

ペルソナ4～アルカナの示す道～

カイナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2011年四月、一人の青年が八十稲羽へと引っ越してくる。そこにて出会う事件、霧に隠された真実。それらが何を意味しどのような未来を描くのか彼はまだ知らない。そしてそこにもう一人、かつて自身の運命を乗り越えた存在が赴くことも……。

目次

プロローグ	二人の愚者	1
第一話	転校生	21
第二話	仲間との交流	40
第三話	マヨナカテレビ	49
第四話	テレビの世界、異様な商店街	70
第五話	V S 陽介の影	97
第六話	戦いの前に……	117
第七話	英雄と友達と……	151
第八話	お姫様の願望	178
第九話	舞踏会の終焉	203
第十話	四月二十日、永劫の絆と秘密の夜間外出	228
第十一話	四月二十一日、運動部との絆と夜中の邂逅	244
第十二話	バイト文化部マネージャーそしてマヨナカテレビ	256
第十三話	四月三十日、自称特別捜査隊発足	268
第十四話	黄金の週間	286
第十五話	中間テストとペルソナ特訓	309
第十六話	月、道化師の絆と暴走少年	332
第十七話	テレビの世界、熱気立つ大浴場	362
第十八話	男達の告白	386
第十九話	The life in May	418
第二十話	皇帝の仲間入り	439
第二十一話	get to the license	457
第二十二話	コミュニティ、皇帝達との絆。	478
第二十三話	沖奈市ナンパと林間学校準備	495

第二十四話	林間学校	513
第二十五話	偶像	544
第二十六話	偶像と虚構と	557
第二十七話	不審者との戦い	569
第二十八話	情報収集と新たな絆	580
第二十九話	テレビの世界、特出し劇場丸久座	598
第三十話	本当の自分	614
第三十一話	The community in June	641
第三十二話	七月初めの絆と霧の夜	660
第三十三話	July Tenth	685
第三十四話	事件解決？そして期末テスト	705
第三十五話	虚構の冒険へ	720
第三十六話	テレビの世界、ボイドクエスト	743
第三十七話	虚栄の仮面、虚構の勇者	767
第三十八話	Summer Vacation (前編)	808
第三十九話	Summer Vacation (後編)	831
第四十話	新学期	856
第四十一話	修学旅行 (前編)	869
第四十二話	修学旅行 (後編)	891
第四十三話	意地と決意	914
第四十四話	意地、そして基地へ	932
第四十五話	テレビの世界、秘密結社改造ラボ	941
第四十六話	少年探偵の真実	961
第四十七話	深まる絆。永劫と魔術師	987
第四十八話	深まる絆。戦車と女教皇	997

第四十九話	深まる絆、皇帝と恋愛	123
第五十話	新たな真実。探偵少女の仲間入り	121
第五十一話	ジュネス・フェスティバル	131
第五十二話	深まる謎と運命との絆	197
第五十三話	正義との真実の絆、新たな決意	187
第五十四話	法王との真実の絆、家族の絆	174
第五十五話	文化祭準備	149
第五十六話	文化祭一日目	135
第五十七話	文化祭二日目	121
第五十八話	文化祭終了、天城屋旅館にて	109
第五十九話	ハロウィン in ジュネス	41
第六十話	永劫との恋情、第二の脅迫状	11
第六十一話	真犯人発覚。父親の決意	10
第六十二話	テレビの世界、天上楽土	1

プロローグ 二人の愚者

四月十一日。人気のない電車の中、色素の薄い銀色、人によっては灰色にも見える髪をした青年がその電車の席の一つに座っていた。ガタンゴトンと揺れる電車に揺られ、青年は暇そうに誰もいない前の席に目をやっている。ちなみに外は畑や田んぼが多く田舎という感じを思わせる光景が広がっている。

「……暇だ」

そしてただ一言そう呟いた。

時間を一ヶ月ほど前に戻してみよう、時は三月上旬。卒業式も近づいている日、青年は自分が住んでいる寮の食堂で朝食の和食定食の味噌汁をすすりながら電話で話していた。

「転勤?……また?」

「ええ……」

「へえ……それで、どっ?」

青年は電話の相手——母親の言葉にどこか慣れたように返す。というのも彼の両親は仕事の関係上で転勤が多く、彼もそれによって転校を繰り返していた。現在寮のある学校にいるのも両親が度重なる転校で友達を作ってもすぐ別れることになってしまう彼を気遣ったことであり、中等部三年から現在高等部一年の一年ちよつとの間両親の転勤ラッシュに巻き込まれた転校という心配はなくなっていた。そのため今回もちよつとした報告だろう、その程度の認識だった。

「それが……外国」

「……は?」

しかし次に出てきた言葉に彼はそう呟くように返すのが精一杯だった。すると電話越しの声が変わる。

「もしもし、真か?」

「親父?… どうしたの?……まさか、また転校なんて……言う?」

聞こえてきたのは彼の父親の声、それに真と呼ばれた青年がまさかというように聞き返し、それに父親は黙り込む。

「……ああ」

そして静かに、だが確かにそう言い、真ははあくため息をついた。

それから次の日曜日。真は自身の実家に戻ってきていた。家には両親が揃っており、彼ら三人家族は居間に座って向かい合った。

「すまん、真。せつかく俺達の仕事に影響が出ないよう寮のある学校に編入させたというのに……」

「流石に国内じゃともかく外国に一年間行くとなると……どちらかに万一の事態が起きた時に頼りになる大人が傍にいないとどうしようもないから……」

「まあ、確かにね」

両親の謝罪の言葉に真も息を吐き両肩をすくめる動作を見せる。それから彼はまた両親を見た。

「ところで、転校たってどこに？ まさかマジで外国？ 自慢じやないけど英語圏にしたって日本の学校のレベルならともかく本場の人達と楽に会話できるほどリスニングもスピーキングも自信はないよ？」

「ああ、遼太郎君……堂島君を覚えてるか？」

「……？」

真の問いに父親がそう尋ねるが真は首を傾げるのみ、それに母親が苦笑を漏らした。

「まあ、あなたが赤ん坊の時くらいだからね。私の弟、今は八十稲羽っていう町で刑事をやってるわ」

「へえ……でも一年間も居座るなんて迷惑じゃないかな？」

「大丈夫だ。さつき話を持ちかけたら快く了解してくれた」

「そうか……なら少なくとも俺は安心か、久しぶりの転校だな……」

両親の言葉に真は一安心というように息をつき、久しぶりに訪れた長年の習慣にどこか楽しみそうな笑みを浮かべていた。そして話が終わり、彼は久々に戻ってきた実家の自室に戻り、ベッドに座るとふっと笑みを浮かべた。

「まあ、まずは世話になった先輩や友達への挨拶回りか……とりあえず、命先輩に連絡取るか」

そしてそう眩くと携帯を開き、電話をかけ始めた。
それから一ヶ月ほど時間が過ぎ、冒頭に戻るわけである。

真は暇そうに誰もいない前の席に目をやって「暇だ」と眩いていたが、その時彼のポケットに入れてある携帯がバイブを始め、真はポケットから携帯を取り出して内容を確認する。一通メールがきていた。

「駅まで迎えに行く。八十稲羽駅の改札口に十六時」

確か以前確認しておいた時刻表によると確かにそのくらいに時間帯にこの電車は目的地であり終点の八十稲羽へとたどり着くはずだ。しかしまだ後二十分程度時間はある。

「……寝るか。終点なら乗り越す心配もないし」

彼は一人そう眩くと目を閉じ、座っている椅子に体重を預けた。寝ようと思ったのもつかの間、彼の意識は急速に遠のいていった。

それから彼は妙な感触を感じる。なんというか、今まで彼は固さを感じる椅子に座っていたはずなのだが今座っているのはふかふかで柔らかい感触なのだ。それに彼は不審感を覚え、ゆっくり目を開ける。

「なっ!?!」

直後驚いたように目を見開いた。今まで乗っていた電車の光景は綺麗に消え去り、代わりに目の前には青い車内とも言うべき光景が広がっていた。その外の光景も田舎という感じのものではなく前がまったく見えない霧に包まれている。

「馬鹿な、俺は今まで電車の中で眠っていたはず……どういうことだ?」

真はそんな状況でもなお冷静に状況を把握しようとし、口元に手をやる。

「ようこそベルベッドルームへ」

そこにふと声をかけられて彼は前を見る。そこには鼻の長い奇妙な顔の老人と二十代後半ぐらいの青い衣装に身を包んだ美しい女性が座っていた。それを見た瞬間真は警戒心を露にし僅かに目を吊り

上げる。

「何者だ、お前ら？ 誘拐犯っていうのならあいにくだが家は共働きの一般家庭、身代金はあるま期待しない方がいいぞ？……何より、力づくで脱出する」

彼は悟られない程度に拳を握り締め、いつでも相手に飛びかかれるように姿勢を前傾に持っていく。

「ほう……これはまた、変わった定めをお持ちの方がいらしたようだ……フフ」

「定め？ いらした？……どういう意味だ？ もう一度聞くが……お前、何者だ？」

「私の名はイゴール。お初にお目にかかります。ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所。本来は何かの形で“契約”を果たされた方のみが訪れる部屋」

「……へえ、つまり俺はイレギュラーでこんな変なとこに紛れ込んだじまつたってことか？ 冗談にしたって面白い……爺さん、話だけは聞こうか」

老人——イゴールの言葉に真は興味を持ったように姿勢を後ろに戻し、拳も解く。しかしまだ警戒までは消していなかった。

「貴方には、近くそうした未来が待ち受けているのかも知れませんが……どれ……まずはお名前を伺ってみるといたしましょうか……」

「……俺の名は真。椎宮真^{つちみやまこと}だ。読み方を説明するならば名字は頸椎の椎に宮殿の宮と読み、真は真実の真と読む」

イゴールの言葉に真は僅かに悩む様子を見せるが本名を名乗る。それにイゴールは満足そうに頷いた。

「ふむ……なるほど。では、貴方の未来について少し覗いて見ると致しましょう」

そう言うと共にイゴールは机の上に手をかざしてカードの束を出現させる、まるで手品のようなそれに真は驚いた様子を見せる。

「どういうトリックだ？……」

「“占い”は、信用されますかな？」

「え？ あ、ああ、まあ多少はな」

真の眩きを意に介さずイゴールは尋ね、不意を突かれた真は僅かに声を詰まらせながら頷いた。

「結構」

そう言つてイゴールが山札に手をかざすと六枚のカードが円盤状に、その中心に一枚のカードがまるで生き物のように配置につく。その光景に真はまた不思議そうに眉をひそめた。

「常に同じにカードを操つておるはずが、まみえる結果は、そのつど変わる……フフ、まさに人生のようでございますな」

そう言いながら彼は真から見て右手前のカードをひっくり返す。そこに現れたカードはタロットカードのアルカナ番号XVI、塔のカードの正位置だった。それを見た真は顎に手をやる。

「……悪いが、これはどういう意味なんだ？」

「ほう……近い未来を示すのは『塔』の正位置。どうやら大きな『災難』を被られるようだ」

「なんだそりや……」

真の疑問の言葉にイゴールがそう説明を眩き、それに真が嫌そうな声を漏らす。

「それではその先の未来を示しますのは……」

そう言いながら今度は真から見て左手前のカードをひっくり返す。現れたのはアルカナ番号XVII、月のカードの正位置。

「『月』の正位置。『迷い』そして『謎』を示すカード……実に興味深い……」

「災難に謎、どうにも厄介なことになりそうだな……」

イゴールの説明に真はまた嫌そうな顔を見せてはあとため息をつく。

「貴方は、これから向かう地にて災いを被り、大きな『謎』を解く事を課せられるようだ。近く、貴方は何らか『契約』を果たされ、再びこちらへおいでになる事でしょう」

「さつきから言つてる契約つてのは具体的になんなんだ？」

「それは分かりませぬ」

「なんだそりや……まあ要するに、その時やその時つてやつつか？」

「左様。今年、運命は節目にあり、もし謎が解かれねば、貴方の未来は閉ざされてしまうかも知れません。私の役目は、お客人がそうならぬよう、手助けをさせて頂く事でございます」

イゴールはそう言いながら再びタロットカードに手をかざし、一瞬にしてそれらを消し去る。それを真はもう見慣れたのか驚いた様子を見せず、イゴールに横に座っている美女を見た。

「おっと、ご紹介が遅れましたな。こちらはマーガレット。同じくこちらの住人でございます」

「お客様の旅のお供を務めて参ります。マーガレットと申します」
「どうも」

イゴールの紹介に美女——マーガレットが礼儀正しくお辞儀をし、真も会釈を返す。そしてイゴールは長い鼻の下で両手を組んだ。

「詳しくは追々に致しましょう」

その言葉と共に真は目の前の風景が歪んでいくのを感じ取り、思わず声を上げた。

「お、おいちよつと待て！」

「ではその時まで、ごきげんよう……」

しかし、イゴールの言葉と共に彼の意識はベルベットルームから消え去っていった。

「間もなく、八十稲羽八十稲羽、終点です」

「う……」

車内アナウンスを目覚ましに真は目を覚まし、きよろきよると辺りを見回す。そこは青に包まれた車の中ではなく八十稲羽へと向かう電車の中。謎の二人の人間——イゴールとマーガレットの姿はどこにもなかった。

「夢？ いや、そんなはずないよな……」

真はそこまで考えると首を横に振り、とりあえず降りる準備をしようとして隣の席に置いておいた荷物——かさばるものは前もってこれからお世話になる堂島宅に届けているため現在持ってきているものは

旅行鞆一つくらいだ——を手に取ると席を立った。

それから彼は電車を降りると辺りをきよろきよろと見回す。辺り一面田舎という感じ、転校前に通っていた場所と比べるとギャップが凄まじかった。

「おーい、こつちだ」

そんな呼び声が聞こえ、声をした方を見ると三十代後半ぐらいの精悍な顔つきをした屈強な男性と、小学校に入るか入らないかぐらいの女の子がこつちに近づいてきた。

「よう、写真で見るとより男前だな。ようこそ、稲羽市へ。お前を預かる事になっている、堂島遼太郎だ」

「椎宮真……初めまして」

「はは、オムツ替えた事もあるんだがな」

男性——遼太郎の挨拶に真も緊張してるのか仏頂面で挨拶し、遼太郎はそう笑って言った後自分の後ろに隠れているようにしている少女に目をやる。

「こつちは娘の菜々子だ。ほれ、挨拶しろ」

「……にちは」

遼太郎に言われ、恥ずかしそうに菜々子が挨拶する。しかし知らないとして大きな男性に対してどこか怖がっているようにも見え、真は困ったように頭をかくが、少しすると思いついたような表情を見せた。

「ちよつとすみません」

「おう？」

遼太郎に一言断りを入れてから、彼は二人に背を向けて荷物を探り、何かを準備する。そして振り向いて菜々子に目線を合わせるようにしやがみ、彼女の前に右手を出す。

「菜々子ちゃん、ちよつとこの右手を見てて」

「？」

真の言葉に菜々子は彼の右手を見始め、真は手をゆっくり左に動かしながら親指と人差し指をくっつけ、右に動かしながらパチンツと指を鳴らす。それと同時に彼の右手に小さな造花が現れた。

「すごいー！」

「ほう、見事なもんだ……」

突然の現象に菜々子が目をまんまるにして驚き、遼太郎も驚いた様子を見せる。

「手品は趣味の一個なんでね。はい、菜々子ちゃんにあげる」

「わーい！　ありがとう、お兄ちゃん！」

真の言葉に菜々子は嬉しそうに笑いながら花を受け取る。それから遼太郎がはっはつと笑う。

「よかったな、菜々子。さて、じゃあ立ち話もなんだしそろそろ行くか？」

「ああ、はい」

遼太郎の言葉に真は頷いて立ち上がると鞆を持ち上げ、先に車に行った遼太郎と菜々子の後を追う。その時女子とすれ違った。

「ねえ」

「ん？」

突然声をかけられ、真はつい振り返る。そこには言つてはなんだが愛想の悪い少女が立っている。その右手には何かの紙が握られていた。

「これ、落ちたよ」

「え？」

少女が差し出してきた紙を真は確認する。親に念のためと渡されていた堂島家の連絡先のメモだ。それを入れていたポケットを確認すると確かにメモ用紙が入っていない。それに気づくと真は右手を伸ばしてそのメモ用紙を受け取った。

「すまない、ありがとう」

「べ、別にいい。拾っただけだから」

真のお礼に少女はそう言うと言き去っていき、真はメモ用紙をポケットに入れる。

「おーい、どうしたんだー？」

「あ、はいー！」

すると遼太郎の呼び声が聞こえ、真は鞆を持ち直して車の方に走

り、すぐに乗り込むとシートベルトをつけた。

「二人ともシートベルトつけたな？ 行くぞ」

遼太郎の確認に二人が返事を返すのを確認して、遼太郎は車のエンジンを掛ける。そしてゆっくりと走り出した車は、流石運転手が現職の刑事なだけあってか制限速度を守り走っていく、が遼太郎は車のガソリン残量に目をやった。

「ん？ そろそろガソリンを入れないとまずいか……すまん、ガソリンを入れにちよつと寄り道するぞ」

そう言つて遼太郎はガソリンスタンド——この町唯一のガソリンスタンドMOEL石油へと入る。

「らっしやーせー」

すると店員と思わしき制服を着た女性が出迎え、その合間に遼太郎は助手席に座っている菜々子を見た。

「菜々子、トイレは大丈夫か？」

「ん、行ってくる」

「一人で行けるか？」

「うん」

遼太郎の言葉に頷いた菜々子はシートベルトを外すと、車から降りる。

「奥を左だよ……左つてわかる？ お箸持たない方ね」

「わかるもん……」

どこかからかうような口調で菜々子に話しかける店員に、菜々子は口を尖らせながら返してトイレに向かう。それを見送ってから店員は遼太郎に話しかけた。

「どこか、お出かけで？」

「いや、都会から越してきた甥を駅まで迎えに行つて来ただけだ」

「へえ、都会からですか……」

気さくに話しかけてきた店員に遼太郎は説明を返し、店員はじつと真を見る。

「……ども」

それに真は仏頂面で会釈を返した。

「レギュラー満タンで頼む」

「はい、ありがとうございますーすー」

遼太郎の注文に店員は元気よく返してきびきびと動き出し、そう思うと遼太郎も車から出た。

「ちよつと一服してくる」

「ああ、行つてらっしゃい」

遼太郎の言葉に真はそう返した後、電車や車でずっと座りっぱなしだった身体をほぐそうと彼も車から出て軽く柔軟をする。と遼太郎が遠ざかっていくのを見計らったかのようにさっきの店員が真に近づいてきた。

「君、高校生？ 都会から来ると、なーんもなくてビックリっしょ？ 実際退屈すると思うよ。高校の頃つったら、友達んち行くとか、バイトくらいだから」

「……つまり、遠まわしなバイト勧誘か何か？」

「あはは、まあその要素がゼロだとは言い切れないかな。ま、落ち着いたら頃にでも考えてみてよ。学生でもオツケーだからさ」

店員の言葉に真はふつと不敵な笑みを浮かべながら問い返し、それに店員は参ったというように笑って返した後そう続け、右手を差し出す。それに真は怪訝な目を一瞬見せたが挨拶に握手を求めらるくらい別に不思議でもないかと思ひ直すと彼も右手を差し出して握手を交わす。

「おっと、仕事しないと」

そう言つて去っていく店員の後姿、それを見送っていると突然真の視界がぐにやりと歪んだ。

「っ!？」

思わず隣の車に手を当ててバランスを取り、しかめた顔の目頭をもう片方の手の親指と人差し指で押さえる。

「どうしたの？」

するといつの間にか戻ってきていた菜々子が心配そうに声をかけてきていた。

「だいじょうぶ？ 車よい？ ぐあい、わるいみたい」

心配そうな表情を見せてきている菜々子、彼女に対し真はにこりと笑みを浮かべた。

「大丈夫だ、ちよつと疲れが出ただけだから。座って休めばすぐに治るさ」

真はそう言つて車の中に戻つて席に座るとふうと息を吐いて目を閉じ、菜々子も助手席に戻ると心配そうに真を見る。

(……くそ、久々の引越で気疲れしたのか?……)

真は心の中でそう思いながら、でも菜々子に心配かけまいと平常を装っていた。

それから三人は家に戻ってくる。その頃には真の気分も治つていた。そして現在真と遼太郎は二人がかりで部屋の荷物の整理をしている。菜々子は一階でご飯の準備中だ。

「まあ、こんなところか。この家、この部屋がお前が一年間住むところだ。自由に使つてくれ」

「ありがとう。ああ、母さんから聞いてるけど……叔母さんにも挨拶した方がいい?」

「あ、ああ……千里も喜ぶよ」

遼太郎の言葉に真は一つ頷いた後そう尋ね、遼太郎は不意を突かれたように黙つた後頷いて返し、二人はとある部屋に向かう。そこにあるのは仏壇、そこには一人の女性——遼太郎の妻であつた堂島千里の写真が飾られている。

「……」

真は蠟燭に火を点けて鈴棒で鈴を軽く叩き、合掌する。

「ありがとよ」

「……記憶にない人が合掌したところで、喜ばれるか分からないけどね」

「そんなことはない」

遼太郎のお礼の言葉に真がそう言うのと遼太郎は首を横に振る。それから部屋を後にし、居間にやってくる。そこでは菜々子が寿司と飲み物をちやぶ台に並べていた。

「それじゃ、軽く歓迎会をするか」

「ああ、なんか気を遣ってもらってすみません」

「気にすんな。さあ、歓迎の一杯といこう」

遼太郎の言葉に真がすまなそうに言う。遼太郎はふっと笑みを浮かべてちやぶ台の脇に座る。それから二人もその両隣に位置するちやぶ台の脇に座った。それから遼太郎はまず茶を飲んで喉を潤すと口を開く。

「しかし、今度は外国とは義兄さんも姉さんも大変だな。子供も親に振り回されて大変じゃないか？」

「いや、別に。親父も母さんも俺のこと気遣ってくれてるのは分かってるから。それにこういう時に快く預かってくれる人がいて正直安心してるよ」

「ははっ。確かにそうかももしれんがそう達観してもらっても困るがな。まあうちは菜々子と俺の二人だし、お前みたいなのがいてくれると俺も助かる。これからしばらくは家族同士だ。自分ちと思つて気楽にやつてくれ」

遼太郎の言葉に真は僅かに笑みを浮かべながら返し、それに遼太郎は笑つて返す。それに真は一つこくりと頷いた。

「押忍」

「お、オス……お前、体育会系か？」

「げっ……前の学校では剣道部。えっと転校先、八十神高等学校つて言ったかな？ そこには剣道部ないみたいだけどね……まあ何か運動部探してみるよ」

真の口から出た言葉に遼太郎がドン引きしながら聞き返すと彼はこともなげにそう返す。

「そ、そうか……さてと、じゃあ飯にするか」

遼太郎がそう言つて箸を取り、寿司に箸をつけようかとしたところで急にピピピと着信音が鳴り出す。遼太郎の携帯だ。

「たく……誰だ、こんな時に……堂島だ」

彼は渋い顔をして携帯電話を取り出しそう言つて立ち上がる。そして一言二言会話すると彼は椅子にかけてあつた上着と車の鍵を取った。

「……ああ……ああ、分かった。場所は？……分かった。すぐ行く」
そう言い電話を切ると遼太郎は苦虫を噛み潰したような顔をする。
「酒飲まなくてあたりかよ……ああ、仕事でちよつと出てくる。急で悪いが、飯は二人で食つてくれ。帰りは……ちよつと解らん。菜々子、後は頼むぞ」

「うん、行つてらっしゃい」

遼太郎の言葉に菜々子はどこか残念そうな顔を見せながら彼を送り出し、あつという間に家は真と菜々子の二人きりになる。そして菜々子がテレビをつけたところで真が口を開いた。

「た……大変だな。堂島さん、刑事だと母さんに聞いたけど……」

「いつもこうだよ。わるい人をつかまえるんだつて」

「あ、そう……」

真の言葉に菜々子はそう言い、真はそう呟き、会話が途切れる。間が持たず、つい真はテレビで放送されているニュースに目をやる。生天目という議員秘書の不倫騒動についてニュースが行われていた。
(……)

それに対し真は口をつぐみ、菜々子に悟られない程度に眉をひそめ嫌そうな表情を見せる。毎回幾度と引つ越しと転校を繰り返す彼、しかしながら彼はそれを様々な場所で色々な人と交流を深め人と人の繋がりを持つ機会とも認識しており、不倫というのはその繋がり、すなわち絆の中でも強い家族というコミュニティをぶちこわしにする行動。そう考えているゆえに彼はこのような行動は嫌悪していた。

「ニュース、つままないね」

菜々子がふと口を開く。まあ不倫報道なんて小学校低学年だろう彼女にはつまらないのは間違いないだろう。

「ああ、チャンネル変えていいよ」

「うん」

菜々子がチャンネルを切り替えると今度はスーパーの明るいCMが流れ始めた。

「ジュネスは、毎日がお客様感謝デー。来て、見て、触れてください。エヴリデイ・ヤングライフ！ ジュ・ネ・ス！」

「エヴリデイ・ヤングライフ！ ジュ・ネ・ス！」

そんな大手スーパーチェーンのテーマソングに合わせて口ずさむ菜々子に真はちよつと和んだ表情を見せた。

夕食後、食事を終えて片づけも終えた後。相変わらず声のかけづらい雰囲気が続いており、真はむうと声を漏らした後立ち上がった。

「菜々子ちゃん、俺、部屋を片付けてくる。もしかしたらそのまま寝てしまうかもしれないけど」

「うん。分かったお休み」

真の言葉に菜々子はこくんと頷いて返し、真は二階にあてがわれた自分の部屋に行つてドアを閉めるとはあと息を吐いた。

「や、やりづらい……年下の女の子相手がこんなに気疲れするなんて……でも早めに慣れないとな……色々、気になることもあるし……」

真はそこまで独り言を呟くと部屋に積み上げられた荷物を見回す。「とりあえず、明日必要なものだけ出して後は明日かな」

彼はそう呟くと必要になりそうな学生鞆やその他の用具を出していき、学校に必要なものは学生鞆に入れる。それが終わるとほぼ同時に彼は眠気から欠伸を漏らした。

「……駄目だ、眠い……今日はもう寝よう……」

せめて菜々子にお休みの挨拶くらいしたほうがいいだろうか、一瞬そう考えるものの今は眠気の方が勝っており彼はふらふらと布団まで行くとほとんど倒れ込むように眠りについた。

「……暇だなあ」

時間を僅かに戻して四月十一日の昼過ぎ頃、とある大学の巨大掲示板の前。学生同士の待ち合わせにもよく使われるというここで濃い青色の髪を右目を隠すように伸ばした青年が一人そう呟いていた。

「あ、あのっ」

「はいっ」

そこにかけられてきた声に青年は目を細めながら聞き返す、とその相手——多分青年と同じ年くらいだろう女性、その頬は少し赤く染

まっている——がどこか興奮した様子で口を開いた。

「あ、あのっ、お暇でしたら私とサークルの見学なんて——」

「すみません、人を待っておりますので」

女性の言葉を青年はにこりと一つ笑みを浮かべて丁寧にお断り、女性はいゆんとなつてその場を去っていく。

「これで五人目……皆暇だよね」

青年ははあくど深いため息をつく。と言つても彼の顔は結構整っている方でその発されるオーラは人を惹きつけ魅了するカリスマと呼ばれるレベルにまで達している。本人はただある相手を待つて掲示板を預けてもたれかかっているだけなのだがその光景すら傍から見ればフアツション雑誌の一ページとなっているのだ。

「……ん？」

すると彼の携帯が鳴り始め、彼は携帯を入れているズボンのポケットを見下ろす。

「ゆかりかな？」

そしてそう呟いてポケットに手を入れ、携帯を取り出して着信の相手を確認する。と彼は驚いたように目を見開いてすぐさま電話に出る。

「やあ、久しぶりだな」

「ええ。お久しぶりです、きり……先輩」

電話口の女性の声に青年はつい挨拶を返そうとするがその言葉は途中で途切れ、彼は辺りをきよろきよろと用心深く見回してから先輩と口にする。

「どうした？ もう私の名を忘れたのか？ 酷い男だな、命^{みこと}」

くつくつと笑みを噛み殺しながらのからかうような声、それに青年——命ははあとため息をついた。

「冗談は止めて下さい。ただ、一応人前なのでね。あなたの名前を軽く出して騒ぎになりたくないんです……桐条先輩」

女性の言葉に対して命はそう言い、ぼそりと女性——桐条の名を出す。とその相手はふつと笑った。

「別にそこまで気にするような事ではあるまい。なんなら美鶴と呼

んでくれても私はいつこうに構わないのだが?」

「はっはっは……ふざけた冗談ぬかさないでください」

女性——美鶴の言葉に命は笑い声を漏らした後少々低くした声色でそう続け、気持ちを切り替えるように短くふうつと息を吐いた。

「で、何のご用なんですか?」

「ふっ。用がなくては電話をかけてはならないような関係ではなからう?」

「あく妙に電波が悪いなくこれじゃ僕の意味とは無関係に電話が切れて電源まで落ちちやうかも」

「悪かった悪かった……本題に入る前に一つ尋ねたいのだが、ゆかりと結生は近くにいますか?」

命の言葉に美鶴はふつと一つ笑みを漏らしながら——電話口のため命の想像であるが——どこかからかうような口調でそう言い、命はそれにむかっていたのか棒読みでそう言いだして携帯の電源ボタンに手を伸ばすがその前に美鶴が苦笑交じりのような声で謝罪、それから急に真剣な声質になり、それを聞いた命も僅かに真剣な顔つきになって辺りを見回す。

「いえ、二人ともまだ講義が終わってないのかそれとも道に迷ってるのか。とりあえず近くに二人はいませんけど……二人に用事なら言伝しますよ?」

「いや、今は君だけの方が都合がいい」

「……何か問題でも? きり……家の問題じゃ僕じゃ力になれないと思います?」

美鶴の言葉に命はそう尋ねる。とはいえ彼女の家というか現在彼女が総帥を勤めている桐条グループのことはしっかりぼかしており、それを聞いた美鶴は苦笑を漏らした。

「まったく、いくら人前だと言っても桐条グループくらい口に出しても構うまい……まあいい」

美鶴はそこまで言うふうと一息つき、彼に尋ねるような声を出した。

「君はマヨナカテレビという話を知っているかな?」

「マヨナカテレビ？　なんですかそれ？　新手の深夜番組か何かですか？」

美鶴の言葉に彼はきよとんとした様子で尋ね返し、それを聞いた美鶴はまたふうと今度はため息に分類される息を吐いた。

「まあ、そうだろうな……最近八十稲羽という町で話題になってい

る話でな……なんだか、妙な予感がするんだ。私の勘なんだがな」

「へえ。理論派の先輩が勘なんか頼ろうなんて、どういう影響でしようか？」

「君がそれを言うか？……まあ、それで調べてみたいところなんだが……まあ、分かると思うが色々忙しくてな。とても人員を裂く余裕がないんだ、ただでさえ何かあるという確証もないのだからな」

美鶴の説明を聞いた命の混ぜ返しに彼女は呆れたように言い、そう続ける。と命は納得したように頷いた。その顔には女性ならば例外なく見惚れてしまいそうな綺麗な笑顔が浮かんでいる。

「なるほど、要するに暇なキャンパスライフ絶賛エンジョイ中の僕達を引っ張り出そうって魂胆ですか。ま、僕達なら何かあっても桐条グループは痛くも痒くもない」

「ぐっ……君は、相変わらず皮肉や嫌味が上手いな……も、もちろん今はもう君達は私と一切関係ない。断つてもいいん——」

「その依頼、お受けしましょう」

「——だ、ぞ……」

その綺麗な笑顔からすぱつと皮肉を繰り出し、それに美鶴が唸った後断つてもいいと言おうとするがそれを遮る命の言葉に美鶴の声が小さくなつていく。その声質も呆然としたようなものに近い。

「お、お前は!!　何を考えているんだ!!?　また、私はまたお前を巻き込もうとしているのだぞ!!」

その直後美鶴の動揺しきつた焦り声が電話口から響いた。

「別に構いませんよ。というか、そんなもん聞かされて僕には関係ないって切り捨てるのは後味悪いですし、もしそれで何か起きてみてください。僕が後悔します……まあ、どうせそのマヨナカテレビとやらの調査だけですよね？　せいぜい数日休む程度でしょ？」

「あ、ああ。それに関してなら任せておいてくれ。君達の通う大学の理事長とはちよつとした知り合いでな、私から話を通しておく。ゆかりと結生には……」

「黙ってていいですよ。どうせ数日、風邪こじらせてうつしても悪いから来るなどでも言っておきます。あ、でもばれたらフォローお願いしますね?」

「君というやつは……」

命のあつさりとした言葉に対し美鶴はせめてもの手助けというようにそう言い、その次にそう尋ねるが命はまたあつさりとそう答え、美鶴はどこか呆れたようにそう声を漏らす。と命はにやりと意地の悪い笑みを浮かべた。

「それと、多少報酬は期待してもよろしいですよね?」

「分かった。大学卒業の後は桐条グループに歓迎しよう」

「分かりました。報酬に関してはまた後のご相談という事をお願いします」

「そうか? 報酬という点を差し引いても君なら大歓迎なのだが……どうだろう? アイギスと共に私の専属秘書というのは——」

「失礼します!」

美鶴の言葉が終わる前に命は電話を切り、携帯をポケットに押し込む。

「まったくもう……マヨナカテレビ、か……」

「お兄ちゃん!」

「命くん!」

「あつ」

命は一つ悪態をついた後うつむいて少し考える様子を見せるがそこに聞こえてきた呼び声に反応し、顔を上げる。そこにいるのは命に向けて元気に手を振っている赤い髪をポニーテール風にしてる女の子と元気に微笑んでいる茶髪の女の子。二人はたたたと命に走り寄っており、命も美鶴からの電話内容を一旦思考の外に追いやつてにこりと笑みを浮かべた。

「遅かったね。結生、ゆかり」

「結生ちゃんが料理研究サークルが試食に出してる料理につられてね、サークルの人振り切るのに時間かかったのよ」

「てへへ」

命の言葉に茶髪の女の子——ゆかりがはあっとため息をつきながら説明し、それに赤髪ポニーテールの女の子——結生が照れたように頭をかく。ちなみに赤髪ポニーテールの女の子こと結生は命の双子の妹、茶髪の女の子ことゆかりは命の恋人である。

「まったく。ま、ちゃんと来たんだしどうでもいいか。じゃあサークル見学に行こう……一応聞くけど、どこ行きたいかとか決めてる？」
「バッチリ！ だよお兄ちゃん。まず料理研究サークル、次にお菓子作りサークル、でもって——」

「食ってばっかじゃないか……ゆかりはどう？」

命の言葉に結生は元気に微笑みながら言い、メモを取り出して読み上げ始めるがその内容に命が妹の額にチョップでツツコミを入れ、恋人ことゆかりに尋ねる。

「私はやっぱ弓道サークルかな？ でも、命君が頑張りたいって思うものなら陸上だってなんだって応援するし、私も一緒に頑張りたい、かな？」

「ありがとう、ゆかり。でも、僕もゆかりが頑張りたいって思うものは全力で応援したいし、一緒に頑張りたいな」

命の問いにゆかりはふふっと笑ってそう答えた後どこかもしもじとした様子で命に告げ、それに命も微笑んでそう言う。二人はそれから照れたようにはにかんで微笑み見つめあい、結生は呆れたようなジト目を見せてため息を一つついた後ゆかりの腕と命の首根っこを掴んで引っ張り出す。

「はいはいごちそうさま、人目のあるところであんまいちやつかないでね恥ずかしい。ほら行く」

「ご、ごめん結生ちゃん……」

「て、手え離して結生、首、首絞まってる……」

結生の呆れきった言葉に腕を引っ張られているゆかりは苦笑を交えながら謝罪し、首根っこ、正確には服の首部分の後ろを掴まれて

引っ張られている命は苦しそうな声を漏らしていた。

かつて絶対的な「死」という運命を覆した青年、名を利武命。とじたけみこと彼の
新たな運命の輪が回り始めた。

第一話 転校生

八十稲羽へとやってきた初日の夜。真は長旅疲れで布団の中でぐっすりと眠っていた……はずだった。

「んっ……んっはっ？」

ふと起きあがり、辺りを見回す。辺り一面が霧で覆われ、手を伸ばしたらその先すらもハッキリと見えない。足下は赤い煉瓦のような物で出来た一本道で、先は霧で見えないが長い道はどこかへと続いているようだ。

「……」

夢だから深く考えるのも無駄かと考えたのか真はとりあえず道の前に歩き始める。と言っても前が見えない上に足下の煉瓦のような物体に足を取られないよう気をつけてはいるが。

「真実が知りたいって？……」

「？」

突如霧の中からどこからともなく聞こえてきた声、それに真は足を止めて辺りを見回す。

「それなら……捕まえてっらんよ……」

「……あっちか」

声は霧の奥から聞こえてくる。それに真はニヤリと笑みを浮かべて奥の方に歩き出す、がまた少し歩くとぴたりと足を止めた。

「なんだ、こりゃ？」

思わず呟いてしまう。彼の前にはなんというか四角がたくさん集まった壁のようなものがある。行き止まりだとしたって道は一本道、声の主とはどこかで鉢合わせになるはずだしそもそも……

「変な気配が向こうからするんだよ……」

壁の向こうから変な気配を感じ取り、真は壁に手を触れる。とその瞬間中央の四角が捻れるようにして壁が開いていき、先へと進めるようになる。それを見ると真は真剣な目つきを見せながらその壁の先に歩いていった。

「追いかけてくるのか……君か……ふふふ……やってっらんよ

……」

そこにいるのは霧に隠れた何者か。しかし顔は霧に隠れて見えな
い上にぎりぎり確認できる体つきや聞こえてくる声は全て中性的
で男か女かの判断すら出来ない。その何者かの挑発のような言葉に
真は身構えるが、同時に彼は自分の右手にいつの間にか刀が握られて
いるのに気づき、彼は刀を剣道の正眼の構えで構えた。

「せやああああっ！」

そして彼は手加減抜きで刀を振り上げ、相手の面を狙って斬りつけ
る。その刀は相手に当たったようなしかしそれでいて空気でも切つ
たような手応えのなさを真の手に感じさせた。

「へえ……この霧の中なのに、少しは見えるみたいだね……」

「はあああああっ！」

何者かの声に対し真は今度は胴を狙ったように刀を力強く左から
右へとなぎ払う。しかしそれもまた先ほどのような不思議な感触を
見せるだけだった。

「なるほど……確かに、面白い素養だ……」

「らあああああっ！」

なぎ払いの勢いを利用して回転し、左腰から右肩へと逆袈裟懸けに
斬りあげる。しかしその相手は意に介さない様子で話し続ける。

「でも、簡単には捕まえられないよ……求めているものが『真実』
なら、尚更ね……」

その言葉が聞こえた直後、更に霧は濃くなり視界が悪くなる。混迷
の霧、真の頭にそんな言葉が浮かぶが彼はその思考を振り切ると刀を
振り上げ、鋭く振り下ろす。しかし先ほどまで不思議な感触だったと
はいえ一応当たっていた刃は霧のせいかな相手に当たらず切っ先が空
を切った。

「誰だつて、見たいものだけを、見たいように見る……」

その言葉の直後、真は刀を左手に握って下ろす。続けて右手を掲げ
た。

「おおおおおっ！」

そして右手で何かを掴み取って握り潰すように右手を力強く握り

しめる。それと同時に目の前の何者が目がけて天空から雷が降り注いだ。

「いつか、また会えるのかな……こことは別の場所で……フフ、楽しみにしてるよ……」

その声を最後に霧は更に深まり、真の意識も遠のいていった。

「はっ」

真は目を覚ますと辺りをきよろきよろと見回す。そこは堂島家の自分にあてがわれた自室、霧に覆われた不思議な場所では間違ってもない。それを確認してから真は起きあがり、今日から通うことになる八十神高等学校の制服に着替えると荷物を軽く確認してから一階に下りていく。

「あ、おはよう」

「おはよう、菜々子ちゃん」

するとちょうど菜々子と対面し、彼女の挨拶に真も頷いて返す。

「待っててね、今朝ご飯準備するから。朝ご飯はね、トーストとめだまやき」

「……ちよつとごめんね」

菜々子の言葉に真は少し考える様子を見せ、菜々子に断ってから冷蔵庫を開けて中身を確認する。

「ふむ……菜々子ちゃん、オムレツなんて好きかな？」

「オムレツ！ 作れるの!?!」

「任せとけ。これでも料理にはちつとばかしうるさいんだぜ？」

真の言葉に菜々子が驚いた様子を見せると真はふっふつと笑いながらそう言つて卵とバターを取り出す。

「じゃ、菜々子ちゃんはトースト焼いててくれ。その間に作るから」

「うんー」

真の言葉に菜々子が嬉しそうに頷いて食パンをトースターに入れている間に真は卵をボールに入れて溶き、塩胡椒でさつさと味付け。フライパンにバターをひいて馴染ませると溶き卵を焼き始める。その手際の良さに菜々子が目を輝かせていた。

「はい、出来上がり」

両面がこんがりきつね色になるまで焼くと皿に移し、同じ要領でもう一個焼いていく。

「すごい！ お兄ちゃん、料理上手だね！」

「ははっ、ありがとな。じゃあ食べようか」

「うん！ いただきますーす！」

菜々子の目を輝かせながらの言葉に真は笑って返した後そう言い、それに菜々子は待ちきれないように座るといただきますと挨拶してオムレツを食べ始め、真は苦笑を漏らすとトースターから出てきたトーストを取り、皿にのせると菜々子の前に差し出す。それに菜々子はあつと声を漏らした後恥ずかしそうに笑い、真もふつとほほえましそうな微笑を浮かべる。

そして食事が終わった後二人は後かたづけや戸締まりを確認してから二人揃って学校に向かう。その途中まで菜々子が真の道案内をしていた。

「あと、この道、まっすぐだから」

鮫川河川敷の道の先を指しながらそう言い、彼女はくるりときびすを返す。

「わたし、こっち。じゃあね、お兄ちゃん」

「ああ。菜々子ちゃんも気をつけてな」

「うん」

菜々子の言葉に真が返し、菜々子はうんと頷くと小学校向けて歩いていく。それを見届けてから真は高校の方に歩いていった。とその途中、彼は後ろの方からギイギイと金属がきしむような音を聞く。

「よっ……とっ……とっとお……」

すると後ろからふらふらと揺れながら自転車をこいでいる男子生徒が近づいてきており、真は無言で道の脇にそれる。しかし雨が降っているため傘を差している所謂傘差し運転状態なものもあるだろうがふらふらとかなり危なっかしい。現に彼はバランスを取るのに必死のようで前を見ておらず、少しすると電柱にがしやんとぶつかった。

「う……お(い)い(い)い……」

男子生徒は股間を押さえて悶絶しており、真は相手を可哀想に思いながらも声をかけるのもまた可哀想に思え、うんと頷く。

「そつとおこう」

そしてそう呟き、歩き去っていった。

それから彼はついに八十神高等学校に到着。校門へと続く坂道を上り、鏡は今日から通う校舎を見上げた。道の両脇に植えられた桜の木は、満開に咲き乱れており雨の中でも色鮮やかさを誇っている。

(ここが今日から通う八十神高校か……)

彼は校舎を眺め回し、校門をくぐると先生に挨拶するため来客用出入り口に行くところから職員室に歩いていった。

それから少し時間が過ぎてここは八十神高等学校二年二組教室。

「ついてねえよなあ……このクラスって、担任、諸岡だろ？」

「モロキンな……一年間、えんっえん、あのくそ長い説教きかされんのかよ……」

「ところでさ、この組、都会から転校生来るって話だよな」

運悪く人気のない教師が担任にあたってしまったのだろう、愚痴を漏らしていた二人の男子生徒の会話に、女生徒が割り込む。と男子生徒の一人がその話題に興味を示した。

「え、ほんと？ 男子？ 女子？」

「さあ？」

「都会から転校生……って、前の花村みたいじゃん？ ……あれ？ なに朝から死んでんの？」

その話を少し遠くから聞いていた、緑色のジャージを着たショートカットの女生徒がそう呟き、後ろの机に突っ伏している男子生徒に話しかける。

「や、ちよつと……頼むから放つていたげて……」

それに男子生徒——なお朝真が見ていた自転車でこけた男子である——は朝こけた時のとある部位の痛みがまだ消えていないのか苦しそうな表情で返し、女生徒は首を傾げて振り返る。その目の先には赤いカーディガンを着て綺麗な黒髪をロングにした少女がいる。

「花村のやつ、どしたの?」

「さあ?」

ショートカットの女生徒の言葉に黒髪ロングの女生徒が首を傾げて返す。するとガラガラガラと教室の扉が開く音が聞こえ、おかつぱ頭で前歯が大きい中年くらいの年代だろう教師が教室に入ってくる。その後ろをついていくように真も教室に入ってきた。

「静かにしろー!」

教卓に着いた教師が騒がしいクラスの生徒達を一喝し、教室内のざわめきも治まっていく。

「今日から貴様らの担任になる諸岡だ! いいか、春だからといって恋愛だ、異性交遊だと浮ついてんじゃないぞ」

教師——諸岡はそこまで言う classroom 全体を見渡して、さらに言葉を続ける。

「ワシの目の黒いうちは、貴様らには特に清く正しい学生生活を送ってもらうからな!」

その言葉に教室内の生徒が露骨に嫌そうな感じを見せ、真も僅かに顔をしかめる。

「あー、それからね。不本意ながら転校生を紹介する」

諸岡はそう言つて真に目を向けた。その視線は真を見下しているように見える。

「ただれた都会から、へんぴな地方都市に飛ばされてきた哀れな奴だ。いわば落ち武者だ、分かるな?」

その言葉に真はギリツと歯ぎしり——もつとも相手に聞こえてはいないようだが——を鳴らした。

「女子は間違つても色目など使わんように! では椎宮真、簡単に自己紹介しなさい」

高圧的な態度、それに真は露骨に機嫌の悪そうな仏頂面を見せ、ぽつりと漏らすように声を出した。

「誰が落ち武者だ」

その言葉に教室内の全員が驚いたように目を見開く。

「き、貴様の名は『腐ったミカン帳』に刻んでおくからな……いいかね

!？」

それに諸岡はそう声を漏らし、さらに声を張り上げる。

「ここは貴様がいままでいたイカガワシイ街とは違うんだ！ 貴様も調子に乗って女子に手を出したりイタズラなんかするんじゃない——」

「その前に一つお聞きしたい、諸岡金四郎教諭」

「——な、なんだ!？」

諸岡の注意を遮って真が声を出し、諸岡は自分の話の腰を折られたのに一瞬機嫌の悪い様子を見せるがすぐに続け、真は諸岡の目を見た。

「諸岡教諭は確か、この学校で倫理の担当をなさっていると記憶していますか？」

「そ、それがどうした？」

「では、先入観と偏見でものを言い、他人の人権を踏みにじることが教諭に取つての倫理なのでしょうか？」

「なっ!？」

大胆不敵、正にその言葉が似合うほど率直に諸岡に対して自らの意見を述べ、それに諸岡のみならず教室内の生徒まで驚愕する。

「教師とは生徒を教え導くもの、間違つても生徒を見捨て貶めるものではないと記憶していたのですが……間違いでしたかね？」

「ぐ、ぐぬ……わ、分かった。さつきはワシが言い過ぎた………す、すまなかつたな」

真の言葉に諸岡は渋々といった様子で折れ、生徒達は驚いた様子を見せる。諸岡はただ彼の理屈に圧倒されたわけではない、もしここで真の発言を暴言としなんらかの処罰を与えようものなら彼は間違いなく自身を道連れにするようななんらかの行動——例えるなら校長先生や教育委員会への直接的な抗議活動など自分の立場を危うくするようなもの——を起こしてくる。彼の発するオーラからそんな確信を得て諸岡は謝罪の言葉を口にしたのだ。とはいえ心中穏やかではなくむしろ少なくとも舌打ちは叩いているわけのだが。と真はさつきまでの大胆不敵な様子はどこへやら穏やかな笑みを見せて頭を下げた。

「ごちらこそ、言い過ぎて申し訳ありません。たった一年ですがこれからご指導とご鞭撻の程、よろしくお願いいたします」
「ぬ……」

さつきまでの威圧感から百八十度変わった態度に諸岡は驚いたように言葉を失い、真は頭を上げると生徒達の方を向く。生徒達も呆然とした様子を見せていた。

「申し遅れましたが、椎宮真と申します。椎は椎の木、宮は宮殿の宮。真はそのまま真実の真と読みます。家庭の事情で一年間だけの付き合いとなりますが、よろしく願います」

「あ、あー、椎宮の席だが……」

「せ、せんせー、ここ空いてますが……」

「あ？ そうか。よし、お前の席はあそこだ」

真が自己紹介を終えた後まだシヨックから抜け切れていない諸岡がその声を出すと緑ジャージにシヨートカットの女生徒が手を挙げて自分の隣の席を指し示し、それに諸岡が言うと言は黙って指定された席に向かい、着席する。と隣のシヨートカットの女生徒が話しかけてきた。

「き、君怖いもの知らずだね？ びっくりしたよ……まあんな最悪な担任だけど一年間頑張ろ」

「おう」

女生徒の言葉に真は無愛想に返し、女生徒は苦笑を漏らして前を見た。

「かつわいそ、転校生。来ていきなり『モロ組』か……」

「目エつけられると、停学とかリアルに食らうもんねえ……」

「ま、私ら同じクラスだから一緒なんだけどね……」

ふとまわりからそんなざわついた声が聞こえ、真は人知れず息をついた。

「静かにしろ、貴様ら！ 出席を取るから折り目正しく返事しろ！」

ざわつくクラスに諸岡が一喝、生徒達は黙り込んだ。

それから少し時間が過ぎ、昼頃。今日は半日授業のためこの時間帯で終了、チャイムが鳴ると諸岡が口を開いた。

「よし、今日はここまで。明日から平常授業が始まるからな」

そう言い捨てて教室を出ようとする諸岡、それと共に生徒達も席を立つがその時校内放送が流れ始める。

『先生方にお知らせします。只今より、緊急職員会議を行いますので、至急、職員室までお戻りください。また全校生徒は各自教室に戻り、指示があるまで下校しないでください』

「うーむむ、いいか？ 指示があるまで教室をでるなよ」

校内放送が終了したところで、諸岡がクラス全体にそう言い置いて教室を出て行き職員室へと戻る。

「あいっ……マジしんどい」

それを見届けてから女生徒の一人がそう呟いた。真がそれを聞いているとふと誰かが話しかけてくる。

「あ、あの、椎宮さん」

「ん？」

声の方を向くとそこにいたのはなんとというか大人しそうな印象と
いう感じの言ってみれば地味な女生徒。

「なんだ？」

「あ、あの……あ、いえ、なんでもないです」

そう言う女生徒は離れていき、真は首を捻る。何か用事があった
にしては様子がおかしい。

「……そっとしておこう」

しかし彼はそう結論づける。とその時サイレンが鳴り始め、真は顔
を上げた。興味を持った男子生徒も次々と窓に向かう。

「なんか事件？ すっげ近くね、サイレン？」

「クッソ、なんも見えね。なんだよ、この霧」

「最近、雨降った後とか、やけに出るよな」

男子生徒が言うとおりに、窓の外は濃い霧で覆われていて視界が塞が
れている。真はその光景に既視感を覚えるがすぐにその既視感も消
え去る。

「そーいや聞いた？ 例の女子アナ。なんかパラッチとかもいるつ
て」

「ああ、山野真由美だろ？　商店街で見たやついるらしいぜ。てか、俺聞いたんだけどさ……」

と話題が変わって例の女子アナという話題——恐らく不倫騒動の山野アナのことだろう——に移り、二人の男子生徒が会話をしているとその内一人が驚いた様子を見せて一人の女生徒——赤いカーディガンに黒髪ロングの子だ——に近寄った。

「あ、あのさ、天城。ちょっと訊きたい事あるんだけど……天城んちの旅館にさ、山野アナが泊まってるって、マジ？」

「そういうの、答えられない」

「そ、そっか、そりゃ、そうだよね……」

どこか期待のこもったような声に対し女生徒はにべもなくそう返し、男子生徒は乾いた笑みを漏らしながらさすがと引き下がり、さつきまで話していた男子生徒の方に戻っていく。

「はー、もう何コレ。いつまでかかんのかな」

すると男子生徒と入れ替わりに天城と呼ばれた女子生徒に真の隣の席となったショートカットの女生徒が話しかけた。その女生徒の印象は所謂活発で明るいという感じなのだが現在は見るもうんざりとした様子を見せている。

「さあね」

少女の愚痴に天城は声を漏らす。しかしさつきの男子生徒への返答と比べて声質も柔らかいし表情もどこか明るい。

「あーあ、放送鳴る前にソツコー帰ればよかった……」

うんざりとした様子の言葉に天城は苦笑を漏らす、と女生徒はパツと表情を変えた。

「ね……そう言えばさ、前に話したやつ、やってみた？」

「前に、って？」

その言葉に天城が首を傾げ、女生徒はさらに言葉を続けた。

「ほら、雨の夜中に……ってやつ」

「あ、ごめん、やってない」

やっと話の内容が分かったのか謝る天城に女生徒はカラカラと笑い声を出した。

「いいって、当然だし。けど、隣のクラスの男子『俺の運命の相手は山野アナだーっ!』とか叫んでたって」

女生徒のくすくすと笑いながらの言葉、それが終わった頃にスピーカーから音が出始め、続けて放送が聞こえてきた。

『全校生徒にお知らせします。学区内で、事件が発生しました。通学路に警察官が動員されています。出来るだけ保護者の方と連絡を取り、落ち着いて、速やかに下校してください。警察官の邪魔をせず、寄り道などしないようにして下さい。繰り返します——』

「事件!？」

放送の言葉が一旦終わった時に男子生徒の興奮した声が聞こえ、教室内のざわめきも強くなる。

(おじさんは刑事だから捜査に出る必要があるか、なら家に菜々子ちゃん一人というわけにはいかないな……)

真はすぐ思考をまとめると鞆を持って席を立つ。とそこにさっきのショートカットの女生徒が話しかけてきた。

「あ、帰り一人? なら一緒に帰らない?」

女生徒はそこまで言うとししと笑みを浮かべる。

「あたし、里中千枝ね。隣の席なのは知ってるっしょ?」

「ああ」

女生徒——千枝の言葉に真は頷き、千枝は隣の少女——天城を指す。

「で、こっちは天城雪子」

「あ、初めまして……なんか急でごめんね」

紹介に合わせて天城雪子が挨拶し、申し訳なさそうに付け加える。とそれに千枝が反応した。

「のあ、謝らないでよ。なんかあたし失礼な人みたいじゃん。ちよつと話を聞きたいなーって、それだけだったば」

じたばたと両手を上げ下げしながらの言葉に真はふっと笑みを浮かべる。

「自己紹介したが改めて、椎宮真だ。よろしく頼む。里中、天城」

「えっ? あ、あー、うん。よろしく」

「よ、よろしくね?」

真の言葉に二人はそう返し、続けて真はすまなそうに頬をかいた。

「ところで、俺は今日出来ればまっすぐ帰りたいたんだが……」

「え? どったの? まあ寄り道するなくとは放送で言われてるけど……」

「それもそうだが、俺は今従兄妹の家に居候している身で、その従兄妹は今小学生なんだ。下校自体は集団下校になるだろうが、家に一人にしておくわけにはいかないからな」

「そ、そつか……うん、分かった。まあでも途中までは一緒に帰らない?」

「それならおやすいご用だ」

真の説明に千枝は頷き、続けてそう申し出ると真はふっと笑って頷く。そして三人揃って歩き出すとその前に例の自転車に乗っていた男子生徒が姿を現した。

「あ、えーと、里中……さん」

千枝に向けて話しかける男子生徒はどこか落ち着きがなく目がきよろきよろと泳いでおり、顔色も少し悪いように見える。その手にはDVDのケースが握られていた。

「これ、スゲー、面白かったです。技の繰り出しが流石の本場っつーか……」

そこまで言うと言は頭を下げ、彼女にDVDのケースを押しつける。

「申し訳ない! 事故なんだ! バイト代入るまで待つて!」

そしてそう言うやいなや脱兎のごとく逃げだし、千枝は一瞬ほかーんとしていたがすぐその眉をつり上げる。

「まてコラー! 貸したDVDに何した!?!」

そう叫んで地面を蹴り、一気に男子生徒に追いつくと跳び蹴りで容赦なく男子生徒を蹴り飛ばす。

「どわっ!」

その一撃を背中に受けた男子生徒は吹っ飛び、股間を机の角に強打。真は痛そうな表情を彼に向ける。それから千枝はDVDのケー

スを開き、目を見開いた。

「なんで?! 信じられない! ヒビ入ってんじゃん……あたしの『成龍伝説』があああああ……」

「俺のも割れそう……つ、机のカドが、直に……」

「だ、大丈夫?」

「ああ、天城……心配してくれてんのか……」

悶絶する男子生徒に心配した雪子が声をかけ、それに痛みを堪えながら男子生徒が弱々しく雪子に話し掛ける。が千枝がふんつと鼻を鳴らした。

「いいよ、雪子。花村なんか放つといて帰ろ」

千枝はそう言つて雪子を連れて教室を出て行き、真は彼の横を通り過ぎながら気の毒そうな表情を彼に向ける。

「ド、ドンマイ」

そしてとりあえずそうとだけ言い残し、教室を出て行って千枝達を追いかけた。

「そういえば、里中達の家の方はどつちなんだ? 正反対じゃすぐ別れるだろ? もし反対なのに気を使つてついてきてもらつても悪いしな」

「あ、そだね。あたし達の家は——」

「君さ、雪子だよね」

校門近く、ふと帰り道が気になった真が千枝に尋ね、それに千枝が帰そうとした瞬間そんなぐもつた感じの聲が聞こえてきた。そこに立っていたのは制服がブレザーの他校の男子生徒、恐らく柱の影にでもいたのだろう。真達は相手が話しかけてくるまで全くその存在に気づいていなかった。だがその印象は言つてはなんだが不気味、くぐもつた声の印象もあるが目には生気が宿っていないような印象すら受ける。

「こ、これからどつか、遊びに行かない?」

「え? だ、誰?……」

突然現れた男子生徒に雪子が驚いたように声を漏らす。その様子に気付いた他の生徒達が集まり始め、あつという間に遠巻きに野次馬

が出来ていく。

「なにアイツ。どこのガツコ?」

「よりによつて、天城狙いかよ。てか、普通は一人ん時に誘うだろ……」

野次馬の中からそんな話し声が聞こえてくる。

「張り倒されるにオレ、リボンシトロロン一本な」

「賭にならないって。『天城越え』の難易度、知らねえのか?」

そんな賭まで始まる始末。真は参ったようにふうと息を吐いていた。するとその様子に苛立ったのか困惑して何も返さない様子の雪子にやはり苛立ったのか男子生徒が不機嫌な声で再度訊ねた。

「い、行くの? 行かないの? どっち?」

「い、行かない……」

「……ならいい!」

男子生徒の言葉にどこか怯えた様子で返す雪子に男子生徒はそう言い捨てて踵を返し、走り去っていく。それを見送ってから雪子は困ったような様子で千枝に話しかけた。

「あ、あの人……何の用だったんだろ……」

「何の用って……デートのお誘いでしょ、どう見たって」

「え、そうなの?……」

「そうなのって……」

雪子の言葉に千枝が呆れたように説明すると雪子は驚いた様子を見せ、それに千枝はさらに呆れた様子を見せる。

「まあけど、あれは無いよねー。いきなり『雪子』って、怖すぎ」

「確かに。見る限りだが相手が一方的に天城を知っているという印象だったな。それに話し方に相手に対する敬意も感じられなかった、なんというか自分の感情だけをぶつけて相手の感情をくみ取ろうとしてなかったというか……」

千枝の息を吐きながらの言葉に真も腕組みをしながら返す、と彼らの背後からようつと爽やかな声が聞こえてきた。

「よう天城、また悩める男子をフツたのか? まったく罪作りだな……俺も去年、バツサリ斬られたもんなあ」

「別に、そんな事してないよ？」

背後から軋んだ音を立てる自転車を押してきた男子生徒——千枝からは花村と呼ばれていた——が声をかけてくる。と花村の言葉に雪子は身に覚えがないというように首を横に振り、花村はにっこり笑う。

「え、マジで？　じゃあ今度、一緒にどっか出かける？」

「……それは嫌だけど」

雪子の言葉に気をよくしたらしい花村が遊びに誘うが、困ったように雪子が断る。それに花村はがくつと大げさに肩を落とすうつぶむいた。

「僅かでも期待した俺がバカだったよ……っ—かお前ら、あんま転校生イジメんなよー」

「話聞いただけだってば！」

花村はそう言うときギンギンいう自転車に乗って去っていき、その後ろ姿目がけて千枝が怒鳴る。と真はやれやれと肩をすくめて困ったような笑みを浮かべる。

「そろそろ行かないか？　さつきからの騒ぎで妙に注目されてる」

「え？　マジ？　ってやば、モロキン来てんじゃん。早く行こー！」

真の言葉に千枝がそう言って昇降口の方を見回すと「とっとと帰れ！」と怒鳴り散らしながらこつちに近づいてきている諸岡に気づき、三人揃ってその場を逃走する。

それから帰り道、真は千枝からせがまれて転校の理由をかいっつманで話していた。

「へえ〜両親の海外赴任……もつとしんどい理由かと思っちゃったよ。はは」

「どういう理由だよ……」

「んくつとそだね〜、親が実は外国のスパイで——」

「はい却下」

「——ちよつ、最後まで言わせてよ！」

千枝の言葉に真が呆れたように尋ねると千枝はそう話し始めるが

瞬時に真が遮り、それに千枝が声を上げる。その漫才を見て雪子はふつと笑っていた。すると千枝はふと足を止め、辺りを見回す。周りは田んぼだらけ、遠くには山も綺麗に見える。

「ご、ほんつとなーんも無いでしょ？」

「まあ、正直に言えばな。前の学校の地元に比べたら素朴というかなんというか……」

「あはは。ま、そこがいいところでもあるんだけどさ、余所のヒトに言えるようなモンは全然……」

千枝の言葉に真が苦笑気味に返し、千枝は自嘲気味に続けるが言葉を止めて考える様子を見せる。

「あ、八十神山から採れる……何だっけ、染め物とか焼き物とか、ちよつと有名なな」

「へえ、染め物や焼き物は山から採れるのか？」

「えっ!? 知らないの!？」

千枝の言葉に真がからかうような笑みを浮かべてそう言うのと千枝は分かりやすいびつくりの表情を見せる。すると雪子が苦笑した。

「千枝、その言い方じゃ、染め物や焼き物が直接山から採れるみたいだよ? 椎宮君もその間違いを指摘したんでしょ?」

「まあな」

「うあ、意地悪……ああ、雪子んちの『天城屋旅館』は普通に自慢の名所!」

雪子の指摘に真がイタズラが成功した子供のような笑みを浮かべると千枝が声を漏らし、それから思い出したように続ける。と急に話を振られた雪子は困ったような様子を見せる。

「え……別に、ただ古いだけだよ」

「そんなことないって! 隠れ家温泉とかってよく雑誌とかにも紹介されてんじゃない。この町ってそれで保ってるよね、実際」

まるで自分のことのように嬉しそうに語っている千枝に対し雪子はやはり困った様子を見せ、真は僅かに首を傾げる。すると千枝は今度は真の方を見た。

「ね、ところでさ、雪子って美人だと思わない?」

「は？」

突然振られた話題に真は困ったような声を漏らす。と雪子がまた困ったような恥ずかしそうな様子を見せており、真はふうと息を吐く。

「気は進まんが、しようがないか」

「へ？　なんか言った？」

「いや、なんでも。まあ天城は確かに美人だと思うぞ」

その言葉に雪子の顔が赤くなり、千枝は「でっしょー」と大きく頷く。と真は千枝の方を向いた。

「だが、里中も可愛いと思うぞ」

「ふええ!？」

「天城は大和撫子的な美人だが、里中は元気で活発で周りを明るくするタイプで可愛いと思うぞ」

「え!？　あ、いや、そんな……」

真の褒め言葉に里中は顔を真っ赤にして腰が砕けたようにふらふらとなり、真は雪子の方を見る。と雪子はくすつとイタズラっぽい笑みを見せた。

「うん、そうだね。千枝は可愛いよ」

「ぎゃーっ！　雪子までー!？」

雪子の追撃で千枝はついにへたり込み、雪子は満足そうな笑みを浮かべる。

「ね？　こういうの人に言われると結構恥ずかしいでしょ？」

「は、はい、ごめんなさい……」

雪子の言葉に千枝は真っ赤な顔でへたり込みながら謝罪し、真もくつくつと笑みを浮かべていた。

「もく、真君も酷いよ……」

「悪かったな、こういうのは注意するより一回体験させた方が早いから。ああ、でも里中が可愛いってのは全部が嘘ではないぜ？」

「ちよっ!？　もう止めてよ……都会の人って口が上手いんだね……」

「俺の場合先輩の影響だな……これでも前の学校に行く前は口下手だったんだ」

「へ〜」

それから三人は会話しながら歩いていく、と妙にぎわついている人だかりを見つければ、彼らはそつちの方に歩いていった。そこにあるのはブルーシートに立ち入り禁止の黄色いテープ、そしてパトカーと警官、野次馬。ドラマとかでよくある事件現場という様相だ。野次馬の女性達は口々に話しており、その中の「死体がアンテナに引っかかっていた」という言葉に真が反応する。

「さつき学校で事件があったと言っていたが、まさかこれか？　だがアンテナに引っかかっていた？……」

「おい、ここで何してる」

真が考え込もうとした瞬間聞こえてきた声、聞き覚えのあるその声に真はそつちを向いた。

「叔父さん。ああ、学校帰りに通りがかつたんだが……」

「……つたく、あの校長、ここは通すなって言つたらうが……」

真の説明を聞いた男性——遼太郎はチツと舌打ちを叩いて苦虫を噛み潰したような表情で頭をかきむしり、真の後ろから千枝が恐る恐る話しかけてくる。

「え、えつと、知り合い？」

「ん？　ああ、こいつの保護者の堂島だ。あ……まあ、その、仲良くしてやってくれ。それと、三人ともウロウロしてないでさつきと帰れ」

「分かってます。ああ、ところで叔父さん、菜々子ちゃんは？」

「……他の子の保護者と一緒に集団下校をして、今は家に一人だ……すまんが、菜々子は頼んだ」

「はい」

千枝の言葉に遼太郎はそう言い、それに真は頷いた後さつきから心配していた事を探ね、それに遼太郎は返した後すまなそうな声質で続け、真は静かに頷いた。すると現場の方から若い刑事が彼らの方を走り抜け、田んぼの方に行く。

「うえつ、おええつ！」

「足立！　おめえはいつまで新米気分だ！　今すぐ本庁帰るか？」

「ああ!?!」

「す……すいませ……うつぷ」

そして人目をはばからずに嘔吐をはじめ、それを見た遼太郎が苛ついた様子で叱責を始めた。それに足立と呼ばれた刑事はすまなそうに返すがまだ顔色は悪く、遼太郎は呆れたようにため息をつく。

「たあく……顔洗ってこい。すぐ地取り出るぞ!」

そう言つて仕事に戻る遼太郎の後を足立は追いかけていった。それを真は見送り、二人の方を振り返る。

「すまない、俺はここから走つて帰ることにする」

「ああ、従兄妹さん心配だもんね。うん、じゃあね」

「また明日ね」

「ああ、じゃあな」

真の言葉に雪子と千枝が頷いて返し、真は一言返すと家の方向けて走っていった。

第二話 仲間との交流

四月十三日、午前中、八十稲羽商店街。黒色のシャツに青色のジャケットを羽織り、青のジーンズ、さらに前髪が右目を隠す程度に伸びその髪色は青色というほぼ青ずくめの青年は商店街の道に一台のバイクを止めてどこことなく居心地悪そうな表情で携帯電話を使い電話していた。

「……きついです、注目……」

「そ、そうか……」

その言葉に電話の相手も呟く。彼の言葉通り彼はすっかり注目的、周りの人達は例外なくひそひそと何かを話していた。見覚えのないよそ者がその会話内容だと予測するのは想像に難くない。

「ところで命、やってきて早々だろうが何か異常な点はないか？」

「……もうちよつときちんと調べてみないとどうとも言えませんが、特に何か事件が起きたという話はありませんね。周りの話を聞く限り生田目元議員秘書の不倫騒ぎ、あのスキヤンダルの話でもちきりつてとこです。ま、無理に異常を言ってやれば異常なほど平和な田舎町ってとこでしょうか？」

「……本当にすまない……それで、マヨナカテレビという話はどうだ？」

青年——命の皮肉に電話の相手——美鶴はすまなそうに返した後、自分が気になっている事について命に尋ねる。

「ああ、やってきた時にそこらの人が話してたので聞いてみましたけど、確か雨の日の夜午前零時、一人で電源の入ってないテレビを見ていれば運命の人が映るだのなんだの。確証はありませんけど単なる都市伝説の類じゃないですかね？ あと気になるといえば霧なんですけど、まあ霧なんて自然現象ですもんね」

「そうだな……すまない、忙しい時期だというのに」

「まあ数日滞在しての調査とのご依頼だところちも納得して受けましたからね。気にしないでください……いつまでゆかりと結生を騙せるかは甚だ疑問ですが……」

命は美鶴にさつと調べた事を報告、それに美鶴がすまなそうな声で謝ると命はそう返した後はあと深いため息をつく。この町にやってくるより前に妹である結生と恋人であるゆかりには「酷い風邪をこじらせた」と嘘をついて大学を休むことを理由付けている。しかしもしばれたら何を言われるかそして何をされるか分かったものではなく、それを了解しているのか美鶴が続けた。

「もしばれたら私もフォローを手伝おう。なんでも言ってくれ」

「言うような事にならない事を祈りますよ……それで、こっちの宿なんですが……」

「ああ。アイギスに頼んで旅館に予約を取らせておいた。なんでも町の老舗温泉旅館だそうさ。ゆっくり休んでくれ」

「そりやどうも……で、なんです。このバイク……」

命は一連の話が終わった後、自分がここまで乗ってきたバイクを見ながら呟く。この依頼を受けた後美鶴から送られてきたものだ。

「どうした？」

「これ、先輩の私物ですよ？ S・E・E・Sで使ってた。シャドウのアナライズ機能とかのサポート装置は大方取り外されてますけど」

「ほう、よく覚えていたものだな。私も色々忙しくて最近バイクに乗るどころか整備することすらままならん。そうとなれば君に使ってもらった方がバイクも喜ぶだろう……なにより、君に私のバイクのキーも渡していたしな」

「アリガトウゴザイマス。んじゃ、切りますね」

「ああ。定期報告はきちんとしてもらうぞ」

「ええ」

命はそう言い、電話を切るとバイクのハンドルにひもをかけていたヘルメットを被りなおし、また走り出した。

それから少し時間を戻して学生の登校する時間帯、真は菜々子と別れた後学校に向かっていた。と後ろの方からシャツという音が聞こえ、そう思うと真の後ろから何かが追い抜く。そしてそう思った直

後その追い抜いたもの——自転車が電柱に激突、その衝撃で運転していた男子生徒が派手にごみを捨てるポリバケツに頭から嵌ってしまった、ゴロゴロとあがくように転がっている。

「だ、誰か……」
「……」

流石に見かねたのか真は彼に近づき、彼が嵌っているポリバケツを取ってやる。

「いやー、助かったわ。ありがとうな！」

「構わない……ん？ あんたは昨日里中に蹴っ飛ばされた」

「あ、ああ、まあな。えつと……そうだ、転校生の椎宮真だったよな。俺、花村陽介。よろしくな」

「ああ、よろしく頼む」

少年——陽介の言葉に真も会釈をして返し、ポリバケツを立て直すのと辺りに散乱しているゴミをすぐ出来る範囲でゴミ捨て場に集める。

「しっかりとてんなあ……」

「通行人の迷惑になるだろうが」

陽介の言葉に真は真顔でそう言い、ぱんぱんと手を払うと陽介と共に学校向けて歩き出す。とその途中で陽介が口を開いた。

「なあ、ところでさ、昨日の事件、知ってんだろ？」

「テナに」ってやつ！ あれってなんかの見せしめとかかな？」

「まあ、事故だって言い張るのは無理があるのは確かだな」

「だよな。わざわざ屋根の上にぶら下げるとか、マトモじゃないよな」

陽介の言葉に真は腕を組んで返し、それに陽介がうんうんと頷きながら続けると真はふっと、どこか冗談っぽく微笑んだ。

「だが事は殺人事件だ、素人が首突っ込んだら危険だぞ。子供にされるかもな」

「あつはつは。怪しげな取引現場を目撃して黒づくめの男達に毒薬飲まされてったか？ お前って冗談言うタイプなのな。正直無愛想な奴だと思ってたぜ」

「よく言われる」

真の冗談に陽介は笑いながらそう言い、にっと笑って続けると真は

肩をすくめて返した。それからたわいのない会話をしながら、彼らは学校に歩いていった。

それから時間が過ぎて放課後。真が帰るために荷物をまとめていると教室の後ろから陽介が近づいてきた。

「よう。どうよ、この町には、もう慣れた？」

その言葉に真は鞆を机の上に置き、陽介の方を向いて苦笑する。

「まだ二日目だからな。新しい環境に慣れるのは早い方だが、今は辺りの土地勘を覚えるのに大忙しだ」

「だろうな。ああ、今朝助けてくれたお礼にここの名物のビフテキをおごるぜ。俺、安い店知ってるからさ」

「あたしには、お詫びとかそーゆーの、ないわけ？ 成龍伝説」

陽介が真にそう提案していると、それを聞きつけた千枝が会話に混ぜられてくる。

「う……飯の話になると来るなお前……」

「雪子もどう？ 一緒に奢ってもらおう」

千枝の言葉に陽介が声を漏らすが千枝はそれを無視して雪子に話しかける。しかし雪子はその言葉に首を横に振って返した。

「いいよ、太っちゃやし。それに、家の手伝いあるから。それじゃ私、行くね」

淡々と、しかしどこか残念そうに断りを入れて雪子は下校する。それに千枝は残念そうな表情でため息をついた。

「仕方ないか。じゃ、あたし達も行こ」

「え、マジ二人分奢る流れ？……」

「ご馳走様」

千枝の言葉に陽介が困ったような声を漏らすと真はくっくつと笑いながらそう返す。それに陽介はげんなりした表情で肩を落としため息をついた。

それから三人がやってきたのはジュネス——半年前にこの町にオープンしたスーパーマーケット、と真は里中から説明を受けていた

——の屋上にあるフードコート。それから注文品を持ってきた陽介に一番に千枝がブーイングを出す。

「安い店ってここかよ!? ここ、ビブテキなんかないじゃん!」

「二人分じゃ無理だっつの」

千枝の言葉に陽介はそう言い、注文品をテーブルに置いて真と千枝に配ってから椅子に座り、自分の分を取る。それから彼らは少し会話をし、そのひとつを聞いた真が飲んでいたジュースを飲み込んでから口を開いた。

「へえ。花村の親父さんはここの店長なのか」

「ああ。それで俺の家族、半年くらい前にこっち越してきたんだ」

真の言葉に陽介は微笑を浮かべながらそう言い、すると千枝がふと思ったことを口にするように声を出した。

「そーいやこーつてき、出来てまだ半年くらいだけど、行かなくなつたよねー、地元の商店街とか。店とか、どんどん潰れちゃって……あ」「……別に、ここのせいだけって事ないだろ?」

千枝の言葉に対し多少不機嫌そうに陽介が答える。それに真は口を挟むことができずジュースに口をつけた。それから少し無言が続くが、近くのテーブルに誰か女性がやってくるとそれを陽介が見つける。

「あ……小西先輩じゃん。悪い、ちよつと」

そうやって彼は席を立ち、離れたテーブルに座る女性の方へと移動する。それを真は見送った後千枝の方を向いて少し首を傾げる。

「誰だ?」

「三年の小西早紀先輩。実家は商店街の酒屋さん」

真の質問に千枝はさらつとそう答え、聞き耳を立て始める。しかしそうするまでもなく陽介の声が聞こえてきた。

「お疲れつす。何か元気ない?」

「おーつす……今やつと休憩。んで花ちゃんは友達連れて自分ちの売り上げに貢献してるとこ?」

「うわ、ムカつくなー」

悪態を叩き合いながらの軽口。それから陽介はどこか真剣そうな

目で女性——早紀を見る。

「……つか、ホントに元気なさそうだけど、何かあった？」

「別に……ただ疲れてるだけ」

「……何かあったら、何でも言つてよ。俺……」

心から心配するような陽介の言葉、それに早紀はふふつと笑った。

「だーいじょうぶだつて。ありがとね」

そしてその言葉を返す、それに陽介は複雑な表情を見せた。と、早紀は先のテーブルにいる真に気づく。

「あの子……もしかして、昨日入つたつていう転校生？」

「え？ あ、ああ」

早紀の言葉に陽介は頷き、早紀は席を立つと真達の方に歩いていく。

「君が転校生？ あ、私の事は聞いてる？」

「名前程度ならさつき里中から。三年の小西先輩、ですよ？ 椎宮真です」

早紀の言葉に真はさつき千枝に説明されたことを答えた後自身の名を名乗る。

「そう言えば後輩の子から聞いたけど、モロキンを言い負かしたんだつて？ 凄いよね」

「大袈裟な。少し自分の意見を出しただけですよ」

早紀の言葉に真ははあとため息をつきながら返し、早紀はまたふふつと笑う。

「あなたも都会の方から越してきたのよね？ 都会っ子同士はやっぱ気が合う？」

彼女はちらりと陽介の方を見やっってから問い、真は少し考えると肩をすくめた。

「特にそうというわけでは。そもそも花村が都会出身つてのはこの放課後に聞きましたし」

「あらそうなの？ ごめんね、変なこと聞いたかしら」

真の言葉に早紀はくすくすと笑つてそう言い、ちらりと陽介を悪戯っぽい目で見ると内緒話のような仕草を真に向ける。

「花ちゃん、お節介でイヤツだけど、ウザかったらウザいって言いなね?——」

「ちよっ! 先輩!」

内緒話の仕草とは裏腹に間違いなく陽介にも聞こえるような声量の言葉に陽介が声を出し、真はふつと笑う。

「ウザい」

「お前も乗らなくていいっての!!」

真のふざけたような一言に陽介は更なるツツコミを見せた。それに早紀は満足したように笑うと伸びをし、くるりと踵を返す。

「さーて、もう休憩終わり、つと。じゃあね」

そしてひらひらと手を振って歩き去っていき、陽介はにっこり笑って真達を見る。

「人のこと『ウザいだろ?』なーんて、小西先輩の方がお節介じゃんなあ?あの人、弟いるから、俺のことも割とそんな扱いって言うか……」

「ん? 弟扱いは不満なのか?」

「へええくえ、やつぱさういうことく?」

陽介の言葉に真が純粋な疑問の声を零すと千枝がにやあくつと効果音がつきそうなほどに頬を吊り上げ、その言葉に陽介はぎくりとなる。

「老舗酒屋の娘と、デパート店長の息子。燃え上がる、禁断の恋! みたいなの?」

「バツ!……アホか! 何言ってるんだよ!」

「花村、顔が真っ赤だぜ?」

「言われんでも分かつとるわ!!」

千枝の言葉に陽介が顔を真っ赤にして声を上げると真がふつと笑いながらそう言い、陽介はまた叫び返した後ため息をついて崩れ落ちるように椅子に座る。

「たっく、椎宮のキャラがマジで分からねえ……無愛想と思ったら軽い冗談だけじゃなく洒落にならん冗談もためらいなく口に出すし……」

「前の学校の先輩のおかげだよ」

陽介の言葉に真はくつくつと笑い、千枝はにっこり笑った。

「じゃ、そんな悩める花村にイイコト教えてあげる。椎宮君も聞いときなよ」

「……イイコト?」

千枝の言葉に真と陽介が千枝の方に身を乗り出し、千枝も身を乗り出すとテーブルの中心に三人の顔が近づく。

「マヨナカテレビって知ってる?」

千枝が出したその言葉。続けて告げられるその内容はどこにでもありがちな所謂恋占いのような都市伝説。それに真と陽介は顔を見合わせて苦笑し、陽介が「幼稚なネタでいちいち盛り上がれんな」と口にして千枝の逆鱗に触れて口喧嘩を始め、真は苦笑を漏らしてまたジュースに口をつけた。

一方少し時間を戻し、雪子が実家である天城屋旅館に戻り、制服とでも言おうか着物に着替えて旅館に出た時。彼女は入り口で何か小さな騒ぎが起きてるのに気づき、そっちに向かう。

「あ、あの、ですから、利武様のご予約は明日からになっておりまして……」

「ちよつ、う、嘘でしょ!」

「……ほ、本当です」

名簿を見ている従業員と困ったように声を上げている青年。その内容から察するに青年が予約日時を間違えてしまったらしく、青年はがくりと崩れ落ちる。

「ア、アイギス……恨むぞちくしょう……」

そしてぶつぶつとそう呟くと立ち上がり、従業員に向けて深く頭を下げる。

「さ、騒ぎ立ててすみませんでした」

「あ、はい……」

「はあ、今日の宿どうしよう、他の旅館予約なしで泊まれるかな? 最悪悪野宿も覚悟して……とりあえずまず先輩に相談しないと……」

礼儀正しく謝罪の言葉を出した後がつくりと肩を落とし、ずくんと
いう擬音を背負いとぼとぼという効果音が似合いそうな足取りで旅
館を出て行く青年。雪子はその後姿を見送った後、旅館の手伝いに
戻っていった。

第三話 マヨナカテレビ

四月十三日、夜、午前零時前。八十稲羽商店街にある言ってはなんだがボロい神社の境内、ライダーズジャケットを羽織った青年は空から降り注ぐ雨を見ながら携帯で電話をしていた。ちなみにバイクは神社の茂みの中に隠している。

「本当にすまない、命。まさか予約日時を間違えてしまうとは……」
「アイギスに『恨むぞ』と伝言をお願いします。おかげで今夜は野宿ですよちくしょう。しかも雨まで降り始めて……人気のない神社がなかったらどうなったことか……」

「すまない……」
青年——命の愚痴に電話相手である美鶴はすまなそうに返し、命はやれやれと息をつく。

「まあ、先輩は悪くないんだし愚痴はこの辺にしますよ。じゃ、電話切りますね」

「ああ。明日からも調査よろしく頼むぞ。身体を壊さないようにな」

「了解」

美鶴の言葉に命はそう返し、電話を切る。そして辺りをきよろきよろと見回した。

「……風邪を引かないことを祈るか」

そしてそう呟き、楽に入れる一番奥まで入っていき座り込むとジャケットを毛布か布団のように自分にかけて携帯の時計を見る。

「もうすぐ午前零時、か……ふっ、影時間を思い出しちゃったな……」
彼は二年前まであった一般には隠された時間をふと思いついて笑みを漏らし、目を閉じた。

それと同じ頃、とある一軒家、堂島家に居候している少年——真は今日の放課後にクラスメイト里中千枝から聞かされたことを思い返していた。

——マヨナカテレビって知ってる？——

——雨の夜の午前0時に、消えてるテレビを一人で見るんだって——

——そこに映った自分の顔を見つめると、別の人間がそこに映るの——

——それ、運命の相手なんだってよ——

それを聞いた後、真は一緒にいたクラスメイト花村陽介と思わず顔を見合わせて苦笑してしまい、さらに陽介は「幼稚なネタでいちいち盛り上がれんな」と千枝をからかって口喧嘩。それからとにかく今夜は雨だから試してみようということになり、現在彼は雨音を聞きながら消えているテレビの前に立っているわけである。

そして、そんなことを考えている間に時計の針が零時を指し示し、真は目の前のテレビに目を向ける。しかしやはりというか、テレビの画面には自身の顔しか映らない。

「……そりやそうだよな」

真はそう声を漏らし、明日花村や里中との笑い話にしようと思いなからテレビから視線をそらし、もう寝ようと布団へと歩き出す。

「……え？」

その時間こえ始めたノイズ音と後ろ、ちょうどテレビのある方から光が漏れているのに気づき、真は驚いたように振り向く。電源を切っていたテレビが不可思議な光を放っていた。そしてそのテレビには、何かが映っている。

「これは!？」

思わずテレビの前に駆け寄り、画面を凝視する。画像がかなり荒いが確認できるのは女性、セーラー服を着ていることから考えると女子高生と見受けられる。

(どこかで、見たような……)

そんな思考が頭を過ぎり、真は画面に頭を近づけ、右手を身体を支えるように画面に近づける。そして画面に触れたその瞬間、画面に波紋ができた。

「なあっ!？」

まるで水に手を入れたかのごとく、ガラスであるはずのテレビ画面を真の手が突き抜けてしまう。

「くっ!?!」

しかもテレビの中の腕が何かに引つ張られるように引き込まれていき、真は咄嗟にテレビ画面の縁を入れていない反対側の手で掴み、テレビに引きずり込まれないように抵抗する。

「のわっ!?!」

と、突然引き込もうとする力が消え、抵抗していた真は慣性の法則にしたがって後ろに倒れこむ。

「づあっ!?!」

そしてそこにあつた机の角に頭をぶつけ、ぶつけたところを押さえながらごろごろと床を転がり悶え始める。

「お兄ちゃん?」

「!」

すると階下から聞こえてくる声、菜々子だ。それに気づくと真は後頭部を右手で押さえながら階下へと続くこの部屋のドアを見る。

「どうしたの?」

「す、すまない起こしたか!?! その、ちよつと寝ぼけて!」

「そう?」

「そうそう。もう寝るから、おやすみ!」

「うん、おやすみ」

お休みの挨拶をすると共に菜々子の足音が彼女の寝室なのだろう場所へと向かっていき、真はようやく少し引いてきた頭の痛みから意識を外し、テレビを見る。

「なんだったんだ、さっきの……」

真は立ち上がりながらそう呟き、しかしまたテレビに触れる気も起きず、はあとため息をついた。

「……寝よ」

そしてそう一人ごちると布団の方に歩いていき、眠りについた。

それから翌日の放課後。授業も終了した後真は席につき、辺りの会話を聞いていた。

(先日の事件の噂話か……)

「あ、ねえねえ椎宮君、噂聞いた？」

真がそう心の中で呟いてると千枝が突然話しかけ、真はそつちをちらりと見ると首を横に振る。

「いや、なんの噂か知らないが特に興味もない」

「おい、お前はあれか？ 大都会の冷たい大人か？」

「あ、花村じゃん。どつたの？ なんか元気ないよ？」

真の言葉に陽介がツツコミを入れ、それに千枝が返した後ふと気づいたように聞き返す。

「ああ、いや、あのさ……や、その、大した事じゃないんだけど……実は俺、昨日、テレビで……」

陽介はそこまで言うと言口づもり、うつむくと首を横に振る。

「いや、なんでもねえや。それより噂、なんだって？」

「ああ、事件の第一発見者って、小西先輩らしいって」

「そっか……だから元気なかったのかな……今日、学校来てないっぽいし」

陽介の言葉に千枝はそう言い、それを聞いた陽介はまだうつむいたままそう呟く。とそんな話をよそに雪子が席を立ち、千枝がそれに気づく。

「あれ？ 雪子、今日も家の手伝い？」

「今、ちよつと大変だから……ごめんね」

千枝の問いに雪子はどこか疲れた様子で答え、彼女はそのまま下校する。それを見送った陽介が腕を組んだ。

「なんか天城、今日とつくべつ、テンション低くね？」

「忙しそうだね、最近……」

陽介の言葉に千枝は小首をかしげて答える。それから千枝はパツと表情を変えた。

「ところでさ、昨日の夜……見た？」

「昨日のって、マヨナカテレビか？」

「えっ？……や、まあその……お前はとうだったんだよ」

千枝の言葉に真が確認を取ると陽介は動揺したように声を漏らし

た後千枝に話を振る。それに彼女はこくこくと頷いた。

「見た！ 見えたんだって！ 女の子！……けど、運命の人が女って、どゆ事よ？」

「ああ、俺も見えた。鮮明には見えなかったが、そういえばここの制服に似た制服、いやこの学校の制服を着てたような……」

千枝の言葉に真が眩き、千枝がえつと驚いたような声を漏らす。

「ね、ねえ、もしかして髪の毛がこう、ふわって感じる感じに伸びてなかった？ こう、ふわって」

千枝は自分の頭の後ろに手をやってふわつと伸びた感じの髪をジェスチャーで表現、するとそれに陽介が反応した。

「お、おい、それもしかして俺が見た人と同じなんじゃねえか!？」

「え、じゃ花村も結局見えたの!? しかも同じ子？ 運命の相手と同じって事？」

「知るかよ……で、お前はどうかだったんだ？」

陽介の言葉に千枝は驚愕の声を漏らし、むむむと考える様子で続けると陽介はそう返し、真に話を振る。それに真は昨日——零時を回っていたことから今日とも言えるだろうか——ぶつけた後頭部をかきながら頭を横に振った。

「いや、驚いて髪形まで覚えてない……いや、実はだな……」

真はそこまで言うのを潜め、昨日——零時を回っていたことから以下略——のマヨナカテレビの時間帯で起きたことを話す。それに陽介は苦笑いを見せた。

「いや、テレビに吸い込まれたってのはお前……動揺しすぎ？ じやなきや寝才チだな」

「そうか？……」

「けど夢にしても面白い話だね、それ。テレビが小さくて入れない、とか妙にリアルでき。もし大きかったら……」

陽介に続いて千枝もあははつと笑いながらそう言い、思い出したような表情を見せた。

「そう言えばウチ、テレビ大きいのが買おうかって話してんだ」

「へえ。今買い換えすげー多いからな。なんなら、帰りに見てくか？」

ウチの店、品揃え強化月間だし」

「見てく見てく！ 親、家電疎いし、早く大画面でカンフー映画見たい！」

陽介の言葉を聞いた千枝は嬉しそうに頷き、アチョーツと言いながらポーズを取る。その次に陽介が真の方を見てにししつと悪戯っぽく笑った。

「だいぶデカイのもまであるぜ。お前が楽に入れそうなのとかな、ははは」

(夢？ 夢だったのか？……)

陽介の言葉を聞き、真はついにあれが寝ぼけて見た夢だったのか現実だったのか自信がなくなってきたのか口元に手をやりながら心の中で呟いていた。

「ほーら花村ー椎宮くーん、早く行こー！」

「へいへい。ほら椎宮、行こうぜ」

「あ、ああ」

すると教室の出入り口で千枝が待ちきれないというように真と陽介を呼び、陽介も苦笑交じりに返した後真を促す。それを聞いた真も二、三度空頷きして荷物を持ち立ち上がった。

それから彼らがやってくるのはジュネスの家電売り場、テレビコーナー。

「でかつ！ しかも高っ!! こんな誰が買うの？」

「さあ……金持ちなんじゃん？」

驚く千枝に呆れた様子で陽介が説明する。それによるとジュネスでテレビを買う客は少ないらしく、この辺りには店員が配置されていないらしい。実際真が辺りを見回して確認するが確かに客どころか店員の姿もなかった。それから陽介と千枝はすたすたと一台のテレビに歩き寄ると右手を画面につける。と画面はそれを押し返し、陽介はにししと笑った。

「……やっぱ、入れるわけないよな」

「はは、寝才子確定だね」

「大体、入るつたつて、今のテレビ薄型だから裏に突き抜けちゃうだろう……ってか、何の話してんだっつもの！」

陽介はそこまで言うと言首を横に振り、それから千枝が話しかける。

「ねえ、それよりもっと安いのがないの？ テレビ。おススメある？」

「んん、こちらなどいかがでしょうか、お客様。この春発売されたばかりの最新型で……」

千枝の要望に陽介は冗談っぽく笑いながら接客を始め、比較的安いテレビの方に歩いていく。しかし千枝は「ゼロ一個多いんじゃないっ!？」と叫んでおり、それを横目で見た後真は目の前の巨大テレビを見る。

「あ、あの、君、もしかして真君？」

突然背後から聞こえてきた声、しかもこの場ではまず聞くはずがなかった声に真は驚いたように振り返る。そこに立っていたのは黒色のシャツに青色のジャケットを羽織り、青のジーンズ、さらに前髪が右目を隠す程度に伸びその髪色は青色というほぼ青ずくめの青年——ちなみに真から見える左目には若干クマが出来ていた——。その姿を見た真はさらに驚いたように目を丸くした。

「み、命先輩!?! なんでここに!?!」

「それはこっちの……あ、そうか。親が海外転勤で引越して親戚の家にお世話になってるんだっけ。うわ、偶然だな……」

真の驚いた声での質問に男性——命も驚いたように返そうとした後すぐ察したように続け、改めて驚いたように頭をかく。

「そ、それで、先輩はなんでここに?」

「あーいや、ちよつと訳あってね。このお店見て回ってたら真君っぽい後姿を発見したから声をかけたただだよ。ところで、あつちの二人は友達?」

真の質問に命は言葉を濁した後誤魔化すように陽介と千枝を指す。それに真はこくんと頷いた。

「は、はい」

「そっか、転校デビューが上手くいったようで何よりだよ。ところでテレビ見てたけど、部屋にテレビないの？ まあそれにしたって一人部屋にこれはでかいか。従兄妹の家のやつを買い換えるとか？」

「あ、いえ違います。里中、ああ、あつちの女の子の方。彼女が家のテレビを買い換えるとかでその下見に来て、俺はその付き添いです。ちなみにもう一人の男の子、花村はこの店の店長の息子です」

「へえ。真君の友達なら後で挨拶しとかないかね」

真の説明に命は穏やかに微笑みながらそう言い、その笑みにつられたように真も笑った後、彼はまたテレビに目を移す。

（夜のあれ、やっぱ夢だったのかな？……このテレビ、これだけ大きかったら本当に俺ぐらい入れそうだな……）

「真君、真君」

「あ、すいませ——」

つい思考に入ってしまった真は命に呼ばれたことで我に返り、彼の顔を見るとはっとする。

「……何かあった？」

まるでこっちの心の内を見透かしそうなその表情、それに真の胸がドキリとなり、彼は思わず口をつぐんでしまう。

「転校デビューが上手くないとか、居候先の間人間関係が不安だとかそういうのじゃない。もっと変なことがあった……違うかな？」

どこか不安げな様子を見せながらも真剣な目つきでそう問いかける命、それに真はしばらく押し黙った後、ようやく口を動かした。

「……マヨナカテレビって知ってますか？」

「……この町で噂に聞くくらいはね。確か、雨の日に一人で消えているテレビを見ると、運命の相手が映る……だったけ？」

「は、はい。それで、里中に言われて試してみたんです……昨日、ちょうど雨だったから」

命の真剣な目つきでの言葉に真は説明を始める。

「で、それで、運命の人かどうかはえと、分からないですけど、女の人がある、映ったんです。その、画像は荒くて、よく見えなかったんですが」

ところどころもっているたどたどしい説明、それに命は真剣に耳を傾けていた。

「その女の人をよく見ようと、テレビの画面に触ったんです……」

真はそこまで言うとき口を閉じ、命は少し黙って言葉の続きを待つ。しかし真はそこで口をつぐんでしまった。

「……それで、触ったらどうなったの？」

待ちきれないというように続きを促す命。しかしその目は作り話を面白がっているものではなく、真剣そのものだった。

「……テレビに……テレビに吸い込まれたんです……手が」

真はそう言葉を吐き出すとすうくはあくど深呼吸をし、自分の前にあるテレビに手を伸ばす。

「こう、何の変哲もないテレビに触れた。それだけなんですけど……」

そしてテレビの画面に触れたその瞬間、テレビの画面に波紋が出来、真の手があの時と同じようにテレビに吸い込まれた。

「っ!？」

「真君っ!」

咄嗟に命が彼の肩を掴み、その声に少し離れたところにいた陽介と千枝が反応し、その光景を目撃。

「な、何あれっ!?! あれって最新型? 新機能とか? ど、どんな機能?」

「そんな機能あるわけねえだろ!」

その瞬間驚いたように叫びながら慌てて真の元に駆け寄る。そして真のテレビに刺さっている右腕をまじまじと見た。

「うそ……マジで刺さってるのっ!?!」

「マジだ……ホントに刺さってる……すげーよ、どんなイリユージョンだよっ!?! で、どうなってんだ!?! タネはっ!?!」

「二人とも、落ち着いて」

「えっ? あ、あなたは?」

驚愕のあまりどこか混乱している様子の千枝と陽介に対し命が落ち着くように言い、テレビに腕が刺さっているなんていう異常事態の前では仕方ないだろうが二人はそこでようやく命に気づいたように

声を漏らす。

「ああ、真君の知り合いつていうかね……真君、身体に異常はない？」
「あ、は、はい……これ、もう少し奥までいけるかも……」

命の問いに真はそう答え、そう思った時には彼はすでに上半身をテレビに突っ込んでいた。ちなみに左腕は命が押さええている。

「バ、バカよせて！ 何してんだお前っ!?!」

「す、すげえっ!?!」

「真君、何か見える？」

「つて何普通に対応してんですかあんたもっ!?!」

陽介のうろたえながらの言葉と千枝の驚きでもはや感心しかできてないような言葉、それに対し命はあくまで冷静に尋ねておりその冷静さに陽介がツツコミを入れていた。

「……よく見えません。なんだこれ、霧かな？……ああでも、なんか中は凄い広い空間つて感じがします」

「な、中つて何っ!?!」

「く、空間つて何っ!?!」

「広いつて何っ!?!」

「つていうか何っ!?!」

真の言葉にもはや千枝と陽介はパニックに陥っていた。

「や、やべ、びっくりしすぎで漏れそ……」

「は?!」

「いや実は行き時なくてさつきから我慢してたつてか……」

そういうや否や陽介は股間を押さえながらどこかに行く。がすぐに慌てき三割り増しな様子で戻ってきた。

「客来る！ 客！ 客!!」

「ええっ!?! ちよっ、ここ半分テレビに刺さった人いんですけど!!」
ど、どうしよう!?!」

陽介の言葉で、更にパニックになった千枝がどうしたら良いのかわからず、陽介と共にあたふたと周りを意味もなく走り回る。

「真君、一回抜くよ!」

命はこんな状況を赤の他人に見られるわけにはいかないと判断し、

真の身体を一旦テレビから抜こうと彼の左腕をぎゅつと掴む。そして真の腕を引っ張ろうとしたその瞬間、走り回っていた陽介と千枝は互いに衝突し、なんと真と命の方に倒れこむ。

「うわっ!？」

「うわ、ちよ、まつ!!」

命と陽介の叫びを最後に彼らはテレビの中へと落ちていった。

「うわっ!？」

「きやつ!？」

「いでっ!？」

四人の声が響き渡り、四人は倒れこんだまま辺りをきよろきよろと見回す。周りは霧のようなモノで覆い隠されていて、数メートル先も見渡せない。一寸先は闇、その霧バージョンと言うべきだろうか。

「皆、怪我はないか？」

「若干、ケツが割れた……」

「元々だろが!」

真の言葉に陽介がボケると千枝がツツコミを入れ、その平常運転の様子に真は問題なしと判断。しかしもう一人答えるべき者が答えていなかった。

「先輩、大丈夫ですか？」

「……」

真の問いに対し命は辺りをきよろきよろと見回していた。霧のせいでよく見えないが信じられないものを見るような目をしている。

「先輩?」

「あ、ああ、ごめん。大丈夫。心配ないよ」

真の言葉に命はすまなそうな笑みを見せながら返す。それから千枝が不安気に辺りを見回した。

「何(こ)こ……ジュネスのどっか?……」

「んな訳ねえだろ。大体、俺達テレビから……つうか、これ……何がどうなってるんだ?」

「……！ 皆、周りを見て」

千枝の言葉に続けて陽介が言うと言いが、残る学生三人は辺りを見回す。鉄柱に取り付けられた複数の照明が彼らを照らしており、まるでテレビのスタジオのような場所だ。

「これって……スタジオ？ 凄い霧……じゃない、スモーク？……こんな場所、うちの町にないよね？……」

「あるわけねーだろ……どうなってんだここ……やたら広そうだけど……」

千枝の言葉に陽介がそう返す。それから千枝が不安気な声を出した。

「どうすんの？……」

「周りを調べて、出口を探そう」

千枝の言葉にすぐさま真が返す。

「それは賛成なんだけど、あたしら……そう言や、どっから入ってきたの？ 出れそうなトコ、無いんだけど!？」

「ちよ、そんなワケねーだろ！ どどどーゆー事だよ！」

「知らんよ、あたしに聞かないですよ！ やだ、もう帰る！ 今すぐ帰るー！」

「だからどっからだよ!!」

確かに霧のせいによく見えないものの周りを見渡してみても出口らしき場所がない。それに千枝が動揺して痙攣を起こし、陽介も状況が分からず混乱しているのか千枝を怒鳴りつける。するとその時パァンツと手を打ち鳴らしたような音、いや事実手を打ち鳴らした音が響き、千枝と陽介は驚いたように止まる。

「落ち着くんだ、二人とも。僕達はここに入ってきた。入ってきたんなら出口もあるはずだ」

「は、はい……」

手の打ち鳴らした青年——命の言葉に陽介と千枝はこくと頷く。それを霧でよく見えなくとも様子で確認した命は安心したように微笑んだ。

「よし。っと、そういえば君達にはまだ名乗ってなかったね。僕は

利武命。^{としたけみこと} 利は有利不利の利、武は武士の武、命は生命の命って書く。真君の前の高校の先輩だ。といつてももう高校は卒業して今は大学生だけどね……ああ、僕のごことは気軽に命って呼んでいいよ、そっちの方が慣れてるから」

「あ、初めまして。俺、花村陽介です」

「里中千枝です……」

命が名を名乗り、陽介と千枝もどこか呆然としながら名を名乗る。それから真が口を開いた。

「とりあえず、出口を探そう」

「ああ」

「ここ、ホントに出口とかあんの？……」

真の言葉に陽介が頷き、次に千枝が不安そうに尋ねる。と命が辺りを見回し、何かを感じたように一つの方を向く。

「……こつちに行ってみよう」

「あ、先輩！」

「お、おい待ってっ！」

「わー！置いてかないでよー！」

命が歩き出すとその後を真が追い、さらに陽介が追い、最後に千枝が追いかける。

それから彼らは歩き続け、ふと陽介が口を開いた。

「あの、命さん？ なんでこつちに來たんですか？」

「……特に根拠はないけど、こつちの方霧が薄いように思えたから。まあ強いて言うなら勘？」

「うあ……」

「先輩って基本理性的だけど、実は結構直感で動くんだよな……」

陽介の問いに命がさらっと返すと千枝が声を漏らし、真がはあつとため息をつく。と彼らは一つの部屋にたどり着いた。

「ここは？……」

「調べてみよう」

陽介の言葉に命がそう言い、彼らは部屋に入る。命と真は床に何かないかそして誰かいた痕跡がないかを調べ、千枝と陽介は壁を見る。

「この壁、ポスターだらけだね。でも全部顔無いよ？ 切り抜かれてる……メチャメチャ恨まれてる……とかってこと？」

千枝は壁に貼られている顔が切り抜かれているポスターを見ながら呟き、陽介は床に立っている椅子とその近くに天井から吊るされている縄、そして赤いスカーフを見て嫌そうな表情を見せる。

「この椅子とロープ、あからさまにまずい配置だよ……輪つかまであるし……これスカーフか？」

「ああ……」

陽介の言葉にいつの間にか横に立っていた真も頷く。そして床を調べていた命は立ち上がると首を横に振った。

「駄目だ、痕跡が見つからない……一旦戻ってみるか」

「そつすね……ってだーもう！ もう我慢できねー！」

命の言葉に陽介は頷いた後そう声を上げ、部屋の隅に行くとズボンのチャックを下ろす。それを見た千枝がぎよつとした表情を見せた。

「ちよつ、ここにすんの!？」

「うつせえ！ 見んな！」

千枝の言葉に陽介は声を上げる。そしてあくつと唸った。

「あくつ、出ねえ！ ボーコー炎になったらお前らのせいだぞ!？」

「知るかつつの」

「戻るよ、真君」

「はい」

陽介の言葉に千枝が返し、命がそう言って部屋を出て行くと真もその後に続き、陽介と千枝も慌ててその後を追った。

それから彼らは元のスタジオらしき地点に戻ってくる。命は勘で動いたにも関わらずこの濃霧の中道を覚えていたらしい。そしてスタジオに辿り着くと真と花村、千枝が疲れたように息を吐いた。

「疲れた……」

「まあ、こんな変なところ放り込まれたんだからね。しょうがないよ」

そして陽介が呟き、一人平然としている命が苦笑いをして返す。と真が霧の先を突然睨みつけた。

「先輩、何かいます！」

「！」

真の言葉に命は表情を変えて真の視線の先を見る。そこには確かに霧の中ずんぐりふつくらという感じの人影があり、こちらに近づいてきていた。それを見た命は真と共に陽介、千枝の前に立ち塞がって僅かに構えを取る。そしてピョコッピョコッという妙に気の抜けそうな足音とともに、その人影が霧の中から姿を現す。

「「……クマ？」」

「そこにいるのは、誰クマ？」

四人の間の抜けた声が重なる。そこにいたのはなんとというか、シルエットとしては逆さにした卵に小さな手足をつけて頭に丸い獣耳をつけたような存在。どこかデフォルメされた熊という感じを思わせ、その存在はそう尋ねる。それに真、陽介、千枝はポカンとしており、命が最初に口を開いた。

「僕は利武命と言います。訳あってここにやってきてしまったのですが、帰る方法などはご存知じゃありませんか？」

「つてというか、お前こそ誰なんだよ？」

初対面の相手ゆえだろうか敬語を使い礼儀正しい口調を使用している。その次にようやく立ち直った陽介が口を開くとその相手は首を傾げるような動作をした。

「クマはクマクマ。ここに一人で住んでるクマよ。ここは、ボクがずっと住んでるところ。名前なんてないクマ」

「ずっと住んでるところ？……」

存在——クマの言葉に陽介は不思議そうな声を漏らす。それから今度はクマが声を出した。

「とにかく、君達は早くアッチに帰るクマ。最近誰かがココに人を放り込むから、クマ、迷惑してるクマよ」

「は？ 人を放り込む？ 何の話だ？」

クマの言葉に陽介が声を漏らす、とクマは怒ったような様子で地団駄を踏んだ。

「誰の仕業か知らないけど、アッチの人にも少しは考えて欲しいって言ってるの！」

「ちよつとんなんなワケ？ いきなり出てきて何言ってるのよ!? あんたダレよ、ここはドコよ!? 何がどうなってるのっ!？」

クマの怒ったような言葉に千枝が本当の怒声を出す、と真が声を出した。

「里中、落ち着け」

「そうだよ。このクマさんとやらに当たっても仕方がない」

真の言葉に命もそう促す、とクマは怯えた様子で真の後ろに隠れた。

「さ、さつき言ったクマよ……と、とにかく、早く帰った方がいいクマ」
「要は早くココから出て行ってんでらる？ 俺らだってそうしたいんだよ！ けど出方が分かんねーっつてんの！」

「ムツキー！ だからクマが外に出すっつてんの！」

「だから分つかんねーな！ 出口の場所が分か——」

「は、花村君ストップ！ 落ち着いて！」

「——え？……へっ？」

クマと陽介は頭に血が上ったように言い合うが冷静な命が陽介に促し、それに陽介は止まった後クマの言葉をようやく理解したか呆けた声を出す。とクマはとんとんと足踏みをし、直後ぼうんっという感じで煙が出る。

「んだこりゃ!？」

「テ、テレビ!? どうなってるの!？」

陽介と千枝が驚いたように声を漏らす。煙の中から姿を現したのは古い感じのテレビが三つ積み重なったもの。それを陽介と千枝、そしてテレビの裏側にいた真と命もテレビの正面にやってきてそれをまじまじと見つめているとクマは彼らの後ろ側に回り込む。

「さー行って行って、行ってクマ。ボクは忙しいクマだクマ！」

そしてそう言いながらクマは四人をテレビ向かって押し込んでいく、それに千枝が声を出した。

「い、いきなり何!? わ、ちよつ……無理だつて！」

「お、押すなつて！」

その後、彼らをテレビに入った時と同じ不思議な光景と感覚が包み

込んだ。

「……あれ？　こっつて……」

「戻ってきた……のか？」

千枝が声を漏らし、続けて陽介も声を漏らす。間違はなくジュネスの二階、家電売り場だ。周りに人気は無い。とピンポンパンポーンという放送の開始音が流れ始めた。

「ただいまより、一階お惣菜売り場にて、恒例のタイムサービスを行います。今夜のおかずにもう一品、ジュネスの朝採り山菜セットはいかがでしょうか？　ヤングもシニアも、お見逃しのないよう、お得なタイムサービスをご利用ください」

「げっ!?　もうそんな時間かよー!」

「結構長くいたんだ……」

タイムサービスの放送、それを聞いた陽介が驚いたように声を漏らし、千枝も呆然とした様子で呟く。それから陽介は一つの方向に眼をやると合点がいった表情を見せた。

「そうか……思い出した、あのポスター……」

「ポスターってあの部屋の?……あ、そうか」

「先輩?」

陽介の言葉に命が声を漏らし、陽介の見ている方を見ると彼も納得したような表情を見せ、真も呟くと命が促す。

「ほら、見てみなよあのポスター。向こうの変な部屋で見たの、あれじゃないかな?」

「へ?……」

命の言葉に千枝は命と陽介が見ている方を見る、と彼女もまた驚いた表情を見せた。

「ほんとだ、あれだ。だっきは顔無くて分かんなかったけど、終みすずだったんだ……最近ニュースで騒がれてるよね?　旦那が、この間死んだ山野アナと不倫してた、とかって」

「お、おい、じゃ、何か?　さっきのワケ分かんない部屋、山野アナが

死んだ件と何か関係が……」

「確かに、そういやあの部屋、妙な輪がぶら下がってたりしてたが……」

千枝の言葉に陽介が驚いたように声を漏らし、真も頷いて思考を始める。

「わ、わーわー！ 止め止め！ おい、止めようぜこの話！」

しかしそこに陽介が声を出して遮り始めた。

「つか、今日のことまとめて忘れることにするね、俺。なんかも、ハートの無理だから、うん」

「なーんか寒くなってきた……気分も悪いし、帰ろ」

陽介と千枝はそう言ってそれぞれ歩き去っていき、その場には真と命のみが残る。

「……せ、先輩……これって一体？……」

「……正直、人に納得させることが出来るだけの説明を行える自信はまだないよ」

「ですよー」

真の言葉に命は少し考えた後首を横に振って返し、真はため息混じりに声を漏らすと歩き出す。

「俺ももう帰ります。先輩はどこかに泊まってるんですか？」

「ああうん、一応天城屋旅館ってとこにね」

「天城屋……ああ、天城の実家か」

「知ってるの？」

「娘さんがクラスメイトなんです」

「へえ……まあいいや。じゃあね」

「ええ」

二人はそう会話をし合うと真はジュネスの一階に続く階段の方に歩き去っていき、命は彼が見えなくなつたのを確認してからちらりとテレビを見てまた何か考える様子を見せる。それは何か過去を思い返しているような表情にも見えるが、彼は考えを一旦打ち切るとさつき真が降りていった階段の方に歩いていった。

「ただいまー」

それから真は気分転換に少し商店街をぶらついてからお世話になっている堂島家へと帰ってくる。と既に従兄妹菜々子はもちろん叔父遼太郎も帰ってきていた。現在はカップラーメンが出来るのを待っているようだ。

「おう、おかえり」

挨拶を返した遼太郎に少し会釈をして彼は居間のちやぶ台脇に座る、がすぐ身体のだるさからうつむいてしまった。と、遼太郎が話しかけてくる。

「あー、のな。まあ、知らんとは思うが……小西早紀って生徒の事……何か聞いてないか？」

「小西早紀……ああ、確か今日は休んだと、クラスの友達が言っていました」

「ああ、そうなのか……」

遼太郎の言葉に真は思い出すように虚空を見上げた後そう返し、それに遼太郎は頷いた後少し黙り込む。

「実は……行方が分からなくなったと連絡があつてな。うちの連中で探しているんだが、まだ見つからない……ハア、仕事が増える一方だなあ……」

遼太郎はそう愚痴のような声を漏らした。

「次は、霧の街に今も暗い影を落としている事件の続報です。稲羽市で、アナウンサーの山野真由美さんが変死体となって見つかった事件。被害にあう山野さんの行動ははつきりしていませんでしたが、地元の名所として知られる天城屋旅館に宿泊していたことが、警察の調べで分かりました」

（天城屋旅館、天城の実家で先輩が泊まつてる……）

ニュースの言葉に真はそう心の中で声を漏らす。するとコメントーターが天城屋旅館の、というかその娘である雪子の話をしており、アナウンサーは困ったように声を漏らした後気象情報に話を移した。

「えー、続いて気象情報です。雨足は段々と弱まってきました。事件のあった稲羽市周辺などでは、これから朝にかけて霧が出やすいでしょう。視界が悪くなります。車の運転などの際は十分な注意を……」

ニユースは続いている。と菜々子が口を開いた。

「ラーメン、もういい?」

「まだ早いだろ」

菜々子の言葉に遼太郎が返す、それを見てみると真は突然くしゃみを漏らし、遼太郎が彼の方を見た。

「風邪か? いかんな。新しい環境で疲れがたまってるんだろ。菜々子、薬」

「うん」

遼太郎の指示に菜々子は頷いて立ち上がると薬を取りにいき、その間に遼太郎がまた真に話しかけた。

「薬飲んだら、今日はもう寝ろ」

「そうします……」

「おくすりとおみず、持ってきたよー」

遼太郎の言葉に真が頷き、菜々子がお薬とお水を入れたコップを持って戻ってくると真はそれらを受け取って薬を飲み、コップと薬を入れていた容器をちやぶ台の上に置く。

「すみません、片付け任せていいですか?」

「ああ。お前は今日はもう寝ろ。春先のカゼは厄介だぞ」

「びようにんは、ねなきやだめなんだよ。今日はきりが出るみたいだから、はやくねないと、さむいよ?」

「はい。んじやおやすみなさい」

真の言葉に遼太郎と菜々子はそれぞれそう返し、真は頷くと自分の部屋に戻っていき、すぐ布団に入って眠りについた。

「ふむ、テレビの中の世界、か……」

一方天城屋旅館の一室——個室だが大学生一人で使用するには大

分広く高級な雰囲気の部屋だ——で、この部屋に泊まっている青年——命は携帯電話を使って美鶴に定期報告として今日体験した世界——テレビの中の世界について報告を行い、それを聞いた美鶴はそう声を漏らす。電話口のため命の推測だが電話の向こうではふむふむと頷いていることだろう。

「はい。あの世界に入った時、嫌なものを思い出しました……影時間に現れた塔、タルタロスを」

「……まさか、私の予感が当たっていたのか？」

「それはまだなんとも……また何か分かったらすぐに連絡します」

「ああ、頼む」

「はい」

命の言葉に美鶴はそう言い、二人はそう話し合うと命は電話を切る。そして命は携帯電話を少し眺めた後それを一旦畳に置くと押入れから布団を取り出し、さっさと敷いていく。そして布団に入るとかばんを探り、その中から銃——召喚器を取り出すと寝転びながらそれを弄んで眺める。

「桐条先輩に念のためって渡された召喚器……これから出来るだけこっそり持ち歩くか……ま、使う必要が無ければそれが一番いいんだけどなあ……」

命はそう一人呟くと召喚器をかばんの中に戻し、掛け布団を被ると目を閉じて眠りについた。

第四話 テレビの世界、異様な商店街

「ふわ……んっ」

四月十五日の朝。真は起き上がると一欠伸を漏らして伸びをする。昨日の身体のだるさは綺麗に取れており、真は起き上がると学生服に着替えて一階へと降りる。

「起きたか、それじゃあな」

と真が降りていくのとほぼ同時、遼太郎は真に一つ挨拶を交わしたのみで家を出て行ってしまった。

「お父さん、なにかようじみたい。デンワきて行っちゃった」

「そうか……よし、とりあえずご飯にしよう。オムレツ作ってやるから」

「……うん」

心配そうな菜々子を喜ばせようと思ったのか真はそう言うが、菜々子の心配そうな表情を消すには至らなかった。

それから真は雨のため傘を差して学校に向かう、とサイレンの音が耳に入ってきた。

(叔父さんが呼ばれたって言ってたし、何か事件か?……)

真は足を止めてそう考えるが、それは今考えててもしようがないと判断したのかすぐにまた歩き出した。

その日の午後、急に全校集会が入り、生徒達は体育館へと集合する。そこで女生徒が何か噂話をしていたが千枝は携帯電話を閉じると呟いた。

「雪子、午後から来るって言ったのに……」

千枝はそう呟いてから振り返る。

「なんだろう、急に全校集会なんて……ってあれ、花村どしたの?」

「ん? いや、別に」

千枝の言葉に陽介は少し浮かない表情で呟く。その直後女性の声が前のマイクから聞こえてきた。

「えー、みなさん静かに。これから全校集会を始めます。ではまず校長先生の方からお話があります」

女教師がそう言い、それから白いひげが特徴的な校長先生がマイクの前に立つ。

「今日は皆さんに……悲しいお知らせがあります。三年三組の小西早紀さんが……亡くなりました」

その言葉と共に体育館内がざわざわとなり始める。

「な、亡くなった?!……」

「……」

千枝が驚きの声を漏らし、陽介は悲しそうな苦しそうな表情をし、真は驚いたように眉をひそめる。

「小西さんは今朝早く、遺体で発見されました。小西さんが何故亡くなったのか、警察の方々が捜査してくださっています。協力を求められた時は我が校の生徒として、節度ある姿勢で応じてください」

校長先生がそう話すが、体育館内はざわざわに覆われ始めていた。

「えー、静かに、静かに……それから、先生方からは、いじめなどの事実はないと聞いています。くれぐれも、軽い気持ちで街頭取材などを受けたりしないように……」

「遺体で発見って、そんな……」

「……」

校長先生の言葉も聞こえてない様子で千枝と陽介はそれぞれ呟き、シヨックを隠せない表情を見せる。

そして校長先生の話が終わった後、彼らが教室に戻っていると女子生徒の噂話が耳に入ってきた。

「ちよーびびったよねー。死体、山野アナン時と同じだったんでしょ?」

「前はアンテナだったのが、今回は電柱らしいじゃん。連続殺人ってことだよね、これって……」

「死因は正体不明の毒物とか、誰かが言ってた」

「正体不明って、そりやちよつとドラマの見過ぎだって」

「そういうえば、例の夜中のテレビで、早紀に似てる子が映ったらしょよ。超苦しがってたとかかってー、怖くない?」

「ハハ、そつちこそ絶対夢だって。今マスコミとかめつちや来てるし、

取材でも受けて影響されたんじゃない?」

女子二人はそう言いたいことを言うとするたと歩き去っていく。とそれを見た千枝が少し目を吊りあがらせた。

「つたく、他人事で好き勝手言ってるよ」

「他人事だよ。今はまだ、な……」

千枝の言葉に真はふうと息を漏らしながら呟く、と後ろの方から陽介が声をかけてきた。

「なあお前ら、昨日、あの夜中のテレビ、見たか?」

「……いや、昨日は少し具合が悪くなつて、帰ったらほぼすぐに寝た」

「あのさ、花村までこんな時に何言ってるの!？」

花村の言葉に真は何か感じ取ったのか首を横に振って素直に返し、千枝は怒った様子で問い詰める。

「いいから聞けつて! 俺……どうしても気になつて見たんだよ」

陽介はそういうと一旦言葉を切り、あたりに聞こえないように声を潜めた。

「映ってたの、あれ小西先輩だと思う」

「えっ!？」

「どういうことだ?」

陽介の言葉に千枝が驚きの声を漏らし、真が尋ね返す。

「見間違いなんかじゃない……先輩、なんか苦しそうに、もがいているみたいに見えた……それで、そのまま画面から消えちゃった……」

「なによそれ……」

「先輩の遺体、最初に死んだ山野アナと似たような状態だったって話だろ?……覚えてるか? “山野アナが運命の相手だ”とか騒いだ奴いたよな?」

「……確かに。確か里中が、隣のクラスの誰かがそう言っていた、と言っていたのを覚えている」

「う、うん、そういうえばそんなこと言ったかも……」

陽介の確認するような言葉に真は少し考えた後こくと頷き、千枝に促すと彼女もこくと頷いた。

「俺、思ったんだ。もしかするとき……山野アナも死ぬ前に、あのマヨ

ナカテレビつてのに、映ってたんじゃないかなって……」

「どういふこと?」

陽介の言葉に千枝が声を漏らす、と陽介の言葉を聞き思考状態に入っていた真が口を開いた。

「花村、お前はまさかあのテレビに映った人は死ぬ。と言いたいのか?」

「いや、そこまでは言い切らないけど……ただ偶然にしちやなんていうか、引つかかるっていうかさ……」

真の言葉に陽介は首を横に振って返した後そう続け、また彼らに確認するように口を開いた。

「それと、向こうで会った『クマ』が言ってたろ? 『危ない』とか

『霧が晴れる前に帰れ』とか……」

「そうだ、確か『誰かが人を放り込む』とも言っていた」

「ああ。それにポスターの貼ってあったあの部屋、事件と何か関係ある感じだったろ? これってなんかこう、?がってないか? もしかしたら、先輩や山野アナが死んだのって、あの世界と関係あるんじゃないのか!」

陽介の言葉に真が思い出したように返し、陽介はまたああと頷いてそう続けた後真の方を見た。

「なあ、俺の言ってること……どう思う?」

「……正直に言えば馬鹿らしいが……あの妙な世界を見ている身としては否定しきれないな」

「ああ。もし?がりがあるなら、先輩と山野アナもあの世界に入ってたってことかもしれない。あつちで何かあったってんなら、あのポスターの部屋があった説明もつく。もしそうなら、先輩に関係する場所だって探せばあるかもしれない」

陽介の言葉に真は首を横に振って返すものの続けて肩をすくめてそう言い、それに陽介が頷いて続けるとまさかといわんばかりの表情で千枝が口を開いた。

「花村、あんたまさか……」

「ああ。俺、もう一度行こうと思う……確かめたいんだ」

「よ、よしなよ……事件のことは警察に任せた方がいいって！」
「無駄だ」

陽介の言葉に千枝がそう返すと直後真が続け、それに千枝が頷いた。

「そ、そうだよ！ 椎宮君の言うとおりだよ！」

「里中、逆だ。俺は里中の意見に無駄だと言ったんだ」

「えっ!？」

千枝の言葉に真は静かな声で返し、それに千枝は驚いた様子の声を漏らす。それを見た真はふうと息を吐いた。

「テレビに映った人が死ぬだの、テレビに入るだの警察に言っただうなる？ イタズラとか頭がおかしいとか思われるのがオチだ」

「そ、それは……」

「全部俺の見間違いならそれでもいい……ただ、先輩がなんで死ななきゃなんなかったか、自分でちゃんと知っときたいんだ」

「花村……」

真の意見に千枝は声を失い、陽介が続けると彼女はそう声を漏らす。

「こんだけ色んなもの見て、気づいちまって、なのに放つとくなんて、出来ねーよ……」

陽介はそう言っただけを見る。

「悪い……けど頼むよ。準備して、ジュネスで待ってっからさ……」

陽介はそう言っただけ走り去っていき、それを千枝は見送った後心配そうな顔で真の方を向く。

「気持ちに分かんなくもないけど、あんなとこまた入ったら、無事に出られる保証ないじゃん……どうする?」

千枝はそう言っただけ真の顔を見た。

「行くしかないな。ああいうのは止めようとしたって無駄だ」

「ま、まじで?……」

真の返答に千枝は啞然としたように返し、学校玄関を見る。

「とりあえず、ジュネスに行こう。花村、放つとけないよ……」
「ああ」

千枝の言葉に真も頷き、二人は走って学校を出て行った。

ジュネス二階家電売り場、例のテレビの前で陽介は長いロープを身体に巻きつけ、ゴルフクラブを手に待っていた。かなり怪しい姿だが幸いにして周りに人影は無い。

「来てくれたのか!」

「バカを止めに来たの! ねえ、マジやめなつて、危ないよ……」

「ああ……けど、一度は帰ってきたろ? あん時と同じ場所から入れば、またあのクマに会えるかもしれない」

「そんなの、なんも保証ないじゃんよ!」

陽介の言葉に対し千枝は必死で説得を試みるが、陽介は真剣な目で千枝を見た。

「けど、他の奴らみたいに他人事つて顔で盛り上がってらんない」

「そう、だけど……」

陽介の言葉に千枝は沈黙、それから陽介は今度は真を見る。

「お前は どうする? このまま、放つとけるのか?」

「放つとけないが、向こうで何が起きるかは分からない。反対している千枝を連れて行くのは反対だ」

「ああ。俺とお前だけでいい」

陽介の言葉に真が返すと陽介は頷き、それから千枝を見る。

「心配すんなつて、ちゃんと考えはあるんだ。里中は、これ頼む」

そう言つて陽介は千枝にロープを渡した。

「え? なにそれ、ロープ?」

「俺ら、これ巻いたまま中入るから、お前端っこ持つてここで待つてくれ」

「な、なにそれ? 命綱つてこと? ちょ、ちよつと待つてよ……」

陽介の言葉に千枝は困惑した様子で声を出す、今度は陽介は真に右手に持っているゴルフクラブと懐から出した傷薬を差し出す。

「椎宮。お前にはこれ、渡しとく」

それを真は迷い無く受け取った。

「ないよりいいかと思つてさ」

「ありがとよ……だが、連れて行くにあたつて一つ条件がある」

「な、なんだよいまさら!?!」

真の突然の言葉に陽介は声を上げる、と彼はニヤリと微笑んだ。

「この調査が終わつた後、俺と里中に何か奢れ。俺は手間賃、里中は心配賃だ」

つまり遠まわしに、この調査で死ぬことは許さない。そう真は言つていた。それに陽介はふつと笑う。

「オツケー、約束するよ……よし、じゃあ行こうぜ。ぐずぐずしててもしょうがないからな」

「ああ」

陽介の言葉に真は頷き、二人はテレビの方に向かう。

「ちよ、ちよつと待つてつてば!」

それを見た千枝がぎよつとなつて止めようとするが二人は止まらず、真はテレビに手を入れる。

「やあ、皆お揃いでピクニック?」

「!?!」

そこに聞こえてきたそんな声。それに三人はぎよつとした顔で声の方を向く。そこには真の前の学校での先輩利武命——黒シヤツと前を開けた青色のライダーズジャケットに黒ジーンズの出で立ちだ——が立っていた。

「せ、先輩!?!」

「またあの世界に行こうつての?」

真の驚いたような声に対し命は冷静に聞き返す、と千枝が思いついたように口を開いた。

「あ、そ、そうだ! お願いします命さん! 命さんからもこのバカ二人に言つてやつて下さい!」

「無駄だよ。僕も一緒に行こうと思つてたからね、いやーぎりぎりセーフ。行かれた後じゃもうどうにもなんないからね」

「えええつ!?!」

しかし千枝の言葉を命はにつこり笑顔で却下、千枝はまた驚いた様

子で声を上げる。と命は荒事には向いてなさそうな華奢な手をぽきぽきと鳴らした。

「安心して、僕はこれでも腕っ節には自信があるんだ。もし何かあったら二人をぶん殴って連れて逃げてくるから」

「……言つとくけど、事実だぞ？ 自慢じゃないけど俺先輩に喧嘩で勝てたこと、一度もねえんだ……」

「で、でも、危ないですよー！」

「心配ないって。さ、行くよ真君、花村君」

命の言葉に真がため息混じりに返し、千枝がまた説得を試みるが命はあつさりそう言つて二人をテレビの方に押す。

「ちよ、ちよつとー！」

「大丈夫、任せておいて」

それに千枝が声を上げるが、命は千枝の方を向くとにこりと穏やかな、しかし見るもの全てを安心させるような笑顔を浮かべて左目を閉じパチンとウインクする。それに千枝は思わず固まってしまい、気づいた時には既に彼らはテレビに入ってしまった。ようやく我に返った千枝はくいくいとロープを引っ張るが、少しするとスポンとロープがテレビから抜けてしまう。

「ほらあ、やっぱり無理じゃん……もう、どうしよう……」

それを見た千枝は膝をつき、今にも泣きそうな表情でそう呟いた。

「いってて……」

「こっちは……」

陽介が声を漏らし、真が立ち上がりながら呟く。と陽介がにっこり笑った。

「見ろよ、前と同じ場所じゃないか！ ちゃんと場所と場所で？ がつてんだ！」

「キ、キミたち、なんでまた来たクマ!？」

陽介の言葉の直後聞こえてきた声、そして霧の中からクマがやってくる。

「こんにちは、クマ君。また失礼します」

「あ、は、はい……ってあーっ！ わーかった！ 犯人はチミタチだクマ！」

命の礼儀正しいお辞儀にクマもつられたようにお辞儀を返すが、その直後クマは怒った様子でそう続ける。

「っておい今なんつった!? 犯人!?!」

クマの言葉に陽介が声を上げる、とクマは彼らに背中を向けた。

「最近、誰かがこの中に人を放り込んでる気配がするクマ。そのせいで、こつちの世界はどんどんおかしくなってきたクマ……」

クマはそこまで言うのと振り返る。

「キミたちはココに来れる……他人に無理矢理入れられた感じじゃないクマ。よって、一番怪しいのはキミたちクマ！ キミたちこそ、ココへ人を入れてるヤツに違いないクマアア!!」

「うん、確かに現在の時点で一番怪しいと言われても反論は出来ないね。真君」

「ちよつ、俺に振らないでくださいよ！ ってかクマ！ お前も勝手に決めるな！」

クマのびしつという感じで左手を突き出してくるのに対し命は腕を組んでうんうんと頷いた後真に話を振り、それに真はツツコミを入れた後クマに向けて声を上げる。

「そうだ！ それになんだそりや?! 人を入れる!! こんなトコに放り込まれたら出れずに死んじゃうかもしれないねーだろ！ そんな危ねーことするワケ……」

「おい、まさか……」

陽介の言葉は途中で途切れ、真も声を漏らす。そして陽介がまた口を開いた。

「おい、待てよ。さっきの人を放り込んでるって話、まさか先輩や山野アナのことか？ その誰かっのが、二人をここに放り込んだってことか!? なあ椎宮、命さん、どう思う？」

「……きつとそうだ」

「確かに、そう考えれば……」

陽介の言葉に真と命は頷いて返す。それから陽介はまたクマを見た。

「もしも、こいつの話がホントだとしたら……誰かがハナから殺す気で、人をここに放り込んで……ってこともありえないか？　だとしたら……」

陽介はそう考えを纏め始めるが、クマはじたんだを踏んで声を上げる。

「ゴチャゴチャうるさいクマねー！　キミらは何しに来たクマ!?　コは一方通行！　入ったら出られないの！　クマが出してあげないと出らんないの味わったでしょーが！」

「うるせー！　関係ねーだろ！　お前の力なんて借りなくてもな、見ろ、今日はちゃんと命綱——」

「が切れてるよ、花村君」

「——え？……おあつ!?!」

クマの言葉に陽介が怒鳴り返し、自慢げにそう言おうとするが命がさらつとツツコミ、陽介はその言葉に固まった後切れたロープの片端を見て声を上げた。

「テ、テメー！　調べが済んだらこっから俺らを出してもらおうからな！」

「ムツキー！　調べたいのはこっちクマよ！　クマ、ずっとココに住んでるけど、こんな騒がしいこと今までなかったクマ！　証拠あるクマか!?　放り込んでるのキミらじゃないって証拠！」

「証拠!?　そんなの急に言われても……」

陽介は一瞬で意見を変え、それにクマが返した後そう尋ねると真は困ったように声を漏らす。

「ほら、やっぱりキミらクマ！」

「違うって言うてんだろ!?　てか、お前に証明してやる義理はねえつての！　それよりこっちの質問に答えてもらおうぞ！　偶然来たこの前と違って今回はマジなんだ！　いーか、俺らの世界じゃ人が死んだよ。霧が出るたびに死体があがってる。知ってること話せ！　ぜってーココとなんか関係があるはずだ！」

「霧が出るたびに死体?……そつちで霧が出る日はこつちだと霧が晴れるクマよ。霧が晴れるとシャドウが暴れるからすぐ危ないクマ」
「シャドウ?……」

クマの説明に真と陽介は不思議そうな声を漏らし、命はまさかといわんばかりの表情を見せる。

「はっはーん、そういうことクマか……」

「はあ!? 一人で納得してんなコラ! 俺らんところが霧だどこつちは晴れ? シャドウが暴れる?」

「そうなるって危ないから、早く帰れって言ったんだクマ! さあ、質問は終わりクマ。キミらが犯人なのは分かってるクマ! 今すぐやめてもらおうクマ!」

「だから違うって言うてんだろ!? いい加減キレそーだぜ……なんで人の話聞かねえんだテメエは!」

陽介の怒声にクマはびくりとなったように声を漏らす。

「は、犯人かも……って言うてるだけクマよ? ただ、確認してるだけ……」

「はあ? 強気か弱気かどつちなんだよ? どうも調子狂うなこのクマ……」

クマは突然弱気になってそう呟き、それに陽介は困ったように声を漏らす、と次は真が口を開いた。

「ところで、ここは何なんだ? まるでテレビのスタジオみたいなんだが……ここで何か撮っているのか?」

「お、おい! もしかしてあのおかしな番組、ここで撮影されてんのか!?!」

真の言葉を聞いた陽介が気づいたように声を上げる。と今度はクマが首を傾げるように身体を傾けた。

「おかしなバングミ? サツエイ? なんのことクマ?」

「ああ、つまり放り込まれた人間を誰か別の人間が撮っているんじゃないかって言うてるんだ」

「? 分かんないこというクマね……ココは元々こういう世界クマ。誰かが何かをトルとか、そんなのないクマよ」

「どういうことだ?」

クマの言葉に命が補足するが、クマは不思議そうな表情でそういうのみ。その次には真が尋ねるとクマは真の方を向いた。

「ココにはクマとシャドウしかないクマ! 前にも言ったクマよ!」

「あのな、こっちはお前もシャドウだかも、どっちも何者か分かんねーんだよ! っていうか、俺らに証拠だ何だ言う前に、お前がそもそも一番怪しいじゃねーか! お前こそ実は犯人なんじゃねーのか!?!」

クマの言葉に陽介は声をあげ、クマに近寄る。

「大体なんだよそのフザけたカツコ! いい加減正体見せやがれっ!!」

そしてそう叫ぶや否やクマの頭をがしつと掴み、ぐぐぐつと上に引っ張る。すると少しの抵抗の後あつさりぽんつという音を立ててクマの頭が外れた。

「うおあつ!」

「なっ!?!」

「これは……」

陽介、真、命はそれぞれ反応を見せる。着ぐるみの中はからっぽ、例えるなら某錬金術漫画の鎧の弟君状態なのだ。

「な、なんなんだよお前……中身がねえ……」

陽介は唾然とした様子で呟くとクマの胴体は頭を被りなおし、悲しそうな表情を見せる。

「クマが犯人だなんて、そんなことするはずないクマ……クマはただ、ココに住んでるだけ……ただココで、静かに暮らしたいだけ……クマ」

「……そうだね。怪しいからとはいえいきなりやりすぎたよ。花村君の無礼を僕から詫びるよ、ごめんね、クマ君」

「み、命さん!?!」

クマの悲しそうな言葉に命は少し考えた後頭を下げ、陽介が驚いた様子を見せる。とクマがまた口を開いた。

「キミ達が犯人じゃないって、信じてもいいクマよ? でもその代わ

り、本物の犯人を探し出して、こんなことを止めさせて欲しいクマ……約束してくれないなら、こっちにも考えがあるクマ」
「考え？」

クマの言葉に陽介が声を漏らす、その時クマがまた言った。

「ココから出してあげない」

「なっ!? テ、テメー!」

「このままじゃクマの住むココ、めちやくちやになっちやうクマ。そしたらクマは……ヨヨヨヨ……」

クマの言葉に陽介が声を荒げ、クマはそう呟くと泣き始める。

「な、何急に泣いてんだよ。あーもう、ホント調子狂うぜ……」

陽介は困った様子で頭を抱える、と真が口を開いた。

「分かった。犯人を捜すことを約束しよう」

「お、おい椎宮!」

「しようがないね。選択の余地ないし、僕も真君に協力するよ」

「命さんまで!」

真の言葉に陽介が声をあげ、命が続くと陽介はまた声を上げる。とクマは嬉しそうに微笑んだ。

「よ、良かったクマ」

「くそ、出さないとかって足元見やがって……けど、いろいろ知りたくて来たのは間違いない。今んとこ、なんもワカンネーしな。俺達で犯人を捜せか、望むところだ。その約束、乗ってやるよ」

クマの言葉に陽介ははあつとため息をついた後そう言い、自分を指さす。

「俺は花村陽介、一応名乗っとくぞ」

「俺は椎宮真だ」

「改めて、僕は利武命」

陽介に続いて真と命も名を名乗る。

「お前、名前はなんてんだ？」

「クマ」

陽介の問いにクマはざらっと名乗る、と陽介は頭に手をやった。

「まんまだな、おい……けど犯人捜すって、どうすりゃいいんだ？」

「それはクマにも分からんクマ。でも、この前の人間が入り込んだ場所に分かるクマ」

陽介の言葉にクマはそう返し、その言葉に陽介が反応する。

「この前の人間って、もしかして小西先輩のことか!？」

「この前、ココで消えた人間クマ」

「もしかしたら何か手がかりがあるかもしれない。クマ君、案内を頼めるかな?」

「まかしときんさい! あ、その前に。三人とも、これをかけるクマ」

陽介の言葉にクマが頷き、命が続けるとクマは大きく頷いた後思い出したように三つの眼鏡を取り出して三人に一つずつ手渡す。陽介のものはレンズが四角でフレームはオレンジ色、レンズの縁が太い印象のもの。真は同じくレンズが四角でフレームは黒セルというもの。命は真の眼鏡と同じでフレームの色が青以外違いはなかった。

「なんだよ、この眼鏡……」

陽介はそう呟きながら眼鏡をかけ、真と命も同じように眼鏡をかける。と三人は驚いたように目を丸くした。さっきまでは霧で少し先も見えなかったのに眼鏡をかけるとまるで霧がないみたいによく見通せている。

「うお、すつげえ……この間と視界が全然違う。かけてると濃い霧がまるでないみたいだ……」

「どういう理屈になってるんだろ……」

陽介が驚いたように呟き、命が不思議そうに眼鏡をいじる。

「霧の中を進むのに、きつと役立つクマ。まあ、クマはココに長いこといるから、頼りにしてくれクマ!……あ、でもクマに出来るのは案内だけだから、自分の身は自分で守ってほしいクマ」

「頼りにならねーじゃんか! ワケわかんないの、相手に出来ないからな! 武器は持ってきたけど、その……雰囲気出しみてーなところあるだろ! 来たばっかの俺らより、危ないならお前がなんとかしろよ!？」

「ムリムリ、筋肉ないもん。クマは少し離れた所からキミたちに状況を伝えるクマよ。分かったクマ?」

「……」

陽介とクマはそう会話をし、ふと何を思ったのか真は軽く、ポンツという程度にクマを押し。

「や、やめれー」

とクマは一瞬で倒れもがき始めた。なんというか、甲羅を下に倒れた亀とでも言えばイメージは伝わるだろうか？

「ま、まじか……こいつシヨボすぎるぞ」

思わず陽介も呆然とした様子で呟く。

「こんな弱いのと犯人捜すなんて約束しちまったのか？……」

「あはは。まあなんとかなるよ」

陽介は頭を抱えており、対照的に命はあつけらかなとした表情で笑っていた。その間にもがいているクマを真が助け起こし、三人はクマの案内について歩いていく。

それから彼らがやってきた場所、それを陽介は驚いた様子で見回していた。真も唾然として目を見開いているし、命も何か考える様子で辺りを見回している。

「な、なんだよ……町の商店街にそっくりじゃんか……一体どうなってるんだ!?!」

「最近おかしな場所が出現しだしたクマよ。いろいろ騒がしくなってるクマ」

陽介の言葉に、彼らより後ろ、そして数メートル離れた位置にいるクマが呟く。と陽介が振り返り腕を組んで彼に向け声を発した。

「ところでお前、なんでそんな離れたところにいんだよ?……いざとなったら逃げる気じゃないだろうな?」

「そ、そんなことないクマよ! ただ、あんまり近くにいたらキミたちの活躍の邪魔になるから……」

陽介の言葉にクマは誤魔化すようにそう言い、それに陽介はふくんと声を漏らして辺りを見回す。

「しっかし、どの辺まで続いているんだ? てか、町のいろんな場所の中

でなんでここなんだ？」

「なんでって言われても、ココに居る者にとってココは現実クマ」

「ハア……相変わらずよく分かんねーなあ……」

クマの言葉に陽介はそう声を漏らし、それから道の先を見た。

「けど、ここがウチの商店街ならこの先は確か小西先輩の……」

陽介はそういうや否や走り出し、残る三人も慌ててその後を追う。

陽介が立ち止まったのはある店の前だった。

「やっぱり……ココ、先輩んちの酒屋だ。先輩、ここで消えたってことなのか？ 一体何が……」

陽介はそう言って酒屋に入ろうとする、とクマがびくりとした様子で叫んだ。

「ちよ、ちよつと待つクマ！ そ、そこにいるクマ！」

「どうした？ クマ」

「いるって、何がだよ？」

クマの言葉に真と陽介が同時に尋ねる、と命がびくりと身体を震わせた。

(こ、この感じ!?)

「……シャドウ。やっぱり、襲ってきたクマ！」

命が身を震わせたのと同じ、クマは声を上げた。

「陽介！ 下がれっ!!」

直後命の凜とした声が響き、陽介は慌ててその場を離れ命の横まで戻る。その直後酒屋の中から青い仮面をつけた何かが泥のように茶色い身体が胴体と手を模して真達の前に立つ。

(臆病のマーヤ……シャドウという名称からまさかと思ってたけど、なんで影時間が消えた今シャドウが……)

命は自分の記憶の中から敵——シャドウのデータを手繰り寄せ、身構える。臆病のマーヤ自体はただの雑魚、二年のブランクがあるとはいえ命に倒せない相手ではない。だが今彼の近くには三人の非戦闘能力者がいる。彼らを守りながらとなるとその難易度は桁違いに跳ね上がる。

「何!？」

すると突然シャドウが宙に浮かび、茶色い身体が球を作り出す。そしてその球が太い紫と細い黒の縞々模様の身体を作り、巨大な口とその中から長い舌を伸ばした。

(な、なんだこいつ!? まさかシャドウが進化したのか!?)

命は心中驚きながらも表面は冷静さを崩さず分析を始める。しかし敵が未知数の存在となったせいで相手の出方を伺う必要があった。命は相手の動きを見つつ、ライダーズジャケットの下に隠している召喚銃に手をやる。

「……………」

しかし次の瞬間、彼は何か自分とシャドウとは別の何かの反応に直感で気づいた。

(な、なんだこいつら……………これがシャドウ、なのか?)

命が相手を分析しているのとはほぼ同時、真も目の前の異形の存在――シャドウを見ていた。すると彼の頭に何かの音が響く。

「我は汝、汝は我……………」

(な、なんだ?……………)

「汝、双眸を見開きて、今こそ発せよ!」

聞こえてきた声。その直後、彼は自分の右手にタロットカードが握られているのに気づく。

「これは……………」

真はそれを驚いた様子で眺める、と彼は突然ニヤリ、と笑みを漏らす。ドクンと彼の心臓が強い鼓動を立て、彼の中から何かザワザワとした感覚が現れ始めた。

「ペ、ル、ソ……………ナー!」

そう叫び、彼はカードを握り潰しカードはまるでガラス片のように砕け散る。その直後、彼の背後から鉄仮面のような顔に鉢巻を巻き、黒長い学ランのような服に身を包んだ。そして長い刀を持った存在が姿を現す。

(へ、ペルソナだって!? まさか真君、ペルソナ能力に目覚めたの!?)

その存在——ペルソナを見た命は驚きを隠せないように目を丸くする。

「『ウエオオオオオツ!!』」

「しまった!?!」

命は真がペルソナを発言したことに驚いてしまい、反応が遅れる。

「イザナギ!! スラツシユー!」

しかしシャドウが命達に近づく前に真が叫び、ペルソナ——イザナギが手に持った刀でシャドウの一体を斬り裂き、シャドウは消滅。それを見たもう一体のシャドウは敵を真に変更、すると真はそれを見越していたかのようにゴルフクラブを振り上げ、力の限りシャドウに叩きつけた。その一撃にシャドウが怯む。

「ジオー!」

直後真が命じ、イザナギから発された落雷がシャドウを撃ち碎き消滅させた。二体のシャドウ、それは真の力の前に一瞬にして無へと帰した。と陽介が真に走り寄る。

「すつげ、なんだよ今の!?! ペルソナって言ったよなツ!?! な、アレ、どういう……てか、一体何したんだよつ!?!」

「いや、俺も何がなんだか……」

「なあ、俺も出せたりすんのか?」

「わ、分からない……というより正直俺も説明が欲しいくらいで……」
興奮している陽介に対し真は困った様子で呟く、とクマがそこに歩いてきた。

「落ち着け、ヨースケ。センセイが困ってらっしやるクマ!」

「セ、センセイ?」

「センセイって……俺のことか?」

「いやはや、センセイは凄いクマねツ! クマはまったくもって感動した!」

「あ、ああ……そりゃ、どうも?」

「こんな凄い力を隠してたなんて……シャドウが怯えてたのも分かるクマ! もしかして、この世界に入ってこれたのも、センセイの力クマか?」

「……確証はないが、恐らく」

クマの言葉に真はやはりどこか困惑気味の表情と声質でそう返すのが精一杯だった。

「ふむーっ！ やっぱりそうクマか！ こら、スゴイクマねー……な、ヨースケもそう思うだろ？」

「何、急に俺だけタメ口になってんだ！ チョーシ乗んなっ！」

「まあまあ落ち着きなよ花村君」

クマは真には普段通りだがいきなり陽介にはタメ口に変化しており、陽介がクマを突き飛ばすと命が苦笑気味にそう言う。

「さてと、それじゃこの店を調べてみようか？」

「あ、ああ。そうっすね。よし、捜査再開！ 頑張っていこうぜ！」

命の続けたの言葉に陽介も頷き、気合を入れるようにそう叫んで再度店の前に立つ。

「にしても、ここで一体先輩に何があったんだろうな？」

「それを調査するのが今回の目的、なんだろ？」

陽介の言葉に真はふつと笑ってそう言い、命もそうそうと頷く。が彼は直後何かに気づいたように顔を上げた。

「どうしました、先輩？」

「しっ！……皆、耳を澄ませて」

命の行動を不思議に思ったのか尋ねてくる真に命は人差し指を口に当てて静かにするよう促し、さらに耳を澄ますように言う。と辺りから聞き覚えのない何者かの声が聞こえてきた。

「ジュネスなんて潰れればいいのに……」

「ジュネスのせいで……」

「な、なんだよこれ……」

どこからともなく聞こえてくる声。それに陽介が声を漏らす。

「そういうえば小西さんちの早紀ちゃん、ジュネスでバイトしてるんですってよ」

「まあ……お家が大変だった時に……ねえ」

「ジュネスのせいでこのところ、売り上げもよくないっていうし」

「や、やめろよ……」

「娘さんがジユネスで働いてるなんて、ご主人も苦勞するわねえ」

「困った子よねえ……」

「おい……おい、クマ！」

聞こえてきた声は推測するに早紀のことを指している。陽介は我慢できずにクマを呼んだ。

「ここは、ここにいる者にとつての現実だとか言ってたよな!? それ、ここに迷い込んだ先輩にとつても現実って意味なのか?」

「……クマは、こっち側のことしか分からない」

陽介の言葉にクマは首を横に振って返す、と陽介はキツとした表情で酒屋の方を見た。

「……上等だよ。一体何がどうなってるのか、俺達で確かめてやる!」

「ああ。行こう!」

陽介の言葉に真も頷き、彼らは酒屋の中に突入。しかしその中でもまだざわざわとした声は聞こえていた。

「くそっ、またか……」

陽介が呟く、と男性の怒鳴り声が聞こえてきた。

「何度言えば分かるんだ、早紀!」

「こ、これ……先輩の親父さんの声か!」

「お前が近所からどう言われてるか、知らないわけじゃないだろ!? 代々続いたこの店の長女として、恥ずかしくないのか!」

聞こえてきたのはどうやら早紀の父の声らしい。陽介の驚いた声の後も早紀の父のものらしい声は続いていた。

「金か!? それとも男か!? よりにもよって、あんな店でバイトなんかしやがつて!」

「なんだよ、これ……バイト楽しそうだったし、俺にはこんなこと、一言も……」

早紀の父の声に陽介は苦虫を噛み潰したような表情を見せた後拳を握り締めた。

「こんなのがホントに、先輩の現実だったのかよ!」

そして我慢できないように声を荒げる、と真がテーブルの上に散らばっているものに気づいた。

「あれは……」

それを見た真はテーブルに走り寄り、一緒にテーブルに近づいた命がその散らばっているもの——写真を掴み取る。

「写真……」

「あつそれ、前にバイト仲間とジュネスで撮った写真じゃんか……な、なんでこんなところ……」

命が取った写真を覗き込んだ陽介がそう声を漏らす。写真には笑顔の早紀と、その隣に陽介が写っていた。

「ずっと、言えなかった……」

「!?」

そこに聞こえてきた女性の声、それに誰よりも速くそして強く、陽介が反応する。

「この声、先輩!？」

「私、ずっと花ちゃんのこと……」

「え? お……俺のこと?……」

早紀らしき声、それから陽介のことを指す言葉が出て、陽介は驚いたように声を漏らす。

「……ウザいと思ってた」

しかし直後聞こえてきた言葉に陽介は信じられないといわんばかりに目を見開いた。

「仲良くしてたの、店長の息子だから都合いいってだけだったのに……勘違いして、盛り上がって……ほんと、ウザい」

「ウ、ウザい?……」

「ジュネスなんてどうだっていい、あんなののせいで潰れそうなウチの店も、怒鳴る親も、好き勝手言う近所の人も……全部、無くなればいい」

「ウ、ウソだよ……こんなのさ……」

早紀の声として出てくる言葉、それに陽介は愕然とし、さらに泣きそうな声を漏らした。

「先輩は、そんな人じゃねえだろ!？」

そしてまた我慢出来ずに叫び声を上げた、その時だった。

「悲しいなあ、可哀想だなあ、俺……」

突然聞こえてきた声、花村陽介の声にそこにいた全員が驚いた様子で声を向く。

「てか、何もかもウザいと思ってんのは自分の方だったの、あはは……」

そこには陽介が座り込んで自嘲気味の表情でそう声を漏らしていた。

「あ、あれ？ ヨースケが二人、クマ？……」

思わずクマがそう呟いてしまう。そこに座っているのは確かに陽介、しかしその表情は自嘲に歪んでおり、さらに瞳が金色に怪しく輝いていた。

「お、お前、誰だ!? お、俺はそんなこと、思っていない……」

「ん〜？」

陽介が陽介らしき存在に駆け寄って問いかける。と陽介らしき存在はくつくつと笑いならのっそりと立ち上がると我慢しきれないようにその整った顔を歪めて笑い出した。

「アハハ、よく言うぜ。いつまでそうやってカツコつけてる気だよ。商店街もジュネスも全部ウゼーんだろ！ そもそも田舎暮らしがウゼーんだよな!？」

「な、何言ってる？ 違う、俺は……」

「お前は孤立すんのが怖いから上手く取り繕ってヘラヘラしてんだよ。一人は寂しいもんなあ、みんなに囲まれてたいもんなあ」

陽介らしき存在の言葉に陽介は反論しようとするがその前に陽介らしき存在はそうまくし立てる。そしてまたニヤリとその表情を歪めて笑った。

「小西先輩のためにこの世界を調べに来ただあ？ お前がここに興味を持ったホントの理由は……」

「や、やめろ!!」

陽介らしき存在の言葉に陽介は必死で叫ぶ、と陽介らしき存在は心底おかしそうに陽介を指差して笑い出した。

「ははは！ 何焦ってんだ!? 俺には全部、お見通しなんだよ。」

だつて俺は……お前なんだからな！」

陽介らしき存在はそう言い、ニヤリと口元を歪める。そしてその口から陽介が止めたがってたであろう言葉を発した。

「お前は単に、この場所にワクワクしてたんだ！ ド田舎暮らしにはうんざりしてるもんな！ 何か面白いモンがあるんじゃないか……ここにきたワケなんて、要はそれだけだろ!?!」

「違う……やめろ、やめてくれ!……」

陽介らしき存在の言葉に陽介は力ない声でやめろと言う、が陽介らしき存在は止まらなかった。

「カッコつけやがってよ……あわよくばヒーローになれるって思ってたんだよなあ？ 大好きな先輩が死んだって言う、らしい口実もあるしさあ……」

「違う!!」

陽介らしき存在の最後の言葉に陽介は声を荒げる。

「お前、なんなんだ！ 誰なんだよ!?!」

「くくく……言つたろ？ 俺は、お前……お前の『影』。全部、お見通しだつてなあ!」

「影……そうか！ こいつは花村君のシャドウ!」

「シャドウ!? あれが!?!……いや、先輩、なんでそんなことを……」

陽介の言葉に陽介らしき存在はそう告げる。とそれを聞いてようやく陽介らしき存在の正体を見抜いた命が陽介らしき存在——陽介のシャドウを指差して声を上げ、それを聞いた真は前半シャドウという存在に対する驚きの、後半何故そんなことを命が知っているのかという驚きの声を出した。すると陽介は首をぶんぶんと横に振る。

「ふ……ぎげんなっ！ お前なんか知らない!」

そして陽介は自身のシャドウを睨みつけて叫んだ。

「お前なんか……俺じゃない!!」

「ふふふふふ、あつはつはつはつはつはつ……ああそうさ、俺は俺だ。もうお前なんかじゃない」

陽介がそう叫んだ瞬間陽介のシャドウは高笑いをしながらそう言う、と彼を黒い影が取り囲み始めた。

「あ、あああ、あああああ……」

陽介は震えながら声を漏らす。そして黒い影の中から巨大な何か——カエルのようなものに乗り、というか下半身がカエルのようなものになっている、黒い身体で手が異様に巨大な人間——異形の存在——シャドウが姿を現した。そして陽介のシャドウはその巨大な手を振り上げ、腰を抜かしたように倒れこんでいる陽介目掛けて振り下ろす。

「花村君っ！」

と間一髪命が飛び込んで陽介を抱えながら離脱、陽介のシャドウが振り下ろした手は地面に激突。しかしその手はコンクリートで出来ていると思われる——テレビの中の世界のものがどんな物質で構成されているのか分からないが少なくともかなり硬いと推測できる——床を砕いており、生身の人間が無防備に受けたら間違いない命はないことを容易に知らしめた。

「先輩、クマ、下がって！」

真はそれを見ると自分がやるしかないと前に立ち、ゴルフクラブを握り締めて剣道の時と同じく正眼に構えた。

「我は影、真なる我……」

陽介のシャドウはその本体と思われる人間部分がゆらゆらと揺れながら声を出していた。

「退屈なものは全部ブツ壊す……まずは、お前からだ!!!」

陽介のシャドウは巨大な手で真を指差し、それを見た真は右手に精神を集中。それがイザナギを呼び出すペルソナカードを作り出した。

「イザナ——」

「遅えよ!!」

しかし真がそれを砕き己の人格の鎧を呼び出そうとする前に陽介のシャドウの声が響き、陽介のシャドウはまるでアニメや漫画の忍者が忍術を使う時のようなポーズを取った。

「いつまで耐えられるかな？ 忘却の風！」

陽介のシャドウがそう叫んだ瞬間真目掛けて吹き荒れる風、それが真を吹っ飛ばした。

「ぐはあっ!!」

真は酒屋の壁に叩きつけられ、苦しそうな声を漏らす。

「イザナギの弱点は疾風か!」

「ク、クマ? センパイ?」

ペルソナを使っているにしては凄まじいダメージ、それを見た命は瞬時にそう予測を組み立て、それを聞いたクマは声を漏らす。と命はクマの後ろに陽介を置く。

「クマ君、花村君を任せたよ」

「せ、センパイはどうするクマ!?!」

「もちろん。あのシャドウをぶっ倒す。安心してよ、これでもシャドウとの戦いには慣れてるからさ」

「ク、クマ?」

命の言葉にクマが尋ねると命はにこりと綺麗な微笑を見せてそう返す。その言葉にクマはきよんとした表情を見せ、命はそれを見ることなく真のそばに駆け寄った。

「真君! 大丈夫?」

「せ、先輩! 危険です、離れてください! いや、俺が囷になるから花村とクマを連れて逃げて!」

無防備に駆け寄ってきた命に真が慌てたようにまくしたてる、と陽介のシャドウがにやあつと微笑んだ。

「ほう、面白え……てめえもブツ壊してやらあ!!」

そう叫び、陽介のシャドウは命目掛けて突進。それに対し命は立ち上がると真に背を向けて陽介のシャドウの方を向き、無防備に立ち尽くす。

「先輩、逃げてえー!!」

「真君。ペルソナ使いは、シャドウと戦う力を持つのは、君だけじゃないんだよ?」

真の必死の叫びに対し命は彼に背中を向けたままそう言うのみ。そして彼はライダーズジャケットの中から銃を取り出し、自らのこめかみに突きつける。

「せ、先輩!?!」

「ペ……」

凶器を取り出しただけでなくそれを敵シヤドウではなく自分に突きつける。その行動に真が声を漏らした。すると命の口から言葉が紡ぎ出される。

「ル……ソ……ナー！」

その最後の言葉が紡ぎ出されると同時、引き金が引かれる。ガシヤアンというガラスの割れるような音が響き、彼の内部から何かが現れる。それは白髪が命と同じ髪型を取っており、作り物のような身体に巨大な竖琴を持っている。

「ペ、ペルソナ？」

「そう。これが僕のペルソナ、幽玄の奏者……オルフェウス！ いけ、アギ！」

「ぐあああああつ!!」

真が唾然とした様子で呟くと命は頼もしげに微笑んでペルソナ——オルフェウスを見上げ、そして指示を出す。それを聞いたオルフェウスが竖琴をかき鳴らし、それから発された炎が陽介のシヤドウを襲う。それから命は呆れた様子で真を見る。

「真君、いつまで呆けて倒れてんの？」

「え？ あ、はい！」

命の言葉を聞いた真は慌てて立ち上がり、ゴルフクラブを構えなおす。それを見ながら命が口を開いた。

「あくまで予測の範囲だけど、あのシヤドウは疾風属性の魔法を使うみたいだ。そして君のペルソナ、イザナギはその疾風属性を弱点としているらしい。あいつの風攻撃が来たら僕、あるいはオルフェウスの後ろに隠れて」

「で、でもそれじゃ先輩が！」

「もちろん、僕は防御重視で行く。ゴルフクラブ程度とはいえ武器持ってるんだから君が攻めてくれないと、丸腰は流石にやだよ」

「う……」

「今回僕は君の盾となる。だから君は僕の剣として戦ってくれ」

命のデータ分析と指示を聞いた真が声を上げると命は反論が来る

前にふざけ半分の口調でそう言い、その言葉に真は声を失う。そして命はにこりと微笑んで作戦を言い、それを聞いた真は少し考えた後力強く頷いた。

「……了解！」

「オツケーー！　じゃあ僕は盾に、君は剣に。そしてオルフェウスとイザナギは魔術と肉弾戦の混合だ！」

「おうっ！　来い、イザナギ!!」

「テメエらあ、木っ端微塵にブツ壊してやる!!!」

命の最終作戦を聞いた真が声を上げてイザナギを呼び出し、ようやくアギの炎を消し去った陽介のシヤドウは苛立った様子で声を荒げた。

第五話 VS 陽介の影

テレビの中という異様な世界、そこにあった異様な雰囲気、漂う八十稲羽商店街、そこに存在していた異様なコニシ酒店。その異様だらけの中に存在する店の中にはやはり異様な光景が広がっていた。内装は少々、というかかなり散らかっていることを除けば普通の酒店とあまり相違ない。

しかしそこには迷彩柄のカエルを下半身にした、赤いマフラーを巻き手が異常なほどに巨大で身体が真っ黒な人間。陽介という少年のシャドウとそれに対峙する少年と青年——色素の薄い銀色の髪をした少年はゴルフクラブを手にその後ろには鉄仮面に鉢巻きを巻いて長ランを纏い刀を持った何かを従えている。もう一人は青い髪を右目を隠すように伸ばしており、右手に銃を持ち後ろには白髪が青年と同じ髪型を取った作り物のような身体に巨大な豎琴を持っている何かを従えている——が睨み合っていた。

「ブツ壊れろお！」

「オルフェウス！ タルンダ！」

陽介のシャドウが巨大な右手を振り上げると青年——命が自身の従える存在——オルフェウスに指示を出し、それを聞いたオルフェウスが豎琴をかき鳴らすと不思議な力が陽介のシャドウを襲う。

「な、なんだ？ 力が入らねえ……ちくしょう！」

「はあああああつ……」

陽介のシャドウは困惑したように呟いた後力が入っていない右腕を振り下ろす、それを見た命も気合を入れてジャンプ、下げていた右手を一気に突き出した。

「せいっ!!」

「うおっ!？」

気合一撃、そういうかごとく正拳が力が入っていない陽介のシャドウの右手を打ち返す。それを見ながら命は後ろの仲間へ声をかけた。

「真君！」

「はい！ イザナギ、ジオ!!」

命の言葉を聞いた彼の元後輩——真は自身が従える存在——イザナギに先ほどの命と同じように指示を送りながら自身もゴルフクラブを手に陽介のシャドウに突進した。イザナギが吼え、同時に落雷が陽介のシャドウを襲う。

「グオオオオオオオッ！」

「おおおりやあああッ!!」

陽介のシャドウが苦しそうな悲鳴をあげ、直後真の振り下ろしたゴルフクラブがシャドウの本体であろう上半身の人型部分に激突した。

「があっ！ この、クソがあっ!!」

しかし中途半端な打撃が逆に相手の意識を覚醒させてしまったのか陽介のシャドウはイラついた様子で真を睨みつけ、巨大な左手を振り回して相手を振り払う。

「そおいつー！」

「がっ!？」

と直後今度は背後からガンガンツと立て続けに二回の衝撃が襲い、陽介のシャドウは振り返る。そこには何かを投げたらしいポーズを取っている命が立っており、その横には数本空きのある酒のケースがあった。そして現在陽介のシャドウからアルコールの匂いが漂っている。

「てめえ、まさか!？」

「考えてみれば武器なんてそこら辺に転がってるんだよね。あ、ところでシャドウ君。ちよつと聞きたいんだけどさ……」

陽介のシャドウの声に命はへらへらと笑いながらそう言い、次に意味ありげに問いかけながらニヤリと微笑み、一旦言葉を切って息を吸う。

「……お酒って燃えるって知ってる?」

「!？ ギャアアアアアアアッ!!」

命の言葉に陽介のシャドウがぎよつとした表情を見せた次の瞬間陽介のシャドウを炎が包み込む。オルフェウスの使用できる魔法——炎属性魔法アギの炎が陽介のシャドウにかかっていた酒に引火、一気に燃え上がったのだ。

「イザナギ！ ジオ!!」

「グオアアアッ!!」

そこにイザナギが落雷——電撃属性魔法ジオを放ち、陽介のシャドウはさらに苦しげな声を漏らす。

「グウツ、チックシヨッ！」

陽介のシャドウは必死に身体を振り回し巨大な手で炎を払うように消す、がその消し終わった瞬間真はゴルフクラブを、命はそこら辺に転がっていた空き瓶を手にジャンプして陽介のシャドウに殴りかかる。

「ツ！ クソオツ!!」

しかし陽介のシャドウはどうかその連続攻撃を両手を広げて受け止め、ゴルフクラブは勢いのせいかぐにやりと曲がり、空き瓶は衝撃に耐え切れず砕け散る。と命は何かを感じ取り、地面に着地すると叫んだ。

「攻撃来るよ！ 合流！」

「はいっ！」

命の言葉に真はそう返すと二人は走って合流し、命が前に立って両腕をクロスし身構える。直後陽介のシャドウはアニメや漫画の忍者が忍術を使う時のようなポーズを取った。

「消えろおっ！ 忘却の風ッ!!」

「ぐううううっ!!」

吹き荒れる烈風を命はふんばって耐え、その風が消えた瞬間イザナギが動き出す。

「イザナギ！ ジオ！」

「オルフェウス！ 突進！」

イザナギの落とした雷が陽介のシャドウを撃ち、続けてオルフェウスが陽介のシャドウ目掛けて突進しその勢いを込めて豎琴でぶん殴る。

「ガ、ハッ……」

雷に貫かれ、豎琴でぶん殴られた陽介のシャドウは限界が近いのかぐらりとふらつく。

「真君、トドメを！」

「はい！ イザナギ、スラツシユ!!」

命の言葉に真は頷いてイザナギに追撃を指示、それを聞いたイザナギは小さく頷くと地面を蹴って飛ぶように陽介のシャドウに突進。

「フツ、フザケンナアアアアアアツ!!」

それを見た陽介のシャドウは声を上げるが、イザナギは突進の威力を込めて刀を横薙ぎに振りぬく。その一撃がトドメになったか、陽介のシャドウは断末魔の悲鳴を上げるとその全身がまるで焦げていくかのように黒く染まりあがり、どしゃつと倒れこんだ。

「お、終わった……のか？」

倒れた陽介のシャドウを見ながら真は心配そうに呟く。今にもまた動きだしはしないか、そう考えると目を離すなんてとても出来なかった。するとその肩にぽんつと手が置かれる。

「……」苦労様、真君。まあ実戦初めてにしては結構イイ線いってたと思うよ。召喚の仕方に違いこそあるけどゆかりや順平も最初はペルソナの召喚に苦労してたしね」

「あ……え？……」

命の言葉に真は変な声を漏らして命の方を見る。今さっき彼は妙なことを言っていた。

「実戦、初めて？ 召喚の仕方？ そ、それにゆかりや順平って、岳羽先輩にいいお——」

「ヨースケー！」

真の呆けたような声が終わる前にクマの声が響く。さっきの戦いの最中気絶していたらしい陽介が目を覚ましたらしく、彼は頭を押さえながら立ち上がった。

「う……俺は、一体？……」

陽介は立ち上がると驚いたように目を見開く。彼の前にもう人間とカエルが重なり合ったような異形の存在はいない。しかし、そこにはまた金色の瞳をした花村陽介のシャドウが無表情のまま立っていた。

「お前は……お、お前は、俺じゃ……俺じゃ、ない」

「……」

陽介は力なく首を横に振りながら眩き、それに陽介のシャドウは気のせいかな悲しそうに眉を歪ませる。

「あれは元々、ヨースケの中に居たものクマ。ヨースケが認めなかったら、さつきみたい暴走するしかないクマよ……」

「でも、でもよ……」

そこにクマが陽介に悲しげな声でそう言い、しかし陽介はそう眩く。と真が彼に近寄った。

「勇気を持って。それだって、花村のらしさだ」

「椎宮……」

「そうそう。それに誰だって同じようなものさ。人には誰しも裏表がある。僕は結構交友関係が広いって自負してるけどさ、人には見せない裏が全くない人間なんて僕は今まで会った事ないよ」

「命さん……」

真の言葉に続けて命もそう言い、それに陽介は声を漏らした後困ったように頭をかく。

「ちくしょう……ムズいな、自分と向き合おうって」

彼はそう言うのと自らのシャドウの目の前まで歩いていき、その金色の目から目を逸らさずに口を開いた。

「わかってたんだ。でも、みつともねーし、どーしよーもなくて……認めたくなかった」

陽介はそう言い、そして目の前の自分自身へと右手を差し出した。

「お前は俺で、俺はお前か……全部、ひっくるめて俺だってことだよな」

その言葉に彼は頷き、気のせいかな僅かに微笑むとその姿が光に包まれる。直後、陽介の前にシャドウとは少し違う異形——ペルソナが姿を現した。白いツナギに身を包み、赤いマフラーは爽やかな風にたなびいている。どこかさつき真と命が戦ったシャドウを思わせる意匠も残っていた。その姿を陽介は微笑を浮かべて見上げる。

「……ジライヤ」

彼がその名を呼ぶと同時、ジライヤはタロットカードとなって陽介

の目の前へとゆっくり降下。そのカードにはローマ数字の「I」、魔術師を意味する数字が書かれていた。そのカードは陽介の目の前まで落ちると光の粒子となって陽介を包み込んだ。

「これが俺のペルソナ……」

陽介はそう呟いた後、何かに気づいたように声を出した。

「さつき聞こえた先輩の声……」

そう呟いた後、彼は三人の方を振り向く。

「あれも、先輩が心のどつかで押さえ込んでたものなのかな？……はは、ずっとウザいと思ってた、か……」

陽介はそう呟くのがくつと伏せた。

「これ以上ねーってくらい、盛大にフラれたぜ。ったく、みっともねー……」

「花村……」

陽介の言葉に真がなんとも言えない表情で呟く。その次に命が口を開いた。

「そうとは限らないんじゃないかな？」

「え？」

命の言葉に真と陽介が声を漏らす。

「これはあくまで僕の推測だけだよ。その小西さんもシャドウを見たんだよね？　そして、シャドウは自身が否定されたことで襲い掛かる」

「……え？　まさか、先輩は俺のことをウザがってるシャドウを……否定、した？　ってことはつまり……」

「まあさっきの花村君みたく事実そう思ってた、でも認めたくないから否定したって可能性もあるけどね？」

「ぐあ……」

尊の言葉に陽介は希望を見つけたように顔を上げるが命はさらつとそう続け、それを聞いた陽介はぐあつと声を漏らして倒れた。

「あ、トドメさされた……」

「クマ……」

それを見た真とクマはそう呟いた。と、陽介は顔を上げて起き上が

る。

「ま、まあとにかく。椎宮、命さん。二人がいて助かったよ。ありがとう
な」

「ああ」

「どういたしまして」

その言葉に真と命が頷く。それから陽介はクマを見た。

「なあ、クマ……さつき命さんが言ってたけど、先輩はここでもう一人
の自分に殺されたのか？ さつき俺に起きたみたい……」

「多分そうだと思うクマ。ココにいるシャドウも、元は人間から生まれ
たものクマ。でも霧が晴れると皆暴走する。さつきみたいに意志
のある強いシャドウを核に大きくなって、宿主を殺してしまうクマ」
「……つまり、それが町で霧が出た日にこつちで人が死ぬ原因になる
のか……」

陽介の言葉にクマが説明を行い、それに真は理解したように呟く。
と直後陽介がふらつき、真は膝をついた。

「二人とも、大丈夫？ 大分疲れてるみたいだけど……ああ、真君はペ
ルソナを召喚してたし無理もないか」

「元々この世界は人間にはちつとも快適じゃないクマ……け、けど、な
んでセンパイは平気なのクマ？」

「え？ ああ、まあね」

「そ、そういうえば先輩、あなたはなんでペルソナやシャドウについてそ
んなに詳しいんですか？……」

「ああ、まあね……隠しててもしょうがないし、しょうがない。説明す
るよ」

命はクマと真から妙に怪しまれてるような視線を投げかけられ、命
は苦笑した後諦めたように続ける。とクマが口を開いた。

「もう何も聞こえなくなつたし、これ以上ココには何もなさそうクマ」
「分かった。じゃあ一旦戻ろうか……クマ君、少し気になることがあ
るし、いくつか質問していいかな？ それが終わった後に僕も説明す
るよ。僕のこの、ペルソナの力についてね」

クマの言葉を聞いた命がそう言い、四人は一旦三人が入ってきたス

タジオのような広場へと戻ってくる。

「それでセンパイ、聞きたいことってなにクマ？」

「ああ、うん。君は確かここが入ってきたものにとって現実になるって言ってたよね？」

「クマ」

クマの問いかけに対し命は確認を取りそれにクマはこくんと頷くと陽介が気づいたように口を開いた。

「あ、そうか！ さっきの商店街と前に見た妙な部屋！ あれは死んだ二人がこつちに入った後で、二人にとつての現実になったってことなのか!？」

「つまり、山野アナと小西先輩が入ったせいであんな場所が出来てしまった？」

「……今までなかったことだから、分からないけど……ココで消えた人たちもきつと、さっきのヨースケみたいになったクマね……」

「死んだ二人にも同じことが？ どういうことだ？」

陽介の言葉に続き、真も述べる。それに対しクマは少し考える様子を見せながらそう言い、それに真が尋ね返す。とクマはまた口を開いた。

「……この霧は時々晴れるクマ。そうなるとシャドウ達はひどく暴れる。クマ、いつも怖くて隠れてるんだけど、最初の時もその次も、人の気配はその時に消えたクマ……」

クマの言葉を三人は黙って聞き、最初に陽介が口を開く。

「つまりだ……先輩や山野アナはこんなトコに放り込まれて、出られずにさまよって……その内身体からあのシャドウつてのが出て、そいつが霧が晴れた時に暴れだして命を……そういうことなんだな？」

「……ということは、花村も……この霧が晴れるまでいたらもつと危険な目にあっていた。そういうことか？」

「間違いないと思うクマ。それに、さっきはセンセイにセンパイ、クマも側にいたから……」

陽介の言葉に続けてまた真が言い、それにクマはこくんと頷く。と陽介はうつむいて拳を握り締めた。

「……くそっ！ 先輩達、たった一人でこんなところに……なのに誰も、先輩達を……」

「花村君……」

「あ、でもでも」

陽介の苦しそうな声に命が眩き、その次にクマがまた口を開いた。「二人ともここが晴れた日に消えたけど、それまではシャドウに襲われなかったクマ」

「でも、さつき僕達は襲われた。シャドウはペルソナ使いにしか倒せない。それを本能的に分かってるのか、探索している僕達を敵とみなしているのか……」

「シャドウ達、警戒してたクマ。キケンかもしれない、けどボクらなら戦って救えるかもしれないクマ」

クマの言葉に陽介と真はクマの方を見る。

「もしかた誰かが放り込まれても、俺達なら助けられるかもしれない。ってことか？」

「その人が殺されてしまう前に、さつき花村を助けたように……」
「でも、それじゃ堂々巡りだよ？」

陽介と真の言葉に命が指摘、それに陽介はああと頷いた。

「とにかく、ここに人を入れてる犯人を捕まえて止めさせるしかない……ようやく、少しは状況が分かってきたぜ」

陽介は腕を組んでうんうんと頷く。

「ねえ、逆に一つ聞いていいクマ？」

「どうした？」

するとクマが尋ね、真が問う。

「シャドウが人から生まれるなら、クマは何から生まれたクマか？」

「お前自分の生まれも知らねーのかよ!? そんなこと俺らに分かるわけねーだろー!」

「この世界のことならいくつか知ってる……けど、自分のことは、分かんないクマ……ちゅーか今まで考えたことなかった……」

クマの言葉に陽介が驚いたように叫ぶとクマは困ったような悲しそうな様子でそう呟く。

「まじかよ……つかそんなんじや、俺らが何訊いても無駄なはずだよ……」

陽介はため息をつきながらそう呟き、それから真は命を見た。

「話も一段落したところで、先輩。いいですか？」

「ああ、僕の力とこの知識についてだね？ まあいいけど。その前に一つ尋ねていいかな？」

「はい？」

「なにクマ？」

真の言葉に命はにこりと微笑んで頷いた後尋ねる。それに三人が首を傾げると彼は用意していたようにその問いを口に出した。

「実は一日は二十四時間じゃなかった。なんて言ったら君達は信じるかな？」

「はあ？ なんすかさそりや？」

「……新手の洒落か何かですか？」

命の言葉に陽介と真は首を傾げて尋ね返し、クマに至ってはとうとうことか理解していない模様。すると命は「まあそうだよ」と可笑しそうに笑った。

「真君。桐条美鶴に真田明彦っていう先輩の名前を覚えてるかな？」

「あ、はい！ 俺達とは入れ替わりでしたけど、噂によく聞いてました。でも、それが何か？」

「まあ、まずは最初の問いを片付けようか。一日は二十四時間じゃなかった。十二年前から二年前まではね。その時間には空は緑色になって月が不気味に光り、通常の機器が使用不能になって人は棺桶と化す。僕達はその時間を影時間と呼んでいた」

「……え、映画か何かの題材っすか？」

命の説明に陽介は頬をヒクヒクさせながら苦笑いで返す。と命はふふつと笑った。

「テレビの中の世界だって似たようなものだと思うな。影時間は午前0時から発生する、けど普通の人間には知覚出来ない。さっき言った通り皆棺桶の中でお休みだからね。そんな中に蠢く存在、それがシャドウ。そのシャドウを打ち倒すことが出来る力、それがペルソナ」

「「シャドウ!? ペルソナ!」」

命の口から出たシャドウとペルソナという言葉、それを聞いた三人が声を上げ、それに命はふっと微笑む。

「僕がペルソナとシャドウについて知識を持っていたのはそのためだよ。まあ、若干差異はあるようだけどね。正直最初にシャドウを見た時は驚いたよ、なんで影時間が消えたはずなのにシャドウがいるんだって……」

「先輩?」

命はそこまで言うとか何か考え込む様子を見せ始め、真が問いかけると彼は笑みを漏らす。

「あ、ああ、なんでもないよ。ごめんごめん。で、その影時間を調査するためペルソナ能力を持つ者達が集められた。それがさつき言った桐条先輩と真田先輩、僕も含めた十人……ああ、まあ人じゃないのが含まれてるけど、十人。特別課外活動部、通称S・E・E・S・さ」

「気にしないで。まあそういうわけでシャドウと戦って、影時間の秘密を解いて。影時間は消えましたーめでたしめでたし……ってわけ」

「大雑把っすね!! もっとこう、色々あったんじゃないんすか!」

「いや、ペルソナやシャドウの説明のためここまで口を割ったけどこの戦いを詳しく口外するわけにはいかないからね」

命はその戦いの内容をさらっと流し、陽介が突っ込むと命は肩をすくめて返した後、続けた。

「まあ、僕がペルソナやシャドウについて詳しい理由や実戦経験がある理由はこんなところだね。流石に二年戦ってないから大分鈍ってるっばいけど」

「そうですか……」

命がそこまで言うとか真はそう言って陽介と共に疲れきった息を吐き、それを見た命が口を開く。

「さて、そろそろ戻った方がいいかな。クマ君、出口お願い」

「分かったクマ」

命の言葉にクマは頷いてまたとんと足踏みをし、出口である三

段重ねのアナログテレビを作り出す。とクマは思い出したように口を開いた。

「そうだ！ これからまた来てくれるんならキミたちは必ず同じ場所から入ってきてほしいクマ」

「同じ場所……ジュネスのテレビからつてことか？」

クマの言葉に真が聞き返し、クマはこくと頷く。

「違うところから入ると違うところに出ちゃうクマ。もしそれがクマの行けない場所だったらどうしようもないクマ……以上。分かったんクマ？」

「ああ、分かった」

「うん、分かったよ」

クマの説明に真と命が頷き、三人はテレビから出て行った。

それから三人は家電売り場へと戻ってくる。幸いにして店員も客もおらず、唯一いるのは床にへたり込んでいる千枝のみだ。

「あ……が、がえつでぎだあ……」

「う、うおう」

千枝は涙でぐちゃぐちゃになっている顔で三人を見、それに陽介は声を漏らす。

「ど、どうしたんだよ、その顔……」

「う……」

その言葉に千枝は立ち上がると彼をキツと睨み付けると手に持ったロープを力の限り投げつける。彼女のそんな行動を予想だにしていなかったのだろう。陽介は顔面ですれを受け止めて尻餅をついた。

「あがつ」

「どうした？ じゃないよ！ ホントバカ！ 最悪！ もう信じられない！ アンタら、サイツター！」

陽介が間の抜けた声を出し、千枝は怒りのままに叫んだ後、今度は泣きそうな声を漏らす。

「ロープ切れちゃうし、どうしていいか、分かんないし……心配、した

んだから……」

千枝はそこまで言うのと涙の浮かんでいる顔で三人を睨みつけた。

「すっげー、心配したんだからね!!」

「あ……」

「あーもう、腹立つ!」

千枝の言葉に命は声を漏らし、千枝はそう言うのと走り去っていく。と陽介は表情を歪めた。

「ちよつとだけ、悪いことしたかな?」

「ちよつとどころじゃないよ……迂闊だった」

陽介の呟きに命が苦虫を噛み潰したような表情で呟く。その顔には自分に対する怒りと情けなさも混在しているように見えた。

「僕達は彼女一人に命綱、つまり僕達をこっちの世界に繋げておく役目を任せてた。それが重責過ぎたんだよ。僕達の他にテレビの中の世界を知る人はいない、誰にも頼れない。もし僕達が戻ってこなかったら彼女は止められなかった自分のせいだっていう気持ちも誰にも打ち明けられず一人で抱え込むしかなかったんだよ」

「う……」

「……」

命の言葉に陽介が声を漏らし、真も情けないように顔を押しさえる。それから陽介が苦しい表情で口を開いた。

「……明日、謝ろうぜ」

「ああ……」

「ごめん。僕の分も謝っておいて……それと、後で僕からもしっかりと謝罪するって伝えておいて」

「分かりました」

陽介の言葉に真も頷き、その次に命が言うのと真はこくと頷いた。それからまた命が口を開く。

「まあ、今日のところはまっすぐ家に帰ってゆつくり寝た方がいいよ。どうやらテレビの中はかなり体力を消耗するみたいだからね」

「分かりました。たしかに今日はもうヘトヘトつす、風呂入って寝るわ……今日は、眠れそうな気がする」

「ああ。じゃあまた明日、学校でな」

命の言葉に陽介は言い、真も頷いて返した後三人は別れて帰っていった。

その帰り道、河川敷を真が通りがかった時だった。

「あれ?……」

そんな声が聞こえ、真は声の方を向く。そこにはピンク色の着物を着た天城が雨宿りが休憩所に座っており、真は彼女の方に歩いていき、雪子が座っている長椅子に座る。

「あ、この格好驚いた? 家のお使いだったから……」

「ああ、里中が言ってたな……あ、そうだ。宿泊客に利武命っているよな?」

「えっ? えと、そういうのは教えられない……けど、知ってる人?」
真の問いに雪子は慌てたように言った後尋ね返し、真はああと頷いた。

「前の高校の先輩。俺がこんな口上手くなった原因の一人」

「そうなの? ふふ……あの人、予約日時間違えたみたい。受付で大騒ぎになってたのを覚えてる」

「あの先輩が?……へえ」

真と雪子はそう言い合い、一旦話が途切れる。

「え、えっと……この町とか、学校にはもう慣れた?」

「まあまあかな?」

「……よかった。知らない場所に転校してくるって大変なんだろうね。私はこの町から出たことないから、転校ってどんな気分か分からないけど……」

「まあ、最初は大変だったが今はもう慣れっこだな。それに友達が増えるから楽しいところもあるぜ、先輩に会えたおかげで口下手な俺もこうして上手く話せるようになったしな」

雪子の言葉に真はふざけたような口調でそう言い、雪子はまたくすくすと笑ってからまた尋ねた。

「あ、えっと……私、いつも帰り早いし……その、千枝とかとは、どう

「？」

「ああうん……仲良くやってるよ」

雪子の問いに真は困ったように声を漏らし、まさか泣かせちゃいましてくなどというわけにもいかずそう言葉を濁した。すると雪子はふふつと柔和に微笑んだ。

「そう、よかった。千枝ってね、すごく頼りになるの。私、いつも引つ張ってもらってる。去年も同じクラスでね、一緒にサボって遊んだりしたな……」

「里中はともかく天城がサボるなんて想像できないな……」

「あ、ひどい」

雪子は千枝のことを嬉しそうに話し、その言葉に真が呟くと雪子は口を尖らせて責めるような視線を見せて返す。それから気づいたように時計に目を落とす。

「あ……そろそろ戻らなきゃ。板長と明日の打ち合わせしないと……」

「送っていいこうか？」

「えっ!？」

雪子の言葉を聞いた真がそう申し出る、と雪子は驚いたように声を漏らし、真は頭をかく。

「いや、女の一人歩きは危ないだろ？ もうすぐ日も暮れそうだし……」

「あ、そ、そうだよね！ で、でも大丈夫だから！」

真の言葉に雪子は顔を赤くしながらそう言い、傘を差そうとする。が動揺してるせいかなかなか上手くいっておらず、真が笑いかみ殺しているときようやく天城は傘を差し、それを見てから真も立ち上がってワンタッチの傘を開いて休憩所から出る。

「んじゃまた明日、学校でな」

「う、うん！」

そしてそう挨拶し、雪子もこくと頷くとその場を去っていき、真も家に帰っていった。

それから真は家で菜々子と共にニュースを見、そこで事件が続くというニュースを聞くと菜々子は心配そうな表情を見せる。とテレビが別の話題に変わった。

「鮫川の上流に軒を構える、地元随一の歴史を持つ高級温泉宿、天城屋旅館。源泉かけ流しのラドン泉の露天風呂を備え、遠方からのリポーターも多い高級旅館だ」

何かの番組での天城屋旅館の紹介らしい。テレビ画面がマイクを持った現場リポーターのものに変わっている。

「えー、事件後、女将が一線を退き、今はこちら、一人娘の雪子さんが代わりに務めています」

そう言うと同時に、和服姿の雪子がアップで映る。

「言ってみれば、現役女子高生女将……といったところでしょうか？　なんともこう、惹かれる響きです。お話うかがってみましょう……すみません！」

「え？　私……私ですか？」

リポーターに突然声をかけられ、雪子は驚いたように声を漏らす。

「女子高生で女将、ということですが」

「いえあの、私は代役で……」

「でも跡継ぐわけでしょう？　ていうか和服色っぽいね。男性客多いでしょ？」

「えー、や、あの……」

リポーターはセクハラまがいの質問に脱線しており、真はチツと舌打ちを叩いた。

「……つまんない……あ、おさらあらわなきや」

菜々子もつまんなそうにそう言い、思い出したように流し台の方に歩いていく。それを見た真もこれ以上セクハラを聞いて気分を害するよりはと皿洗いを手伝うため流しの方に歩いていき、黙々と皿を洗っていく。

「ふたりでおさらあらうと、はやいね」

皿洗いを終えた後菜々子はえへへと笑ってそう言い、クイズ番組を

見始める。それを見てふつと微笑んでから真は外でまだ降り続けている雨を見た。

(今日も雨……マヨナカテレビを見てみないとな)

彼はそう考えたとその時間まで部屋で過ごすかと思つて菜々子に一つ挨拶をして部屋に戻つていった。

「……そうか。やはり普通の事件ではなかったか」
「ええ」

一方天城屋旅館のとある高級客室では命が報告を行っていた。マヨナカテレビは単なる都市伝説ではなかった。そしてシャドウが関係している。という二つの事柄を。

「真君もいることだし、それでなくても放つておくわけにはいかない。先輩、この依頼を長期に変更していいですか？」

「ああ、こちらからお願ひしたいぐらいだ。それと私達もなんとか向かえるようにしよう。ゆかりや風花にも私から連絡を取っておく」
命の頼みを聞いた美鶴は頷きそう続ける、と命は首を横に振った。

「……いえ、それは必要ありません」

「は?」
命の言葉に美鶴は声を上げる、と命はさらに続けた。

「すいません。言い直します……絶対来ないでください。来いというフリじゃありません、来るな」

「命?!? お前は何を言つてるんだ?!」
「来ないでくれ、絶対に!!……」

命の命令のような言葉に美鶴が叫び声を上げると真がさらに叫び声を上げる。幸いにして隣の部屋には宿泊客は今のところいない。うだがもし宿泊客がいたら間違ひなく苦情が来るほどの音量。それを考えたわけではないのだが、彼は少し黙ると声を絞り出した。

「……分かつてますよ。戦力は圧倒的に足りない、合理的に考えたら先輩達にすぐにでも来てもらうべきだって」

「だったらー!」

「でも!! でも先輩は桐条グループがある! ゆかりも、結生も、順平も風花も真田先輩も天田もコロマルもアイギスも、今は普通の生活を送ってるんだ! それを、いまさらこんな危険なところに放り込まれていいはずがない!!」

「だが、それを言ったら君は!」

「僕はもう巻き込まれてるからしょうがない! でも、こんなもの関わらずに済むなら関わらない方が絶対いいんだ!!」

命はそこまで言うと言わぬ荒い息を漏らした。声は震えておりどこか泣きそうな雰囲気を見せている。

「ああ、分かっている。こんなのただの自分勝手な我侷だ、今ここで皆を呼ばなかったらこの町の人を危険に巻き込んだりじゃうかもしれない……でも、皆を危険に巻き込むよりマシだ」

「……バカが」

命の搾り出すような声に美鶴もまた搾り出すような声で返し、心配そうな声で続けた。

「だが、せめてアイギスだけでも——」

「アイギスは人間だ!!! アイギスも絶対によすな!! いや、他の人に漏らすことすらするな!! もし誰かに言ったりしたら、僕はあなたを一生軽蔑します」

美鶴のその言葉すら命は怒りに満ちたような声で叫び返し、電話では相手に分からないだろうが怒りに満ちたような目を見せていた。それに対し美鶴は申し訳なさそうな声を漏らしだす。

「だが、だがそれでは私は……」

「巻き込んだ罪悪感があるっていうんなら、ここでの宿泊経費とかの諸経費全額そちらの負担にしてください。それで充分です」

「……分かった。だが、一つ、いや、二つ約束してくれ」

「……聞いてから判断します」

美鶴の言葉に命はすぐさまそう返し、ようやく折れた美鶴は条件の提示を開始、それに命が返すと美鶴は口を開いた。

「まず一つ目……もし状況が君一人の手に負えなくなったらすぐ私達を呼べ。これ以上は手に負えなくなりそうと判断しても同じだ。

約束できないというのなら……軽蔑されようと構わん、すぐ全員に連絡を取り、八十稲羽へと向かう」

「……分かりました。で、もう一つは？」

「こっちは約束というより私の個人的な頼みだ」

美鶴の提示した条件の一つを命は承諾、もう一つはと問うがそれに美鶴はそう返した後一つ呼吸をした。

「巻き込んだ手前で言える立場ではないだろうが……命は絶対に大事にしてくれ」

「……………努力します」

懇願するような言葉、それに命はしばらく黙り込んだ後そうとだけ返した。それに美鶴はふうと息を吐き、また続ける。

「それと、こちらは約束とは別物だ。定期報告はきちんとするように」

「了解」

「それから……」

「まだあるんですか？」

定期報告やらなにやられることがあつた命は声を漏らし、美鶴は電話口でふつと笑みを漏らしたような息を吐いたのを命は聞いた。

「ゆかりと結生はどうする？」

「……………絶対言うな」

「それはどっちが心配なんだ？ いや、どれが、と言った方がいいかな？」

美鶴の言葉を聞いた命は息を呑んだ後そう呟き、それに対し美鶴はようやく優位を取り戻したためかくつくつと笑いながら悪戯っぽく問いかける。それを聞いた命は顔を押しさえて呟いた。

「……………ゆかり、結生、そして僕の三人……と返しましょう……ほんとに言わないでくださいね？」

「自首は早めにすることを薦めるぞ？」

命の言葉に美鶴はまたくつくつと笑いながら返した。岳羽ゆかりに利武結生、こんな状況においても命最大の弱点ツートップである。いや、こんな状況だからこそというおうか。

「……とりあえず、切りますね」

「ああ……最後に、君を大事に思う先輩として言わせてくれ……」
命の言葉に美鶴はそう言いだし、一旦言葉を途切れさせると命は電話口で彼女がすーはーと深呼吸しているのを聞く。

「死なないでくれ、頼む」

「……………また何か分かったら報告します」

心の底から懇願するような声、その言葉に命はそうとだけ言うと美鶴がまた何か言おうとする前に電話を切り、すぐに携帯の電源まで落とす。

「……………」

そして彼は携帯をかばんの方に放り投げるとそれは開いていたかばんの口から綺麗の中に入る。それを命はこともなげな目で一瞥してから特に何をするでもなく、雨音を聞きながらふと点いてないテレビの方に目をやった。

第六話 戦いの前に……

四月十五日、夜中。堂島家二階の真の自室。真は外で雨が降っているのを確認するとカーテンを閉め、部屋を外から見えない密室状態にしておいた。

「テレビに何か映るだろうか……」

真はそう呟いて点けているテレビの前に立つ。テレビには天気予報が映っている。

「今日のニュースにもありました稲羽市ですが、今年も頻繁に濃霧が観測されています。実はこれは、ここ数年見られるようになった異常気象で、原因はよく分かっています。周辺にお住まいの方はご注意ください。今日は、稲羽市の事件について時間を延長してお伝えしました……まもなく午前0時です」

ニュースが終わると真はリモコンのスイッチを押してテレビを消す。それから数拍置くと消えているはずのテレビからノイズとノイズ音が発生し始め、テレビに人影が映った。

「まただ……どうやら条件さえ揃えば何度でも見られるようだな……」

真はそう分析し、テレビに映っている人影を注視する。画面に映っているのは体格から考えて恐らく女性、和服を着ているように見えるが画像が荒いせいで誰なのかという確証までは持てなかった。

（……待てよ）

真はふとマヨナカテレビの映像に手を触れたらどうなるか、と考え、テレビに手を入れる。がその瞬間テレビの映像は消えてしまい、手を抜いた時にはテレビはいつも通り沈黙を保っていた。

「……流石にそう上手い話はないか……」

真はそう呟き、明日早速陽介、そして学校が終わった後に命とも連絡を取ろうと考えると明日の備えて眠りにつくため布団に入り、目を閉じた。

「ようこそ」

「！」

眠ったはずの自分の耳に届いてきた声、それに真は驚いたように目を開いた。それと同時に彼の視界に移るのは真つ青な車内と自分の向かいに座っている鼻の長い老人と群青色の衣服を身に纏った銀髪の美女。

「ご心配めさるな、現実のあなたは眠りについていらっしやる。私が夢の中にてお呼びたてしたのです」

「ここは確か……ベルベットルーム」

老人——イゴールの言葉に真は記憶を辿りそう呟く。

「再びお目にかかりましたな」

「ここは、何かの形で契約を果たされた方のみが訪れる部屋……あなたは日常の中で無意識に目覚めを促され、内なる声の導く定めを選び取った。そして見事、力を覚醒されたのです」

「力……ペルソナのことか？」

イゴールに続いて美女——マーガレットが言い、その言葉に真が尋ね返す。それにイゴールが深く頷いた。

「左様……これをお持ちなさい」

その言葉と共に真の右手に群青色の鍵が浮かび上がり、やがて実体を持つ。

「今宵からあなたは、このベルベットルームのお客人だ。あなたは力を磨くべき運命にあり、必ずや、私達の手助けが必要となるでしょう」

「……」

イゴールの言葉に真は眉をひそめる。イゴールの言葉がどうにも何かの押し売りや悪魔との契約のように聞こえてきた。

「あなたが支払うべき代価は一つ」

その言葉に真はふつと笑みを見せる。どんな無理難題が来る、と考えたその時イゴールは続けた。

「『契約』に従い、ご自身の選択に相応の責任を持っていただくことです」

「……なに？」

イゴールの言葉に真は驚いたような呆けた声を漏らし、僅かに身の前に乗り出した。

「それだけか？ まさか命でも取られるんじゃないかと思ったんだが……いや待て、そもそも俺は契約なんて……」

真はそこまで言うの一つ心当たりのある事柄を思い出し、それを口にした。

「まさか、クマと約束した犯人探しか？」

「左様」

「……分かった。気をつけておく」

真の問いにイゴールは小さく頷き、それを聞いた真は一つ頷いて返した。

「結構」

それにイゴールはもう一度小さく頷き、手を組みなおすとまた口を開いた。

「あなたが手に入れられたペルソナ……それは、あなたがあなたの外側の事物に向き合った時に現れる人格。様々な困難と相對するため自らを鎧う、覚悟の仮面……とでも申しましょうか」

イゴールはそこまで言うとそのギョロ目で真を一度眺め回す。

「しかもあなたのペルソナ能力はワイルド……他者とは違う特別なものだ。空っぽに過ぎないが無限の可能性も宿る。そう……いわば、数字のゼロのようなもの」

「特別？……」

「そう……まあ、あなたの周りにもう一人存在するのですが……」

イゴールの説明に真が声を漏らし、それに対しイゴールは真に聞こえるか聞こえないか程度の声量でそう呟く。それに真が首を傾げた。「え？」

「いえ、なんでもございませ……ペルソナ能力は心を御する力、心とは絆によって満ちるもの。他者と関わり、絆を育み、貴方だけのコミュニティを築かれるが宜しい。コミュニティの力こそが、ペルソナ能力を伸ばしていくのです」

「つまり、人と仲良くなっていけばなっていくほどペルソナはその力

を増していく……そう言いたいわけか？」

イゴールの言葉に真は自分なりにその言葉を理解し、返す。と次にマーガレットが口を開いた。

「コミュニケーションは単にペルソナを強くするためのものではありません。ひいてはそれはお客様を真実の光で照らす、輝かしい道標ともなつてゆくでしょう」

「……よく意味は分からないが。当然だ、人との交流をただの道具にするつもりはない」

マーガレットの言葉に真がそう返す、と次にまたイゴールが口を開いた。

「あなたに覚醒した『ワイルド』の力は何処へ向かう事になるのか……ご一緒に、旅をして参りましょう……フフ」

イゴールはそこまで言うともまた手を組みなおす。

「では、再び見えます時まで……ごきげんよう」

そしてイゴールがそう言い終えると共に、真の視界は真っ白に塗りつぶされていった。

それから目を覚ました次の日、今日は雨も上がって曇り。真が学校へと向かいながら電話をかけていた。

「先輩、昨日の夜の……」

「マヨナカテレビだね？ 分かってる。僕も見たよ……」

電話の相手は命だ。真が命と話していると突然その後ろからチリンチリーンと自転車のベルの音が聞こえてくる。

「よっ、おはよーさん」

「よお、花村」

「ん？ 花村君？」

陽介だ。彼は真に追いつくと自転車を止めて片足を地面につけ、周りに聞こえないように声を潜めた。

「あ、命さんと電話中だった？ ちようどいいや……昨日の夜中の、見たろ？」

「ああ」

「見たよ。女の人っぽかったね……なんか、どこかで見たような気もするんだけど……」

陽介の言葉に真が頷き、命も真の電話のスピーカーから肯定の声を出す。それに陽介は考える様子を見せた。

「俺も誰だかいまいち分かんなかったけど、あれに映った以上放つとけない。とにかく放課後様子見に行こうぜ。クマからなんか聞けるかもしれないし」

「分かった」

「オツケー……本当は僕一人で一刻も早く聞きに行つた方がいいんだろうけど、色々やることがあつてね。学校が終わつたら連絡してよ、それまでには終わらせるよう努力するから……あ、ごめん。旅館の人が来た、切るね」

三人は放課後にジュネスに行つてクマに様子を聞きに行くという意見で一致し、直後命は電話を切る。それからまた陽介が考える様子を見せた。

「また誰かが放り込まれたんだとしたらやっぱ、マジでいるのかな？」

犯人……」

「被害者の死ぬ直接的な原因はあの世界かもしれない……だが、だから自分に罪はないと考えるような、あの世界を利用するような真似は許せないな」

陽介の言葉に真が頷き、それに陽介もああと頷いた。

「だからさ……絶対、俺達で犯人見つけようぜ！」

「なに？」

「だって警察が捕まえられるか？ 人をテレビに入れてる殺人犯なんてさ」

「……まあな。分かった、やろう」

陽介の提案に真は頷き、陽介もああと頷いた後思い出したように続けた。

「そうだ。実は昨日さ、俺んちのテレビで試したら頭突つ込めたんだよ。お前みたいに」

「本当か!？」

「マジだつて……俺が一人でテレビに入れたの、あの力が目覚めたからかもな……ペルソナ、か……命さんが言ってたけど、もしかしたらこの事件を解決するために俺達が授かったもの、なのかもな」

「ヒーロー気取りは止めてくれよ？」

「分ーかっつてるつて。あ、でもテレビに入るのもペルソナも、全部お前が最初にやつてのけたんだよな？」

陽介の妙に能天気な言葉に真がたしなめの言葉を口にするのと陽介はけらけらと笑って返し、それからそう尋ねると真は肩をすくめた。

「ペルソナは先輩達が二年のフライングでな」

「それは考えねえの。お前とならき、犯人見つけてこの事件を解決できるような気がするんだ。ま、よろしく頼むぜ」

「……こちらこそ」

陽介がそう言つて手を差し出し、それに真も同じ手を差し出して握手を返す。その時彼とほのかな絆の芽生えを感じ取り、同時に真の頭に声が響いてきた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たななる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、〃魔術師〃のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

陽介との絆に呼応するように、心の力が高まるのを真は感じる。

(……なるほど。これがコミュニケーションか……)

それに対し真は相手に悟られない程度に笑みを浮かべながらそう呟き、陽介は手を離すと自転車に乗りながら口を開いた。

「さてと、学校急ごうぜー」

「ああ」

その言葉に真も頷き、二人は学校向けて全速力で走っていった。

それから教室に着いた頃にちょうど雨が降り出し、二人は教室内でも気兼ねなく話せるような雑談を行っていた。するとガラガラツと扉が勢いよく開き、慌てた様子の里中が教室に入ってくる。彼女は教室内をきよろきよろ見回した後真達の方に走り寄った。

「さ、里中！ その……き、昨日は……わりい、心配さして……」
「そんなことより、雪子、まだ来てない？」

「天城か？ いや、見てないが」

陽介の言葉を里中はあっさり切り捨てて尋ね、それに真が首を横に振って返す。と里中は心配そうな声を漏らす。

「ウソ、どうしよう……ねえ、あれってやつはホントなの？ その……マヨナカテレビに映った人は向こう側と関係してるってやつ」

「ああ、朝にその話とかしてさ。放課後確かめに行こうかって——」
「昨日映ってたの……雪子だと思う」

「——!?!」

里中の問いに陽介が返すと千枝はそう言い、それに二人の顔色が変わる。

「あの着物、旅館でよく着てるのと似てるし、この前インタビュー受けた時も着てた。心配だったから夜中にメールしたんだけど返事来なくて……で、でも夕方頃かけた時は今日は学校来るって言ってたから……あ、あたし……」

「分かったから、落ち着けて。で、メールの返事はまだないのか？」
「うん……」

不安げな千枝の言葉に陽介が落ち着くように言い、尋ねると千枝はうんと頷く。その後真が向こうの世界で得た情報をかいつまんで話した。すると千枝の顔色がさらに悪くなる。

「そ、それ、どういうこと？ まさか雪子……あそこに入れられたってこと!?!」

「分かんねーけど、そういうことならとにかく天城の無事を確かめんのが先だろ！ 里中、天城に電話！」

「ああ、確証はないんだ。まず落ち着け」

千枝の言葉に陽介と真が返し、千枝はうんと頷くと雪子の携帯に電話をかける。しかし少しすると電話を切つてまた心配そうな顔で二人を見た。

「どうしよ、留守電になつてる……で、出ないよ……」

「マジかよ、じゃあまさか、天城はあの中に?……」

「や、やめてよ! きつと他に何か用事とか……」

千枝の言葉に陽介が声を漏らすと千枝は怒鳴り声を上げ、そこに真が気づいたように声を出した。

「そうだ! 里中、天城は確か旅館で手伝いをしてると言つてたよな?」

「あ、そつか! え、えつと天城屋旅館……」

「手伝いって、学校休んでか?」

「可能性はゼロじゃない。俺も先輩にメールで聞いてみる」

真の言葉に千枝は気づいたように頷いて天城屋旅館のアドレスを探し始め、陽介が首を傾げていると真もそう言つて命にメールを打ち始めた。そんな間に千枝も旅館に電話をかける。

「雪子……お願い……」

千枝は心配そうな声を漏らし、真と陽介も祈るような様子を見せる。

「……あ、雪子!? よかったーいたよー!」

そう言つた瞬間千枝の表情が明るくなり、少しタイミングを置いて真の携帯に命からメールが着信する。

「あ、命さんから?」

「ああ、いるつてさ……一応、テレビに映つたのが天城の可能性があるつてメールしておくよ」

陽介の問いに真はそう返し、またメールを打つておく。それを送つた辺りで千枝も電話を切つた。

「急に団体さんが入つて、手伝わなきやいけなくなつたつて。それで、明日もずっと旅館の方にいるつて。そーいや今までも年に一回くらいはこゆことあつたつね」

千枝は心底安心した様子で説明した後少し怒った様子で花村に詰め寄る。

「……って花村く、要らない心配しちゃったじゃん！ てか全然無事じゃん！」

「わ、悪かったって……けど俺らも、そう思いたくなる訳があんだよ」「……どんな？」

千枝の言葉に陽介は悪かったと謝った後そう続け、それに千枝は首を傾げて問う。

「えつと……俺達、マヨナカテレビに映るのはあっち側にいる人だっと思ってたんだ。だってそうだろう？ テレビの中にいるからテレビに映っちゃう。いかにもありそうじゃん？」

「だが天城はこっちにいる……前提条件を間違えているのか、あるいは何か見落としているってことか……」

「ああ。とりあえずどういふことか確かめた方がいいかもな。よし、放課後ジュネスに集合しようぜ。俺、準備して先行ってるな」

陽介の説明の次に真はそう言い、それに陽介が頷いてそう言ったところでこのクラスの担任である諸岡がやってきたため陽介と千枝は慌てて席に戻っていった。

それから放課後、彼らはジュネスの家電売り場に集合していた。もちろん命も一緒だ。そして千枝は真から昨日のテレビの世界で起きたことを詳しく説明していく。

「ま、まあまあ、俺のイタイ体験とかその辺はいいから、な？」

「……そんな話、普通絶対信じないよね。実際にあの中、見てなかったら」

「まあね」

「全くだぜ。で、とにかく中の様子を知りたいわけなんだけど……」

千枝の言葉に命と陽介が頷き、陽介はそう呟いて辺りを見回す。今日に限って客がたくさんやってきていた。

「なんで今日に限って……ってそういや今家電セール中だったけか

……」

「嬉しいような悲しいような、だね」

「なんとかクマ君の話、聞けたらいいんだけど……」

陽介の言葉に命が笑いながら返し、千枝が呟く。と命が思いついたように皆をいつものテレビの前に集める。

「皆、こうやってあくまでこのテレビを下見しているようなフリをして壁を作るんだ。それで、真君が手を突っ込んで呼んでみるってのはどうかかな?」

「あ、なるほど!」

命の言葉に陽介は頷き、真を除く三人で壁を形成。真が手を突っ込み、クマを呼ぶため手招きを行った。

「っ!」

「ど、どうした!?!」

「ば、ばか、声でかいって!」

と、真は突然手を引っこ抜き、陽介が声を上げ、千枝が声を抑えて陽介を押さえる。そして真の手を見るとぎよつとした目を見せた。

「は、歯型ついてんじやん!? 大丈夫?」

「泣けてきた」

「いや泣いてないじやん。もうクマの仕業だなあ」

千枝の言葉に真が白々しく返すと千枝はツツコミを入れた後両手を腰にやってもくと呟く。

「おいクマきち! そこにいでしょ!?!」

「なになに? コレ、なんの遊び?」

千枝が声を潜めて叫ぶとテレビに波紋が広がり、中からクマの声が聞こえてくる。それに陽介が返した。

「遊びじゃねっつの! 今、中に誰かの気配はあるのか?」

「誰かって誰? クマは今日も一人で寂しん坊だけど? むしろ、寂しんボーイだけど?」

「うっさい! けど、誰もいない?……ホントに?」

「ウ、ウソなんてつかないクマ! クマの鼻は今日もビンビン物語クマ!」

「……分かったよ。ありがとう、クマ君」

陽介と千枝とクマの会話の後命がお札を言い、それを聞くとテレビから波紋が消える。それを見届けてから千枝が口を開いた。

「やっぱあたし、雪子に気をつけるよう言ってくる。土日は旅館が忙しいだろうから一人で出歩いたりはしらないと思うけど……」

「僕もなるべく注意しておくよ。旅館なんて人の出入りがかなり多いけど少なくとも不審な動きを取る人物には気をつけておくよう心がけとく」

千枝の言葉の後に現在天城屋旅館に宿泊中の命がそう言い、最後に「流石に追い出されるわけにもいかないから天城さんに四六時中張り付くストーカーみたいな目立つ行動はできないけどね」と締めしておく。それに陽介も頷いた。

「もしかしたら、今夜のマヨナカテレビでまた何か分かるかもしれない」

「ああ。全部勘違いで済むならそれでいいんだが……」

陽介の言葉に真が頷き、それに陽介もまた頷いた。

「今日見たら電話するわ。携帯の番号、教えてくれ」

「ああ」

「真君、後で僕の携帯番号を花村君に送って、僕には花村君の携帯番号送ってくれる？」

「分かりました」

陽介達男三人組はそうやってそれぞれの電番を交換。全員分来た

陽介はよしと頷いた。

「じゃあ、今夜見るの忘れるなよ？」

その言葉に残る三人も頷いて返し、その場は解散した。

それから夜中まで時間が進み、山野真由美の遺体発見現場では、遼太郎達が更なる手掛かりを見つけなるべく捜査を続けていた。しかし、ここ数日の雨のせいもあり、捜査は難航しているのが現状である。

「やっぱこれ以上は出なそうっすね。犯人に直接つながる物証は無し

か……」

透明なビニール傘を差した若い刑事——足立が現場で指揮を執る
遼太郎に話し掛ける。それに遼太郎が首を横に振った。

「まだ殺しと決まった訳じゃない」

「殺しですよ絶対！ あんな遺体、事故死な訳ないですつて！」

「……まあな」

遼太郎の言葉に足立が返し、それに遼太郎も頷いた。

何故亡くなったか警察も掴めていない状況で同じ状態の遺体が二つ。殺しであればまず鉄板で同一犯の連続殺人であるということが遼太郎の見解である。事件当初は山野真由美の不倫相手である生田目太郎、そして生田目の妻である柊みすずの三角関係のもつれによるものと見られたが海外公演中の柊みすずのアリバイは固く通話記録も残っている。そもそも愛人問題がメディアに出たのは柊みすず本人が会見で暴露したから。仮に柊みすず本人が犯人だとしてもこれから殺人を犯すのに自身に疑いが向くような発表はしないだろう。

「旦那の生田目太郎にしても、いくら揺さぶっても何も出てこないしな。奴あここ半年は中央で仕事をしていた。スキヤンダルで最近町に戻ってきたらしいが、事件当時は市外の議員事務所に詰めてた。もちろん山野真由美の死んだ日もだ。泊り込みで作業していたと裏が取れてる。おまけに山野の方にも、失踪前後に生田目と接触した形跡は全く無いときてる……」

「この事件で騒がれたせいで、生田目のヤツ、秘書をクビになってますからねえ。生き残った関係者の中じゃ、むしろ一番の被害者じゃないですか？」

「ああ、確かにな……」

遼太郎の言葉に足立が返し、遼太郎は数度頷いて呟き、数拍おいてからまた口を開く。

「しかも二件目の小西早紀……最大の接点は遺体発見者って所だが、口封じとしちゃおかしい。小西の死は一件目が世に出た後だし、それにあの遺体……隠すどころか見て欲しいって風だ。他の？がりつて言や、ガイ者の山野が死の前に滞在した宿の娘と同じ高校……つてく

「らいか」

「ですねえ……ニュースで見たつすよ、その辺」

「な、なにい!? 宿の話、もう出てんのか!？」

遼太郎の言葉に足立がうんうんと頷く、とその言葉に遼太郎が驚きの声を漏らした後困ったように頭をかく。マスクミの鼻と行動というものか。すると足立がうんと頷く。

「よっし分かった! やっぱあれじゃないすかね? 遺体の状況に、僕らが見ても分からない、小西早紀だけに分かる何かがあったとか! それを口封じしたかったんですよ、きつと!」

「……」

足立の推理に遼太郎は沈黙をもって返し、彼に背を向ける。

「ともあれ、今はガイ者まわりをしつこく洗うしかねえか……」

そこまで言うとは彼は顔を上げる。

「犯人……町の人間だな」

「おっ、出ましたね、刑事の勘!」

遼太郎の呟きに足立が楽しそうに口を出し、危機感の無いその様子に遼太郎が足立を睨み付ける。睨まれた足立は自身の失言に気付き、慌てて姿勢を正した。

一方天城屋旅館、命は事件について考えながら従業員の邪魔にならない程度に旅館内を散歩しつつ怪しい人間がいないかチェックしていた。とりあえず今は少し従業員が忙しそうに走り回っているが怪しい人間はいない、それなのに命の表情は険しかった。

(……おかしいな、僕結構歩いてるのに……天城さんが見当たらない……)

命はそこまで考えると足を止める。まさかと最悪の予測が頭をよぎる。それを考えると命は辺りを見回して手近な従業員に声をかけた。

「あ、あの、すいません。天城雪子さん、見かけませんでしたか?」

「え? 雪ちゃんを?……どうしてでしょうか?」

命の問いに従業員は僅かなり怪しむ様子を見せながら尋ね返し、それに命は笑みを見せながら言った。

「ああ、僕里中千枝さんの知人で、千枝さんが心配していたと伝えたいのですが……」

「ああ、なるほど……そう言われてみれば見当たりませんね……会ったらそれを伝えておきましょうか？」

「はい、お願いします」

命の言葉に従業員はそう言い、それに命が頷いて返すと従業員は歩き去っていく。その後姿が消えていくのを見届けてから命は頭をかいた。

(くそ、嫌な予感がする……)

心中でそう呟き、これ以上部屋の外にいたら怪しまれる可能性もあるためか彼は足早に部屋に戻っていった。

時間が過ぎて午前0時、マヨナカテレビにまたしても映像が映る。

「こくんばくんわ〜♪」

「……は？」

しかしテレビに映ったものに真は目を点にした。

「え〜っと、今日は私、天城雪子がナンパ、逆ナンに挑戦してみたいと思いま〜す」

洋風のドレスを着た雪子がマイクを持ってリポーターのように振る舞っている。どこかのバラエティ番組のような構成に、性格が豹変したかのような雪子の立ち居振る舞い。画面に映る雪子が、楽しそうに古城の中へと去って行った姿を最後に映像が終了、テレビは消える。しかし、真の脳はさっきの事態を理解することに時間を要していた。すると突然携帯が鳴り出し、真は我に返ると電話に出た。

「お、おい、見たか今の!! 天城だよな、顔本人だったし、つか名乗ってたぜ!! けど言ってること、おかしくなかったか!? しかもなんかバラエティ番組みたいな……なんだこれ、今までのもこうだったのか? どうなってるんだ一体……」

「落ち着け。花村、天城の番号知ってるか？」

「い、いや、知らねえ。そ、そうだ、俺里中に連絡して、里中から天城に連絡してもらおう！」

「ああ。俺は先輩に連絡を取ってみる！」

「頼む！ 明日日曜だし、朝一でジュネスに集合するよう伝えてくれ！」

「分かった！ 切るぞ」

真と陽介はお互い僅かなり動揺しつつも冷静に連絡を取り合い、真は陽介との通話を切るとそのまま命に電話をかける。とワンコールで命が出た。

「先輩、マヨナカテレビ……」

「分かってる。くそ、不覚だった……でも怪しい人なんて見かけなかったし気配も感じなかったのに……」

真の言葉を遮って命はそう言い、電話口でも分かるくらいに悔しそうな声を漏らす。

「つと、天城さんだよね？ さつき従業員に聞いた時、見かけないって言ってたんだ」

「やっぱり……とりあえず、花村が明日朝一でジュネスに集合するよう伝えてくれたって」

「分かった。電話切るね」

「はい」

真と命はとりあえず用件のみを手短かに話すと電話を切り、真は明日に備えるためすぐ布団に向かうと眠りについた。

それから翌朝、早くに目が覚めた真は身支度を調べると居間へと降りる。

「あ、おはよ」

と居間には既に菜々子が座っており、真は驚いたように彼女の方に近寄った。

「おはよう。早起きだね」

「お父さん、早おきだったから、いっしょにおきた。かえり、おそいつ

て」

「そ、そうか……」

菜々子は一人でジュースを飲んでおり、遼太郎は今日も早くから捜査に出掛けたようだ。つまりここで真まで出かけると菜々子は家に一人になってしまう。しかしこれからもしかしたら、いやまず間違はなくテレビの中に行くことになるだろう。そんなところに菜々子を連れて行くわけにもいかない。真は葛藤を始めていた。

「出掛けるの？」

するとそんな彼の様子に気づいたのか菜々子がそう言い、真は驚いたように菜々子の顔を見る。

「るすばん、できるから」

菜々子はそう言っていてリモコンを使いテレビの電源を入れる。とちようと天気予報が流れており、今日の稲羽市は快晴だそうだ。

「晴れだって。せんたくもの、ほそうっと」

「……すまない、菜々子ちゃん。お礼、と言っても変かもしれないけど今晚はハンバーグ作ってあげるよ。じゃあ、行ってきます」

「うん、行ってらっしゃい」

真はすまなそうに言った後少し重い足取りで家を出て行き、ジュネスへと向かう。とその途中で命から電話がかかってきた。内容は「ごめん、ちよつと遅れちやいそう！」とのことだ。

ジュネスへと到着した真は待ち合わせ場所のフードコートで陽介と千枝がやってくるのを待つ。それから暫くして陽介が後ろ手に何かを隠し持つてやってきた。

「わり、お待たせ。バックヤードから、いーもの見つけてきたから。見てみ、どーすかコレ！」

陽介はそう言っ隠していたものを真に見せる。右手に持っているのは刀、左手に持っているのは鉞のようだ。それに真は目を細める。

「いくらペルソナがあるからって、武器も無しじゃ心許ないからな。ゴルフクラブも折れちまったし」

「そ、それ、どうしたんだ？……」

「ジュネスのオリジナルブランド、刃はなし。んでお前、どっちにする？」

陽介の言葉に真が尋ねると彼はふふくと鼻を鳴らして刀と鉈を真の前に突き出し、それに真は心なしか顔を青くしながら首を横に振った。

「いや、今はいらない……」

「まあそう言うなって、いざって時絶対助かるから！」

「そ、そうじゃなくって……今人前だから……」

陽介は武器を持って得意げにしており、真は慌てて辺りを見回す。完璧に注目されているがテンションがあがっている陽介は気づいていない。

「でもって俺は……あ、意外に両方ってありかもな。こ、こんな感じとか？ それともこうか?! 逆にこうとか!」

「バ、バカ振り回すな! 早く下ろせてか元あった場所に置いてこい!!」

陽介は刀と鉈を振り回し始め、真は慌てて腕を押さえようと立ち上がる。するとそこに巡回中の警官が通りがかり、その光景を目撃する。

「挙動不審の少年二人組を発見。刃物を複数所持、至急応援求む」

警官は無線で応援を呼び、その声が聞こえた陽介はギクリとして慌てて背後に模造刀を隠す。しかし既に警察官に見つかっているため、意味がない悪あがきだ。

「はっ……あ、や、ちよっ……」

「ふ、二人組って俺も!?!」

陽介は慌てたように声を漏らし、真はさつき聞こえてきた言葉を思い出すと声を上げる。

「いや、いやいやいや、何でもないっすよ。これ別に、万引きとかじゃなくて……や、疑ってんのはそこじゃねえか……て、てか別に怪しくないっす! あーと俺ら刃物マニアっていうか、あ、それもアブナイ話ですよ、えへへ……」

陽介は混乱しているのかそんな事を言い出し、真がため息をつきさ

てどうするかと考え始めると警官が口を開いた。

「とにかく詳しい話は署で聞くから、それ床に置きなさい。手は頭の上！ はーやーくー！」

その言葉に真は増援がくるんだし無駄な抵抗はそれこそ面倒ごとになるかと諦めて警官の指示に従う、が陽介は言い訳を続けようと刃物二つを前に突き出してぶんぶんと首を横に振った。

「や、でもこれは……」

「な、な、なんだこのヤロー！ やろうっちゆうの!？」

しかしそれを抵抗と見なしたのか警官はそう言いだし、真は心中で頭を抱える。まあ絵的に見ても頭を抱えているように見える凶なのだが。その直後巡回していた警官が呼んだ応援が現場に到着、彼らは仲良く警察への連行とあいなつてしまった。

「はあ、はあ、はあっ……」

一方ジュネスまで走ってきた千枝は入り口で足を止めると呼吸を整え始める。すると彼女は人だかりを発見し、そっちの方に走っていく。

「ちよつとすいませーん……つてええっ!？」

そしてその人影の注目先——パトカーに乗せられている真と陽介を見ると声を上げ、パトカーが発進すると千枝は慌ててその後を追って走り出すがあつという間に置いてかれてしまう。

「ど、どうなつてんの?……」

「あれ? 里中さん」

千枝が呆然として声を漏らす後ろからブォーンとエンジン音が聞こえ、そんな声も聞こえてくる。それに千枝が振り返ると同時にその音を立てていたバイクに乗っている男性——命もヘルメットを外した。なおジャケツトを前を閉めて着ており黒い学生服風のズボンを穿き、その背中には中に何か入れてるらしいリュックを背負っている。

「どうしたの?」

「そ、そそそれが椎宮君と花村が警察に!!」

「はあ？……な、何したんだあの二人……」

命の言葉に千枝はさっきの状況を説明、それに命は頭を抱えて眩いた。

「知りませんが、とりあえず警察署まで行かないと！」

「あーもーしゃーないな。じゃあ乗って！ はいこれ予備のヘルメット！ あ、それとこれ代わりに背負ってて」

騒ぐ千枝に命はそう言って千枝に予備のヘルメットを投げ渡し、千枝もそれを被り、さらに渡されたリュックを背負うと慌てて命の後ろに乗る。

「しつかり背中に掴まっててね！」

「は、はい」

命はそう言ってバイクを走らせ、千枝はそのスピードに慌てて命の背中にしがみついた。

（うわ、思ってたより背中大きいし、結構たくましいかも……）

「つと、これガソリン切れかけだから先に補充させてね……あれ？

どうしたの？」

「わっ!? あ、あー、なんでもないっす！」

「ふくん……まあいいや。えーつと、たしかガソスタ近くにあったはず……」

千枝は命の背中や腕を回したことで分かる腹筋の手触りについてそんな事を考えてしまい、命がガソリン残量に気づいてそう言い、気づいたように千枝に問いかけると彼女は慌ててあははと笑い誤魔化する。それに命は首を傾げながらもまあいつかと結論付けるとガソリン補充のためガソリンスタンドを探し始めた。

「お前、こういうバカをするタイプには見えなかったがな」

警察署。ここに連行された真と陽介は偶然いた遼太郎に説教をくらっていた。

「今、色々起きてるのは知ってるんだろ？ あちこちに警官が配備されてる。つたく……俺が偶然いなきや、補導歴がついてたところだ」

「本当に申し訳ありません」

遼太郎の注意に真は深く頭を下げる、と陽介が首を横に振った。

「つ、椎宮は悪くありません！ 俺がジュネスのバックヤードで見つけて、かつこいいからついいい気になって、椎宮は俺を止めようとしてくれてたんす！ だからその、ごめんなさい!! そんなで頼んます！ 椎宮をあんま怒らないでやってください！」

陽介はそう言った後深く頭を下げて謝罪と頼み込みを行い、それに遼太郎は頭をかく。

「こつちあ今、事件で忙しいって言うか……色々とデリケートなんだ。ニュースで知ってるだろ？ これつきりにしろよ……じゃあ、帰ってよし」

「すみませんでした！」

遼太郎の言葉に対し二人は最後にもう一度頭を下げてから入り口の方に歩いていき、その途中で聞こえてきた刑事達の会話——雪子が行方不明というものを聞くと彼らは顔を見合わせる。

「おつとー……つと、ゴメンね」

と、彼らの前にコーヒーを持った若い刑事——足立が現れ、陽介が口を開いた。

「あ、あのっ！ ちつと訊いてもいいですか？ その、天城のやつ……あ、つか天城屋の天城雪子のことなんですけど……もしかして、居なくなっただんですか？」

「え、あ、うーんとね……言っつていいのかなあ？」

陽介の言葉に足立は困ったような声を漏らし、少し考える様子を見せる。

「まあ、天城さんと友達なら……特別だよ？」

それから足立はそう前置きを入れてから話し始めた。

「天城さん、昨日の夕方くらいから急に姿が見えなくなっただって、ご家族から。土曜だから旅館の人はキリキリ舞いで、夕方頃は誰も天城さんを見なかったって。あつ、でもまだ事件って決まったわけじゃないから！ ただ、失踪した人が霧の日に……なんてのが続いているから、署内も過敏になつて……あ、君達何か聞いてない？ 本人が、例え

ば辛そうだったりとか」

「え？……辛そう？」

「ほら、一件目の殺人の前、例の山野アナが天城屋に泊まっててさ。山野アナ、接客態度のことで女将さんに酷い言葉浴びせたみたいなんだよね。で、女将さんがストレスで倒れちゃって。ほら、天城さん、女将さんの娘なわけだし、まあその……色々思うじゃない？」

その言葉に二人は？マークを頭の上に浮かべるような顔を見せ、足立は二人に問いかけた。

「天城さん、家出とかほのめかしたりしてなかった？　じゃないと、何か都合悪いことあって隠れてるとか言ってる奴もいてさ……」

「……天城を犯人だと思ってるやつもいる。って言いたいんですか？」

足立の言葉に対し真は少しむっとしたような様子で問いかけ、それに足立はぎよつとした様子を見せる。

「い、いや、そういう意見もあるってだけで——」

「足立い！　部外者と立ち話してんな！　コーヒーまだかよ!？」

「——は、はい！　すみません！」

足立の言葉を遮って遼太郎の言葉が聞こえ、足立はすぐそれに返すと彼らにすまなそうな顔を見せた。

「ごーめん、今のなし！　忘れて！」

そしてそういうやいなや彼は走り去っていき、真と陽介も入り口近くまで行くと陽介が口を開いた。

「なあ、さっきの刑事、まさか天城のこと……」

「あの人はどうとかは分からないが……まずい流れではあるな」

陽介の言葉に真は首を横に振ってまずいといいたげな表情で返す。

「あつ、いた！」

「もう、何やってるのさ？」

そこに聞こえてきた千枝の焦った声と命の呆れた声、それに真が苦笑いを零す。

「ちよ、ちよつと誤解とアクシデントがありました……」

「それより天城だよ！」

「えっ!? もう知ってるの!? 携帯に何度かけても繋がらなくて……
家行ってみたら、雪子、ホントに居なくなっちゃって……!」

真の言葉に続いて陽介が言い、それに千枝が声を漏らすと陽介は額を押さえた。

「……やっぱ向こうに行くしかないか……それより、警察が妙なこと
言ってる。天城が『都合悪いことがあって隠れてる』とか……天城
のお袋さん、山野アナにイジられて倒れたらしい。動機があつて、し
かもモメた直後に山野アナ死んだから……!」

「何よソレ! 雪子が犯人って流れ!? んなわけないじゃんつ!!」

「そんなことは分かってる! だがこのままじゃまずい……とにかく
く、一刻も早く天城を助けよう!」

陽介の言葉に千枝がかつとなつたように声を上げ、それを真が一喝
して返した後そう続ける。それに千枝はうんと頷いた。

「あ、そ、そうだよね……えっと、どうしたらいいの?」

「警察こんなじゃ、やっぱ俺らが行くしかないだろ!」

「あたしも行く!」

千枝の言葉に陽介が言う、と千枝がそんな事を言い出し、三人は驚
いたような目で彼女を見た。

「行くからね! 絶対、雪子助けるんだから!」

「大丈夫か、お前……けど参つたな、丸腰なんだよ……また何か武器に
なりそうなもの見つけないと……!」

「武器?……あたし、知ってるよ!」

千枝の言葉に陽介は不安げに返し、それからそう漏らすと千枝はそ
う言った。

「とにかく、一緒に来て!」

そういうやいなや千枝は走り出し、残る三人もその後を追って走っ
ていった。

それから四人がやってきたのは稲羽中央商店街にある【だいだら】
という店。

「ほら、ココ!」

「な……何屋?」

「一応、工房？……金属製の色んな、刀とか売ってんの」

千枝の言葉に陽介が唾然とした様子で尋ね、千枝が疑問系で説明する。まあ、普通店内に所狭しと剣や槍などの武器や鎧などの防具が並べられている店なんて見たことないだろう。真も当然のこと流石に命も驚きに閉口してしまっている。陽介が「なんでこんなところ知ってる!?! まさかカンフー映画の見すぎで!?!」とか叫び、それに千枝が「男子が言ってた!」と叫び返してるのを見ながら真は命の方を向いた。「せ、先輩……これ、銃刀法違反にならないんですかね?」

「さ、さあ?」

真の言葉に命も苦笑いをしながら返して武器を調べる。

「まあこの出来なら護身くらいならなんとかなるよ、きつと……(……このが使えなかつたら最悪桐条先輩に相談して黒沢さんのツテとか……)」

命は武器を調べた次に彼らの武装プランを考え始め、その間に千枝は手近な鎧に近づく。

「あ、これとか強そう……あ、でも重いかな……」

「なあ里中、やっぱ危ねえって……気持ち分かるけど——」

「分かってない!!」

千枝が鎧を見ながらそう言っていると陽介が説得を試みるが、それに対し千枝が叫んで陽介の言葉を遮った。

「分かってないよ……雪子、死んじやうかもしれないんだよ?……あたし、絶対行くから!」

千枝はもはや意地になっており、真は困った様子で隣の命を呼んだ。

「先輩、どうしましょう?」

「あ? え、えーつと。ああ里中さん? そうだね……僕の知識がこっちのシャドウにも当てはまるのなら、シャドウは基本ペルソナ使いしか襲わないはずだし……分かったよ。じゃあ……僕達の後ろにいる、僕達の指示に従う。これを条件にしてなら、まあ荷物持ちとして採用するよ」

真の言葉に命は少し考えて二つの条件を提示して荷物持ちとして

採用すると伝える。それに千枝はぱあつと顔を輝かせた。

「はい！ 任せといてください！ 運動神経なら負けません!!」

「言つとくけど、戦わせないよ？ シヤドウはペルソナ使いにしか倒せないんだ。君はあくまでお荷物であることを自覚してよね？ 身体を守る防具だけここで準備すること」

「う、は、はい……」

命は少し辛らつな物言い、千枝に言い、それに千枝はこくと頷いた。それから命は店主の前に進み出た。

「すみません」

「あぁ？」

その言葉に低い声で返す店主——壮年の男性で禿げ上がった頭に髭と繋がるほどに伸ばしたもみ上げ、それよりも特徴的なのはその顔面にX字を描く派手な刀傷だ。店主の仏頂面もあいまってかなり恐ろしく思える。それに直接の相手になっていない真、陽介、千枝ですら大小違いはあるが僅かなり怯えている様子を見せている。

「……ここに置かれているものは商品として販売されているのでしよ
うか？」

「……おう。ここにあるのは全部俺の作ったアートだ。おめえら、さつきから何かぼそぼそ喋ってたが、もしうちのアートを喧嘩に使おうってんなら……」

しかし店主の顔に命は全く動じずに尋ね、それに店主は頷いた後その目を鋭く研ぎ澄ませながら尋ね返す。それは普通の相手なら間違はなくすくみあがるものだが命は僅かな恐怖心すら見せず、真剣な目で真つ直ぐに店主の目を見返しさらに不敵な笑みまで浮かべる。

「いえ、まさか。ただ……人助けに必要なんです」

「人助けか……まあ、嘘じゃあなさそうだな……ふん、買うんなら好きにしろ」

「はい。ありがとうございます」

命の言葉を聞いた店主はうんと頷いて返し、それに命は軽く頭を下げて返した。

「じゃあ皆、それぞれ武器を探して……僕も、ちようどよかった」

命の言葉に三人は頷いて武器、千枝は防具を探し始める。千枝は防具のみと言われているし真は剣道部時代に使い慣れているという両手剣に決めている。陽介はそんな様子を見て不安になったか命に話しかけた。

「あの、命さん、俺どういう武器を……」

しかし陽介の言葉は途中で途切れる。命はかなり真剣な目で片手剣を品定め——剣を一本取って鞘から軽く抜いて刃を見、納得いかないうちに首を傾げると剣を戻し、また別の剣を取つての繰り返し——しており、どうにも声をかけられる雰囲気ではない。と固まっている陽介の後ろから真が話しかけた。

「どうした、花村？」

「あ、ああ……な、なあ椎宮。俺の武器も見立ててくんね？」

「……と言われてもな……あ、この鉈なんてどうだ？ ジュネスでも振り回してたろ？」

「うーん……ま、使ってみるか。よし、んじやせつかくだし二刀流でいかか」

真が問いかけると陽介がそう頼み、それに真は困ったように頭をかいた後、ふと目に入ったものを薦めるノリで鉈を薦め、それに陽介も頷いてどうせなら二刀流でいくかと鉈を二本取った。

それからそれぞれ個別で清算していく。武器だけならともかく防具として楔帷子を一人一つ買ったので意外な出費となっている。

「ああそうだ。青髪の兄ちゃん、こいつをおまけにやるよ」

「竹刀袋？……なるほど、ありがとうございます」

店長が渡してきた竹刀袋に命は不思議そうな目を見せるがすぐにその使い道に気づくとお礼を言う。片手剣もこれに入れば少しは目立たなくなるだろう。と店長はにっこり笑った。

「それと、もしもつとイカしたもんが欲しかったら素材を持つてこい。言つとくがわしはありきたりなもんは好かん！ 出所がわからねえような代物の方が燃えるからな。そういうものを持つてきてくれれば新しいアートを作つてやる」

「……」

店長の言葉に命は僅かに驚いた様子を見せた。二年前の戦いの間にもエリザベスの依頼でシャドウの一部を取ってきたりしていた。こっちでもシャドウの一部、素材なら使えるかもしれない。

「……覚えておきます」

命はにこりと微笑んでただそうとだけ言う。と次に陽介が気づいたように声を出した。

「つか、俺らここで武装しちゃったらまた警察連れてかれるよな？」

かといってジュネスん中、こんな物騒なモン提げて歩けないし……」

「制服着ちゃえば良くない？ 上から。結構分かんないと思うよ？」

「しようがない。それで行こう……んじゃさ、一旦解散して準備しようぜ。夕方のセール終わないと店も混んでるし、警察いたら三人一緒じゃ目立つだろ」

「分かった。じゃあ後でジュネスのフードコートに集合しよう」

高校生三人組もそう話し合うと命が店から出るよう促し、四人は店から出て行った。

それから四人は一旦解散ということになり、真と命は同じ方に歩いていく。とだいたら、隣の単なる道端に突如青い奇妙な扉が出現、それに真はぎよっと目を見開いた。しかし他の人には見えていないのか、誰もその不可思議な扉に意識が向かないらしい。たった一人、その扉の方を見ている命を除いて。

「先輩、見えるんですか？」

「……いや、真君と同じ光景が見えてると思えないね。多分真君、青い扉が見えてるでしょ？」

「は、はい」

「僕には青いもやもやがぼうつと見える程度なんだ」

「そうですか……」

二人はそう話し合う。と真の頭に声が響いてきた。

「ついに始まりますな……では、しばしお時間を拝借すると致しましょうか……」

その言葉に呼応するように契約者の鍵が光を放ち始める。

「先輩……」

「……行って。君にとつて大事なことになるはずだ」

真の言葉に命は真剣な目で言い、真はいと頷くと扉の前に歩き、その扉の鍵穴に鍵をさす。それと共に彼の視界が白い光に覆われていった。

「お待ちしておりました」

それから気がつくのと、そこはベルベットルームの中だった。

「あなたに訪れる災難……それは既に、人の命を奪い取りながら迫りつつある……ですが恐れることはございません。あなたは既に抗うための力をお持ちだ……いよいよそのペルソナ、使いこなす時が訪れたようですな……フフ」

イゴールはそこまで言うとなつと、と笑みを零し、次にマーガレットが口を開く。

「あなたのペルソナ能力はワイルド。それは正しく心を育めば、どんな試練とも戦い得る切り札となる力……私共も、そのためのお力添えをして参ります」

「私の役割……それは、新たなペルソナを生み出すこと。お持ちのペルソナカードを複数掛け合わせ、一つの新たな姿へと転生させる。言わば、ペルソナの合体でございます」

イゴールはそこまで言うとなつと一旦言葉を置き、続けた。

「あなたは一人で複数のペルソナを持ち、それらを使い分けることが出来るのです。そして敵を倒した時、あなたには見えるはずだ……自分の得た可能性の芽が、手札としてね。時にそれらは、ひどく捉え辛い事もある……しかし、恐れず掴み取るのです。カードを手に入れたなら、ぜひともこちらへお持ちください。しかも、あなたがコミュニケーションをお持ちなら、ペルソナはさらに強い力を得ることでしょう」

イゴールはそこまで言い、言葉をまた一旦置くと念を押すように手を真の方に差し伸べてきた。

「あなたの力は、それによって育っていく。よくよく心しておかれるが良いでしょう」

(つまり、今俺が持っているコミュニティ、陽介との魔術師のコミュニティによって魔術師のペルソナを生み出す時、さらに強い力を得るというわけか……)

イゴールの説明を真はすぐさま理解し、そう記憶に入れておく。とイゴールがマーガレットの方を向き、マーガレットは右手に持つ分厚い本を真に見えるように立てた。

「右手に見えますのはペルソナ全書でございます。お客様がお持ちのペルソナを登録されることで、それをいつでも引き出せる仕組みでございます。ご利用の際は、私にお気軽にお申し付けください」

マーガレットはそう説明すると一旦言葉を置いた。

「それと、もう一つ……今宵は、あなたの旅をお手伝いさせていただく、新しい住人をご紹介します」

彼女がそう言うところまでようやく真は気づく。イゴールの右隣に青い帽子を被った愛想のない少女が座っている。

(……ん？ どこかで見たような……)

真はその姿を見て首を傾げる。がその少女は真の方を見ようともしていないかった。

「……マリー？」

「分かってる。聞こえてる。よろしく」

「あ、ああ……」

マーガレットの言葉にマリーと呼ばれた少女はそう単語を三つ並べて挨拶を行う。それに真は頷いた後、マリーの方を見た。

「……どこかで会わなかったか？」

「……え？」

その言葉にマリーは驚いたように真の方を見た。

「ああ、そっか。そういうえば会ったかも。だから見たことあるんだ。ふーん……」

しかしマリーはそうとだけ言うともたうつむき、代わりにとうとうにマーガレットが口を開く。

「失礼いたしました。こちら、マリーでございます。彼女の魂は未だ幼く……」

「うるさい！ 余計なこと言わないでよ！」

「……………覧の通りでございます。…無礼があるかもしれませんが、見習いのご理解いただいて、どうかお許しください」

「分かった」

マーガレットの言葉にマリーが叫んで口を挟み、マーガレットは僅かに困った様子でそう続けると真は彼女の願いに頷いて返す。

「マリーが取り扱うのはスキルカードでございます。カードを用いることで、お客様のペルソナに新たな力を与える仕組みでございます。また彼女は、お客様がここではない世界と絆を結ぶための手助けとなるでしょう」

「ここではない世界？」

「こちらは追ってマリーより、ご連絡させていただきます。ご利用の際は本人にお気軽にお申し付けください」

マーガレットのよく分からない言葉に真が声を漏らすとマーガレットはそう続ける。そしてその次にまたイゴールが口を開いた。

「フフ、覚えておいでですか？ 以前私は申しました。あなたの運命は節目にあり、謎が解かれねば未来は閉ざされるやも知れない……とね」

「ああ、言ってたかな？……………で、どういう意味なんだ？」

「言葉の通りでございます。戦いに敗れる以外にも終わりはありません……ゆめゆめ、お忘れになりませぬよう」

「……………気をつけておく」

イゴールの言葉に真は頷いて返し、イゴールは結構、と頷いた。

「次にお目にかかります時は、あなたは自らここを訪れる事になるでしょう。フフ……………楽しみでございますな……………では、その時まで。…きげんよう」

その言葉を最後にまた真の視界が白く染まっていく。

「……………あ」

「お帰り」

気が付くと、真は先ほど現れた扉の前に立っており、彼が声を漏らすとすぐ隣に立っていた命が声をかける。

「先輩、俺……」

「心ここにあらずって感じにぼーっと突っ立ってたようだったよ。僕がベルベツトルームに行ってた時と同じだね」

真の言葉に命はさっきの真の状態を説明し、そう続けた後に「まあ僕も自分の状態は結生とかに聞いたただけけど」と付け加えておく。それに真がまさかというような表情で口を開いた。

「ってことは先輩も……」

「そう。ワイルド能力の説明は受けたかな？ 僕もその能力の持ち主さ……と言つても、今は花村君のシャドウとの戦いで見せたオルフェウスしか使えないようだし、ベルベツトルームに行けない今じゃはたしてその力が上手く使えるのやら……もしかしたら最悪、足手まといは僕になつちやうかもね……」

真の言葉に命は頷いて説明をし、思案顔で呟く。それに真がなんともいえないような表情を見せると命はふっと微笑んだ。

「なんちゃってね。ワイルドが使えなくなっても一年間の戦闘経験は消えないよ。ぼつちりアドバイスやサポートしてみせるさ」

「はい、お願いします」

「じゃ、僕達も一旦解散。遅れないようにね」

「はいー」

二人はそう言い合うと分かれ道でそれぞれ別れていった。

それから少し時間が過ぎ、メンバーはジュネスフードコート、ついさつき真と陽介が警察に連行される前にいた場所へと集合する。命の服装は変わっていないが高校生組は全員制服着用だ。ついでに真はタイムセールに立ち寄って今晚のハンバーグの材料を買っていたりする。

「制服、日曜だから、ちょっと目立つな。もうじきタイムセール終わるから、人も少なくなるはずだ……そろそろ行くか」

「ああ……里中、先輩が言ってたことだけど、俺達から離れるなよう」

「……分かつてる」

陽介の言葉に真は頷いた後千枝に念を押し、千枝もしぶしぶといった感じで頷く。それから彼らはテレビの世界に移動、そこにいるクマを見た千枝は驚いたように目を丸くする。

「わ、ホントにあん時のクマ……」

「なにやってんだ、お前？」

千枝が驚いた様子で声をあげ、陽介が問う。クマはうんうんと困って唸っているような動作をしているのだ。

「見て分かんクマ？ 色々考え事してるクマ。それでクマはこんなにクマってるのに……あ、ダジャレ言っちゃった。うぷぷ……」

クマは悩んでいると思ったらダジャレを言って自分で笑い出し、陽介ははあと息を吐くと真が尋ねる。

「それで、何か分かったか？」

「まあ考えても無駄かもな。お前、中カラツポで脳みそもねえだろうし」

真の言葉に続いて陽介がからかうように言う、とクマが陽介の前に走り寄ってだんだんと地団駄を踏んだ。

「シツケイな……けど、たしかにいくら考えてもなーんもワカラヘンがねっ！」

「ウツサイよあんたら！ くだらないこと言ってる場合っ!! クマきち、昨日ここに誰か来たでしょ!？」

「なんと！ クマより鼻が利く子がいるクマ!？」 お名前、何クマ？」

「お、お名前?……千枝だけど。それはいいから、その誰かの事を教えてよー」

千枝の言葉にクマは驚いたように声を上げた後名前を尋ね、千枝はとりあえず名乗った後そう続ける。それにクマはうんと頷いた。

「たしかに昨日、キミらとお話したちよつと後くらいから、誰かいる感じがしてるクマ」

「天城なのか!？」

「クマは見えないから分からないけど、気配は向こうの方からするクマ。多分あっちクマ」

「あつちね……皆、準備はいい?」

クマが一つの方を指差すと千枝が言い、それに三人が頷くと千枝は一人飛び出し、慌てて三人+クマもその後を追いかけていく。それから彼らがしばらく進んでいくとそこには古城が聳え立っていた。

「な、何(なに)……お城!?!」

「まさか、昨日の番組に映っていたのはここなのか?」

「……クマ君、あの真夜中の不思議な番組は本当に誰かが撮ってるんじゃないんだね?」

千枝の言葉の後に真が口元に手をやって眩き、その次に命がクマの方を見て尋ねる。それにクマが首を傾げた。

「バングミ?……知らないクマよ。何かの原因で、この世界が見えちゃってるかも知れないクマ。それに、ここにはクマとシャドウしかないし、ここは初めっからこういう世界クマ!」

「初めからこういう世界って、それがよく分かんねえんだっつもの!」

「じゃあキミ達はキミ達の世界のこと、全部説明できるクマ?」

クマの言葉に陽介が声を漏らすとクマは反撃、陽介はうぐつと声を漏らした。

「とにかくそのバングミってものことはクマも見たことがないから分からんクマ」

「うん、そう言われてみればそれもそうだよな」

「でも、ホントにただこの世界が見えてるだけなの? だってそもそも雪子が最初に例のテレビに映ったの居なくなる前だよ? おかしくない? 大体、あの雪子が逆ナンとかってありえないっつもの!」

「逆ナン?」

クマの言葉に命が頷き、千枝がそう言って最後にイラついたように叫ぶ。とその最後の言葉にクマが声を漏らした。

「たしかに、普段の天城が逆ナンなんて絶対言わないよな……あつ!」
千枝の言葉に陽介が賛同の声を出し、それから気づいたように声を上げた。

「もしかして、前に俺に起こったことと何か関係あるのか!?!」

陽介の言葉に真と命もはっとしたような表情を見せ、それからクマ

が口を開いた。

「まだ色々と分からないけど、キミたちの話を聞く限りだと……そのバングミっての、その子自身に原因があって生み出されてる……って気がするクマ」

「雪子自身が、あの映像を生み出してる？……あーも、どういうこと？
ワケ分かんない！」

クマの言葉に千枝が声を上げ、真と陽介も考え込む様子を見せる。
「下手な考え休むに似たり、だよ。まだ情報が少ない、そんな状態で考えてても答えが出るとは到底思えないよ。まずは落ち着こう」

命の言葉に真と陽介は頷いて返す、が千枝は聞いていない様子で古城を見上げた。

「ねえ……雪子、このお城の中にいるの？」

「聞いている限り、間違いないクマね。あ、でき、逆ナンって……」

「ここに雪子が……あたし、先に行くから！」

クマの言葉を聞くや否や、千枝はそう言っただけで一人飛び出して城の中へと入って行ってしまふ。

「お、おい里中！ 一人で行くなつて！」

思わず陽介が声を上げるが千枝は聞く耳持たずに走り去っていく。

「……あ！ お城の中はシャドウがいっぱいクマ……オンナノコひとりには危ないカモ……」

「な、マジかよ！ それ先に言えよ！ くそ、里中を追うぞ！」

「ああ！ 先輩、行きましよう！」

「うん……まったくあの子は、シャドウをなんだと思ってるんだ！」

クマの言葉に陽介が焦ったように言い、真も命に促すと命もうんと頷きどこか怒った様子で返す。と次にクマが真に近寄った。

「そだ、センセイ！ これを持っていくクマ」

「これは？」

「クマが一人で集めたクマ」

クマが渡してきたものに真が尋ねるとクマはそう言い、それに命が口を開いた。

「ありがたく使わせてもらいなよ。でも時間が惜しい、僕もシャドウ

との戦い方は実戦で叩き込むから、二人とも覚悟してね？」

「は、はい！」

命はニヤリと不敵な笑みを浮かべながらそう言い、それに真と陽介はびくりとしながら返事をする。

「よし、じゃあ行こうか！」

命はそう叫ぶと共にばさあつとジャケットを脱ぐ。とその下には月光館学園の制服が着られており、しかも左腕には「S. E. E. S.」と書かれた腕章があった。

「せ、先輩、それは？……」

「やっぱシャドウをやりあうならこっちの方が気分が出るからね。送ってもらったんだ。まだ卒業したてだし、違和感ないでしょ？」

「え、ええ……まあ」

「あと武器もだいだら。で買った剣以外にも持参してたんだ」

命のふつと笑いながらの言葉に陽介が頷き、命はそう言うとりユックから所謂オールフィンガーグローブのようなタイプのナックルを取り出して両手につけ、左腰に剣の鞘を装着。さらに良く見るとベルトは改造され、ダーツの矢が装填されている。

「さて改めて、行くよー！」

「は、はい!!」

命の改めての号令に二人が声を上げて返し、四人は千枝を追いかけて古城に飛び込んでいった。

第七話 英雄と友達と……

天城雪子がテレビの中に入れられてしまい、その影響によってか出てしまった古城。そこを調べにやってきた真と命、陽介にクマ、そして雪子が心配だから一緒に行くと言っただけでついてきた千枝。その千枝が心配心からか独断専行してしまい、残る四人も古城に乗り込んだ。

古城の中は床がチエス盤のような模様になっており、それを除くと絨毯もカーテンも赤一色で彩られていた。

「チエチャンは、まだそんなに遠くには行ってないクマ」

「あいつ、ひとりで先走りやがって……くそつ、行こうぜ！」

「うん……でも、下手に動いてシャドウから不意打ちをくらうと危険だ。焦ったらいけないよ」

少し離れた所から周囲を探るクマからの情報に、陽介がもどかしげに話すと命も領きつつ二年前の戦いを思い出しながら続けた。すると彼らより離れた後ろを走っているクマが口を開く。

「クマがサポートするクマ！ クマはシャドウの匂いを感じられるし、攻撃もなるべく覚えるよう頑張るクマ！」

「ああ、心強い。頼む」

「分かったクマ。シャドウがセンチ達に気付いて凶暴になってるクマ。シャドウより先にこちらから攻撃を仕掛けるクマ！」

「ああ、分かった……つと、そう言ったそばからシャドウ発見！」

クマと真はそう話しつつ、真がそう叫ぶとたしかに道の先からこの前真が戦ったシャドウ——虚栄のアブルリーが三体近づいてくる。それを見た陽介も領いた。

「よし、ペルソ——」

「待った！」

しかしペルソナを召喚しようとするのを命が制し、陽介がずっこけると命はベルトからダーツの矢を一本引き抜いて振りかぶり、三体いる虚栄のアブルリーの内真ん中の一体目掛けて投擲。

「キイイイイツ!？」

それがシャドウの長い舌に突き刺さって虚栄のアブルリーが悲鳴を上げると、ダーツの投擲を終えた直後走り出した命の、走った勢いを利用したドロップキックが虚栄のアブルリーを吹っ飛ばして消滅させる。それを見た陽介は目を丸くした。

「すげえっ!?!」

「ペルソナの召喚は体力や精神力を消耗するんだ。常に召喚し続けてたらずぐバテちゃうから、ここぞという時に召喚! それ以外では武器を使って肉弾戦をした方がいい!」

「ええっ!?! つつたつて俺らこんなの相手に戦ったことないつすよ!

わー二体こっち来た!?!」

陽介の驚きの叫び声に対し命はそう説明、しかしその言葉に陽介はまた声を上げた後、命を後回しにするつもりか真と陽介の方に一体ずつ突進してくる虚栄のアブルリーを見て悲鳴を上げる。と命がまた口を開いた。

「大丈夫! ペルソナは召喚せずともその主に力を与えてくれる!

その程度の敵にペルソナ抜きで互角に戦えないんじゃないから先、ずっと僕の足手まといだよ!」

「……やるぞ、花村!」

「……ああ! そこまで言われちゃ黙ってられねえっ!」

命の挑発のようなハツパに真はにやりと笑って背負っていた模造刀を引き抜き、陽介も右手の鉈を虚栄のアブルリーに突きつけて叫び声を上げた。

虚栄のアブルリーの一体がその挑発に乗ったかスピードを上げて陽介に突進、それに陽介は覚悟を決めた表情で右手の鉈を前に突き出し、左手の鉈は後ろに引いて姿勢を低く取っていた。

(……あれ!?!)

すると陽介は自分の感覚の変化に気づく。虚栄のアブルリーの動きがまるでテレビのスロー映像を見ているかのように遅く見え、さらに自分の身体がとても軽く感じる。

(これが、ペルソナの力なのか!?!)

その感覚に陽介は驚愕を覚えつつ、虚栄のアブルリーが長い舌で舐

めるように攻撃してくるのをゆっくりと見ていた。

「遅いっ!!」

陽介はそれをギリギリまで引きつけてかわし、虚栄のアブルリーの舌が空振り勢い余って上に振り上げられたのを見た瞬間今度は自分の番だと言わんばかりに虚栄のアブルリーの懐に入り込むと右手を振り上げて一気に振り下ろし、鉈で虚栄のアブルリーを斬り裂くと続けて引いていた左手を振り上げて追撃、トドメと言わんばかりに思いつきり身体を捻って勢いをつけ、右手の鉈を振り上げて斬り裂く。その連続攻撃に虚栄のアブルリーは耐えきれず消滅した。

「よしっー!」

それに陽介は嬉しそうに両手を握りしめ、歓喜の声を上げた。

一方真も、自分の中からあふれ出る力に笑みを浮かべていた。

(花村のシャドウと戦っていた時も感じていたが、力があふれてくる……)

真は笑みを浮かべながら心の中で呟き、模造刀を振り上げると目の前の突進してくる虚栄のアブルリー目掛けて突進、それを見た虚栄のアブルリーも舌を振り上げた。

「ふんっ!!」

「ギイイイイッ!?」

しかし真は模造刀を振り下ろし、その舌を押し返しつつ斬るという荒技を見せる。

「はあっー!」

次に剣道で言うならば胴を薙ぐような一閃、そして刃を返すと刀を両手で握りしめ、右下に構える。

「たあああっ!!」

トドメといわんばかりに声を上げ、刀を振り上げて虚栄のアブルリーを真つ二つに斬り裂く。その一撃に虚栄のアブルリーは真つ二つになり消滅していった。それと同時に陽介が相手していた虚栄のアブルリーも消滅していく。

「お見事! まあ、初めての戦闘ならこんなもんだね」

命がぱちぱちと拍手しながら誉めるのを聞くと陽介は照れたよう

にはにかみ、真も嬉しそうに微笑む。と彼の視界に変なカードが動き出し、真はそれを見るとイゴールの言葉を思い出した。

(これが俺の可能性の芽?……)

動き回るカード。真はその内の一枚に手を伸ばし、そのカードを掴み取る。掴み取ったカードには所謂妖精のような絵が描かれていた。

「ピクシー……」

「おい、椎宮? ぼーっとしてどうしたんだ?」

真がそう呟いていると突然陽介が声をかけ、彼ははっとしたように我に返った。

「どうしたんだよ?」

「あ、ああ、いや……なんでもない」

陽介が首を傾げながら問いかけてくるのに真は少し考える様子を見せた後静かに首を横に振って返した。

「クマ君、里中さんのいる場所は分かる?」

「ん〜……それは分かんないクマ。あ、でもチエチャンはセンセイやセンパイ達と違ってペルソナが使えないから、シャドウ達は見向きもしてないクマ」

「そうか。なら里中が襲われる心配はいらねえよな?」

「だが、いつまでも安全って保証はない。出来るだけ急いで探さないと」

命の言葉にクマが首を横に振り、続けてそう言うのとそれを聞いた陽介が返すと真が続ける。それに命がうんと頷いた。

「確かにそうだね……よし。君達のシャドウ戦闘経験も必要だし、クマ君は里中さんを探すのに集中して、君達は二人一組でシャドウを相手して。君達が戦闘に集中できる程度に僕が残るシャドウを倒していくから。ああ、念のために言っておくけど、常にペルソナの召喚はダメとは言ったけど状況に応じて使い分けるんだよ? 状況を見極められずシャドウに返り討ちにあうとか一番笑えないんだから」

「は、はい!」

「はいクマ!」

命の言葉に三人は頷き、それからクマは気合を入れて鼻をクンクン

し始めたり辺りを頑張つてきよろきよろ見回したり、彼らより少し先行して千枝を探し始め、真と陽介は二人一組でシャドウの相手をし始める。

「敵二体か。一体は見たことないやつだな……」

「よし、一回ペルソナを練習してみようぜ。魚っぽいのは任せろ！」

真が模造刀を構えながら呟くと陽介がそう叫び、同時に彼の頭上から青く輝くカードがゆっくりと降下。陽介はそれを鉋を逆手に持つて掬い上げるように砕く。それと共に回転しながら姿を現す陽介の人格の鎧ベルソナジライヤ。それが印を組むと同時に陽介が叫ぶ。

「ジライヤ、ガルツ!!」

陽介の叫びと同時に疾風が巻き起こり、巻物で構成された魚のようなシャドウ——冷静のベーシエがその風に巻き込まれて霧散する。それを見た真も自身の右手にペルソナカードを具現させた。

「イザナギ！ ジオ！」

真の言葉とともにイザナギが吼え、発された雷が虚言のアブルリーを貫き消滅させる。

「よしっ。えーつと命さんは……って!？」

「え?……なにっ!？」

陽介はガッツポーズを一つ取った後命を探し、彼を見つけると絶句し真も彼の向いている方を見ると絶句する。命は虚言のアブルリーをナツクルをはめた拳で殴り飛ばす、ここまではいい。しかしその後からは冷静のベーシエが回転しながら突進してきているのだ。

「み、命さん！ 後ろ後ろーっ!!」

「間に合うかっ!？」

陽介が声をあげ、真がイザナギを召喚しようとする。しかし冷静のベーシエと命、そして真達の距離を考えるととても真達からの攻撃は間に合わない。すると命はゆっくりと腰の片手剣に手をやる。

——次の瞬間だった。命の背後を取っていたはずのシャドウは霧散し、命はそのシャドウを正面に見据えつつ片手で剣を振り切っていた。

「な、なんだ!? なにやったんだ今の!？」

「い、居合い斬り?……」

陽介が困惑の声をあげ、真が驚いたように声を漏らす。と命が余裕
綽々の状態で二人の方に近寄ってくる。

「心配してくれてありがとう。でも、この辺の雑魚くらいならよっぽ
ど大群で来られるか気を抜かなければ僕は問題ないよ。それより君
達は自分のことを心配してね?」

「は、はい!」

「せ、センサー! センパイ! 階段を見つけたクマー! チエ
チャン、上に行つたのかもー!」

命の言葉に真と陽介が背筋を伸ばしながら答え、その後にくマの呼
び声が聞こえてくる。それを聞いた真が一番に反応した。

「先輩、花村、行こう!」

「おう!」

「オツケー」

「クマー! 案内してくれ!」

「任せてクマー!」

真の言葉に陽介と命が頷き、真がクマにそう言うとかマもうんと頷
いて走り出す。しかしまたシャドウがその道を塞いでいき、それを見
た命は苦虫を噛み潰したような表情を見せて召喚銃を構える。

「邪魔だなあもう! 無駄な敵は倒さず正面突破、行くよ!」

「はい!!」

命の指示に真と陽介も頷き、命がこめかみに召喚銃を押し付けるの
と同時に真と陽介もペルソナカードを具現させる。

「「ペルソナアツ!!」」

その叫びと共に命の召喚銃の引き金が引かれ、真がカードを握り砕
き、陽介がカードを掬い上げるように破壊する。そして辺りに炎、雷、
風が舞い踊り、シャドウ達を撃破あるいは牽制しつつ四人は一気に
走っていき、曲がり角を駆使してどうにかシャドウ達を撒いてから階
段まで辿り着く。

「ふひいゝあつぶねゝ……」

「ああ」

「皆、無事？」

「あ、はい。俺は大丈夫……あ」

陽介が安堵の息を吐き、真も頷くと命が無事か尋ねてくる。それに陽介が返した後、彼は命が僅かに傷を負っているのに気づいた。

「命さん、怪我してますよ？」

「ん？ ああ、さつき倒しきれなかった奴の攻撃がかすつたみたいだね。真君、傷薬か何か——」

「あー大丈夫ですよ。それくらい俺に任してください！」

陽介の指摘に真は指摘された場所を確認しながら呟き、真に治療道具がないか聞こうとするがそこに陽介が割って入り、ペルソナカードを具現させて鉋で砕き、ジライヤを召喚する。

「ジライヤ！ ディア!!」

ジライヤが印を組むと共にあふれ出る暖かな光、それが命を包み込むと共に彼の負っていた傷が癒えていった。それに命は感心したように頷いて陽介を見る。

「回復術か。物理攻撃も出来て魔法も出来て、器用だね。これは頼りになるよ」

「へへっ、ありがとうございます。俺に任しといてください！」

命に褒められた陽介が鼻の下をこすって嬉しそうに返す、その時だった。

「赤が似合うねって……」

突然城内に声が響き渡り、それに陽介が驚いたように顔を上げる。

「この声……天城!？」

「私、雪子って名前が嫌いだった……雪なんて、冷たくて、すぐ溶けちゃう……儂くて、意味のないもの……でも私にはピッタリよね……旅館の跡継ぎって以外に価値の無い私には……」

どこからともなく聞こえてくる声。その言葉の中には自嘲の感情が読み取れた。

「これ……天城の、心の声か？ たしか、小西先輩の時も聞こえた……」

「そして多分、この場所はユキコって人の影響で、こんな風になったク

マ

「だけど、千枝だけが言ってくれた。雪子には赤が似合うねって……千枝だけが……私に意味をくれた……」

陽介が気づいたように言い、クマがそう続けると雪子らしき声がまた続いていく。

「千枝は、明るくて強くて、なんでも出来て……私に無いものを全部持つてる……私なんて、私なんて、千枝に比べたら……千枝は私を守ってくれる……何の価値もない私を……私、そんな死角なんてないの……優しい千枝……」

「……急ぎょう。天城もそうだが、里中が心配だ」

「ああ、急ぎょうぜー!」

そこまで言うのと雪子らしき声は聞こえなくなり、真の言葉に陽介も領くと四人はまさか階段でシャドウが待ち伏せなんてしていか慎重に確認しながら上がっていき、その階段の先にある重厚な扉を見るとクマがキツとした表情を見せた。

「やっぱし、チエチャンはこの部屋の中に隠れているクマ!」

「急ぎょう!」

クマの言葉に真はそう言い、陽介、命と力を合わせて扉を開くとその中に飛び込んでいった。

「無事か、里中! つ?!」

一番に部屋に飛び込みながら一番に声を上げるのは陽介、しかし彼は続けて絶句し、真と命も部屋に入るとはっとした表情を見せる。その部屋——一階下が廊下と小部屋で構成された場所とすればこの部屋は大広間という感じに見える——では二人の千枝が相對していたのだ。しかもその一人の方の瞳は金色、千枝のシャドウが具現していた。その口元には薄っすらと笑みが浮かんでいるが目は全く笑っておらず、笑みもどことなく歪んで見えた。すると千枝のシャドウは突然声を荒げる。

「あたしの方が、あたしの方が……あたしの方が! ずっと上じゃない!!」

「違う! あ、あたし、そんなこと!」

千枝のシャドウの言葉に千枝が叫ぶ、と真が口を開いた。

「里中を守るぞ！」

「お、おう！」

「ま、待ってー！」

真の言葉に陽介が頷き、クマも一緒に三人は走り出す。とそれに気づいた千枝は振り返るときよつとした目を見せ、動揺したように首を横に振る。

「い、いや、こないで、見ないでえ!!」

「里中、落ち着け！」

「違う……違う、こんなのあたしじゃない！」

「バ、バカ！ それ以上言うな！」

千枝の言葉に陽介が落ち着かせようとしたりとにかく禁句を言わせないように叫ぶ、と千枝のシャドウがまた口を開いた。

「ふふ……そうだよねえ。一人じゃ何にも出来ないのは本当はあたし。人としても、女としても、本当は勝ててない。どうしようもない、あたし……でもあたしは、あの雪子に頼られてるの」

千枝のシャドウはそこまで言うともまたふふつと歪んだ笑みを見せる。

「ふふ、だから雪子はトモダチ……手放せない……雪子が大事……」

「そんなつ……あたしは、ちゃんと、雪子を……」

「うふふ……今まで通り、見ないフリであたしを抑え付けるんだ？……けど、ここでは違うよ。いずれその時が来たら、残るのは……あたし。いいよね？ あたしも、アンタなんだから！」

「黙れ!! アンタなんか……」

うろたえている千枝に対し千枝のシャドウはそう言い切る、と千枝が平常心を失ったように声をあげ、それに陽介が反応する。

「駄目だ、里中!!」

「アンタなんか、あたしじゃない!!」

しかし一歩遅れて千枝の拒絶の言葉が飛び出した。

「うふふ、うふ、ふ、きゃーっはっはっは!!」

それを聞いた千枝のシャドウは高笑いをはじめ、直後黒い何かが千

枝のシャドウの周囲に集まっていくと衝撃が走り、千枝が吹き飛ばされる。

「つとー！ クマ君！ 里中さんを連れて後ろに！」

「わ、分かったクマー！」

それを後ろにいた命が支え、千枝をその場に寝かせてクマに指示を出し、クマもそれに頷きながら走っていく。

さっきまで千枝のシャドウがいた場所にいる異形は現在それぞれを肩車で支えている三名の女生徒の上に彼女らを椅子のように座っている黄色いボンテージをまとった人型となっていた。女生徒の首には鎖が着けられており、その先端は本体である人型の右手に握られている。さらに人型の左手には鞭が握られており、長い黒髪はまるで触手のように蠢いていた。

「来るよー！」

命が拳を構えながら叫び、真と陽介も頷いてそれぞれの武器を構える。

「我は影……真なる我……なにアンタら？ ホンモノさんを庇い立てる気？ だったら、痛い目見てもらっちゃうよ！」

「うるせえー！ 大人しくしやがれ！ 里中……ちつとの辛抱だからな……」

「さあて……そんな簡単にいくかしら!？」

千枝のシャドウの言葉に陽介が叫び、次に千枝に向けてそう呟くと千枝のシャドウはそう声を荒げた。その声を合図に真と命がペルソナを呼び出すためそれぞれカードを砕き、こめかみを召喚銃で撃ち抜く。

「イザナギ！ ラクンダ!!」

「オルフェウス！ タルンダ!!」

「グツ!？」

イザナギが吼え、オルフェウスが豎琴を鳴らすと共に千枝のシャドウを光が包み込む。それに続いて陽介が自身のカードを掬うように砕いた。

「ジライヤ！ ガル!!」

「きゃあつ!？」

疾風を受けた千枝のシャドウは悲鳴を上げて体勢を崩し、それを見た陽介が真に目を向ける。

「チャンスだ!・ぼこぼこにすつぞ!」

「おう!」

「剣の錆にしてやる!」

陽介の号令に真が頷き、命も剣を抜いて三人は千枝のシャドウ目掛けて突進。一気に武器を振るって攻撃していくがその攻撃を千枝のシャドウは耐え抜き、体勢を立て直した。

「フンツ、痛い目見ないと分かんないようね!」

千枝のシャドウは鼻を鳴らし、鞭をぱちんつと地面に叩きつける。

「泣き喚け!・マハジオ!!」

「くっ!？」

「ぐあああああつ!!」

その叫び声と同時に小さな雷——下級雷属性魔法ジオが大量に降り注ぎ、真はそれをどうにかかわすが陽介と命はかわし切れずに電撃をくらい、体勢を崩す。

「キャハハ、ダサ、目がマジじゃん!・けど……まだまだこっからだよ!!・ほおーら!!」

「がはあつ、う……」

千枝のシャドウは高笑いをしながらそう叫び、異形の蠢く黒髪が無数の刃と化して陽介に襲い掛かる。体勢を崩した陽介はかわす事が出来ずに全ての攻撃を受けて気絶してしまった。

「うわわ、強烈クマ!・大丈夫クマ?」

「くっ……真君!・僕が前衛に出るから花村君をなんとか起こして!」

「ど、どうにかって……」

クマが後ろから心配そうな声を出し、命はなんとか立ち上がると真に指示を飛ばした後ダーツを投げて千枝のシャドウに牽制を始める。それを聞いた真は困ったように呟いて陽介の方に走り寄る。

「……とにかく、起きろ!」

「ぐふおっ!？」

とりあえず蹴りを叩き込んでみる、と陽介は情けない悲鳴と共に意識を覚醒させた。

「て、てめっ!? 何すんだよ!？」

「悪い。だがとりあえず傷を治さないとな」

「あ、ああ……ジライヤ、ディアを——」

「いや、花村はガルで先輩の援護を頼む。お前の傷は俺が治しておく」

陽介の言葉に真は手短に謝った後そう続け、それに陽介はジライヤに下級治癒魔術ディアを指示しようとするが真がそう返し、それに陽介は目を丸くした。

「え? でもイザナギって……」

「ああ。イザナギじゃ無理だ」

陽介の言葉に真は頷いて返し、次ににやりと笑みを見せる。

「だが、ピクシーならたやすい」

そう言うと共に彼の手にペルソナカードが具現。しかしそれに描かれている絵はイザナギではなく妖精の絵だった。そして真はそのカードを握り砕く。

「ピクシー! ディア!!」

真がカードを砕くと同時に姿を現すのは物語に出てくる小妖精^{ピクシー}。妖精は暖かな光で陽介を包み込むとさきほどの雷と追撃で出来た傷を完全に塞いで見せた。

「おお、すっげー……ってか一体なんなんだこれ!? ペルソナが二体!?」

「詳しくは後で説明する。それより援護を!」

「お、おう、そうだな。ジライヤ! ガル!」

「いくぞ、イザナギ!」

陽介は驚いたように声を漏らした後真に問いかけ、それに真が返すと陽介は頷いてジライヤを召喚。その言葉と共にジライヤが印を組み、千枝のシャドウ目掛けて疾風を放つが、その風はいつの間にか千枝のシャドウが張っていた緑色の障壁に威力を弱められてしまう。その後に真もイザナギを召喚して千枝の影の方に向かっていった。

「イザナギ！ スラツシュ!!」

「オルフェウス！ 突進!!」

真の指示と共にイザナギが刀で、命の指示と共にオルフェウスが豎琴で千枝のシャドウを斬り、殴りつける。

「グツ……アンタらバカじゃないの!? なんでもそこまでしてホンモン庇うの!? あんな薄汚い女!!」

「友達だからだ!!」

千枝のシャドウの言葉に真が強く言い返しながら模造刀で斬りつける。とその次にジライヤの手裏剣が追撃を行い、さらにペルソナ之力によって得た速さで陽介が千枝のシャドウに突進、二本の鉞で斬りつけながら叫ぶ。

「そういうこつた！ それに薄汚い女つて、里中の一面しか見てないてめえがそんなこと言う権利なんざねえ!! 第一、お前だつてその里中の一面だろうがっ!!」

「分かったようなことを……」

陽介の言葉に千枝のシャドウは齒軋りをしているような声で呟き、陽介を蔑んだ目で見ると真が何かに感づいたように陽介と命の方を見た。

「花村！ 先輩！ 防御!!」

「!!」

その言葉に咄嗟に陽介と命は身をかがめて防御体勢を取る。

「泣き喚けっ！ マハジオ!!」

直後千枝のシャドウが放つ無数の電撃。しかし陽介と命は防御していたおかげで先ほどのように体勢を崩すにはいたらなかった。

「イザナギ！ ラクンダ!!」

真が先ほどの技で千枝のシャドウから防御能力を奪い、さらに千枝のシャドウを覆っていた緑色の障壁が消えていく。それを見た命が陽介の方を見た。

「花村君っ！」

「はいっ！」

命の呼び声に陽介が叫び返し、彼の前に魔術師のペルソナカードが

具現する。

「行つけえ！ ジライヤアツ!!」

陽介はそう叫び己の人格ペルソナの鎧ソナを具現、千枝のシャドウに鉋を突きつけた。

「ガル!!」

そしてそう叫び、直後ジライヤの放った疾風が竜巻となり千枝のシャドウを呑み込んだ。

「嫌あ……」

その一撃がトドメとなり、千枝のシャドウは弱々しく声を漏らすと以前陽介のシャドウが倒れた時と同じように真っ黒となり、力なく倒れていった。

「う……」

千枝のシャドウが倒れた少し後、気絶していた千枝がうめき声を漏らして意識を取り戻す。

「里中、大丈夫か!？」

それを見た陽介が走り寄って彼女の手を取り、立ち上がらせる。

「さっきのは……」

千枝はそう声を漏らして立ち上がった後、自分の目の前にいるもう一人の千枝を見る。しかしもう一人の千枝は無言で立ち尽くしていた。

「何よ……急に黙っちゃって……勝手な事ばかり……」

「よせ、里中」

「だ、だって……」

さっきまで色々言ってきたのに急に黙り込んでいるもう一人の千枝に千枝が文句を言うがそれを陽介がいさめ、千枝は声を漏らす。と真が次に口を開いた。

「分かっている。あれが千枝の全てじゃない……みんな、一緒だ」

「みんな?……」

「椎宮の言うとおりで。俺もあつたんだ、同じような事。だから解る

し……その……誰だつてさ、あるつて、こういう一面……」

真と陽介の言葉に千枝は俯き、少し考えてると踵を返して自らのシヤドウの目の前まで歩いていき、その金色の目から目を逸らさずに口を開いた。

「アンタは……あたしの中にいたもう一人のあたし……つて事ね……ずっと見ない振りしてきた、どーしようもない、あたし……」

千枝はそこまで言うのと可笑しそうに笑った後、快活な笑みを見せた。

「でも、あたしはアンタで、アンタはあたし、なんだよね……」

その言葉にもう一人の千枝が頷くとその姿が光に包まれる。直後、千枝の前にシヤドウとは少し違う異形——ペルソナが姿を現した。フルフェイスヘルメットを被つて黄色いタイトのようなものに身を包み、その手には両端が刃となつている薙刀を持っている。どこか勇ましい武人のような雰囲気をもとわせるペルソナを千枝は黙って見上げていた。

「……トモエ」

彼女がそう呼ぶと同時、トモエはタロットカードとなつて千枝の前にゆっくりと降下。そのカードにはローマ数字の「Ⅶ」、戦車を意味する数字が書かれていた。そのカードは千枝の目の前まで落ちると光の粒子となつて彼女を包み込んだ。

「あ……あたし……その、あんなだけ……でも、雪子の事、好きなのは嘘じゃないから……」

「バーカ。そんなの、分かつてるっつ」

千枝の困惑気味の言葉に陽介がおどけたように笑つて返し、それに千枝も安心したように微笑んだ。と思つたら突然彼女は崩れ落ちるように膝をつく。

「さ、里中!？」

「へーキ……ちよつと、疲れただけ……」

「へーキ、じゃねーだろどう見ても……それに多分、お前……俺達と同じ力、使えるようになってるはずだ」

「え?……」

陽介の慌てたような声に千枝はそう返すが、陽介はどことなく呆れたように返した後そう続ける。それに千枝が声を漏らした後、陽介は真と命を見た。

「なあ、どうする?」

「一度戻って体勢を立て直そう」

「僕もそれに賛成」

「そうだな。里中を休ませないと」

陽介の問いに真と命が返すと陽介も頷く、と千枝が陽介を睨みつけた。

「か、勝手に決めないでよ! あたし、まだ……行けるんだから……」

三人の言葉に反発するように千枝はそう言って立ち上がろうとするが身体に力が入らないのか上手く立ち上がる事が出来ておらず、そんな千枝の前にクマが慌てて回り込み、命もその横に立つ。

「無理しちゃイヤクマ!」

「落ち着くんだ里中さん。別に君を邪魔に思ってるわけじゃない。君はペルソナ能力を得た、つまり立派な戦力になっているからこそ一旦戻って休息を取ってもらう必要があるんだよ」

「でも、でも雪子はまだこの中にいるんでしょ?! あたし、さっきのが雪子の本心なら、あたし……伝えなきゃいけないことがある。あたし、雪子が思ってるほど強くない! 雪子がいてくれたから……二人一緒だったから大丈夫だっただけで、ホントは……」

「……なら、それを伝えるためにも、まずキミが元気になるクマ!」

クマの懇願に続いての命の説得に千枝が慌てたようにまくしたてるとクマがそう言い、その次に真が口を開いた。

「ああ。天城は普通の人間だ。ココに居る影は普通の人間を襲うことはない……そうなんだよな、クマ?」

「そうクマ。襲うのはココの霧が晴れる日クマ」

「……それまでは、天城は無事だつてことだな?」

「まず、間違いないクマ」

真の言葉に続いてクマが言い、陽介が確認を取るとクマはこくと頷く。と千枝は首を傾げた。

「どういうこと?」

「どうやら俺らの世界と、霧の晴れる日が逆さらしい。ここが晴れる日……俺らにとっては霧が出る日に、被害者は影に殺される」

「つまり一旦外に戻っても街に霧が出るまでは天城は安全だ。天気予報でもたしかしばらく雨の予報はなかったはずだ。霧は大体雨の後に出るんだよな?」

「ああ。大丈夫だって、戻ったらすぐ、天気予報をチェックしよう」

千枝の言葉に陽介と真が交互に話していく。と千枝は我慢できないように無理矢理立ち上がった。

「でも……だからって……やっぱり、ここまで来て引き返せないよ!

雪子が居るのに! 一人で……怖い思いしてるの——」

「!?!」

千枝の言葉が途中で途切れ、真と陽介も目を見開く。千枝の言葉が途切れた理由、それは命が彼女の頬を平手で叩いたせいだ。

「ちよっ、何を——」

「確か言っただよな、千枝? 僕達の指示に従うことがここに連れてくる条件だと」

「——っ」

怒ったような千枝の言葉を遮り、命は冷たい瞳と冷たい声で尋ねる。無邪気な笑みを見せたり飄々とした彼の顔しかほとんど知らない千枝はその威圧感に言葉が止まり、僅かに口をぱくぱくさせた後また口を開いた。

「で、でも、雪子はこうしてる間にも……」

「なら、その雪子がいる場所までどれだけ進めば辿り着くんのだ?」

「え?」

「そこまで進む際に現れる敵、シャドウの対策は? 消費アイテムの配分と使用ペースは? お前のペルソナを使つての真達との連携は?」

「う……」

命は淡々と千枝に言葉を突きつけていき、千枝は言葉を失う。そして命はトドメの言葉を発した。

「それとも、お前は無理をしてお前が命を落とし僕達が雪子を助けた時に『雪子を助ける為に千枝が死んだ』と言わせ、雪子に『自分のせいで親友が死んだ』という重荷を一生背負わせたいのか?」

「!?」
トドメの言葉に千枝の表情が驚愕の色に染まり、命はその目の睨みに力を込めた。

「シャドウとの戦いはゲームじゃないんだ! 下手をしたら命を落とす! それも分からずただ無策に突き進むのはもはや無謀以前の問題だ!!……」

「せ、先輩?」

命は言い終えると同時に細かく震え始め、真が後ろから声をかける。

「……もう、嫌なんだ……」

そこに漏れる命の声、それはさつき千枝に対して淡々と突きつけていた声と比べて弱々しく、震えていた。

「僕達もペルソナを手に入れてすぐ、強大なシャドウと戦う事になった。その時仲間の一人が僕への嫉妬と反発で勝手に単独特攻しちやっつたんだ……僕は止めるべきだったのに、止めきれなかった……そして追いついた時、その人はシャドウの大群に囲まれてたんだ」

「「っ!?!」」

その言葉に真、陽介、千枝が息を呑む。

「なんとか援護が追いついたからよかったけど、もし追いつかなかつたら、順平が死んじゃってたらって考えたら今でも怖いし、僕はこの力を持っててもなお何人も助けられなかった人を見てきた……だからお願い」

命はそこまで言うのと千枝を弱々しい光の宿った目で見、その両腕を掴んで頭を下げた。

「冷静になって、無謀な特攻なんて止めて……お願いだから、後生だから……」

「……」

心の底から怖がり、心配している言葉に千枝も黙り込んでうつむ

く、

「……分かりました」

千枝は力なく項垂れて眩き、真と陽介の方を見る。

「二人も、一人で突っ走ってごめんね?」

「……次から気をつけてくれたら構わない」

「気にしてねえよ。天城は必ず俺達で助ける……だろう?」

「……うん!」

千枝の言葉に真と陽介はそう返し、それに千枝は微笑んで頷いた。

それから彼らは一旦入り口広場へと戻ってくる、と千枝がぐったりした様子で頭を下げた。

「なんか……この前、入った時より疲れた……頭もガンガンするし……花村達、平気なの?」

「俺達は眼鏡があるから平気だが……」

「あ、そか。お前、眼鏡してないな」

千枝の言葉に真がそう言うのと陽介が気づいたようにぼんと手を打つ、とそれを聞いた千枝が彼らの顔をまじまじと見た。

「あ……そういえば眼鏡してんね。目、悪かったっけ?」

「お前……どんだけテンパってたんだよ……」

そのずれた回答に陽介が呆れたように声を漏らし、真も僅かに苦笑した後クマの方を向いた。

「クマ、里中の分の眼鏡はあるか?」

「じゃんじゃじゃくん。チエチャンにも用意してあるクマ。はい、チエチャンの」

真の言葉にクマはそう言って眼鏡を手渡し、千枝もそれをもらうと恐る恐る眼鏡をかける、と驚いたように目を丸くした。

「うわっ、何これすっげー! 霧が全然無いみたい!」

「あるなら、早く出してやれっつもの」

「でも里中さんが飛び出していったし、渡すタイミングがあったかは怪しいよね」

千枝の驚愕の声の後陽介がクマに文句を言い、それに命が苦笑しな

がら返す。と千枝はそれを聞いてない様子でうんうんと頷いた。

「なるほど、そう言う事なんだ。モヤモヤん中、どやって進むのかと思っただよ。ね、これ貰ってもいい?」

「モチのロンクマー!」

千枝の問い掛けにクマが嬉しそうに返事を返す。そして千枝はまたうんつと勇ましく頷いた。

「今日のところは、仕方ないけど……でもこれで、リベンジ出来そう!

二人とも、勝手に رفتたりしないですよ!」

「お前がそれ言う?」

「……うつ」

千枝の言葉に陽介が腕組みをして返し、千枝はうつと言葉を失う。思いつきり独断専行した千枝の言える立場ではなかった。

「それじゃ全員の取り決めにしよう。絶対に一人で行かない」

真の言葉に三人は頷く。シャドウとの実戦もそうだがさっきの命の言葉からもこの戦いは常に命の危険と隣り合わせ、一人で行ったらもしもの事もある。

「じゃあ、これからは学校の放課後や学校のない日もあるべくここに来るようにしよう……それで、命さん。お願いがあるんですけど……」

陽介はそう言った後に命の方を向く。

「俺達のリーダーをお願いしていいっすか?」

「え?」

「この中なら命さんが一番強いし、経験もある……お願いできませんか?」

陽介の言葉に命は目をつぶって少し考える様子を見せ、目を開いた。

「悪いけど、断るよ」

そう言ってから命は真の方を見る。

「代わりに僕は真君を推薦する」

「えっ!」

その言葉に真は驚いたように声を上げた。

「い、いや、先輩をさしおいてそんな……」

「押し付けるつもりはない。でも、真君にはセンスがある。君ならやっていけるよ。それに、僕がリーダーを引き受けたとしても、僕じゃ綿密に連絡を取り合うのが難しい。その点真君なら同じ学校だからすぐ花村君達と連絡することが出来るからね」

真の言葉に命はそう返し、真はなるほどと頷いた。

「ああ、大丈夫だよ。僕も皆をしつかりサポートする。そうだね、ご意見番やアドバイザーと言おうか」

「あたしも賛成。椎宮君って熱く見えるけど冷静だし、なんか安心」

「そうだな、俺も助けるよ。あれだ、頭良い人でリーダーの右腕っぽいポジション、参謀的な？」

命の言葉に続いて千枝と真がそう言い、それを聞いた真は少し黙った後小さく頷いた。

「分かった。リーダーの役目、承らせてもらう」

真がそう言った瞬間、彼の頭の中に声が響いてきた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たな絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、*“愚者”*のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

コミュニティの声。それに真は黙って頷いた。

(コミュニティ、こいつは個人だけでなく団体とも？がるのか……)

「よし、とにかく今日は休んで、明日からに備えようぜ。まずは天気予報の確認、忘れんなよ？ 雨が続くとヤバイからな」

真がそう考えていると陽介がそう言い、残るメンバーも頷く。と命がクマの方を向いた。

「ところでクマ君。僕達の持つてきている武器だけど、ここに置いて

「いっていいかな？ 毎回人目を盗んで持ってくるより安心だから」

「あ、それいいな。クマ、お願いできるか？」

「分かったクマ！ クマに任しときんしゃいー！」

命の言葉に陽介が続けるとクマはえっへんと胸を張って返す。

それから彼らはテレビの外に出ると完全に疲れきっている千枝を命がバイクで送っていくことにし、真と陽介も家に帰っていく。

「ただいま」

「お帰りなさい」

堂島家に戻り、真が声を出すと菜々子が挨拶を返す。それに真は僅かに笑みをほころばせた後家に上がって袋を台所をテーブルに置いた。

「菜々子ちゃん、今から約束通りハンバーグを作るから。待っててね？」

「ほんと！ やったー！」

真の言葉に菜々子は嬉しそうにぴよんぴよんと跳ね、真はまた一つ微笑んだ後ハンバーグを作り始めた。

そして彼がハンバーグを焼いている時、突然家の電話が鳴り始め、菜々子がそれに出る。

「はいもしもし……はい、はい……おにいちゃん、でんわー。男の人、たんにんだって」

「担任、ってえと諸岡教諭？……はいはい」

菜々子の言葉に真は不思議そうな表情で返すと火を少し弱くして菜々子に渡された受話器を耳に当てる。

「もしもし？ 電話代わりました」

「あーもしもし、ワシだ。諸岡だ。えー、転校生の貴様にワシが直々に用意していたものがある。あー、貴様の家に届ける予定だったが、事情があつて行けなくなってしまった。えー、ここはどこだ？ ここ

はあれか……」

電話の相手である諸岡はそこまで言うと一旦言葉を途切れさせた。

「あー、ワシは今商店街のガソリンスタンドの前にいる。分かったな。速やかに取りに來い！」

「い、今から!?!」

諸岡は言うことと言うと電話を切り、真は驚いたように声を漏らすか聞こえてくるのはツー、ツーという電子音のみ。真は受話器を置くと困ったように現在ハンバーグを焼いているフライパンを見る。ちなみにフライパンの大きさの関係上焼くのは一個ずつで今は自分の分を焼いている。

「ただいまー」

「あ、お父さん」

と、ちょうど遼太郎が帰り菜々子が呟く。と真はフライパンの火を切ってフライパンに蓋をすると彼に近寄った。

「叔父さん」

「ん?」

「すみませんがちよつと担任の諸岡先生が渡したいものがあるとかで呼び出されたので。行つてきます」

「お、おう?」

真の説明に遼太郎は首を傾げつつ頷き、真は靴を履き始めながら続けた。

「あと、ハンバーグ焼いてる途中なのでフライパンには触らないでください。続きは帰ってからやります」

「あ、ああ」

「じゃあ急ぐんで。すぐ戻ります!」

真の続けての言葉に遼太郎が頷くと真はすぐ家を出て行った。

それから真は商店街までやってくる。

「えーつと、ガソリンスタンドって言つてたよな……」

真はそう声を漏らしながら歩いていくが、男性の声が聞こえてきた。

「ですから、僕は里中さんの知人であつて……」

「なんだ？ てかこの声……」

その言葉に真は首を傾げ、ちょうど声の方でもあるガソリンスタンドの方に走っていく。とそのガソリンスタンド前では彼を呼び出した諸岡が男性と何か話をしていった。

「諸岡教諭？ と……命先輩!？」

「あ、真君」

「む、来たか！ 意外に速かったな。む、お前はこいつと知り合いなのか？」

諸岡と話していた男性は命、それに真が驚いたように声を上げると命は声を出し、諸岡も真に声をかけた後命を指差しながら尋ねる。

「あー、前の高校の先輩です。今は大学生、でしたよね？」

「まあ休学中……っていうか許可貰って特別状態っていうか……説明が難しいな……」

諸岡の問いに真は返した後命に話を振り、それに命は困ったように声を漏らす。と諸岡が頭をかいた。

「まあいい、椎宮。貴様のために用意した我が校指定のジャージだ！

ほら、受けとれい！」

そう言っただけが突き出してきたのは言葉通りジャージ。つい真は受け取ってしまった。

「よし、受け取ったらサツサと帰れ！ ワシはこいつに、我がクラスの女学生を連れまわしていた事を聞いた皆さんといかんだ！」

「はい……そういえば先輩、里中さんって……」

「あーほら、あの後。里中さん疲れて気分が悪いって言うから一度静かなところで休ませてたんだよ。で、流石に暗くなる前に家に送って行って、ご両親にお礼って食事を、悪いと思ってただけだけど押し負けてご馳走になってから帰ってたらこの諸岡氏が里中さんを無理矢理連れまわしてたとかかっていちやもんを……」

「なあ〜にがいちやもんだ!？ 貴様、都会から来たといい気になつてるんじゃないかな!？ ここは貴様がいたようなイカガワシイ街とは——」

「諸岡教諭」

「諸岡氏」

諸岡の口からそんな言葉が飛び出した直後、真と命の声が重なり、デジャヴに諸岡はぎくりとなる。そして命は静かな印象を与える瞳で諸岡を見据えた。

「諸岡氏、あなたはたしか先ほど学校では倫理を担当なさっているとおっしゃっておりますね？」

「教諭、前にもお聞きしたと思いますがもう一度お聞かせ願いたい」「そ、そうだが、な、なんだ？」

二人の言葉に諸岡は微妙に汗を流しながら尋ね返す。それから二人の言葉が重なった。

「先入観と偏見でものを言い、他人の人権を踏みにじることが教諭に取つての倫理なのでしょうか？」

「ぐうっ!?!」

それは転校初日、真が言い放ったものと全く同じ。それに諸岡はまた声を漏らした。そして命は何か譲れないものを宿したような瞳のまま、自らの心臓の上を指す。

「僕は気分の悪いという知人を介抱し家まで送り届けただけです。諸岡氏のおっしゃるような行為は一切行っていないと僕は僕の信念においてお約束いたします。なんなら後日、証明として里中さんとそのご家族にお話を聞いてはいかがでしょうか？ もちろん僕も同席いたします」

「む……分かった。椎宮に免じてここは貴様を信じてやろう……」

命の言葉を聞いた諸岡は押し負けしづしづと言った様子でそう呟き、街の中に去っていく。それを見てから命はふうと息を吐いた。

「やー危なかった。助かったよ真君」

「は、はい……」

「じゃ、僕も帰るから」

「あ、じゃあまた」

命の飄々とした言葉に真はこくこくと頷き、命がバイクで夜の闇の中に消えていくのを見届けてから真も学校指定用ジャージを抱えて家へと帰っていった。

「……はい、これで全員分つと。じゃあ菜々子ちゃん、いただきますーす」

「いただきます」

「美味そうだな。いただきます」

晩御飯が出来たため堂島家も夕食になり、三人は食事の挨拶をして食べ始める。

「む、美味しいな。お前、料理出来るんだな……」

「ほら、親父と母さん共働きだから」

「ああ……」

遼太郎の言葉に真が返し、それに遼太郎は納得したように頷いた後気づいたように真を見た。

「そういえばこれの材料費はお前が出したのか？」

「はい、もちろん」

「そうか……後でレシート見せろ。払う」

「えっ!? いやいいですよ、これタイムセールのもんなら出費じゃないですし……」

「それぐらいさせろ。こんな美味しい飯を作ってもらっただけじゃなく材料費まで出させてるんじゃない」

遼太郎の言葉に真が何を当然のことをとばかりのイントネーションで返すと遼太郎はそう言い、それに真は驚いたように返すが遼太郎は真剣な目つきで言い、真は頭をかいた。

「……はい。じゃあお願いします」

「おう。それでいい……おっと、そうだった」

真の言葉に遼太郎は嬉しそうに微笑み、ハンバーグをまた一口二口口に運び、咀嚼して飲み込んだ後思い出したようにまた口を開いた。「お前、さつきは担任からジャージを受け取るために呼び出されたくらいいいし、都会じゃ夜中の外出もよくあることなんだろう。だがここは田舎で、俺はお前を姉貴から預かってる身だ……分かるな？ これ以後、理由のない夜間外出は禁じる」

「……分かりました。別に理由なく夜中外うろつく趣味もないですし」

「よし……しっかし、ジャージを渡すだけとは。そんなもん学校でいくらでも渡せるだろうに……まあ、この騒ぎだ。皆浮き足立ってんだろうなあ……」

遼太郎の言葉に真は少し考えた後領き、それに遼太郎は満足そうに領くと少し声を漏らしてからまたハンバーグを食べ始めた。そんな感じで今日の堂島家の一日は過ぎていく。

第八話 お姫様の願望

千枝のシャドウを倒した翌日。真と陽介は学校の教室で話していた。まだ千枝はやってきていない。

「里中のやつ、大丈夫かな？ 昨日は色々ありすぎたし、元気になってりやいいけど……」

「里中なら大丈夫だろう。自分のシャドウをきちんと受け入れられたんだからな」

「そうだけど……」

陽介の言葉に真が返すと陽介はそうだけど、と言いながらしかしやはりどこか心配そうな表情を見せる。と教室のドアが開いて千枝が教室に入り、真達を見つけるとすぐ彼らの方に歩き寄っていく。

「おはよう」

「よ、よう」

「よく眠れたか？」

「うん、結局朝まで爆睡……」

千枝の言葉に陽介が慌てたように返し、真が尋ねると千枝はあつきりそう言い、それから二人の顔を交互に見ると照れくさそうに頭をかいた。

「その、昨日は色々ありがと……」

「?」

千枝の言葉に二人は不思議そうな表情を見せる、と千枝は照れくさそうに口を開いた。

「なんか、恥ずかしいっていうかき。よく考えたら、二人には本音とか、全部見られちゃったわけだし……あ、命さんにもだよ……」

「気にすんな」

千枝の言葉に陽介がそう声をかける、と千枝はその陽介の方を向いた。

「たしか、花村もあたしみたいになったんだよね？ 花村ん時はどんなだったわけ？」

「え？ あー、何ていうか……」

千枝の問い掛けに陽介は何とも気まずそうな表情になる。

「そういや、お前ん時は、何もなかったよな？」

「話を摩り替えるな」

陽介はさらっと話の矛先を真に向けるが真はツツコミを返し、その後少し考える。

「だがそういえばそうだな……あの時は夢中だったと言うか、記憶が曖昧だな……」

真は考え込み始めるが、そこにまた千枝が声を出す。

「椎宮君のことはともかくさ。とにかく今は雪子を助けるのが一番重要だよな。あたしもやるから。仲間はずれとか、絶対無しだよ？」

「当たり前だ」

「当然。頼りにしている」

千枝の言葉に陽介と真がそう返す。と予鈴が鳴り、それに陽介が「まだトイレ行ってねえよ」と言っ慌てて教室を出て行った。

「ね、あのさ。えっと……あ、ありがとね。助けてくれて……」

陽介が居なくなつた事を確認してから千枝が真に話し掛ける。

「花村も、頼れるんだけどさ……けど、椎宮君つてやっぱり不思議っていうか、なんか、頼れそうな気がするんだよね……」

千枝の言葉の中に彼女からの感謝の気持ちが伝わり、真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、“戦車”のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

真の脳裏にまた響いてくる言葉。それを聞いた後、彼はふと思いだしたように言葉を口にする。

「そういえば里中。連絡先を教えてください」

「えっ!?……あ、うん。そっか、必要だもんね、これから……なんでも、電話してよ」

真のストレートな言葉に千枝は驚いたように声を漏らした後納得したように頷いてそう言い、二人は携帯電話の番号を交換する。

「雨が降ったら、その後の霧に注意……だったよね。その前に、絶対助け出そう!」

「ああ。だが無理はするな」

「もつちろん! 雪子を悲しませるわけにはいかないもんね!……昨日、命さんに諭されるまで気にも止めてなかったけど……でもこれから気をつけるよ」

千枝の言葉に真が返すと彼女はまた頷き、昨日の命の剣幕や言葉を思い出したのかそう呟いた後にまた元気に頷いた。その後に陽介も教室に戻ってきて、本鈴と共に皆席に着席する。

「ハロー! グッドアフタヌーン、エヴリワン! 体育教師の近藤だ!」

それから午後まで時間が過ぎて次の授業は英語、しかし教室に入ってきた教師はジャージを着ており、明らかに体育の教師だ。というか自分で体育教師と名乗っている。

「人がいなくてな、俺が英語を担当する。大丈夫大丈夫、こう見えても海外旅行経験あるんだぞ! 一週間も旅行したら充分、充分! ツアーだったけどな、ははは!」

(……)

その言葉に一途の不安を感じてしまう真なのであった。

それからそんな一途の不安を感じてしまった英語の授業も無事終了し、時間は放課後まで過ぎていく。真は教科書等を鞆に詰め込むと隣の席の千枝と帰る準備を終えた後どこか落ち着かなさそうに教室の後ろに立っている陽介を交互に見て、まず隣の席の千枝に話しかけた。

「里中、どうする?」

「ん〜……今日、テレビ行く?」

「いや、分からない。命先輩にも予定を聞いてみる必要があるし、なにより物資がな。傷薬とか買い込んでかないと……やっぱ往復つてのがきつい」

「ああ、そうだな……」

真の言葉に千枝がそう聞き返すと真は小さく首を横に振って返し、そこに陽介が会話に入って真の意見に賛成する。テレビの中の世界にある雪子がいる古城、雪子を助けるためにはあそこに潜むシャドウと戦いながら城を上っていくのだがそれがどこまであるか想像もつかない上に、テレビから出るには一度古城を一階まで下りて出て行かなければならない。

昨日千枝を助けた後城から出て行く時は幸いシャドウと出くわさなかったからよかったが、毎回そう上手くいくとは到底思えないし上まで上がっていくと同時に下りていくための負担が増してしまう。陽介はそれを考えたのか頭を押さえて苦しそうな表情を見せる。

「せめて下りる手段さえどうにかなればまだ楽なだけだな……」

「まあ、ないものねだりしてもしょうがない……何か手段を考えてみよう。とりあえず俺は薬買いに行くよ、テレビに行く時は電話する」
「ああ、んじゃ商店街に四六商店ってあるから行ってみなよ。品揃え豊富だよ、おばさんいい人だし……あたし、悪いけどもうちよつと残るから。なんか動きたくない気分っていうか……あ、でもテレビ行く時は連絡してね。すぐ飛んでくから!」

「俺も残るわ。ちよつと考えたいことあるし……ああ、でも里中と同じくテレビ行く時は電話してくれ。すぐに行く」

「ああ」

陽介の言葉に真は首を横に振って答えた後、そう言って鞆を持ち上げる。それに千枝と陽介がそう返すと真は頷いて教室を出て行った。

それから真は商店街にやってくると千枝が言っていた四六商店を探し始める。

「ありがとうございました」

とまた聞き覚えのある声が聞こえ、真は声の方を見る。「四六商店」と書かれた看板がある店から命が出てきていた。

「先輩！」

「あ、真君！ ちょうど良かった……これを見て」

真の言葉に命は反応し、ちょうど良かったと漏らすと真剣な目つきでエコバッグの中から一つの玉を取り出す。と真は驚いたように目を開いた。

「これってクマが渡してきた、地返し玉!？」

命の手にあったのは昨日雪子のいる古城に入ろうとした直前クマが渡してきた、曰く「戦えないほどに傷ついちゃった人に力を与えてくれる玉」という地返し玉。ちなみにあと白桃の実とソウルドロップというもの——使い方はそれぞれ白桃の実は「食べれば元気が出るし、磨り潰して傷口に塗れば傷が少し早く治る」といういわば劣化版傷薬。ソウルドロップは「齧ればすつきりして気力回復!」という、気力つまり精神力を使うペルソナを操るには必須といえるものだ——も受け取っている。真の言葉に命はうんと頷いて四六商店を見た。

「この店に売ってたから気になって店主に聞いてみたんだ、クマ君の説明も込みでね……店主によるとそういう言い伝えがあるっただけで、まあお守りみたいなものらしいんだけど……ああ、それとも一個気になるものがあるんだ」

命はそう言い、地返し玉を袋の中に戻すとまた別のものを取り出す。今度はなんていうか、手のひらサイズのカエルの置物とでも言えればいいだろうか？ とりあえずそんなものだ。というか妙にリアルで金色のメッキ製だが着色してしまえば本物と言えば騙される人間も出るかもしれない。

「……これは？」

「カエレル」

「……カ、カエルとの洒落？」

「知らないよ。まあこつちも気になって聞いてみたんだけど、やつぱりお守りなんだって。道に迷わなくするとか、帰りたい場所に帰れるようになるとか」

「やつぱ帰るとカエルの洒落じゃないですか」

命の説明に真は目を閉じどこか呆れた様子でまたツツコミを入れ

た。

「まあ、この際名前の由来はどうでもいいよ……ちよつと気になつてね。もしかしたらこれ、あつちで使えるかもしれないんだ」

「……分かりました。じゃあテレビに、ですネ?」

「もちろん」

命の真剣な目つきでの言葉に真が感づいたように尋ね返すと命もうんと頷いて返し、二人は携帯を取り出す。

「俺が里中に連絡取ります」

「じゃ、僕は花村君だね」

二人はそう言つて学校に残っているはずの二人に連絡を取り、ジュネスのいつものフードコートで集合と言う旨を伝えると電話を切つて、二人もジュネスに向けて歩いていった。

「全員揃つたね?」

「ああ……先輩、そこで飯買つてるけど」

「……」

一足先に待つていた千枝が尋ねると真が頷いた後言いにくそうにカウンターで軽食を注文している命を指差し、それに陽介が閉口すると命がハンバーガーとフライドポテトのセットを四人分持つてやってきた。

「お待たせー。やーここのハンバーガーとかって安いね」

「あ、ま、毎度ありがとうございます……」

「でもワイルダック・バーガーの新作セットやフニャフニャポテトも捨てがたいな〜」

命の能天気な言葉に陽介は癖かつい頭を下げてしまい、命は両手が塞がっているながら器用に口で自分の分のポテトを口で銜え取りぽりぽりと齧る。

「つてそうじゃなくつて! 命さん! これからテレビの中に行くつてのに何を暢気な!!」

「暢気つてわけじゃないよ」

それを見た千枝があーもーつといわんばかりに声を上げると命は

真剣な目つきで千枝を見、それに千枝は昨日を思い出したかびくりとなる。と次の瞬間命は柔和に笑った。

「そんなびびらなくつても。ただピリピリし過ぎだよ。そりゃ天城さ
んつていう一人の人間の命がかかっているんだから暢気になりすぎ
ても困るけど、焦りは平静を乱し平静を乱すと冷静な判断が出来なく
なる。冷静な判断が出来ないのは実戦において命取りだからね。ま
ずは全員リラックスするんだ」

命はそう言うのとハンバーガーとポテトをテーブルに置く。

「というわけでこれは僕の奢り、全員これを食べて落ち着くこと。あ
あ、ドリンクは自分で買ってきてね」

「は、はい……」

命はそう言うて席に着くと自分のハンバーガーとポテトを食べ始め、懐から盆ジュースを取り出すと平然と飲み始める。それを見た残り三人もそれぞれ自分の好きなドリンクを注文し、持ってきてから命の持ってきたハンバーガーとポテトを食べ始めた。

「よし、全員食べ終えたね？」

「はい。ああ、なんかタイミシング置いたら少し落ち着いたかも……」

「よし。んじやちよつと出鼻くじかれちまったけど、行くか！」

「ああ」

命の言葉に千枝はふうと息を吐きながら呟き、次に陽介が言うともああと頷いた。そして四人はプレートとかを片付け、空き缶をゴミ箱に捨てるのと家電売り場へと行き、周りに人がいないことを確認してからテレビの中に入っていった。

「みんな遅いクマー！ 今日に来てくれないかと思って泣きそうになつてたクマー」

「あはは、ごめんごめん。でもクマ君、悪いけど急いでるんだ」

「え？ あ、そっか。迷い込んだオンナノコを助けに行くクマー！ クマがお城に案内するぞ！」

クマの言葉にまさか飯食ってましたとも言えないため命は誤魔化

し笑いを零した後話をそらし、それにクマは思い出したように言うとうんと大きく頷くと彼らを古城へと案内していった。

「雪子……椎宮君、急ごう!」

「あ、ああ。そうなんだが……先輩」

「うん……皆、一つ実験してみたいことがあるんだ」

「実験?」

千枝は心配そうにそう言うが真は今日ここに來ることに決めた理由を思いながら命を呼び、命も頷いてそう言う。それに陽介と千枝が反応すると真が頷いた。

「ああ。上手くいけばこれからの探索が楽になるかもしれない」

「だから、まず僕と真君だけでこの中に入る。皆はここで待ってて」

「「えっ!?!」」

真の言葉に続いて命がそう言い、それに陽介と千枝、クマが声を漏らした。

「い、いや、それ危険じゃねえっすか!?!」

「そ、そうですよ!」

「別に深入りするつもりはないよ。この城の一階の適等なところが実験場所。シャドウと戦うつもりはないし、逃げ回るには人数が少ない方が身動きが取りやすい。それにいざとなった時にも一人くらいならよほどじゃない限り僕で守りきれ。だから三人はここで待ってて……いいね?」

陽介と千枝が慌てたように言うが命はさらっとそう返し、最後に念を押すように陽介達をじろりとした目で睨みつける。それに陽介、千枝、クマがこくこくこくと細かく何度も頷くと真がはあと息を吐いた。

「先輩、リーダーは俺なんですが……」

「あ、ごめんごめん。つい……じゃ、そういうわけで行ってくるよ」

真の言葉に命はけらけらと笑い、ひらひらと手を振って真と共に古城の中に入っていった。

「イザナギ！」

「オルフェウス！」

それから二人はなるべく戦闘を避けつつ、でも逃げ切れない場合のみ戦っていく。そして適当な部屋に辿り着くと命が荷物を探った。

「じゃあ真君、使ってみて」

そう言つて彼が取り出したのはカエレール。それを真は真剣な表情で受け取った。

「はい。つて、俺が？」

「僕はこれをここからの脱出アイテムとして使用できると考えたんだ。でも、もし脱出できるのが使用者一人だった場合、僕が使用して君一人取り残されるよりは君が使用して僕一人取り残された方がマシだからね。万一またカエレールを使用する前にシャドウから強襲を受けた時、生き残る確率的な意味でね」

「なるほど……」

真はカエレールを受け取った後に気づいたように問いかけるが、命はそう自分の考えをすらすらと述べていく。それに真は納得したように頷くとカエレールを握り締めた。ここから帰る、そのためにイメージするのは自分達を待つ陽介達がいる古城前。帰るのは自分と命の二人、それらを鮮明にイメージした瞬間。真はカエレールを掲げて見上げるように上を向く。

「転移、城門前！」

真がそう叫んだ時、二人を不思議な光が包み込んだ。

「うおおっ!!」

「のああっ!!」

「クマアツ!!」

真と命の耳に突然そんな声が聞こえ、同時に二人を覆っていた光が消え去る。その目の前には陽介、千枝、クマが目丸くして立っていた。

「っ、槌宮!!」

「み、命さん!？」

「センセイ!? センパイ!？」

「ここは……城の前?」

「どうやら実験成功みたいだね」

驚きの声を上げている三人をよそにきよろきよろと辺りを見回して真が呟くと命もうんと頷く。

「え? あの、ちよつ、どうなってんすか!？」

「い、いきなり光が入り口の前に集まったと思ったら弾け飛んで、そう思ったら二人が!？」

陽介と千枝はパニックになっているのかまくしたてており、命は真に目をやると真も頷き、彼らを治めるとカエレルを取り出して説明をしていた。

「……ええーつとつまり? 四六商店で売ってたカエレルつつう道具を使ってみたらここに戻ってこれた、と?」

「うっそー、信じらんない……だってそれ、昔から売られてるなんの変哲もないお守りだよ? うちにも二、三個あるし……」

説明を聞いた陽介と千枝は信じられないと漏らし、真と命もまあそうだよなあと苦笑いを見せる。とクマがウムムと唸った。

「ウムム、もしかしたらそういうイメージの力かもしれないクマ」

「二「イメージ?」三」

クマの言葉に四人の声が重なる。それにクマはうんと頷いた。

「この世界はテレビの中の人にとって現実になるって何回も言ってるクマね? もしかしたら、そのカエレルっていうものに込められたイメージが現実になるのかもしれないクマ」

「カエレルは帰りたい場所に帰ることが出来るようになるお守り、そのイメージがこの古城の中からここに『帰る』力になってるってことか?」

「多分、そうだと思うクマ」

クマの予測に陽介が腕組みしながら返すとクマは大きく頷く。それに千枝もふくと呟き、続けて陽介は一つ頷いた。

「まあなんにせよ。学校で考えてた下りる手段がどうにかあっただけ

ありがてえよな。俺、命さんから連絡来るまでシャドウに会わず帰る方法を考えてたんだけど、思いついたのが手近な窓叩き割って飛び降りるくらいだったからな」

「ず、ずいぶん荒っぽいね……」

陽介があははと苦笑しながら言い、そのとんでもない手段に命も頬を引きつかせた。と陽介の言葉に真も頷く。

「ああ、とりあえず帰る手段は確保できた。これなら上に向かうことに全力を注げる。皆、行くぞ！」

真の激励の言葉に残るメンバーが「おー」や「クマー」など、思いの言葉で返し、メンバーは再び古城に入ってしまった。

「なんだよ、これ……」

「え？」

古城に入って少し歩き、最初に口を開いたのは陽介。それに千枝が声を漏らすと真が振り返った。

「花村もそう思うか？ さっき入った時先輩は平然としてるから俺の気のせいかと思ってたんだが……」

「え？ 椎宮君も？ どうしたってのよ？」

「……昨日と通路が変わってんだよ」

真の言葉に千枝が首を傾げると陽介は静かな、しかし重い口調で言った。千枝は昨日眼鏡をかけてなかった上にそもそも道順を覚えるほどの余裕がなかったからだろうが、真と陽介は絨毯などの家具こそそのままだが道だけが変わっていることに違和感を隠せていなかった。

「まあ僕の場合は……里中さんには話してなかったけど二年前の戦いで所謂シャドウの巣とも言えるような場所が似たようなものだったからね。このくらいは予想の範囲内だったよ」

「へ？」

「ああ、後で説明すつから」

命の言葉に千枝が首を傾げると陽介がそう言い、クマに道順を覚え

るのを任せると彼らは階段を探していく。とはいってもついさつき真と命が行った先は除外されるため割と簡単に階段が見つかり、彼らは上に上がっていき、二階へとやってくる。

「ここは昨日と変わんねえみたいだな。つっても、あるのはこの閉まつてるでかい扉ぐらいだけど」

陽介は目の前にある重厚な扉を見ながらそつちの方に歩いていく、とクマが首を傾げた。

「あれれっ？ 扉の向こう、誰かいるみたいだクマ……」

「まさか、雪子!？」

クマの言葉に千枝が反応し、彼らは扉を開けると中に入っていた。その扉の奥はやはり昨日と変わらぬ大広間。そこにドレスに身を包んだ、背中を向けているからこそ分かる黒髪を長く伸ばした何者かがいた。

「雪子?……」

「天城! 無事か!？」

千枝が声を漏らし、陽介が声をかけながら五人は走り寄る。しかし雪子と思しき者は彼らに背を向けたままだった。

「やっと思つけたのに……雪子、何か変……」

不安げに千枝が声を漏らした直後、どこからともなく雪子と思しき者へとスポットライトが当たる。

「うふふ……ふふ、あはははは!」

それと同時に雪子と思しき者は突然笑い出し、振り向いて真達を見ると驚いた表情を見せた。

「あらあ? サプライズゲスト? どんな風に絡んでくれるの? んふふ、盛り上がって参りましたっ!」

そういう雪子と思しき者はまるで番組のリポーターのよう。と、命は相手の瞳が金色に光っており、雪子本人ではないと直感する。

「さてさて、私は引き続き、王子様探し! 一体どこに居るのでしよう? こう広いと、期待も高まる反面、なっかなか見つかりませんね〜! あ、それとも、この霧でかくれんぼ? よくし、捕まえちゃうぞ!」

身体をくねらせるような動作をしながらハイテンションでそう言う、雪子と思しき者。それは付き合いの長い千枝はともかくまだ知り合って数日程度の真や命すらも本人じゃないと思わせるようなものだった。

「ではでは、さらに少し奥まで、突撃〜！」

そして雪子と思しき者がどういとうと同時。

——ヤラセなし！雪子姫、白馬の王子様さがし！——

まるで空中に投影されたかのように、そんな文字が浮かび上がった。それと同時に辺りから歓声まで響き渡る。

「な……何だよ、コレ!？」

「雪子じゃない……あなた……誰!？」

「うふふ、なーに言ってるの？ 私は雪子……雪子は私」

「違う！ あんた、まさか……本物の雪子はどこ!？」

歓声に陽介が驚いたように辺りを見回し、千枝が声を漏らすと雪子と思しき者はそう言い、それに千枝はまた叫んだ後相手の正体を見切ったかのように続けて叫ぶ。と辺りから今度はざわざわという声が聞こえてきた。

「なんだ、この声……」

「シャドウが騒ぎ出したクマ！」

「それじゃ、再突撃、行ってきます！ うふ、王子様、首を洗って待つてろヨ！」

陽介の言葉にクマが返した後、雪子と思しき者——雪子のシャドウはそう言うのと彼らに背を向けて走り去っていく。

「あ、待ってー！」

「里中！ 止まれ!!」

それを見た千枝がつい追いかけようとするが真が瞬時に叫び、千枝も昨日のことを思い出したのか足を止めて振り返る。

「今の雪子、どういうことなの!？ まさか、あれ……」

「そうクマね……たぶん、もう一人のあの子クマ」

「俺らん時と同じってか……」

「でも、デタラメに騒いでいた訳じゃないクマ。本物のユキチャンは

何かを見せたがってる……それをハッキリ感じるクマ」

千枝の問いかけにクマが答え、陽介が腕組みをして眩くとクマはそう続け、少し考える様子を見せる。

「なんていうか……このお城そのものが、あの子に関係してるっていうか……想像してたより、結構キケンな感じクマ！」

「雪子……」

クマの最後の言葉を聞いた千枝は心配そうに振り返り、今にも走り出しそうになる。が深呼吸するとその踏み出しそうになった足を止め、それを後ろで見っていた命も真達が誰一人気づかぬ内に自身のこめかみに構えていた召喚銃を下ろす。

「……よく出来ました。もし走り出したら足止めにオルフェウスにアギを命じていたところだったよ……順平の二の舞にさせるわけにはいかないからね……」

「はい。心配なんだけど、あたし一人先走って、椎宮君達や後で雪子に迷惑かけちゃうわけにはいかないから……」

「よし、なら皆一緒に急ごう！」

命の笑顔でのしかしその目は心配そうな眼差しをしていながらの言葉に千枝も落ち着くよう深呼吸しながら返し、次に真がそう言う。今度は五人揃って走っていった。

そして階段から上の階層に上がっていった時、突然どこからともなく声が聞こえてきた。

「うふふ……ふふふ……もうすぐ王子様が私を迎えに来てくれます。ふふ……私はいつまでもお待ちしています……いつまでも、いつまでも……」

「ふむー、声は聞こえてくるけど……この辺りはセンセイ達とシャドウの気配しかないクマ。シャドウの動きに気をつけて進むクマ！」

雪子らしき声を聞いた後クマが言い、彼らは了解と頷く。そして警戒しながら城内を歩いていると命がベルトの右側に装填しているダーツを一本引き抜く。

「いたよー」

命の言葉と同時に彼らも身を引き締める。現れたのは今までよく

見かけていた虚言のアブルリーと冷静のベーシエ、そして見覚えのない、カンテラを持ったカラスのシャドウだ。

「俺がアブルリーを倒すから花村と里中はベーシエを！ カラスは先輩、お願いします！」

真はすぐに指示を出す全員が頷き、命は空中を旋回しているカラス目掛けてダーツの矢を二、三本投げ、それがお腹にある仮面のような部位に刺さるとカラスはひゅるるると墜落、命もそれ目掛けてジャンプしながら腰の片手剣の柄に手をやり、すれ違い様の居合い斬りでカラスを斬り倒した。

「くらいやがれ！ ガル!!」

一方陽介は何度も戦ってきたおかげで弱点が分かっているためかその弱点を突こうとジライヤを召喚し、疾風攻撃魔法ガルを放つが、その攻撃をベーシエはかわす。しかしその先には千枝がカードを具現させながら待ち構えていた。

「いけ、トモエー！」

千枝はカードを足で蹴り碎き、自らの人格ペルソナの鎧を呼び出す。そのペルソナ——トモエは薙刀を振るいベーシエを一刀両断に斬り裂いた。

「イザナギー・ジオ!!」

真もイザナギの落とす雷でアブルリーを消滅させる。とまた彼の目の前で数枚のカードが動き出し、真はその内の一枚を取る。それには三日月のような頭をして袋を持っている小人の絵が描かれていた。

「……ザントマン」

彼はその名を悟り、静かに呟いた。

その後、彼らは階段を見つけてまた一つ階層を進めた。

「いらっしやいませ——」

と、彼らが次の階層に足を踏み入れると同時にまたどこからともなく雪子らしき声が聞こえてくる。

「本日は天城屋旅館にお越しいただき誠にありがとうございます。こちらがお部屋でございます。何か御用がございましたらいつでもお申し付けください」

とても礼儀正しい、洗練されたような声。しかしその声はどこか機

械じみたというか義務感で言っているような印象を与える。

「この声は、何を言ってるクマ？　ここは旅館じゃなくてどう見てもお城だクマ」

「つてか、ここって雪子の心から生まれたんだよね？　なのに洋風のお城つて……なんか違和感があるって言うか……」

「あく、そりや俺も分かるわ。なんつーか天城つて、和つていうイメージなんだよな。大和撫子つーの？　おしとやかみたいなさ」

「……だからこそ、か？」

声を聞いたクマの不思議そうな声に続き、千枝と陽介がそう話し合う。と真が考えるように少し黙った後そう呟いた。

「え？」

「俺の推測だが、天城はそういうイメージに反発心を少なからず持っていた。それがこの城に表れているとしたら……」

「なるほどね……案外ありえるかも。勝手なイメージ押し付けられるのって結構辛いものだよ？……僕も色々あったしね……」

真の推測を聞いた命はそれに賛成するように頷き、どこか遠い目で呟く。それに陽介と千枝は訳が分からないままつい黙り込んでしまった。

「まあ、そんな心の推測やってる暇があったら足を進めるよ。はい急いだ急いだ！」

しかし命はすぐ話を切り上げさせ、真達もそれに頷くと足を進め、シャドウ達を戦いながら階段を見つけて五階まで上がる。

「どこにいるクマね……」

「うふふ……ふふふ……」

クマが呟いた直後また声が聞こえ、それにクマがはっとした表情を見せる。

「感じるクマ！　あの子の気配クマ！　きつとこの階にいるに違いないクマー！」

「雪子ー！」

「急ごうー！」

クマの言葉を聞いた千枝が一番に反応し、真もそう言って走り出

す。

「まあ！　そこにいらつしやるのはもしかして……」

しかし少し足を進めると突然そんな声が聞こえ、真達はつい足を止めてしまう。

「もしかして王子様でしょうか？　私は囚われの身です。どうか私を助けてください。うふふ……王子様ならきつと……きつと、どんな困難な道のりも乗り越え私を解き放ってくれるはず……私、お待ちしています……」

雪子らしき声はそう述べていく。

「ふふふ……」

最後に一つ、そう笑い声を零して声は聞こえなくなった。

「なんか変な雰囲気クマ……気を付けるクマ」

声を聞いたクマはそう呟き、彼らに気をつけるよう警告する。と口元に手をやっていた命が口を開いた。

「ごめん、少し考え事をしたいんだ。悪いけどしばらく前線を任せていいかな？」

「え？　あ、はい。分かりました」

「ごめん……クマ君、悪いけどシャドウが真君達で抑えきれなくなったら教えて」

「わ、分かったクマ」

命の言葉に真は頷き、命はもう一度謝った後クマの近くまで歩き寄るとクマにそう言い、クマもこくと頷く。それから命はクマの後ろを歩きながら思考を始めた。

（昨日聞いた天城さんの声の中にあつた“何の価値もない”という自己否定や里中さんへの依存的な台詞、今までの話を組み合わせて考えると天城さんは囚われのお姫様……待ち望むものは自分を連れ出してくれる王子様。こういった傾向を持つ症候群を平賀先輩や山岸から聞いたことがある。たしか、たしかこれは……）

命は高校時代に自分と絆を結んだ、当時管弦楽部長平賀慶介や共にシャドウと戦った仲間である山岸風花から聞いた話を必死に記憶をたどって思い出していた。

(……シンデレラコンプレックス!!!)

そして彼はその症候群の名を心中で叫ぶ。シンデレラコンプレックス、まあ一言で言ってしまうえば童話のシンデレラのようなもの。辛い現実から王子様が助けてくれる、という依存的願望を指摘したものだ。

まあただかっこいい王子に憧れるだけなら何も問題はないとか多分女の子なら一度くらい夢に見るだろう。がシンデレラコンプレックスを持つものはその願望が強く、他人に依存してしまい自主性を見失ってしまう可能性を持つ。そう命は聞いたことがあるが、数年前の断片的な知識ではここまでが精一杯だった。そもそも平賀は医者を目指しているといっても精神科医は専門外のはず、山岸は家こそ医者の家系だが本人は現在自分が好きな機械工学の道を進んでいる。この話すら文化部活動中の単なる雑談の一部を覚えていたに過ぎないものだ。

(この場合、王子様っていうのは里中さんを指すはず……つまり里中さんを上まで連れて行けって天城さんのシャドウは言いたいのかな？……いや、何か違和感が……)

「命先輩！」

命は相手の心理状態を予測し、対応策を考え始めるがその瞬間真から声がかかり、彼の意識が呼び戻される。

「どうしたの？」

「あ、いえ。この扉の先に天城の気配があるそう。花村と里中は行くって」

「あ、ああ。分かった。ちょうどどこつちも思考が一段落したし、戦線復帰するよ」

命の問いに真はそう言い、命が頷いて返すと今度は陽介が問いかけた。

「つーか命さん、何考えてたんですか？」

「んー。まあちよつとした推測みたいなもの？」

「そうっすか」

陽介の問いには命は悪戯っぽい笑みを浮かべてそう言い、陽介は頭

をかきながら返した。

「よし。じゃあいくよ!」

そして最後に千枝がそう言い、五人はその部屋の扉を開けて中に飛び込む。

「うふふ……」

「雪子……じゃない!」

一番に部屋に飛び込んだ千枝はその部屋にいた雪子のシャドウを見て一瞬本物の雪子と見間違えるが直後気づいたように悔しそうな声を漏らす。

「もう一人の天城さん! あなたの望みは里中さんを連れてくることか!?! なら、早く天城さんを返してもらおう!」

千枝の次に口を開いた命に残る四人がえつというような声を漏らす。しかし雪子のシャドウはそれらの言葉を聞いていないかのよう薄く笑みを見せ、同時にその隣に馬に乗った騎士のようなシャドウが姿を現す。

「王子様なら、こんな衛兵に負けるはずなんてありませんよね?」

「お、襲ってくるクマー!」

雪子のシャドウが言ったと同時に、騎士のシャドウから威圧感が発され始めクマが叫ぶと同時に真達も武器を構えた。

「グオオオオオッ!」

騎士のシャドウ——征服の騎士は命目掛けて突進し、左手に持つランスで命を串刺しにしようと突き出す。が命は納刀していた剣の柄に手をやると居合いのように引き抜いてランスの側面に当て、自身より右へとランスを受け流す。

「イザナギ! ラクンダ!!」

その隙に真がイザナギに相手の防御能力を下げさせる補助スキルラクンダを指示し、その発された光の球を受けた征服の騎士の防御能力が下がる。

「ジライヤ! ガル!」

「トモエ! 串刺し!」

そこに陽介のペルソナジライヤの放つ疾風と千枝のペルソナトモ

エの薙刀による串刺しのごとき突きの連続攻撃が決まり、命も剣を納刀してから銃をこめかみに当てる。

「オルフェウス、タルンダ!!」

命がそう叫んで召喚したペルソナオルフェウスが豎琴を鳴らし、さつきイザナギが放ったものと似たような光の球が征服の騎士から力を奪っていく。が征服の騎士は暴れる馬を操るような動作をしながらランスを振り上げ、直後奪われたはずの力を取り戻していく。

「タルカジャか、厄介な真似を!」

「先輩、もつかいタルンダで補助を! 里中、たしかトモエの使えるスキルにタルカジャがあつたよな? 俺に頼む!」

「了解」

「オツケー!」

「俺が時間を稼ぐぜ!」

相手が使用したスキルを予測した命が言うのと真はすぐ作戦を立てて指示、それを受けた二人が頷くと陽介が二本の鉦を手に征服の騎士に向かつていく。

「タルンダ!」

「タルカジャ!」

オルフェウスが豎琴を鳴らして征服の騎士から力を奪い、トモエが仲間を鼓舞する舞のように薙刀を振り回し、真に力を与えていく。

「ペルソナチェンジ、ピクシー! ジオ!!」

真はペルソナを魔術師のピクシーへと切り替えて征服の騎士目掛けて落雷を放つ。そのスキル自体はイザナギが使用するものと同じだが魔術師であるピクシーの魔力はイザナギよりも上、つまり魔術スキルであるジオの威力はピクシーの方が上ということだ。

「どりゃあっ!!」

そしてピクシーのジオを援護に陽介が二本の鉦で連続斬りをくらわし、素早くバックステップを踏んで征服の騎士のランスのリーチ外まで逃げる。

「ハイヤーッ!!」

しかし征服の騎士はランスを振り回し、声を上げる。と陽介の正面

に黒い方陣が浮かび上がった。

「なんだこりゃ!？」

「花村君！ 逃げろ!!」

「え?」

見たことない術に陽介が声を上げるとその術を見た命が悲鳴のような声をあげ、それに陽介が声を漏らした瞬間、方陣が黒い光を発する。

「が、あつ……」

陽介は突然自分の身体から力が抜ける感覚を覚え、膝をつくそのまま倒れこむ。それを見た千枝が目を見開いた。

「花村!!」

「闇属性下級スキル、ムドだ！ その能力は対象の相手を呪殺する……まさか成功するなんて運が悪い……」

「そんな!」

「里中さん！ 今ならまだ間に合う！ 地返しの手を持って花村君を助けるんだ!!」

「は、はい!」

命の悲鳴の後千枝が声をあげ、命は咄嗟に指示。千枝は頷くと支給された地返しの手を持って陽介の方に走る。しかし陽介にトドメを刺すつもりか征服の騎士もまた倒れている彼の方向に向けて動いていた。

「ザントマン！ ブリンパ!!」

しかし直後そんな声が聞こえ、謎の音波が征服の騎士を襲う。しかし征服の騎士は何事もなかったかのように音波の方を見た。

「失敗か！ だが花村の元へはいかせん!」

そこでは新たなペルソナザントマンを従えた真が刀を手に征服の騎士を挑発しており、征服の騎士も騎士らしくその挑戦を受けたように真の方を向いた。

「アギ!!」

「グウツ!？」

しかし直後その横つ面を炎が襲い、命が真の横に立つ。

「先輩、騎士道精神っていうのを……」

「相手はシャドウだよ？ 勝つために最善を尽くすのがリーダーさ」
真がジト目で命を見ながら呟くと命はしれっとそう言い、真も「それもそうか」と呟いた。

「さあいくよ、オルフェウス！ アギ!!」

「イザナギ！ スラツシュ!!」

直後命のペルソナオルフェウスが豎琴をかき鳴らして火炎を撒き散らし、真のペルソナイザナギが刀を構えて征服の騎士に斬りかかる。それからオルフェウスの炎を援護にイザナギは征服の騎士との斬り合いを演じ始める。

一方千枝、彼女は倒れている陽介に走り寄るとその胸の上に地返し
の玉を押し付ける。

「花村！ お願ひ、起きて!!」

千枝は目を閉じて必死にお願いする、と地返し
の玉が光を放ち、その光が陽介の中に入っていくと地返し
の玉は役目を果たし終えたかのように砕け散った。

「つ……俺は……」

「花村！ 大丈夫!?!」

「お、おう……」

陽介がゆっくりと目を覚まし、起き上がると千枝は声をかける。それに陽介は頷いた後、現在壮絶な斬り合いを演じているイザナギ達を見る。

「そうだ、椎宮達を助けねえと……」

「うん!」

陽介の言葉に千枝も頷き、二人の背後にペルソナが出現した。

「くうっ!」

そしてイザナギVS征服の騎士。真は苦しげな声を漏らしていた。オルフェウスの援護があるとはいえやはり刀とランスではリーチが段違い、苦戦を強いられていた。

「っっ!」

イザナギの刀が征服の騎士が振るつたランスに弾かれ、征服の騎士のランスの毒々しいオーラがまとわれる。

「マカジヤマー！」

しかしランスが突き出される直前、そんな声と共に緑色の光が征服の騎士を包み込み、そう思うと征服の騎士のランスを覆っていた毒々しいオーラが消えていき、さらにランスのスピードも下がる。

「今だ！ 椎宮!!」

「ああ！ チエンジ！」

援護してくれた陽介の言葉に真が叫んで返し、イザナギがカードに戻っていく。そして真はそのカードを砕いた。

「ザントマン！ 脳天落とし!!」

そう叫ぶと共に小人が征服の騎士の脳天に一撃を叩き込み、征服の騎士はふらふらとふらつく。

「オルフェウス！ アギ!!」

「トモエ！ ブフ!!」

そして真のオルフェウスが放った炎と千枝のトモエが放った氷の弾丸が征服の騎士を貫き、その連発魔術攻撃がトドメとなって征服の騎士は黒い霧と化して消滅していった。

「うふふ……」

征服の騎士を倒した後、そんな笑い声が聞こえてくる。そこでようやく気づいたがいつの間にか雪子のシャドウの姿が部屋から消えていた。

「あなたが本当の王子様ならきつとまたお会いできるでしょう。私は所詮、囚われの身……ここから出ることなど叶わないのだから……」

聞こえてくる声、それはまたうふふという笑い声を最後に消えていき、真はクマから「気配が消えたクマ」という言葉を聞いてようやく気を抜き、命の方を向いた。

「先輩、戦う前に言ってた天城のシャドウの目的ってどういうことですか？」

戦いの余韻もつかの間、真が命に尋ねてくる。

「ああ、この部屋に入る直前まで思考していたのはそれだよ。天城さ

んがこの城を生み出している心の状態には恐らくシンデレラコンプレックスが関係してるんだ」

「シ、シンデレラコンプレックス？」

命の言葉に千枝が不思議そうな声を漏らす、と真が口を開いた。

「聞いたことがあります。一言で言ってしまうえば女の子の『王子様が自分を助けてくれる』という心理状態を示すものだって」

「天城が、それを……あ、言われてみりゃあ。つまり、その助けてくれる王子様が里中ってことですか!？」

真の説明の後陽介が言い、命はそれに首肯を示す。

「王子様、里中さんが相手の目的だと思っただけけど……」

「……先輩、里中が王子だなんてありえませんか！」

命の眩きの後真が気づいたような表情で漏らし、千枝もうんうんと頷く。

「そうだよ！ 私女だもん！」

「性別的な問題じゃない。二階で最初に天城のシャドウを見つけた時あいつはこう言っていました。『私は引き続き、王子様探し！ 一体どこに居るのでしょう？』こう広いと、期待も高まる反面、なっかなか見つかりませんね〜！』」

真は妙に上手い雪子のシャドウの物真似まで行い、それに陽介が頬を引きつかせる。

「……椎宮、わざわざ口調まで真似しなくていいと思うぞ？」

「あ、悪い。あの時は単に霧で里中の姿が見えてなかったと考えたとしても直後天城のシャドウは里中と会話した。もう一人の天城であるあいつがそれで里中と気づかないのは不自然だし仮に気づいたとしても、あいつはその後王子様探しを続けるという発言をしていたはずです」

「……言われてみればたしかに。ってことは僕の推測は的外れってことなのか？……」

真と命はそう会話をしていく、と千枝がふらついた。

「う……我慢してたけどやっぱ、もう限界……」

「はあ、俺もだ。さっきので全力使い果たした……」

千枝に続いて陽介も膝を折って座り込みながら言い、残る二人は顔を見合わせる。

「二人も疲れてるんじゃないやもう撤退するべきですかね？」

「まあ、退きどころとしては正しい判断だよ……文字通り、鍵も見つけたしね」

真の問いかけに命もそう返し、一旦かがみ込むと何か拾い上げた。

「それは？」

「ガラスの鍵。シンデレラのガラスの靴の代わりかな？ 真君、君が預かっててよ」

「……分かりました」

真の問いに命は拾い上げたガラスの鍵を右手で弄びながら返し、ぽいつと真に向けて投げる。それに真も領いてガラスの鍵を受け取った。

「さて、じゃあ帰るよ」

次に命はカエレールを取り出して上に掲げ、ここにいる全員をこの古城の入り口前まで移動させる光景をイメージする。

「転移、城門前！」

そしてそう叫ぶと共に、この城の一階での実験と同じように彼らを光が包み込んだ。

第九話 舞踏会の終焉

4月19日、朝。真は昨日の探索の疲れが残っているのかこつている肩をほきほきと鳴らしていた。すると突然電話が鳴り始める。

「もしもしっ。」

「もしもし……ふいにお呼び止めして済みません。過日、ベルベツトルームにてお会いしました、マーガレットでございます」

「ああ」

電話の相手はベルベツトルームにいた銀髪の美女——マーガレットだ。

「ひとつ……大切な忠告を忘れておりましたので、お耳に入れようと思ひまして」

「忠告？……詳しくお願いします」

「はい……コミュニティがもたらす絆もまた、ペルソナの力を高める大きな源……時を争い、ただ戦いだけに邁進しても、それで人が真に満たされることはないでしょう。どうか、日々を無為に急がず、あなたの信じる歩調を大切になさいますよう。お忘れなきように……それでは、失礼いたします」

マーガレットの忠告の言葉が終わると電話は切れ、真はその忠告を考える。

「つまり、よく考えて一日一日を送れ。というわけか……」

そしてそう呟き、荷物を持つと学校に行くため家を出て行った。

それからその道中、真は後ろからジャージの男子生徒が自分を通り越していき、目の前を歩いている制服の男子生徒に話しかけるのを見る。

「よう」

「おー、どした？ 朝練か？」

「部活入ってないやつは今日から運動部に入れるだろ？ 走ってるだけで、少しは宣伝になるんじゃないかねーかと思って」

ジャージの男子生徒は明るくそう言っている、と制服の男子生徒が呆れた様子を見せた。

「あのさ……お前、その格好で走ってても、何部だか分かんなくねー？」

「ごもつともなツツコミ。それにジャージの男子生徒は困った様子でうつむく。」

「……考えてなかった」

「ははっ。まあでもお前らしいよ。ウチの部も新人、入るといいなー。やっぱテンション上がるしきー」

そしてそう呟く、と制服の男子生徒は明るく笑ってそう返し、続けてそう言うと言わんばジャージの男子生徒が首を傾げた。

「お前んところは勧誘しねーのか？」

「やー、どうだろうな。みんな女子マネ欲しいとか言ってるけど……あ、そーだ！ 今日の帰り、商店街の神社寄ってこーぜ。新人が入りますように」って、お参り」

「神頼みかよ……別にいいけどな」

制服の男子生徒の言葉にジャージの男子生徒が呆れたように言い、その案に頷く。とジャージの男子生徒が思い出したように続けた。

「そーいや知ってるか？ あの神社、何か住み着いてるって話」

「聞いた聞いた。それ、ホントなのかね？」

そんな話を後ろの方で聞きながら真はふと考える。

（部活か……剣道部があればいいんだが……まあ、まずは天城を助け出してから考えよう）

真は前の学校でもやっていた剣道部がこつちにもあるかと思いを馳せながら、しかし今最優先すべき事項にも思いをやりつつ学校に向かっていた。

それから放課後、少々所用があったものの彼らは今日もここにやってきて、すぐクマの案内で城門前へとやってきていた。

「あ、そうそうセンセイ。ちよつと調べてみたけど、どうやらこの前最後まで行った階層まですぐ行けるみたいけど、どうするクマ？」

「本当か？ ショートカットできるのか!？」

「クマ」

「それは助かるね」

クマの言葉に陽介が聞き返すとクマは頷き、命が続くと真も頷いた。

「ああ。どういう原理なのかはこの際置いておく、急ごう！」

真の言葉に残りメンバーも頷き、彼らは入り口に立つと真がこの前最後に到達した階層のイメージを思い浮かべながら城に入っていく。そして彼らがやってきたのは確かに古城の五階だった。

「急ぐぞー！」

近道できたのは嬉しい誤算だがのんびりする理由にはならない。真はそう意味を込めて言い、陽介達も頷くと一気に第五層を走り抜け、当時考えに没頭していた命はずかり知らぬ事だが鍵がかかっていたドアの前にやってくるとガラスの鍵を使い、扉を開ける。そしてその先にあつた階段を走り上つていった。

「言ってみれば、現役女子高生女将……といったところでしょうか？　なんともこう、惹かれる響きです。お話うかがってみましょう……すみません！」

六階に上がった時に聞こえてきたのは以前テレビで雪子にセクハラまがいの質問をぶつけていたりポーターの声だった。

「うるさいー！」

その言葉に対し雪子の強い拒絶の言葉が飛び出す。

「あ、あのさ、天城。ちよつと訊きたい事あるんだけど……天城んちの旅館にさ、山野アナが泊まってるって、マジ？」

「うるさいうるさいー！」

「でも継ぐわけでしょ？　ていうか和服色っぽいね。男性客、多いでしょ？」

「私に構わないで！　もうウンザリ！……ウンザリよ……」

「色々な声が飛び交ってよく分かんないけど、気配は近づいてきてるクマ。頑張るクマー！」

噂好きのクラスメイトに再びポーターの声。それらにも雪子は吐き捨てるような声で拒絶を行っていた。それらの声に対しクマが言い、千枝は浮かぬ顔を見せる。

「あ、あたし……雪子の事全然分かってなかったんだね……雪子ん家

のことを自分のことみたいに自慢して……」

「勝手に落ち込んでる暇があるなら足を動かす。天城さんを助けてから謝ればいいんだよ」

「は、はい！ よし、急ごう！」

千枝の言葉に命が返し、それに千枝は頷くと走り出し、真達もその後を追いかけて始めた。千枝は彼らより数歩先を走り、曲がり角を曲がる。

「きやあああああつ!!!」

直後聞こえてきたのは千枝の悲鳴、それに三人はスピードを上げて曲がり角を曲がった。

「里中っ！ どうしたっ!?」

「む、む、む、虫っ！ 虫がいるっ!!」

曲がり角を曲がりながら声をかける陽介に対し、千枝は腰を抜かしたように座り込んで顔面蒼白に涙目になりながら陽介達の方を向いて声を上げる。その震える指の先にはたしかに赤い甲殻をした巨大なカブトムシが二匹いた。その角の先に仮面がついている。

「だ、大丈夫か、里中？」

「む、無理無理無理っ！ あんなのと戦えないよおっ!!」

陽介の言葉に千枝はぶんぶんと首を横に振って叫ぶ。完全にパニックになっていた。それを見た真が素早く千枝達の前に立つ。

「花村、里中を頼む！」

「お、おう！」

「いくよ、真君！」

真の言葉に陽介は千枝を抱き上げて下がっていき、命もそう言って召喚銃をこめかみに突きつけた。

「オルフェウス、突撃!!」

その言葉を聞いたオルフェウスの豎琴に光が宿り、一気にカブトムシに突進するとその勢いを利用してカブトムシをぶん殴る。しかし甲殻が硬いのかあまり聞いてない様子だ。

「物理は利きづらいか……」

「だったら、ペルソナチェンジ！ エンジェル！ ハマ!!」

命の分析に対し真はすぐに天使エンジェルを召喚しカブトムシを光の結界と護符で囲むとその護符から発された光がカブトムシを浄化する。命はそれをちらりと見るともう一体のカブトムシに接近する。

「力で駄目なら——」

そう呟き、同時に命は剣を相手を掬い上げるように振るい、カブトムシを跳ね上げさせる。

「——技でダウンさせるだけっ!!」

続けて角の部分に回し蹴りを叩き込み、勢いをかけてカブトムシを転げさせる。それに命はニヤリと微笑んだ。

「この瞬間を待っていた、しかけるっ!」

「はいっ!」

命の宣言に真も頷き、二人は一気に剣をカブトムシに叩き込む。その剣撃が止んだ後、カブトムシは消滅していた。それから彼らは城内を歩き出す。千枝はめんぼくなさそうにうつむき、陽介も困ったような笑みを浮かべていた。

「まさか、里中が昆虫嫌いとはな」

「うん、あくいうのはほんと無理っというか……」

「まあ、無理はするな。無理に前線に出て無茶な動きをされるより後ろで魔法援護をしてくれ」

「うん。誰にも苦手なものはあるからね。僕らでフオローするよ」

陽介の言葉に千枝が返すと真がそう指示を出し、命も頷く。それに千枝は恥ずかしそうな上目遣いで真達を見た。

「ご、ごめんね?」

「その分、別の奴ら相手ではしっかり活躍してもらおう」

「当然! まっかせといて!!」

千枝の謝罪の言葉に対し真はにやつと笑いながら言い、それに千枝も大きく頷いた。

それからカブトムシのシャドウ「熱甲蟲」を相手にする時は千枝はブフで援護という事になったがちょうどよくそのブフが熱甲蟲の弱点だったことも分かり、他のシャドウも倒しながら彼らは階段を見つけ、上がっていった。

「王子様はまだ来ないの？ 王子様、早く私を連れ去って！ どこか……私の事なんか誰も知らない世界に……」

「近いクマー！ この上にいるクマー！」

聞こえてきた雪子の声、それが聞こえなくなった後にクマが声を上げると四人は顔を見合わせて走り出した。そして道中のシャドウを走りながら倒れていき、階段を見つけると一気に駆け上がる。その先には一階から二階に上がったときと同じような重厚な扉があった。

「その先クマーっ！」

扉を見た瞬間クマが叫び、それを聞いた千枝が一番に飛び出して扉を蹴破る勢いで開け放った。

「雪子っ!!」

一番に飛び込んだ千枝が声を上げ、続けて残りのメンバーも部屋に飛び込む。この古城の最上階、そこは所謂謁見の間のような作りで入り口から伸びる紅い絨毯の先は長い階段状になっており、その階段の最上階には玉座があり、その玉座の部分に雪子のシャドウが、階段の下にいる和服姿の雪子を見下ろしていた。

「やっぱりだ、天城が二人！」

「天城！」

「今助けるからね、雪子！」

陽介が声を出し、真と千枝が雪子を助け出そうと走り出す。とその瞬間彼らの足元の絨毯がまるで意思を持っているかのように動き出し、彼らに巻きついていく。

「な、何これっ!?! 動けない!?!」

「オルフェウあっ!?!」

千枝が声をあげ、咄嗟に命がペルソナを召喚しようと召喚銃を構えるがその引き金を引く前に命も絨毯に捕まってしまい、さらに取り落とした召喚銃はカララララと乾いた音を立てて床を滑っていく。

「くっ、離せっ！」

「ちくしょー！ どうなってんだよ!?!」

「クマー!?!」

あっという間に全員が絨毯に絡め取られてしまっていた。

「あら？　あららららららあ？」

そしてようやく雪子のシャドウが口を開く。

「やっだもう！　王子様が四人も！　もしかしてえ、途中で来てたサプライズゲストの皆さん？　いやくん、ちゃんと見とけば良かったあ！」

雪子のシャドウは不自然に身体をくねらせて歓声を上げ、彼らを甘く酔ったような瞳で見た。

「つーかあ、雪子どっか行っちゃいたんだあ。どっか、誰も知らない遠くう。王子様なら連れてつてくれるでしょお？　ねえ、早くう」やはり不自然なほどに媚びた言動、しかしそれよりも前におかしい点に千枝が気づいた。

「ちよ、ちよつと待ってよ。王子様が四人つて、ここにいる男つて椎宮君に花村、あと命さんで三人だよ！？　数おかしくない！？」

「ま、まさか四人目はクマクマ!？」

「いや、昨日も推測してたけど……やっぱり王子様の一人は里中さんだよ」

千枝の言葉にクマが驚きの声を上げる、と命が冷静にそう言つて雪子のシャドウを睨みつける。

「そうだろう？　天城さんのシャドウよ」

厳しい視線で問いかける命……しかし、絨毯に身体全体縛り付けられているため全然かっこついていない。と、命に問いかけられた雪子のシャドウはにっこりと微笑み、金色の瞳を持つ目も細める。

「千枝……そうよ、アタシの王子様。いつだってアタシをリードしてくれる、千枝は強い王子様……」

うっとりとした眼差しに声質での言葉、しかしその声質が突如一変する。

「王子様……だった」

一変して冷たい声質。うっとりとしたような眼差しも刺すようなきついものになっていた。

「……だった？」

過去形の言葉、それに千枝は声を漏らす。

「結局、千枝じゃダメなのよ!」

そして直後放たれた強い言葉に彼女はびくりとした目を見せる。

「千枝じゃアタシをここから連れ出せない! 救ってくれない!」

「……雪子……」

雪子のシャドウの苦いものを吐き出すような叫び、それに千枝が声を漏らす。

「や、やめて……」

それを聞いた雪子が立ち上がって声を漏らす。しかし疲労のせいなのか分からないがその声はとても弱々しかった。

「老舗旅館? 女将修行? そんなウザい束縛……まっぴらなのよ! たまたまここに生まれただけ!なのに生き方、死ぬまで全部決められてる! あー、やだ、嫌だ、嫌あーっ!」

「そんなこと、ない……」

「どっか、遠くへ行きたいの。ここじゃない、どこかへ……誰かに、連れ出してほしいの。一人じゃ、出て行けない……一人じゃ、アタシには何にもないから……」

「やめて、もう、やめて……」

雪子のシャドウは激昂してヒステリックに叫んだと思ったら次には自虐的に呟く、その内容に雪子は弱々しく返すのが精一杯だった。

「希望もない、出て行く勇氣もない……うふふ、だからアタシ、待ってるの! ただじーっと、いつか王子様がアタシに気づいてくれるのを待ってるの! どこでもいい! どこでもいいの! ここじゃないなら、どこでも!」

雪子のシャドウはそこまで言うで一息をつく。それから見せる表情は苦虫を何匹も噛み潰したように苦々しかった。

「老舗の伝統? 町の誇り? んなもん、クソ食らえだわっ!!」

「なんてこと……」

雪子のシャドウの吐き捨てるような言葉、それに雪子はとがめるような声を出すが雪子のシャドウはニヤリと笑みを歪ませて雪子を見た。

「それが本音。そうでしょう? もう一人のアタシ!」

「ち、ちが……」

「よせ、言うなっ!!」

雪子のシャドウの言葉に雪子は声を震わせる。それを聞いた陽介が慌てて声を漏らした。

「違う! あなたなんか、私じゃないっ!」

「うふふふふ……いいわあ! 力が漲ってくるう! そんなにしたら、アタシ……うふ、あはは、あはははは!!」

しかし間に合わず雪子の口から紡がれる、禁句。それを聞いた雪子のシャドウの周りに黒い影が集まっていき、その影が球体を形作って天井へと上っていく。と、突然天井から鎖に繋がれた鳥籠が落つてきた。

「我は影、真なる我……さあ王子様、楽しくダンスを踊りましょう?」

落ちてきた鳥籠の中にいるのは真紅の立派な翼を持ち、籠の入り口は開いているのにそこから飛び立とうとしない、雪子の顔を歪めて笑っている人面鳥。それを雪子は震えながら見上げていた。

「雪子、逃げて!!」

千枝が思わず叫ぶ、がその瞬間どこからともなく小さな、しかし一人入れるには充分すぎる大きさの鳥籠が飛んできて雪子をあつという間にその中に閉じ込める。そしてその頭上に鎖が巻きつき、囚われた雪子は千枝達から離されてしまう。

「雪子っ!!!」

「千枝ーっ!!!」

響き渡る二人の悲鳴、それを聞きながら命はもがき、どうにか絨毯から右腕を解放すると今度は滑り落ちた召喚銃に懸命に手を伸ばし、銃を手にとると自身のこめかみに押し当てる。

「オルフェウス!」

ガラスが割れるような音と共に召喚される幽玄オルフェウスの奏者、それが豎琴を構えると命は他のメンバーの方を見た。

「少し熱いが我慢しろ! オルフェウス、アギ!!」

命が警告を叫び、続けてオルフェウスに指示。それを受けたオル

フェウスは豎琴をかき鳴らして炎を生み出し、その炎が絨毯を焼いていくと一番に千枝が脱出して立ち上がり、雪子のシャドウを見る。

「待ってて、雪子……あたしが全部受け止めてあげる！」

「あらホントお？……じゃ私も、ガッツリ本気でぶつかってあげる！！」

千枝の言葉を聞いた雪子のシャドウが口元を歪め、直後雪子のシャドウが翼を広げると爆発が千枝目掛けて広がっていく。

「タルンダ!!」

しかし命が続けてオルフェウスに指示を送り、その光が爆発の威力を弱める。

「ゆけ、ナタタイシ！ 突撃!!」

「援護しろジライヤ！ ガル!!」

そこに少し遅れて脱出した真が新たなペルソナナタタイシに突撃を指示し、ナタタイシは光を纏うと物凄いスピードで炎に自ら突っ込む勢いで突進。そこに陽介がジライヤに援護を指示し疾風が出来る限り炎をかき消しナタタイシに道を作り上げた。

「フフフ……」

しかし雪子のシャドウは籠の中に閉じこめるとナタタイシの突進を弾き返す。

「くっ、硬いつ!?!」

「だったらこれでどうよ！ トモエ！ あたしにタルカジャ!!」

真が声をあげ、それを聞いた里中はトモエを召喚すると自分に、対象の力を上げさせる補助スキルタルカジャを指示、その意思を汲み取った真がなるほどと頷いた。

「ナタタイシ！ ラクンダ!!」

「ジライヤ！ 里中にスクカジャ!!」

真に続いて陽介も分かったように千枝を援護、それを受けた千枝はスクカジャの力によってさらに増したスピードで雪子のシャドウに突進、その炎をかわしながらペルソナカードを具現した。

「来て、トモエッ！ 串刺し!!」

「ツアッ!?!」

そう言い、ペルソナカードを走りながら蹴り砕くと共に姿を現したトモエが光を纏った薙刀で檻の隙間から雪子のシャドウを突き刺し、雪子のシャドウが小さく悲鳴を上げ、同時に籠の扉も開く。とそれを見た千枝も思いつきりジャンプした。

「どりゃああああああああつ!!!」

「グフウツ?!?」

そして気合の叫びと共にドロップキックを雪子のシャドウに打ち込み、その蹴りをモロに受けた雪子のシャドウは苦しげな声を上げて籠の中に叩きつけられた。それから千枝はその蹴りの反動で空中を華麗に飛ぶとすたつと着地する。

「すげえなおい!」

それを見た陽介は声をあげ、籠の中に叩きつけられた雪子のシャドウは何事も無かったように元の位置に戻った。

「んふふ、まだまだよ。もおつと強さを見せてちようだい! いらっしやい……アタシの王子様……ンフフフ……」

雪子のシャドウがそう言うとその傍らにスポットライトが当てられ、そこに頭の上に王冠を乗せて金髪で赤い服を着た、ここまでだけ言えば一般的な王子様のイメージだがその外見はズンぐりとした二頭身程度の見た目としてはブリキ製のようないメージの人形が姿を現す。

「なんだあいつ?」

「気にすんな! 天城のシャドウを倒せばいいだけのことだ! ジライヤ、突撃!!」

「うん! トモエ、ブフ!!」

「オルフェウス、突進!!」

その姿を見た真が声を漏らす。陽介は気にもせずジライヤに攻撃を指示し、ジライヤが光を纏った手裏剣を投げると続いてトモエが氷の粒で攻撃、さらにオルフェウスが光を纏った豎琴で雪子のシャドウをぶん殴った。

「グウウツ!!」

雪子のシャドウはそれに苦しげな声を漏らす、と先ほど雪子のシャ

ドウが生み出した人形——とりあえず雪子のシャドウの言動から、王子”と呼称しよう——が雪子に向けて剣を振る。すると雪子のシャドウの傷が癒えていった。

「王子様……」

「げっ!? ああのシャドウ地味にうぜえぞ!」

それに雪子のシャドウが恍惚の声を漏らし、陽介が声を上げると命が剣を抜いた。

「あいつは僕が倒す! 皆は天城さんのシャドウを!」

命はそう言うのと王子に突進し剣を振るう、それに対し王子も勝負を受けるといのように剣を構えて命の剣を受け止め、いとも簡単に押し返して見せた。

「ぐっ!?」

小柄な体型に見合わない力に命はふらつき、王子の剣に光が灯ると命は咄嗟にバックステップを踏む。と同時に鋭い一閃がさつき命がいた場所を斬り裂き、完全にかわしきれなかったのか命の左肩から血が流れ出す。しかしもしかかわしていなかったら防御が間に合わず最悪戦闘不能ほどの怪我をしてしまう可能性すらある一撃だ。

「思ったよりやるね……ただの取り巻きと思って油断してたよ」

「……」

左肩を押さえながらの命の言葉に王子は何も返さずに剣を構えなおす、と命は中距離の状態から剣を突き構えに持っていった。

「!」

と命は中距離から一瞬で王子の懐に潜り込むと鋭い突きを見せ、モロに受けた王子はしかし耐え切りながら剣を振り下ろす、が命はそれを素早いフットワークでかわして剣撃が止むとバックステップを踏む。

「桐条先輩仕込みの必殺の突きと真田先輩仕込みのフットワークさ。驚いたろ?」

命は自らにシャドウとの戦いの基礎を覚えてくれた頼れる先輩二人を思い出しながら静かにそう呟き、王子が再び剣に光を纏わせて剣を振り下ろす。しかし命は今度はその剣を片手で持った自身の剣で

いとも簡単に受け止めてみせた。

「最初は驚いたけど。考えてみたらこんな攻撃、順平の大剣に比べたら全然軽いものだよ」

次に思い出すのは自分と一緒に馬鹿をやったり、戦いの時はつかかってきたり協力し合ったりした親友の、威力重視な大振りのせいでよく外れるものしかし頼りになる剣。そう言いながら命は王子の剣をキインツと澄んだ音を立てながら押し返す。そして命は剣を鞘に収めて居合いの構えを取り、王子はまた剣に光をまとわせるとジャンプして命に飛び掛りながら剣を振り下ろし、命も剣を引き抜いた。そして二人が交差し、王子は着地する。

「ぐっ……」

直後王子の剣が当たったのか命の額が切れて血が流れ始め、しかし彼がゆっくりと剣を鞘に収めると同時に王子は黒い霧となつて霧散していった。

「くそ……不覚だった。真君！　ごめん、一旦下がって傷を手当する！」

「はいー！」

命は額の血を拭いながらそう呟くと、額から流れる血で視界が覆われると不利になると判断したのか一旦戦線離脱を真に言い、真もそれに頷くと命は傷薬を懐から取り出しながら一度後方に下がっていった。

「王子様っ！　王子様っ！」

王子が倒された雪子のシャドウは取り乱したように叫び、また彼女の横にスポットライトが灯る。しかしそこから現れるものはもういなかった。

「なんで、なんで来てくれないの……」

「誰も来ない！　この隙を狙え！！　イザナギ、ジオ！！」

「おう！　ジライヤ！　ガル！！」

「トモエ、脳天落とし！！」

雪子のシャドウがわなわなと震えた声で呟き、その隙を突くように

真がイザナギを召喚して落雷を起こし、さらに陽介のジライヤが疾風を巻き起こし、続けて千枝のトモエが鳥籠から頭を出していた雪子のシャドウの脳天に踵落としを叩き込む。

「グウツ!？」

その連続攻撃に雪子のシャドウは声を漏らし、次にギロツとした視線で彼らを睨みつける。

「ケツ、期待外れもいいところだわ。あんたら王子でもなんでもない……死ぬ、クズ男ども!!」

雪子のシャドウがそう叫んで翼を羽ばたかせた直後、彼らを爆発が包み込む。

「千枝っ、千枝っっ！　お願い、もう止めて!!」

その爆発に千枝が巻き込まれたのを見た雪子が悲鳴をあげ、格子に手をやって泣きそうにうつむきながら自身のシャドウに懇願する。

「ナタタイシー！」

そこに響く真の声、と同時に爆発によって出来た煙の中からナタタイシとその力の恩恵を受けた真が飛び出してきた。

「ナタタイシ、ソニックパンチ！」

「っ!!」

真はナタタイシに指示を出しながら自身も刀を振り下ろす、それを見た雪子のシャドウは咄嗟に鳥籠に閉じこもり、直後ナタタイシの光をまとった拳と真の刀が鳥籠に刃り、ギインという鈍い音を響かせる。

「王子でもなんでもない？　当然だ！　俺はそんなものになった覚えなんて一瞬たりともない!!」

雪子のシャドウに至近距離から、爆発のせいかところどころ焦げた鎖帷子を纏って頬に煤をつけながら叫ぶ真。その剣幕に雪子のシャドウが若干押される。そして真は鳥籠の隙間に足をひっかけると再びペルソナの力によって向上した脚力を以って上空を舞い、刀を振り上げると勢い良く鳥籠に叩きつける。

「自分一人じゃ何も出来ない？……そんなの、誰だってそうだ!!」

「そうよ！」

真の声に続いて聞こえてきた声、それと同時に煙の中からトモエがその腕に千枝を抱えながら空を滑空する。その身体もやはり煤で薄汚れていた。そしてトモエが千枝を投げ、千枝が鳥籠に蹴りを入れて籠にしがみつく。

「雪子がいけないと何も出来ないのはあたしの方！」

千枝は迷いなくそう叫び、それに雪子のシャドウだけじゃなく雪子も驚いたように目を見開く。

「あたし、雪子みたいに美人でもおしとやかでもないし、勉強も出来ないし、家でなんの手伝いもしてないし……雪子には敵わないと思つた。だからあたし、雪子に頼ってもらいたかつた！ でも、でも……」

千枝はそこまで言うと一度声を止め、首を横に振る。

「そんなの違つた！ あたしはただ雪子に頼られてることに甘えて、雪子を籠に閉じ込めてた！ ごめん、雪子!!」

「千枝……」

千枝の泣きそうな声での言葉、それに雪子が声を漏らす。そして真が籠に掴まりながら再度刀を構える。

「お前らの友情の間に邪魔なものがあるんなら!!」

「それを、俺らがブツ壊す!! いけ、ジライヤ!!」

真の言葉に続いて煙の中から聞こえる声、そして煙が疾風で吹き飛ばされ、そこから陽介と、手裏剣に光を灯らせているジライヤが姿を現す。

「里中、離れる!!」

「ジライヤ！ ソニックパンチ!!」

真が叫んで宙へ舞うと同時に千枝も籠から飛び降りる。その直後陽介が叫び、ジライヤが投擲した手裏剣が猛スピードで雪子のシャドウを覆っている籠に向かっていく。

「来い、イザナギ!!」

そこに真はイザナギを呼び出す。さらに真の右手には一枚の、赤い剣が一本書かれているカードが握られていた。

「スキルカード、発動！」

真が叫ぶと同時にカードに書かれている剣が光を放ち始め、その光

がイザナギを覆っていく。

「イザナギ！ 閉ざされた籠をぶった斬れ！！ 二連牙！！」

真の声と同時に、イザナギが光を纏った刀を鋭く左右に振るった二連撃とシライヤの放った手裏剣が同時に鳥籠に当たり、バキインと音を立てて鳥籠が碎け散る。

「そんな!？」

「いけ!!」

「里中あつ!!」

自らを覆っていたものが壊れた雪子のシャドウが驚愕の声をあげ、真と陽介が叫ぶ。それを聞いた千枝は自らの前にペルソナカードを具現させた。

「お願い、トモエツ!!」

その言葉と共に現れるもう一人の自分——トモエは雪子のシャドウを見て何か決意を秘めた瞳を見せると跳躍、一気に雪子のシャドウ目掛けて突っ込んでいった。

「飛んでけーっ!!」

千枝が蹴りのポーズを取り、トモエの動きとシンクロする。そのトモエの蹴りが雪子のシャドウに突き刺さった。

「アアアアアアアッ!!」

雪子のシャドウは悲鳴を上げて空中に吹き飛ばされ、天井に激突。その後、赤い羽がぱらぱらと部屋中に降り注いだ。

「雪子ー!」

雪子のシャドウを蹴り飛ばした後、千枝は雪子の方に走っていく。と雪子のシャドウが消えた影響か雪子を閉じ込めていた鳥籠も少しずつ消えていった。

「雪子!! 大丈夫? 怪我は無い!？」

「う、うん……」

千枝の心配そうな言葉に雪子は曖昧に頷く、と彼女は自分の視界にまた自身のシャドウが黙って立っているのを見て顔を強張らせ、顔を横に振る。

「わ、私、あんなこと……」

「分かつてる」

雪子の言葉に対し真が一番に頷いて返す。

「ああ。天城、お前だけじゃねーよ。誰にだって人には見せらんねー、自分でも見たくねーモンはあるんだ……」

真の言葉に続いて陽介も頷く、とその次に千枝が口を開いた。

「雪子、ごめんね……あたし、自分のことばっかで、雪子の悩み、全然分かってなかったね。あたし、友達なのに……ごめんね……」

千枝は泣きそうな声で謝り、実際涙が出てきたのかジャージの袖で涙を拭う。

「あたし、ずっと雪子が羨ましかった……雪子はなんでも持っていて、あたしには何にもない……そう思っていて、ずっと不安で、心細くて……だからあたし、雪子に頼られていたかったの……ホントは、あたしの方が雪子に頼ってたのに……」

千枝はそこまで言うとう首をふるふると横に振る。

「あたし、一人じゃ全然ダメ……椎宮君や花村、命さんにも、いっぱい迷惑かけちゃったし……雪子いないと……あたし、全然、分かんないよ……」

「千枝……私も、千枝の事、見えてなかった……自分が逃げる事ばっかりで」

雪子は千枝にそう言うとう、何かを決めた表情で自らのシャドウの目の前まで歩いていく。

「逃げたい……誰かに救って欲しい……そうね……確かに、私の気持ち」

そこまで言うとう雪子はぎゅっと強くしかし優しく、自らのシャドウを抱きしめる。

「あなたは、私だね……」

その言葉にもう一人の雪子が頷くとその姿が光に包まれる。直後、雪子の目の前にシャドウとは少し違う異形——ペルソナが姿を現した。ピンク色が基調となっており、桜の花とも翼とも取れる美しい袖を広げている。美しい踊り子のような雰囲気をもとわせるペルソナ。それを雪子は黙って見上げていた。

「……コノハナサクヤ」

彼女がそう呼ぶと同時に、コノハナサクヤはタロットカードとなって雪子の前にゆつくりと降下。そのカードにはローマ数字の「II」、女教皇を意味する数字が書かれていた。そのカードは雪子の目の前まで落ちると光の粒子となつて彼女を包み込んだ。その光が消えた瞬間、雪子は膝を突く。

「雪子!!」

「大丈夫か?」

「うん、少し、疲れたみたい……」

一番に千枝が駆け寄って声をあげ、次に陽介が心配そうに声をかける。それに雪子は疲れたように荒い呼吸をしながら眩き、皆の方を向いた。

「みんな……助けに来てくれたのね」

「当たり前だ」

「うん、当たり前じゃん!」

雪子の言葉に真が返すと千枝も大きく頷く、それに雪子は嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう……」

「いいよ、そんなの……無事でよかった……ホントに……」

「へへ……だな」

雪子のお礼の言葉に千枝はそう返した後我慢の限界がきたのかまた泣き出し、陽介も安心したように微笑む。

「んで、キミをココに放り込んだのは誰クマ?」

「え……あなた、誰?……て言うか……何?」

「クマはクマクマ。で、放り込んだのは誰クマか?」

「この場所に来る前に何が起きたのか。覚えてないか?」

話が一段落下ところでクマが前に出て雪子に核心を問う、が雪子はクマの姿に困惑しており、クマは名を名乗ってから再度尋ね、真も補足する。それに雪子は顔をうつむかせた。

「……分からない。誰かに呼ばれた……ような気がする、けど……記憶がぼんやりしてて、誰か分からないの……ごめんね、えつと……ク

マさん」

「分からないクマか……」

雪子の言葉にクマは落胆したように呟く。

「でも、これではつきりしたね」

「ああ。やっぱ天城をここに放り込んだ誰かがいるってことだ」

しかしこの世界に雪子を放り込んだという確信を得るには充分。

そういうように命が口を開くと陽介も頷いた。

「うむう……ちゅーことは、やっぱヨースケ達の仕業じやなさそうク

マね……」

「おい、まだ疑ってたのか？」

「い、いえいえいえ！　んなこたあーないクマ！」

クマの呟きに真が呆れたように問う、とクマはドキツとしたように

慌てて真の方を向いて弁解を始める。と命が口を開いた。

「それは後にしてとにかく外に出よう」

「うん！　雪子、辛そうだし……」

命の言葉に千枝も賛成し、雪子に肩を貸す。

「んじや、ありがとうね、クマくん」

千枝はクマにお礼を言うのとドアの方に歩き出し、真達も彼女らを

ガードするように彼女らを挟んで歩き出す。

「え、ちよ、クマを置いてくつもり!？」

とクマが慌てたように口を開き、それに陽介が首を傾げた。

「置いてく?　何言ってるんだ。お前、こっちに住んでんだろ」

「それは……そうクマ……でも……」

陽介の言葉にクマはごにごによと寂しそうに呟く、と雪子がクマ

の方に歩いていった。

「ごめんね、クマさん。また今度改めてお礼に来るから……それまで

いい子で待っててね」

まるで子供をあやすような口調と仕草で、雪子はそつとクマの頭を

撫でる。

「ク、クマ……」

それでクマはあつさり機嫌を直した。

「つーかあ、クマねえ、どつか行つちやいたいんだあ。ねえ、早くう」
そして調子に乗ったか人の黒歴史を真似、それに辺りの空気が凍る。

「……さて、カエレル使って帰ろうか。クマ君抜きで」

「そつすね。クマ、お前は一生そこにいろ」

命は手のひらサイズのカエルの置物——カエレルを取り出して
そう言いだし、それに陽介も頷いた後クマを冷たい目で見ながら続ける。

「ま、待ってー！ ごめんなさいクマ〜!!」

それにクマは必死で命達にすがりつき、命達は苦笑を漏らし合った
後、きちんとクマも連れて城門前に転移。入り口広場まで歩いていく
途中で命が口を開いた。

「そうだ。皆、天城さんのことだけど、ジュネスで発見したとはしない
方がいい」

「え？ なんでつすか？」

「もしこれでジュネスが事件と関係があると判断されたらこつちも身
動きが取り辛いからね。ただでさえテレビに入るなんて一般人には
信じられないような珍現象なんだ。だったらいつそ別のところを発
見現場に仕立て上げた方がいい」

「仕立て上げるって……」

命の言葉に陽介が聞き返すと命はそう説明、それに真は頬を引きつ
かせるが少し考えると頷いた。

「だが、たしかにその方がいい。もしこれでジュネスに警察が配備さ
れてテレビに入れなくなったら元も子もないからな。事件がこれで
終わるならいいんだが……」

「まあね。天城さんも、そういうことで口裏合わせ、お願いできるかな
？」

「は、はい……」

真の言葉に命がそう言い、次に雪子に尋ねると雪子も曖昧に頷い
た。そして彼らはテレビを出てから人目につかないようジュネスを
出て行く。

「じゃああたし、雪子家まで送ってくね？」

「僕も同行するよ。どうせ泊まってる旅館だし、女の子一人じゃ大変だしね」

千枝が雪子に肩を貸しながらそう言うのと命も言い、それに千枝がお願いしますと頭を下げてから三人は歩き去っていく。それを見届けてから真と陽介は一旦情報を整理するためフードコートまで戻っていった。

「とりあえず、天城が今までの二人と同じ手口で、その……殺され掛けたってのは、間違いないよな」

「ああ。それと、恐らくマヨナカテレビに映っていたのも天城のシヤドウだろうな」

「俺もそう思う。天城が現実で押さえつけてたモンがあっちの世界で現実になった……ってことなのか？」

陽介は頭をかきながらそう呟き、がしがしと頭を乱暴にかいた。

「あーダメだ。ますます分つかんね。犯人って一体どんなヤツなんだ？」

「ゆっくり考えてみたいが……流石に今日は疲れた……」

「俺もだ……しゃーねえ。集まつといてなんだけど、今日はこれで解散にしよう」

「ああ……あとは、天城が回復してから話を聞いてみる。俺達に出来るのはこれくらいだな」

「ああ。んじやお疲れさん」

真と陽介は今まで分かったことを要点に纏めると疲れで思考が働かないのかそう言い合い、あとは雪子が元気になった時に話を聞いて、また考えようという結論に至ると解散していった。

一方、命、千枝、雪子の三人。三人は旅館までバスで——幸い運転手を除いて人気がなく、だが念のため話を聞かれないよう後ろの方に座っている——向かっており、その途中で雪子が尋ねる。

「あの、今日私の身に起きたことって……」

「あー、えーつと、なんて説明したらいいのか……」

「元氣になった時に話すよ。詳しく話すには長いし、中途半端な説明じゃむしろ混乱するから」

「そうですか……」

雪子の疑問の声に千枝が頭をかくと命が返し、それに雪子はうつむきながら呟く。

「あ、そういう言い忘れてた」

と命はそう言うのと真剣な目で雪子を見る。

「天城さん、念のために言っておくけど。あつちの世界のことは警察に話さない方がいい。流石に非常識すぎるからね。信じられなくて当たり前、最悪の場合事件を混乱させようとしてるなんて疑われてもおかしくはないから」

「そ、そうだね。うん、止めといたほうがいいよ」

命の念押しに千枝もこくこくと頷いて雪子に心配そうにそう言う。

「は、はい。気をつけます……あの、でもじゃあ皆にはなんて言えば？

……」

「嘘を吐く必要はないよ。この一言で言い……覚えてない」

「え？」

「実際、テレビに放り込まれる前のことは覚えてないわけでしょ？

後で思い出したとしたら別だけど、そうじゃないなら下手に嘘を吐くよりは覚えてないって言った方がいい。あと、発見場所はジュネスじゃないってことにしとくのも忘れないでね。どっか近くの裏路地で里中さんが発見した、とか。そういう口裏を合わせておいたほうがいい」

「は、はい」

困惑する雪子達を前に命は冷静に状況を把握してそう言うっており、それに二人はこくこくと頷く。それからバスが旅館に到着するまで、彼らは天城雪子発見嘘話の口裏あわせを、それぞれ命が真の、千枝が陽介の携帯に電話して五人がかりで行っていた。

それから時間が過ぎて夜。真は晩御飯にクリームシチューを作り、

菜々子と共に食べていた。するとガラガラと玄関の戸が開く音がし、菜々子はぱつと顔を輝かせる。

「帰ってきたー！」

そして玄関の方に走り出そうとするが、帰ってきた父遼太郎が見知らぬ相手を連れてきているのを見ると困惑したように足を止める。

「お、おかえり……」

「こんちやっすー」

「珍しく上がりが一緒になったんでな。送りがてら連れてきた」

「どーも、この春から、堂島さんにこき使われてる、足立です」

困惑している菜々子に対し遼太郎が連れてきた若い刑事——足立が軽いノリで自己紹介をする。

「なんだ足立、これでも遠慮してんだぞ？」

「まーた、お父さん。冗談キツイツスよ！ あはは」

遼太郎の言葉に足立は笑いながらそう言った後、真に目を向ける。

「おわつと、そうだ！ 君、たしか天城雪子さんと友達でしょ？ 天城

さん、無事に見つかったからさ！ 皆にも知らせてあげてよ」

「そうですか。お疲れ様です」

「おつと、ありがとう。やく感謝されちゃったよ、なんか照れんなあ」

足立の言葉に真は労をねぎらうように言い、それに足立はにかつと笑った後次はたははと照れくさそうに笑って頭をかき、その後には難しそうな顔を見せた。

「でもでも、まだ全てがクリアってわけじゃないんだけどね。さつき訪ねた帰りなんだけど、天城さん、居ない間のこと覚えてないんだつてさ。それに、その間の彼女の足取り、まるで本当に消えたみたいで、実はウチらも掴めてなくてさ。なーんか怪しいっていうか、裏に何か……」

足立がそこまで言った瞬間、遼太郎が足立の頭をはたく。

「イタあつー！」

「バカ野郎！ いらんこと言うな！」

「す、すいません……」

はたかれた足立が声をあげ、遼太郎が一喝すると彼はしゅんとなつ

て謝り、遼太郎は真と菜々子の方を向いて口を開く。

「気にしなくていいぞ。コイツの勝手な妄想だ」

「……天城を疑っているのか？」

「心配するな。警察は野次馬じゃないからな。こいつの独り言だ。本気にするなよ？」

遼太郎の言葉に対し真が少し目を研ぎ澄ませながら返すと遼太郎は安心させるようにそう言い、真はまた少し考えたと席を立つ。

「分かりました。じゃあ二人の分今からよそうんで、手洗ってください」

「お、おう」

「は〜い」

真の言葉に大人二人は返し、次に真は遼太郎個人に目を向ける。

「あと叔父さん。これからお客を連れてくる時は事前に連絡を。夕食がシチューだったからよかったものを。別のメニューだったら今から追加分作らなきゃいけないかったですからね」

「す、すまん……」

真のごもつともな指摘に遼太郎はすまなそうに謝る。と足立が口を開いた。

「あれ？ 君が食事作ってるの？」

「まあ、両親共働きだから自然と。毎日コンビニ弁当じゃ栄養も偏りますから」

「なるほどね〜」

足立の不思議そうな言葉に真はそう返しながらシチューをよそい、足立はふんふんと頷く。

それから賑やかな夕食が始まり、菜々子も収支笑顔のまま夕食は続いていく。そして夕食が終わると遼太郎が足立を送っていくために二人で家を出て行き、菜々子もはしやぎ疲れたのか眠ってしまう。真はそれを見てふつと優しく微笑むと菜々子を寝室まで連れて行き、布団で寝かせてあげる。

そして真は夕食に使った食器を洗い、お風呂でシャワーを軽く浴びて寝巻きに着替えると流石に疲れが限界に来たのか部屋に戻るとす

ぐ眠りについた。

第十話 四月二十日、永劫の絆と秘密の夜間外出

4月20日。平日のため真は今日も学校に向かっていた。その途中で喪服のお婆さんが猫と話しているのを横目で見て、お婆さんと猫を通り過ぎた辺りで後ろから元気な声が聞こえてくる。

「おっはよー!」

「よお、里中」

声をかけてきた少女——千枝に真も挨拶し、千枝は真の横に並ぶ。

「ね、今の見た? あ猫かわいーよね。前に雪子と一緒にエサあげたことがあってさ。でもなかなか懐かないんだな。ま、あたしは断然イヌ派なんだけどね!」

千枝はにししと笑いながらそう言い、それからまた思い出したようにぱつと表情を変える。

「あ、そだ。雪子からメール来たよ! ちょっとずつ回復してるって。変な後遺症とかもないみたいで、ほんとよかったよ」

「安心だな」

「うん。あとは治るの待つだけだね。そしたら話、ゆっくり聞こう?」

放課後、あたし雪子のお見舞い行くんだ」

雪子が回復しているという報告に千枝は自分で言ってる安心したように微笑み、真もふつと穏やかに笑う。それからたわいもない雑談をしながら彼らは学校に向かっていった。

時間が過ぎて午後、この授業は国語、現代文の時間だ。教室に入ってきたのはパツとしないイメージを与える先生。その右手には自分を横しているのだろう腹話術の人形がはめられている。

「はーいはい、静かにしんしゃーい。授業を始めるかな。現代文担当の細井よ。今年みんな、楽しゅうやろな。どうせ受験なんかしなかる? わざわざ稲羽出なくてもええやん。都会のヤツと競つても、ええことないよ。田舎が一番、一番」

先生——細井は穏やかな口調でそう言っており、親しみやすい先生というイメージを真に与えた。

「ん、じゃあ最初の授業やしな。お手並み拝見するっぺ。つてことで

……「拝見します」の敬語の種類はなんね？　ほい、敬語が苦手そう
な花村っち！」

「うお!?」

いきなり当てられた陽介は声を漏らす。

「や、そりや得意じゃねーけど……悪い！　教えてくれ、椎宮！」

「謙讓語だ」

陽介の言葉に真はぼそぼそと答えを教え、陽介もそれを信じて答える。

「おお、花村っち見直したわいな！　ちゃんと敬語が出来る子やった
んね」

細井は感心したようにそう言い、さっきの問題の解説を始める。

「ふく……椎宮、助かった。お前つてスゲーなあ」

「そりやどうも。だが接客をしてたら敬語は身についてそうないメー
ジなんだがな」

「まーな。でも知識とは別モンだろ、これ」

陽介のお礼の言葉に真はそう言い、陽介も苦笑しながら返す。

それからまた時間が過ぎていき放課後。真は学校を出て行くと商
店街まで行き、商店街にある書店、四目内堂書店にて新発売された本
を買っていく。それから家に直帰するか適当にぶらぶらしようか考
えていると真は商店街に人知れず存在する青い扉――ベルベット
ルームへのドアがふと目に入り、彼はなんとなくドアに手をかけると
ベルベットルームへと向かった。

「あれ……来たんだ。意外とよく来るね、キミ」

それを見て最初に口を開いたのはマリーだ。

「ベルソナ？　スキルカード？　あ、どっちでもいいけど」

実にぎつくばらんとするか愛想のない口調、それをマーガレットが
見咎めるような目でマリーを見た後真の方を向く。

「……失礼いたしました。マリー、少しは控えなさい」

「は？　意味わかんない。ばかきらいとうへんぼく」

マーガレットの言葉にマリーは不機嫌な声に棒読みでまくしたて、
マーガレットは息を吐く。

「フウ……大変申し訳ございません。手に余るじやじや馬っぷりでございます」

「まったくだ」

マーガレットの言葉に真もふつと微笑んで返し、それにマーガレットもフフツと笑う。

「フフ、左様でございます。ですが……これも全て、貴方様の旅の手助けとなれば幸いです」

「……どういう意味だ？」

「ここはお客様の定めと不可分の部屋。この部屋で全く無意味なことは起こり得ません……貴方様は、この部屋での出会いより先に、既にマリーと出会っていらつしやった様子。人ならざる者と出会い、その者と触れ合う貴方様の定めが、その出会いを導いたのでしよう」

「……人ならざる者？」

「左様でございます」

マーガレットの説明の一部に真が反応し、声を漏らす。それにマーガレットはまた頷いた。

「この部屋のお客様たる貴方と、宛てなく彷徨う人ならざる者との運命の交錯……果たしてこの出会いが何を導くのか、失礼ながら私どももその行方には、多少興味がございます」

「……」

マーガレットの言葉にマリーは黙り込んだままうつむいた。

「幸い、貴方より先にこの地にいたとは言え、所詮、マリーは人ならざる者……つまり、貴方の暮らす世界のことを詳しく存じ上げているわけではないのです。ですから……貴方様さえよろしければ、どうぞ彼女をこの部屋の外へ連れ出してやってください」

マーガレットはそこまで言うともマリーの方に目を向け、微笑む。

「ねえ、マリー？」

「べ、別に……」

マーガレットの囁きにマリーは驚いたように声を漏らし、頬を赤らめてうつむく。

「……なんでもない」

マリーはそう呟くが、真はふつと微笑むと頷く。

「分かった。んじゃ出かけるか」

「えっ、ホント!？」

その言葉にマリーは驚いたように目を丸くする。が少しするとどこか呆れたような目を見せる。

「……キミ、いい人すぎじゃない？ そんなんじゃ手玉に取られちゃうよ?……」

マリーはそこまで言うとい旦黙った。

「手玉って……使い方合ってるでしょ？ ちゃんと覚えたんだから」「まあな」

マリーのどこか心配そうな言葉に真はくつくつと笑い、マリーは僅かにむつとしたような顔を見せる。

「……とりあえず、行く?。」

「おおせのままに」

マリーの不機嫌そうな言葉に真はふつと笑って返し、二人揃ってベルベットルームを出て行く。ちなみに真はともかくマリーは多分虚空から急に出てきたことになるんじゃないかと思うのだが、幸いにして周りに人気はなく、怪しまれる心配はなかった。

それから二人は商店街の惣菜大学前へとやってくる。

「はあ、ちよつと落ち着いた。息詰まるよ、あの部屋。狭いし暗いし鼻喋らないし」

「そうか。気分転換になればなによりだ」

マリーの言葉に真はふつと微笑んで返し、マリーは黙って辺りを見回した後真の方を振り向いた。

「やっぱ……何か不思議。懐かしい感じがするんだ……匂いとか」

「懐かしい?。」

「うん、そう。なんとなく懐かしいの」

マリーの言葉に真が尋ね返し、マリーはうんと頷いた後また辺りを見回す。

「ね、色んなものあるね。全然、気にしたことなかったよ」

マリーはそう言う惣菜大学の方を見る。

「肉……串?」

マリーはそう呟くと惣菜大学のカウンターに歩いていく。

「ねえ、それ食べたい。串のやつ」

「あら、いらっしやい。320円だよ」

「……お金ないと食べれない?」

マリーが注文し、それに返す店員の言葉にマリーは困ったように声を漏らし、真は苦笑を漏らすとマリーのすぐ後ろまで近づく。

「買ってやろうか?」

「あるの!? 意外とすごいんだ、キミ」

「……」

真の言葉にマリーは驚いており、真も流石にどうリアクションを返すべきか困っていた。

「あれ? うーっす椎宮。こんな時間買い食いか?」

するとそこに陽介が歩き寄り、真に挨拶した後マリーに目を向けると驚いたように声を失った。

「……可愛い」

陽介はそう声を漏らした後、真に詰め寄る。

「何? 何がどうなっちゃってんの? お前のオトモダチ!」

その言葉と勢いに真は若干引いた後、思いついたような表情を見せる。

「妹だ」

「いもっ!?……」

真の言葉に陽介は絶句し、マリーの方を見る。

「あーでも、言われてみれば目元とか……」

「いもうとじゃないよ、なんでウソつくの?」

しかし陽介の言葉が癪に障ったのか、マリーはジト目で真に言い、それに陽介はガクツという感じのリアクションを取った。

「ウソかよ! 乗っちゃったじゃねーか!!」

「ナイスリアクションありがとう」

「てめー」

陽介の言葉に対し真はイタズラっぽく笑いながら返し、陽介も悪態

をつきながら笑い声を漏らす。

「つかバレンの分かっててきとー言うなっつーの」

続けて陽介は頭をかいて言い、それからマリィの方を向く。

「あ、俺は花村陽介ね！ コイツの友達っつーか、相棒ってヤツ」

「……あいぼー？ 仲良しってこと？」

「へへっ、まあそんなとこ。あ、君は名前なんっつーの？」

「え……」

陽介の自己紹介にマリィが首を傾げながら返すと彼は明るくそう言い、マリィの名を尋ねる。それにマリィは困ったように声を漏らした。

「マリィ……かな？」

「へー、マリィちゃんっつーんだ」

困ったように漏れたような声、しかし陽介は気にする様子を見せていなかった。

「あ、もしかしてビフテキ串買う？ よっしや、ここは俺のおごりってことで！」

陽介はそう言うのと店員に話しかけ、マリィは首を傾げる。

「……買ってくれるってこと？……いいの？」

「ラツキーだったな」

マリィの言葉に真はふつと笑い、マリィが困ったような様子を見せると陽介はにししつと微笑んだ。

「へへっ、いーって！ 俺、バイト代にちよい色付いたからさ。ビフテキ串三本ね！ 俺とあいつと、マリィちゃんの分」

「あら、景気がいいのね。はいよ、ちよつと待っててね」

陽介の注文に店員はふふつと微笑み、ビフテキ串を三本渡す。それを三人は近くに座ると一本ずつ食べていった。

「ふーっ、食ったわ！ 相変わらずポリュームは満点だぜ」

陽介は満足そうに息を吐いてそう言い、マリィの方を見て微笑む。「どうよマリィちゃん、この辺の名物のお味は」

「すっごい変。硬いし噛めないし途中で冷めた。すごく美味しかった」

「あ、美味しかったわけね……出だし、そうでもねー雰囲気だったけど……」

「まあ、それなら良かった」

陽介の問いにマリーは悪態をつくような口調で言うが結局美味しかったらしく、それに陽介は困ったような声を漏らし、真もふつと笑いながら頷く。

「ねえ、ビフテ……串？　どういう意味？」

「ビーフステーキの略だ」

「ビーフステーキ？　ふくん、そうなんだ……」

マリーの疑問の声に真が答え、マリーはふんふんと頷く。

「『ビ』がヤダ。なんか硬そう。ビーフステーキがいい」

「や、名前は関係ないんじゃない？」

マリーの言葉に陽介はツツコミを入れた後、真の方を向く。

「つか……変わった子だな、マリーちゃんって。まあ、そこも可愛い……のか？」

「さあな」

陽介の言葉に真もははつと笑って返す。

「キミたちってさ、毎日食べてるんでしょ、コレ……ずるい。もっと早く来ればよかったな……」

マリーは少し膨れっ面をしながら呟き、それから三人でたわいもない話を始める。と陽介はふとポケットに手をいれ、ぎよつとした様子を見せた。

「あ、ヤツベ！　バックヤードのカギ！……俺、ジュネス戻るわ！　またな、椎宮！　あとマリーちゃんも！」

彼はそう言うや否や走り去っていき、マリーは僅かに可笑しそうな笑顔を見せる。

「変な人だね。キミのあいぼー」

「まあな」

「ん……でも肉の串、買ってくれた。だからいい人。これ決定ね」

「そ、そうか」

マリーの陽介に対する二つの評価に真は苦笑を漏らす、とマリーは

立ち上がった。

「ね、他のところ行く。次はね、景色がいいトコがいい」

「はいはい」

マリーの言葉に真は笑いながら頷いて立ち上がり、二人は一緒に歩き出す。しかしマリーは見るもの全てが珍しいらしく、目を離すとすぐどこかに行ってしまう。そんな彼女を真はようやく高台まで連れてきた。

「ほら。〴〵注文の景色のいいトコ、だ」

「ふくん……なんか緑って感じだね。緑と……緑。あと茶色と……濃い緑？」

真の言葉にマリーは辺りを見回しながらその場所を評価し、ふと空を見上げる。

「緑の葉っぱ、飛んでゆく……お空と雲とにこんにちは……迷子の私も飛んでゆく……夜空の月にさようなら……」

マリーは突然そんな事を呟きます。と彼女は我に返ったように真の方を振り向いた。

「ちつ……違うよ!? い、今の、詩とかじゃないから！ たた、たまたま心に浮かんだだけ！ そう！ それだけだから……」

マリーはそこまで言うのと恥ずかしそうに頬を赤らめながらうつむき、真から顔を逸らす。

「……ば、ばかきらいさいあくさいてー。か、勝手に聞かないでよー」

マリーの言葉に真も困ったように乾いた笑みを漏らす。とマリーはまた何かに興味を持ったように走り出し、真も慌ててその後を追う。

「こんなに広がったんだ……」

マリーが驚いたように眺めているのは高台から見下ろせるこの町の風景。それを見ていたマリーはふつと頬を緩めた。

「なんだろ……やっぱ懐かしい。いいね、こういうの……」

マリーはそう言うのと真の方に顔を向ける。

「見えるトコまだある？ もっと色んなトコ見たいよ」

「ああ。案内するよ」

「うん、お願い。キミといると、色んな事気になる。意外と楽しいよ」
マリーは期待を込めた目で真を見つめており、真もふつと微笑む。
マリーのことが少し分かったような気がする。彼がそう考えた時
だった。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、『永劫』のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。

「じゃあ次！ どこ行こっか？」

「そうだな……」

マリーは嬉しそうに微笑みながらそう言い、それに真は少し微笑み
ながら、マリーと共に歩き出した。

それから日が傾き始めた頃。真はマリーをベルベットルームに送
り届けてから家に帰っていく。それから家に帰ると本を読んで時間
を過ごしていくが、夜になっても遼太郎が帰ってくる様子はなく真は
本を閉じるとイタズラっぽく笑った。

「ちよつと外行ってみるか」

真はそう呟くとこつそり家を出て行き、夜の商店街へと繰り出す。
しかし当然のことながら既にほとんど店は閉まっていた。

「まあ、そりやそうだよな……？」

真は呟きながら歩いていくが、ふと見慣れない店に気づく。いや、
見慣れない店というのは語弊かもしれない。店自体は見覚えている
もの。しかしその看板が見慣れないものに変わっていた。この店の
見覚えのある看板はたしか「四六商店」のはず、しかし今は「スナツ
ク紫路宮」という看板になっていた。それについて真は引きつけられる

ようにその店へと入ってしまう。

「あーら、いらっしやい」

出迎えてきたのは化粧を施したぽっちゃりとした女性。どこか見覚えがあった。

「うちのお店、夜はスナックやってるの。アンタ、昼に会ったかしら？」

――

「し、四六の……」

「――ま、どうでもいいわね……」

女性を見た真が目丸くして声を出すがそれを女性は遮る。

「ここは、日常から逃れた大人たちが、つかの間の安らぎを求めて集まる、夜のオアシス。そして、アタシは『宝石』を身につけオアシスに舞い降りた、夜の蝶つてどこかしら」

「え、あの……」

「ここで見たこと、話したことは、全て夢の出来事。明日に引きずるなんてご法度よ。覚えといて」

「は、はあ……」

「ぎ、分かったらおかえり。アンタのような子供が来るところじゃないわよ」

「は、はい……」

困惑している真に対し女性――紫路宮のママはそう言い、真は混乱しながら店から出ようと振り返る。

「あら？ ちょっと待ってー」

すると紫路宮のママが突然真を呼び止める。

「なに、それ？ アンタ、立派ないいモノ持ってるわね」

「はいっ」

「ほら、後ろポケットの」

「？」

紫路宮のママの言葉に真は首を傾げ、紫路宮のママが後ろポケットを指すと真はポケットから何かを取り出す。

(シャドウと戦っている間に出てきた石……)

取り出したのは雪子を助けるため城の中のシャドウと戦っている

時に見つけた石。何かに使えるかもしれないとポケットに放り込んでいたものだ。

「そのキラキラした綺麗な石！ アタシと取りかえっこしてくれない？」

「はあ、まあいいですけど……」

紫路宮のママのお願いするような言葉に真はそう言い、ポケットから深みのある青色がついた水晶の欠片を五つほど取り出した。

「綺麗ね……それ、なんていうの？」

「あーえーつと……ブルークオーツ？」

「そう。じゃあそのブルークオーツ五個とこのインラインスケート、交換しない？」

紫路宮のママの言葉に真は少し考えた後出鱈目の名前を言い放ち、紫路宮のママはそう言ってインラインスケートを取り出す。真もそれを少し触らせてもらおうが軽量のアルミフレームと大口径ローラーを使っており、安定感が抜群というイメージだ。

「ふむ……分かりました。俺じゃブルークオーツを持って余しそうですし、交換します」

「ありがとう」

真はインラインスケートを千枝の武器として使えるんじゃないかと思いつくと紫路宮のママの申し出を受け、ブルークオーツ五個とインラインスケートを交換する。その物々交換を終えた後、紫路宮のママはふとため息を漏らし始めた。

「はあ……」

「どうしました？」

「ねえ、アタシ、アタシの悩み、聞いてくれない？」

「ものによりますが」

ため息が気についた真が尋ね、紫路宮のママが尋ね返すと真はそう返す。

「ウチの子、アキヒコっていうんだけどね……」

その言葉にふと前の学校で入れ替わりに卒業していった先輩を真は思い出してしまう。

「最近、元気もないし、アタシのゴハン、ぜんぜん食べてくれないのよ……」

「なるほど……」

「アタシが夜の仕事してるせい？ それとも……もしかして、アタシが本当の親じゃないってあの子、感づいちゃったんじゃない？」

紫路宮のママの言葉に真の表情が変わる。彼が思っていた以上に重い問題だった。

「はあ……最近、心配で夜も眠れないの……」

「なるほど、それは心配ですね……」

紫路宮のママの言葉に真も心配そうに頷く、その時水槽の魚が活発に泳ぎだした。

「あ……」

それに紫路宮のママが声を漏らす。

「アキヒコ！ どうしたの!？」

(アキヒコって魚かい!!!)

直後飛び出した言葉に真はずっこけながら心中でツツコミを入れたのであった。

「……」

紫路宮のママは真の方に目を向ける。

「アンタが持つてるそのタツヒメテントウが食べたいみたいね……」

「タツヒメテントウ？……ああ」

その言葉に真は一瞬首を傾げるが、以前喉が渴いたと漏らしていた少年にジュースを奢ってあげた際、「おじいちゃんに、親切にしてもらったら礼をせい、と言われた」とお礼に渡された虫を思い出す。

「ねえ、お願い！ その虫を、この子に食べさせてあげて！ アタシのあげるパン屑は食べてくれないの。このままじゃ、この子……アタシ、この子だけが心の支えなの！ ねえ、お願い！」

「構いません」

紫路宮のママの懇願するような言葉に真は頷く。最初は魚かい！と突っ込んでしまったが大事なものの、愛情を注ぐものは人それぞれである。

「ありがとう。アンタ、やさしいのね……今だったら、アンタに口説かれてもイイわ」

しかしその次に彼女から出された言葉には流石に冷たい目を見せられました。

「……冗談よ冗談、本気にしないで。さっ、アキヒコ、ゴハンよ」

紫路宮のママはそう言って水槽の魚——アキヒコへと虫を与える、と魚の口から何かが出てきた。

「なんてこと、これ、釣り針じゃない！ アキヒコ、どこでこんなもの食べたの！」

「どうやらこれが喉かどこかに引っかかってたのが原因のようですね」

「そうみたいね。よかったわ、これできつと元気になってくれる」

紫路宮のママが釣り針を水槽から取り出し、アキヒコに声を向けると真が推理、紫路宮のママは頷いた後安心したように微笑んだ。

「アンタ、ほんとうにありがとう。感謝するわ」

紫路宮のママは真にお礼を言い、お礼ついでに釣り針を渡される。それから紫路宮のママはパン屑を入れた袋を取った。

「アキヒコ、元気になってよかったわね。ほくら、パン屑ですよ。ちゃんとよく噛んで食べるんですよ」

そう言ってパン屑を水槽に投入。しかしアキヒコは見向きもしなかった。

「ったく……元気になったとたん、調子に乗って急に贅沢なこと言い出したりして……フツ、あの人もそんなだったわ」

紫路宮のママは昔を思い出すような表情で呟き、真に目を向ける。

「アンタ、パン屑いる？ あの子にタツヒメテントウをくれたらあげるわ」

「分かりました。覚えておきます」

紫路宮のママの言葉に真は苦笑を交えて頷くと先ほど交換したインラインスケートを手にはスナックを出て行った。

それから彼はまた歩き出す。次にやってきたのは商店街の北側、ちょうどテレビの中の異様な商店街というべき場所がこの場所を模

していた。それを考えながら彼は歩を進めていく。

「あれ、椎宮君じゃん」

「ん？ よお里中」

「何やってんの？」

「ちよいと探検つてとこだ」

「へえ〜……ところで何それ？ インラインスケート？ 君そんなのやってるの？」

声をかけてきたのは千枝。それに真はふつと微笑んで返し、その後千枝は真の持っているインラインスケートを見て首を傾げた。

「ああ、これは物々交換で手に入れたものというか……あつちに行つた時に里中の武器に使えないかと思つてな」

「あーなるほど。革靴じゃ流石にきついし、インラインスケートなら店内で持つてもまあツツコまれないよね。買ったのかなり思われるくらいか」

「まあ、あつちに行くことにならなきゃそれでいいんだけどな。とりあえず預かつといてくれ」

「オツケー。今度行く時持つてくよ……うくん、少し練習しとこつかな？」

千枝の問いに真はそう言い、それを聞いた千枝が納得したように頷くと真はふつと微笑んだ後インラインスケートを彼女に渡し、千枝もそれを受け取つて大きく頷いた後、インラインスケートを入れた箱を見ながらそう呟いた。

「ところで里中は何やってたんだ？」

「あたし？ ああ、あたしは愛屋行つてたんだ。ちよつと小腹すいちやってさ。そだ、時間あるならちよつと話してかない？」

「ああ。別にいいぜ」

真の言葉に千枝は愛屋を指しながらそう言い、それから少し話さないかと尋ねる。それに真も頷いて返した。

「ん〜……でも話すことと……あ、椎宮君、転校してきたばっかだし、こつちのことまだ分かんないっしょ。ま、言うほどたいしたモンないけどねー。自然が多い……くらい？」

千枝は考えたり話したり考えたりとしており、また考えるとぽんと拍手を打った。

「でも、みんないい人ばっかだよ。財布落としても、絶対に出てくるし！何か困ったことあったら、あたしになんでも言ってみよ」

「じゃあ、オススメの店はどこだ？」

千枝は明るく快活に笑いながらそう言っており、真が問いかけると千枝は考える様子を見せた。

「んー、あたしのオススメは愛屋と惣菜大学かな。愛屋は肉丼が美味だし、惣菜大学はビフテキ串が美味！まあ、場所とか関係ナシに、肉は全国共通でオススメだけだよ」

「そうか」

千枝は真の問いに対する答えを強く語っており、真も微笑を浮かべながらそうかと頷いた。

「こっちつてお店とかすぐ閉まっちゃうけど、愛屋は遅くまでやってんだよね。ついつい、美味しそうな匂いに釣られちゃうんだよねー、これが……」

「なるほど。たしかに分からなくてもいい」

千枝の言葉に真も愛屋から漂う匂いをかきながら頷き、それから二人はたわいもない話を繰り返していく。とあつという間に時間が過ぎていき、千枝は携帯の時計を見た。

「うわ、けっこー話したね。つい夢中になりすぎちゃった……」

千枝はそう言っただけで携帯をしまい、また思い出したように別のポケットを探る。

「そうだ、コレあげる！」

そう言っただけで彼女は漢方チョコなるお菓子を真に渡し、真もそれを受け取る。

「それ、あたしの最近のオススメ！よかつたら試してみて？」

「ああ。機会があればな……」

千枝の明るい言葉に真は苦笑しながら漢方チョコをポケットに入れる。

「じゃあ、そろそろ帰ろっか」

「ああ、送ってくよ」

「ありがとう」

千枝が帰ろうかと言うと真は女性の一人歩きは危ないと思ったか送っていくと申し出、千枝も嬉しそうに頷いた。それから真は千枝を家まで送っていくと自宅に帰る。しかし真が家に帰ってきてきてもまだ遼太郎は帰ってきておらず、真は夕食を食べたり風呂に入るなどをしてから二階の自分の部屋にまで戻ると眠りについた。

第十一話 四月二十一日、運動部との絆と夜中の邂逅

四月二十一日。今日の授業も全て終了して放課後、真は荷物を纏めるとふと運動部が部員を募集し始めたということをし少し前の登校中小耳に挟んだのを思い出す。

「えーっと……」

真は運動部に話を聞こうかと思いつたが既に全員部活に行ったり帰ったりしており、千枝も既に雪子のお見舞いに行ってしまったている。

「ああ、花村！」

「ん？ どした？」

真は陽介に話しかけ、陽介も鞆を肩に担ぎながら教室を出て行くところを呼び止められ振り返り、真も陽介の近くに走り寄る。「悪い、運動部の募集が始まったって聞いたんだが。何か知らないか？」

「運動部？ ああわり。俺帰宅部だからさ……ほら、ジユネスでバイトという名の手伝いさせられてるし」

「ああ、なるほど」

真の問いに陽介はすまなそうに謝った後苦笑しながら続け、真が納得したように数度頷くと陽介は虚空を見上げて考える様子を見せた。「そうだ。職員室に行ってみりやなんか分かると思うぜ？」

「そうだな、行ってみる。ありがとよ」

「いいってことよ。んじやな」

陽介の言葉に真は頷いてお礼を言い、陽介もにししと笑って手を振ると去っていく。それを見送ってから真は一旦席に戻って鞆を持つと彼も教室を出て行き、転校初日に行った職員室に向かっていた。

「失礼します」

「む？ なんだ貴様か」

職員室のドアをノックし、きちんと挨拶をしてから部屋に入ると諸岡が声を漏らす。

「諸岡教諭、申し訳ありませんが部活について聞きたいことがあるん

ですが」

「ああん？ 部活に入りたいだど？」

真の言葉に諸岡はそう漏らして立ち上がり、真の前に立つ。

「貴様の魂胆は分かっている！ どうせ出会い目的だろ！ 違うか！」

「違います」

「いいか、部活というのはなあ……」

諸岡の言葉に真は瞬時に返すが諸岡は聞く耳持たず説教を始め、真は心の中でやれやれとため息をつく。

「……で、部活がなんだって？」

「運動部が募集を始めたと聞いたので、それについて」

「ふん、運動部だと！ 貴様、青春の汗を流す気だな！」

一通り説教が終わった後諸岡はちゃんと問いかけ、それに真が切り出すと諸岡は鼻を鳴らしてそう言った。

「……貴様、運動部の経験は？」

「前の学校では剣道を」

「ふむ……貴様が入れそうな運動部はサッカー部かバスケット部だな。この学校に剣道部はない！」

諸岡は真の部活経験を尋ね、真が正眼の構えを取りながら答えると諸岡は少し考える様子を見せてから答える。

「サッカー部もバスケット部も職員室出て左！ 非常口から行け！ ちなみに活動日は火・木・土だ！ 雨の日は休め！ 分かったな……で、他にはまだあるのか！」

諸岡は高圧的な口調ながらしつかり活動場所と活動日まで教えており、最後に高圧的な声でまた尋ねる。それを聞いた真は「もういいです」と答えようとするが、直前で思い出したように出そうとする言葉を変える。

「文化部はどうですか？」

「フン、残念だな！ 文化部の募集は四月二十五日からだ！ 女子との出会いなどそうやすやすと手に入らんということだな！」

「そうですか。では掛け持ちについては？」

「掛け持ちい？ 貴様、青春を満喫する気だな！ 運動部同士や、文化部同士の掛け持ちは許さん！ 運動部と文化部の掛け持ちなら許可する！ 分かったな！」

真は文化部の募集および掛け持ちについても情報収集をしておき、それを終えると彼は丁寧な頭を下げる。

「分かりました。ありがとうございます」

「うむ、分かったならさっさと帰れ！」

「はい。文化部募集が始まったらまた尋ねに来るかもしれませんが、その時もご教授お願いします。では失礼します」

真はすらすらと言葉を並べて挨拶し、礼儀正しく職員室から出て行くとき左を向く。

「えつと職員室出て左、非常口つと」

真はさっきの諸岡からの説明を思い出しながら一年組の廊下を、上級生が珍しいのか視線を受けながら歩いていく。そして廊下の端にある非常口まで辿り着いた時彼はふと先日のイゴールの言葉を思い出した。

（他者と関わり、絆を育み、貴方だけのコミュニティを築かれるがよろしい。コミュニティの力こそが、ペルソナ能力を伸ばしてゆくのです……だったかな）

真はそこまで考えると非常口から踏み出す。

（まあ、まずは見学してみるか）

「ようー、そこにいるのは椎宮真じゃないか！」

「つとむ！」

踏み出そうとした瞬間後ろから声をかけられ、びっくりしてちよつとふらつきながら振り向く。そこには体育および教員が足りないことから英語も担当している体育教師近藤の姿があった。

「こ、近藤教諭……びっくりした」

「はっはっはソーリーソーリー。どうした？ 運動部に入部しようと考えてるのか？」

「あ、はい。さきほど諸岡教諭に相談したところバスケット部かサッカー部なら入部できると聞いて、ちよつと見学を」

驚いたように目を丸くしている真に対し近藤ははっはっはと笑いながら軽く返し、にっと微笑みながら尋ねると真はそう返す。それに近藤は腕組みをしてうんうんと頷いた。

「そうかそうか！ いや、実はバスケット部アンドサッカー部は俺が顧問をしているんだ。よし、しつかり見学しろ！ なんなら掛け持ちでも構わんぞ！」

「いえ、運動部同士の掛け持ちは校則違反のようなので。それ以前に身体が持ちません」

近藤は見学歓迎の様子を見せた後掛け持ちでもいいぞと言い出したがさつき諸岡に運動部同士の掛け持ちは許さんと言われたことから面倒ごとになっても嫌なので断りを入れておく。それから二人は非常口から出て行き、近藤はそこから体育館へと向かう。

「よし。まずはバスケット部だ。ところで椎宮、バスケの経験は？」

「全く、前の学校の授業でやった程度ですね。サッカーも似たようなもんです。俺元剣道部なので」

「そうか……まあ、気にしなくてもいいぞ。初心者だろうが大歓迎だ！」

真の言葉に近藤は経験者でないことに僅かなり残念そうな声を漏らすすがすぐ明るくそう言った。

それから真はバスケット部の練習を見学し始める。

「ナイッシュー！」

バスケの上手下手の区別は真にはよく分からないが、元気に声を出しているのは中性的に整った面立ちを持つ、やや小柄めという体格の男子だ。

（この前見た奴？……）

「そろそろ基礎練、行きましょーよー」

その男子に見覚えを感じ、真は首を傾げる。男子は基礎練習をやるうと言っているが全員聞く耳持たずシュート練習をやっていた。

「よし、次サッカー部行くぞ！」

「あ、はい」

それから近藤に連れられて今度はグラウンドに向かい、サッカー部

の見学を始める。

「ナイパサー！」

こつちでもやはり上手下手の区別はよく分からないが、精悍な印象の面立ちを持ち鼻に絆創膏を貼っている男子が目立つ印象だ。

（あ、たしか前に走ってた奴）

「次、ダッシュ行くぞー！」

真は昨日ジャージを着て走っていた男子だったかと考える。まあそんなこんなで見学も終了し、真と近藤は非常口前まで戻ってきた。「まあ、うちの活動はこんなもんだな。どうだ？ 入るか？……ああ、今すぐ決めなくてもいい。うちに帰ってゆっくり考えてくれてもいいぞ。あ、これ入部届けだ」

近藤は運動部紹介を終わってそう言い、入部届けを手渡しておく。それに対し真は少し考えると鞆を探り、筆箱からボールペンを取り出すとさらさらと必要事項に記入を行い、近藤に入部届けを返す。

「はい、お願いします」

「も、もう決めたのか!？」

真の即断即決に近藤は驚いたように声を上げ、入部届けを見る。それにはバスケット部の文字が書かれていた。

「バスケットにしたのか」

「はい。こつちの方が面白そうな気がしたので」

「そうかそうか。よし、すぐ体育館に戻って皆に紹介だ！」

近藤の言葉に真はふつと微笑んで返し、近藤は嬉しそうに微笑むと真を引っ張って再度体育館に向かった。

「……というわけで、今日からお前らの仲間だ！ 椎宮真、知ってるよな？ 都会からの転校生だが、バスケットは初心者だそうだ。だがこれで我がバスケット部も安泰だな！ なんなら部長にするか？ ん？」

爽やかに笑いながらそういう近藤、部長にするくという言葉はまあ冗談だろうと真は考えて笑みを漏らすのみだった。

「あ、いっすねー。決めたりすんの、面倒だし」

しかし部員の一人からそんな声が出、さつき真の印象に残った男子が呆れたような顔を見せる。

「ほら、お前も挨拶せい」

「椎宮真です。バスケは初心者ですが、足手まといにならないよう頑張りたいと思います。よろしくお願いします」

「あはは、まー適当でいいよ適当で」

その言葉から察するに、どうやらあまり熱心な活動はしてないらしい。真はついそう考えてしまった。

「そういうわけで、後よろしくな。先生はサッカー部、行ってくるから。椎宮、お前は今日は見学しておけ。じゃ、適当に解散」

近藤がそう言って体育館を出て行き、部員らは練習もそこそこに帰っていった。

「おつかれー」

するとさつきから印象に残っている男子が声をかけてくる。

「どう？ 一日目の感想は？」

「ああ……えっと」

「あ、俺、一条康。同じ二年だよ。よろしくな」

「ああ、椎宮真だ。改めてよろしく頼む」

男子——一条に対し真も改めて名を名乗る。と彼はにししつと微笑んだ。

「仲間できてさ、嬉しーよ。俺」

「いちじよー、そっちまだ終わんねーの？」

一条がそう言っていると、突然もう一人男子が体育館に入ってくる。サッカー部で印象に残っていた男子だ。彼は真の方を見ると少し首を傾げる。

「新入部員？ ああ、つかさつき見学してた奴か」

「ああ、サッカー部の方に入らなくてすまない」

「別にいい」

男子の言葉に真はすまなそうに返すが彼はただそう返すだけだった。特に気にしている様子はない。

「長瀬大輔だ。よろしく。サッカー部二年。一条とは……腐れ縁だな」

「腐りすぎ。もういいつつのな」

男子——長瀬の自己紹介に一条も笑って返し、真もつられて笑みを見せる。それから長瀬は自分達以外人気のない体育館を見回した。

「例によって、他の奴らは帰ったのか？」

「まーね。今日もさ、リバウンド練習やるーつつたら、〃疲れるから〃却下だよ。で、シュート練習ばつかでさ……」

「ああ、さつき見学してた時はたまたまシュート練習の時間かと思ってたが、違うのか？」

「ああ。基礎練とかそういうのはほとんどなし……って、入ったばかりの椎宮の前でグチっちゃダメだよな！」

長瀬の言葉に一条が返し、それに真がさつきの練習風景を思い出しながら聞くと一条は困ったように息を吐きながら返した後気づいたように声を上げる。それから彼は真ににっと笑みを見せた。

「幽霊部員も多いけど、楽しいぜ、バスケ。椎宮、バスケ初心者なんだっけ？」

「ああ。だが前の学校では剣道部に入ってたから、体当たりと足捌きなら自信はある」

一条の確認の言葉に真はそう返す、と一条はおかしそうに笑った。

「おっけ、全然おっけ！俺がガシガシしごいてやるからさ！」

「しごかれて嫌になったらサッカー部に逃げてこい」

「考えとくよ」

一条の言葉に続けて長瀬が冗談交じりに続けると真もふっと笑って返す。真は二人との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まごことを知る一歩なり

汝、〃剛毅〃のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。

「そだ、活動日は聞いている？」

「ああ。ここに来る前に諸岡教諭から。火・木・土、だったか？」

「そう。楽な部活だけど、ちゃんとやれば根性つくと思うぜ。ああ、けど雨の日は部活休みだから注意な？ この体育館、他の部に占領されんだよ」

弱小部はツライよなあ……と一条は漏らし、また思い出したように口を開く。

「ああ、それと試験前一週間も休みな」

試験休みも導入されており、それを言い終えると今度は長瀬が口を開いた。

「で、またお前がボール磨き？」

「あいつらが合コン行ってる間、ボクはボールを戯れますよ、どうせ。ボール大好き……」

長瀬の言葉に一条はそう言い、少し黙る。

「あー……合コン行きてえ!!」

そしてその声を荒げた。

「ほら、手伝ってやるから早く帰ろうぜ」

「俺も手伝おう」

「マジで?! お前、超いいやつ……俺泣きそう」

声を荒げる一条に長瀬がそう言うのと真も手伝いを申し出、一条は声を漏らす。

「ふむ、空気を読まず帰った方が面白い反応が見れたか？」

「ちよつ!?!」

「冗談だ」

「真顔で言うなや!?!」

一条の反応に真が真顔で呟くと一条は声をあげ、それに真は肩をすくめてふつと笑いながら返し、一条はツツコミを入れる。それから三人で雑用を行ってから、真は帰路についた。

「くああ……」

夜中。八十神高校の倫理教諭をしている諸岡金四郎は欠伸をしながら、家に帰る前に外食でもするつもりなのか商店街を歩いていた。「むっ？」

すると彼は喧騒に気づき、足を止めるとその方を見て歩き出しながら口を開く。

「コラァー！ 何を騒いどるんだァー!!」

「げっ、この声モロキンだぞ!？」

「に、逃げる!!」

怒鳴り声の後暗闇の中から聞こえてきた声とドタドタという足音。それが消えた後、暗闇の中から一人の青年が姿を現した。

「どうも。助かりました、諸岡氏」

「き、貴様は!？」

青年の姿を見た諸岡が驚きの声を上げる。暗闇から出てきたのは命だった。

「貴様、うちの女生徒を連れまわしたと思つたら今度は喧嘩か!？」

「ち、違いますよ！ 僕は一切手出ししてません！」

「むう……ん?」

諸岡の言葉に命は慌てて首を横に振るが諸岡は疑わしげな声を漏らすのみ。すると彼は命が何かを抱きかかえているのに気づいた。

「なんだそれは？ 子犬か?」

「ああ、はい。誰かは知りませんが、子犬をいじめてたのを見て助けに入ったんです。んで、逃げ回っている間に諸岡氏がやってきたわけです」

諸岡の言葉の後命はそう言い、子犬を下ろす。と子犬は元気に走り出した。

「気をつけろよー」

命は暗闇に消えていく子犬を手を振って見送り、子犬が暗闇に消えると諸岡の方を向いた。

「さて諸岡氏。助けてもらったお礼に食事でもどうでしょうか？ 奢りますよ」

「ああ？ いや、わしは……」

「まあまあお気になさらず。えーつとこの時間ならまだ愛屋は開いてるかなつと」

命の提案に諸岡は驚いたように声を漏らすが命はあつさりそう言つて諸岡を引つ張つていく。それに困惑した諸岡はされるがままに引つ張られていき、二人は愛屋に座ると適当な席に向かい合つて座る。

「焼きそば定食一つ、お願いします。諸岡氏は？」

「あ、む……わしもそれで構わん」

「アイヤー！ 焼きそば定食二つ毎度ー！」

命の注文の後諸岡も流されるように注文。それに愛屋の店主はそう返した後焼きそば定食を作り始めた。なんでも注文してからそばを打ち始める本格派なのが売りとのこと、出来るまで時間はかかるだろう。

「……お前は変な奴だな」

「何がです？」

突然口を開く諸岡ときよとんとしている命。その表情はどこか無邪気な子供のようだ。

「以前、色々言つただろう？ なのに何もなかったかのように話しかけてくる」

「ああ、里中さんのあれですか？ 別に、教師が生徒の心配をして何もおかしいことはありません。むしろあの時はまるで都会人を差別されたようでこちらも少し言い過ぎました。すいません……ですが、噂に聞く諸岡氏が思つたより良い教師で安心しましたよ」

諸岡の言葉に命はどこか嬉しそうに笑いながら言つた後すまなそうに謝り、さらにそう続ける。それに諸岡が怪訝な目を見せると命はああと声を漏らした。

「僕が高校二年の頃のお話なんですがね。別のクラスの女の子が行方不明になつてた時期があるんですよ……ああ、当時僕は生徒会の庶務をやっていました」

「ほう」

命は目を瞑り、高校二年のあの戦いの中であった事件を思い出す。「で、行方不明つてのを知った時僕達は驚きましたよ。その担任の教師が、その子は病欠、としてたんですから、もちろん教師は彼女が行方不明であることを知っていました」

「なに!？」

その言葉に諸岡が声を上げる。信じられんといわんばかりの目だ。「それを知った後、僕と生徒会長は担任の先生に談判にいきましたよ。一体どういうことだ、とね。まあ僕は会長の後についていただけなんですが……いやーあん時は久々に切れた切れた。若気の至りですねあれは」

「……な、何があつたんだ?」

命の言葉に諸岡は頬を引きつかせながら声を漏らし、命は「ん?」と言いながら首を傾げた。

「ああ。その教師が『生徒の為にした事』、『皆将来の都合がある。君達子供には分からんだろうがね』と言い出したのでちよつとプチツてきちやいまして……あははははは」

「焼きそば定食、おまちー」

「あ、どうも」

「あ、ああ……」

命はちよつと言いくそような表情で空笑いを漏らしており、諸岡は無言を保つ。するとそこに独特の声質という感じの声をした少女が焼きそば定食二つを置いたお盆を持って命達の席にやってきて焼きそば定食を二人の前に一つずつ置く。

「ごゆっくりどうぞー」

そして彼女はまた独特の声でそう言うのと歩き去っていき、命は割り箸を取り、割りながらまた口を開く。

「許せないことですよ。教師というのは未来ある生徒を教え導くものであり、保身のため見捨てるものではない。僕は両親亡くしてから妹と一緒に親戚たらいまわしにされて転校を繰り返しましたけど、江古田……ああ失敬。そいつ程クズだと思つた教師はいませんよ」

命はそう言つて焼きそばをすすり、水を飲んで喉を潤すと師岡の方

を見てにこりと微笑んだ。

「なので、諸岡氏のように生徒の事を思ってくださいる教師を見ていると安心します」

「わ、わしは別に……」

命の微笑みながらの言葉に諸岡は慌てたように声を漏らす、命はどこか相手を見透かすような不思議な表情を見せる。

「あの問いかけてきた時に感じや目を見れば分かります。まあ、違うっていうならそういうことにしておきましょう。とりあえず、とつとと食べましょうか」

「そ、そうだな……」

命の言葉に諸岡はそう言って自分も割り箸を取り、焼きそば定食を食べ始める。

それから十数分程度、二人は会話をしながらの食事を終え、最初の約束通り——といっても命が言い出しただけにすぎないものなのだが——命が二人分の代金を支払い、二人は愛屋を出る。

「あー……ご馳走になったな」

「いえいえ、諸岡氏の鶴の一声がなければ僕はまだ街中を逃げ惑うしできませんでしたよ」

諸岡は一応最低限の礼儀としてそう言い、それに命はにこにここと微笑みながら返す。

「そうか……」

その言葉に諸岡は何か考える様子を見せ、ふんと鼻を鳴らす。

「そういうことにしといてやろう。それと、これを恩に着せようなどとは思わんことだ！」

「分かっていますよ。では、おやすみなさい」

諸岡の言葉に命はおかしそうに笑って返した後挨拶して夜の闇の中に消えようとする、と思いついたように振り返った。

「一緒にお食事できて楽しかったですよ。またいずれ」

命はそう言い残すと走り出して夜の闇の中に消えていく。

「……変わった奴だ」

それを見送った諸岡もそう呟き、自分の家に帰っていった。

第十二話 バイト文化部マネージャーそしてマヨナカテレビ

4月23日。真は授業が終わった放課後、今日はどうしようかと考え事をしながら教室を出る。

「うーっす椎宮」

「おう、一条」

「これから部活だろ？ 一緒に行こうぜ」

教室を出た真に声をかけてきたのは一条、それに真は少し考える様子を見せた。

（そういえば、朝にバイトの募集があるとか言ってたな……シヤドウとの戦いとかで何かとお金も必要になるだろうし……）

真はそう考えるとぺこりと頭を下げる。

「すまん、ちよつと調べときたいことがある。それが終わったら戻ってくるから……多分途中から出られると思う」

「あー、分かった。何を調べるのか知らないけど、まあなるべく早くな」

「ああ」

真の言葉に一条がそう返すと真も頷いて階段を下りていき、学校を出て行く。そしてバイト募集の掲示板がある商店街の北側へとやってくるとその掲示板に近づくと

「封筒貼り、翻訳、折鶴、学童保育、か……」

掲示板に出ているバイトを一通り眺めてそう呟く。しかし結構自由なバイトらしく、大方出来る時にやるだの来れる時に来るで構わないような感じだ。

「……ふむ、応募するだけでも構わないのか……」

真はそう呟くと応募先を携帯の写メで撮っておく。とりあえず今から部活に参加しなければならぬ。詳しい応募や参加は部活が終わってから考えよう、そう思って彼は携帯を閉じるとその場を去り、再度八十神高校に走っていった。

それから数日過ぎて4月25日、月曜日。真はいつも通り学校に向かつて通学路を歩きながら、前の方で女子生徒が二人話しているのを聞いてしまう。

(ああ、今日から文化部に入れるのか……)

真は相手の会話内容からそんな情報を手に入れ、この学校の文化部なら何に入るかと考えを巡らせる。

「準備、準備……」

すると彼の横を一人の小柄な女子生徒が慌てて走りすぎていくのを真は見る、が彼女は慌てて戻ってきた。

「鞆、鞆……」

慌てた様子でそう呟き、元来た道に戻っていく女子生徒。それを真や前の方を歩いている女子二人も不思議そうな目で眺めていた。

それから時間は過ぎて放課後、真は後ろの席でへばっている——恐らく今日の体育の授業のマラソンのせいだろう——陽介をチラリと見た後席を立った。

「椎宮く、お前マラソン平気だったのかよ」

「まあ平気というわけじゃないが、スポーツは大体足腰が基本だからな。それより俺は文化部の入部方法を職員室に行って聞いてくる」
「ほんつと元気だなお前……」

席を立った真を見た陽介がへばりながら尋ねると真はそう返し、その言葉を聞いた陽介ははあく息を吐いてそう返した。それに真は苦笑を漏らしながらじゃあなと言って教室を出て行き、職員室へとやってくる。

「諸岡教諭、いらっしやいますか？」

「ああん？　なんだ？」

ドアを開けながらの真の言葉に諸岡は気だるそうにそう言って席を立ち、職員室に入ってきた真の前に立つ。

「はい、以前言っていた文化部の入部について聞きたいんですが……」

「文化部う？ 貴様のことは出会い系と認識したぞ！」

真の言葉に諸岡は彼の入部理由が下心からと考えたのかそう言い、ふむと考える。

「今募集があるのはたしか、演劇部と……そうだ、吹奏楽部だな」

「吹奏楽部！ 演奏ですか!？」

「う、うおっ……」

諸岡の言葉を聞いた真は瞬間的に目を輝かせて問いかけ、それに諸岡は押されたように声を漏らす。職員室の教師も彼の方に注目した。

「あ、失礼しました。俺前の学校で管弦楽部だったもんで」

「そ、そうか。あく、両方とも実習棟の一階に部室があるから勝手に行け！ ちなみに活動日は月・火・木だ！」

「はい、分かりました！ 失礼します!!」

落ち着きを取り戻した真の言葉に諸岡はそう漏らした後部活の説明、それに真は頷いた後元気に頭を下げて職員室を出て行くところ。

「おい」

しかしその前に諸岡が呼びとめ、真もつい振り向く。

「あー、お前の前の高校の先輩、たしか命とか言ったか？」

「はい」

「奴は変わった奴だな。わしを食事に誘いおったぞ」

「ああ……まあ先輩はそういう人ですからね」

諸岡の言葉に真はそう言うてから「じゃあ失礼します」と言い残して職員室を出て行った。そしてそのままノンストップで実習棟に行き、吹奏楽部が活動しているような音楽室へとやってくるとその扉を開けた。

「すいません、入部希望なんです……」

真はそう言いながら音楽室に入るが流石に練習中ゆえに演奏の音があるため聞こえていないらしい。

「あとさー、先生んところ行って鍵もらってきてー」

「あ、はい。分かりました！」

活動中の男子生徒の一人が女子生徒にそう言っており、それに女子

生徒は頷くと歩き出す。マネージャーなのだろうかと思はれており、少女は真の方に歩いてきているが彼女は全く気づいていなかった。

「きやつ!?」

ぶつかってようやく気づいたように下がり、真を見るとぺこりと頭を下げる。

「あつ、ごめんなさい……えつと?」

「入部希望なんだが……」

女子生徒は部員ではないはずの真の存在に首を傾げており、真は入部希望だと伝える。と女子生徒はにこりと微笑んだ。

「あつ、はい、分かりました。えつと、ちよつと待つてくださいね。部長! ぶーちよー!」

彼女はそう言うのと部屋の奥の方を向いて部長を呼ぶ。そして部長がやってくると演奏が一旦止んだ。

「椎宮真君、二年生だ。みんな、よろしくな」

『はい』

部長の言葉に全員が返し、それから部長は真の方を向いた。

「椎宮、楽器の経験は?」

「転校前の学校、管弦楽部でトランペットを担当しました」

「お、ホントかよ。じゃあ皆を積極的に指導してくれよな?」

「いえ、指導を行えるほどの腕では……」

真が楽器経験者であることを知った部長はそう言うが真は首を横に振って返し、部長はまたふふつと微笑む。

「じゃ、今日は見学してって。活動日は月・火・木だから。あと……あ、松永!」

部長は真に今日は見学するよう伝え、活動日も伝えてから思い出したように松永と呼び、それに真がマネージャーなのかと思っていた少女が前に出る。

「は、はいー」

「細かいことは、こいつに聞いてくれ」

少女の方を見ながら部長はそう言い、真は少女の方を見る。

「あ、えと、松永綾音です。一年です」

少女——松永はそう言いながら、少し頬を紅潮させていく。

「が、楽器はトロンボーンです。それから、えっと……」

「じゃ、後よろしく」

松永は慌てたようにその声を漏らしており、部長は後は任せたというように部員の方を向いた。

「休憩終わりー。さっきんところから、もう一回合わせるぞー」

部長がそう言い、指揮棒を取るとまた演奏が始まり、真はそれを見学。時間が過ぎて部活が終了すると部員達は帰っていき、部室には真と松永だけが残された。

「……」

「あ、先輩も帰ってくださいって大丈夫ですよ！……って、ごめんなさい！ 部のこと、お話ししないといけませんよね」

無言でたたずんでいる真に松永がそう言うが直後思い出したようにそう言い、えっとと考えるような声を漏らす。

「えっと、活動日は月・火・木……って、これは部長が言っていましたっけ。出欠は取りませんので、割と自由です。ですけど、出席した方が上手になりますし……表現力とかも磨けると思いますよ……って、下手つぴな私が言うことじゃないですけどね」

「そうか」

松永は最後に笑いながらそう言い、それに真はふっと声を漏らす。

「じゃあ先輩、何か質問はありますか？」

「あー、そうだな……活動内容は演奏だろ？ んじゃ人間関係とかは？」

松永の言葉に真は少し考えるように虚空を見上げた後、そう尋ねる。それに今度は松永がふっと、と言って考える様子を見せた。

「えーっと、特に悪くはないと思いますよ。人数が少ないのでポジションもほぼ固定ですし……あつ、それで思い出しました」

「なんだ？」

「私達、病院とか福祉施設なんかで発表会を時々やってるんですよ。部員が少ないので、大会とかは出られないんですけど……発表会は

とつても喜ばれてます。私達も気合、入れてますよ」

松永は発表会のことを嬉しそうに語っており、しかし最後には恥ずかしそうにうつむいた。

「……私は裏方ですけどね」

そしてそう呟いた後、頬を紅潮させて顔を上げる。

「じゃ、じゃあ、私、後片付けがありますから。先輩、お先にどうぞ」

松永の言葉に真は部室内を見回す。

(一人で片付けるには骨がいらそうだな……)

真はそう考えると松永の方を見る。

「手伝おう」

「えっ、あ、あの……」

真の申し出に松永は困ったような顔を見せ、真は頭の後ろに手をやる。

「ああ、松永が男と二人つきりで行たくないとかなら無理強いはしないが……」

「あ、いえ、そんなことは……でも、い、いいです！ 私の仕事ですから！ だからあの、気にしないでください！……けど、お気遣い、ありがとうございます」

「そうか。ならいい……でも大変になったらいつでも言ってくれ」

真の言葉に松永は首を横に振って返した後明るく笑ってそう言い、それを聞いた真はふっと笑ってそう返す。真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、〃太陽〃のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。すると松永は外を見てあつと声を漏らす。

「あ、もう暗くなってきましたね。気をつけてくださいね、先輩」

「松永もな。夜道の一人歩きは危ない」

「はい。じゃあさようなら」

松永の言葉に真もそう返し、松永が頷いてさようならと言うと真も軽く手を振って返してから部室を出て行き、家に帰っていった。

それから数日過ぎて4月26日。その昼休みに腹ごなしの散歩に一階にやってきていた真は一条に話しかけられた。

「椎宮、近藤先生が今日部員に話したいことがあるから出来るだけ出席するようにって連絡！」

「おう、分かった」

一条の言葉に真は頷き、それから時間が過ぎて放課後。その連絡通り真は一条と共にバスケット部の活動場所である体育館へとやってきていた。しかし部活終了後ほとんどの部員は帰ってしまい、真と一条込みでも四人しか残っていなかった。そして顧問の教師である近藤は真には見覚えのない女生徒を伴って体育館にやってくると体育館内を見回した。

「なんだ、他の奴らはもう帰ったのか？ だからバスケット部は……」

そしてそう呟くがすぐに首を横に振る。

「まあいい。喜べ、マネージャーが入部したぞ」

「ほんとですか!？」

「これで今まで交代制だった面倒な仕事から解放される！」

「はっはっは。俺に感謝しろよ！」

近藤の言葉に部員の二人が嬉しそうな声を出し、近藤は嬉しそうに笑いながらそう言う。

「じゃ、自己紹介だ」

その言葉に女生徒は嫌そうな顔を近藤に見せた後さつと部員達を一瞥する。

「……海老原あい」

そして短く名前のみを名乗る。しかし外見としては美人の部類に入り、実際部員二人は嬉しそうにというか表情をだらしなく緩ませていた。

「じゃあ後は任せたぞ。先生は先に帰る！」

そしてそう言うのと近藤は体育館を去っていき、部員二人は顧問の目がなくなったためか海老原に見とれ始めた。

「……言つとくけどアタシ、やる気ないから。汗臭いアンタらの世話なんか死んでも嫌」

「ええ？ だつたらなんで……」

すると海老原は突然そう言い、それに一条が驚いたように声を漏らした。

「出席日数足りないから。マネージャーすれば、進級できるの。基本、来ないからアタシに色々頼んだりしないでよ」

海老原はあっさりと言いい、踵を返す。

「それじゃね」

そしてそう言うとう入り口の方に歩いていき、彼女が見えなくなると一条ははあとため息をつく。

「……まあ、海老原の顔が見えた時点で、ないなと思ったけどさ」

「そうなのか？」

「まーな」

一条の言葉に真が聞き返すと一条はやれやれというように首を横に振って返した。

「うっし、メシ食って帰ろうぜー」

そして一条はそう言うのと更衣室に向かっていき、真も未だに未練がましい表情で海老原が歩いていった方を見ている部員二人を一瞥した後更衣室に向かつていった。

それから彼らは長瀬も誘って愛屋へとやってくる。

「こないだココ来れなかったからさー、もー夢に見たっつの」

「……どうだった？」

明るく笑う一条に対しどこか心配そうに尋ねる長瀬、それに一条はイタズラっぽく笑った。

「夢の内容?」

「違うんだろ?」

「ああ、ウチのこと?……つーか長瀬、椎宮にも話したのかよ……ま、いーけど」

一条の言葉に真が聞き返すと一条はそう言った後、真もウチの事情を知っていることに軽くため息をついた後まあいいけどと軽く流す。

「なんつーか、まー……複雑?」

一条は笑ってそう言った後、真に話しかけた。

「で、聞いたんだろ? すげーんだよウチ、こう見えて。政略結婚とかアリアリだからねー。こないだは社交場で挨拶回り。この俺が、だぜー?」

一条の言葉に真は少し想像し、僅かに噴出した。

「ありえないな」

「マジ、自分で時々笑いそうだよ」

真の言葉に一条はそう返して苦笑いを漏らす。その後彼は注文した丼を見る。

「だから、俺がこんなところで食って、こんな喋りしてんのって家の人には内緒。家じゃ、勉強か茶道か習い事。真面目でデキのいい「康様」ですからね」

「康様あ?」

一条の言葉に長瀬が呆けた声を漏らす、と一条は彼の方を向いて肩をすくめた。

「……だってそう呼ばれてるもんよ」

一条はそうとだけ言い、少し考える様子を見せる。

「まー、苦労もあるけど、食わせてもらってるし、小遣いももらってるしぎ。給料分は働かないとな」

「そういう言い方はないと思うんだが」

一条の言葉に真はそう返し、長瀬も頷く。と一条は浮かない顔を見せた。

「……けどそれも、もう終わりかも」

「どうした？」

「ウチって旧家だから、代々継がなきゃいけないわけ。で、今の当主……って父親だけどき、子供いなくて」

「子供がない？ お前は？」

「それを今から話すんだっつもの」

一条の言葉の矛盾点に真が聞き返す、と一条はそう返して話を続ける。

「ま、それで一条家が潰れたら困るから、孤児院から俺を引き取ったんだけど……なんつーかまあ、生まれたんだよね。女の子……一応、俺の妹になるわけだけど。幸子つつつて、もうすぐ二歳。すげー可愛い」

「ああ、そりやおめでどう。良かったな」

一条の微笑みながらの言葉に真は新たな命の誕生に祝辞の言葉を述べておく。

「だろ？」

それに一条は嬉しそうに返す、と長瀬が考え込む様子を見せるが一条の方を向いている真は気づいていなかった。

「良かったよ、これで。家を継ぐなんて面倒くせーし……ちゃんと、血が？がった子が継ぐべきだろ」

「……」

一条の言葉に二人はつい黙り込んでしまう、と一条は慌てたように二人の方を見た。

「なんか、変な空気？ ほら、食おうって、な？」

「……だな」

その言葉に長瀬は頷いてそう言い、一条もそうそうと頷く。そして部活の話などをしながらの食事が終わり、真は彼らと別れて家に帰っていった。

それからまた数日が経ち、4月29日。昭和の日で学校は休み、真

は外で降り続ける雨を見ていた。

「これで三日か……」

真は一人そう呟くと作業テーブルに向かい、最近アルバイトとして始めた封筒貼りを始める。振り続ける雨の音をBGMに黙々と単調な作業を続けていく。そして夜になるまでそれを休み休み続けていき、夜になると真は一階に下りる。菜々子と遼太郎がテレビを見ており、真もそれに参加した。ちょうど今は天気予報をやっている。

「終日降り続いた雨の影響により、各地とも気持ちのいい晴れ間とはいかないようです。特に稲羽市方面では、今夜半から明日にかけて、濃い霧の発生が予想されています。お出かけの際には充分ご注意ください。では、時間帯ごとの天気を見てみましょう……」

「霧か……多いな、最近。これ以上面倒が起きなきやいいが……」
「……」

天気予報を聞いた遼太郎はしかめ面をしながら呟き、それを聞いた菜々子はリモコンに手を伸ばしてチャンネルを変える。

「あ、こちら。黙ってチャンネルを変えるのダメだろ」

すると遼太郎がそれを注意し、菜々子は浮かない表情を見せる。

「ジュネスは、今年もゴールデンウィークは休まず営業！ 来て、見て、触れてください。エヴリデイ・ヤングライフ！ ジュネス！」

「エヴリデイ・ヤングライフ！ ジュネス！」

しかしその時ジュネスのCMが流れると途端に明るい笑顔を見せ、CMの歌を真似た後遼太郎の方を向く。

「ゴールデンウィーク、エイギョウしてるって！」

「ハハ、分かった分かった。連休、どっか行きたいのか？」

菜々子の言葉に遼太郎は笑いながらそう尋ねる。それに菜々子が驚いたような目を見せた。

「どこか行けるの!?!」

「お前どうだ？ 予定空いてるか？」

「ああ、空いてると思います」

「だったら、みんなでどっか行きたい！」

菜々子の驚いている言葉の次に遼太郎は真に尋ね、それに真は僅か

に考えた後そう返す。それに菜々子は嬉しそうに微笑んでそう言った。

「菜々子ね、ジュネスがいい!」

「ほんとにジュネスでいいのか? そんなのいつでも行けるだろ?

ほら、もう遅いから寝なさい」

「はい……」

菜々子の出した候補に遼太郎はどこか呆れたように漏らした後寝るように促し、それに菜々子は嬉しそうにジュネスのCMソングを繰り返し口ずさみながら寝室へと歩いていく。そして遼太郎は真の方を見た。

「まあ、お前も予定がないなら考えといてくれ」

「はい。じゃあ俺も部屋に戻ります」

「おう。お休み」

遼太郎の言葉に真は頷いた後立ち上がってそう言い、遼太郎もお休みと挨拶を返すと真は軽く会釈で返して自室に戻っていった。

そして十二前に時間が進み、真は外が霧に覆われているのを確認するとカーテンを閉め、テレビの前に立つ。それと同時にマヨナカテレビが映り始める。しかしそれは砂嵐を映すのみで他には何も映らなかった。

(……よかった)

真は安堵の息を吐いてマヨナカテレビが消えていくまで何も映らないことを確認し、それから安堵と同時に疲れが出てきたのかふわあとな欠伸をすると寝巻きに着替えて布団に入り眠りについた。

第十三話 四月三十日、自称特別捜査隊発足

4月30日。真は普段通り登校をしていると校門前に雪子が立っているのに気づき、そつちに目をやる。と同時に雪子も気づいたように真に目を向けた。

「あ、お、おはよ」

「もう大丈夫か？」

雪子は真に走り寄って挨拶し、真もそう尋ね返す。それに雪子もこくんと頷いた。

「う、うん……今日から学校、来るから……よ、よろしくね」

そこまで言うとな彼女は顔をうつむかせ、浮かない表情を見せる。

「なんか、みんなに、すごく迷惑かけちゃったよね。ごめんね……」

「天城のせいじゃない。それに、こういう時は『ごめん』じゃない」

「え？……あ、そっか。『ありがとう』だよね」

雪子の言葉に返す真の言葉に雪子は一瞬首を傾げた後気づいたように頷いてありがとうとお礼を言う。その雪子の表情は以前よりも明るく見えた。

「お母さんね、もう仕事に復帰したの。仲居さんたちもすごく協力してくれて、なんだか前より、上手く回ってるみたい」

そこまで言うとな雪子はまた何か考えるような様子を見せる。

「私、無理してたのかな……なんでも自分がやらなきゃって、思い過ぎたのかも……あれから、自分の事とか……少し冷静に考えられるようになったと思う」

「そうか。良いことだと思っぞ」

雪子の言葉に真はふつと微笑んで頷く、と雪子は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「で、でも、なんか恥ずかしいな……自分でも見たくないと思ってたこと、みんなに見られちゃったし……」

「あれが天城の全て、ってわけじゃないだろ？」

「……うん、そう思いたい」

雪子の言葉に真はそう返し、それに雪子はこくんと頷く。

「雪子ー!」

するとそこに聞こえてくる少女の声、それに雪子は嬉しそうに顔をほころばせた。

「あ、千枝ー!……じゃあ、また後でね」

「おう」

雪子はそう言うのと駆け寄ってくる千枝の方に歩いていき、真は雪子を救うことが出来てよかったと考えながら教室に歩いていった。

それから時間は放課後まで過ぎていき、真、陽介、千枝の三人は屋上で少し話し合いを行っていた。そこに雪子が片手に一つずつカップ麺を持ってきて合流する。

「お待たせ。千枝はおそばの方だよ」

雪子が手に持っているのは赤と緑の容器で有名なカップ麺だ。緑色の容器を受け取った千枝はカップ麺から漂う匂いに嬉しそうな表情を見せる。

「サンキュー! おくこの匂い、たまらん……部活前のこの一杯のために生きてるね、うん。これ、あとどんくらい待ち?」

「全然、まだよ」

千枝の問いかけに雪子はそう返して千枝の隣に座り、千枝は真達の方を向く。

「で、なんだっけ?……あ、雪子に事情聞くんだったよね?」

「ああ。先輩には後で俺が伝えるし、俺達で分からないことは疑問点を纏めてから電話する」

「まあ、流石に毎度毎度ずっと電話で参加ってわけにはいかないよな。通話料金的に……」

千枝の言葉に真が言い、それに陽介もうんうんと頷く。そして真剣な目つきになって雪子を見た。

「なあ、天城さ、やな事ムリに思い出さす気はないんだけど……改めて、聞かせて欲しいんだ。さらわれた時の事、やっぱ何も覚えてないのか?」

「……うん」

陽介の言葉に雪子はうつむき、浮かない顔で頷く。

「落ち着けば思い出すかなって思ったけど、時間が経つ程、よく分からなくなっちゃって……ただ、玄関のチャイムが鳴って……誰かに呼ばれたような気は、する」

雪子は自分が覚えていることを口に出すが、そこまで言うとうるふると首を横に振った。

「けど、その後はもう、気づいたら、あのお城の中で……ゴメンね」

「謝んなくていいって。けど、やっぱりその来客つてのが犯人!？」

「どうだろうな、もしそうなら相当大胆だぜ。玄関からピンポーンなんてさ」

「目撃者が無いか警察も洗ってるようだが……恐らくあまり期待できないだろうな。すぐに身元がばれるような格好で歩くほど相手も馬鹿じゃないはずだ」

雪子の謝罪の言葉に千枝は慌ててそう返した後、来客が犯人なのかと言う。それに陽介は肩をすくめて返し、次に真が悔しそうな表情で返した。

「なんでこんな事すんだろ?」

「そこまでは、犯人に聞いてみなきゃ分かんねーな……」

すると突然千枝がそんな事を言い、陽介もそう返す。そこに真が真剣な目を見せた。

「だが、一つ大事なことは分かった。人が次々テレビの世界に行っているのは偶然じゃない……こつちにいる誰かがさらってテレビに放り込んでいる。つまりこいつは、殺人だ」

「ああ……つと、言っただけだったな」

真の言葉に陽介も神妙な顔で頷き、その後にししつと笑みを見せた。

「俺とコイツ、あと命さんで、犯人挙げちゃうことにしたからさ! この事件、正直警察には無理そうだけど、俺らには力があるからな」

「ああ。逮捕権があるのは警察だ、だが証拠を見つけて犯人を警察に引き渡すくらいなら俺達にも出来るはずだ……」

陽介の言葉にそう言い、一旦言葉を切って雪子達の方を見る。

「だが、力は少ないよりは多い方が助かる。良かったら力を貸してくれないか？」

「え？ えっと……」

真はそう雪子と千枝に問いかける。それに雪子は驚いたように声を漏らした。と千枝が勢い良く右手を突き上げた。

「あたしもやるからね！ あんな場所に人放り込むなんてさ。も、絶対ブチのめす！」

「千枝……」

千枝の言葉に雪子は感嘆の声を漏らし、少し考えた後真の方を見る。

「私も……やらせて」

「……」

その言葉に三人の視線が雪子に向く。

「どうしてこんなことが起きてるのか知りたい。それに……もし自分が、殺したいほど誰かに恨まれてるなら、知らなきゃいけないと思う。もう、自分から逃げたくないの」

雪子の強い視線での言葉に三人は頷き、陽介がにと笑みを見せた。

「おっし！ じゃあ、全員で協力して、捕まえてやろーぜ！」

「ああー！」

「もっちろんー！」

「うん」

陽介の言葉に真が大きく頷き、千枝も勢い良く言う。雪子も頷く。そしてその次に千枝が口を開いた。

「でも、そうやって犯人捜す？ 今んとこ、手掛かり無しだよね」

「狙われたの、私で三人目だけど、これで終わりなのかな？ もし、次に狙われる人の見当が付くなら、先回りできない？」

「先回りか……なるほどな、いいかも。じゃあ、今までの被害者の共通点を挙げてみようぜ」

千枝の言葉の後に雪子が提案、それに陽介が頷くと真が目を閉じて

考えているような状態を見せる。

「二人目は女子アナの『山野真由美』さん、二人目は『小西早紀』先輩。三人目は『天城雪子』……一番に思い浮かぶ共通点といえば全員女性。というところか」

「だな」

「女性ばっか狙いやがってえ！ 許せん！ きつとヘンタイね」

真の言葉に陽介が頷くと千枝が憤慨した様子でそう言う。と陽介が思いついたように声を出した。

「あと、これは？」二人目以降の被害者は一人目に関係してる」

「あ、そっか、雪子も小西先輩も、山野アナと接点があつた……」

「確かにそうだよね……」

陽介の言葉に千枝が頷くと雪子も賛成する。

「とすると……『山野アナの事件と関わりがあつた女の人が狙われる』……ってこと？」

「決め付けは危険だが、今のところはそう考えて動くべきか」

「そうだな。で、これも多分んだけど、次もし、また誰か居なくなる」とすれば……」

雪子のまともに真が頷き、陽介も頷いてそう言う。と千枝が思いついたように口を挟んだ。

「あつ！ 雨の晩に、『例のテレビ』に映るのかな!? 雪子ん時も、それっぽい流れたし」

「小西先輩の時もそうだった。多分間違いないねえ」

「ああ。最初の内はハッキリとは見えないが、重要なのは居なくなる前に映つたということだ。まるで誘拐の予告みたいだが、とにかく今はあれを当てにするしかない」

千枝の言葉に陽介も返し、さらに真もそう言う。

「次に雨が降つたら……か」

それに雪子が声を漏らし、全員がマヨナカテレビを忘れずに見ようということを決める。それから陽介が口を開いた。

「ところでソレ、もう出来てんじやね？」

陽介の言葉に千枝はカップそばを思い出してにっこり微笑む。

「うおっと、そうだった！ いっただつきまーす！」

千枝の言葉に続いて雪子もカツプうどんを開いて食べ始める。

「な、先生、ヒトクチ！ とりあえずヒトクチ味見！」

と突然陽介がそんな事を言い出した。

「うっさいな！ アンタも買えばいいじゃん！……つたく、ヒトクチだけだかね」

千枝はそれに叫び返すが、しつこくなるとうっさいと考えたのかすぐに折れてそう言い、容器を陽介に渡す。と真もふとカツプうどん――赤いきつねの香りが気になってきたように雪子の方を見る。

「ちよつと食べる？」

「あ、いいのか？」

「うん、どうぞ」

とそんな視線に気づいた雪子の言葉に真がつい聞き返すと雪子はそう言つて赤いきつねの容器を手渡した。

「なんか催促したようですね」

一言断りを入れてから真は陽介と共にくどんを食べ始める。

「う、う、うメエエエエ……俺、まじ、腹ペコの子羊の気持ち分かるわ〜」

「……美味しい」

陽介は感極まったようにそう言い、真もおあげを齧つて静かにそう言う。すると真は約束通り少しで食べ終わったのに対し陽介は手が止まらないというようにそばをすすっていく。

「ギャー！ ちよつと何してんのよあんた!!」

「はっ?」

千枝の悲鳴に陽介ははっとなつてさきつと容器を千枝に返す。

「ぐちそうさま」

真も同じように雪子に容器を返す、と二人は愕然とした表情を見せた。

「具ごと全部いかれてんじゃん……」

「お、おあげ……」

千枝は具ごと全部食べられているのに、雪子は好物なのだろうおあ

げがないのに愕然としていた。

「あ、すまん。カップうどんの油揚げ……好物なもんで……」

つきつねうどんの主役である油揚げを食べてしまった真はすまなそうに雪子に謝り、千枝は陽介に詰め寄る。

「なにしたか、分かってんでしょーね?」

「い、いやいやいや! 待て、ごめん、悪かった! 代わりに肉! 肉 おごっから!」

怒り心頭の千枝の様子に陽介は慌てて謝り、さらにそう言う。と千枝は押し黙った。

「肉だぞ、肉!? き、聞こえてる?」

「肉……」

「おあげ……」

肉にぴたりと止まった千枝の後ろで雪子もそう漏らす、と真が彼女の前に立って頭を下げた。

「すまん。お詫びに食事を奢る」

「そーそー雪子! 肉で手を打とうよつ。カップ麺なんていつでも食べられるし、ね?」

「……脂身少ないのなら、いいよ」

奢る食事の内容は肉で固定されているらしい千枝の言葉に雪子はうかない表情でそう返した。それに千枝もうんと頷く。

「よっし、協議の結果、肉で許す! 脂身少ないのって、フィレ?

あー、フィレ肉、なんて芳醇な響き!」

そう言つて上機嫌にフィレ、フィレ、フィレ、フィレに……と歌いだした千枝に陽介は困ったように表情を引きつかせる。

「ど、どうするよ相棒!」

「高いカップそば代になつたな」

陽介の言葉に真も肩をすくめてそう返し、陽介はがくつと肩を落とした。

それから場所はジュネスへと移る。

「いや、ホントちようどよかつたぜ。今日から始めたんだよな、ビフテキ。ウチとしても名産広めんには協力したいし、それに立派な鉄板もあることだしな」

「焼きソバ屋の鉄板じゃん……まあいいか、肉は肉だし。フィレ肉には程遠いけど……」

陽介はジュネスのビフテキで済ませようとしており、その言葉に千枝がツツコミを入れるが肉は肉だからいいかと結論付ける。

「雪子、大丈夫？ 苦手なんじゃない？」

「う、うん。えつと……」

千枝の言葉に雪子は冷静になって考えるとおあげしか食べられないのに奢ってもらっていいのかと不安になるが、真が雪子の方を向いた。

「食べられない、食べきれないなら残りは俺が貰う。食材を無駄にするのは命に対する冒涇だからな」

「あ、うん……」

真は真剣な顔でそんな事を言い、雪子がそれに頷いた後真は前を向きなおす。

「話の続きになるが、結局犯人はどんな奴なんだろうな？」

「山野アナだけ見れば、動機は恨みっぽいよな。不倫相手の奥さんとかさ」

「でも終みすずってアリバイがっちりでしょ？ 旦那さんとも前から別居中らしいし」

「そうなのか？ やけにお前詳しいな……」

真の言葉に陽介が返すと千枝がやけに詳しい情報を話し、それに陽介は驚いたようにその声を漏らす。

「じゃあ二件目か。小西早紀先輩、彼女は一件目の死体の発見者だった。だよな、花村？」

「ああ。犯人が同じだとすれば、先輩が狙われたのは……俺が思うのは口封じってとこだ。例えば何か、証拠を握られたとかな」

「でも、犯人はテレビに入れただけだね？ 警察に捕まるほどの証拠なんてあるかな……」

「それなんだよなあ……」

真の促しに陽介がそう言うが雪子がそう意見を返し、それに陽介はそう声を漏らして腕組みをする。

「しっかし、田舎は退屈そうだと思ってたなら、信じられない事ばつかなあ……おつと、新メニユー発見伝」

「ん？ あれは足立さん？」

そこに突然やってきた相手に真が声を漏らす、とその声が聞こえたのか相手——足立は振り向くとぎよつとしたような顔を見せた。

「キ、キミは堂島さんとの……あはは……」

彼はそう言つて苦笑いを漏らし、彼らの方に歩き寄ってくる。

「えつと、そうだ、ちようどよかつた。うん。堂島さん、今日は定時で上がるからつて、菜々子ちゃんに伝えてくれる？」

「足立さん、別にさぼつてたなんてリークしませんから」

「あ、あつははは……」

足立の挙動不審な言葉に真は少し笑いながらそう言い、足立はそれに乾いた笑い声を漏らした後陽介達を見た。

「ども、足立です。堂島さんの部下……ていうか相棒ね」

「お仕事、大変そーつすね？」

「え、ああ、世間は面白がつてるみたいだけど、僕らはそういう訳にもいかないからね」

足立が名乗つた後の陽介の言葉に、困つた表情で足立が答える。

「あの、やっぱ小西先輩が狙われたのつて、口封じなんですか？」

「あ、あー、いいとこ突かれちゃつたね。イタタタタ……なんて、はは。もちろん、その辺は僕らも考えてるさ。彼女、山野アナの死体発見後に殺されたでしょ。もし口封じだとすると、彼女以外の人間が見ても、証拠だと分らないものが遺留品にあつたとかね。とすると、犯人は小西早紀に非常に近い人かもしれないよねえ。柊みすずの周りからは何もでないし……あ、僕の推理、イイ線いつてるかも……」

「足立さん、警察には守秘義務というものがあるのでは？……」

千枝のストレートな質問に足立はそう話し出し、それを聞いた真が呆れたように口にする。と足立は慌てた表情を見せた。

「あつと、また喋りすぎ？ い、今の内緒ね……まあ、犯人は警察が必ず捕まえるから。それじゃ！」

呆れたような表情でさらに冷めた目で指摘する真の視線に居たたまれなくなった足立は、逃げるように去っていく。

「あく……たしかに、警察には任せておけないなあ……」

「言つとくけど、堂島さんを一緒にはしないでくれよ？」

「わ、分かっていますって……ってのあつ、しまった！ 肉がげんなりしてる!!」

「肉肉うるせーよ……」

千枝の言葉に真がそう返すと千枝は苦笑いをしながら言った後肉がげんなりしているのに気づいて声をあげ、それに陽介がツツコミを入れる。

それから二人が食事を終えるのを待っている間に真が呼んだ命も合流、二人が食事を終えてから彼らはテレビの中へと向かった。

「すごい……ここ本当に、テレビの中なんだ……」

テレビの中に入った雪子は辺りをきよろきよろと見回しながらそう呟く。するとぴこっぴこっという足音と共にクマがやってきた。

「あの時のクマさん……夢じゃなかったんだ」

雪子は感慨深い様子でそう呟く。やはり非現実的な体験過ぎたせいでどこか夢だったんじゃないだろうかと考えていたのだろう。

「ユキチャン元気？ クマね、ユキチャンとの約束守っていいクマにしてた」

「そっか、えらいえらい」

クマの言葉に雪子がにこっと微笑んで返す。その構図はあたかも出かけていたお母さんと一人でお留守番してた息子だった。

「ま、まあ、このクマきちのためにも犯人見つけようって事になってさ」

それを見ていた陽介が苦笑交じりにそう言い、それに雪子も頷いて再度クマを見る。

「私も、仲間に入れてもらったの。一緒に頑張ろう」

「うん！ 一緒に頑張ろうって思ってたクマ！ だからユキチャン

に、用意してたクマよ」

雪子の言葉にクマはそう返して雪子に眼鏡を手渡し、雪子はそれをかけると明るくなったのであろう視界を見てうんと頷く。

「そっか、みんなかけてるの、コレなんだ。ありがとう、クマさん」

ほんとだ、霧が晴れて見えるくと辺りを見回してそう言っている雪子をちらつと見た後、今度は千枝が口を開いた。

「ところでさ、なんでそんなにメガネ持つてるワケ？」

「よくぞ聞いてくれたと言いたいですぞ！ これ、クマが作ってるクマよー」

「本当かい!？」

千枝の言葉にクマがそう言い、命が驚いたように問い返す。それにクマはうんと大きく頷いた。

「クマはココに住んで長いから、ココで快適に過ごす工夫は怠らないクマ」

「へえ……それなら、なんでクマ君はメガネをしないんだい？」

「おっと、それ訊いちやう？ またまたいい質問クマ！ 何を隠そう、クマはこの眼自体がレンズになってるクマ！ 知らなかったクマ？」

「知らねーよ」

命の問いかけにクマはふっふつと笑うようにしてそう言い、それに陽介が呆れたように返す。

「な、なに大して興味ないのフリしてイジワルしてるクマか！ クマはすごく器用クマよ！ 見るクマ！ 指先がこんなに動いている！」

クマはそう言って手の先端を微妙に動かしており、それに真と命はスベリギヤグを見たようにしーんとなった。

「分かんわー！」

そして陽介がツツコミにクマを突き飛ばし、クマは倒れこむがまるで起き上がりこぼしのように起き上がる。と雪子がクマが倒れた拍子に何かを落としたのに気づいた。

「あれ、何か落ちたよ？」

「あ、それ、ちよつぱり失敗したメガネ」

「あー、これ……」

雪子は拾い上げた眼鏡が琴線に触れたのかその眼鏡に付け替える。

「ちよ、ちよつと雪子？」

「あはは、どう？」

雪子の明るい言葉に残るメンバーは沈黙する。雪子が付け替えたのは牛乳瓶の底みたいなレンズに大きな鼻とピンと真横に伸びた髭、所謂パーティ用の鼻眼鏡だった。

「む、むしろ自然？」

「あははは、やった」

詰まりながらコメントを返した真の言葉に雪子は嬉しそうに声を出した。

「……ユキチャン、それ気に入ったクマ？」

「鼻ガードついてるし、私、これがいい」

「おやめなさい！」

驚いたような意外そうな声で問うクマに、雪子は真剣な声音で即答した。冗談に聞こえないその言葉に間髪入れずに千枝がツツコミを入れるがクマは困ったように頭をかく。

「クマったなー。それ、本物のレンズ入ってないクマよ。こんなことなら、ちゃんと用意しておけばよかったクマ」

「なんだあ、残念」

クマの言葉に雪子は心底残念そうな声を漏らし、眼鏡を付け直すと鼻眼鏡を千枝に手渡した。

「はい、次は千枝ね」

「はあ？　ちよ……しょーがないなあ……」

雪子の言葉に千枝は困惑したようにそう言って眼鏡を付け替える。

「う……ぶぶっ！」

するとそれを直視した雪子が噴出した。

「あはは、あははっはっはっはっはっはっは！」

「こういう流れ、これ……」

「あ、天城さん？……」

文字通り腹を抱えて笑い出した雪子に千枝が声を漏らし、陽介が困惑したように声を漏らす。と千枝は呆れたようにはあとため息をついた。

「出たよ、雪子の大笑……あたしの前以外ではないと思ってたのに……」

「笑い上戸、というやつだったわけか……」

千枝の言葉に真も頬をひくつかせながらそう返し、千枝がこんな眼鏡じゃ捜査にならないっしょ、と雪子を叱り付けると命も困ったような笑みを見せる。

「たしかに、その眼鏡をつけられてちや真剣な話も出来ないね……」

「ま、まあでも、天城が元気出たみたいでよかったよ、うん……」

命の言葉の次にとりあえず陽介がフオロー。

「ち、千枝の、かお……ぷっ……ははは、おかしー！ ツボ、ツボに……う、ぷぷっ、くるし、お腹いたい、あはは……」

どうやらツボに入ったらしく笑い続ける雪子。それを見ていた命がため息をついた。

「やれやれ……とりあえず、今日は一度戻るとする？」

「ああ、はい……」

命の言葉に真も頷き、雪子の爆笑が治まってから彼らは元の世界へと戻っていった。

「ところで命さん、なんでそんなもん持ってきたんですか？」

「なんか前々から集めてましたよね？」

ジュネスから出たところで陽介が尋ねる。命は前々から持参していた袋にシャドウの破片を少しずつ入れていたのだ。それに命があと頷く。

「ほら、 дай だら、のおじさん、珍しい素材を見つけたら持ってこいつで言っただでしょ？ シャドウの破片で試してみたらどうかな？」

「あ、なるほど。珍しいっちゃ珍しいよね」

命の言葉に千枝がうんうんと頷いて返し、じゃあ行ってみようとい

うことになって彼らは商店街までやってくる。と命があつと声を漏らして足を止めた。

「どうしました？ 先輩？」

「やばい、大学のレポート出すの忘れてた……」

「レポート？」

命が足を止めたのに真が尋ねると命はそう声を漏らし、それに陽介が首を傾げると命はうんと頷いた。

「ああ、うん。詳しくは話せないけど、僕はこの調査のために大学休学してて、依頼主が大学の理事長と親交があるらしくって、郵送されるレポートをやって期日までに大学に送り返すつてのを一定数やることで単位取得するつていうことになってるんだ。もし単位落として留年なんてなつたら僕……殺されるかも」

「「っろっ!」」

命は顔を青くして尋常じゃなく震えており、その言葉に陽介、千枝、雪子の三人が声を失い、真は「あゝ」と納得したように頷く。

「そ、そう言うわけでゴメン！ 僕一刻も早く旅館に戻つてレポートまとめて郵送しないと!!」

「わ、分かりました！ 後は俺達に任せてください!!」

「ごめん真君！ よろしく!!」

命の言葉に真も真剣な表情で頷き、命はそう言う「なんでバイクで来てないんだ僕のバカー！」と叫びながらダダダダと突っ走つていく。しかし元陸上部なだけあつて綺麗なフォームで走っていた。

「だ、大丈夫かな？ 命さん……この時間帯は旅館に向かうバスは出てなかったはずだけど……」

「先輩なら本気出せば走つて旅館まで戻れると思うが……」

「あー、なんか納得しちまいそう……」

心配そうに声を漏らす雪子に真がそう返すと陽介もうんうんと頷く。

「ま、とりあえずあたしらはだいだら。でシャドウの破片売ればいいんでしょ？ さ、早く行こう」

そして千枝がそう言うのと彼らは改めてだいだら、に歩いていった。

「あん？　おう、おめえらか」

「ひ」

刀傷が目立つ強面の男性—— дайだら。店長の出迎えに初対面の雪子が思わずひっと悲鳴をあげて千枝の後ろに隠れる。

「だ、大丈夫だって雪子。か、顔はこんなだけど怖い人じゃない……と、思うから……」

千枝の言葉も尻すぼみになっていき、陽介も腰が引けている。

「おい、なんか用じゃねえのか？」

「あ、えつと……」

店長の低く威圧感のある声に真は少し怯えたように声を漏らす、がふうつと息を吐いてシャドウの破片を入れた袋を差し出した。

「あ、あの、珍しい素材を持つてきたらしい物を作つてくれるという話だったので面白そうなものを持つてきました」

「ほう……」

真がそう言つて差し出してきた袋の中身を店長はほうと呟いて袋を受け取り、その中身であるシャドウの破片を一つ一つ念入りに調べていく。

「……」

最初こそ口元に笑みが浮かんでいたが、その調べていくのが進んでいく内にその口元が引き締まり、表情も険しいものになっていく。それを見た陽介がううつと唸った。

「な、なあ……まずつたんじゃね？」

「ガ、ガラクタばつか持つてきたとか思われたかな？……」

後ろの方で陽介と千枝がぼそぼそと話し合う。たしかに命が集めていたシャドウの破片は戦った後消滅していなかったものを集めたと言つていたがそれは大きな乳歯の他にひしやげてしまつているカクテラに破れてしまった布に毒々しい色をした花、硬い角など、ガラクタと言つていいに近い。真も少々頬が引きつっていた。

「……なあ、おめえら」

「は、はいっ!？」

店長の言葉に真はビクツとなつて問い返す。そしてそのこつちを

見透かすような店長の視線に硬直した。

「おめえら、こんなもんどこで手に入れたんだ？」

その低い声の威圧感に真はつい黙り込み、店長はむうと声を漏らし、一つの鉄の塊を持ち上げる。マジックハンドなるシヤドウの破片だ。

「こいつ、少し調べた感じ強度は鉄と同等かそれを上回るのに鉄とは思えねえくらいに軽い。この強度に軽さ……こんなもん、ワシは今までお目にかかったことがねえ……」

(いいっ!?)

店長の呟きに真は驚愕の声を心の中で漏らすが必死で表情に出ないように隠す。

(っ、っ、椎宮！ まずったんじやね?! マジで!?)

(俺も、そう思う……まずい、やっぱ先輩と一緒にいる時にくればよかったかも……)

後ろで陽介が必死の形相で囁きかけ、真も囁き返す。まさかあの化け物から取れた破片までも化け物レベルだったなんて予想もしていなかった。店長の言葉に彼らは完全に心中パニックに陥っており、誰も店長の言葉に返す余裕がなかった。

「だんまりか……まあ、そうだろうな……」

店長は静かにそう呟き、うんうんと頷く。

「分かった。おめえらがこれをどうやって手に入れたかはもう聞かねえよ。ワシは職人だ、その魂に火をつけるような面白え素材が手に入った。それだけで充分だ」

店長はふつと笑いながらそう言い、それに四人は心中安堵の息を吐き、真が口を開く。

「あ、ありがとうございます。じゃあこれを使って日本刀や短刀二本、足甲と扇子つて作れますか？」

「かっかつ、面白え注文だな。よし、最高のアートにして渡してやる」
真の言葉に店長は笑ってそう返し、頷く。それに真はよろしくお願
いしますと頭を下げた後、思い出したように続ける。

「あと、鎧とかを服の中に着込めるようにしてもらえればありがたい

んですが」

「……おめえ、変わったシユミしてんな……」

真の言葉に、店長は気のせいか冷ややかな目を彼に見せた。

「四日と五日、だな」

時間は夜になり、真と菜々子がテレビを見ていると突然遼太郎がそう言う。それに二人が遼太郎の方を振り返った。

「四日と五日なら、まあ……休み、取れそうだな」

「ほんと!？」

その言葉に菜々子が嬉しそうな驚きの声を上げる。

「……ほんと?」

しかしその次には不安げな声を漏らした。

「なんだよ、疑ってるのか?」

「……いつもダメだから」

「ま、毎年じゃないだろ? ジュネスに行きたいんだったか? 近所じゃなくても、少しくらい遠くたっていいぞ」

遼太郎の言葉に菜々子がそう言うと言とうと遼太郎は苦しげな表情でそう返した後、少しくらい遠くてもいいと続ける。とそれに菜々子は眼を輝かせた。

「ホント? りよこう!？」

「あー、まあ、たまには、旅行もいいかもな……何処もメチャクチャ混むだろうけどな……」

「やったー、りよこう!」

菜々子の言葉に遼太郎は困ったように返すが奈々子は大はしやぎ、それに遼太郎の口から笑みがこぼれた。

「んー……よし分かった。どつか、考えておかなきゃな……」

遼太郎は微笑を浮かべながらそう返した後、真の方を見る。

「お前、どうする? 一緒に、どっか行くか?」

「そうですね……どうしようかな……」

「えー、行こうよー!」

遼太郎の問いに真はどうするかと考え出すが奈々子がそう返し、遼太郎はまたふつと笑う。

「菜々子は、一緒にいいみたいだな。予定が無いなら、付き合ってくれないか?……な?」

「分かりました」

遼太郎の言葉に真は降参したように返し、菜々子はまた微笑む。

「菜々子、おべんとう、もって行きたい!」

「ん? ああ、そうだな……」

菜々子の言葉に遼太郎は考える様子を見せた後、真を見る。

「真、お前弁当作れるか?」

「ええ、もちろん。一人分だと逆に面倒なんでやりませんが、まあ三人なら」

「やったー! おべんとう!」

遼太郎の言葉に真が頷くと菜々子は嬉しそうに声を上げる。

「(さて、何を作るか…) ……俺、部屋に戻りますね」

「おう、お休み」

「おやすみなさーい」

真は弁当は何にするかと考えながら立ち上がり、遼太郎と菜々子に挨拶と挨拶すると部屋に戻っていき、寝るまでの間家から持ってきた料理本を読んで弁当のメニューを考えて時間を潰していった。

第十四話 黄金の週間

五月一日。真はなんとなく商店街へとやってきていた。
「あ……」

と、ベルベットルームへの扉の前にマリーが立っているのを見つ
け、真は彼女に歩き寄っていく。

「よお、マリー」

「あ、来た」

「ん？」

「キミの事、待ってたの。ね、どつか連れてつてくれる？ 一人じゃ全然分かんないし……キミ、色んなトコ知ってるでしょ？」

真に声をかけられたマリーはそう言い、それに真は少し考える様子を見せる。

「分かった」

「うん、行こっ！」

真の言葉にマリーは嬉しそうに微笑んで頷く。

「今日はね、賑やかなとこ。『ジュネス』行きたい。聞いたもん、そういうのあるって」

「はいはい」

そして注文をつけ、真は苦笑しながら頷いた。

それから二人は、興味津々のマリーが真を引きずるように家電売り場のフロアまでやってくる。

「ね、きっきの……『たいむせーる』って何？ 『さらだあぶら』？

みんな取り合ってた。君も」

「ああく……」

マリーの言葉に真は声を漏らす。ジュネスに来たついでに買い物も済ませようとした彼、ちょうどタイムセールに遭遇したのでサラダ油を購入したのだがそれがまあ激戦区だったとだけ言っておこう。

「きつと戦うくらい大事なものだ……」

そしてマリーは一人納得したような表情で頷いていた、その時だっ

た。

「あつれ、椎宮君じゃん。偶然〜！ 何してんの？」

「よお、里中」

偶然家電フロアにやってきていたらしい千枝が駆け寄りながら声をかけ、真も軽く右手を挙げて挨拶を返す。と千枝は次にマリリーに気づいて分かりやすいびつくりの表情を見せる。

「かわいー……誰、この子」

「ちよつとした知り合い。マリリーっていうんだ。な？」

「え？ あ、うん……」

千枝の言葉に真はさらつと返してマリリーにもそう言い、それにマリリーは驚いたような戸惑った様子で頷く。

「マリリーちゃんって言うんだ？ すげー、外国の人みたい……あ、あたし里中千枝。よろしくー！」

「うん……」

明るく挨拶する千枝に対しやはり戸惑いの様子を見せるマリリー。するとマリリーはテレビに気づいてそつちに顔を向けた。

「これ、知ってる。色んなの、映るヤツ……」

「あ、マリリーちゃんもテレビ見に来た派？ あたしも欲しいんだよねー。うちのテレビ、まだ買い替えてなくてさ」

「ほ、欲しくないよ！ 欲しくないけど……」

そう言うマリリーの横に千枝が歩き寄ってそう言い、それにマリリーはふるふると首を横に振って否定の言葉を出す、がその言葉は途中で途切れ、何か考える様子を見せる。

「『野次馬ゲーノー速報』も見れる？」

「なんだその番組……」

「なんで？ やってるんでしょ、『ヤジヤジ』って。みんな見てるって聞いたもん、まーがれつとに」

マリリーの言う謎の番組に真がツツコミを入れるとマリリーはそう返し、何故か誇らしげに胸を張る。

「……」

明らかにマーガレットにからかわれている、いるのだがこうも胸を

張られて自信満々に言われては否定する気にもなれなかった。

「……そつとおこう」

結局そういう結論に至り、そんな彼の心の葛藤を知らないマリーは千枝に話しかける。

「ね、どうやったら見れるの?」

「え!? もしかして、マリーちゃんって、全然テレビ見ない人!」

「見ないよ、部屋にないもん」

「うわ、出た! いるいる、そういう子! キビシイ家って、そんなだよねー」

実際は少々違うのだが勘違いした千枝はうんうんと頷き、辛そうな表情で「あたしなら耐えられない。カンフー映画のない生活なんて! ……」と漏らしていた。

「ね、どうやって見るの?」

「えーつとだな………」

自分の世界に入り込んだ千枝をほつといて、マリーの問いに対しテレビの説明をする真。それにマリーはむくといいそうな顔を見せた。

「……でも、あの部屋 〴〵せんとないなー」

「ああ………」

「え?」

マリーの呟きに真は声を漏らし、千枝は首を傾げる。そしてマリーは踵を返した。

「鼻に言つとく、〴〵せんとないなー 付けろって。ヒマすぎだよ、あの部屋 ……」

「あ、ちよ、マリーちゃん!」

そう言うやいなやマリーは歩き出し、千枝は慌てて声をかける。

「てか、コンセントないってどんだけ!」

「あー悪い。俺マリーを追わなきゃ」

「あ、じゃあフードコートでご飯にしようよ! あたし先行ってるからー!」

「ああ、付き合わせてもらう。マリーを捕まえたら向かおう」
「オツケー!」

千枝はコンセントがないという眩きにツツコミを入れ、その次に真が言うのと千枝は提案。それに真は快く乗ってからマリーを追って走り出した。

それからマリーを捕まえた真は千枝に言われた通りフードコートにやってくる。と既に千枝は四人前のビフテキを注文しており——ちなみに真とマリーが一人前ずつ、千枝が二人前だ——三人で一緒に食事にする。そして一番先に食べ終えたのは二人前注文していたはずの千枝だった。

「はー、美味しかった！ 余は満足じゃ！ 久しぶりに食べると、このステーキも捨てたもんじゃないねー」

「……………」

二人前あつさり平らげてしまっている千枝に流石に二人とも閉口してしまう。

「マリーちゃん全然食べてないじゃん。あ、椎宮君もだけどき。いかなー。そんなんじや、大きくなれないぞー、なんちって」

「や、食べるの早すぎだし……………太るよ」

「うわ、言った！ い、痛いトコ突くね……………」

千枝の言葉にマリーはさらっと女性に対する禁句を告げ、それに千枝は痛いところを突かれたと叫ぶ。

「あ、そうだ。あたし、飲み物買って来る！」

すると千枝はそう言って立ち上がり、歩いていくが流石にさっきのマリーの指摘が気になったのか「ウーロン茶にしよう……………」と呟いていた。

「……………じゆねす、人多いね。なんであんなにいるの？ ヒマだから？ ……テレビあるなら、見てればいいのに」

マリーの言葉に真はなんと説明しようか困ったように苦笑を漏らす。

「おかーさん、ジュース買って！ 炭酸のヤツ！」

「ダクメ。さつき飲んだでしょ、我慢なさい」

「買って、買ってー！」

「ダメって言うてるでしょ。また虫歯になっちゃうわよ、ホラ」

するとそんな会話をして歩いていく親子を見かけ、マリーはその親子をじつと見送っている。

「ね……ああいうのってさ、私にもあったのかな」

「うーん……俺の場合、物心ついた時から両親は共働きで俺は家に一人が多かったからな……だが、普通なら当然なんじゃないか？俺の例もあるから一概には言えないが」

「当然、なんだ。そっか……」

マリーの問いに真はそう返し、その言葉にマリーは落ち込む様子を見せる。

「……何も覚えてないの。ただ歩いてて……行くトコなんてなくて、なんとなくあの部屋に着いて……そしたらまーがれつとが、ここにいなさい」って」

マリーはそこまで言う一旦言葉を切り、一拍置いてまた口を開く。

「マリーって名前も、あの人がくれただけ……名前ないんじゃ、不便だから」

「何も思い出せないのか？」

「違う。思い出さないの、必要ないから」

マリーの言葉に真が尋ねるとマリーはそう返すが、その言葉とは裏腹に彼女の表情には切実なものを真は感じていた。

「でも……なんでだろ。この町、懐かしい気がするんだ」

「住んでたことがある、とか？」

「……分かんない」

マリーの呟きに真が尋ねるが、マリーは静かに首を横に振る。とその後気づいたように明るい表情を見せた。

「覚えてるって言うか……これだけは、絶対に私のだって知ってる」

そう言って彼女が鞆の中から取り出し、真に見せたもの。それは古びた竹櫛だった。

「これだけ最初から持ってた……これは絶対、私のもの。でも……だから何？」

最初こそ力強くそう言うマリーだったが、やがてその声はしぼんで

いく。

「こんなの、何の役にも立たないよ……」

マリーはふうと息を吐いて竹櫛を鞆に戻し、真を見る。

「キミさ、《真実》を探してるんでしょ？……やめた方がいいよ。あの訳ないし、そんなの」

「どうだろうな？」

マリーの警告じみた言葉に真はふつと笑って返す、とマリーはふいつと顔を背けた。

「……この話、つまんない。もつと別の話がいい」

そう、浮かない顔で彼女が呟いた時だった。

「おっ待たせ〜！ やー、売店混んでたから頼んで来ちゃった。出来たら届けてくれるってさ」

明るい顔と声でそう言いやってくる千枝、しかし彼女はテーブル近くまで来ると重い雰囲気気づいたように二人の顔を交互に見る。

「……あれ。何かこう、空気重くないっすか。や、やだな、ちゃんと二人の分も頼んで来たってば！……ウーロン茶だけど」

「ああ、そりやどうも……」

千枝の言葉に真はとりあえずお礼を言っておく。それから三人でしばらく話した後、真とマリーは千枝と別れて商店街に向かい、真はベルベットルームまでマリーを送り届けてから家に帰っていった。

そして五月二日。真は雨が降る中傘を差して学校にやってくる、とその校門で雪子が話しかけてきた。

「おはよう……雨だね。夜までには上がるらしいけど。私が《向こう》にいた間は、椎宮君達、きつと雨の度に……」

「いや、俺の記憶では天城を助けるまでに雨は降らなかつたはずだ」

「あ、そ、そう？ それとごめんなさい。暗くなっちゃうよね」

雪子の心配そうな言葉に対し真はあっさりとそう返し、それに雪子は驚いたように声を漏らした後ごめんなさいと謝って苦笑する。

「あ、ところで明日からゴールデンウィークだけど、何か予定はあるの？」

「家族サービスってやつだな。ジュネスに行くことになってる」

「そうなんだ。お休み中はずっと晴れみたい。せつかくなんだし、ずっと平和だといけど、でも事件はまだ解決してないんだよね……」

「時々は『向こう』に行つて、力をつけるようにした方がいいだろうな」

「うん……必要にならなければいいんだけどね」

真と雪子はそう話し合いながら校舎内に入つていった。

それから時間が過ぎて夜。真と菜々子は二人、居間でテレビを見ていた。

「今日未明、稲羽北にある稲羽信用金庫のATMが、重機で壊され奪われる事件がありました。現場から乗り捨てられた重機は、近くにある土木業者から盗難届けが出ている車両でした。犯人は警備会社に来るまでの非常に短い間に犯行を終えて逃走しており、警察では……」

「……おそいね、お父さん……」

テレビのニュースがそう言っているのを聞くと菜々子は浮かない表情を見せる。まだ遼太郎は帰ってきておらず、真も少し黙り込む。と突然電話が鳴り始め、菜々子は電話の近くに歩いていくと受話器を取った。

「もしもし、お父さん？ うん、だいじよぶ……うん……うん……」

しかしその表情がどんどん曇つていくものになるのに真は気づいてしまった。

「……うん……分かった」

そして菜々子はそう言うと言真の方に歩いていき、受話器を差し出す。

「かわつて……」

「ああ……」

「お休み、取れなくなつた……」

菜々子はそう言うと共に部屋に走つていき、それを見送つてから真は受話器を耳に当てた。

「お前か。悪いが今日遅くなる、戸締りして先に寝てくれ。それと、四日と五日の休みの件なんだが……実は若いのが一人、体壊してな……抱えてる事件の内容からいくと、穴は空けられん……俺が出るしかなさそうだ」

「……菜々子ちゃんがかわいそうだ」

「すまん、急なこと……菜々子は……どんな風だ？　悪いが、気にしてやってくれ……」

「……了解」

「じゃあな」

真と遼太郎は会話もそこそこに遼太郎がじゃあなという電話は切れ、真は受話器を元の場所に戻すと部屋に籠ってしまった菜々子に一言「お休み」と声をかけてから自室に戻っていき、来週から中間テストのため少し勉強をしてから眠りに着いた。

そして翌日五月三日、真は私服に着替えると一階に下りる。既に居間では菜々子が起きてきており現在はテレビを見ている。

「あ、おはよ」

「お、おはよう」

菜々子は真に気づくと挨拶し、真も挨拶を返す。と突然玄関のチャイムが鳴り、二人は玄関に顔を向けると歩いていった。

「おーっすー！」

「なんだ、里中か」

真と菜々子が玄関にやってくると同時にその気配を感じたのかわららつと戸を開けて元気よく挨拶してきたのは千枝。それに真が小さく声を漏らすと千枝はむつとしたように頬を膨らませる。

「なんだとは何さー！　でもよかった、居るじゃん。ね、今日ヒマなら遊び行かない？　雪子も来るし」

千枝は頬を膨らませた後にししというように笑ってそう言い、次に菜々子の方を見る。

「奈々子ちゃんも一緒に行く？」

「！　え、えつと……」

千枝の言葉に菜々子は驚いたように目を丸くした後困ったように

眩く、と真はふつと穏やかに微笑んだ。

「一緒に行こう」

「え、い、いいの?」

「もっちろん! いいに決まってるじゃん!」

真の言葉に菜々子が困惑したように声を漏らす。千枝は明るくそう言いきり、それに菜々子は嬉しそうに微笑む。それから彼らはジュネスのフードコートに集まり、バイト中の陽介や家の手伝いを切り上げてやってきた雪子と合流する。

「ゴールデンウィークだったのに、こんな店でじゃ菜々子ちゃん可哀想だろ」

「だって他ないじゃん」

「ジュネス、だいですき」

「な、菜々子ちゃん!……」

陽介のぼやきに千枝はそう返すが、菜々子が満面の笑顔でそう言うと陽介は感動したように眩く。

「でもほんとは、どこか、りょこうに行くはずだったんだ、おべんとう作って」

「お弁当、奈々子ちゃん作れるの?」

菜々子の言葉に対し雪子が問いかける、と菜々子は首を横に振って真に視線を向け、それに千枝はニヤニヤと微笑んだ。

「へへ、家族のお弁当係? すごいじゃん、お兄ちゃん」

「お兄……ちゃん」

「へへ、お前料理とか出来んだ。たしかに、器用そうな感じあるけどさ」

千枝の言葉に菜々子がぼうつと眩くと陽介がそう漏らす、と真はふつと笑って頷いた。

「まあ、両親が共働きだから自然にな。いくつか前の学校では料理研究部に入ってたこともある……と言っても、命先輩には敵わなかったが……って、そういうえば先輩は?」

「ああ、命さんなら面接中」

真は話の途中で存在を思い出したように命の事を言うと陽介はさ

らつと返し、今度はそれに皆の視線が集中した。

「あ、ああ。昨日、命さんに頼まれたんだ。バイト紹介してくれって……流石に甘えるばっかにもいかないから、とか言ってたけど……とりあえず、俺から親父、店長に紹介したんだ。んで一応履歴書作って、今面接中。つっても命さんなら多分採用されるだろうけどさ……命さん、そんなに料理上手いのか？」

「ああ。先輩も元々料理は嗜む程度にやってたそうだし、荒垣って料理上手な先輩に習ったらしい。少なくとも一般的な家庭料理以上には出来たのを何回か食わせてもらったことがある」

「へ〜……んじや惣菜んところにも回すこと出来るか？……」

陽介は面接に至る経緯を説明した後真に命の料理レベルについて尋ね、それに真が頷いて返すと陽介は少し考える様子を見せた。と突然千枝が口を開く。

「あ、あたしも何気に上手いけどね、多分。お弁当ぐらいなら、言ってくれば作ってあげたのに、うん」

「いやー……無いわ、それは」

「なんでムリって決め付けたの!? んじやあ、勝負しようじゃん！」

「ムキんなる時点でバレてるっつ……てか勝負って、俺作れるなんて言ってるよ……あ、けど不思議とお前には勝てそうな気がするな……」

「あはは、それ、分かる」

「ちよ、雪子!？」

料理のイメージがない千枝の発言のためか陽介が呟いて返すと千枝がムキになってかかり、また二人の言い合いが始まると雪子も笑い、それに千枝が驚愕の声を出した。

「じゃあ菜々子ちゃんが審査員かな。この人ら、奈々子ちゃんのママよりウマイの作っちゃうかもよ〜？」

「お母さん、いないんだ。ジコで死んだって」

陽介はさらつと地雷を踏み、菜々子の言葉に真を除く三人が声を失い千枝が陽介を睨みつける。

「ちよつと、花村……」

「そ、そっか……えつと……ごめん、知らなかったからさ……」

千枝の言葉に陽介は心底すまなそうな表情で頭を下げる。とそれに菜々子は困ったように首を横に振った。

「菜々子、へーきだよ。お母さんいなくても、菜々子には、お父さんいるし」

菜々子はそのままで言うとしり顔が赤くなる。

「……お兄ちゃんもいるし」

そしてにこつと満面の笑顔を向けた。

「今日は、ジュネスに来れたし、すごい、たのしいよ」

「……そ、そっか」

「お姉ちゃんたち、いつでも菜々子ちゃんと遊んであげるからね！」

「うん、遊ぼう」

菜々子の言葉に陽介が安心したように頷き、千枝と雪子が続くと菜々子は嬉しそうに頷く。

「よし、菜々子ちゃん。一緒にジュース買いに行くか！」

「うん！」

陽介の言葉に菜々子は頷き、二人は一緒に歩いていく。

「小さいのに、えらいね……」

「うん。意外とウチらの方が、ガキンちよだったりして。よしつ、あたしも菜々子ちゃんになんかオゴツてあげよ！」

雪子と千枝もそう言うと言席を立つ、と入れ替わるように菜々子がやってきて嬉しそうな屈託のない笑顔を見せる。

「お兄ちゃん、なにかいるー?」

「ああ」

その屈託のない笑顔を見た時、真は菜々子との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、「正義」のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真は僅かに笑みを浮かべて席を立ち、菜々子の元に歩き寄る。

「お兄ちゃん、たこやき、半分こでいー？」

「ああ……よし、一緒に買いに行くか」

「うん！」

菜々子の言葉に真は頷いて返し、菜々子も嬉しそうに返すと二人共にたこ焼きを買いに歩いていった。

それからまた時間が過ぎて翌日五月四日。真が部屋で封筒貼りをしていると突然携帯が鳴り出し、真は液晶から相手が陽介と気づくと電話に出る。

「もしもし？」

「もしもしー、オレオレ！」

相手はやはり陽介、すると真はピーンとひらめいた表情を見せた。

「……もしかして陽介かい、どうしたんだい？」

「……あー、いや実はバイクで事故っちゃってさー。今すぐお金が

……ってオレオレ詐欺じゃねっつの!!」

「ははは、乗ってくれてありがとよ。観客がないのが残念だ。で、どうしたんだ？」

即興のボケに見事に乗ってノリツツコミまで披露してくれた陽介に真は笑いながら返し、本題に戻す。

「ああ、昨日の今日でアレだけどさ、今日ちよつと遊ばねーか？」

他、適当に誘うし……どうよ」

「別にいいぜ」

「おう。あ、そだ。菜々子ちゃんもどうだ？ 良かったら連れて来

ようよ」

「聞いてみる」

「おう。んじゃ切るな、商店街で待ち合わせでいいだろ」

「ああ。じゃあな」

陽介は遊びの誘いの電話をかけてきており、それに真が頷くと陽介は菜々子も連れてきたらどうだと続け、それにも真は菜々子に聞いてみると返し、最後に陽介が待ち合わせ場所を言うと真は電話を切り、封筒貼りをキリのいいところまで仕上げるとそれらを一旦纏めておいてから居間に向かい、菜々子に陽介と遊びに行かないかと尋ねる。「行くー!」

もちろんというように元気よく返す菜々子なのであった。

それから真と菜々子は一緒に商店街にやってくる、と書店の前で陽介が待っているのを見つけ、彼と一緒にいる少年達に真は驚いたように声を漏らす。

「一条、長瀬」

「ん? よっ椎宮」

「遅いぞ」

その言葉を聞いて真が来たのに気づいたのか一条と長瀬が右手を挙げて返す。

「花村、二人と知り合いだったのか?」

「あ? ああ、まあな。さて、んじゃ全員揃ったところで菜々子ちゃん、どこ行きたい?」

「ジュネス!」

真の問いかけに陽介はそう返し、続けて菜々子に問うと彼女は即答。それに真と陽介は僅かに苦笑を漏らした。

それから四人はジュネスの家電売り場へとやってきて、陽介は嬉しそうに笑っている菜々子を見てまた苦笑を漏らした。

「つか、菜々子ちゃんホントここ好きね。どっか生きたいところ……で、ジュネス!」即答だもんなあ」

「まー、でもここってなんでもあってワンダーランドだよなー。妹ちゃんの気持ちも分かる……つか、マジかわいくね?」

陽介の言葉に一条が、菜々子に同意するように言った後にししつと笑って続ける。

「ウチも妹いるけどさ、やー、奈々子ちゃんみたいになってくんねーかな」

「な、菜々子、かわいくないよ……」

と、一条の言葉に照れたのか菜々子はそう言っつて真の後ろに隠れる。

「あ、ヤベ、俺嫌われた?」

それに一条はそう声を漏らす。

「大丈夫、可愛くないよ」

しかしその次に長瀬が可愛いと言われて照れた菜々子のフオロのつもりなのかそんな事を口走り、それに菜々子は今度は傷ついたように顔を伏せ、残る男子三人が驚愕の表情を取る。

「それダメだろうが!」

「アホかお前は!」

「ていうかアホだ」

「アホじゃないぞ! 断じて!!」

そして一条、陽介、真の順番に長瀬目掛けて集中砲火。それに長瀬は首を横に振りながら叫び返した。

「バカじゃないの?……てか、バカじゃないの? ってかな?」

そこに聞こえてきた声、それに真は驚いたように声の方に顔を向け、陽介は右手を挙げる。

「あ、命さん。ちゃーっす」

「どーも」

そこに立っていたのはジュネスの制服に身を包んだ命。その胸には「研修中」のバッジが光っていた。

「先輩、採用されたんですね」

「まあねー。とりあえず研修と称して人手足りないところ次々回される。もうどこが担当だが分かんなくなってくるよ」

真の言葉に命は笑いながら返し、首を傾げている一条、長瀬、菜々子を見るとにこつと笑みを浮かべた。

「どうも。訳あってここに滞在しています、真君の前の学校での先輩の利武命です。よろしく」

「あ、ど、ども」

「初めまして……」

命の笑顔での言葉に運動部二人が声を合わせて頭を下げ、菜々子も恥ずかしがりながらぺこりと頭を下げる。

「じゃ、次僕食料品売り場に回されることになってるから。ゆっくりお買い物をお楽しみください、お客様。それじゃねー」

命はそう言うとすたすたと歩き去っていき、真は陽介の方を見る。

「たった一日で採用って……」

「いやーうん、こつちも色々大変なんだわ……察して」

真の言葉に陽介はそう声を漏らし、苦笑を漏らした。

「テレビ、おつきいね……」

すると菜々子がそんな言葉を漏らしながらテレビを見、それに長瀬もテレビを見ながら頷く。

「こんなデカイ画面でスポーツでも見たら吸い込まれそうだな」

「ぜ、ぜんっぜん無理ですよ？ うん」

長瀬の言葉に慌てたように陽介が声を漏らし、真は今日共に遊びに来た全員の顔をちらりと眺める。

（今日は楽しい休日になりそうだ……）

そして心の中でそう呟いた。

それからまた翌日、こどもの日でありゴールデンウィーク最終日五月五日。真は私服に着替えると考える様子を見せた。

（少し、散歩に出かけるか……）

真は心中でそう呟くと財布や携帯など必要最低限のもののみを持って家を出て行く。菜々子はこの二日はしゃいで疲れたのかまだぐっすりと眠っているため鍵をかけておくのも忘れない。

「いらっしやいませー！ こどもの日、お菓子セールが行われておりまーす」

店員——陽介でも命でもない——の呼びかけが聞こえる中、真はジュネスの食料品売り場を適当に見て回る。が特に必要になるものもなく、真はお菓子セールだからと適当にあつたスティック菓子を手

に取ると会計し、ジュネスから出るとそのお菓子を齧りながら歩いていく。

「お、神社……そういえば……」

それから適当に歩いてみると神社までたどり着き、真は少し前に男子二人——一条と長瀬——が神社の境内に何か棲みついているという話をしていたのを思い出し、神社に入る。

「……」

神社の境内に人影はなく、薄汚れた社はあまり手入れもされていないことを思わせる。

「……帰るか」

真はそう呟いて神社を出て行こうとする。

「はっ!?!」

しかしその瞬間何者かの気配を感じ、咄嗟に真は身構える。と、突然謎の動物がまるで空を飛んできたかのごとく真の目の前にすたと降り立った。

「キツネ?……ん、これは?」

その謎の動物こと謎のキツネに真は驚いたように声を漏らした後、キツネが絵馬をくわえていることに気づく。とキツネは真に近づいて絵馬を突き出し、真はその渡された絵馬を取るとそれに書かれている文字を読む。

「『おじいちゃんの足がよくなりますように　けいた』……なんだこれ?」

子供が書いたような字でお願い事が書かれている絵馬を見た真は首を傾げる。と、彼は絵馬の裏に『珍しい形の葉っぱ』が貼り付いているのに気づいた。するとキツネは何かの気配を感じ取ったのかどこかに姿を消し、それと入れ替わるようにお爺さんがやってくる。

「あんなまー、珍しいね。あんなちゃんみたいな若い子が来なるとは」
「はあ……」

「この神社、だあれも住んどらんでな。時々ワシが手入れしとったんじやが、最近どうにも足が痛くてのー。もつとマシなお社にしてやりたいが、まず先立つもんがてんで足らん。どれ……ワシもお参りしと

こうかの。足が治らんと、手入れも出来ん。それに……」

お爺さんはぺらぺらと良く喋り、一旦言葉を切るとふうと息を吐いた。

「孫の圭太と遊びにも行けんからのー」

(聞いた……この絵馬を書いた子か？ おじいちゃんの足が良くなるように……と書かれているが……)

お爺さんの言葉を聞いた真は絵馬に目を落として心の中で呟く、とはいえ流石に老人の足を治すなんて技は彼は持ち合わせていない。

「やや、あんちゃんの手持つてる、それはもしや!？」

「は、はい!？」

すると突然お爺さんが声をあげ、真は驚いたように顔を上げる。お爺さんは絵馬の後ろに貼り付いていた葉っぱを凝視していた。

「その変わった形の葉っぱじゃ! 間違いないわい!」

「な、何がですか?」

「……死んだ婆さまの代から、湿布にはこれが一番と言われとつての! いやはや懐かしい!! しかし、あんちゃん、よう見つけたのお!？」

この辺の山じゃ、もう取れんと思つちよつたが」

「い、いえ、別に俺が見つけたわけじゃ……」

「た、たのむ、その葉っぱを、わしに譲つとくれっ!!」

「あ……構いませんが……」

たどたどしい真の言葉に対し押し返してくるお爺さん、それに真は押し負け、元々断る理由もないので葉っぱをお爺さんに渡した。

「おおー、これじゃこれじゃ……どれどれ……」

お爺さんはそう呟きながら、変わった形の葉っぱを足に貼り付ける。

「し、しみこむ! 何かがしみこんでくるぞえ!!」

するとお爺さんはそう叫び、足が痛いと言っていたにも関わらずぴよんつと飛び跳ねた。

「おほつ、ずーつと取れんかった痛みがみるみる消えていくぞい!!」

むふふ? むふふ!?!……おまけに精力までみなぎってきたぞい!?!」

お爺さんはそう言うのと真の方を見て微笑む。

「いんやー、あんちゃんとかえてえらい助かってしもうたわい。ありがたや！ これで、孫の圭太と遊びにも行けるぞい！」

「どういたしまして」

「こりや、巡り会わせて下さったお社様にも、たんと感謝せにやいかんのー！」

お爺さんはそう言うや否や賽銭箱に賽銭を入れるとすたたたと凄く軽い足取りで去っていく。

「ものすごい回復効果だ……」

思わず真もそう呟いてしまう。と隠れてきたキツネが嬉しそうに真の方を見た後、確かめるように賽銭箱を覗き込みだした。

(まさか、お賽銭を貰うために絵馬と葉っぱを渡してきたのか……)

思わずそんな事を考えてしまうと、キツネは嬉しそうに真の方を向いて「コン！」と一鳴きする。その口にはさつきと同じ葉っぱをたくさんくわえていた。

「コーン！」

たくさんの葉っぱを必死に見せてくるキツネ、何か頼みごとがあるようなその姿に真は不思議な出会いを感じ、キツネとの間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たな絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、《隠者》のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真は僅かに笑みを浮かべた後、ふとキツネのくわえている葉っぱを見る。

「(さつきの回復効果は凄かった……もしこれがテレビの中でも使えるとしたら心強いんだが……) ……とっど？」

真がそんな事を考えているとキツネが真の周りをくるくると周りに出す。

(まさか、こっちの気持ちを理解してるのか……)

その行動に真が驚いたように心の中で呟くと、キツネは賽銭箱の方に走ってそれをアピールする。その意味する言葉を予想した真は不敵な笑みをキツネに見せた。

「……タダでは協力しない、ってか？」

「コーン！」

真のくつくつと笑いながらの問いかけをキツネは肯定するように一鳴きし、真はまた一つ微笑を浮かべると絵馬を神社に返し、家に帰っていった。

それから時間が過ぎて夕方頃。仕事帰りのサラリーマンや夕食の材料の買い物にやってきた主婦でこった返している中、堂島遼太郎は衣料品売り場にやってきていた。

「いらっしやいませーって……堂島さん！」

「ん？ ああ、君か」

品物を選んでいる様子のお客様に声をかけた陽介はその相手が堂島であることに気づくと驚いたように声をあげ、遼太郎も陽介の姿を認めると声を漏らす。

「どうしたんだい、花村君？」

「あつと、命さん……」

「む？」

すると今は衣料品売り場に回されているらしい命が歩き寄り、陽介が困ったように声を漏らすと遼太郎は命の姿を見て首を傾げる。

「見覚えがないな……申し訳ないが、あなたは？」

「あ、えつと、ジュネスの新入りバイトです！ い、今は研修中なので無礼は勘弁してください！」

「……」

遼太郎は見覚えのない相手である命を不思議そうな顔で見ている。陽介が慌てて説明するが遼太郎は怪しいというような表情を崩

さず、命は笑みを見せた。

「この四月からちよつと旅行に来て滞在しています、利武命と申します。初めまして……えつと、堂島さん、でしたっけ？」

「……はい」

「もしや、甥っ子に椎宮真君がいらつしやいますか？」

「!?」

命の最初の問いかけに遼太郎は頷いて返すが、その次の問いかけには流石の遼太郎も目を見開く。と陽介が慌ててフォローに入った。

「あ、えつと、違いますよ！ 命さんは椎宮の前の学校の先輩なんす！

俺もそれが縁で命さんと知りあつたんすから！」

「そうなのか……この四月から……」

陽介の言葉に遼太郎は一つ頷いた後、刑事の雰囲気を僅かに出しながらそう呟き、命を見ると懐から警察手帳を取り出し、自身の身分を証明してから命に尋ねる。

「申し訳ありません。ここには旅行で来たとおっしゃってましたがどこにご宿泊でしょうか？」

「天城屋旅館ですが」

「天城屋旅館……」

遼太郎の問いにまた正直に答える命、それを聞いた遼太郎は事件の関連性を考えたのか考え始め、陽介はぎよつとなつて命に近寄り囁く。

(み、命さん！ なんかすつげー怪しまれてませんか!?)

(まあ、四月に急にやってきたんだから怪しまれて当たり前だよ)

(何を暢気な!?! 捕まったらどうすんすか!?!)

(下手に嘘ついて後でばれた方が怪しまれるって。まあ、任せといてよ)

慌てている陽介に対し命は端から見れば暢気とも言えそうなほどあつさり返す。

「重ね重ね申し訳ありませんが。この町に来たのはいつでしょうかな？」

「四月十三日です。天城屋旅館に連絡を取れば……つと、そうだった

……」

「はい？」

「あ、いえ、恥ずかしい話なんです……実は予約を失敗してまして、宿泊予約自体は四月十四日からになってたんです。その日はこの町にあつた神社で寝ましたけど、僕は予約を十三日にしたと思い込んでたので旅館自体には向かいました。従業員の誰かが覚えていると思いますか？」

「ふむ……失礼ですが、十二日の夜から十三日の朝まではどこに？」

「と言われましても……僕がこの町に来たのは十三日の午前中、大体十時頃だったと記憶してます。十二日はたしか、この町から少し離れた町にあるホテルに泊まってました。ホテル名はすぐには思い出せませんが、たしか領収書受け取ったので、後でお見せしましょうか？」

「ふむ……」

陽介がはらはらしている横で命と遼太郎はそう話し合う。と話は終わったというように遼太郎から刑事の威圧感が消え、彼は命に頭を下げる。

「急に申し訳ありません。ご存知だと思いますがこの四月から起きている連続殺人事件で少しピリピリしています」

「いえいえ。四月に急に現れた余所者なんて怪しまれてしょうがないですよ。早い事件解決を願います」

「どうも……」

謝罪する遼太郎に命は笑いながら返し、遼太郎がまた一つ返すと陽介が命の腕を取った。

「さて、んじゃ命さん。次あつちの物品整理いきましようか！」

「あ、そうだね」

「ではお客様、ゆっくりお買い物をお楽しみください！」

陽介はそう言うと言を引っ張るようにその場を去っていき、遼太郎はそれを見送った後、また買い物物の続きを始めた。

そして真が家に帰り着いてから時間が過ぎて夜。真は菜々子と一緒に居間でテレビを見ていた。

「先頃、稲羽北のATMが重機で壊され持ち出された事件で、容疑者逮捕です。逮捕されたのは、重機盗難を届けていた会社の元作業員プメナ・スシン容疑者、二十六歳です。警察の調べによりますとスシン容疑者は……」

「ただいまー。まったく、病欠で何日穴空ける気だ……ほんつと最近の若いのは……」

ニュースの途中で遼太郎の声が聞こえ、菜々子はニュースの続きに目もくれず玄関に走っていく。

「おかえりなさい！」

「……菜々子、悪かったな。また約束破っちゃまって……」

嬉しそうに言う菜々子に対しすまなそうに謝る遼太郎。しかし菜々子は笑顔を崩していなかった。

「あのね、お兄ちゃんたちがあそんでくれた」

「そうか……ありがとうな」

「いえ。俺も楽しかったので」

菜々子の笑顔での言葉に遼太郎は静かに呟いた後真に礼を言い、真も軽く首を横に振って返す。と、菜々子は遼太郎の横にある袋に気づいて目を丸くした。

「あつ、ジュネスの袋！ なあに？」

「はは、もう見つかったか。ま、今日は五月五日だからな。菜々子にプレゼント買ってきたんだ」

菜々子の言葉に遼太郎は笑いながらそう言い、袋の中から何かを取り出すと菜々子に手渡す。

「あー、服だ」

菜々子はそう言って服を拡げる。カモノハシの絵が描かれていた。

「選ぶのにえらい時間くったけどな、ハハ。気に入ったか？」

「なんか、ヘンな絵がかいてあるー。へんなのー、あはは、やったー」

菜々子はカモノハシの絵が描かれたシャツを無邪気に喜んでいる。すると遼太郎は真の方を向いた。

「それと、お前にもあるんだ。子供扱いつつつもりはないが、まあ公平にな」

遼太郎がそう言って差し出してきたものを真は受け取り、拡げる。水着だ。

「これは……ハイカラですね」

「まあ、とっとけ。その内いるだろうと思ってな」

「はい。それじゃ夕食にしましょうか」

「ああ。すまんな」

水着を見た真の言葉に遼太郎が返すと真は水着を自分の横に置いて立ち上がりながらそう言い、それに遼太郎が頷くと菜々子も一緒に夕食の準備に向かう。そして家族団らんの時を過ごして時間は過ぎていった。

第十五話 中間テストとペルソナ特訓

5月6日、放課後。自称特別捜査隊メンバーである四人は真の席の周りに集合していた。

「あく……なんでもう終わりかな、連休……」

「けど、平和で良かったじゃん？ ジュネスでバイトしてると、おばちゃん層の噂話聞けるけど、何もおきてないみたいだし。誰かが失踪、みたいな話無し……もしかして、天城の事件で終わりなのか？」

「終わらないだろうな。確証はないが……少なくとも油断は出来ない」

千枝が残念そうな声を漏らし、続けて陽介がにっと笑ってそう言う

と真は小さく首を横に振って返した。

「うん。分からないけど、犯人がまだ捕まってない以上、安心は出来ないと思う」

「雨が降ったら、また誰かがテレビに映ったりすんのかな？ 犯人像とか、もう少し何か分かればなあ……」

真の言葉に雪子が頷いて返すと陽介が考え込む様子でそう続ける

が、その表情は浮かないものだった。

「こうなると、雨が降って誰かが映るまではジタバタしてもしよーがないじゃん？ 天気、そろそろ崩れるらしいけど、あたし的には、来週一杯もつてくんないかな……」

そこに千枝が明るくそう言うがその言葉はどんどん力がなくなっていく。

「来週……中間テストじゃん？」

そしてはあつとため息を漏らしそうな声色で言う。

「あー、言っちゃった……それ考えたくねえー……」

「ハア、あたしも雪子みたく天から二物を与えられたいよ……」

それに陽介も浮かない表情を見せ、千枝も今度こそため息を漏らしながら続ける。と陽介がピーンというような表情を見せた。

「そ、そうだ真！ 何かあるかもしれねえし、テレビ――」

陽介の言葉が終わる前に突然ピリリリと音が鳴り始め、真は制服

のポケットに手を入れる。

「あ、悪い……先輩からだ」

真は陽介に一言断つてから携帯の液晶を見、それに表示されている名前を見ると電話に出る。

「もしもし？先輩ですか？」

「あ、もしもし、真君？念のために言っておくけど……つと、今周りが大丈夫？皆にも聞いておいてもらいたいことなんだ」

「……」

電話口の命は開口一番そう言おうとするが直後気づいたようにそう言い、それに真は真剣な目を見せると教室内を見回す。既にほとんどの生徒は教室を出て行っているが残って喋っている生徒もいないことはなく、真はそれを確認すると小声になる。

「すみません、屋上にでも移動してからかけなおします」

「オッケー」

真の言葉に命は頷くと電話を切ったのかツーツーという電子音が鳴り始め、真は陽介達に屋上に行こうと伝え、皆揃って屋上に行つてから改めて命に電話をかける。陽介達にも聞こえるようスピーカーをオンにしていた。

「先輩、それで伝えたいことって？」

「うん。とりあえず手っ取り早く言えば、もうすぐ試験でしょ？」

試験終了までテレビに行くのは禁止」

「ええええええっ?!?!」

命の言葉に陽介と千枝が絶叫。直後陽介は真から携帯を奪い取る
と電話口に口を押し当てた。

「みつ、みみみ命さん！なんでっすか!?!」

「そ、そうですよ！ま、万が一何かあったら!!」

陽介に続いて千枝も電話口目掛けて叫ぶ。

「今のところテレビの中に救助対象の人はいないはずでしょ？僕達も先輩に言われてたことだけど、学生の本分は勉強なんだから。それに、安全な内に受けられる試験で赤点取つての補習中とかにテレビの中に誰か放り込まれでもしたらそれこそ取り返しがつかないよ」

「うぐ……」

焦り絶叫している陽介と千枝は冷静な命に正論で言い負かされ、黙り込んでしまう。

「ま、そういうわけで試験期間中はテレビに行くのは禁止だから。真君もリーダーを承ったからにはきっちり面倒を見るように。いいね?」

「わ、分かりました」

「じゃあ試験頑張つてね。終わったらジュネスで何か奢つてあげろし、シャドウ相手の鬱憤晴らしにも喜んで協力するから」

命の電話口からでも分かるような厳しい声質での言葉。それに真が頷くと命は今度は明るい口調で言った後電話を切ったのかまた電話口からツーツと電子音が鳴り始めた。そして二人はがくと肩を落とす。

「ま、まあまあ、命さんの言うことも一理あるし、頑張ろ?」

「そーだね……」

そこに雪子が困ったように苦笑いしながら二人に声をかけ、千枝もはあとため息をついて返す。

「しようがない、頑張ろ。ねー花村、雪子に色々教わった方がいいんじゃない?」

千枝はふうと息を吐いた後陽介の方を向いて問いかけ、それに陽介は思いついたような表情を見せる。

「あー、そういや天城、学年でトップクラスだもんな。個人レッスン、頼んじやおうかな」

「こつ、個人レッスン!?!」

陽介の言葉に雪子は驚いたように声を漏らし、顔を伏せる。

「え? どしたの?」

そして陽介がそれに声を漏らした直後、雪子は陽介の方を向くとその頬目掛けて思いつきビンタを叩き込む。

「い、いて!?!……そんな、叩くところですか? 勉強、教えてって言っただけなのに……」

「あ、ごめん……勉強か…… “オヤジギャグ” なのかなって……最近、

変なお客さん多いから……」

「ギャグと思つたなら、なおさら流せよ！」

「ごめん、手が勝手に……」

「やれやれ……」

陽介が声を漏らし、それに雪子が呟くと陽介が叫び、と軽く漫才みたいなやり取りが一段落すると陽介は千枝の方を向いた。

「て言うかコレ、里中が勉強教えてもらえとか、いらんコト振つたからじゃね？」

「な、なんであたしのせいになんのよ!? あんたが“個人レッスン”とかビミョーな言い方すつからでしょ！」

「確かに。場合によってはセクハラと受け取られても文句は言えんぞ」

「なっ！ つ、椎宮まで……てか里中！ 十割俺かよ!?!」

陽介の叫びに千枝が返し、それに真が同意すると陽介は流石にシヨックを受けたように声を漏らした後千枝と口喧嘩を始める。

「あ、私、そろそろ帰るね」

そして雪子はマイペースに帰宅。真は口喧嘩をしている二人を見て困つたように頭をかいた。

それから二人も口喧嘩を終えると帰宅し、真も荷物を持つと屋上から出て行く。

(そういえば、今日は学童保育のバイトが出来る日だったっけ……)

真はふとそんな事を思い出し、携帯のカメラで取った写真の中からバイトの時間帯を撮つたものを調べる。

(ああ、やつぱりそうだ。一応応募したらいつでも来てくださいつて感じだったな)

真はそんな事を考えながら学校の玄関までやってくる。と一つにやつと笑つた。

(先輩は試験期間中テレビに行くなどは言つたけど帰つて勉強しろなんて一言も言つてなかつたな)

そう結論付けると彼は商店街のバス停に行き、そこから学童保育を行く高台へとやってくる。そして職員に挨拶した後、学童保育の手伝

いとして子供達に紹介された。

「……」

子供達からは妙に注目されており、真は微動だにしない。

「せんせー、かのじょいる?」

「こらー! そういうこというの、エッチだからダメなんだよ!」

「せんせー、色オニやろーぜ! せんせーがオニ!!」

一人の男の子が突然そんな事を言うとその隣にいた女の子が注意し、彼とは別の男の子はそう言うや否や逃げ出しさっきの男の子と女の子も逃げていく。意外にすばしっこいのか既に結構遠くに逃げていた。

「どーしたのせんせー! のろまー!」

「……面白い」

ぴよんぴよんと飛び跳ねて挑発してくる色オニを提案した男の子に対し真は一つそう呟くと少し柔軟体操を行う。

「陸上部でもあった先輩に鍛えられた足腰、舐めるな!!」

「げっ、速え!?!」

そしてそう言うや否や一気に走り出し、男の子はぎよつとした表情を見せると大慌てで逃げ出した。

「つて、色オニー! 色、色言ってー!!」

「よし。ならばコバルトブルー! 見つけられるものなら見つけてみる!!」

「なんだそれー!?!」

『大人気ねー!!』

男の子の叫びに対し真は色を指定、色オニに参加している子供達は例外なくそう叫んだ。

それから学童保育の終了時間。真はどうやら迎えが来ていないらしく男の子が一人残っているのに気づく。

「椎宮くん、どお? 全員お迎え来たかな?」

「いえ、この子が……」

「あ、勇太くんがまだか……」

学童の先生の言葉に真は男の子を指しながらそう言い、それに先生はそう呟いた後いつものことだけどねえと声を漏らす。すると勇太と呼ばれた男の子が真の後ろに隠れ、同時に女の人が近づいてくる。

「……あ、ユー君。ごめんね、遅くなって……」

「……べつに」

女の人の言葉に勇太はそう言って走り出し、女の人はそれから真に気づいて首を傾げる。

「学童の……先生？」

「ええ」

「そうですか……ユー君、また面倒かけてると思いますけど、お願いしますね……」

女の人の問いかけに真が頷いて返すと女の人はそう言い、勇太の後を追うように歩き出した。

「……南勇太くん」

すると突然学童の先生が口を開く。

「みんなと遊んでるときは元気いっぱい……というか、ありすぎでちよつと問題なんだけど。お母さんが来ると、ああなんだよね……ママハハだから、しょうがないのかなあ？」

「ママハハ、というと……」

「勇太くんのお父さんと、さっきの女の人が再婚してね。あの人、どこだったか、都会の人らしくて……ちよつと何考えてるか分からないのよねえ。そのせいか、勇太くん、学校でも問題見みたいでねえ……この間も……」

学童の先生はそう噂話を続けており、真はふうと息を吐くと口を開いた。

「すみません。俺もうそろそろ……」

「あ、そうね。ごめんなさい。お疲れ様……これ、バイト代ね」

「どうも、では失礼します」

真の言葉に学童の先生はすまなそうに笑った後彼にバイト代を入れた茶封筒を渡し、真もこくと頷くとま着替えるため部屋に戻っていった。

「ただいま」

「おう、帰ってきたか」

真が家に帰ってきた時に聞こえた声、それに真は驚いたように家中を見て、そこにいた男性に微笑みかける。

「叔父さん、早いですね」

「まあな……ところで、どうだ、そろそろこっちの暮らしも慣れただろ？」

「ええ、まあ」

真の言葉に遼太郎はそう返した後真に問いかけ、彼は頷いた後彼に歩き寄る。

「なんなら、何か話しますか？」

「ハハッ、ヒマなのか？ まあ座れよ」

その言葉に遼太郎は笑ってそう言い、自分の向かいにある椅子に座るよう勧める。

「お前が来てから、こうしてゆっくり話をする時間もなかったな」

「ええ、そうですね」

「……」

遼太郎の言葉に真は頷き、それに対し遼太郎は必死に話題を探すような顔を見せていた。

「あー……その、どうだ、学校は？」

「楽しいですよ。交通に関しても徒歩だけで行ける分前の学校より楽かもしれません。前の学校では寮を出てモノレール乗ってと結構面倒だったので」

「はは、そうか。それはなによりだ」

遼太郎はようやくやく出した話題に真は微笑みながら返し、それに遼太郎は苦笑を漏らす。

「あとは……そうだな……あー、友達やなんかは……いるようだな、色々と」

遼太郎はそう呟いた後、難しい顔を見せて真の方を見る。

「お前の交友関係にまで、どうこう口出しするつもりはないが……俺の言いたいことは、分かるな？」

「いえ、さっぱり。はつきり言ってください」

「……言うじゃねえか」

遼太郎の言葉に真はきつぱりそう返し、それに遼太郎は不敵な笑みを見せた後、真から顔を逸らしてまた難しい顔を見せる。

「何故か、事件の陰にはお前だ……考えたくはないが、事件が始まったのも、お前がこの町に来たのと同時期だ」

遼太郎はそう呟いた後、真の方を見る。

「俺の仕事はな、まず始めに偶然って選択肢を消すことから始まる。お前の先輩だという男もだがこれ以上俺の領分に足を突っ込んでくるようなら、その時は……」

「……どしたの？」

遼太郎が真の方を向いてそう言っていると、突然菜々子が話しかける。

「お兄ちゃん、わるいことなんてしないよ」

そして真を弁護するようにそう言い、それに遼太郎は困ったように頷く。

「わ、分かっているって。そんなつもりじゃあない」

「だって、いじめてる……」

遼太郎の言葉に菜々子は心配そうな表情を見せながらそう言う、と真が口を開いた。

「違うよ、菜々子ちゃん。俺と叔父さんは少し話してただけだ。いじめられていたわけじゃない」

「そ、そうだぞ……もう遅いだろ、そろそろ寝なさい」

「……はあい」

真の言葉に遼太郎も焦ったように合わせた後菜々子にもう遅いから寝るように促し、それに菜々子は頷くと寝室に戻っていく。そして遼太郎は真の方を困ったように見た。

「あいつ、お前のことが気になって仕方ないようだな」

「はは、それはどうも……」

遼太郎の言葉に真も苦笑して返す、と遼太郎は真剣な目を真に向けた。

「とにかく……危ないことにだけは首を突っ込むな。お前が無事ならそれでいい。成績を上げろとまでは、頼まれてないからな」

「はい。気をつけます」

遼太郎の言葉に真は頷いて返す。遼太郎は純粹に彼のことを心配しており、真は遼太郎との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、〃法王〃のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真が僅かに笑みを浮かべていると遼太郎がまた口を開いた。

「今まで住んでいた街とは勝手が違うだろうが、ここにはこのいいところもある」

そこまで言うと、遼太郎の顔が渋いものになった。

「まあ、今は少しばかり、物騒な町になっちまってるがな……」

「……」

遼太郎の言葉に真も困ったような表情を見せる。

「さて、そろそろいい時間だ。早めに寝ろよ。おやすみ」

「はい。おやすみなさい」

遼太郎の言葉に真も頷いて彼におやすみを言うと席を立ち、部屋に戻っていった。

それから翌日の放課後、真と千枝、雪子は教室で雑談をしていた。

ちなみに外はごろごろと雷が鳴っている。

「里中へ、例の『成龍伝説』、新しいの買ってきたぜ。名作価格でキユツパーだよ。これなら肉おごんないで即日返しゃよかった」

そこに陽介がそう言いながら近寄ってくる、とまたごろごろとさつきより大きな雷鳴が聞こえてきた。

「明らかに近づいてるっしょ、これ……」

それに千枝は声を漏らす、と陽介が驚いたように彼女に目を向けた。

「あれ……お前、意外にも雷怖い子？」

「う、うっさいな！　だって、当たったら一撃死じゃん！」

陽介の言葉に千枝が叫んだ直後、ピカツという雷光とゴロゴロゴロという雷鳴が響く。

「っひゃあっ！」

その瞬間千枝は顔を伏せて両手で耳を塞ぐ、と陽介はくくくつと笑った。

「ハハハ、ビビリ過ぎだっつーの。こういう日はあれじゃん？　逆にカンフーの特訓とかすると盛り上がるんじゃないやね？　雷ビカーンってなって、新しい必殺技とか出来ちゃうぜ。DVDにもあったら、そゆシーン」

「ムカつく！　人の気持ちも知らないで！」

陽介の言葉に対し千枝はキツと彼を睨みつける。

「どうせ雷落ちんなら、こいつに落ちろー！」

そしてそう叫び、その声を聞き届けたのかゴロゴロゴロという音が響き渡り、直後教室の電気が消えた。

「あれ、停電？」

「里中が落ちろとか言うからだぞ？……こりやさつきと退散してバイトだな。俺、今日の食料品の売れ行き次第じゃ、今週のバイト代に色つくかもしんねーんだ。この天気じゃ客足少ないかもだけど、バイク貯金のために頑張らねーとなー！」

雪子の眩きの後に陽介はやれやれというように肩をすくめて言った後にししと嬉しそうに返す。そしてその最後の言葉が終わった時、

陽介の携帯が鳴り出す。

「あ、わり」

陽介は一言断ってから携帯を見る。

「チーフからだ……」

そして電話相手を確認すると受話器を耳に当てる。

「もしもし、お疲れっすー」

「陽介くん？ あのさ、実は雷で、お店が一部停電になってさ」
「!?」

「今日、早く来れないかな？ 冷蔵庫が全部止まっちゃって……こりや食料品フロアは早仕舞いだわ」

「え、ちょ！ そんじや俺の給料……」

「とにかくさ、片付け手伝って欲しいんだ。頼んだよ！」
「待つ……」

電話相手のチーフなる男性は陽介に対しそう言い、話を終えると一方的に電話を切る。それから陽介は携帯を呆然とした表情で見た後、ふと真達の方を見た。

「なんでこっち見んのよー！」

「あーも、なんでこうなるんだーっ！」

千枝が声を上げ、続けて陽介も声を荒げる。

「ねえ雪子お、もう帰ろう？」

「……千枝、こんな話知ってる？」

千枝が雪子にそう言うのと突然彼女はそんな事を言い出し、千枝が首を傾げる。

「ある女の子が、宿題を忘れて、夜中の学校に忍び込んだんだけど、トイレに行きたくなってね……明かりの消えた女子トイレに無理して入ったの。そしたら、誰もいない筈なのに、手洗い場の鏡に……」

「待った！ 何の話?」

雪子が突然話し出した話、それに千枝はストップをかけて問いかける。

「え？ 怪談。確か千枝、好きじゃなかった？」

「なぜに今ッ!？」

千枝の問いかけに雪子はさらつと答え、それに千枝は叫び返す。その目は少し涙目になっていた。

「……そういえば俺が前にいた学校にこんな話があったな……」

「わー！　わー！　君まで何言い出しちゃってんの!?　もう！　知らない！」

真はふと思い出したように呟き、それに千枝は涙目で声を上げた後ぷいっとそっぽを向く。と陽介が呆れたように息を吐いた。

「ハア……いつそもう、リーダー様に家まで送ってもらえよ、里中」

「ばば馬鹿にしてる!？」

「仕方ねーだろ、そのテンパリ具合じゃ……」

陽介の言葉に千枝が声を荒げると陽介は呆れたようにそう返すと教室内の電気が点き直した。

「あ、点いた！　ほら、帰るよ、雪子！」

千枝はそう言つて雪子と一緒に足早に帰っていく。

「な、なあ真、ところろで……」

「さて、俺も帰つて勉強するか」

「せめて話だけでも聞いてくれー!」

その後陽介は真に問いかけるが彼はさらつとそう言つて席を立ち、陽介が必死に叫ぶか真もすたすたと教室を歩き去つていった。

それから数日が経ち、5月9日。八十神高校は今日から中間テストとなつており、真は普段通り学校に向かつていた。

「おはよう……」

するとその後ろから千枝が合流、真に声をかけた。その表情は明らかに沈んでいる。

「ついに今日からテストつすねえ……現実は厳しいつすねえ……」

「勉強はしたか？」

「うう……この顔色から察して欲しいですよ……」

千枝の言葉に対し真がそう問いかけると千枝は沈んでいる顔を見せながらそう言い、はあとため息をつく。

「……けど、テスト終わっても、まだ事件は終わってないんだよね。気が重いのが続くなあ……」

「ま、頑張れ」

千枝の言葉に真はそう返し、二人は学校に向けて歩いていった。

それから中間テストの日々が過ぎ、5月12日放課後。テストが終了し陽介は伸びびをして口を開いた。

「やーっと終わったなー。うあー。この解放感！ これだけは全国共通だなー！」

「ちよつと、うっさいー！」

陽介の声に千枝が声を荒げて注意し、雪子の方を向きなおす。

「ね、じゃあ問7は何にした？ 文中の“それ”が指す単語ってやつ」

「ええと…… “悲しげな後姿”にした」

「うっわ、間違えた！ あたし“机の上の餅”にしちやったよ……」

「餅？……え、そんな話だっけ？……」

千枝は雪子の答えを聞くとしまったーというようなりアクションを取るがその言葉に雪子はむしろ驚いたようにそう呟く。

「分かった。もう現国は諦める。地学に賭ける」

そして千枝はそんな事を言うとう真の方を向いた。

「“太陽系で最も高い山”って何にした？」

「ん？ えーつと……ちよつと待ってろ」

千枝の問いかけに真はそう言うとお鞆の中を探り、テストの問題用紙を取り出す。そして地学の問題用紙を広げると陽介がぎよつとした表情を見せる。

「うえ!? お前問題用紙にまで答え書き込んでんの!？」

「ああ。自己採点用だ」

「うおお、数学、数式までびっしり……俺、これの半分も分からねえ……」

陽介の言葉に真はあつさりそう答え、陽介は数学の問題用紙を見ると呆然とした様子で呟く。その間に真は地学の、さつき千枝が問い

かけてきた答えを探す。

「……ああ、あった。『オリンポス山』だな」

「ギャー！ マジで!? 違うのにしちやったよー……」

「あ、私と一緒にだ」

「おっ、天城も!? じゃあそれ正解っぽいじゃん……」

真の言葉に千枝は声を上げ、天城がそう言うのと真の数学の問題用紙を見て呆然としていた陽介が反応し、真に問題用紙を返すと頭を押さえる。

「あーあー、廊下に貼り出されんのが楽しみだよ、つたく……」

そして陽介が呟いた時だった。

「聞いた？ テレビ局が来てたってよ」

突然そんな声が聞こえ、四人は声の方を向く。

「どーせ、例の『死体がぶら下がってた』事件のだろ？」

「や、違くてさ、幹線道路あんだろ？ あそこ走ってる暴走族の取材だってよ。オレのダチで族に顔出してるヤツいてさア、そいつから聞いたんだよね」

「おま、友達にゾクいるとか、作んなよ？ んな事よりさ、明日の合コン、外待ち合わせでヘーキかな？ あさってから本格的に雨なんだろう。明日もヤバそうじゃね？」

二人の男子生徒がそんな事を話しており、雪子は三人の方を向くと首を傾げる。

「暴走族？」

「あー……たまにウルサイんだよね。雪子んちまでは流石に聞こえないか」

「うちなんか、道路沿いだからスゲーよ」

「うちの生徒にもいるらしいじゃん？」

「あー確か、去年までスゴかったってヤツがうちの一年にいるとか、たまに聞くな。中学ん時に伝説作ってたって、ウチの店員が言ってたっけ」

雪子の言葉に千枝がそう言うのと陽介がため息をつきながら返し、また千枝が言うのと陽介はそう噂に聞いたというように言った後首を傾

げる。

「んー、けど、暴走族だっけな?……」

「で、伝説って?」

「あー、たぶん、雪子が考えてるのは違うと思うけど……」

陽介の言葉の後、妙に期待した声で雪子が尋ねる。それに千枝がツツコミを返した。それから真が口を開く。

「さて、ところでテストも終わったことだし、気分転換や鬱憤晴らしも兼ねてテレビに行ってみるか?」

「大賛成!!」

真の提案にもものすごい勢いで陽介と千枝が食いつくのであった。

それから彼らはジュネスのフードコートまで移動する。

「……」

「わっ、なんかいる!? キ、キツネ!? いつの間に……」

そこには真が以前あった謎のキツネがおすわりしており、千枝が驚いたように声を上げる。

「おわっ、こいつ……一体どっから入ったんだ!」

「てか、地味に目つき怖ッ……」

「あ……この前掛け……確か、神社で見かけたことあるような……」

陽介も驚いたように声を上げると千枝が声を漏らし、さらに雪子が呟く。

「あーえつと、俺が連れてきたわけじゃないんだが……こいつ、もしかしたらテレビで使えるかもしれない」

「「えっ!?!」」

真の言葉に三人が驚いたように声をあげ、真はちらりとキツネを見る。

「実は以前、神社でこいつとあったんだが……こいつ、不思議な葉っぱを持っていて。足が痛いと言っていたお爺さんがその葉っぱを湿布にすると見る見る内に回復したんだ。それとこいつ、俺達に協力してくれるのかもしれない。まあ、タダでは協力しないそうなんだが……なんだか金をよこせとかいう感じで……」

「え?……葉っぱで、回復?」

「え……私達に、協力?」

「マジかよ……見返りに金を欲しがってるってか?……」

「コーン!!」

真の説明に千枝、雪子、陽介が驚いたように声を漏らすとキツネは肯定するように一鳴きする。

「なんだよ、こいつ……まるでこっちの話を分かってるみたいなりアクシヨンだな……」

「コーン!!」

「また鳴いた……こつちのこと、ホントに分かってたりして……」

「で、でも、考えてみたら、警備の人とかにも、見つからなかったって事だよな? あたしたちの後つけて来たんだとしたら、大したもんかも」

「コーン」

キツネは陽介達の話に通じるタイミングでリアクションを取っており、千枝は困ったように苦笑する。

「え……ホントに話、通じちゃってる? どうしよつか……」

「でも、捕まえたりするのはかわいそう。悪さをするようには見えなしいし……ねえ、あなたはどう思う?」

千枝の言葉に雪子がそう言い、次に真に問いかける。

「俺は協力してもらいたい。不思議な葉っぱの効能をこの目で見ているからな」

「……うん。その“回復”っていうの、私達ほんとに助かる話かもしれないし」

「え!? それって“あつちの世界”へ連れて行こうって話か?……」

真の言葉に雪子も頷き、それに陽介は驚いたように声を上げた後キツネを見る。

「んー……実は意外とアリか? 簡単に帰りそうもない雰囲気だし……それに、ヘソでも曲げられて、店内でイタズラでも始められちゃ困るしな……」

「確かに。ようやく仕事を覚えてきたのに変な仕事増やされるのもご

めんだしね」

陽介の言葉の後にそんな声が聞こえ、四人はぎよつとした表情で声の方を見る。

「みつ、命さん!? 驚かせないでくださいよ!」

「あつはは、ごめんごめん。一応バイト上がったし、僕もテレビに行けるよ」

陽介の言葉に命は笑って返した次にそう言い、真もはいと頷く。

「よし、じゃあ行くう!」

真の言葉に全員が頷き、一行は荷電売り場からテレビの世界に向かった。

「あつセンセイ! こっちは平和クマよー!」

「そうか。今回は少し腕試しつてとこだけだな」

彼らが入つてくるとクマが嬉しそうに声をかけ、真が頷いてそう言うのと次に命が口を開く。

「まあ、腕試しというより今日はペルソナの訓練でもしてみようか。ところで真君、皆の新しい武器つて準備できてる?」

「あ、はい。試験勉強の合間の息抜きに散歩でかけたついでに購入しておきました」

「オツケー。じゃあとりあえず、クマ君、今行けてシャドウが出ないつて確証があるのつてどこかな? 出来れば広い場所がいいんだけど」

「クマ? えーつと……やっぱ、センセイやヨースケがペルソナを出したところなら安全だと思うクマ」

「そつか。じゃあ皆、一回あの商店街に行ってみよう」

「商店街?」

「うげ、行きたくねえ……」

命の問いかけに真は刀や短剣二本、雪子の武器となる扇子を取り出す。ちなみに千枝は以前の夜に真から手渡されたインラインスケートを武器として使用する気らしく既に着用済みだ。

それから命の一声で彼らは真や陽介がペルソナを覚醒させた異様な商店街へと向かう。ちなみにその場所を知らない千枝と雪子は首を傾げており、陽介はげんなりとした表情で声を漏らしていた。そし

て一行は異様な商店街へと移動し、真は命の方を見る。

「ところで先輩、ここで何やるんですか？」

「何っていうか、まあ訓練？」

「訓練って、そんなの雪子のお城でやればいいじゃないですか」

「……」

真の言葉に命が返すと千枝が首を傾げながらそう言い、それに雪子はふっと目を逸らす。

「まあそうなんだけど、実戦の前にといいか、今まではペルソナ覚醒からほとんど間髪入れずに天城さん救出に行つたからね。ここらで一ツペルソナの基礎訓練を行おうかと思うんだ。ま、そういうわけで」
命はすらすらと説明し、竹刀袋から二本の竹刀を取り出すとその内の一本を真に投げ渡す。

「とりあえず、一回実戦形式で見せるから。真君、かかつてきて」

「え、えっ!？」

「ああ、ペルソナありでいいよ。ハンディとして真君がペルソナを使うまで僕はペルソナなしでいくから」

困惑している真に対し命はそう言い放ち、真は少し考える様子を見せるとふうつと息を吐いた後目を研ぎ澄ませる。

「分かりました。なら全力でいきます」

「オツケー。あ、花村君、一応ディアの準備はしといて」

「分かりました!」

真の言葉に命は頷いた後陽介に治癒術の準備をお願いしておき、それに陽介が頷くと二人は向かい合つて数メートル間合いを取ると構えを取る。それぞれ真は剣道の中段の構え、命は猫背に前屈みの体形で剣を右手で握つて突き出すように構え、切っ先は地面に向けている。片手下段の構えとでも称すればいいだろう構えを取っている。そして左手は後ろに下げて拳は軽く開いている。それから少し二人は硬直し、そこで千枝が気づいたような表情を見せる。

「あ、え、えっと……は、はじめっ!!」

咄嗟に千枝が声を出し、同時に真が地面を蹴りながら竹刀を振り上げ、真が飛び出すのを確認したように命も飛び出す。

「めえええええんっ!!!」

真は剣道のように声を上げながら命の顔面目掛けて竹刀を振り下ろす、が命はその竹刀の側面に自分の竹刀を打ち当てて軌道を逸らしながら左の拳を突き出す。

「ぬんっ!」

それに対し真は無理矢理体当たりをして拳を押し返す。そして突進の勢いで真から少し距離を取りつつ彼の視界から外れている位置で左手にカードを具現する。

「イザナギ! ジオ!」

そしてほぼ不意打ちの形でイザナギを召喚し、ジオを指示。

「おっと!」

しかし命はそれを読んでいたのか横っ飛びに飛んで落雷をかわし、その左手に召喚器である銃を構えて銃口をこめかみに押し当てる。

「オルフェウス!」

召喚器の引き金が引かれ、ガラスが砕けるような音と同時に姿を現すオルフェウス幽玄の奏者、それが豎琴を手にイザナギと対峙した。

「突撃!」

「スラッシュー!」

そして命と真の声が重なり、同時にオルフェウスが豎琴に、イザナギが刀に光を点してその武器を振るいぶつかり合う。そして剣同士で言うならば鏝迫り合いのような状況になり、真は眉間に皺を寄せているが命の方は涼しげな笑みを浮かべている余裕さえ見せていた。

「あ、真君。言い忘れてたけどせっかく色んなペルソナを使えるんだし、ペルソナチェンジもありだからね」

「そりゃどうも」

命の言葉に真はそう言うといザナギに思考で後退を命じ、オルフェウスの豎琴を振り下ろそうとする勢いを利用して素早く後退、相手が消えたオルフェウスの豎琴がぶんっ空振りする。そしてイザナギの姿が消え去った。

「ペルソナチェンジ! ウコバク!」

直後真がカードを砕き召喚したのは炎を宿したフライパンのよう

なものを両手で抱えている小悪魔。

「アギー！」

「スクンダー！」

直後二人の声が重なり合い、オルフェウスが豎琴をかき鳴らしウコバクがフライパンを持ち上げて相手の方に向けると同時に豎琴から生み出された炎が真を包み込み、同時にウコバクの生み出した光がオルフェウスと命を包む。そして命は炎に包まれたにも関わらずけろっとした表情の真を見るとふっと微笑んだ。

「へえ。火炎耐性持ちか」

「はい。これなら先輩のオルフェウスのアギは封じられますし、スクンダで動きを遅くしておけば接近戦を仕掛けてきたのを見てからでもイザナギにチェンジすれば充分対応できます。後の先、つてやつですよ」

「ふうん……」

命の評価に真はにやりと笑いながら返し、それに命もまたにやりと笑みを見せる。と同時に突然オルフェウスが豎琴を鳴らす構えを取り、それを真は目ざとくキャッチする。

「アギー!!」

相手のアギを自らのスキルで相殺しようとしたらしく真が叫び、同時にウコバクのフライパンから炎が噴出す。しかしそれと同時にオルフェウスは豎琴の柄を両手で握った。

「えっ!?!」

豎琴をかき鳴らす動作によって炎を放つスキル、アギと見せかけたフェイントだ。しかし少なくとも真はそこまでペルソナを自在に操る術を持つておらず、そのフェイントについて思考が固まってしまう。

「いけ、オルフェウス！」

「チエ、チェンジ！ イザナギ！」

命の音が響き、咄嗟に真もウコバクを消し、スキルを放っている最中のペルソナチェンジの反動か少し痛む頭を押さえながらイザナギを召喚しなおす。そしてオルフェウスとイザナギが再度ぶつかり合うがそこから一方的な戦いとなる。

「ぐ、うつ……」

オルフェウスは豎琴を回転させて上下左右から連続攻撃をしてくるのに対しイザナギは勢いに負けないように打ち返しているためとはいえ大振りが目立っている。

「せいっ！」

「ぐうつ!」

そしてついに防ぎきれなくなりオルフェウスの一撃がイザナギの脇腹に直撃、真も苦しげな声を漏らすとイザナギの姿が消えていった。

「ま、ぎつとこんなところかな」

命はにこやかな笑顔でそう言うと共に陽介達の方を見る。

「はい。じゃあ今の戦いで気づいたこと。花村君」

「うえっ!?! あ、えつと……や、やっぱ命さん、強いっすね?」

「はい次里中さん」

いきなり話を振られた陽介は慌てた声を出した後苦笑いしながらそう返すが命はさらつとスルーして今度は千枝に尋ねた。

「え? あ、えつと……み、命さんのペルソナって、なんかすつごく動いてましたね……とか?」

「ん、まあ近いといえれば近いかな。皆はペルソナってどう動かしてる?」

千枝のこちらも苦笑いしながらの言葉に命は頷き、続けて尋ねる。

「ああ、俺は頭の中でイザナギに動くイメージを与えてる感じですが……」

「俺もっす」

「私もそんな感じかな?」

命の言葉に真が一番に返すと陽介と千枝も頷く。ちなみにまだペルソナを召喚していない雪子は当然だが話に入れていない。

「僕がさつきやったのは、僕達はペルソナとのシンクロって呼んでいる技法さ。簡単に言えばペルソナと精神を通わせることにより、より精密な行動指示を行えるようにした、っていうかペルソナと一体となるって言えば分かりやすいかも」

「ペルソナと……」

「一体？……」

「ま、百聞は一見にしかず。やってみなよ。心を落ち着けて、ペルソナに身体をゆだねる感じ」

命の言葉に陽介と千枝が首を傾げると命はさらっとそう言い、真達は不安げな表情を見せながらもそれぞれのペルソナカードを具現化する。

「イザナギ！」

「ジライヤ！」

「トモエ！」

「コノハナサクヤ！」

そして真は右手でカードを握り潰すように砕き、陽介は短刀で下から搦り上げるように砕き、千枝は回し蹴りで蹴り砕き、雪子は扇子で払うように砕いた。それと共にそれぞれのペルソナが具現する。

「ペルソナは心の海に住まうもう一人の自分。まずはペルソナの身体に慣れてみる事から始めると良い。皆人間型だしまだ楽だと思うよ？ 不定形や獣のペルソナになったらシンクロし続けているとたまに手の感覚とかおかしくなるからね」

命はへらへらと笑いながらそう言い、真達は目を閉じると自身のペルソナに精神を集中する。

「う……なんか変な感じだ。俺が、俺を見てる？……」

「な、なんだこれ？ 俺の身体が、俺じゃない？……」

「な、なんか変な感覚……」

「う、うん……」

そしてそこまで眩くと疲れたのか一度ペルソナを消し、命は苦笑する。

「まあ、最初はその感覚に慣れてみるべきだね。ちなみにシンクロはペルソナと一体化する手法、ゆえにシンクロの度合いによって自分の意思の通りに動かせるようになるけど代わりにペルソナが受けたダメージが自分にフィードバックする危険性もあるから気をつけた方がいい。あと皆のレベルならシンクロ中は自分も戦おうなんてしな

い方がいいよ。下手したらペルソナを動かす思考と自分を動かす思考がごちゃ混ぜになって訳わかんない動きすることがあるから」

命はシンクロの危険性について説明を行い、それから今日は自称特別捜査隊メンバーのペルソナ訓練に時間を費やし、適当な頃合を見計らってテレビを出て行くとそれぞれ家に帰っていった。

第十六話 月、道化師の絆と暴走少年

5月13日、昼休み。真は昼食のお弁当を食べ終えた後腹ごなしに教室を出て校内を散歩していた。

「…………… あいつは……………」

真は廊下で僅かに見覚えのある相手を見つけ、声を漏らす。

「よお、マネージャーの……………海老原とか言ったか？」

「ん？ ああ、アンタか……………」

真が声をかけた相手——以前、出席日数が足りない代わりにバスケット部のマネージャーをやる羽目になったと言っていた女子こと海老原——はそんな声を漏らすとにやりと笑みを見せ、その笑みを見た真はぎくりと肩を震わせて後ずさる。今の真の表情はなんというか、頭の上に太字明朝体で「嫌な予感」という文字が浮かんでいるような表情である。と、逃がすかといわんばかりに海老原は真の肩を掴む。

「ねえ、午後の授業、ちよつと抜けない？ 放課後までには戻ってくるし」

「え？ いや、それはちよつと……………」

「文句言わずに、はい来る！」

「お、おい海老原!？」

海老原の言葉に真は困ったような声を漏らすが彼女は力強くそう言つて真を引きずつていく。こんな時に限つて周りに人気はなく、真は声にならない声を上げながら海老原に引きずられていった。

それから場所は沖奈駅前へと移り、海老原は気分良さそうに笑っているのに対し真は低いテンションではあたため息をついていた。

「ん〜！ やっぱ気分いいね〜。この時間、まだみんな勉強してるでしょ？ そういうの、サイコー」

「……………サボりは良くないと思うんだが？」

「は？」

海老原の言葉に真が声を漏らすと彼女はすぐさま眉間に皺を寄せて彼を睨みつける。

「……………って言いながら、アンタがやってるのは何よ？」

「俺は返答も聞かれずに拉致られただけだ……まあ、結果的にサボりなのは変わらないか」

海老原の僅かにイラついたような声に真はため息を漏らしそのような声色で返すがやれやれと首を横に振りながらそう続ける。と海老原はふつと笑みを見せた。

「ま、あたしだっていつもじゃないよ。大体、出席日数とか素行不良とかで目エつけられてるし、最近は大人数……ま、いいわそんな話。それじゃ、行くわよ」

「へいへい。こうなりや付き合つてやりますよ」

海老原の言葉を聞いた真は諦めたように肩をすくめて返し、それを聞いた海老原はふふんつと鼻歌を歌うように鼻を鳴らす。

「まず軽く服見てー、アクセと靴見てー、最後はケータイ見よつかないっ!？」

「付き合つてくれるんだよねー?」

「……へいへい」

その言葉に真は嫌な予感を感じて声を漏らすが海老原がそう言うのと諦めたようにため息と声を漏らした。

それからしばらく時間が経過し、二人は駅前に戻ってくる。しかし海老原は手ぶらなのに対し真は両手に紙袋を一杯抱えていた。

「やつぱ、荷物持つ人がいるといいねー。片っ端から買えるもの」

「……なあ、海老原が支払いに使ってたやつってゴールドカードとかいう代物だよな?……だ、誰のカードなんだ?」

「あんた、あたしが盗んだとか思ってるなら囲むわよ?」

海老原はあははつと笑いながらそう言い、荷物を持たされながら真は心配そうな顔でそんな声を漏らす。それに海老原はむつとしたように彼を睨み、ゴールドカードを見せる。

「あのね、これはあたしのカード。ウチ、家柄も由緒も何もないけど、金はあるの。パパ、土地ころがしてるから」

「ああ、土地成金とかいうやつか」

海老原はゴールドカードを真に見せながら念を押すように言い、その言葉を聞いた真は彼女から目を逸らしつつそう声を漏らす。と海

老原はちらりと時計に目をやった。

「そろそろ行かないと、放課後までに帰れない」

「へえ、意外に真面目だな」

「放課後になった途端に生活指導のセンスがあたしんとこ来るの。出席と素行のチェックにね。そのまま補講の場合もあつて、ホント面倒」

海老原の言葉を聞いた真は驚いたように声を漏らす。それに対し海老原は顔を横に振って返す。が続いて悪戯っぽい笑みを見せた。

「けど当のあたしは、こーやって要領よく遊んで、センスはまんまと騙されて……バツからし」

そこまで言う。と彼女は一旦言葉を切る。

「けど今日は、いつもより笑えたかな。アンタ、他の男子とちよつと違うね。割りりと気に入ったかも。また今度、遊んであげる。ああ、次はちゃんと放課後ね。授業抜け出す前提で誘ったらアンタうるさそうだし」

「それなら歓迎つとしておきますよ」

海老原は冗談交じりな笑みを浮かべながらそう言い、それに対し真も紙袋を抱えたままひよいと肩を上げて返す。真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たな絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、〃月〃のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。すると海老原が駅の方に歩き出す。

「ほら、トロトロしない！ アンタも生活指導に追い回されたいの？」

「だったら少しくらい荷物持てよ……」

海老原の叱責に対し真はそんな言葉を漏らしながら彼女の後を追うように歩いていった。

それから真もこっそり教室に溶け込み、学校はすぐに放課後になる。真もサボりから戻ってきてきてなんだが特に学校でやる用事もないため学校を出て行くとなんとなくジュネスへと向かう。

「ん？ あれは……」

とジュネスの外で、中にいる見覚えのある男性に気づき、真は昨日の夜の事を思い出した。

「帰ってきたか。そうだ、ちよつといいか」

「はい？」

昨夜テレビから帰って来た時、遼太郎が突然話しかけてきた事からそれは始まる。

「お前、ジュネスはよく行くか？」

「ええまあ、たまに」

「足立のヤローが、時々姿をくらしやがる。大方、ジュネス辺りでサボってんだと思うんだが……お前が行くような時間に見かけたら、おおよそサボってるはずだ。ジュネスで足立見たら、ガツンと言っちゃまっていいぞ」

真はふとそんな叔父からの言葉を思い出す。ジュネスの中にいる男性——足立、遼太郎の言葉通りなら彼は今サボっているというわけだ。

（つくづくサボりに縁がある日だ……）

真はふとそんな事を思いながらジュネスに入り、足立に近づく。

「こんにちは、足立さん」

「あれ？ あー、君かあ。どしたの？ 僕に何か用？」

「あ、いえ、ただ堂島さんがジュネスで足立さんを見かけたらガツンと言っていると言っていたもので」

「え、ど……堂島さんに!? や、やだなあ。ここには仕事で来てるってのに……」

真の言葉に足立は一瞬びっくりした表情を見せた後困ったように

顔をしかめ、真の方を一瞬見てにかつと笑った後店内を見回す。

「ホラ、人の話聞きやすいからさ。こういう場所は捜査しやすいんだよねー」

「なるほど。一理ありますね」

足立の言葉に真はふんふんと頷き、それに足立は機嫌をよくしたかまた笑った。

「それに夏は涼しいし、冬はあったかいでしょ。なかなかいい穴場見つけたと思っ……つとど。ま、そういう事だから！」

「……そうですか。ま、足立さんには世話になってますし、付き合いましょうか?」

「はい? あ、そう? 君も変わってるねえ」

足立の続いての言葉に真はジト目になってため息をついた後、さっきのサボリ気分が若干残ってしまっているのかそんな事を言い、足立も不思議そうな表情を見せてそんな事を呟く。

「じゃあさ、君は何やってんの? ヒマ潰しつてどこ? こんな田舎だと、やる事ないでしょ。ホント何もなしさー。やっぱ都会とは違うよねえ」

「いや、そんなことはないと思います」

「あ、そう? でも君、都会から来たんだよね。その内分かるよ。ホントやる事ないからさ、こー」

足立の同意を求めるような言葉に真は首を横に振って返し、それに足立は面食らったように目を丸くしたあとやれやれとため息をついて頭をかく。

「僕なんて、ここ来た時の最初の仕事、猫探しだよ。スーツ泥だらけになってさー……クリーニング代、経費で落ちないし。次は夫婦喧嘩の仲裁だっけ。そんなの警察がいちいち出張ってらんないよ」

足立は愚痴を漏らしている、がそれが一段落するとふうつと息を吐いた。

「でも最近は何騒になったから、ノンビリもしてられないんだけどね。ホラ、例の事件。まだ解決してない訳じゃない? 上層部も手えこまねいててさ、現場も方針がコロコロ変わっちゃって……」

「……」

足立はそこまで言う口をつぐみ、すまなそうに笑う。

「あ、ごめーん。不安にさせちゃったかな。君らは安心していいよ、ウン。ここは僕ら警察が何とかするからさ」

「はは、頑張ってください」

足立は真を気遣うようにそう言い、それに真も少し笑って返す。真は彼との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、『道化師』のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。すると足立は彼から目を逸らして歩き出す。

「さて、と……そろそろ仕事に戻るかな」

そう言っただけ歩いていこうとする足立だったが、突然誰かがやってくと彼は慌てたように真の影に隠れ、その入ってきた相手——おばあさんが立ち去っていくと彼はふーとため息をついた。

「ふー、危ない危ない……」

「？」

その光景に真は首を傾げるが、足立はその前にまた歩き出す。

「じゃあ僕は行くから。君も早く帰りなよ」

足立はそう言っただけ歩き去ろうとするが、途中で思い出したように足を止めると真の方を見て悪戯っぽい笑みを見せる。

「僕がジュネスにいたの、堂島さんには内緒だよ？」

「はいはい。考えておきますよ」

足立の言葉に真も悪戯っぽく笑って返し、彼は足立が仕事に戻るの

を見送ってから家に帰っていった。

それから夜になり、真は菜々子と一緒にテレビを見ていた。ちなみに後ろのソファでは遼太郎が新聞を読んでいる。

「静かな町を脅かす暴走行為を、誇らしげに見せつける少年たち……そのリーダー格の一人が、突然、カメラに向かって襲いかかった！」

「てめーら、何しに来やがった！」

リポーターの声の直後聞こえてきた、声変わりをした後の少年らしい低い声。それを聞いた遼太郎が新聞を下ろしてテレビに目を向ける。

「この声……」

「見世もんじゃねえぞ、コラア!!」

テレビに映っているのはカメラに威嚇するように怒声を上げている、金髪をオールバックにした少年の姿。一応目にぼかしは入っているがそれだけであり声にも加工は入っておらず、体格や目を除いた顔立ちから個人の特定は簡単そうに思える。特に八十稲羽周辺となると少し探せば分かるだろう、真はふとそんな思考に入っていた。

「あいつ、まだやってんのか……」

「お父さん、しりあい？」

「うーん、まあ、仕事の知り合いだな」

遼太郎の呟きを聞いた菜々子が首を傾げて問いかけると遼太郎は頷く。

「『巽完二』……ケンカが得意で、たかだか中三でこの辺の暴走族をシメた問題児だ。けど確か、高校受かって、今はどつか通ってんじゃないかったか？」

「ふーん」

遼太郎の言葉に菜々子はそう声を出す。

「あーあー、折角顔にボカシかかってんのに丸分かりだなオイ」

「俺も思いました。声に加工が入っていないですしこれじゃあ髪形や体格で個人の特定はたやすいですね」

遼太郎の言葉に真も頷き、自分が思ったことを口にする。と遼太郎

はまた思い出すように口を開いた。

「こいつ、実家が老舗の染物屋でな。たしか、母親が夜寝られないから、とかで毎晩走ってた族を一人で潰しちまったんだ」

「ま、またアグレッシブな親孝行ですね……」

「ああ。だが動機はともかく、暴れすぎなんだよ……これじゃ、その母親が頭下げる事なっちまう」

遼太郎の言葉を聞いた真が頬を引きつかせながらそう言う。彼はふうと息を吐いて返す。と菜々子がテレビの下に表示されている天気予報に気がついた。

「あ、あした雨だつて。下にお天気でてる。せんたくもの、中だね」

(明日は雨、マヨナカテレビを見ることになりそうだな……)

菜々子の言葉に真はそんな事を思考の片隅に入れる。そしてニュース番組が終わった後、彼らはそれぞれ眠りについた。

それから翌日5月14日の放課後。千枝は教室の窓から外を見る。完全に雨が降っていた。

「おっと、降ってきてる……天気予報、当たったね」

千枝はそう言う。真の席を中心に集まっている、命を除いた特別捜査隊の集まりに混ざりこむ。と同時に陽介が口を開いた。

「じゃあ今夜だな、例のテレビ」

「何も見えないといいけど……」

「ああ。それが一番といえば一番なんだが、せめて何か犯人に？がるヒントでも映らないものか……」

陽介の言葉に続いて雪子が言う。真もそう呟く。

「じゃ、今夜は忘れずにテレビチェック！ オーライ？」

そこに千枝がそう纏めた。

それから時間が過ぎて夜になり、真は自分の部屋に戻ると外で雨が降っているのを確認してカーテンを締めてテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始め、真は砂嵐の中に人影を見つけた。

(……高校生くらいか？ だが、男……みたいだな)

真は目を凝らして人影を見ながら分析を進める。しかし画像が荒

く誰なのかまでの判別は出来なかった。そしてマヨナカテレビは消えていく。

(……先輩にかけてみるか。だが俺達の推理ではたしか狙われるのは女性……)

真は考え事をしながらとりあえず命に電話をかけてみようと思っ
て電話を取り出す。そしてそれを開こうとした直前、陽介から電話が
かかってきた。

「もしもし」

「もしもし。な、どう思う？ 映ってたの、男だよな？ けど人相ま
では分かんなかったな。明日、皆で詳しいこと話そうぜ。俺が里中
にかけて、里中から天城に回してもらおう」

「分かった。俺は先輩にだな」

真が電話に出ると陽介は素早く要点を纏めて話し、それに真も頷く
と電話を切り、命に電話をかける。

「もしもし、真君？」

「先輩、マヨナカテレビ……」

「見たよ。でも君達の推理と合致しない部分が発見できたね」

「はい。それについて明日、皆で話し合うことになってます。場所は
多分いつもの場所だよ」

「りよーかい。じゃあ切るね」

「はい」

電話に出た命はいつもの冷静というか飄々とした態度を崩してお
らず、二人は素早く要点だけを話し合うと命が電話を切り、真も電話
を切ると今日はもう眠りについた。

そして翌日5月15日。彼らはジュネスのフードコートに集合し
ていた。全員が集合しているのを見回して確認した後、陽介は両手を
組んで肘をテーブルに乗せ、手で口元を隠して神妙な表情を取る。

「えー、それでは稲羽市連続誘拐殺人事件、特別捜査会議を始めます」
「ながっ！」

「あ、じゃあここは、特別捜査本部？」

神妙そうな表情でそんな事を宣言する陽介に千枝が突っ込み、雪子

は目を輝かせる。

「おーそれぞれ！ 天城、上手いこと言うな」

「トクベツソーさほんぶ」……んー、そう聞くと惹かれるものが……」

雪子の言葉に陽介が楽しそうな笑みを見せて頷くと千枝も何かに惹かれるようにうんうんと頷く。

「はい皆、どうでもいいことに引っ張られないで会議スタート」

「おっとととすいません命さん」

と、そこに命がぱんぱんと拍手を打って会議の始めを促し、陽介もこくこくと頷いて気を取り直す。それから真が口を開いた。

「じゃあまず、全員がマヨナカテレビを見ていると仮定して話を始めるが、誰か映っていた人が何者か分かった人はいるか？」

「んー、顔は見えなかったけど、アレ男だったよね？」

「俺にもそう見えただぜ。年は、まあ高校生ぐらいじゃね？」

真の問いかけに千枝は言うど陽介も頷いて意見を出す。

「私も、あんな風に映ったんだ……」

雪子も自分がああいう風にテレビに映ったのかとうつぶいて声を漏らす。

「あれ、でも待って」

しかしその次に気づいたように顔を上げた。

「被害者の共通点って、〃一件目の事件に関係する女性〃……じゃなかったっけ？」

「だと思っただけだな……」

「でもまだ、映ったのが誰なのかハッキリしてないからね。案外男装の女の子だったってオチもありかもしれないよ？」

「先輩、ややこしくなること言わないでください……」

雪子の問いかけに陽介が苦しそうな表情で漏らすと命がそう発言し、それに真がツツコミを入れる。

「たしか私の時は、事件に遭った夜からマヨナカテレビの内容、変わったんだよね？」

「ああ。急にハッキリ映って、内容もバラエティみたいのになった。

今思えば、クマの言った通り、中の天城が「見えちまつてた」のかもな」

「でも昨日見えた男の人、はつきり映らなかつたでしょ？　もしかしたら……今はまだ『あっち』に入っていないんじゃない？」

そこにまた雪子が問いかけ、それに陽介が答えると雪子はさらに続ける。その言葉を聞いた命がにやりと笑って頷いた。

「そう。マヨナカテレビのあのバラエティ番組が放送される条件がテレビに被害者が放り込まれることだと仮定すれば、逆に言えばバラエティ番組が放送されていない今、被害者はテレビに入っていないという証明になる」

「そうか！　つまりこれからテレビに入れられるだろう被害者が誰かを特定できれば先回りが出来る！」

「ああ……それに、上手くいけば犯人とか一気に分かるかもしれない」
命の言葉を聞いた真が思いついたようにそう言う。陽介も頷く、がすぐに浮かかない表情を見せた。

「ハア……けど、まず誰か分かんない事にはな……悔しいけど、とりあえずもう一晩くらい様子を見てみるしかないな……」

「オホンツ……えー、ってことはつまり、ワタシの推理が正しければ……」

陽介の言葉に続き千枝はオホンツと咳払いをし、仰々しく話し出した。

「映像は荒く、確かな事は言えないが、あれはどうも男子生徒だと思われる。しかしそれだと、これまでに立てた予測とは食い違う……個人の特定がまだ出来ないの、つまりは、もう少し見てみるしかない！」

「……全部今言ったじゃねーか」

「う、うっさいなー！」
千枝の推理という名の纏めに陽介がツツコミを入れると千枝は顔を赤くして叫ぶ。

「んふふ……ふふ、あは、あーははは!!　おっかしい、千枝！　あははは、どうしよ！　ツボ、ツボに……」

「出たよ……」

「ごめ、ごめええーんふふふ」

それに対し雪子が爆笑し始め、千枝が困ったように声を漏らすと雪子は謝りながらも笑い続ける。

「なるほどな……天城って、実はこういう感じか……」

そして陽介も少し息を吐きながらそう漏らした。

「つか、映ったあの男の子、どっかで見た気すんだよね……それも、つい最近……」

「あ、里中も思うか？ そーなんだよ、実は俺も昨日から考えてたんだけどさ……」

「学校の生徒、とかじゃないか？ たまたま目に入ったのを覚えてるとか？ かくいう俺もなんか見覚えがある気がするんだが……」

そこに千枝が口を開くと陽介がその意見に同意し、真もそう続ける。それに命はうんと頷く。

「ま、とりあえず今夜マヨナカテレビを見てみよう。そして明日、また皆で考えればいい」

「二はい二二」

命の纏めに四人は真剣な表情で頷く。

「ぶ。ぶ……」

しかし次の瞬間雪子が思い出し笑いを始め、それに千枝はあーもうつといわんばかりに口を開いた。

「ぬわったく、いつまで、笑ってんのサ!! この『爆笑大魔王』がっ!!」

「あはははは、千枝うまい!」

「悪化させてどーする」

「……そっとしておこう」

その千枝が出したツツコミは逆効果となって雪子にさらなる笑いを与え、陽介がジト目でツツコミを入れ、真は静かにそう漏らした。

そしてまた夜。真は自室で、外で雨が降っているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始め、真はまた砂嵐の中に人影を見つけた。

「……これは……」

真は目を凝らして砂嵐の中の人影を見る、と彼は何かを感じつき同時にテレビは消えていく。そのすぐ後に陽介から電話がかかってきた。

「見たか？」

「ああ……もしかしたらだが、巽完二かもしれない」

「ああ、やっぱそうだよな」

陽介の問いに真は頷いた後自身の予想を話し、同じ事を考えていたのか陽介もその意見に肯定の言葉を返す。

「どっかで見たなーと思ってたけど、テレビだよ、テレビ、特番！

カメラに『ゴラァー！』とか叫んで、超コエーの」

「……そんなに怖かったか？」

「は？……ま、とりあえずこれで目星ついたな。明日また皆で話そうぜ」

「ああ」

陽介の言葉に真は頷く。

「……あ、そだ……話全然変わるけど、電話しついでに、訊いていいか？」

「なんだ？」

しかし陽介の話はまだ続き、その口調もどこか冗談交じりのような明るいものになる。それに真もつい聞き返した。

「こないだから言おうと思ってたんだよ。お前さ……天城と里中の事、どう思う？　ぶっちゃけ、どっちが好み？」

その言葉に真はふっと笑みを漏らした。

「……どっちも好み、と言ったらどうする？」

「ははっ、マジ？　お前、守備範囲広すぎだろ！……あー、心配しなくても、もちろんこれ内緒にしとっからさ。んじゃ、明日な」

真の言葉に陽介は笑って返し、最後にそう伝えておくと電話を切る。真も携帯を閉じると今日はもう眠りについた。

そして翌日の放課後。彼らは教室の真の席を中心に集まる。

「昨日の彼、やっぱ彼だよな……」

「『巽完二』か……見るからに絡みにくそうだよな」

「てか、すっげー怖い人なんじゃないの？……この前の特番見た？」

「あー、見た見た」

「暴走族の番組？ 私も見たいよ」

千枝と陽介の会話に雪子も入り、彼女はふと目を伏せる。

「……あの子、小さい時はあんな風じゃなかったけどな……」

「天城、翼の事を知ってるのか？」

「うん。今は全然話さなくなっちゃったけどね。あの子の家、染物屋さんなんだけど、ウチ、昔からお土産品仕入れてるの。だから今も、完二君のお母さんとは、たまに話すよ」

雪子の呟きを聞いた真が尋ねると雪子はそう説明、そして思いついたように口を開いた。

「あ、染物屋さん、これから行ってみる？ 話くらいは聞けるかもしれないし」

「そうだね。最近なんか変わったことはないかとか。本人に直でコンタクトするのは怖いけど、流石に自分ちの店先なら暴れないっしょ」

「よし、じゃ今から行ってみるか」

雪子の提案に千枝が賛成し、陽介も賛同する。

「危なくなったら、男衆ヨロシク」

「うえっ!？」

「ま、なんとかなるだろ。先輩に連絡とってみる」

しかし最後に千枝がそう言い、それに陽介が声を上げると真が席を立てて命に携帯で電話をかけた。

「あ、もしもし先輩ですか？ これから……え？ 報告書……あ、はい、分かりました。皆にも伝えておきます」

「あ、あのさー椎宮……命さんは？」

真の電話は十秒経たずに終わり、陽介は嫌な予感といたげな表情で真に声をかける。と彼は振り返って肩をすくめた。

「この任務の報告書を纏めないといけないんだと。ここのシャドウは先輩達の知っているものと差異があるからそれを細かに纏めないといけない、だからちよつと今日は来れそうにないそうだ」

「うえっ!?! 嘘！ いざとなったら俺達だけで巽完二押さえないといけないわけ!?!」

「そんな巽君がだれかれ関係なく襲い掛かるなんて言い方したら失礼だよー」

「どわっ!? まだ電話切ってなかったんすか!？」

真の言葉に陽介が声を上げると電話口から命の声がし、それに陽介はまたびつくりしたように飛び上がる。

「まああれだよ。見た目怖い人でも話してみたらすごく優しい人だったって事あるんだし怖がらずに話してみなよ。じゃあ捜査頑張ってるねー」

「あ、ちよつ命さんっ!!」

命の能天気にも聞こえる言葉に陽介は叫び返すが、聞こえてくるのはツー、ツー、という電子音のみ。陽介はがくりとうなだれた。

「さて、んじや行くか」

そして真の言葉に女子二人はこくと、陽介もゆつくりがつくんといい感じで頷いた。

それから彼らは完二の実家である染物屋「巽屋」へとやってくる。

「こんにちは」

「あら、雪ちゃん。いらっしやい」

「それじゃあ、僕はこれで」

雪子の挨拶に店の女主人らしき女性が挨拶し、直後青い帽子に青い服という青ずくめの少年がそう言うと言と女主人は子供の方を向いてすまなそうな顔を見せる。

「あんまりお役に立てなくて、ごめんね」

「いえ、なかなか興味深かったです。ではまた」

女主人の言葉に対し少年はそう言うと言と店を出て行き、それを見た陽介が首を傾げる。

「なんだ?……変なヤツ」

「見ない顔だよ」

「雪ちゃん、相変わらずキレイねえ。お母さんの若い頃に似てきたわよ。今日はどうしたのかしら? お友達とお買い物?」

「あ、いえ、その……」

陽介に続いて千枝もそう言っていると女主人は雪子を見て柔和に

微笑む。しかしその言葉に雪子は困ったように声を漏らし、真と雪子が女主人と話し出し、陽介と千枝は店内の商品を眺める。

「あれ、このスカーフ……コレ、どっかで見たような……」
「ん？」

千枝の言葉を聞いた陽介が彼女の横に歩き寄り、千枝のいうスカーフを見る。

「あー、見覚えあんな……何処で見たっけか……」

そしてスカーフを見ながら考え込むように眉間に皺を寄せた。それを真もちらりと見ると目を見開いた。

「あ、あそこだ！ テレ……例の場所！」

「そうか！ 顔無しのポスターのあった部屋の……ってことは、山野アナの……」

真はテレビと言いそうになったがすぐ近くに事情を知らぬ相手がいるため咄嗟に表現をぼやかす。それを聞いた陽介もそうかと頷いて呟く。それを聞いた女主人は首を傾げた。

「あなたたち、山野さんとお知り合い？」

「ああ、ええ、ちよつと……」

「突然申し訳ありませんが、もしかして山野さんはこのスカーフと同じものを持つてはいらっしゃいませんか？」

女主人の問いに陽介はごまかし、続けて真が尋ねる。それに女主人は頷いた。

「ええ、それは元々彼女に頼まれたオーダーメイドだったの。男物と女物のセットだったんだけど、やっぱり片方しか要らないって言われてね。仕方なくもう一枚は、こうして売りに出してるのよ」

「ヤバイよ……最初の事件と関係あるじゃん……どうしよう……」
「どうしようって……」

女主人の言葉を聞いた千枝が声を漏らすと陽介もそう返す。その時店の裏手からぴんぽんという音が聞こえてきた。

「まいどー、お荷物でーす」

「あ、はい。ごめんなさい、ちよつと外すわね」

続けて聞こえてきたのは宅配便の業者らしき男性の声、それに女主

人は裏の方を向いて声を上げた後雪子達にすまなそうな顔を向ける。と千枝が首を横に振った。

「あ、いえ、あたしたち、もう帰りますから」

「おばさん、また今度ね」

「そう？　じゃあ、お母さんにもよろしくね」

千枝に続いて雪子がそう言うのと女主人もそう返して立ち上がり、裏に歩いていく。それを見届けてから陽介が口を開いた。

「ここもやっぱり、最初の事件と繋がってる……けど、たかがスカーフだろ？　そんなんで狙うか？……くつそ、どういうことなんだ……」
「とにかく、一度外に出て話そう」

陽介は考え込んで頭をかき、そこに真がそう言うのと三人も頷き四人は一度店から出て行った。

「あれ……完二くんだ」

「ちよ、お前ら、隠れろー！」

雪子の言葉を聞いた陽介が慌てたように叫び、四人は咄嗟に近くのポストの影に隠れる。

「これ、どー見ても丸見えなんだけど……」

「しっ！　聞こえねっつの！」

それを千枝がツッコむと陽介がそう言い、四人は完二と少年の会話に耳を澄ませた。

「あ、明日なら別にいいけどよ……あ？　学校？　も、もちろん行ってっけど……」

「じゃあ、明日の放課後、校門まで迎えに行くよ」

完二の言葉に少年はそう言い、踵を返すとすたすたと歩き去っていく。

「きよ、きようみって言ったか、アイツ？……男のアイツと……男のオレ……オレに……興味？……」

完二は少年の言葉を考え出すが、やがてポストの影から覗いている真達四人に気づく。

「あん？　何見てんだゴラァア!!」

直後完二は声を荒げながら四人に突進、慌てて四人も逃げていき完

二はチツと舌打ちを叩くと家に入ってしまった。

一方四人も相手をまいたと確信できるところまで逃げてから足を止める。

「ビビった。テレビで見るよか迫力あんね……」

「そうか？ 先輩がキレた時の方が何倍も怖いぞ？」

「う……ま、まあそうだけどき。命さんの場合なんていうか静かだから余計怖いっていうか、ベクトル違わない？」

千枝の言葉に真があっさり返し、千枝も一度彼がキレたところを目の前で見えていたというかその対象が自分だったこともあって真の意見に賛同するが直後怖いのベクトルが違うと言っておく。と雪子が確信を得たように口を開いた。

「昨日の映像、やっぱり完二くんだ……」

「ああ……それに、思ったんだけどき。例の『共通点』……母親の方なら該当してんだよ。一件目の山野アナの関係者で、しかも女性だ。でも、テレビに映ってたのは息子の完二の方……どういうことだ？」

「条件はあくまで俺達の推理だ。実際に攫われる対象が映るテレビ映像を考えると完二の方が攫われると考えるべきだと思う」

「んー、そうなんだよな。条件は母親の方があってんだけど……」

雪子の言葉に陽介も頷く、が続けてそう言いそれに対して真がそう返すと陽介も腕組みをした。と雪子は思いついたようにまた口を開く。

「あ……これって、私の時と似てるかも」

「どういうこと？」

「よく考えたら、被害者の条件に一番合うのって、私より、お母さんだったはずでしょ？ 山野さんに直接対応してたの、お母さんだし……なのに、狙われたのは私だった」

雪子の言葉に千枝が問いかけると雪子はそう説明、それに千枝は首を傾げた。

「だから、今度も母親じゃなくて息子がってこと？ でもそれじゃ、動機がホントに意味分かんないじゃん。口封じにも、恨み晴らすことにもならないし」

「読み違えてんのか？……実は最初の事件から、恨みでも復讐でもなかったとか？……あるいは、あの染物屋自体に何か秘密が……」
「ふむ……」

千枝の言葉を聞いた陽介が考え始めると真も困ったように声を漏らす。と陽介はがりがり頭をかいた。

「あーも、分かんなくなってきたぜ！」

「でも、このまま放っておけない」

「うーん……こりやもう、巽完二に直接聞いてみた方が良くない？何か気になることないか、とか。怖いけどさ……」

陽介の言葉の次に雪子がそう言い、そこに千枝は困ったように頭をかいてそう続ける。と真が口を開いた。

「そういえば完二だが、さつき店にいた少年と約束をしていなかったか？ 学校に迎えに行く。と聞こえたが」

「あれ？ 完二って入学早々学校サボりまくりって聞いたけど……なんか怪しくねえ？」

真の言葉に陽介は首を傾げてそう呟く。と千枝がうんうんと頷いた。

「確かに、雰囲気は妙だったね。んー、言われてみると怪しい……臭う、なんか臭う気がする」

「臭うって……クマかよ、お前は……けど、実際何か掴めるかもよ」

千枝の言葉に陽介がツツコミを入れ、にっと笑う。

「よし……張り込み」してみようぜ。完二と染物店の両方。絶対犯人に先越されたくないしな」

その言葉に残る三人が頷く、と陽介はにししつと笑みを見せた。

「……というわけなんで、天城、ケータイ番号教えてみない？」

「ちよつと……」

「花村、お前まさかそれが狙いなんじゃ……」

陽介の言葉に千枝と真の冷たい視線が彼の方に向かう。

「や、違うって。俺、こん中で天城だけ番号知らないからさ。それに『あ行』の知り合い、少ないし」

「はあ……アンタそういえば、夜中にかけてきて下ネタとかやめてく

れる？ リアルにヘンタイっぽいよっ！」

「お、俺は、天城と話してんの！」

「……」

陽介の言葉に千枝がそう言い、陽介は慌ててそう言うのと天城の方を向く。彼女の方は何か考えている様子だ。

「……あ、思い出した。今日、お豆腐買って帰るんだった」

「うわ……一切聞いてねえ……」

「豆腐……今日の晩飯は豆腐ハンバーグにでもするかな……」

「お前もかよ!？」

「はいはい、じゃ明日ね。でも、そっか……張り込み？ 尾行？……やば、地味にワクワクしてきた！」

雪子は話を全く聞いておらず、雪子から豆腐という単語を聞いた真も今晚の献立を考え始めると陽介はそちらにもツツコミを入れ、話を千枝が打ち切らせる。しかし直後千枝は無邪気な子供のような笑みを浮かべ、四人は解散。真は雪子と共に商店街の丸久豆腐店という店に豆腐を買いに行き、それから家に帰っていった。

そして翌日の放課後。彼らは校門前で張り込みをしていた。

「ターゲットは登校しているな!？」

「登校は確認済みであります！ ターゲットは本日、昼休み終了間際、母親の手作り弁当持参にて登校。現在はトイレで髪の毛いじってるであります。ターゲットはやたらソワソワしており、絡まれたらイヤなので出てきたであります！」

「何の約束なんだろう……昨日の男の子、顔見知りって感じじゃなかったよね」

千枝のやけに芝居がかった言葉に陽介も上官に報告する兵士のような口調でそう言い、雪子が声を漏らす。

「えー、その辺りは自分が考えますに、もつと微妙な……」

雪子の言葉に千枝がそう言っていると突然ガタンという物音が聞こえ、四人はそつちを向く。

「あ、来たー！」

玄関から出てきた完二の姿を見た千枝が声を出し、完二が四人に気

づかず校門前の坂までやってくると昨日の少年が坂を上ってきた。

「ごめん、待たせちゃったかな」

「や、オ、オレも今、来たトコだから……」

少年の言葉に完二はしどろもどろに返し、二人は坂を降りていく。

「な……なんだ、アレ……」

「とつ、とにかくさっ！ 追っかけないと見失っちゃうよ！」

「お、おう。それじゃ二手に分かれよう。完二尾行班と、店張り込み班な。ところで真、命さんは!？」

「ごめん！ やっぱどうしてもバイト抜けられそうにない！ あ、今行きます！ ごめん切るね。もう休憩終わりだから」

まるでデートのような二人の会話に陽介が声を漏らすと千枝が慌てて言い、それに陽介も頷いた後真に尋ねる。と真は今まで話していた携帯のスピーカーホンを入れ、そこから聞こえてきた命の慌てた言葉と電話が切れた後特有の電子音に陽介は啞然とする。

「や、やっぱりか……はあくあ、なんで今日に限って命さんシフト入ってんだよ……」

「そ、それよりさ！ 班分けどうすんの!？」

陽介のがつくりと肩を落としながらの言葉に千枝が慌てながら言う。と携帯を懐にしまった真が真剣な目で口を開く。

「誘拐犯がどちらに来るか分からない今もしもの事があつた場合女子二人だけだと危険だ。俺は天城と組もう。花村、里中を頼めるか？」
「了解！」

「……うん、分かった。椎宮君、雪子をよろしくね」

真の言葉に陽介はすぐに頷き、千枝も一瞬心配そうな顔を見せたが真の意見をもっともだと判断したか了解した後雪子をよろしくと付け加えておく。そして千枝は歩き去っていった二人の方を見ると慌てたように叫ぶ。

「って、やばっ！ もう見えなくなっちゃう！ 行くよ、花村！」

「おう！ じゃあバレないように、俺ら恋人同士のふりで行くぞ！」

「やーだーっつの！ 見られなきや必要ないっしょ！」

千枝と陽介は漫才のような掛け合いをしながら走り去っていく。

「……あの二人、大丈夫かな？」

「花村も真面目な時は真面目だから大丈夫だとは思うが……」

雪子の心配そうな言葉に真もそう呟く、と雪子はそこで二人きりになったのに気づき、慌てたような表情を見せる。

「どうした、天城？」

「え、あ、えーっと……それじゃ、私達は染物屋さんね」

「そうだな。いざとなれば天城が店に入って客のふりをして様子を見てくれ。店の周りは俺が護衛する」

「う、うん……行こっか」

慌てたような表情を見せた雪子に真が問うと雪子は慌てたようにそう自分達の役割を確認、それに真は頷いて返し、雪子がそう言う二人は異屋に向けて歩いていった。

それから場所は異屋。真はその横の神社に潜伏しながら辺りに怪しい人影や物音がないかを確認していた。すると店内の様子を見に行っていた雪子がついでに近くの自動販売機で買ったのだろう飲み物を両手に抱えて戻ってきた。

「お待たせ……これ、飲み物」

「すまん」

「お店の方は特に変わったことはないみたい。このまま何もなければいいけど……犯人、来るかな？」

雪子がそう言って渡してきたペットボトルを真は一言言ってから受け取り、蓋を開けると一口飲む。雪子は心配そうな表情でそう漏らしており、その表情の中に隠れている恐怖を読み取ると真はふつと笑った。

「安心しろ。もし犯人が来ても俺がいる」

「えっ!?……う、うん。ありがと……頼りにしてる」

真の言葉に雪子は顔を赤らめながら声を出し、小さく頷いてうつむく。

「もし本当に来たら……ちよつと、怖いけど……私も、捕まえるの協力する。みんなに助けてもらったのに、自分だけ何も出来ないなんて、嫌だから……それに、私にも、出来る事あるって思うから……」

雪子はそのままで話すと気づいたようにはつとした表情を見せる。

「ご、ごめんね……なんで、こんな話してるんだろ。な、なんか緊張してるみたい。同年代の男の子と二人だけで話すとか、そういうの、なかったから……」

「たしかに、今まで見てきた感じだと大体里中が一緒なイメージがあるな」

雪子の言葉を聞いた真は今まで学校で見てきた雪子のイメージを思い浮かべる。

「う、うん。千枝もね、ああいう性格だから男の子の友達多いけど……今はあなたや花村君と一緒に一番楽しいみたい……私も、楽しいよ」
「どうも」

雪子の言葉を聞いた真はふつと笑ってそう返す。真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、〃女教皇〃のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。その後彼はふと思い出す。

「天城。携帯番号教えてくれ」

「え？ う、うん。いいよ。家の仕事で出られないことあるかもしれないけど……いつでもかけて」

真の言葉に雪子は驚いたように声を上げた後顔を赤らめながらそう言い、二人は携帯を取り出すと互いの番号を交換した。

一方陽介と千枝の完二追跡班。陽介は携帯電話を手に電柱の影に隠れていた。

「えー里中さん里中さん、聞こえますか？ どーぞ」
「聞こえてますよー」

陽介からの通信を聞いた千枝がポストの影から頭を出す。もちろん手には携帯電話を持っている。

「ターゲットは200m先で立ち話中。どうぞ」
「……なあ」

千枝の言葉通り完二と謎の少年は200m程先で話しながら歩いている。と陽介が呆れた表情で口を開く。

「この配置、意味あんのかよ？」

そしてそう漏らす。陽介の隠れている電柱からすぐ近くの曲がり角に千枝の隠れているポストがある。その距離感のはつきり言って携帯電話による通話無しで充分話が出来る程度だ。

「二人固まつてたら見つかった時一網打尽！ どうぞじゃん」
「どうぞつける位置間違ってんぞ……」

「だから少しでも分散した方がいいと思っただであります。どうぞ」
「絶対意味ねえよ、100%芋づるコースだろこれ」

千枝の言葉ひとつひとつに陽介がツツコミを入れていく。まあ一網打尽を防ぐ分散としては少々どころではなく距離が近すぎるのはたしかだ。

「そんなことよりお腹が空いたであります。どうぞ」

「知らねーよ！ だったら出前でも頼めばいいだろ？」

「出前？ 外なのにな？」

千枝がそんな言葉を漏らすと陽介はツツコミを入れた後そう言い、それに千枝が首を傾げる。

「お前知らねーの？ 愛屋の出前って、どこにいても配達してくれるって評判なんだぜ？」

「マジで!？」

陽介の言葉を聞いた千枝は目を輝かせ、電話を切るとボタンをプッシュしていく。

「じゃあ早速……すいませーん、出前お願いします。肉丼二つ！」
「俺いらねーよー」

「誰がやるって言った！ 二つともあたしのだから！」

「あーそーですか！」

千枝の注文したメニューに自分の分も勝手に頼まれたと思った陽介が声を出す。千枝は二つともあたしのだからやらないと主張、それに陽介は口を尖らせた。

「えーっと場所は——」

「オウコラア」

「え？」

そして千枝が今いる場所を伝えようとしたところ、ドスの効いた声が聞こえてくる。

「何してんだオメエら？」

「げっ!!」

そこにいるの間にか立っていたのは完二、それに二人は声を漏らした。後硬直、とりあえず立ちなおすと陽介が誤魔化すように笑った。

「と、通りすがりのバカップルでーっす！」

「はあ!? 誰がよ!？」

「馬鹿！ いちいちツッコむな！」

「やなもんはやだっつーの!!」

陽介の誤魔化しの言葉に千枝が目を三角にして声を荒げ、陽介が慌ててそう言うが千枝はさらに叫ぶのみ。ちなみにその間に少年は話は終わったのか歩き去っていった。

「アアン?……つかオメエらたしか昨日の……」

「いいっ！」

完二は二人の顔を覗き込みながらそう呟き、陽介が声を上げると千枝が両手を前に出す。

「あ、ああああの、あたしら別に二人の邪魔する気ないし、別にあたしは怪しいとか思っただけ！」

「あ、怪しい……」

「馬鹿、里中！ 余計なこと言うな!……逃げんぞ！」

千枝の言葉に完二の表情が固まり、陽介は慌ててそう言っただけと移動すると一気に走り出す。

「あ、ちよつこら花村！……逃げ足速過ぎ！」

「あ、コラアツ!!」

直後千枝も完二が固まっている間にその場を逃げ出し、直後完二も我に返って二人を追いかけ始める。

「そんなんじやねーんだかな！ マジぜってーちげーかな!!」

「ひええええええっ!!」

「ああ!? 聞いてんのかゴラアアアアツ！ マジ、ぜってー、ちげーかな!!」

完二が怒号を上げながら追いかけてくるのに対し陽介と千枝は悲鳴をあげながら逃げ惑うしか出来ず、二人は商店街を走り翼屋の方へと向かう。

「ん？ 花村の声？」

一方神社にいた真も陽介達に気づく。

「わ、わりーピンチ連れてきちまったー!!」

「雪子ゴメーン!!」

「お、追われてるの？」

「余計な揉め事になったら厄介だ。俺達も逃げるぞ」

二人はそう叫んで神社前を通り過ぎていき、雪子が呟くと真もそう言い、二人は陽介と千枝と一緒に逃げ始める。

「待てコラアアアアアツ!! シメンぞ！ キュツとシメンぞ!!」

その後を完二が声を荒げながら追いかけていった。

「まずい、このままじゃ全員捕まっちゃう……こうなったら、囿になれ

！ 里中!!」

「はあ!? なんであたし!?」

「ほら、映画とかでよくあんだろ!? ここは俺に任せて先に行けとか！ アレ言うチャンスだぞ！」

「たしかに……」

「千枝!? 前向きに検討しないで!!」

陽介の口車に乗せられそうになっている千枝に雪子が必死で呼びかけていた。

「待ってってコラア！ ってなんだっ!?」

完二も声を荒げながら追いかけていたが突然彼をバイクが追い抜く。

「おまちどー」

「ええっ!？」

「でまえ、おとどけにきたー」

「俺ら絶賛移動中なのに、なんで場所分かったんだよー!？」

出前用バイクに乗っている少女——中村あいかの妙なイントネーションの言葉に陽介はツツコミを入れる。しかしあいかは気にすることなく後ろの荷台から肉丼を取り出した。

「おかいけー、1600えんー」

「聞けよ!」

「ん〜……ごめんお釣りある?」

「払うのか!？」

あいかのこの状況と陽介のツツコミを完全にスルーしている言葉に陽介がさらにツツコミを入れ、千枝は財布を取り出した後細かいお金が無いのかあいかにお釣りがあるか尋ね、そっちにも陽介はツツコミを入れる。

「千枝、百円あるよ」

「後にしろよ!!」

次に雪子が財布から百円玉を取り出し、陽介はそっちにもツツコミを入れる。

「どんぶり、おいといてー」

「どこにだー!!!」

そしてあいかはお代を貰うとそう言い残してバイクは去っていく。その最後の言葉にも陽介はツツコミを入れたのだった。

「な、なんとか撒いたな……」

「ああ」

さっきまで全力疾走&ツツコミを一手に担っていた陽介はせえぜえと荒い息をしながら呟き、それに真が汗一つかいていない平然とした表情で返す。千枝は出前に取った肉丼を幸せそうな表情で食べ、雪子も笑顔でそれを見守っていた。

「はあく、今日走りすぎて疲れた……今日は大丈夫みたいだったけど、天城のこと考えるともうそろそろ起きてもおかしくはねえよな?」

「まあな。また明日、様子を見てみよう」

「ああ。大変だけど、まあしゃあねえよな。んじゃ今日は解散にしよ
うぜ、俺マジ疲れた」

「お疲れさん」

陽介の言葉に真はふつと微笑を浮かべながら返し、その場は解散と
なった。

そしてまた夜、部屋で休んでいた真に電話がかかってきた。

「もしもし?」

「あ、もしもし? 天城ですけど。ご、ごめんね、遅くに……あのね、
完二くん、家にいないんだって!」

「本当か!」

雪子の報告に真は思わず声を大きくさせる。

「旅館のちよつとした用のついでに、染物屋さんで電話してみたの。
それでね、完二君のお母さんと話したんだけど……完二くん、どこか
へ出かけちゃって、そのまま帰ってきてないみたいなの。よくあるこ
とだって、お母さんは言ってたけど……どう思う?」

「……断定は出来ないが、やばそうな流れではあるな」

「うん……ねえ、今日また雨だから、映るかもしれないよね、マヨ
ナカテレビ」。完二くんは、ほんとに何か起きたのか、見れば分かる
かも」

「可能性は高いな」

「うん。0時になったら、私も見てみるね……それじゃ」

雪子の言葉に真は頷き、互いにマヨナカテレビを見るという意見で
一致させると雪子は電話を切った。

それから少し時間が過ぎ、真は外で雨が降っているのを確認してか
らカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点い
ていないテレビが映り始めた。

「鮮明な映像、やっぱりか……」

映った映像に真は悔しそうな表情を見せる。とまるで下から競り

あがってきたかのように完二が姿を現してきた。しかしその姿はふんどし一枚という怪しすぎる格好で、何故か顔を赤らめてやけにやっっている。

「皆様……こんばんは。ハッテン、ボクの町！」のお時間どえす」

「……」

テレビの中の完二の言葉に真は全身が凍りつくような錯覚を感じる。

「今回は……性別の壁を越え、崇高な愛を求める人々が集う、ある施設をご紹介します。極秘潜入リポートをするのはこのボク……巽完二くんどえす！」

そこまで言うと言角が少々変わり、しかし完二はカメラ目線を取る。

「一体、ボクは、というかボクの体は、どうなっちゃうんでしょうか!?! それでは、突・入、してきまあす！」

真が凍り付いている間にも映像は進み、完二が画面の奥へと去って行ったところでマヨナカテレビは消えてしまった。そしてその直後携帯電話の着信音が聞こえて出してバイブも作動し、真ははっと我にかえると電話に出る。

「お、お、おい！ おいおいおい!!」

電話の相手は声からして陽介らしい。しかしかなり焦っている様子だ。

「花村、落ち着け」

「いや、だってあれはねえだろ!?!」

「それは賛成だが、今はそれどころじゃない」

「あ、ああ、そうだな……」

焦っている陽介に対し真はそう返し、それを聞いた陽介もようやく落ち着きを取り戻すが次に聞こえてきたのは悔しそうな声だった。

「クソッ、見込み当たってたのに、結局これかよ……あん時帰らないで、あと一歩粘ってりやよかったのかな……ハア」

陽介は悔しそうな声を漏らした後はあと一つため息をつく。

「にしても、あいつの背後に映ってた場所……あれ、なんだと思う？」

「崇高な愛を求める施設」？ あー、分つかんねー！」

「とにかくすぐ作戦を立てよう。花村、お前や先輩のシフトは大丈夫か？」

「ああ。テレビに行くには問題ねえ」

陽介は少し考えた後声をあげ、真は明日皆で考えようと言うと念のため陽介や命のバイトのシフトを尋ねる。それに陽介は大丈夫だ問題ないと返し、陽介が電話を切ると真も携帯を閉じ、明日に備えて眠りにつくのだった。

第十七話 テレビの世界、熱気立つ大浴場

5月18日、放課後。完二がテレビの中に放り込まれたことが確定してしまい、自称特別捜査隊学生メンバーは教室に集まっていた。

「マヨナカテレビ」って、結局なんなんだろう?……」

「最初は、心霊現象みたいなモンかなって、噂を試したら、見えただよね。そしたら「もう一つの世界」なんて大事に関係してて……」

「噂なってるって事は、実際に見てるヤツが結構居るって事だよな」
雪子の呟きに千枝が返し、陽介が言う。と真が思い出すように虚空を見上げる。

「噂の内容は、雨の夜の0時に、ついていないテレビをじっと見つめる……」
「だつたよな?」

「んなの何かきつかけ無いと普通試さねーよな、アホらしくて」

「しかも、見て何か映っても一人だったら寝ぼけてたで済みかねないからな」

「ああ。それに実際やってみたら誰でも見れる。それも何度でも……もしコレが広まって、みんなが見だしたら……」

「エライ騒ぎになりそうだね……」

真の言葉に陽介が返すと真は自分もそうなりかけていたと思い返して頷きながら返し、陽介がさらにそう言うのと千枝は頭をかきながら返す。

「クマの話を元になると、あの映像は、失踪者自身が生み出してるのかなんとか……要はなんとなく見えてるわけじゃなくて、失踪者のせいで見えてるって事らしいけど……」

「ハア……てか雪子さん時も見えただけど、当の雪子はそんなに関わった覚え無いワケじゃん?」

陽介の言葉に千枝がそう言う、と雪子は何かを思いついたように話に入った。

「あのさ、ちよつと話逸れるんだけど……あの映像って……犯人も見てるんだよね?」

「たぶんね。きつとどつかで面白がつ……」

雪子の疑問の言葉、それに千枝が頷いてそう言うが途中で何かに気付いたようにその言葉が止まった。

「まさか、楽しんでるってこと!?!」

千枝は気づいたように叫び、真は顎に手を当てて考えるポーズを見せる。

「人をほうり込んで、その後映る『番組』を楽しんでいる……たしかに可能性としてはあるかもしれない……」

「なるほど……うわ! 頭ん中の犯人像が一気にヘンタイ属性になった!」

千枝の言葉に真が可能性があるかと肯定を示すと陽介がそう言い、「キミの全てが見たいよ、雪子たーん」という謎の叫びを行う。

「うっわ、うわ、うっわ!! てか、雪子の一連の話見られたんなら一緒にあたしのも見られた可能性あり!?!」

それを聞いたからか千枝は羞恥からか顔を真っ赤に染め上げた。

「犯人……絶対許さんっ! 顔中クツ跡にしてやる!」

その次には怒りに顔を赤くしながらそう叫ぶ。

「やろーども!」

さらにその次にはぐぐつと拳を握りしめた。

「一、完二を助ける! 二、犯人、潰す!」

千枝は一つずつ今回の作戦を言っていく。

「三、犯人、ぶっ潰す!! オーケー!?!」

「二お、おー……」

千枝の怒り心頭の言葉に男子二人は若干押されつつもそう返し、雪子も頷く。そうして彼らは完二を助ける意思を固くしたのであった。

「ぶ、ププ……ち、千枝、二と三、同じだったよ?」

「や、分かってるから……」

しかしその次には雪子の笑いのツボが入り、三人は困ったような顔を見せた。

それから彼らはジュネスの家電売り場へと行き、人目を気にしつつテレビに入る。もちろん命も合流している。

「おいクマ、こつちに誰か入ったろ？」

「あ……うん。誰か居るみたい」

テレビに入ってそうそう陽介がクマに尋ねる。それにクマはこくと頷くがその口調は弱々しく自信なさげなように聞こえた。

「みたいって……場所は？」

「分からんクマ」

「完二くんって男の子だと思っただけど……」

「分からんクマ……」

千枝と雪子の問いかけにクマは同じ言葉で弱々しい口調までも同じで返し、千枝は困ったように「もー」と声を漏らした。

「なんなの？　なんかスネてるのか？」

「鼻クンクンしても、どっからのニオイか分からないの」

千枝の言葉にクマは力なく首を横に振ってそう返す。それを聞いた陽介が頭をかいた。

「お前、色々考えすぎなんじゃないのか？　自分が一体ナニモンだとか、いつからココに居るのかとか、確か言ってたよな？　どーせカラッポ頭なんだから、あんま考えんなよ」

「そうクマね……」

陽介の言葉に、クマは彼らに背を向けながらまた弱々しい言葉で返す。

「なんか、けっこう深刻？」

その様子を見た千枝がそんな言葉を漏らした。

「完二の居場所、お前に分かんないっつわれると困るんだって」

「確かに。この世界を闇雲に進むのは危険すぎるしな……」

陽介の言葉に真も同意し、少し考える。

「クマ、俺達に何か出来ることはないか？　出来る限り手伝おう」

真の言葉を聞いたクマは何かひらめいたように彼らの方を向き直す。

「“カンジクン”のヒントがあるといいかも！　そしたらクマ、シューチューーできる予感がひしめいてる。カンジクンの事がよく分かるような……なんかない？」

「完二の事か……なんかって言われてもな…… “噂”ならよく聞くけど」

「噂なんてあてにならないよ？ 言う人が好き勝手脚色して尾ひれがついて最終的にはその張本人も知らないような事がでつち上げられるんだから」

クマの言葉に陽介が呟くと命がはあくど深いため息を漏らし、肩をすくめるような動作で続ける。

「まあ、でも噂を除いたら知らないよね。親しいってワケでもないし」「うん。私も最近の完二君って言われると自信ない……」

命の言葉の次に千枝が頭をかいてそう言うと言完二と幼い頃知り合っただったという雪子も最近の完二になると自信がないと続ける。

「カンジクンの “人柄” を感じるような、なんかそういうヒントが欲しいクマよ……」

「となると、実際の異君を知る人に訊いてみるのが一番早いだろうね」「そうですね。じゃあ一度テレビを出て、手分けして探してみよう」

クマの言葉を聞いた命がそう提案、それを聞いた真が頷くと彼らは一度テレビから出ていった。そしてさらにジユネスから出ると真が口を開く。

「じゃあ俺と天城で異屋に行ってみる。花村と里中は他を回ってみてくれないか？」

「おう。任せとけ！」
「オツケー！」

真の言葉に陽介と千枝は頷く。まず異屋に行つて不自然ではない雪子で確実に異屋の女主人である完二の母親から彼の情報を入手、さらに社交的な二人ならば噂以外に何か完二に対する人柄のヒントを掴むことができるかもしれないという考えからだ。

「僕も適当に回って探してくるよ」
「お願いします。じゃあ何か情報を掴めたら携帯で報告、集合場所はいつものフードコートで」

そこに命もそう言い、真も一言返してから最後に報告や集合の事を言い、彼の「解散」の一言で皆は散っていった。

それから真と雪子は異屋へとやってきて雪子が挨拶もそこそこにさりげなく最近の完二について話を振る。

「ごめんなさいね。あの子、昨日から帰ってなくて……最近物騒だし、一応警察の方に届けてはおいたんだけど……」

「心配ですよね……」

「そうね。黙っていなくなるのはしよっちゅうだったけど、帰ってこないなんて初めて……」

「何か心当たりはないでしょうか？」

完二の母の心配そうな言葉に雪子が同調し、次に真が尋ねる。完二の母はその問いに対し少し考える様子を見せたがやがて静かに首を横に振る。

「ごめんなさい。最近、私もあの子とはあまり話せてなくて……」

「そうですか。失礼しました」

完二の母の申し訳なさそうな返答に真は丁寧に頭を下げる、と完二の母は思い出したようにぽんと手を打った。

「そういえば、数日前にあの子、知らない子と話してたわね。このお店にも来てたけど……」

「あ、もしかして青い帽子を被った小柄な……」

「ええ。あの子なら何か知ってるかも……たしか数日前にジュネスで見かけたわね。一人暮らしなのかしら？……」

「そうですか。ありがとうございます」

新たな情報を得た真は嬉しそうに微笑んで頭を下げ、雪子も丁寧にお別れの挨拶を言ってから二人は店を後にし、真が携帯で陽介に電話を掛ける。

「花村、様子はどうだ？」

「あゝ、色々回ってたんだけどよ。俺には商店街の人達冷たくつてよ」

「……そうか、すまない。そこも考慮しておくべきだった……」

「いや、いいって。それよりどうだ？」

「ああ。情報は手に入った。前に完二に接触してた奴がいただろ？青い帽子被った……」

「アイツか！なるほどな。よし、手分けして探そうぜ！」

「完二の母親によるとジュネスにいたところを見かけたらしい。適当に探し回っていなかったらジュネスに向かおう」

「オツケーー！」

真と陽介は連絡を取り合うと電話を切り、二人は商店街を走っている。

「ええ。本当は完ちゃんは母親思いで優しいのに、見た目で誤解されて不憫だわ……」

「たしかにそうですね。母親を大事に思う子に悪い人はいませんから」

すると豆腐屋で真が店番をしているお婆ちゃんとお茶を飲みながら談笑している光景が移り、真は思わずジト目になってしまう。

「先輩？」

「あ……すみません、ご夫人。僕はもうそろそろ失礼しないと」

「あ、お引止めしてごめんね」

「いえいえ。では失礼します」

命はにこつと微笑んでお婆ちゃんに挨拶し、豆腐屋から出ていくと真達に合流する。

「何呑気に茶を飲みながら談笑してたんですか……」

「あはは、巽君について知りませんでした聞いていたらちよつと話が長引いて、気がついたらお茶も出してもらっちゃってね。月光館時代によく話してた古本屋のお爺ちゃんとお婆ちゃんを思い出して話を切り上げることも出来なくなつてさ……でもそこまでの情報は手に入らなかったな。せいぜい巽君の暴走族との乱闘が母親のためだったくらい」

「ああ、おじさんから聞きました。アグレッシブな親孝行ですよね……」

「はは。僕も影時間捜査の一環っていうかそういうので路地裏の不良と乱闘繰り広げたけど……あ、あとあそこのお婆ちゃんのお孫さんが今度こつちに越してきて八十神高校に転入するんだつてさ。学年は聞いてなかったけど同学年だったら仲良くしてあげてね」

「は、はあ……」

なんかさらっとこの事件とまったく関係ない情報を入力しつつ、三人はとりあえずジユネスへと向かう。

「花村！」

「千枝！」

「雪子——！」

「おう、来たか！」

真と雪子の呼びかけに千枝が手をぶんぶんと振って返し、陽介も右手を上げて返す。それから五人がジユネスに入ると丁度エレベーターが開き、そこから真達の探している少年が姿を現した。

「お、ちようどいいや。なーなー、お前ってこの前異完二と話してた奴だろ？」

「……ですが、僕に何か用ですか？」

陽介の言葉に少年は少し黙った後冷静な声質でそう返し、命が苦笑を漏らしながら前に出る。

「ごめんごめん。ちよつと聞きたいことがあるんだけど、異君と話してる時に何かおかしなことかなかったかな？」

「何故そんなことを？……ま、いいでしょう。何やら急いでいるようですし、質問にはお答えしますよ」

命の言葉に少年はそう漏らして少し考えた後続け、少し考える様子を見せる。

「そうですね……最近の事を聞いたら、何か様子が変わりました。だから、感じたままに伝えました。『変な人』だね……と。随分顔色を変えてましたよ。こちらがビツクリするくらいでした」

「あ、そういえばあたしが言った時もそうだったなく。でも意外だな、そういうのあんま気にしないタイプに見えるのに……」

少年の言葉に千枝が自分が完二とちよつと話した時の事を思い出してそう言う。それを聞いた少年はまた考える様子で目を閉じた。

「……それを踏まえると、普段の振る舞いも少し不自然だったような気がしましたね。まるで何か『コンプレックス』を抱えているような……確証はありませんが」

「コンプレックス……ありがとう。参考になったよ」

「そうですか……では僕はこれで」

少年の言葉を聞いた命はお礼を言い、それを聞いた少年は軽くそう返しただけで歩き去っていく。

「変な人、という言葉に過剰反応。何かコンプレックスを抱えている風……これがヒントになるかもしれない」

「ああ。さっそくクマに伝えに行こうぜ！」

聞いた話を総合し、言う真に陽介が頷いて返す。そして彼らはそのまま家電売り場へと行くとテレビに入ってしまった。

「おっ、センセイ！ 来たという事は……」

「ああ。手がかりが見つかった」

クマの言葉に真は頷いて答え、自分達が調べてきた完二の人柄をクマに説明する。

「ふむふむ、コンプレックス……え、それだけ!? それだけで探すクマ? クマ使いが荒いクマね……」

「すまん。だがなんとかやってみてくれないか？」

「しよーがない……なら、全開で鼻クンクンするクマよ！」

クマの悲鳴に真はすまなそうに言い、クマはそう言うともむむむと唸って鼻をクンクンし始める。

「おっ、なんか居たクマ！ 当たりの予感！ これか！ これですか!? ついて来るクマ！」

そして何かを発見したようにそう言い、彼らは前を歩くクマの後を歩いていった。

それから彼らがやってきたのはロッカーがいくつも並んだまるで脱衣所のような場所で、その上かなり蒸し暑い。

「なんか……この霧、今までと違うくない？」

「メガネ、くもっちゃった……」

千枝の言葉の次に雪子がメガネを外しながらそう呟く。その言葉通りこの場所の霧は今までと違ってメガネであまり見通せないし逆にメガネが曇ってしまう。まるで湯気のようにだ。

「にしても、アッチーなー。これじゃまるで……」

陽介の言葉が終わる前に突然怪しげな音楽が鳴り始め、思わず全員身構えてしまう。

「僕の可愛い子猫ちゃん……」

「ああ、何て遅しい筋肉なんだ……」

「怖がる事は無いんだよ……さ、力を抜いて……」

怪しげな音楽と共に聞こえてくるのはダンディな男の声と優男風の声。それを聞いた全員が固まった。

「えっ……と……」

「ちよ、ちよつと待て！ い、行きたくねえぞ、俺！」

千枝の困ったような呟きに陽介が顔を青ざめさせ全力で拒否するように首を横に振る。腰もかなり引けている。

「クマ君、本当にここに巽君がいるんだよね？」

「クマの鼻センサー、ナメたらあかんぜよ！」

「こ、今回は間違つててほしかった……」

命の冷静な問いかけにクマは自信満々に頷き、陽介は頭を抱えながらそう漏らした後脱衣所から続く湯気の中を見た。

「ええ……こんな中突っ込めつての？……うあ、なんか汗出てきた……」

「いや、暑いからでしょ、それは……」

陽介の言葉に千枝がツツコミを入れる。

「ね、ねえ……」

そこにふと雪子が心配そうな顔で口を開き、湯気の中を見る。

「こんな暑い中にいたら、完二君まずいんじゃない……」

その言葉に全員目が開く。

「確かにまずい！ こんなところに長時間いたら間違いなく脱水症状を起こす！ シヤドウに襲われる以前に危険だ！」

「っ、行くぞ！」

「くっ、しゃあねえ！ 覚悟決めるか！」

命の言葉を聞いた真は迷いを捨てた目で声を上げ、陽介も頷く。そして全員一気に湯気の中へと突っ込んでいった。

「よかった。中はそこまで湯気がひどくないね……」

ダンジョン内を走りながら命が漏らす。入り口の脱衣所はメガネが曇るほどに湯気が濃かったが内部はそんなことはなく、戦いに支障をきたすことはなかった。完二の心が生み出したダンジョンはまるでサウナ。しかし辺りに「男子専用」と書かれた垂れ幕があるのが妙に気になった。すると彼らの前にパピヨンマスクのような仮面をつけた、岩のようなシャドウが数体姿を現す。

「あたしに任せて！ いっけー！ トモエ！！ 暴れまくり！」

一番に飛び出した千枝が自らの人格の鎧（ペルソナ）トモエを呼び出し、千枝の言葉を聞いたトモエの薙刀に光が宿り、一気に衝撃波を放つ。しかしその衝撃波があたったシャドウはガガガンツという岩に固いものが当たったような衝撃音を鳴らすだけに結果に終わった。

「嘘!? 硬っ!?」

「花村っ！」

「おう！ ジライヤ、マハガル！」

千枝がぎよつとして動きを止めると真が声を上げ、陽介もペルソナを呼び出すと辺りに小さな竜巻を起こして岩のようなシャドウを掬い上げ、シャドウは着地に失敗してごろごろと転がる。

「弱点にヒット！ ヨースケ、カックイー！」

「チャンス！ ボコボコにすっぞ！」

後ろのクマが歓声を上げ、陽介の言葉を合図に全員が転がっているシャドウに突っ込んでいく。シャドウの身体には物理攻撃が通じないような硬いものも多いがその核となる仮面はその限りではない、命からあらかじめ聞かされていた通り全員がシャドウの仮面を狙い撃ち。仮面を砕くと同時に岩のようなシャドウの身体が霧散していった。

「ふいふ、にしてもほんとアッチーなここ……」

「お疲れ様。花村君」

陽介が汗を拭いながら呟くと雪子がにこつと微笑んで陽介に声をかける。千枝は着ている服をぱたぱたとさせており、真はさっきの戦

いで可能性の芽が見えているのか虚空を眺めている。

「ふう……」

命は額に流れる汗を拭いながら辺りの気配を探る。とその勘が何かに反応した。

「天城さん！ 危ない！」

「えっ!?!」

言うが早いか雪子の方に突進する命、それに雪子が声を漏らすと命は彼女の横に立って反転しつつ腰の剣を抜き、虚空を一閃。するとキインツという音が響いた。

「て、敵二体！ 奇襲クマ!!」

『!?!』

クマの慌てた叫びに全員の意識が戦闘状態に変わる。さつき雪子を射撃した存在——それはドーナツのようなものを銜え、腹部にこれまたドーナツのような穴が空いた太っちよの警官とでもいうシヤドウだ。その手には銃が握られており、先ほどはそれで射撃してきたものと考えられる。

「ご、ごめんなさい、命さん……」

「気にしないで。陽介君、スクカジャお願い！」

「分かり——」

「いや、俺が前に出るから援護を！」

雪子の申し訳なさそうな言葉に命は一言返した後陽介に指示を出し、陽介がそれに頷こうとした瞬間真の声が響き、真はなんと真正面から二体の警官シヤドウに突っ込んでいく。それを見た警官シヤドウが真に銃を向けた。

「つつ、椎宮!?! 馬鹿止める危ねえ!!」

「スライム!!」

陽介の絶叫と真の叫びが重なり、警官シヤドウの銃から放たれた銃弾が真に突き刺さる……と思ったがそれはなんと真の身体から弾かれた。

「ええっ!?!」

「なるほど。全員、真君を援護!!」

千枝の素っ頓狂な声を聞きながら命は頷き、声を上げる。それを聞いた高校生三人組はこくこくと頷き、ペルソナを呼び出した。

「トモエ！ ブフ！」

「ジライヤ！ マハガル！」

「コノハナサクヤ！ マハラギ！」

トモエの薙刀から放たれる氷結の弾丸、ジライヤの放つ無数の竜巻、コノハナサクヤの舞いと共に放たれる炎の弾丸の雨、それが警官シャドウを襲う。

「スライム、突撃!!」

さらに命が呼び出したペルソナ——スライムが光を纏って警官シャドウに突撃、その一体を撃破する。

「コノハナサクヤ！ アギ！」

そこに雪子が追撃の炎を放つ、警官シャドウを焼き尽くした。そして真がふうと息を吐いて命達の方に戻ってくると命がふふつと微笑んだ。

「スライムのスキル、恐らく物理無効だね？」

「はい。さつき新たな可能性の芽が見えて、それを掴み取ったらスライムが持ってたスキル、物理耐性がパワーアップしたんです」

命の言葉に真は笑みを浮かべながら返し、命はふんふんと頷いた後彼の腹に不意打ちの膝蹴りを叩き込む。

「がはっ!？」

戦闘を終了しスライムの力を宿していなかったためか思いっきり腹に突き刺さる命の膝。

「それならそうと一言言う！」

「は、はい……すいません……」

命の注意の言葉を真はうずくまりながら絞り出すような声で返し、高校生三人組は苦笑を漏らしながらそれを見ていた。

それから彼らは一丸となってシャドウを倒しながらダンジョンを進んでいく。そして三階へと足を踏み入れた時だった。

「うっ!？」

「どうした、クマ？」

突然クマが声を漏らし、真がクマの方を向いて尋ねる。

「今、背中がぞくつとしたクマ！ この階に何かいるクマ！ 気を付けるクマ！」

「……皆、油断するな」

「お、おうっ！ 任せとけっ!!」

クマの言葉を聞いた真が全員に声をかけると陽介が上ずり強張った声で返す。それから真と陽介が前衛を歩き、次に命と雪子が真人中、千枝をしんがり置いて彼らは進んでいく。前方からの攻撃はどんな相手にもワイルド能力で柔軟に立ち回れる真と相手を瞬発力でかき回せる陽介で対応し雪子が魔術で援護、バックアタックを千枝が警戒。最後に命は真で判断しきれない状況に陥った時に瞬間的な司令官の役割を果たすため真ん中を位置どっていた。そして一本道を進んでいった先にあつたドアの前に立つとクマが口を開く。

「およう… この気配……もしかしてカンジクンか?……」

クマの言葉を聞いた全員が互いに頷きあい、真がそつとドアを開け、警戒しながらドアを開けて中に入る。

「ウツホツホ、これはこれは。ご注目ありがとうございます!」

その先にいたのはビシッビシッビシッという擬音が似合う勢いで無駄に滑らかに様々なポーズングを取る白ふんどし姿の細マツチョモとい完二。しかしその瞳は金色に輝いている、つまり彼はシャドウ完二なのだが全員軽くドン引きしている。

「さあ、ついに潜入しちやった、ボク完二。あ・や・し・い、熱帯天国からお送りしていまあす」

無駄に甘つたるい声、そして可愛らしく見せているつもりなのだろうウインク。そのコンボを見た高校男子二人の背筋に寒気が走る。

「イザナギツ!!」

「ジライヤアツ!!」

「ちよ、待った待った! まだ早いって!」

そして二人は同時にペルソナを召喚。それを見た千枝が慌てて二人を静止させる。

「つるせえっ!! 早くどうにかしねえとこっちはもたねえんだよっ!

精神的につ！」

千枝の静止に対して陽介が怒鳴り、真も今までやせ我慢していたようだがもう限界が来たらしくどこか据わった目で完二のシャドウを睨み付けている。

「お、おとおお落ち着いてって！ ほら命さんは冷静だよ！」

千枝はそう言うって未だペルソナ召喚用の銃型召喚器をホルスターに収めている命を指す。がそこで彼女は彼の手がホルスター近くをさまよひ、さらにその手がぶるぶる震えている事、そして彼の口からぼそぼそと何か呟かれているのに気づいてしまった。

「大丈夫あれはシャドウ大丈夫あれはシャドウ大丈夫あれはシャドウ大丈夫あれはシャドウ大丈夫あれはシャドウ……シャドウだからぶつ殺しても平気……」

「のわああああああつ既に暴走しかけていらつしやる!? 落ち着いてください命さん!!」

その目に光は宿っておらず、怪しい笑みを浮かべながらまるで呪詛のようにぶつぶつと呟いている命を見た千枝は今度は命を押さえ始めた。

「まだ素敵な出合いはありません。このアツい霧のせいなんでしょうか？ 汗から立ち上る湯気みたいで、んううん、ムネが、あ、ピンピン、しちやいますねえ〜」

自分の身体を抱きしめてぶるぶるつと震え、胸筋をピクピクツと動かしてそう言う完二のシャドウ。その背景にテロップが浮かび上がった。

—— 女人禁制！ 突・入!? 愛の汗だく熱帯天国！——

「ヤバい……これはヤバい……色んな意味で……」

うめき声を上げながら陽介はそう呟いて数歩引き、彼を守るようにジライヤが前に出る。しかしやはり陽介の心の海より生まれし存在のためか陽介と同じく腰が引けていた。

「確か、雪子さん時もノリとしては、こんな感じだったよね……」

「うそ……こ、こんなじゃないよ……」

次に千枝が引きつった笑みでそう呟くと雪子は最初強く否定しつ

つどこか落ち込んだ様子でそう漏らす。と、どこからともなくざわざわとした声が聞こえだした。

「またこの声……てかこの声、前より騒がしくなってるない？」

「……この声、もしかして……」

千枝の眩きに陽介が気づいたと同時に平静を取り戻したのか神妙な表情を見せる。

「被害者しかいないのに、誰の声なのか不思議だったけど……外で見てる連中って事か？」

「『番組』流れてることの反響ってこと？ うわ、今の完二君見られてんだとしたら、こりゃ余計な伝説が増えそうだね……」

「こいつは恐らくシャドウなんだが、外の奴らにはそんなこと分からないよな……」

陽介の言葉を聞いた千枝が苦々しげな表情を見せると真も眩く、とまた声がざわざわと騒ぎ出した。

「シャドウたち、めっさ騒いでるクマ！」

「ボクが本当に求めるモノ……見つかるんでしょうか、んふっ」

クマの言葉の後、完二のシャドウはやはりにやけた笑みに媚びたような甘い声でそう言う。

「それでは、更なる愛の高みを目指して、もつと奥まで、突・入！

張り切ってえく……行くぜ、コラアアアッ！」

そして突入という言葉に合わせて腰を振ったかと思うといきなり拳をぶうんと大きく振ってドスの効いた声で叫び、踵を返すと部屋の奥に駆け出す。

「っ、皆！ シャドウだ！ 戦闘態勢!!」

その直後命が叫び、同時に部屋の奥から完二のシャドウと入れ替わるように二体の警官シャドウがやってくる。それを見た命、真、陽介、千枝は構えを取った。

「あんなのと一緒、あんなのと一緒、あんなのと一緒……」

その後ろで雪子はまだシヨックなのかぶつぶつと眩いている、が突然顔を上げるとキツとした表情を見せた。

「そんなの、なんか悔しい……コノハナサクヤ!!」

雪子の怒りに燃えたような表情で召喚されたコノハナサクヤ。彼女の放った炎が一気に二体の警官シヤドウを焼き尽くした。するとコノハナサクヤが不思議な輝きを放ちだす。

「……あ、レベルアップ？　少しは強くなれたかな？」

「うわ……瞬殺」

呑気な雪子の眩きを聞きながら、命は一瞬で焼き尽くされた警官シヤドウ二体に僅かな同情の意を見せた。それから彼らは先に進んで階段を見つけ出し、四階に上がる。その時どこからともなく声が聞こえてきた。

「「こんな所で引き下がるのは男じゃねえ！　見てろよ！　巽完二の男気、見せてやるぜ！」

「この声は……」

「完二みたいだ。まだ無事のような……」

どこからともなく聞こえてきた声に陽介が声を漏らすと真が安心したような声色で呟く。

「「グオオオオオンッ!!」」

すると突然聞こえてきた咆哮。それと共に首輪の先に鎖で繋がった巨大な鉄球を着けた虎が三体と弓矢を手に持った天使のようなシヤドウが二体姿を現す。

「来るぞ……頼む、ラクシャーサ!!　キルラツシユ！」

真は声を上げて戦闘開始を示した後ペルソナを呼び出し、二刀を持った鬼神を呼び出す。その鬼人は光を纏った二刀を手に虎に飛びかかり、右手の刀で斬撃をくわせた後繋げる目にも止まらぬ連続斬りで虎シヤドウの一体を斬り崩す。

「オルフェウス！　突撃!!」

次にかかってくる虎に命が呼び出したオルフェウスが光を纏った豎琴で殴りかかる。それを虎は右腕をひっかくように振り下ろし、豎琴にぶつけるとそのままの勢いで腕を振り下ろし豎琴を押し返した。

「押し負けた!?　っっ！」

命は押し負けたことに声を上げた後その虎の左腕での追撃を咄嗟にオルフェウスとシンクロしとんぼ返りでかわす。

「トモエ!!」

そこにトモエがきつきオルフェウスの攻撃を押し返した虎に突っ込んでいき、今度はトモエの振り上げた薙刀と虎の振り下ろした右腕がぶつかり合う。そして僅かな拮抗の後トモエの薙刀が押し勝ち、その瞬間トモエの薙刀が光を放つ。

「脳天落とし!!!」

千枝の叫びと同時に虎の脳天に突き刺さる薙刀、その一撃が虎を殴り崩す。

「コノハナサクヤ! アギラオ!!」

残る一体の虎はコノハナサクヤの放ったアギの上位術——アギラオが焼き尽くす。

「遅えよテメエら! ジライヤ! ソニックパンチ!!」

さらに天使シャドウ二体はジライヤが放つ光を纏った手裏剣にあえなく斬り倒された。

「ふう。これで全滅だな……先輩、先を急ぎましょう!」

「あ、うん……」

真は辺りを確認してからそう言い、命はこくと頷くと先を歩く彼らの後を走っていった。そして彼らは階段を見つけると五階へと上がる。その時またどこからともなく声が聞こえてきた。

「お……男には……男には、プライドつてもんがあるんだよ……へっ、俺はぜってえ負けねえぞ……」

「先輩……」

聞こえてくる完二の声は弱々しくなっており、真は心配そうに命に声をかける。

「僕達に出来ることは……一刻も速く、でも確実に異君を助けるために全力を尽くす……これだけだ」

「はい……皆、急ごう!」

命は静かにそう言い、真はその言葉に頷くと全員に急ごうと言って走り出した。そして彼らは一気に六階への階段を見つけると六階に駆け上がる。

「ハイ! そののナイスなボーイ!」

そこに突然またもやどこからともなく今度は完二のシャドウの聲が聞こえてきた。

「キミもボクと同じく更なる高みを目指しているのかい？」

「ナイスなボーイ？……お、俺達の事か!? 違う！ 俺達は完二を助けに来たんだ！」

「ヒューー！ ボクを求めてるって？ そうなのかい？ 嬉しいこと言ってくれるじゃない！」

完二のシャドウの言葉を聞いた陽介は少し黙ってその言葉の対象が自分達であることに気付くと否定。しかしその言葉の意味をそう捉えた完二のシャドウはむしろ嬉しそうな声を出していた。

「それじゃあ、とびっきりのモノを用意しなきゃ！ 次に会うのが、とても楽しみだ！ じゃあ、またね！」

その言葉を最後に完二のシャドウの声は聞こえなくなり、陽介は顔を青ざめさせる。

「な、なあ……二手に分かれねえ？ 天城と里中はこのまま特攻、俺と椎宮と命さんは帰宅、とか……」

「却下」

「アホな事言っていないで行くよー」

苦笑い、というか引きつった笑みを浮かべながらの陽介の言葉を命が却下し、千枝が陽介の耳を掴んで引つ張って行く。その後を残る三人もついて行き、彼らはそのまま七階まで上がる。

「ムハーー！ 何か知らんけどこの階の熱気はスゴイクマー！」

「確かに……汗が酷くなってきた……」

「皆大丈夫か？ ガンバレー！」

クマの言葉通りこの階の熱気は今までのものと比べて凄まじく、真はメガネを外すと額の汗を拭う。そして彼らは進んでいくとどうやらこの階は上から見ると真達が上がってきた場所を中心として左右対称となった長方形型の道になっており、そこにただ一つ存在するドアの向こうから異常な熱気が漂ってきていた。

「……いぐぞ」

「うんー！」

「…………お、おう」

真の号令に女子二人が力強く頷き、陽介も及び腰になりながら頷く。それを見てから真はドアを開けた。

「ようこそ、男の世界へ！」

そこにいたのは完二のシャドウ。その横には長身な完二でさえ膝程度の高さしかない巨人のレスラーみたいな恰好をしたシャドウが立っていた。

「突然のナイスボーイの参入で会場もヒートアップ！ ナイスカミングなボーイとの出会いを祝し、今宵は特別なステージを用意しました！」

「ま…………まさか…………」

完二のシャドウは実況のような声を上げ、陽介は顔を青ざめさせる。真もまさかといわんばかりに頬を引きつかせていた。

「時間無制限一本勝負！ 果たして最後に立ってるのはどちらだ？」

さあ、熱き血潮をぶちまけておくれ！」

その宣言と同時に動き出す巨人シャドウ。まず初めにその内に力を溜め込み、ただでさえ筋骨隆々な身体の筋肉がさらに盛り上がった。

「オルフェウス！ タルンダ！」

「エリゴール！ スクンダ！」

まず命の呼び出したオルフェウスが相手の力を抑え、さらにエリゴールの威嚇が巨人の動きを遅くさせる。

「とりやーっ！」

そこに千枝が飛び回し蹴りで攻撃する、とその瞬間巨人の身体が発光した。

「ぶぐっ?!?!?」

その直後、悲鳴を上げたのは千枝だった。まるでカウンターパンチを食らったような衝撃、それが彼女のお腹に襲い掛かる。巨人は全く動いていない。

「物理反射…………いや、カウンタか!?!」

千枝の様子から相手のスキルを分析した命の声が響く。カウンタ、

文字通り相手の物理攻撃をそのまま相手に跳ね返すスキル。つまり千枝はシャドウを一撃で砕く蹴りをそのまま自分で受けてしまった。それは飛び蹴りという技の関係上空中に浮かんでいた千枝の華奢な身体を吹っ飛ばすには十分だった。

「あぐっ！ げほっ……」

「くそ！ 花村！ すぐに里中の回復とフォローに回れ！」

「了解！」

「それと下手に物理攻撃を放つと跳ね返されかねない！ 魔術攻撃をメインに戦うんだ！」

「はいっ！」

地面に叩きつけられた千枝は苦悶の表情でお腹を押さえながら地面を転がり、真はすぐに天城に指示を出し、命も戦い方のアドバイスを送る。

「オルフェウス！ アギー！」

「ジャックフロスト！ ブフーラ！」

「コノハナサクヤ！ アギラオ！」

オルフェウスが竖琴をかき鳴らして炎を操り、ジャックフロストが床から氷の槍を突き出させ、コノハナサクヤがオルフェウスが操るものより数段上の量の炎を撒き散らす。

「ジライヤ！ デイア！」

そして陽介も千枝の元に辿り着くとジライヤに回復魔法——デアを指示し、千枝のお腹の傷を癒す。そしてその光が消えると陽介は千枝に手を伸ばした。

「大丈夫か、里中？ 立てるか？」

「あ、うん。なんとか……ありがと」

陽介の言葉に千枝は頷いて彼の手を取り、立ち上がると照れくさそうにお礼を言い、巨人シャドウを見る。

「さーつと。あたしに恥かかせてくれたお礼をしないとね……いくよ、トモエ！」

「その意気だ！ いくぜ、ジライヤ！」

そして二人は笑みを浮かべながら戦線に復帰した。

「グオオオオオオオオツ!!!」

巨人シャドウは炎や氷を耐えながら一番手近にいる真に突進、丸太のように太い腕を振りかぶった。

「チエンジ！ スライム！」

咄嗟にペルソナを入れ替え、剣を前に出して防御の構えを取る。その直後巨人シャドウの拳が真に激突。しかし不思議な力がその拳の激突を防ぎ、真は剣を思いっきり振るって拳を押し返した。

「今だ！ 総攻撃!!」

「オルフェウス！ アギ！」

「ジライヤ！ ガル！」

「トモエ！ ブフ！」

「コノハナサクヤ！ アギラオ！」

真の声を聞いた四人が一気に所有するペルソナの魔法で連続攻撃。しかし巨人シャドウはそれをも耐えきって見せ、魔法の雨が止むと同時に千枝を睨み付け、巨体を生かしたタツクルを仕掛けてくる。

「里中！ 逃げろ!!」

「千枝!!」

さつきを思い出したのか陽介と雪子が声を上げる。が千枝はにやあつと笑みを見せるとなんと巨人シャドウに突っ込んでいく。そして二人が激突する直前……千枝の身体が発光する。

「グオオオオオオツ!？」

その直後巨人シャドウの巨体が吹っ飛ばされる。まるで自分のタツクルの衝撃をそのまま自分が受けたかのように。そして空中を吹っ飛び地面に叩きつけられた巨人シャドウの身体が霧散していき、それを見た千枝はしてやったりといわんばかりの笑みを見せる。

「残念でした。トモエもカウンタのスキルを持つてたのよ。これであたしに恥かかせてくれたお礼はしたからね！」

そして消えていく巨人シャドウを見ながらびしっと指を突き付け、巨人シャドウは静かに消えていった。それを見送ると千枝は振り返って元気な笑みを浮かべながらVサインを見せる。

「へへっ、やったね!」

「確かにやったことはやったんだけど。カウンタ狙いで敵に突っ込むのは正直無謀だと言わざるを得ないね」

「あ、やっぱりですか?……はい、今度から気をつけます……」

千枝の嬉しそうなVサインに対し命は冷静に彼女の戦い方を批評し、千枝は自覚してたのか素直に謝る。と雪子がぺたりとへたり込んだ。

「っ、疲れた……」

「ああ。さっきの戦いで結構体力使ったからな……今日はこの辺で引き上げよう」

「え!? で、でも完二君……」

「無茶をしてミイラ取りがミイラになったら意味がない……心配だけど、今日はこの辺で引き上げた方がいい」

雪子の呟きに真が言うのと千枝が心配そうに呟き、次に命がそう言うのと真も頷いた。

「また明日。確実に助け出そう」

「ああ……そういや明日ってテストの結果発表の日じゃなかったっけ?……」

真の言葉に陽介も神妙な表情で頷くが直後そう呟き、千枝は少し黙るとがくつとうずくまる。

「ああ、それを考えただけで気が重くなってきた……今日はもう帰ろっ」

さつきまでの焦りようはどこへやら帰ろうと言いだす始末。それに命は苦笑を漏らすとダンジョンからの脱出アイテムであるカエレールを取り出した。

「じゃあ、いくよ……転移! 脱衣所!!」

命は全員に転移を始めると伝え、カエレールを掲げるとこのダンジョンの入り口である脱衣所の光景を思い浮かべながら呪文を唱え、彼らの姿が白い光に包まれる。それから白い光が消えた後彼らの目の前には脱衣所の光景が広がっており、彼らはそこから広場に戻るとテレビから出ていく。

「それじゃ、俺晩飯の材料買ってから帰ります」

「ああ、んじや俺ついてくよ。今日は惣菜が安いぜ〜」

真と陽介はそう言って食品売り場に歩いて行き、残る三人はジュネスから出ていくと千枝は二人の方を向く。

「じゃあ、あたしも帰るね。また明日頑張ろう」

「うん」

「ああ。今日はすっかり休んで、明日疲れたから休みます〜なんて言わないようにね。学校も」

「うぐ……しょうがない、覚悟決めよう……」

千枝の言葉に雪子は笑顔で頷き、命も悪戯っぽく笑ってそう言う。千枝はうぐつと唸ってため息をつく。帰路につく。それを見送ってから命は雪子の方を見た。

「さて。天城さんって帰りはバス？」

「は、はい。あ、でも……この時間だと少しどこかで時間潰さない……」

命の言葉に雪子は頷いた後携帯の時計を見てそう呟く。それに命はふふつと笑った。

「じゃあ、バイクに乗せてあげるから一緒に帰ろう」

「え、ええっ!?!」

その言葉に雪子はびつくりしたように声を上げ、彼女の頬が少し赤く染まる。

「どうせ帰る場所是一緒でしょ？ 天城さん置いて先に帰るのもなんだし、こんな事もあるうかとヘルメットは二人分常備してるからね。遠慮しないでいいよ」

「あ……じゃ、じゃあ、お言葉に甘えます……」

命の優しげに微笑みながらの言葉に雪子のはにかむように微笑み、顔を伏せてそう呟くように返す。それに命はオッケーと返すと「バイク出してくるからちよつと待ってて」と言ってから駐輪場に歩いて行き、数分でバイクを持ってくると雪子にヘルメットを渡し、彼女がヘルメットをしっかりと被って後ろに乗るのを確認すると命もハンドルの握った。

「じゃ、しつかり掴まってね。振り落とされたら危険だから」

「は、はいっ」

命の言葉に雪子は少し上ずった声で返し、命の背中に抱き付くように掴まる。それから命もバイクを走らせ、ジュネスを後にした。

それから旅館に辿り着くと命は雪子と別れ、部屋に戻る。そして部屋の障子を閉めると真剣な表情を見せた。彼の頭に思い浮かぶのは今回の戦い。

「……オルフェウス一体じゃ、そろそろ限界なのかな……」

命はそんな弱音のようなものを呟く。しかし次に彼は首を横に振った。

「いや、でも僕はやらなきゃいけないんだ……皆を守るために……」

命は自分に言い聞かせるように呟く。しかしその言葉は消えそうなほどに弱々しかった。

第十八話 男達の告白

ユニバース、奇跡を奇跡でなくさせる究極の力。それを使えば人類全てに死を与える概念を封印することすら可能。しかし、それには一人の人間の命が封印の楔として必要だった。

「……………」

だから僕は封印の楔となることを選んだ。それで皆を、仲間を、恋人を、妹を守るのなら安いくらいだ。目の前に存在するのは人間が死に触れようとする欲求——エレボス、それが僕の封印している存在——ニユクスに触れてしまえば人間は滅びる。だから僕は負けるわけにはいかない。それが今の僕の使命。

「メギドラオンでございませす」

突如そこに響く美しい声。それと同時に具現した白い光の爆発がエレボスを吹き飛ばす。

「……………」

それを見た僕は驚いたように声を失う。いや、既に声を出せる状態ではないこともあるのだが。白い光の爆発を生んだ女性——正確にはそれを放つ事が出来るペルソナを使役した存在は銀髪をおかっぱというべき髪型にしており、群青色の衣服に身をまとった姿はエレベーターガールを想像させた——は僕に見覚えのある相手だった。

「……………」

エリザベス、何故ここに？ そう問いかけたがやはり声が出ない。すると女性——エリザベスはエレボスを吹き飛ばした後暢気に僕の方を向いて頭を下げてきた。

「お久しぶりにございませす、命様。貴方様を助けに参りました」

「……………」

助けに？ でも僕はここでニユクスを封印しないと……僕がそう考えている間にエレボスが立ち上がり、自身に背を向けて隙だらけのエリザベス目掛けて襲い掛かる。それを見た命は危ないと叫びたかったが、やはり声が出なかった。

「タナトス！」

また聞こえてきた別の声、それと共にエレボスに襲い掛かった存在に僕は息を呑む思いだった。そしてエレボスに襲い掛かった存在——タナトスを使役している少年はエレボスに対峙した後顔のみ振り返ってにこつと人当たりの良い笑みを僕に見せてくる。

「久しぶり、命君。君を助けに来たよ」

「……………」

甘いマスクに後ろに撫で付けた髪、口元を隠す長いマフラー。ニユクスとなつたはずの親友——望月綾時だ。それに僕はもはや何も言えないどころか、驚きのあまり思考停止状態になつてしまつていた。すると二人はそれぞれが呼び出したペルソナ——綾時はタナトスに剣で接近戦を、エリザベスはピクシーにメギドラオンによる援護兼砲撃を指示しているようだ——にエレボスを任せて僕の方に歩き寄ってくる。

「命様、貴方様を助けに参りました」

「遅くなってゴメンね？」

そんなことより、なんで君達がここに？ 特に綾時はニユクス・アバターとなつて僕達と戦い、ニユクスに取り込まれてしまつたはず……………。

「あはは、それは話せば長いけどこちらのエリザベスさんのおかげだよ。ま、言つちやえば禁則事項？」

「私は貴方様を助けるため、あらゆる手段を尽くしました。そして、ようやく貴方に会えた……………」

綾時もエリザベスも嬉しそうに、どこか泣きそうな顔を浮かべている。そこまでして僕を助けたかつたんだろう。でも、僕が封印の楔としての役目を果たさなければ人間は滅びてしまう。僕を助ける＝結局僕含めた人間全てが死んでしまうだけだ。すると僕のそんな思考を読んだのかエリザベスは笑みを見せる。

「心配ありません。私達は貴方様を助け、同時に封印も維持する手段を手に入れております」

「うん、任せといてよ」

エリザベスに続いて綾時もそう言う。その二人の微笑みに僕はつ

い安心してしまい、ピクシーとタナトスがエレボスを足止めしている隙にエリザベスが封印されている僕に手を伸ばし、同時に僕の身体を暖かい感覚が満たしていく。

「う……………」

突如喉の奥から声が漏れ、それから少しずつ身体感覚が戻ってくるのが分かる。と封印が解けたためニユクスが少しずつ封印の扉から出てこようとし始めた。

「エリザベスさん、お願いします！」

「あつ……………」

響く綾時の声。それと同時に綾時は僕を突き飛ばして、さっきまで僕がいた封印の場所に飛び込む。そしてエリザベスは一枚のカードを砕いた。それと同時に綾時の命が封印を満たしていく……………これは、さっきまでの僕と同じ……………人の命を楔にしたニユクスの封印だ。

「りよ、じ……………ど、いう……………と……………」

久しぶりに声を出したせいかなかなり途切れ途切れになってしまう。すると綾時はにこり、と笑みを見せた。同時に僕の頭の中に綾時の声が響いてくる。

（心配ないよ。僕はもう一人の人間さ、でも、かつてニユクスだった存在としてニユクスは僕が責任持って封印する）

「そ、な……………こと……………ふざ……………る、な……………」

声が途切れ途切れになってしまふのは久しぶりに声を出すせいだけじゃない、頬を流れるものがそれを示している。しかし綾時はにこりとした笑みを崩していなかった。

（君は君の未来を生きるべきだ。大丈夫、これが僕の選んだ道……………君は、結生ちゃんやゆかりちゃん、たくさんの仲間達の未来を守るために封印の楔の道を選んだ。僕も、君の未来を守るために、この道を選んだ……………それだけさ）

綾時はそこまで言うとは違う慈愛の笑みを命に見せた。

（だって、僕は君の事が好きだからね。でも、結生ちゃんやゆかりちゃんを泣かせたりしたら、許さないからね？）

その言葉を最後に綾時の声が聞こえなくなり、命はうつむく。新たな封印を終えたエリザベスはふうと息を吐くと、エレボスが再び前進してきたのを見て命の腕を掴んだ。

「命様、ここは危険です。離れましょう！」

「綾時、綾時……」

エリザベスはそう言うのと細身の女性とは思えない力で命を引っ張り、命は呆然とした表情でその声を漏らした後、遠ざかっていく封印の楔——親友望月綾時に手を伸ばす。

「りょうじーっ!!」

命は目を開けて声を上げる。しかしその手の先には誰もおらず、その手はただ虚空を掴むのみ。命はぜえぜえと荒い息をしながら起きると辺りを見回す。ここは天城屋旅館、現在僕がマヨナカテレビの調査のために宿泊している旅館だ。

「……ゆめ、か……」

命はぼんやりと呟く。寝間着は汗でぐっしよりと濡れており、手も汗でぐっしよりと濡れさらに僅かにぶるぶると震えていた。命はその手をぎゅつと握りしめ、目を閉じると震えが止まるように必死で祈り始めた。

それから時間が過ぎて昼。真達は昼食を食べた後雑談をして過ごしている。と教室に一人の女子が駆け込んできた。

「試験結果張り出されたよー！」

「ああ、来たか……」

その言葉に陽介が絶望の声を漏らし、真が苦笑交じりに立ち上がる。

「んじゃ、見に行くか」

「おう……」

真の言葉に陽介も頷き、二人は教室を出ていくと下駄箱前の掲示板に張り出されている試験結果に目を通しに行く。

「おっ！ 来た来た！ おーい椎宮！」

「ん？ どうした、一条？」

「とぼけんなって。お前すげえじゃねえかよ、ほら！」
「え？ どれどれ？」

掲示板に来た途端真と同じ運動部に所属している一条が手を振りながら真を呼び、真が首を傾げながら問い返すと一条はにししと笑いながらそう言って試験結果を見るように促し、陽介が試験結果を覗き込む。

「うえっ!? つ、椎宮!? お前、学年一位じゃねえか!？」
「ホントか!？」

その言葉に真本人もぎよつとしたように叫び、試験結果の一番上を見る。そこにはたしかに「椎宮真」の名が書かれていた。

「うおーっ、なんか自分の事みてーに嬉しいな、これ!」

「なんだよ椎宮ー、お前勉強出来るんだったら俺達に教えてくれたつてよかったじゃねえかー!」

「あ、いや、俺も驚いてるんだが……まあ確かに月光……前の学校じゃいつもトップ10ぐらいは入ってたけど……」

「てつめ、さりげなく自慢かこのこの!」

陽介は自分の事を喜んでいるかのように喜び、一条は真に後ろから抱き付きながらそう言う。その後も教室からの帰り道に文化部仲間の綾音から尊敬の目で見られたり色々あって真は教室に戻っていった。

それから時間が過ぎて放課後。真は席を立つと陽介達に目をやる。

「じゃあ、今日もジュネス集合。俺はちよつと用事があるから少し遅れるけど。出来るだけ早く行く」

「おう」

「オツケー」

「分かった」

真の言葉に三人は頷いて返し、四人は一旦解散。真は商店街の方に行くところにも誰にも知られず存在する青いドア——ベルベツトルムへの入口へと向かった。今回の戦いに備えて新たなペルソナを呼び出す必要がある。そう思いながら彼は青いドアに手をやった。

「……あれ?」

真はベルベツトルームに入ると声を漏らす。そこはいつもと様子が違った。イゴールとマリーの姿が見当たらず、マーガレットが本を読んで過ごしているだけだ。

「あら……」

マーガレットは真がやってきたのに気づくと驚いたように声を漏らす。

「これは、失礼しました。何かご用でしょうか？ あ……と言つても、今ちようど主が席を外しております。急ぎでなければ、また時を改めてお越しくくださると……」

マーガレットはそこまで言うとは静かに本に目を落とした後ふるふると首を横に振る。

「いえ、違いますね。ここはお客様の定めと不可分の部屋……この部屋でまったく無意味な事は起こらない……この出会いにも、何か意味があるのでしよう」

マーガレットはそう呟くと本を閉じ、再び真の方を向く。

「ようこそ、ベルベツトルームへ……一度言ってみたかったのよね。主以外の出迎えを受けた人なんて、もしかしたら初めてじゃないかしら」

マーガレットはそこまで言うといつくすつと笑う。

「ベルベツトルームは、招かれる客人の心と不可分……景色も、住人の姿も、その時々々の客人の数や定めに応じて、主を選ばれ、変わりゆく……少し話しましょう？ そうするべき、という気がするのよ」

そう言うマーガレットの言葉と視線にはいつもの違い、優しげな情が感じ取れる、真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、“女帝”のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。

「貴方は既に、いくつか『コミュニケーション』を持つているようね。出会いを重ね、言葉を重ね……お互いの理解が深まることで、絆は固まるもの……でも時に心は、千の言葉よりも、たった一つの行動によって大きく震えるわ。貴方に分かるかしら？」

「確かに。ただ口先だけで言うよりも行動で示した方が人の心に訴えるって聞いたことがあるな」

「フフ……今日の出会いは意味は、もしかするとその辺りなのかも知れないわね」

マーガレットはそう言い、何か考える様子でうつむく。

「決めたわ」

「……何をですか？」

「貴方の辿る定めのお糸に、この私も絡めて頂戴……そこから『絆』という新しい糸が紡がれるかも知れない。私には知りたいたいことがあって、最初に迎えた客人が貴方……そして、主不在の今日の出会……私達は、きつとどちらも特別なもの……お互いにとってね」

「そりやどうも」

マーガレットの微笑みながらの言葉に真は肩をすくめて返し、マーガレットは目を細めながらまた口を開いた。

「貴方の事をもっと知りたいわ。まずは、その類まれなペルソナ能力から見せてもらおうかしら」

「……というと？」

「そうね……」

マーガレットの言葉に真が首を傾げて返すと彼女はまた少し考えるように目を伏せる。

「『スクカジャ』を持って『イツポンドンダタラ』を私に見せて頂戴」

「スクカジャを持つイツポンドンダタラ？」

「千の言葉より、一つの行動に、心は震える……もう忘れたのかしら？」

「……なるほど。ペルソナ合体か」

マーガレットの出した命題に真は首を傾げるが少しすると思いついたように頷く。ペルソナ合体、それはワールド能力の持ついくつものペルソナを操る能力によって呼び出せるペルソナ同士をイゴールが合体させ、新たな姿とすること。しかしそれはただ使わないペルソナを素材とするだけではなくその素材となったペルソナが持っているスキルを継承させることも可能。つまり彼女はペルソナ合体によってスクカジヤのスキルを継承したイツポンドアラを作り出せ、と言っているわけだ。

「ふふ、楽しみが一つ増えたわね。それじゃ、ごきげんよう」

「ああ。でもイゴールさんにも用はあるし、少し時間を置いてまたすぐに来るよ」

マーガレットのお別れの挨拶に真もそう返し、それと共に彼の目の前を闇が覆っていった。

それから気づいた時には彼の意識は商店街に戻ってきており、真は少し考える様子で佇むとその場を後にし、ジュネスに走っていった。

それから真達は家電売り場からテレビに入る。真は広場へとやってくるど皆にすまなそうな表情を見せた。

「悪い、まだちよつと用事があるから……」

真はそう言うど広場の隅にある青いドアの前に立ち、ベルベットルームへと入っていく。

「あー、また入ってった……」

「不思議だよね。あたし達からしたらただ突っ立ってるだけなのに、いつの間にか新しいペルソナ持つてるんだもん」

陽介と千枝はただ広場の隅で棒立ちしている真を見ながらそう話し合う。それから数分程度で真はベルベットルームから戻り、真の「行こう」という言葉を聞くと皆も頷いて完二がいるはずのダンジョンであるサウナ入り口である脱衣所へと向かい、そこから前回上がった一番上の階までワープ、ダンジョンの攻略を開始した。彼らが少しサウナを進んでいくと出てきたのはピンク色のローブをまとったかのような姿をした、背中にまるで巨大な両手がついているような魔術

師のシャドウが三体。その姿を見た真は自らの右手にカードを具現し、握りつぶした。

「浄化しろ、パワー！ マハンマ!!」

彼が呼び出したのは能天使^{パワァー}、それが槍を振るうと同時に放たれた光の波動が一瞬で魔術師のシャドウを浄化し消滅させた。

「すっげー！ 一瞬じゃねえか!?!」

「今回のためにバイト代はたいてペルソナを多く合体させたからな。今日、確実に完二を助ける!」

「「おー!」」

陽介が歓声を上げると真は自信満々にそう言つて士気を上げるためにそう言い、それに陽介、千枝、雪子が右腕を振り上げて返す。命もそれに頷くが念のため、といわんばかりの冷静な目で真を見る。

「新たなペルソナを手に入れたのはいいけど、そのせいでいつもの戦い方が出来なかった。なんて間抜けな真似はやめてよね?」

「はい、分かっています」

命の言葉に真も頷いて返し、命はならよしというように頷くと辺りを見回した。

「じゃあ急ごう。ただでさえ一日この蒸し暑い中なんだからね……二年前の戦いじゃタルタロスに一週間閉じ込められて平気だった例もあるけど……今回に当てはめるにはこのことタルタロスは相違点がありすぎるから参考にもならないからね。急いで、でも慌てるな……だよ」

命の言葉に高校生四人組は頷いて返し、彼らは遅い来るシャドウをなぎ倒しながらサウナを進んでいく。そして十階にまで上がった時だった。

「……カンジの声、聞こえないクマ……」

「あ、ああ……」

クマが心配そうな声で呟き、陽介も歯切れ悪く返す。先ほど本物の完二なのか完二のシャドウなのか分からないが「ここは最高だ……」という声を彼らは聞いており、陽介はついに完二が目覚めてしまった可能性を危惧してしまっていた。

「よっしやー！　ここは一つ、全力で探してみるクマ!!」

とクマは気合を入れて鼻をクンクンし始め、突然ピカーンという擬音が出そうなほどに目を開く。

「キターー！　この感じ、クマ復活かも！　カンジ、きつと近くにいるクマー！」

「よし。皆、急ぐぞー！」

クマの言葉を聞いた真は真剣な表情で言い、一気に走り出した。そして一行はさらに上の階層まで辿り着き、そのすぐ先にあるドアを見るとクマが声を出す。

「おっ！　カンジの感じ！　この向こうにいるクマ！」

「覚悟はいいな？　行くぞ!!」

「ええい、もうどうにでもなりやがれっ!!」

クマの言葉の直後真が一番に飛び出し、さらに陽介も自棄になったようにその後につき二人の男子が扉を開けて全員一緒に中に飛び込んだ。

「いた!!」

「完二!!」

部屋に飛び込んで一番に千枝が完二を見つけ、陽介が彼を呼ぶ。

「お……俺あ……」

「もうやめようよ、嘘つくの。人を騙すのも、自分を騙すのも、嫌いだろ？　やりたいこと、やりたいって言って何が悪い？」

しかし完二にその声は届いておらず、完二の歯切れの悪い声に対し完二のシャドウはまるで子供を諭すような、しかしやはり媚びた口調でそう言う。

「それと……これとは……」

『ボクはキミの『やりたいこと』だよ』

「違うー！」

完二はうつむき、曖昧な言葉を漏らす。完二のシャドウの言葉について否定の声を出してしまう。

「駄目！　完二君!!」

それを聞いた雪子が咄嗟に彼に走り寄ろうとする。

「邪魔はさせないよ！ ふんっ!!」

しかしそれを見た完二のシャドウがそう叫び、何故かポーリングを決める。その瞬間部屋の隅にあった浴槽らしきものから何か水っぽいものが溢れ、床に流れていく。

「なにこれ？ こんなもんで足止め……っとうわあっ!!」

「ち、千枝!! きゃあっ!!」

それを見た千枝は首を傾げながら足を踏み出すが突然その液体が滑ってバランスを崩し、そつちを見た雪子も同じくバランスを崩して二人は尻もちをつき、ぬるぬるとした液体が身体につく。

「……な、何コレ……気持ち悪っ……ん、んう……」

「お、起き上がれない……ひゃんっ」

千枝と雪子が悲鳴じみた呻き声を漏らす。起き上ろうとしても滑ってしまい、再び嫌な感触のする床に倒れてしまう。

「こ、これ、まさかローション!? 芸人じゃあるまいし!」

命は謎の液体の正体を見抜き声を上げる。ちなみに陽介は「つつ、椎宮! 何か録画出来るもん持ってねえかつ!」と真に問いかけ、真はどこか悔しそうに「な、ないっ!」と叫んでいた。

「女は嫌いだ……」

まあそんなことが起きている前で完二のシャドウは突然そう呟き、その言葉に完二が反応して顔を上げる。

「偉そうで、我がままで、怒れば泣く、陰口は言う、チクる、試す、化ける……気持ち悪いモノみたいにボクを見て、変人、変人つてき……で、笑いながらこう言うんだ」

完二のシャドウはそこまで言うで一息つく。

「『裁縫好きなんて気持ち悪い』 絵を描くなんて似合わない……『男のくせに』……『男のくせに』……『男のくせに』……」

段々と強くなっていく口調、それはどこか悩んでいるような声にも聞こえる。

「男ってなんだ? 男らしいってなんなんだ? 女は怖いよなあ……」

「こっつ、怖くなんかねえ!」

「男がいい……」

完二のシャドウの言葉に完二は相手を脅かすような口調で返すが完二のシャドウは止まらない。

「男のくせにつて、言わないしな。そうさ、男がいい……」

「ざっ……けんな！ テメエ、ひとと同じ顔してフザけやがって！」

「……キミはボク……ボクはキミだよ……わかってるだろ？……」
「違うー！」

完二のシャドウのにやけながらの言葉を完二は咄嗟に拒絶する。

「違う、違う!!」

その言葉を聞いた完二のシャドウのにやけ顔に、若干違うものが混じった。

「テメエみてえのが……俺なもんかよ!!」

瞬間、完二のシャドウの口の端が妖しく吊り上がる。そして完二のシャドウを黒い影が取り囲み始めた。

「ふふ……ふふうふふ……ボクはキミ、キミさアア!!」

その言葉の直後衝撃が走り、完二は吹き飛ばされると床にしたたかに叩き付けられ気絶する。さつきまで完二のシャドウがいた場所にいる異形は胴体が左右で白黒に色分けされた、やはりふんどし姿の巨人。その白黒で色分けされた丁度真ん中に咲き乱れた薔薇に囲まれる形で完二が生えており、その巨人の腕は丸から矢印が生えたような形の、雄を意味するシンボルを武器のように担いでいる。

「我は影……真なる我……ボクは自分に正直なんだよ……だからさ、邪魔なモンには消えてもらうよー！」

「こんなのが、完二君の本音だなんて……」

「こんなの本音じゃねえ！ タチ悪く暴走しちまつてるだけだ!!」

「ああー 皆、行くぞ!!」

完二のシャドウの言葉になんとかローション地獄から抜け出した雪子が呆然と呟くとそれを陽介が否定し、真もそれに頷くと声を上げる。それに全員が頷き、千枝と雪子が動いた。

「トモエー！」

「コノハナサクヤー！」

召喚と同時に突っ込んでいくトモエ、しかしその前に完二のシャドウと同じく左右で白黒に色分けされたマツチヨな巨人が立ちはだかった。

「邪魔だー!! トモエ! ブフ!!」

千枝は声を上げてトモエに指示、トモエは薙刀から氷の弾丸を巨人に叩き込むが巨人はなんとそれを自身の胸板で受け止めると歓喜の表情を見せた。

「コノハナサクヤ! アギラオ!!」

そこにコノハナサクヤが炎の弾丸で追撃をかけるが、それはもう一体の白黒マツチヨ巨人がやはり厚い胸板で受け止めこちらもまた歓喜の表情を見せる。

「なっ、何あれ!?!」

「かつ、火炎無効に氷結無効クマ!」

「厄介な! 来い、ラクシャーサ!!」

「だったらあんなの無視すりゃいいだけだろうが! いけっ、ジライヤ!!」

千枝の悲鳴にクマが声を上げ、次に真が鬼神を、陽介が忍者を呼び出してそれぞれのペルソナとシンクロ。二体の白黒巨人を翻弄するように動き回り、二人は互いにアイコンタクトで同時に完二のシャドウ本体に突っ込む。

「ウフフ、可愛いコ♪」

しかし白黒巨人の一体——タフガイはその動きを見切っていたかのように二人を抱きしめ、頬擦りする。

「うぶっ!?!」

直後男子二人は気持ち悪そうな声を漏らし、がくつと膝をつく。とその意味を理解した命が顔を青ざめさせた。

「まさか、シンクロの感覚共有にこんな罠がっ!?!」

「こ、心が折れたクマー! センセー! ヨースケー! しっかりー!!」

命の解説の後クマが二人に駆け寄って揺り起こそうとする。

「ま、まっずい! 男性陣が命さん除いてやられた!」

「た、大変！……えっ!?」

その光景を見た千枝が焦った声を上げ、雪子も彼らを回復しようとか何かスキルがないかコノハナサクヤに精神を集中しようとする。その瞬間もう一体の白黒巨人——ナイスガイが雪子の横に立ち、彼女を見下ろす。

「……はんっ、下品な赤！」

「はあっ!?」

そしてナイスガイの鼻を鳴らしながらの言葉に雪子は分かりやすいぐらいに眉を吊り上げる。その次にナイスガイは千枝の方に目を向けた。

「え? な、なに?……」

自分を舐めまわすように見てくるナイスガイに千枝は不安げに身体を縮ませる。とナイスガイはまるで憐れむような視線を向けながら彼女の肩にぽんぽんと手を置いた。

「な……なんか言えやあーっ!!!」

「ぶ、ぶぶぶブチギレクマー!?!」

それに千枝も怒髪天。男性陣は感覚共有したペルソナがマッチョに抱きしめられている事で心を折られ、女性陣は馬鹿にされた事で理性を失いブチギレてしまった。

「くっ、オルフェウス！」

戦線崩壊寸前、その状況に命は召喚器を引き抜いてこめかみに押し当て引き金を引く。そして呼び出されたオルフェウスも豎琴を構え、命も腰の剣を引き抜いた。

「いけ、オルフェウス！」

命の言葉と共に突っ込んでいくオルフェウスはラクシャーサとジライヤを抱きしめているため無防備なタフガイを殴り飛ばして二体のペルソナを救出。タフガイと接近戦を繰り広げる。

「せやあっ!!」

「オウツ!?!」

同時に命もナイスガイに斬りかかり、連続攻撃を見舞う。ペルソナとのシンクロによる高度動作制御状態での戦闘と並行して自分も戦

闘、簡単に言えば一つの脳で二つの身体に別々の動作を同時に行わせているのと同義の状態。それを命は行っていた。

「これで、終わりだよッ！」
「っ!？」

突如聞こえてきた声に命は反応しつつも向かってくるナイスガイを反射的に蹴り飛ばす。完二のシャドウは両手に雄のシンボルを振り上げ、思いつきり地面に叩き付けると同時に床を裂いて雷が走る。真も陽介も無防備、雪子や千枝も頭に血が上って防御を考えられる状況ではない。しかし……

「異君っ!!!」

何よりも、ペルソナを持たない普通の人間である完二がああ電撃を受けたら間違いなく命がない。命はそれを直感的に判断し、走り出す。と同時にオルフェウスも豎琴をかき鳴らして光——タルンダー——を放ち、電撃の勢いを抑える。そして命は完二の前に立つと両腕を広げ、まるで壁のように立ちはだかった。

「があああああああつ!!!」

完二をかばうのに精いっぱい自分の防御なんて一切考えず無防備に電撃を受けてしまう。そしてオルフェウスの弱点である属性も……電撃だ。

「ああ！ 自らの身を挺してかばうなんて、なんて男らしいっ!!!」

完二のシャドウが歓声を上げる。しかし命はそれを耳に入れる余裕すらなく、床に崩れ落ちる。その意識も闇に落ちていった。

「……」

その直後、やつと体調が回復した真は立ち上がるが目の前で命が床に崩れ落ちたのを見ると目を剥き、状態が平常に戻った陽介、千枝、雪子、そしてクマも目を見開く。

「せ……せんぱああああああいつ!!!」

そして真の悲鳴がその場を響き渡った。

「ベルベルベルベルベット……」

突然聞こえてくる不思議な歌。歌自体に聞き覚えはないが懐かしいその美声に闇に落ちていた命の意識が少しずつ覚醒していく。

「わーがーあるじながいはな……」

命はゆつくりと目を開く、とその顔を何者かが上から覗き込んだ。

「おはようございます、命様」

そう言つてにこりと微笑を見せる銀髪の女性、群青色の衣服に身を包んだ姿はエレベーターガールとでも称しようか。顔立ちも美人の部類に入る。その顔をぼんやりと見ていた命はやがてぎよつとしたように目を見開いて起き上がった。

「エ、エリザベス!？」

そして女性——エリザベスを見ながら素っ頓狂な声を上げる。さつきまで自分の後頭部にあった柔らかい感触なんて思い出す暇もない。

「お久しぶりでございます。命様」

「あ、ああ、久しぶり……いや、そんなことより……」

命はエリザベスの挨拶に挨拶を返した後辺りを見回す。二年前に見慣れたエレベーターのような部屋、しかしエレベーターの上昇は止まっておりしかし出入り口はどこにもなかった。ちなみにエリザベスは二年前に命がいつも腰掛けていた椅子があつた場所に置かれていたソファの端つこに座っていた。

「ここは、ベルベットルーム？ でもイゴールがいない……皆は？」

「僕はどうなったんだ？ 異君のシャドウは？」

「貴方様は異様をかばつてシャドウの電撃をその身に受けて意識を失われ、そのあなたの精神を私がお呼び申し上げました。この場所は、かつての貴方様のベルベットルームと申し上げればよろしいでしょうか？」

命の矢継ぎ早な質問にエリザベスはそう答えていく。

「まだ戦いは終わってないはずだ。じつとしちやいられない……とに

かく帰らなきや」

命はそう言うのとベルベットルームを歩き回る。しかし帰り道がどこにもなかった。

「今の貴方では彼らの足手まといです」

そしてエリザベスはぴしやりとそう言い放ち、それに命の身体がびくりと跳ね上がる。

「もちろん、貴方様の経験に裏打ちされたアドバイスなどは彼らの支えとなるでしょう。しかし、お気づきになっっているはずですよ……本来、ワイルド能力は数々のペルソナを使役する能力。オルフェウスしか使えない貴方様ではその真の力は発揮できず、さらに言えばオルフェウスの力だけではここから先、いえ、この戦いを切り抜けることすら難しいでしょう……分かっていないはずですよ」

エリザベスはそう言うのと命の目を真っ直ぐに見る。

「あなたは封印の楔となるためユニバースを使役し、奇跡を起こした。ですが、その代償は安いものではありません。現在封印の楔は望月様が代行なさっておりますが、ユニバースの代償により貴方はペルソナ能力を失うまでではなくともその大部分が消えてしまっている……言ってしまうえばあなたがかつて持っていたペルソナを操る力は既にほぼ失われているも同義ですよ」

「……」

エリザベスの言葉に命は彼女から視線を外して頭をかき、ため息をついた。

「……分かってるよ」

そしてそう呟き、次ににこつと微笑んで見せた。

「でも、だからと言って諦めるわけにもいかないからね。エリザベス、早く僕を解放して……いざとなったらオルフェウスしか使えなくとも……」

命はそう言いながら真剣な目で召喚器を構える。とエリザベスはふっと微笑んだ。

「戦いなどしなくても、貴方様を元の場に送り届けるつもりにございませす」

「…………え？」

エリザベスの言葉に命は驚いたように声を漏らす、とエリザベスはイタズラっぽく笑った。

「もちろん、愛しい貴方様と共にここで永遠に二人きりというのも捨てがたいのですが。そのような事をして貴方様に嫌われたくもありませんから」

「そりゃどーも」

「ですが、このまま返してまたすぐに死にかけられても困ります」

エリザベスの言葉に命はおどけたように笑って返すが、彼女は続けてさらっとそう言い、それと同時に彼女の両手に巨大な本が現れる。それを見た命が目を見開いた。

「ペルソナ全書!?!」

「貴方様は当時使役していたペルソナの力こそほとんど失っております。ですが、このペルソナ全書に保存されている貴方様のペルソナの力さえあれば、多数のペルソナを使役することは可能です。今回はサービスということで一体、無料でお引き渡しいたしましょう」

「分かった。なら——」

エリザベスはそう言って手袋をしているものの細く美しい人差し指を立ててそう言い、それを聞いた命は自身の持つ最強のペルソナを呼び出そうと試みる。しかしその前にエリザベスが先ほど立てた指が命の口に触れ、つい命は口をつぐんでしまう。

「人のお話は最後まで聞きなさい。と教わりませんでしたでしょうか？」

エリザベスは悪いことをした子供をたしなめるお姉さんのような口調と柔らかい表情を見せながらそう言い、それについて命は僅かに赤くなってしまう。そしてエリザベスは指を命から離すとペルソナ全書にその指を触れさせる。

「先ほどから再三申し上げているように、今の貴方様のペルソナ能力は相当弱まっております。今の貴方様ではあの戦いの時に使役していたペルソナを扱うことなど不可能でしょう」

「…………つまり、相当のレベルダウンってわけですか？」

「噛み砕いて言えばそうなります」

エリザベスの言葉を聞いた命はあとため息をついてそう言い、それにエリザベスも頷いてペルソナ全書を彼に渡す。

「では、ペルソナをお選びください」

「……」

命はエリザベスからペルソナ全書を受け取り、ページを開く。そして最初にニユクスとの決戦の時に使役したペルソナ達のページを見るがそれらは全てペルソナの姿がシルエツトでしか見えず、今の彼では扱えないことを示している。そしてペルソナの姿が見えるページを探していくと嘆息した。

「ほんと、結構ランクが下がりますね……まあ、オルフェウスしか使えない状況からいったら大きな進歩になるか」

しかし命はふっと笑みを見せると一つのページのペルソナを指差す。

「では、こいつでお願いします」

「はい」

命の言葉にエリザベスは頷き、全書に手をかざす。そして全書から柔らかい光が発された後それが粒子となって命を包み込み、彼は自身の中の新たな存在に笑みを見せる。

「ありがとう、エリザベス」

「いえ。ですが、これ以降は有料となりますのでお気をつけを……もしここに来なければ、眠る際に私のことを思い出してください」

「はいはい」

命の言葉にエリザベスはふっと微笑みながらそう言い、それに命が頷くと共に彼の視界を闇が覆っていった。

「先輩っ！ 先輩っ!!」

「くそ、こいつら！ 邪魔だっ!!」

真が声を上げ、陽介が突っ込もうとするがナイスガイとタフガイが壁となり、敵ながら凄まじいコンビネーションで真達四人を押し返す。

「さあーこれでトドメだよっ!!!」

響き渡る完二のシャドウの声、完二のシャドウは先ほどと同じく、雄のシンボルを高く掲げていた。

「止めろおおおおおっ!!!」

響く真の絶叫、しかし完二のシャドウはその悲鳴をむしろ心地よさそうに聞きながら雄のシンボルを振り下ろし、電撃が再び床を裂いて倒れている命と完二に向かっていく。

「……!?!」

次の瞬間、彼らは目を見開く。さっきまで意識を失ったかのように倒れていた命が突然ゆらりと立ち上がったのだ。そして彼は完二のシャドウと目の前から迫りくる電撃を眺め始めた。

「もう遅いよおっ!!!」

しかし完二のシャドウは勝利を確信したように叫び、命は静かに右腕を左肩の方に持っていく。

『!?!』

直後、命が腕を振ると同時に電撃が霧散した。

「バ、バ、バ、バババ、バカなっ?!?!」

完二のシャドウはまさかと狼狽えはじめ、命は右腕を下ろすと右手で静かに召喚器を握り、自分のこめかみへと持っていく。ガアンツという銃声と同時に響き渡るガラスが割れるような音、そして彼の背後にペルソナが具現する。

「な……」

「な、なん……」

「う、嘘……」

「なんなの……あれ……」

真が、陽介が、千枝が、雪子が絶句する。命が召喚したのは彼が今まで操っていたペルソナ——オルフェウスではない。その姿はオル

フェウスのような人形然とした姿ではなく人間そのもの。真っ白い服に身を包み古代人のような髪型、手には一本の剣を握っていた。命はその存在が具現すると同時、その名を呼ぶ。

「吼えろ……タケミカズチ!!!」

その名は雷神——タケミカズチ。彼の呼び声に答えるかのようにタケミカズチも右手の剣を振り上げて雄々しい声を上げ、剣をぶうんと一振りする。

「し、死にぞこないがああああつ!!!」

完二のシャドウはそんな声を上げて雄のシンボルを振り上げ、まるで鈍器のように振り下ろす。命はそれを見てくつくつと笑うと無造作に右手を掲げ、それに合わせるようにタケミカズチも右手を掲げ、その右手に持つ剣で完二のシャドウが右腕に握るシンボルを受け止める。

「遅い」

命が右腕を振るい、タケミカズチも同じ動作でシンボルを弾き返す。そして命が手首を返して再び自分の顔の前に防ぐように持つていき、タケミカズチも同じように動いて今度は左手で振り下ろしてきてもう一本のシンボルを受け止める。そしてまた押し返して直後向かってくる右手のシンボルをまた防いで押し返して今度は左手のシンボルを受け止めて押し返す……命がやっていることは簡単に言えばその繰り返し。しかし二本のシンボルを鈍器のようにさまざまな角度から休みなく乱打してくる攻撃を全て確実に、完璧にタケミカズチを操りその剣一本で捌ききっていた。

「せ……先輩！　先輩!!　先輩!!!」

真は泣きそうな嬉しそうな声を上げ、それを聞いた命はやれやれと首を振ると振り向いて呆れたような目を見せた。しかしその間も迫りくる完二のシャドウの攻撃は全て彼とシンクロしているタケミカズチが防いでいる。

「ほらどうしたの？　今日のために全力を尽くしたんでしょ？　だってそんな雑魚二体、余裕で倒してくれないと……これから先ずーっと、僕の足手まといだよ?」

挑発するような悪戯っぽい笑顔での言葉。それを聞いた真は少しぼかんとした。後たしかにと頷いた。

「花村！ 里中！ 一度体勢を立て直す！ こいつらぶつとぼして距離取らせろ!!」

「おうっ!!!」

「「な、なんっ!? ひゃーっ!?」」

真の指示を聞いた陽介と千枝がジライヤとトモエの力で、ジライヤの疾風とトモエの蹴りでナイスガイとタフガイを吹っ飛ばす。そして真はふうーつと息を吐くと刀を構え直した。

「仕切り直しだ！ いくぞ!!」

「「おうっ!!!」」

真の叫びに陽介、千枝、雪子も声を上げて返した。

「天城！ 里中！ マハラギとマハブフ！」

「分かった！ コノハナサクヤ、マハラギ！」

「オツケー！ トモエ、マハブフ！」

真の指示を聞いた女子二人は冷静にペルソナに指示をし、直後炎と氷がタフガイとナイスガイに放たれる。と右にいたタフガイはアギの炎に怯み、左にいたナイスガイはブフの氷に怯んだ。

「右の方は俺と天城で潰す！」

「おう！ 左は俺と里中に任せろ！」

真の言葉を聞き、以心伝心といわんばかりに陽介はそう言ってナイスガイに突っ込み、千枝もその後にくると真は陽介達の方に向かおうとした。タフガイの前に立ち塞がり、右手に握った刀をタフガイに突きつけその刀の鋭さに負けない眼光で睨みつけた。

「ここは通さん」

「いや〜ん、かっこいい〜」

真の言葉を聞いたタフガイがそう叫んで真を抱きしめるように両手を広げて突っ込もうとする、がその真の左手には一枚のカードが握りしめられていた。

「ラクシャーサ!!!」

カードを砕き、現れる鬼神。と同時に鬼神が振り下ろした二本の剣

をタフガイは両手で受け止め握りしめた。

「うふふふ、この程度でアタシを倒せると——」

「思っちゃいけないよ……今だ、天城！」

「コノハナサクヤ！ アギラオ!!」

「——え？ ひゃあああああつ!!」

タフガイは不敵な笑みを浮かべてそう言おうとするがそれを遮って真が叫び、雪子が指示を出すと同時にコノハナサクヤの放つ炎がタフガイを襲い吹っ飛ばす。しかしその炎は僅かにラクシャーサの背中も焦がした。

「あつちつ！」

「だ、大丈夫!? 椎宮君!」

突如背中に走る焼けるような痛み、それに真が思わず声を出し雪子も心配そうな声を出す。

「心配いらない！ ラクシャーサ、チャージ!!」

雪子の心配そうな声に対し突き放すようにそう言ってラクシャーサに指示を出し、ラクシャーサは身体に力を込める。

「グ……オオオオオオツ!!」

と、タフガイもそう男らしい雄叫びを上げて右手に光を灯らせる。それを見た真も真正面から受けて立つとばかりに睨み、ラクシャーサも頷くと二刀に光を纏わせる。そして二人が同時に飛び出した。

「ソニックパンチ!!」

「キルラッシュユ!!」

タフガイの筋骨隆々な右腕をそのまま使ったとばかりの真つ直ぐな鉄拳。それをラクシャーサは二刀をクロスさせての斬り上げで打ち上げ、続けて連続斬りでタフガイを切り刻む。

「ぬうつ!!」

しかし負けてなるものかとタフガイは左腕のフックをラクシャーサの脇腹に当てようとする。しかしそれをいつの間にか突っ込んできていた真が刀を使って受け止めていた。その瞬間真の身体が発光し、タフガイのフックがそのまま衝撃を跳ね返されたように弾かれる。

「コノハナサクヤ！ アギラオ!!」

「こいつで終わりだ!!」

さらに雪子の指示と共に放たれた炎弾がタフガイを貫き、トドメとばかりに真が刀を大上段に構えて勢いよく振り下ろし、タフガイを真つ二つに斬り裂いた。

「オ、オオオオオオツ……」

タフガイは半身になりながらも左腕を既に自分に背中を向けている真の方に伸ばしていく。しかし真が刀を背中の中鞘にしまっパチンという音と共にタフガイの身体は霧散し消えていった。

「ジライヤ、ソニックパンチ！」

陽介の言葉と共にジライヤの両手の手裏剣に光が灯り、二本の手裏剣は猛スピードで放たれナイスガイの身体を傷つける。

「ふんっ！」

しかしナイスガイがポーズジングを取ると共にナイスガイの身体が光に包まれ、その傷は一瞬で塞がった。

「あーもうっ！ さっきからしっこいつ！」

攻撃してもその分回復される。それに千枝は地団駄を踏み、トモエを見上げる。

「こうなったら回復以上のダメージを与えるまでよ！ トモエ、あたしにタルカジャ！」

「ふんっ！」

千枝の言葉を聞いたトモエは力を与えるような舞いを踊り、千枝に力を与える。とそれを見たナイスガイも受けて立つとばかりのポーズジングを取り、力を込めた。

「花村、援護して！」

「おう！ ジライヤ、里中にスクカジャ！」

千枝の指示に陽介も頷いてジライヤに指示を出し、ジライヤが印を組むと身軽になった千枝はナイスガイに突進する。

「ジライヤ、ガル！」

「とりやあつ!!」

花村の指示と共に放たれる疾風がナイスガイの動きを僅かに止め、そこに千枝が渾身のドロップキックを叩き込む。がナイスガイはそれに耐えきると両拳に光を灯らせる。

「やばっ……」

それを見た千枝はすぐに逃げようとするが間に合わず、少しでも防ごうと両手を前に出す。

「マカジャマー！」

そこに響く陽介の声、それと共にナイスガイを緑色の光が包みそう思うとナイスガイの両拳から光が消えた。

「考えてみりゃ簡単なこった！ 相手が色んなスキルを使うってんならそのスキルを封じちまえばいいだろうが！ いけ、里中!!」

「オツケー!!」

陽介の言葉に千枝は力強く頷き、トモエを見上げる。とトモエはナイスガイに突進しながらその薙刀に光を纏わせた。

「いっけー!! アサルトダイブ!!」

千枝の叫びと同時にトモエの薙刀から放たれる一撃。それがナイスガイを一撃で霧散させた。

「花村、大丈夫か!？」

「千枝っ！」

「あたしは大丈夫っ！」

「さあ、急いで命さんの援護に向かおうぜ！」

そこに彼らと同時にタフガイを倒した真と雪子が合流し、千枝はにしつと元気に笑ってサムズアップを見せると陽介もそう言い、真もああと頷くと現在完二のシャドウと一対一を行っている命の方に走り出した。

「くっ、このっ！」

「ほらほらどうしたの？ 太刀筋が乱れてきたよ？」

四方八方から鈍器代わりのシンボルを叩き付ける完二のシャドウに対し己のペルソナタケミカズチを操りシンボルを弾き返す命。一

見すれば命の防戦一方、しかしシンボルを叩き付ける完二のシャドウは苛立っている心情を表すように軌道が無茶苦茶で対する命は余裕の笑みさえ浮かべている。もはや防戦一方の状況すら何かの演技にしか見えなかった。

「この、キルラツシュ!!!」

シンボルに光を纏わせ、一気に連撃を叩き込もうと振り上げる。それを見上げながら命はふっと笑みを見せた。

「遅いってば……タケミカズチ、月影!!!」

「ぎゃあっ!!!」

命の言葉と同時に放たれるのはまるで満月を思わせる軌道で斬るタケミカズチの剣。それが完二のシャドウを捉え完二のシャドウはしりもちをつくよう倒れこむ。

「先輩!」

「やあ、やっと来たね。遅かったじゃない」

「うっそー……巽完二のシャドウをたった一人で圧倒しちまつてる……」

そこにやってきた真の言葉に命はあつさりと返し、次に今の状況を見た陽介の言葉を聞くと飄々とした笑みを見せた。

「いやいやーけっこーぎりぎりだったよー」

「よく言いますよ、んな余裕な笑みをして……」

「じゃ、そういうわけで僕は一旦完二君を連れて少し後ろに下がったから。あとよろしく」

「え、えっ!?!」

命はあつさりそう言うのと完二をおぶって後ろに下がっていき、千枝が慌てたように命と完二のシャドウを交互に見る。

「くっ……もうこうはいかないよっ!」

「先輩に頼ってばかりなんてわけにはいかない!　いくぞ!!」

「二おうっ!!!」

起き上り、シンボルを担ぎ直した完二のシャドウに対し真は刀を抜きながら叫び、陽介達三人もそれぞれの武器を構えながら声を上げた。

「来い、イザナギ！ ジオ!!」

右手でカードを握り潰し、呼び出す人格の鎧は彼の相棒とも言える存在イザナギ。その咆哮と共に雷が完二のシャドウに降り注ぐ。

「ああ〜っんっ!」

しかしそれを受けた完二のシャドウはむしろ悦ぶような歓声を上げ、それを見たクマがげつと声を出す。

「電撃吸収クマ！ 電撃攻撃しても悦ばせるだけクマよ!」

「なに!? くそ、すまん!」

「気にすんなって! いくぜジライヤ! ガル!!」

「コノハナサクヤ、アギラオ!」

「トモエ! アサルトダイブ!!」

クマの判断を聞いた真はすまなそうに声を漏らし、それに陽介が気にするなよと返して自身のペルソナに攻撃を指示、雪子と千枝も続くと真もああと頷いた。

「イザナギ、スラツシュ!!」

剣に光を纏い、その剣を振り下ろすイザナギ。しかし完二のシャドウはそれを右手のシンボルで受け止めた。

「ふん、さっきの男に比べればこんなもの……」

「チェンジ!」

「えっ!」

完二のシャドウはイザナギを押し返そうとするがその前に真の声が響き、イザナギの姿が消える。そして真の手に新たなカードが握られた。

「ティーターニア! ガルーラ!!」

「ぐうううっ!」

「よっしやここだ! ソニックパンチ!!」

「くらえーっ!!」

現れたのは妖精の女王、彼女が手をかざすと疾風が竜巻となって完二のシャドウを襲い、その隙を突いた陽介がジライヤに指示を出して高速の手裏剣を放ち、千枝がトモエと共に突進し飛び蹴りを二重に叩

き込む。

「ぐ、このっ！ 狂信の雷!!」

「二「あああああああっ!!!」二」

しかし完二のシャドウはそれらに耐えながら彼らに電撃を見舞う。しかし雪子はすぐに立ち上がり、自分の前に現れたカードを砕いた。

「コノハナサクヤ、メディア!!」

カードを砕きながら指示を出し、コノハナサクヤが空中で舞うと真達に癒しの光が降り注ぎ、その傷を癒す。それから次に立ち上がったのは千枝だ。

「トモエ、ブフ！」

「くっ、冷たっ!?!」

その言葉と共にトモエが石突を相手に向けた薙刀から放たれるのは氷の弾丸、それに完二のシャドウが怯んでいる隙に真は電撃を受けてダウンしている陽介の方に走る。

「ニギミタマ、リパトラー！」

呼び出されるのは四魂の一つ和魂。ニギミタマその発された光が陽介を包み、真はその光が消えてから陽介に手を出す。

「立てるか?」

「あ、ああ。悪い」

真の差し出してきた手を陽介はすまなそうに取って立ち上がる。

「お待たせ。完二君を避難させてきたよ」

「先輩」

そこに命が合流し、真は彼に声をかけ命はへらへらと笑って後ろを指す。

「いやーあのぬるぬるを拭き取るのに苦労したよ」

「……………ほんとだ」

命の言葉に男子二人はそう漏らす。後ろのローション地獄を命はこういう魔法を使ったのか綺麗に掃除し、その真ん中に完二を寝かせていた。

「さて、そろそろトドメといこうかな。真君、手を貸して！」

「はい！ 花村、あいつの動きを止めてくれ」

「おうー」

命の言葉に真は頷いた後陽介に指示を出し、陽介も頷くと完二のシャドウの方に走っていく。そして命もニヤリと笑って完二のシャドウを睨んだ。

「さあ、真君。あいつに向かつて一撃雷を叩き込むよ！」

「え!? いや、あいつは雷を吸収する能力があるみたいで……」

「心配いらないよ！ 僕を信じてどでかい一発よろしく！」

「は……はい！ 来い、イザナギ！」

命は見る者全てに安心感を与えるような微笑みを見せており、真も頷くとイザナギを呼び出す。

「来い、ジライヤ！ くらいやがれ、ガルーラ!!」

「トモエ、ブフ！」

「コノハナサクヤ！ アギラオ!!」

「ぐううううっ!?!」

そこに陽介、千枝、雪子の魔術三連コンボが決まり、完二のシャドウが怯んで動きが止まる。真はそれを見て三本の赤い剣が描かれているカードを構えた。

「スキルカード、発動！」

真が叫ぶと同時にカードに書かれている剣が光を放ち始め、その光がイザナギを覆っていく。それと同時に命も召喚器を指で回転させながら頭に近づけ、こめかみに銃口を突き付ける。

「来い、我が心の海より生み出されし雷の神！ タケミカズチ!!」

銃声とガラスが割れるような音が重なり、彼の心の内より雷タケミカズチ神が降臨、タケミカズチは完二のシャドウを威圧感溢れる目で睨み付けた。

「喝ッ!!!」

「ひっ!?!」

タケミカズチの口から放たれた一喝、それに完二のシャドウが怯んだ瞬間真と命は完二のシャドウを睨み付け、その口から声を轟かせる。

「『ジオンガ!!!』」

二人の言葉が轟き、雷鳴が轟き完二のシャドウに二つの雷が降り注ぐ。と完二のシャドウはニヤアと笑ってそれを歓迎するように両腕を広げた。

「忘れたのかい!? 僕に電撃は……え?」

完二のシャドウはそこまで言っただけで気づく。電撃を吸収する快感が感じられない、いや、むしろ……

「ギャアアアアアアアアアアアツ!?!」

その身体を走るのは痛みと痺れ、予想してなかったダメージに完二のシャドウは悲鳴を上げ、悲鳴を聞いた命はふつと笑う。

「電撃ガードキル。僅かな時間、相手の雷に対する耐性全てを無効化する。さっきの一喝がそれだったんだよ。ついでに僕の電撃はブースト付きで威力割高。ま、遠慮しないでよ」

命が静かに呟き、完二のシャドウはふらりとふらつく。

「イザナギ、スラッシュ!!!」

そこに間髪入れずに真が叫び、イザナギは光を纏った刀を構えて一気に完二のシャドウに突進、横一文字に斬り裂いた。

「イ、イクウウウウウウツ!!!」

斬撃を受けた完二のシャドウは歓声のような悲鳴のような叫び声を上げて倒れ、その巨人の身体がどんどん黒ずみ消滅していく。

「終わった……」

真はふうと息を吐き、イザナギが消滅。と陽介達が足早に走り寄ってきた。

「み、命さん! 身体大丈夫なんですか!?!」

「つていうかさっきのペルソナなんなんですか!?! オルフエウスじゃないし!」

「も、もしかして命さんも椎宮君と同じ、ペルソナがいくつも使えるんですか!?!」

「そ、そういうばそうだった! 先輩、一体どういう!?!」

陽介、千枝、雪子と続いた質問に真も思い出したように問いかけ、命は苦笑する。

「えーっと、言っただけじゃなかったっけ? 真君には言った覚えあるんだけど

ど僕も真君と同じワイルド能力……皆！ 後ろ向いて!!」

「!!?!」

命は苦笑を漏らしながら説明しようとするがふと彼らの後ろを見ると目を見開き、真剣な目つきになって叫ぶ。それに真達も振り向くと、完二のシャドウが巨人の身体が消滅したにも関わらず立ち上がったのだ。

「情熱的なアプローチだなあ……三人とも……素敵なカレになってくれそうだ……」

「……は？……！ や、やめろつてー！ そんなんじゃねー!!」

完二のシャドウの言葉に陽介は呆けた声で一瞬呆けると気づいたように叫ぶ。

「誰でもいい……ボクを受け入れて……ボクを受け入れてよおおおっ!」

「わああああつ！ ちよつ、無理矢理はやめてー!」

そう叫びながら突進してくる完二のシャドウ、それに陽介は後ずさりながら叫ぶが直後、彼の横を別の影がすり抜けた。

「やめろつつてんだろおっ!」

そんな怒声と共に響くのは鈍い打撃音。目の前にはさつき殴られたのだから完二のシャドウが仰向けに倒れ、さつき殴つたのだから完二のシャドウと全く同じ外見の少年が立っている光景があった。

「完二……君？……」

「たく、情けねえぜ……こんなんが、俺ン中に居るかと思うとよ……」

「……完二、お前……」

雪子の眩きの後少年——異完二が目の前の少年——彼のシャドウに向けてそう言い、その言葉を聞いた陽介が声を漏らす。と完二はふんと鼻を鳴らした。

「知ってたんだよ……テメエみてえのが、俺ん中に居ることくらいな！ 男だ女だつてんじゃねえ……拒絶されんのが怖くて、ビビッてよ……自分から嫌われようとしているチキン野郎だ!」

完二は真達の前で宣言。そして自身のシャドウを睨み付けた。

「……オラ、立てよ。俺と同じツラ下げてんだ……ちつとボコられた

くらいで沈むほど、ヤワじやねえだろ？」

その言葉を聞いた完二のシャドウはゆっくりと立ち上がり、その金色の目で完二を見る。それに完二は臆することなく、真っ直ぐにその瞳を見返した。

「テメエが俺だなんてこたあ、とつくに知ってんだよ……テメエは俺で、俺はテメエだよ……クソツタレが！」

相手を脅かすような低い口調で悪態のように叫ぶ。しかしそれを聞いたもう一人の完二が柔らかく笑って頷くとその姿が光に包まれる。直後、完二の目の前にシャドウとは少し違う異形——ペルソナが姿を現した。黒い身体に骸骨が描かれている巨人。その左手には得物なのだろうか雷を模したシンボルが握られている。それを完二は黙って見上げていた。

「……タケミカズチ」

彼がそう呼ぶと同時に、タケミカズチはタロットカードとなって完二の前にゆっくりと降下。そのカードにはローマ数字の「IV」、皇帝を意味する数字が書かれていた。そのカードは完二の目の前で落ちると光の粒子となって彼を包み込んだ。その光が消えた瞬間、完二は膝を突く。

「う……くそ……」

そしてそのままばかりと倒れ伏せ、真達が慌てて彼に走り寄る。

「完二君！」

「く……」

「外に運ぼう！」

千枝の声に完二は唸り声でしか返すことが出来ず、命はそう叫んでカエレールを取り出すと頭上に掲げ、「転移！」と叫ぶ。それと共に彼らは光に包まれ、この場から消えていった。

第十九話 The life in May

5月20日。完二を救出した翌日、授業も終わった後真は少し伸びをしながら商店街を歩いていった。そして書店で本を買った後バス停近くに行くとふと足を止め、携帯電話を取り出した。

「今日は学童保育のアルバイトが出来る日だったか……行くか」

真はそう呟き、ちようど来た高台行きのバスに乗って学童保育へと向かった。

それから学童保育の制服に着替えて学童保育のアルバイトをしている時だった。

「ままごとなんか、やってらんねーよ！　かくれんぼやろうぜ、お前がオニ！」

元気な少年——勇太はそう言って走り出し、真はやれやれと息を吐く。子供に振り回されつつ世話をしていた。

「椎宮君！　ほとんどお迎えも済んだから、今日は帰っていいよ」

「そうですか。じゃあお先に失礼します」

「ええ。じゃ、またよろしくね」

「はい。お疲れ様でした」

それから夕方になり、学童の先生がそう言うと言くと真もこくと頷きアルバイトの代金を貰うと学童の制服から学校の制服に着替え、手荷物を持って帰っていく。その途中、鮫川土手に差し掛かった時だった。

「……………」

真はふと足を止める。土手にある休憩所、そこに見覚えのある女性が座っている。

（たしか、勇太の母親だったか？…………）

そう記憶の中から探り出し、真はそっちに足を進める。

「こんにちは」

「あら……この間の、学童の方でしたっけ？」

真が声をかけると勇太の母親は少し首を傾げながらそう呟き、時計に目をやる。

「やだ、こんな時間？ 私、ずっと座ってたのね……」

「具合でも悪いんでしょうか？」

「……あ、いいえ、別に」

時間を忘れてた事に真は相手が具合でも悪いのかと思ったのか心配そうに尋ね、勇太の母親は首を横に振った後ふふつと笑う。

「先生って、高校生よね？ なんだか大人びてるのね……」

「褒め言葉として受け取っておきますね」

勇太の母親の言葉に真は肩をすくめて返し、彼女はうつむいた。

「向かってたのよ、ちゃんと……迎えに行こうと思って……でもなんだか、疲れちゃって……足が止まっちゃった……いつも、あの子のこう考えると……」

勇太の母親はそう言っただけ息をつく。

「……先生も聞いた？ 勇太と私、血が繋がってないって……」

「……ええ。勇太君の父親の連れ子だよ」

「そう。半年前から、一緒に住んで……まだ半年というか、もう半年というか……全然、会話なんてないままよ。今は夫がいないから……ふふ……暗い家で、ずっと二人」

勇太の母親はどこか暗い表情でそう呟く。

「……俺からは何とも言えませんが、ゆつくり頑張るしかないと思いますよ」

「あ……ごめんなさい。急にこんなこと……」

「いえ」

「……でも、嬉しい。聞いてくれて、話してくれて……ふふ、こんなキャッチボールさえ、普段なかなか無いから」

そう言う勇太の母親は弱々しく笑っており、その笑みに真も優しい笑みを返す。真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、「節制」のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。すると勇太の母親は笑みを浮かべながら口を開いた。

「私、南絵里です。あの子ともども、よろしくね」

「椎宮真です。こちらこそよろしく」

勇太の母親——絵里が名乗るのに合わせて真も自身の名を名乗る。と絵里は慌てたように立ち上がった。

「つて、そうだ。迎えに行くんだった。それじゃ、どうも……」

絵里はそう言うとう学童保育の方に歩いて行き、真もそれを見送つてから家の方に歩いて行った。そして家に帰った後菜々子と少し話をしてから、彼は今日は眠りについた。

それから次の日、学校が終わった後真は商店街へとやってくる。

(とりあえず、四六商店で薬とかの買い出しでも……)

「あ、来た」

真が商店街で行うべきことを考えながら歩いていると突然そんな女の子の声が聞こえ、彼はつい足を止めてしまう。

「マリー」

「あのね、今日は行きたいところある。連れてって」

足を止め、少女——マリーの名を呼ぶ真にマリーはそうやって真の手を掴む。

「え？ いや、俺ちよつと買い物——」

「……つまんない。ばかきらいさいていけちんぼ」

買い出しをしたから断ろうとするがその瞬間マリーは頬を膨らませながら悪態をまくしたて、ジト目に上目遣いで真を見る。

「……少しでよければ付き合うよ」

それを見た真はマリーから目を逸らして諦めたようにそう漏らす。

「うん、行こー」

それを聞いた瞬間マリーは嬉しそうに頬をほころばせ、真から手を

離れたと思うと今度は彼の右腕に自分の腕を巻き付かせる。

「早く行きたい、早く。ね、連れてってよ」

「つ、連れてってってマリーお前、引っ張るな……」

マリーは連れてってって言いながら真を引っ張っていき、マリーも腕を引っ張られて歩きづらそうにしながらマリーに引っ張られていった。それからやってくるのは以前二人でやってきた後陽介も合流した惣菜大学。

「やっぱり硬いし噛めないし途中で冷める。すごく美味しい」

マリーは仏頂面に見えながらも僅かに笑顔を覗かせる表情でビフテキ串を食べ、真もそれを見ながらビフテキ串に噛り付いた。そして食事を終えたらマリーをベルベットルームに送ろうと思ったもののマリーはそれから今度はジュネスに行きたいと言い出して結局夕暮れまで付き合わされてしまい、ようやくマリーをベルベットルームに送った頃には疲労困憊、薬を買う気力もなくして真は家に帰っていった。

そしてまた翌日5月22日。ゆっくり眠って疲れも取れた真は部屋を出て一階に降りる。と台所の椅子に菜々子が座っているのを見つけた。

「どうした、菜々子？」

「おはよう」

「っと、おはよう」

声をかけてきたまことに菜々子はまず挨拶をし、真もうっかりしてたというように挨拶を返す。菜々子はテーブルに置かれているなえを見ながら困った様子を見せていた。

「どうしたんだ？」

「えっとね、学校で、やさいそだててるんだ。おうちでそだててみなさいつて、先生が“なえ”くれた。お父さんにきいたら、好きなどこにうえていいって……どこにうえればいいかな？」

「うーん……」

菜々子の言葉に真は考えるように腕を組む。

「あ、そうだ。たしか家の隣に空き地があったけど……あれもここの

土地なのかな?」

「家の、となり? うん、使っていないけどうちのお庭だよ。あそこになえ、うえるの?」

「やってみよう」

真はそこまで言うのと菜々子を連れて家を出て家の脇にある空き地へと顔を出す。

「ここに『なえ』うえるの?」

「んーつと……」

菜々子の質問に真は庭に放置されている材料を見ていく。

「ああ。これなら簡単な菜園くらいなら作れる……ちよつと待っててくれ」

真は腕まくりをして笑いながらそう言い、ブロックで縁を作りそこに土を入れ、簡単な菜園を作っていく。

「すごいーい! もう『なえ』うえていい?」

「ああ」

菜々子は感激したように声を上げ、真も頷くと二人は菜々子が学校からもらってきたトマトの苗を植える。

「野菜、出来るかな?」

「きつと出来る」

「ほんと?! 楽しみだね!」

菜々子はえへつと嬉しそうに笑った後ピンツと何か思いついたように真に目を向ける。

「ねえ、かんばん、作りたい!」

「看板?」

「やさいの『なえ』、実がなるまでみんなにわからないから。ここにやさいできるよつて、ちゃんと書いとかなきゃ」

「なるほど……幸い木材はあるし、任せろ」

「うん! ありがとう!」

真は自信満々にそう言い、菜々子はお礼を言うと家の中から絵の具を持ってくる。真はその間に木材を組み立てて看板を作り、菜々子が持ってきた絵の具で『やさい畑』という文字を書き、菜々子はその下

にトマトの絵を描いた。

「できたー！ 菜々子、お水あげるかかりね！」

「手伝うよ」

「うん！ いっしょにがんばったもん、おせわも、いっしょにしようね！」

菜々子は嬉しそうに笑いながらそう言い、その笑顔を見た真もつい笑う。

「やさしい、いっぱい取れたら、おうちがジュネスみたいになっちゃうかな？」

「その時は花村に買い取ってもらおうか。産地直送と銘打ってな」

「えへへ……楽しみだね！」

菜々子の純粹な笑顔での言葉に真も冗談を交えて返し、菜々子はまた楽しそうに笑う。その笑顔を見た真もつい笑顔になってしまった。

それからまた数日が経ち、25日。真は学校に行っている途中でふと話し声に耳を傾けた。

「商店街の北側にある掲示板に、新しいバイトの募集が貼られてたよ

！ 家庭教師の日給が凄く良かったなあ……」

「あんた、その知識で家庭教師って、ムリじゃない？」

「なにそれ！ でも残念でしたー」

女子生徒Aの言葉にその友達らしい女子生徒Bが辛辣なツツコミを入れ、それに女子生徒Aは残念でしたと返す。

「家庭教師のバイトには、その相手に優しく教えてあげられる寛容さが大事なの！」

「……いや、結局足りてないんじゃない？」

「そんなことないって！ あ、でもスナック紫路宮で皿洗いのバイトでもいいかなー。あっちも寛容な人大歓迎って感じだったし……」

女子生徒二人はそう話しており、真は再び歩き出した。

それから時間が過ぎて放課後。真は席を立つと丁度陽介が話しかけてきた。

「なーなー椎宮、今日暇だしテレビ行かぬ？」

「ああ……俺ちよつと調べたいことがあるから。悪い」

陽介の突然の誘いに真は乗ろうとするが直後、今朝の事を思い出しちよつと調べたいことがあると答える。と陽介は残念そうに笑った。

「あ、そう？ んじゃ今日は運動部無いみてえだし、俺一条達と遊ぶから。途中合流大歓迎！」

「覚えとくよ。じゃな」

「おうー」

陽介は残念そうに笑った後元気な微笑みを浮かべながらそう言い、真も頷いて教室を出ていこうと歩き出しながら挨拶すると陽介もおうつと返す。それから真は商店街のバイトを貼り出している掲示板へとやってくる。

「あ、君もアルバイト見に来たの？」

「ああ。なんでも寛容さが必要な家庭教師のバイトがあると聞いてな」

「ああ、あるよ。日給すごい。でも寛容さが必要な家庭教師って、どんな子教えるんだろ？ 自信ないな」

真と同じくアルバイトを見に来ていたのだろうそんな女子生徒に真はそう返して掲示板を見る。そこにはたしかになかなか良い日給と思われる家庭教師のバイトと、スナック紫路宮の皿洗いのバイトが貼り出されていた。

(夜か……まあおじさんもバイトなら分かってくれるか)

真はそう思いながら家庭教師と皿洗いに応募しようと連絡先を携帯のカメラで撮影する。

「うくん、私はもうちよい考えてみよ。じゃね」

「ああ」

女子生徒はそう言って掲示板の前から歩き去っていき、真はきちんと連絡先が撮れているかを確認する。

「よし。んじゃ花村達に連絡でも……」

「あれ、あんた」

そのまま陽介達に合流でもしようかと思ったところでそんな声が聞こえ、真は僅かにびくりとなって声の方を見る。

「海老原……」

「こんなとこで何やってんの？」

そこにいたのは彼が所属しているバスケット部の一応マネージャーと海老原。彼女は真の姿を見て首を傾げるが、直後まあいいやと自己完結した様子で再び話しかけた。

「ね、これから遊びに行かない？」

「え？ 俺花村と——」

「女の子から誘ってんだから快く受けなさいっての！ はい来る！」

「——遊びにぐえ」

海老原の誘いに真は先約があるからと断ろうとしたが彼女はそんな事気にも止めずに真を引っ張っていった。それから二人は沖奈市へとやってくる。真はあまり乗り気じゃなかったが海老原の強いクエストとそれに真が押し負けたせいだ。

「んー……今日は特に、欲しいのなないんだよね。何しよつか？」

「……本音を言えば帰りたいが、わざわざ来といて切符代も勿体ないか。たまには俺もこういうとこで買い物するか」

「え？ あんたの買い物に付き合うの？……ま、いっか。たまにはそういうの、面白いかも」

海老原の無計画な言葉に真は本音を漏らす。が直後切符代が勿体ないと思いつき、買い物提案。海老原はそれに嫌そうな顔をする。が直後乗り気な様子でベンチから立ち上がった。

「何かさー、ちよつと不思議だよねー」

「何がだ？」

と、いきなり海老原はそんな事を言い、真が首を傾げると彼女は真の顔を見た。

「あたしがマネージャーにならなかつたら、アンタとこうしてないわけじゃん。アンタから見たら、幸運が転がり込んできたって感じじゃん」

「そうでもない」

海老原の言葉を真はずばつと本音で叩き切り、それを聞いた海老原はあははつと笑った。

「サボらされたりね？　悪い子になっちゃったねー」

そういう海老原は悪戯っぽく笑っており、真は呆れたようにため息をつく。

「あたしをアンタの部に入れたのは顧問だけだね。〴〵指導の一環として、部活動を行い他者との協調性を堂の……」とか言ってます。まー、あたしには、スポーツとかマジでやる人の気がしれないけど……たまにはアンタの応援でもしたげるよ」

「光荣ですよーっと」

海老原の何故か偉そうな言葉に真は棒読み気味で返す。その時同じ学校らしい男子生徒が走り寄ってきた。

「あ、ああああの、海老原さん！　ここで会えて、う、運命感じて！

あの、えと……」

男子生徒は興奮なのだろうか顔を赤くしながらそう口走る。

「俺……俺と！　つ、付き合ってくださいっ!!」

そして正面から告白。真はその勇氣にほうと心の中で賞賛の声を漏らす。

「無理」

「ー!」

しかし海老原はぼつさりと断り、それについて真も海老原の方を見てしまう。

「鏡見てから来てよ」

「おい」

続けての彼女の言葉に真がつい声を出すが男子生徒はもう走り去っており、真は心なしかきつい視線を彼女に向ける。

「もうちよつと言いつてもものがあるんじゃないか？」

「だって付き合う気ないし。期待持たせる方が可哀想でしょ？」

「……」

真の言葉に海老原は悪びれる様子もなく肩をすくめており、それに彼も沈黙する。

「あー、何か最後に疲れた。そろそろ帰ろっか」

「結局何しに来たんだよ……」

海老原は最後まで真を振り回し、稲羽まで帰るとそこで解散。真は家に帰っていった。

それからまた翌日の昼休み。昼食を食べた真は腹ごなしの散歩で一階までやってくる。

「ああ、あんたか」

「海老原……」

そこに丁度散歩でもしていたのか海老原と鉢合わせ。

「ねえ、今日ヒマでしょ？ 付き合ってよ」

「昨日の今日か……ま、いいぜ」

「ん。じゃあ後でね」

海老原はそう言うのと階段を上がっていき、真も適当に一階をぶらついてから教室に戻っていく。

そして午後の世界史の授業でピラミッドの建造における通説を聞いたり色々している間にあつという間に放課後になり、真は玄関に向かう。

「あ、ちよつと待ってて」

しかし海老原はそう言うのと校内に戻っていき、真は待ちぼうけをくらってしまふ。とそこに一組メンバーが通りがかった。そして一条が真を見つけ、話しかけてくる。

「椎宮じゃん、何やってんの。ウチのクラス、特別授業とかって講堂集められてき……」

「なんか知らんがご愁傷様」

一条は参った参ったというように笑いながらそう言い、真もふつと笑う。と別のクラスの男子生徒達が歩き寄ってきた。

「あ、そういや二人ってバスケ部？」

「……ってことは、海老原あいがマネージャー!?」

その言葉に、どこかスカした雰囲気男子生徒が驚きの声を上げた。

「うおっ、マジかよく超うらやましいー!」

「……そうか？」

「ああ。全然、来ないけどな」

熱狂する二人の男子生徒に真は首を傾げ、一条も苦笑する。

「アレじゃん？ 放課後は男漁りに忙しいんだろ」

「超遊んでるってなー。何か、パパとかいるんだって？」

スカした雰囲気男子生徒に続けてニヤついた男子生徒がそう言う。

「金回り、良さそうでもんなく」

「……いくら、もらえんのかな？」

「ちよ、おまつ、生々しいって〜！」

「けど、相場知りてーよなー。こんな田舎町だと、やつぱ安いじゃん」

「やーでも、現役女子高生よ？ しかも、あの顔、あの身体よ？」

「そーそー、あの腰が……」

三人の男子生徒の話は止まらず、一条も嫌そうな顔を見せる。

「……その辺にしといたらどうだ？」

「そうだけ。やーめろって、あることないこと言われちゃ、可哀想だろー？」

真の重々しい雰囲気を見せる言葉に続いて一条も軽い口調ながら正論を言い、それに三人は気まずそうな様子を見せる。

「そ、そうだよな。あつ、やっべー、部活遅れるー！」

男子生徒三人組はそう言って足早に立ち去っていき、一条は申し訳なさそうに苦笑した。

「ごめんな、椎宮。お前と海老原さんって、結構仲いいんだろ？」

「そう見えるんなら一度眼科に行くことをおススメする。基本拉致られてるだけだ」

「あ、そうなん？……まあとりあえずさ、あいつら根は悪い奴らじゃないから……許したってよ」

一条の言葉に真がため息交じりに答えると彼はまた苦笑した後彼らを許してやってくれと言い、それに真も笑みを見せる。

「本気で怒っちゃいないさ」

「そか。じゃ、またなー」

真の言葉に一条は安心したように微笑んで返すと階段を上がっていく。それを見送って真は一安心というように息を吐いた。

「……」

「!?」

と、そこに下駄箱の影にでも隠れていたのか海老原が顔を出し、真は驚いたように目を見開く。

「……じゃ、行こうか」

しかし直後、さっきまであったことを隠すようにそう言った。

「なんで、何も無いフリするの?」

「……」

彼の言葉を聞いた海老原はそう言い、真も沈黙する。

「別に……気にしてない、あんなの……いつものことだし。あたしのこと何も知らない人に、何言われたって……平気なんだから……」
海老原はどこか落ち込んだ様子でそう漏らす、と真は彼女の頬が赤くなっているのに気づいた。

「けど……ありがとう」

「……どういたしまして」

彼女の口から出てきたお礼の言葉に、真もとりあえずそう返しておいた。

「……帰る。送ってよ」

「ああ」

気にしていないと言いつつも海老原はどこか落ち込んだ様子を見せており、一人で帰らせるのもどうかと思ったのか真は海老原のいつもの我儘な物言いに素直に従い、海老原を彼女の家まで送ってから家に帰っていった。

「ただいま」

「おう、お帰り」

「ああ、おじさん」

夜、真が家に帰ってくると遼太郎がお帰りを言い、真もその顔を見ると頬をほころばせる。が、直後夜のバイトの事を思い出した。

「おじさん、ちよっとお話が」

「ん……どうした?」

「いえ、夜にアルバイトをすることになりました。事後承諾ながら報

告に」

「なに？ 夜にアルバイトするだど？……あのなあ……俺はお前の保護者だぞ。そんな事許すと思ってるのか？」

「事後承諾は申し訳ありませんが、正直に言えば許してくれると思いました」

遼太郎は真が夜にアルバイトをすると聞いてびっくりしたように声を漏らした後そう続け、それに真はすまなそうながらどこか自信に満ちた表情でそう言う。

「ずいぶんと余裕だな。まあ悪さする気がないから、そう言えるのかもしれんが……」

遼太郎はどこか呆れた様子でそう呟き、少し考えるとため息をつく。

「ったく……分かったよ、許可してやる。隠れてコソコソされるよりはマシだ。お前を信じてやるさ」

「ありがとうございます」

「だが、田舎と言っても夜は誘惑も多いんだ。危ない真似だけはするなよ。約束だぞ、分かったな？」

「もちろん」

夜のバイトに許可が出たこと——実質夜の外出許可が出たにも等しい——に真はこくと頷いた。と、今度は遼太郎の方が話しかけてきた。

「そういうえば、この前畑を作ったそうじゃないか。見てきたがなかなかのものだったぞ」

「ありがとうございます……なんなら今日手入れでもしようかと思っ
ていたんですが」

「お、それなら今日は俺も手伝おう」

「菜々子も、おやさいみにいくー！」

そう言って三人は手入れ道具を手に家を出ていき、隣の菜園へとやってくる。そして真のてきぱきとした手入れを見ると遼太郎はほ
うと声を漏らした。

「順調そうだな。大したもんだ」

彼はそう呟くと菜園を見回す。

「まさかあのほったらかした土地が、こんな立派な畑になるとはな
「うん！ お兄ちゃんと菜々子でがんばった！……でもここ、はじめ
からいろいろ置いてあったよ？」

遼太郎の言葉に菜々子は嬉しそうな笑顔で言った後首を傾げ、それ
に遼太郎は二、三度頷く。

「ん？ ああ……まあ、古い道具だがな」

「……ふーん？」

彼の言葉に菜々子は曖昧に首を傾げる。そんな感じで夜中は過ぎ
ていく。

それから翌日27日。真は放課後学童保育のアルバイトにやって
きていた。

「せんせー、俺とうでずぼうやろーぜ！」

そう言つて勇太が腕をぶんぶんと振り回す。

「俺、負けたことないんだ！ てかげん、きんしだからな！」

「……面白い。まあ怪我をさせても厄介だ……腕を折らない程度には
加減しよう」

「うげ……」

元氣な勇太に対し真は不敵な笑みで拳をぽきぽきと鳴らし、その様
子に勇太は若干引いていた。まあそんな感じで時間が過ぎていき、学
童の子供達が次々帰っていく中真は勇太と話をしていた。

「あ……この間の……椎宮君……だったよね？」

「ああ、どうも」

そこに勇太を迎えに来たらしい絵里が話しかけ、真はペこりと会
釈。絵里は勇太に微笑みかけた。

「ユ一君、先生と仲いいの？」

「……べつに！ むかえ、こなくていいってば!!」

彼女の言葉に勇太はそう言つて走つていく。

「ユ一君……もう……」

絵里は困つたようにそう呟き、真に目を向ける。

「先生は、子供好き？」

「ええ、まあ」

「君がお父さんになったら、子育て手伝うんだろうね……ドラマに出てくる父親みたいなの……うらやましい」

「そんな予定はありませんが」

真の返答に絵里は悲しそうに呟き、真はとりあえず飄々とした様子で誤魔化しておく。

「ハア……もう、疲れる……あの子の事、嫌いじゃないけど……」

「苦手？」

「……そんなふうには、一言で言えないわ」

絵里のため息交じりの言葉に真が若干首を傾げて聞き返すと彼女は首を横に振る。

「そうですか」

「ふふつ、先生もやっぱり子供ね……」

そう言う絵里はやはり悲しそうに笑っていた。

「他のお母さんと会っちゃやうからここに来るの、嫌だったけど……ふふ」

絵里は力が抜けたように微笑み、真は目を閉じて若干考える様子を見せる。

「あら……勇太君のお母さんじゃない？ 勇太君、一人にして良いの？」

「子供放っておしゃべりに夢中って、母親として、どうかと思うわよ。いくら新しい先生が若いからって、ねえ？」

「……あ、はい……すみません。それじゃあ……失礼します」

絵里は別の学童の母親二人にそう言われると気まずい様子で歩き去っていき、真は今度はその二人の応対を始める。

時間も過ぎて夜中になり、真は家に帰っていく。

「ただいま」

「あ、お兄ちゃん。お帰りなさい」

真が帰ってくると菜々子が出迎える。どうやら遼太郎は帰ってきていないらしい。

「ねえ、お兄ちゃん……どうして人はいなくなっちゃうの？」

「……」

菜々子の質問に真は少し困ったように沈黙。

「分かった。じゃあ居間の方で話そうか」

「うん」

続けての言葉に菜々子は素直に頷いた。そして居間のちゃぶ台に向かい合って座り、真は人の一生について自分に出来る限り、菜々子に分かりやすく話してみる。

「そっか……むずかしいね……でも、分かった！　ありがと、お兄ちゃん」

「どういたしました……それで、他に分からないことは？」

「んつと、えーつと……あつ、ある！」

菜々子は嬉しそうに頷き、真がそのお礼に返した後疑問はないかと聞き、菜々子は少し考えた後大きな声であると言った。

「死んじゃったら……人はどうなるの？」

「……天国、つてところに行くんだよ」

「やつぱり、そうなんだ。お母さんも、天国に行つたんだよ」

質問に対する真の返答に菜々子は嬉しそうに笑う。

「あとね、さつき、ニユースでやってた。『ゆうびんきよくに、ごうとう』って……どうして、わるいひとは、わるいことするの？」

「……分からない」

菜々子の次の質問には真は顔を伏せて首を横に振り、そう返すのが精一杯だった。彼にも自分なりの正義感というものがあり、今自分が連続殺人事件の犯人を追っているのもクマからの依頼以上にそんな事が許せないという正義感ゆえ。しかしそれを他人に押し付けるという事はしたくなかった。

「そっか……お兄ちゃんは、わるいひとじゃないもんね」

そう言う菜々子は真がわるいひとじゃないから、とどこか安心したように微笑んでいた。しかしその顔はまたすぐに浮かないものになる。

「でも、わるいひとがないとお父さん、もつと帰ってくるよね……去年はジケン、あんまりなくて、お父さん、おうちにいたよ……ほいく

えんも、むかえにきてくれたし……」

菜々子はそこまで言う少し黙る。

「お父さんは菜々子より、わるいひとの方が大事なの？」

「それは違う。おじさん……お父さんは菜々子を守るためにわるいひとに立ち向かってるんだ」

「……よくわかんないよ」

彼女の絞り出すような言葉に真はほぼ反射的にそう言い、しかし菜々子はよく分からないと首を振る。彼女は寂しさにじっと耐えている様子を見せていた。

「……お兄ちゃん、もう少し、お話しして」

「よし。じゃあこの前学校で花村がだな……」

寂しそうな菜々子に真は学校で起きたことやら何やらを話している、夜が更けていくと菜々子を寝かせてから自分の部屋に戻っていた。

それから数日過ぎて29日、朝。真は特に予定もなく何をしようかと考えていた。その時突然携帯が鳴る。

「あ、もしもし。一条だけど」

「一条、どうしたんだ？」

「今日ヒマ？ だったらどっか行こうぜ。長瀬も一緒。どう？」

「ああ、いいぜ」

「おっけ！ んじゃまた後でな！」

電話の相手は一条で遊ばないかという誘い。それに真は二つ返事で乗り、一条はそう言うと言電話を切る。そして真は電話を一度テーブルの上に置くと準備をし始めた。

それから三人は合流すると商店街を適当にぶらつき、この街の本屋である四目内堂書店の前に来ると長瀬が思い出したように買うものがあると言って店内に入っていく、二人は店の外で待つ。そして数分程度で長瀬は店から出てきた。

「長瀬、何買ったんだ？」

「マンガ。昔家にあって、懐かしいというか急に読みたくなったというか……」

長瀬はそう言つて袋から彼曰くマンガを取り出す。

「つて、あ?」

彼が取り出したのはどう間違えてもせめて女向けの表紙。

「……間違えた。『剛腕英雄ピッチャーマン』のつもりが『魔女探偵ラブリーン』」

「アホか」

「どう間違えたらそうなる」

長瀬のボケに一条と椎宮二人がかりでツツコミを入れた。

「椎宮にやる」

「……もらつとく」

「え、そういうの読んじやうの? ハイエンドだなー、お前」

「お婆ちゃんは言つていた。人からもらえるものは借金以外は貰つておけ、と」

長瀬が差し出してきた本をとりあえず貰う真に一条がツツコミを入れると真はどこか今考えました的口調でそう返した。

「つかしーなー……絵が似てると思つただけど……」

「いやいやいや。それでもこの間違いはどうかと……」

髪をかきむしりそう呟く長瀬に一条はまたもやツツコミを入れる。

「あれ? 椎宮君に、一条君、長瀬君?」

「よお、里中」

そこに偶然通りがかつたのだろう少女千枝、真が右手を上げて返すと千枝は首を傾げた。

「不思議な組み合わせ……でもないか。椎宮君と一条君部活いっしょなんだっけ」

「あつ、さ、里中さん……」

そんな千枝の様子に途端に一条が焦つた様子を見せた。

「えと……何やってるの?」

「……修行?」

「しゅぎよ……」

一条の問いかけに少し考えて返す千枝に彼は絶句したように漏らす。

「さすが、漢だな、里中」

「ちがうつつの!」

直後少々ずれた返答を見せる長瀬に千枝は怒ったようにツツコミを叩き込む。それからなんのかんので千枝が合流、一条が少々挙動不審になった以外はなんの問題もなく彼らは休日を過ごしていった。

それから5月31日。真は部活に行こうと廊下に出る。がいつもの場所に一条がおらず、代わりに長瀬が話しかけてきた。

「椎宮、一条がいないが……今日部活だよな?」

「ああ……まあ部活が始まれば出てくるだろ」

「ハハッ、頑張れよ」

真の言葉に長瀬は笑ってそう言い、真は体育館に行つて部活を始める。しかし一条は見つからず、真は急用でもあるのかと考えた。

「あー、つつかれた……もう帰ろうぜー!」

部員達はそう言って帰っていき、真も着替えると下駄箱にやってくる。と一条の下駄箱に靴がある事を見つけ、彼は一条がまだ校内にいることを確信。振り返ると校内に向けて歩き出した。

それから彼がやってきたのは屋上。そこで一条は大の字になって寝転がっていた。

「部活、終わった?」

「サボるとはいい度胸だな……何かあったのか?」

一条の問いかけるような呟きに真は冗談交じりの口調で言った後真剣な顔で本題を切り出す。

「なにもない……」

「……」

「や、ウソ、ある……けど大したことじゃねえよ」

一条はそこまで言うときき上がる。

「バスケ、好きか分かんなくなつた」

「あんなに熱心にやってるのにか?」

彼の吐き出すような言葉に真は意外そうなというか驚いたような声を漏らす。

「好きにしろつて、言われたんだ。バスケやるの、あんだだけ反対してた

家の人が……急にバスケでもなんでも、好きにしろって」

「よかったことじゃないのか？」

「かもな……んで、朝一人で練習してたんだけど……何も思わないんだよ」

一条は眩き、うつむく。

「楽しいとか、悔しいとか……何も思わなかった」

彼はそう言つて、今度は空を見上げる。

「放課後、ずっとここにいたんだ。したら色んな部活の音が聞こえてきて……なんでみんな、あんなに楽しそうなんだろうなーとか思つてた。みんな、急に遠く感じて……」

彼は空を見上げながら、呆けた様子で眩く。

「あ、鳥……鳥はいーな。あんな高いところ飛べて」

「飛ぶか？」

「死ぬわ……俺、何か……海の底にいるみたい」

「……」

一条は空を飛ぶ鳥を見ながらそう眩き、真がそう聞くと彼は条件反射的にツツコミを入れた後、やはり浮かない表情で眩く。真もちよつと場を和ませようとした冗談が通じなかったことに沈黙した。

「まあ、ゆっくり休め」

「ああ……そうだな。別に、何か結論が必要なわけじゃないし。たまにはこうしてサボンのも、いいしな」

真のアドバイスに一条はふつと笑いながらそう言う。と真も笑みを見せた。

「一日休めば取り返すのに三日かかる。っていうがな」

「マジで？」

「ピアノでは」

「ピアノかよ!？」

真剣な顔からの冗談に一条はやはりツツコミを入れ、笑う。

「次の部活は、ちゃんと行くよ……それより、探しに来てくれたんだよな？　ありがとな」

「どういたしまして」

一条の嬉しそうな微笑みでの言葉に真はお礼の言葉を返し、一条は再び空を見上げ始めた。

「俺、もうちょっとだけここにいる……今夜、親戚が来ることになってさ。心の準備、上手く出来てないんだ。仮面かぶんの、結構上手いんだけど、たまにシンドいんだよね」

一条はその言葉通りシンドそうな表情を見せており、それを見た真は立ち上がる。

「じゃあ、俺は帰るよ」

「サンキュ……また今度な」

一人にした方がいい。そう判断した真に一条は一言お礼を言い、真は未だ空を見上げる一条を一瞥した後屋上を出ていった。

第二十話 皇帝の仲間入り

六月四日。ここ数日雨が続いており家で見た天気予報では今夜は霧が出るという予報を聞く。そして夜中、真は外で霧が出ているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始めた。マヨナカテレビだ。しかしそれは砂嵐を映すのみで他には何も映らなかった。

(……よかつた)

真は安堵の息を吐いてマヨナカテレビが消えていくまで何も映らないことを確認し、それから安堵と同時に疲れが出てきたのかふわあとなげんをする。と寝巻きに着替えて布団に入り眠りについた。

それから翌日。真は散歩がてらジュネスへとやつてくる。

「ああ、真君！」

「ん？」

と、突然自分を呼ぶ声が聞こえ、足を止める。

「ああ、足立さん」

自分呼び止めてきたのは足立。それに真はそうやってやつほーというように手を軽く振っている足立に歩き寄る。

「どうしました？」

「いや、ちょっと僕と話してかない？ その方が捜査つぽく見え……」

「あー、いや、こつちの話」

「……まあ、いいですよ」

「そうこなくつちや！ 話が分かるねえ、出世するよ君！」

サボっているらしい足立の言動に真は苦笑しながら頷き、足立は悪戯っぽく笑いながら返す。

「でさ、君は何してんの？ 買い物？」

「暇潰しのつもりでしたが……そうですね、夕飯の買い物もついでにしようかな」

「そっか。感心だねー。僕とか一人暮らしだからさ、夕飯とか面倒なんだよねー」

「え、どうしてですか？」

足立の問いかけに真は暇潰しのつもりだったのだが、ちょうどいいから夕飯の買い物もしておこうかなと返す。それに足立がめんどくさそうな表情で呟き、その言葉を聞いた真が驚いたように聞き返す。「高校生には分かんないかな。ダルいんだよねー、仕事の後って。だからさ、カップ麺とかテキトーにね」

「栄養偏りますよ?」

足立はめんどくさそうな表情を見せながらそう言い、真が呆れたように返し次に思いついたようにふつと笑う。

「なんなら、作ってあげましょうか?」

「君が僕の家に来て、とか? はは、それ面白いね。でも出来れば女の子がいいなあ」

「自信あるんですけどねえ」

お互いに冗談交じりに笑いながら会話し、足立はにんまりと笑う。「やっぱ可愛い子がいいよねー。あ、正確には美人タイプのが好みだけどさ。あと、料理が上手くないと。そしたら後はどうでもいいんだけど……」

「そ、それはちよつと……性格とか……」

足立の言葉に真は苦笑を漏らす。その時足立の背後のエレベーターのドアが開き、お婆さんが一人降りてくる。と彼女は足立を見た。

「透ちゃん! 透ちゃんじゃないの!」

「!?!」

その呼びかけに足立は振り返ると驚いたようにのけぞる。

「うつわ……見つけた」

「お知り合いですか?」

「え? ああ、まあ……」

足立の反応に真が首を傾げると足立は言葉を濁す。

「お仕事、終わったの? 危ない目に遭ってない?」

「あー……いえ、まだ途中で。これから署に戻るところ」

足立が言葉を濁している間にお婆さんは足立に人懐こく話しかけ、足立は言葉を濁した様子でそう返す。とお婆さんは嬉しそうに微笑

んだ。

「お仕事頑張つて嬉しいわあ。ご近所さんにも、いつも自慢してるのよ。また煮物、持つて行くからね。体調に気を付けなきやダメよ？」

あ、そうそう。お昼に見た刑事ドラマでね……」

お婆さんはぺらぺらと話し続け、足立は困つたように頭をかく。

「あのー、そろそろ署に……」

「あら、もうこんな時間？ それじゃあ、お仕事頑張つてね」

困つた様子の足立の言葉にお婆さんはそう言つてジュネスを出ていき、足立はふうと息を吐く。

「やくつと行つてくれたよ……」

「足立さん、食事作つてくれる女の人もいるじゃないですか」

「止めてよ、そんなんじゃないつてば」

安堵の様子を見せた足立に真が冗談っぽく笑いながら言う。足立は嫌そうな表情を見せながら返す。

「あの人の息子さん、何か僕と同じ名前らしくてさ。それで知らないけど、やーたら構われちゃつて。差し入れとか言つて、いつも署まで大量の煮物持つて来んの。話も長いし……ウザいったらないよ」

「慕われてる証拠じゃないですか？」

「いや、別に慕つてほしくないつて。勘弁してほしいよ」

足立はそう言つて肩をすくめる。

「ウチの親と正反対のタイプだからさ。ああいうの、よく分かんないんだよねー。要するに寂しいんだろうけど。身寄りとかなさそうだし。こつちじやこれも仕事の内だから、無視とか出来ないしき。ま、最近警察も忙しいから、僕くらいしか相手する人いないみたいだね」

どこか憎まれ口のようなながら、足立はどこか嬉しそうに真の目には見える。と、足立の表情が拗ねたようなものに変つた。

「でもさー、せめて息子じゃなくて孫じゃない？ 僕まだ27なんだから」

「あはは……」

足立のどこか拗ねたような言葉に真は苦笑を漏らす、と足立は近く

にあつた時計を見た。

「さて……そろそろホントに戻らなきや。まーた堂島さんにドヤされちゃうよ。じゃーね」

「お仕事頑張つて」

そう言つて足立はジュネスを出ていき、真も一声かけた後買い物のためエレベーターに乗った。

それから時間が過ぎて夜。真は居間で菜々子と一緒にテレビを見ていた。それは少年が実の父親を探すドキュメンタリー番組で、菜々子は食い入るように見つめている。

「ほんとの、お父さん……」

菜々子はぽつりと眩き、真の方を見る。

「ほんと”……つて、どういうこと?”」

「大好きな人の事、だと思ふ」

「そつか……じゃあ、お兄ちゃんはおほんとのお兄ちゃんなんだ」

菜々子の問いかけに真はそう返し、それを聞いた菜々子は嬉しそうに微笑んでそう言う。

「お父さんも、ほんとのお父さんだ!」

えへへ、と笑つてそう続ける菜々子だったが。突如その表情が暗くなる。

「でもお父さんは、菜々子の事、好きじゃないと思ふな……」

「そうかな?」

「……もしかして……菜々子、ほんと”じゃないの?」

菜々子は寂しそうな、どこか泣きそうな表情でそう眩く。

「お父さんの”ほんと”の子供じゃないから、お父さん、おうちに帰つてこないの?」

「おじさ……お父さんがそう言ったのかな?」

「……言つてない」

菜々子の寂しそうな言葉に真は微笑を浮かべながら問いかけ、それを聞いた菜々子は安心したように微笑む。

「お母さん……どして、菜々子おいてったんだろ」

「……」

「……お母さんいたときね、お母さんとお父さんと菜々子で、三人でね……さめがわのところで、お花つんでね……」

菜々子はほつぽつと思い出話を続け、真はそれを黙って聞く。まるで彼女の胸の内を理解しようとするように。と、菜々子の話が止まった。

「お兄ちゃん。なにかお話、して……」

その言葉に真はちらりと時計を見る。もうそろそろ菜々子は寝る時間だ。

「……菜々子の話、もっと聞かせてくれるかな？」

「うん、いいよ！ えーつとね、今日はね、朝おきて……」

真が優しく問いかけると菜々子は嬉しそうに微笑んで頷き、今日の事を話し始める。それから話が一段落し、夜が更けてくると菜々子を寝かせ、彼も自室に戻り眠りについた。

それから翌日の六月六日。放課後、特捜隊学生メンバーは屋上へと集合していた。と、少し遅れて前回テレビの世界に落とされ、真達に救出された完二がやってくる。

「う……ういースー！」

「ぶっ……意外に敬語じゃん」

「や、だってその……先輩なんスし……」

「あはは、意外に可愛いところあんじゃん」

ぶつきらぼうながらどこか敬語っぽい口調に千枝が吹き出すと完二は照れたように頭をかいて呟き、それを聞いた千枝が笑いながら感想を述べると真や陽介、雪子もくすくすと笑い、雪子は「変わってないね」とも呟く。

「えと……ありがとう、ございまして……あんま、覚えてねえけど……」

完二は素直に頭を下げ、感謝の言葉を述べ、真は雪子に目配せ、雪子も頷くと口を開いた。

「私達、教えて欲しい事があるの」

「さっそくだけど、あん時会ってた男の子、誰？」
「?.....!?!」

雪子の言葉の次に千枝が尋ねると完二は一瞬首を傾げた後思い出しびっくりしたようにのけぞり、頭をかく。

「ア、アイツの事あ、俺もよくあ……つか、まだ二度しか会ってねえし……」

「二人で学校から帰ってたじゃんよ? 何話したの?」

「や、えと……最近変わった事ねえか、とか……ホントその程度で……けど、自分でもよく分かんねんすけど、俺……気づいたら、また会いたい、とか口走って……」

「男相手に」

「……」

千枝の言葉に完二はどこか焦り気味に言い、その最後の言葉に陽介と千枝がダブルツツコミを入れると彼はこくんと頷いた。

「お、俺……自分でもよく、分かんねんすよ。女って、キンキンうるせーし、その……すげー……苦手で。男といた方が楽なんすよ。だから、その……もしかしたら自分が、女に、興味持てねえタチなんじゃって……けどゼツテ認めたくねーし、そんなんで、グダグダしてたっつーか……」

「まー確かに、男同士の方が楽だつてのは分かるけどな」

「ああ。俺も転校したての頃は大体男友達とつるんでたからな、やはり友達付き合いという点なら同性の方が気楽だ」

完二の言葉に男二人が同意する。

「それで、気持ちは落ち着いたか?」

「あ、ああ、もう大丈夫ッスよ。要は勝手な思い込みだったって事ッスよ。壁作ってたのは、俺だったんだ」

真の言葉に完二はにつと笑いながらそう言い、それを聞いた全員が首を傾げると完二は「あく」と声を漏らした。

「あく、ええと……ウチ、こう見えて代々『染物屋』なんすよ……あ、知ってるのか。親は、染料は宇宙と同じ……とか、布は生きてる……とか、ま、ちつと変わりモンで。んな中で育ったもんで、俺、ガキの

頃から、服縫うとか興味あつたんすよ」

完二はそこまで言うため息を一つつく。

「けどそういう事言うと、やっぱ微妙に思うヤツもいるみたいで……女にやイビられる、近所は珍しがるで、一時はもうなんもかんもウザかつたんすよ。で、気づいてみりや一人で暴れてた……つてとこスかね」

と、そう言い切ると彼は恥ずかしそうに頭をかいた。

「んだ俺？ 何一人でベラベラ喋ってんだ……あー、今のなしで……なんか俺、大分カッコ悪リッスね」

「いや、逆にカッコイイよ」

「いや、全然ダメッスよ」

恥ずかしそうにそう言う完二に真はそう返すが完二は首を横に振って返し、それから空を見上げた。

「ハハ……こんなん、人に初めて話したぜ。ま、今まで言う相手もいなかったんすけど」

彼はそこまで言うの特捜隊メンバーを見る。

「やっぱ俺、男だ女だじゃなくて、人に対してビビってたんすかね。なんか、スツキリしたぜ」

そう言う彼は言葉通り、スツキリした表情を見せていた。

「意外に純情じゃん……つか、いい子じゃん」

「い、いい子は、やめろよ……」

「ははは、図体でかいのに照れんなって」

そこまで聞いた千枝が驚いたように呟くと完二は照れ隠しに腕をぶんぶん振り、それを聞いた陽介はからかうように笑って言った後真剣な表情を見せた。その口から発される言葉も真剣味を増している。

「んで、二度目に俺らと会った後の事だけど、何か覚えてる事ないか？」

「ほら、あたしらをシメンぞーって追っかけてきた後」

「あ？ えっとー……うち戻って……部屋でフテ寝決め込んで……」

陽介と千枝の言葉に完二は腕を組んで首を傾げながら呟く。と首が逆方向にかくんと傾いた。

「ん？　そーいや誰か来たような……」

「誰か来た!?!　どんなヤツだ!?!」

「あ、いや、そんな気したってだけで、誰も来てないかも……」

完二の言葉に陽介が食いつくがその記憶は曖昧なのか完二も言葉を濁す。

「あと思い出すことつつや……なんか変な、真っ暗な入り口みてえのとか……気が付いたらもう、あのサウナみてえなトコにブツ倒れてたツス」

「真っ暗な入り口……」

「……テレビじゃないか?」

完二の言葉に雪子が無か考える様子を見せると真が口を挟む。

「あ?……あー、言われてみりゃ、んな気も……てかなんでスカ?」

「いや。ちよつと思っただけだ」

完二は真の問いかけに頭をかいて思い出すように虚空を見上げながら答えるが唐突に出てきたテレビという名詞に疑問を覚えたのか尋ね返し、真は顔色一つ変えずに返し、完二も「そスカ」とさほど気にする様子を見せなかった。

「警察には、何か訊かれたか?」

陽介の質問に完二は今と似たような説明をしたらワケ分かんねーって顔をされたと話し、また首を傾げながら四人を見る。

「先輩ら、もしかして探偵みてーな事やろうっての?」

「んー、まあ、そんなとこ」

「なら、俺も頭数に入れてくんないスカ?」

完二の問いかけに千枝があしらうような口調で返すと完二は頼むような視線を見せながら尋ねてくる。

「何故だ?」

「酷え目にあつたのが『誰かの仕業』ってんなら、十倍にして返さないと気が済まねえ」

「マジ?　そりゃいい。すげー戦力じゃん」

彼の参加希望に真が理由を問うと彼はそう返し、陽介は大幅な戦力増強に嬉しそうな顔を見せる。

「言っておくが、遊びじゃないぞ」

「へっ。遊びで言わねッスよ。命救われたんだ……俺あ、先輩らのために命張るって決めてるんで。面倒みてやってほしッスー!」

完二はびしっと姿勢を決めて頭を下げる。とそれを見た真は少し黙った後こくと頷いた。

「分かった。よろしく頼む、完二」

「あざっす!!」

真の言葉に完二は一度頭を上げて真を見た後、また勢いよく頭を下げて声を上げた。と、陽介がにししつと笑う。

「んじゃ、仲間が増えたお祝いに……」

「『特別捜査本部』、行く?」

「それ、まだ言ってるんだ……」

陽介の言葉に雪子がどこかテンション高く言うと千枝が呆れ気味にツツコミを入れる。

「な、なんスか、それ!」

「しようがねえな、連れてってやるか!」

特別捜査本部という言葉に完二が素っ頓狂な声を上げると陽介が笑いながらそう言った。

それから場所はジュネスの屋上フードコートへと移る。彼らはジュースをそれぞれ買っていたが完二はただ一人肉を食っている。

「しつかしよく食うな、お前……話ちゃんと聞いてたか?」

「んあ? ひーへるっふお」

陽介の呆れ交じりの言葉に完二は肉を口に詰めたまま返し、一旦食事の手を止める。

「あー、えっと、テレビを使って殺人?……って事あ、撲殺で決まりスね?」

「ちげー! テレビで殴ってんじゃねーよ! どんだけ聞いてねーの、お前……」

「まあ、完二君も自分の足で『向こう』に入ってみりや分かるって」

完二の見当違いの言葉に陽介が怒鳴り、千枝は笑いながらそう言う。

「とりあえず、犯人の手口は天城の時と同じと考えていいだろう」

「そうだね。まずさらって、それからテレビに入れる」

「うん……怖いね」

真の言葉に千枝がそう言うのと雪子も顔を伏せ、特別捜査本部テーブルが静寂に包まれる。

「つかさ、例のテレビ、最近、けっこう面白くね？」

「“次に出んの誰？”とか、気になるな」

「ん？」

と、近くのテーブルからそんな話し声が聞こえてきた。

「俺前から、次はぜってーアイツって思ってたんだよ。名前なんだけ、一年の暴走族上がりの……」

「次は誰と思ったって？」

「!？」

男子生徒の一人がそう言うのに完二が反応し、ドスの効いた声を上げると二人はびくりと跳ね上がって口を止める。

「そいつあ多分 “巽完二” って名前だな……ちなみにゾク上がりじゃなくて、ゾクを潰した方だけだな」

彼は席を立ちあがり、振り向くと目つきを鋭くしながらそう言う。

「誰だテメエら！」

そして最後のドスの効いた声で脅しをかけるように叫ぶと男子生徒二人は蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「んだよ……つまんねーな」

完二はそう言うのと席に座り直す。

「やりきれないね……殺人事件との絡みとか、よく知らないで言っ

んのかもだけど、同じ学校の子なのに……」

「関係ねーとか、自分は大丈夫だとか、観客気分なんだから……次に誰が狙われるか、分かんなくなってきたってのによ」

「今回の事で、『被害者は女性』っていう共通点は崩れちゃったね」
他人事な様子の生徒に千枝がため息をつきながら漏らすと陽介も困った様子で返し、雪子もうんと頷く。

「もう一個の読みはたしか『山野アナと関係ある人が狙われる』だったか？ 完二、お前は山野アナと面識はあるか？」

「山野？……えーつと……いや、ねっすね。うちの客だってお袋が言ってたけど、会った事はねえっす」

「じゃあ外れ、と考えておくべきか」

「そうだな。直接関わったのはどっちも母親だったんだしな。なんでわざわざ子供を狙ったのか、微妙に説明つかない」

真と陽介の言葉を最後に彼らは再び口を閉ざした。

「なんだ先輩ら、手がかりなしスか？」

と、完二がどこかにやついているような様子で口を開く。

「じゃーここで俺が、すんげーの出しちまうぜ？」

そして彼はポケットから一枚のメモを取り出した。

「なんだ、それ？」

「今日、俺が復帰したらなんか目障りなのがちょろちょろいたんすよ。先輩や俺が行方くらましたこと、面白半分にかぎ回ってやがったんで、没収してやったんす。ま、書いてある意味はよく分かんねんすけど」

「分かんないんじゃん……」

陽介がメモを見ながら聞くと完二はそう言い、千枝のツツコミを横に完二は真にメモを渡す。

「えつとわっ!？」

「なにになに？ 演歌ヒットチャート、女子アナランキング……」

真がメモを読み上げようとした瞬間彼の背後から誰かがメモを抜き取って項目を読み上げていく。

「お、おい、誰だテメエー！」

「命さん！ お、落ち着け完二！ こいつは俺達の、つつーか正確には権宮の先輩だ！」

突然現れて自分の出した手がかりを横取りした相手に完二は席を立てて声を荒げるがその相手を見た陽介は完二を押し止める。とメモを読んでいる男性——命はどんどん表情を険しくしていった。

「……異君、これ君が見つけたんだよね？」

「ああ？」

「……お手柄だよ」

静かに自分を呼んだ相手に完二はきつい表情で返すが彼はメモから目を離し、完二に賞賛の目を向ける。

「え？」

「真君、ここを読み上げて」

突然褒められたのに完二が呆けた声を出すと命は真にメモを渡し、一部分を指差す。

「えっと……テレビ番組報道表？……山野真由美、4月11日……小西早紀、4月13日……」

「なんだこの日付？ 4月11日？」

「あ、遺体が発見された日……は、そっか、始業式の日だったから、12日か……11日はその前の日だけど……」

「小西先輩の遺体が出たのは15日だ。忘れられない日だから……」

「小西早紀、4月13日」？……」

「ヒントはこの項目のタイトルだよ」

真が読み上げた日付に陽介が首を傾げ、千枝が思いついたように口を開くがすぐに違ったと続け、陽介は苦虫を噛み潰したような表情でそう言う。そして考え始めるがそこで命がヒントを出した。

「……そうか！ これ、4月13日、小西先輩がテレビ報道された日だ！ 遺体の第一発見者で！」

「あ、第一発見者ってインタビューされてたやつ！」

「じゃあ、〃山野真由美、4月11日〃っていうのも山野さんがテレビの報道に出た日？」

「あった！ あたし覚えてる！ ちょうどそんな時、不倫報道あった！」

「おい待てよ……天城も確か、インタビューされたよな？ あのインタビュー流れたの、いつだった!？」

「た、たしか、学校休んでた間……えっと……」

命のヒントを受けた真が口を開くと次々に情報が出揃い、陽介も何かに気づいたように雪子に尋ねると雪子は思い出そうとした後真の方を向いた。

「土手であなたと会った日。ほら、私、和服で……覚えてない?」

「ああ、あの日か！ たしか……」

「えっと、買い出しに行つた日だから、ええと……4月15日！ 私が事件に遭つたの、確かそのすぐ後!」

「完二、お前の出た、例の特番は!？」

「あー、あれッスか。あのおかげでお袋マジグレして酷え目に……つと、えーつと……日にちまでは覚えてねッスけど……先輩らと会う、チヨイ前ッス」

一気に情報が揃い、命はにやりと微笑んだ。

「僕達が巽君を張ろうと決めたのは、マヨナカテレビに映つたのが巽君じゃないかと思つたから、だったよね？ そしてそれが巽君だと分かつた根拠……」

「ああ、間違いない……今までの被害者全員、いなくなる前にテレビで報道されてる」

命の言葉に真は頷き、今までの被害者の真の共通点をその口で紡いだ。

「じゃ、犯人の狙つてるのって、^ッテレビで取り上げられた人……?」

「事件のニュースにばつかり目がいつてて、全然気づかなかつた……」

「うん。僕も巽君のメモを見て初めて気がついたよ。巽君、本当にお手柄だったね」

「あ、いや、そんな……」

千枝の言葉に雪子も頷き、命も腕組みをしてこくこくと頷いた後微笑んで完二を褒め、それを受けた完二は照れくさそうに頬をかく。

「偶然にしては出来すぎている。恐らく間違いない」

「ああ。考えてみりや、天城の件で失敗したのに、もう一度天城を狙わず狙いを完二に移した。その事もテレビ報道っていう犯人なりのルールがあるって考えれば、一応領ける」

「そっか、そうだよね……犯人、二度来る可能性あったんだよね……ヤバ、考えてなかった……」

「テレビ繋がりの線、全然あるな……」

「恐らく被害者は『メディアで有名になった人』、これを焦点にしてみよう」

「でも、そうなると動機はなんなんだ？ テレビ出たら殺すって、どういうんだ？ あーくっそ、よく考えたら全然解決出来てねーよ！」

話が進んだ……ように思えたが結局犯行の動機が分かっておらず陽介はまた頭を抱えた。

「なんで俺、もつと頭よくねーんだ……」

「それを言ったら間違いなく花村君より頭がいい自信がある僕にも動機は分からないし、とりあえずは愉快犯って考えとけばいいんじゃない？ 本当の動機はとっ捕まえてから聞き出せばいいんだし」

陽介の落ち込みそうな言葉に命も苦笑気味に返し、完二もそれに頷いた。

「そッスよ。なんで落ち込む事あんスか？ 俺、先輩らスゲーって思ってるんスけど」

その言葉に全員が完二の方を向く。

「だって先輩ら、結局俺の事気づいて、体張って救ったじゃねえスか。充分だぜ、それで」

完二の言葉に雪子も頷いて真達を見る。

「私だって、助けてもらった。解決はまだでも、もう二人も救ってる」

「それは、そうだけど……」

「それに、『次は完二君じゃないか？』っていう皆の推理はちゃんと当たってたよ」

「惜しかったよね」

「あ？ 事件の前から分かってたんスか？ なら来んのもちっと早目がよかったッスよー」

雪子の言葉に千枝が頷くと完二がそう言い、彼らはい笑ってしま
う。と、命も微笑んだ。

「そうだよ。僕達だつて最初からすべてが分かつてたわけじゃないん
だ。最初なんてこれを倒せば影時間が終わる、目的が達成できるつて
のをすっかり騙されちゃつてたつて事だつてあつたんだからね。そ
の後、一つずつ手探りで先に進んでいったんだ。今分らない事
でも、進んでいけばきつと分かつていく。そう信じて、今を進んでい
くんだ」

「はい。現に今、これで被害者の共通点と犯人が狙うルールが分か
つた。今度こそ先回りできる可能性は高い」

命という先人の言葉に真は頷き、真剣な目でそう言う。と雪子がう
んと微笑んだ。

「それに、今度こそ犯行終わりつて可能性もあるかもしれないし」
「だといいいけどな……二度も邪魔してやったんだ、いい加減懲りてほ
しいぜ。とりあえずは今まで通り、雨の日にテレビチェックするつて
事だな」

雪子の言葉に陽介も頷き、千枝は空を見上げた。

「そういえば……来週、林間学校だ。雨降らないといいいけど……1、2
年合同だから、完二君も一緒つすね」

「マジスカ？ 学校かあ……かつたりーなあ……」

千枝の言葉に完二がめんどくさそうな表情で呟く、とその次に表情
が輝いた。

「あ、次のビフテキ、そろそろ頼んでもらつていいスカ？ 焼けるまで
に、残り一気にいっちまうんで……ここ、先輩らのワリカンなんスよ
ね？」

「毎度どーも……と言いたいけど、皆、顔合わせは済んでるの？」

「あ、そうだった。皆、行くぞ」

「あ、ちよつと？ 分あつたツスよ。じゃあ安いところラーメンかペア
セットのたこ焼きで……」

「全部却下」

「ええっ？」

完二の言葉に命が一応店員として返しておくが次に真に尋ね、真も思い出したように相槌を打つと席を立つ。それに続くように陽介と千枝が席を立つと完二はビフテキ二人前も金を払いたくないのかと思っただか安いものを頼もうとするが雪子が一刀両断、完二は情けない声を上げた。

「じゃ、僕もそろそろ仕事に戻るから。後は頼んだよ」

「はい」

「お疲れっす」

どうやら仕事を抜け出てきたらしい命はそう言って店内に戻っていき、真と陽介も一言返してから仲間を連れ、家電売り場の方へ歩いて行った。

それから真達はテレビに入り、クマの待つ広場へとやってくる。

「あー……言われてみりや、居たような……クマだったのか……っーか、何で『クマ』？」

「知らん」

クマをしげしげと見ながら話す完二に陽介が即答する。

「クマも知らん。ずっと悩んでるの」

「な、なんか、かわいいじゃねえか……さ、触っていいか？」

「おさわりはお断りクマ」

「なっ……んだとコラア！ テメ、調子乗んなよ!？」

しよぼんとしている姿が琴線にでも触れたのか頬を染めながら触っていいかと尋ねる完二だがクマがおさわり禁止と返すと声を荒げる。とその姿を見た雪子がぷぷと笑い、完二もちつと舌打ちを叩いた。

「あー……ところで、気になってたんすけど、天城先輩もさらわれたんすよね？」

「え……うん、完二君の前に」

完二の問いかけに雪子はこくと頷く、と完二は何か興味を持った風に雪子の方を向いた。

「てこたあ、先輩もなんかこう、さらけたんすか？」

「そ、それは……その……」

「どなんだったんスか、先輩の——」

その言葉が終わる前に雪子の平手打ちが完二に突き刺さり、彼は「うごおつ」と情けない悲鳴を上げた。

「あ、ごめん……スナップ効いちゃった……」

「あ、アゴが……」

「クマ、本題に入りたいんだが。完二のメガネは出来てるか？」

とりあえずコントはさておき真がクマに話しかけるとクマもこくと頷いた。

「はい、これカンジのね？」

「お、これだな、例のメガネ……？」

クマがそう言つて手渡してきたメガネを完二は受け取るが霧の中見えたそのメガネに若干違和感を覚える。

「早くかけて」

「あ？ は、はあ……でも、俺のだけ違わねえスか？」

雪子の催促に完二は少し首を傾げながらメガネをかける。それは、いつかの鼻眼鏡だった。

「に、似合う……うぷぷ……ぷぷ……あははははは！」

「ハハ、すげー。お前のは、マジ似合ってるよ！」

「ちゃんとしたのあるのに、ユキチャン、こっちにしようって聞かないクマよ」

その姿を見た雪子と陽介が笑い、クマがそう言っていると完二はキレたように鼻眼鏡を地面に叩き付ける。

「つまんねー事してんなよ、ああ!? よこせオラツ！」

完二はそう言つてクマが持っているもう一つのメガネを奪い取る。

「二ぶっ!!!」

なんとそれも鼻眼鏡。不意打ちのそれに真と千枝まで吹き出してしまった。

「ウププ、あははははは!!」

そして雪子の笑いのスイッチももう一段階入る。

「スペアの方を奪われたクマ……カンジ、実は好きね、ソレ？」

「アハハ、くるしー!」

「くっ、くく……すまん、不意打ち過ぎる……」

クマの言葉の後千枝が笑い、真も必死で笑いを堪えながら謝る。その光景を見た完二は顔を赤くし、鼻眼鏡を遠くに投げ捨て鼻眼鏡を星にする。

「こつちが、本物クマ。やっと渡せたクマね」

「要らねえモンならスペア作ってんじやねーよ」

やっと本物を受け取った完二はメガネ——サングラス型だ——をかける。

「くっそ、てめーら! いつか、ぜってーやってやつからな!」

「あははははは!」

「ふ、今度完二の武器を見繕ってからペルソナの訓練でもする。その時に仕返しを受け付けるよ。俺と花村でな」

「俺も!」

「よっしや!!」

「ちよ、おい!」

吼える完二の横で雪子が笑い、真はいつの間にか持っていた両手剣を鞘に入れたまま完二に突き付け、さらに陽介まで巻き込み彼は悲鳴を上げるが完二は拳をガンツと合わせてやる気満々の様子を見せ、陽介は悲鳴を上げるのであった。

第二十一話 g e t t o t h e l i c e n s
e

6月7日の昼休み。自称特別捜査隊二年生メンバーは机を突き合わせて昼食にカップ麺を食べていた。

「熱いカップ麺が腹に染みるわ……」

「そういえば、もうすぐ梅雨入りだよね」

「まだ早くねえか？」

千枝の幸せそうな言葉の次に雪子がそう話題にだし、それに陽介が反応する。

「梅雨で毎日雨になったら、毎晩『マヨナカテレビ』見ないといけな
いね」

「あー、考えなかった……ま、仕方ねーな」

雪子の言葉に陽介がうんざりした様子でそう漏らし、千枝もうぐむと何か考える様子を見せていると真が口を開いた。

「里中と天城は無理して起きておく必要はない。女性は夜更かしで肌が荒れるの気にするだろ？ 俺と花村、完二でどうにかする」

「あー大丈夫だって。人任せにする方が心配で眠れなくなるってば」

「うん。それは申し訳ないよ」

「そうか。ありがとう」

真は女子に気を遣ったつもりだったがその女子二名が心配ないと返し、真は一言お礼を返しておく。それに女子二人はこっちこそというように微笑んだ。

「話戻すけど、今雨を気にするつつつたら、へへ、『林間学校』だろ？」

陽介は楽しそうにそう言い、それに千枝と雪子が不思議そうな顔を向けた。

「なんでアレの話で、そんな楽しそうなワケ？」

「ん？ 林間学校は普通楽しむような行事じゃないのか？」

「あ、そっか。二人とも初めてだよね……」

千枝の言葉に真もきよとんとした様子を見せる、と雪子が気づいた

ようにそう言い、千枝もやれやれといたそうな浮かない表情を見せた。

「あんねえ、林間学校の目的、『若者の心に郷土愛を育てる』だよ?」
「建前なんて、そんなもんだって。フツーじゃん」

「そういえば俺もいくつか前の学校で、昔廃校になりそうだった学校を救った校長の偉業を称えるため、と銘打たれた『70時間断食』という行事があったな」

「いやそれはねーよどんな行事だよもはやただの苦行じゃねえか!？」

千枝の言葉を陽介は笑い飛ばすが次の真の言葉には即座にツッコミを叩き込む。

「やる事つつたら、その山でゴミ拾いだからね」

「ゴ、ゴミ拾い!? なんの修行だよ!？」

「いや、70時間断食と比べれば——」

「そいつはもういいっつーの!!」

千枝の言葉に陽介が叫び、修行という例えに真がそう言うとは彼もそっちにもツッコミを入れた。

「ま、夜だけはちよつと楽しいかも。飯盒炊飯とか、テントで寝たりとか」

「私達四人、班一緒だよ」

「一緒……」

千枝の言葉の次に雪子がそう言い、その言葉に陽介は少し黙った後突然ガタンと席を立ちあがった。

「まさか、夜も一緒!？」

「死ね! テントは男女別」

「まあ当然だな」

陽介の叫びに千枝が叫び返し、真もうんと頷く。

「言つとくけど、夜にテント抜け出すと一発停学だかんね!」

その言葉に陽介は一気にテンション下がったとばかりに席に座り直し、背もたれに身体を預けてぐたあ、という様子になる。

「ハア……なんかつまんなそーだな。せつかく面白イベント来たと思っただのに……」

「一泊だけだし、次の日はお昼前に解散になるから、すぐ終わっちゃうけどね」

「そういえば、去年は河原で遊んで帰ったね」

陽介の言葉に雪子がそう言うのと千枝も思い出したように返す。それに陽介がまた反応した。

「河原って、泳げんの？」

「あー、泳げんじゃん？ 入ってるやついるよ、毎年」

「そっか、泳げんだ……」

千枝の言葉を聞いた陽介もうつむきながら女子達にばれないようにニヤリと微笑み、千枝と雪子は顔を見合わせて首を傾げ合わせた。

まあそんなこんなで昼休みも終わり、午後の授業も終わりで放課後へと時間が進む。真が隣の千枝とだべっていると彼にこの教室の担任である諸岡が近づいてきた。

「おい、椎宮！ 今週は保険週間なのを知ってるな？」

「ええ」

「お前は委員会に入っておらん！ つまり、怠け者だ！」

「……まあそうですね」

諸岡のきつい言葉に真は反論するつもりがないのかすぐに認める。

「よって、病欠者の代わりに委員会に出てもらおうか！」

「え、んな勝手な——」

「分かりました。で、どの委員会ですか？」

その命令のようなきつい言葉に千枝が反論しようとするがその反論を聞く前に真は平然と頷き、席を立つ。

「あ、え？」

そのあっさりとした返答に逆に諸岡が詰まった。

「で、どの委員会ですか？」

「あ、うむ。保健委員だ。保健室に行きなさい……は、話はワシが通しておいた」

律儀に聞き返す真に諸岡はそう言い、どうも調子を崩されたというように首を傾げながら教室を出ていく。

「じゃ、ちよつと行ってくる」

「い、行ってらっしやい……」

真はそう言つてすたすと教室を出ていき、千枝は頬を引きつかせながらそう呟いた。

それから真は保健室を探すとそのドアを開ける。

「失礼します」

その言葉に保健室にいたメガネにツーサイドアップの髪型をした女子生徒が振り向く。

「椎宮君、だっけ？ 転校生の……何か怪我とかした？」

「いえ、諸岡教諭に病欠の生徒の代わりに委員会に出ると言われました」

「あくなるほど。よかつた。人手が足りないから困つてたところ」

ここに来た目的を簡潔に話すとその女生徒は嬉しそうに微笑んでそう漏らす。

「校内中を見回らないといけなくて、その間、ココが空っぽになつちやうんだ。椎宮君はココにいて、誰かが来たら、応対してくれる？」

「分かりました」

女子生徒の指示に真は軽く頷く。

「……と言つても薬いじつちやダメ。怪我とか病気の人が来たら救急車ね」

「……了解」

釘を刺してくる女子生徒に真は少し黙つた後頷いた。

「業者さんとか電話の応対だけ、お願い。滅多にないけどね」

最後にそう言い、保健委員メンバーは保健室を出ていくと校内に散つていった。それから真は保健室の長椅子に座っていたが、誰かくる気配に気づくと椅子から立ち上がり、ほぼ同時に保健室のドアが開いた。

「ども、サントー製薬の北尾です」

「はい、何かご用ですか？」

会社員風の男性——北尾に真は丁寧な口調で要件を聞き、男性は保健室内を見回す。

「つて、先生はお留守？ じゃあ伝言、頼んでいい？」

「あ、はい。ちょっと待ってください」

北尾の言葉に真は頷くと鞆の中から適当なメモ帳を一つ取り、ページ破くと鉛筆を取った。

「ガーゼを頼まれたけど、再来月の納品でいいのか、連絡が欲しいんだ」

「ガーゼの納品が再来月でいいのか、連絡ですね。かしこまりました」
「はい。それじゃ、お願いしますねー」

北尾の伝言をメモリ、確認。北尾は頷くと保健室を出ていった。それから少しして女子生徒達が帰ってくる。

「お疲れさまー。何かあった？」

「ええ。サントー製菓の北尾さんから、ガーゼの納品が再来月でいいのか連絡をしてくれと」

「ふんふん……了解。先生に連絡するね」

真はさっきの伝言を伝え、女子生徒は頷いて先生に連絡。少しすると先生からも連絡をしたという言伝を受ける。それから女子生徒が校内見回りをしたメンバーの方を向いた。

「それじゃ、校内の見回りの発表し合おうか。えーと、まず1班……」

あ、そうか。ここは一人で行ったんだっけ」

「そうつすよー、小西がいないから」

「小西？」

女生徒の言葉にメガネの男子生徒がそう言い、聞き覚えのある苗字に真がそう漏らす。

「あ、そっか、小西君か……仕方ないよ、あんなことがあったし……」

「うん、可哀想だよ。だからその分、アンタがやればいいーの」

「ヒデーなー！」

「……」

軽口みたいな言い合いに真はつい黙る。とその時保健室のドアが開き、一人の男子生徒が入ってきた。

「すみません、遅れて」

「いつ、いーよいよよー！」

その男子生徒の顔を見たメガネの女子生徒が慌てて首を横に振る。

「委員会、来なくていいんだって、ホント。おうちの手伝いとか、大変でしょ？ 代わりいるし、大丈夫だから」

「……けど、俺だけ……」

「じゃっ……じゃーさー。椎宮君と、ここの整理してくれる？ あたしたち、報告会するし、テキストにやって、帰っていいから、ね!？」
女子生徒は慌ててそう言うのと真の方を向く。

「そ、それじゃ、お疲れさまー!」

そしてそういうや否や彼女達は保健室を出ていき、真と件の男子生徒のみが保健室に残される。

「……一年の……小西です」

男子生徒——小西はそう漏らすと顔を少し彼から逸らす。

「三年の、小西早紀……知ってますよね。あの人の弟です」

「ああ……」

小西の言葉に真は合点がいったように声を漏らす。

「あんた……花村のツレですよね?」

「ああ。二年の椎宮真だ」

小西の言葉に真は頷いて名を名乗り、小西は少し表情を歪める。

「俺、嫌いです。花村も……あんたも」

「嫌われる理由が想像つかないが……まあいい」

小西の言葉に真はそう漏らし、小西はふんと鼻を鳴らす。

「……もう、帰っていいですか?」

「ダメだ」

「……家の手伝いあるんで。家、大変だから……分かりますよね?」

「やってきておいて自分のやるべき仕事をしないのは無責任じゃないか?」

「……」

小西の暗い言葉に真は毅然とした態度でそう言い、小西は彼に背中を向ける。

「じゃ、俺、棚の方やるんで……雑巾あります? ああ、そこか」

小西はそう言って棚の掃除と整理を始め、真も保健室の整理を始める。それから整理が終わっても誰も戻ってこなかったため二人は保健室

を出ていき、帰路についた。

それから次の日、あいにく雨が降っている中真は真面目に授業を受け、英語の時間に天城からバランスビームがなんなのかと質問されて平均台と答えたりして時間が過ぎ、放課後。帰る準備をしている真に陽介が近寄ってきて辺りを注意深く見回した。

「なあ、知ってつか？」

「何をだ？」

「後ろに乗せたりするとき、背中にギューってなるらしいんだよ……」

「背中に牛^{ギユウ}？」

「いやぎゆうじゃねーよ。ギューってというか、ムギユツて感じ？」
「？」

陽介の言葉に真は天然なかわざとなのかボケで返し、陽介はツツコミを入れた後またそんな曖昧な言葉を言う。それに真がこいつは何を言ってるんだ的な表情を向けると陽介はすまなそうな顔を見せる。

「すまん、先走った。要するにだな……」

陽介はそう言い、もう一度注意深く辺りを見回してから真に顔を寄せる。

「バイクの後ろに女の子乗せると、背中に密着するらしいって話だ」

「背中に牛^{ギユウ}か？」

「だからぎゆうじゃねーよ何回も言わすなっ！ お前笑ってんだろ絶対分かってんだろ!？」

真は今度こそ陽介の目的を完全に確信しながらさっきのボケを繰り返し、陽介は叫ぶ。

「まあ、分かっただけならいい。これからの男はバイクだと思っただよ。モテる男子の条件は、ズバリ行動力だろ？ つーわけでコレ、お前にやるよ。免許とんねーか、相棒」

陽介はそう言って原付免許の教本を真の机に置く。

「ま、予算的に原付しか無理だけど、少しは行けるトコも増えんだろ」

「……確かに、ジュネスや商店街に行くのに楽にはなりそうだな」

「そうそう！ 事件捜査中の俺達に、絶賛、相応しいステータスだと思

わない?」

陽介の言葉に真がそう言うのと陽介は相手を乗せるために言葉を紡ぐ。彼の目は完全に本気だった。

「ちーす、先輩。林間学校なんすけど……なんか取り込み中ツスか?」
と、そこに完二がやってきた。

「あー。ちつとな、バイクの話」

「バイク? どつか潰すんすか? カチコミなら手伝いますよ!」

「カチコミじゃねーよ。ていうか、カチコミってなんだよ」

バイクと聞いて一番に連想するのがそれなのは完二らしいといふべきなのかいわれないべきなのか、とりあえず彼の言葉に陽介がツッコミを返す。

「バイクの免許を取らないかという話だ」

「免許? 先輩ら持ってないんすか?」

真が説明し、それに完二がクエスチョンマークを頭上に出しながらそう聞き返す。と陽介が目を見開いた。

「ナニ? まさかお前、ナニゲに免許……」

「ねツス。まだ15ツスから」

「ねーのかよ!」

思わせぶりに言っておきながら無免許な事に陽介はまたもやツッコミを入れ、次に呆れたような目を見せる。

「お前……よくそれで族とやり合ったな。どやって追い回してたわけ?」

「んなモン、チャリで充分だろ」

「いや、充分じゃない……」

陽介の言葉に完二が何言ってるんだこいつみたいな表情で返すと真は小さな声でそう漏らす。

「とにかくお前は、『密着計画』には加えらんねーな」

「密着!? ……なんすか、密着って!」

「声でけーよ!」

陽介の言葉に完二が反応し大声を上げると陽介もまた大声で返し、少し声を潜める。

「だから！ これからの男のステータスに必要なのは、まずバイクと……」

「バイクと？……」

「……彼女だろ？」

「……」

陽介の言葉を聞いた真は少し前に殺された早紀の事を思い出す。

「……小学生の発想だな」

「うっせーよ！ せめて中学生と言ってくれ！」

しかし流石に言うのははばかりされたのかからかいの言葉を言うに止め、それに陽介は叫び返す。結局年下じゃねーかというツツコミは真は心の内に留めた。

「先輩ら、免許デケーの取るんスか？」

「ん？」

「なんか分かんねーけど、バイクと彼女って事は、2ケツになるんスよね？」

「そうなるな。だが予算の関係上原付……ん？ そういえばたしか……」

完二の言葉を聞いた真は原付にする予定だと返そうとするがそこで一つ思い出す。

「原付、2ケツ禁止ツスよ」

「あ、そういえば」

「……忘れてた」

完二の指摘に真は思い出したように眩き、陽介も忘れてたと漏らす。

「じゃあ作戦は開始するまでもなく頓挫だな」

「うっせーな！ いいのっ！ バイクあんだだけで、女子が寄ってくんのっ！ そんだけで充分プラスだろーが！」

真の冷静な言葉に陽介は叫び、再び声を潜める。

「……いいか、よく聞けよ。俺達に彼女がいないのは、この町で出会いを待ってる」からだ！ 小さな町でただ待ってたって、んなモン、出来なくて当たり前だろ？ 原付でもいいから、とりあえずバイクの

魅力で彼女作って！　いつかデケーバイク買って……密着すんだよ！」

「密着……」

「それにほら、俺らのセンスって、ちよつと都会的などこあるしき。本気で出会いを求めるなら、もつと大きな町が舞台じゃないとな。恋にはタイミングってなもんがあんだし、一日数本しかねー電車なんて待ってられるか！　バイクでさっそうと駆けつけて、近づく女の子にクールに声をかける……溢れ出す俺達のフェロモンで、たちまち仲良くなつちやうってわけさ」

陽介の熱弁に真は心の底からめんどくさそうな表情を見せる。彼の先輩である命の名言を借りるならば「どうでもいい」といわんばかりだ。

「フイ、フイレ？　モン？」

「フイレじゃねーよ！　里中かよ！　フェ・ロ・モ・ン！」

聞き慣れない言葉のせいかボケをかます完二に陽介は一文字ずつ区切って強調する。

「俺調べによると、バイクは男のフェロモンを増幅させる、ナンバーワンアイテムらしいぜ！」

「フェロ……モン……」

陽介の言葉に完二は頬を赤らめながら小さく呟く。

「お前……変態のリアクションだぞ、それ」

「んだとコラア！　いースよ！　だったら、やってやるっス！　巽完

二、オトコの魂、女どもに見せつけてやんぜコラアア！」

「お前は無理だつってんの！　とにかく誰にも言うんじゃねーぞ？　いろんな奴にマネされたら、俺らのフェロモン薄まりそうだしな」

陽介は完二に念を押しておいた後、真に顔を向ける。

「つーわけで相棒。免許のこと、叔父さんに言つとけよ？」

「そのつもりだ。許可が取れるかは別だがな」

「ウツス！」

陽介の言葉に真は頷き、完二も腕まくりをして声を出す。

「お前じゃねーよ！　てか、お前の叔父さん知らねーし！」

完二のリアクションに対し陽介はまたもやツツコミを入れた後、真剣な目で真を見る。

「俺は本気だからな……バイクあれば色んなところ行けるし、絶対楽しいって！」

「まあ、行動範囲を広げたり時間短縮に使えるそうなのは確かだな」
彼女を作るどころか、陽介のその言葉には真も賛同する。

「嗚呼……きつと、かけがえのない青い春が、俺達を待ってる！」
「ええ！ そっスね！」

陽介の言葉に完二が返し、二人は呆れたような目で完二を見た。
（今夜、叔父さんにバイクの相談を試みるか……）

そして真は心の中でそう思うのであった。

それから帰り道、軽く飯食って帰ろうぜという陽介の提案と完二の希望により愛家に行く事になり、三人は商店街を歩いていた。と、ブロロロロというエンジン音が後ろから聞こえ、そう思った瞬間エンジン音は三人を追い抜く。そしてそのバイクは豆腐屋の前で止まり、それに乗っていた二人の人——運転していた青年は雨に濡れてびしょびしょになっており、後ろに乗っていた人はレインコートに守られている——がバイクから下りる。

「ありがとうねえ、命ちゃん」

「いえいえ。買い物のででしたし、お年寄りを濡らせるわけにはいきませんから」

「でも悪いわあ。お風呂入っていきなさいな」

「じゃあお言葉に甘えさせていただきます」

バイクに乗っていた青年は命、後ろに乗っていたのはどうやら丸久豆腐店のお婆さんらしい。お婆さんは柔和に微笑んでレインコートを脱ぐと家に入っていく、多分お風呂を沸かすのだろう。

「先輩、どうしたんですか!？」

「あ、真君。ジュネスで買い物してたら久慈川さんが立ち往生してね。なんでも傘を間違えて持ってかれちゃったらしくって、ジュネスから傘なしで歩いてたら風邪引いちゃうかもしれないじゃない？」

だから送ってきたんだよ」

「み、命さんが濡れちゃってますけど……」

「大丈夫だって、僕強いから」

ヘルメットを脱いだ命はそう言ってバイクにもたれかかっただけと笑う。それは濡れていてかっこ悪いなどという事を一切思わせない。むしろ濡れているからこそ何かの魅力を見せる。正に「水も滴るいい男」という言葉を的確に表現していた。

「カ、カツコイイツス！ 大先輩!!」

「あはは、ありがと……って、大先輩？」

「椎宮先輩の先輩なんスよね。なら大先輩ツス！」

「あー……そういう理屈になる、のか？」

感動したらしい完二の言葉に命は笑ってお礼を返した後彼が自分を示した言葉に首を傾げ、完二はそう一言で説明、それに陽介は頭をかいた。

「命ちゃん、上がって身体を拭きなさいな。お爺ちゃんのお古だけを着替えも用意したから」

「あ、どうも。じゃあね、皆」

お婆さんの勧めに命はまた微笑んでお礼を言った後真達にお別れを言っただけ丸久豆腐店に上がる。

「……うむ、やはりバイクを持っていけばモテる理論は実証された！」

「なに言ってるの？」

「いやだって、かなり年上だけどそういうことにならね!!」

「……でも先輩がモテるのって月光館学園時代からそうだけ？」

「なんだそりゃ!? 羨ましい!!」

真と陽介がそう言い合いながら、三人は愛家に向けて再び歩き出した。

それから食事を終えて、真は家へと帰ってくる。

「ただいま」

「おう、お帰り」

その声に戻す男性の声。どうやら遼太郎は既に帰ってきているらしい、と、真はさらにもう一人人がいることに気づく。

「おじやましてまーす」

「ああ、足立さん。こんばんは」

遼太郎の部下の足立だ。

「キミも食べる？ ウナギ。スーパーのだけど」

「悪かったな」

「う、旨いつす！ 特売品とは思えないですよね〜！」

足立の言葉に遼太郎が機嫌悪そうにそう言うのと足立は慌てて取り繕い、遼太郎は呆れたように足立を見た後真の方を見る。

「すまん、コイツ毎日カツプ麺でな。ズルズルうるせえから、呼んでやったんだ」

「強がっちゃって。ホントは堂島さんも、同僚と飯食べたかったんでしょ？」

「馬鹿言ってるな」

遼太郎の言葉に足立がからかうような口調で言うが遼太郎は低い声でそう返すのみ。しかし足立はまた明るい声を出した。

「でもウナギっていいチョイスだったでしょ!? 菜々子ちゃんも喜んでたし。お父さんの株も『ウナギ』のぼり。なーんて、はは……」

その言葉に二人は無言になり、呆れた目で足立を見る。

「す、すべっちゃったかなー。ウナギだけに……」

「いいからとつとと食え」

「はい〜」

遼太郎がそう言うのと足立は再び食べる箸を進める。

「でも菜々子ちゃん偉いなあ。食べたらずぐ宿題なんて……せつかくのウナギなんだから、もつとゆっくり味わえばいいのに」

「お前がサボりすぎなんだよ。少しは見習え」

「耳が痛いッス」

足立はそう呟いてまた食事を進めていく。真は遼太郎にバイクの相談をしなければならぬが、来客なら帰ってからにした方がいいかと考える。

「……どうした？」

と、遼太郎はその視線に気づいて彼の方から真に問いかけてきた。

「ああ、今日学校でバイクの免許を取らないかって友達と話題になったんですが……」

「バイク？ 原付か？ そうか、お前の歳ならもう乗れるんだな……けどなあ……」

その言葉に遼太郎は心配そうな声を漏らす。彼も警察、若者のそういう事故にはよく触れているのだろう。

「まーまーお父さん、そう言わずに。ここじゃバイクも欲しくなりますって」

と、足立が助け舟を出してきた。

「キミの気持ち分かるよー。同じ『元・都会人』としてさ。電車だつて少ないし、徒歩じゃいくらなんでも不便すぎるよねえ？」

「まあ『すぎる』』というほどでもないですが、毎日ジュネスに食材やらなにやら買い出しに行くのはちよつと負担が大きいのは事実です」
「そうは言ってもな……」

足立の言葉に多少反論しつつもバイクがあれば便利だという事は言っておく。しかし遼太郎はまだ賛成とは言えない表情だった。

「そーいや堂島さん、前に言つてませんでしたっけ？ 若い頃はバイクで相当無茶を……」

その言葉に遼太郎は焦つたように足立を睨む。

「阿呆、余計な事言うな。食い終わつたら、サツサと……」

と、言い終える前に突然彼の携帯が鳴りだした。

「つたく……」

彼はそう毒づいて立ち上がり、真達に背を向けると電話に出る。

「俺だ……分かった、すぐ行く」

仕事の用事だろうか。遼太郎はそう言つてすぐ電話を切った。

「酒飲まなくてアタリかよ……足立、例の資料確かお前持ちだったな？」

「資料？……あゝ。あの不審者、また出たんスか？」

「いちいち口に出すな。戻るぞ、先に車乗つてろ」

「も、戻るって、署にですか!! まだ肝吸いが……」

署に戻るといふ言葉に足立はブーイングを出すが遼太郎が睨むと

彼は慌てて割り箸を持ったまま家を出ていく。それを見届けてから遼太郎は真を見た。

「バイクの話だが……自分で決めたことか？ 誰かに影響された、とかじゃないんだな？」

「ええ」

「足がないと不便つてのは分かる。だが2輪は危険も多いんだ……分かるな？」

「安全運転を心がけます」

「ああ。だが簡単に許すつてのもの……」

遼太郎は悩んでいるように頭をかき、真が少し不安そうな顔を見せると遼太郎は僅かに笑った。

「そんな顔するな。お前が本気なのは分かった。まずは免許だろ。無事を取れたら、また話を聞いてやる」

「あ、はい！」

「じゃ、悪いが留守番頼むぞ」

遼太郎はそう言つて家を出ていく。と、玄関の戸が閉まると同時に真の携帯に着信が入り、真は相手が陽介だと確認して電話に出る。

「よっ、俺だけど！ バイクの件どうだった？ なんか気になっちゃまってる」

「とりあえず免許を取る。話はそれからということになった」

「マジか!? ならすぐ取りに行こうぜ！」

「はあ!？」

「猛勉強しねーと……絶対、一緒に合格しようぜ！ 明日、免許試験場行こうぜ！」

「お、おう……」

いきなり話が免許取得に進み、陽介は言い終えると共に電話を切る。それから真は部屋に戻り、陽介にもらった教本で原付免許取得のための勉強を始めた。

そしてその翌日の朝。真は普段通り学校に行っていた。

「ふああ……」

後ろの方から聞き覚えのある声での欠伸が聞こえ、真は足を止め

る。

「おはよーさん」

と、いかにも眠そうな陽介が追いつき、彼が横に立つのに合わせて真も再び歩き出す。

「眠そうだな」

「ベッド入って、細かいとこ気になって起きて本見直して、の三拍子がエンドレスでさ……結局ほとんど寝てねーよ……」

陽介はいかにも眠そうにそう呟くが、やがてにっと笑う。

「まあでも、やるからには一発合格だよな。どうよ、自信は？」

「任せておけ。先輩に電話で色々教わったからな」

「そ、その手があったかっ!!」

真の言葉に陽介は愕然としたように叫んだ。

「とにかく試験、遅れないように行こうぜ。学校終わったらソツコーだかんな」

「分かった」

彼の言葉に真は了解と頷き、互いに教本にあった問題を出しあいながら学校へと向かう。

それからあつという間に時間が過ぎて放課後。真は友達の誘いや部活の誘いも先約があると振り切つて陽介と共に試験会場に飛び込み、免許の試験を受ける。そこで走り出したペンは止まらないとばかりに一気に問題を書き切り、真は余裕で試験に合格、原付免許を手に入れる。

「へへっ。狙い通り揃つて一発合格だぜ!」

商店街のバス停。バスに乗つてここまで戻ってきた陽介は嬉しそうに微笑んでそう叫ぶ。

「つーか割と余裕だったな。ちょい気合入れすぎたつーか……」

「まあな」

二人はそう話し合いながら商店街の方に歩みを進める。

「……叔父さん?」

「お、ほんとだ」

と、ガソリンスタンドの前に遼太郎が立っているのに真が気づき、

陽介もそれを視認すると彼に走り寄る。

「こんちやつすー。仕事ですか？」

「ガソリン入れにな。あとまあ、ちよつとした野暮用だ」

陽介の問いかけに遼太郎はそう返し、次に彼の方が陽介達を見据えた。

「お前達、どこ行ってたんだ？」

「免許取ってきました」

その言葉に隠す必要もないのか真はあっさり和白状し、原付免許を提示。それに遼太郎がぎよつとした目を見せた。

「お前、もう取ってきたのか!？」

そう叫んで真の見せてきた原付免許をまじまじと見て、やがて呆れた顔を見せた。

「原付は筆記だけだが、にしたつて、早すぎるだろ……やれやれ……こりや姉貴をなんて説得するか、考えておかないとな……」

「いいんですか？」

「免許証持つてこられちゃ、ダメなんて言えねえだろ？ たった一日で取ってきたお前の熱意を信じることにするさ」

遼太郎の呟きに真が驚いたように漏らすと彼はそう言つてふつと笑い、それを聞いた陽介が嬉しそうに真の肩を叩いた。

「やったな！ お墨付き出たじゃん！ 俺も帰つてカタログ読み込まねえと！ お前にも貸すからさ！」

「いや、真は必要ないだろう」

「え？」

遼太郎の言葉に二人が不思議そうな声を漏らす。

「堂島さーん。満タン、丁度今終わりましたー」

と、ガソリンスタンドの中から足立が白い原付を押しやってきた。

「あれっ君達、偶然だね。堂島さん、こりやサプライズ中止ですか？」

「馬鹿言え。元々そんなつもりじゃねえよ」

「サプライズ？」

足立のにししと笑いながらの言葉に遼太郎が呆れたように返し、陽介が首を傾げる。そして遼太郎は微笑を浮かべてバイクを見た。

「俺の愛車だ。バイク屋で直させた。年季は入ってるが、なかなかいいぞ。ガソリン入れてみたが、まさか今日の内に渡すことになるとはな……」

「うええっ!? まさか君、もう免許取ったの!? 最近の若者は行動力あるな……」

遼太郎の言葉に足立は遼太郎と同じぎよつとした目で真を見る。

「つて、堂島さん、まさか……」

「おう。真、これをお前に譲る」

「……もう乗らないんですか?」

陽介のまさかという言葉を遼太郎は肯定、真に譲ると言い、それに真は念のためにと聞き返すと彼はふつと笑った。

「いつかはと思ってたんだが、仕事じゃ車ばかりだし、機会もなくてな。埃かぶらしとくより、お前に使ってもらった方がいい」

そういう遼太郎はとても穏やかに笑っていた。

「署じゃ難しい顔してばかりなのに、すっかり優しいパパさんっすねー」

「うるせえぞ足立!」

「すーぐ怒鳴るんだから……」

そこに足立がからかいの言葉を入れると遼太郎は怒鳴り声を上げ、足立は怯えたように空笑いしながらそう漏らす。

「けど僕らも、もつと小回りきく足が欲しいですよ。例の『不審者』だって、いつ出くわすかもしれないんだし。プロ並みの撮影機材しよって、天城屋からこの辺まで、他人んち撮って歩いてるんでしょ? 細い道も知ってるみたいだし、四輪だけじゃ……」

「余計な事喋ってんじゃねえ! 車戻ってろ!」

「は、はいはいっ!」

足立の口を遼太郎は一喝で閉じさせ、足立は慌てて走り去っていく。

「まあ……なんだ」

と、遼太郎はどうにも気まずそうな笑みを真と陽介に見せた。

「俺も免許取ったのは、お前達くらい歳のなんだ。親に隠れて、勝手に取っちまってな。乗り回してるとこ後で見つかって、親にしこたまぶん殴られたよ……はは……菜々子には言うなよ？」

「はい」

「ははっ、なんか意外っすね」

彼の悪戯っぽい笑みでの言葉に真と陽介も微笑みながら頷く。と、彼は次に厳しい目を見せた。

「あまりうるさく言いたくはないが、くれぐれも安全運転しろよ？」

2輪を始め車つてのは動く凶器なんだ。事故を起こせば怪我をするのはお前達だけじゃない時もあり、そこに未成年だのなんだのいう言い訳は通用しない。免許を取ったからにはそれなりの責任があると、いうことを忘れるな」

「は、はい！」

警察として、そして真の保護者としての厳しくも優しい言葉。それに二人は背筋を伸ばして返した。と、そこにブロロロロという昨日と同じエンジン音が聞こえてきた。

「あれ、真君に花村君」

そして彼らの隣でバイクが止まった。

「先輩！」

「あ、堂島さんでしたっけ？ こんにちは」

「あ、ああ。確かジュネスでバイトしてる……」

「利武命です。真君がここに来る前通っていた高校で彼の先輩やつてました」

命はヘルメットを脱いで遼太郎にも挨拶し、遼太郎が呟くと彼は改めて名を名乗る。そして彼は遼太郎の横にあるバイクに目を向けた。

「バイク……堂島さん、乗るんですか？」

「いえいえ。実はね命さん、俺達原付免許取ったんですよ！ ほらこれ！ で、このバイク、堂島さんのをなんと椎宮が譲り受けることになったんす！」

「へ。そりやおめでどう」

陽介はそう言つて嬉しそうに原付免許を見せ、命もへくと呟いて免許を見る。

「そーいや命さんのバイクもかつこいいつすよね。どこのなんですか？」

「え？ さあ？ 先輩がちよ……先輩のお下がりだから」

「そーなんすか？」

命は自分のバイク——というか美鶴のバイクを調査にあたって借りた——を見ながらそう言い、陽介も頭をかく。

「身近に免許取つてるやついるじゃねえか……」

と、遼太郎はやはり誰かに影響されたんじゃないかと疑うような目で真を見、真もぎくつと肩を揺らすと彼はふつと笑った。

「冗談だよ。ただ影響されただけで一日で免許取れるはずもねえからな」

「ほっ……」

「じゃあこれから二人とも原付に乗るんだね？ バイクは危険なんだからこういう場所では安全運転しなきゃいけないよ？ 未成年だからって言い訳は——」

「あーいやいやいいつす！ その説教はさつき堂島さんから充分聞きました！」

命は遼太郎と同じ説教を始めそうになり、陽介が慌ててそれを遮つた。と、命はにこりと微笑む。しかしその笑みを見た陽介の脳裏に「嫌な予感」という文字がよぎった。

「じゃ、バイクもある事だし早速今度人気のないところで軽く練習してみようか。頭で動かし方分かってても身体が動かなきゃ意味ないからね。事故起こされたら被害者の関係者にも悪いんだし、僕が目が見えない内は事故起こすような腕前で人が多い道に出す気はないからそのつもりで」

「えええつ!?!」

「ふっ、そりゃあいい。利武さん、うちの甥とその友達を頼みますよ」「ええ。事故を起こしてからじゃ遅いですから、まずは手近な芽を徹底的に抜いておきましょう」

命の意外にスパルタな面が表に噴出。陽介が素っ頓狂な声を上げると遼太郎が命の提案に賛同。命もにやりと不敵な笑みを浮かべて頷いた。

「……ま、間に合うかな……」

「先輩は結構スパルタだからな。覚悟しておこう」

陽介ががくつと肩を落としながら眩き、真も苦笑気味にそう返した。

第二十二話 コミュニティ、皇帝達との絆。

6月9日。真と陽介は原付免許を取得し、その後真はガソリンスタンドで会った遼太郎から彼が昔使っていたバイクを譲り受けることとなっていた。

「あつ」

「どうした？」

と、真が突然声を漏らし、遼太郎が聞き返すと真はしまったというように頭をかいた。

「携帯電話、学校の机の中に置きっぱなしにしてたの忘れてた……」

「あー、そういやお前学校出てから一度も携帯いじってねえな」

「なにやってんだ。ったく……とつとと取ってこい。バイクは俺が家まで持ってってやるから」

「なんなら学校まで送ろうか？」

「あ、じゃあお願いします。花村、また明日」

「おう！」

真のしまったといわんばかりの言葉に陽介が思い出したように頷くと遼太郎も呆れたようにそう言い、命が学校まで送ろうかと申し出ると真は好意に甘え、陽介に挨拶すると命の後ろに飛び乗り、ヘルメットを被る。そしてバイクは一気に走り出した。もちろん交通安全を考慮したスピードになっている。

そしてバイクはあつという間に八十神高校前の坂までやってきた。

「じゃ、僕はもうすぐバイトだから」

「はい、ありがとうございます」

命はそう言って出発し、真は一言お礼を言ってから学校に上がっていく。

「あれ、椎宮君。今日急いでたみたいだけど……どうしたの？」

と、今から帰ろうとしていたのか靴箱に立っていた雪子が首を傾げる。

「いや、ちよつと急用があつてな。天城はこれから帰るのか？」

「うん。今日は家の手伝いはいいからって言われてたから、図書室で

勉強してたの……一人で考えたいこともあったし。じゃあね」

「また明日」

雪子はそう言って靴を履くと学校を出ていき、真も挨拶を返しておくと上履きに履き替えて二階に上がる。

「あー、もう学校ヤだ。巽が来るとかホント許せない」

と、階段の近くでそんな声が聞こえ、真は眉をひそめて階段を上がる。どうやら一年の女子生徒のようだ。

「どうかしたのか?」

「ん? あ、二年の転校生の……ねえ、あんた一年の巽完二って知ってる?」

「ああ」

キツめな印象を与える女子生徒の言葉を真は首肯する。知り合いというか既に彼にとっては友達と言えるだろう。

「あいつ、チーム作ってカツアゲしてんだって。同じクラスとかマジ最悪だし。何か実習棟の方でコソコソしてるしき。超怖い」

「完二がカツアゲ?……どこでそんな噂聞いたんだ?」

「知らないわよ。でもどーせやってるに決まってるんじゃない」

真の言葉に女子生徒は吐き捨てるようにそう言って、言いたいこと言って満足したのか階段を下りていく。それを見送った後真は教室に入って忘れていた携帯電話を取り、さっきの噂が気になったのか、実習棟へと足を延ばす。

「……」

確かに完二がいた。なんか被服室の窓からものすっごい睨んでいるような形相で教室内をガン見している。

「……完二?」

「おあつ!」

突然声をかけられた完二は大袈裟に飛び跳ね、真を見ると目を丸くする。

「つつ、椎宮先輩!? べ、別にノゾいてるんじゃないからね! 全然ツ、ちげーかな!!」

「……完二、ちよつといいか?」

顔を真っ赤にしてぶんぶんと首を横に振り叫ぶ完二に真は真剣な顔をして問いかける。

「な、なんスカそんな怖エ顔して……なら、場所変えましょうや」

完二は真の様子から何かを察したのか場所を変えようと提案。二人は鮫川の土手へとやってくる。

「……で、なんスカ、話って？ テレビのことツスカ？」

「いや。少し話を聞きたいだけだ」

「なんスカ、ケーサツみたいに？」

「警察……か。たしかにそう聞こえるな」

真の言葉に完二が聞き返すと真はふっと笑う。

「で、なんスカ？」

「いや。さつきある女子生徒からお前がカツアゲグループを作って恐喝してるって噂を聞いて。確かめに来たんだ」

「あ？……は？ カツアゲ？ え、俺が!？」

単刀直入の言葉に完二は一瞬呆けた後その言葉の意味を頭で理解するとまた目を丸くして自分を指差す。

「せ、先輩、俺を疑ってんスカ!？」

「見損なうな!」

「す、すんません!……あ、あれ？ なんで怒られんだ？」

その焦ったような言葉に真は一喝。完二は反射的に頭を下げた後なんで自分が怒られたのか理解できないようにクエスチョンマークを頭の上に浮かべた。

「えつと、でも俺やってねえツスよ!」

「分かってる。本当に疑ってるのなら別の手段で証拠を押さえるからな、信じてるから直接聞いたんだ。疑われてると思ったならすまない」

「あ……いや、俺も別に本気で先輩が疑ってるなんて疑ったわけじゃ……俺こそすんません」

完二の焦った言葉に真は真摯な態度で返し、完二もごによごによと呟いた後どこか浮かない様子を見せた。

「……けど、そんなウワサ立つのも、やっぱテメエ自身のせいツスよね

「……これじゃ、先輩らにも迷惑かけつかも……」

「迷惑だなんて思わない。そんなふざけた噂に惑わされるほど俺は暇じゃないからな」

「先輩……その……」

真の言葉に完二は感動したように声を漏らす。そして決心したように強い光を宿した目で真を見た。

「ヒマン時でいいんで、ちっと、話とか……聞いてもらっていいツスカ？ 何かモヤモヤしてんスけど……俺、バカだから分かんないんスよね」

「それぐらいなら喜んで引き受けよう」

完二の相談を真は笑みを浮かべながら引き受ける。彼なりに自分を変えようとしている様子を感じ取り、真は彼との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たな絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、*“皇帝”*のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。すると完二は何か考える様子で空を見上げた。

「先輩らに迷惑かけねえには……えーと……」

どうやら早速、自分なりに何が出来るかを模索しているらしい。

「そうだー」

そして彼は一計を思いついたのかぼんと手を打って真を見る。

「とりあえず、カツアゲグループとかツブしときますか？」

「いや、もっと平和的にだな……」

しかし思いついた手段が結局暴力的で、真は引きつった表情でツツ

コミを入れた。

それから土手の草原に座って完二の相談に乗った後、真は帰路につく。

「ただいま」

「遅かったな」

「あ、その後ちよつと友達と話し込んで……」

「そうか……」

先に帰りついていた遼太郎の言葉に真はそう言葉を濁し、遼太郎も納得したのか新聞に目を落とす。

「お兄ちゃん！ お父さんのオートバイに乗るの？ かつこいー！」

「ありがとう」

遼太郎から話を聞いたのだろう。菜々子はぱあつと輝くような笑顔でそう言い、それに真はお礼を返す。

「これでぼーそーぞくだね！ いつテレビでるの？」

「いや、そんな予定は……」

しかしその次の彼女の無邪気に微笑みながらの言葉には頬を引きつかせるしか出来ず、遼太郎も新聞で顔を隠してはいるものの参ったような様子を見せていた。多分彼も菜々子から無邪気な笑顔でそれを聞かれ返答に困ってしまったのだろう。それから真は菜々子を口八丁で誤魔化した後二階の自分の部屋へと戻っていった。

それから次の日の放課後。雨は降っているが少々小降りの中、真、陽介、命は堂島家前に集合していた。命はバイクを用意している。

「じゃ、ちよつと訓練してみようか。雨降ってるから少し近所を乗り回す程度にね」

「は、はい！」

「じゃあまず真君から。花村君は僕の後ろに乗って」

「分かりました！」

命が教官役のバイク訓練だ。遼太郎から安全運転を心がけるよう言われ、原付免許を取ったと知った命が教官役を買って出たのだ。真は叔父から受け継いだバイクに乗ってヘルメットを被り、陽介も命の予備ヘルメットを被るとバイクの後ろにとり、少し遠慮がちに命にし

がみつく。

「花村君、もっとしつかり抱きつかないと。運転手に身体を預けるくらいのは気持ちじゃないとむしろ危ないよ?」

「あ、はい!……うお、たしかにこりや密着するわ……」

「何か言った?」

「なんでもないっす!」

陽介は自分が作戦の女性役(予定)の立場になってその密着具合に驚き、真はその間にエンジンをかける。そして真を先頭に、命がその後を続くようにして二台はスタート。真のぎこちない運転に命が後ろから声をかけたりアドバイスを送り、三人は真がさんざん迷った挙句に駅前へと辿り着いた。

「ふう……」

「ご苦労様。じゃ、その自販機でジュース買って、少し休憩したら今度は花村君が真君のバイクに乗って帰ってみようか」

「あ、はい! 椎宮、バイクのキー貸してくれ」

「ああ」

ヘルメットを脱いで緊張が解けたように安堵の息を吐く真に対し命はいつものようにそう言い、陽介は頷くと真からバイクのキーを借りる。そしてジュースを飲み、少しだけべつべつの休憩してから帰り道につき、再びさんざん迷って三人は堂島家へと戻ってくる。そして命はそのまま陽介を自宅に送る。また明日練習しようと言って乗せていき、真はそれを見送ってから家に入っていった。

そして土曜日。真は、命が急に午後からシフト入らなければいけなくなつた——なんでも他のバイトが突然今日は無理だと言いだしたらしい——という旨を陽介から聞き、今日はバイク訓練は中止だという事を聞くとしようがないためなんとなく商店街に出てくる。

「あ……」

と、マリーがベルベットルームから出てきているのを見つける。

「ね、どっか行く?」

「……ああ、いいぜ」

マリーの言葉に真は少し考えるがどうせ今日もバイク訓練のため

予定を入れていなかったため領く。

「うん、行こー！」

それにマリーは嬉しそうに頷いた。

「今日はね、〃街〃がいい。色んなのあるって聞いたよ？ だから連れてって」

「街……沖奈でいいかな」

マリーの注文に真は少し考えるとマリーを連れ、沖奈市へと向かった。

「ここは〃街〃なんだ。ふくん……」

彼女はきよろきよろと珍しそうにあたりを見回した後、真を見る。

「変なの。広いのに狭い。四角と……灰色ばかり。ね、街は何するト？」

「まあ、色々遊ぶところかな」

「ふうん……」

マリーの質問に真はそう返し、マリーはそう呟くとジト目を彼に見せる。

「キミって遊んでるの？ じゃ〃遊び人〃だね。だからたまになんてしょ、あの部屋来るの。さいあくきらいばかさいてー」

「んな事言われても……というか遊び人の意味が……」

マリーの言葉に真は困ったように呟く。

「こっちの身にもなってよ……待ってるのに」

彼女はそう言って頬を膨らませており、真はどうしようかと頬をかく。

「あれ、椎宮君？ あ、マリーちゃんもいるじゃん！」

と、突然声をかけられ真はそっちを向く。声の方にいたのは千枝と雪子だ。千枝はおーいと手を振って二人に近づき、雪子は見慣れないマリーに視線を向けながら千枝と一緒に二人に近づく。

「こんにちは。えっと……友達？」

「あ、そっか。雪子は会った事ないっけ。この子、マリーちゃんって言うってね、前に一緒にご飯食べたんだー」

千枝が雪子にマリーを紹介し、次にマリーを見る。

「あ、こっちは天城雪子。あたしらの仲間だから」
「……なかま」

千枝の快活に微笑みながらの言葉にマリーはそう呟き、その間に雪子は真を見た。

「あなたの知り合いって事は、この辺の子じゃないよね？ やっぱり都会から遊びに来てるの？」

「あくそっか、それで沖奈市？ はは、そーだよ。あたしらの地元、何もないからさ」

雪子の言葉に続いて千枝もそう言い、マリーは真の方を見る。それに真もマリーの方を見返した。

「……今日は赤もいる。何、この緑と赤」

「えっ？……緑と……赤？……緑と赤!？」

「あ、あはは……そっか、あたし前も緑だったかも……」

マリーの言葉に雪子が驚いたように叫ぶと千枝も頬を引きつかせながら呟く。それにマリーは首を傾げた。

「別に、嫌な事言ってるよ。似合ってるし」

嫌味とはとても思えない純粹な言葉に、二人は顔を見合わせると嬉しそうに笑う。

「あ、ありがと。褒められてると思わなかった」

「いい子だね。間違いないよ」

二人ともうんと頷いてそう太鼓判を押す。

「でも赤の人は赤ばっかって感じ。緑の人は……ずっと同じ？」

「!?!」

しかしその直後マリーはそう言い、二人は驚いたようにのけ反り千枝は苦笑気味にうつむいた。

「あ、相変わらず痛いトコ突くね……」

「……でも当たってる」

「ううん、違うよ」

二人ともがくっとうつぶむいており、それにマリーが首を横に振る。

「何か……勿体ない。人間は服変えられるでしょ。もっと色んなの着ればいいのに」

「そ、そういうものかな。あまり自分で選んだりとか、しないから……」

「そうだ！」

マリーの言葉に雪子が困ったように声を漏らすと千枝が思いついたというように声を出す。

「あたしたち、今から服買いに行くんだけど、椎宮君も一緒に行かない？ もちろんマリーちゃんも一緒にさー！」

「ちよつと千枝、いきなり誘ったら迷惑かもしれないよ？」

千枝の言葉を雪子がたしなめる。

「いや、俺はマリーが良ければ構わない」

「え……別に……いいけど」

「よし決まり！ ホラ、早く行こー！」

マリーの言葉に千枝はそう言い、女子二人がマリーを挟んでまるで連行するように連れていく。それから四人は沖奈駅前のショップへと入った。そこで千枝と雪子は楽しそうに服を選んでいるが店内は女物の服やアクセサリーがメインらしく、真は手持無沙汰になっていた。

「ね、このシャツどうかな？ いい色じゃない？」

そういう千枝は緑色のシャツを手を取っている。

「それは『緑』じゃないか？」

「うん、『緑』だけ……」

真に続いてマリーもツツコミを入れ、千枝ははっとした表情でシャツに目を落とす。

「おわ、ホントだ！ なんてあたし、緑ばつか買っちゃうんだろ!？」

千枝はそう言っただけでシャツを戻した後マリーを見る。

「マリーちゃん、好きな色は？ 分かった。青でしょ」

「や、特にない……けど」

「そう？ だってなんか青っぽいイメージだけど……帽子とかバッグとか」

マリーは千枝の微笑みながらの言葉にタジタジになっていた。

「このスカートどうかな？ ちよつと大人っぽいかも」

と、スカートを選んでいた雪子が声をかけ、真は今度はそつちを見る。彼女は真紅のスカートを手に取っていた。

「……す、凄いい色だな」

「うん……赤だよね」

「そつか、単色っていうのがダメなのかな？ 私、すぐシンプルなの選んじやうから……」

真が言葉を選び、マリーが単刀直入に言うのと雪子はそう呟いてスカートを元の場所に戻す。

「うん、ありがとう。ちよつと冒険してみる、脱シンプルで」

「あ……うん、そう」

雪子はなんかちよつとずれているような気がする返答を見せてまた選び始め、真とマリーは顔を見合わせると心なしか困った様子を見せる。

「これはこれは？ あたしつぽくない？」

「……また緑？」

「これはどうかな？ 脱シンプル！」

「色ありすぎ。目眩するよ」

千枝と雪子のファツションセンスにマリーは次々と辛辣なツッコミを入れていく。

「このスカート可愛い！ これとこれ合わせて……ね、どうかな！」

千枝がそう言って選ぶのは黄色のシャツと青いスカート。雪子もそれを見にやってきた。

「いいんじゃない？ 一応、緑じゃないし……」

「でも、黄色と青つて……混ぜると緑……だよね？」

マリーが頷くと雪子がそう呟き、三人は困った顔を見せる。

「あ、あはは……ホントだ。なんだろ、無意識の欲求？」

「わざとじゃないんだ……」

千枝の言葉にマリーはそう返し、彼女らはまた服の選択を再開する。

そして買い物を終えた後、彼らは駅前へと戻ってきた。

「……」

「なくんでないかなあ？ あたしのサイズだけ」

「しようがないよ、また来よう。次は入荷してるかもしれないし」

千枝は残念そうにがくつと肩を落しながらそう呟き、雪子が元気づけるようにそう言うのと千枝は元氣よく頷いた。

「じゃあそんな時はさ、またこの四人で来ようよ、ね！」

「マリーが良ければ喜んで」

「え……私も？ なんで？」

千枝の言葉に真は頷いてマリーに促すと彼女は驚いたように聞き返す。

「なんでって？ 友達じゃん、あたしたち」

「……ともだち？ そうなの？ いつから？」

千枝のあつけらかなとした言葉にマリーはきよとんとした顔で聞き返し、それに千枝は「はうつ」と言いながらのけ反った。

「ひよつとしてマリーちゃん……楽しくなかった!? 今日とか、この前も……め、迷惑だった？」

「え……迷惑じゃないよ。ともだちって言うから訊いただけ」

千枝は落ち込みそうな表情でマリーに恐る恐るという様子で尋ね、マリーはそう返した後、頭の上にクエスチョンマークを浮かべたような様子を見せる。

「……ともだちになると、何か意味あるの？」

怪訝な様子を見せているマリーに千枝はうくと頭を悩ませていた。

「そりや……分かんないけど。と、友達の意味？ うくと……」

「友達になれば分かる」

「うん……意味は、あると思うよ。一人じゃ無理だと思った事でも、二人ならできる事もあるじゃない」

千枝が頭を悩ませていると真がそう言い、雪子もそう続けてにこつと笑う。

「ほら、今日だって、マリーちゃんにお洋服見てもらったし」

その言葉にマリーはうつむいた後首を横に振る。

「……わかんないよ。だって……」

マリーが何か言おうとしたその時、千枝が思い出したように顔を上げた。

「そうだ！ 欲しいDVDあったんだ！ 早く行こう、売り切れちゃうー！」

「カンフー映画だよね……売り切れないと思うけど」

「いいからいいから！ ほら、全員駆け足くっ！」

千枝はそう言って飛ぶが如く走り出し、雪子もその後を追って歩き出す。

「え……私も？」

「早く行こう」

「意味わかんない……行きたくないとかじゃなくて」

そういうマリーは戸惑ってこそいるが、嫌ではなさそうであった。

「ね、あの人達ペルソナ使うでしょ？ キミと一緒に、『真実を追う』人達……」

マリーは大分先にいる千枝と雪子を見ながら呟き、次に真を見る。

「一人じゃ無理でも二人なら出来るの？ ともだちだから……」

そう言って、彼女はさっきの千枝と雪子の言葉を考えていた。

「おーい、二人ともー！ はくやくくくー！」

千枝が両手を大きく振って飛び跳ねながら二人を呼び、マリーはうつむいて少し拍を置いた後うんと頷いて歩いていく。真もその後を追って歩いて行き、それから四人で沖奈市を見て回ってから帰っていった。そして家で少し封筒貼りのバイトを進めてから真は眠りにつく。

その翌日、6月12日。真はやる事もなく、通信販売番組「時価ネットたなか」を見ていると突然携帯が鳴り始め、真はテレビを切ってから電話に出る。

「もしもし？」

「あ、もしもし、天城ですけど……」

「ああ天城。どうしたんだ？」

「急にごめんね。もし今日、時間があれば出てこれないかな？」

「ああ、いいけど」

「うん。じゃ、後でね。バス停で待ってて」
「おう」

雪子からの誘いを受け、真は電話を切るときさっさと荷物を準備し——と言っても財布や携帯を手提げ袋に入れるくらいだが——菜々子に一言言ってから家を出ていった。そしてバス停で雪子と合流し、二人は商店街の本屋「四目内堂」に行く。

「椎宮君、何買ったの?」

「ちよつと漫画」

「へく……意外。参考書とか買うのかと思ってた」

「そういう天城は何を買ったんだ?」

「ふふ、これ」

少し笑って雪子が見せてきたのはどうやら資格の本のようだ。

「最後の一冊だったの。よかった……この本、色んな資格のことが詳しく載ってるって先生に薦められたの」

「資格でも取るつもりなのか?」

「……う、うん、そうなの」

雪子の言葉に真が聞き返し、雪子はこくと頷く。少し恥ずかしそうだった。と、雪子はうつむく。

「テレビの中の……」もう一人の私”が言ってた。旅館を継ぐなんて、まっぴらつて……あれね、やつぱり……私の本当の気持ちだと思う。だから、もう少し、素直になることにしたんだ……」

雪子はそう言うときか焦ったような顔で真を見る。

「わ、私ね、天城屋旅館、継がない!……高校出たら、この町、出てく!」

雪子はそう言う顔で顔を紅潮させた。

「……言っちゃった……言っちゃった!……ふふっ」

「まあ、職業選択の自由はあるからな……俺は止めはしない」

眩き、彼女は清々しく笑う。それに真もそう返した」

「それでね、一人で生きていけるように、何か資格を取ろうと思うの。インテリアコーディネーターとか、いいかなって……どう?」

「なんだそれ?」

「え、えつとね、部屋の内装とか家具を選んで、素敵な部屋にする人……つて感じかな？」

雪子が出した資格に真が聞き返すと彼女は張り切って教える。

「でも、難しいんだ。資格を取るのにお金が掛かって……お母さんたちにはもちろん、言えないしさ……」

「シャドウ倒してなんとかならないか？」

「そ、それはちよつと……私の我儘に付き合わせるみたいで気が引ける、かな？」

資格を取るのにお金が掛かる、という発言に真はシャドウを倒してお金を稼いだらどうだと聞き返すが雪子は苦笑を漏らす。

「こつそり出来るアルバイトでもあればいいんだけど……」

「……そうだ。天城、封筒貼りに興味はあるか？」

「封筒貼り？……あ、そっか！」

真の問いかけに雪子はアルバイトを掲示している掲示板を思い出して、うんと頷く。

「さつそく掲示板、見てみるね！」

雪子は拳をぎゅつと握って力強くそう言う。と、その時彼女は何かに驚いたように目を開けた。

「どうした!？」

「あ、ううん……何か、ペルソナに力が……」

真が驚いたように尋ねると雪子はそう呟き、ペルソナを召喚する時、精神を集中するように目を閉じる。

「新しいスキルを覚えてる……ムド？」

「闇属性、呪殺のスキルだ。そういえば前に花村の相談に乗っていた時も同じような事を言っていたが……まさか、天城の心の成長がペルソナに影響を及ぼしてるのか？……」

「すごい……」

雪子の言葉を聞いた真は前に同じことを陽介が言っていたことを思い出して仮説を立て始め、雪子も己の成長とペルソナの連動に呟く。が、すぐに気づいたようにあつと漏らした。

「きよ、今日は付き合ってくれて、ありがとね？」

「つと。気にすることはない」

「自分の気持ち、人に話すのつてちよつとドキドキするけど……頑張ろうって思ったよ」

雪子は目を細めてにこつと微笑み、また照れたようにうつむく。

「じゃ、じゃあ私、掲示板見てくるから……」

「ああ。頑張れよ」

雪子はそう言つて掲示板の方に走つていき、真も彼女に声をかけてから家に帰つていった。

それからまた翌日6月13日。学校は今日から衣替えであり、真は学ランを着ず夏用の半袖シャツに袖を通していた。ついでに私服も夏物を用意してから学校に行く。そしてあつという間に時間が過ぎ放課後も学童保育でバイトをし、夜、家にいる時だった。なんとなく下に降りると遼太郎が忙しそうに新聞を見ているのを見つける。

(前に聞いた、菜々子の母親について聞いてみよう)

真は意を決した様子で心の中で呟き、遼太郎に近づく。

「なんだあ?」

「ちよつと話をしようかと」

「ああ、そんなにヒマか……んじゃ、ちよつと待ってる。まだやる事があるからな、そんなに構つてはやれんぞ」

遼太郎は呆れつつ少し嬉しそうな様子を見せていた。彼は何かを探しており、真はそれを見て待っていた。

「あるとすりゃあ、後は……つたく、今時の若えのは資料の整理ひとつ、まともにできねえんだ」

遼太郎はイライラとした様子で毒づいた後、すまなそうな様子で真を見る。

「……つて、お前じゃない。すまんな」

「手伝おうか?」

「いや……いいんだ。あんまり気い遣うな」

真が手伝いを申し出るが、遼太郎は苦笑いをして静かに首を横に振る。

「昔の……新聞記事だ。ボロくなつたからコピーを取り直したんだが

……そのコピーがどっかに紛れちまったらしくてな……ある事件の犯人が、まだ拳がらねえんだ。新しい事件のせいで風化しかかっている……」

遼太郎はそう言い、再び資料に目を落とす。

「けどな、俺だけは諦めるわけにはいかねえんだ……絶対にな」

そう言う遼太郎は、思い詰めた表情を見せていた。とても何かを聞き出せる雰囲気ではない。

「お父さん……」

と、菜々子が突然苦しそうな様子を見せながらやってきた。

「なんだ？ どうした？」

「なんか、おなかいたい……」

その言葉を聞いた遼太郎が慌てて立ち上がる。

「悪いモンでも食ったか!？」

「叔父さん、それはないはずですよ!」

遼太郎の言葉にここの食事を任されている真が咄嗟に言い返す。

「おなかの下のほう、ちくちくする……」

「な、何だつて!? きゅ、救急……い、いや、確か前にもあったな。あの時と同じ感じか!？」

「……わかんない」

菜々子は具合が悪そうにそう漏らし、遼太郎は焦ったようにきよろきよろと辺りを見る。

「参ったな……あの時の薬は確か……」

そんな時に突然遼太郎の携帯が鳴り始める。

「ああ、クソッ! こんな時に……はい堂島! なんだ足立か、切るぞ。なに封筒? しかも俺に? ひよっとして市原さんからか!？」

いつ!?!……忘れてただあ!?! ふざけやがって……」

遼太郎は電話相手の足立に怒鳴り声を上げる。

「すぐ行くー!」

そしてそう言うと言帯を切り、コートを取るとすまなそうな目を真に向けた。

「出てくる。救急箱の中に薬があるはずだから……頼む」

そう言つて遼太郎は出て行つてしまい、真は救急箱の中から腹痛の薬を出すと菜々子に飲ませ、寝かせつける。それから数時間後、真は玄関前で仁王立ちをしていた。

「ふう……」

と、遼太郎が家に入り、機嫌が悪そうに玄関を占める。そしてようやく真を見るとぎよつとした目を見せるがすぐに睨みを利かせた。

「真……まだ起きてたのか。もう遅いだろ、早く寝ろ！」

「叔父さんが俺の話を聞けば今すぐにでも寝ます」

「お前の話だあ？」

イライラして真を睨み付けている遼太郎を、真も負けじと睨み付ける。

「どういうつもりだ？ 菜々子のことが気にならないのか？」

「ツ！ うるせえな！ お前等にそんなこと言われる筋合いは……」

真の言葉に遼太郎は怒鳴り声を上げようとするが、直後静まり返る。

「そりゃあ、あるよな。すまない……」

そして自分の非を認め、申し訳なさそうに謝った。

「菜々子はどうしてる？」

「薬を飲ませて、寝かしつけました」

「そうか、寝てるか……お前がいてくれて……本当に助かった」

遼太郎は菜々子が薬を飲んで寝たことを聞くと安心したようにそう言い、真に助かったと伝える。

「もう遅いから、お前も寝ろ……おやすみ、真」

「おやすみ」

さつき約束した手前遼太郎の言葉におやすみとだけ返し、真は自室に上がっていった。

第二十三話 沖奈市ナンパと林間学校準備

6月15日。真はいつものように学校へと向かっていた。

「おつす、相棒！」

と、陽介が声をかけてきた。

「へへっ、聞いてくれよ。ついに俺、バイクゲットしたぜ！ 念願のバイクですよ、バイク！ もう朝から興奮しまくりでヤベエよ！」

陽介は見ても分かるくらいに興奮しており、パチツとウインクした。

「でき、さっそく今日の放課後にバイクで沖奈いかね？ ほら、前に約束してたじゃん？」

「なんだっけ？」

「もしかして忘れちゃいました!? 題して『バイクで都会的な女の子を、誘惑しちゃおう』計画！ 今年こそ、彼女のいる夏を過ごしたいんだよ！ お前だってそうだろう!? 学校終わったら速攻で出発しよーぜ！」

「それはいいんだが……先輩どうする？」

「はっ!？」

興奮のあまり超ハイテンションになっている陽介に真が冷静にツッコミ、陽介ははつとなる。命は「君達が一人前に運転できるようになるまで人気の多い道に出させる気はない」と言っていた。もしその誓いを破ったら普段温厚だが怒る時は凄まじく怒る命のこと。どうなるか想像がつかない。

「……みつ、命さんも連れて行こう！ 俺がどうにか言いくるめるからさー！」

「……頑張れ」

陽介の少しどもりながらの言葉に真はため息交じりにそう返し、二人は学校に向かう。そして授業を終え——倫理の授業で諸岡が殺された女、つまりは小西早紀の悪口を言いそれに陽介がそんな言い方あるかよと毒づいたりしたが——放課後になると千枝と雪子と一緒に遊ぶ約束でもしているのか教室を出ていき、陽介はその隙に命に電話をかけた。

「……沖奈市までツーリングしてみたい？」

「そうなんすよ命さんっ！ 俺、今日バイク買ったんでちよつと試し
についていうか……」

「そうやって舞い上がってる時こそ危険なんだよ？」

「だ、大丈夫つす！ 俺達今までそこまで危険な事起こしてないで
しょ!?! いつもより多めに安全運転心がけますから！ ね、ね!? な
んなら命さんも一緒に来ましようよ！」

陽介は必死で命に言い訳をしており、真はそれを自分の椅子に座り
陽介の机に肘を置いて頬杖をつきながら眺めていた。と、電話口から
「はあく」というため息が漏れる音が聞こえてくる。

「分かったよ。僕がいない間に勝手に遠出されて事故られるよりは
マシだ。今まで近場を乗り回した成果を見る試験として、僕も同行す
るよ」

「あ、あざーつす！ んじゃジュネスに集合っつーことで！」

「はいはい」

命同行とはいえ許可が出たことに陽介はお礼を言い、電話を切ると
気のせいか顔の近くを花が舞っているような表情で真を見る。

「許可出たぜ！ 早速集合場所のジュネス行こうぜ、相棒！」

「ああ。んじやとつとと帰るぞ」

「おう！ 遅れんなよ！」

陽介はそう言うや否や荷物を持って教室を飛び出し、真も荷物を
取って教室を出ていった。

そしてジュネスで全員集合した後、彼らは沖奈市へと出発。真を先
頭に、次に陽介が、最後尾を命で沖奈へと向かった。

「沖奈駅前、到着っ！ 意外と来れるもんだな！」

ヘルメットを脱いだ陽介が嬉しそうに叫ぶと、その後ろからチリン
チリンというベルの音が聞こえた。

「マジでここまでついてきやがったか……」

その言葉の直後、完二が自転車をギョギョ鳴らしながら真達に追
いついた。

「楽勝つすよ！ 慣らし中の原チャリなんざ、相手になんねツス！」

そう叫ぶ完二だったが、やはり多少息が乱れている。

「途中でガス欠になんなかったら、完全に振り切ってたつっの！」

……遊び代欲しさにガソリンケチるんじゃないやなかつたぜ……」

「初歩的なミスだね。減点」

「ぐはっ！」

陽介が叫ぶと命が冷静に指摘、陽介はぐはつと声を上げた。そして完二も陽介の隣にバイクを止め、辺りを見回す。

「来るたびに思うツスけど……やっぱ、人が多いスね」

「ああ。この辺で張つてりやそのうち声かけてくるかもだぜ!？」

「やっぱそういう狙いだつたわけね」

完二の呟きに陽介が笑いながら言う。命が呆れた目を向ける。

「うっ!？」

「……ま、どうでもいいよ。僕ちよつと買い物してくるからついでにバイクの番よろしく」

「お、俺もせっかく沖奈来たんで、その……し、手芸の……」

命の指摘再びに陽介が声を漏らすと命はそうとだけ言つて荷物を持ち去っていき、完二ももごもごとそう漏らした後二人を睨む。

「なんでもねーよ! 買い物あるつっててんだろ! とにかくちつとはずすんで、先やつちやつててください!」

完二もそう言つて自転車の鍵をかけ、走つていった。

「何しに来たんだよ、アイツ……」

その光景を見て陽介は呆れたようにそう漏らした。

「ま、命さんがいないのはライバル減つて大助かりだけどな! よつしや! 作戦決行だぜ!」

その後に彼はそう叫び、しばらくここで待つことにした。

(初夏の日差しが心地いい……)

真は空を見上げてサンサン降り注ぐ太陽の光を浴び、心の中でそう呟いた。

……それから三時間が経過する。

(初夏の日差しが暑苦しい……)

「遅れました! どれ買うか迷つちまつて……」

三時間も直射日光のがんが当たる場所においては無理もないが二人とも若干へばっており、そこに完二が戻ってきて二人を見る。

「収穫ゼロツスカ」

「おっかしーなあ。どっかから視線を感じるんだけどなあ……」

「無理がある……俺涼みがてら買物してくるよ……」

「や、待ってっ！ もうちよい粘ればきつと……」

「や、日い暮れちまうだろそれ……」

完二の眩きに陽介が負け惜しみ気味にそう言うと言はそう言つてその場を離れようとし、陽介が必死でそれを止めるが完二は呆れたようにそう返す。

「やっば、どっか問題あんじやないスカ？ 大体バイクは男のアイテムつつー話ツスけど、それ原付ツスよ？ バイクなんて大先輩のやつだけじやないツスカ」

完二はそう言って命が乗ってきたバイクを見る。考えてみれば命のバイクの横に真達の原付があつては圧倒されているような気がしないでもない。

「まあ……確かに雑誌で見たやつは、でけーバイクだったけどさ。しょうがねーだろ!? 夢と現実には開きがあんの！ 高いのは買えないのっ！ 原付で精一杯だつっーのっ！」

陽介が叫び、叔父のお下がりを貰った真もふうとため息をつく。

「……先輩、俺に十分くんねーか？」

「は？」

「やられたまんま黙ってらんねっしょ！ 先輩らの仇、俺がとつてやんぜー」

「ケンカじゃねーっての！ 仇とるってどーすんだよ。お前、ナンパでもするつもりか!？」

「つたり前つすよ！ この状況で、他に何すんスカ！」

「あのな……バイク持つてる俺らで駄目なのに、お前に仇取れるかつーの。なあ？」

完二の言葉に陽介は呆れたようにそう言い、真に話を振る。と、真は不敵な笑みを見せた。

「……自分なら三分だ」

「お前何言っちゃってんの!? 何対抗してんだよ!」

真の言葉に陽介は反射的にツツコミ、完二は愕然とした様子を見せる。

「ありえねえ…… 赤いきつね」だって五分かかんのに!」

「お前も何言ってるの!」

「流石先輩だぜ! だったら三人で勝負ツス! 異完二、男の生き様見せてやんぜ!」

完二は若干ずれた返答を見せ、陽介がそれにさらにツツコミを入れると完二はガッツポーズを取ってそう叫んだ。

「お、落ち着けての! 完全に全員参加の流れじゃねーか!? ってか命さんは!」

「……冗談のつもりだったんだが……それと命さんはナンパなんかするとは思えない」

陽介が必死に押し止めようとする後ろで真はぼそりと呟く。

「マジ分かってんのか? それってこつちから声かけんだぞ? なんかカツコ悪いっつーか……いい思い出もないっつーか……」

陽介はしどろもどろになっており、完二はそれをじっと見る。

「怖えーんスか?」

「そうじゃなくてだな……」

「友達になれつつて、ハイ」って言わせりやいいんスよね? そんなだけの話じゃねーか」

完二の気軽な言葉に陽介は大きくため息をつく。

「ま、失うもんねーし。いいか……」

「流石先輩ツス! 負けたらパンイチで町内マラソン、ついでに鼻メガネかけてやらあ!」

「そういうのは止めろ」

陽介がナンパ勝負を承認すると完二はそう言い、さらに叫ぶが真がノーを出す。

「……男はダメだかな?」

「まだそれ言うのかよ!? クソツ、ぜってー負けねえかな!」

陽介の念押しに完二はそう叫んで走り去り、真もやれやれという様子を見せて歩き出した。と、映画館の前で命が清楚な女性と話しているのを見つけた。

「先輩!？」

「あ、真君」

「先輩！ あなたが女性をナンパするなんて見損ないましたよ！」

「いや、違うんだって……」

信じられない光景に真はかっとなったのか命を怒り、命は困ったようにそう漏らす。

「落ち着いてください。心のバランスを保たなければ、悪の気に付け込まれてしまいます」

と、清楚な女性が澄んだ瞳を見せながら柔らかく微笑んで真に話しかけ、真はへつと声を漏らす。最初の言葉はともかく、その後には妙な言葉が続いた。

「貴方は、ご存知でしょうか？ 今、この世界は魑魅魍魎に塗れ、絶望に満ち満ちています。その絶望は人々の魂へと侵食し、やがて、辛く、苦しい人生が訪れます。病気、自己、身内の不幸……全ての災いは、それが元凶なのです」

「!？」

清楚な女性の言葉に真は驚いたように命を見、命はため息をつく。どうやら女性は何かの宗教の勧誘家で命はそれにつかまっていたらしい。

「さあ、"ハピネス・ソウル"を手に入れて、貴方も幸せになりましょう！」

ものすごく真剣な様子で、澄んだ瞳を見せながら清楚な女性は真に迫り、真は困ったような様子を見せる。と、命が真を庇うように前に出た。

「申し訳ありませんが、宗教はお断りなんですよ……あまり良い思い出がないものでして」

命は真を庇ってそう言い、逃げるように促す。その隙に真はその場を逃げ出した。

「なんだかよく分からないけど危なかった……先輩大丈夫かなあ……」

真は自分を庇ってくれた命の身を案じながらそう呟く。と、前をあまり見ていなかったせいかわりに誰かにぶつかってしまおう。

「つと、すみません」

「あら、こちらこそごめんなさいね。大丈夫？」

真とぶつかった華やかな雰囲気的美女もにこりと微笑んで真に声をかけ、真は焦ったように頭に手をやった。

「あ、いえ。俺の前方不注意でしたので……おひとりですか？」

もう一度謝った後、ナンパ対決中という雰囲気のせいかついその声をかけてしまう。

「んー、ひとりっていうか……人と待ち合わせ中なんだけど」

「あ、それは失礼しました」

美人なお姉さんの言葉に真は謝って彼女に背を向けようとするが、その時美女は妖艶に微笑んだ。

「うふふ、もしかしてナンパのつもり？」

「いえ、そんな……」

「私ねー、年下の男の子ってけっこう好きなんだ。素直で可愛いし、純情だし……いろいろと教えてあげたくなっちゃう。ね……キミは、年上の女ってどう？」

「あーえつと……あんま分からないです」

とりあえず話を合わせようとするがやはり真は正直にそう言う。

「ふふつ、正直なのね。でも、そういう子を骨抜きにするのが楽しいのよねー……ねえ、お姉さんと、本当に遊んでみる？」

美女はそう言い、次にくすりつとに微笑んだ。

「なーんて、今日は無理なんだけどね。それに、無理に手を出す趣味もないし……」

美女はそこまで言うと言の耳元に口を寄せた。

「でも、もしキミがその気になったら……大人の遊び、いっぱい教えてあげるね？」

「は、はあ……」

美女の言葉に真は顔を赤くしながらそう漏らし、なんか流れの内に番号を教えられてしまう。それから時間が過ぎて夕方へとなり、真は集合場所に戻る。

「……………どうだった？」

「や、上手くいかねーッス」

「そうだよな……………」

陽介と完二はそう言い、真は隣で疲れている命を見た。

「先輩、あの、大丈夫でしたか？」

「なんとかね。映画館から出てきた人が携帯電話使っているのを見て、それは人の強欲が作り出したどうのこうのって言い出したからその隙を突いてどうにか逃げた」

命はそう言っつてふうとため息をつく。

「ちよつと昔を思い出しちゃったな……………月光館学園にいた頃、その生徒に宗教の勧誘員やってる奴がいてさ、僕も勧誘受けたことあるんだ、もちろん断ったけどね。そいつも今はその宗教から抜けてフードライターとして頑張ってるそうだし。あいつ食べるの好きだったし、楽しそうでもよかったよ。僕個人の思いとしてはいるかどうか分からない神様を信じるより、今確かにここにいる自分を変え、高めることに頑張っつてほしいから」

「そうなんですか」

そう言う命は嬉しそうな表情を浮かべており、真もつられて微笑む。

「椎宮、お前はどうか？　なんかゲットできた？」

「ああ、一応」

真は陽介から尋ねられて素直に答え、それに陽介と完二の視線が真に集中する。

「さすがだな！　それって携帯番号!?　どんなコだった？　とにかく、かけてみるよ!」

陽介は慌ててまくしたて、さらに完二まで迫り真はしようがないとため息をついて携帯を取り出しさつき華やかな美女からもらった携帯番号にかける。数回コール音が続いた後、誰かが電話に出た。

「出た！」

「やっぱり本モンだぜ、この人……」

陽介が歓声を上げ、完二が感心した声を漏らす。

「あー？ もしもし？」

しかしその電話の向こうから聞き覚えのない男の声が聞こえてきた。

「もしもし？」

「この……おい、テメエだな。殺すぞ、このクソガキが！」

「!?」

いきなり殺気立った怒鳴り声が聞こえ、真は咄嗟に受話器から耳を離す。

「他人の女に手え出しやがって!! 一生、立てなくしてやんぞクラア!!! 二度とかけてくんじゃねー!! 分かつ……おい聞いてんのか!?!」

腕を限界まで伸ばしてなお耳に届く怒声、それに真のみならず陽介と完二までドン引きしていた。

「ちよつと貸して」

と、命がさらつと電話を奪い取り、耳に当てる。

「失礼」

「アアン!?! なんだクソガキ!?!」

「私の部下が失礼いたしました。私、桐条グループ会長の秘書をさせてもらっている者ですが」

その言葉に真、陽介、完二がざわつとなる。なんかすごいとんでもない嘘を言い始めた。なんか口調も丁寧だがとんでもない威圧感を漂わせている。

「きつ、桐条グループ……」

電話相手も委縮していた。

「今回は私の部下の不手際ということでお話を終了させていただきましたのですが。もしもそちらが部下に手を出そうというのならば、こちらも相応の手段を使わざるを得ないのですが……」

命はこの上なく優雅で丁寧な口調を使って電話相手と話しており、

学生三人は口出しできなかつた。そして数分の後、「それでは、失礼いたします」と言つて電話を切ると命はにこつと微笑んだ。

「もう大丈夫だよ」

「いやいやいやあんた何してんすか!? どんだけ身分詐称してんですか!?!」

「大先輩あんた大学生でしょっ!? つっつか桐条グループって、あの桐条グループっすよね!?!」

命の平然とした言葉に陽介と完二が叫んでツッコミを入れる。それに命がきよんとしている的真がため息を漏らした。

「完二は聞いてないから無理もないけど……花村、忘れたか?先輩がシャドウと戦うため所属していた組織には現桐条グループ総帥、桐条美鶴さんが所属してたんだぞ……月光館学園は桐条グループが母体になってるんだし」

「はっ!? そういやそんな事言つてたような……」

「高校卒業する時に先輩から秘書としてスカウトされてたしね、あなたが嘘でもないよ。結局蹴つて大学進学したけど……さてと、この番号を念のため先輩にリークして調べといってもらうか……言い訳考えないと、ほんとにこの後秘書にさせられちゃいそうだ……はあくあめんどくさ……」

命はかちかちと真の携帯を操作し、件の電話番号を自分の携帯に転送しておく。そしてとんでもなくめんどくさそうな息を吐いた。

「や、ははは……こんな事もあるよな、うん! よし、次はラスト!

俺の番だな!」

「さて、帰ろうか」

「ちよつと待つて話だけでも聞いて!」

陽介が元気よく言つた瞬間真はヘルメットを被ろうとし、必死で陽介はそう叫んで止める。

「花村先輩も、イケたんすか!?!」

「へへっ、つたり前だろ。番号、一個ゲットしましたー!」

「さすがッス!」

「いっや、苦労したわー。すっげーイカしたお姉さんでさ。ちよつと

背伸びしちったかなー。大人の色気っていうかさ」

陽介は自慢するようにそう言って携帯を開く。

「早速かけてみつかー……期待しとけよ?」

そう言って携帯を耳に当て、誰かが電話に出ると陽介はにかつと笑う。

「もしもーし? 俺っすー、分かりますー?」

「花村くん?」

「うーす、バイクデートの彼でーす! ittyやー、嬉しいなあ……あれ? でも俺の名前、なんで? 言いましたっけ?」

電話相手が名前を呼ぶと陽介は嬉しそうにそう言うが、その後どうやら彼は名前を名乗った覚えがないのか不思議そうな表情でそう尋ねる。

「なんでって、わかるわよ。同じ学校だもの」

「同じ学校? んなはずないっしょ、だっってお姉さん……」

陽介はそこまで言うと言色を青くさせる。

「っーか、その声……」

「大谷花子に決まってるじゃない。あんた、あたしの番号調べたわけ?」

その瞬間陽介は高速で電話を切る。

「ヤッベー、完っ全にヤッベー……ば、番号間違えたか? も、もっかい……」

陽介は青い顔でそう呟き、初夏の日差し of 熱さとは別の意味で汗をたらたら流しながら携帯を耳に押し当てる。

「も、もしもーし? 俺っすー。分かるー?」

その声は若干引きつっていた。

「分かるって言ってるじゃない。そんなにあたしとデートしたいの?」

その瞬間陽介は神速で電話を切る。

「……なんスか今の。地面の底から響くみてーな……悪寒が走るみてーな……」

「忘れろ……悪い事は言わない。この番号は危ない……知らない方が

身のためなんだ……」

完二の眩きに陽介は必死の形相で叫び、真と完二は首を傾げる。ちなみに命はさっきの電話番号の件について先輩に相談したいのか、しかし街中で堂々とするのははばかられたのか近くの喫茶店に入っていたりする。

「あら、アンタたち……」

そこにさっき電話から聞こえてきた、地面の底から響くような悪寒が走る声が聞こえてきた。そしてその声の方から小太りという言葉では言い表せられない、八十神高校の制服を着た女子生徒が歩き寄ってくる。

「大谷……さん!? なんでここに……」

「アタシ、田舎が似合わない女でしょ? 散歩してたら突然電話よ。ほんと、強引よね。バイクデートかあ……」

女子生徒——大谷はそう言って陽介の原付に目を向ける。

「ま、アンタがそこまで言うなら、付き合っただけあげるわ」

「ちよ、まつ?!」

陽介が止める真もなく大谷は彼の原付に飛び乗る。と、タイヤが思いつきり外れ、パーツが飛び、手っ取り早く言うと言われる。

「う……うおおおおおおおっ?!?!」

それに陽介は絶叫し、地に伏せた。

「おっ、おお俺のバイクっ……」

「なによ、このバイク、壊れてるじゃない。アタシを誘いたいなら、もう少し頑張らなきゃね。いい女を独り占めするには、それなりの努力が必要なんだから」

そう言っただけで大谷は原付から飛び降りる。その衝撃で原付が倒れ、煙を噴き出し始めた。

「呪いか?……何かの呪いなのか?……」

「げ、元気を出せ……帰り、何か奢ろう」

この世の終わりだとばかりに呟く陽介に真は慌てて声をかける。

「は……はは……ダメだ。もはや、俺には帰りの足さえね……」

「先輩……あんたは精一杯戦ったぜ。俺、感動したッス!」

と、超絶ローテンションの陽介に完二は感動したと叫ぶ。

「俺のケツ、乗ってください！ 家までバッチリ送りますよ！」

「……何かあったの？」

完二がそう叫んだ辺りで戻ってきた命がこの惨状を見て目を点にした。

そして帰ることになり、陽介は完二のバイクの後ろに乗る。

「おお……密……着……！ 分かったぜ、これが密着計画の全てなんスね！」

「分かんない！ 怖えーんだよ！ つかチャリも2ケツ違法だよ！ 命さんのバイク乗りやいいじゃねーか!？」

その言葉に真と完二がはっとした顔を見せ、命に顔を向ける。

「いや、僕は花村君のバイクを桐条グループの回収業者に預けなきゃいけないから。ちゃんと修理して花村君ちに届けるよう手配するから安心して！」

命は相手を安心させる笑顔を浮かべながらそう言い、ビシッとサムズアップした。

「大先輩、花村先輩を傷つけまいと修理サービスを付けてまで気を遣ってくれるなんて……あざっす!!」

「いやなんかちげーよ！ 修理サービスは嬉しいけど俺を傷つけまいとするんならバイクに2ケツさせてくださいよてか俺も残りますよ!!」

「ごめん。僕今日バイト遅れるって店長と食品のチーフに言っておいて。たしか今日花村君シフト空いてるでしょ？ まさかこんな遅くなるとは思ってなくてさ……シフト代わってくれる？」

「詰んだー!!」

陽介に気を遣う姿に感動した完二が叫び、陽介も必死に叫ぶが命は真顔で陽介にお願い、陽介は頭を抱えて絶叫した。

「でも先輩、自転車の二人乗りも違法で……」

「いや……もういいんだ……早くこの苦行を終わらせてくれ……」

真の指摘に陽介は落ち込んでいますといわんばかりの暗い声で呟き、それに真と完二は顔を見合わせて一筋汗を流した。

「じゃ、真君。帰りは僕一緒になれないけど、安全運転を心がけることを忘れないでね」

「はいっ！　じゃ、お先に！」

「先輩、しつかり掴まっつててくださいっ！」

命の注意に真は頷き、彼の原付が走り出すと完二もその後を追いペダルをこいで走り出した。

沖奈市でのナンパ作戦の翌日。真はいつも通り学校へと向かっていた。

「おはよう、椎宮君」

と、後ろの方から雪子が追いつき、真に話しかける。

「林間学校、明日からだね。私達同じ班だけど、ご飯は何を作ろうか？」

「料理か、腕が鳴るな」

「うん。放課後に皆で買い出しに行こう。千枝と花村君にも声かけとくから」

真は林間学校での料理作りに腕が鳴ると言い、雪子も頷いて買い出しを提案。真が頷くと雪子は残る班員である二人にも声をかけておくと言う。

それから時間が過ぎて放課後。真達は林間学校での飯ごう炊きさんで使う材料を買いにジュネスの食品売り場へとやってきていた。ちなみに命はおらず、陽介によると「命さんは仕事覚えるの早い上に何でもできるから色んな売り場に引っ張りだこ」らしい。その陽介は「用事があるから先に買い物済ませてくれ」と言っつてこの場にいらない。

「ところで、メニューは決めてるのか？」

「ラーメンとカレーで迷ってるんだけど……」

「カレーがいいな」

「んじゃ、カレーで決まりね」

真が尋ね、雪子が既に二つままで絞っていることを伝えると真はカレーがいいと言い、千枝がカレーで決定と告げる。そして彼女らは食品売り場の野菜コーナーへとやってきた。

「カレーって……何入ってたっけ？」

「にんじん、じゃがいも、玉ねぎ……ピーマン、まいたけに……ふきのとう？」

「ふきのとう……と『ふき』って一緒？……」

千枝の質問に雪子が答え、千枝は頭を悩ませながら呟く。

「……ねー、千枝。カレーに片栗粉って使うよね？」

「……？ そ、そりや、使うんじゃない？」

「使わないと、とろみつかないよね。じゃあ片栗粉と……小麦粉もいるかな」

「こ、小麦粉って、あれでしょ。薄力粉と、強力粉？ どっちだろ？」

「強い方がいいよ。男の子いるし」

「どういう理屈だ？ 強力粉はパンを焼いたりするのに使うもの、カレーには使わない。そもそもカレーをルーから作るならまだしも今回は使わなくても充分だ」

「あ、そうなの？」

「あ、あったー！」

千枝と雪子の会話を聞いた真が呆れたように指摘し、千枝があははと誤魔化し笑いをすると雪子がそう叫んで食品に手を伸ばす。

「トウガラシ。辛くないと、カレーじゃないよね」

「なら、キムチも買ってかない？ あと、コシヨウ？」

「コシヨウは白と黒があるよ？」

「お、さっすが旅館の娘！ とりあえず両方買おっか！」

「……」

二人の言葉に真は腕組みをし、黙り込む。気のせいか額に青筋が立ち、身体は小刻みに震えていた。

「そうだ……かくし味もいるよね」

「そういや、テレビで言ってたな……確か……チョコ……コーヒー……ヨーグルト……あたし、好きなチョコあるんだった！ けどあたし、コーヒー苦手だから、コーヒー牛乳でいいよね？」

「あ、魚介も混ぜる？ きつといいダシが出るよ」

「……いい加減にしろ!!!」

と、ついに真がキレた。それに千枝と雪子はびくつとなつて真の方

を見る。

「な、なに？ 椎宮君？」

「ど、どうしたの、そんな怒って……」

「聞くからに、二人とも料理初心者だな？……何故自分に身の丈にあった買い物をしない!? カレーなんてカレールーを湯に溶かし、材料にメジャーなどところで言えばさつき言っていたにんじん、じゃがいも、玉ねぎ、肉をそれぞれ切り分けて入れて煮込めば完成するだろうが!? 何故初心者が無理にかくし味やアレンジを効かそうとする!？」
「で、でも、それじゃ物足りないかなって……」

「料理の基本が出来てない奴がアレンジに走ったところで碌な事にならない！ それはもはや食材への冒瀆だ!!」

真は怒号を上げて説教し、雪子が苦笑しながら返すと真は追撃。それに千枝がむかつとしたような表情を見せた。

「聞き捨てならないわね！ そこまで言うなら勝負しようじゃないの!!」

「ふ、面白い……」

千枝の言葉を聞いた真はさつき千枝と雪子が食材を入れた買い物かごをその場に置き、新しいかごを取りに行くために彼女らに背中を向け、歩き出す。

「……格の違いを教えてやろう」

そして思い出したように足を止めると彼女らに目を向けて不敵な笑みを浮かべながらそう言い、それに千枝と雪子はゴゴゴゴと背中から燃えるようなオーラを放っていた。

「え、えーつと……どうしたわけ？」

「別に」

買い物を終えたらしい紙袋を持った陽介が恐る恐る尋ねる。三人は真、千枝と雪子で別れて距離を取っており、さらに男子と女子で顔を合わせようともしていない。完璧に喧嘩していますというオーラ

を発していた。

「花村……明日、負けるわけにはいかない勝負が始まる。お前も覚悟を決めておけ」

「は、はあ!?!」

「ふん、そんな口叩けるのも今の内よ！ 女子の底力見せてやるんだから!!」

「……この勝負、勝つ!」

真の言葉に陽介が呆けた声を上げると千枝が真をびしっと指さしながらそう言い、雪子も静かに闘志を燃やす。

「ど、どうなってんだあっ!!?!」

全く事態を呑み込めない陽介はとにかくそう叫ぶしか出来なかった。

「ただいま」

千枝、雪子と林間学校でのカレー勝負が行われることになり、真は袋に食材やらなにやらを詰めて家へと帰る。

「おかえり、お兄ちゃん!」

真が帰ってきたのを聞きつけ、菜々子がたっただと走ってきて「おかえり」と返した。それから菜々子は真がたくさんの袋を持っているのを見て首を傾げた。

「どうしたの?」

「ジュネスで買い物をな」

「ジュネス! いーなー!」

「林間学校でカレーを作るから、その材料とか色々買ってきた」

「カレー……いいなあ! 菜々子カレー大好き!」

真からカレーを作ると聞いた菜々子は嬉しそうに笑う、と真はふつと笑う。

「よし。じゃあ今夜はカレーにしようか。菜々子、明日作るカレーの試食を頼む」

「うん!」

「明日は帰ってこられないから、明日の分も多めに作っておくよ」
「ありがとー!」

菜々子は夕飯の献立がカレーになったことに嬉しそうに言い、真は制服から私服に着替えてエプロンを着けると夕飯にカレーを作り始める。にんじんやじゃがいも、牛肉を菜々子の一口大くらいに切つていき、玉ねぎをみじん切りにして飴色になるまで炒め、ルーにコクを与える。ついでに隠し味として摩り下ろしたリンゴと蜂蜜を入れ、甘味をつけた。

「ん? いい匂いだな。カレーか?」

と、帰ってきた遼太郎が匂いを嗅ぎ、調理場を覗き込んだ。

「お父さん! お兄ちゃんがね、カレー作ってくれてるの!」

「明日は林間学校で帰れないので、すいませんが明日もこれ食べてください」

「ああ。カレーは一日寝かせてからが美味しいからな。楽しみだ」

菜々子が嬉しそうに遼太郎に報告すると真はすまなそうに笑いながらカレーをかき混ぜ、彼の言葉に遼太郎は楽しみだと頷く。そして晩御飯が出来、三人で食卓を囲み、夕食が始まる。

「あまーい! 美味しー!!」

「ふむ、コクがあるな……美味いぞ」

「どうも。明日作ってみようと思ってる一つなんですよ」

「ほう……」

菜々子が嬉しそうに言うのと遼太郎も美味そうにカレーを食べ、真は嬉しそうに微笑んでそう言い、遼太郎はほうと唸る。

「ん? 一つ?……」

しかしその後の彼の言葉についてそう漏らす。そして晩御飯も終わって食器洗い等を終わると真は明日が早いいためすぐ就寝の準備を始めた。

第二十四話 林間学校

6月17日。今日は林間学校だ。

「……よし」

真はたくさんの荷物を準備し、中身を確認すると鞆を背負って家を出ていく。その時に挨拶に出てきた菜々子にたくさんの荷物を見て目を丸くされていたのは別の話だ。ついでに集合場所では陽介に「なんだその荷物!？」と叫ばれたり千枝と雪子からは凄まじく殺気こもった視線で睨まれたり諸岡から荷物をガン見されていたりもした。

林間学校。それは八十神高校近くの山にて行われ、若者の心に郷土愛を育てる事を目的とした学校行事だ。しかしその名目で行われるのはゴミ拾い、そのためか一部の生徒は体調不良を訴えて欠席したりそれを羨ましく思ったのか途中で抜け出したりする者も多いらしく、その結果残った生徒の作業量が多くなり、嫌になった者が逃げだしてさらに残った生徒の作業量が……という悪循環を生む結果になっていた。

「で、俺達は一年の手伝いって」

「鍛えた力の見せどころだな、花村」

「おうよ！ シャドウに比べりゃちよろい……って俺スピード型だし！」

真と陽介は一年生の手伝いを割り当てられ、二人は軽くダベりながら一年生の方に行く。

「あ、先輩！」

「ん？ ああ、松永」

と、声をかけてきた女子の声に真は反応、声をかけてきた女子に挨拶を返す。

「知り合いか？」

「ああ。文化部の後輩……と言っても入部日で考えれば俺が後輩だけだな」

「そ、そんなことないですよ!!」

陽介が首を傾げて問いかけると真はそう女子——松永綾音を紹介、次に冗談っぽく笑って続けると綾音はあわあわとなる。

「で、松永。このグループは何をするんだ？」

「あ、えっと……このゴミ捨てなんですけど……」

綾音がそう言うって草むらを指す。そこには弁当の空き箱やペットボトルなどではなく古いテレビや錆びついた自転車など、主に粗大ゴミが捨てられていた。

「なるほど。これは力がいりそうだ……」

「つつてもよ椎宮……俺達以外男いねえぞ」

陽介が一年組を見回して呟く。この作業を行う一年は全員女子、割り振った相手が大雑把に決めたのかあるいは男子がめんどくさがって逃げたのだろう。しかしそうなるといくらシャドウを相手にして鍛えている二人と言っても限界がある。

「うーす」

と、そこに聞こえてきた聞き覚えのある男子の声。それに陽介は驚いたように目を向けた。

「完二!? お前何やってんだよ!?!」

「あー。俺の割り当てられたグループなんすけどね、どいつもこいつももびびっちゃまって作業になんねツスから。抜け出してきたんすよ」

陽介の叫び声に完二は頭をかいてそう言い、きよろきよろと辺りを見回す。ここにいる一年女子も不良のレッテルを貼られている完二の登場に怯えてしまっており、完二はため息を漏らしそうになるがどうにか押し止める。

「なら丁度いい。完二、俺達のグループを手伝ってくれ。ここ、結構力がある仕事になりそうなんだ」

「あん? ……あーこりゃ確かに……でも、大丈夫ツスカね?」

真の頼みに完二は粗大ゴミの山を見て呟き、真に尋ねる。一年女子は完二に怯えてしまっているが、そこに綾音が「あの……」と声を出した。

「先輩……異さんと知り合いなんですか?」

「知り合いというか少ししるんでるといかな。見た目は怖いが話し

てみると面白い奴だぞ」

「ちよっ先輩っ!？」

綾音の言葉に真は悪戯っぽく笑いながらそう言い、それを聞いた完二が顔を赤くして声を荒げる。

「とまあ、すぐ吠え出すが噛みつきはしないから安心していい」

「犬かよ俺は!？」

真の言葉に完二はさらに怒鳴り声を上げ、その掛け合いを見た女子達があくすくすと笑うと完二は照れ隠しにそつちに怒鳴りそうになるが真がパンパンと手を叩いてそれを阻止する。

「さて。じゃあ心強い助っ人が出来たことだし作業を進めようか。花村、重いものを運ぶ時に草に足を取られたら危ないから軽く草刈りしとこう。鎌か何かもらつてきてくれ。あとネコ車も頼む」

「ああ。任せとけ」

「完二、軽いやつは女子数人でなんとかなるはずだ」

「おう。大勢で運びにくい、重いやつとかを運びやいいんスね!」

「そういうことだ。松永、そういう事で女子は無理せず何人かでグループを組むよう伝えてくれ」

「は、はいっ!」

真はすぐさま指示を出し、陽介と完二、綾音も領くと作業に取り掛かる。それから鎌を持ってきた陽介がゴミを運ぶ道を作るように素早く草刈りをしていき、完二は重そうなブラウン管テレビを軽々持ち上げる。

「おいテメエら、危ないからどけ!」

完二は前の方に立っている女子達向けて叫び、女子達が慌ててそこをどく。ぶつきらぼうだが気遣いを見せる姿に女子達からの好感度が上がっている……ような気がする。と真は錆びついた自転車を運びながら思った。

「よいしよ、よいしよ……」

綾音は三人の女子と共に古い小さな、しかし女子からすれば重い冷蔵庫を運んでいた。

「きゃっ!？」

「綾音ちゃん!？」

「わわっ!？」

「きゃっ!？」

と、石につまずいたのか綾音のバランスが崩れ、冷蔵庫を運んでいた四人のバランスも崩れる。

「危ねえっ!!」

そこにギリギリで気づいたらしい完二が駆けつけ、冷蔵庫を支える。

「完二！ 大丈夫か!？」

「へ、平気ツス！ おい、松永？ 大丈夫か?」

「あ、は、はい……すみません」

陽介が叫び、完二はそれに叫び返した後綾音に大丈夫か尋ね、綾音も頷くと再び冷蔵庫を支える。

「うし、んじや運ぶぞ」

そして完二が号令をかけて冷蔵庫を運び、所定の位置まで運ぶとゆっくり冷蔵庫を下ろし、完二はふうと息を吐いて腰をとんとんと叩く。

「テメエら大丈夫か？ 怪我とかしてねえよな?」

「え？ あ、はい!」

「私は大丈夫です!」

「あ、綾音ちゃん！ 膝、すりむいてる!」

「えっ!？」

完二の言葉に女子二人は大丈夫だと返すが三人目の女子が綾音が膝をすりむいていると言い、綾音も驚いたように足を見る。確かにさっき倒れた時なのだろうか別の時だろうか、右膝から少し血が出ていた。

「つと、本当だな……」

完二はそう呟いてポケットを探り、おっと呟いてポケットから何か取り出す。絆創膏だ。

「ほれ、これでも貼っとけよ」

「あ、ありがとうございます……」

ぶつきらぼうに差し出してきた絆創膏を綾音は受け取り、膝の傷口に貼る。

「んじや、テメエらも気をつけろよ」

完二は相変わらさずぶつきらぼうながら女子達の事を心配している様子で注意を呼びかけ、それに女子達がかくかくと頷くと完二は眞の方を見る。そのせいか、女子達の頬が若干赤く染まっていることは気づいていなかった。

「先輩！ 俺そろそろ戻りますんで！」

「ああ！ 晩飯時になったら俺達のとこに來い。礼にカレーを振る舞うよ」

「ホントツスか!? あぎつす！ この異完二、ぜってえにお邪魔するツス!!」

手伝ってくれたお礼に夕食をご馳走すると眞が言うのと完二は目を輝かせて頭を下げ、嬉しそうに鼻歌を歌いながらその場を去っていく。それに頬が赤く染まっている女子達他、このグループの一年女子は例外なくぽかーんとした表情を見せた。

「な？ なかなか面白い奴だろ？」

眞が歩き去っていく完二を見ながらそう言うのと女子達は我慢できなくなつたようにぷつと噴き出す。ついさつきまで怖がっていたのが嘘みたいなのその反応に眞は悪戯っぽく微笑んだ。

「あ、そうそう言い忘れてた。あいつ、女子にはあまり慣れていないんだ。せつかく仲良くなれたんだからあいつが女子に慣れるお手伝いをしてくれれば俺は嬉しいな」

その言葉にさつき頬を赤く染めていた女子の他積極的そうな女子が『はい！』ととても良い笑顔に元氣よく返す。

「さてと。じゃあラストスパートだ、頑張ろうぜ！」

眞の号令に女子達は再びはいと返して粗大ゴミを運び始める。

「おい椎宮……お前、女子を煽つたろ？」

「なんのことだ？」

陽介の呆れた声に眞はいけしやあしやあと聞き返す。

「とぼけんなよ……お前、このままじゃ完二がおもちやにされるぞ」

「完二が周りと関わりを持てるようになればそれが一番だろ？ いきなり町内全体のレッテルは無理でも同じ学校、同じ学年、同じクラスならレッテルを剥がすのも近い分簡単だ」

「つたく……末恐ろしいよ、お前」

真はにやつと笑いながらそう言い、それに陽介は呆れたように肩を落として呟いた。

「ま、いいや。とつとと終わらせようぜ！」

「ああ……俺にとつて本番はこれからだがな」

「何言ってるんだお前……」

陽介の言葉に真は静かにそう呟き、陽介はそう返しながら二人はゴミの方に歩いて行った。

そして作業も終わって夕食の準備が始まる。その一角では凄まじい覇気がぶつかり合っていた。燃え盛る赤いオーラを放つ千枝と雪子、それに対抗する真と陽介（陽介は訳が分からずとりあえず厄介な事に巻き込まれたと肩を落としているが）だ。

「里中、天城……手加減はしないぞ」

「望むところよ！」

「そつちこそ……ほえ面かかないでね」

「一体何がどうなってるんだよちくしょー……」

真、千枝、雪子は凄まじいオーラを放ちながら言い合い、巻き込まれた陽介はずくと肩を落として呟く。そしてその場が静寂に包まれ、互いの気が最大限に高まった瞬間二チームは素早く動いた。

「花村！ 水を汲んできてくれっ！ 分量はそれぞれ鍋の中にメモを入れてる！」

「お、おうっ！ って鍋多っ!？」

真の指示に陽介は反射的に頷くがその多さに驚愕し、慌てて近くのクラスメイトに手伝いを頼んで水汲みに走り出し、その間に真は素早く玉ねぎを取り出すと目と鼻を覆う形のゴーグルを着用、玉ねぎのみ

じん切りを開始する。

「は、早っ!？」

「千枝、私達も玉ねぎ切らないと!」

「う、うん!……め、目が痛い……」

流れるような作業に千枝が叫び、雪子が急いでそう言うのと千枝は玉ねぎを斬り始める。が玉ねぎの汁は目に沁み、二人ともすすり泣きながら玉ねぎを切っていった。そしてにんじんやじゃがいもの皮むきと刻みが終わった辺りで陽介がたくさんの水入り鍋をクラスメイトと共に抱えて戻ってくる。

「つつ椎宮! 水汲んできたぞ!」

「サンキュ。しばらく休んでてくれ」

真は陽介にお礼を言い、鍋の他に頼んでおいた飯ごうを準備する。

「つて椎宮、米貰ってこねえと!」

「心配いらぬ……そろそろ来るはずだ」

「来るつて?」

真の言葉に陽介が呟いたその瞬間ブロロロロというエンジン音が聞こえてくる。

「やっほー。椎宮真君にお届けものでーす」

そう言つてその場にバイク（後ろにたくさん荷物が乗せられている）が乗りつけ、運転手はバイクから降りるとヘルメットを外して、青い髪をなびかせて整った顔立ちでスマイルをサービス。女性陣から黄色い声上がる。

「命さん!？」

「真君、物資補給に来たよ」

「ありがとうございます、先輩!」

命がそう言つててきぱきと荷物をおろし、真もその荷物を開ける。

「米!？」

「無洗米だ。これなら洗う必要がないから陽介達でも簡単に炊ける。後はスパイスと今回使う食材で持ちきれないものや出来る限りギリギリまで冷蔵しておきたかったもの……」

「お前どんだけ料理に本気出してんだよ!？」

命まで荷物運びに駆り出す真の本気具合に陽介は驚愕の声を上げる。その横で千枝と雪子も啞然としていた。

「くおらーっ!!! 誰だバイクなんぞ乗っとるのは?!?!」

と、エンジン音を聞きつけた諸岡の怒鳴り声が聞こえ、生徒の一部が「モロキンだ!」、「あの男の人やべえ!」とか叫び出す。

「ぬ、貴様は?!」

「お久しぶりです、諸岡氏。後輩に助けを求められて参上いたしました」

しかし諸岡は命を見てのけ反り、命がスマイルをサービスしながらそう言うどぐぬつと唸る。彼は以前の食事以来彼に若干苦手意識を植え付けられていた。ちなみに真は気にも止める様子もなく陽介の他、夕食にお呼ばれされていたはずの完二まで巻き込んで料理を続けていた。陽介は真指示の元飯ごうでご飯を炊き、完二は隠し味であるリンゴを摩り下ろしていた。真は二人に指示を出しながら材料を切り、カレーを煮込んで味見、スパイスや隠し味の追加などを同時進行で行っている。その素早さは既に分身が見えるのではないかと観客に思わせる程だった。しかも作っているカレーは一種類ではなく現在進行形で三つカレー入りの鍋が煮えており、しかもまだ増えるような雰囲気を見せている。その料理の手際に千枝と雪子はすっかり圧倒されていた。

そして真はやり切った笑顔を浮かべて完成したカレー鍋にさつと手を振る。

「出来た……パーフェクト」

「ブリリアントだよ、真君!」

真が汗を煌めかせながらパーフェクトと、とても良い発音で呟くと命もびしっとサムズアップして高校時代の先輩の台詞を真似る。

「……これ、味見する?」

「え、ゆ、雪子がしないなら……しない」

その近くでは雪子と千枝が紫色の煙の噴き出すカレー鍋を見ながらそう呟いていた。

「さて。手伝ってくれたお礼だ。花村、完二。先に二人に味見の榮譽を与えよう」

「マジか相棒！」

「あざっす!!」

真の言葉に陽介と完二は目を輝かせてご飯を盛り、カレー鍋の前に立つ。

「うひゃーどれも美味そう！」

「ありがたくいただくッス！ 先輩！」

真の説明に陽介と完二は嬉しそうに言い、それぞれ別々のカレーをよそつて席へと運ぶ。

「ん、んじゃ……」

「いただきます!!!」

二人は両手を合わせて挨拶し、スプーンにご飯とルーを適量乗せ、ゆっくりと自分の口へと運んでいく。それに見ている全員がぐくりと唾を飲み、ついに二人はカレーを口に入れた。

「うっ……」

その瞬間二人の口から呻き声が漏れ出し、観客達が息を飲む。

「……っめー!!!」

そして二人の歓声が山の中に響き渡った。

「な、なんだこりゃ?! コクがあつて甘くつて、すっげー美味しい!!」

「こっち、なんか酸味が効いてるッス！」

「花村の方は林檎と蜂蜜、さらにカカオチョコレートを少し混ぜて甘味とコクを出してみた。完二の方は恐らくヨーグルトを隠し味に入れたやつだったと記憶してる」

パクパクパクとスプーンが止まらない二人から目を離し、ここの観客に目を向けた。

「皆も遠慮せずにどうぞ。無礼講のカレーパーティーと行きましよう！」

「レッツパーティー！ だね」

『イエーッ!!!』

真の言葉に命がノリ、それにこの場の全員が声を上げると林間学校

夕食は突如それぞれのグループが作った晩飯を食べ合うパーティと化した。

「……………」

千枝と雪子はそんな中自信がもてないのか無言でカレー鍋の前に立っていた。

「よっ。どうしたんだよ天城、里中」

「こ、こんにちはっ、里中さんっ!」

と、さつき美味いカレーを食べて上機嫌になっている陽介と、若干カチコチになりながら一条が千枝に挨拶。

「あ、花村、一条君……」

「さ、里中さん。これ、俺達の班で作ったおにぎりなんだけどさ。食べてよ……その代わり、カレー一杯貰っていいかな?」

「えっ!」

「大丈夫だって。そりやまあ、あんなに上手いカレーの後じゃちよつとハードル高いかもだけだよ」

一条が交換として手渡してきたおにぎりを受け取りながら千枝は頬を引きつかせ、陽介は軽くそう言いながら彼女らの料理をよそい、一条に渡すと自分の分もよそって二人は近くの席へと運んでいく。

「ちよつ、待っ——」

「二じゃ、いっただつきまーす!」

二人はそう言い、同時に料理を口に含む。そして同時に白目を剥き失神した。

「キヤーツ!!!」

「花村! 一条君!」

それに雪子が悲鳴を上げ、千枝が二人に駆け寄り揺り起こす。

「あんじゃコリヤーアア!!!」

意識を取り戻した陽介の一声がそれだった。ちなみに一条はまだ意識が朦朧としているのか席に座ったままうつむいている。

「お前ら! どんな作り方ゲホッ、ゲホッ!」

叫んでる途中にさっきの味を思い出したのかゲホゲホと咳き込む。

「カレーは辛いか甘いかだろ!? これくせーんだよ!!」

「し、新食感だった……」

陽介が怒鳴る後ろで一条は青白い顔でようやくそうとだけ漏らした。

「ジャリジャリしてる上にドロドロしてて、ブヨブヨんどこもあつて……要するにもう、気持ちワリーんだよ!」

「なんか、上手く混ざんなくて……」

「愛情は、入れたんだけどさ……」

「愛情つて、一体何突っ込んだんだよ!!?」

陽介の怒声の前で雪子と千枝は言い訳、陽介はさらに追及する。

「ま、まあまあ花村君落ち着いて」

「命さん!?! ちよつ、まだいて大丈夫なんですか!?!」

「諸岡氏から許可取ったよ。許可してくれなきゃ真君のカレー食わせませんって」

仲裁に入ってきた命の、陽介の驚いた叫び声に対する笑顔での返答に三人は「た、性質悪い……」と言いたげな表情を見せた。ちなみにその諸岡は悔しそうに顔を歪ませながらも真製のカレーにがつついてる。

「ま、そういうわけでも問題なくなっただけどさ。お腹が空いたし、僕も里中さんと天城さんのカレーをご馳走になろうかと」

「「えええっ!?!?」」

その言葉に三人が驚愕の声を上げ、千枝と雪子がぶんぶんと首を横に振る。

「だ、駄目です! 止めてください!!」

「ちよ、ちよつと失敗しちゃって……」

「ほんと、ほんとに止めといた方が! 遊びで勧めるのもためらいますから!」

「心配ないって。じゃ、花村君の残したのもらうね」

「「あああっ!!!」」

命はそう言って自分用のスプーンを取り出し、陽介の残したカレー

をすくうと一口口に入れる。それに三人が悲鳴を上げ、命は目を閉じて何回か咀嚼……その瞬間、命の動きが止まった。

「……………」

三人は息を飲んでそれを見守る。と、命の喉が動き、ゴクンという音が聞こえる。あのカレー改め物体Xを命は飲み込んだ。

「……うん、個性的な味だね。新食感だ」

彼は少し引きつっていながらも、笑顔で感想を出した。

「命……さん……」

「二人とも料理が不慣れなんだから仕方がないよ。ところで、なんか真君から話は聞いたけど、許してあげてよ」

千枝と雪子が声を漏らすと命はそう言い、すまなそうな顔を見せる。

「え？」

「真君は昔から料理をしてたそうだね。両親が共働きで、ご飯を作る暇もなかったそうだから自分が作って、その料理を食べた親が笑顔になつてくれるのが何より嬉しかったそうなんだ。だから料理を冒険されるのは許さないらしくってね……でも二人にそんなつもりはないんだし、きつと真君も分かってくれるよ」

命はそう言いながら物体Xを食べ進める。

「心配しなくても基本に忠実にやっていけば上手になつていくよ。僕が保証する……僕の仲間にも今はある程度上手になつたけど最初は正にこんな料理を作る人がいてさ……懐かしいや……」

命はそう言うとき昔を思い返すように虚空を見上げ、目を細める……しかし、その目が妙に虚ろになっているような気がする。

「……あれ？ 幾月理事長、タカヤとジンじゃないか。何をやってるんだ？ あ、パパ、ママ？ そんなところで何してるの？……武治氏、それにあなたはゆかりのお父さん……どうしたんですか皆揃ってそんな綺麗なお花畑と小川の向こうで……」

「せ、先輩!! 戻ってきてください!!!」

虚ろな目になった命がそう漏らしていると突然真が命の肩を掴んでぶんぶん前後にゆする。

「お、おい椎宮、どうしたんだよ!」

陽介が慌てたように叫ぶと命ははつとしたように目を見開く。

「ぼ、僕は一体? 綺麗なお花畑と小川の向こうで手招きしてた幾月理事長とタカヤとジンが、パパとママと武治氏と詠一朗氏にぼこぼこにされてた……」

「先輩あなたの両親は幼い頃亡くなったはずですよ!」

「命さんその川つて三途の川じゃないっすか!」 臨死体験!」

命のぼーつとしたような声に真と陽介が声を上げ、千枝と雪子も啞然とする。まさか臨死体験をするまでの味とは思っていなかった。

「臨死体験……そうか。二年もの間風花の料理を食べてなかったから胃が弱くなってたんだ……油断した」

「いや、そんな問題なんすか!」

命は悔しそうに呟き、それを聞いた陽介がツツコミを叩き込む。

「ふう……あ、そうだ。里中、天城」

「えっ?」

「な、なに?」

真は命の命が救えたことに安堵の息を吐いた後千枝と雪子呼び、二人が驚いたように真の方を見る。

「すまなかった」

と、真は深く頭を下げ二人に謝る。

「いくらなんでも言い過ぎた。二人は真面目に、俺達に料理を振る舞ってくれようとしていたのに……本当にすまない」

「あ、いや、そんな……実際に料理は失敗しちゃったわけだし……」

「そ、そうそう! 椎宮君の忠告に従わなかった私達こそごめん!」

真の誠実な謝罪に雪子と千枝は慌てたようにわたわたとなり、二人も頭を下げる。

「……えーつと、結局なんだったんすかね?」

「さあ? ま、仲直り出来てよかったじゃん」

陽介は結局話を理解しきってない様子で呟き、命も肩をすくめてそう返す。

「……」

一方夕食ゾーン。一年の男子生徒——小西は少し居心地悪そうな様子でおにぎりを食べていた。

「小西？」

「？」

と、そこに声をかけてきた相手があり、小西は気だるげな様子で振り向く。

「椎宮先輩……」

「久しぶりだな……カレー、食わないか？ 嫌いなのか？」

「好きですけど……行きづらいです」

小西は静かにそう呟いておにぎりを再び齧る。真はそれをちらりと見た後その場を離れ、少しすると両手に皿を持ってその内の一つを小西の前に置いた。

「ほら、食え」

「……いただきます」

真がそう言ってスプーンを渡してくると小西は静かに呟いてカレーをご飯と一緒にすくい、口に運ぶ。そしてもぐもぐと咀嚼しているのを真は興味が湧いているように見つめている。

「……なんすか？」

「美味いか？」

「……まあまあ」

真の言葉に彼はそう呟き、カレーを食べ進める。しかし真はそこを離れる様子はなく、彼は顔をしかめて真の方を見た。

「なんか用ですか？」

「別に。暇だし何か話さないか？」

その言葉に彼は一度食事の手を止め、スプーンを置く。

「俺は嫌ですね」

刺々しい言葉、しかし真は気にも止めずに微笑を浮かべており、彼もやがてつられたようにふっと微笑を浮かべた。

「俺と話したいなんて、珍しい人ですね……そうだ。一応言つときま

すよ」

小西はそう言つてカレー皿に目を落としました。

「俺、保健委員は『おみそ』扱いになりました。『おみそ』って……知ってます？　いてもいなくても、いいってやつ。俺、出ても出てなくても……いてもいなくても、よくなつたんです。家が大変だから、『特例』だつて……可哀想だからって、言えばいいのに。今日も、保健委員は救護用のテントで待機だったのに、俺は『人手が足りてるから大丈夫』って追い出されました」

そう言う彼は暗く笑っている。

「みんな、俺のこと『可哀想』って遠巻きですよ……居心地はいいっすけどね。でもあいつら、好奇心丸出しの顔なんです。『どうやって殺されたの？』』『どうして殺されたの？』』『犯人が憎い？』……聞く勇氣もないくせに、目だけ輝かしちやつて俺を見てるんすよ……一挙手一投足。うんざりだ……」

心からうんざりするような表情を見せながら、彼は暗い目で真を見る。「あんたもそうですか？　事件について、聞きたくて話しかけたんすか？」

「そんなつもりはない。ただ――」

「みんな、そういう……」

真の返答を聞くつもりもなかったのか小西はそう呟いて再びカレーを食べ始め、食べながら再び彼に話す。

「けど残念ながら、言えることはないっすよ。テレビで発表されてるのが、俺の知ってる全部。あー、『犯人が憎い？』には、『いいえ』……ですね」

話し終わると同時にカレーを食べ終え、彼は立ち上がると真に背を向ける。

「さよなら」

そしてそう言い残して彼は歩き去っていく。真はその様子を見て浮かない顔を見せた。

「何変な顔してんのよ」

「ん？　ああ海老原」

と、その隣に彼の所属するバスケット部のマネージャーこと海老原あい
がカレーを入れた皿を持ちながら座り、カレーを一口二口食べると口
を開いた。

「これ、あんたが作ったんだってね」

「ああ」

「ふくん」

あいの言葉に真が頷くと彼女は軽くそう返してカレーを食べてい
く。

「……ま、結構美味しいじゃん」

「そうか!」

あいの評価を聞いた真は嬉しそうに微笑み、その顔を見たあいが若
干怯む。

「な、なに?」

「ああ、やっぱ自分の作った料理を美味いって言うってくれるの、嬉しい
からさ。ありがとう」

「ど、どういたしまして」

真の心の底から嬉しそうなお礼にあいは照れくさそうに返した。

それから時間が過ぎて夜中。真と陽介は一緒のテントである。ちな
みに命は流石に部外者の宿泊は何か問題が起きてても大変だしそも
そも彼自身目的は材料配達および食事参加のみのつもりだったため
食事が終わるとすぐ、真が出した大量のゴミ(と言っても食材はほと
んど無駄にはしておらず、食材を入れていた袋などの人工物が大半だ
が)を持って帰っている。

「……なあ、なんでお前ここにいんの?」

陽介は何故かこのテントにいる完二に尋ねる。

「バックレたら進級させねえって釘刺されたんすよ。それに一年のテ
ント、葬式みてーに静かだし」

「まあ、お前がいたらそーなるわな」

完二の言葉に陽介はそう漏らし、完二はきよろきよるとテント内を

見回す。今このテントにいるのは真と陽介、そして完二だけだ。

「ここ、先輩らだけなんスか？」

「後のヤツら、病欠だとき。賢いよな……」

「なら俺、ここいてもいいツスよね？」

「ああ。ゆつくりしていけ」

完二の言葉に真が頷くと完二は嬉しそうに笑う。

「お、さっすが先輩。器でかいツスね。迷惑かけないから大丈夫ツス。騒がなきやバレないし」

「しゃーねーなあ」

陽介も真が許可したなら仕方がないと肩をすくめて許可し、テントの奥を顎でしゃくる。

「じゃあ、お前寝る場所あそこな」

その言葉に完二は振り向いてテントの奥を見る。

「おお、すっげ岩あるじゃないスか。寝れねえよコレ、マジ痛えって」

「うるせーな……騒がないんじゃねーのかよ」

「先輩、もちつと奥行けねんスか？」

「ムリムリ、奥は坂んなってんだよ。寝てる間にズリ落ちるって。嫌なら戻れよ」

そう言われて完二はぶつくさ言いながらも承諾。次にため息を漏らした。

「そーいや先輩らの担任、モロキンとかってヤツでしたっけ？ さっ

きそいつに外で捕まったんスけど、腹立って軽くキレかけたツスよ」

「何があった？」

「知りもしねえクセに、やれ中学時代がどーの言ってきやがって。しかも厄介事起こしたら即停学とかなんとか……たいがいにしやがれってんだ」

「あいつ、思い込み激しいからな……」

完二は苛立ったように漏らし、陽介はため息交じりにそう返す。

「なんか松永とかが庇ってくれたんでキレずに済んだんスけどね……助けてくれたお礼だとかなんとか……あ、そういえばその時にちよつと聞いたんスけど。あの野郎、例の殺された二人の事、ボロクソ言っ

てたらしツスよ」

「モロキンが？ 山野アナと……小西先輩の事か？」

陽介の問いかけに完二は頷く。

「不倫だの、家出だのする人間は狙われて当然だ」とかんなんとか……ま、尾ヒレついてんのかも知んないスけどね。嫌われてるみてえだし」

「アイツなら言いそうだな、まったく……俺も去年、越してきた時色々言われたからな」

「ああ。俺も落ち武者とか言われたな」

「先輩らもつすか!？」

完二の言葉に陽介と真が思い出したように頷くと完二は驚いたように叫ぶ。

「ま、いちいち覚えちやいねーけど」

「たとえ、話半分でもムカつくぜ……てめ腐ってもセンコーだろつつんだ」

「あんなヤツ、むかつくだけ損だぜ？」

陽介と完二はそう言っており、真もふうと息を吐いて寝ころんだ。

「流石にゴミ拾いと料理で疲れたな」

「そりやまあありやな……」

「でも美味かったつすよ。ゴチになったツス」

真の言葉に陽介が苦笑し、完二は改めてお礼を言った。

その頃、学生が夕食を食べていた場所。そこでは教師陣が酒を飲んでいた。

「ったく。近頃の生徒はたるんどる！ 体調不良だのなんだの屁理屈だけは立派になりおつて！ どうせ全員サボってるだけに決まってる！」

「そうかいねえ？ でも椎宮つちや花村つちは真面目だと思うがよ。特にあの料理は美味かった」

缶ビールを一本空けながら諸岡が叫び、それに細井が柔らかく笑い

ながら返すと近藤がうんうんと頷いた。

「本当だな！ あんなグッドテイストな料理を作れるんならクツキングクラブにでも入れればいいものを！」

「まあ、真君は料理好きですからね。僕も少し鍛えましたけど筋金入りですよ」

近藤の闊達に笑いながらの言葉に青髪の青年が缶ジュースを飲みながら微笑んで返す。

「ふんっ！ 料理が出来ようと人格形成に関係ないわ！ 天城や里中と群れたり最近は何完二までもつるんでおる！ 絶対いかがわしい事をしてるに決まっとるわ！」

「決めつけはいけませんよ、諸岡氏。疑わしきは罰せず、ですよ？」

諸岡の言葉に青髪の青年が諫めるようにそう言う。

「と……うて……」

そこで中山が声を漏らし、祖父江がその青年の方を向く。

「お、おぬしは何者じゃ？」

『!?!』

その言葉でようやく全教師の視線がまったく違和感なくこの空気に溶け込んでいた青髪の青年の方に向いた。

「どうも。諸岡氏以外は初めまして、利武命と申します」

「きつさまあ?!? 帰ったんじゃなかったのかあ?!?!」

青髪の青年——命の飄々とした笑顔での挨拶に諸岡が怒鳴り声を上げて立ち上がる。

「諸岡先生、お知り合いなんかね？」

「というより、さっきのトーク内容だと椎宮とも知り合いのようだが……」

細井と近藤の言葉に諸岡はくつと唸り、命はにっこりこと微笑む。

「諸岡氏とは前に一度共に食事をした仲でして。真君とは真君の前の学校の先輩と後輩の関係なんですよ」

「あら、そうだったの？」

命の自己紹介に中山がそう返し、諸岡は舌打ちを叩く。

「それよりも、貴様はここで何をしている?!? もしや眠りについてい

る女子でも狙っているのか!？」

「そうだったらこんなところで呑気にジュース飲んでませんって。あ、僕飲酒は駄目ですよ、まだ19なので」

諸岡の怒号に命は呑気に笑って缶ジュースを見せ、まだ未成年なので飲酒は駄目だとあらかじめ断っておく。

「なんとなく面白そうな匂いを感じ取りましてね。この方々とコミュを築くつもりは特にないんですけど」

命はあははと笑ってそう言い、その言葉に教師陣が「コミュ?」と眩く。そして命は新しいジュースの缶を開いた。

「この頃の若者は何かと多感ですからねえ。色々と間違いを起こすもんですよ」

「ふん、分かっとなるようだな!　だからこそ常に厳しく己を律せねばならん!」

「それも確かなんですけど、人っていうのは失敗を犯す生き物です。失敗を犯し、痛い目を見るからこそ反省し、次に繋げる。人は、命はそうやって育まれていくものです……だからこそ大人のすべきことは失敗をただ無暗に罵倒し否定するのではなく、その失敗から何を学べばいいのか教え、導いていくことだと僕は考えます」

命はそう言ってジュースを飲み干し、夜の闇に向けて放り投げる。それはこの場所に常備されていたゴミ箱に吸い込まれるように入っ
ていった。

「また、教師は人を教え導くもの。ですが生徒からも教えられ導かれるもの。そうとも僕は考えます」

「ふん、貴様如き若造が分かった口を聞きおって!」
「ごもつとも。じゃ、僕はそろそろ帰ります。お休みなさい」

命はそう言ってその場を去っていき、しばらくするとブロロロロというエンジン音が聞こえそのエンジン音も遠くなっていく。

「な、なんだったんかいねえ?」

「さあな……じゃ、私は少しトイレに行って、見回りに行ってきます」

細井の言葉に諸岡はそう返した後、コップに残っていた酒を飲み干すとトイレの後見回りに行くと言って歩いていった。

さてこちらは真達の寝ているベッド。既に就寝準備完了の状態、というか既に真は眠りこけていたが、その横には完二が若干密着の勢いで近づいていた。

「完二、お前もつとあつちだろ?」

「あそこじゃエビゾリんなるんスよ」

「……そうか」

陽介の真を挟んでの言葉に完二がそう返すと陽介は言いよどむ。

「あの……さあ」

「なんスか?」

と、また陽介が完二に話しかける。

「なんでこのテント来たんだ?」

「あ? さつき言ったじゃねえスか」

完二がそう返すとテントは沈黙に包まれる。

「んだよ……なんなんスか?」

その沈黙に耐えきれないように、再び完二が声を出す。

「こ、この際だから……その……しよ、正直に言っただけ……」

「はあ」

陽介はどこか怯えたような、何とも言えない表情で完二を見る。

「お、お前って、やっぱ……アッチ系なの?」

「アッチ?……」

「お、俺ら……貞操の危機とかになつてない? いま」

「のあ!?!」

陽介の言葉に完二は顔を真っ赤にして声を上げ、立ち上がる。

「ななな何言つてんじや、コラア! そ、そんなんじやねつてんだろが!!」

「ちよ、ちよつと待て、なんで豪快にキョドるんだよ!? な、なおさらホンモノっぽいじゃんかよ!」

完二は立ち上がって盛大にキョドリながら叫び、それに陽介も負け

じと立ち上がって叫ぶ。ちなみに真は二人の足元でぐっすり眠りかけていた。

「んなワケねえだろうが！ そんなのあ、もう済んだ話だ！ 今はもう、そのっ……な、なんっーか……」

「口ごもんなよこえーよ!!」

「今はもう、女ぐらい平気って事ッスよ！」

「証明できんのかよ!？」

「しよ、証明だ?……」

陽介の言葉に完二は一瞬口ごもる。

「じゃなきや、俺ら一晚ビクビクしながら過ごす事になんたる！ あ、いや椎宮平気そうに寝てっけど俺がさー！」

「ケツ……も、いッスよ」

陽介の言葉に完二は悪態をつき、目を吊り上げる。

「んなら俺、女子のテント行って来ッスよ!!!」

そして思いつき怒鳴るように宣言した。

「え!? ちょ、そりやマズいつて！ いちいち極端なんだよ!! バレたら停学って、自分で言ってたろ！ モロキンにまで目エつけられてんのに!」

「んな事で引き下がんのは男じゃねえ!」

まさかの展開に陽介は慌てて落ち着かせようとするが完二はそう叫んでテントの入り口を睨む。

「モロキンがなんぼのモンじゃ!! 異完二なめんなコラアアアアアアアアツ!! うおおおおおおおーっ!!!」

「あ、ちょ、おい!!」

陽介が止めるまでもなく、完二は絶叫してテントを走り疾走していった。

「あー……アホが走ってくよ……もー知らない、俺……」

その光景を見た彼は諦めたようにそう呟いた。

「くかー……」

そして真はこの一連の騒ぎに気づかず、ぐっすり眠りこけていた。

一方その頃……千枝と雪子のテント内……。

「ぐがー……ぐぐおとおおおお……」

千枝、雪子、大谷の三人のテント。大谷は耳障りないびきをかいて眠っており、眠れない千枝と雪子は、千枝はイライラした様子でテント内を右往左往し、雪子は壁に顔を向けて正座していた。

「ハア……なんでここだけ三人か、分かったよ……」

「眠れないね……」

「ハア……あーも、寝れないし、やる事もないし……」

千枝はそう呟き、ふと気になったように雪子を見る。

「そういえば、クマくん。今頃なにしてんのかな。いちんち中一人つて、考えてみたら寂しいよね。そう言えばあいつ、前にさ……」

「ぐがー……ぐぐおとおおおお……」

千枝が話している間にも、大谷のいびきが邪魔をし千枝はいい加減我慢できない様子で耳を押さえた。

「ああああ……うああー！ も、やだあ！ 雪子、逃げようよ！」

「逃げるって……どこへ？ 山を降りるとかは、ちよつと……」

雪子はそこまで呟くと、どこか据わった目で大谷を見る。

「……鼻と口ふさいだら、いびきって止まる？」

「ちよ、やめなさいアンタ！」

いきなりのエキセントリックな発想に千枝が必死でツツコミを入れた。

「あー……もーいや……」

千枝が呟いた瞬間、外からがさがさつという物音が聞こえ二人は瞬時に反応する。

「だっ、誰?！」

千枝がそう叫んだ瞬間、テントの入り口が開いた。

再び真と陽介のテント内。陽介は完二の暴走を気にしているのか寝ている真を見ながら一人腕組みして胡坐をかいていた。

「ねえ……起きてる?」

そこにいきなりテントの外から聞き慣れた女の子の声が聞こえ、彼は苦々しげな顔を見せる。

「何してんだよ、こんなところで! こつち男子だぞ!」

「入れて! テントに!」

「バカ言うな! モロキンにばれたら停学なんだぞ! 戻れ!」

「帰れないの!」

陽介と千枝が慌てた様子で会話していた、その時だった。

「腐ったミカンは!、いねが! みだらな行為をするやつあーな!」

「! しよ、しよーがねーな、早く入れよ!」

いきなり聞こえてきた諸岡の声に陽介はしようがねーと言って二人を招き入れる。

「なんだようるさいなあ……」

と、真が目を覚まし、千枝と雪子が入ってくるのを寝ぼけ眼で確認する。

「ん? あれ?……夢か?」

「安心しろ、いやしていいのかわかんねえけど、現実だ」

「へえ?……あれ? 完二は?」

「もー知らん……」

寝ぼけているため状況が把握できていない真に陽介は頭を抱え、女子二人が入ってくるとそつちに怪訝な目を向ける。

「で、なんなんだよ、いったい?」

「その、完二君が……」

陽介の問いかけに雪子がそこまで説明、一瞬千枝と目を合わせる。

「気絶して、のびちやつてるから……」

「気絶?」

「え、お前ら、まさか……」

「そ、その、全然大したことじゃないよ!? い、いきなり入ってきて、いきなり気絶したの! そんだけ。ね、雪子!」

「え？ う、うん」

「??？」

何か察した陽介を慌てて千枝が誤魔化し、雪子も押されて頷く。それに真はまだ訳が分かってない様子で首を傾げていた。

「で、そんな状況で寝れないしさ、起きたらほら……騒ぎそうでしょ？

だから、置いてきちやった」

「……」

千枝の言葉に陽介は呆れたような目を見せる。

「いいかー、〝ふらち〟と〝みだら〟は違うんだからなく……」

「来た！ 近いぞー！」

「二人とも、隠れろー！」

「そ、そっか！」

「え、ちよっ!？」

「きゃっ!？」

諸岡の言葉に陽介が叫ぶと真は半分寝ぼけた頭で思考し、二人を隠すべきと判断すると陽介も頷いて真が雪子を、陽介が千枝を引つ張り布団に連れ込むと陽介はさらにランプに手を伸ばして明かりを消す。

「ちよ、ちよっと花村！ 近い!!」

「うっせ！ 大声出すな！」

陽介に布団に押し込められた千枝が彼をぼかぼか叩きながら叫ぶと陽介も声を潜めて叫ぶ。

「天城、すまないが静かにしてくれ。停学がかかっている……」

「う、うん……」

真の言葉に雪子は真っ赤になりながら頷く、が真っ暗になっている上に真は彼女の方を見ていないため全くそれに気づいていなかった。

「おい、おまえら、二人いるなー。返事しろー」

「はい」

「んあー？ あー。いるな……花村はもう寝てるんだなあ？」

「うっす！ もう寝てます！」

「寝てないじゃないか！ いいから、黙ってまた寝ろー!!」

点呼確認をした後、諸岡の「ふあわわ」という欠伸が聞こえてきた。

「いかん、ちよつと飲み過ぎたか？ 眠くてたまらん……」

諸岡はそう言つて去つていき、気配が遠ざかつていくのを確認してから四人は布団を出て明かりをつける。

「はあ……一氣に年食つた気分だぜ」

「まっただよ……危うく停学くらうとこだった……」

「あのな、お前らのせいだかな！」

陽介の言葉に千枝が賛同すると彼は怒つたように彼女を声を潜めて怒鳴る。

「しよ、しよーがないじゃん！ とにかくもう出れないし、朝、人起き出す前に出てくから、それでいいでしょ!？」

「なんでお前がキレてんだよ……」

千枝の逆ギレじみた声に陽介は呆れたように呟く、と千枝は彼を睨んだ。

「言つとつけど……妙なこと」しないよね」

「な、なに勝手に……」

千枝の言葉に陽介はまた叫ぼうとするがそこで真は欠伸を漏らした。

「ふわ……そつとしておく。勝手にしてくれ」

「あ、起こしちやつたんだよね？ ごめん、お休み」

真は眠気が我慢できないのか再び寝転がり、雪子はさつき自分達が入ってきた時に真が起きたのを思い出すとごめんと謝りお休みと言つておく。

「くつそ、貸しだからな！」

真が寝てしまつては形勢不利と判断したか、陽介も結局彼女らの滞在を許可したのであった。

その翌日、6月18日。午前中で現地解散となり、真達は近くの川へとやってきていた。

「はーっ。終わった終わったー！」

「あつという間だったな。林間学校」

千枝が伸びをしながらすすきりした様子でそう言い、真も呟く。

「んじや、俺らしか来てないみたいだし、せつかくだから泳ぐか!!」

「え、先輩ら泳ぐんスか?……」

陽介のテンション高い言葉にぐったりと膝を折って座り込んでい
る完二が気分悪そうな声を漏らす。

「俺あダリイんでパスで」

「大丈夫か?」

「昨日、ちゃんと寝れたのか?」

「!? お、俺あ別に誰とも添い寝なんざしてねえツスよ!!!」

気分悪そうな完二に陽介と真が心配そうに問いかけると完二はび
くつとなつて怒号を上げる。

「二……え?」

自爆した完二に四人が若干引きつった笑みを見せ、それを見た完二
が居心地悪そうな様子でうつむいた。

「い、いや、俺のこたあいいんで……」

「俺だけ泳いでも、つまんねーだろ」

陽介はそう呟いて、にやにや微笑みながら女子二人の方を見る。

「な、なに見てんの! あんただけで入りやいいじゃん!」

その視線に気づいた千枝が自分の身体を隠すように抱きしめなが
ら陽介を睨み、叫ぶ。

「そういや、貸しがあつたよな?」

「うっ……か、貸しはまあ、そうなんだけど……」

陽介の指摘に千枝は目を泳がせながら呟き、直後はつと思いついた
ように陽介を見返した。

「そっそう! 水着持つてきてないし! ねえ雪子!!」

「そ、そうだよね! うん、残念!」

「いやーほんと残念だなー。水着持つてれば入れたのになー、あはは
……」

千枝と雪子は慌てて取り繕い、空笑いを見せる。

「じゃーん! なんとここにありましたー!」

と、陽介がいつから準備していたのか二つ水着を取り出した。

「ジュネス・オリジナルブランド、初夏の新作だぜ? 知り合いの店員
に選んでもらったんだ。結構いいだろ?」

「うわ、引くわー……」

「先輩マジ引くっす……」

女物の水着をわざわざ用意する別ベクトルでの準備の良さに千枝と完二が引きながらそう漏らす。

「それ、最初からずつと持ってたの?」

「いいじゃん、一緒にみんな泳ごうぜ!」

雪子も引いた様子で問いかけ、それに陽介は明るく返す。

それから二人は水着を持って着替えに行き、真と陽介も水着に着替える。しかししばらく待っても千枝と雪子は戻ってこない。

「おっせーなーあいつら、どこまで着替えに行っただ……」

陽介がイライラしているように足をトントンさせながら呟く。

「先輩、その水着いいッスね!」

「ああ。ハイカラだろ?」

「ハイカラっすね!」

その後ろでは完二と真がそう話し合っていた。ちなみに完二は泳ぐのパスらしく着替えていない。

「お待たせ……」

その言葉と共に千枝と雪子が戻ってくる。

「うお、これは……」

陽介が嬉しそうな声を漏らし、完二も頬を赤らめる。二人ともビキニ姿で千枝はスポーティで健康な、雪子は美白美人で綺麗なイメージを見せていた。

「そ、そんなジロジロ見ないでよ……恥ずかしいじゃん……」

「ちよ、ちよつと……黙ってないで何か言つてよ……」

二人も恥ずかしそうに頬を赤らめており、それに真は笑みを見せる。

「二人とも、可愛いよ」

「ふああ……な、なに言いだしてんのっ!!」

「や、やだ、もう……」

真のストレートな評価を受けた千枝が顔を真っ赤にして睨みながら怒鳴り、雪子も恥ずかしそうにそう漏らす。

「いつやー、想像以上にいんじやね？ まあ、中身がちよつとだけガキっぽいけど、将来いい感じのオネーサンになるぜ、きつとー！」

陽介の言葉に千枝と雪子の額に青筋が立つ。

「そうか？ 今でも充分大人っぽいと思うけどな」

「つつ、ちみや、くん？……」

「ほ、ほんとになに言いだしてんのこの人っ……」

しかし真が二人をフォローし、雪子と千枝は再び顔を赤くする。

「えー。いやお前、それはおべんちやら過ぎだつて」

「それに比べてこつちは……すつげー不愉快……」

「私も……」

だが陽介は笑いながらそれを流し、それを聞いた千枝と雪子が怒りに震える。

「飛んでけーっ!!!」

「え？ のわあっ!!!」

直後、千枝の蹴りが、崖つぶちに立っていた陽介を襲う。

「おわあああああああっ!!!」

そして陽介は崖から落ちていき、勢いよく着水する。

「おお、大丈夫っすかせんぱーいー！」

完二が慌てて陽介に呼びかけ、雪子はそつちに目を向ける。

「ちよつ、完二君!」

「な、なんスか？」

雪子の声に気づいた完二が振り向く。その鼻からは興奮しすぎたのか鼻血が出ていた。

「ちよつと……やだっ！」

それを見た雪子がほぼ反射的に完二を崖から突き落とす、陽介と同じように川に叩き込む。

「危なかった……」

雪子はまるで一仕事終わった後のような冷静な口調でそう呟く。

「な、なにも落とすことねーだろーがーっ!!!」

「いーじゃん！ どうせ入るつもりだったんでしょーっ!!!」

「いっぷしっ、寒っ……」

陽介の怒号に千枝が叫び、完二が小さくくしゃみをする。

「ん？ 上から何か聞こえないか？」

と、男子勢唯一無事な真が川上からえずくような声に気づき、雪子も声に気づいて上流に目を向ける。

「この声……」

「モロキン？」

千枝も声の正体を呟いて上流に目を向ける。

「の、飲み過ぎたく、気持ち悪い……」

どうやら諸岡が川上で吐いているらしい。

「……ふ、二人とも!! 早く上がれっ!!」

「うあっ！ なんか流れてきたっ!!」

真が血相を変えて叫び、千枝も驚愕の声を上げる。

「う、うあ、うわあああああああっ!!!」

それを見た二人も慌てて暴れるように岸に上がっていった。

それから彼らは帰路につく。

「すんすん、俺臭わねツスか？」

「何も言うな……俺らはまた大事なものを失った……」

完二がジャージの臭いをかきながら呟くと陽介がげんなりした様子で呟く。

「よ、よかったね。うちら入る前で」

「うん……」

その後ろでは女子二人が話し合っていた。

「ん？」

と、先頭を歩いていた真が何かに気づいて足を止める。

「どした？ って、げっ!？」

真が足を止めたのに気づいた陽介が問いかけ、前を見ると驚きの声を上げる。彼らの前には大谷が立っており、頬を赤く染めて恥ずかしそうにうつむいていた。

「な、なにこれっ!？」

「これって、まさか……」

「告白じゃねえ!？」

「かもな」

途端にワクワクしたように目を輝かせる千枝、この先の展開を予測しまさかと呟く雪子、そのこの先の展開を叫ぶ陽介、それに頷く真。

「え、ああ……」

そしてただ一人、声にならない声を漏らしながら完二は硬直していた。そして完二以外の四人が素早く草むらに身を隠し、同時に大谷がゆっくりと完二の方に歩いていく。

「あ、う……い、え……お……」

完二はドクンドクンと心臓を脈動させ、怯んだ様子を見せていた。

「な……なんスか?」

しかし度胸一番巽完二、とりあえず彼女に話しかける。

「あの……私……」

大谷はやはり顔を赤く染めながら完二に話しかけ、完二はごくんと唾を飲んで「うろう」と声を唸らせる。

「あなた、みたいなのが……」

「うろう……」

告白っぽい流れ、それに完二はこれ以上ないぐらい、ある意味では初めて自らのシャドウと相對した時並に怯んでいた。

「趣味じゃないの、ごめんなさい」

その直後大谷がぼつさり完二を振り、完二は大口を開けて逆にショックだとばかりの顔を見せる。

「昨日の夜の事は、もう忘れて」

そう言つて大谷は歩き去つていき、完二は大袈裟な様子で膝を折り、地面に両手をつく。

「なんじゃそりゃああああああああつ!!!!」

彼の叫び声が山中へと響き渡り、小鳥達が驚いたようにピーチクパーチク言つて空に逃げていく。

「そつとしておこう」

そして、真の締めが小さく響いた。

第二十五話 偶像

6月19日、夜。真達は三人揃って食卓を囲んでいた。現在テレビではワイドショーをやっている。

「……以上、当プロ『久慈川りせ』休業に關します本人よりのコメントでした。えー時間が押しておりますので質問等は手短に……」
進行役の人の言葉に一人の男性が手を挙げる。

「失礼、えー『女性ビュウ』の石岡です。静養と言う事は何か体調に問題でも?」

「いえ、体を壊してるって訳じゃ……」

石岡なる質問した男性の言葉に茶色の髪をツインテールにした可愛らしい少女——久慈川りせが、少し浮かない顔でそう返す。

「とすると、やっぱり心の方?」

「え?……」

りせの質問に石岡なる芸能記者はそう続け、それにりせは驚いたように声を漏らす。

「休業後は親族の家で静養との噂ですが、確か稲羽市ですよ、連続殺人の!」

「え、あの……」

「老舗の豆腐店だと聞いてますがそちらを手伝われるんですか?」

「えー、以上で記者会見を終わります! はい、道開けてください!」

芸能記者の遠慮ない質問にりせが困惑していると、彼女の所属事務所代表らしき男性が無理矢理記者会見を打ち切る。

「りせちゃん、テレビやめちゃうの?」

「さあな……けど実家ここって事あ、面倒な野次馬が増えそうだな、こりや」

テレビを見ていた菜々子が尋ね、それに遼太郎はそう漏らすとワイドショーの後で流れる久慈川りせ主演のCMを見てふうと息を吐いた。

「久慈川りせ……か。何も無いのが取り柄だったような田舎町が、今

年はエラく騒がしいな……」

彼がそう呟き、時間が過ぎていった。

その翌日、20日の放課後。真達特別捜査隊二年メンバーは集まって雑談を楽しんでいた。

「うーす」

と、一年の教室から来た完二がずかずかと二年の教室に入り、慣れた足取りで真達の元に向かう。

「お、来た。最近マジメに来てんじゃん、どしたん？」

「出席日数って面倒なんがあるもんで」

千枝の言葉に完二はくくつと笑いながら返し、陽介がため息をつく。

「しかし、お前の顔見ると、こう……どうにも林間学校思い出すな……」

「忘れるんじゃないのかよ……」

「いや……すまん」

「ハア……いいスけど」

陽介の言葉に完二がそう呟くと二人は浮かない顔を見せる。

「つーかそうだ、先輩ら、ニユース見たツスか？」

そこで完二は話を変えようとしたのかそう話題を出す。

「ニユース？……ああ、久慈川りせ・電撃休業」つてやつ？ まさに

今ブレイク中つてとこなのに、なんで休業すんだろーね」

「アイドルつてのも大変だよなー、うん」

完二の出した話題に千枝がそう言い、陽介がうんうんと頷く。

「……りせ？」

と、真が首を傾げ、陽介が驚いたように真を見る。

「え……知らないの？ お前、これは都会とか田舎、カンケーないぞ？」

「芸能にはあまり興味が……あ、いや昨日そんなニユースしてたな……えっと、久川りえだっけ？」

「久慈川りせ!!! お前頭いい癖になんで名前間違えて覚えてんだよ!?!」

陽介の言葉に真が頭をかき、昨夜見たワイドショーを思い出して聞き返すと陽介は全力でツツコミを入れる。

「まだデビューして短いけど、このままいきや、じきトップアイドルだぜ。俺、結構好きなんだよ！ なんとたつてキャワイイ！」

「キャワイイって……オッサンかよ」

陽介の言葉に千枝は冷たい視線を彼に送る。

「まあでも、確かここ出身で、小さい頃まで住んでたらしいし、ファン多いんじゃない？」

「ニユースだと、彼女 “お婆さんの老舗のお豆腐屋さん” へ行くんでしょ？ それ……もしかして、マル久さんの事じゃないかな？」

「マルキユー？」

千枝の続けての言葉に雪子がそう言い、その店名に陽介が首を傾げる。

「“マル久豆腐店”。うちも仕入れてるの」

「あー、商店街のあそこか！ よく前通るな……」

雪子の言葉に陽介が納得したように頷き、ふと何かに気づいたように沈黙。顔をぱつと輝かせる。

「じゃあ、あの豆腐屋行ったら、りせに会えんのかな!？」

「ちよつと！ 今はそういう話してんじゃないでしょ！」

「え？」

陽介の嬉しそうな声に千枝が叫ぶと彼は不思議そうな表情を見せる。

「事件の話だつて！ “テレビ繋がり” でしょーが!? 狙われるかもよ、彼女？」

「そんな、りせは別に昨日今日テレビに出たわけじゃないじゃん。大体、りせと事件って関係あるわけ？」

「それ、気になって調べてみたの」

千枝の言葉に陽介は笑いながら返すが、その言葉に雪子が返す。

「りせちゃんとアナウンサーの山野さんは、繋がり自体、ほとんどないみたい。同じ番組に、一、二度出たことがあるだけ」

「アイドルなのは前からだけど、彼女いま、ニユース流れて、この町の

「時の人」じゃん」

「しかもその本人がここに引越してくる……狙われてもおかしくはない、か」

雪子に続いて千枝がそう言うと言と真が呟く。と、そこで陽介も気づいたように頷く。

「もしこれでリセが狙われたら、犯人の狙いはさらに絞り込めるな」
「どういうことツスカ？」

陽介の言葉に完二が首を傾げた。

「だーから、もしリセが狙われたら、犯人のターゲットは完全に「テレビで報道された人間」だ」

「最初の事件の関係者って線は、ほぼなくなる」

「はー、あー、なるほど」

陽介の言葉に続いて真が言うと言二は二、三度空頷きする。

「よし、じゃ早速、リセの動向に注意だな！ うしっ！」

「テンション上がってんな……」

陽介のテンション上がっている叫びに千枝は静かにそう呟いた。

それからその場は解散。まだ陽介はりせちーの事で盛り上がったそれに千枝が辛辣なツツコミを叩き込み、雪子はマイペースに帰宅。完二も荷物を取りに自分の教室へと戻っていったため真も荷物を持って教室を出ていき、一階へとやってくる。

「よお、小西」

「……あなたですか」

一階に知っている顔を見つけたため声をかけ、その相手——小西は嫌そうな顔を向ける。

「保健委員は至急、保健室に集合してください。繰り返します……」
と、突然そんな放送が聞こえてきた。

「あー……保健委員、か」

「一緒に行くか？」

「は？ いいですよ、俺だけで」

小西の呟きに真がそう聞き返すと小西はすげなく断る。

「おーい！ 椎宮っておまえだろ？」

と、男子生徒が真に声をかけてきた。

「ああ。何か用か？」

「保健委員の代役よろしくって、先生が」

「は？」

「確かに伝えたぞ？ オレ、停学になるから、頼むよ！」

男子生徒はそう言って慌てて走り去っていき、それに小西が苦笑する。

「はは……また、とぼちりですね。俺、ノート提出があるんで、後から行きます。お先どうぞ」

「ああ」

小西がそう言い、真は頷くと保健室へと急ぐ。

「椎宮君……何？ キミも呼ばれた？」

「ああ。理由はよく分からないが代役として」

と、以前の女子生徒が真に尋ね、真は頷いて再度保健委員として招集されたことを伝える。

「マジで？ 人手足りないし、ありがたいけど」

「けどー、今日の招集、マジ勘弁なんですけど。デートとか言って半分くらいいいねーし。しっかも棚卸とか、すっげー辛くね？………つたく、小西はいいよな」

「そういえば小西君って宿題免除されてるってマジ？」

と、男子生徒が愚痴り始めるとさらに別の女子生徒がそんな噂を持ち出す。

「ええー！ なんだよそれ、超うらやましいんですけどー！」

ざわざわと、小西の話題で盛り上がり始めた。

「その辺にしておけ」

とりあえず真偽不明の噂も多く、聞いていて面白くないためたしなめる。

「いいっすよ、別に……」

と、そんな声と共に保健室のドアが開き小西が入ってくる。それと同時にさっきまで盛り上がり上がっていた全員が口をつぐみ、居心地悪そうにうつむいた。

「……あ、その……すんません。空気悪くするつもりじゃなくて……」

小西は申し訳なさそうに呟き、保健室から出ていく。

「ほ、ほら、仕事仕事！」

気まずい空気を払拭するように女子生徒がそう言うが、気まずい空気の中保健委員の仕事をこなし、それが終わると真は靴箱へと戻ってきた。

「小西」

「あ……ど、ども」

真が驚いたように声をかけると小西も驚いたように振り返り、ども、と挨拶する。

「帰ってなかったのか？」

「……みんなが働いてるのに、先帰るの嫌だっただけです。なんとなく……」

「そうか」

小西の言葉に真は静かに頷く。

「あ……袖のどこ、汚れてますよ」

小西は気づいてないらしい真に指摘をし、真も袖を見る。たしかに少し袖が汚れていた。

「さっきの……棚卸のせいですね。はは……すみません、本当は俺がやるはずなのに……」

小西は申し訳なさそうに笑いながら呟き、真の方に歩いていくとハンカチを彼に渡す。

「これ、よかつたら……」

「可愛いハンカチだな」

「あ、やっぱそれ……」

ハンカチを受け取った真はそう呟くと小西は慌てて何か言おうとするが、すぐ口をつぐむと首を横に振る。

「……いえ、なんでもありません」

呟き、彼は真に背を向ける。

「俺、もう少しここにいますから……さよなら」

そう言われ、真も彼を無理にこの場から離すことは出来ない判断

し、一人で家に帰っていった。

「おう、お帰り」

「ただいま」

新聞を読みながら挨拶してきた遼太郎に真はただいまと挨拶を返し、ふと以前彼が新聞記事のコピーを探していたことを思い出し、靴を階段の下に置くと遼太郎の向かいの席に座った。

「叔父さん、この前探してた新聞記事のコピーはどうになりました？」

「新聞記事のコピー？……ああ、見つかったよ。すまん、心配したか？」

「いえ、なんとなく気になっただけなので」

真の質問に遼太郎は一瞬首を傾げるが直後思い出したように頷き、苦笑する。それに真がなんとなく気になっただけと返すと彼は「そうか……」と呟いた。

「妻の……千里の記事なんだ。ひき逃げされて、死んだ時のな……」

遼太郎はそう呟き、一拍置く。

「前に話したな。まだ犯人が拳がってない事件の事を……もう分かっただろう？ これ以上は家の中でする話じゃない……やめよう」

呟き、彼は暗い表情でうつむく。と、真はがたと音を立てて立ち上がった。

「じゃあ、外で話しましょう」

「!？」

真剣な声でそう言う真に遼太郎は驚いたように目を丸くし、

「……ははっ。まったく……かなわんな、お前には」

やがて苦笑いを見せてため息をついた。

「アイツは……」

遼太郎が話し始め、真は再び椅子に座る。

「菜々子の母親は、菜々子を保育園に迎えに行くところ、ひき逃げされたんだ。寒い日で、目撃者はなく、発見も遅れに遅れた。俺に知らせが入るまで、菜々子は保育園で一人、ずっと待ってた……いつまで経ってもこない迎えを、たった一人で、な……」

遼太郎はそこまで話すとまた一拍置き、苦しそうに息を吐いた。

「殺されたなんて……菜々子には言えなかつた」

彼の口から発される言葉も、酷く苦しげなものだった。

「犯人を捕まえるのが仕事の父親が……足取り一つ、掴めてねえってこともな……だが、俺は必ず犯人を上げる。そのためにはプライベートなどない、菜々子だって、分かってくれるさ」

「……菜々子が、そう望んだのか？」

遼太郎の言葉に真は目を鋭くさせながら問い返す。それに遼太郎は自分の顔を隠すように顔の前で両手を組んだ。

「……今は望まなくとも、分かってくれる日がくる……そう思うしか無いだろ……すまん、今は一人にしてくれ」

彼は疲れた顔をしており、一人にしてくれと頼まれたため真は立ち上がり、部屋に戻ろうとする。

「……真」

と、遼太郎が背中を向けている真に向けて声をかける。

「……ありがとな」

彼のお礼の言葉を聞き、真はそれに無言で返すと自室へと戻っていった。

少し時間を戻して夕方頃。命はマヨナカテレビ調査の建前で暇潰しに町を散策していた。そして前に店主のお婆さんをジュネスから家まで送った久慈川豆腐店の前を通りがかると、ふとバイクを止める。

「どうかしました？」

「え？ ああ、命ちゃん」

命が声をかけると困った様子を見せていたお婆さんは嬉しそうに頬をほころばせる。

「いや、実はね。今日孫が帰ってくるんだけど、ちよつと天城さんの所に行かなきゃいけない用事が出来ちゃって……」

「ああ、前に言っていたお孫さんですか。なら僕が迎えに行きましよ

うか？」

「ええっ!？」

命のあっさりした言葉にむしろお婆さんが驚いたように叫ぶ。それに命は穏やかに微笑んだ。

「どうせ暇ですし」

「ああ、じゃあお願いしたいけど……」

「ああ、知らない人ですからね……久慈川さん、携帯持ってませんか？」

「え、ええ……一応連絡とか取りやすいようにって息子が……」

お婆さんがそう言って携帯電話を取り出すと命は「貸してください」とだけ言って携帯電話を受け取り、少し調べる。

「……うん、メール機能と写メ機能はあるな。久慈川さん、ちよつとこつちに」

「ええ?」

命はそう言ってお婆さんの隣に顔をやるとお婆さんの携帯電話で写真を撮り、メールを開く。

「えつと、この「リせちゃん」ってやつですか？」

「え、ああ、うん。メールは上手く使えないんだけどね……」

「代筆しますよ。この子の携帯にさっき取った写メ送りますんで、この人と一緒に帰っておいでってメールを送っておきます」

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ」

命はそう言って慣れた手つきでメールを送り、ついでに自分の携帯を取り出してそれぞれ片手で何か操作してから携帯電話をお婆さんに返すと店の前に止めておいたバイクにまたがってヘルメットを被りながらお婆さんの方を見る。

「じゃあ、行ってきます。ああ、僕の携帯電話の番号を送っておいたので何かあったら連絡してください」

命はそう言ってバイクを走らせ、それを見送ったお婆さんは穏やかに微笑んだ。

そして命は慣れたように稲羽駅へと到着、ヘルメットを外すと額に

くつついた髪を顔を横に振って離れさせる。

「早すぎたかな……」

そう呟く。まあただでさえ人気がないし、電車はまだ到着していない。というよりそもそも何時の電車に乗ってそのお孫さんが帰ってくるのか聞いていない、ついでに言えば孫の顔や名前も分からないことに命はようやく気付いた。

「まあ、名前は多分久慈川とか、リセちゃん”から連想出来る感じだろうし、相手は僕の顔知ってるはずだからあっちから話しかけてくるのを待とう……」

命は自分に言い聞かせるように呟き、懐から携帯音楽プレイヤーとイヤホンを取り出すと音楽を聞き始める。それからしばらく時間が経ち、命は飽きることなく音楽を聞いていた時だった。

「の……あの……」

「ん？」

ようやく声をかけられている事に彼は気づき、一度音楽を止めてイヤホンを耳から外す。

「はい？」

命は相手を見下ろしながら声をかける。その相手は帽子を深くかぶりサングラスをかけ、軽い旅行に使うような鞆を背負っている少女だった。

「え、えつと……お婆ちゃんが言っていた、代理の方ですよね？」

少女はそう言って携帯を見せてくる。その画面にはついさっき命が撮ってお婆さんの孫に送った写メが写っており、それを見た命が微笑む。

「ああ、君が久慈川さんのお孫さんだね」

「はい……えと……」

「じゃ、長話もなんだし久慈川さんも待つてるだろうから行くか。はい、ヘルメット被って」

「あ、はい……」

少女——久慈川孫は少しおどおどしており、命は彼女向けて微笑むと予備のヘルメットを渡し、彼女がヘルメットを被ってバイクに乗る

と彼もバイクに乗る。そしてバイクは丸久豆腐店向けて出発した。それから二人はバイクに二人乗りで人気の少ない道路を走っていた。

「あ、あの……名前……」

「ああ、名乗ってなかったっけ。僕は利武命」

「そ、そうじゃなくって……」

「ああ、そういえば君の名前聞いてなかったっけ。りせちゃんってアドレスの名前しか……ん？」

安全運転に集中しつつも命は久慈川孫の言葉に耳を傾け、彼女の言葉に納得したように返すがそこでふと気づいたように沈黙する。

(久慈川さんは息子さんに携帯電話を持たされたと言っていた、つまりこの子の苗字も久慈川の可能性が高い。この子の名前はアドレスから考えると「りせちゃん」から連想できる……)

命はそこまで考え、うんと頷いた。

「推理するに、久慈川りせちゃん、かな？」

「は、はい……え、えつと……なんとも思わないんですか？」

命の推理に久慈川孫こと久慈川りせはこくこくと頷いた後質問、それに命は少し首を傾げた。

「え？……あー……そういえばなんかどっかで聞き覚えがある名前だね。結生とゆかりが話してたような……」

命は運転しながら器用に頭を悩ませており、りせは我ながら信じられないとばかりの視線を命に向ける。

「え、えつと……りせちー、って聞いた事ないですか？」

「あー……確かどっかの少女アイドルの愛称だっけ？ たしか……久川りえ？」

「く、じ、か、わ、り、せ、です!!!」

命のボケ——と言っても本人は至極真面目な表情で言っているが——にりせは思わず全力で一言一句に力を込めたツツコミを叩き込む。

「……ん？ 少女アイドルりせちーの名前が久慈川りせ……」

命はそこで何かに気づき、赤信号のためついでにバイクを止めて振

り向き、りせを指差す。

「……もしかして、少女アイドルの久慈川りせ？」

「遅いよ!!」

いつもの聡明さはどこへやら、ようやく真相に辿り着いた命にりせは再びツツコミを入れた。

「いやーごめんごめん。あんまり芸能人とか興味なくってさー、正直僕には関係なかったからどうでもいいって言うかね。友達と話合わせる程度にしか見ないんだよそういうの」

「だ、だからって……」

再びバイクを走らせ、命のすまなそうな、しかしあつけらかなと笑いながらの言葉にりせはがくつとうつむきながら呟く。ここまで自分の事を知らない相手にいきなり出会うとは思ってもいなかったのだろう。

「それにしても、私がアイドルだって知ったのによくそこまで平然としていられますね……」

「……まあね。そういうお偉いさんとの顔合わせには慣れてるっていうかなんというか」

りせの言葉に命は言葉を濁しておく。彼には尊敬する先輩であり共に戦った仲間として桐条グループの現総帥がいるし、某通販番組の社長とコミュニティを築いていたりした過去がある。今更少女アイドル一人で驚く理由もないだろう。

「それに、君は君だし」

「え?」

「少なくとも僕は君がアイドルだろうが一般人だろうがどうでもいいよ」

命の言葉にりせはぼかーんとする。自分がアイドルであったという事自体知らなかった上にその事実すらどうでもいいと切って捨ててくるとはまさか思いもよらなかったと言わんばかりだ。

「さて、もうすぐ着くよ」

「あ、はい！」

命の言葉にりせは頷き、それから少し走った後バイクは止まり、命はヘルメットを外すと額にくっついた前髪を払いのけるように軽く顔を振ると改めてりせの方に振り返った。

「はい、到着。長旅お疲れ様でした、お嬢様」

「あ、ありがとうございます……」

命のスマイルを見せながらの言葉にりせはぺこりと頭を下げてお礼を言い、それに命も笑う。

「気にしなくていいよ、暇潰しにはなったしさ。じゃ、僕は帰るね。久慈川さんよろしく」

命はそう言ってりせから予備のヘルメットを盗るとバイクに再びまたがり、そこで思い出したように「そういえば」と声を出した。

「君って八十神高校に転入するんだよね？」

「はい？　そうですけど？」

「あそこの二年には僕が信頼してる後輩がいてね。その子には信頼できる仲間がいる。何かあったらその子達に助けを求めなよ……もちろん、僕も何かあれば助けるけど」

「はあ……」

命の言葉にりせは曖昧に声を漏らす。命は「じゃあねー」と軽く言っただけを走らせ去っていった。

「……不思議な人」

りせは命が去っていった方を見ながら呟き、持ってきていた鞆を背負い直すと丸久豆腐店へと入っていった。

第二十六話 偶像と虚構と

6月21日、夜。真は自室で、外で雨が降っているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始め、真は砂嵐の中に人影を見つけた。

(……女性か?……水着を着てる?……)

画像が荒いたためよく見えないがとにかく特徴を観察していく。

(……心なしか、久慈川りせに似ているような……)

そう考えた時、突然画像が変わった。妙に胸や太ももばかりが強調されるように映っている。しかしそのせいで顔がよく見えなかった。そしてテレビは消えていく。そのすぐ後に陽介から電話がかかってくる。

「もしもし! オイ見たか、今の! 今のそう見ても『りせ』だろ

! 『久慈川りせ』!」

「断定はできないが、俺も同じように思った」

「だよな!」

陽介の言葉に真が賛成の意見を出すと陽介は意見があつたのが嬉しかったのか少し弾んだ声を出す。

「あ……でも喜んでる場合じゃないよな、失踪するかもしれないわけだし……とにかく明日行ってみようぜ! ホラなんだっけ、『マル久豆腐店』!」

陽介はそう言うところ「やっぱ、ドキドキしてきた……」と少し緊張した様子で漏らす。そして「じゃ、明日な」と言って電話は切れ、真も携帯を閉じると今日はもう眠りについた。

そして翌日6月22日の放課後。自称特別捜査隊メンバーはいつものように教室へと集合していた。

「ね、聞いた? 久慈川りせ、ホントに来てるらしいよ! ほら、豆腐屋の『マル久』ってあるじゃん? あれ『久慈川』の『久』なんだって」

「マジで!? え、俺、家超近いんだけど!」

クラスメイトの女子と男子が話しながら教室を出ていく。

「マル久さん、すごい人だからだっけだっけ」

「ぼいね。けど昨日のマヨナカテレビ、本当に彼女だった?……なんか雰囲気違くなかった?」

「間違いねえって!」

雪子の言葉に千枝が返し、次に首を傾げながら尋ね返すと陽介が力強く叫ぶ。

「あの胸……あの腰つき……そしてあのムダのない脚線美!……」

熱っぽく言いながら、陽介はふと千枝の身体を見る。

「……なんであたし見んのよ」

「と、とにかく間違いねんだって!……な!」

千枝が心なしか目を鋭くさせながら陽介に問いかけると彼は慌てたようにそう言っただけで完二に話を振る。

「あー、行くんスか? 俺あ芸能人とか興味ねえけど、ヒマだし……ま、付き合いますよ」

「あたしと雪子は先約あるから。何かあったら携帯に連絡して」

完二が同行すると言うと千枝はそう言い、雪子と共に教室を出ていく。

「んーじゃ、俺らも行くか。言っとなつけど、そこらの野次馬と違うぞ。

俺らのは捜査だ、捜査」

「じゃ、とつとと行っただけとつとと済ませよう」

陽介がテンション高くそう言うのに対し真はあくまでもいつも通りというように鞆を持って立ち上がった。

それから男子三人は商店街のマル久豆腐店へとやってくる。

「あれ、刑事さん。なんかあったんですか?」

目的地へとやってきた陽介が声をかける。豆腐店の前で足立が交整理の時に使う赤い棒を手に振っていた。

「ああ、君らか」

三人に気づいた足立が参った様子で口を開く。

「いやあ……ヤジ馬が次々車で押しかけて商店街の真ん中で止まろう

とするからさあ」

「なんかワケありスか?」

「いやホラ、久慈川りせだよ。知らない?」

足立の言葉に完二が問いかけると足立はそう言い、「もしかしてもう見た?」と食いつく。

「あ?……交通課じゃねえ私服のデカがなんで出張ってんのかって訊いてんだよ」

「え……あ、いや、えつと……ほら、稲羽署小さいし、人手足りなくてさ……」

完二の睨みながらの言葉に足立は慌てたようにそう言って「仕事があるから」と言つてその場をそそくさと歩き去っていく。

「お前……高一で現職の刑事ビビらすとかねーだろ……」

「別に。思つた事言つただけツスよ」

その様子を見た陽介が呆れたように完二を見て眩き、それに完二はそう返す。まあ、その口調の威圧感というものがあるのだろう。

「にしても、ただ事じゃねーな、これ。警察出てくるって……」

陽介はそう眩き、はつとした様子を見せて「まさか」と眩く。

「警察も、りせが狙われてるって踏んでんのか?」

「はい、失礼、ちよつと道空けて……おーい、足立!」

と、「豆腐屋の中から遼太郎が出てきた。

「おじさん!」

「お前達、こんなところで……ん?」

遼太郎は真達を見て呆れた様子を見せた後、完二に気づく。

「異完二!……お前ら、仲いいのか?」

「るせえな、いいだろ……」

「……まあいい。それより何してる、こんなところで」

遼太郎の言葉に完二はそう眩き、遼太郎もまあいいと眩いて真に尋ねる。

「買いい物に。晩御飯は豆腐料理にしましょうか?」

「ああ……任せる」

遼太郎の質問に真はあっさりと返し、逆に遼太郎に問いかけると彼は頭をかいて「任せる」とだけ呟く。

「ほ、ほら、こんな普通の豆腐屋がアイドルの実家って聞いたら確かめたいじゃないすか！ 俺その……ファンだし！」

「……」

そこに陽介が理由付けを重ねると遼太郎は少し黙り込み、再び頭をかいて「ハア」とため息をつく。

「まあいい。いくら芸能人だろうが、ここは自宅だ。迷惑にならない様にしろよ」

「もちろんです」

遼太郎はそう言うと言仕事に戻るのか歩き去っていき、そこに完二が腕を組んだ。

「先輩の叔父貴がデカたあね……てか、今の空気なんすか？……先輩ら、疑われてんすか？」

「ま、俺達一回引つ張られてるからな……」

「は、花村先輩はともかく椎宮先輩がつすか!？」

「どういう意味だよ!? まあ、確かに椎宮が引つ張られたのは俺が巻き込んだしまったせいだけだよ……」

完二の言葉に陽介が居心地悪そうに返すと完二が驚いたように叫び、それに陽介は怒鳴り返した後申し訳なさそうに真を見る。

「だが、全てを話すわけにはいかない。叔父さんを信用してないわけじゃないんだが、あの世界”の事を言ったところで信じてもらえないはずもない。むしろ混乱させようとしていると疑われてしまったら身動きが取りづらくなる」

「ちげえねえ……」

「なにより、俺が問題起こしたら叔父さんに公私に渡って面倒かけてしまうからな」

真の冷静な言葉に完二が頷くと、豆腐屋から一人の学生が歩き去っていった。

「んだよ、婆さんだけで”りせちー”いねえじゃん……」

「もうこの町来てるって聞いたけど、ガセネタ踏まされたって事かな。」

ま、楽しかったけど」

学生に続いて中年男性がそう言って歩き去っていき、他の客も次々去っていく。

「ガセネタ!? え、いねーの!? 結局う!?」

と、陽介が素っ頓狂な声を上げた。

「ぷっ、なんだ今のダセー声」

「う、うるさいよー!」

「まあいい。買い物だけでも済ませるとしよう」

完二と陽介が言い合いをしている間に真は店へと上がる。店の奥で割烹着を着て三角巾を着けている女の人が何かの作業をしている。いつものお婆ちゃんのようなのだ。

「すいませーん!」

「豆腐を買おうと真が声をかける。

「はいはい、お客さんかい? おや、たしか命ちゃんのお友達の……」

と、別の方から豆腐屋のお婆さん——久慈川さん——が声を返してきた。

「えっ、あれ!? じゃ、あっちのは……」

奥にいるのはお婆さんだとばかり思っていた陽介が驚いたように叫ぶとその女の人は作業を止めて振り返った。

「……なに?」

可愛らしい顔立ちをしている少女。それに陽介が硬直すると完二が彼女の前まで歩いていく。

「……?」

「あと……りせって、お前?」

「なんで呼び捨て?」

完二の言葉に少女は嫌そうな表情で呟く、と陽介が驚いたように駆け寄った。

「うそ……ホントに、りせちー?」

「……何の用?」

「すまない。豆腐を買いに来たんだ」

陽介の言葉に少女——りせが用件を尋ねると真が財布を出しながら

ら用件を言う。

「……お豆腐？　どれにするの？」

「そういえば何を作るか決めてなかったな……」

「え？　どれも同じじゃねえの？」

「いや、料理ごとに使用する種類が違うんだ」

りせの言葉に真が思い出したように呟くと陽介が問いかけ、それに真が返すとりせが頷いた。

「そう。冷奴か湯豆腐なら絹。煮炊きするなら木綿……目的しだい」

「そうだな……湯豆腐にするか。絹を三人分頼む」

「絹ね。ちよつと待ってて」

りせの詳細説明の後真は絹を注文し、りせは待っててと言い残して商品の方に歩いていく。しかし雰囲気に変に暗い。

「なんか……テレビで見んのと全っ然キヤラ違うな……たまたま疲れてんのかな？……いやー、でも本物の“りせちー”だよ……来てよかった。本日のミッション達せーじゃなかった！　本題がまだじゃん！」

陽介は嬉しそうにそう言った後本題を思い出す。

「あのっ……さ、最近、変な事なかった？」

「変な事？……ストーカーとかかって話？……キミたち、私のファンってこと？」

陽介の質問にりせはやはり暗い雰囲気ですう呟くように聞き返し、尋ね返すと真は陽介を見る。

「少なくとも花村は。俺は正直君の名前はこの前のワイドショーで覚えた。久川りえだったか？」

「く、じ、か、わ、り、せ!!」

真の説明の後ボケ——と言っても本人は至極真面目な表情で言っているが——にりせは思わず全力で一言一句に力を込めたツツコミを叩き込む。

「なんで迎えに来てくれた男の人と同じ覚え間違えされてるの……」
「迎えに……」

りせがため息をつくとき陽介が呟き、りせはその相手を思い出すよう

に目を閉じる。

「……青い髪の毛、背が高い大学生くらいの男性……バイクで迎えに来てくれたんだけど……」

「命先輩だ」

「命さんだな」

「大先輩っすね」

その特徴のみで三人はあっさり言い当てた。それにりせは驚いたように目を丸くする。

「知り合いなの？」

「こいつの前の学校の先輩だよ。大学休学して旅行に来てんの……あ、んでさ。ほら、ここんとここの町ブツソーだから、それで俺達、いろいろ調べてるっつーか……」

「ふうん？……」

りせの言葉に陽介が説明の後、何故自分達がいきなりりせに変な質問をしたのかという理由を説明、しかしりせはまだ特に興味を持ってないようだった。

「ごめん、えつとさ……真夜中に映るテレビ”の事って知ってる？
つっても深夜番組とかじゃなくて……んー、なんて説明したらいいか……」

「……昨日の夜のやつ？　”マヨナカテレビ”だっけ」

「あ、知ってた」

陽介が説明に困るとりせがそう言い、陽介はそれぞれというように頷く。が、その時少し男子三人が固まった。

「……って、ええっ!?! 昨日、見たって事!?!」

直後陽介が叫ぶ。マヨナカテレビの映像を、その本人が見ていたということだ。それにりせは素直に頷いた。

「噂、知り合いから聞くことあったし。でも、昨日映ったの、私じゃないから。あの髪型で水着撮った事ない」

その後、りせは少しうつむく。

「それに、胸が……」

「はっ。」

「胸、あんなないし」

「あー、言われてみれば……」

りせの眩きに陽介が心なしかりせの胸元に目をやるが、それを真が横目で睨んだ。

「花村」

「つて、あー、何言ってるの俺!? あ、その、ごめん!」

「謝り過ぎ。変なの」

何度も謝る陽介にりせは「変なの」と言ってくすつと笑う。

「あ、笑った」

「……あれつて、何が映ってるの?」

「ハッキリしたことは何も分からない。だが、今ここで事件が起きていることは知っているだろうが、あのテレビに映った人は失踪……いや、誘拐されるかもしれないんだ」

今度はりせが質問し、それに真が説明するとりせは驚いたような顔を見せる。

「やぶからぼうじゃ、信じらんねえよな……けど、嘘じゃねえ」

「だから、知らせなきゃと思つて」

完二と陽介が真剣な顔でりせに忠告する。それに彼女は「ふうん」と呟いた。

「あれ、やっぱり夢じゃないんだ。昨日は、疲れてたけど眠れなくて。ちやうど雨降ってたから、たまたま聞いてた噂、試したただけなんだけど……」

そう呟き、また「ふうん」と声を漏らす。

「……分かった。ありがとう。気をつける」

りせはそう言つて真の方に歩いていき、絹ごし豆腐を三人分入れた袋を渡し、真も財布からお金を取り出して清算する。

「んじゃ、俺達はこれで」

「ありがとうございました」

陽介がそう言い、手を上げて出ていくと真と完二もその後が続いて出ていくとする。

「あの……」

「ん？」

と、りせが真に声をかけ、彼は足を止めると振り返る。

「あなた達って、八十神高校の生徒ですか？」

「ああ……そういえば以前に先輩が、ここのお孫さん、つまり君が八十神高校に転入するって話を聞いてたっけ」

「はい……あの、命さんから、あなた達は信頼のおける後輩だ。何かあったら相談したらいいって……」

「……少し過剰評価だ。まあ、もし何かあったら相談には乗るし、君の身に危害が及ばないよう守るつもりではある……あのテレビに映っていたのが君じゃなかったとしても、狙われる可能性が高いのは確かなんだからな」

真はりせの言葉に真剣にそう返し、豆腐屋を出ていく。それをりせはぼかんとした顔で眺めていた。

それからしばらく時間が経ち、豆腐屋内に遼太郎と足立が入ってきていた。

「……ちようど頂きます。ありがとうございます」

「ひとまず騒ぎは収まったみたいなので、自分ら、とりあえずこれで。今後も騒がしいようなら署まで連絡ください」

「はい」

豆腐を買いながら足立がそう言い、その助言にりせはとりあえず頷く。

「あー、失礼、いくつか訊きたいことが」

今度は遼太郎がりせに話しかけた。

「最近、この辺りで物騒な事件が連続してるの、知ってるね？ 身の回りで、怪しいヤツは見ませんでしたか？」

「別に……今まで通りです」

遼太郎の言葉にりせはすげなく返し、刑事二人が困ったような顔を見せる。

「あー、今まで通りな……仕事がアイドルじゃ、ストーカーだの、ハナ

から怪しいのだらけか……どうして休業されたんです？」

遼太郎は困ったような顔でそう漏らした後、次の質問に移る。

「何か関係あるんですか？」

しかしそれにはりせは少しむっとしたように眉を寄せて聞き返し、次に目を伏せる。

「……疲れただけです」

「学校はどちらへ？」

「八十神高校の予定です。近いし」

いくつか質疑応答した後、遼太郎は足立を顔を見合わせた後再びせに顔を向けた。

「脅かすつもりはないんだが……あなたには、これまでの被害者と幾つか共通点がある。だから、その……」

「誘拐されるかもしれないでしょ？ さっきも同じ事言われました。気をつけます」

遼太郎が言葉に詰まるとりせはあっさりそう返し、それに二人が驚いたように目を剥く。

「えっ……さっきも言われた？」

「三人連れで……八十神高校の制服を着てて、本人もその生徒だっ
て言っていましたけど……」

「もしかして、三人の内一人はこう……なんて言うんだ、若干「ヤンキー風」の？」

足立が驚いたように尋ね返すとりせはそう説明、それに遼太郎が少し言葉に詰まりながら説明するとりせは素直に頷く。

「それって……堂島さんの彼と、あと友達のこと？」

足立の言葉に遼太郎は頭をかき、りせと一言二言話すと足立と共に豆腐屋を出た。

「……どうもおかしいな」

豆腐屋から出て少し歩き、遼太郎が呟く。

「このところの失踪事件……二件の殺しと合わせて、俺達でも掴めてない謎ばかりだ。ここへ来て彼女に警告したのも、言っちゃえば俺の刑事としての勘からだ。それを、事情も知らない高校生が先回りして

のはどういう事だ？……ただ有名人の顔見に来るための口実か？
……それとも……」

「堂島さん？」

遼太郎が考え込む様子を見せ、足立が声をかけると彼は少し首を横に振った。

「八十神高校、な……二件目のガイシヤの小西早紀に、一時行方をくらました学生二名か……」

「学校関係者の捜査の方も、何も出てないんですよえ……このままだと、ウチらマズくないですか？ 県警もそろそろ……」

「要らん心配してるな！ 捜査続ける！」

そう言い、二人は車に乗って出発した。

それから時間が過ぎて夜。真は遼太郎、菜々子と共に夕飯の食卓を囲んでいた。

「おとうふが、いっぱいだね……」

「叔父さん、たしかに夜は豆腐料理にしようと言いましたが、何も叔父さんも買ってこなくても……とりあえず明日は豆腐の味噌汁が決定か？ なら和食で合わせて……魚あったかな？」

「ああ……」

菜々子が呟き、真が呟くと遼太郎は曖昧に頷いた後、真を見る。

「久慈川りせと、何を話した？」

「……少し世間話ですが？」

遼太郎のいきなりの質問に真は豆腐を食べていた手を止め、口の中ものを呑み込んでから顔色一つ変えずにそう返す。

「そうか……」

呟き、彼は少し考えた後首を横に振る。

「いや……すまん」

「お父さんたち、りせちゃんに会ったの!？」

と、菜々子が話に食いついた。

「まあな……」

菜々子の言葉にそう眩き、少し食卓に重い空気が流れる。

「また……けんか？」

「違う……ほら、早く食べなさい」

やや重い空気のまま、夜の時間は過ぎていった。

そして午前0時頃、昨日と同じように真は自室で、外で雨が降っているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始め、真は砂嵐の中に人影を見つけた。

（昨日と同じ水着の女性……やっぱり胸や腰が強調されているように見えるが……ん？）

真は目を凝らしてテレビを見る。

（久慈川りせだ！ かなりはつきり映っている！）

砂嵐状態ながらはつきりと少女——久慈川りせの顔が映っている。それから少しするとテレビは消え、真は陽介に電話をかける。

「もしもし」

「おう！ やっぱ“久慈川りせ”で当たったな！ 本物より迫力あった気イするけど、今日は顔も見えたから、間違いないよな！ 明日すぐ、皆で集まろうぜ！」

「ああ」

真と陽介は明日集まる事を決めると電話を切り、携帯を閉じる。そして真は明日に備えてベッドに入り、眠りについた。

第二十七話 不審者との戦い

6月23日の放課後、学校が終わった後真達はジュネスの屋上——特別捜査隊本部にやってきていた。

「昨日のマヨナカテレビだけど、久慈川リせに間違いないな」

「ああ。顔が映ったからな、まず間違いない」

陽介のいきなり出した結論に真も同意する。

「じゃあ、これでまた一つ分かったね。犯人に狙われるのはテレビで報道された人だって」

「だな！ 山野アナの事件関係者の線は、消えたっぽいな」

雪子の言葉に陽介は同意し、再び皆を見る。

「んで、りせだけど。朝チラツと覗いたら店にいた。マヨナカテレビに、例のバラエティみたいのが映るのは、やっぱ本人が入った後みただい」

「あれって、入った被害者自身が生み出してるのかもって、前言ってたよね？」

陽介の報告の次に雪子がいきなりそう話題を出した。

「どういうことか最初はイメージしかなかったけど、今は、そうなのかもって思う……映像に出てくるの“もう一人の自分”なわけだし。入った人の本音が、無意識に見えちゃうのかも」

「けどさ、マヨナカテレビっていなくなる前から見えるじゃん？ いまいちハッキリ見えないやつ。あれは、なんなわけ？」

「事前に必ず映るって考えると、まるで“予告”みたいだよな……」

千枝の言葉に陽介がさっと考えたように呟く。

「犯行予告ってこと？ 誰に予告してるわけ？ なんのために？」

「犯人に訊けよ。俺だって、色々分かんないんだからさ」

陽介の言葉に千枝が食いつくと彼は首を横に振ってそう返す。

「結果的に、予告に見えている……っていう可能性はない？」

二人の話を聞いていた雪子がそう呟く。それに千枝が「どういう事？」と尋ねると、雪子は「被害者の心の中が映るなら、犯人の心の中も映るのかも知れないって思っただけ」と返す。

「そういう事もありえるかもな……人をテレビに入れられる、という事は犯人は俺達と同じ力を持つている可能性が高い」

雪子の言葉に真が腕組みをする。

「じゃああれは、犯人の “これから襲うぞ〜!” っていう妄想?」

「それは、分かんないけど……」

千枝がそう言うとき雪子はそこまでは分からないと返す。と陽介が再び腕を組んだ。

「そこまでいくと、あの世界そのものが、そういう風って気もしてくるな……被害者とか犯人とか、とにかく人の頭ん中が入り混じって出来るモン……ってか?」

「分からないな。そもそも住人であるクマにも説明が出来ないんだ」

その言葉に真が首を横に振ると千枝が重いため息の後「相変わらずぜんぜん分からない」と叫び、ふと完二を見た。

「てゆうか、完二君、ついてきてる? さっきから、ひとつ言も喋ってないけど……」

「はえ?……あー……まーその……」

千枝の言葉に驚いたように顔を上げて言葉を濁す完二に千枝は目を細めながら「寝てたんじゃないだらうな」と呟き、それに完二は慌てたように「すっごい推理中!」と叫ぶ。

「ハア……」

と、追求する気もなくなったのか千枝はため息をついた。

「……あの世界ってさ、ホントになんなんだろう」

そしてその次にそう呟く。それに真が頷く。

「クマの説明も “たぶん” が多くて正確性に欠けるしな」

「そもそも犯人は、なんで人をテレビに入れるのかな?」

「入れたら死ぬのは、もう分かっているはずだ……殺す気でやってんのだけは間違いない」

真が呟いた後雪子がふと疑問に思ったように呟くと陽介がそう言い、手口がテレビなのは警察が絶対に証明できないからじゃないかと述べる。

「殺しねえ……恨みつらみか? まあ、俺を恨んでるやつなら掃いて

捨てるほどいな」

と、完二は吐き捨てるようにそう呟いた。まあ暴走族一つ潰した過去を持つ彼だ、喧嘩などで恨みを買っていても不思議ではない……と言っても最近には妙に女子に遊ばれていると松永が語っていたのだが、真はそれは自分の心の内に留めておく。

「けど、天城先輩とか、あるんすか？ 人に恨まれる覚えとか」「ないよ」

真がそう考えている間に完二が雪子に尋ねると彼女はきつぱりと否定する。

「や、雪子……誰でも知らない内について事、少しはあんじやないかな……はは……」

あまりにもきつぱりとし過ぎた否定に一番彼女と付き合いが長い千枝すらも苦笑を漏らしていた。

「けど、今まで被害に遭った全員に共通する恨み……ってなると、見当つかないね」

「ま、幸いまた先回りできるチャンスだし、この際動機は後回しだ」「ああ。捕まえて叔父さんに引き渡して、尋問してもらえばいい」

千枝の言葉に陽介がそう言うと言と真も頷き、真剣な目を見せる。「とりあえず今はつきりしていること、それは久慈川さんが危ないということだ」

「……ってことは、また張り込み!？」

真の言葉に千枝が驚いたように叫ぶ、と陽介が微笑を浮かべて頷いた。

「おう！ 今度こそ、犯人に先回りしようぜ！」
陽介の言葉に残る四人が頷く。

「やる気満々だね」
と、その後ろから声をかけられ陽介は驚いたように立ち上がって後ろを見る。

「やあ。一応今日のシフトは終了したし、今日は僕も出られるよ」

「あ、そっぴや命さん、今日は朝からでしたっけ。お疲れっす。それで、命さんがいてくれるなら百人力っすよ！」

彼らの切り札たる命の出撃可能状態に陽介は嬉しそうに歓声を上げた。

それから彼らは商店街の四六商店へとやってくる。

「やっぱ、アンパンと牛乳だよね」

「張り込みついたら、それしかないだろ」

千枝が喜んでアンパンと牛乳を手に取り、陽介も同意する。さしずめ張り込みのための食糧補充と言ったところか。

「買うものは決まった？ 早く行くよー」

『はい』

さつさと買い物済ませた——カロリーメイトと野菜ジュースだ——命の言葉に学生五人が口々に返して次々品物を買っていく。と、その時四六商店に一人の青年が入り、陽介がそれに気づく。

「あれ、足立さん？ なんでここに？」

「え？」

陽介の言葉に青年——足立が困ったように頭をかきながら「聞き込みの最中」と返す。その後ため息交じりに何か呟いていたが、小さすぎたためよく聞こえなかったらしく全員首を傾げた。

「それより、君らこそ何してんの？ 買い食い？」

「今から、豆腐屋にりせちゃんの様子見に行くんすよ」

誤魔化すように足立が尋ね返すと陽介があっさりと言いい、足立は「そうなんだ……」と呟く。

「あ、ボ、ボクもちょうど、行くところだったんだよ」

「あ、じゃあ一緒に行きます？」

足立の言葉に千枝がそう言い、現職のデカだし、ちよつとは心強いかもと真達に呼びかける。

それから彼らは丸久豆腐店へと向かう。りせは店番をしておりその相手を足立が、雪子と千枝は店の前で談笑している振りをしており、真、陽介、完二は店の前を何往復もしている。ちなみに命は久慈川祖母と談笑をしていた。

「は、犯人め……来るなら来てみろっ」

店から出てなんかかつこつけた様子でそう言う足立に真達は呆れたような目を見せる。と、その時雪子がふと店の上を見上げ、目を丸くした。

「あっ……あれ!」

雪子の言葉に全員が彼女のしている方を見る。そこには背にリュックを背負い双眼鏡を首から掛けた明らかに不審者が電柱をよじ登っていた。

「だっ、だれだー!」

刑事である足立が素つ頓狂な悲鳴を上げ、それで気づかれたことに気づいた不審者は急いで電柱から降り、彼らに背を向けて逃げ出す。

「あっ、逃げた!」

「待ちやがれっ!!」

千枝が叫び、完二が一番に飛び出すと真達もその後が続く。

「逃げんな teme……このっ!」

宅配トラックが横を通るのを脇目にしながら完二が叫び、不審者は車の走っている道路まで追い詰められると彼らの方を向く。

「く、来るな!」

「るっせ! んなの聞く馬鹿が——」

「と、飛び込むぞ! 僕が車に轢かれてもいいのか!」

「な、なんだそりや……」

不審者の叫びに完二がそう言うのと不審者は自分が車の走っている道路に飛び込むと脅迫、陽介が呆れたようにそう漏らす。

「だっ、駄目だよ! 被疑者が大怪我したら、警察の責任問われていっぱい怒られ……あ」

と、足立が余計な一言を口走る。それを聞いた不審者はじりじりと道路の方に後ずさりしながら飛び込まれたくなかったら追いかけてくるな、どっかに行けと真達を脅し始める。距離的に考えても今から先頭にいる完二と真が飛びかかったとしても、不審者が道路に飛び込む方が早い。

(くっ……一体どうすれば……)

真は飛びかかれるように構えながら必死で頭を働かせる。

「車に轢かれるのがどれだけ痛いのか、分かっているのか？」

「先輩!」

「な、なんだよ!」

いきなり命が不審者に呼びかけ、不審者も驚いたように叫ぶ。

「自動車に轢かれたらどこを轢かれるにもよるが人間の骨なんて衝撃に耐えきれず簡単に折れ、部位によっては首の骨折って即死……いや、それだけで済むならまだいいな」

命は冷たい笑みを浮かべながら不審者に向けて話していた。

「自動車には当然運転手が乗っている。そこにいきなり人が飛び出して轢かれでもしたら運転手はパニックに陥ってハンドルを変に切り、例えばこの電柱やバス停に激突するかもしれない。いやいや別の車に当たって連鎖的に事故が発生するかもなあ。その中に死傷者が出ない確率なんて一体どれほどのものだろう」

「……」

淡々と話す命に不審者はもちろん真達も呑み込まれる。

「もしかしたら事故に遭ってしまった不幸な車の中には子供が乗っていて、家族で楽しくお出かけしているのかもしれないなあ。交通事故にあつたせいで両親を失い、親戚中をたらいまわしにされる人生を歩んでしまう。交通事故のせいで身体に消えない傷が残るかも、いや心に残るかもしれないなあ? そんなことになったら誰が責任を取れるのか……」

「……」

不審者はどこか殺気立っている命の口調に顔を青くしてぶるぶると震えてしまっていた。

「今だ、真!!」

「!、だ、だああああっ!!」

相手が怯んでいる隙を突いた命の怒号にも近い叫びに真はびくんと反応した後不審者目掛けて突進、不審者の胸ぐらを掴むとそのままうつ伏せに地面に引き倒し、不審者を地面に叩きつけるとさらに取っ

た腕を捻り上げた。

「あででででで!!!」

「大人しくしろ!!」

不審者が悲鳴を上げるが真は構うことなく叫び、陽介達が駆け寄る。

「きつ、君らね、善良な一市民にこんな乱暴なマネして……」

「いや、善良な一市民は普通電柱登ったりしねえだろ……」

地面に叩きつけられた拳句腕を捻られながら不審者が叫ぶと陽介が呆れ顔でツツコミを入れる。

「い、いやそれはその、僕あただ、りせちーが好きで、部屋とか、ちよつと見てみたくて……」

「ふむ、荷物は全部カメラや撮影用具だね。とりあえず足立刑事、不審者として引つ張つてください」

不審者は慌てて弁明を始め、彼の荷物を命が探り確認すると足立に不審者として警察署連れてってくださいと言う。それに足立はうんと頷くと神妙な表情で警察手帳を取り出した。

「話は署で聞こうか……くー! この台詞、言ってみたかった!」

「やっ、やめてくださいいよお! 僕がなにしたらっていうんですかあ!」

し、知ってんだから! 日本には「盗撮罪」ってのはないんだ!」
「たしかに日本の法律には現在盗撮罪という罪状はありませんけど、今回の場合ストーカー規制法に抵触する可能性があります。ま、とりあえず弁明釈明は警察署の方でお願いしますね」

足立が刑事なのに気づいた不審者が慌て出し、さらには盗撮罪という罪状はないと開き直る。が、それに再び命がさらつと言い捨て、不審者は硬直すると諦めたように項垂れる。そして足立が「不審者の確保にご協力感謝します!」と敬礼と芝居がかつた口調で言った後、不審者を「キリキリ歩け」と叱りながら連れていく。

「これで……終わったって事だよな」

「えと……もしかして、事件解決しちゃった? うわは、マジで!」

陽介が驚いたように呟いた後、千枝が嬉しそうに声を上げていよつしやとガッツポーズを取る。

「それにしても命さん、すげーつすね！ さっきの啖呵！ 聞いてて本当に驚きましたよ！ 臨場感抜群っていうか呑み込まれたつつか……」

「ああ、そりやそうだよ……」

陽介が命の方を見てぐつと拳を握りながら言う。命は目を細め、寂しげに笑う。

「後半、ほとんど実体験だもん」

その言葉に全員が黙り込む。と、命は慌てて苦笑いを浮かべた。

「あ、いやいや身体や心に傷が残るつてのは流石に出まかせだよ？」

「逆に言ったらそれ、交通事故で両親失う云々は本当つてことですよね!」

「そ、そういうえば林間学校の時椎宮君が、命さんの両親は幼い頃亡くなつたつて……」

命の慌てたフォローに千枝が叫び、雪子が林間学校の時の真の言動を思い出す。

「うん、僕の両親交通事故で亡くなつたんだ。当時ある研究所で事故が起きて、それが原因で交通事故が起きたみたい」

子供の頃だし流石に事故について難しいことまでは覚えてないけどね。と心なしか冷たい笑顔で命は続け、まるでそれ以上このことについて追及するなと言っているかのような威圧に陽介達はこくこくこくと頷く。

「ま、それで親戚たら一回しにされた後、最終的に父方の祖父母に引き取られて今に至るつてどこかな？」

やはり冷たい笑顔のままそう言い、彼は強引に話を終わらせる。

「ん、んうっ！」

と、真が空気を変えるために咳払いをした。

「とりあえず、久慈川さんに報告しておいた方がいいだろう」

「あ……そ、そうだな。安心させてやんねえと！」

真の言葉に陽介はこくこくと頷き、彼らは丸久豆腐店の方に歩いていくと陽介が先頭で店に入ろうとする。

「おや、いらっしやい。お豆腐かい？」

しかし彼らを出迎えたのは久慈川祖母だった。

「あ、ど、ども。ええと……」

「すみません、りせちゃんはいらっしゃいますか?」

「ああ、命ちゃん。りせに用事かい? あいにくあの子、出かけたみたいだよ」

言葉に詰まった陽介に命が助け舟を出すと久慈川祖母はそう言う。

「え? ついさつきまでいましたよね?」

「たまにあるんだよ。だまらつて出てっちゃってねえ」

色々とおつて疲れているようだから許してやって欲しい、と久慈川祖母は微笑む。しかしそれを聞いた陽介は久慈川祖母の相手を命に任せ、真達の方を向いた。

「黙って……出てった?」

「探すぞ。本当にただ出かけただけだとしても、まだ遠くには行っていないはずだ」

「う、うん、分かった!」

陽介が嫌な予感とばかりに呟くと真は皆の方を見て真剣な表情でそう言い、それに千枝が頷くと他のメンバーも頷く。

「すみません、ちよつと急用が出来たので。もしりせちゃんが戻ってきたら僕達が探してたと伝えて、僕に電話をください」

「ええ。分かったよ」
「では」

命も久慈川祖母にもし彼女が本当に出かけたただだった時のために人当たりの良い笑顔で伝言を頼み、お婆さんが店の奥に消えたその瞬間命は真剣な表情になって店を飛び出し、彼らも一気に散らばった。

「いない、そつちは?」

日も暮れ始めた頃、彼らは再び豆腐店の前に集合すると千枝が一番に尋ね、それに真達が首を横に振ると近所の聞き込みをした雪子が誰もりせちゃんを見ていないみたい、と報告、命もお婆さんから連絡は

ないと報告する。

「俺達が探せてないだけかもしれないが……どこに行つたんだ……」

「嫌な予感がするな、くそっ……当たんなきやいいけど……」

真と陽介が悔しそうに唸る。

「ここで唸つてもしやあねえツスよ……やれる事あやつたんだ」

と完二がそう言う。

「たしかに。予報じゃ今晚は雨だ……もう後は信じてマヨナカテレビを見るしかない」

命が締め、彼らは頷くと解散する。

そして夜、真は外で雨が降っているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始めた。

「鮮明な映像……」

映つたのはとても鮮明な映像。つまりりせがテレビに入れられたという事実には真は悔しそうな表情を見せる。と、テレビの真から見て右の方から黄色いビキニ姿のりせが現れ、テレビの中央に立つと視聴者に笑顔を向けた。

「『マルキュン！ りせチーズ！』みなさーん、こんばんは、久慈川りせです！」

りせは笑顔でそう言った後、前かがみになって胸を強調するような格好になる。

「この春からね、私進級して、いよいよ花の『女子高生アイドル』にレベルアップ、やたー！」

そう言つて彼女は嬉しそうにぴよんつと飛び跳ねる。

「今回はですね、それを記念して、もうスゴい企画に挑戦しちゃいます！」

彼女はそこまで言うのと再び胸を強調するような格好になった。

「えっとね、この言葉、聞いたことあるかなあ？ スウ・トオ・リイツ・ツプウー。ん、もう、ほんとにいい？」

一言一言区切ってそう言った後、彼女は恥ずかしそうに頬を赤らめ

て「きゃあ、恥ずかしー！」と言って逃げるようにカメラから遠ざかる。

「ていうか、女子高生が脱いじゃうのって、世の中的にアリ!？」

カメラに背を向けてそう言った後、彼女は再びカメラの方を向く。

「でもね、やるからには、ど〜んと体当たりで、まるっと脱いじゃおっかなって思いますっ！ きゃはっ、おっ楽しみにー！」

そこまで言うともヨナカテレビは消えてしまった。そしてその後携帯電話の着信音が聞こえ出してバイブも作動し、驚きの映像に固まっていた真ははつと我にかえると電話に出る。

「あ、み、見たよな、りせちー！ す、すとりつぶとかって、マジか!？」

なんか回を重ねるたんびに企画どんどんスゴくね!？」

「落ち着け」

興奮している陽介に真はただ一言落ち着くように言った後、一拍置く。

「一刻も早く助けるぞ」

「あ、そ、そうだよな。狙い分かったのに防げなかった俺達の責任だ……とにかく明日な！」

「ああ」

真の言葉に陽介は真剣な声でそう言い、電話を切る。陽介が電話を切ると真も携帯を閉じ、明日に備えて眠りにつくのだった。

第二十八話 情報収集と新たな絆

6月24日の放課後。真達は昨夜りせがテレビの中に落とされた事の捜査のためテレビの中を訪れていた。

「おーい、クマクマ?」

千枝が呼びかける。

「クマ、泣いてないよ」

クマは眩き、そう思うとがくつと膝をついてorzの形になる。

「みんな、クマの事忘れて楽しそうに……クマ、見捨てられた……」

「そ、そんな事あるワケないじゃん!」

「ごめんね、寂しかったの?」

クマの言葉に千枝が驚いたように叫び、雪子が謝る。とクマは立ち上がった、が、まだ彼らに背中を向けている。

「ダイクツでヒクツしてたクマ。どーせクマは自分が何なのかも知らんダメな子クマ。答え見つからないし、みんなは来ないし……そつちの世界の楽しそうな声まで聞こえた気がして……寂しいから泣いてみようと思ったけど、ムリだったクマ……」

「まあ、空っぽだしな……」

クマの言葉に陽介が苦笑いをする。

「カラッポカラッポ、うるさいクマ!」

「な……なんだと、この! ココは、お前の現実なんだろう!? お前がココでひっそり暮らしたいっつーから、犯人捜し、約束したんじゃないか!」

と、クマは陽介の方を向いて地団駄踏みながら叫び、陽介が怒鳴り返す。

「まーまー。クマ君も考えすぎで疲れたんだよ」

命が苦笑しながら二人を抑える。

「独りだと色々考えちゃって、寂しさ増量中クマ……みんながいないと切なくて、胸が張り裂けて綿毛が飛び出しそうクマよ……」

「クマ君って中に綿毛が入ってるの?」

クマのその言葉に命が律儀にツツコミを入れていると千枝と雪子

がクマを元気づけるように撫で、クマは嬉しそうに二人の方を見る。「いつか、逆ナンしてもよい?」

「おー、いいぞお!」

「……逆ナンのネタは、もう封印しない?」

クマのいきなりの言葉に千枝が元気よく頷くと雪子は浮かぬ表情で呟く。

「それよか、確かめてー事あるんだよ! 今、こっちどーなってる?

久慈川りせって女の子、来てないか? なんか分かんない?」

「クジカワリセ?……んむ?……」

「分かんないのか……」

本題に入り、陽介の言葉にクマが分からないというように首を傾げると陽介も目頭を押さえるようにしながら呟き、「お前の鼻、だんだん鈍ってきてないか」と言う。

「クマは何をやってもダメなクマちゃんね……みんなの役に立たなくなったらきつと捨てられるんだクマ……」

「そんな事はない」

陽介の毒舌に傷ついたのかクマが浮かぬ表情でそう呟くと真がフォローを入れる。

「クマ……みんなと一緒にいいの?」

その言葉に命が頷く。

「もちろんだよ……じゃあ、この前巽君を助けた時のように、今度はりせちゃんを感じが掴めそうなものを探してこよう」

「ハッキリとは分かんないけど、誰か入ってるような気は微妙にするクマよ。そのコを感じられるような、何かヒントがあれば、きつと前みたいに、分かるクマ」

少なくとも誰かがテレビの中にいるのは間違いないらしく、命が特別捜査隊メンバーの方を見て一つ頷くと、彼らはテレビから出ていく。が、真はただ一人、何か言いたそうなクマの前に残っていた。

「クマ……いろんなことが、分からんクマ」

「焦る事はない」

「……ありがとクマ。センセイは優しいクマね……クマ、もつと頑張

るクマよ」

クマが話し出すのが、真は微笑を浮かべて「焦る事はない」と返す。それにクマは嬉しそうに笑いながらそう言い、真は彼との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たな絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、『星』のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。

「クマ、ココで待ってるクマ……」

「ああ」

クマの言葉に真は頷き、彼もテレビを出ていった。

「おせーぞ椎宮！」

「何してたの？」

「ああ、クマとちよつと話を」

家電売り場の入り口近くで陽介達がたむろしており、真が来たのに気づいた陽介と千枝がそう言うと言うと真は誤魔化し笑いをしながらそう言う。

「とりあえず真君が来る前に話し合ったけど、僕は一度久慈川さんのところに行つて話を聞いてみようと思うんだ」

「大先輩、丸久のぼっちゃんや仲良いつすもんね。俺もお袋にちよつと話聞いてみます……あんま期待はできねえと思いますが」

「でも、しないよりはマシだよ。私も旅館の人に話を聞いてみる」

「で、あたしと花村は前と同じく町中駆けまわって情報を集める！」
「つつーわけだ」

命の言葉に続いて完二、雪子、千枝、陽介が言う。

「……俺、余ってないか？」

その言葉の後、真が呟く。と、学生四人がはつとした表情を見せた。「真君は学校で話を聞いてみてもらえるかな？」

「あ、そうだな！ お前、一年の……松永、だっけ？ ああいうところに友達多いし！」

「分かりました。じゃあ、何か進展があったら携帯に連絡。集合場所はいつものフードコートで」

命の指示を聞いた陽介が前の林間学校での彼の顔の広さを思い出しながらそう言い、真は命の指示に頷いた後連絡手段、集合場所の最終確認を行う。そして彼が「解散」というのを合図に彼らは町中に散らばっていった。

それから真は走って学校へとやってくる。と、彼は靴箱のすぐ近くに以前保健委員絡みで知り合った、小西早紀の弟を見つける。

(そういえば、ハンカチを借りたきりだったな。もののついでに話してみるか)

真は以前彼からハンカチを借りたことを思い出し、それがカバンの中にある事を確認すると、カバンからハンカチを取り出して小西早紀の弟の方に歩き寄った。

「小西」

「ん？……ああ」

声をかけられ、小西は気だるげな様子で真の方を向き、真だと確認すると「ああ」とやはり気の抜けた声を出す。

「これ、返すよ」

「ああ、これ……」

そう言っつて真が差し出してきたハンカチを見て、小西は驚いたように声を漏らしてハンカチを受け取ると、頭をかく。

「別に、捨ててくれてよかったんですけど……これ、姉のハンカチなんです。親が間違えて、俺のカバンに入れてて……」

そこまで言っつて彼は苦笑する。

「もう、使う人いないから……このハンカチも役目果たせて、嬉しいと

「思いますよ……ども」

「助かったよ」

「や……いい、いいっすよ、そんなの……」

小西のお礼の言葉に真は微笑を浮かべながら返し、それを受けた小西は照れくさそうに再び頭をかく。と、気づいたように真の方を見る。

「あ、俺、小西尚紀です」

小西あらため尚紀はそう言った後、頭を下げる。

「あの、よく知らねーのに、嫌いとか言っつて、すみませんでした」

「気にしてない」

「……よかったっす」

謝罪の言葉に対し真は言葉少なくそう返し、それに尚紀はホツとしたように微笑を浮かべる。真は彼との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、〃刑死者〃のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。と、尚紀が突然自嘲気味の笑みを見せた。

「こないだ、委員会に俺が入ってって、気まづくなっちゃないですか。あれで正式に、委員会をクビになりました。もう、来なくていいって……まあ、俺のせいなんですけど……また、取り上げられちゃいました……」

心なしか光の淀んだ瞳を覗かせながら彼はぼそりと呟いた後、真の方を再び見て笑う。

「よかつたら、時々遊んでください。大体、週の始めの方はウチの酒屋のへんにいますから……家、手伝って……それじゃ」

暗い様子でそう吹き、靴箱の方に歩いていく尚紀。その様子に思わず真は硬直してしまうが、彼が自分を横切った辺りで、真は我に返ったように今、自分に背中を向けている尚紀の方を向いた。

「尚紀！」

「……はい？」

彼の呼びかけに、尚紀が振り返る。

「今この町に来てるって噂の久慈川りせについて、何か知らないか？」
情報収集しようとしていたことを、何も考えずにとにかく出してしまった。と、尚紀は悪戯っぽく笑う。

「先輩、見た目に似合わず意外にミーハーなんすか？……あいにく、何も知りません……ああ、ま、ありがとうございます」

最近の話題を振って元気づけようとしたと解釈したのか尚紀は悪戯っぽく笑って皮肉を言った後にお礼を言ってひらひらと手を振り、学校を出ていく。それに真は妙な誤解を持たれたかと考える。

「あれ？ 椎宮じゃん」

「花村達と一緒に帰ったと思ってたが、どうしたんだ？」

「ああ、一条に長瀬」

そこに二階から一条と長瀬が降りてくる。

「ちようど良かった。なあ、最近久慈川りせってアイドルが越してき たって噂、聞いているか？」

「え？ りせちー？ ああ、そんな噂あるよな。商店街の豆腐屋だけ？」

「そうなのか？」

真の言葉に一条がそう言って長瀬に話を振るがこっちは首を傾げるのみ。

「ああ、それでちよつとりせについての噂を集めてるといふかなんというか……」

「へー、お前がアイドルの情報収集ってなんか意外だな。でも俺も別にそこまでファンってわけじゃないからなー」

真の言葉に一条は意外だなと笑った後に困ったように呟く。

「ああ、そういえばその久慈川とかいうアイドルについて詳しいって豪語している奴がいたな。たしか実習棟の二階に歩いていくのを見たが……」

「そうか！ すまん長瀬、助かった！」

長瀬から情報を得た真は彼の肩にぼんつと手を置いてお礼を言うてから実習棟へと走っていき、二人は何が何だか分からんというような表情を浮かべた後、まあいいかと結論付けたのか靴箱の方に行き、自分の靴を取ると学校を出ていった。

それから真は実習棟へとやってきてそのりせのファンだと豪語していた人物を探す。焦っていたため名前や人物像を聞きそびれていたが、偶然にも今実習棟にいる人間は二人組で話している者がほとんど。その会話内容からりせのものが読み取れないものを除外し、一人佇んでいる少年を選んだ。

「すまない。久慈川りせのファンだという奴を探しているんだが」

「りせちー？ ああ、ずっとファンだよ！ お前もか！」

どうやら当たりらしく、久慈川りせの名前が出た瞬間同志を見つけたとばかりに少年が目を輝かせ鼻息荒く真に話しかける。

「あ、いや、別にそういうわけじゃ……ちよつと話が聞きたいんだ」

「……え、違う？ まあ、りせちーファンなら、誰にも負けない自信はあるぞ？ 聞きたいことがあるんならなんでも聞いてくれ！」

「ありがとう。最近の久慈川りせの様子について聞きたいんだが……」

りせちーファンと豪語するだけあつて自信たつぷりにそう言う少年。それに真は先にお礼を言った後、聞きたいことを話す。

「え？ 最近のりせちーの様子？ そりや、電撃休業するなんて、悩みがあつた」以外に考えられないよ！ ブログでもほのめかしてたしね。悩みの内容は……まあ、諸説アリだけど。ぞっこんファンとしちゃ気になるさ……でも俺なんか解決できるわけないし……」

「悩みがあつた、か……他にはどうだ？」

「うーんそう言われても、最近のりせちーと言つてもなあ……休業後

はブログも止まってるし、もつと詳しい情報が欲しいなら、もうマスコミ関係者くらいじゃないかな……ファンレター書いてみようかな……今でもちゃんと届くかなあ……」

真からさらに聞かれた少年は困ったように腕組みをしてそう呟く。もうめぼしい情報はないらしく、真は話を終わるといふ合図に頭を下げた。

「ありがとう。助かった」

「ああいやいや、気にしないでよ」

丁寧にお礼を言う真に少年は朗らかに笑って返し、真はその場を去っていく。リセの一番のファンだという少年から話を聞いた以上ここでの聞き込みはもういらぬかと判断し、彼は陽介達の手伝いでもしようかと思いつながら学校を出る。と、その校門辺りでいきなり携帯電話が鳴り始めた。

「もしもし?」

「あ、真君?」

「先輩?」

「久慈川さんから良い情報を手に入れたんだ。なんでもりせちゃんについて探ってる人がいるみたい……俗に言うパパラッチってやつだね」

「パパラッチ……」

命から情報を得る。

「どこにいるかは聞きそびれちゃったんだけどね。りせちゃん目当ての客が多く来て久慈川さん忙しくなっちゃったから……まあとにかく、そういう相手ならりせちゃんについて何か知ってるかもしれない」

「分かりました。先輩はそのまま商店街を探してみてください、学校での情報収集も終わったので俺も探してみます」

「うん。僕はこの事を他の人達にも伝えるよ、じゃあね」

二人はそう話し合って電話を切る。そして真は携帯をしまった後校門を出て再び走り出した。それから真は河川敷や商店街を走り回った後、時間も遅くなってきたためジュネスへと向かう。そこには

既に陽介達が集合していた。

「皆、どうだった？」

「一応りせに何か悩みがあつたんじゃないかって話ぐらいはあつたんだけだよ。悩みって括りじや大雑把すぎるだろ？」

「もつと突き詰めた方がいいと思うのよね。完二君を探す時もコンプレックスだけって話じや大変だったし」

「え？ 俺そんな大雑把なモンで探されたんすか……」

真の言葉に陽介が返すと千枝が完二を探した時のクマの台詞から考えてその悩みというものを突き詰めた方がいいと意見を出し、完二はコンプレックスなどという抽象的この上ないキーワードで探されたことに若干ショックを覚える。

「で、命さんからパラッチがいるって話を聞いたから商店街中駆けまわって探したんだけど、どこにもそうっぽい奴が見当たらねえんだよ」

「街の人じゃなきゃすぐ分かるんだけどさ……」

「うん。客のプライバシーに関わるから本当は言ったりしちやいけなainだけど、うちの旅館に泊まつてる人にもマスコミ関係とかそういう人はいなかったよ」

陽介、千枝、雪子から情報が出てくる。と、飲み物を買ってきたらしい命がお盆をテーブルに置いた。

「今日はもう遅いし、また明日、そのパラッチの人に狙いを絞り込んで探そう。幸いにも明日は僕も花村君もシフトは入ってないからね」
「そうっすね」

「というわけで今日はお疲れ様。走り回って喉乾いただろうし、好きなもの取って飲んでってよ」

命がそう言つてドリンクをサービスし、彼がオレンジジュースを手取るのを合図に真達も次々にジュースやらコーラやらを取つていく。そして乾杯を取つてドリンクを飲み干してから、彼らはまた明日の激務を誓って帰路についた。

「ただいまー」

「お帰り！ お兄ちゃん！」

家に到着し、真の挨拶に菜々子も元気よく返した後、真は帰る前にちよつとジュネスで買ってきたものを並べる。

「菜々子ちゃん。俺今日バイトがあるから、夕食は簡単なものになるけどいいかな？」

「うん、いいよ」

真の言葉に菜々子はそう返し、真は「ありがとう」と返すとご飯が炊けているのを確認してから簡単な野菜炒めを作り、ささつと夕食を食べるとバイトに出かけていった。

最近彼が始めたバイトは病院での清掃。真夜中の病院というのはなかなか気味が悪く、どこからか視線や妙な声を感じたり聞こえたりして勇気がいるバイトである。まあそのためかバイト代はなかなかのもので、元々あまり怖いもの知らずな方である上に現在シャドウなどという摩訶不思議な存在と戦っている真にとつてはお化けなんてどうってことないとあっさり応募したわけなのだが。

「……これでこの病室は終わりかな」

空き病室の清掃を終わらせ、真はふうと息を吐く。と、入り口の扉が開く音と足音が聞こえ、真はそつちを向く。

「あら、先客？」

入ってきたのはこの病院のナースだ。というよりも、真がこのバイトに入った初日、医者と何か怪しげな会話を繰り返していた人だ。

「つて、この間の学生さんか。お仕事、偉いわね」

「……ども」

ナースの言葉に真は少しぶつきらぼうに返す。と、ナースはふふつと笑った。

「あ、ごめんなさい。自己紹介もまだだったわね。上原小夜子よ、よろしくね」

「椎宮真です」

ナース——小夜子が名乗ると真も名乗り、よろしくと会釈する。

「終わったら、ナースステーションにいらっしやい。温かいコーヒードも入れるわ……」

小夜子はそこまで言うとおふつと怪しく笑う。

「なーんてね」

「？」

おどけたような言葉に真が首を傾げると、彼女は突然真に近寄った。

「キミ、高校生だつてね……」

そう呟いて真の身体を舐めるように見回す。

「ふふつ、肌がつるつる……ねえ、分かるでしょ？」

「……何がですか？」

小夜子の言葉に真はわざとらしく返し、きよろきよると辺りを見回す。

「ふふつ、とぼけちゃつて……大丈夫、誰も来ないから」

「……すいませんが、今日俺走り回つて疲れてるんです」

小夜子の言葉に真は今日は疲れていると返す。

「あら、部活動？……フツツ。気に入ったわ、キミ。今度キミが来るの、いつ？ 私もシフト入れておくから」

「こんな町でも、楽しい事つてありそうね……」と呟く小夜子はよこしまな好意を真に向けており、真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、《悪魔》のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真は僅かに苦笑を浮かべた。

「じゃ、また」

小夜子はそう言って病室を出ていこうと踵を返し、真も彼女と一緒に病室を出ると小夜子はナースステーションに戻っていき、真は別の部屋の掃除に向かう。そして時間一杯掃除をしてから、彼はバイト代を貰って帰路についた。

それから翌日の6月25日。朝から雨が降っており、真は少し苦い顔を見せながら歩いていった。雨が嫌いだと言うわけではない、いや、濡れるし洗濯物が外に干せないしと色々面倒なので嫌いではあるのだが雨が続けば霧が出る。それはすなわちテレビの中でシャドウが暴れ出す危険な時という意味である。今テレビの中にはりせがいる。それゆえに彼は苦い顔を見せていたのだ。

「おはよ、椎宮君」

と、後ろから千枝が話しかけてきた。

「うわ、怖い顔……今日は一日雨だけど、明日までは続かないらしいから……いきなり霧は出ないはずなんだけど……」

「……ああ。頭では分かっているんだが、どうにもな……心配だ」

「そだね。今回はマヨナカテレビの内容、かなりシンドイっぽいし……でも、焦りは禁物だよね」

苦い中に心配そうな顔を見せている真の言葉に千枝も心配そうに返し、しかしそう続ける。

「私達もしっかり準備して、 “全開” になる前に、助けたいよね！」

「……そうだな」

千枝のむんつ、と気合を入れるようなポーズをしながらの言葉に真も微笑を浮かべて頷いた。

それから時間が過ぎて放課後。真達は教室の後ろ隅に集合。円陣を組んで真は命に電話をかけていた。

「じゃあ、今日は例のパパランチの捜索に狙いを絞ろう。僕はジュネスの店員に話を聞きながら探してみる」

「俺もジュネスを探してみます」

「あたしは商店街を探してみる」

「俺も行くツス！」

「私、旅館に戻ってそういう人を見たかももう一度店の人に聞いてみる」
「なら俺は商店街以外で人が行きそうな場所を探してみる」

命の言葉に続いて陽介、千枝、完二、雪子がそう言い、最後に真が
そう言う。

「皆、今日こそ久慈川りせがいる場所に繋がる手がかりを見つけよう
！」

そして真が場を引き締めさせ、全員領くと一気に学校を飛び出し、
散っていった。

それから少し時間が過ぎ、真は河川敷にある休憩所に腰かけてい
た。先ほどまで町中を駆け回ったがパララッチと思える人間には出
会えず、少し休憩がてら電話をかけていた。

「ああ、こっちは駄目。見かけない人はいないってさ。花村君も似
たようなもの……え？ ああ……里中さんから花村君に電話があっ
ただけどさ。やっぱり見かけないって」

「そうですか……」

命からの報告に真は肩を落とす。と、彼は「ん？」と顔を上げた。

「どうしたの？」

「いや……」

命からの呼びかけに真はそう呟いて、傘を差し自分の前を歩いてい
く男性を見る。まだここに来て三か月にも満たないが、見覚えのない
顔。

「先輩、見つけたかもしれません。電話切ります」

そう言うや否や真は電話を切り、傘を差して休憩所を出ていく。

「すみません」

「ん？」

背後から声をかけられ、その男性は振り向く。

「ええつと……何か用？」

「すいません。久慈川りせについて、何かご存じではないでしょうか？」

「なんだ君……久慈川りせについて聞きたいって？ 君もりせちーについでの情報を集めてるのかい？……」

真の言葉に男性——パラッチはそう聞き返した後、考える様子を見せる。それからふっと微笑んだ。

「良かったら、君の持つてる情報と僕の持つてる情報を交換しない？」

商店街の人には警戒されちゃって、なかなか情報が集まらないんだよ」

「分かりました。では、俺から情報を提供しますけど。嘘は言わないでくださいね？」

「ああ。そこは君は信じよう、だから君も俺の情報を信じてほしい」

パラッチの申し出を受けた真は不敵に笑って念を押すが、そういう話には慣れているのか相手も不敵に微笑みを返す。

「ではまず、知り合いから聞いた話ですけど……悩みを持っていたんじゃないかという話が出ています」

「悩みを持っていた、ね。やっぱりそこになるのかなあ……」

真は学校で聞いた、りせは悩みを持っているという話を出す。それにパラッチはやつぱりと眩いた。

「いや、実は先日の電撃休業の理由について、取材していたんだけどさ。『りせちー』って創作されたキャラクターに疲れてしまった、って情報が有力なんだ。『普段の自分とは違う、アイドルとしての自分……』。それに耐えられなくなった……って線で決まりかな。目新しい情報はなかったけど、助かったよ。ありがとう」

真の出した情報からすらすと新たな情報を出し、お礼を言う。

「えっと、まだ聞いてみたいんですが……そういえば」

ここで話を終わらせてなるものと粘ろうとする真。と、彼は初めてりせに会った時の事を思い出した。

「あの、俺久慈川りせに会った事があって、俺はアイドルには詳しくなかったのでよく分からなかったんですが……その時に友達が言っていたんです。テレビで見るのと全然キャラが違うって」

自分達の推理によると次に狙われるのはりせ。だからりせに注意するよう助言に行つた時に陽介が言つていたことを彼は思い出し、情報として提供する。

「ふうん、やつぱりか……」

それにパパラッチもふむふむと頷いた。

「実は僕も昔、プライベートのりせちゃん、目撃したことがあるんだ。驚いたよ、テレビの印象と全然違つてさ。すぐ本人とは分からなくてね。でも、アイドルつて『キャラづくり』するものだし当然っちゃ当然なのか」

(つまり……)

そう呟くパパラッチを見ながら真は今まで手に入つた情報を整理していく。

(久慈川りせはどうやら『キャラ作りをしていた』らしい。そして、『普段の自分とアイドルの自分』、このことについて悩んでいた……)

「ああ、情報ありがとう。助かつたよ」

「あ、はい」

互いに情報は手に入り、真とパパラッチは別れる。そしてパパラッチがいなくなつてから真は電話をかけた。

「真君！ どうだった!?!」

「ビンゴです」

電話に出ると同時に叫ぶ命に真は笑つて返し、パパラッチから手に入つた情報を命に話す。

「キャラ作りに普段の自分とアイドルの自分……なるほど。さしずめ彼女は、『本当の自分』について悩んでたんだらうね」

「本当の自分?」

「人は誰しも仮面を持ち、相手によって使い分ける。真君だつて心当たりあるでしょ?……色々と」

「それは、まあ……」

色々と、という部分の声が心なしか暗い命の言葉に真も返答に困つたように返す。と、命は明るい声を出してきた。

「ま、手がかりが手に入ったんだし話は後だ。花村君、里中さん達に連絡して……うん、お願い。真君、すぐジュネスに集合しよう」

「はいー」

近くにいるらしい陽介に指示を出しながら真にジュネス集合への指示を出し、真ははいと返すと電話を切つてジュネスに向けて走り出した。

「椎宮！ こっちだ!!」

フードコート屋根付きの場所を陽介が場所取りしており、その隣の席には千枝と完二が既に集合している。

「先輩は？」

「命さんは旅館にいる雪子を迎えに行つたつて！」

「変なウワサ立たなきやいいけどな……」

「なんだつて!？」

開口一番命の行方を問う真に千枝がそう言うと言陽介がため息をつき、その言葉を聞いた千枝が眉を吊り上げて陽介を怒鳴る。

「ごめんごめん、待つたかな!？」

「お待たせ、皆！」

「あ、先輩」

「雪子！」

真が皆に集めた情報からの推理を説明し終えた辺りで命と雪子が到着。全員集合し終え、彼らはテレビの世界へと移動していった。

「あ、センセイ！ その顔はもはや！ 手がかり発見か!？」

「ああ」

クマの言葉に真は頷き、クマに説明していく。

「ふむふむ……ホントの自分……なるほど……クマと同じね。繊細でセンチメンタルなタイプね。ならば……」

テレビに落とされた人物を示す匂いを手に入れたクマはうむむと唸って鼻をクンクンしていく。

「おっ!?! なんか居たクマ！ 見つけた？ クマ見つけちゃつた!？」

何か発見したらしいクマがテンション高く「ついて来るクマ！」と叫んで走り出し、真達もその後を追った。

「なに……真つ暗じゃん」

千枝が呟く。確かに彼らがやってきた場所は真つ暗で何も見えない。と、いきなりバチンという音と共に辺りが照らし出され、いきなりの光に真達の目がくらみ彼らは咄嗟に目を庇うように腕で覆ったり目を瞑ったりする。

「……うお……これって……」

光に目が慣れ、目を開けた千枝が呟く。目の前に広がるのはスモークがたかかっているステージ、その近くには真つ赤なソファや木製のテーブル。さらにハートマークで彩られたカーテンや眩いライトなど、とても派手な場所だ。

「温泉街につきもののアレ!？」

「……あ、そうかも」

テンション高く叫ぶ陽介に雪子は同意し、僅かな沈黙の後「ウチには無いからね?」と念を押しておく。

「ストリップ……てやつスカ」

「ストリップ!？」

完二の呟きに今度はクマが反応する。

「はっはーん! 読めたクマよ……シマシマのやつクマね!？」

「……」

「ストリップって……シマシマのやつクマね!？」

クマのギャグが滑り、雪子は眩しそうにライトを見上げる。

「……眩しい……メガネしてても目が痛くなりそう……」

「ねー、ボケたらツツコミなさいよ! もっかいクマ……ストリップって……シマシマのやつ……」

「うっさいな、こいつ……」

マイペースなクマに千枝が毒づく。

「……え、シマシマって? めん、何の話?」

そして全く話を聞いていなかったマイペースその2、雪子がクマのボケを完全に殺した。

「も、もう言わないクマ……はやく、先に進もうクマ……」

クマはいじけてしまい、流石に可哀想になったのか真達は憐れみの目を彼に向けた。

第二十九話 テレビの世界、特出し劇場丸久座

「オルフェウス！ アギ!!」

拳銃を自分のこめかみに当て、引き金を引いた命が叫ぶと同時。目の前の、巨大な岩に仮面をつけたようなシャドウ——無為のバザルトが、命が呼び出したペルソナ——オルフェウスが豎琴を引くと共に放った炎に包まれる。

「先輩、後ろから敵が——」

その背後からDNAのような二重螺旋構造で形成された人型のシャドウ——ミス・ジエーンが襲い掛かる。が、命はすぐさまそっちに振り向きつつ、オルフェウスを消し自らの心の海より新たなペルソナを準備しつつ再び召喚器である銃の引き金を引く。

「タケミカズチ!! ジオンガ!!」

それと共に彼の心の海より姿を現した雷神——タケミカズチの咆哮と共に放たれた電撃がミス・ジエーンを粉々に撃ち砕いた。

「セ、センパイ凄いクマ!?!」

「椎宮より数段速え……」

辺りの敵シャドウ全滅を確認した後クマが叫び、陽介も啞然とする。そして命はタケミカズチが消えていったのを確認した後学生達の方を向いた。

「改めて、これが戦闘の基本だね。相手の弱点を確実に見抜き、その弱点を突く。特に僕や真君のようなワイルド能力者はいくつもペルソナを使い分ける事が出来る。つまりより多くの相手の弱点を突いて攻撃し、味方の力を底上げまたは敵の力を抑え、傷ついた仲間を癒し、さらにはシャドウの得意な攻撃を読みペルソナを入れ替えての防御等応用の効く戦いが出る。もちろん、それをやれるだけの判断力と知識が必要になるけどね」

「は、はい……」

命の見せつけた技量の高さに真はぽかんとしながら頷く。と、雪子が「あの」と問いかけた。

「その、命さんや椎宮君のワイルド能力って……どういふものなんで

すか？」

「どういうもの、と言われてもね……そもそもとして、君達タロットカードって知ってるかな？」

「あの、占いに使うカードですか？」

雪子の質問に命が困ったように眩き、逆に質問をすると千枝が首を傾げながら答える。それに命は「そう」と頷くと右手を横に振る。と、二枚のカードがその手に現れる。その内の一枚にはローマ数字の「I」、もう一枚には「XII」と書かれていた。

「基本的にペルソナ使いのペルソナは1番の魔術師から12番の刑死者までのいずれかに当てはめられる。花村君は1番の魔術師、里中さんは7番の戦車、天城さんは3番の女教皇、巽君は4番の皇帝。という具合にね」

そこまで説明を終えると命はその二枚のカードを消し、再び別のカードを手の中に具現させる。そのカードに浮かび上がっている絵はオルフェウス、それには「0」の文字が書かれていた。

「ただ、ごく稀にこのアルカナ番号0番、愚者のアルカナを持つペルソナを持つ者がいるんだ」

「！」

それを聞いた真がすぐさま自分のペルソナ——イザナギを確認する。

「イザナギのアルカナは愚者です！」

「僕のオルフェウスもそうだよ。これがワイルド能力者の証と言ってもいいかもしれない。まあ手っ取り早く言っちゃえばペルソナ使いの突然変異体って感じかな？ 数字の0、それはなにもものでもないがなにもものにもなれる……納得してくれたかな？ 正直詳しい説明は難しいんだ」

「は、はあ……要するに才能？ みたいな？」

命が説明を終えると完二が頭をかきながら答える。

「まあ、生まれ持ったのって意味ならその解釈でいいかもね。さあ、そろそろ行こう」

「はい」

完二の見せた解釈に命は苦笑しながら返した後先に進もうと言い、それに真が頷いて彼らは先に進んでいく。

「ムムッ！」

先に進んでいき、第三層へとやってきた時クマが突然声を出す。

「匂う！ 匂うクマよ！ クマの鼻が何かキャッチしたクマ！」

「皆、急ぐぞ!!」

クマの言葉を聞いた真が突如目を研ぎ澄ませた真剣な表情で言い、陽介達も頷いて先を急ぐ。

「匂いの元はこの向こうクマ!!」

そして行く手を阻むある一つのカーテンを指差してクマが叫ぶと真がそれを開き、彼らは中へなだれ込む。

「やっと、見つけた！」

部屋に入って一番に陽介が叫ぶ。彼らの目の前には黄色のビキニを着た可愛らしい少女——久慈川りせの姿がある。

「……けど、やっぱ様子が変」

その姿を見た千枝が不安そうに呟くと雪子が「多分また、もう一人の……」ともう種が分かっているかのように呟いた。

「ファンのみんな〜！ 来てくれて、ありがと〜お！」

久慈川りせ、いや、りせのシャドウがコンサートなどの最初に観客に呼びかけるかのように声を出す。

「今日は、りせの全てを見せちゃうよ〜!……ええ？ どうせウソだろって？ アハハ、おーけーおーけー！」

りせのシャドウはそう言って無邪気に、しかしどこか妖艶かつ不気味に笑う。

「なら……ここで……あ、でもここじゃ、スモーク焚きすぎで見えないかな？ じゃあもう少し奥で、ウソじゃないって、ちゃーんと証明したげるネ!!」

——マルキユン真夏の夢特番！ 丸ごと一本、りせちー特出しSP

りせのシャドウがそう叫んだ瞬間彼女の背後にテロップが浮かび、心なしか普段よりも大きな歓声が響く。その光景に完二は「オ、オレも、あんな風だったんか？……うお……こらキツイぜ……」と絶句し、千枝が「うあ、ざわざわ声、今回スゴい……なんか気持ち悪くなってきた……」とざわざわ声にそんな感想を呟く。

「誰かが見えるんだとしたら……早く何とかしないと、これ……」

「じゃあ、フアンみんな！ チャンネルはそのまま！ ホントの私……よく見て！」

陽介が呟くのをよそにりせのシャドウはそう言い、「マルキュン！」とポーズと台詞を決めると奥へ向かって走り出す。

「ま、待て！ 皆、急ぐぞ！」

「ああ。イタイ話聞かれるだけとは訳が違うって！」

真がりせのシャドウに待てと叫んだ後皆に急ぐぞと言い、陽介もそれに賛成して走り出す。が、その先にまるでアイドルの追っかけを防ぐ警備員のように警官型のシャドウ——固執のフアズが二体姿を現す。

「邪魔だ！ ジライヤ、ガルーラ!!」

その姿を見た瞬間陽介が邪魔だと叫んで自らの前にペルソナカードを呼び出し、走りながらそれを手に持っている短剣で斬り砕いて己のペルソナ——ジライヤを呼び出し、ジライヤは印を組んで竜巻の槍を固執のフアズに放ち、フアズはそれを避ける事もなく、まるで竜巻の方がフアズに吸い込まれるかのように突き進む。が、その瞬間、フアズの身体が発光した。

「っ!? ぐあああああっ!!!」

「花村っ!?!」

直後ジライヤの放った中竜巻が跳ね返され陽介が吹っ飛ばされる。「疾風反射!?! ならー!」

真は足を止めて右手に精神を集中、ペルソナカードを呼び出す。

「まとめて消し飛ばす！ マタドール！ マハンマ!!」

右手でカードを握り砕くと共に現れるのは闘牛士の格好をした骸

骨。それがマントを翻すと共に辺りに光の陣が組み敷かれ浄化の光が放たれる。

「なにっ!？」

しかし、その光を受けたはずのファズは浄化されることなく、その場に佇んでいた。

「光無効……こういう奴は」

しかしその光を目くらましに命がファズへと突進、ファズの右手の銃から放たれる銃弾を伏せるようにかわしながら相手に足払いをかける。

「一発弱めに殴って確かめる!!」

足払いで体勢を崩したところに回転の勢いを利用してもう片方の足で蹴りを入れる。その感触に命はよしと頷いた。

「打撃は効きそうだ!」

「うっし! タケミカズチ、キルラッシュユ!!」

命の報告を聞いた完二はうっしと頷いて手に持っている鉄板で自らのペルソナカードを砕き呼び出したタケミカズチに攻撃を指示、タケミカズチはファズ目掛けて右手に握る雷の形をした剣により攻撃を加え一気に打ち砕く。

「トモエ、アサルトダイブ!!」

さらに千枝がトモエに攻撃を指示、薙刀を構え突進の勢いを加えた打撃がファズを打ち砕いた。

「よっしやー!」

「へっ。余裕だぜ」

千枝と完二がペルソナを消しながら台詞を決める。ちなみに陽介は吹っ飛ばされた時のダメージを雪子のコノハナサクヤが使う治癒魔術で回復している。

「それにしても、まさかいきなり攻撃が反射されるなんて……」

「カウンタのようなスキルの他に、ペルソナ自身の資質として無効や反射能力を持つ者もいる。もちろんシャドウもそれは同じ……そろそろ敵を見つけた瞬間先手必勝と攻撃を仕掛ける段階は終わりだよ。強力な攻撃を反射されたらその分こつちが不利になるからね」

「あてて……確かに、ほとんど不意打ちでしたよあんなの……」

真がさっきの戦いで思った事を呟き、命がシャドウとの戦いで先輩としてそう言っていると、反射攻撃の恐ろしさを身をもって知った陽介が頷く。

「とりあえず、そういう相手には敢えて威力の低い攻撃を当てて攻撃が無効化されたり反射されたりしないか試してみたらいい。物理攻撃なら特に楽だね、近づいてぶん殴ればいい」

「いや、初見の相手に生身で近づくと命さんじゃないと出来ないと思いますけど……」

命が簡単そうに言うのに千枝がツツコミを入れる。確かに初見、一体相手が何をしてくるか予想もつかない相手に対策なしで迷わず突っ込んでいけるのはこの中では命くらいだ。

「あれー!? こんなトコまで来るなんて、りせのフアンの人？」

「……」

五階まで上がってきた時、りせの声——正確にはりせのシャドウの声だろう——が聞こえてくる。それに真は厳しい表情でなんとなく虚空を見上げる。

「マジ!? りせちー、超うれしー!」

しかしその声はそんな厳しい表情など関係なく歓声を上げた。

「せっかく来てくれたんだから、特別にサービスしちやおっかなあ……でも、ここじゃダメ! りせちーに、あなたの頑張りをもうちよつと見せてほしいな!」

嬉しそうな声でまくしたて、「待ってるからね!」の一言の後声が聞こえなくなる。それを聞き流して真はクマから荷物を受け取り、その中からプチソウルトマトを数個取り出すと齧る。

「真君、無茶はダメだよ?」

「まだ大丈夫です」

命が心配そうに声をかけると真は静かにそう返した。ちなみに後ろの方では陽介とクマが特別サービスという一言を聞いて疲れが

吹っ飛んだかのようにうひょーと叫んでおり、千枝と雪子が冷ややかな目で二人を見ていた。

「ほら、頑張つて！ もうちよつとだよ！ りせ、応援してるから！」

「……なんか、こっちは命賭けて必死で助けようとしてんのに逆に明るく励まされるとか……やるせない気分になりますね……」

さらに六階へと上がった時に聞こえてくる声に完二がやるせなさそうに呟く。

「りせちゃんのシャドウの挑発みたいなものだよ」

その声に命がそう言い、そう思うと彼は突如目を研ぎ澄ませ「それより」と呟く。

「敵襲だ」

呟くと同時にスラアつと滑らかな金属音を響かせながら剣を抜く。彼らの目の前に現れたのはこの鮮やかというか派手派手しい場所に似合わない戦国の世の武者とでもいうシャドウが二体。

「只者じゃない……出来る」

よく分からないが普通のシャドウとは何かが違う感覚を覚え、命は呟く。と、その武者姿のシャドウ——雨脚の武者は突然自らを鼓舞するかのように刀を振り上げ、それと共に武者の周囲を光が上がる。

「リベリオン、相手の急所を狙い撃つ勘を研ぎ澄ますスキル……皆、気をつけてっ！」

命が素早くスキルを分析、自らの記憶のデータベースと照らし合わせて注意を呼び掛けていた瞬間、雨脚の武者の一体が鋭い斬撃を命に放ってきた。

「命さん!? コノハナサクヤ、アギラオ!!」

雪子がすぐさま扇子でペルソナカードを砕いてコノハナサクヤを呼び出し、炎を放つて援護。しかしその炎を浴びた武者は無傷では済まずともほとんどダメージを受けている様子がなかった。

「くっ!？」

さらにもう一体の武者は真を狙い、急所目掛けて次々と鋭い斬撃をくらわせ真はそれを手に持っている刀で必死に防御していくが武者の猛攻は続く。

「ぐうっ!？」

ついに武者の一撃が真の手から刀を弾き飛ばし、武者の持つ刀の刃が返され無防備になった真に狙いが定められる。

「タケミカズチ！俺にラクカジャ!!」

「ぐっ!？」

しかしそこに突然そんな声が聞こえ、直後真が何者かに突き飛ばされる。

「ぐああっ!!」

「完二!？」

真を庇い斬撃を受けたのは完二。

「ジライヤ、テンタラフー!!」

だがそこに陽介がジライヤを呼び出して不思議な光を二体の武者に放ち、その光を受けた武者の動きが鈍る。

「しめた！天城さん、異君の治癒に！真君花村君里中さん、物理攻撃で一気に決めるよ!!」

「二二はいっ!!!」

命は指示を出しながら召喚器である銃をこめかみに当て、真達もペルソナ召喚の準備を整える。

「ナタタイシ、電光石火!!」

「オニ、デッドエンド!!」

「ジライヤ、パワースラッシュ!!」

「トモエ、疾風斬!!」

ナタタイシが凄まじい速度での突進で攻撃をしかけ、オニの一撃が武者の刀ごと相手を打ち、ジライヤの手裏剣が武者を斬り裂き、トモエが薙刀を振るうと同時に発生した真空波が武者を斬り刻んだ。

「強敵だった……天城、完二は大丈夫か？」

「あ、うん。椎宮君の身代わりになる前にラクカジャを使ってたみたいだったから、ダメージはあまりなかったみたい」

「いつちちち……」

真は弾き飛ばされた刀を拾い鞘にしまった後に雪子に完二の具合を尋ね、雪子は治癒を終えた後状態を報告、完二も座ったままいちちと呟くが既に傷は全くなくなっていた。

「心配ねつすよ、先輩。こんぐらいの怪我はいつもの事ツス」

「そうかもしれないけど、無茶をし過ぎ。君に何かあったらお母さんが心配するだろうし、僕達も悲しいからさ」

「……すんません」

完二の、真に気を使うような言葉に命は心配そうな表情でそう言い、その言葉を受けた完二は申し訳なさそうにうつむきながら謝る。と、命は「まあでも」と言って完二に手を差し伸べた。

「真君を助けてくれてありがとう」

「……あざつす、大先輩」

そのお礼の言葉に完二も嬉しそうに微笑み、彼の手を取って立ち上がった。

「どうやらさっきの敵は、外が雨だから出てきたみたいクマ」

「雨?」

「うん。クマもよく分からないけど、外が雨とか雷とか、そんな日は出てくるシャドウに特別な奴が増えるんだクマ。この貴重な珍品がその証クマ」

クマの説明に命はふんふんと頷く。

「なら、珍しいシャドウのようだね……真君、雨の日は普段より危険みたいだけど、どうする?」

「……皆がいいんなら、先に進みます。雨の後は霧が出る。今日のこれは明日には止むみたいですけど……だからと言って絶対とは限りません」

命の言葉に真は強い意志を覗かせる目でそう言い、陽介達を見る。「皆、さっきは少し不甲斐ないところを見せたけど……もう少し頑張っていていけるか?」

「当然だ!」

「もつちろん!」

「早くりせちゃんを助け出そう！」

「俺の事は心配いらねツス！ 頑丈なだけが取り柄ツスから！」

真の言葉に四人は口々に賛成の意見を述べる。

「……少しは皆の上に立つリーダーらしくなってきたかな？」

その姿を見た命も、ふふつと微笑んでそう呟いた。

「うれしい！ ホントに来てくれたんだ！」

六階に上がった時、そんなりせの声が聞こえてくる。

「でも、やっぱりちよつと恥ずかしいからあ……電気、消すね！」

りせの声でそう言った瞬間いきなり辺りが暗くなり、少し前しか見えなくなる。

「ムム！ 電気を消したって事は……ゴクリ……せ、センチ！ クマ、オトナの階段登るのか？」

「何想像してんのよクマ……」

クマのテンション上がった声に千枝が冷ややかにツツコミを入れる。

「見通しが悪いな……皆、はぐれないように気をつけよう。先輩、バツクアタックに注意したいので後ろの警戒をお願いしますか？」

「了解」

真が冷静に皆に呼びかけ、指示を行う。そして陽介と完二で前方を固め、二番目辺りに真が立って周囲を警戒、雪子とクマは千枝が徹底護衛、殿を命が守るといふ陣形で彼らは真つ直ぐ進んでいく。

「椎宮、前にカーテンがあつたぞ！」

陽介が言い、今まで行く手を阻んでいたが触れると同時にシャツと簡単に開いていたカーテンに今まで通り触れる。

「ああん！ もう、気が早いんだから！ そこはまだ、ダ・メ！ こつちよ、こつち！ 早く来て！」

だがカーテンは開かず、そんなりせの声が代わりに聞こえてきた。

「どうやらこのカーテンはまだ開けられないようだ……他を探そう」

真がそう言い、一行は七階の探索を始めた。

「来てくれたんだね！」

七階の奥地、そこにあつたカーテンの前に立つとりせの声が聞こえてくる。

「いいよ。りせ、心の準備はできてるから……」

りせのどこか恥ずかしそうな声にクマと陽介がごくりと唾を飲む。

「準備は良い？ 真君？」

「はい……皆、行くぞ！」

命の確認に真は頷き、彼らはカーテンを開けると中に飛び込む。

「りせ、初めてなの……やさしくしてね？ じゃあ、電気つけるよ？」

そのカーテンの向こうにはりせのシャドウが暗い部屋の中立っていた。そして彼女がそう言うと共に部屋が明るくなり、いきなりの光に彼らは一瞬目を瞑る。

「ギョギョー！」

クマの悲鳴に真達も目を開ける。

「キヤーツ!!?」

そして千枝と雪子の女子コンビも悲鳴を上げた。さつきまでりせのシャドウが立っていた場所、そこには真っ白な大蛇が存在し空中で身をくねらせていたのだ。と、その悲鳴を合図に蛇型のシャドウ——淫欲の蛇は身をくねらせてハートマークのようなポーズを取り、周りに淀んだ空気をまき散らしてくる。

「ぐっ、なんだこりゃ!?!」

「皆気をつけて！ この空気の中じゃ毒や混乱とかの効果を受けやすくなっちゃう！」

陽介が空気を振り払おうとしているのかぶんぶんと短剣を振り回している。命が気をつけるよう叫び、全員が警戒を行う。それと同時に淫欲の蛇は毒をまき散らし攻撃を行う技——バイラスウェイブで攻撃を仕掛けてくる。

「くっ!?!」

攻撃は受けながらも幸い毒までは受けず、真は素早く右手にペルソナカードを具現化する。

「オニ、デッドエンド!!」

「タケミカズチ、キルラッシュ!!」

真が赤鬼を召喚すると同時に完二も己のペルソナである髑髏の巨人を呼び出し、オニの持つ薙刀とタケミカズチの持つ雷の形をした剣が淫欲の蛇に振り下ろされる。が、蛇はそれを細長い体をくねらせてかわしてみせた。

「ジライヤ、ガルーラ!!」

「トモエ、疾風斬!!」

だがそこにジライヤが竜巻を起こし、さらにトモエの振るう薙刀からも真空波が発生してその威力が増大。蛇の動きを止める。

「オルトロス!」

「コノハナサクヤ!」

その機を逃さずに命と雪子がペルソナを召喚、

「アギラオ!!」

二人のペルソナから放たれた炎が蛇を捉え、蛇は悲鳴を上げて地面に落っこちる。

「今がチャンスよ! 準備はいい?」

雪子が合図をかけ、真達は一齐に武器を手に襲い掛かる。蛇も炎に怯んで攻撃されるがまだまだだったが立ち直ると長い尾を鞭のようにしならせて真達を振り払う。そして再びバイラスウェイブで攻撃をしかけてくる。

「ぐうっ!」

「千枝!」

その一撃をかわしきれなかった千枝が攻撃を受けた左足の膝下を押しえて膝をつき、雪子が彼女の方に駆け寄り、千枝が押さえている部分を確認する。その傷跡は紫色に変色していた。

「千枝、大丈夫!」

「うん、大丈夫……」

「チエちゃん、これ使うクマ!」

雪子が声をかけ、千枝が少し苦しそうな様子で呟くと荷物持ちであるクマが大慌てで鞆の中からどくだみ茶——テレビの中だと解毒作用が強まるのだ——を渡し、雪子がどくだみ茶を少量千枝の傷口へとかけ、残りは千枝が飲んでいく。と、紫色に変色していた肌の色があつという間に元の肌色に戻った。

「相変わらず、四六商店で買ったやつなのに凄いなあ……」

「テレビの中のイメージのカクマ」

千枝は空になったどくだみ茶のペットボトルをしげしげと眺めながら呟き、クマはえへんと胸を張ってそう答える。

「ま、いいや。とにかくいくよ、雪子！」

「任せて！」

千枝はまあいいやと言うと雪子に声を投げかけ、雪子も頷く。そして二人は同時にペルソナを召喚すると再び戦線に復帰した。

「サティ！ マハラギ!!」

「ジライヤ！ マハガル!!」

サティ ジライヤ
命と陽介が無数の火の玉と風の刃で蛇を牽制し、

「タケミカズチ！ デッドエンド!!」

逃げ道を塞いだところで完タケミカズチ二の一撃が淫欲の蛇に決まり、アツパースイング気味に打ち上げられた攻撃によって淫欲の蛇が上空へ吹っ飛ばされる。

「トモエ！ 脳天落とし!!」

そこに千枝トモエの、蛇の脳天目掛けた一撃により蛇は地面に叩きつけられた。

「インキュバス！」

「コノハナサクヤ！」

インキュバス コノハナサクヤ
さらに真と雪子が追撃の準備をし、

「アギラオ!!」

その炎が再び淫欲の蛇を焼き尽くし、蛇はついに影のように真っ黒な粒子となり四散する。

「……お、明るくなった。これで先に進みやすくなったな」

「じゃあ、この部屋を調べたらさっきのカーテンの場所に戻ってみよ

う」

陽介の言う通り、シャドウを倒した瞬間この階層の全域が明るくなり、真がそう指示をして彼らは部屋を調べる。が、特に目立つようなものはなく、あったのは奥の方にあった宝箱に入っていたアムリタソーダー一つのみ。とりあえずそれを荷物入れ用の鞆に入れてから、一行は一度さつき陽介が見つけた開かないカーテンに場所に戻っている。

「……………い、いくぞ?……………」

陽介が片手に短剣を準備しながらもう片方の手でカーテンに触れようと手を伸ばす。また何かの不意打ちがくるのではないかという警戒で、真達も武器を構えている。そして陽介が手を触れると共にカーテンが開き、真達は注意深くその先を調べる。が、そこにあるのは階段だけだった。

「ふう……………よし、先に進もう」

真が一度警戒を解いて先に進もうと号令をかけ、真達は上の階層へと進んでいった。

「理想の男性は……………うーん……………やさしくて清潔感がある人かな?」

十階に上がってきた時、そんなりせの、先ほどから続くインタビューにでも答えているかのように明るい声が聞こえてくる。が、特に真達はその内容に興味を示している様子はなかった。

「見た目より、中身……………」

ただ一人、容姿よりも中身が大切だと語るりせの声に、物理的な意味で中身のないクマを除いて。

「行くよ、クマ君」

と、命がクマの頭の後ろを優しくぽんと叩いてそう言い、真も刀を一、二回素振りをしてから構え直した。

「一気に突破するぞー!」

『おうっ!!』

真の号令に陽介達が声を上げて士気を上げ、彼らは一気に十階を走

り出した。

「おらあっ!!」

大きな球体に大きな口を開き長い舌を出しているシャドウ——妄言のアブルリーを完二が殴り飛ばし、

「やあっ!!」

人の手を象り手首部分に顔を付けたようなシャドウ——キリングハンドを千枝が蹴り飛ばし、

「アギラオ!!」

下がピラミッドを逆にした形状に尖った椅子に座っているシスター風のシャドウ——解放のマリアを雪子が召喚したコノハナサクヤが炎を放ち焼き尽くす。

「花村!・クマ!・大急ぎでこの辺を調べて階段を探してくれ!!」

「分かった!」

「了解クマ!」

鉄球と鎖で繋がれているライオン型のシャドウ——スレイヴァニマルを真は刀で押さえつけながら陽介とクマに指示を出し、二人は領いて手近なカーテンを触っては開けて階段がないか探していく。

「クマックマツ!」

クマは息を切らしながら走り、一つのカーテンを開ける。と、その先には階段があった。

「か、階段見つけたクマーツ!!」

クマは喜びを全身で表現しているかのように両腕を振りぴよんぴよんと飛び跳ねて大声を上げる。と、クマを突然大きな影が覆った。

「クマ?...ギョギョー!!」

クマは振り返ると悲鳴を上げる。いつの間にか巨鳥型のシャドウ——ヴィーナスイーグルがクマに接近していた。しかもヴィーナスイーグルはスキルを使おうとしているのか自らの内部に力を込めており、まるで自ら発光しているかのように見える。

「クマ君伏せてっ!!」

「クマツ!」

聞こえてきた声に従いクマは頭を抱える形でしやがみこむ。その直後ビュンツという風切り音が響き、そう思うとヴィーナスイーグルの断末魔が聞こえてきた。

「大丈夫だったかい、クマ君？」

「セ、センパイ……」

命がヴィーナスイーグルに突進し一撃でヴィーナスイーグルを仕留めたのだ。命はさつきヴィーナスイーグルに渾身の一突きを叩き込んだ片手剣を鞘に収めながらクマに大丈夫かと尋ね、クマは感動にふるふると震える。

「階段を見つけたみたいだね、お手柄だよ」

次にサムズアップをしながら彼はそう言い、そこに真達が走ってきた。そして彼らはそのまま階段を上がっていく。そのすぐ先にあつたのは大きな扉。

「……ここが最上階みたいだね……真君、どうする？」

「ここまで来たら下手に仕切り直すより、この勢いで突き進みましょう！」

「そうだね。少しでも早くりせちゃんを助けてあげよう！」

「おっしや！ 俺はいつでもいいぜ!!」

「あたしも、気合十分!!」

「俺もツス！ 巽完二、男の見せ所だ!!」

命がどうするかを真に尋ねると彼は仕切り直すよりも一気に勢いのまま突き進むと言い、それに雪子が少しでも早くりせを助け出そうと言うと陽介、千枝、完二が気合に溢れた様子でそう叫ぶ。

「皆……行くぞ!!」

そして真が叫び、彼らは扉を開けると一気に突入していった。

第三十話 本当の自分

テレビの中の世界、久慈川りせの抑圧した精神から出来たという場——特出し劇場丸久座。真達はそこを突破し、巨大な扉を開いてその中へと突入したのだった。

「いたー！」

千枝が叫ぶ。丸久座の最奥の場、それは部屋全体は円形状で中央にはこれまた円形状のステージ、そのステージの中央には天井まで伸びる一本の棒——ポールがあった。そのステージ中央に、黄色の水着に身を包んだ少女——久慈川りせのシャドウが立っている。

「見ろ、本物も居るぞー！」

さらに陽介が続けて叫ぶ。りせのシャドウが見下すように見ている先。そこに丸久豆腐店の制服と言うべきか、割烹着に身を包み三角巾を被っているりせが項垂れた状態で膝を地に着けている。

「キヤーハハハハハ!! 見られてるうー! 見られてるのね、いま、アタシイイ!!」

「やめてー！」

りせのシャドウはステージ中央に伸びるポールに掴まってくねくねと踊りながらテンション高く叫び、それにりせが弱々しい声で叫ぶ。

「んっもー! ホントは見えて欲しいくせに、ぶんぶんー！」

しかしりせのシャドウはそう、甘えるような声を出す。

「ごおんな感じで、どおう!」

そう言ったりせのシャドウは再びポールに掴まっていやらしく踊り出す。

「もう……やめてえ……」

それに対しりせはただ弱々しく呟く。

「皆、いくぞー!」

「ああー!」

しかし律儀に付き合っている理由もなく真が叫ぶと陽介がいち早く頷いて駆けだす。が、その時天井から太っちょの警察官型シャドウ

——固執のファズが無数に現れてきた。

「げっ、またこいつらかよ?」

「皆、椅子の後ろに隠れるんだ!!」

陽介が嫌そうに叫ぶと命が咄嗟に叫び、その指示に従って全員が椅子の後ろに飛び込む。その直後ファズの集団は銃を真達が立っていた方に向け一気に乱射する。

「お客さまあ? 踊り子には手を触れず、マナーを守ってご覧ください?」

りせのシャドウが自分を抱きしめ、やれやれと呆れた様子でそう言った。

「くそっ!」

椅子の後ろに隠れながら真はくそつと毒づいて右手に精神を集中、ペルソナカードを具現すると握り潰すように砕く。

「来い、イザナギ!!」

「頼む、ジライヤ!!」

「いくわよ、トモエ!!」

「お願い、コノハナサクヤ!!」

「砕け、タケミカズチ!!」

「カモン、オルフェウス!!」

真がイザナギを召喚するのを皮切りに陽介達もペルソナを呼び出し、それぞれのペルソナとシンクロする。

「一気に行くぞ!!!」

そして真が叫び、ペルソナ達はファズの集団へと斬り込んだ。

「もう、やめてえ……」

「ふふ、おつかしー。やめてだつてー」

一方りせはこの極限の状況のせいでそれに気づいていないのかただ弱々しくやめてと繰り返し、それにりせのシャドウはおかしそうに笑う。

「どあっけんじゃないわよ!!」

その直後キレたような怒鳴り声を上げる。

「アンタはあたし！　あたしは、アンタでしようが!!」

「違う……違うってば……」

りせのシャドウの言葉にりせはただ弱々しく違うと呟く。

「まずい……里中さん！　こいつら吹っ飛ばすよ!!　巽君！　真君達に突破口を!!」

「はいっ!!」

「了解ッス!!」

命は今までの経験からこのままではまずいと判断し、千枝と完二向けて叫ぶとオルフェウスの召喚を解除。新たなペルソナを心の海から準備すると拳銃型の召喚器をこめかみに当てる。

「来い、ナタタイシ！　電光石火!!」

「トモエ、疾風斬!!」

命が呼んだペルソナ——ナタタイシが高速で動き回ってファズに体当たりし、さらにトモエが薙刀を振るい真空波を発してファズを吹き飛ばす。

「タケミカズチ、デエツドエンドオツ!!」

さらにタケミカズチが雷の形をした剣を振るい、前方のファズを薙ぎ払う。

「ここは僕と里中さんと巽君に任せて、皆は急いで!!」

「了解っ!!」

命の言葉に真も頷き、真、陽介、雪子、クマはファズの集団を命達に任せステージに向けて走り出す。

「キャハハハ!!　ほら見なさい、もつと見なさいよ！　これがあたし！　これがホントのあたしなのよおお！　ゲーノージンのりせなんかじゃない！　ここにいて、このあたしを見るのよ!!　ベツタバタなキャラ作りして、ヘド飲み込んで作り笑顔なんて、まっぴら!　りせちー?　誰それ!?　そんなヤツ、この世にいない!!　あたしは、あたしよおお！　ほらあ、あたしを見なさいよおお!」

「わ、たし……そんなこと……」

りせのシャドウはポールに掴まって踊りながら不満を吐き出すように叫び続け、それにりせは弱々しく眩く。と、りせのシャドウはいやらしく笑って踊るのを止め、水着に手をやる。

「さーて、お待ちかね。今から脱ぐわよおお！ 丸裸のあたしを、焼きつけなア！」

「やめ、て……やめてええ！」

そう言っただけで水着を脱ぐとするりせのシャドウ。それにりせはついに我慢の限界が来たように叫び、自身のシャドウを睨む。

「あなたなんて……」

「！ だめ、言っちゃダメ！！」

りせが叫ぼうとしている言葉をいち早く察知した千枝がフアズを蹴り飛ばしながら叫ぶ。

「あなたなんて……私じゃない!!!」

しかし一歩遅く、りせは禁断の言葉を吐いてしまった。

「うふふ……ふふ、あはは、オーホホホッ!! きたきたきたあ!!」
りせのシャドウは高笑いをし、みなぎってきたように叫ぶ。そしてりせのシャドウを黒い影が取り囲み始めた。

「これで！ あたしわあ、あたしイイツ!!」

叫び、りせのシャドウを中心に衝撃が走り、りせは吹き飛ばされるとステージから叩き落とされる。

「あぶねえっ!!! ジライヤ!!!」

しかしりせが床に叩きつけられる前に陽介がジライヤに指示を出し、ジライヤは忍者のようなスピードでりせの方に飛び込むと彼女をキヤツチする。

「クマー！ りせちゃんを頼む!!」

「分かったクマー！」

陽介は戻ってきたジライヤの抱えるりせをクマに任せ、さっきまでりせのシャドウが立っていたステージを見る。さっきまでりせのシャドウがいた場所にいる異形は目が痛くなりそうな極彩色の裸体をし、その顔にはアンテナをまるで仮面のようにつけ、ポールに足を絡めて逆さ吊りのような姿勢でゆらゆらと揺れていた。

「我は影、真なる我……さあお待ちかね、モロ見せたくイム。フッフ……特等席のお客さんには……メチャキツツイのを特別サービスよッ！」

「やっぱり色々悩みとかあったんだな……けど、必ず暴走は止めてやる！」

りせのシャドウがゆらゆらと揺れながらそう叫び、その姿を見た陽介が短刀を両手にしながら叫んでペルソナカードを具現。真と雪子もペルソナカードを具現化する。

「あらあ？ ステージの上の手え出そうつての？ 勘違いなお客……更にキツイのがあるかしら!!?」

りせのシャドウがそう叫んだその瞬間、真はイザナギを、陽介はジライヤを、雪子はコノハナサクヤを召喚した。

「アギラオ!!」

「くっ!?!」

コノハナサクヤが炎を放ち、その先制攻撃をりせのシャドウはポールに絡めた足に力を込めて動き、かわす。

「スラッシュ!!」

「パワースラッシュ!!」

「ぐあっ!?!」

しかしそこに相手の移動先を予測していたイザナギとジライヤがそれぞれ刀と手裏剣でりせのシャドウを斬り裂いた。

「このっ!!」

りせのシャドウはイザナギを睨みつける——顔がアンテナになっているのでその表現でいいのかは疑問だが——と、その瞬間イザナギの姿が消え去った。

「なっ!?!」

「チェンジ！ モスマン！ ジオンガ!!」

「ああっ!?!」

真は瞬時にペルソナを変え、モスマン蛾人間の放つ落雷をりせのシャドウはその身に受ける。

「もらった！」

その隙をついた陽介が叫び、ジライヤが飛びかかる。

「もつと見てえ……」

が、その時りせのシャドウが甘えたような声を出すと自分の股間を開き陽介へと見せつけた。

「なっ!？」

シャドウだが人間型、それもりせのシャドウが変化したものであるためか陽介は赤面して怯む。

「隙ありっ！ ジオ!!」

「がああああああっ!!」

直後陽介を落雷が襲った。

「花村君っ!!」

「またまた隙ありいっ!!」

雪子が焦ったように叫ぶ。が、その隙をりせのシャドウは見逃さなかった。

「マハブフツ!!」

「っ、きやあああああつ!!」

「チェンジが間に合わな……ぐあああああつ!!」

雪子と真を氷の弾丸の雨が襲い、弱点である氷の攻撃に二人は怯む。

「キャハハハ、どう、楽しんでる？ ホントのあたしは、まだまだ

こっから……壊れちゃったりしないよねツ!!」

「くっ……」

りせのシャドウが楽しそうに揺れながらそう言い、真は刀を一閃しその勢いで身体についてた氷の欠片を払いのける。

「タケミカズチ、デッドエンド!!」

「な、あぐうっ!!」

その時タケミカズチがその場に乱入、巨大な拳でりせのシャドウを殴り飛ばす。

「雪子、椎宮君、あと花村！ 大丈夫!？」

「あいつらは全員片づけたツス!!」

「こっからは僕達も参戦するよ」

ファズの集団を相手取っていた千枝、完二、命が合流。ペルソナ達も陣形を取った。

「いくぞ、天城！」

「うんっ！」

陽介が雪子に合図を出し、雪子も頷くとジライヤとコノハナサクヤが構えを取り、コノハナサクヤは両手を掲げそこに炎を集中する。

「アギラオ!!」

そして雪子が合図を出し、コノハナサクヤは炎を放つ。

「うふふ、当たたら——」

「マハガル!!」

「——なっ!?!」

その炎を揺れる勢いを利用してかわそうとするりせのシャドウだったが、その逃げ道を塞ぐように無数の竜巻が現れてりせのシャドウの動きを封じる。

「あああああああつ!!!」

そしてコノハナサクヤの放った炎がりせのシャドウに直撃、りせのシャドウは焼かれる痛みと悲鳴を上げた。

「そこよー！ トモエ、黒点撃!!」

そこにトモエが突進、一点に威力を集中した蹴りを叩き込む。

「がはっ……」

りせのシャドウは苦しげに息を吐き、蹴りの勢いでポールから引き剥がされステージ外に落っこちる。

「まだだ！ タケミカズチ、パスタアタック!!」

しかしステージ後ろに回り込んだタケミカズチがアツパーサインが気味に追撃を決め、りせのシャドウの身体が再びステージへと打ち上げられる。

「いくよ、真君！ 来い、オルトロス!!」

「了解！ 来い、イザナギ!!」

命は真に合図を送って双頭の犬オルトロスを呼び出し、真はイザナギを呼び出すとまるで騎馬兵のようにオルトロスに跨り、オルトロスは一気にりせのシャドウ目掛けて突進する。真はそれを見て四本の赤い剣が描

かかっているカードを構えた。

「スキルカード、発動！」

真が叫ぶと同時にカードに書かれている剣が光を放ち始め、その光がイザナギを覆っていく。そしてオルトロスがりせのシャドウ目掛けて飛びかかったその瞬間、イザナギの刀とオルトロスの牙に光が宿った。

「パワースラッシュ!!!」

「剛殺斬!!!」

「あああああああつ!!!」

イザナギの刀が斬り裂き、オルトロスの牙が噛み千切る。その二重攻撃にりせのシャドウは悲鳴を上げてポール横へと落っこちた。

「やったか!?!」

陽介が叫ぶ。が、りせのシャドウはまだ戦闘不能には至らないのか再びポールの上にぶら下がる。

「フフフフ……そおーれっ!!!」

りせのシャドウは怪しく笑うと自分から、緑色の、上から見たら正方形になる緑色の光の線を放ち、真達はその光に当たると緑色の正方形の光が枠になって一瞬真達を囲み、さらに上から光が降りてくる。まるで真達をスキャンしたかのような動きだ。

「おさわりは禁止だから。キャハハッ！」

「……一斉攻撃だ!!!」

『了解!!!』

未知の攻撃に対し、真達はまた何かされる前に攻撃を決意。一斉攻撃を指示し、それに陽介達も頷く。

「くらいやがれ、ガルーラ!!」

「受けやがれ、ジオンガ!!」

「キャハハハハ!!!」

ジライヤとタケミカズチがそれぞれ竜巻と落雷を一直線に繰り出して攻撃をしかけるが、りせのシャドウはそれをポールを支点に踊るようにかわす。

「なっ!?!」

「だったら直接！ 暴れまくり!!」

「援護して、マハラギ!!」

「おおくとつとおっ♪」

男子二人が絶句し、千枝は魔法攻撃がダメなら直接ぶん殴るとでもいうようにトモエに接近戦を指示、光を纏った薙刀で連続して斬りつけるがその全ての斬撃、さらには援護に放たれた火球さえもりせのシャドウは全てかわした。

「イザナギ！ スラツシュ!!」

「オルフェウス！ 突撃!!」

「見え見えくっ♪」

その隙に背後に回り込んでいたイザナギとオルフェウスが斬りかかり殴り掛かる。が、死角から放たれたはずの攻撃をもりせのシャドウはまるで後ろに目がついているかのようにかわしてしまった。

「アンタたちのことは全てお見通し……キャハハツ！」

「なんなの、アイツ!? 全然、こっちのが当たらないじゃん……」

「くそつ、攻撃が全部読まれてるみたいだ……」

千枝が悔しそうに叫び、陽介もそう呟く。

「ク、クマ、なんの役にも立たんクマ……」

その後ろでクマが何の役にも立たない自分に頭を抱える。と、りせのシャドウは再びさっきの光を放ってくる。

「くそ、またか!? なんなんだこりゃ!?!」

「この力って……」

陽介が叫び、クマが呟く。

「多分、こっちを探ってるクマ!……ちよつと、まずいクマ!!」

「そうか、このシャドウ！ ユノと同じ解析タイプか!?!」

クマが叫ぶと命も合点がいったように叫ぶ。

「はーい、解析完了オー」

直後、命の予測を肯定する意味の言葉をりせのシャドウは放った。そしてりせのシャドウはポールから降りてステージに足をつける。

「反撃、いっくよー!!」

そう言ってポールに手をやった瞬間、ポールが外れてりせのシャド

ウはまるで銃のようにポールの先端を真達に向ける。

「発射ー!!!」

「や、やめるクマ!!」

クマが叫ぶがりせのシャドウは構うことなくポールの先端から火、氷、風、雷のエネルギー弾を放つ。

『ぐああああああっ!!!』

それぞれイザナギとタケミカズチには風のエネルギー、オルフェウスとジライヤには雷のエネルギー、トモエには火のエネルギー、コノハナサクヤには氷のエネルギーと、各々のペルソナの弱点が直撃。ペルソナとシンクロをしている真達にもダメージが通り苦痛の悲鳴を上げる結果になる。

「キヤハハハハ！ バッチリダメージー!!!」

「く、くそつ……」

「このままじゃやられる……」

りせのシャドウが笑いながら言う。弱点攻撃の直撃を受けた千枝と雪子はお互いを支えて立っているのが精一杯、完二も苦しうに胸を押さえて膝をつき、陽介は大の字になって倒れている。息を荒げている真が唸り声を上げると、基礎体力の違いかまだ高校生達と比べて余裕のある命が眩き、直後一計を思いついたのか真達を見る。

「皆！ 一塊になるんだ!!」

「そうか！ あの攻撃は俺達の弱点を狙ってくる！ 一塊になれば、うまくやればそれぞれの耐性を狙って防衛できるかもしれない!!」

命の言葉に陽介がその指示の意味をそう解釈、力を振り絞って起き上がると彼らは一塊に集まり、ペルソナ達も円陣を組む。

「もういっちょー!!!」

直後りせのシャドウがポールからエネルギーを発射。

「くるぞー！ 自分のペルソナに耐性があるやつを狙って、仲間を守るんだ!!」

陽介が合図を送り、全員が宙を走るエネルギー弾をじっと見切るように見る。

「花村君、はずれ」

と、命が突然そう言う。

「え？」

「こうでもしないと……皆を守り切れないんだ」

「先輩、何を……」

命の言葉に真が呟く。

「死ぬはダメだ……皆は僕が守る!! ゆけ、オルフェウス!!!」

命が叫び、オルフェウスは躊躇うことなく空中へと飛び上ると合計六発分のエネルギー弾を……全てその身へと受けた。

「ぐあああああああつ!!!」

シンクロしている、いや、していなくとももう一人の自分であるペルソナに大ダメージが通った命は悲鳴を上げる。

「が、はっ……」

そしてエネルギーの弾雨が止んだ瞬間、命が倒れ込み同時にオルフェウスが消える。

「せ、先輩!!!」

「キャツハハハハ!! かつこ悪いのー!!」

真が叫び、りせのシャドウが嘲笑う。それに真は怒りのままにりせのシャドウを睨みつけるが、その時には既にりせのシャドウは攻撃態勢へと移っていた。

「そーれえっ!」

三度放たれるエネルギー弾、今度こそイザナギ達を撃ち抜いたその衝撃に真達も吹っ飛ばされる。

「そんじゃーそろそろー。あんたら、消しちゃおっかなー」

りせのシャドウが無邪気にそう言うと同時に、現在りせのシャドウが武器にしているポールと同じものが四本、空中から落っこちてくる。

「ウソだろ……こんな……」

「か、勝てないって、こと?」

「わ、私達……し、死んじやうの?……」

「ヤベエ……」

攻撃が通じず、相手の攻撃は確実にこちらの急所を狙ってくる。その状況に陽介達の心に諦めの感情が芽生えた。

「ダメクマ!! し、死ぬとか絶対ダメクマよ!!」

「クマ……久慈川さんを連れて逃げるんだ……」

「み、みんなを見捨てて……クマだけ?……」

リーダーである真もクマにりせを連れて逃げるように言う。それにクマはそう眩き、

「そんな事出来ないクマ!!」

首を横に振って叫ぶ。

「クマは、また独りぼっちになるの?……いや、いやクマよ……」

クマは頭を抱えてそう眩く。と、その時りせのシャドウが再びあの緑色の光を放ってきた。

「チイツ……またやりやがる気だ!……」

「はい、またまた解析、完了オ!」

りせのシャドウは無邪気にそう言っつき落ちてきた四本を合わせて五本のポールを真達に向ける。

「さよなら……永遠にね!!」

りせのシャドウがそう言い、エネルギー弾を発射しようとした瞬間、クマがりせのシャドウの前に立つ。

「か、考えるより先に、か、身体が……な、なに前に出たんだ、わしやあ!?!」

クマはその行動に自分でも驚いており「ぬおおうっ!」と叫ぶ。

「と、トンデモない事をしでかしそうでクマっている自分っ!! こ、こうなったら、やってやるクマ!」

最初こそ驚いていたがクマは覚悟を決めた様子で叫ぶ。

「クマの生き様……じっくり見とクマーッ!!」

クマが吼えた瞬間、クマの身体が金色の光に包まれる。

「……!? なにこの反応、すごい高エネルギー……」

りせのシャドウは己の解析能力でクマのエネルギーを感知。

「ぬおおおおおおっ!!」

その直後、クマがりせのシャドウ目掛けて突進する。

「く、来るなああああああああっ!!」

咄嗟にりせのシャドウが五本のポールの先端をクマに向ける。

「やめろおおおっ!!」

陽介と完二が叫び、雪子と千枝が目を瞑り逸らす。直後ポールの先端から放たれたエネルギーがクマに直撃。

「クマーッ!!」

真が必死に叫ぶ。が、その直後、クマはそのエネルギーをかき分け、少しずつ前に進んでいくのを見た。

「ぬ、ぬおおおおおおうっ……とりやーっ!!!」

クマはついにエネルギー弾を放っているポールの先端へと飛びつき、その砲口を抑え込んだ。エネルギーの出っていく先がなくなり、ポールの裂け目から光が差していく。

「ぼ、暴発する!?!」

りせのシャドウが叫ぶがもう遅く、ポールはりせのシャドウとクマを巻き込み暴発の大爆発を起こした。

『クマーッ!!』

真達のクマを呼ぶ声が響くと同時に、彼らの視界は光に包まれた。

閃光が消え、真達の視力が回復すると紙のようにペラペラになり煤けたクマの姿が目映った。ステージの向こうには戦闘不能に陥ったのか元の姿に戻っているりせのシャドウの姿もあるが、今は気にしていられない。

「クマ!! バカが……無茶しやがって……」

完二が叫び、次に眩く。

「クマ……みんなの役に立てたクマか?……」

「立ったどころじゃねーよ……命の恩人だよ!」

「うん……かつこよすぎ」

「逆ナンして……いいよ」

クマの言葉に陽介、千枝、雪子が涙声になりながら次々にクマの功績を称える。

「そか……よかった……独りぼっち、いやだから……」

クマはそう眩き、ペラペラの姿で立ち上がる。

「な……なんじやこりやああ!!」

直後、自分の状態に悲鳴を上げ、自慢の毛並みがボロボロになっていることに嘆き始める。

「……とりあえず、死にそうではないな」

「ああ。むしろ俺らが死にそうだし……」

その様子に真が呟き、陽介はそう呟くと彼らはりせのシャドウの方へと走る。そこにはいつの間にか目を覚ましていたりせの姿があった。

「久慈川さん!」

「あ、この前豆腐を買いに来た……」

りせのシャドウを見下ろしていたりせは、真の呼び声で振り返り彼の事をそう呼ぶ。

「ごめん……なさい……私のせいで……」

そして彼らがなんでここに来たのかなんとなく分かったのか頭を下げて謝る。

「もう無理しなくていい」

「……え?……うん。いつ以来だろ……そんな事言ってもらったの……」

真の言葉にりせは一瞬驚いたように声を漏らした後うんと頷き、何か安心したように微笑む。それから彼女は再び自分のシャドウに向き直った。

「起きて……」

りせが呼ぶと、彼女のシャドウも起き上がる。りせは、その瞳を真つ直ぐに見据えた。

「ごめん……今まで、ツラかったね。私の一部なのに、ずっと私に否定されて……」

まず最初に彼女は自分のシャドウに謝る。

「私……どの顔が“本当の自分”か、考えてた。けど……それは違うね。そんな風を探してちゃ……」

りせはそう語る。

「“本当の自分”なんて……どこにもない」

「本当の自分なんて……ない?……」

彼女の言葉に後ろの方でクマが呆然とした様子で呟く。

「あなたも……私も……テレビの中の『りせちゃん』だって……私から生まれた」

りせはそう言って、再び自分のシャドウを真っ直ぐに見る。

「全部……『私』」

その言葉にりせのシャドウも頷くとその姿が光に包まれる。直後、りせの目の前にシャドウとは少し違う異形——ペルソナが姿を現した。白いドレスを身に纏い、顔はアンテナになっている。さらに両手にはヘッドマウント式のディスプレイを持っている。それをりせは黙って見上げていた。

「……ヒミコ」

彼女がそう呼ぶと同時、ヒミコはタロットカードとなつてりせの前にゆつくりと降下。そのカードにはローマ数字の「VI」、恋愛を意味する数字が書かれていた。そのカードはりせの目の前まで落ちると光の粒子となつて彼女を包み込んだ。その光が消えた瞬間、りせは膝を曲げ倒れそうになる。

「久慈川さん！」

咄嗟に真が彼女を支える。その後ろで陽介が「ずりい！」と叫ぶ。

「……気を失っているようだ」

真が冷静に言い、千枝が「無理ないよ」と言うと雪子も「私達もふらふらだもん」と呟く。それに完二も「確かにな」と賛成した。

「とりあえず、一旦外に出ようぜ。りせちゃんもそうだけど、命さんだってやべえ。俺達を庇って大ダメージを受けたんだ……」

「そうだね……」

陽介の言葉に千枝が賛成し、振り返る。と彼女はぎよつとしたリアクションを見せ、その姿に雪子が「どうしたの、千枝？」と呼びかける。

「本当の自分なんて……いない？……」

そこにはクマが呆然としたような声でそう呟いていた。

「お、おい、クマ……」

いつもと違う様子に完二さえもどこか引いたような声になつてい

た。

「“本当”？ “自分”？」

その時、クマとよく似た、しかし違う声が聞こえてくる。

「ククク……実に愚かだ……」

その瞬間、クマの背後からまるで浮き出るように、クマによく似た、しかし目が凶暴そうな目つきになっている存在が現れる。

「なんだよ、アイツ!?!……」

思わず身構えた陽介が呟く。

「ま、まさか…… “もう一人のクマくん”？ クマくんの、内面って事!?!」

と、今までの経験からか千枝がそう叫ぶ。

(……う……なんだ、この違和感は……)

その後ろで、リセを支えている真はもう一人のクマ(仮)を見ながら眉をひそめていた。

「な、何がどーしたクマ!?!」

クマも様子がおかしい事に気づいたのか振り返り、

「お、おわあ!?!」

そこにいた存在に驚きの声を上げる。

「真実など、得る事は不可能だ……真実は常に、霧に隠されている。手を伸ばし、何かを掴んでも、それが真実だと確かめる術は決してない……なら、真実を求める事に何の意味がある？ 目を閉じ、己を騙し、楽に生きてゆく……その方がずっと賢いじゃないか」

「な……何言ってるクマか！ お前の言う事、ぜんぜん分からんクマ！ クマがあんまり賢くないからって、わざと難しい事を言ってるクマね！」

もう一人のクマに対しクマはそう叫び、「失礼しちゃうクマ！ クマはこれでも一生懸命考えてるの！」と続ける。と、もう一人のクマはそれを嘲笑するようにふんと鼻を鳴らした。

「それが無駄だと言っているのさ……お前は “初めから” カラッポなんだからね」

「!」

「お前は心の底では気づいてる……でも認められず、別の自分を作ろうとしているだけさ……失われた記憶など、お前には初めからない。何かを忘れているとすれば、それは『その事』自体に過ぎない」
「そ……そんなの……ウソクマ……」

もう一人のクマの言葉にクマは力なくそう呟く。

「なら、言ってやろうか。お前の正体は、どうせただの——」
「やめろって言ってるクマー!!」

もう一人のクマを黙らせようとクマは体当たりを仕掛けるが、逆に弾き飛ばされ地面に倒れてしまう。

「クマさん!!」

「お前達も同じだ……真実など探すから、辛い目に遭う……そもそも、これだけの深い霧に包まれた世界……正体すら分からないものを、この中から、どうやって見つけるつもりだ?」

「真実は必ずある。俺達は、それを見つけてみせる」

もう一人のクマの嘲るような言葉に対し真はそう言い切る。ともう一人のクマはくつくつと笑った。

「真実が欲しいなら、簡単な事だ。お前達が『真実』と思えばいいだけさ……」

もう一人のクマはそう言い、「では、一つ真実を教えてやろう……」と続ける。

「お前達は、ここで死ぬ。知ろうとしたが故に、何も知り得ぬままな……」

そう呟いた瞬間、もう一人のクマが、まるで今までシャドウを暴走させた時のように黒い影を取り囲み始める。

「くそっ! クマ抜きでこんなのとどうやって戦えば……」

攻撃を仕掛けてくると分かっているが今まで支援してくれたクマがいない。その状況に陽介が悪態をつく。

「大丈夫、構えて」

「久慈川さん!?!」

そこにりせの声が聞こえ、真は自分が支えているりせを見下ろす。彼女は既に目覚めていた。

「ちよ……まさか、その体で一緒に戦う気？」

「いや、待て。そういうえば先輩はさつき、久慈川さんのシャドウを解析タイプだと……」

千枝が慌てたように叫ぶと真がそう呟く。

「うん。私は多分、倒れてるその子の代わりが出来るから……今度は、私が助けてあげる！」

りせがそう叫んだ瞬間、彼女の掌に現れたペルソナカードが砕け散り、彼女の背後に召喚されたペルソナ——ヒミコが両手に持つヘッドマウント式ディスプレイがりせの頭部に装着された。

「よし……だが、この身体じゃ……いや、全力で戦うしか……」

支援のめどは立ったが自分達の身体はボロボロ。しかし弱音を吐いてはいられないと真は気合を入れ直す。

「心配、いらナイよ」

そこに、さらにもう一人の青年の声が聞こえた。

「先輩……」

「死にかけて、コツを思い出したよ……僕の力のね」

声をかけた青年——命に真は呟き、命はそう言うと言と召喚器である銃を構える。額が切れたのか血が流れており、左目が赤く染まっているようにさえ見える。そんな中、命は笑っていた。

「見せてやるよ、ワイルドの奥義……ミックススライド!!」

叫び、引き金を引くと共にガラスの割れたような音が響く。さらにその衝撃で命の頭が吹っ飛んだかのように大きく揺れた。そして彼は力を込めるように前かがみになって目の前のものを抱きしめるように両腕を前にやる。

「来い、オルフェウス！ アプサラス！」

そして力を解放するかのようにな腕を広げて身体を逸らし、同時に彼の頭上に二体のペルソナ——オルフェウスとアプサラスが姿を現す。

「ペ、ペルソナを二体同時召喚!？」

「カデンツァ!!!」

真が驚愕に声を上げると命は叫び、オルフェウスとアプサラスはそ

れぞれオルフェウスは豎琴を鳴らし、アプサラスは舞いを舞う。と、それが真達に癒しの力を与え、真達の傷が一瞬で半分以上癒されていく。

「な、すげえ回復力……」

「しかもなんか、身体が軽い！」

陽介があつという間に癒えていく身体の傷、それほどの回復力を持つさっきのスキルに驚きを覚え、千枝はさらに身体が軽くなった事に感嘆の声を出す。

「これで戦えるよね、皆?！」

「はいー！」

命の不敵に笑いながらの言葉に真も頷いて返す。と、同時にもう一人のクマを取り囲んでいた黒い影が膨張し、爆発する。

「我は影……真なる我……お前達の好きな『真実』を与えよう……ここで死ぬという、逃れ得ぬ定めをな!!」

「こんな不気味なのが……あのトボけたクマくんの中に?」

「クマの奴……見かけよりずっと悩んでたみたいだな……俺達で救ってやろうぜー！」

「なんなんだろ、この感じ……あいつ、何かの強い干渉を受けてる?……」

「愚かしい隣人ども! さあ、末期は潔くするものだ!」

まるで怪獣のように巨大化し、巨大な穴から上半身のみを出した格好で、不気味に化け物のような目を爛々と光らせている姿のクマのシャドウに千枝が眩き、陽介が叫び、ペルソナによる解析支援をしているりせがそう違和感を巡らせる。

「皆、いくぞー！」

真の叫び、それが開戦の合図となる。

「いくぜ、ジライヤ! ガルーラ!!」

「コノハナサクヤ! アギラオ!!」

「トモエ、ブフ!!」

「オニ、デッドエンド!!」

一気にジライヤ、コノハナサクヤ、トモエが竜巻、火球、氷弾で攻撃を仕掛け、そこに鬼が手に持っている大剣で一撃を叩き込む。

「タケミカズチ!!!」

そして命と完二が同名のペルソナを呼び出す。

「くらえ、僕と異君の連携攻撃!!!」

「一撃必殺だゴラア!!!」

命が叫び、完二がドスの効いた声で怒鳴ると同時に命のタケミカズチが連続斬りを叩き込み、完二のタケミカズチが一撃重い斬撃をくらわせた後タイミングを合わせて雷撃でシメる。

「どうだ!! 終わっちまったんじゃねーの?!」

陽介が自信満々にそう叫び、この猛攻で発生した煙目掛けて叫ぶと、その瞬間煙が巨大な手で払いのけられた。

「この程度か?」

そして煙を払いのけた存在——クマのシャドウは傷一つない姿を彼らに見せた。

「うげっ、ウソツ?!」

「ヒートウェイブ」

陽介が驚愕の悲鳴を上げるとクマのシャドウは巨大な右手を掲げ、地面に叩きつける。

「飛べっ!!!」

咄嗟に真が指示を出して全員ジャンプ。その直後地響きと衝撃波が地面を襲った。

「身体が軽い、テメエの攻撃なんざ当たる気がしねえぞおらあつ!!」

そのまま完二がジャンプの勢いでクマのシャドウの方まで飛んでいき、持っている鈍器を叩きつける。が、クマのシャドウは怯む様子も見せずに巨大な目で完二を睨みつける。

「くそっ!」

「コノハナサクヤ! マハラギオン!!」

「ジライヤ! 完二の離脱を援護しろ! マハガル!!」

完二が唸り声を上げると雪子と陽介がペルソナに指示、コノハナサクヤが火球を、ジライヤで風の刃を連射してクマのシャドウの気を引

き、その隙に完二はクマのシャドウを足場にして大ジャンプ、陽介達の隣へと戻る。

「あざっすー！」

完二のお礼に陽介は「気にするな」と返し、完二はクマのシャドウを睨みつける。

「あいつ、とてつもなくかてえッス」

「そのようだな。俺達がペルソナと一緒に攻撃するよりもペルソナとシンクロして、ペルソナでの攻撃に集中した方がよさそうだ」

完二の言葉に真も頷き、その作戦に彼らも了解と頷く。

「相談は終わったか？……マハラクンダ！」

クマのシャドウは咆哮と共に不思議な光を放ち、その光を浴びたペルソナ達から守りの力が消えていく。

「まずい……」

「なあに、防御力を下げられても当たらなければいいだけの話だよ」

防御力を下げられたことに真がまずいと呟くと命はそう言ってペルソナの召喚準備をする。

「それより攻め込むよ！ クー・フリーン！ マハタルカジャ！！」

「！ 了解！ イザナギ、ラクンダ！！」

命が呼び出したクランの猛犬が雄叫びを上げ仲間達を鼓舞、真の呼び出したイザナギが光を放ちクマのシャドウの防御力を下げさせる。

「ジライヤ、ガルーラ！！」

「コノハナサクヤ、アギラオ！！」

まずジライヤとコノハナサクヤが竜巻と炎で攻撃を仕掛け、その威力のある連続攻撃にクマのシャドウは一瞬怯む。

「そこだ！ トモエ、黒点撃！！」

「ぐふっ！？」

その一瞬の隙を突いて突進したトモエがその勢いのまま一点に威力を集中した蹴りを叩き込んだ。

「まだ終わらねえぜー！」

しかしさらにタケミカズチが拳を振りかぶる。

「デッドエンド！！」

「がはっ!!」

真正面からぶん殴り、クマのシャドウの顔面が後ろへと吹っ飛ぶ。と、クマのシャドウは否応なく見せられた空中にクー・フリーンが槍を構えている光景を見てしまう。

「突き穿て、クー・フリーン!! ミリオンシユート!!!」

「ぐあああああっ!!!」

命が叫びクー・フリーンが投げ放った槍が突如炸裂したかのように分裂、四本の光の矢となってクマのシャドウを貫く。その後光の矢はクー・フリーンの手元に戻り槍へと姿を変える。クマのシャドウは貫かれた痛みと悲鳴を上げるが、再びふんと鼻を鳴らす。

「無駄な事はやめろ。抗つても、何も見えはしない……」

そう言つてクマのシャドウは穴の中に潜り込む。

「ヤロウ! 逃げる気か!」

完二が腕まくりしながら声を上げる。が、その直後クマのシャドウは再び現れた。しかし左腕の上に掲げ、その左手の上に何か凄まじいエネルギーが球体状になっている。

「え、何?……やな予感がする……」

後ろで解析しているりせが呟く。

「一気に叩くよ! クー・フリーン! もっかいミリオンシユート!!」

突き穿て!!!」

「イザナギ! ジオ!!」

「ジライヤ! ガルーラ!!」

「コノハナサクヤ! アギラオ!!」

「トモエ、ブフ!!」

「タケミカズチ! ジオンガ!!」

りせが呟くのを聞いた命は一斉攻撃を指示、クー・フリーンの投げた槍が再び四本の光の矢に炸裂してクマのシャドウを貫き、それを援護するように火、氷、風、雷がクマのシャドウを撃つ。と、クマのシャドウの左手にあるエネルギーがさらに膨張した。

「この感じ……攻撃が来るよ、防御して!」

「全員! 防御だ!!」

りせが叫び、真が防御の指示を叫ぶと全員のペルソナが主を守るように立って防御の構えを取り、真達もそれぞれ踏ん張る構えを取る。

「ぬうううううんっ!!」

『ぐうううううんっ!!』

その直後クマのシャドウが左腕を勢いよく振るってそのエネルギーを真達に叩きつける。その威力にペルソナや真達は押されるがどうにかダメージなく乗り切った。

「よし、一斉攻撃だ!!」

「いくよ、雪子!」

「うんっ!」

真が叫び、千枝が合図をすると雪子も領いてコノハナサクヤを見上げる。それと同時にトモエが飛び上がった。

「コノハナサクヤ! トモエにアギラオ!!」

雪子は千枝のペルソナに攻撃を指示し、コノハナサクヤは火炎放射をしてトモエを炎で包み込む。

「あつついつ、けど、我慢っ!!」

トモエとシンクロしている千枝にもその熱が伝わるが千枝はそれを我慢し、今トモエを包んでいる炎よりも燃え盛る気合を込めた目でクマのシャドウを睨みつける。

「燃えよトモエッ!! ドラゴン・スピン・キック!!!」

技名の締めには千枝は「ホアチョーッ!!」と叫び、燃え盛るトモエはドリルのように回転しその勢いを込めた蹴りがクマのシャドウへと叩きつけられる。

「いくよ、異君!——」

「ウッス!——」

「二——タケミカズチ!!」

次に命と完二がタケミカズチを呼び、二体のタケミカズチはそれぞれの武器を掲げる。その時天空から雷鳴が轟き、互いの武器に雷が落ちると雷の大剣が完成する。

「くっらえ、ふつのみたま布都御魂!!!」

命の技名叫びを合図に二体のタケミカズチが剣を振り下ろし、雷鳴

が轟いて雷光がクマのシャドウの身体を走る。

「椎宮、合わせてくれ!!」

「分かった!」

そして最後に陽介が真に合わせてくれと頼み、真も頷くと三本の赤い剣が描かれているカードを構えた。

「スキルカード、発動!」

真が叫ぶと同時にカードに書かれている剣が光を放ち始め、その光がイザナギを覆っていく。その瞬間ジライヤが飛び上がり、印を組む。そして陽介が炎の蹴りと雷の剣で黒焦げになり、目も形を保てなくなったかのようにぐにやぐにやと歪んでいるクマのシャドウを睨みつける。

「いい加減、往生しやがれっ!!!」

陽介が叫ぶと同時にジライヤが印を組み終え、イザナギは自分の刀を目の前に構えるとまるで扇風機の羽のように刀を回転させる。

「マハガルーラッ!!」

「ガルーラ!!」

陽介が叫ぶと共にジライヤがマハガル以上の勢いを持つ無数の竜巻を放ち、イザナギの回転させている刀から竜巻が放たれそれらが竜巻の矢となってクマのシャドウを貫く。

「グアアアアアアアアアッ!!!」

それがトドメとなり、クマのシャドウは断末魔の悲鳴を上げその全身がまるで焦げていくかのように黒く染まりあがったと思うと影が霧散し、消滅していった。

その後気が付いたのか、クマも立ち上がって真達の前へと移動する。しかし相変わらずペラペラゆらゆらと頼りなさげだ。

「あれは、クマさんの一面なの?.....」

「けど、まさかクマくんにも押さえ込んでた心があつたなんてね」

雪子と千枝が呟き、クマは振り返るとその前に立つ、元の姿へと戻ったクマのシャドウへと向き直る。

「クマ.....クマは、自分が何者か分からないクマ.....」

「.....」

クマの言葉をクマのシャドウは黙って聞く。

「ひよつとしたら、答え無いのかも……なんて、確かに時々、そんな気もしたクマ……だけどクマは、今ココにいるクマよ……クマは、ココで生きてるクマよ……」

「きつと見つかる」

クマの言葉に真がそう言い、それにクマは驚いたように振り返ると「センセイ」と言う。

「ホントに、見つかるクマ?」

「ああ。俺達もいるからな」

「しゃーねーな、一緒に探してやるよ」

クマの言葉に真が頷くと陽介が口ではしようがないという様子だが真面目に笑いながら頷く。それに皆が頷き、クマは「みんなあー」と嬉しそうな声で言う。「クマは果報者クマ!」と感極まったように話すと、その時クマのシャドウの姿が光に包まれた。

「これって……」

「ペルソナ?……」

見覚えのある、というかついさつきりせが自分のシャドウを受け入れた時にも見た光に千枝と陽介が呟く。それにクマが自分のシャドウへと近づいていった直後、クマの前にシャドウとは少し違う異形——ペルソナが姿を現した。ずんぐりとした球体状の身体に細い手足を伸ばし、その両手でミサイルを掲げている。それをクマは黙って見上げていた。

「……キントキドウジ」

クマがそう呼ぶと同時、キントキドウジはタロットカードとなってクマの前にゆっくりと降下。そのカードにはローマ数字の「XVII」、星を意味する数字が書かれていた。そのカードはクマの目の前まで落ちると光の粒子となってクマを包み込んだ。

「これ、クマの……ペルソナ?」

「それ……すごい力、感じるよ……よかったね、クマ……」

クマが驚いたように呟くとりせは相手を元気づけるように微笑みながらそう言い、その言葉が終わった瞬間彼女の身体が崩れ落ち、再

び咄嗟に真が彼女を支える。

「わ、大丈夫!?」

「そうだよ、いきなりだもん……ごめんね、無理させて……すごく疲れてるのに……」

千枝が声をかけ、雪子が慌てたように彼女に謝る。

「とにかく、早く外に出よう!」

「うん!」

陽介が叫び、命が領いてカエレルを取り出して掲げて、「転移!」と叫ぶ。それと共に彼らは光に包まれ、この場から消えていった。

「りせちゃん、大丈夫? もうちよつとで外だからね?」

そして場所は入り口広場へと移り、雪子は現在命に背負われているりせに向けて声をかける。それにりせはこくと頷きながら、だが私よりもクマをと、クマを心配する言葉を投げかける。確かにクマは現在ペラペラ、クマの身体の構造は未だによく分かってないものの重傷と見て間違いないと思える。

「……お前、大丈夫か? オレら、戻んなきゃなんねえけど……」

「しばらく一人にして欲しいクマ」

完二の言葉にクマはただそう言う。それに陽介が慌てたように「おい!」と叫ぶとクマは自分の自慢である毛並みがかサカサになった事や鼻が利かず探索で迷惑をかけている事を謝罪する。と、クマは突然寝っ転がって腹筋を始めた。

「毛が生え変わるまで、トレーニングにハゲしく励むクマ! 誰も、オラを止める事は出来ね! あ、ソーレ!」

「きゅ、急にどしたんだよ……」

「話し! かけないで! 欲しい! クマツ!! あ、ソーレ! ふんっ! ふんっ!」

豹変したクマに陽介が問いかけるが、クマはそう言っ腹筋に励むのみ。

「そつとしいてやろうぜ」

完二が何かを悟ったように「男には一人で越えなきゃならない時が

あるもんだ」と話す。それに千枝は「そんなハイブローな話？」とツツコミを入れた。

「じゃあ、りせちゃんを僕と天城さんと里中さんで送っていいこう」

「そうっすね。今はゆっくり休ませましょう……話はその後でいい」

命が言い、陽介も今は休ませようと言う。そして千枝が「頑張つてね」とエールを送り、彼らはテレビから出ていこうと歩きだし、真が一番最後に歩き出す。

「前にも、言っただけどっ！」

と、クマが腹筋しながら真に話しかける。

「センセイのっ、力にはっ、どこかつ、特別なものをつ、感じるクマよっ！」

腹筋しながらのため変に切れながらの口調だ。

「きつとっ、クマにもっ、クマだけのっ、役目があるっ……センセイとっ、いるとっ、そんな気がするっ、クマ！ だからっ、それっ、探すためにっ、強くなるクマ！ クマーッ！」

「ああ。頑張れ」

クマの言葉に真は、その燃える瞳を真っ直ぐに見返しながらエールを送る。その時彼はクマとの絆が深まった感覚を覚えた。そして腹筋し続けるクマにもう一度微笑みかけてから、真はテレビを出ていった。

第三十一話 The community in
June

老舗旅館天城屋。その若女将である少女——天城雪子は朝の手伝いの合間を使いある一室——大きな個室だ——へとやってきていた。

「おはようございます、命さん」

ふすまを開けながら挨拶をする雪子。が、その直後彼女は眉を吊り上げた。

「つて、命さん!!」

「あ、おはよう。天城さん」

雪子の怒号を意に介さず挨拶する青年——命。彼は平然とした表情で木刀を使い素振りに興じていた。ちなみに服は旅館に備え付けられている浴衣で、木刀を振るう格好だけを見るとまるでどこかの浪人だ。

「もう！ ペルソナで回復したとはいえそれは外傷だけ！ それに命さんは私達より酷い傷だったんですからまだ安静にしてないと！」

雪子の怒号が命の泊まっている部屋に響き渡る。つい昨日、命達自称特別捜査隊はりせのシャドウに壊滅の危機に追い込まれ、さらにクマのシャドウとの激闘もあつて全員ボロボロ。雪子や真、陽介達回復能力を持つペルソナ使いが騒ぎにならないようどうにか外傷のみは回復させたとはいえ逆に言えば外傷のみの回復で精一杯。現にその雪子も普段なら平気な量の食膳を運ぼうとするだけで足元がふらつき、「朝から少し調子が悪い」と中居さん達を誤魔化しつつ手伝いをしている現状、りせのシャドウの攻撃で一番酷い怪我を負ったはずの命は特に辛いはずだ。しかし彼はそんな様子を見せていなかった。

「じつとしてたら勘が鈍っちゃうよ」

そう言って彼は一枚の白紙のレポート用紙を取り出すとそれをひよいっと投げ上げ、ひらひらと落ちてくるそれをじつと見、一瞬でシユパアンと音を響かせて木刀を突き出す。しかもそれは一回のみ

に見えて既に数回の突きを放っており、刃のない木刀を使っているにも関わらず綺麗な穴をいくつも紙に空けていた。

「うくん。やつぱちよつと調子が悪いな……」

「そうは見えないんですけど……」

命の、納得いつてないように首を傾げながらの言葉に雪子は呆れたような半目を見せて眩き、直後はつとしたような表情を見せるとずかずかと命の部屋に入る。

「だったら休んでくださいっ！ 今すぐっ！！ 椎宮君にも 先輩はすぐ無茶するから見張ってて”っ”って言われたんですから！」

「真君余計な事を……」

目を吊り上げて雪子は怒鳴り、命は舌打ちを叩きそうな表情でそう眩く。その間に雪子は幼い頃からの教育の賜物かてきぱきと布団を敷き、少し力づくでもとばかりに命をぐいぐいと布団の方に押す。

「舐めないでよ。いくらダメージがあると言っても女子高生との力比べに負けるつもりは……」

しかし休むつもりなんて毛頭ない命は不敵に笑いながら足腰を踏ん張らせる――

「っ!？」

「きゃっ!？」

――その時突然彼の膝が折れ、バランスを崩した命を押し形になつて雪子も倒れ込む。

「っっー……」

「あ、だ、大丈夫ですかみこ……」

命は苦しげな声を漏らし、雪子は慌てて大丈夫かと声をかけようとするが、直後今自分が置かれている状況に気づく。現在自分は命の上に乗っかっており、その端正な顔は自分の目の前にある。しかもこのどたばたのせいか命の来ている浴衣は脱げかけ、その状態はまるで雪子が命を襲い押し倒しているかのようだ。

「っー!!!」

それに気づいた雪子は顔を真っ赤に染め上げて起き上がる。

「っ、っめんなさいっ!!!」

そしてペこりつと頭を下げて一言謝ると逃げるように部屋を出ていった。

「……やれやれ。助かった」

それを見送り、命は起き上がる。と、身体中を走る鈍い痛み顔に顔をしかめた。

「いつつ……やっぱしばらく動かない方がマシか……今の内に溜まってる報告書でも書くとするか。大学のレポートもあるし……」

結局鍛錬は諦め、命は予定を確認しながら、鞆の中から美鶴へ送る報告書と大学に提出するレポートの用紙を取り出し始めるのであった。

「うゝ……」

6月27日月曜日、真は少し億劫そうな様子で通学路を歩いていた。

「お、先輩！」

「ん？ ああ、完二」

と、後ろからそんな呼び声が聞こえ、真は歩きながら振り返ると声をかけてきた少年——完二に声をかけ返し、完二は走って真に追いつく。

「ウツス！ 昨日はありがとうございました！」

「ああ」

完二のお礼に真は静かに頷く。昨日、真は完二と共に中華料理店愛家で食事をしようとしていたのだがそこに偶然食事にやってきた私服警官がおり、完二を見ると「怪しい」「何をしている」と追及を始め、しまいには「別の店で食べよう」と言って愛家を出ていった。それで完二は自分の行いで母親にも迷惑をかけていると少し落ち込んでしまったのだが真は「完二が変わればいい」と元気づけたのだ。

「まあ、遅刻するから急ごう。今日は少し疲れてるし、早めに着いて少しでも休憩したい」

「賛成ツス」

今回の戦いによる疲労は一日で取れるようなものではなく、真がこきこきと肩を鳴らしながらそう言うのと完二も頷き、二人は歩いて行った。

「貴様ら、浮かれすぎだぞ。アイドルなぞ、ただの小娘に過ぎん!! しかもりせなど……お前らと年も変わらんし、浮かれたCMやバラエティばかり! あんなバカげた番組に出るしか能のないバカに憧れを抱いているとでも言うのか?」

学校での倫理の授業、それを担当する諸岡は説教するようにそう話し、ふんと鼻を鳴らす。

「このクラスも『アイデンティティ』の確立が済んでいない生徒ばかりのようだな? ん?……なんだ貴様ら、不満そうだな」

教室を見回して嫌味たらしくそう言う諸岡は、生徒達が不満そうにしていると行って、突然「立て、椎宮!」と不意打ちで真に立つよう言う。

「『アイデンティティ』とは何か? 答えてみろ!」

そしていきなりそう問題を出してきた。

「アイデンティティですか?」

「ふん、分からんか?」

真が確認するように問い返し、諸岡はふんと鼻を鳴らす。と、真は目を瞑ってすうつと息を吸った。

「アイデンティティ、心理学用語で『自己同一性』という概念であり、また、所謂『自分とは何者か』という自らに対する問いかけを通して自分自身を形成、『これこそが本当の自分である』という実感を持つことを『自我同一性』と言います」

真はすらすらと言葉を並べ、諸岡もそこまで説明してくるとは驚いたのか目をパチクリしてむう……と声を漏らした。

「ふん、教科書を読んで理論武装済みか。可愛げのないガキめが……まあ、その通り。『アイデンティティ』は、自己同一性のことを示す! それは、これこそが本当の自分なのだという実感のことだ。ちな

みに、さつき椎宮の最後に言った自我同一性も自己同一性と同じ意味の言葉だな」

諸岡はそう言って真をちらりと見るが、真は悔しさも見せずにごつと微笑んでいた。まるでここまで答えてなお、諸岡に花を持たせたかのようなその笑みに諸岡はまたぐぬぬと唸った。

「ふん、アイデンティティを確立している者は、あんなアイドルなんぞに憧れたりしない！ 貴様ら未熟者どもは憧れのアイドルを真似て、アイデンティティを確立するらしいが……他人の真似ばかりしているような奴に、本当の自分なぞあるものか！」

諸岡は悔し紛れのようにそう言い、真はふうと息を吐いた。

それから時間は放課後へと移る。ちなみにテレビに関しては、リセを助けた後自分のペルソナを手に入れ、今まで役に立たなかった分頑張ると言って自分を鍛え始めたクマに気を使い、暫く一人にしてやろう。という意見で一致した。そして真は商店街に散歩にやってきており、神社でリセの無事な全快を祈って賽銭を入れ、仲良くなった男の子と虫取りに軽く興じた後神社を出る。

「あ、椎宮さん……」

「尚紀」

丁度その時彼の名前を呼ぶ声があり、真もその相手——尚紀に反応する。どうやら尚紀は暇で家の周辺を軽く散歩している様子だ。

「そうだ。愛家にでも行かないか？」

「はい、いいですよ。丁度家の手伝いも終わりましたし」

真の誘いに尚紀も乗り、二人は愛家へと足を運んだ。

「うまいっすよね、ここ。家近いし、よく来てたんですけど、最近あんま来れなくて」

「飽きたとかか？」

尚紀の言葉に真が少し首を傾げるようにして尋ねると尚紀はおかしそうに笑って首を捻る。

「それが、ガキン頃から来てましたけど、なんか飽きないんすよ」

尚紀はそう言うと言から手を離して難しい表情を取る。

「ウチの酒屋は、結構忙しいんですけど……あんま手伝えること、無い

んすよ。だって、商売が忙しいんじゃないやなくて……」

そこまで言うと、尚紀は一度口をつぐみ、少し項垂れる。

「マスコミは減りましたけど、他に事件がないと急に来たりするし……近所の人も、最近になって入れ替わり立ち替わり来て……若いのに可哀想って、泣いたりするんすよ」

さらには姉と話したことのない町内会のおばさんまでやってきては自分に対して「お姉ちゃんの方まで立派に生きなきゃね」など言うのだと尚紀は話す。

「……息苦しいです」

尚紀は息を吐きながらそう呟き、立派に生きるって……なんなんすかね。とも呟く。と、真は首を横に振った。

「分からないな」

こちらも手から箸を話しながらのその言葉に尚紀は驚いたように真の顔を見る。

「椎宮さんも……探してるんすか？」

そう言った後尚紀は困ったように笑う。

「難しいっすね、生きるって。もう、生きちゃってるのに……」

と、彼ははっとした顔を見せた。

「あ……すみません。椎宮さんといると、いらんことまで話しちゃって」

「構わないよ」

尚紀の言葉に真は微笑んでそう返し、その微笑みに尚紀は照れくさそうに笑うと再び自分が食べていたラーメンに目を落とす。

「ま、食いましょう。冷めるとさすがにマズイから」

と、この店のオヤジさんが真達の方を見た。

「ははっ。オヤジさん、すっげニラんでる」

おかしそうに笑いながらそう言って尚紀は再びラーメンを食べ始め、真も食事を再開した。

「ふむ、そうですか……まあ、無事でよかったですな」

一方真達が帰路に着いた頃。諸岡はこの前行方不明になり、一昨日発見され衰弱状態のために入院したりせの実家——丸久豆腐店にやってくるまで。そこで彼はりせの祖母から話を聞き、無事でよかったですと話す。それにりせの祖母も嬉しそうに微笑んで頷いていた。

「では、私はこれで」

「ありがとうございます、諸岡先生」

「いえ、教師として当然ですので」

りせの祖母の言葉に諸岡はそう返して豆腐屋を後にする。

「……りせちゃんはいなかったか……」

誰にも聞こえない程の音量で諸岡は呟き、商店街の本屋——四目内堂書店へと歩みを進めると新しく入荷された本を見ていく。

「……むっ」

置かれている本の一冊に諸岡の視線が止まるその本は最新のりせの写真集。現在りせが休業しているという事実を考えれば彼女が芸能界に復帰しない限りこれが最後のりせの写真集になるだろう。しかも店頭に並んでいる本はこれが最後の一冊だ。

「……」

諸岡はキョロキョロと入念に辺りを見回す。一般的な学生及び社会人の帰宅時間からは少々ずれている事や最近起きている殺人事件のためか人影は見当たらず、諸岡はその本を手にとるとそつと書店に入り、ついでに二冊ほど倫理、哲学の本と一緒に購入。重い紙袋を提げて書店を出る。

「あれ、諸岡氏？」

「ぬおうっ!？」

そこに突然声をかけられ、人に見られていないか注意していたはずの状態での完全な不意打ちに諸岡は驚いたように飛び上がり、その時紙袋が地面に落ちるとセロハンテープ一枚で止めていた蓋が紙が破れる形で外れ、中身である本が散乱する。

「ぬああっ!？」

「あ、すみません」

さらに諸岡は声を上げ、声をかけた相手——命は諸岡が落とした本

を拾おうと屈み込む。

「ちよつとま——」

諸岡が制止しようとするがもう遅く、命は諸岡が落とした本の一冊——りせの写真集を取ったのであった。

「あ、これりせちゃんの——」

命がそう呟いた瞬間諸岡は他二冊の本を拾い上げた後写真集をひったくる。

「か、か、か、勘違いするのではないぞ！ これはあれだ！ 新しく我が校の生徒となる、既に仕事をしている者がどのような仕事をしているのかを確認するための資料というやつだ！」

「……なるほど、流石諸岡氏。仕事熱心ですね」

顔を真っ赤にしながらかましく立てる諸岡の言葉を信じたのか命は笑みを浮かべて諸岡を賞賛する言葉を紡ぐ。

「アイドルという仕事は表向き華やかですけど実際は大変な事のオンパレードですからね……学生ともなるとその合間に勉強もせねばならない、その分負担は大きいはずですよ。だからこそ、どのような仕事をしているのか、それはどれだけ大変な事なのか、それについて教員からも理解者は必要だと思えますが……諸岡氏ならば言われずとも分かっていくようですね。教育熱心で理解ある教員がいて、生徒達は幸せだと思いますよ？」

「む……ま、まあな」

命の言葉に諸岡は少し得意気な顔になる。

「では、お仕事の邪魔になっても申し訳ありませんので、僕はこれで」「あ、ああ……」

命は微笑んでそう言うのと去っていき、諸岡は空領きを二、三度した後。ふんと鼻を鳴らす。

「仕事への理解、生徒への理解、か……」

諸岡はそう呟くと家に帰っていった。

「なあなあ、長瀬のヤツ、なんか変なんだけど。なーんか企んでるみた

いな……」

翌日6月28日の昼休み。真は一条に呼ばれて屋上で一緒に曇り空の下食事をしているとそんな相談事みたいな事を口にする。

「ああ……そうか？」

「椎宮も心当たりねえの？……ま、いつか」

一条はそう言って食べ終えた昼食であるパンを入れていた袋を荷物にしまい、真が弁当を食べ終えてしまうのを待つてから立ち上がる。

「それ聞きたかっただけだからさ。それと今日、部活だよな？」

「ああ。今日はちゃんと出るよ？」

「……ああ」

一条の確認するような言葉に真がそう返すと、一条は少し浮かないような顔で頷いた。

そして放課後に移り、真は一条と一緒に体育館まで行くと、浮かない様子で着替えから精が出ていない一条を更衣室に置いて体育館へとやって来る。既に長瀬と、そして――

「花村に完二？」

「よお？。なんか長瀬にとっ捕まってるよ？」

「俺もツス。花村先輩と話してたらなんか長瀬先輩が来いつつて、無理矢理ユニフォーム着せられました」

真が呆けた声を出すと、バスケット部のユニフォームを着ている陽介と完二は事態が理解できてない様子でそう説明する。

「二人、急にデートだとか合コンだとか言ってる帰りがった。花村と異つてお前と仲いいんだろ？」

「あ、ああ……」

つまりドタキャンの人数合わせに陽介と完二がとっ捕まったわけだ。

「対戦校の奴ら、まだか？。それに一条もまだか？」

そして長瀬が腕組みをしながら呟く。

「長瀬？。……、体育館だぞ？。それに花村に、確か一年の異？」

と、一条がやって来ると共に長瀬に気づいて妙な声を出した。

「今日は俺も、バスケット部」

「えーっと、俺も？」

「俺も、ツスカ？」

「そういうことになるだろう」

長瀬の言葉に陽介と完二も真の方を見て頭をかきながらそう言い、真は腕組みをしながらそう呟いた。と、他校の者なのか別のユニフォームを着た高校男児が体育館にやってくる。

「お、来た来た」

「はあ!？」

長瀬の言葉に一条が声を上げて長瀬と他校男子を交互に見ると、長瀬はしてやったりな顔を見せる。

「今から試合、するから」

「ハア!? ちよ、だって、人数足りねーじゃん!」

「ここに五人いるだろう」

長瀬の単刀直入な言葉に一条が声を上げると、長瀬は自分、真、陽介、完二、一条を差しながらそう言う。

「え、椎宮、まさかお前も!？」

「すまん。口止めされていたんだ」

一条の言葉に真は一礼して返す。数日前、一条が元気ないのに気づいた長瀬は彼に内緒で練習試合を企画。真もそれに協力していたのだ。

「いいか、お前一人で頑張ったって、何も出来ないんだ。けど俺らがいる、忘れんな」

「そうだ」

「よく分かんねえけど、そういう事だ!」

「ツス!」

長瀬の言葉に真が頷くと陽介と完二も乗る。

「じゃあ、そういうわけで練習試合、始めようぜ!」

長瀬が仕切り、練習試合の準備を始める。

「花村、完二。お前らバスケのルール分かってるか？」

「あーまあ、テレビで見てるからなんとなく……」

「俺もツス。えーつと球ついて走って、ゴール入れりやいいんすよね？」

その合間に念のため真が確認を取り、陽介と完二はそう返した。

そして練習試合がスタート。

「はあっ!!」

試合開始早々一条は小さな身体で大きくジャンプしてシュートを決め、先制する。しかし相手チームは全員バスケット部なのに対しこちらは実質バスケット部二人、少しは経験のあるらしい助っ人一人、素人二人という編成。敵チームの動きの鋭さに翻弄され、すぐに点を取り返される。そしてさらに流れに乗って相手プレイヤーの一人がドリブルしながら突っ込んできた。

「くっ!!」

真が素早くそれに対応、粘り強くそのプレイヤーに張り付くと真を抜くのは諦めたのか相手はフェイントをかけつつ素早く味方にパスを投げる。

「させるかっ!!」

そのフェイントに反応、真はボールを奪おうとするがパスの勢いに負けてボールは弾かれる。それをすぐに別の相手プレイヤーが取りに走る。

「そうはいくかっつのっ!!」

しかしそれを超える速さで陽介が突進、ボールを素早く拾い上げると、

「二条!!」

「ナイパスツ、花村!!」

素早く一条にパスを出す。それは鋭く一条に渡され、一条は再びシュートを決める。

「くそっ、攻めろ攻めろっ!!」

また点差が離され、相手チームは一気に攻撃に移り相手の一人が隙を突いてボールをドリブルしながらゴールへと向かう。

「完二!! 止めろっ!!」

「了解ッス!!」

真が指示を出し、完二は頷くとゴール前に立ちほだかり、長身でさらに威圧感のある完二の前に立たれた相手プレイヤーは思わず怯んでしまう。

「異完二……く、くそっ!!」

「おおっと!!」

怯み、苦し紛れにシュートを打つが完二はジャンプしてそのボールを取り、着地と同時に振りかぶる。

「一条先輩! 叩き込んでくださいッス!!」

「サンキュー、異っ!」

剛腕を振るってボールを投げ、片手で思いっきり投げた球は相手ゴール近くに立っていた一条の下にノーバウンドで届き、バシンツという音を立てて一条はボールを受け取る。そして相手がコートの端から端までのノーバウンドパスに驚いて啞然としている隙に一条はシュートを叩き込み、さらに得点を重ねる。

「へえ。椎宮、お前の友達、なかなかやるじゃないか」

「まあな」

長瀬は現役バスケット部顔負けのフットワークを見せた陽介と凄まじい剛腕でのパスを見せた完二の事をそう評価する。

「よし、俺も負けてられないな!」

そして長瀬も右手の平を左手に握った拳でぱんつと叩くとボールの方に走っていき、真は攻撃はエースの一条と彼と付き合いの長い長瀬、そして彼らと友達であり且つ機動力のある陽介に任せようと考え後ろの方に下がる。

それから試合は進んでいくが、最初相手は試合開始前の八十神高校メンバーの話から八十神はほとんどが素人だと思つて手を抜いていたらしく、本気になるとバスケット部である一条と真、よく助っ人に来る長瀬はともかく陽介と完二は素早いパス回しやフェイントなどの技術に翻弄され始める。まあそれでもシャドウとの戦いで培ったフットワークやブロック技術、体力で食らいついているのは流石といえるが。

そして時間は過ぎていき、試合終了十秒前を切る。現在スコアは同点だ。相手がボールを持ち、最後のチャンスとばかりに攻めていく。「しまっー!」

長瀬の横をすり抜けたプレイヤーに得点されると同時に試合終了。試合に負けてしまう。

それから試合後の後片付けなども終え、陽介と完二は帰っていた。その後、真、一条、長瀬の三人は屋上へとやってきていた。

「負―けちったな」

ごろんと屋上に寝ころびながら一条が呟き、「俺と椎宮、神が乗り移ったみたいだったのに……」とぼやく。

「……」

「一人、トラベリング知らねーやつがいたからな。素人の花村と異でさえ知ってたのになー」

「……」

最後に自分がディフェンスしきれなかった責任を感じているのか黙っている長瀬に一条がからかうような声質で呟く。

「いいいか、お前一人で頑張ったって、何も出来ないんだ!」とかカツコいいこと言ってたな」

「……るっせーよアホ!」

いい加減我慢が限界にきたのか長瀬が吼え、大体自分が試合を組んだのだったと、この試合をしようとした経緯を離そうとする。と、一条はそれを右手を彼の方に出して制し、ははっとなめてみせる。

「ははっ。分かってるよ、俺の為だろ?」

そう言い、彼はふう〜つと大きく息を吐く。

「うん、何か……スッキリした。なんっーか……一人じゃないって、思ったよ」

一条は空を眺めながら話す。孤児であった自分が一条家に引き取られたのは家を継がせるためだった。しかし妹である幸子が生まれ、きつと将来は実子である彼女が家を継ぐことになるだがそうなる血の繋がっていない自分なんていってしまうが、さらに言えば育てる価値も全くないのではないかと思ひ、両親にどこか申し訳なく感

じていたらしい。

「……俺、出てった方がいいのかなあ」

最後に彼はそう呟いた。

「考えすぎじゃないか？」

「……そんなことを、家で言われてるのか？」

真はストレートにそう言い、次に長瀬が心配するように一条に声をかける。それに彼は首を横に振った。

「ううん、皆優しいから、言わない。俺が思ってるだけ」

「……血が繋がってなきや、本当の親子じゃないって思うのか？」

「そりゃキレイ事だ」

一条の言葉に長瀬が真剣な顔でそういうが、一条はあっさりそう返した。

「キレイ事って……」

それに長瀬が言い返そうとすると、一条は起き上がって長瀬の方を見る。

「血が繋がってなくても親子なら、なんで2歳の子に英才教育すんだよ！ 家庭教師つけてさ！ 俺にバスケしていいって、なんで言うんだよ。習い事もやめていいし、公の場に出なくていいって……なんで言うんだよ!?! 俺がいらなんて事だろ？ もう、役目が終わったってことだろ!?!」

「……」

必死の形相で怒鳴る一条、それに二人は何も返せずに黙り込む。と一条ははっとなった後申し訳なさそうに顔を伏せた。

「ごめん……お前らに怒鳴っても、仕方ねーのに……」

二人に謝罪した後、彼は「今度……施設に行ってみる」と言う。それに長瀬が「お前がいたとこか？」と聞くと一条はそうと頷いた。

「家出か？」

「はは、違うよ」

真の首を傾げながらの言葉に一条は笑ってそう返し、本当の両親の事について聞こうと思う。と言う。

「一緒に行く」

「え!？」

と、真はすぐさまそう言い、それに一条は驚いたように声を上げる。

「いい、いいよ。そんな迷惑、かけらんねーよ」

「……分かった」

一条が慌てて首を横に振ると真はしぶしぶ頷く。と、長瀬も一瞬顔を伏せた後彼の方を見た。

「お前がそうしたいなら、そうすりゃいいよ……帰ってくんだろ？」

その言葉に一条は頷き、次に照れくさそうに頬をかいて二人を見た。

「その……あ、ありがと、な。今日の試合のこともさ……俺の為って、分かったらすげー嬉しかった」

「どういたしまして」

「ああ。花村と巽にもよろしく伝えてくれ」

一条のお礼に真が言うと、彼は今回いきなり参加してくれた二人にもよろしく頼むと言い、再び悪戯っぽく笑った。

「負けたけどな、試合」

「るせつつの」

悪戯っぽい微笑みでの言葉に長瀬はるせえと返した後、試合に負けて勝負に勝つと名言を残すがそれに一条が何も勝ってねーしとツツコミを返した。そんなこんなの雑談をしながら時間は過ぎていく。

それから翌日6月29日。その放課後、真は用事もないしとつとと帰ろうと荷物を持つ。

「お、椎宮もう帰んの？」

「ああ。たまには家で出来るバイトでもして小金を貯めようと思ってな」

「あはは、頑張れー」

「また明日ね」

真が帰ろうとしているのに気づいた陽介が声をかけ、真が冗談っぽく笑いながら言うのと千枝がバイトを応援、雪子がまた明日ねと返し、それらに会釈で返しながら真は教室を出ていく。

「いたっ!!」

「え？——」

「ちよつと来て!!」

「——おわっ!？」

その瞬間突然女性の声が響き、真は教室の外から何かに引つ張られ姿を消す。

「……な、なんだ？」

「さ、さあ？……」

「……びっくりした」

一瞬の光景に三人は目を点にして固まる事しか出来なかった。

「……一体なんなんだ？ 海老原」

屋上、真は適当なところに荷物を置いて自分をここまで引つ張ってきた相手——海老原あいに見尋ねる。彼女はフェンス越しに外を見ており、まったく真の方を見ていない。

「あ……のさ。えつと……こ、こないだは、どうもありがとう……」

「こないだ？……なんのことだ？」

あいはもじもじした様子でお礼を言うが真は覚えてないように首を傾げ、あいは振り返ると「下駄箱でアタシの事を色々言ってた……」と恥ずかしそうに呟く。それからあいはゆっくりと真の方に歩いて行った。

「あたし、ね……なんか、変なの……あの時の事思い出すと、ドキドキして……寝れなくなっちゃうの……ど、どうしよう!」

「は……は？」

「昨日さ、バスケット部の試合があつたでしょ？ こつそり見てたんだけど、いつの間にか目が離せなくなっちゃうて……」

心なしか迫って来るあいには真は頬を引きつかせながら下がって行く。

「どうしよ……好きになっちゃった、みたい……」

あいはそう言って潤む視線で真を見上げる。

「一条君の事……」

「なるほど」

その言葉に真は心なしか白けた目で呟く。確かにあの時、噂に盛り

上がる同級生を嗜めたのは一条も同じだ。

「明るくて優しいし……か、彼女とか……いるのかな？」

「あーいや、聞いた事ないな……というか今はそれどころじゃないし……」

あいの言葉に真は若干テンション下がった様子で呟く。

「好きなタイプとか、知ってる？ その……あたしみたいの、嫌い……かな？」

しかしあいは全く気にせずになまなましていた。

「じ、自信を持って。そうすれば大丈夫だ」

とりあえず言葉を濁しつつあいを応援しておく。とあいは嬉しそうな表情でうん、と頷いた。と、彼女はその嬉しそうな明るい表情のまま真の両手を握る。

「ねえ、お願い協力して！ 好きなタイプ聞いてほしいの！……頼れるの、アンタしかいないから……」

そう言い、あいはさすがのような視線で見つめてくる。

「……分かった」

それに真はそう返すしかなかった。と、あいはよかった、と安心してように呟いた後、真から手を離して二、三步離れる。

「その、今日じゃなくていいから……お、お願い……します」

頬を赤くし、もじもじとしながらあいはそう呟いた。

それから翌日、6月最後の日である30日。早速あいからのお願いを達成しようとした真だったが一条は一昨日話していた孤児院に話を聞きに行ったのかはたまたそのための準備なのか既に帰ってしまっており、しようがないから文化部で時間を過ごしてから家へと帰っていった。

一方天城屋の一室。夜中、命は電話で美鶴に定期報告を行っていた。

「……解析能力を持つシャドウ……」

その中で出た報告内容——りせのシャドウが持っていた能力に美鶴の声が陰しくなる。

「まさか、その能力を持つシャドウが存在するとは……」

「考えてみりや不思議でもないんですけどね。思考が行き当たりませんでした」

「確かに……それで、大丈夫だったか？」

「え？……ああ」

美鶴は険しい声で呟いた後、心配そうな声で命に声をかけそのいきなりの声の変化に命は一瞬呆けた声を漏らしてしまうが、直後電話口の相手には見えないと分かっているながら誤魔化すような笑みを見せる。

「まあ。全員でかかって、どうにか押し切りました。まあ危なくなかったと言えば嘘になりますが」

本当は壊滅の危機に陥り、クマが自爆覚悟の特攻をしてくれなければやられていたのだが。そんな事を言っただけで心配させたくないという建前と、ペルソナ能力を持たないはずなのにかつて自分達が戦った満月の大型シャドウに匹敵するシャドウを自爆覚悟とはいえ一撃で粉砕したクマの事を報告するのは難しいためそう言葉を濁しておく。

「そうか」

しかし美鶴は命が無事だったことに安堵しているのか特に追求する様子を見せず、次に「そうだ」と続ける。

「世のシャドウが原因と思われる事案を解決するために『シャドウワーカー』という組織を立ち上げたんだ。どうだ、君も入らないか？」

「そうすればこちらも正式に君への支援が――」

「お断りします」

明るく弾ませるような美鶴の声に対し一瞬で切り捨てるようにその申し出を断る命。それに美鶴がうつと声を漏らすと命ははあとため息をついて気だるげな目を見せた。

「恐らくその組織には真田先輩やアイギスはもちろん、順平や風花、結生やゆかりも既に勧誘しているんでしよう？」

「あ、ああ。いや、伊織と風花は勧誘はしたが非常勤隊員の立場だし君との約束の手前結生とゆかりはまだ……」

「そこはありますがどうもごめいます。で、今の僕は桐条先輩との個人的約束によってここにいる。そしてその契約のため皆に僕がここにいる

事を言うわけにはいかない……ですけど、僕がシャドウワーカーに入れば今僕がやっているのはシャドウワーカーの正式な任務となる。そうすれば、あなたはその任務内容をシャドウワーカーに通達せねばならない。もちろん、皆にも……契約の抜け道ってやつですね」

「……………」

命の言葉に美鶴は絶句したかのように声が止まり、やがて電話口から「はあ……………」とため息が漏れる。

「やはり、悪知恵では君には敵わないな」

そしてその口から、先ほどの命の指摘が真実だという言葉が語られた。

「先輩……………」

「だが、私も心配しているんだ。特にそんな未知のシャドウの話聞いたとなればいてもたってもいられん……頼む。いい加減意地を張らずに私達からの救援を受け入れてくれ……」

美鶴は若干泣きそうな声になりながら命に懇願する。

「絶対に断る。巻き込まなくていいのに皆を巻き込むわけにはいかない」

「…………頑固者」

しかし命も譲らず、美鶴はただそうとだけ漏らす。

「また何かあったら連絡します。今回のシャドウについて詳しくは報告書で」

「…ま、待て命！ まだ話は——」

強引に話を済ませようとしていることに気づいた美鶴は慌てた声で出すが命は気にも止めずに電話を切ると電源まで落とす。しばらく放置して時間を稼げば会長として忙しい美鶴は電話をかけてこられなくなる。最近気づいた手法だ。命は電源の切れた携帯電話を見下ろす。

「…………ごめんなさい。美鶴先輩」

その口から電話口では語られなかった美鶴への謝罪の言葉が漏れ出、それは誰にも聞こえることなく消えていった。

第三十二話 七月初めの絆と霧の夜

「…………ふう」

7月1日の夜。真は病院の清掃のアルバイトにやってきており、窓拭きが一段落してふうと息を吐き、つい病院に来た患者が座る長椅子の方を見る。そこに喪服姿のお婆さんが見える。

「…………本物のお婆さん、だよな？…………」

ついさつき嫌な視線を感じたり妙な叫び声が聞こえたりしたためかついそんな事を呟いてしまう。と、お婆さんはゆつくりと立ち上がり、真の方を見ると「まあ…………」と呟く。

「ああ…………許して…………」
「？」

喪服姿のお婆さんは何かぼそぼそと呟くと真に背を向けて歩いていき、やがて彼の視界からいなくなる。

(なんだったんだ?)

首を傾げながら心の中で呟く。

「こんばんは?」

「うひゃえいつ!?!」

その直後、背筋をつーつと触られながらそんな挨拶をされ、完全不意を突かれた真は妙な声を上げて前方に弾かれたように飛ぶ。

「あら、面白い」

「…………」

そこにはこの病院のナースこと上原小夜子がくすくすと笑いながら立っていた。

「スキあり、ね?」

小夜子はそう言って綺麗に磨かれている窓を見る。

「適当にサボればいいのに、熱心に仕事してるのね、キミって…………ね、どうしてこんなバイトしてるの?」

「夜は暇ですし、何かと入り用ですから」

小夜子の質問に真はそう答える。まあ実際バイト代のほとんどはシャドウと戦うための武器やペルソナのために使っているし、入り用

というのは嘘ではない。

「ふうん、ひよつとして苦学生？」

しかし小夜子はそう解釈をし、「だったらこんなところで、こんな悪いオネーサンに捕まっていいの？」とイタズラっぽく笑いながら聞いてくる。

「それにしても、若い子が病院で雑巾がけもないでしょーに……そんな姿見たら、泣く子もいるんじゃない？」

小夜子はどこか呆れた様子でそう呟いた後、「彼女とか、いないの？」と聞いてきた。

「……聞いてどうする？」

「子供は素直に、聞かれたことに答えてりやいいのよ」

真の言葉に小夜子はやれやれとため息をついた。

「若いよね、高校生って……10も変わらないけど、すごく、遠い事みたい。何かキラキラしてて……妬ける？　って言うの？」

小夜子は真に背を向けながらそう言い、「だからかしら」と言う振り向く。

「グチャグチャにしてやりたいわ」

その言葉に真は数歩下がりながら冷たい目を見せる。

「ふふ、冗談よ……半分は。もう半分の意味は……」

小夜子はそういうとすたすたと歩いて真との距離を詰める。

「……分かるよね？」

「知らん」

「ふふ、ホントかしら？……」

あしらうような真の返答に小夜子は薄く笑った後、「もう行かないきゃ」と呟いた。

「ついつい、ちよつかい出しちゃうのよね。ふふっ。きつと、君が可愛いせいね……」

小夜子はそう言ってくすくすと笑う。

「悪かったわね、仕事の邪魔して。それじゃ、頑張んなさいな」

小夜子は労いのつもりだろうか声をかけて歩いていき、真はやれやれとため息をついた。それからアルバイトを終えて彼は家に帰る。

それから7月3日に日にちが過ぎ、その朝。真が少し勉強をしていると突然電話に着信が入り、真は電話を出す。

「はい、もしもし?」

「あ、あの、松永です。い、いま大丈夫ですか?」

「ああ。どうしたんだ?」

電話の相手である綾音の、若干緊張したような声色に真はどうしたんだ、と優しげな口調で聞く。

「今日なんですけど、あの、宜しかったら一緒に、出かけませんか?」

「ああ、分かった」

「はい! それじゃ、忘れないでくださいね!」

綾音からの誘いを真は二つ返事で了承し、電話を切ると真は勉強を止めて出かける準備をする。

そして真はバス停で綾音と合流、二人で沖奈市へと繰り出した。

「わ、お店がいっぱいできてる……」

「あまり来ないのか?」

綾音は街を見回しながら呟く。それに真がそう聞くと綾音はそんなに遠くないけどあまり来ないため新鮮。と言う。

「え、えっと、どこか行きたいところがありますか? 買いたいものとか……」

「いや。松永が好きな場所がいいよ」

綾音が慌てて気を遣ってくるが、真は自然体な様子でそういう。それに綾音は頬を赤らめながらありがとうございます、とお礼を言った。

「えっと、じゃあまず……」

「ん?」

「あれ?」

綾音がどこに行こうかと考えていると、突然そんな声が聞こえ、真と綾音はついその声の方を向く。

「あら? 長瀬先輩……ですよね?」

綾音の言葉通り、さつき変な声を出したのであろう相手は長瀬と一条——長瀬は何故か校外、しかも今日は日曜であるにもかかわらず学

生指定のジャージを着ている——だ。

「一条、長瀬」

「おう、椎宮」

「偶然だな」

真の呼びかけに長瀬と一条も笑いながら二人の方に歩き寄り、長瀬はふと綾音の方を見てからもう一度真の方を見る。

「彼女か？」

「えっ、やつ、ああああのっ!!」

長瀬の言葉に綾音は顔を真っ赤にしてうつむき、ごごによごによと言葉を漏らす。

「あー、アレか。えーと……微妙な距離感、てやつか！」

「アホか」

「先輩……」

爽やかに笑いながらボケた発言をする長瀬に真と一条が異口同音にツツコミを入れ、綾音も流石に冷ややかな目になってしまう。と、長瀬は驚いたように綾音を見た。

「あ、八高？」

「中学も一緒でした!!」

長瀬の間拔けな声に綾音は両腕をぶんぶんと上下させながら叫ぶ。

「あーつと、なんかごめんな？ 椎宮」

「いや、別に……」

怒っている綾音とたじたじになっている長瀬を見ながら、一条が頬を引きつかせて真に謝ると彼も静かにそう言う。

「えーつと確か吹奏楽部の松永さん、だよな？」

「知ってるのか？」

「ん、まあ。で、彼女なのか？」

松永を知っているらしい一条はにししと笑いながら真を小突く。
「違う。朝一緒に出掛けないかと誘われたから一緒に来ただけだ」

「へ〜……」

真はそう言った後、ふと数日前に海老原から頼まれたことを思い出す。

「なあ、きつき質問されたし、こつちから質問いいか？」

「ん？ ああいいぜ。どんと来い……あ、でも家の事はなしな？ その、まだ施設に行つてないんだ……」

「ああ。落ち着いて、心の準備が出来てからでいい」

真からの質問いいかという言葉に一条は、真面目な真なんだから妙なことは言つてこないだろうと高をくくっているのか笑いながら頷き、しかしその一瞬後に真剣な顔で条件を追加。それを真は了解してから一条に囁くように尋ねる。

「好きなタイプはなんだ？」

「え、は？ す、好きなタイプ？」

予想だにしてなかつた質問だったのか一条は目をパチクリさせながら真を見る。

「お、おまえ、なんか悪いもんでも食つたか？」

「あーいや、ちよつとな……えー、花村と前にそういう話が出たんだよ」

友達をダシにして、真は海老原の応援を行う。一条は「ああ、花村が……」と納得したような声を出していた。

「でも、えー、なんだよ急に……うっわ照れる。えーと、えーと……優しい子、かな？ はは……」

一条は頬を赤くしてにやけながら、髪をかきかきそう答える。

「ん？ 一条、どうかしたのか？」

「のあつ!？」

と、綾音のお怒りから逃れられたのか長瀬が尋ねてきた。

「いやいや、なんでもないっ!! そ、そうだ松永さん! あのーなんだ、良ければ俺達も一緒に遊んでいいかな!？」

一条は大慌てで話を逸らそうと松永に話しかけ、松永も驚いたように口を手で隠し、ちらちらと真を見る。

「松永が良ければ、俺は構わない。松永が嫌だつて言うならすぐ追いつ返すけど?」

「い、いえそんな! あの……じゃあその、よろしくお願いします……」

(……今日は楽しくなりそうだ)
松永はペこりと一条と長瀬に頭を下げ、四人は楽しく休日を過ごしていった。

それから夜に時間が過ぎ、真は菜々子と二人つきりちやぶ台で向かい合っていた。

「えつと……お父さんに、ないしょだよ」

「ああ」

今にも泣き出しそうな菜々子を安心させるよう、真は微笑んで頷く。

「まえに、学校でくばられたの。うちのの人に、わたしなさいって……これ」

菜々子はそう言って一枚のプリントを差し出してくる。

「……授業参観の開催希望日アンケート」

「いつ来れるか、書いてもらいなさいって……お父さん、おしごとあるから……きつと、来れないよね？」

「きつと来てくれる」

菜々子はしゅんとなっており、それに対して真は静かにそう告げ、菜々子が驚いたように顔を上げる。

「俺も一緒に頼んであげるよ」

「ほんと？ お兄ちゃん、ありがとうー！」

真の言葉に菜々子は嬉しそうに笑って真にお礼を言い、「お父さんにわたす」、「来てつて……言う」と言った。

「お兄ちゃんに話してよかったー！」

菜々子は満面の笑みでそういう。その笑みからは真への信頼が読み取れた。

「ちゃんと、来てくれるよね……ほんと」のお父さんだったら」

菜々子はぼそりとそう呟いた後、真に対して「お兄ちゃんもじゅぎょうさんかんはあったの？」と聞いてくる。それを皮切りにした色々な話をしている内に夜も更けてきたので真は菜々子を寝かせて、

部屋に戻っていった。

それから7月5日に日付は過ぎる。今日は吹奏楽部の発表会、真も演奏への参加はしないものの部室へやってきていた。

「い、いよいよ、今日ですね、発表会……ももも、もう、緊張してきた……」

先輩である奏者の一人が怪我をしてしまったため代理となった綾音は頬を紅潮させながら呟く。が、真が前に立つと彼女はぎこちなく微笑んだ。

「先輩、お留守番、お願いしますね。私、頑張ってきますから……笑顔で帰ってきたいです！」

「ああ。頑張れ」

綾音の言葉に真も微笑んで返す。

「うーす、集まってるかー？」

そこに部長の声が聞こえ、二人は部長の方を向く。そして部長は今回演奏するメンバーが揃っていることを確認するとよしと頷いた。

「んじゃあ、張り切っていくぜー……の前に、サプライズだー」

部長は気合を入れた声の後に気の抜けた声を出す。

「恥ずかしいマネすんなよー」

タイミングを合わせて戸を開けて入って来る男子生徒。それは綾音が今回代役になった、腕を怪我した男子生徒——飯田だ。

「あ、飯田！ 腕は大丈夫!?!」

派手目の女子部員が心配したように声をかける。と、飯田部員は「へーきへーき、もう治ったし」と言って腕をぶんぶん振った。

「つてわけでき、ギリになったけど、俺も参加すつから。向こうで一回、合わせればいいよな？ よろー」

飯田部員は軽めな口調でそういう。

「あ、でも……トロンボーンは……」

と、男子生徒の一人が綾音の方を見ながらぼそりと呟き、他の生徒の視線も綾音に集中する。

「……えっ、あ……あの……」

ようやく気付いたというか我に返ったというか、そんな様子で綾音が呟く。

「え、何この空気？」

飯田部員も困った声を漏らした。と、部長が「どうする？」と綾音に聞いてきた。つまり、今回出るか、もしくは飯田に譲るか。そういう事だ。

「えっ、そんな、私……」

「え、あー、そういうことか……」

ようやく気付いた飯田部員も頷くと「んじゃ今回は俺、辞退って事で……」と綾音に譲ろうとする。

「飯田がいいと思うよ。上手いし、場馴れもしてるし」

と、三年の女子部員が突然そう言い出す。さらに「皆もそう思ってるんじゃない？ 失敗されたら困るしさ」と他の部員に同意を求めてきた。それに他の部員は押し黙っていた。

「俺は松永を推薦したい」

「先輩……」

真は真剣な表情で綾音を推薦する。「松永は最近放課後、今回の発表会の為に河原で一生懸命練習していたんだ。その努力を無駄にさせたくはない」と他の部員を説得する。

「……だってさ、松永。良かったね、仲良くしといて」

「えっ、あの……」

三年の女子部員があっさりそう言い、綾音が困ったように呟くと部長は再び「どうする？」と聞いてくる。彼はあくまでも綾音の意見を尊重する様子だ。それに綾音は「私……」と困ったようにうつぶいて少し考える様子を見せた後、顔を上げて飯田部員に微笑みかけた。

「行ってきてください、飯田先輩。元々先輩の役でしたし、私では力不足ですから……お願いします」

「え、うーん。じゃあ、そういうことなら……」

綾音の言葉に飯田部員は頷く。

「……ん、じゃあ行くぞー。準備出来た奴から、表のバスー」

「が、頑張ってくださいね！」

部長が指示を出し、綾音がそう言うのを最後に部員らは支度をして出ていく。残ったのは真と綾音の二人だけだ。

「ふふっ」

綾音が突然笑う。

「なんか……バカみたいですすよね……私……バカみたいですすよね……」

笑った後、泣き出してしまふ。

「わ……たしっ……やっぱり……上手く行かない……ですね……しよ
うがない、けど……いい、つも……いっつも……」

綾音の泣きじやくりながらの言葉に真は少し困ったように頭をかいた後、何を思ったのか彼女を抱きしめた。

「よしよし」

「先輩……う、ひっく……うっ、うっ……く……」

まるで子供をあやすお母さんのように抱きしめながら頭を撫でる真に対し綾音は余計に泣いてしまふ。

「す、すみません……」

ようやく泣き止んだ綾音は真から離れた後謝る。その後彼女は語り出す。「音楽で誰かの支えになれば」、昔からの夢、前は遠い夢、でも今は違うそれが叶うかもしれない。遠い夢という憧れではなく、目標、それももうすぐ手が届くと思っていた。でもそれがするりと抜けてしまった。

「だから……すごく、悔しいです！」

そう叫んだ後、綾音は「あ」と声を漏らした後、アハハツと笑った。「なんか、不思議です。こんな事思うの、初めて……悔しくて、でも、なんだか満足してる……」

綾音は満足そうに微笑みながら、寝ても覚めてもずっと曲が離れなかった。少しでも時間があつたら練習、腕はずっと筋肉痛だったと再び話す。そして今までは無理だと思っていたけど、初めてここまで

やった。と話した。

「だから、悔しいし……悔しい事が、嬉しい……気がします」

そう話した後、彼女はまた「先輩」と真を呼ぶ。

「さつき、推薦してくれて、ありがとうございました。すごく、嬉しかったです」

「ああ」

「でも、飯田先輩を押しつけて自分が……って思えなくて……ごめんなさい」

「気にするな」

綾音に対して真はそう微笑みかける。と、綾音は少し変わった気がします。と真に微笑んだ。真のおかげで変わった気がする。微笑はそう言っていた。

「……あ、気づいたら二人つきりですね、今……」

行けなかったのも、そんなに悪い事じゃないかも、ですね。と言って綾音はまた微笑んだ。

またまた日は7月6日に進む。その放課後、真は屋上に連れ出されていた。と言ってもいつもの特捜隊メンバーとの集会ではないし、かと言って不良な人々に連れてこられたわけでもない。

「き、聞いてくれた？ 一条君の……好きなタイプ……」

あい前から頼まれていた、彼女が想いを寄せるようになった一条の好きなタイプについての報告だ。

「えーつとだな……『優しい子』とのことだ」

「優しい子……可愛い子、じゃなくて？ 美人……でもなくて？」

真からの報告を受けたあいはやけに動揺。突然真の胸ぐらを掴みあげた。

「だ、誰だって可愛い子が好きでしょ？ 可愛かったら愛されるでしょ!？」

「え、いや、お、落ち着けえび——」

「って言うか、まどろっこしいから好きな子聞いてきてよ！」

「はあ!?!」

「いや、私に考えがある……協力しなさい!!」

「はああ!?!」

「はいかいいえか、はいどっち!?! ほら早く!!」

綺麗な顔立ちで睨みながら真に迫るあいには真は頷くことしか出来なかった。

それからちやうど部活動の日で一条も部活に参加していたため急ぎよ真も部活に参加する。そして部活も終わり、真と一条は二人でボール磨きをしていた。

「一条、えつと、その……大丈夫か?」

「ん? ああ……なんか施設に行く勇氣出ねえ。行かなきゃなんねえんだけど足が重いって言うかさ……」

真の大丈夫かという言葉の意味をどう取ったのか、一条は重いための息をつきながらそう言うのみ。

「……俺からは頑張れとしか言えないが、あまり気負いすぎるな」

「ああ。サンキュ……つと、ボール磨き終了! 早く片付けようぜ」

真のアドバイスに一条は頷いた後ボール磨き終了と叫び、それをボールを入れてあるカゴにシュートの要領で投げ入れると早く片付けようと言う。それから二人はカゴを体育館倉庫の方に押していく。

「なあ、気を取り直して雑談なんてどうだ?」

「ん? ああ、いいぜ」

真の話題運びに一条は頷いてみせる。と、真は一瞬相手に気づかない程度に深呼吸をし、一条を見る。

「好きな子っているのか?」

「え、は、はあつ!?! 好きな子!?! おまえ、前からどうしたんだよ!?!」

ね、熱でもあんの!?!」

「いないのか?」

一条の思う彼らしくない質問再びに一条は再び慌て出すが真はあくまで自然体に尋ねる。それに一条は困ったように髪をかいた。

「まあ、その。なんだ……お前に限って大丈夫だとは思うけどさ……誰にも言うなよ?」

「もちろん」

一条は髪をかき、頬を赤らめながら呟いた後、真に誰にも言うなよと念押し。彼もこくと頷いた。

「や……」

「やっ」

この時点で海老原あいでない事は確定する。

「里中さん」

「うぐっ!？」

予想だにしない相手——という仲間だ——の名前に真は驚いて息を飲んでしまいむせたのかごぼごぼと咳き込む。

「な、なんだよ!?」だ、大体席隣とか、仲がいいとか、実は結構羨ましいんだよお前!」

顔を真っ赤にして右腕をぶんぶん上下させながら一条は叫び、真に近づくと突然ヘッドロックをかけた。

「聞いたからには協力しろよな?」

「いてててて」

おふぎけ程度とはいえ痛い事は痛く、真はぱんぱんとギブアップのように彼の腕を叩く。

「ははっ。でもこういう話も悪くねえな。さっきの気の重さがどっか吹っ飛びました……これなら、頑張れる気がする」

と、一条は次に爽やかに笑いながらそう言う。

「ありがとな、椎宮。さ、とつとと鍵閉めて帰ろうぜ」

「ああ」

一条がそう言い、二人は倉庫から出ると一条が鍵を閉める。それから出口の方に歩いて行っていると突然真がポケットを探りだし、それに気づいた一条も真の方を見る。

「どしたよ?」

「あ、ああ。ハンカチを落としたみたいだ……」

「ハンカチ? 倉庫にか?」

「多分……探してくるから鍵を貸してくれないか? 先に帰っててくれ」

「おう。んじや悪いけど鍵、職員室に返しといてくれな？」
「分かった」

真はそう理由を付けて一条から倉庫の鍵を借り、ついでに一条を遠ざけておく。そして一条が体育館から出ていったのを見届けてから真は倉庫の鍵を開け、さつき真達が片づけたカゴのすぐ横にあった跳び箱の一番上の段を持ち上げる。

「……………」

そこにはこれ以上ないくらいに落ち込んだ様子で体育座りをして
いるあいの姿があった。

「死んでやるー!!!」

「は、早まるな!!!」

場所は再び屋上に移り、修羅場が展開される。あいはフェンスを越えようと手をかけてよじのぼろうとし、真が必死に彼女の肩を引っ張ってそれを阻止する。

「里中ってアレでしょ!? あのダツサイ子でしょ!? あたし、あんなのに負けたの? あたしの方が、ずっとずっと可愛いのに!!」

あいは冷静さを失っているかのように、頑張って可愛くなったのに愛されなかつたら意味がないじゃんと呼ぶ。

「落ち着け!」

「!?」

真が怒鳴るかのような勢いで叫び、あいがびくつとなくなって動きを止めた瞬間真が力づくでフェンスから海老原を引き剥がす。

「軽々しく死ぬなんて言うな。親が泣くぞ?」

「う、うつく…………う、ううつ…………」

自分をクッションにしてあいを堅いコンクリートから守りながら真はあいにそう言い、冷静さを取り戻したのかあいは泣きじやくり始める。

「あたしね…………」

少ししてあいも落ち着き、彼女は話し出す。曰く、昔はあいはデブ

でドン臭くて、さらに家も貧乏だったためイジメられていた。クラスの子に囲まれて「気持ち悪い」とか「ブタ原」とか呼ばれていた挙句に好きだった子には「こっち見んなよ、菌が移る」とまで言われていた。それは今でも夢に見るそうさ。

「それで、中学になる時、ウチが急にお金持ちになったの」

「ああ、土地をころがしてるとかなんとか……」

「そ。そしたら、やつかみがすごくて……逃げないようにココに引っ越ししてきたんだ」

あいはこの町に引っ越してきた経緯を話し、そこでチャンス、見返す時だと思っただのと話す。愛されるためにダイエツトして体を鍛えて、フアツション誌も読んで。モテるコツや笑顔も全部雑誌で勉強したのだという事だ。

「頑張ったんだな」

「でも、ダメだった」

真が彼女の努力を労うが、あいは沈んだ声で呟く。

「可愛くなきや愛されないのに、可愛くなったと思っても、愛されない。結局、愛されない……他に、とりえなんて無いのに……」

あいは沈み、また今にも泣きそうな声で呟く。

「そんな事はないんじゃないか？」

「え？」

「海老原の魅力が、一条に分からなかったただけだ。俺が言えた義理じゃないけど、焦るなよ」

真はあいを元気づけるようにそう話す。

「アンタは……優しいね。アンタみたいのを好きになれば良かった……」

「そうか？ ま、もう戻ろう。早く着替えたいし、鍵も返さなきやならない」

あいの言葉を冗談と受け取ったか真はあつきりそう言う。と、あいは突然真の手を掴んだ。と思うとその手を引っ張って真を自分の方向にかせる。

「ねえ……あたしたち、付き合おうか？」

にこにここと微笑みながらそう聞いてくるあい。普段なら彼女の押し強さに押し負けてしまうのだが、真はあいの両肩に手を置くと彼女を優しく押し離し、まっすぐにあいの顔を見る。

「今は落ち着いて、よく考えるんだ」

「……アンタって変なヤツ。うん……でもごめん、今は……混乱してる」

笑顔から一変し、あいは悲しげに笑ってみせる。

「今日はもう帰るね……ありがとう」

そしてあいは重い足取りで屋上を出ていき、真も制服に着替えて職員室に体育館倉庫の鍵を返すと家に帰っていった。

時間が過ぎて夜中、真は病院清掃のアルバイトにやってきておりちようどそれが一段落する。と、彼は通路の先に、この前のバイトの時に見た喪服のお婆さんが立っているのを再び発見した。と、そのお婆さんは杖を突いてゆっくり真の方に歩いてくる。

「こんばんは……」

「こんばんは」

喪服のお婆さんは朗らかに笑いながら挨拶し、真も挨拶を返す。

「この間は、ごめんなさいね。あなたのお顔、ジロジロ見たりして……知り合いに似ていたものだから」

「そうですか」

お婆さんの優しく微笑みながらの言葉に真はそうとだけ言う。

「ここで働いてらっしゃるの?」

「ええ。アルバイトで」

「あらそう、偉いのね……私にも、あなたくらいの孫がいてね……今日、遠くに帰ってしまってしまったけど……ここであなたに会ったのも、考えてみると不思議だわ……」

お婆さんの言葉に真は首を傾げる。

「でももう、ここには来ないから……」

「そうですか」

「大きな街じゃないもの、またお会いできるかもしれないわね。私はね、お休みの日に河原で日向ぼっこするのが好きなの。川がキラキラ

光ってね……気持ちよくて……悲しいくらいよ」

お婆さんはそう話し、「それじゃあね」と言うのと真の横を通る形でいなくなる。と、入れ替わるように前方の通路の方から一人の女性が歩いてきた。

「上原さん……」

「あら、ちようどいいところにいるわね。その病室なんだけど……」

小夜子は仕事の指示を出そうとした後、「まあいいわ」と言うところからよう指示を出し、真も清掃用具を持って部屋に入った。

「うん、片付いてるわね……ここ、さつき空いたのよ。床の掃除、お願いね……どうして空いたか、気にしちゃダメよ？」

小夜子は指示を出した後、静かにそう言う。

「分かりました」

それに真が静かにそういうと、小夜子は呆れたようにため息をつく。

「少しは怖がるのかしなさいよ……この患者、今日退院したのよ。死の淵から無事、生還してね」

彼女はこの部屋が空いた理由を説明し、「いう事をちゃんと聞く、いい患者だった」と話す。さらに若いのに社長で、顔もいいし弱音もはかない。甘えない。早く会社に復帰をしたいと、必死だったと話す。「おかげで予定より早い退院になってね。『お世話になりました』って、嬉しそうに頭下げて……すぐ前向いて、歩いて出ていっちゃった。私を……愛してるなんて、バカなこと言ってたくせにね」

小夜子はそこまで言うのと重く息を吐く。

「私を必要とするのは患者の時だけ……結局みーんな、いなくなるわ」「治るのは、いい事では？」

「……子供はイヤだわ。正論言って勝とうとして……へんな事言ったわね、忘れて？」

その言葉に真が聞き返すと、小夜子は彼を少し睨みつける様子でそう言った後くるりと入口の方に身体を向ける。

「この掃除、他のスタッフに頼むわ。アンタ、もう帰りなさい。道も暗いし……こんなところいたらダメよ。私なんか捕まってるや……」

ダメよ」

小夜子は真にもう帰るように言った後静かにそう呟き、最後に「おつかれさま」と言い残すと部屋を出ていき、一応上司に当たる相手に帰るように言われては仕方がないため真もアルバイトを終えて家に帰っていった。

そして翌日7月7日の放課後。

「あっはははマジで長瀬、ばっかでー!」

「ば、馬鹿言うな!」

「まあまあ」

八十神高校二階の廊下。陽介、一条、長瀬、真の四人は珍しくここに集まって談笑しており、陽介が一条から長瀬の話聞き、陽介がからかうと長瀬は顔を赤くして叫ぶ。それを真がいさめる。それが一連の流れとして繰り返されていた。

「あ、いたいた! 椎宮君!」

「ん?」

「この声」

突然聞こえてきた元気な女子の声、それに真が反応、陽介が聞き覚えのある声に呟き、一条がびくつとなる。

「あ、花村。それに一条君に長瀬君。おっす」

「よお、里中」

「さ、里中さん、こんにちは……」

声をかけてきた女子——千枝は陽介、一条、長瀬にも気づいて挨拶、長瀬と一条が挨拶を返すと千枝は突然がしつと真を掴んだ。

「椎宮君、付き合って」

「……は!」

千枝の言葉に真は一瞬のフリーズの後声を上げ、陽介も「な、ええっ!」と呆けた声を上げ、一条は気のせいかわつた目で真を睨み、長瀬は「ん?」と首を傾げる。

「悪いけど、ちょっと借りてくね」

そしてそのまま千枝は真を引っ張って去っていく。

「……え? なにあいつ? 実はそーゆー関係?」

「……あの野郎、協力しろつつつたのに……」

「どうした？ 一条？」

陽介が目をパチクリさせ、一条が身体をプルプルさせながら怨嗟の声を呟くと長瀬は再び首を傾げる。

「えー……つと？」

それから場所は鮫川の土手へと移る。真は目の前で自分に背を向けて「やっぱココがいつかな？」と呟いている千枝をただ見つめていた。

「里中、なんなんだ？」

「え？ ああごめんごめん。特訓だよ、特訓！」

真の問いかけに千枝は振り返ると元気に笑いながらそう言う。

「この前のりせちゃんの新シャドウ、凄い強敵だったでしょ？ もしこれから先もあんなのが出てきたらって思うと、もっと強くなんなきゃって思っちゃってさ」

千枝は真剣な顔でそう言った後、家で練習してたら障子とか破って怒られた。と笑う。

「こーゆーのに修行ってツキモノでしょ！」

「たしかに。日々の鍛練が大事だからな」

「やっぱそう思う!?!」

千枝の言葉に頷くと彼女は嬉しそうに目を輝かせる。

「でね……一緒にやろうよ、リーダー！……ダメかな？」

「ああ」

「やった！ ありがと、椎宮君！」

最初こそ不安そうな目だったが真が特訓に付き合う事を了承すると途端に嬉しそうに笑う。そして千枝が「よーっし！」と気合を入れ、まずは型の確認というように構えを取ると、その時突然真の携帯が鳴り始めた。

「あ、すまん」

「うん」

真は千枝に一言謝ってから電話に出る。

「あ、も、もしもし椎宮!?!」

「花村……どうしたんだ?」

「どーしたもこーしたもねえよ! お前里中とどうい関係なんだ!?! 一条が、昨日の今日で裏切りやがって」とかめつちや暗い表情でぶつぶつ言つててめつちやこえーんだよ!?!」

「え?……」

陽介の電話口からでも分かるほどに必死な声に真の頬も引きつる。

「ん? 相手花村? どったの?」

「すまん、里中。付き合うと言つて早々なんだが……俺は学校に戻る!!!」

「え、ちよ、椎宮くーん!?!?」

千枝の呼びかけも無視して真は大急ぎで学校に戻つていく。それから下校までの間、真は三人に対して誤解を解くことに全ての時間を使う羽目になってしまった。

7月9日、土曜日。日も落ち始めた頃。八十神高校倫理教師にして生徒指導担当である諸岡金四郎は一人商店街を歩いていた。と、ブロロロロというエンジン音が後ろから聞こえ、そう思った瞬間エンジン音は三人を追い抜く。そしてそのバイクは豆腐屋の前で止まり、それに乗っていた二人の人——両方ともレインコートに守られている——がバイクから下りる。

「ありがとうねえ、命ちゃん」

「いえいえ。りせちゃんが元気でよかったです」

バイクに乗っていた青年は命、後ろに乗っていたのはどうやらりせの祖母らしい。お婆さんは柔和に微笑んでお礼を言い、命もそう返す。そして彼女が家の中に入っていくのを見届けてから命は振り返るが、そこでさつきまでの会話を聞いていたらしい諸岡に気づく。

「あれ、諸岡氏!」

「げっ」

しまったと表情を歪める諸岡。雨の中お婆さんとバイクに二人乗

りという状況にあっけにとられてしまっていた。

「今お帰りですか？」

レインコートを着込んだまま笑顔で話しかける。

「あー……まあな。貴様こそどうしたんだ？」

「ああ。諸岡氏は知つてると思えますけど、ここのお孫さんのりせちゃんが入院していて、もうすぐ退院だというので少し病院まで付き合っていたんです。暇だったんで」

「ふん、貴様のような若者が働かんから……」

「あはは。バイト休みなんですよ、今日」

諸岡が説教を始めようとすると思は苦笑しながらそう返し、突如ああそうだ。と思いついたように呟く。

「夕食がまだでしたらよければご一緒しませんか？」

「はあ？……」

命の言葉に諸岡は呆けた声を出し、しかし会って数か月とはいえ彼の飄々とした性格をある程度理解した諸岡は断つても言葉巧みに誘ってくるだけだろうと考え、ごほんと息をつく。

「まあ、いいだろう」

「ありがとうございます」

同行者を得た命は嬉しそうに頷き、二人は中華料理店愛家に向かう。

「……」

諸岡は自分が注文した肉丼を前にして割り箸を割りながら、目の前にある巨大な丼を目にする。

「……それはなんだ？」

「雨の日のみの特別メニュー、スペシャル肉丼ー」

諸岡の言葉にこの店の看板娘——ちなみに諸岡が担当しているクラスの生徒だ——であるあいかが説明する。命が注文したのはそのスペシャル肉丼という代物だ。曰くこれを完食するには、全てを受け入れる「寛容さ」、正しくペース配分する「知識」、肉の群れに突っ込む「勇気」、食べ続ける「根気」、それら全てが必要そうだといいものである。

「一度食べてみたかったんです」

「ふん、話のネタというやつか」

命はそう言つて割り箸を割り、諸岡はふんと鼻を鳴らしながらそう呟いて肉丼を食べ始め、命もスペシャル肉丼に箸を突っ込む。諸岡は自分の分を食べながら命が食べていくのを見るが、見る限り彼の箸には肉しか挟まつておらず、肉・肉・油・肉・油、そして肉。という感じだ。

（ふん、食べきれないわけがないだろう……見ていだけで気分が悪くなりそうだ）

凄まじいポリユームの肉丼を見た諸岡は心中そう呟く。まあ命は見た感じ長身な代わりに痩せ型。とても通常五倍ポリユームのスペシャル肉丼を食いきれるとは思えない。諸岡は心中呟いて自分の肉丼を食べ始めた。

「ごちそうさまでした！」

「……」

そして諸岡は啞然とする。命は諸岡が肉丼を食べ終えるのとほとんど同時にスペシャル肉丼を食べ終えていた。その丼の中には肉片一欠片どころか米一粒残っていない。

「アイヤー！ まさか完食するとはねー！」

約束通り料金タダヨーと言う店主とおー、と言いながらぱちぱち拍手をするあいだ。他の客もスペシャル肉丼の凄さを知っているのだろうか命に拍手を送り、命は「どーもどーも」と拍手に応える。それを諸岡は目を点にして見てしまっていた。

「あー、流石にきついな。結生だったらもつと楽に食べたんだろうなきつと……すいません、お水ください。あとちよつと休ませてください……」

「アイヤー。ゆっくりしてってネー！」

命は少し辛そうに水を注文、あと休ませてとお願い。店主もスペシャル肉丼を完食した命に敬意を評しているのかそう返し、あいかの水を彼のコップに注ぐ。そして店内が再び静寂に包まれてから諸岡

はふうと息を吐いた。

「貴様、一体どこにそこまで入るんだ？」

「え？ ああ、昔から結構食べる方なんですよ」

妹には負けるけど。と笑いながら命は諸岡の質問に答える。それに諸岡はまたため息をついた。

「……本当にお前は変わった奴だ」

「そりやどうも」

彼の呆れたような言葉に命はまた笑う。

「まあ、だからこそあんな変わった連中に慕われるんだろうな」

「はい？」

「貴様の後輩、椎宮真に花村陽介、天城雪子に里中千枝、巽完二だ。よく会っているのを見かける」

「あく。まあそうですね」

気が合うんですよ。と命は笑顔で言っただけ。

「気が合う、か……」

諸岡はそう呟いてふうんと唸る。

「ワシは、学生というのは色々問題を起こす。人として大事な倫理を知らんからそういう問題を起こして平気な顔をしていられるんだと思っていた」

諸岡は突然語り出す。

「だが貴様は不思議だな。わしにとっては腐った蜜柑帳に書いておくべき相手のはずだが問題を起こすとは全く思えん。逆に信じられる相手だと思えてくる……以前貴様は言っていたな。『教師は人を教え導くもの。ですが生徒からも教えられ導かれるもの』と」

「はい」

命が以前林間学校の時に言っていた言葉を諸岡は思い出す。

「わしは貴様を生徒だとはこれっぽっちも思わんが、貴様の誰とでも偏見なく接する姿は見習おうかと思わんでもない」

「それは光栄です。諸岡氏のような立派な教師を導けるとあれば生徒冥利につきますよ」

「生徒だとは思わんと言っただろう？」

命のふざけたような言葉に諸岡はふんと鼻を鳴らして帰す。そして命の腹がこなれ彼が動けるようになってから二人は愛家を出ていく。まだ雨は降り続いていった。

「まだ降っているか……」

「さつき店内のテレビをちらつと見ましたけど今日は終日降り続いて、今晩は霧が出るらしいです」

「そうか」

諸岡が雨に表情を歪め、命がそう説明をすると自分は全く気付いていなかったテレビ番組からの情報収集能力に少し感心する。そのため彼が真剣な表情かつ小さな声で「気をつけないとな……」と呟いているのには気づいていなかった。それから命は店の横に止めていたバイクにまたがる。

「では僕はこれで。お休みなさい、諸岡氏」

「ああ……おやすみ」

命の純粹な笑顔での挨拶に諸岡も少し照れた様子で挨拶を返し、命が雨の中バイクを走らせて夜の闇の中に消えていくのを見てから、諸岡も再び傘を差して雨の中家に帰り始める。

「……ふん、我ながら柄にもない事を言ってしまった」

雨の中諸岡はそう呟く。しかしその口元には若干にやけのような緩みが出来ていた。

「教師は生徒を教え導くもの、か。確かにワシは生徒が問題を起こせばただ怒鳴るのみだったか」

「少しやり方を変えてみるべきか。と考え、しかし今から間に合うのだろうかとも考える。」

「……いや、奴ならば恐らく『変わろうとする思いがあるなら大丈夫』とでも言って笑うのだろうか」

そこまで考えると諸岡は再びククツと笑った。いつの間にか自らの考え方の参考にまでするほどに命の考え方に染まってしまっている。しかし不思議な事に悪い気はしない。そんな思いが心の中に染みわたっていく感覚を覚え、諸岡の頬がまたも緩む。

「……」

その油断と、この雨音のせいだろうか、

「む？」

諸岡は何者かが背後から近づいてくるのに気づくのが遅れてしま
い、

「がっ?!?!」

気づいた時には、彼は後頭部に何か強い衝撃が叩き込まれたのを感じ、その威力に諸岡はなすすべなく前に倒れ、持っていた傘が吹っ飛んで彼は雨ざらしにされる。

(い、つたい、な、にが……)

諸岡は何が起きたのか理解できず、ただ濡れた地面に倒れ込み振り続ける雨に身体を打たれていくのみ。

「く、くくく、ざ、ざまあみろモロキン……俺を馬鹿にした罰だ……」

何か自分を嘲るような声を諸岡は聞く。普段なら怒鳴り上げてやりたいが身体に力が入らず、声を出す気力もない。後頭部に熱いほどの痛みを感じながらも身体からは少しづつ力が抜けていき、目の前が暗くなつていく感覚を彼は覚えていく。

(う、く……)

雨に濡れていく以外に身体が冷たくなっていく感覚を彼は感じる。その頭上ではまだ嘲るような笑い声が響く。と、その時突然彼の視界を真っ白な何かが覆う。

(きり、か?……)

先程命は、今晩は霧が発生する。と言っていた。このタイミングで霧が出てきたらしい。

「諸岡氏」

(!)

突然聞こえてきた声、まるで命のような声に遠のきかけていた諸岡の意識が一瞬戻る。頭上からの嘲る声が聞こえてこない、その代わりに彼の目の前に一人の少年が姿を現した。黄色いマフラーを首に巻き、左目には泣きボクロがついている。命とは似ても似つかない、しかしどこか命を思わせるような面影があった。

「申し訳ありません。命君の友達であるなら、助けたい……けど、今

の僕は現実世界に干渉する事が出来ない。今の僕にあなたを助ける事は出来ません……」

(ふん……また奴の友達、というやつか……)

「ええ……そして、本当にごめんさい。今の僕ではあなたの『死』の運命を変える事は出来ない」

(小童が。やはり子供は未熟だな)

未熟という問題ではないが、ついそんな毒舌を吐いてしまう。それに少年はくすつと笑った。

「まあ子供と言つてくださつて結構ですよ……諸岡氏、命君の友達であるあなたを今死から救う事は出来ません……ですから」

少年がそう呟いた瞬間、彼の背後に何かが現れる。銀色の獣を思わせる仮面をかぶり、無数の棺桶を背負った黒い衣をまとつ者。まるで死神だ。

「せめて、これ以上苦しませないよう……安らかな死を……それが僕、かつて全ての人間を滅ぼそうとした存在、デス……いえ、命君の親友、望月綾時。その魂の一欠片が行える事です」

少年——綾時は悲痛な表情で呟き、タナトス、とギリシア神話で死を司る神の名を呼ぶ。と、彼の背後に立っていた死神はゆっくりと剣を抜くとそれを振りかぶる。そして死神が剣を振り下ろすと共に、彼の視界は真つ暗に染まっていく。しかし苦しみは感じることもなく、まるで魂がなんの抵抗もなく身体から離れるような感覚を彼は覚える。

(命……ワシはどうやら変われなかつたようだ……だが……貴様に会えてよかった)

そんな思いを胸にし、諸岡金四郎は意識を手放していった。

第三十三話 July Tenth

7月9日。ここ数日雨が続いており家で見た天気予報では今夜は霧が出るという予報を聞く。そして夜中、真は外で霧が出ているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始めた。マヨナカテレビだ。しかしそれは砂嵐を映すのみで他には何も映らなかった。

(……よかった)

真は安堵の息を吐いてマヨナカテレビが消えていくまで何も映らないことを確認し、それから安堵と同時に疲れが出てきたのかふわあと欠伸をすると寝巻きに着替えて布団に入り眠りについた。

その翌日、7月10日の朝。サイレンが遠くから聞こえてくるのを真は自室で聞く。

「何かあったのか?……」

殺人事件は食い止められたと昨夜確認した。だが妙な胸騒ぎから真はつい、そんな言葉を口にしてしまう。その時、携帯電話が鳴り始めた。

「……里中?」

携帯の液晶画面に表示されている名前を見て真は眩き、電話に出る。

「た、た、たいへん!」

「どうしたんだ?」

それと同時に千枝の声が電話口から聞こえてきた。その声はとても慌てており、真がどうしたのかと尋ねると千枝は「商店街のはずれで死体が見つかったんだ」と話す。

「何!?!」

「ね、なんで!?! だって、あたしたち……とにかく、ジユネスで待つてるから、急いで来て!」

「分かった」

千枝は焦ったように叫ぶが、皆で話せばいいんだという事を思いついたのかジユネスで待っていると告げる。それに真は頷き、電話を切

ると急いで着替えて、階下にいた菜々子に「少し出かけてくる」と伝えてから、家の前に止めている原付に跨りジユネスに向けて走っていった。

「椎宮、こつちだ!」

陽介の呼び声を聞いて真はいつもの席に辿り着く。既に陽介、千枝、雪子、完二が揃っていた。

「すまない。原付で急ごうと思ったんだがガソリンが途中で切れてしまった……」

「……お前も焦ってたんだな。まあ、無理もねえか」

真の言葉に陽介も神妙な表情で呟く。残るメンバーも神妙な表情になっているのを真は見回し、そこで違和感に気づく。

「花村……先輩は?」

命が来ていない。それに気づいた真が陽介に尋ねると雪子がうつむき、陽介も歯を噛みしめる。

「命さんは……警察に連れてかれたらしい」
「!?」

陽介からの報告に真が目を見開く。

「ついさつき軽く皆に説明したんだが……さつき、俺現場見に行ったんだ。死体はアパートの屋上の手すりに逆さにぶら下がってた……そして、殺されたの……」

陽介はそこまで話した後、殺人の事を再び話すのが辛いのか一瞬口を閉じ、だが意を決したように真を見る。

「『モロキン』だ」

「モロキン……諸岡教諭!」

陽介の出した名称を真は反芻、八十神高校倫理担当であり生活指導担当、さらに自分達のクラスの担当である諸岡金四郎を指すものだと思いつくと驚いたように叫ぶ。

「ちよ、ちよつと待ってくれ……それと先輩が警察に連れていかれるのに何の関係があるんだ!」

真は口をパクパクさせた後、普段の冷静さとは打って変わって取り乱したように陽介の肩を掴んで叫ぶ。と、雪子がうつむいた様子でぼつり、と口を開いた。

「今朝、旅館に警察の人がやってきて……命さん、昨日の夜愛家で諸岡先生と夕食食べてたらしくって、重要参考人とかって……」

「なんスかそれ！ 大先輩が疑われてるってんスか!？」

「命さんが犯人なわけないじゃん!!」

雪子が心配そうな声で呟くと、そこまではまだ聞いていなかったのか完二と千枝がテーブルを叩きながら立ち上がって怒鳴り声を上げる。

「落ち着け!!!」

と、その瞬間真が声を張り上げて場を制止させ、全員目が真の方に向く。

「先輩なら大丈夫だ。それよりも、諸岡教諭が殺されたっていうのは……」

「あ、ああ。そうだな、今はその話だ」

真はここに全員集合した本題を出し、陽介も頷くと全員改めて席に座る。

「だが、諸岡教諭が……殺された……」

「んだよコレ……狙われんのは、テレビ出た奴じゃねえのかよ」

席に座ると共に真が呟くとうつぶむいた完二が両手をぎゅっと握りしめながら声を絞り出し、「夜中の番組も普通のニュースも、モロキン出てるとこなんて見たことねえぞ!？」と叫ぶ。陽介も「くそ……どうしてこんな事に……」と悔しそうに声を漏らした。

「色々、分かったような記してたけど……結局、全部ただの偶然だったのかな……」

「マヨナカテレビも、本当は関係ないのかな……」

千枝と雪子も意気消沈した様子で呟く。

「ちつくしよ、ここまでできて振り出しかよ!!」

陽介もパンツと苛立ちをぶつけるようにテーブルを叩いて声を荒げる。その後「やっぱり警察も捕まえない犯人を俺らで、なんて

……無理だったのか？」と彼までも弱音を吐き始めた。

「……いや……まだ、諦めるには早い」

だが、真がそこに言葉という一石を投じる。

「つたりめーだぜ、椎宮先輩！」

一番に完二がそれに反応。「そもそも警察にや無理だろうって始めたんじゃないスか」、「このまま俺らが腰砕けんなったら犯人は野放しになっちまう」と陽介達を鼓舞する。

「泣きゴト言ってる場合じゃねえ……俺らなりのやり方で、前進むしかねえんだ」

完二は強い気持ちの籠った言葉を彼らに叩きつけた。

「完二くん……」

「ふん……完二のくせに、生意気だ」

雪子が声を漏らし、陽介が笑いながら悪態をつくると完二は「なんスカそれ！」と叫ぶ。しかし、これで普段通りの空気が戻ってきた。

「なあ、もしかしたらだが……クマなら何か知っているんじゃないか？」

「おう。下向いててもしょうがない。とにかく、行ってみようぜ！」

すかさず真が提案すると陽介は頷き、彼らはテレビの世界に行こうとテレビコーナーへと向かう。

「……あれ、店員さんがいる？」

しかしこんな時にテレビコーナーに店員——何か話している様子の男性店員と女性店員だ——が来ていた。千枝が呟き、陽介も「珍しいな」と呟くと店員に何かあったのかと声をかけた。それに女性店員が「陽介君」と返すと男性店員が「店長から何か聞いてない？」と聞いてきた。

「何か？……なんかあったんすか？」

「いや、さつきから売り場に妙な着ぐるみがいるんだけどさあ……今日、何かのキャンペーンだったっけ？」

「着ぐるみ？」

「熊田〴〵さんとか言うらしいんだけど……」

男性店員と女性店員がそう言い、それから二人は「そろそろ持ち場

に戻らない」と言って歩き去っていく。

「熊田?……」

陽介もその男性店員のいうキャンペーンや熊田なる人物に心当たりがないらしく腕を組んで考え込む。その時千枝はふと左を向き、その瞬間ぎよつとした目を見せた。

「う、うわ、居る!!」

千枝が叫び、全員が千枝の見ている方を見ると全員が目を見開く。

「おおーう。なかなか、ツボにクルクマねー」

そこにはマツサージチェアに腰掛けて楽しんでいるクマの姿があった。随分マツサージを堪能している様子だ。

「お、おまつ……何でココに……」

「やつと、来たクマなー。待ってたクマ」

「クマさん、出ちゃっていいの!?!」

「つか、出れるんかよ!?!」

驚いてクマに詰め寄った陽介、雪子、完二がクマに問いつめる。

「そりゃ出口あるから出れるクマよ」

それにクマは当たり前な事を言うように返した。曰く「今までは出るって発想がなかっただけ。しかしみんなと一緒にいるとこちら側に興味が出たので出てきた」とのことだ。

「でも考えてみたら行くところないし、戻るのも勿体ないし、ここで待ってたクマ」

そう言い、「さつきお名前訊かれたから、〃クマだ〃って言つといたクマ」と話す。それを聞いた千枝が「〃熊田〃、ね……」と呆れたように呟いた。

「まあ、その話は後に置いておこう」

「そうだ、訊きたいことあるの!」

流星に呆れた様子の真が、クマの現実世界デビューは置いて本題に入ろうとし、雪子がクマに訊きたいことがあるのと言う。

「クマさん、いつからここに? 向こう側に、誰か来なかった?」

「? こっちの霧晴れるまで中にいたけど、誰も来なかったよ?」

雪子の問いにクマはそう返し、陽介が「ほんとに誰の気配もなかつ

たか？」と怪しむように言う。クマは憤慨した様子で「居なかった！相変わらずクマだけでした！」と念を押すように言う。さらに陽介は鼻が詰まっていたのかも疑うがクマは独りだった。だからこつちに来たのだと叫んだ。そしてここまで疑われると傷ついたのか「前から探知能力落ち目ですし、信じてくれなくてもいいですけどね」と拗ね始めた。

「いや、俺はクマを信じるよ」

「センセイは優しさで出来てるクマな……」

真が微笑を浮かべながらクマを信じると宣言するとクマは嬉しそうに笑う。

「でも確かに、昨日のマヨナカテレビには何も映んなかったしなあ……て言うか、よく考えたらさ。クマくんが何も感じてないわけでしょう？」

「……もしかして、諸岡教諭は『あっち側』に入らなかつた。という事か？」

千枝の言葉を聞いた真が気づいたように呟く。

「んー……どうなってんだ？」

陽介も考え込む様子を見せるが、クマが空気を読まずに「どっか行きたいクマ！」と言い始める。それに完二が呆れた様子で「帰る気なしか。どこに行きたいんだよ」とクマに言う。と、クマはマツサージチエアから降りて真に何か手渡してきた。

「……これは、メガネか？」

渡されたものを見た真が呟き、クマはこくと頷く。クマ曰く「これからはりせがクマ達をバックアップしてくれるので、自身は皆と一緒に前線で戦うのだ」ということだ。

「戦ってよし、守ってよし、笑顔もよしの『クマ・スペック2』！ 参上クマ！ 今ここに、新たなクマ伝説が幕を開けるのだー!!」

「伝説……おおー」

クマの発言に雪子が感動したような声を漏らす。と、そこで気づいたがいつの間にか辺りに女性客や小さな子供達が集まり始めていた。「やばい、人目引いてる……クマお前、のびのび騒ぎ過ぎなんだよ！

と、とにかく、移動だ！」

陽介がそう言っただけで彼らはクマを連れてその場を離れ、フードコートへと移動する。

「もう一回、しつこく確かめるけどさ。あっちの世界の霧が晴れた時まで、中にはお前だけだったんだな？」

「そう言ってるクマ」

まずテレビに誰も入っていない、という大前提が間違っていないか。陽介が最終確認を取るとクマはそれを肯定する。

「マヨナカテレビにも映ってなかった……」

「どういう事ツスカ？」

千枝が呟き、完二がぼやくと陽介も「分かんねー」と困った様子で呟く。

「けど、どうやらモロキンは、そもそもテレビに入れられてない……それだけは確かみたいだ」

「なら、こっちで殺されたって事？　なんで犯人、モロキンだけテレビに入れなかったんだろ？」

陽介は諸岡がテレビに入れられた、ということはない。と判断、千枝は何故諸岡はテレビに入れられなかったのだろうかと疑問を漏らす。

「……入れる気がなかった。というのはどうだ？」

「入れる気がなかった？……つまり、始めから別扱いって事か？　なんでだ？」

「こういう言い方はしたくないが……今までの事件が実験だったとしたらどうだろう？」

「実験？　天城先輩や俺らが？」

真の出した推理に陽介や完二が首を傾げる。それに真は「ああ」と頷いた。

「まず前提として、犯人は諸岡教諭に恨みを持っていたでしょう。その犯人はなんらかの要因でテレビの中の世界を知った。そして、山野真由美アナと小西早紀先輩をテレビに入れて殺した」

小西早紀の名前が出た時に陽介の顔が一瞬曇る、が彼は顎で、続け

てくれ。とジエスチャーを示した。

「まず、テレビに入れられる＝死ぬ。それを最初に犯人が知らなかったとしたら、山野アナの遺体が出た時に知ったとしたら……いや、それがたまたまだったかもしれない。と犯人は思ったのかもしれない」
『……』

真の説明に皆が難しい顔で彼に注目する。

「犯人は次に小西先輩をテレビに落とした……これでまた遺体が出れば、テレビに人を入れればその人物の謎の変死体が出現する。という結論が出る」

「小西先輩は、実験のために殺されたつてののかよ!？」

「テレビに映った人物を狙ったというのも、ただ単に獲物を見繕うのに都合が良かっただけかもしれない。ふとテレビを見た時に町の間が映って、”ああ、こいつでいいか”くらいの気持ちだったのかもな」

「そんな……」

真の仮説の説明に陽介と雪子が反応する。

「だが、小西先輩の遺体が出た移行。つまり、天城からはテレビに入れても変死体は出ない」

「そっか！ あたしらが助けてるもんね！」

次の説明には千枝が反応した。

「んで、実験が上手くいかなかった、モロキンに恨みを持つ犯人は本命であるモロキンだけあしくじらねえように外で殺りやがったつてわけか……ん？ 待てよ?」

完二は吐き捨てるような口調でそう結論を出す。が、次に待てよと漏らした。

「つてこたあ、これで犯人の目的は達成されたつて事ツスか？ 人殺されといてこういう言い方すんのも腹立たしいツスけど」

「この推理が正しければ。だが……これは、何故諸岡教諭だけがテレビに入れられなかったか。という疑問を解決するための推理だ。ただ単純に無差別に相手を狙う愉快犯だったとしたら……今まではふざけてテレビに入れていた。が、今度はやり方を変えたとしたら

……」

完二は悔しそうに頭をがりがりとかくが、その次の真の真剣とかややこしい事になったというような表情を見ると頬を引きつかせた。

「ちよつ……もしそうなら、もう犯人を押さえないと防ぎようがねえぞ!」

「とにかく、今回の推理は正直自分に都合よく考えた推理だ。当てにせず、まだ事件は続いていると考えた方がいい」

真は今回の推理が都合のいいものだとして切り捨て、まだ事件は続いているという前提にした方がいいと忠告する。

「そうになると、やっぱ手がかりあるよね……りせちゃん、そろそろ話聞けないかな」

「そうだな……それに期待するしかねーや」

千枝がりせに話を聞けないかなと呟き、陽介も今のところ唯一の手がかりとなるそれに期待するしかないと頷く。

「……ハア……それにしても暑っクマー」

と、今まで話に参加していなかったクマが、この夏の暑さに負けて声を漏らす。

「……取る」

そして驚くべきことを言い出した。

「取るって、まさか『頭』か?……」

陽介がそう聞かす早いかクマは自分の頭に手をやる。が、素早く陽介がその頭を押さえつけた。

「やめろよ、子供見てんだろ!」

バンツと音を立ててクマの頭を押さえつけ、「中身カラッポで動いてるとかトラウマ残るっての……気イ遣えよ」とクマを叱るかのように入る。と、雪子が「元に戻ってよかったね」と毛のフサフサ具合も一緒に安心したように言い、完二がフサフサな毛並みを見て「触っていいか」と尋ねるがクマは駄目とすげなく断る。

「てゆーか、ふふーん。クマもうカラッポじゃないクマよ。チエちゃんユキちゃん逆ナンせねばって、復活頑張って、中身のあるクマに

なったクマ！」

クマの言葉に千枝が「はいはいエライよくやった」と苦笑交じりの棒読み気味に返し、雪子は「逆ナンいつまで引つ張る気！」と叫ぶ。「だいたい、中カラツポポなのに、頭開けたって暑さ関係ねーだろ」

「だからカラツポポじゃないってーの！ あーっち、もう限界クマ……」クマはそう言うや否や頭の後ろにあるファスナーに手をやり、陽介達が慌てているのをよそにファスナーを開ける。その中から出てきたのは金髪碧眼に細見の美少年で、皆が唾然としている目の前でクマの中から出てきた美少年はテーブルの上に置かれていた缶ジュースを美味しそうに飲み干す。

「ねえ、チエチャン、ユキチャン」

「は、はい？」

「着るものとか、ないかな？ ボク、生まれたままの姿だから……」

金髪美少年はそう言うが、千枝は呆然とした様子で「ほんとにクマくん？」と尋ねる。雪子も「ええと……」と言葉を失っていた。

「てか、生まれたままとか言った!?! や、ここで全開とかダメだから！ 着るものだよね？ い、行こう、とにかく……」

と、クマの台詞を思い出した千枝が顔を赤くしてそう言い、女子二人がクマを連れて階下の衣料品売り場へと消えていく。

「アイツが……クマ？ カラツポポじゃなくなっちゃって……中から〃ニンゲン〃 生えてきたってのか？」

「どんだけありえない生きモンだよ……つかアイツ、ほんとなんなんだ？」

「……まあ、今に始まった事でもないだろう？」

完二と陽介が呆然とした様子で呟くと真が苦笑気味にそう言う。陽介もその言葉に頷き、「こっち出歩かれるならクマのままよりはマシだな」とポジティブな意見を出した。

「ていうかそうだ。りせの話聞こうって流れじゃなかった？」

そして陽介は話の流れを元に戻す。

「俺達で、先にりせんとこ行こーぜ。クマは……まあ、二人もついてるし、大丈夫だろ」

「ああ。一応メールしておく」

陽介が先にりせの所に行こうと言い、真もその案に賛成すると一応雪子と千枝にその旨のメールを送っておく。と、二人からは「すぐ行くからりせちゃんちの近くで待ってて」という返答を貰い、男子三人は商店街の四六商店に足を運ぶことになった。

「……ん？……つ、椎宮！ あれ!!」

「どうしたんスカ、花村先輩？」

「あれ！ 四六商店の前!!」

商店街を歩いてる途中、陽介が突如四六商店を指差しながら叫び、完二が陽介に尋ねると彼は慌てた様子でそう指と声で示し、二人も陽介が指す方を見る。そこには見覚えのあるバイクが停められていた。

「あ、あれ、先輩の！」

命のバイクだ。それに気づいた真は四六商店に走り出し、陽介達も慌てて後を追う。

「ん？」

と、ひよこつと。四六商店から命が顔を出した。

「やあ真君、花村君に異君も」

「先輩！」

「命さん、天城から警察に連れてかれたって……」

「だ、大丈夫だったんスカ!？」

平然としている命に対し慌てる高校生三人組。それに命もけけらと笑った。

「そんな別に。僕前に堂島さんと話して、今回のが同一犯による連続殺人だとしたら最初の方でアリバイしっかりしてるって分かってもらえてるから容疑者として疑われたんじゃないよ。ただ、何時頃諸岡氏と別れたのか。その時怪しい人影とかを見なかったかって聞かれただけ……」

命は最初こそ明るく笑いながらそう言っていたが、その言葉が終わりに近づくとつれ、表情が悔しそうに引きつっていく。

「全く感じなかった……怪しい人影も、気配も、殺気も……今回の事件

はテレビを使っている、りせちゃんを助けられたから今回も無事だつて……油断しすぎてた……まさか、僕の目の前で殺人が起こされるなんて……あの時、諸岡氏と別れてなければ……」

ギリツ、と命が歯を噛みしめる音が真達の耳に聞こえた。が、命は首を横に振ると弱々しい笑みを見せる。

「……ごめん。たればなんて言ってもしようがないよね。ところで皆はどうしたの?」

「ああ、りせちゃんから話を聞いてみようかと思ひまして……ってそういうやりせちゃんって病院に……」

「あ、心配ないよ。今日退院して、ついさつき帰ってきたみたい」

命の問いかけに陽介がそう返答し、そこで思い出したようにりせが入院していたことを呟くが、命はそれに対して心配ないと返した。

「じゃあ今は天城さんと里中さん待ち?」

「はい」

「じゃ、僕も一緒に行こうかな」

命もりせに話を聞く班に合流。それから特別捜査隊男性陣は四六商店の前でアイスや飲料水を飲みながら時間を潰す。完二が「ホームランバーの季節ツスねー」と言いながらアイスを齧っているがもう何も食べており、陽介から「腹壊すぞ」とツツコミをくらっていた。

「ごめん、遅くなった……って命さん!」

「だ、大丈夫でしたか!」

千枝と雪子も合流するが、彼女らも命を見ると慌て出す。それに命も「大丈夫大丈夫」と笑いながら返した。

「つたく、クマきちの服なんか別になんでもいいーだろ?」

陽介が呆れたように呟く。その後ろで命が「クマくん?」と首を傾げたため真が短く、クマが現実世界に出てきた事と、どういう理屈か人間が中に生えてきた事を伝える。

「い、いやあ。あはは……」

苦笑している女子二人の後ろから、胸元の開いたシャツを着た美少年が現れた。胸には造花だが深紅の薔薇を差しており、その優れた容姿もあいまってイメージは童話とかに出てくる王子様と言っても過

言ではない。

「のあ……ク……クマか、お前？」

「イツエース、ザツツライト。イカガデスカ？」

驚いた陽介にクマはなんか似非外国人っぽい言葉で返す。

「ブリリアント！」

「いや命さん、合わせなくていいですって……」

「あ、センパイ！ さっきいなかったから心配してたクマよー」

命がとある先輩の口調を真似すると千枝が呆れ気味にツツコミ、命の姿を見つけたクマがわーいというように両腕を掲げて笑顔を浮かべる。

「あたしもビックリだけどきー。間違いないあのクマ君だから」

千枝曰く「見る物全部が新鮮なため、大騒ぎで大変だった。女性もののフロアではコーンして訳わかんない事を叫ぶ」とのことで大変だったらしい。そう話し、クマに対して「この姿の時は本能のままはっちゃけたらダメだからね！」と釘を刺す千枝に項垂れるクマを雪子が「本当に初めてなんだから仕方ないよね？」と慰める。千枝も「別に許さないとはいってないでしょ？」と言うとクマは「嫌われたのかと思ってドキドキしちゃった」とまた笑う。

「まったく……大人しくしてりや、見た目は可愛いのに」

その無邪気な姿に千枝は思わず笑みを浮かべていた。

「カワイイ……か？ お前、どう思うよ、完二？」

「あ？ なんて俺に訊くんスか？」

陽介が完二に、クマがカワイイかと話を振り、完二がなんで自分に訊くかと尋ねると陽介は「お前の好みかと」と言う。それに完二は頬をヒクヒクさせながらなるほどねと頷き、「つまり殺されてえっつー事スね？」と陽介相手に凄む。それに陽介が途端に慌て出すとツボに入ったのか雪子が吹き出す。

「笑うとこじゃねっスよ、天城先輩……」

「ご、ごめ……むぶふっ……」

「雪子こうなるとダメだから、許してあげなよ」

「あーお、キミたち！ ボクのために争わないでよ、ベイビー？」

「るせーっ！ てめ、ケンカ売ってんのか!？」

なんかコントのようなどたばたが始まった。

「やれやれ……もう話が進まないし。巽君、クマくんと一緒にこれでアイスでも食べててよ」

話を進めようと、命が完二に千円札を渡して、クマと一緒にアイスを食べてるように言う。

「そんな、イキナリもらえねツスよ!」

「いやまあ、なんていうか……クマくんをこのまま連れていったらりせちゃん混乱しちゃうだろうし。悪いけど巽君に子守をしてもらおうかなって」

「そっすね。完二、俺からも五百円やるよ。リニューアルしたクマきちの歓迎ってところで」

命が差し出した千円に慌てる完二だが、命は子守をお願いするようなものと言い、それを聞いた陽介もリニューアルしたクマへの歓迎として五百円玉を渡し、「その代わり騒ぐなよ?」と念を押す。

「お、どーしたの花村、急に“先輩”じゃん」

後輩の面倒を見る先輩のような姿の陽介に千枝はからかうように言い、「口じゃ色々言ってもクマくんにも優しいんだ。花村はオトナだね。オトナは細かい事気にしないよね?」となんか含みのある言い方をする。陽介も「何かあんな?」と千枝に返した。

「クマくんの服さ、持ち合わせで足りない分、花村のツケで買ったから」

「……ツケ?……はあ!? ツケ!? なんだそれ、聞いてねーぞ!」

「お金ないんだからしよーがないじゃん! ジュネスのくせに、服高いし!」

千枝の申し訳なさそうな笑みでの言葉に陽介が叫び、千枝も逆ギレしたように叫び返す。

「ツケって……マジでツケたの?」

陽介のすがるような言葉に千枝はこくと小さく頷き、陽介は「俺がバイク買ったばかりで貯金カスカスなの知ってるだろ!」と叫ぶ。

「そーいや先輩、この前花村が壊されたバイクって……」

「あ、うん。修理費はほとんど僕っていうか経費で落としたから実質先輩が立て替えた。流石に可哀想だし、花村君には相場の半額ちよいしか請求来ないようにしといたよ」

その後ろで真と命が以前沖奈市で陽介がバイクを壊した時の対処について話し合う。陽介と千枝はツケの事で言い合いを始め、その間に陽介から何か言われたのかしよげているクマに完二が「ホームランバー食いに行くぞ!」と言って彼と共に四六商店に入っていく。

「……先に行こう。千枝達……長そうだから」

「そうだな」

「そうしょっか」

ふうと呆れた様子で息を吐いてからの雪子の言葉に真と命も頷き、三人で丸久豆腐店へと向かう。

「おや……やっぱ来ましたね」

と、丁度その時豆腐店の中から、以前完二と会っていた謎の少年が現れ、真達の姿を認めるとそう呟く。

「今度は久慈川りせを懐柔ですか?」

「人間きが悪いなあ。友達が退院したんだから、調子がどうか聞きに来ただけだよ」

「……そういう事にしておきましょうか」

少年の言葉に命がにこにこ微笑みながらそう言い、少年も命を真っ直ぐに見て口元に微笑を浮かべ、そう返す。その時、言い争いは終わったのか店員が自分のツケで服を売ったことにぼやきながら陽介が豆腐店前にやってくると少年を見て「完二ん時の……」と声を漏らす。

「あれ以来になりますか。そういえば、まだ名乗っていませんでしたね。僕は白鐘直斗。例の連続殺人について調べています」

「白鐘……先輩に聞いたことがあるね。たしか凄腕の探偵だつて……その若さで大したものだ」

「恐れ入ります」

少年——直斗に対して命が笑みを浮かべてそう言う。直斗は社交辞令と受け取ったのか小さくそう返し、真達に「一つ意見を聞かせて

ください」と話を振る。

「本日早朝に発見された諸岡金四郎さん……皆さんの通う学校の先生ですよね」

「ああ。補足しておけば俺達の担任だ」

「そ、それが何？」

直斗の言葉に真がそう言い、千枝がどことなく焦った様子でそれが何かと聞き返す。

「第二の被害者と同じ学校の人間……世間じゃ専らそればかりですが、そこは重要じゃない」

首を横に振って直人はそう言い、「もつと重要な点がおかしいんですよ」と呟く。

「この人……『テレビ報道された人』じゃないんです」

その口からそう言葉が放たれ、真達は驚きに硬直してしまう。そこにすかさず直斗が「どういう事でしょうね？」と聞いてきた。

「さあ？」

しかし一番に命がすつとぼける。

「……まあいいです。とにかく、僕は事件を一刻も早く解決したい。皆さんの事、注目していますよ。それじゃ、いずれまた」

すつとぼけてきた命に対し、直斗は小さく呟くとそう言って歩き去っていく。

「なんなんだ、あいつ……」

「マヨナカテレビの事を知らずにここまで僕達と同じ推理をしてくるとは……白鐘直斗、なかなかやり手みたいだね」

陽介の呟きに命はそう声を漏らす。

「先輩、白鐘の事を知ってるんですか？」

「ん？ いや、別に面識がある訳じゃないよ。ちよつと聞いたことあるだけ」

真が命に尋ねるが、命はそうとだけ言って煙に巻くような笑みを浮かべてみせた。

「あ、いらつしやい」

とそこに不意打ちのように女の子の声が聞こえ、真達は驚いたよう

に振り返る。そこには今まで散歩にでも出かけていたのだろうか、りせが立っていた。

「久慈川……体はもう大丈夫なのか？」

真の言葉にりせは無言で頷き、それに陽介が「よかった」と安心したように笑う。

「それを確かめに来たの？」

「あ、まあね……」

陽介の反応を見たりせがそう聞き、陽介も「まあね」と返す。とその次にりせが「少し時間いい？」と聞いてくる。曰く「話さなきやいけないと思ってた」だそうで、「今日は店番がお婆ちゃんだから着いて来て」と言う。

それから一行は神社の境内へとやってくる。その合間にちよくちよくと話を聞くなりせは「家にいたことは覚えてるけど、気がついたらもう『向こうの世界』だった」と話し、千枝が「またしても手がかりなしか」とがつくり肩を落とす。

「さつき、白鐘って妙なヤツに会ったんだけど……」

「ああ……事件のこと、色々と訊かれた。でも『向こうの世界』の事は話してない。無駄だと思っただし。あなた達の事も訊かれたけど、適当に言っというた。『ジュネスの屋上で気を失ってた所を助けてもらった』……とかね」

陽介がさつきの直斗の事を聞くとりせはそう話し、陽介も「他に言い方無いよな」と頷く。

「あの……その……」

「……ん？ どしたん？」

突然何か言い淀み始めたりせに千枝が尋ねる。

「あの……助けてもらっちゃって……ありがとね！ 嬉しかった！」

それに対し、りせは突然明るい態度へと急変。助けてくれた事にお礼を述べた。

「やば、カワイイ……あー、今やっとホンモンって実感した。確かに『りせちー』だ」

陽介の琴線に触れたのか彼は照れ、その言葉に、りせは「最近疲れ

ていて少し暗かったから嫌かなと思った」と言い、喋り方が変ではないかと訊ねてくる。しかし続けて「世間的には明るい感じの方がりせの『普通』なのかも知れない」と困惑した様子で話す。りせはどの辺が『地』の自分なのかが分かんなくなっていると説明した。

「……そんなに変か？」

「え？」

しかしその言葉に真が首を傾げる。

「そーそー！ いいじゃん、その時々で」

「うん。無理に決めなくても、誰だっっているんな顔があると思う」

千枝と雪子もそれに賛同し、りせを元気づける。

「そうだ、アレ渡さなきや。クマメガネ。あ、渡さなきやっていうか、

えつと……」

「……こう言い方をしてはなんだが……久慈川、君をテレビに放り込んだ奴を捕まえるために力を貸してくれないか？ もちろん命の危険もある。無理強いはしないし、だからと言って断ったらこれから先事件に巻き込まれた時に助けない。なんて事はしない」

千枝が言いよどむと真が頼むようにりせを見る。

「先輩……私がないと、困る？」

「え、えつと……まあ、人手は多い方が助かるというか……」

「そうだね。そうでなくても、恐らくこっから先はりせちゃんの力が必要になってくる。僕の勘はそう言ってるよ」

りせが尋ね、真が困ったように呟くと命が、この先はりせの力が必要になってくるだろう。という予測を述べる。

「……そうですね。クマのシャドウとの戦いで久慈川が見せてくれたあの力はきつと、この先に必要になる」

「なら、私が仲間になった方がいいでしょ？」

真の言葉にりせは改めてそう尋ねる。それに真は頷き、さつきクマから渡されたメガネを取り出す。

「久慈川、俺達に力を貸してくれ」

「もちろん！」

そう言っつて真が差し出してきたメガネをりせは満面の笑みで受け

取った。

「それ、一応仲間の証っていうか……」

「そのメガネがないとテレビの中ではまともに動けない。まあ詳しくはテレビに入った時に説明するよ」

「ありがとう、先輩。これで仲間、だよな」

陽介が説明しようとするのを引き継いで真が簡単にメガネの効果の説明、詳細の説明はテレビの中ですと言うとりせは嬉しそうに微笑んで頷いた。

「私、明日から八十神高校に通うの。同じ学校。でも私、まだ友達いないから、仲良くしてよ」

りせはそう言い、少し頬を赤く染めながら「それに、恩人だし……」と呟く。

「よろしく」

「こちらこそよろしく、先輩」

真がそう言っつて右手を差し出すと、りせも微笑んで右手を差し出し握手をする。

「けど、こんな時期に転入つて大変だな。事件とか、モロキンとか……それにテストもすぐだし」

陽介が思い出したように呟き、続けてテストという単語を自分で言っつてへこむ。それに千枝も「やるんじゃない？ テストだけはさ」と呟いた。

「ふふ、大変つて。怪物相手に死にかけたことに比べたら、そんなのりせが怪物相手に死にかけたのに、テストで大変なんていうなんて変なのというように笑う。それに陽介達も苦笑を漏らし、陽介が「事件の事は明日改めて、『特捜本部』で相談だな」と言う。

「うーす、調子どうスか？」

そこに遅れてやって来た完二に、りせが話が済んだ事を伝える。そのまま、甘えるように真の腕を取るりせに完二が呆れた視線を向ける。

「お前……なんか前とキャラ変わってねえか？」

「あなたも先輩達と同じハチ校生？ 明日から、私もだから、よろしく

ね」

呆れた完二に対しりせはあつさりそう言う。

「あ？ ああ、そう……スか？ あーと、学年は？」

実は上下関係をきっちりしている完二。年上かどうかはつきりしていないためか微妙に敬語を使いつつ、りせに学年を尋ねてきた。

「真君達を先輩って言ってるんだし、一年じゃない？」

「あ、そうツスね。んじゃよろしく頼むぜ」

命の推理に完二は領き、ならタメ口で問題なしと判断したのかりせにそう話しかける。その後陽介が「クマはどうした？」と尋ねると完二は「向こうで五本目のホームランバー食ってるツスよ」と返し、これからクマはどうするのかと尋ねた。それに陽介が「仕方ないから俺が連れて帰る」と言ってその場は解散になった。

第三十四話 事件解決？そして期末テスト

7月11日。真は普段通り学校に向かっていた。

「よう、椎宮」

と、後ろから陽介が追いつき声をかけてくる。が、本人としては普段通り明るく声をかけたつもりなのだろうがその声は暗く、自分で気づいたのか陽介ははあと息を吐いた。

「……実感湧かないぜ……担任が“殺された”なんてさ。昨日……あんま寝れなかったよ」

その言葉の通りか陽介の目の下には若干クマが見える。

「お前は大丈夫か？」

「まあな」

「まあ……これで凹んじまったら、犯人捕まえらんねえもん……」

「ああ。諸岡教諭のためにも犯人を捕まえよう」

陽介と真はそう言い、犯人確保の決意を固めて頷きあう。

「ん？ 待てよ……」

と、ふと陽介が声を漏らした。

「つてことは、担任が新しくなるのか？ 誰だろうな……」

担任教諭が亡くなったため自分達の担任もまた新しくなるのだろう。それに気づいた陽介は腕を組んでそう呟いた。が、直後「まあ、モロキンより濃い奴なんてそう居るわけないか」と笑い、二人は学校に向かった。

それから始業前、教室は担任であった諸岡が亡くなったという噂でもちきりになっている。と、始業のチャイムと共に女性の教師が教室に入ってきた。

「おつはよお。今日から貴方たちの担任になった、柏木典子でえす」

女教師——柏木は「諸岡先生が亡くなられたので代わりに私があなたの達の相手をする事になった」と甘ったるい声で述べ、次に諸岡に黙祷を捧げます。と言い、クラスの生徒達は目を閉じる。そしてクラススの全員が黙祷を終えると彼女は教卓に腰掛けていた。そして来週の定期試験もちやんとある、という事やらなにやら話し始める。それ

にクラスの生徒が「果てしなくうぜえ……」や「モロキンから柏木つて……どんな濃い味のコンボだよ……」と声を漏らし始めた。

「それとお、一応、言っとくけどお。一年に、例のアイドル……クジカワさん……だっけ？ 入ったけどお。テレビで見るのと、ぜんぜん違うから、がっかりしないようにねー……うふ」

柏木は甘ったるい声でそう言い、次に「りせちーなんて所詮ケツの青いクソガキ」だの言ったりせをこき下ろし、さらに話を続けていく。「……大人気ない教師だな……」

「あはは……」

真がぼそりと率直に感想を呟くと隣の席の千枝も苦笑を漏らした。近くの席で「柏木がりせちーに対して対抗意識を燃やしている」や、「柏木は地味に40過ぎだという噂は本当か」という話が始まり、次に「こないだ本屋でモロキンがりせの写真集買ってるの見た奴いるらしいし、生きてたらりせちーの入学、喜んでたかもな」や「モロキンはムカツク奴だったけど殺されたって思うとけっこ可哀想だよな」という話、さらにはりせのストリップ番組——マヨナカテレビだ——の噂にまで話が広がる。

マヨナカテレビの噂が大分広まってきたことがその会話から伺え、陽介が「放課後集まろう」という話を出すと真達も頷いた。

「あー……来週もう期末かあ……赤、久々にくるな、コレ……」

時間は放課後に、場所はいつものジュネスフードコートへと移り、事件についての話をする前にふと千枝がぼやくと陽介が「しょっちゅうだろ」とからかう。それに千枝が「花村に見せた事ないっしょ！」と叫ぶと雪子が「赤の科目以外はいつも平均点以上だよね」と本人的には助け舟を出す。しかし千枝は「フオローになっただいっしょ！」と叫んでいた。

「あはは」

と、りせが朗らかに笑う。それに千枝が「り、りせちゃんまで……」と流石に落ち込んだ様子で呟いた。しかしそれによりせは首を横に振ると「違うの、ごめんなさい」と言う。

「私……新しい学校でも、どうせ当分は友達うまく出来ないって思っ

てたから……」

「きつかけが事件なんかじゃなきゃ、もつとよかつたんだけどね」

りせは転校してすぐに友達が出来たことを喜んでいたらしく、しかし千枝はきつかけが事件じゃなきゃもつとよかつた。と呟いた。

「てかさう、事件の話だけど。今回のモロキンの件……どう思う？昨日は椎宮が仮説を立てたけど……」

「ああ。今までの事件との共通点だった、夜中の番組に映らなかつたのがやはり気になるな……」

陽介の言葉に真が頷く。クマも「もしテレビの中に入ったならクマが分かるはずだよ。前より鼻、利かなくなってきたけどそれくらいは間違えない」と言う。次に千枝が「死体が見つかったのも、現場の様子も今までの被害者である山野アナや小西先輩と同じだったとニュースで言っていた」と話し、雪子は「どうして諸岡先生が狙われたんだろう」と動機を考える。その言葉を受けて完二は「モロキン恨んでるやつなんざ数え切れねえ」と話した。たしかに諸岡は特に生徒に対して高圧的で、敵を作るタイプだ。だがそこで、りせが「テレビを見て狙いを決めるなら、被害者と面識ない犯人ってイメージ。そういうタイプは動機を考えても意味なさそう」と指摘する。曰く「会った事もないのに意味分かんない理由で恨んでくる人、世の中にはいっぱい居る」とのことと、どこか体験談染みた話し方に千枝が「りせちゃんと言うとリアルだね……」と頬を引きつかせた。

「だが、諸岡教諭の場合、マヨナカテレビだけじゃなく普通のテレビにも出てなかった。やはり諸岡教諭だけは特別に狙われていた、と考えるべきか？」

「椎宮の出した、小西先輩達は実験だったって推理なら筋が通らねえ事もねえしなあ……」

真と陽介も腕を組んで考える。

「しっかし、ウチの高校から続けて二人か……警察、ウチの人間に目星つけて、目え光らしてんだろうな……」

完二の言葉を聞いた陽介がうつむく。

「……俺、白状するとき……正直、心のどこかで、モロキンのヤツが犯

人かもつて……思つてたことあんだ」

陽介はうつむいてそう、懺悔するように呟く。

「ウチからは二人目つていうけど、実際はもつとだろ？ それにあいつ、〃死んで当然〃とか何度も言つてたことあつたしな……けど、疑つて悪かつたなつて……ムカつくヤツだったけど、こんな死に方、あり得ないだろ……モロキンだけじゃねえ……可哀想つつか……なんつか……とにかく犯人、許せねえよ……」

陽介も言葉を受け、千枝が顔を上げる。

「モロキンのためにも、あたしたちに出来る事、やるしかないよ！ こうなると、ウチの学校になんか関係あるつてのが、今んところ有力でしよ!?! なら、あたし達で手分けして——」

「その必要はありません」

千枝の言葉をさええぎり、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「オ、オメエ……」

「白鐘直斗……」

姿を現した少年に完二が驚き、真がその相手の名前をフルネームで呼ぶ。

「諸岡さんについての調査は、もう必要ありません」

「何故だ？」

直斗の言葉に真が尋ねる。と、直斗は「容疑者が固まつた。ここからは警察に任せるべきでしょう」と彼らに告げた。それに陽介が驚いた様子で「なんで、んなことお前が……」と呟く。

「白鐘君は、県警本部の要請できている、〃特別捜査協力員の探偵〃だからでしよ?。」

「先輩!。」

「あなたですか……」

直斗の背後から話しかける青年——命の姿に真が声を上げ、直斗は命をちらりと見る。

「……何故あなたがそれを知っているんでしよ?。」

「ジュネスで働いてたら警察の方々も多く来て、世間話の中からね。それより容疑者が固まつたつて聞いたけど、よければ誰なのか教えて

くれない？」

直斗の射抜くような視線を命は防ぐこともせずを受け流し、話題も逸らす。真達の興味も何故命が直斗の正体を知っているのか、よりもこの連続事件の犯人の方に強くなっている。が、直斗は「僕も名前は教えてもらっていません」と告げた。ただ分かっている事、それは「容疑者は高校生の『少年』」だという事だ。つまり少年法で保護され、個人情報公開されないことになる。

「メディアにはまだ伏せられていますが、皆さんの学校の生徒じゃないようです。ただ、今回の容疑者手配には、よほど確信があるみたいですね……今までの事件と、問題の少年との関連が、周囲の証言ではつきりしているそうです。逮捕は時間の問題かもしれません」

直斗はそう話し、「無事解決となれば、またここも元通り、ひなびた田舎町に戻りますね」と締めた。

「容疑者は……高校生……」

陽介はそう言い、そうかと呟いた後「で、お前は何しに来たんだ？」と直斗がわざわざここまで来た理由を問う。たしかに、元は命がせがんだとはいえ情報は伏せられているのにわざわざ無関係の高校生（以下一名大学生一名人外と思われる存在）に伝えるのは問題になるかもしれない。

「皆さんの『遊び』も、間もなく終わりになるかもしれない……それだけは、伝えておいた方がいいと思ったので」

「おや、それはわざわざどうも」

直斗の言葉に命がへらへらと笑い、お礼を言う。

「……関わった事は否定しないんですか？」

直斗はそう命に尋ねるが、彼の笑みを見るとふうと息を吐いて「まあいいでしょう」と言う。どうやらこれ以上どうこう言う気はないようだ。

「遊び？……」

と、りせが直斗の言った「遊び」という言葉に反応する。

「遊びはそっちじゃないの？」

その言葉に直斗もりせを見る。

「探偵だか何だか知らないけど、あなたは、ただ謎を解いているだけしよ？ 私達の何を分かっているの？……そっちの方が、全然遊びよ」
「こっちゃん、大事な人殺されてんだ……遊びで出来るかよ」

直斗の台詞にりせが静かな怒りを滲ませて反論する。さらに続けて陽介も小西早紀の事を思っているのか、額に皺を寄せながら直斗に反論した。が、その次には優しく笑みを見せ、クマに向けて「それに、約束してるしな」と続ける。

「ヨヨヨースケ……」

その言葉にクマが感動したようにそう呟いた。

「遊び……か。確かに、そうかもしれないですね」

りせと陽介からの反論を受け、直斗は自嘲気味にそう呟く。それを受けた陽介が「容疑者が固まったのでお払い箱になったのか、それで寂しくなってきたか？」と反撃に皮肉るように話す。陽介の皮肉に「探偵は元々、逮捕に関わる事もなく、事件に対して特別な感情も無い」と直斗は語る。

「ただ……必要な時にしか興味を持たれないというのは……確かに寂しい事ですね。もう、慣れましたけど……」

しかし、その次にどこか辛さを押し隠した様子で直斗はそう呟いた。

「謎が多い事件でしたが、意外とあつけない幕切れでしたね……じゃ、もう行きます」

直斗はそう言うのと去っていき、千枝は「容疑者が拳がったって、ほんとにこのまま解決なのかな？」と呟き、陽介も意気消沈したように息を吐くと「さあな」とぼやく。容疑者が拳がったという事で緊張感が無くなったのか、今日は解散となった。

それからしばらく、彼らは事件は捜査の経過を待つしかないため、期末テストも近いので放課後は勉強会を続けていた。そして日は7月17日に進む。場所はジュネスのフードコートだ。

「聞いてくれよ椎宮！ 俺こないだ休んだからさ、長瀬にノート借りようと思ってー。持ってきたんだけど、それが“数1”……二年になつてどんだけ経つと思つてんだよ。しかも“1”をフツーに書く

なよ！」

一条はフードコートの机をばんつと叩きながら叫ぶが長瀬は平然と「借りる奴が偉そうな事言うな」と言い、一条は「借りねーよもう」とぼやく。今日は運動部繋がりで友情を結んだ二人との勉強会だ。

「あーあ。暗記モノはもう終わったし数学だけだったのにさ……樵宮、数学得意？　つかお前たしか中間トップだったよな？」

「ああ」

「あー、マジ尊敬するわ。公式丸暗記でそれなりの点は取るけどさ、数学だけはホント理解できない」

「いいからホラ、俺に教えるよ。世界史と物理と英語と……」

「多すぎんだよ」

真、一条、長瀬はダベるように言い合う。

「あ、偶然」

と、そこに女の子が声をかけてくる。

「里中、天城」

「さ、さささ里中さんっ!？」

「おう、天城か」

真が平然と二人を、一条が里中に焦り、長瀬も平然と雪子を呼ぶ。

「もしかして勉強するの？　混ぜてもらっておっかな」

「え、や、ホント？　全然いーよ！」

「ごめんね、千枝が急に……」

「そ、そんなのホント全然……」

千枝を見て舞い上がった一条は千枝と雪子が勉強会に参加するのを喜んで歓迎し、雪子がぺこつと頭を下げて謝ると一条は「あはは」と笑う。と、千枝は唇を尖らせた。

「まあた、雪子には皆デレデレしちゃうんだから」

「え、ええ!?!　ちよつと待つ……」

「いいもーん。こつちには秘密兵器がいるんだし」

勘違いしてぷいっと顔を背ける千枝に一条が叫び、千枝が言う「秘密兵器」なるものに男性陣三人の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

「はーやれやれ。ついうっかりバイトに入るところだった。花村君にシ

フトじやないってツツコまれなかつたら危なかつたよ……」

「先輩!」

そこに命が姿を現した。

「あ、命さん遅いですよー!」

「やーごめんごめん。ついいつもの癖でバイトの方行ってた」

千枝の笑顔での言葉に命はへらへらと笑って謝る。

「私と千枝、命さんに勉強教えてもらおうかって話になってね。でもどっちかの家だったら集中できないかもって話になっちゃったからここに来たの」

「なるほど。先輩なら楽勝ですよね」

雪子の説明に真が笑う。

「……そんなにスゴイの?」

「俺が前通ってた学校であり先輩の母校で、先輩の親友曰くベスト3位以下になったことなし。ちなみに俺はトップ10前後」

千枝が目丸くして眩くように尋ねると真は平然とそう言い、その言葉に全員が固まる。真は転校して初めての中間テストで学年一位を飾っている。それを上回る順位の成績を持つ、つまり命の方が勉強が出来るという証明だ。それを聞いた瞬間千枝は素早く命の方に姿勢を正して起立、びしっと頭を下げた。

「……利武せんせー! どうかこの迷える子羊をお救い下さいませ!!」

「そんなかしこまらなくっても教えるって。安心してよ、これでも後輩に教えるってのは慣れてるからさ」

「いやったー!」

命からの協力を取り付けた千枝は歓声を上げる。

「いやー、やっぱ頭がいい人って頼りになるわー」

千枝は満面の笑顔でふんふん鼻歌を歌いながら勉強道具を広げていく。

「……椎宮、頼む。数学教えてくれ……今回、里中さんに勝つ」

千枝の台詞がなんらかのスイッチになったか、一条は真に教えを請う。

「ほほう、命さんの力を借りた私に勝とうとな？ いい度胸だよ一条君！」

ただ単に仮想敵にされたとても勘違いしたのか、千枝はさらにやる気に火をつける。そして二人はそれぞれ月光館学園の先輩後輩を先生役にし、やる気の炎を燃やしながら勉強に没頭し始めた。

「えーと……長瀬君、だよね？ 私達も勉強しよつか？」

「おう。世界史と物理と英語、教えてくれ」

「うん、いいよ」

その横で長瀬と雪子もマイペースに勉強を開始した。

それから翌日、7月18日に時間は過ぎる。今日は祝日で次の日から八十神高校は期末テストに入るが、真は家にこもっての勉強ばかりでは息が詰まるため、息抜きに鮫川を散歩していた。そしてふとなんとなく土手から河原に下りると、そこでは見覚えのある老婦人が日向ぼっこをしている。

(たしか、病院にいた……)

真は病院での清掃のバイトを思い出しながら老婦人に近づく。と、その気配に気づいたのか老婦人はゆっくりと振り返り、真を見て少し首を傾げる。

「……？ あら、ひよつとして……病院で掃除していらした？」

「はい」

老婦人の方も真の事を覚えていたらしく問いかけてくる。それに真もこくと頷くと老婦人は嬉しそうに微笑んだ。

「まあ、こんなところで、あなたに会えるなんてね。今日はいいい日だわ……よかつたら、おばあちゃんとお話しない？」

「ええ」

「まあ、嬉しいわ」

老婦人は穏やかに笑った。

「ええと……」

「椎宮真です。椎の木の椎に宮殿の宮。そして真実の真で椎宮真」

「椎宮真……真ちゃんね。ふふ、いいお名前ね。ぴったりだわ」

真は老婦人に名を名乗り、老婦人はぴったりな名前だと微笑む。老

婦人は「ずっとこの町に住んでいるのだけど、あなたを知らなかった」と言うが、真は両親の仕事の都合で一時的に都会から越してきたんだと話す。それに老婦人は「あら、そうなの」と微笑んだ。

「都会から来たなら不便もあるかもしれないけど……いい町だと思うわよ」

「はい、そう思います」

「ふふっ、嬉しいわ。なんだか自分が褒められたようね」

老婦人の言葉に真が頷くと、老婦人は嬉しそうに頷く。と、老婦人は「あら」と申し訳なさそうな声を漏らす。

「私、名乗ってもいなかったわね。私は、黒田ひさ乃というの……死神よ」

「死神？……どういう意味ですか？」

「……ごめんなさいね。つまらない事言ったわ」

老婦人——黒田ひさ乃の名乗った死神という言葉に真がどういう意味かと尋ねるが、ひさ乃はただそう言うだけ。彼女は続けて「まだこの町に慣れてないかしら？」と問うてきた。そして老人特有の暖かな微笑みで「何か困る事があったら、相談に乗るわよ」と言う。

「ふふっ、おばあちゃんて悪いけど」

「いえ。年の功と言いますし、その時は頼りにさせていただきます」

ひさ乃の言葉に真はそう返し、真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、“死神”のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。

「また会えると嬉しいわ。それじゃ、さようなら」

ひさ乃はそう言って歩いていき、真も気分転換の散歩を再開した。

7月19日。今日から八十神高校は週末まで期末テストだ。

「……」

真は今までの勉強の成果をただただテストにぶつけていく。が、その数日の内の何回か、隣の席の千枝が「止まらん、ペンが止まらんぞふははははー！」とかテンション高く言っているのが妙に気になった。そんなこんなでテストは進んでいき、ついに期末テスト最後の教科が終了する。

「終わったー……くあー、も、ちょー眠イ」

陽介はテスト終了の解放感を喜び、欠伸をする。

「につしつしー大変だったようだね花村君。一夜漬けは身になりませんよ？」

と、千枝がにししと笑いながら陽介に話しかけた。

「なんだよその言い方？ よっほど自信があるようだな」

「とーぜん！ 命さんからコツを教えてもらって、雪子ともたつくさん勉強したからね！ もうばつちり!!」

「千枝。さつきから答え合わせ、みんな私と同じ答えなんだよ」

陽介が千枝の言葉にカチンときたのかそう言うのと千枝はびしつとサムズアップをしながら答え、雪子もそう言う。

「うーっス……」

「お疲れさま……じゃないや、こんにちは……」

と、完二とりせの一年生コンビが浮かない表情で入ってきた。

「うわ、まさか里中の代わりの負け組が……」

「何よ英語くらい！ いざとなったら通訳でもなんでもつけてもらおうもんー！」

その眩きにりせが怒りに腕をぶんぶん上下させながら陽介を怒鳴る。

「先輩は？」

「まあ、普段通りかな？」

りせのどこか甘えるような声に真はそう返す。

「普段通りって、中間一位の普段通りってなんだよ……」

「そうなんだ！ さすが、先輩は違うなあ……」

真の言った言葉に陽介が呟くとりせは頭の上にハートマークを飛ばしているような表情でそう言う。と、完二が「も、いーすよ。テストの話は……」と浮かない表情で呟いた。

「それより、事件の方どうなってんスか？」

「そうだな。久々に『特捜本部』に行つとくか」

完二の言葉に陽介が提案、彼らは荷物を持つと教室を出ていく。

「よ、椎宮」

「一条、長瀬」

と、一条が声をかけてきた。

「勉強教えてくれてありがとよ」

「……自信ばつちりのようだな」

一条の言葉に真がふつと笑うと一条はぐつとサムズアップを見せる。

「ま、結果発表を楽しみにしててくれ」

「一条、テスト終わったし少し走ろうぜ！」

「へいへい。じゃな！」

自信満々の一条に対しマイペースにそう言う長瀬。それに一条は笑ってへいへいと言って真達に別れを告げる。それに真も軽く手をあげて返した後、彼らは学校を後にするいつものフードコートへと向かった。

「なんかちよつと、気が抜けたね」

フードコートに用意されている椅子に座ると、千枝がテーブルに肘をついてぼそりと呟く。その言葉が意味するのはテストが終わった、という事だけではなく容疑者が固まった事。千枝は「あたし達にしか解決できないんだ、みたいに気負ってたからさ」と呟く。

「まだ分かんねーよ。逮捕されたわけじゃねえ」

その言葉に対し陽介がそう言い、完二も「情報待ち……ってどこスかね」と返した。

「つたく、容疑者挙がったのはいいけど、どこ行つたんだか……こつち

はもう、クタクタだったの……」

と、いきなりそんな声が聞こえてきた。

「……足立さん？」

「え？ おわつと!? き、君達、聞いてた？」

真がその相手を呼ぶと相手——足立が慌てたように彼らにそう言い、誤魔化すような笑みを浮かべて「事件はもう解決に向かってるから！ 犯人が捕まるの、時間の問題だから。安心したまえ、うん。無差別に人を攫って殺人、なんて絶対許されないからさ！ キバってるよ？」と取り繕うが明らかにどこか誤魔化し気味というか焦ってるというか、そんな空気を感じた特別捜査隊高校生メンバーの視線が足立に刺さっていく。と、足立は「も、もう行かないと！」とやはり誤魔化すようにそう言つて足早に去つていった。

「なあんか、頼りになんねーな……けど、流石に警察で手配中じゃ、俺達の出る幕はないか……」

「そっすね」

陽介がはあとため息交じりに言い、完二もそれに頷くと空気がどんどん重くなつていく。

「そ、そうだ。テストで分かんないところあったんだけど」

と、りせがテストで分らないところがあつたと話題を提起する。

「〃銀鏡反応に使われ、40%溶液がホルマリンとして知られる、化学式HCHOとは何か?〃……だっけな。でさ、〃HCHO〃って、何？」

「ああ、ホルムアルデヒドのことか？」

りせの質問に真が即答。りせは「そうなんだ！」と感嘆の声を上げ、酢酸にしちゃったけど、お酢なワケないよね」と冷静になつてから自分の解答のおかしさに気づく。続けて「完二もこの問題出たでしょ？」と聞くと完二は「完二って呼ぶな」と返す。と、りせはむつとしたように唇を尖らせた。

「完二、私には冷たくない？ 先輩達には鼻血出してんのに」

「は、鼻血つて、オメツ、それどっから!？」

りせの言葉に完二が声を裏返し、千枝が誤魔化すように「勉強なら

雪子に訊いたら？」というがりせは「せつかくなら異性の先輩に訊きたいでしょ？」となんでもない表情で返す。

「先輩、私のこと……迷惑ですか？」

次にどこか悲しげな表情で真にそう聞く。

「え、いや……別に、このくらいなら助けにならん事も……」

なんか押せ押せなりせに真もたじろぐ。千枝が「すげー」と声を漏らした後話題を変えようと「そういえばクマくんってどうしてんのかな？」と言った。と、陽介が「あ、そっか」と呟く。

「連絡すんの忘れてた」

そう言っただけは一つの方に顔を向け、全員が陽介の見ている方を見る。その視線の先ではクマが着ぐるみを着て風船を子供達に配っている。

「住み込みで働かせることにしました。マスコット」

「あーむしろ着せたんすね。逆転の発想だ」

陽介の言葉に完二が感心したように頷く。陽介曰く「あつちに帰んのイヤって言うから、しょーがなく」との事らしく、陽介がしばらく生活費を立て替えるという事を条件に陽介の家に下宿させる事になったとのことで、人懐っこい性格から陽介の母にも気に入られ、陽介の父にも「働かざるもの食うべからず」と、彼が持っていた着ぐるみをマスコットにしてジュネス八十稲羽店に採用されたらしい。

「……暇だから、からかってくツかな」

そう言う陽介に真っ先に千枝が同意して、完二がふかふかのクマに触れないかと呟いて席を立つ。雪子も無言で陽介達よりも早く席を立ち、陽介達はクマの方へと向かう。真も席を立ち、皆の後に続くこうとすると「ね、先輩」と、りせに呼び止められた。

「学校も慣れてきたし、これからはもつと色々、遊びに行きたいなって思ってるの。でね、私ほら、やたら人に知られてて一人じゃ不安だし……それに先輩、色んな事知ってそうだし……」

「ああ。遊ぶなら付き合おう」

「ホント？ やった！」

りせのお願いを真は快く了承、りせは嬉しそうにぴよんと跳ねる。

その屈託のない好意を受け、真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たな絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、「恋愛」のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。

「……なら早速だが、明日日曜だし。どこか遊びに行くか？」

「え？ ホント？ うん！ じゃあ店番が終わったら遊ぼう！」

真の提案にりせは嬉しそうに頷き、二人は連絡先を交換。明日遊びに行くという約束を取り付けたりせは携帯を嬉しそうにぎゅつと握りしめた後、悪戯っぽい笑顔で「じゃ、クマイジリに行きましょ」と言うとクマを呼びながら、現在陽介達と談笑しているクマの方に歩いていく。真もその後続くように歩き出した。

第三十五話 虚構の冒険へ

期末テスト終了から翌日、7月24日。真はりせが店番を終えた後、彼女の強い希望で惣菜大学にやってきていた。

「ふう。もー無理、おなかキツくなってきた……でもすつごい満足したー！ ずっと気になってたんだ、ここ」

りせはふうと息を吐いた後満足そうに微笑み、次に「けど、一人だとホラ、恥ずかしいでしょ？」と恥ずかしそうにはにかむ。

「買い食いが恥ずかしいのなら買って帰って食べればいいんじゃないか？」

「もう、先輩ぜんぜん分かってない」

首を傾げてそう言う真はりせは唇を尖らせ、「この『空気』が大事なんだから。食べればなんでもいいんじゃないの」と熱弁する。それからりせは惣菜大学の商品を見ていき、「実はこういうの……ずーつと憧れてたんだ」と言う。曰くりせの親は厳しかったし、友達もあまりいなかったらしい。「ま、学校になかなか顔出さないんじゃない、しょうがないんだけどさ」とりせは自嘲した。

「て、やめやめ！ 暗すぎるこの話!!」

りせは空気が重くなつたのを感じたのか慌ててその話を打ち切る。

「楽しい話しよ。せっかく先輩と二人なんだし！ 私、この町に来て、先輩と会えて、嬉しいんだもん、ほんとだよ？」

りせは自然な笑顔ではしゃいでおり、真もその笑顔につられたのかふつと微笑む。と、その時りせの笑顔の性質が変わった。

「じゃあまず、好きなタイプから訊いてみよっかな？」

小悪魔のような悪戯っぽい笑顔、それを見た真はびくつとなり、「そうだ。買い物があったんだ」と誤魔化してその場を逃げ出し、りせもきやははと笑いながらそれを追う。それから暗くなるまで追いかけてこになり、真はりせを家に送ってから帰路についた。

それから7月25日。今日は雨で、天気予報によると夜には晴れるだろうが明日は終日雨だそうだ。

「今日はもう止んだけど、明日は終日雨、かあ」

「雨といえば、マヨナカテレビはチェックしておくべきだよね?」

昼休み。教室の窓から見える曇り空を見上げながら千枝が呟き、雪子がそう言う。それに陽介が頷いた。

「そうだな。元々警察の手に負えないような奴だったんだ、念のためチェックしておいた方がいいだろ」

「俺もそう思う」

陽介の意見に真が賛成。後で一年の二人にも言っておくとして、明日はマヨナカテレビをチェックしておく。という事で意見は纏められた。

「ねえねえ!」

と、教室の外からそんな女の子の声が聞こえてくる。

「試験の結果、貼り出されたよー!」

試験結果が貼り出されたらしい。

「うわ〜……やーな時間が来ちゃったな……」

「んっふっふー。さー花村君、今までの努力の成果を確認しに行こうではないか〜」

陽介の言葉に今回自信満々な千枝が得意満面の表情で彼の首に腕を回してそう言う。それから四人一緒に試験結果の確認に向かう。

「んーつと……だー、やっぱ俺駄目だったわ……」

「えつと私は……うん、まあこんなものだよね」

陽介が悔しそうに頭をかき、雪子がうんと頷く。

「ん? あ、あれ?……私の名前、ない……」

千枝は自信の表れか普段自分がいる場所より数段上位の場所を指差し追いながら名前を確認していく。

「あ、あれ? 俺の名前……今回自信あったのに……」

と、その横で同じように普段自分がいる場所より数段上位の場所を指差している一条がそんな声を漏らす。

「い、一条君も?……」

「さ、里中さんも?……」

二人は青くなった顔を見合わせる。ちなみに一条と一緒に来ていた長瀬は大体いつもの場所を確認して「おお、あったあった」と言っ

ている。なお本人はあまり頓着していないが少し順位が上がっていた。

「お、先輩ら。奇遇ツスね」

「ん？ よお、巽か」

と、そこに完二が声をかけ、長瀬が返す。里中と一条は未だ普段より上位の場所を青い顔で確認している。

「せくんぱいつ、結果どうでした？」

「いや、まだ見てない……」

「ああ、んじや俺見てみますよ」

完二と一緒に来ていたりせが真に話しかけ、真がまだ自分の結果は見えないと言うと背の高い完二が試験結果の前を占拠している里中と一条の後ろから真の名を探し始める。

「えーつとせんぱ……ってマジツスか!! 先輩学年トップツスよ!」

「そうか。ありがとう、完二」

「あ、どうも……じゃなくって!? うお、先輩スゲーツス!」

「うおー権宮またトップかよ!」

完二から結果を聞いた真は軽くお礼を言い、そのお礼に完二もどうもと返すがその後「先輩スゲー」と叫び、陽介も歓声を上げる。

「……あ、私の名前あった……順位、ちよつとしか上がってない……」

「お、俺も……同じく……」

その時、里中と一条はようやく自分の名前を見つけ、どきつと膝をついた。

「うううううう……」

放課後、千枝は机に突っ伏していた。午後はテストの返却だったのだが、

「ま、まさか解答欄がずれてたなんてね……げ、元気出して、千枝……」
雪子が引きつった笑みで千枝を元気づける。その言葉通り、千枝は今までにない手応えにテンションが上がり過ぎてしまったのか解答欄をずらして答えを書いてしまい、大量減点をくらってしまったのだ。ちなみにもう一人の手ごたえを感じていた生徒こと一条に關し

ては廊下からの「一条、数学のテスト名前書き忘れて0点にされたんだって!？」という長瀬の笑い声と一条の「馬鹿声がでけえ!!」という叫びから察していただきたい。

「かーッ、やっとなんか解放されたぜー!」

落ち込んでいる千枝は雪子に任せ、陽介は伸びをする。

「なあ、夏休みどっか行かね? バイク、修理から戻ってきたんだよ! しかもなんか買った時より調子いいの!」

陽介は嬉しそうに笑いながらそう言う。その後半の台詞に真は「きつと先輩が修理の時追加メンテお願いしたんだな……」と考える。「あー、バイクの話してるー! いいなあ」

と、りせが話に入り、陽介のバイク破壊の経緯を知っている完二が「単車直ったんスか!」と言う。

「よく蘇ったツスねアレ。大谷先輩ツスよね?」

林間学校を思い出したのだろうか、完二は少し浮かぬ表情でそう言う。

「ん? 花村と大谷さん、なんかあったの?」

と、過ぎた事を気にしてもしようがないと気を取り直したのか千枝が話に入ってきた。

「あー、ナンパ失敗して単車ぶつ壊されたんスよ」

「うっわ! 花村まさかの大谷さん狙い!?!」

完二の間違ってないが間違いを誘発する説明に千枝が叫び、雪子もどこか引き気味で「わ、私、応援するよ!」と言う。

「一切そんな話してねーだろ?!?!」

誤解を一掃しようと陽介が声を上げてツツコミを入れた。

「はあ。夏、どっか行こうって話だよ、海とかさ……電車じゃ辛いけど、バイクなら楽しそうじゃんか」

陽介が本来の話の内容を説明、雪子が「そう言えばずっと行ってないなあ、海」と呟くと千枝も明るい声で「眩しい太陽、きらめくさざ波」とキャッチコピーみたいなのを話し出す。しかしその最後が「ほとばしる肉汁」であり、陽介が「食い気じゃねーか」とツツコんだ。「じゃあさ、私達も免許取っちゃおうのどう? だって紙のテストだけ

でしょ?」

「俺らの歳じやムリなんだよ」

りせの提案に15歳である完二がそう言う。と、りせはにやあと笑った。

「ざーんねん。私誕生日先月だもん。現在16歳」

「きったねーぞテメー!」

誕生日の早い遅いで免許が取れるか決まり、得意気にきやははと笑うりせに対して完二が怒号を上げる。

「あくでも、センパイの後ろつてのも捨てがたいなあ。ギユツてしてあげたい」

「ギユウ!?!」

りせの言葉に陽介が自分達がバイクの免許を取る本来の目的である作戦を思い出す。

「原付は二人乗り禁止だ」

「そういうこつた。まあでも、免許取るつてのはアリだと思うぜ。一週間もありや取れるし」

が、真は冷静にそう返し、次に陽介が免許取るのはアリだと思おうと言う。と、雪子が「お仕事用のだけど、旅館にスクーターある!」と言い、りせも「事務所が貰い物持て余してるから、借りられると思う」と続ける。が、「マネージャーに電話しなきゃだけど」と暗い顔でぼやいた。次に陽介は「里中はなんかねーの?」と、千枝に話を振った。

「原付つてスクーターの事でしょ?」

「50ccならなんでもいって」

「……なら、ある……かも」

千枝の質問に陽介が頷くと千枝はそう言う。曰く「親戚にバイク好きで腐らしてる人がいて、もしかしたら借りられるかも」ということだ。

「やべえ、マジでいけんじゃねーか。全員免許取つて、みんなで海行こうぜー!」

陽介の言葉に真や千枝達が頷く。と、完二がそれに待ったをかける。「クマはどうするんだ」という話だ。それに対し陽介は「じつとさ

せときや『荷物』で通んだろ」とさらつと言い、それに完二が「ぜつてー見通し甘いだろそれ」とツツコミを入れた。

「……いざとなれば車輪をつけて『牽引』というのはどうだ？」

「ぷっ!!!」

続けての真の提案に雪子が吹き出し笑い出すと、千枝が「どこかに笑いありましたか？」と聞く。

「クマさんに……車輪……ぷぷ……ローラースケート……くく……似合うー!」

どうやら勝手に変な想像をして勝手にツボに入ったらしい。

「決めた。私、免許取る!」

りせは免許を取ると言い、「海、プライベートは大分久々かも」と表情を明るくする。と、陽介がはつとした顔を見せる。

「俺今、大事な事に気づいちった……もしかすとコレ……ナマリせちーの、ナマ水着と、ナマで!」

陽介の言葉に千枝が「人のいないところでボヤいてくれる?」と険しい表情でツツコミを入れる。

「ね、センパイは誰の水着姿が楽しみ?」

「あ、えーっと……く、久慈川かな?」

りせの笑顔で迫りながらの言葉に真は頬を引きつかせながら空気を呼んでそう答える。それにりせは頬を赤らめて頷き、「ちやあんと勝負水着、スタンバつとくから!」と言って可愛らしく微笑む。そして千枝と雪子も免許を取るという話になり、夏休みにはみんなで海に行くという事になった。

それから皆で夏休みの話をして時間が過ぎ、翌日の7月26日の放課後。終業式が終了、八十神高校の一学期は本日で最後、明日から夏休みだがあいにくの雨模様だ。

「予報通り雨つと。んじや夜まで続いたら全員マヨナカテレビ、忘れんなよ?」

「分かってるって」

「うん」

陽介が雨模様の天気を見た後念を押すように言い、それに千枝と雪

子が頷く。

「つつても、なんも映らなきやいいんすけどね」

「そだね。久々にスケジュールギチにならない夏休みが過ごせるチャンスだもん」

「まあ、その考えは俺達も同じだ。だが相手はテレビの中に入るなんていう超常能力を持つからな。警察の追跡を振り切る可能性がある……そうなった場合、手がかりを掴めるのはマヨナカテレビぐらいだからな」

一年生コンビがそう呟き、真が注意喚起を行う。それに完二は「分かっているツスよ」と返し、りせもうんと頷く。

「んじゃまあ、出来ればマヨナカテレビにやなんも映らず平穏な夏休みを過ごせることを祈って。今日はとつとと帰るとすつか」

「そうだね。私と千枝はスクーターの免許取る勉強したいし」

「あー、また勉強かあ……」

陽介が平穏な夏休みを過ごさせる事を祈るようにぱんつと両手を合わせ、今日はもう帰ると提案。雪子も頷き、千枝と共に原付免許を取るため勉強に励むと言うと千枝がそう呟く。

「せくんぱいつ。この前免許取ったばかりだし、よかつたらフレッシュな知識での講師役お願いできませんか？」

と、りせがチャンスを逃さず真に甘えるように教えてくださいとねだってきた。

「別に構わない。どうせなら天城と里中も一緒にどうだ？」

「え？ いいの？」

「にしし、そりゃ助かるわ。ありがと！」

真はりせのお願いを快く了承し、りせが嬉しそうに笑顔を見せたかと思うのもつかの間、真は雪子と千枝も一緒にどうだと誘い、二人が賛成するとりせは一瞬でジト目になる。

それから一緒に免許を取った陽介、さらにまだ免許を取れる年齢ではないものどうせ暇だからと時間潰しに参加を決めた完二、要するに特捜隊高校生メンバーでの原付免許取得勉強会がジュネスフードコートで開始され、夕暮れ時になり始める頃に解散。一行はそれぞれ

帰路につく……そして、そのまま時間は深夜まで過ぎていった。真は外で雨が降っているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始めた。

「……鮮明な……映像?……」

マヨナカテレビに映し出されたのは鮮明な映像、すなわちテレビの中に誰かが入っているという事だ。まるでどこかの城のような壁を背にし、少年が立っている。不健康な色白な肌で生気がない暗い瞳をしている少年だ。

「みんな、僕のこと見てるつもりなんだろ? みんな、僕の事をしってるつもりなんだろ?……それなら、捕まえてごらんよ」

マヨナカテレビ特有というか古いテレビでよくある砂嵐のようなザーザー音にかき消されそうなほどか細く抑揚のない声で少年がぼそぼそと呟いた辺りで映像が消える。

「今映っていたのは……一体?……」

映像が映らなくなったマヨナカテレビを見ながら真がぼそりと呟く。と携帯電話の着信音が聞こえ、真はすぐに電話に出る。

「おい、見たか!」

電話の相手は陽介だ。

「今の誰だ? 俺、知らねえよ……ニュースや特番で見かけたか?」

「いや、俺も知らない」

陽介の確認に真が知らないと否定すると陽介は「ゾンビみてえに、やけにテンションが低かったけど」と呟く。と、電話の向こうからクマが「ヨースケ!」と呼ぶ声が聞こえてくる。

「……っと、あー分かったうるせーな! 悪い、クマに代わるわー」

そう言ったところで一瞬電話口に静寂が走り、

「——センセー! クマクマー!」

その後電話の向こうからクマの声が聞こえてくる。

「初めて噂の『マヨナカテレビ』見たクマよー」

テレビの中の住人だったため真達の立場に立ってマヨナカテレビを見ていなかったクマは初めてその立場に立ってマヨナカテレビを

確認。やっぱりこれはテレビの中に入れられた人物、つまり今回の場合はさっきの生氣のない少年の抑圧してる気持ちに、テレビの中の世界が共鳴している現象だと説明する。少なくとも誰かがサツエイしているわけではない、という事が確認できてハッキリスツキリした。ということだ。

「だけど、さっきの子……多分もうあっちの世界に入ってるクマ! どうするクマ!?!」

「決まっている……俺達もテレビの世界に向かうぞ。明日、会議を開くと花村に伝えてくれ」

クマの言葉に真は毅然とした様子でそう言い、それにクマも「さっすがセンセイ、頼れるう!」と言う。クマからの厚い信頼を真は感じ取った。と、電話の相手が再び陽介へと代わり、彼は「もう〴〵入ってる〴〵ってどういうことだ!?! いつもは事前にボンヤリしたのが映るだろ?」と問うてくる。

「てか、あいつが言ってた台詞……聞いたか?」

だがその疑問に対する考察を考える間もなく陽介はそう続けてきた。

「『捕まえてごらん』って……そういや、見た目『少年』だったよな……なあ、もしかしてあいつ……」

「花村、結論を急ぎ過ぎだ。クマにも言ったが明日、皆で集まって話そう」

「ああ、分かった」

話を急ぐ陽介に真は二人で結論を出すわけにもいかないため会議で話すことを提案。陽介も頷くと電話を切り、そう思うと今度は千枝から電話がかかってくる。彼女にも明日会議を開く旨とそれを雪子達に伝える事を頼み、真も命と完二に会議を開くことを伝え、その日は早目に休むことにした。

そして翌日7月27日。真達はいつものフードコートへとやってきていた。

「りせちゃんとかマくんが『あっちの世界』を探っている間に、少しでも情報を纏めよう。まず、昨日のマヨナカテレビは皆見たね?」

議長を命が務め、まず最大の前提となるマヨナカテレビを全員が見たかを確認。それに全員が首肯、完二はイラついた様子で「見てて根暗が感染力そうだったぜ。死んだ魚みてえな眼でボソボソ挑発しやがって」と言う。

「なんなんスか、アイツ？」

「分からない話し合いの前に結論を出すのはあまり得策じゃないんだけど……」

「俺は犯人だと思う」

完二の言葉に命が言い淀むと陽介がそう言い、天城も「やっぱりそう思った？」と聞いてくる。千枝も「ただの勘っちゃ勘なんだけど、繋がるんだよね」と言う。

「白鐘からの話を信じれば容疑者は『高校生の少年』であり、諸岡教諭の件で足が付き指名手配……」

「そんなタイミングで昨日のテレビだ。おまけに『捕まえてごらん』なんて意味ありげな挑発……」

真が直斗から受けた情報を改めて説明し、陽介がそう言う。

「あーと……そんで？」

と、完二が間の抜けた声で尋ねてきた。それに対し陽介は生気のない少年をA君とし、今までの事件の流れ、つまりA君がテレビの世界の存在を知り、命を奪う目的で人をテレビに放り込んでいく。だがある時からテレビに入れても人が死ななくなり、モロキンだけはA君が自分で殺したが足がついた。そして、指名手配されたA君には逃げ場がない。と説明していく。

「あ……もしかして、逃げ込むために自分から『あっち』へ行っちゃって事スか？」

そこまで言われると理解できたのか完二が結論を出し、「先輩意外と頭いッスね！」と褒めてるのか貶してるのか微妙な感想を陽介に投げかける。それに陽介も「ムカつくなお前」と表情を歪めた。

「あの子……逃げ込んだ後はどうするつもりなんだろう……」

「えっ？」

と、雪子がそう呟き、千枝が反応する。

「だって、クマさんがここに居るって事は、あの子、出られないんじゃないか……」

「まさか……ヤケンなって、じ、自殺……しちゃう気とか?……」

雪子の言葉に千枝がどこか焦ったように呟く。

「いや、そんなんじゃないな」

が、陽介がそれを否定。その根拠として「犯人は、少なくとも出る方法がある」って事を犯人は知っている」と言う。まあそうでなければテレビの中に入れたはずの雪子や完二、さらにはりせがこちらの世界に帰っている事の説明がつかないし、雪子や完二は一般人だとしても現在休業中とはいえアイドルであるりせが死んだのならニュースになる。そのニュースが出てこない、つまりりせは生きています。という情報を犯人が掴めないはずがない。

「まあ、その手段がどうかはともかくとして。僕達がやる事は一つ……だよ、真君?」

命も不敵な笑みを浮かべて真に結論を呼びかけ、真もこくと頷くとその口から結論を紡ぎ出す。

「ここまで来たら、奴に話を聞くだけだ」

つまり、テレビの中に入り、生気のない少年を確保する。真はそう言った。と、そこにりせが慌てた様子で走って来る。

「おつ、ナイスタイミング! どうだった?」

「ダメ。情報少なすぎて、足取り掴めない。中に誰がいるのは間違いないんだけど……」

千枝の問いかけにりせは首を横に振って返し、陽介は残念そうに「そうか」と呟いた後「クマは?」と尋ねる。それに対しりせは「まだ張り切って探してる」と笑みを浮かべて返した。

「なら俺達はアイツが誰なのかを確かめよう」

「ああ。彼が何者なのか、そして指名手配されている少年と同一人物なのか……とにかく、彼を示す何かを掴められればいつものように居場所は分かるはずだ」

「そうだね。そうしたら後はいつものように、ってわけだ」

陽介が最初に言い、次に真がそう言うのと最後に命が締め、それに千

枝も「もしあの子が本当に犯人で、あつちの世界に行つてたら警察も
う手出しできないし」と言い、完二が「つまり、俺らがやるつきやね
えって事だな!」とやる気のある様子を見せる。そして彼らは領きあ
うと情報収集のためフードコートを飛び出した。

「……今回ばかりは厄介ですね……」

「そうだね。今までの相手はどこ誰かかって言う身元が分かつてたん
だし……」

町中を走り回つて情報収集をしていた真と命は偶然合流し、お互い
に進展がないという事を報告し合うとそう話す。今まで同じように
情報収集をしていた時はそれぞれ異完二、久慈川りせ、というどこの
誰なのかという身元が分かつていたためそれを元にして情報収集を
していたが、今回の相手はまずどこの誰なのかも分からない。さらに
相手は「高校生の少年」であつたため少年法で保護され、個人情報
報道されていない。そのため町の人に犯人が何者なのか、という事を
聞いても期待できるような答えが返つてこないのだ。

「せめて写真でもあればいいんだけどねえ。顔だけはマヨナカテレビ
に映つてたから分かるし……あーでもなんで探してるのかとか言わ
れたら説明できないか。もし彼が犯人じゃなかったら色々めんどく
さいし」

「そうですね……そういうえば俺、あいつの顔どこかで見たような気が
……」

「同じ学校とか?」

「あーはい。学校の辺りで見たような、でも校舎内で見かけたか?
……」

命はせめて顔は分かつてるんだから写真でもあればいいんだけど
と呟き、それに真も頷いた後、顔という言葉から連想したのかそんな
事を呟き、命が聞くと真は腕組みをして頭を捻る。やがて頭をかいて
首を振り、「思い出せない」と彼はぼやいた。

「まあ、仕方がないよ。その相手に間違いないって自信もないだろう

し。さあ、頑張ろう」

「はい」

二人はそう言い、再び別れて走り出す。だが結局役に立ちそうな情報は手に入らず、時間だけが過ぎていく。真はそろそろ家に帰って夕飯の支度をしなければならず、買い物時間を考えるとこの辺が潮時。真は陽介を始め特捜隊メンバーに連絡、今日はこの辺にしてまた明日情報集めをしようという事で今日は解散となり、真はジュネスへと向かい、夕飯の材料を買い始める。

「ん？」

と、いきなり携帯に着信が入り、真は花村達が帰り際に何か情報を手に入れたのか？ と考えて液晶を見る。

「叔父さん？」

だがその相手は現在の自分の保護者である堂島遼太郎。家電ではなく携帯に電話をかけてくるのは珍しく、真は驚いた様子で電話に出る。

「はい、もしもし。真です」

「ああ、真か？ さっき家に電話をかけたんだが菜々子からまだ帰って来てないって言われてな。今どこだ？」

「ジュネスです。夕飯の材料を買いに」

「ああ、そうか。丁度良かった」
「？」

遼太郎の台詞に真が首を傾げると遼太郎は説明を始める。なんでも最近の事件の容疑者が急に行方不明になってしまったことから捜索で忙しくなるらしく、しばらくは家に帰れるかどうかも分からなくなってしまうとのこと。そのため家に帰って着替えを取り、菜々子に顔を出そうと思っているのだがそのついでに最近ろくにちゃんとした飯を食っていないらしい足立を夕食に招待しようとしている。ということだ。

「こっちの都合で急に悪いな。大丈夫か？」

「いえ、問題ありません。任せてください」

遼太郎のすまなそうな言葉に対し、真は笑みを浮かべて任せろと頷

く。そして遼太郎はもう一度「すまん、頼む」と返して電話を切り、真は再び夕飯の買い出しを開始した。

そして家に帰ってすぐにエプロンを着用、夕飯を作り始める。そして菜々子には遼太郎の着替えを用意してもらい、食事の準備が出来て配膳をしている辺りで遼太郎の「ただいまー」という声と足立の「おじやましませーす」という声が聞こえてきた。

「お帰りなさい叔父さん、いらっしやい足立さん。夕飯の準備出来ますよ」

「早いな……急にすまん」

「いえ」

真が夕食の準備が出来ているというところと遼太郎は驚いたように呟き、もう一度すまんと謝る。それに真もそうとだけ返し、四人での夕食が始まった。

「んんっま!!」

足立の歓声上がる。今日の夕食のメニューはオクラ丼に始まり、こんがり焼いた鶏肉のさつぱりとした酸味の効いたレモン風味、そして丁度この前収穫できた、この家の家庭菜園で作った産地直送無農薬の野菜サラダだ。

「いつやーホント美味しいよ! このオクラ丼のネバネバ感、たまらないねー! 肉も最近疲れてるから食べれるか不安だったけど、さつぱりしてていくらくらでも食べられちゃうよ!」

「どうも。オクラに含まれるネバネバの元になっているムチンという物質は夏バテに効果があると聞きました、それにこれから大変だと聞いたので、しっかり肉を食べて元気になってもらおうかと思ってます」

「やー気遣ってもらってありがとう! ほんつと大変なんだよー容疑者の少年が急に行方不明になっちゃってねー。今総出で捜してるんだよ! あ、そういうえばあいつ商店街のどっかでバイトしてたはずだよな……」

「足立! いらんことぬかしてないでとつとと食え!」

美味しいご飯に上機嫌になったか口を滑らせてしまう足立に遼太

郎の一喝が届き、足立は「うひいっ」と怯えた声を出す。

そして食事が終わり、遼太郎は菜々子から着替えを受け取ると片付けや後の事を真に任せ、足立と共に署へと戻っていく。それを見送つてから真は菜々子と一緒に片づけをした後、入浴などを済ませて就寝する。

そしてまた翌日7月28日。場所はジュネスフードコート。真はここで集合した特捜隊メンバーに対し、昨夜足立が口を滑らせた言葉を説明する。

「……と、いうわけだ」

「商店街でバイトか……警察が言ってたんなら間違いないな！」

「バイトツスか……少なくともウチじゃねツスね。そもそもお袋がバイトの募集なんざしてたところ見た事ねえし」

「私も知らないよ」

真の説明を聞いた陽介がにと笑うとその商店街に住んでいる完二とりせは少なくとも自分達の実家ではないと言う。ちなみに陽介も「小西酒店もねえよな……」と呟いていた。

「じゃあ、今日は商店街で聞き込みに行こうか」

「そつすね。つっても俺は商店街の人達にはあんまい顔されねえかもだし……俺は念のため他回ってみます。俺へのつてかジュネスへの妬みとかで変な嘘つかれたりしても申し訳ないし」

「うん、任せたよ」

命が行動方針を改めて口に出すと陽介も首肯、しかし続けて何とも言えない様子で顔を伏せながら呟き、申し訳なさそうに笑いながら商店街での聞き込みが出来ない分、他のところで情報が手に入らないか聞き込みを言うと言う。それに対し命は慰めなどは何も言わず、ただ「任せた」とだけ伝える。

「じゃあ、手分けをして探そう」

真が最後に締め、彼らは再び情報収集を開始する。現在商店街でこう言うってはなんだがバイトを雇う余裕があるといえる経営をしているのは完二の実家である巽屋とりせの実家である丸久豆腐店、そして陽介が「多分ないと思う」と主張している小西酒店を除けばガソリン

スタンドのM O E L石油、本屋の四目内堂書店、金属細工店のいだら、雑貨屋の四六商店、中華料理店の愛屋、惣菜屋の総菜大学の六軒。それぞれ千枝、雪子、命、りせ、完二、真が聞き込みに向かい、陽介はジュネスに残って何か情報を掴めないか探すという事になった。

「すみません」

「あら、いらっしやい」

真の挨拶に惣菜大学のおばちゃんは柔らかな微笑を浮かべて挨拶する。

「あーえつとビフテキ串一つ……それと、ちよつとお話いいですか？」

ただで聞くのも悪かろうと思って適当な品物を注文、それから本題に入り、おばちゃんはビフテキ串を用意しながら「なんだい？」と尋ねてくる。

「ちよつと知人から聞いたのですが、以前この店で学生がバイトをしてはいませんでしたか？」

「・ちよつと、どこから聞いたの？ 言うなって言ったのに……」

真の問いかけにおばちゃんは驚いたように目を丸くし、少し慌て出すと、諦めたようにため息を一つついて声を潜める。

「……ええ。確かにあの子、一時ウチでバイトしてたよ」

おばちゃんは真にそう話す。と言っても結構前だしほんの少しだったらしい。肉をバラすのですぐに音を上げたそうだ。さらに暗く挨拶も出来ない上に全然話そうともしなかったらしい。

「どんな子でした？」

「どんな子って……ほら、目がこう黒目がちでさ。口で言うのは難しいけど……」

真のさらなる問いかけにおばちゃんはうんうんと唸り、その次に思い出したように「前にここでバイトしてた子が中学の同級生だと言っていた」と話す。「金髪にしている目立つ子だからその子に話を聞いてみてはどうだろうか」と真に言った。

「ありがとうございます。あ、これビフテキ串の代金です」

「はい。320円たしかに預かりました。ありがとね」

話が終わり、ビフテキ串の購入も出来たところで真は店を後にす

る。そして命達と合流し、バイト先が分かり、件の少年と中学の同級生だと言っていた人物がいるらしいという事を話す。

「中学の同級生か……なら、卒業写真を見せてもらえればいいんじゃないかな？」

「卒業写真？ そっか、それなら特定できるね！ 学校の友達とか、心当たりがないか電話してみよう！」

「俺も花村にこの情報を連絡しておこう」

命の言葉に千枝が頷いて電話をかけ始めると真も陽介に電話をかける。

ジュネスで色々な客や従業員から話を聞いていた陽介は、突然鳴り始めた携帯電話を取る。

「もしもし？ ああ椎宮。なに……卒業写真？ あー！ なるほど、顔写真って本人だって決定的だよな。それが揃ったらそろそろ特定できるかも？ 分かった。金髪で目立つ奴だな、片っ端から聞いてみる！ おう、ジュネスは任せとけ！」

陽介は胸をばんと叩きながら任せろと言ひ、電話を切るとうつしと呟いて携帯をポケットにしまい込む。

「あーあーったく塾うぜえよなあ！」

「暑くて外出る気しねえし、今日サボツちまう？」

と、彼の後ろの方でそんな声が聞こえ、「塾かあ、大変だなあ」くらいに思いながら彼は振り返る。二人の高校生くらいの男子生徒で、両方とも髪を染めているのか一人は茶髪、もう一人は金髪で、塾で使うテキストなどを入れているのであろう鞆を肩に担ぎ、べらべら駄弁りながら歩いていた。

（金髪で、派手目の学生……っておいおいおい!?)

さつき真から聞いた特徴と一致、陽介は慌てて走り出すが二人はエレベーターに乗るとドアを閉め、陽介はギリギリで間に合わずエレベーター直前で足を止め、横の液晶画面で上下どっちに行っているのかを確認。

（下……一か八か、一階まで走るか!)

陽介は外に出られては面倒だと考え、一階まで走ると決意。すぐ横

にあつた階段で一階まで駆け下りて外に出る自動ドアを見る。さっきの学生二人が自動ドアの前でドアが開くまでの間まだ駄弁っている。

「お、おーいそこの二人ちよつと待ってくれ!!」

「んあ? お、ジュネスの花村じゃん」

「なんだ? なんか用?」

陽介が慌てて声をかけると茶髪の少年は陽介の事を知っているのか声をかけ、金髪の少年が何か用かと尋ねる。

「あーいや、いきなり妙な事聞くけどさ。もしかして惣菜大学でバイトしてたりしてねえ? んで、なんつつうかこう、目が黒目がちで暗い雰囲気の奴と中学で同級生だったりとかしねえか?」

陽介は「あはは」と愛想笑いと苦笑いを足して二で割ったような笑みを浮かべながら二人に聞く。と、金髪の少年がニヤツと笑った。

「なんだ? 例の『やらかした少年』の事でも調べてんの?」

「あ、ああ。まあえーつと、卒アルとかさそういうの、お持ちじゃないですかね?」

「要は写真が見たいワケ?」

「お、おう」

陽介からの言葉でつまり写真が見たいわけだと理解した少年はへつと笑いながら「あるんだなーこれが」と言う。

「ちようど今ダチの間で回し見してんだ! 見たいんならやるよ」

金髪の少年はそう言い、無造作にポケットに手を突っ込むと一枚の少しぐちやぐちやになった写真を陽介に渡す。

(こいつだ、間違いねえ!……久保、美津雄か……)

陽介は写真に写っている制服姿の少年とマヨナカテレビに映っていた件の少年の顔が一致する事を確認、名前も確認する。そして学生二人がジュネスを出ていき、陽介はジュネス店員としての条件反射及び感謝の印として「ありがとうございます!」とお礼の言葉を述べ、二人が外に消えていくのを見届けてから再び携帯を取り出した。

「間違いねえ、やっぱマヨナカテレビに映ってた奴だ! ああ、フードコートで落ち合おう」

真達にフードコートで落ち合うという連絡を入れて陽介は電話を切り、自らもフードコートに向けて走り出した。そしてフードコートでクマも含めた全員が集合し、彼らが座ったテーブルの中央に件の少年——久保美津雄の写真が置かれる。

「例の少年と、この写真の奴の顔が一緒……ということは、今テレビの中にいるのは“犯人”……」

写真を見た真がそう結論を決める。と、りせが「この子、ウチの店に来たことある……」と漏らした。

「偵察してた……って事なのかな？……やだ、ホント……狙われてたんだ……」

りせは今更ながら恐ろしくなったか身震いを見せた。完二も「クソがっ！ なめやがって！」と怒鳴る。

「この子、どつかで……ん……ん……」

と、千枝も彼に見覚えがあるのか首を傾げる。

「分かった、アイツだ!!」

そして思い出したように声を上げ、雪子に対し「ほら、あん時の!!」と促す。が、雪子はまだピンと来てない様子で「あん時？」と返す。

「椎宮君も一緒だったでしょ!? 4月のホラ！ いきなり告ってきたじゃん！」

「ああ、あいつか！ そうだ校門前の、だから学校辺りで見かけたような記憶があったのか!」

千枝が真に促すとそこで思い出したのか真も頷く。陽介も「すげーな里中」と千枝の記憶力に感心する。と、千枝は「違うの」と返す。曰く「声をかけてきたのは初めてだけど、改めて考えたら雪子の周りによく姿を見かけていた」そうだ。

「えーと……ごめん、誰？」

「校門前でさ、いきなり“雪子”ってー!」

が、当の雪子はまだピンと来ていない様子で、陽介がそう促すと雪子は「あー!」とやっと思い出したのかそう声を出す。

「あー……そうだったっけ？」

が、直後ボケる。と、千枝は「フラれた腹いせで雪子を狙ったって

事!？」と逆恨みで親友を狙われた事に対して怒りを見せ、雪子はとぼけた様子で「別に、フツてないけど……」と呟く。

「この子、お豆腐売ってる私に話しかけてきて、『暴走族、困るでしょ?』って……『暴走族は群れないと何にも出来ない』とか、確か、延々悪口言つてた気がする……」

次にりせが自分も久保に付きまとわれていた記憶が蘇ったのかその説明、久保の事を「一人で喋っちゃう系のアレな人」と評する。あしらい方は慣れていたけど色々で疲れてたから無視していたらしい。「私……それでさらわれたのかな?……」

りせが不安気な様子で呟いた後、陽介はふと完二を見る。

「あ?……や、俺、ゾクじゃねえっつの! ハア……あのクソ番組のトバッチリかよ……」

ウンザリとした表情で完二が呟く。つまり、暴走族特集の特番で暴走族と間違われた完二は単なるトバッチリで久保に狙われたという事だ。

「そういえば。今思い出したけどジュネスのバイトで研修中色々たらい回しにされてた頃にこんな子を見た覚えがあるな、たしか山野アナの事だったかな? 『浮気なんかする女への天罰だ』とか言ってたような」

と、命も写真を見て思い出したのかそう言い、陽介が「おーおー揃ってきたなあ色々」と呟く。

「とにかく、後は直接本人に聞くしかない、か」

真が結論を締め、全員が頷くと彼は立ち上がる。

「よし、早速テレビに――」

「あーつとごめん真君」

決意を強くしテレビに行こうという真の腰を命が折り、真はがたと倒れながら「なんです、先輩?」と言う。

「いや〜ごめん……僕そろそろバイトなんだよ……」

「あ、そういう命さん、今日は夜までシフト入ってたっけ……」

「あの、便乗するようで悪いんだけど私もそろそろ旅館に戻らないと……」

命が申し訳なさそうに苦笑しながら言う。陽介が命のシフトを思い出し、雪子も苦笑いしながら旅館の手伝いがある事を言う。

「あーそうか……しようがない。じゃあ、今日はこれで解散。天気予報によると雨はまだしばらく大丈夫そうだし、今日の内に準備を万全に整えて、明日一番でテレビに行こう」

命にも生活があるしバイトのサボりなんてなんだかんだで真面目な命としては許せないだろうし、雪子としても旅館の手伝いは大事なのだろう。真はそれを了承すると今日準備を整え、明日テレビに向かう事を提案。全員がそれに頷くと今日は解散となった。命はそのまバイトに入り、陽介は「今日はシフト入ってないし、明日に備えてゆっくり休養するよ」と言って帰宅。完二とりせも明日に備えて帰宅し、雪子は千枝と帰れるところまでは一緒に帰るらしい。

「さて。俺は四六商店で買い出しでもするか」

真もリーダーとしての責務であるテレビの中で必要になるアイテムの買い出しをしようと四六商店に向かう。

「ああぼっちゃん。こんには。夏休みは楽しんでるか？」

四六商店の店主であるおぼちゃんに挨拶され、真は「ええまあ。毎日忙しいです」と返すと「高校生にもなると、大変なんだねえ」とおぼちゃんに返され、「あつつくなったら、いつでも涼みにきなさいねえ」と言われる。

「はは。その時には頼りにさせていただきますよ」

真はそう言いながら店の中を見ていき、誰かが怪我をした時のための軟膏薬や緊急の医療セット等の各種薬品、そしてこちらの世界では単なるお守り程度のものだがテレビの中の世界で役に立つ地返しや玉やカエレル、さらにちよつとした雑談中にテレビの中で緊急の攻撃手段になるかもしれないという話になったロケット花火などを試しに少し買う。

「……ぼっちゃん、変なものを買っていくからおぼちゃんたまに不安になるよ」

「あ、あはは……」

おぼちゃんから一般人視点からではごもつともな指摘をくらい、説

明も反論も出来ない真は苦笑いを返すことしか出来なかった。

そして時間が過ぎて夜。真は病院の清掃アルバイトにやってきていた。少し買い出しの品が多かった&昨日の夕飯の材料費を叔父さんに請求するのを忘れてしまい、テレビの世界でシャドウと戦う中で少しはお金を稼げるだろうが、その前に少し小金を稼いでおかないとまずいかもしれないと判断したのだ。

すると真は清掃中に小夜子に見つかってしまい、手近な病室に連れ込まれてしまう。

「……」

「何かあったんですか？」

自分から引つ張ってきたにも関わらず小夜子は何も話さず、その雰囲気から何かあったのかと察した真が尋ねると小夜子はキツと睨んできた。

「やめてよ、カウンセラーのつもり？……」

きつい口調でそう言い放つが、少し黙った後に「ごめん……キミに当たっても仕方ないのに」と謝り、彼の方を見る。

「……さつき、私が前に勤めてた病院から連絡が来て……私が担当してた患者が……亡くなったって」

小夜子は哀しげな表情でそう言う。「まだ小学生の男の子で、学校に行きたいといつも言ってたけど結局ダメだった」ということで、彼女は彼からプロポーズを受け、本気に受け取っていなかった小夜子も「大人になったら考えてあげる」と冗談めかして言っていたそうだ。

「でも私、忘れてたのよ、その子の事！ 病院移って、こっちで手一杯で、時々思い返したけど、すぐ忘れて！……でもその間もあの子はずっと、闘ってた!!」

小夜子は我慢できず吐き出すように叫び、続けて自己嫌悪をしているかの様子で「私、何をやってたんだろう……」とぼやく。

「自分を責めないでください」

「責めるわよ……責めるに決まってるじゃない……私……どうして、病院移ったのかしら……患者は治ると私を置いていく……でも私だって、患者を置いていったわ……私に出来る事、あったはずよ……」

思わず出た真の言葉に対し小夜子は苦しげな声を吐き出す。相当思いつめている様子で、真もかける言葉が見つからず、しばらく見守るしか出来なかった。

「あ、ごめん……キミが今日、来てくれて良かった」

「あ、いえ……」

小夜子はさすがのような視線で真を見、真はそう呟く。

「私、やるわ。やれること……あるはずよ。それじゃ」

小夜子は何かを決意した様子でそう呟き、それじゃ。と言うと足早に病室を出ていく。真はそれを見届けた後、丁度いいからその部屋の掃除を開始。その日の業務が終了するまで部屋の掃除を続けた。

第三十六話 テレビの世界、ボイドクエスト

7月29日。夏休みに入っている特別捜査隊メンバーは朝からテレビの中にやってきていた。もちろん命も今日はシフトを夜からにしていたため一緒にやってきていた。

「方角、分かるか？」

真がりせに聞き、りせもうんと頷いて「やってみる」と答え、自らのペルソナ——ヒミコを召喚し、ヒミコはそのアンテナのような頭部を左右に動かす。

「居た……見つけたよ！」

そしてヒミコのアンテナが一つの方を向き、りせもそのアンテナが指す方を指差して「あっち」と言う。

「おっしや、行こう！」

千枝が「あたし達で、絶対犯人捕まえよ！」と気合充分に言い、それに真達も頷き合い気合を入れ直す。

「何コレ……ゲーム？」

りせの先導でやってきた場所を見た千枝がそう漏らす。上空に「GAME START」と「CONTINUE」という二つの文字が浮かんで「GAME START」の左側には白い三角形型の右矢印がそれを選択しているように示されており、周りもドットで形作られた、所謂レトロなゲームをイメージさせそうな作りになっている。

「捕まえてみる……ってくらいだから、いわゆる『ゲーム感覚』って事か？」

陽介の皮肉めいた口調に千枝は「むっかつく！」と怒鳴って地団駄を踏み、「顔面クツ跡の刑にしてやる！」と意気込むと「行こ！」と促す。

「……ゲームスタートだ！」

割とノリよくそう言う真に対し陽介も僅かに笑みを見せつつ「男はみんな、ゲーム好き」と言い、命も「少々不謹慎かもだけど、まあテ

ンション上がるっちゃ上がるよね。こういうの」と笑う。

「女はみんな、クマが好き」

陽介と似たようなノリでクマが言うが、真達は見事にスルーして歩き出した。

〽ぼうけんをはじめ

ぼうけんをやめる

「なんだ!？」

ドクロマークが飾られている入り口から、辺りがやはりドットで形作られた城の内部と思しき空間に入り込んだ真達の前にそんな文字が浮かび、カーソルが一度 〽ぼうけんをやめる〃の方に動くがもう一度 〽ぼうけんをはじめ〃に動いた。

なまえをいれてください

と思うと今度はそんな文字が浮かび上がった。

「えっ!? 何これ!？」

後方支援担当のりせが驚いたように叫ぶが、彼らが何もせずとも勝手に 〽ミツオ〃という名前が入力される。

「ゲーム開始ってこと!?! 何かムカつくー! 行くよ、先輩!」

「ああ」

りせの気合というか怒りの籠った声に真は静かに頷き、彼らは足を踏み出した。

「火属性攻撃に弱い奴発見! 皆、注意して!!」

りせの指示に真達は身構える。りせの解析能力はクマよりも優れており、真との絆の力により、さらに敵シャドウの弱点まで探れる能力を持つのだ。と言ってもりせ曰く「なんとなく、これが弱点だっというのが分かるだけ」にすぎないため数種類の敵が一斉に現れたらどれがりせの解析したものなのかが分からないという欠点があるのだが。

実際現在真達の前には三つの顔が塔のように連なりそれぞれ好き勝手に回転しているようなシャドウと空中をくねる巨大な蛇のよう

なシャドウ、そして巨大な円形のプレートに密着するように逆さづりにされているシャドウが二体存在している。

「炎なら私だね！　お願い、コノハナサクヤ！」

雪子が一番に動いてペルソナを召喚、コノハナサクヤが全てのシャドウ目掛けて炎を放つ。マハラギオンが塔のようなシャドウ——墮落の塔と蛇のようなシャドウ——情欲の蛇に当たるが二体とも平然、特に情欲の蛇にはあまり効いている様子はなく、円形プレート逆さづりシャドウ——狂気のキュプロクスは気のせいかわ慌てた様子で炎をかわしていた。

「あの二体には効いてないって事は逆説的に、あいつが炎弱点だね！」

命が鋭く分析、狂気のキュプロクスを指差すと真も了解と頷いて右手にペルソナを宿すカードを具現し、握り潰す。

「サキュバス！　マハラギオン！」

召喚されるのは男性を誘惑しその生気を搾り取るという悪魔——サキュバス。その撒き散らされる炎にキュプロクスの一体が直撃し、体勢を崩してダウンする。だがもう一体のキュプロクスは命からがらかわしていた。

「甘いっ！」

が、陽介がその相手目掛けてロケット花火を投げつける。花火、それに伴うイメージは綺麗な火の爆発。イメージが具現されるテレビの世界においてそのイメージが現実化しキュプロクスに直撃すると同時にロケット花火は綺麗な爆発を見せ、その炎に怯んだキュプロクスもダウンする。

「よし、いくよ異君！」

「ウッス！」

ダウンした二体を見た命が完二に合図を出し、完二が頷くと命はこめかみに召喚器を当て、完二もペルソナカードを具現する。

「クラマテング！」

「タケミカズチ！」

命が召喚するのは源義経が牛若丸と名乗っていた時代彼に剣術を教えたという伝説が残る天狗ことクラマテング、完二が召喚するのは

己のペルソナタケミカズチだ。

「パスタアタック!!」

そして二体のペルソナの一撃がキュプロクスを無に帰する。

「ジライヤ、ガルーラ!!」

「トモエ、ブフ!」

その間に陽介と千枝が残る二体のシャドウを撃破した。

「よし、先を急ごう」

敵の全滅を確認し、真がそう言って彼らは進み始める。

わあっはっはっはっ!

「っ!? この声、モロキン!?!」

二階に上がった時突然聞こえてきた笑い声に陽介が反応する。笑い声は諸岡の声によく似ていた。

くさった ミカンの ぶんざいで

ワシに はむかうとは いい どきようだ!

きさまの ような にんげんの クズは

えいえんの くるしみを あじわうが いい!

くらえっ!

せいさいのいちげき!

諸岡と思しき笑い声と例によって上空に浮かんだ文字に合わせた諸岡と思しき声が止んだと思うと「せいさいのいちげき!」という文字が浮かび、それは赤色に光る。

ミツオは いしきを うしなった…

そしてそんな文字が赤色で浮かび上がった。

「えっ!?! ウソ…どういうこと?」

癪だが一応ゲームスタート時主人公と設定された名前がゲームオーバーのような図式になった事にりせが困惑する。

「と……とりあえず先を急ごう」

が、分からなくても立ち止まっているわけにもいかないため真達は進んでいった。その先にまたもシャドウが姿を現す。

「せあっ!!」

ペルソナを召喚するまでもなく、真が背負っていた刀を抜いて斬撃をくらわせ緑色の衣服を着た妖精のようなシャドウ——盲愛のクビドを斬り裂く。

「おりやつー!」

続けて陽介が、内部に書物を浮かばせた王冠を被ったような形をしたクラゲのようなシャドウ——偽りの聖典を手に持っている二本の短剣で斬り刻む。

「カーッ!」

「おっと!」

「千枝!・ えいっ!!」

カンテラを持った真っ白な鴉のようなシャドウ——アメンテイレイヴンが力を込めて突撃し、千枝がそれを持ち前の運動神経でかわすと雪子が扇子を投げて援護、ブーメランのように放たれたそれは吸い込まれるようにアメンテイレイヴンに直撃。

「ナイス雪子!・ ドーンッ!!」

アメンテイレイヴンがダメージで動きを止めた隙に千枝が思いっきり蹴りを叩き込み、吹っ飛ばした。

「クマクマーッ!!?」

クマはまだ戦闘に慣れてないのか真っ黒な蛇のようなシャドウ——情欲の蛇に追い掛け回されていた。

「クマッ!? つたくー!」

それを見かねた完二が情欲の蛇の前に立ちはだかり、己の武器を盾にして蛇の攻撃を防ぐ。

「おらあっ!!」

そして直後それを持ち上げて蛇の頭目掛けて叩き込んだ。ペルソナの力がなくてもなお怪力である完二の、ペルソナの力を借りた一撃に情欲の蛇は怯む。

「今だ、クマッ!!」

「クマッ!・ ペルクマー!!」

完二の呼びかけにクマも頷き、ペルソナカードを具現。

「そいやっ！」

武器としていたる右手にはめられた爪でカードを砕く。と共に彼の頭上にペルソナ——キントキドウジが姿を現した。

「キントキドウジ、ブフーラクマツ!!」

クマが指示すると同時にキントキドウジが氷の弾丸を放ち、情欲の蛇に当てる。と情欲の蛇が凍り付き、直後氷が情欲の蛇ごと砕け散った。

「うっしー！」

「やったクマーー！」

完二がガッツポーズを取り、クマも今まで戦えなかった自分自分の力でシャドウを倒せたことを喜ぶ。

「ふう……これで全滅かな？」

最後に命が、見た目はただの五つの目玉だが実は巨大な人の顔という実体を持つシャドウ——フェイトサーチャーと一階で戦った狂気のキュプロクスを二体同時に無に帰し、武器である剣を左腰の鞘に、召喚器である銃を腰の後ろのガンベルトにしまいながら周りを見る。たしかにこれで全滅だ。それを確認し、完二がふんと鼻を鳴らす。

「ったく、古くせえゲームみてえな場所のくせにシャドウはどんどん強くなってやがるぜ……」

「やつと最後だからって気を抜いたらいけないよ？ 最後だからこそ、しっかり気を引き締めてかかるんだ」

『はいー！』

完二の悪態に対し命は犯人を捕まえて事件解決のためにも最後だからこそ気を引き締めるようにと言い、その号令に真達が一糸乱れずに返すと命も満足そうに微笑んで頷く。そして彼らは先に進んでいった。

おはよう。

ゆうべは よく ねむってた みたいね。

三階に上がると共にまた上空に文字が浮かび、同時にそんな女性の

声が聞こえてくる。台詞の内容からして久保の母親というところだろうか。

パトカーの おとが あんなに すごかったのに
きづかないで ねてるんだから。

きつと おおきな じけんね……あれは。

アーケードのCAFÉで コーヒー かってきて。

おかねは たてかえて おいてね。
きいた？

おんなのこが ころされたんだって。

ぶつそうに なったわね。

あんしんして であるけないわ……

きをつけてね。

あまり おそくならない ようにね。

「……なんだ？ 日常会話？……でもなんか珍しいよな？」

「……うん。今までだったらテレビに入れられた人の言葉が聞こえてくるのに……」

台詞が終わると陽介が首を傾げ、千枝も陽介の言葉に賛成。しかし台詞に対して考えている暇はなく、とりあえず話の内容については頭の片隅に放っついていて足を進めていく。

「……あれっ？」

「どうかしたか？ 久慈川？」

少し進んだ時、りせが声を出す。それに真がどうかしたのかと尋ねるとりせは「この先、行き止まりになって……」と返した。

「そんなはずないんだけどな……」

「うん。ここまで一本道だから道に迷いようがないしね……」

りせの不思議そうな言葉に命も頷く。

「ん……とりあえず進んでみりゃいいんじゃないんすか？」

考えるのは苦手なのか完二はずんずんと先に進んでいく。その先の道は前方と左右に分かれており、全て少し先を見るとドット絵で顔を形作られた石像のようなものから水が流れ出しているようになって見えているものが見えるだけの行き止まりになっている。

「あ、ほんとうに行き止まりだ」

千枝が前方左右を確認して頭をかく。

「もしかして、さっきの階段がダミーだったとかいう可能性はないかな？」

雪子が自分達が間違った道を選んでしまったという可能性を提唱する。

「そういう可能性もあるけど……」

「だが、念のために調べてみる必要はあると思う。手分けをしてこの三方向を調べてみよう」

雪子の提唱した可能性を命は半分ほど肯定、真は元来た道に戻る前にここを調べてみようという提案。前方の道を真と命。右の道を千枝と雪子、りせ。左の道を陽介と完二、クマで調べる事にする。

「……といっても、これとっておかしいものはないですよね？……」

真は行き止まりにある、ドット絵で形作られた人の顔面——口に当たる部分から下の泉部分へと水が垂れ流されており、まるで平面の顔面マーライオンだ——を調べながらそう言い、命も近くの壁にも特に仕掛けがない事を確認する。

『う、うおおおおおおっ!!?!』

『きやああああああっ!!?!』

と、左右の道から悲鳴が聞こえ、二人は驚いた様子で元来た道に戻り左右を見る。

「花村君！ 巽君！ クマ君！」

「天城！ 里中！ 久慈川！」

慌てて叫ぶが左右の道には誰の姿もない。

「まさか分断系の罠だったのか!?!」

「先輩！ 皆！ 聞こえる!?!」

「久慈川か!?! 一体何が起きた!?!」

命が罠に引っかかってしまったかと己の浅慮さを悔やんでいるとりせの慌てた声が聞こえ、それに真も返す。

「先輩！ あの、変なオブジェに近づいたら急にふわーってなつて目の前が真っ白になって、気づいたらさつき階段を上がってきてすぐ

みたいな場所に移動してたんです！ でも後ろに階段はないし……」
「……ワープの可能性が高い！ 真君、君は久慈川さん達と合流して！ 僕は花村君達が消えた方に行ってみる！」

「分かりました！ 久慈川！ 皆にそこを動かないよう指示してくれ！」

「はいっ！」

命は瞬時にワープ系の罠という可能性を出し、自分が状況不明になっっている陽介達の確認に行くから真はりせ達の方に向かうよう指示。真も頷くと二人はそれぞれ命は男性陣、真は女性陣が消えた方に走っていく。そしてオブジェに近づいた瞬間二人を謎の浮遊感が襲い、同時に二人の目の前が真っ白になっていく。

「あ、命さん！」

「花村君、異君、クマ君……無事みたいだね」

命は一番に声をかけてきた陽介に返し、次に完二とクマの無事を確認する。

「ああ、俺らさつきのとこを調べようとしたらここに飛ばされたんす。でもって先に進もうとしたらりせから動くなって言われたんで……」
「まあ、無事でよかった。でも、僕達がさつきまでいた場所はもちろん、りせちゃん達とも別の場所にワープしてみたみたいだね」

完二の説明を受け、命はまず皆が無事でよかったと安堵。その後周りを確認するがさつきりせが通信で言っていた通り、後ろに階段がない事を除けばこの階層が上がってきた時の入り口にそっくり。事実その先にはやはり前方左右に分かれているらしい道が伸びており、しかしその分かれ道の中央にはシャドウらしき気配がある事から入り口部分とは別の場所にワープさせられたということが分かる。

「久慈川さん、聞こえる？ 真君と合流できました？」

「あ、はい！ 聞こえます！ 先輩と合流できました！」

「こつちも花村君達と合流成功。で、この先の道にシャドウがいるみたいなんだけど……」

「うあ、こつちにもいます。まだ気づかれてませんけど」

命とりせは通信を行い互いの状況を確認する。

「うん、分かった。じゃありせちゃんはそのちのシャドウの分析に集中して。こつちはなんとかする……うん、終わったら連絡お願い」

命はそう言っただけで連絡を終える。

「よし、行くよ。真君がいないから僕が臨時でリーダーを務めるけど、異論はないね?」

「あ、はい!」

「大先輩なら、先輩の代わりに命預けられるツス!」

「センパイ、よろしく頼むクマ!」

命の臨時リーダーに陽介達は頷き、命も「よろしくね」と返すと武器を抜き先頭に立ち、彼らはシャドウに向けて走り出した。

「こつちの分析に集中しろって……大丈夫なのかな?……」

一方真率いる女性陣。リセは男性陣の心配をしているが、それに対して千枝がにじしと笑う。

「大丈夫だって。命さん強いし、花村だって、まあやる時やるし?」

「うん。心配しなくてもいいよ」

千枝に続けて雪子が微笑みながら心配はいらないと言う。

「まあ、心配なら俺達の戦う相手をすぐに撃破して先輩達に通信を繋げればいいだけだ」

そして真も、背負っていた刀を引き抜いて自信満々にそう言った。

「いくぞ!」

真の号令に合わせて千枝と雪子は頷いて彼を先頭にシャドウ目掛けて突進、シャドウ——一階で戦った墮落の塔に先ほど戦ったアメンテイレイヴンに盲愛のクビド——に襲い掛かった。

「あの塔みたいなのは任せて! 雪子、あの鴉お願い!」

「うん、分かった!」

「よし、妖精は任せろ!」

千枝はそう言うや否や墮落の塔に突っ込んでいき、しかし空を飛ぶアメンテイレイヴンは魔法系ペルソナを使える雪子が魔法による遠距離攻撃をした方がいいという戦法は理に適っており、真もすぐさま盲愛のクビドに突進した。

「いくよ、トモエ！」

千枝は走りながらペルソナカードを具現し、それを器用にも走りながら蹴り割ってトモエを召喚。トモエも薙刀を手に墮落の塔に突っ込んでいく。

「トモエ、アサルトダイブ！」

千枝が指示し、トモエは薙刀に光を纏わせながら重い打撃を墮落の塔に叩き込む。

「ドーンッ!!」

そこに間髪入れずに突進の勢いを利用した飛び蹴りをくらわせた。みしっ、という手ごたえを千枝は感じるがまだ倒すには至っておらず千枝は反撃を警戒し、もう片方の足で墮落の塔を蹴るとその勢いを利用して後ろにバク宙を行い距離を取る。

「ヴオオオオオッ！」

直後墮落の塔を構成している三つの頭がぐるんぐると回転、ぴたつと顔の方向が同じ向きになるように止まると墮落の塔を光が包み、傷を癒す。

「うげっ！ デイアラマ!? あー、もっと攻めればよかったあ……」

味方が少ないためからしくない防御優先の行動をとってしまった千枝はしまったーと頭を抱え、しかし仕方ないかと考えると墮落の塔に再び向かい合った。

「コノハナサクヤ、マハラギ！」

一方アメンティレイヴンと戦っている雪子はコノハナサクヤを召喚、アメンティレイヴンを指差してマハラギを指示し、コノハナサクヤは自らの周囲に無数の炎の球を生成、一気に弾丸の如くアメンティレイヴン目掛けて飛ばす。しかしアメンティレイヴンは縦横無尽に動き回り、その炎をかわすと素早く滑空、雪子目掛けて突進してきた。

「きゃっー！」

咄嗟に身を伏せて突進をかわす。が、いくら防具を着ていようとももろに受けたら無事にはすみそうにない力が外れてなお雪子には感じ取れた。

「フウキ、ガルーラ!!」

真は強風を操る鬼であるフウキの力で竜巻を起こし、盲愛のクビドを上空に吹き飛ばし武器である弓をも弾き飛ばす。

「ミリオンシュート!!」

さらに追撃を指示、フウキが右手に持つ刃を振るうと衝撃が矢のように盲愛のクビドを貫いた。

「やったー！ 先輩かつこいー!! シヤドウ撃破だよ！」

後ろから分析を行っているりせはシヤドウの撃破を喜ぶ。

「!? え!?」

が、その直後驚きに硬直する。

「うそ、いつの間にシヤドウ反応?! う、後ろ?!」

真達の援護に集中していたため、りせは新たにシヤドウ反応が出てきているのに遅れてしまっていた。しかもその反応はりせの真後ろから感知、りせはヒミコを解除して振り向く。そこには石で作られているような外見の巨大な腕に剣を握っている形のシヤドウ——正義の剣が、その剣を振りかぶっていた。

「い、いやあああああつ!!」

テレビの世界の経験も浅く、前線に出ていなかったりせはその攻撃に恐怖し悲鳴を上げる。

「りせちゃん!」

千枝と雪子が叫ぶが、千枝は相手していたシヤドウをようやく撃破したばかり、雪子は空中を飛んでいる相手に苦戦しており援護は間に合わない。そして、無情に正義の剣の剣は振り下ろされた。

「テトラカーン!!!」

「えっ!?」

真の声が響き、直後りせが何かの障壁に包まれる。そこに正義の剣の力を込めた振り下ろし——パワースラッシュが叩き込まれるが、障壁にその剣が阻まれたかと思うとその勢いを跳ね返されたかのように剣が跳ね上げられる。

「デカラビアー！ アギダイン!!」

再び真の声が轟き、直後彼の頭上に浮かんでいる一つ目ヒトデともいうような存在が目を見開き、正義の剣が爆発したかのように勢い

よく炎に包まれ、消滅する。

「すっげー……」

千枝が思わずぼかんとしてしまう。コノハナサクヤが使うアギラオよりも上位のスキルに雪子も啞然としてしまっていた。

「久慈川、大丈夫か!？」

「あ、先輩危ない！ 後ろ!!」

「え?」

真が焦ったようにりせに安否を問うがりせの方も焦ったように叫び、真も振り返る。そこにはさつき雪子の攻撃をかわしていたアメンテイレイヴンが真に突進を仕掛けている光景が映っていた。

「ぐはあっ!!!」

突進の一撃による凄まじい衝撃が真の身体を襲い彼は吹っ飛ばされる。

「ト、トモエ! あいつを倒して!」

「コノハナサクヤ! お願い!」

千枝と雪子が慌ててペルソナを再度召喚、アメンテイレイヴンの撃破を指示する。そしてようやく周りのシャドウの全滅をりせはヒミコで、千枝と雪子も周りを見回して確認。それから雪子がコノハナサクヤの回復魔法で真の回復を行なった。

「いてて……」

「だ、大丈夫椎宮君? ただの突進だったのにダメージが……」

「あー……物理攻撃がデカラビアの弱点なんだ。その代わりにさつき久慈川さんに使ったテトラカーン、物理反射のスキルがあるんだが。一撃しか跳ね返せない上に魔力の消費が激しいんだ……」

「ふーむ。使いどころが難しいって事ね?」

心配そうな雪子に真はデカラビアの特性について説明、千枝が物理攻撃が弱点であることに使いどころが難しいという判断を行う。

「でも、そんな危険を冒してまで私を助けてくれたんですね? ありがとうございます、先輩♪」

「おわっ!」

と、りせは嬉しそうに微笑んで真に抱き付き、真も驚いた声を上げ

る。

「そ、それより久慈川！ 先輩達に連絡を！」

「あ、はい！ ヒミコ！」

誤魔化すように真は通信を指示し、りせも頷くとヒミコを召喚し命達への通信を始めた。

「命さん！ 聞こえますか？ 大丈夫ですか？」

「あ、りせちゃん。遅いから心配してたよ」

「おそ……」

りせから通信を受けた命は、りせが心配そうなどこか慌てたような口調になっているのに平然とした、どこか軽い口調でりせに返しており、その言葉にりせが絶句したのを感じる。

「ところで、ちよつと確認したいことがあるんだけど」

「は、はい？」

と、命の声が真剣なものになった。

「……この、入り口から曲がり角までの距離？ ですか？ はい、調べてみます」

「入り口から曲がり角の距離？ ああ、ちよつと調べてみる」

りせの命から聞いた言葉の復唱を聞くと真はそう言い、入り口まで走ると距離を調べ、歩幅からおおよその距離を算出するとりせに報告、りせから命に伝えてもらう。

「はい……距離が大体同じ？……えっと、そんな単純な……はい、分かりました。伝えます」

りせは命と通信を終えるとヒミコを一旦消す。

「えっと、命さんからの伝言ですけど……次の道を左に行つてという事です。もしかしたらそれで出会えるかもって」

「左？……まあ、命先輩の事だから何か考えがあるんだろう。分かった、そうしよう」

りせからの報告を受け、真は首を傾げるが命なら何か考えがあるはずだと結論づけると千枝達にもそうしようと呼びかける。それに対し千枝や雪子もここで反対するのも危険であるため千枝が「一蓮托生！」と言い、彼らはこの入り口から見て左側の道に歩いていく。そ

ここで彼らを再び浮遊感を襲った。

「椎宮！」

「先輩！」

「センセイ！」

「花村、皆！」

その先には入り口すぐで別れてしまった陽介達が待つており、真は皆の姿を確認すると安心したように声を出す。

「ふむ、やっぱりね」

「どういう事なんですか？」

命のやっぱりという言葉に雪子が首を傾げると彼は「ああ」と言った。

「単純な話だよ。ここの最初の道から僕達は十字路の左右に分かれた。その先の道にある十字路までの距離は僕達がいる方と真君達がいる方で同じだった。だったら僕達は右に、真君達は左に移動すれば同じ場所にワープされるんじゃないかってね」

「そ、そんな単純な考えで……」

「また逆方向に移動したりしてぐちゃぐちゃになるより、修正が簡単な今の内に修正案を試してみた方がいいと判断したまでさ」

命からの説明を受けた千枝が口をあんぐりと開きながら言う。命はしれつとそう言うてのけた。

「だが、ここはそういう罠があるみたいだ。皆離れないようにした方がいいな。ここを調べようと言い出したのは俺だが、軽率だった。すまない」

真は自分の軽率な判断のせいで仲間を分断させてしまった事を頭を下げて謝罪する。と、陽介が「んなことねえよ」と返した。

「まあ、いきなり分断されちゃったのは参ったけどよ。あんな罠があるなんて俺達全員思いもなかったんだ。気に病む必要はねえよ」
「うん。大丈夫、どこに消えたって私が見つけ出しちゃうから！」

陽介は罠を見抜けなかったという意味なら真だけでなく自分達も同罪だと言い、りせはまた分断されてしまっても自分が見つけ出すと自信満々に言う。それに真は嬉しそうに微笑を浮かべ、「ああ」と頷い

た。

「じゃあ、行こう」

真が号令をかけ、彼らは再び歩き出した。

じよしアナが あらわれた！

ワープゾーンを潜り抜け、四階に上がった時そんな、敵キャラが出現したかのような文字が例によって上空に浮かび上がり音声が出る。

「女子アナ……山野真由美アナの事か？」

その文字を読んだ真がぼそりと呟いた。

どうする？

∨ たたかう

にげる

と、そんな文字が現れた。

ミツオの こうげき！

次のそんな文字が流れ、

じよしアナを たおした。

流れるようにそんな文字が続く。

ミツオは レベルアップした！

たのしさが 4 アップした！

むなしさが 1 アップした！

「そんな……殺したのもゲーム感覚だったってこと？ ゼツタイ許

さない！」

「まさか、そんな本当に……許せない……」

「ああ。ナメたマネしやがって……」

りせと雪子、完二は自分達も同じようにゲーム感覚で誘拐され、危うく殺されそうになった事で怒りに震える。陽介も「ゲーム感覚で先輩を……」と、千枝も「よくも雪子を……」と想い人や親友が被害に遭った事から当事者と同じくらいの怒りを見せていた。

「落ち着け」

うな表情で漏らす。五階に上がった時、さっきの“じよしアナがあらわれた”と同じようなノリで“したいはつけんしやがあらわれた”という戦闘シーンが入り、それを見た陽介は再び犯人への恨みを抑えきれなくなっていた。

「花村……」

「分あつてる……燃えるハートで、クールに戦う……ああ、大丈夫だ」

真の呼びかけに対して陽介はさっき命に言われたことを思い出して深呼吸、平静を取り戻すと「大丈夫だ」と返してふと顔を上げる。

「……ん？」

と、陽介は声を漏らす。彼の目線の先には右手に扉、その正面にドットで形作られた盾が飾られている。

「そういやあよ。今まで進んできたところの扉の正面になんか、いつつもあんな飾りがあつたよな？」

「……あ、そいえばそうだね」

陽介が盾を指差しながらそう言うのと千枝が頷く。と、雪子がうくと考える様子を見せた。

「そういえば、階段がある扉の正面っていつも剣みたいなの飾りがあつたよな……」

「どれどれクマ」

雪子が思い出すように呟いているとクマはどれどれと言ってぽんと扉をタッチ、扉が開く。

「ヴオオオオオツ!!!」

「クマー!? シヤドウクマー!?!」

その先からシヤドウが顔を出し、クマは悲鳴を上げる。

「モト!・ムドオン!!」

と、命が素早く召喚器を抜いてペルソナを召喚。棺桶に隠れた何者かの放つ呪いの陣により、シヤドウは一瞬で呪殺され消滅する。

「あ、危なかったクマ……」

「まったくクマ公! 手間かけさせんじゃねえ!!」

クマがはあはあと息を荒くしていると完二が怒鳴り、クマも「クマ」と小さな声を漏らす。

「えーつとここは……行き止まりの小部屋だね」

「じゃあ、盾の飾りは小部屋って可能性が高いのかな？」

千枝がドアの中を確認、どうやらさっきのシャドウがいただけの小部屋らしく、りせがそう言う。

「まあまだ確証はないけど、とりあえず調べてみようか」

実験データは多い方がいいし、と命はそう提案。と言ってもばらばらになるのは危険なので全員で回ってだが部屋中を調べた結果、盾の飾りの向かいにあるドアは小部屋に繋がり、蠟燭の飾りの向かいにあるドアは通路に繋がり、そして雪子の記憶通り剣の飾りの向かいにあるドアは階段に繋がっている。という事が明らかになる。

「なるほど。ドアの向こうが何なのかが分かるだけでも収穫だ。お手柄だよ、花村君」

「いつやくそれほども〜」

命の言葉に陽介はなっはっはと笑う。この階に上がってきた時の苦虫を噛み潰したような表情はどうか消えたらしく、真達は階段を上がつて次の階へと進んでいった。

おはよう。

7階に上がった時、例によってそんな文字が表示される。

「あれ？…こいつつて三階で見た文字……」

「うあ、何これ？　なんか妙なノイズ入ってない？」

しかし見覚えのある台詞に陽介が首を傾げ、文字が表示されると同時に聞こえてくる台詞も耳障りなノイズが走っているため千枝も不快感をあらわにする。

ゆうべは　よく

おんなのこが　ころされたんだって。

「なんだア!?!」

次に表示される文字とノイズ交じりの台詞に完二が素っ頓狂な声を出す。

アーケードのおとが　あんなに　すごかったのに
パトカーのCAFÉで　コーヒー　かってきて。

「これって、単語自体は三階のものと同じ……だけど、文脈がおかしい……」

「も、もしかしてここに入ったハンニンの不安定な心が反映されてるクマ?……」

雪子は文章が三階で表示された単語のランダム表示になっている事に気づき、クマが呆然とした声を出す。

おかねは あんしんして たてかえて

きづかないで であるけないわ……

きいた? おはよう。

ぶっそうに おそくならない ようにね。

あんしんして きをつけてね。

「何か支離滅裂になってきたね……イツちやってる系っていうの? うう、ちよつと怖くなってきちゃったよ……」

支離滅裂な文章をりせは「イツちやってる系」と評し、「怖くなってきた」と少し怯えた様子で漏らす。

「扉の向こうに何か居るよ! 準備はいい?」

七階を探索し、その中にあつた扉の向こうからシャドウの気配を感じ取ったりせが注意を喚起。真達はこくと頷くと扉に手を当てて開かせる。

シャドウが あらわれた!

そんな文章と無機質な台詞と共に真っ黒い影が真の目の前に集中。真っ黒な、人の手を指を下にして手首の方に仮面を着けたような姿をしたシャドウが形成される。と、そのシャドウ——キリングハンドは人が指をパチンと鳴らすような動作を見せ、そう思うと姿はキリングハンドと同じ姿だが一回り大きい白色のシャドウ——ゴッドハンドが現れる。

「こいつ何? 敵が増えたよ!」

「ま、どっちもぶん殴っちゃえばいいでしょ! トモエ、ヒートウェイブ!!」

りせが叫ぶと千枝が一番に動いてトモエを召喚、トモエは光を纏った薙刀で地面を叩き、衝撃波を起こすと二体のシャドウを同時に地面から叩き上げる。

「っしー・ジライヤ、マハガルーラ!!」

そこに陽介がジライヤを召喚して疾風魔法を指示、ジライヤが両手を振り下ろすと共に上空から叩き落とすように突風が吹き、二体のシャドウを地面に叩き付ける。

「よっしクマ君、合わせてー! パールヴァティ!!」

「オツケイクマー! キントキドウジ!!」

そこに命とクマがペルソナを召喚。

「マハブフーラツ!!!」

氷結の弾丸が疾風によって地面に叩きつけられていた二体のシャドウを貫き、ゴッドハンドはダメージに耐えきれずに霧散するがキリングハンドは立ち上がる。

「思ったよりやるね……」

命が眩くと突然キリングハンドが宙に浮かび上がり、手の平で思いつきり地面を叩く。その瞬間地面が揺れ、凄まじい衝撃波が真達を襲った。

「ぐうっ!?!」

その衝撃波に真達が押された、その際にキリングハンドは再び指を鳴らしてゴッドハンドを召喚する。

「なっんだと!?! ンの野郎、さっき倒したばっかだつてのに!?!」

再び現れたゴッドハンドの姿に完二が吼える。これでさつきゴッドハンドを倒したのは実質無駄になった。が、それだけではない。ゴッドハンドがキリングハンドに向けて指を鳴らすとキリングハンドの身体が光に包まれ、傷が癒えていく。

「デイ、ディアラマ!?! これじゃあさつきまでの攻撃が全部無駄になっちゃった!?!」

りせが慌てる。ゴッドハンドは消滅したがキリングハンドが再び召喚、キリングハンドの傷を新たに召喚されたゴッドハンドが癒す。この結果さつきまでの攻撃が実質意味のないものになってしまった。

まあキリングハンドがゴツドハンドを二体召喚する恐れがあった可能性を考えるとゴツドハンドを一体事前に倒せたとも言えるのだが。

「しようがない！ 全員、もう一回一斉攻撃だ!!」

真が指示を出し、全員が頷くとペルソナを召喚。一気に連続攻撃を仕掛け、その内クマのマハブフーラをくらったゴツドハンドが倒れるのを見ると真はクマに、再び召喚されても面倒なため加減をしつつ氷攻撃をゴツドハンドに仕掛ける事を命じ、残るメンバーでキリングハンドに一斉攻撃を仕掛けた。

「クマクマー！ マハブフーラクマツ!!」

キントキドウジに指示を飛ばし、氷の弾丸がキリングハンドとゴツドハンドに放たれる。それに貫かれたゴツドハンドがついに耐えきれず、黒い影になって霧散。するとキリングハンドが再び浮かび上がり、空中でぐるんと回転しつつ地面を叩こうと急降下。それを見た真はペルソナカードを具現し、握り潰すように砕く。その直後キリングハンドの身体が地面を叩き、再び強力な衝撃波——デスバウンドが真達を襲う。

「ギイイイイツ?!」

だがその衝撃波の一部がまるで跳ね返されたかのごとくキリングハンドを呑み込み、

「アギダイン」

直後キリングハンドを巨大な炎が襲う。だが、その衝撃波を防いでいたのはデカラビアを召喚、テトラカーンによる反射壁をしいていた真だけではなかった。

「やるな、 里中」

「さつきカウンタがレベルアップしてヘビーカウンタになっていたのさー！」

衝撃波を乗り越えて千枝がキリングハンドに蹴りかかり、その打ち上げ気味の軌道の回し蹴りがキリングハンドに突き刺さり、その身体が上空へと吹っ飛ばされる。それを見た真も背負っていた刀を抜くと飛び上がる。

「これで終わりだっ!!!」

空中でじたばたしているキリングハンドを真は睨み、上段に構えていた刀を振り下ろす。その斬撃がキリングハンドを一刀両断に斬り裂いた。

「ふう……お疲れ様！」

戦いが終わりシヤドウ反応が消えたことを確認したりせが真達を労う。

「先輩、大丈夫？　あまり無理はしないでね」

「ああ。俺はまだ大丈夫だ」

次に戦っている真達を心配する言葉を投げかけるが、真はまだ大丈夫だと言う。

「ん？　これはなんぞや？」

と、千枝が何か——さつきキリングハンドが消滅した時、その霧散した影が地面に落ちた部分だ——に気づく。そこには何か漆黒の球体がぼつんと置かれていた。

「ん？　さつきまでこんなもんなかったよな？」

「俺ア戦いに夢中で気づかなかったツスけど……なかつたような？」

「でも、あんな手強いシヤドウがいた場所にあつたんだもん。きつと何か重要なものなのかも！」

漆黒の球体——くらやみのたまとでも名付けようか——を見た陽介が首を傾げて皆に言葉を投げかけると完二も首を傾げ、次に雪子が重要なものなのかもしれないと言う。

「そうだな。一応持つておくとしよう……ところで、皆はまだ戦えるか？」

真がくらやみのたまを持つ事にし、次にこのまま進むかどうかを決めるため皆に戦闘や探索が出来るかを尋ねる。

「おう。全然大丈夫だ！」

「犯人を捕まえると思えば元気100倍だよ！」

「早く事件、終わらせよ！」

「まだまだこつからツスよ！」

「大丈夫、まだまだサポートばつちしだよ！」

「センセイ、行こうクマ！」

ここで探索中止を言い出すものは誰もおらず、真は命に目配せをする。だが彼は何も言わずただいるのみ。自分^命に頼らず、自分^真で判断しろというその様子に真も頷いて返した。

「よし、行こう！」

今の自分達ならまだ行ける。その確信を持って彼らは先に進んでいった。

第三十七話 虚栄の仮面、虚構の勇者

わあっはっはっはっはっ!

キリングハンドとの戦いが終わり、くらやみのたまを入手した後。真達はさらに先を進んでいた。と、そんな聞き覚えのある声による高笑いが聞こえてきた。

「この声、またモロキンか!?!」

くさった ミカンの ぶんざいで

ワシに はむかうとは いい どきようだ!

諸岡が あらわれた!

どうする?!

「……?」

真は宙に浮かぶテキストの違和感に首を傾げる。が、その間にテキストは進んだ。

∨ころす

にげる

「!?!」

今までとは違う直接的な表現、それに真達が驚いている間にカーソルは何度かころすとにげるを選択を迷うかのように上下した後、ころすを選択する。

ミツオの こうげき!

諸岡を 殺した。

ミツオは レベルアップした!

ちゅうもくどが 16 アップした!

わだいせいが 17 アップした!

かつこよさが 3 アップした!

「なに、これ!……注目とか、話題とか……信じらんない! カッコ

いいとか、何よそれ！」

「クソがつ！ 人を殺しといてカッコいいだあ!? ンの野郎、舐めやがつて!!」

宙に浮かぶテキストにりせと完二が我慢できないように怒鳴り、陽介達も怒りを隠しきれない様子を見せる。先ほど彼らを落ち着かせていた命でさえも、瞳そのものは落ち着いた輝きを見せているもの目を鋭く研ぎ澄ませてギリツと怒りを噛み殺すかのように歯ぎしりを見せている程だ。

(……なんだ、この違和感?)

しかし真は怒りよりも先に疑問点が浮かび上がる。先ほど山野真由美や小西早紀に関するテキストが現れた時、山野真由美はじよしアナ、小西早紀をしたいはっけんしゃ、と双方ひらがなやカタカナで、それも個人名ではなく職業などで示していた。しかし今回の諸岡に関しては個人名でしかも漢字を使用している。

(そして、この「ごろす」という直接的な表現……)

「どうやら、諸岡氏を殺したのは彼で間違いなさそうだね」

真が考えているところに命が呟く。

「早く行こう、先輩！ とっ捕まえてやんないと！」

「あ、ああ」

それに続けてりせが怒りに燃えながらも冷静さを保っているかのように言い、真も頷くと考えを断ち切って歩き出した。

「あ、敵の気配！ 注意して！」

歩き出したところにりせから警告が飛び、同時にそこから二人一組で踊っているような胴体の上にハート状の頭部が浮かび、剣を持ったシャドウ——ライフダンサーや太っちょ警官のような姿のシャドウ——偏執のファズ、動物の人形を模した姿のシャドウ——お守りレキシーが現れてくる。それも一体ずつではなくなかなかの数だ。

「おっと、まずいね……」

「全員、円陣を組め！ 各個に応戦!!」

命がくるくると召喚器を指で弄びながらニヤリと笑うと真は背負っている剣を抜きながら指示を飛ばし、陽介達も頷いて武器を抜

く。

「コノハナサクヤ、マハラギオン!!」

まず雪子が一番早くペルソナを召喚、全方位に炎の弾丸を放つ。ライフダンサーがその炎弾を受けて怯むがお守りレキシィはそこまで効いている様子を見せず、偏執のファズに至っては全く気にせず銃を構えている。

「雪子ー・トモエ、マハブフ!!」

雪子を守るために千枝も素早くペルソナを召喚、氷の波動を放つてまとめて偏執のファズを攻撃するが、その冷気を偏執のファズは吸収した。

「げ、ウソ!？」

炎だけでなく氷も効かない事に千枝は驚き、偏執のファズの集団が一齐に二人目掛けて射撃を行う。

「タケミカズチ、先輩達を守れ!!」

が、二人の前に完二のペルソナ——タケミカズチが立ちはだかり、その巨体で銃弾を受ける。

「マハジオンガ!!」

そして完二の叫びと共に雷鳴が轟き、偏執のファズを落雷が撃つ。その一撃に偏執のファズが怯んだ。

「先輩ー、あのポリ公モドキは俺に任せといてください!!」

自分の得意属性である雷が弱点と分かった完二は雷型の剣を持ったタケミカズチと共に鈍器を持って突進、雪子と千枝もあのシャドウとは相性が悪いと判断したのか、雪子の攻撃で怯んだライフダンサーの方に向き直した。

「よつと、おりゃっ!」

「クマクマー!」

その先にはライフダンサー相手に多人数戦を仕掛けている陽介とクマの姿があり、陽介が素早い動きで翻弄しつつライフダンサーの突き出してくる剣をかわしながらフットワークで懐に入り込み、二本の短剣で隙のない斬撃をしかけ、そこにさらにクマが間髪入れずに爪を前方に構えて回転突進という光景があった。ちなみにそのペルソナ

であるジライヤとキントキドウジも、ジライヤが素早い動きでライフダンサーの集団の動きを封じたところにキントキドウジが掲げているミサイルを投げつけ一掃というこちらも見事なコンビネーションを見せている。

「おー、花村もクマ君もナイスコンビネーション……」

「あつちは心配なさそうだね……」

千枝と雪子は無駄に入ってあのコンビネーションを崩すのもどうかと思ひ、最後の二人を見る。

「とはいえ……」

「はああああっ!!!」

残るのは真と命のコンビ。真の大剣がお守りレキシシーを一気に両断し、それをかわしたレキシシーは命が俊敏な動きと体術で各個撃破、わざわざ援護するまでもない。

「せいっ!!」

真の大剣がレキシシーの一体を捉え、レキシシーはまるで糸で吊り下げられているかのような変な吹っ飛び方をする。

「手ごたえがない……」

「もしかしたら支援タイプのシャドウかもね。変な技受けないよう気をつけて!」

「キキキキ!」

真が呟き、命が注意を施すと、お守りレキシシーの一体が突然奇声を上げ、光を飛ばす。

「ん? この光……」

真はその光が見覚えのあるものに近いのに気づき、はっとした目でその光が飛んでいく先——完二が無双している偏執のファズの一体だ——を見る。

「まずい……完二! テトラカーンが使われた!! 物理攻撃が跳ね返されるぞ!!」

自分のペルソナの一体——デカラビアも使うスキルだったためかすぐスキルの正体を看破、完二に指示を出す。しかし乱闘になっていた完二にその指示は聞こえなかったのかそれとも間に合わなかった

のか、完二はテトラカーンの反射壁を張られたシャドウを思いつきりぶん殴ってしまい、その攻撃が反射。完二の身体が宙を舞った。

「がはっ……」

「まずっ！」

「完二くん！」

吹っ飛び、地面に叩きつけられた完二に千枝と雪子が叫び、千枝は完二の援護に突進。雪子はペルソナを召喚する。だが既に偏執のフアズは反撃の銃を構えており、まともな方法では間に合いそうになり。

「真君、後よろしく！」

命も真にレキシシーの相手を頼み、召喚器をこめかみに当てる。

「来い、ジャックフロスト！ ジャックランタン！」

凄まじく精神力を消費する代わりにペルソナを二体呼び出し、その力を組み合わせて独自の技を使う命曰くワイルドの奥義、ミックスレイド。今、その新たなボールが脱がれる。

「ジャックブラザーズ!!」

命が凜々しく叫ぶと共にジャックフロストとジャックランタン、二体のペルソナが姿を現す。しかしその二人の間には何故かスタンド付きのマイクが置かれていた。

「ヒホヒホヒホー」

「ヒホヒホヒホー」

まるで漫才の如く、しかし彼らにしか分からない言語で喋った後はぱふっという気の抜けた音と共に色紙が飛ぶ。と、何故か偏執のフアズのみならずライフダンサーやお守りレキシシーの残党までずっこけた。その光景たるやまるで昭和のコントか何かだ。

「よし、今の内に体勢を立て直すんだ！」

まるでここまで予想通りとばかりの命の指示にむしろ真達もずっこける。が、すぐさま立ち上がると雪子がペルソナを召喚。

「コノハナサクヤ、メデイラマー！」

コノハナサクヤが癒しの波動を放ち、完二達を回復。完二も立ち上がるとペルソナカードを具現し、それを拳で打ち砕く。

「タケミカズチ、マハジオンガ!!」

完二の叫びを聞き届け、タケミカズチは雷型の剣を拳で打ち砕き、雷撃の力を解放。偏執のファズに降り注がせる。

「トモエ、ヒートウェイブ!!」

そこにトモエが地面を叩いて衝撃波を発生させ、偏執のファズを呑み込んだ。

「ふい〜。大群だったなー」

ジャックブラザーズによつてずっとこけている間に敵を全滅させた後、陽介が息を吐いて眩く。

「また敵が来る前に、急ぐぞ」

そして真が増援が来る前に進もうと言い、彼らは走り出す。それから運よくシャドウに見つかる事なく階段を見つけ、一気に駆け上がった。

おお ゆうしや ミツオ

みごとであった!

そなたの…

またも宙に浮かぶテキストと聞こえてきたまるで王様のような言葉。だが、それは途中で途切れる。

そそそそそなたのののの…

直後、テキストがおかしくなり、聞こえてきた声にも不愉快なノイズやエコーが走る。

のののののののののののののののおおのおののおおのおの
おおのおのおおのおのおおのおおのおおのおおのおお

ぬおぬぬぬのおおおぬおぬおぬぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ

もはや日本語になっておらず、さらに続くテキストには文字化けが入っていつてノイズやエコーが激しくなり雪子や千枝達は不快そうに目を閉じて耳を塞いでいる。

「近いよ、先輩! 気をつけて!」

「そうしてやる義理もないけど、彼の精神状態が心配になってくるね……急ぐよ」

少し動かせば後は勝手に開いていった。こんな事は初めてだ。

「……あ、そうだ！」

と、雪子が気づいたように声を出した。

「ねえ、椎宮君！ さっき拾ったあの球体！もしかしたらあれが関係あるんじゃないかな？」

「お、そうだ！ 大体中ボスとかが落とす道具がダンジョンの先に進むための必需品ってのがお約束だよな！」

雪子の言葉に陽介も気づいたように柏手を打ち、真に向き直る。それに真も頷いてくらやみのたまを取り出して扉に近づける。と、くらやみのたまから漆黒の闇が溢れ出し、くらやみのたまがただの透明なガラス玉のようなものになると同時に扉が音を立てて開いていく。

「いくぞ!!」

真の号令と共に、彼らは一気に扉の中に駆けこんでいった。

扉の先に広がる光景は円形状の高い壁に囲まれ、その壁の上には観客席が広がり、壁の隅っこには人の骨だろうものがドットで表現されている。それはまさにゲームなどでおなじみの闘技場、さらに言えば古代ローマのコロッセオだ。その中央にはテレビに映っていた少年——久保美津雄が彼らに背中を向けて何か喚き散らしている。

「やあーっと見つけたっ!! あそこ！」

「テメエが久保か！ 野郎、齒あ食いしばれッ!!」

千枝が叫び、完二が怒号を轟かせ拳を振り上げて突進しようとする。が、陽介が「待て完二！」と完二を押し止めた。何か様子がおかしい。

「どいつもこいつも、気に食わないんだよ……だからやったんだ、このオレが！ どうだ、何とか言えよ!!」

美津雄が喚き散らすその先にいるのは、目が金色に光る、美津雄自身だ。

「シャドウが出ている……」

真が声を漏らす。しかも美津雄はやってきた彼らに気づかない程に逆上しており、下手に行動したらどんな刺激をしてしまうか分からない。

「……」

美津雄が喚き散らしているにも関わらず、美津雄のシャドウと思しき存在は何も喋らない。

「たった二人じや誰も俺を見ようとしな。だから三人目をやってやった！ オレが、殺してやったんだっ!!」

『!!』

自白とも言える言葉に真達が絶句し、やがて「やっぱりこいつが……」と誰かが呟く。しかし、美津雄のシャドウと思しき存在はそれでもなお、まるで興味を持ってないかのように何も喋らない。

「な、なんで黙ってたんだよ……」

思わず美津雄も気味が悪そうにぼやく。

「何も……感じないから……」

と、ようやく美津雄のシャドウと思しき存在が、抑揚のない声で呟いた。

「なに言ってるんだ!? 意味分かんねーよテメエ!!」

それに対し美津雄が逆上したように喚く。

「な、なによう……どっちがシャドウ?」

千枝が驚いたように呟く。今までの経験上、自分が解放されテジョンが上がったかのような言動を見せていたのはシャドウの方。だが今はむしろシャドウの方がテジョンが低い。だが、人と思えぬ気配を見せている事から奥にいるものの方がシャドウで間違いないはずだ。

「僕には……何も無い……僕は、無だ……」

やはり抑揚のない声で呟いた後、ようやく美津雄のシャドウは美津雄の目を見る。

「そして……君は、僕だ……」

「なんだよ……なんだよ、それッ！ 俺は、俺は無なんかじゃ……」

「いけない、このままじゃー!」

美津雄のシャドウの呟きに対し美津雄が逆上し、禁句を叫びそうになる。それを聞いた雪子が声を上げ、その声を聞いた美津雄は驚いたように言葉をとぎらせて振り返り、真達を見ると「なんだお前ら!」と

叫ぶ。

「どうやってここへ……くっそ、誰なんだよ！　こんなところで何やってんだよ!？」

「るせえ！　テメエを追って来たに決まってるだろが！」

美津雄の叫びに対し、完二が怒鳴り声を上げる。続けて千枝が「アタが犯人なの？」と若干動揺を交えながら問うと、美津雄は「あははは!!」とテンション高く笑いだした。

「そうだよ、決まってるだろ！　俺が全部やったんだよ!!」

美津雄は得意気に笑いながら自身のシャドウへと振り返る。

「ニセモノが何言おうが知るかよ！　ははは、そうだ、お前なんか関係ない！」

「まずい……それ以上言うんじゃない!!」

これ以上喋らせるのはまずい、そう直感した命が叫ぶ。

「俺の前から消え失せろッ！」

だがひと足遅く、美津雄は己のシャドウを否定する文句を吐いてしまった。

「……」

「お前らもだ……こんな所まで追いかけてきやがって！」

美津雄のシャドウは黙り、美津雄は振り返って真達にも叫ぶ。

「お前らも殺してやる！　まとめて殺してやる！　俺は出来る……俺は、出来るんだからな！」

まるで自分に言い聞かせるかのように喚き散らす美津雄。完全に興奮しており、命は彼を確保するため一歩前が出る。

「認めないんだね、僕を……」

だがその時、美津雄の背後からそんな声が聞こえてきた。それは、美津雄のシャドウの声だ。

「うっ……なんだ、これ……」

美津雄が倒れ込み、真達はそこで美津雄のシャドウと対面する。

「うわあああっ!!」

直後、美津雄のシャドウを中心に衝撃が走り、その衝撃で美津雄は吹き飛ばされるとコロッセオの壁に叩きつけられ、その衝撃によって

気を失ってしまう。真達もそのあまりの衝撃波に目を開けていられず、薄目でどうにか前方を確認できる状態だ。

美津雄のシャドウが立っていた場所に何かがある。が、その直後そこに数々のブロックが生み出され、それらは一つ一つが積み重なっていくとまるでレトロゲームの勇者を思わせる格好に変貌した。

「くそっ……結局、こうなのかよっ！」

なににせよ美津雄が否定したせいでシャドウが暴走してしまい、陽介は短剣を抜きながら叫ぶ。

「みんな、頑張つて！ コイツ倒せば、事件解決は目の前よ！」

りせも背後でペルソナ——ヒミコを召喚して声をかけ、真達も頷くと各々の武器を構えた。

「僕は……影……おいでよ。空っぽを、終わりにしてあげる」

電子音のような無機質な声が聞こえてくる。

「この姿……何かと思や『ゲームキャラ』ってか？ ったく、どこまでフザけたヤツだよ！」

陽介は相手のシャドウに対し悪態をつく。と、美津雄のシャドウは「おいで、さあ……」と呼びかけてくる。

「へっ、言われなくてもぶっ飛ばしてやるぜ！ タケミカズチ、デッドエンド!!」

その呼びかけに対し完二が叫び、タケミカズチを召喚するとその雷型の剣を振り下ろし、しかし美津雄のシャドウも右手に握っているように見える剣型の部分でその剣を受け止め、鏝迫り合いになる。

「隙だらけだぜ！ ジライヤ、パワースラッシュ!!」

「くらえ！ トモエ、黒点撃!!」

しかしそこにジライヤが手裏剣を投げつけ、トモエが一点に力を込めた蹴りを撃ち放つ。その一撃の衝撃に美津雄のシャドウが僅かに後ろに下がり、タケミカズチも距離を取る。

「コノハナサクヤ、アギラオ！」

「キントキドウジ、ブフーラクマツ！」

続けて雪子が自身と同じく魔法を得意とするクマと共に炎の弾丸と氷のミサイルで弾幕を張り、美津雄のシャドウに直撃。しかしそれ

らは全身のブロック状の身体にヒビを入れただけで、有効打になったとは思えない。

「嘘だろ、俺達の全力の攻撃だぞ!? それであれだけのダメージかよ!?」

「かったいなあ……怯みもしないじゃちよつと自信なくすよ……」

「力自体も凄まじいもんツスよ……ちよつと罅迫り合いになっただけなのに、結構消耗したツス」

陽介が悲痛にも聞こえる叫びを見せ、千枝が参ったようにぼやく。完二も額から汗をにじませながらそう呟いた。

「なら、ちよつとどでかいのをぶち込みますか。ディオニユロス！」

「コンセントレイト!!」

「了解です！ ハヌマーン、チャージ！」

命がこめかみを召喚器である銃で撃って召喚するのは極彩色の身体をした豊穡の神。その力によって命は精神を集中。真もインド神話に伝わる風神ヴァーユの化身を呼び出して力を溜める。

「皆！ 椎宮君達を守った方がいい！」

「言われるまでもねえ！ 二人の邪魔をさせるな！」

雪子が叫ぶと陽介も頷き、動き出した美津雄のシャドウを睨みつける。

——コマンド：たたかう——

そんな電子音が聞こえてきた瞬間、美津雄のシャドウはその巨体には似合わない俊敏さで、陽介目掛けて剣を振り下ろす。こちらもドット絵というデフォルメされた見た目には似合わない威圧感があり、狙われていた陽介は「うひゃあつ！」と悲鳴を上げて攻撃をかわす。振り下ろされた剣が直撃した地面は抉られており、無防備に受けたら大ダメージは免れない。

「つぶねえ、皆！ 気をつけろ!!」

陽介が注意を叫ぶが、その時には美津雄のシャドウは続けて真に狙いを定めて突進していた。

「なっ!? 速えっ!?」

陽介は自分以上の速さのシャドウに驚いてしまう。

「タケミカズチ!!」

が、完二が叫んでタケミカズチを操作。美津雄のシャドウの突進を阻む。

「こっから先は通さねえ!!」

「カンジ！ 援護するクマ！ キントキドウジ、マハタルカジヤ!!」

完二が叫び、クマも援護するようにキントキドウジに指示。赤い光が味方の力を底上げする。

「ジライヤ、ガルーラ！」

「トモエ、ブフ！」

「ゴノハナサクヤ、アギラオ！」

その後ろからジライヤが美津雄のシャドウの足元に竜巻を起こして足元を巻き上げさせ、そこに氷と炎の弾丸が襲い掛かって美津雄のシャドウは怯む。その隙に陽介はちらりと真達を見てはつとした顔を見せた。

「皆！ 離れろ!!」

陽介が仲間が巻き添えを食わないように叫び、それを聞いたタケミカズチが美津雄のシャドウから距離を取った瞬間、真と命が動く。

「ディオニユソス！ ジオダイン!!」

「ハヌマーン！ 利剣乱舞!!」

先程精神を集中し、力を込めたペルソナの極大雷撃と連続斬りが美津雄のシャドウに決まり、その攻撃の勢いにより煙が発生。その煙の中からぼろぼろとブロックが零れ落ちていくのが見える。

「いよっしやあー！」

「流石椎宮君に命さん！ すっごいパワー！」

凄まじい威力の二連撃、それを受けたらまず無事では済まないはずと陽介は歓声を上げ、千枝と雪子もハイタッチを行う。

「……!? み、皆！ 油断しちゃダメ!!」

が、その次の瞬間りせの悲鳴が響いた。

「っ！ 花村君！ 今すぐジライヤの風である煙を吹き飛ばして!!」

「え、お、おう！ ジライヤ、マハガルーラ!!」

さらに命も叫び、陽介はおうと頷くとジライヤに指示。無数の竜巻

で煙を吹き飛ばす。

「……何あれ？ 胎児？」

千枝がぼそりと呟く。さつきまで美津雄のシャドウがいた場所に存在していたのは大きな頭の周りにデジタル文字を浮かばせている胎児。

「……心の仮面……その名前がここまで似合うシャドウも珍しいもんだ」

と、命が皮肉な笑みを見せながら呟いた。

「どういう意味ですか!？」

真が問うと、命は「仮定だけど」と前置きをしてから話し始める。

「さっきの美津雄氏の言動、そして皆からの話を聞いてだけ……美津雄氏は周りを見下して世界が自分を中心に動いていると思ってるタイプだ、そんなもってとんでもない目立ちたがり屋。しかし、本人は取り立てて何か出来るわけではない。まあ要するに根拠のない優越感の持ち主ってやつか……だけど、美津雄氏は己の無能さに目を背け、自分は出来る、自分は出来るという優越感だけが歪んで増長していった。自分が世界で一番、誰よりも目立つ、特別な事が出来るのは自分だけ……その結果がさっきの存在さ」

「……勇者」

命の話の中で真が先ほどの存在を思い出し、それが指す名称を呟く。それに命はまたもふっと笑った。

「ペルソナとは人が外側の物事と向き合った時、表に出てくる『人格』。様々な困難に立ち向かっていく為の、『仮面の鎧』……まあ、同じ仮面の鎧だとしても、これは皆みたいに困難に立ち向かうための覚悟の鎧ではなく、赤子のように弱い自分を勇者という強い殻で覆い隠す虚栄の鎧。とても言おう……なんにせよ」

そこまで言って、彼は胎児のような存在——美津雄のシャドウ本体を睨みつけた。

「ここからが本番だよ」

命がそう呟いた直後、完二がへつと声を漏らしてタケミカズチを召喚する。

「要するに、あんな強えのは外見^{ガッ}だけって事だろうがよ！ タケミカズチ、ジオンガ!!」

完二が叫び、タケミカズチが落雷を起こす。が、その時美津雄のシャドウは泣き声のようなうめき声をあげて黄色い壁を展開。その雷を防ぐとまではいかなくても威力を軽減させる。

「ちいっ!」

「ジライヤ、ガルーラ!」

「キントキドウジ、ブフーラクマツ!」

完二が舌打ちを叩くが続けて陽介とクマが攻撃を仕掛ける。その攻撃に美津雄のシャドウは僅かに怯むが、その直後美津雄のシャドウの身体をビリビリと電気が走る。

「マハジオンガ……」

「っ、ぐあああああああっ!」

「クマアア?!」

放たれたのは雷撃の嵐、さつき攻撃を仕掛けた反動で動けなかった陽介とクマはその雷撃をくらってしまい、弱点である攻撃をくらってダウンしてしまう。と、その時美津雄のシャドウがまたもうめき声をあげ、それと共に上空に光が集中する。

「これは!」

「まずい、メギドラがくる! 皆防御するんだ!!」

真がその光を見上げると、攻撃の正体を見抜いた命が防御を指示。咄嗟に真達は武器を前に構えて防御を行うがその前の攻撃にダウンしていた陽介とクマは防御できず、その攻撃をもろにくらってしまった。

「うそ、凄いパワー……皆! このシャドウの力、今までのシャドウとは比べ物にならないよ!!」

「くっ……」

「天城さん! 二人のフォローに回るんだ! 皆も弱点を突かれないように注意して! 隙を見せたらまたメギドラが飛んでくるかもしれない!」

りせがメギドラの威力や美津雄のシャドウの力に絶句、警告を飛ば

すと真も注意を強め、命が咄嗟に指示を飛ばしていく。それに従って雪子はダウンした陽介とクマのフォローに回り、真、命、千枝、完二が美津雄のシャドウの前に立つ。

「一気に行くぞ！ フウキ、ミリオンシュート!!」

「合わせるよ！ クー・フリーン、ミリオンシュート!!」

「オツケー！ トモエ、思う存分暴れまくって!!」

「俺もぶち込むツス！ タケミカズチ、デッドエンド!!」

真と命が呼び出したペルソナが放つ衝撃波が幾多もの矢となって美津雄のシャドウを貫き、さらに縦横無尽に暴れ回るトモエの攻撃が美津雄のシャドウの動きを止める。そしてトドメにタケミカズチの一撃が美津雄のシャドウを殴り飛ばした。が、美津雄のシャドウの身体が再びバチバチと帯電現象を起こす。

「マハジオンガが飛んでくる！ 花村君！ クマ君！」

「安心するクマ、ユキチャン！」

「同じ手はくわねえよ！」

相手の攻撃の正体を見抜いた雪子が心配して二人に呼びかけるが、クマと陽介は頷いて防御の構えを取り、電撃を耐える。

「どうやらあいつ、俺達の弱点を狙ってくるみてえだ。俺達はしばらくサポートに徹するよ」

「ユキチャン、クマたちの分まで戦ってほしいクマ！」

「……うん、分かった！」

陽介とクマのお願いを聞いた雪子は頷き、戦線に復帰する。

「いくクマよー！ キントキドウジ、マハタルカジャ!!」

「ないよりはマシだろ！ もってけ椎宮！ スクカジャ!!」

クマは味方全体を鼓舞し、陽介は仲間一人の機動力を底上げさせる。

「コノハナサクヤ、アギラオ!!」

雪子もコノハナサクヤを召喚し、炎の弾丸を撃ち込む。その一撃をくらった美津雄のシャドウが突如頭を押さえて喚き声を上げると、それを覆うように先ほどのブロックが現れた。が、それは足元しか完成していない。

「あの殻の完成までには、時間が掛かるみたいだね……完成するまでに壊しちゃえ！」

「了解した!!」

りせから分析と指示を受けた真が声を上げ、一気呵成に攻撃を仕掛けようとする。が、その前に美津雄のシャドウから淀んだ空気が広がっていき、突然のそれに怯んだ真達とその心を反映されたかペルソナ達も思わず下がってしまう。

「にやろ！ 脅かしやがって!!」

完二が怒鳴り、美津雄のシャドウを睨みつける。

「すぐだよ。怖がらなくていいよ」

「!？」

眩いている美津雄のシャドウと完二の目が合った時、美津雄のシャドウの口元が笑みを見せる。その瞬間、完二の心の奥底にある感情が浮かび上がった。

(怖い、怖い怖い怖い怖い怖い!!??)

その名は、恐怖。

「二う、うわあああああつ!!!」

完二だけではない。陽介と千枝も同時に悲鳴を上げ、逃げ場のないコロシアムを逃げ惑う。

「ち、千枝!?! 花村君!?! 完二君!?!」

「この症状は恐怖! って事はあの技はまさかデビルスマイル!」

雪子が逃げ惑う三人を見て慌て始め、命は慌てつつも冷静に相手の技の正体を見抜く。と、逃げ惑う千枝に狙いを定めた美津雄のシャドウはブロックを作り出し、まるで念動力を使っているかのように千枝目掛けてブロックを発射した。

「千枝！ 避けて!!」

「いやああああああつ!!!」

雪子が叫ぶが恐怖に心が折れている千枝は指示が聞こえず逃げ惑うだけ。しかしブロックは的確に逃げ惑う千枝を狙っていた。

「そうはいくかつ!!」

が、真が千枝の前に立ちただかり、刀を振るってブロックを弾き飛

ばす。

「助けてええええええつ!!」

「わ、さ、里中止めろっ!!」

「……くそ、いない! 真君! メパトラのスキルを持つペルソナ持ってない!」

「メパトラ!? いや、いえ……いや、待てよ!」

パニックに陥っている千枝が真に抱きかかり、真が慌てて叫んでる中、命は自分が現在所有しているペルソナの中に治療能力を持つペルソナがないのか真に呼びかけ、真もそんなスキルを持っているペルソナを現在所有している覚えがないのか首を横に振るが、直後思い出したように荷物を探り始める。

「あつた!」

真は荷物の中から一枚の、三本の赤い剣が描かれているカードを取り出すとそれを上空に掲げる。

「スキルカード、発動!!」

叫び、イザナギが光に包まれる。

「メパトラ!!」

真が叫び、イザナギが光の波動を降り注がせる。

「……ん? あ、あれ? 俺、一体何を?……」

「あ、あん? どうなつてんだ?……俺いつの間に壁際に?……」

「え? あれ? あたしなん……ほあああああつ!! なんであたし椎宮君に抱き付いてんのっ!」

光を浴びた陽介、完二、千枝は正気に戻り、さらに千枝は現在自分が真に抱き付いていることに気づいて顔を赤くしながらさらに悲鳴を上げる。

「よかった。一人ずつとつ捕まえて鎮静剤浴びせてたら時間がかかり過ぎるからね。真君のおかげで助かった」

命は真の機転と能力に感謝する。

「み、命さん! あれを!」

が、雪子が慌てた声を出して上の方を指差し、命だけでなく雪子の声を聞いた全員が雪子の指す方を見る。それと同時にぴぴろつろ

ピーとファンファーレのような音が鳴り響く。美津雄のシャドウの偽りの外殻、勇者の姿が完成してしまっていた。

「な、なにこれ!? あのシャドウから高エネルギー反応!」

その直後、りせの悲鳴にも近い声が響き渡った。

——魔法：ギガダイン——

そしてそんな無機質な電子音が聞こえてきたかと思うと突然雷のようなエネルギーが降り注いだ。

「ぐあああああつ?!?!? くそ、どうなってやがんだ!! あの野郎、まさかレベルアップでもしやがったのか!」

幸いにしてジライヤの苦手とする雷属性攻撃ではなさそうだが、高エネルギーの攻撃を受けた陽介は悲鳴を上げた後、いきなり強くなった相手に困惑を隠せずにいる。

「チイツー! だんだん思い出してきたきやがった……どうやら、俺らがあいつに妙な術を使われたみたいツスね」

「……ああ。情けねえぜ、さっきから俺いいところ無し足引つ張りまくりじゃねえか」

合流してきた完二の自分が情けないというように吐き捨てる声に陽介も同意し、頭をかくと次にぱんつと頬を叩く。

「だったら、今からその分挽回するつきやねえ!」

「そツスね!!」

陽介と完二は気を取り直して叫び、ジライヤとタケミカズチを召喚。美津雄のシャドウ勇者モード——勇者ミツオ——を睨みつける。

「……どうして? 楽になりたくないの?」

それに気づいたのか勇者ミツオがまるで尋ねるような声を出してくる。

「へっ、楽にだど?」

「こんな所で楽になんかなってたまっかよ!!!」

それに対し、陽介と完二が吼えた。

「クマクマー! マハタルカジャクマー!!」

「マハガルーラ!!」

「マハジオンガ!!」

キントキドウジが仲間の力を底上げすると同時、竜巻の矢と雷の矢が勇者ミツオへと降り注ぐ。

「さっきのお礼、たっぷり受け取りなさいよ！ トモエ、黒点撃!!」
そこにトモエが蹴り込んだ。

——アイテム：バクダン——

また聞こえてくる電子音。と、勇者ミツオの目の前にドットで作られた爆弾が出現、いきなり一直線に真達目掛けて飛んできた。

「おっと、そうはいかないよ！ パールヴァティ、マハラクカジャ!!」
しかし命が待ち構えていたかのようにペルソナを召喚、青い障壁が爆弾を弾き返し、爆弾は空中でやはりドットの爆風を見せた。

「チャージ完了!! ハヌマーン、もっかい利剣乱舞!!」

ぜりやああああ!! と掛け声が聞こえそうな速さでの連続斬りがブロックを斬り刻む。だが、その連撃はブロックにヒビを入れ、破壊こそするがまだ勇者ミツオを破壊するには至らない。

(集中、集中、集中！)

が、その中で一人行動をしていなかった雪子は両手を組み、目を閉じて集中していた。その頭の中に浮かぶのは真の操る一つ目ヒトデ——デカラビアの放ったアギラオを超える炎属性スキル——アギダイン。

(今、あの技が欲しい！ 今、皆を守る力を！)

雪子は目を開き、目の前に現れたカードを祈るように両手で包み込み、破壊。コノハナサクヤを召喚する。

「アギ——」

己の力量を超えた力を発動するため、精神力が持っていられるのが分かる。だが、もう雪子は止まらない。

「——ダイーン!!!」

熱い魂で雪子は叫ぶ。そしてコノハナサクヤが両手を掲げた瞬間、勇者ミツオを巨大な爆発が襲い、その外殻を粉碎する。

「雪子、凄い!!!」

千枝が感嘆の声を上げる。が、雪子は外殻が破壊され、墜落したショックで身動きが取れない美津雄のシャドウを睨んでいた。

「今がチャンスよ!!」

「!! 皆、総攻撃だ!!」

雪子の声を聞き、我に返ったように真が総攻撃を指示。全員がペルソナに攻撃を命じ、一斉に攻撃を叩き込んだ。

「ど、どう!?!」

己の持てる力全てを振り絞った攻撃に千枝が叫ぶ。が、煙が突如吹き飛び、ぐったりとした様子ながらも美津雄のシャドウが姿を現した。

「僕はね……僕がここに居る証拠が欲しいんだ……だから……君らを殺さなきゃ!」

「クソがつ!? あの攻撃を耐えきっただど!?!」

美津雄のシャドウの身勝手な言い分に対し、体力の限界が近いのか膝をついている完二が叫ぶ。

「くそ、クマ君! 天城さんにこれ以上無理はさせられない! 回復を急ぐんだ!!」

「りよ、了解クマ!!」

命がクマに回復を指示し、己も召喚器を握りしめる。が、美津雄のシャドウは己の上に白色のエネルギーを集め始めた。再びメギドラを放つつもりだ。疲労困憊の状態で受けたら無事で済むかも分からない。

「間に合うか!?!」

銃型の召喚器をこめかみに突きつけ、引き金を引き撃つ。ペルソナを召喚し、回復を指示。その一連の流れと美津雄のシャドウがメギドラを撃つのとどちらが早いか、もはや賭けだった。

「うおおおおおっ!!」

が、命の回復を待たずして二人が美津雄のシャドウ目掛けて飛び出す。

「小西先輩の仇だあああああつ!!」

「皆を守る!!」

陽介と真だ。二人とも、目の前の脅威に対し己のハートを燃やし奮い立たせ、ペルソナの召喚が間に合わないとクールに判断。己の身体

での攻撃を選択していた。

「くらええええええええつ!!!」

真の上段に構えられた刀の振り下ろし一閃と陽介の構えた短剣二刀流のクロス斬りが美津雄のシャドウに決まる。そして、その一撃がトドメとなったのか美津雄のシャドウが震え始め、メギドラの膨張もおかしくなっていく。

「まずい！ テイターニア！ 回復はもういい、二人を助けるんだ!!!」

「み、皆伏せるクマー!!!」

命は回復目的で呼び出したテイターニアに対し瞬時に指示を切り替え、テイターニアは一気に真と陽介の方目掛けて突進する二人を救出。その勢いのままコロシアムの反対側へと飛び込む。そしてクマの叫びに従ったメンバーが頭を抱えて伏せるのとほぼ同時に、メギドラが大爆発。すぐ下にいた美津雄のシャドウを呑み込んだ。

「……か、勝ったのか?」

爆発が収まり、心ここにあらずな状態で眩くのは完二。コロシアムにはもう異形の存在はいない。いや、正確に言うならば戦闘不能になった事で一時的に暴走が収まり人間の姿に戻った美津雄のシャドウが立っている。

「皆、大丈夫!?!」

次に起き上がった命が全員の安否を尋ね、彼の使役するペルソナ―テイターニアが真と陽介を抱えてやってくると二人を下ろす。

「う……つつ……」

「うう……」

二人とも疲労によって意識が混濁しているようだが、命に別状はなさそうだ。

「よかった……テイターニア、メデイラマで回復お願い」

ひとまずの無事を確認し、命は改めて回復を指示。テイターニアも領くと二人を下ろしてから両手を広げ、癒しの光を放って皆を癒す。

「う……せん、ぱい……」

と、体力の回復と共に真達が意識を取り戻した。

「みこと、さん……おれ、たちは……みんな、なは?……」

「……二人のおかげで、皆無事だよ。よくやったね」
陽介のぼーつとした声に対し、命は微笑を浮かべて二人の健闘を労う。

「せんぱーい!!!」

と、りせが泣きそうな顔に泣きそうな声で真に抱き付いた。

「もう先輩ってば無茶すぎだよお！ あんな高エネルギーの中に突っ込んだじゃうなんて先輩のバカ！ 無鉄砲！」

「ぐ、ぐえ……」

「りせちゃんりせちゃん、真君の意識が飛んじやうから落ち着いて」

りせの力一杯の抱擁に真の意識が再び飛びそうになり、命がそう言ってりせを引き剥がす。それからクマヤ、精神力を回復した雪子も参加して全員の身体を癒し、全員一時の休息を得る。

「うあ……」

そしてようやく件の犯人、久保美津雄が目を覚ました。

「気がついたか？ ったく、手間かけさせやがって」

「ひいつ!？」

目を覚ました美津雄を見下ろすように陽介が声をかけ、美津雄は驚いたように悲鳴を上げて立ち上がると、自分に注目している真達を見回して「なんだ、これ」と力のない声を漏らす。

「お前ら……お前ら、一体なんなんだよ!？」

状況を呑み込めないのか美津雄が声を荒げて喚き散らす。

「お前を捕まえに来た」

それに対し真は静かにそう告げ、美津雄が声を無くすと陽介が「警察がお前を追っている」と説明。

「諸岡金四郎氏殺しの犯人……そして、その前の二件も君に容疑がかかっている」

命が鋭く目を研ぎ澄ませながらそう言い、陽介が「お前が、全ての事件の犯人なのか？」と確信を問うた。

「すべての、じけん……」

美津雄はそう声を漏らした後、突然得意気にハハハと笑い始めた。

「そうだよ、俺だよ!」

高笑いをしながら、彼は己の容疑を認める。その得意気な様子に完二が「こんなクソ野郎にッ！」と怒鳴った。

「諸岡の野郎だけじゃない……頭悪そうな女子アナも、小西とかいう女も！ 全部俺がやったんだよ！ 俺が、全部だ!!」

美津雄がそこまで叫んだ瞬間、佇んでいた美津雄のシャドウが突如黒い霧となって消滅。それに気づいたりせが「消えた!？」と叫び、今までなかったことに千枝も「どういうこと？」と漏らす。

「は、ははは……消えた……化け物め、消えやがった……ざまあみろ、チクショウ……」

己のシャドウが消えたことに美津雄も気づき、己のシャドウに向けて悪態をつく。その直後美津雄は再び崩れ落ちた。

「お、おい！」

「かなり消耗してる……とにかく、早くこつから出さないと！」

「そうだね。真君、帰る準備を！ 異君、力を貸して！」

「あ、えつと、りよ、了解ッス！」

完二が慌てたように美津雄に声をかけるとりせが、美津雄がかなり体力を消耗している事に気づき、命は真に還る準備——つまりカエレルの準備を頼み、完二にも力を貸すようお願い。完二も僅かに戸惑いながらも了承、命と完二の二人で美津雄に肩を貸す形で担ぎ上げ、直後真がカエレルを使用。この場所から脱出し、テレビから出る。

「……は……なんで……んな、トコ……なんなんだ……お前ら……や、やめろ……なんで、テレビが……ううっ……」

「ちよ、ちよつと」

色々あつて混乱し、支離滅裂になつていゝ美津雄に千枝が声をかける。が、その前にクマが「聞きたいこと山ほどあるクマ！」と言つて美津雄の前に出ると「どうしてこんな事をしたのか答えろ」と問い詰める。

「はは……なんだお前……着ぐるみか、それ?……はは、バカじゃねーの……キモイ、ぜ……」

こんな状況でも相手を嘲笑し、虚勢を張る美津雄にクマがうがーと

叫ぶ。が陽介は「余計に混乱する」と言つてクマに下がるように言つた。

「もう一度聞く、本当にお前がやったのか？」

「しつげえんだよ……なんども、そう……言つてんだろ……」

真の念押しに質問に対してそう答える美津雄に、りせが「何でこんな事をしようとしたのか」と尋ねる。

「人を三人も殺そうなんて……」

りせの言葉を継いで、千枝がそう美津雄に言う。と、いきなり美津雄がハハハハハと再び高笑いを始めた。

「街の騒ぎ、見たろ？」

美津雄はそう皆に話す。大騒ぎになったこの事件、それは俺が一人でやってやったんだ。と美津雄は高笑いをしながら得意気に語る。

「つまり、目立ちたかつたって事か」

命が目を細めて美津雄に言葉を投げかける。

「私や他の人を狙つたのは、どうして？ どうやってさらつたの？」

次に雪子が叫ぶように美津雄に問いかける。

「んだよ……見た事あんなど、思つたら……ハハ、お前、雪子じゃん……」

美津雄は相手が雪子である事に気付いたようだが、今更自分と話したいとかあり得ないと、訳の分からない支離滅裂な言動を見せ、そんな美津雄に雪子も自分の事を恨んでたならそれでいいが、他の人はどうしてなのか答えてと詰め寄つた。

「は……はは、笑える……すげ、必死になつてんの……」

他の人を危険にさらし、拳句には殺したことに對し怒りを見せる雪子を美津雄は嘲け笑う。

「久保、美津雄」

その次の瞬間、低いドスの効いた声はその場に響いた。

「天城さんの質問に答えろ」

命だ。前髪で隠れていない左目だけでなく、隠れているはずの右目からも凄まじい威圧感を感じ、陽介達でさえ驚いてしまう。そのターゲットである美津雄の感じるプレッシャーはその比ではなく、彼はう

つむくとぶつぶつと声を絞り出した。

「誰だって、よかったんだよ……どいつもこいつも……むかつくヤツばっかだ……」

「誰でもいい?……」

美津雄の言動に陽介が震える。そんな事で彼が思いを寄せていた先輩は殺されてしまった。

「お前、覚悟は出来てるんだろうなあ!!??」

陽介が怒りのままに吼え、拳を振り上げて殴り掛かろうとする。

「花村!!」

が、その拳を真が抑えつけた。

「椎宮!! 離せよ!!」

「こんな奴、殴る価値もない!!! お前の拳をこんな奴のために汚すな!!!」

陽介が真に怒鳴り、真もまた陽介に怒鳴り返す。

「そうツスよ、花村先輩……」

完二も真の言葉に同意しながら美津雄の前に立ち、彼を見下ろし睨みつけた。

「くく……なに? 俺を殺そうっての?」

「か、完二君!」

まさか陽介の代わりに自分が美津雄を殴るつもりなのかと思った雪子が叫ぶ。が、完二は雪子を見て小さく首を横に振った後、美津雄の胸ぐらを掴みあげた。

「殺すだ? クソが、思い上がんじゃねえ! てめえは取り返しがつかねえ事をしたんだよ! キツチリ償って落とし前付けやがれ!! くだばっていいのは、てめえのしたことがどれだけ重いか……骨身で分かった後だ!!!」

「……」

そう言い終わると同時に完二が手を離し、美津雄は再び崩れ落ちる。

「なんでだよ……ちくしよ……んでこんな、くだらねえヤツに……」

陽介も崩れ落ち、行き場のない怒りに嘆き苦しんでいた。

「……警察」

「……え？」

完二が呟き、皆が完二の方を見る。

「何、ボサツとしてんだよ!? こういう時の110番じゃねえスカ!」

「あ、ああ、そう、だな……」

完二の言葉に陽介が歯切れの悪い様子で頷いていると、その横で命が真を見る。

「花村君をお願い」

「分かりました」

命の指示に真が頷き、命は携帯電話を取り出すと110番をプッシュ、警察に通報。それから真及び女性陣、そしてクマには陽介を連れてフードコートで待つてもらおう事にし、命と完二で美津雄を警察に引き渡す。それから二人も一緒に署まで連れて行かれ、簡単な事情聴取を受ける事になるがそこはほとんど命がテレビの世界などについて隠しつつ矛盾しない程度の嘘を盛り込んで事情を説明。解放された後、命達は再びジュネスに戻り、フードコートにやってくる。

「はあ、あの足立ってデカがえらい嬉しそうでよ。堂島さんでしたっけ? 椎宮先輩のおじきにえらい怒られてたツスよ」

「はは、光景が想像できんな、それ……まあ、これで……俺らの役目も終わりって事かな……」

完二の説明を受けた陽介は弱々しく笑いながら呟く。

「動機が『目立ちたいだけ』なんて……あんまりだよ……」

美津雄の自供を思い出した千枝が、やりきれない様子で呟く。が、陽介の様子を見てはっとした顔を見せて「いや、意味があればいいわけじゃないんだけど」と慌てたように続けるが陽介は「分かっただけから心配すんな」と笑う。が、やはりその笑みはぎこちなかった。

「終わったね、全部……あとは、警察に任せようっ!」

りせが後は警察に任せようと言い、クマもテレビの中の世界が平和になった事を喜び、雪子も「良かったね」と微笑む。

「本当……色んなことあったけど……」

まだ半年も経っていないのに本当に色々な事があつたと雪子が話

すと、クマが雪子姫の逆ナンを話題に出し、雪子がどこまで粘着のと怒る。事情を知らない完二が「逆ナン!？」とびっくりした声を出す。雪子は「サウナの事忘れて欲しいでしょ？」と心なしか低い、脅すような声で即彼を沈黙させる。そして一番新米のりせが、ずるい。自分も皆の分を見たかったと悔しそうに話す。

「……あ、そっか。俺と椎宮と命さん、そんでクマだけか、全員分見たの」

りせの言葉を聞いて思い出したのか、陽介が呟く。

「ね、花村のつてどんなんだった？ そろそろ時効でしょ、教えてよー」

「いや、よく覚えてないな」

興味を持った千枝が真に尋ねるが、真は悪戯っぽく笑いながらあしらう。陽介も「まーまーいいじゃん」と慌ててその話題を終わらせた。

「つて、そういうえば椎宮ん時は何もなかったんだよな？」

「へ〜……え、ホントかなあ？ やっぱ先輩はトクベツな人？」

陽介は真は気づいたら自然にペルソナを使っていたことを思い出し、りせは僅かに疑わしげにそう問いかける。

「そういうや、先輩を『リーダー』って呼ぶの、考えてみりや、しまいなんすかね……」

寂しそうに完二がそう呟く。完二の言葉に千枝も「何だか寂しいね」と呟くと、場の空気が妙に重くなる。と、りせが名案を思いついたとばかりに微笑んだ。

「ねえ、打ち上げしよう？」

彼女は打ち上げを提案。楽しいし、終わったと実感できると思う。と言う。

「あー、打ち上げね！ いいかも！ いっちよ、パーつとやつとく？」

「はいはいはい！ クマ、ユキチャンのお家行きたい！」

りせの提案に千枝が乗り気になり、クマは雪子の家、つまり天城屋旅館に行きたいと騒ぐ。完二も「先輩んち、温泉旅館だったっけ」と思い出したように呟いた。

「あ、天城先輩も、入ってる……温泉？」

「口に出すなつて、ヘンタイっぽいから……」

完二の頬を赤らめながらの言葉に陽介がぼやいた。

「あ、僕も入ってるよ?」

「命さんも悪ノリしないでくださいって!! って完二、なんで顔赤いんだよ!?!」

「はあ!?! いや、これは違うツスよ!?!」

命が笑いながら言うのと陽介がツツコミをダブルに入れ、未だ顔が赤い完二は違う違うと首を横に振る。

「た、楽しそうだけど、今日はちよつと無理かな……」

雪子の言葉に千枝も「夏休みでシーズン中だもんね。お部屋いっぱいか」と慣れているのか頷く。クマも「ダメクマか」と残念そうに呟くが、雪子が「今度ね」と約束すると嬉しそうに笑う。

「あ、じゃあさ。代わりにお前んちとか、どうよ?」

と、陽介が真の家はどうかと提案。だが直後「何の打ち上げかと叔父さんに尋ねられたらやりづらいか」と考え直す。

「なんとかなるだろ? 菜々子もいるけどいいか?」

「一緒でいいじゃん。てか、遊んであげようぜ」

真の言葉に陽介は笑う。

「そつか、叔父さん刑事さんなら、今日とか帰れないかもね……」

千枝の言葉に全員がそういえば、と呟く。地元を騒がせていた連続殺人事件の犯人が捕まったとなるとその対応で今日は帰れなくなる可能性が高い。

「菜々子ちゃん、お腹空かせてないかな?」

千枝が呟くと、今度は雪子が思いついたように「皆で何か作るのはどう?」と提案した。

「へー、先輩達、お料理得意なの?」

雪子の提案にりせが素朴な疑問を持ったように尋ねると、雪子と千枝は互いに顔を見合わせて「それなりに?」と答える。二人の言葉に陽介が「何を言っているんだ、この人達は……」と表情を歪ませる。

「天城、里中……」

「あ、えーつと……あ、あれから旅館の人達に教わってるし……お、お

「買い物とか……」

「わ、私もえーっと、肉の本読んでるし……」

真が腕組みにジト目のコンボで雪子と千枝を見ると二人は目を泳がせながら呟く。

「ね、私も料理得意だよ?」

と、りせがそう言って「先輩に作ってあげたいな」と話す。それに真が焦った様子を見せる。

「じゃじゃーん。クマ、いい事思いつきました! 料理対決でモツキュモキュくの巻! みたいなあー!」

クマの能天気な言葉に陽介は心なしか震え声で「料理対決だ? ますます嫌な予感すんな」と漏らす。

「お、お、面白そうじゃん」

「ええー、私が勝っちゃうけど、イベントの絵的にそれでいいの?」

千枝が震え声で料理対決に賛成するとりせが自信満々な発言を見せる。

「ほう、面白い」

と、なんと真が一番乗り気になっていた。

「え? 先輩も作るの?」

「料理と聞いたら黙っていられないな」

「その通りだね」

りせが驚いたように真を見ると彼は超乗り気に頷き、さらには命も参加を表明する。

「それじゃあ、審査員は菜々子ちゃんだね」

雪子がそう言うのと千枝が「燃えてきたぜえ!!」と叫び、その勢いで全員食品売り場に出発。その道中で真が菜々子に電話で晩御飯の献立について相談する。なお、遼太郎は今日も遅いと連絡があった後らしい。

「え……ごはん? お兄ちゃんたちが?」

「ああ。天城や里中、久慈川たちも遊びに来るんだ。それで、何が食べたい?」

「たべたいもの? えーと……なんでもいい」

献立はなんでもいい、ということ伝えるが雪子は「遠慮してるんだよ」と言い、真はもつと聞いてみる。

「オムライス……オムライスがいい！」

菜々子からオムライスのオーダーが入り、真はそれを皆に伝えると菜々子に楽しみにしててと伝えて電話を切る。

「オムライスね。いいチョイスだ、菜々子ちゃん。流石にそんなくらい無難なら、食べられない物体にはならなそーだ」

陽介は腕を組んでうんうんと頷くが、女性陣三人がうつむいているのに気づく。

「……あれ、どうした？」

陽介が呆けた声で問うと千枝が「食材取ってくるから」と言ってるのを後にし、何故か別々の売り場に散っていく。命も「料理なんて久しぶりだなー」と言いながら卵売り場に歩いていった。

「欲しい材料、取ってきてやるよ。言ってみ？」

陽介は林間学校の経験から全力で真のサポートを行う事を決意。売り場の事は完璧に把握しているので真が欲しい材料を取ってこようと思ひ、尋ねる。

「いや、材料は自分で選びたい。売り場に案内してくればそれでいい」

「あ、そ、そう？ んで、何作る？」

「そうだな……シヨウユオムライスに挑戦してみよう」

「おう、分かった。んじやまず醤油だな。この時間ならつと……」

真から献立を聞いた陽介はこの時間帯ならどこが最安値か思ひ出し、雪子達が戻ってきた時の為にカートのを完二に任せて真を売り場に案内。真は食材一つ一つを吟味し、カートに入れていた物とは別に用意したカゴに入れていく。

そして真が戻ってきた時、既に雪子達は出揃い、カゴには一通りの食材が入っていた。

「フオアグラ!?」

「さっすが見逃さないね、先輩。スペシャルなオムライスって言ったら、極めつけはコレでしょ」

陽介がカゴの中に何気に入っている高級食材に声を上げるとりせは得意気に笑い、次にふっと哀しげな目を見せる。

「前に先輩達、とても言葉では表せないようなヒドいもの食べさせられたって聞いたから……」

「いや、俺は食ってないんだが……」

「食べたの、俺と一条な？ あと命さん」

りせの若干間違った情報に真が首を横に振り、陽介が修正。

「いやまあ、あれは酷かった……」

「だ、だからうるさいって！」

しかし肝心の料理に関してはフォローのしようがないのか眩き、千枝が怒る。

「かわいそうに……一体誰が、そんなひどいものを……」

りせは渾身の演技を見せる。と、千枝の頬がぴくぴくと引きつった。

「くく久慈川さん？ 調子に乗ってられんのも、今の内ですことよ？」

千枝の言葉に雪子もこくと頷く。

「……一撃で仕留める」

なんか料理を作るにあたっては相応しくない言葉がその口から発された。

「つてあれ、そういえばクマ君は？」

「ん？ そういや……つて」

いつの間にか姿が見えなくなったクマに気付いた千枝が尋ね、真達が周りを見渡すと肉の試食コーナーに居るクマを発見する。見ると、調理担当の婦人に甘えた仕草で未開封の肉を焼いて欲しいと、口説き文句のようにおねだりしている。

「あいつ……シメっぞ……」

クマの行動に陽介が低い声でそう呟く。それからクマは危うく調理担当の婦人が最高級肉を開封しそうになったところで陽介から拳骨をくらって試食コーナーから引きずり出された上で陽介から説教をくらい始め、その間に真達は買ったものを精算。それぞれ分けてから真の家に向かった。

それから料理対決参加メンバーは料理を開始。真や命の料理を手伝うつもりで陽介と完二も近くで待機し、菜々子の相手はクマに任せられていた。

「ほんだと……ウチアゲ」すると、実感するや……」

楽しく騒がしい料理風景を見ながら、クマは安心と寂しさが混じったような声で「事件、ついに終わったんだ」と呟く。が、その後クマは寂しそうな複雑な表情でうつむいた。

「クマ……そろそろ、あっち」に帰らないといけないな……」

「どこかに、帰っちゃうの？」

クマの言葉に菜々子が不思議そうに問いかけ、クマも「約束が済んだからね」と寂しげに笑って返す。

「ふうん……やくそくかあ」

菜々子はそう呟いた後、無邪気に笑ってクマを見る。

「じゃあ、菜々子とやくそくしたら、帰らなくていいの？」

「ナナチャンと……約束？」

「んつと……あそんでもらうやくそく。だめ？」

菜々子は無邪気に笑ってクマと約束。

「菜々子、放つといてすまない……クマも菜々子の世話を任せてすまないな」

と、料理が一段落したのか、あるいは火を使いたいのだがコンロがわあわあ悲鳴を上げている女性陣に占領されてるから料理が出来ないのか——恐らく後者だろう——菜々子とクマの様子を見に来た真をクマは見る。

「クマは……センセイたちに、約束を果たしてもらったよね……だから、もうアツチに帰らなきゃ……」

「約束？……ああ、忘れていた。気にしなくていいと思うが？」

クマの言葉に真は首を傾げながら、自分達が犯人を捕まえるのにクマに協力する事を言っているのだと思い出し、別に気にしなくてもいいと思うとクマに話すが、クマは「約束は約束だし、破ったらよくないし」と歯切れ悪く呟く。

「クマがいないと寂しくなるな」

「せ、センセイ……」

真の寂しげな言葉にクマは感動したように声を漏らした後、菜々子を見て頷く。

「ナナチャンと約束。遊ぶ約束、確かにした……クマ、帰らなくて、ほんとにいいのかな？……」

その言葉に菜々子はうんと頷く。

「クマの方からじゃなくて、ナナチャンの方から、約束……とつても……とつてもうれしい……ありがとう！」

クマは目を潤ませて菜々子と真にお礼を言った。

「椎宮ー、里中がコンロあけたから使っていいってよー」

と、陽介が真を呼びに来た。

「ヨースケ……」

「あん？」

クマが陽介に話しかける。

「クマ、新しい約束ができたから……も、もすこし、ジュネスでお世話になりたい！ お願いできますか、お代官！」

「はあ？ バツカだな、当たり前だろ？」

クマが必死に頭を下げてお願いするのに対し、陽介は何当然の事言ってるんだというように返して勝手に職場放棄するな。大体お前がいなくなったらシフトに穴が開いて調整大変になるんだと説教を始める。

「でーきたーっ！ はい、ジャマジャマ、先輩！」

と、説教している後ろからりせが陽介を無理矢理どかしてきた。続いて千枝と雪子も自分の作ったオムライスをテーブルに配膳する。

「じゃあ、俺はコンロを使ってくる。先に食べていてくれ」

「あ、ご、ごめんね、占領しちゃって」

真の言葉に雪子は律儀に謝り、だが真は気にするなどだけ返して既にコンロ使用中の命と一緒に料理を再開する。

「どうぞ、召し上がれ！」

りせが満面の笑顔で菜々子に言う。と、陽介が「ま、まー待て」とそれを留める。

「いきなり菜々子ちゃんに食べてもらうってのは、その……いかがなもんかな」

陽介が呟き、千枝の方をちらりと見ると千枝が「こっち見んな！」と小声で怒鳴る。

「あー、毒見役ってことスか」

完二の発言にりせが酷い言い方だと唇を尖らせる。

「じゃ私のは、まず花村先輩、食べてみて。絶対おいしいんだからー」
りせは自信満々に自分のオムライスを陽介に薦める。それに陽介は「実はナニゲに期待してる。そうじゃなくなつて『りせちー』手作りの料理を食べるとか普段絶対ない体験だ」と喜んで、いただきまーすとちゃんと挨拶してりせ作オムライスを一口口に入れる。

「う……」

その瞬間陽介の顔が引きつった。というか痛みに耐えているような表情に見える。

「こ……これは……菜々子ちゃんには……やれないな……」

「やつだ、美味しくて独り占め宣言!」

「あ、ああ、まあ……(…んだこれ、めっちゃ辛い! この辛さと熱さ、溶岩かちくしょう!?) フォアグラって食感なんてどこにもねえし! ……な、なんかだんだん鉄のような味がしてきた……つてかやべ、鈍痛が……な、なんでだ? ……」

陽介は外面普通に見せつつも内面で悶え苦しんでいた。

「じゃあ、次、私のね」

「味見は、んじゃオレっすね」

次に雪子が言うのと完二がスプーンで雪子作オムライスを一口掬って口に運ぶ。

「うお、うおい、しょんな無防備に……」

痛さで舌が回らなくてもなお陽介は完二を心配する。

「……っ……っ……っ……」

完二は訳が分からない様子で二口三口とオムライスを口に運ぶ。

「ちよ、ちよつと、何か言つてよ」

流石に雪子も心配になったのかそう問うてきた。

「いや、その……なんつんだ?」

完二もコメントに困った様子を見せる。

「『不毛な味』っていうか……」

「不毛!? 『不毛』って、味に使わないでしょ!?!」

自分の料理に対し出されたあんまりな評価に雪子が叫び、美味しいのかどうなのかと詰め寄る。

「お、おいしくはないツスね……なんかこう、『おふ』を生でかじったみてえな……」

自分なりにコメントを導き出す完二。「こんだけ色々入ってて、全く味がしねえって、ある意味才能じゃねえスか?」と締めくくった。それに対し雪子は「繊細な味が分からないだけよ!」と完二に反撃する。

「……」

と、菜々子が雪子作オムライスを一口食べる。

「……おいしいよ?」

「な、菜々子ちゃん!……」

菜々子の笑顔でのコメントに雪子が感激の声を出す。

「じゃ、じゃあ、次はあたしので。うー……緊張するな……けど、絶対うまいと思う! 今度こそ!」

「クマがいただきますー」

千枝作オムライスの味見役はクマ。彼はぱくぱくとオムライスを食べ歩いていく。

「ど……どう?」

「うん、まずい」

クマは単刀直入にぶった切った。

「ヨースケ達も食べるクマよ、ほれ」

「自分で『まずい』つつといて、お前……」

クマの勧めに陽介はぼやきつつも千枝作オムライスを一口食べると、「あー、なるほど」と納得した。

「や、ほら……でもさ。前のカレーに比べたら格段の進歩じゃん?」

「ふ、普通にまずいってのが、一番キツイから……しかも、慰められた

……」

陽介のフォローに千枝はがくつと肩を落とす。

「……」

と、菜々子が千枝作オムライスを一口食べる。

「これも、おいしいよ?」

「……菜々子ちゃん!」

菜々子の笑顔でのコメントに千枝も感激の声を出す。と、雪子も千枝作オムライスを食べる。

「あー、ほんとだ……」

雪子もはつとしたように頷き、

「ほんとだほんとだ、普通にマズイ、これ! あははははは!」

何が彼女の笑いのツボだったのか笑い出し、千枝はムカツと来たように「りせちゃんの食べてみなよ! 絶対あたしのが美味しいんだから!」と言い、雪子はりせ作オムライスを一口食べる。

「う……うぼっ……」

直後雪子は失神。りせも「せ、先輩!」と驚いた声を出す。

「一撃だ……」

完二が眩き、陽介が苦笑いを漏らす。

「こっ……子供には分からない味なんだもん! 大人の味なんだもん! 先輩達が、お子様なんだもん……私、私……ううう……ひつく……うわああん……」

りせは痲癩を起こした後泣き始め、それを見た菜々子は今度はりせ作オムライスを一口食べる。

「ん……」

菜々子は一瞬辛さに怯む、が、すぐに笑顔はりせに見せた。

「からいけど、おいしいよ!」

「菜々子ちゃん!……ねー、そうだよね! 菜々子ちゃんが一番オトナ!」

「うっわ、ウソ泣きキター!」

菜々子から高評価を得た瞬間りせは嬉しそうに微笑み、余りの変わり身の早さに千枝が驚愕の声を上げる。

「騒がしいな？ 一体どうしたんだ？」

と、丁度オムライスを作り終えた真と命がやってくる。

「お、真打キターー！」

陽介がぐつと拳を握り締め、菜々子の前からオムライスをどかし、真のオムライスを菜々子の目の前に置く。

「お兄ちゃんの！ いただきまーす」

菜々子も嬉しそうに真作オムライスを一口食べる。

「すっごいおいしい！ こんなオムライス、はじめてたべた！ すごい！ おいしい！」

「ありがとう。ライスにケチャップの代わりに醤油バターを使ってみたんだ。喜んでもらえたら嬉しい」

菜々子は嬉しそうに全部食べていく。

「はは、じゃあ僕のはこれどうぞ。くオムライスの島、コーンの海でくです」

命が気取ってことんと卓袱台の上に乗せるのはまるで自然豊かな島のように彩り豊かなオムライスと、オムライスを島に見立て、コーンスープを海のようになみなみと盛ったスープオムライスだ。

「うお、すっげー!!!」

陽介が歓声を上げて我先にとスプーンを伸ばす。

「おお、花村ずるーい！ あたしもあたしも!!」

続いて千枝、完二、クマ、リセとスプーンが伸びていく。もちろん真は自分の分を死守しつつ菜々子の分もちやんとキープしておく。というか菜々子の分キープは全員暗黙の内一致の意見なのであるが。そしてなんだかんだで全員分のオムライスが消費される。

「菜々子ちゃん、お腹いっぱいになった？」

「うん」

千枝が尋ね、菜々子が首肯すると陽介が立ち上がって「ところでさ」と言う。

「今度、お祭りあるだろ、商店街のさ。あれ、皆で行かないか？」

「あ、さんせい！」

陽介の提案にリセが賛成し、クマは「ひよつとして浴衣クマか！」と

興奮、もちろん菜々子も一緒。それに菜々子は喜び、陽介も決まりだなと頷くと、「出店で買うと、大したモンじゃなくてもウマいんスよね。また」と完二がにしと笑った。

そして夜も遅くなったのでこの場は解散。りせは家が近くの完二が送り、雪子はバイクに乗ってきていた命と一緒に旅館に連れ帰り、千枝は真と、同じ方向までは陽介と一緒に送っていくことになった。「……で、なんで愛家で肉井なんだよ……」

「まあ、持ち帰りだからいいだろ」

その道中千枝は愛家の前に立ち寄ると急に肉井が食べたくなったと言ってお持ち帰りを注文しに店に飛び込み、陽介がぼやくと真がそう返す。

「……そーいやよ、ありがとな」

「なにがだ？」

唐突にお礼を言ってきた陽介に真が尋ね返すと、彼は照れくさそうに頬をかいた。

「ほら、久保だよ。俺、頭に血が上つちまってあいつぶん殴ろうとしたのを止めてくれただろ？……サンキュ」

「礼を言われる程の事じゃない」

陽介の言ったお礼の意味に対し真がそう言うと言陽介は「俺にとってはそーなの」と返す。

「……事件、終わったんだな」

「ああ」

陽介は星が輝く夜空を見ながら呟く。

「んーと、さ、椎宮」

「どうした、花村？」

いきなり自分の苗字を呼んできた陽介に真も問い返す。

「……なんつーかさ。もうこれ、やめにしねえ？」

「はっ」

「いや、悪い……俺達、付き合い長いし、友達だろ？　なのに苗字呼びってなんかよそよそしいっつーかさ。事件解決してからってのは妙だけどき……」

齒切れの悪い陽介に対し、真はふつと笑う。

「分かったよ、陽介」

「ぶっ!? い、いきなり呼ぶなよ!? こっちにも心の準備つてもんが
だなあ!!」

真のいきなりの名前呼びに陽介は吹き出し、叫ぶ。

「お前が望んだんだろ、陽介? 違うか、よ・う・す・け?」

「連呼すんなっての、真!!」

わざとらしく笑いながら名前を連呼、しかも二回目は本当にわざとらしく区切った呼び方をする真に対し顔を赤くしながら叫び返す陽介。それから二人はくくくつと笑う。

「まあ、あれだ。事件は終わっちまったけど、これからもよろしく頼む
ぜ、相棒!」

「ああ、相棒」

陽介の言葉に真は頷く。

「やつほーい、お待たせー!」

と、千枝が愛家から出てきた後、心なしか様子が変わったように見える男二人組を見て首を傾げる。

「ん? どうかしたっていうか、なんかあった?」

「いや、別に」

千枝の言葉に二人は異口同音で返し、千枝は再び首を傾げるが「ま、
いっか」と結論づけると「さっさと帰ろー」と言って歩き出す。真と
陽介もその後を追って歩き出した。

一方天城屋旅館に帰っている命と、その後ろに掴まっている雪子。

「……事件、終わったんですね」

「……」

「なんていうか、すつきりしませんね。私達がなんで狙われたのか、私
達は助かったけど、山野さんや小西先輩、諸岡先生はなんで殺されな
きゃいけなかったのか……」

「……」

「ご、ごめんなさい。でも、なんか口に出さないと不安で……」

無言の命に対しつい不安から思った事を口に出してしまう雪子は命に謝罪してしまい、命は無言のままバイクのスピードを上げる。

（事件は解決したはず……なのに、なんだ、このすっきりしない感覚は？……腹の中にストンと落ちないこの感覚、気持ち悪い……）

雪子の言葉に耳を傾ける余裕もなく、命は腹の中に抱える違和感と気持ち悪さを振り切ろうとバイクのスピードを上げ、帰路を急ぐのだった。

第三十八話 Summer Vacation (前編)

7月30日。昨日、ボイドクエストでの、事件の犯人のシャドウとの戦いが終わり、犯人——久保美津雄が連行された。

「ふう……」

事件は解決。真はそれを考え、一安心する。

「遊びに行くか」

昨日はこの前の戦いに続いて命を賭けたギリギリの戦いになった。今日はその気分転換をしても罰は当たるまい、そう思いながら彼は外出の準備を整え、家を出る。

「……習慣は恐ろしい」

が、彼はやってきたのはテレビの中で使う武器防具アイテムを入手でき、さらにはペルソナの強化を行う部屋ベルベットルームに続く扉がある商店街。毎日毎日の積み重ねが生み出した習慣がつい彼をここに足を運ばせていた。

「あ」

いきなり聞こえてきた声に真は反応、「マリー」と声の主の名を呼ぶ。

「ここで会うのは久しぶりだな」

「最近ベルベットルームでしか会ってない。しかも君、鼻やマージレットとしか話してない」

青色の帽子と同色の大きなカバンがトレードマークの少女——マリーに真が微笑を浮かべて挨拶するとマリーはジト目に棘のある言葉で応対しさらに「ばかきらいさいあくさいてー」といつもの悪態も忘れない。その対応に真も苦笑を見せる。

「悪かった悪かった。こつちも色々大変だったし忙しかったんだよ」

言い訳のようにそう言うがマリーの目はきついまま戻らず、真はしようがないというように息を吐いた。

「じゃあ、詫びと言ってはなんだが。今日はマリーに付き合うとするよ」

「いいの？　じゃ、行く」

真の言葉にマリーは遠慮なく「行こう」と言い、二人は歩き出す。「で、今日はどこに行きたい？　ジュネスでも沖奈市でも付き合つてやるよ？　今日は暇だしな」

「んー……」

真の問いかけにマリーは少し考え、彼の方を見て少し首を傾げる。

「あのさ、『学校』って、見れる？」

マリーは真が行っているのなら行ってみたいと、行き先に学校をリクエストする。

「あ、ああ……まあ、行ってみようか」

夏休みだが学校に入る事は出来るのだろうか、最悪の場合マリーをなだめるためなら忍び込む事も止むを得ないかなどと考えながら真はマリーを連れて歩き出す。

「キミってさ、毎日『学校』行ってるでしょ？」

通学路である鮫川の土手に来た時、マリーが突然そう真に問いかける。毎日学校に行っていて飽きないの？　と彼女は尋ねてきた。

「いや、楽しいぞ」

「楽しい……」

真の言葉を反芻したマリーはああ、と頷いて「テレビあるの？　野次馬ゲーノー速報」見れる？」とさらに尋ねる。

「いや、別にそういうわけじゃ——」

「おーす、相棒！　何してん……おつ、マリーちゃんじゃんか。ちよい久しぶりだな！」

律儀に誤解を解こうとする真の声を遮る形で、突然そんな声が聞こえてきたと思うと陽介が駆け寄り、マリーに気づくと彼女にも挨拶する。

「何してんだ？　散歩中？」

「いや、学校見学だ」

「は？」

陽介の質問に一言で答え、しかし陽介は頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら呆けた声を漏らし、真はマリーが学校を見たがっている事を彼に伝える。

「あー。あ、そっか。マリーちゃん他校生だから？　つーか学校……見て楽しいところあったっけ？……ってか、今夏休みだろ？　学校開いてんのかな？」

陽介は首を傾げ、いくつか疑問点を重ねる。が、やがて「ま、いつか」と結論を出した。

「じゃ、俺も参加すっかな。ようこそ、八十神高等学校へ、ってね！」芝居がかった口調でマリーにそう言い、マリーは「学校の中、見れるの？」と尋ねる。

「多分なんとかなるだろ。最悪交渉してみるよ。まあ任せとけって！」

陽介はどんっと胸を叩き、ひと足先に歩いていく。真とマリーもその後を追うように歩きだし、彼らは学校へとやってくる。夏休みにも関わらず校門が開いており、陽介は真とマリーを玄関に置いて職員室に「知り合いの学校見学」という体で相談に行き、偶然職員室にいたのが穏やかな細井先生だった事も手伝って一発オツケー。特に引率もなしに自由に見学してもよいという許可を取った。

「どうやら今日、委員会あったらしいんだよ。ラッキーだったな！」

玄関に戻ってきた陽介はにっと笑ってサムズアップしてみせた。それから真と陽介でマリーを連れ、校内を散歩しながら紹介していく。二階の廊下に差し掛かった辺りで陽介は足を止め、廊下と教室をぐるっと見る。

「んで、ここが俺らの学年の教室。なーんかレトロっしょ？　こじんまりしてるって言うかさ」

「……広い」

陽介のこじんまりしているという説明と裏腹にマリーは広いという感想を出し、陽介は「そう？」と驚いたように漏らし、しかし「ムダに土地があるから校庭もいれると広いか？」と評価を改める。

「ってか、マリーちゃんトコはどうよ？　やっぱ都会だから狭いわけ

「？」

「私のこと？……狭いよ。部屋、ひとつだから」

「ひとつう！……マジでっ。」

なんかお互い誤解しまくっていた。陽介は「特進クラスとか？」とずれた答えを出し、マリイは「わかんないけど」と返す。

「狭いし、暗いし、鼻しゃべんないし。ずっと黙ってて、つまんない」

「ハ、ハナ？……なに？ 先生？」

鼻というのを先生のあだ名か何かと解釈したらしい陽介はずっと黙っているって職務放棄じゃねとぼやいた。

「ね、他のトコ見たいよ。まだ見れるトコある？」

そう言ってマリイは勝手に進んでいく。

「……相変わらずだなー、あの子」

そのマイペース具合を陽介はそう評価した。

「ま、最近知り合うヤツ変わり者ばっかだし、もう慣れっただけだな」
「類は友を呼ぶ、という言葉を知ってるか？ 陽介」

陽介のははつと笑いながらの言葉に対し、真はそう言い残してマリイを追う。

「……ん？ おいちよつと待て真！ それどういう意味だよ!？」

真の言った意味を理解したらしい陽介も叫んでその後を追いかけていった。

それから真と陽介は誰もいない体育館や、真が所属している吹奏楽部の活動場所である音楽室をちらりと案内、最後に八十神高校の屋上へとマリイを案内する。

「んで、ここが俺らの溜まり場。どうよ、青春するには悪くないロケーションだろ？」

「セーシユン？」

陽介の言葉を受けたマリイは首を傾げて陽介を見て「セーシユンって何するの？ 具体的に」と尋ねる。それに陽介も驚いた様子で「具体的に？」と声を裏返す。

「まあその、なんだ？ ゆ、友情を育んだり、悩み打ち明けたり……か？」

陽介はそこまで言った後言葉にすつとかなり気マズイなこれ、とぼやいた。

「……わかんない。あの緑とか、赤の人も？」

「まあな」

マリーはこの前遊んだ千枝や雪子の事を思い出しているらしく、真がそれを肯定すると今度はマリーは真を見て「なんでセーシユンするの？」と聞いて来た。それに陽介は「まだ言わせる気!？」と悲鳴を上げる。

「いや、なんつーか……やつぱ楽しいじゃん？」

しかし陽介は照れたように微笑み頬をかきながら、上っ面の付き合いではなく、本当の自分を見てくれるヤツらと一緒にいるのは楽しいから。とまあなんだかんだ言って真面目に説明した。

「……本当の自分？」

「ああ……そういうヤツらといるとき、俺も本当の自分を見失わずに、ちゃんと向き合えるっつーか……」

陽介は言葉を続けていくごとに顔を赤くしていき、うつむく。顔からは湯気が出ているかのような錯覚を見せていた。

「っだー！ ハズい！ もう無理、勘弁してくれ……っっていうか真！俺にばっか喋らせてずりいぞ!!」

恥ずかしさを誤魔化す為ぶんぶん両手を振りながら真に抗議する陽介。そんな中、マリーは「向きあう……」と声を漏らした。

「なんなら、一緒に青春するか？」

「お、いいねえ！ 俺は大歓迎だぜ！」

真がマリーに向けて尋ねると陽介もそう言い、彼女も仲間に迎え入れようと握手を求める。

「ヤダよ。だつて役に立たないから」

しかしクールにきつぱり拒否。この空気で断られてしまった陽介はがくんとずっこける。

「本当の自分を見失わずに、ちゃんと向き合える……」

「や、もういいから……頼むからそれ忘れてくれ……」

我ながらくさい台詞だと思うのか顔を隠しそう言い陽介。すると

彼は突然「そうだ！」と叫んだ。

「あのーほら、図書室！ 図書室はまだ見てなかったよな!? あんまゆっくりもしてらんないし、急ごうぜ！」

陽介はそう言い逃げるようにその場を去る。が、マリーは動かず、まだ考え込んでいた。

「……向き合うの？ ホントの自分と……」

陽介の言葉を気にしているらしいマリー。しかし、彼女は真の方を見ると「行こ」と言って歩き、真もその後を追う。それから三人で学校を隅々まで見学、最後に陽介がもっかい細井先生に見学許可のお礼を言ってから、三人は学校を出て行き、陽介とも解散。真はマリーをベルベツトルームに送ってから家に帰っていった。

その翌日。学生は夏休みだが学童保育はやっているらしく、真はその手伝いのバイトに行こうとバス停にやってきていた。

「椎宮」

と、バス停の前でバスを待っている彼に突然誰かが声をかけ、真もそつちを見ると「おお」と声を出す。

「一条」

「よ、よお……」

声をかけた相手——一条康は若干居心地悪そうな様子で挨拶し、彼の後ろに並び、一緒にバスを待つ。そしてバスがやってきた時、ふと彼は口を開く。

「ど、どこ行くんだ？」

「バイトだけど？」

「あ、ああ、そう……」

一条の質問に真は平然と答え、一条は妙にしどろもどろにそう返す。

「俺はさ、今から駅行って……施設に行くつもり。夏休みだし、時間がある内につてき」

「そうか」

決着をつけるつもりだ。それを真は察し、二人並んで席に座るとバスは走り出し、駅に着くより先にバイト先の高台についたので真は一

条を置いてバスを降りて行った。

「ニンジャっつこやる人、はーい!!」

学童保育で妙に目立つ少年——勇太やそのほかの子供達に振り回されながら世話をしている内に時間が過ぎていき、子供達は次々に迎えが来る。

「ユ一君、帰ろう」

勇太の義母親、絵里も迎えに来る。が、勇太はぷいっと顔を逸らしていた。

「今日の夜ゴハン、どこの出前がいい？ 高いものでもいいよっ。」

「……おなか、へってない」

勇太はそう言い、「もつと遊ぶ！」と言い残すと走っていく。

「……次からは、もつと遅く来るわ」

それを見た絵里も唇を尖らせ、「せつかくテレビ途中で来たのに、やんなっちゃう」と呟いてため息をつく。

「……仕方ないよね、血が繋がってないから」

「勇太を愛せない事がですか?」

絵里の呟きに真が尋ねる。それに絵里は口をつぐんだ後、彼を見返す。

「母乳上げる時に、母性って目覚めるんだって」

テレビで言っていたんだから本当だ、と絵里は主張。だから、たかが半年前に会った自分に母性なんか目覚めようがないのだ。だから仕方ない、これはきつと運命なのだ。と主張を続ける。

「運命と言えばね、こんなの知ってる?」

主張していたキーワードの中から一部を抜き出し、絵里は言う。曰く生まれる前から人生というのは何もかもが決まっている。神様が決めたプログラムを自分達はこなしているだけ。だからツライ事があつたとしても、それは神様が決めた事である。

「ね、何か楽にならない? 素敵な考え方でしょ?」

「……つまらない考え方ですね」

「……男の人には分かんないのね。そう思うと、男の人って可哀想よね。理屈でしか生きられないっていうか……」

絵里の言葉を真は一刀両断。それに絵里は悲しそうに返す。

「いえ、単純に人生、未来があらかじめ決められているのは気にいらなだけで……その理屈を許せば今、俺達が頑張っている意味がなくなってしまう。それだけの我儘ですよ」

絵里の言葉に対し真はそう静かに、だが力強く反論。それに対する絵里もさっきの言葉はテレビで言っていたことで人気もあるらしく、それならば良い事、そもそも考え方は人それぞれだと反論。真もなら俺がそう考えるのも勝手だ。と反論して論議を終える。

「私ね、その人の講演会にも行ったんだけど、それで号泣しちゃって……私、高次元の存在を感じたの！」

話を続ける絵里はにこにこしていたが、続けてこんな田舎だと面白い事は少ないからテレビやインターネットばかり。買い物も通販頼りだ。と呟く。

「……本当は、都会に戻りたいけど」

「……ふう」

絵里の言葉に真はため息を漏らす。

「……先生には色々言っちゃうね。ユ一君には……内緒にして。それから、他のお母さんたちにも」

「言ってどうする」

「……ありがとう。優しい先生」

絵里のお願いに対し真は呆れ気味にそう返し、絵里はホツとしたように微笑んでお礼を言う。それから絵里と勇太はぎこちなく帰っていき、真もバイトが終わったのでアルバイト代を頂いて高台からのバスに乗り、商店街に戻る。

「ん？ よう、椎宮」

「長瀬」

バスから降りたところにいきなり長瀬が声をかけてくる。

「なあ、一条見なかったか？ ちょっとサッカーの練習に付き合ってもらおうかと思ってたんだが……」

「一条だったら朝、施設に行くと言っていたが？」

長瀬の言葉に真が返すと、長瀬は「施設？」とオウム返しに返した

後、「ああ」と呟く。

「そつか……ちつと、心配だよな……よし。駅まで迎えに行くか！」

「……え？ いや、もうさつきバス出たんだが……」

「んなもんちよつとしたランニングだと思えばいいだろ？」

要するに走って駅まで行くつもりらしい。

「よし、行くぞ！」

長瀬はそう言うや否や走り出し、真もバイト帰りで疲れてるんだが、とぼやきながらその後を追った。

八十稲羽駅、駅前。丁度一条が改札から出てくると、走ってやってきた長瀬達が到着するのは同時だった。

「なんだよ、二人とも……」

「平気か？」

駅から出てきて、真と長瀬がいる事に気づいた一条が驚いたように声を漏らすと、真がそう尋ねる。

「心配して、来たのか？ わざわざ？……ヒマ人め」

憎まれ口を叩きながらも一条は嬉しそうに微笑んでいた。

「建物も先生らも全然、変わってなくてさ、何かすっげー、歓迎されちゃった……けど、本当の親とか、あそこに預けられた理由とかは、教えられないって」

「そうか……」

一条の言葉に長瀬は残念そうに表情を曇らせる。

「でも、これ、もらった」

と、一条はそう言つて懐から一枚の封筒を取り出した。曰く、一条を孤児院に預けた人からの手紙。らしく、まだ一人だと怖くて読んでいないらしい。真達三人は一条を真と長瀬が挟み込むように駅の階段に座り、一条は封筒から手紙を取り出すと、中身が見えない様に折りたたんだまますーはーと深呼吸する。

「よ、読むぞ……」

その言葉に真と長瀬が頷き、一条は意を決したように手紙を開くと内容に目を通す。

「こ……康くん、これを読んでるあなたはさぞ、大きくなったことで

しようね。あなたの名前の「康」は、あなたのご両親が、あなたに、ただ健康であつて欲しいと願つて付けました。偉くなつたり、大金持ちになつたりするより、ずっと大事で、大変な事です。体の弱かつたあなたの両親は、あなたが園に入つて半年ほどで、お二人とも亡くなりました。『育てる事が出来なくてごめんなさい』と、ずっと言つていました。『愛してる』と、ずっと言つていました。あなたは、ご両親の希望の光です。辛い事があつても、くじけてはいけません。胸を張つて進みなさい。あなたを見守つています……』

一条は手紙を読み終え、僅かな余韻の後に息を吐く。

「名前、無し。手がかり、無し……」

彼はそう呟いた後、「死んでたんだな……ホントの親」と声を漏らす。真はもちろん、長瀬も何も言えない様子だった。

「予想はしてたけどさ……やっぱ、ショック、かな」

一条は「繋がり……なくなつてたんだな」と悲しそうに呟いた。

「……そんな事はない」

「……そうかな、まだあんのかな。よく、分かんねーや」

真の言葉に対し一条は苦笑いをしてそう漏らす。

「けど、知つてよかつた……知れて、よかつた」

そう言い、一条は二人に「ありがとな」とお礼を言った。その笑顔はどこか弱々しいが、真は彼の支えになれている。と感じ取つた。

「そろそろ暗くなるな」

と、長瀬が低くなつてゐる太陽を見上げてそう呟く。

「帰ろうぜ……お前の事心配してる人、他にもいるだろ」

長瀬の言葉に一条は頷き、彼らは帰路についた。

それからこつこつと夏休みの宿題をしたり、バイトをしたり、仲間や友達と過ごしながら数日が過ぎ、8月9日。

「あ、先輩！」

商店街にやってきた真に声をかけてきたのはりせだ。たたたと真に駆け寄つてヒマならどっか遊び行こ、と誘つてくる。

「ああ、いいぜ」

「はい！ えーっと、どこに行こうかな……」

真の言葉にりせは嬉しそうに微笑み、二人は共に歩き出す。

それから二人はりせたつての希望で愛家に行き、一緒に肉丼を食べた後りせと一緒に家まで戻る。

「ちよつと味濃かった？ けど、美味しかったー。お婆ちゃんのゴハン、味薄いんだ。お豆腐メインだからヘルシーだけど」

「身体に良いじゃないか」

「そうだよね♪」

りせの言葉に真が返すとりせもふふつと笑い、二人は丸久豆腐店の前にやってくる。

「ん？」

と、真はりせの家の前にメガネにスーツ姿の男性が誰かを待つように立っているのを見る。

「あれって……」

りせが驚いたように声を漏らす。記者かもしくはストーカーかと不安気に呟いており、真はりせを守るように前に立つ。

「逃げるか？ それとも通報するか？」

「えっ!? だ、大丈夫だよ。まだ危険人物って決まってないし……」

積極的に対処に動く真に対し、りせは慌てて返し様子見を提案。

「……でも、ありがと、先輩」

それから安心したように微笑み、真にお礼を言った。

「ん、けど、あの人……どっかで……」

りせはそう呟き、相手に気づかれないように徐々に近づいていく。

「うそ!? もしかして、井上さん!?」

そしてその相手に覚えがあったのか、驚いたようにその男性——井上に呼びかけた。

「りせちゃん！」

井上と呼ばれた男もりせに気づくと彼女の名を呼んで近づき、りせは「なんでこんなところに……」と驚いたように呟く。

「事務所とはちゃんと話してあるでしょ!?」

「……今日は僕個人が納得できないから来たんだよ」

りせと井上なる男性はそう話し合う。

「……申し訳ないですが、どなたですか？」

その横から真が警戒の様子を見せながら割り込み、井上なる男性も真を見てえつと、と漏らした後名刺を取り出した。

「私、久慈川りせのマネージャーをしていた、井上実といいます」

「……なるほど。失礼しました」

名刺を真に丁寧に渡しながら井上はそう自己紹介。真も相手の身元が確認できたので一時警戒を解いた。

「今回は、りせちゃんの休業について、納得できないのでこうして訪問させていただきました。『久慈川りせ』のマネージャーとして、今まで見てき——」

「私は今、タレントじゃない！」

井上の言葉をりせは大声で遮り、もう生活時間をマネージャーに管理されてない。帰らないと警察呼ぶ。と井上を脅すように言う。

「ま、待ってくれ！ もう一度考え直してくれないか？ あの映画、僕は『久慈川りせ』しかいないと思う。君のファンだつて楽しみにしてたし……」

「これ以上……まだ私に何か演じろつていうの？」

「え？」

井上の説得に対しりせはぼそりと呟き、よく聞こえなかったらしい井上は呆けた声を漏らす。りせは誤魔化すように「もう芸能界とか、そういうの全部、もういい！」と叫んだ後、ちらりと真の方を見る。

「私……私、高校卒業したら、か、彼と結婚するんだもん!!」

「!!？」

りせのいきなりの告白に井上だけでなく、その相手である真も驚愕に硬直。しかし幸い井上と違って真の驚きは顔には出ておらず、りせはすぐ真の腕に抱き付いた。

「休業って言ってたけど、決めたの！ もう復帰とか……絶対無いかから！ 真はね、私だけ見てくれて……それに、すっごく優しいんだから！」

「……」

りせは必死になっており、真もそれを見ると井上を睨むような視線で見る。

「申し訳ありませんが、お引き取り願えますか？……話は大体掴めましたが、俺はくじ……りせが嫌がる事を強要させるわけにはいきません……りせは俺が守ります」

若干ぼろを出しそうになったが、真は話を合わせて井上を追い返そうと試みる。その言葉を受けた井上はうつむき、分かった。と返す。

「今日のところは……帰るよ。で、でも、僕は——」

「早く帰って!!」

井上の言葉を遮り、ヒステリックにも似た様子で叫ぶりせ。携帯に手をやっており、本当に警察を呼びかねない様子に井上はその場を去っていく。

「……………行つたみたいだな」

しばらく様子を見て、安全と判断した真がそう呟くと、りせは慌てて真から離れ、顔を合わせづらそうに背ける。

「え、えっと……」

りせは顔を背けながら、井上について紹介する。彼は自分のマネージャーだった人で、娘が自分と同じ年だったからとかでよく色々心配してくれたのだと。

「でも……もう、今の私には関係ない人」

そう締めくくった後、りせは慌てた様子で真を見る。

「えっと、その、ご、ごめんなさい……結婚するとかって、ウソついちゃって……」

「気にしてない。さっき言った、久慈川の嫌がる事を強要させたくないという事と、久慈川は守るといふのは俺の本音だ。そのためならこのくらいの嘘は許容してやるよ」

「先輩……やっぱ大人だな……」

りせが慌てた様子で謝罪するのを真は気にするなと言い、さっき自分が言った事は嘘ではなく本音だったと語る。それにりせはホツとしたように笑った。

「先輩って……やっぱ優しい。ま、まずいな……私………どんどん甘

えちやいそう……」

「俺に出来る事であれば、全力で助ける。俺達は仲間なんだからな」
りせの言葉に対し真は笑ってそう返し、その言葉を受けたりせは
ホツとした反動か照れくさそうに笑っていた。そしてりせが家
に入っていくのを見送ってから、真も家に帰っていった。

それからまた数日が過ぎ、7月12日の夜にはマヨナカテレビが映
る。しかしそれに映るものは何もなく、真は久保はあの後警察でど
うなったのだろうか、と考えを巡らせた。

それから翌日の夜。堂島家のテーブルには出前の寿司が乗せられ
ていた。

「いっやー、スーゴいっすね！　こんだけの大トロ、あんま見ないっす
よ！」

「祝う時くらい、豪勢にいかないとな」

足立の歓声に遼太郎が笑いながら言い、菜々子が「おいわい？」と
尋ねると遼太郎はテレビに映っているニユースを示す。

「〃相手は誰でもよかった〃　〃ムカついた〃　〃主役になりたかった
〃　など供述しており、容疑者の少年は、犯行は認めているものの、反
省の色は全く見られないという事です」

ニユースは、供述は多くの点で一貫性が無く支離滅裂で、精神鑑定
が必要との指摘があることを伝えており、警察では事件の全容解明に
向け、なお慎重な対応を迫られそうですと締めていた。

「実は、立件にこぎつけるの大変だったんだよ」

ニユースを聞いた足立が呟く。証言と状況証拠だけで困っていた
のだが、被害者の服から容疑者の指紋が出て、やっと立件が出来たと
いう事だ。布から指紋が取れるという最近の科学捜査の発展に足立
は歓声を上げる。

「もうこんな怖い事は起きないから、安心しなさい」

「うん！」

遼太郎も我が娘を安心させるように言い、菜々子も嬉しそうに頷
く。

「にしても、ホントふざけた奴ですよ。高校生のくせに連続殺人、

それも死体ぶら下げるなんて……発想が大胆すぎますよ。けど、捕まって良かった〜！ もうあれこれ疑わなくていいし！ このまま野放しになってたらと思うと……」

「やーめろ、話長いんだよ足立！ ネタが乾いちまうだろーが！」

足立は腕を組みうんうん頷きながら話すが、話の途中で遼太郎が話を打ち切らせ、足立は「すみません」と慌てて謝る。

「ほら、みんな食べえ食べえ」

「じゃ、お言葉に甘えて……」

遼太郎がそう言うってから真達は箸を出す、菜々子は寿司に手を付けない。その様子に足立が気づいた。

「あれ、菜々子ちゃん、お寿司嫌いななの？」

「わさび、入ってる……」

足立の言葉に菜々子は首を横に振ってそう言い、遼太郎はしまったなという様子で呟いた後、菜々子がどれを食べたいのかと尋ねる。それに菜々子は満面の笑顔で「ひらめ!!」と言った。

「しつばいなー菜々子ちゃん」

まさかのひらめというチョイスに足立は驚きを露わにした後、口元をペロりと舌でなめながら「じゃあ僕はウニを」と言っつてウニに箸を伸ばす。

「おま、ウニは一個しかないだろー！」

「甘いッスよ。早い者勝ちー！」

ひらめのわさびを取っている遼太郎が文句をつけるが、足立は素早くウニを取ると口に入れる。久々に騒がしい夕食が続いていた。

その夕食から数日が経って、本日は8月15日だ。朝、今日は何をしようかと考えている真の元に突然電話がかかる。

「もしもしー、オレオレ！ あ、オレオレ詐欺とかそういう漫才なしな、急いでんだよ」

「どうした？」

「急で悪いんだけどさ、頼みがあるんだよ。金曜まで、ジュネスのバイトしないか？」

「バイト？」

「人が足りなくてき、頼む！ バイト代はずむから！ 毎日フードコートでおごるし!! ホントお願いします!!」

陽介は電話越しにも分かるほどに必死に頼み込んできていた。

「分かったよ」

「おっしや！ ありがとー心の友よ!! んじゃ待つてるから、今日から頼むな!!」

「了解した」

真は電話を切るやいなや外出の準備を整えて菜々子にも挨拶し、原付に飛び乗るとジュネスに向けて走っていった。

そしてジュネスについて早々出迎えられた陽介からエプロンを手渡され、説明もそこそこにフードコートに放り込まれ、真は妙に多い客を一気に捌き始める羽目になった。

「ハア……たかがヒーローショーやるぐらいで、なんでこんな人が……つれええええ」

「口ではなく手を動かした方がいいぞ、陽介」

「ああ、真がいなかったらマジ死んでたかも……」

愚痴る陽介に対し真はせつせと働く。その手際に陽介はそう呟きながら仕事を続ける。

「いらっしやうい！ カキ氷、おいしいですよ！ キンキンに冷えたカキ氷で、一緒にヒーローを応援しよー!」

千枝も元気に呼び込みを行い、クマは着ぐるみ姿でキレのいい動きで焼きそばを焼いていた。

それから週末までフルタイム出勤。凶悪な炎天下の元、真達は労働に汗を流していた。

「しっかしマジで助かったぜ、真。流石相棒。流石心の友だよなー」

「困った時はお互い様だ……流石に辛くなってきたがな」

陽介の調子のいい言葉に真はそう返しつつ、二人はフードコート店舗の方を見る。

「いらっしやうい！ 暑い時こそ肉ですよー! 焼肉、ビフテキ、生姜焼き！ 肉肉づくしで夏バテ防止！ 肉はアナタを裏切らないっ!!」

肉好き千枝の調子のいいセールストークが響く。

「クマ……すげーよな。頭下がるぜ、ホント」

若干の休憩に入っている陽介の言葉に同じく休憩に入っている真は心から同意する。半袖でも暑いこの炎天下で、しかも鉄板の前で、更にはあの着ぐるみを着こんで毎日奮闘を続けていたクマには、確かに頭が下がる思いだ。と言っても流石のクマも、多少動きにキレが無くなってきてはいるのだが。

「やあ、二人とも休憩中？ お疲れ様」

「あ、命さん。お疲れっす」

と、命が缶ジュース片手に二人に声をかけてきた。

「はい、これ。水分補給はしつかりしときなよ？ 里中さんとクマ君は……まだ仕事るか」

真と陽介に二本の缶ジュースを渡しながら命はまだ鉄板の前で奮闘中のクマと炎天下の中呼び込みをしている千枝を見て呟いた後、そのついでにと普段より大分多い客を見回す。

「それにしても、流石は夏休みだね……終わったら少しは仕事も楽になるかな？」

「そう祈りたいっすよ……ってあれ？」

命の呟きに陽介はげんなりした様子で呟いた後、ふと彼の台詞のおかしい部分に気づく。

「命さんって事件の調査とかに来てたんすよね？ んじやあ事件は一応ケリついたんだし、夏休み終わる頃にはもう帰るんじゃないんすか？」

「ん？ いや、まだ帰らないよ？ 店長にも辞めますなんて言っただいし。それに辞めるなら辞めるで花村君に相談の一つでもしてるよ、僕花村君の紹介で働かせてもらってるんだし」

「あ、そうっすか……まあ命さんがいてくれるならこっちとしては願ったりなんすけど」

花村は命の言葉に対し苦笑を漏らす。

（なんとなくすつきりしないしね……まだ、ケリがついてない。そんな気がする）

あははと笑っている陽介と無言で水分補給をしている真を見なが

ら、命はそんな事を心の中で呟いていた。

「あ、いた」

と、いきなりそんな平坦な女の子な声が聞こえてくる。

「ぶっ!?!」

その声を聞いた真がジュースを吹き出し、驚いたように声の方である後ろを振り向く。そこには青色の帽子を被り、大きな鞆を下げた少女が立っている。

「マ、マリー!?! なんでこんな所にいるんだ!?!」

「まーがれつとにこぜに? もらったから来たの。見たいものあったし」

「ど、どうやって来たんだ?」

「まーがれつとが連れて来てくれた。ここなら君がいるってまーがれつとに教えてもらったし」

体よく押し付けられている。

「ねえ、のど渴いた。何か飲みたい。甘くないヤツ。水はヤダ」

マリーの我儘がフードコートに炸裂する。

「んーつと……誰?」

「えつと、マリーです」

初対面の命がマリーを見て首を傾げ、真が彼女を紹介して立ち上がり、命の方に歩き寄る。

「あの、ベルベートルームで世話になってるんですが……」

「いや、僕は会った事ないけど……でもああ、ベルベートルームの住人ならこの浮世離れた感覚は分かるよ」

自分もそういう相手と過ごしていた経験がある事から命はマリーの浮世離れた感覚に納得。すたすたとマリーに歩き寄ると微笑を浮かべる。

「初めまして、マリーちゃん。喉が渴いたんならこれどうぞ」

そうやって命はマリーにレモンジュースを差し出す。が、マリーは怪訝な表情を彼に向けた。

「誰? タラシ?」

「タラ……」

単刀直入な無礼さに流石の命も硬直。真と陽介もぶはつと吹き出した。

「センサー！ やつと休憩クマー!!」

と、ハイテンションなクマががもし進行上に子供でもいたら撥ね飛ばして怪我をさせてしまうのではないかと心配させるほどの勢いで突進、その進行上にいた真は思わずマリィを庇うようにしてその場を離れ、クマは真達が立っていた場所を通り過ぎるとキキーツと急ブレーキをかけて振り向く。

「ぬおー！ この子は誰クマ?!」

そしてマリィを見て驚いたように声を出し、「ひよつとしてセンサーの「ナオン」？ んもー、隅におけないバッドボーイねー」と続ける。

「……何これ、動いてる」

「クマだ」

マリィがクマを見てから真に尋ねると真は一言で説明。

「クマ……キモイ」

「し、しどい！ 愛らしいクマに向かってそんな……」

マリィの毒舌にクマは泣きそうな声で呟き、マリィは目の前の珍妙な物体が喋る事に驚き、何で出来てるのと疑問を出すとクマは「クマの半分は優しきで出来ています」と答え、マリィが「もう半分は」と尋ねると「クマ毛クマ」と返した。

「優しきと、毛?」

マリィの出した結論にクマは大きく頷く。流石のマリィも不思議そうなのか訳が分からないという顔が隠せていなかった。

「って、そういやマリィちゃん。今日はジュネスに何の用事？ ジュネス見学とか?」

と、陽介はようやく彼女の用件を尋ね、この前の学校の時のように「ようこそジュネス八十稲羽店!」と銘打ってどんと胸を叩く。

「え……要らないよ。もう見たもん」

しかしマリィは一刀両断。クマがヨースケフラれたクマーと彼をからかい、陽介はフラれてねーっつのと叫ぶ。

「マリー、店員に迷惑をかけていないだろうか?……」

「は? 意味わかんない」

真はこの忙しい中マリーが一人でジュネス内を徘徊していたと聞き、店員に無駄な仕事を増やしてないだろうかと心配になるが、そのマリーは毒舌で返すのみ。

「ちーす、花村先輩。前言ってたCDなんすけど……」

と、別の人間が陽介に声をかけてきた。

「完二」

「お、椎宮先輩。奇遇ツスね……ん?」

真が相手に返し、完二が真を見てにっと笑って返した後、マリーを見て首を傾げる。

「誰スか、こいつ」

「何、このオツサン」

完二とマリーは互いに無礼に相手を指し示した。

「オ、オツサン!?!」

「ああ、気持ちは分かる」

「あー、確かにな。うん」

マリーの表現に完二が驚いたような声を出すと真が頷き、陽介も肯定。

「誰がオツサンだコラア!」

直後完二の怒号が響いた。

「冗談だ冗談」

「チツ。椎宮先輩、性質悪いツスよ」

真が笑いながら返し、完二もぼやく。

「完二、何騒いでんの? 花村先輩に用あるんじや……あ、センパー」

と、一緒に来ていたのかりせまで合流。真を見て微笑むが、直後マリーにも彼女は気づき、彼女を近づきながらじーっと見つめる。そのただならぬ威圧感にマリーも押されて何も出来ず、りせはうつむく。

「……可愛い」

そしてぼそりと呟いた後、真の方を振り向いて眉を吊り上げた。

「先輩？ この子誰？ どういう知り合い？」

「え？ えーっと妹、ではなくって……」

眉を吊り上げて詰め寄るりせに真はこの前陽介をからかった時のように誤魔化そうとするが、むーという擬音がつきそうなほどに頬を膨らませて迫ってきているりせには通じそうにない。

「この人知ってるよ？」

と、マリーが突然言う。

「まーがれつとから聞いたもん。 ムリ、キライ、突っ走りすぎの
人」

「違いますっ！ シンドスギ！」

マリーのちよつと違うキャッチコピーにりせは反応し、振り向いて訂正する。

「あんな変わんない」

「変わりますっ！」

マイペースなマリーにりせは「んもうっ！」と言い、陽介に「この子なんなの!？」と叫ぶ。

「俺かよ!？」 や、この子はマリーちゃんつって、椎宮のツレで……」

「ウソ!? ツレって……」

陽介の言葉を聞いたりせは絶句してマリーを見る。

「スマン……火に油を注いだ気がする……」

直後陽介も自分の失言を真に謝罪した。

「ぶっはー。 やつと休憩だよー」

「皆、ご苦労様」

千枝と雪子も合流。これで自称特別捜査隊全員集合だ。

「休憩？……あーそっか。先輩方、ジユネスでバイトしてたんでしたっけ」

完二がぼんと手を打ってそう言うのと陽介が「完二とりせ、補習だったからなあ」とぼやき、りせはうぐつと声を詰まらせた直後「うるさいなあ」と返す。どうやら陽介は二人にもバイトの手伝いを頼んだようだがこの一年生コンビは双方この時期に行われる補習をくらってしまっていたらしい。

「ご、ごめんね？ 私もこの時期は旅館が忙しくって……」

「あーいやいや、そりゃしゃあねえって」

実家の方の手伝いで精一杯で助けられなかった雪子が慌てて謝るが陽介は気にするなど返し、りせは「なんか先輩私達と扱いが違う」とジト目を向け、陽介もそれに怯む。

「あ、そーいやマリーちゃん！ マリーちゃん夏休み暇？ 明日夏祭りなんだけど、夜に神社に来れない？」

陽介はりせのジト目から逃げるためにマリーに話を振った。

「あした？ よる？……」

「ちよつと花村！ いきなり明日の夜とか言われてもマリーちゃん困るでしょ！ マリーちゃんにも予定とかあんだからさー！」

その誘いにマリーがぼやき、千枝がいきなり誘ってもマリーを困らせるだけだと陽介に注意する。

「そ、そうだよな。悪いマリーちゃん、明日ってのは急すぎたわ、気にしないでくれ……」

陽介は悪い悪いとマリーに謝り、少し考えてからパチンと指を鳴らした。

「お、んじゃ皆と一緒に海行かね？ まだちゃんと日程決めてねえし、マリーちゃんが暇な時に合わせられると思うぜ？」

「……別にいいけど。海行ったことないし」

誘い第二弾をマリーは受ける。

「う、海行った事ねえって、おいおいマジかよ!？」

「オッサンうっさい」

完二がマリーの発言に驚くが、マリーはうつとうしそうに完二に返し、完二が「オッサ……」と口ごもると雪子は目を輝かせ、「じゃあ絶対行かなきゃだね!」とやる気満々の様子を見せる。が、陽介は「人生初の海があそこでもいいのか?」と妙に自信なさげな様子で呟いた。「別にいいんじゃない? 大事なのは『どこに行くか』、じゃなくって『誰と行くか』だと思うよ」

そこに命が助け舟を出し、完二も「そッスよ!」と同意する。

「そーいやマリーちゃん。海初めてって事は水着持ってなかったり

「？」

「水着？……持ってない」

陽介の確認にマリーが正直に返し、陽介は声に出さず口の中で「YES！」と叫ぶ。

「オツケオツケー！ マリーちゃんは何も心配しないでいいから！」

そしてグッドとサインを決めてウインクしながらそう答えた。

「……いいの？」

マリーが真に目を向け、尋ねる。

「陽介……真面目にやれよ？」

それに対し真は僅かに目を研ぎ澄ませながら陽介を睨み、陽介も「分かってる分かってる！」と引きながら答えた。

「先輩、妙にマリーちゃんに優しくない？」

「そうか？」

りせのジト目が今度は真に向く。が、彼は首を傾げてそう答えた。

「さてと。そろそろ休憩終わり。真君と里中さんはバイト最終日だし、ラストスパート頑張ろう！」

「二はいつ!!!」

「クマー！」

と、命がぱんつと手を叩いて休憩終了を示し、バイトメンバーは気合充分に答え、完二とりせ、雪子は帰っていく。そしてマリーは妙に心配になった真がバイト中こっさり抜け出してベルベツトルームに送り、大慌てでバイトに戻るという手段でベルベツトルームに送り返された。

第三十九話 Summer Vacation (後編)

学生にとって最大の休暇イベント、夏休み。その真っ只中の8月20日。もう日も暮れた頃、ぼんやりと幻想的な光を放つ提灯が辺り狭しと飾られ、わいわいがやがやと騒がしい人達の多い神社に真達はやってくる。今日は町の夏祭りだ。

「祭りって、去年はもつと賑わってた気がすんだけど……事件のせいかな？」

陽介がぼそりと呟くと完二もそれに同意、「あんだけ殺して騒がれりゃ、仕方ねえか」とぼやく。さらに既に引き上げているマスコミに對し好き放題かき回して逃げ足だけは速いと悪態をついた。

「まあ、空いてていいじゃない。それよりせつかくの出店だし、色々食べようか」

「おお、食べるクマよー!」

命がフオローをし、クマもわーいわーいと両手を上げて賛成する。それから彼らは出店でかき氷や焼き鳥や焼きそばやたこ焼きなど色々買いながら時間を潰していくが、その道中で陽介が神社の出入り口をちらりと見る。

「あいつら、おっせーなー……わざわざ天城んちで集合って、何してんだ?」

「待ってりゃその内……」

「わ、あれ、そうじゃない?」

陽介の呟きに完二がそう言うおうとすると、クマが完二の言葉を遮って突然神社の入り口方向を指差す。

「ごっめん、遅くなっちゃった」

「みんなのお着付けに手間取っちゃって」

千枝が声をかける。自称特別捜査隊メンバー女性陣(&菜々子)は全員浴衣姿で、その姿に陽介とクマは見惚れ、完二は恥ずかしそうに顔を逸らしていた。

「歩きにくい……」

「似合ってるよ」

菜々子が眩き、しかし真がそう言うとな彼女は嬉しそうにえへへと笑う。

「ナナチャン、可愛いーよ！ クマさ、ナナチャンにゾッコンラブ！」
「えへへ、ありがとう」

クマも菜々子の浴衣姿を褒め、菜々子はまた嬉しそうに笑う。

「ね、先輩、私達の浴衣どう？ グツときた？」

「ああ。似合ってる、久慈川」

「お、意外にさらつと言われちゃった。もしかして……言い慣れてる？」

りせの言葉に真はそう返し、りせはそう言いつつも嬉しいと笑う。

「天城さんも似合ってると思うな」

「そ、そんな……」

次に命が雪子を褒めると、雪子は顔を赤らめながら「見慣れてるだけですよ」と返す。

「んー。まあ、里中も意外に色っぽいんじゃないかね？」

「い、意外って言うな！」

最後に陽介がからかうように笑いながら言うのに千枝が顔を真っ赤にしながら強く言い返し、照れながら「なんか、恥ずかしいな」と眩く。

「ねー、カンジ。なんでそっぽ向いてるクマ？」

と、クマが完二がずっと浴衣姿の女性陣から目を逸らしているのに気づいて呼びかけ、完二は「うっせえー」と返すが頑なにそっぽを向いている。

「まさか……恥ずかしくて見れねーとかか？ 小学生かよ……」

「そ、そんなんじゃないねツスよ!!」

陽介の言葉に完二は叫ぶが、やはりそっぽを向いたまま。りせが「完二、かわいいー」と笑う。それから女性陣も追加し、彼らはまた出店を見て回る中で色々面白い食いき、真が菜々子にわたあめを買い渡す。

「よう……面倒見てもらってすまん」

「叔父さん」

と、遼太郎が合流。真が声をかけると菜々子も「お父さん！」と嬉しそうに笑う。

「わたあめ、買ってもらった!」

楽しそうにはしゃいでそう報告する菜々子に遼太郎はよかつたな、と笑う。

「よーし、なら次は俺と射的でもやるか?」

「うん! するー!」

遼太郎と菜々子は楽しそうに会話し、遼太郎が真達に「こっからは菜々子は引き受けよう」と申し出る。

「町が賑わうなんて年に何度もないからな。お前らも、楽しめよ」

そう言うのと遼太郎は菜々子の手を取り、菜々子は遼太郎と握ってな一方の手で真達にばいばいと手を振り、父娘は歩いていった。

「うーむ、夏の祭りかあ……ふーむ、ふむむう……」

クマが何か考え始め、真達はどうかしたのかと全員クマの方を向く。

「夏祭りの夜、寄り添って歩く二人……慣れない浴衣が着崩れて……夏」

なんか訳の分からない事を言い出した。千枝が「いきなりなんのコンビだよ」とツツコミを入れる。

「これはもう、いち、いち、で歩く! クマー!」

さらにそんな事を言い出し、雪子が「いち、いち?」と尋ねる。

「クマ思った。夏で、浴衣で、お祭りでしょ? 異性同士がダンゴ状態でぞろぞろ歩くんなんて、もはや不健康だと思いのね、人として。ここはカップルになって歩くのが大自然の摂理だね!」

クマの言葉に真達は呆れた様子を見せ、完二は「急に何言い出してんだテメー!」とどもりながら怒鳴る。

「はーい、クマに賛成!!」

と、りせが賛成の意思を見せた。

「え!? り、りせちゃん!」

「もう、先輩達……浴衣は何のため? 思い出つくるためでしょ?」

千枝が驚いたように声を上げるとりせはすぐさま説得開始、雪子が

「なるほど……」と納得し始めると千枝が「おい！」とツツコミを入れる。

「じゃ、早速〴〵いち、いち〴〵に組み分けしよ」

しかしその間に話が進んでいく。もう終わらせられる雰囲気ではなくなり、千枝は「どんどんスゴい」とりせの押しの強さを評価する。「でも、そつか……思い出か……」

雰囲気呑まれて納得し始める千枝に雪子も「私はいいかな。あ、このいいは〴〵参加〴〵」と賛成の意思を見せる。

「じゃ、じゃさ、そつちで適当に組み合わせ考えてよ」

そして千枝が男性陣に丸投げした。陽介も「マジ？ 俺ら決め？」と呟くと男性陣は女性陣に会話内容が聞こえないよう適当に距離を取りながら円陣を組む。

「つつても、男4、女3だろ？」

「え？ 男4？ え、一人抜けてない？」

「は？ 俺、真、完二、命さんで四人だろ？」

ナチュラルにクマがハブられていた。

「お、俺も参加した方がいんスカね？」

「そうだな、完二はまともに相手も見れねえのか……なら俺、真、命さんで……」

「み、見れる、見れるツスよ！ んな事くらい、バッチリ耐えてみせツスよ！」

完二は強制参加なのか確認を取ろうとするが、陽介がそう言うのと、女を見られないと見られるのは悔しいのかすぐさま前言を撤回する。

「あ、僕はいいや。皆で勝手にやってて。浮気はダメだしね」

「え？ 命さん？……浮気？」

命はカップル成立イベントを拒否、近くの型抜き屋台に行くと言型抜きを開始。陽介はそれにぽかーんとした表情を見せていた。

「ならクマは、お相手決めたゼヨ」

と、なんかクマが話に入ってきた。

「ちよつ、話進めんなコラ！」

「えつとねー、クマの相手はチエチャンとユキチャンとりせチャン」

完二が怒鳴るが、クマは構うことなくなんと三人相手を宣言。陽介が「お前が『イチイチ』って言ったんだろが!」とツツコミを入れる。「クマ公、俺あ真剣なんだよ……余計なチャチャ入れやがると……」
「そう、カンジ! これは真剣勝負! そしてカンジは真の漢クマ!」
完二もクマに凄むが、クマはそれに負けない勢いで完二に真剣な表情で語りかける。

「真の漢だったら、こんな盛り場で女子とチャラチャラしてる場合じゃないクマ! カンジは今、真の漢を貫けるか試されてるって、そういうことクマ!」

「そ、そうか……そうだよな! ありがとよ、クマ! いい事言うじゃねえか」

クマの全力で自分を棚上げした説得に完二は見事に乗せられていた。それに真と陽介が「おいおい」とツツコミを入れる。

「決定! クマが皆と行くよ!」

その隙にクマが女性陣にそう呼びかける。それに千枝が「どゆこと?」と聞き返した。

「って、おいクマ! まだ話は終わって——」

「あのね、男の数の多くて、仲間外れになる子が出ちゃうから……クマはそんなのツライし」

「——ちよ、おまつ!」

陽介の言葉に耳を貸さず、クマはキラキラオーラを振り撒いて女性陣を誤魔化する。

「はは、そうきたか!」

「優しいね、クマさん」

「えー、せっかく選択権譲ったのにコレ? もう……ちよつとがっかり」

千枝が苦笑、雪子がクマの言い分を信じ、りせががっかりした様子を見せる。そしてりせが「まいつか……じゃ、行きましょ」と言って四人は歩いていく。

「……負けじゃね? 俺ら、負けじゃね?」

陽介がぼやく。

「ちよつと、クマ!?　なんで他の子のブロマイド選んでんの!?　私のあつたでしょ!!」

「こ、このクマキチ!　あたしのネギマ、勝手に食べないでよ!」

「あー!　クマさんが浴衣にケチャップつけたー!」

続けてクマハーレム状態に髪をかきむしりながら「うおー!!　なんなんだこの展開!!」と叫び声を上げる。

「そつとしておこう」

そして真がそう締めた。

「大先輩!　真の漢の座を賭けて、俺と型抜きで勝負ツス!!」

「受けてたつよ」

なお、近くの型抜き屋では完二と命による型抜き勝負が開始されていた。

そしてその翌日。真は今日も神社では夏祭りが行われているらしい、と未だ騒がしさのある神社の方を家の窓から外を覗き込みながら考える。と、いきなり彼の携帯に着信が入り、真は窓から顔をひっこめると電話に出る。

「もしもし」

「失礼いたします、マーガレットにございます」

「マーガレット……この前マリーをジュネスに置き去りにしたのはどういう見だ?」

「あなた様がいらっしやるならば問題ないかと存じました……ですが、今回はその件でお電話申し上げたものではございません」

真は先日多忙極めているジュネスにマリーを置き去りにした事を咎めるがマーガレットはそれをすいっと受け流す。

「あなた様が絆を育んでいる者、その一人が言っていた夏祭りにマリーを連れて行って欲しいのです」

「別に構わないが……」

「それはよかった。昨日から夏祭りとは何か、とうるさくてうるさ

くて――」

「――ちよ、ちよつと！ 余計な事言わないで!!」

マーガレットのどこかからかうような調子での言葉の直後、電話の向こうからマリーの声が聞こえてくる。そして少しばたばたという音が聞こえてきた。

「も、もしもし?! ち、違うからね！ 別に夏祭りって何か気になつてるとか、行つてみたいとかじゃないんだから!!」

「ああ、分かっている。じゃあ夕方に迎えに行くから待つてくれ」

「……うん」

真はマリーと約束を取り付け、電話を切る。そして夕方まで何をしようかなと考え始めた。

そして夕方、ベルベツトルームの前までマリーを迎えに行き、二人は神社にやつてきていた。昨日に引き続き屋台が出ている。

「……ピカピカしてる。それに、色んな匂い……」

マリーが提灯と様々な屋台が出揃っている中で混ざり合う匂いをそう評価する。

「まあ、これが祭りの醍醐味かな?……とりあえずまずお参りでもするか」

「おまいり?」

真とマリーはそう言い合い、境内に向かう。

「何をお願いするの?」

「そうだな……マリーともっと仲良くなりますように、か?」

マリーの質問に対し、真は微笑を浮かべながらそう言う。それにマリーは驚いたようにのけ反る。

「さ、さいあくさいてーおんなつたらし!」

その直後顔を真っ赤にしながら噛みつくように真に毒舌を叩き込んだ。それから真がマリーの分も小銭を放り投げて二人はお参り、マリーが首を傾げる。

「なんだろ、なんか妙な感じ……」

そしてそう呟き、真に「もういいの?」と尋ねてきたので真も頷き、二人は出店に向かう。

「らっしやくい！　うちのは世界一うまいリンゴ飴だよ！」

「りんごあめ？……」

一番近くにあったリンゴ飴の出店の人が客引きをすると、マリーが足を止めて首を傾げる。

「お、美人さんだねえ。福引券、サービスしとくよ！」

「ふくびき？　なにそれ？」

「今ね、色んな屋台で買い物するとその鳥居んところでクジ引けるんだよ。豪華賞品からイマイチなものまで取り揃えてるよ！」

出店の人の説明にマリーは「ふーん」と返して真の方を見る。

「やる？」

「……ま、せっかくだしな。じゃあリンゴ飴二つ下さい、俺とコイツの分」

「毎度！　彼氏さん、太っ腹だね！」

「かれし？　じゃないし」

真はリンゴ飴を二つ注文、出店の人がマリーに向けてそう言うともマリーはいつものようにそう淡々と返す。

「おこのみやき？……」

「買ってやるよ。すいません、お好み焼き二枚お願いします」

次にお好み焼きを買う。

「きんぎよすくい？……」

「止めといた方がいい。あそこには金魚鉢ないだろ？」

「きんぎよばち……鼻に言っとく。置けて」

金魚に興味を持ったようだが飼う場所がないので諦めるよう諭しておく。

そして適当に出店を回り買い物をしてから、二人はくじ引きが行われている鳥居に向かった。

「はいはい……えーと、クジ二回だね。んじゃ、紙持ってくるから引いてくれな」

係の人に福引券を渡し、係の人は確認をするとクジを入れた箱を持ってくる。そして「目を瞑って引いてくれな」とマリーに促し、マリーは目を瞑って箱の中に手をつ突っ込むと、クジを二枚掴み出して係

の人に渡す。

「お、六等だね」

「ろくとー……何？」

「本だね、はい」

マリーは係の人に本を渡され、ぱらぱらと見ると顔をしかめる。

「もじ、おおすぎ……あげる」

すぐさま真に押し付けた。

「疲れた。そろそろ帰ろう」

そしてマリーは帰ろうとせがみ、真はマリーをベルベットルームまで送ってから帰路についた。

そして日は8月23日。よく晴れており、絶好の行楽日和だ。

「せんぱくい、本当に海ってこっちく？ もう結構走ってるよ」

若干うんざりした様子の子のりせが先頭を走る陽介に向けて呼びかける。現在彼らが走っているのは道路は道路だがなんか林に囲まれている。今日は前々から話していた海水浴に出かけていた。

「だーいじょーぶ」

と、千枝が減速してりせの横につきながらそう言い、すうつと鼻で息を吸う。

「海の匂い、するでしょ？」

「匂い〜？」

千枝の言葉にりせがそう疲れたような間延びした様子で返す。と、陽介が「安心しろ」とりせに言った。

「里中は、その辺の獣より獣だ」

「ほお〜？」

陽介の発言を聞いた千枝の声が低くなり、千枝と陽介は「あんたねえ!」、「褒めたんだっつ!」という言い合いを開始する。

「はあ……」

バイクメンバーではしんがりに近い部分を走っている真がため息をつく。

「つまんない、とおい、いつになつたらつくの？」

と、真の隣からそんな声が聞こえてきた。

「あはは……マリーちゃん、気持ちは分かるけどあまり動かないで。バランス崩れる」

それに対し、真の原付の横にバイクを付けていた命が返す。二人乗りが可能なのは命のバイクのみ。マリーは止むを得ず彼のバイクに二人乗りでやってきていた。そして二人は逃げる陽介と追いかける千枝の結果、少しペースが上がっている先頭集団を追いかけて少しスピードを上げながら、命が「二人とも喋つてないで前見て安全運転！」と呼びかける。

「ちよっ……勘弁、してくださいよ……」

「ク、クマツ、クマ……」

その後ろから年齢制限のせいで原付免許を取得できなかった完二と、そもそも論外であるクマがそれぞれ自転車とローラースケートで疲労困憊の様子で追いかけてきていた。

「地図見たんすか地図ー!!!」

「ま、待つ、クマ……も、無理……ぐえっ」

完二が必死で追いかけてながら叫び、クマはバランスを崩してずっこけた。

「あっ」

そんなこんなで林を抜けた時、千枝が嬉しそうな表情を見せる。

「ほら、海ー♪」

「おっしやー!」

「うわー……うわわっ!」

「きれー」

千枝が嬉しそうに言うのと陽介も間違つてなかつたと叫び、雪子はキラキラ光る海に見惚れるがその時一瞬バランスを崩し、慌てて立て直す。それを追い抜きながらりせも歓声を上げていた。

「……ん？」

真が後方確認用のミラーに目を向ける。

「うおおおおお!!」

「クマママママママ!!!」

完二とクマがラストスパートとばかりに追い上げてきた。

「海に一番乗り上等だコラーアー!!!」

「クマー!!!」

ぎゅーんと風を切ってバイク勢を追い抜いていく完二とクマ。

「……わ! 海一番乗りされちゃう!」

「こら、待てー! 一番は渡さないんだからねー!」

「よーし、いつそげー!!」

りせが叫んだので我に返った千枝がスピードを上げると陽介達もそれに追随。

「青春だな」

真も楽しそうにそう呟き、スピードを上げた。

場所は青い空、白い砂浜、波の音が爽やかに響く浜辺へと変わる。

「まだかなまだかなー♪」

「ドキドキクマー♪」

陽介とクマ（人間態）は楽しみそうににやけながら身体を揺らす。

「……何がだ?」

それに対し真が呟く。と、陽介は「はあー!?!」と叫んだ。

「お前、何言ってるんだよ!?! ほら、海だぞ? 水着だぞ? 生りせちー! だぞ!?!」

テンション高く陽介はそう言い、恍惚とした表情で「いーのか俺……ここで人生の運を使い果たすんじゃないか」と呟く。

「せんぱーい♪」

「うおっ!」

そんな軽やかな呼び声に陽介が反応、真も一瞬遅れて声の方を見る。片手を上げて振りながら、フリフリが目立つ水着のりせが駆け寄り、その後ろからなんだかんだで気に入ったのか林間学校の時に陽介に押し付けられた水着を着ている千枝と雪子が追いつく。

「先輩達、待っててくれたんだ。嬉しい♪」

「どうしているの?」

「先に海入ってりやいいじゃん!」

嬉しそうにしているりせに対し恥ずかしそうに顔を赤らめて露出している肌を腕で隠す雪子と千枝。その恥じらう格好もまたいいと陽介達がガッツポーズを取るが、その後ろにクマは目をやる。

「なにこの服?……布すくなすぎ」

胸を隠す部分を紐で繋ぐようにデザインされ、下の方も側面が紐で結ばれているデザインのパレートタイプの黒い水着を着たマリイはそう呟きながら水着をいじっていた。

「YES!!」

その姿に陽介はガッツポーズを取り、「俺の水着チョイスに間違いはなかったー!!!」と歓声を上げる。

「なあ真! やっべーだろこれは!!」

さらに真にも同意を求めらる。

「……皆、似合ってると思う」

それに真は笑みを浮かべながらさらっと褒め、それにマリイを除く女性陣は顔を赤らめる。

「……あ、あれ? そういえば完二と命さんは?」

りせが話を逸らそうと今ここにいない完二と命がいないと振る。

「せんぱあーい!」

と、噂をすれば完二の呼び声が聞こえ、雪子が「あ、来た」と反応し皆も声の方を向く。

『げえー!!!』

直後絶叫が響く。完二の水着は黒色のブーメラランパンツだった。

「おまつ、なんだそれっ!?!」

「あん? 黒シブいじゃないツスカ?」

「色じゃねーよエグすぎんだよ! 明らかに“ソツチ”を連想させんだよー!!」

「んな事言ってるの、アンタだけじゃないすか!」

陽介と完二が怒鳴り合う。

「つていうか完二、私には鼻血出さないワケ?」

次にりせがからかうように言うが、完二は「なんでオマエに鼻血出すんだよ？」と平然と答える。

「ハア!？」

その発言を聞いたりせが眉を吊り上げながら機嫌の悪い声を上げ、三つ巴の論争に発展。

「水着ってだけで、よくこんな盛り上がれんね……」

千枝が呆れたようにぼやいた。

「やほー、皆。遅れちゃったね」

と、何かやっていたのか命が遅れてやってくる。

「お、遅いつすよ命さん……!?!」

陽介がそつちを向き、絶句。それは真とマリー以外のメンバー全員が同じだった。完二のように水着チョイスで絶句させているわけではなく、事実命の水着は陽介達と似た青色トランクスタイプの一般的な水着。しかし露出している肉体は痩せ型な体型だがガリガリというイメージはなくむしろ贅肉一つなく無駄なく鍛えられた肉体美を披露し、荒事に向かないような体つきに見えてあのシャドウとの戦いを潜り抜けている事を一発で彼らに納得させていた。腰に手を当ててポーズを決めているような格好は水着特集のメインモデルと言われても納得させられるオーラを放っている。

「うあ、やば……」

りせがさつと鼻を手で隠す。それに気づいた完二が「どうしたんだ？」と尋ねるがりせは「なんでもない!」と睨んで威嚇、完二も「お、おう」と引きながら頷いて返した。

「これで全員だよな? さあ、今日は海水浴楽しもうか」

「うっひょーい! レッツ・マーメイド!」

命の言葉を聞いてクマは浮き輪を装着して一番に海に飛び込み、千枝が「一番乗りしたな!」と言つてその後が続く。さらにその後「ちゃんと準備運動しないと!」と言いながら雪子が止めようと走っていく。

「俺達も行こう」

「うん」

真もマリーの手を引いて海へと誘う。

「ちよつ、抜け駆け禁止ー!」

陽介、完二、りせもその後には海に飛び込んでいった。それから普通に泳ぐのに始まり、ビーチバレーや辺りの岩場の散策など、彼らは海を堪能する。

「うあー、腹減ったー。あいつらが上がってきたら飯にしようぜー」
「そうだな」

浜辺で寝っ転がる陽介の言葉に真も頷く。

「きゃっ?!」

「紐ほどけるー!」

「ちよつ、クマ! どこ触ってんだっつもの!」

「ケチケチクマねー! こう、豪快にポロリと……」

女性陣の悲鳴とクマの声。それに声だけでクマが何かやらかしているのと把握した陽介は「クマのやつ、何やってんだ……」とぼやく。

「うっひよおおお!」

「今度はなんだ!」

次に聞こえてきたのは完二の悲鳴。陽介も流石に起き上がると、完二が「捕まえたぞコラ!」と怒鳴りながらクマを担いで浜辺に上がってきた。クマも「無念」と呟いている。

「先輩、聞いてくださいよこのアホグマ!」

完二が真達を見つけ、歩き寄っていく。

「ちよ、ちよ、ちよおおお!」

陽介が慌てた様子でのけ反った。真も目を逸らしている。

「先輩、聞いてます?」

「待って。タイム。タイムツ!」

「完二、下、下……」

陽介が慌て、真の助言を受けて完二は下を見る。

「うっぎゃー!!!」

「俺がポロってんじゃねーかア!」

クマの悲鳴が響き、完二は自分の胸を腕で隠す。

「隠すのそっちかよ! 下、なんとかしろ!」

「ギブ、ギブウウウ！」

男子一同大パニックに陥っていた。

「そろそろ休憩にしない？」

「日焼け止め塗り直さなくっちゃ」

「水分チャージに肉チャージも重要だよー」

「にくちゃーじ？」

女性陣が上がってこようとしているらしい。なお命は遠泳に行っており、しばらく戻って来そうにない。

「あいつら上がってくんどー！」

「おいクマ！ シンナリしてんじゃねえ！」

「もう……ダメ……クマ……」

わあわあとパニック絶頂の陽介、完二、クマ。その横に立つリーダー真は手近にあった、この状況を脱出できるアイテムを見つけると後先考えずそれをひつつかむ。

「完二、これをっ!!」

そして完二に投げ渡した。

「あんたら何やって……」

浜辺に上がってきた千枝が真達に声をかける途中で硬直する。

「……」

そこに立つのは股間周りとは何か胸元をワカメで隠している完二。
(ナルキツソスみたいだな)

真が心中で己のペルソナの一体を思い返した。

「……どうしろと？」

千枝がジト目で尋ねる。

「これは……その……ヴィーナスの誕生？ なんちゃって……」

「た……誕生すツゾコリアー！」

陽介と完二も全力で誤魔化しにかかる。

「「へんたいい!!」」

が、誤魔化しきれず、マリー以外の三人——マリーは意味が分からないというように首を傾げている——は悲鳴を上げてその場を逃げ

出した。

「これで……よかつたのかな……」

「とりあえず……かゆいツス……」

陽介と完二はうつむいたまま、そう言い合った。

「お待ちせしましたー」

それから昼食タイムになり、陽介と完二——完二の水着は遠泳から戻ってきていた命が漂っていたのを発見、拾って完二に返した——が近くの自販機で飲み物を買って戻ってくると、真と命がそれぞれ作った弁当——命は旅館の厨房を雪子経由で頼んで借り用意した——を並べる。

『いったただつきまーす!!!』

みんな一斉に箸を伸ばし、千枝やりせは「うつまー!」と歓声を上げるが陽介が「やっぱ二人に頼んで正解だったわー」というと雪子も一緒に三人で陽介を睨む。

「マ、マリーちゃんは料理とかするの?」

慌てて誤魔化すためにマリーに話を振り、マリーは「しないけど」と答える。

「そういえば、まだちゃんと聞いてなかったよね、マリーちゃんの事」と、千枝がそう言い、陽介が「そういやそうだよな。真とはどういう知り合いなんだ?」と尋ね、完二も「お前どこ高だ?」とはどこぞの不良がパンピーに凄むようなセリフでマリーに尋ねた後、見た目で年下と判断したか「どこ中だ?」と訂正する。

「どここー? どこちゅー?……」

「今はこの辺に住んでるんだっけ?」

「っていうか、マリー」って外国人みたいな名前だよな? 苗字はなんていうの?」

「マリーちゃんの事、もっと知りたいクマー」

「み、みんな、その——」

一気に質問攻めにされ、事情を知っている真がフォローに入ろうと

する。

「い、いいじゃん！ 別にそんなの!!」

が、ひと足遅くマリーの叫びが響く。直後、その叫びに自分が気づいて皆を見回すが皆驚いたように固まっている。

「……」

いたたまれなくなってしまう、マリーはその場を走り去る。

「マ、マリーちゃん!？」

「ちよつと行ってくる」

千枝が慌てたように呼び止めるが、真がすぐに立ち上がり、マリーの後を追う。

「……いきなり、聞きすぎちゃったかな?」

申し訳なさそうな雪子の言葉に、さつき質問攻めにしてしまったメニューバーは面目なさそうにうつむいた。

場所は波の当たる岩場。マリーはそこに無言で座っており、真も彼女を見つけるとその隣に座る。

「……皆、悪気があるわけじゃない」

そしてマリーに話しかける。彼らに悪気があるわけではなくマリーの記憶喪失を知らないだけだ。という真の言葉にマリーは「分かってる」と返す。

「でも、記憶がないのって……そんなにダメなこと?」

次にそんな言葉をマリーは真に投げかけた。記憶がなくても、こうやって真や皆と色々見て回るのは楽しいし、それは今日だってそう。と、マリーは真に吐露する。

「……なんか、ごめん」

マリーはぼそりと真に謝る。

「真! マリーちゃん!」

「!？」

聞こえてきたのは陽介の声。しかし来たのは陽介だけではなく、命以外の自称特別捜査隊全員だ。

「さつきはごめんね、急に色々聞いちゃって」

「えっ?」

千枝の申し訳なさそうな謝罪の言葉にマリーが声を漏らす。

「こいつらデカシリーねえから」

「『デカシリー』って何？ それ言うなら『デリカシー』でしょ？」

完二の言葉にりせがツッコミを入れるとクマが「カンジのおシりはデカシリー」とからかう。それに完二が「俺のケツ見たことあんのかよ」と怒鳴ると、りせが「そういうのがデリカシーがないって言うのよ！」と完二を叱る。

「デリカシーがない……デカシリー……う、ぷぷつ！ あは、あはは、あははは！」

雪子がツボに入ったらしく笑い出し、他のメンバーもあっけに取られている完二を除いてつられたように笑い出す。

「ふふ……」

そして最後にマリーも笑い出した。

時間は過ぎて日は傾き始める。そろそろ帰る時間だ。既に全員服に着替えている。

「色々あったけど、楽しかったなー」

「まだかゆいッス……」

陽介がなんだかんだで楽しかったと言っていると完二が自分の身体を見ながらぼやく。マリーを除く女性陣&クマは砂遊びをしている。駄弁っている陽介と完二の隣で、真はマリーに話しかける。

「全員と一緒に遊ぶのは初めてだったよな？ 楽しかったか？」

「……変な人達。意味わかんない。うるさくて、馬鹿馬鹿しくて……デカシリーとか、下らない……ふふ」

自称特別捜査隊メンバーを見回しながらそう言うマリーは言葉とは裏腹にとっても楽しそうだ。

「あの人達みんな、『本当の自分』と向き合った？」

「ああ」

本当の自分、すなわち己のシャドウ。それと向き合った事を真はマリーに伝える。と、マリーはそっか、とだけ呟いた。

「にしても、楽しい時つーのは、一瞬で終わるよなー。こんな感じで高校生活も終わってっちゃうのかねえ……」

陽介がぼそりと呟く。と、完二が「何寂しい事言ってるんすか」と返した。

「ああ。事件は終わったし、むしろこれからだ」

「そうなんだけどさ」

真もそう言うと言陽介はそれに同意しつつも寂しそうな様子を見せ、しかしふとにやりと笑う。

「けど、バイクで出かけんのは想像以上にイイ感じだな。皆一緒つても楽しいし」

陽介はそこまで言った後、名案を思いついたように表情を輝かせる。

「そうだ！ マリーちゃん、今度は30日に花火大会あるらしいんだけどさ、一緒に来ない？」

「えっ？……いいの？」

陽介の突然の誘いにマリーは驚いたように尋ね返すが、陽介は「もつちろん！」と頷く。それから詳しい事はまた後でみんな集まってから相談をするという事でこの話は一旦終了。命の呼びかけによって全員集合、忘れ物が無い事を確認して暗くなる前に引き上げていった。

そして8月30日、夜。花火大会、真達は高台にやってきた。

「おー！ ホントに人少ないなー！」

一番乗りをした陽介はほとんど人気のない高台を見回し、完二が「河原はぶった返してたのに、よくこんな穴場見つけましたね」と雪子に言うと、雪子は「知ってたの」と返す。雪子はよく山側を通るし、お客さんに訊かれる事もあったから自然に覚えてしまったようだ。

「菜々子ちゃん、来られるかな？ 来る前に場所、電話しておいたけど……」

「叔父さんが今夜、どうにかして帰って菜々子と一緒に見に来るそうだから、なんとかなるんじゃないか？」

雪子の心配そうな声に真がそう返しておく。

「ん〜……まっくら、しずか、はなびってなにをするの？」

「もう少し待ってくれ」

真が集合前にベルベットルームで拾って来たマリーの言葉に真は苦笑交じりにそう答えた。

「そういえばクマは？」

次にりせがいつの間にかいなくなったクマを探し、首を傾げると陽介は呆れたように肩をすくめた。

「片っ端から女の子ナンパした挙句、大谷誤爆してお持ち帰りされた」その言葉に完二が「あー」と頷く。なお、とつさにクマ皮を着て着ぐるみを装っていたが問答無用で抱えられてしまったらしい。その末路に千枝が「放つといいレベル!？」と血相を変えるが、陽介は日頃のバチがあたつたんだ。と返す。

「今日の花村先輩、クマに冷たくない？」

りせが陽介を責めるような目で言うが、陽介は「今朝のアイツの所業を考えたらむしろ足りねー」と顔をしかめて返し、もう二、三人大谷おかわりさせたいくらいだ。と言う。

「や、死ぬだろそれ」

「一体何があつた？」

完二と真が呆れ顔でツツコミを入れる。それに陽介は「思い出したくもねー」と言いつつも、聞くも涙語るも涙、という様子で話し始める。曰く、クマが陽介の部屋から余計なものを発掘、花村家の朝食に「ヨーヨー、この本なーにー？」と純粋な疑問で持ってきたらしい。「おかげで俺がどんな辱めを受けたと思う!？」

「んな代物持つてつからでしよーが」

陽介の血相を変えた訴えを千枝が呆れた様子で一刀両断した。陽介も「親のいる前に持ってこられるとか想像しねえだろ!？」と叫ぶが、次にりせが「それ、女の子いるトコで話す？」と呆れた様子でぼやく。「へそくりって事じゃないの?？」

雪子もズレた答えを見せた。

「おえぶ……」

気分の悪そうなしかし聞き覚えのある声。

「この声はクマ君!」

命が一番に反応。少し遅れつつ皆が声のした方を見ると、ズタボロの毛並みをしたクマがふらふらとした足取りで歩き寄り、陽介は「予想以上だな」と呟いた後、クマ皮被った格好は目立つから脱いでこいと言うが、クマは「弧の中、生まれたままの姿だから」と返答。さらに「今朝見たヨースケの本と同じだね!」と続けると陽介は「サラツとトラウマ掘り起こすな!」と叫んだ。

「いた! お兄ちゃん!」

「菜々子!」

次に聞こえてきたのは菜々子の声、真が反応して振り向き、菜々子の後ろにいる遼太郎を見ると千枝が「堂島さん間に合ったんだ」と言い、菜々子は「お父さん、早く帰ってきてくれた!」と嬉しそうに答える。

「待ってた」

「えへへ……来れた!」

真の言葉に菜々子は嬉しそうに笑う。

「悪かったな、気いもませちまって。書類の残りもあつたが、足立に渡してきた」

遼太郎がそう答えていた時だった。

「ハァーイ、お嬢さん。よかつたら、ボクと愛の花火を打ち上げてみない?」

クマ皮を脱いだクマが菜々子をナンパし始めた。菜々子が「どーやんのー!」と笑顔で尋ね、クマが「えつとねー」と答えようとする。「やめなつての、クマきち! 堂島さんに現行犯逮捕されるかんね!」千枝が注意し、二人が言い争いをしていると下の方が騒がしくなってくる。

「そろそろ始まるかな?」

下のぎわめきを聞いた命がそう呟き、皆は高台から空を見上げる。と、ヒュルルルルという音が聞こえ、その次の瞬間パアツツという音と共に、夜空に大輪の花が咲いたかのように花火が広がった。

「わあー」

最初はいきなりの破裂音と光に菜々子とマリーは驚いて目を閉じるが、徐々に慣れていくと女性陣は花火に見惚れる。

「たーまやー！」

「かーぎやー！」

千枝が花火でのお約束を言うと、雪子が続く。

「クーマやー！」

次にクマが言うと、菜々子が真似をして「くーまやー」と続く。

「あー違う違う、覚えちゃだめ」

それを見た陽介が両手で小さくバツテンを作りながら菜々子に言い、その後ごほんとか咳払いをしてすうつと息を吸い、右腕を後ろにやり、体勢を低く取る。

「ジラ——」

「ジライヤー!!!」

ペルソナを召喚する時のポーズを取りながら己のペルソナ——ジライヤの名を呼ぼうとする陽介だが、それを横取りするように命がその場を呼び、先取りされた陽介はアッパーが空振ってがくんとずっこける。

「ちよっ、命さーん！」

「あっはっは。ごめんごめん」

ずっこけた後起き上がりながら陽介が文句を言うと命は笑いながら謝る。

「きれい……」

「これが花火だ」

マリーがぼかーんとした様子で眩くと真が言う。

「キラキラ、ぴかぴか、夜空に咲く光の花……」

「え？」

マリーが突然何か眩き、真が聞き返すと彼女ははっとしたような顔を見せ、顔を赤くする。

「ち、違うよ！ ベ、別に詩とかじゃなくなつて、た、たまたま心に浮かんだだけ！ そう！ それだけだから……」

マリーはそこまで言うと恥ずかしそうに頬を赤らめながらうつむ

き、真から顔を逸らす。

「……ば、ばかきらいさいあくさいてー。か、勝手に聞かないでよ！」
その言葉に真は苦笑を漏らすしか出来なかった。

「以上を持ちまして、納涼花火大会の演目はすべて終了となります」
最後を飾る一際大きな花火が消え去り、余韻を残しながらそんなア
ナウンスが聞こえてくる。

「菜々子ちゃん、楽しかった？」

雪子が尋ね、菜々子は「うん！」と返すがその次には「眠い」と呟
いて目を擦る。

「ははは、だろうな。もういい時間だ、帰って寝るか」

遼太郎も笑いながらそう言い、真達に「お前達もあまり派手に夜更
かしするなよ」と言い残すと菜々子連れて帰路につく。

「ナナチャン、バイバイクマ」

「ばいばいくまー」

その途中でクマがバイバイというと菜々子もバイバイと返し、他の
メンバーも一斉に「ばいばーい」「またねー」「おやすみなさーい」と
挨拶する。

「……花火は良かったつすけど、なんつーか……夏も終いつて感じっ
すね」

「それを言わんでおくれよ」

「私は、結構満足だけどな」

完二の言葉に千枝が哀しげに呟くとりせは満足そうにそう言う。
曰く仕事をしていると夏には秋の格好をしていて季節感なんてない。
それに比べて今年は海に花火、浴衣でのお祭りと夏を満喫できたので
りせとしては満足のようなだ。

「お祭りな……いい思い出ないけどな、誰かさんのおかげで」

陽介がため息をつきながらぼやき、それにクマが「そうなの？」と
尋ねると陽介は「お前だよ！」とツツコミを叩き込んだ。

「や、結構楽しかったつすけどね」

「うん。翼君、型抜き上手かったよ……危うく敗北するところだった」
楽しかったと語る完二に命も同意、しかし陽介としてはもつと甘

酸っぱいものを期待していたらしい。

「つーか今日、アイツも誘ってやりやよかつたツスカね」

「アイツって?」

完二の言葉にマリーが尋ね、完二は「いやテーマは知らねえだろうけど」とぼやきながら「その」と言葉を濁す。

「……ああ、白鐘探偵のこと?」

命の言葉を聞き、陽介も「アイツな」と納得した様子を見せる。

「まあ、そうかもな。よく考えりや、一応同じ事件追ってたんだし」

陽介がそう言うとりせもうんうんと頷き、「もう会えないかもしれないかもしれないもん。キツイこと言っちゃったしこれっきりってちよつと後味悪いかも」と少し浮かぬ顔で呟く。千枝も「そういえば、寂しいっぽいこと、零してたよね」と続けた。が、陽介はひよいつと肩を持ち上げる。

「ま、花火行こうぜ」なんつつてくるタイプでもなさそうだけどな
「もうこっちにいないのかな? 行動力あるし、もしかしたらもうどこか遠くの町で、別の事件に挑んでたりして」

雪子の言葉に完二がうつむくと、りせが「しんみりしちゃったね」と言う。

「そうだな……」

陽介は少し考えた後、パチンと指を鳴らした。

「そうだ、夏休みは明日で終わっちゃうけどさ。冬休みはスキーとかどうよ? きつと惚れ直しちゃうぜ? 俺、スノボ得意なんだよねー」

「……別にほれてないけど」

いきなり予定を立てる陽介とその気取った台詞にマリーがツッコミを返し、完二が「今から冬の話ってアンタどんだけ早い早えーんスか」とツッコんだ。

「だが、楽しみだな」

「だよな! 周りあんだけ山なら、きつと近場にゲレンデあるだろ」

「んなモン幾らでもあるツスよ。ちつと遠いけど、バイクありや余裕っしょ」

真が陽介の提案に同意、陽介もこれからゲレンデを探すつもりらしいが地元民である完二はゲレンデならいくらでもあると答えた。

「それは面白そうだけど、安全運転が基本だからね」

「わ、分かってますって」

と、彼らの教官役である命がツツコミを入れ、陽介も苦笑ながらに頷く。

「もちろん、その時はマリーちゃんも一緒だよな？」

千枝がマリーに話を振る。

「……うん。楽しみにしてる」

それに対しマリーは微笑を浮かべながら頷き、それを聞いた陽介は「マリーちゃん乗り気じゃない！ こりゃバシツと計画立てないとな」と気合を入れ、他のメンバーも大盛り上がりになる。

「んじゃ、計画煮詰めるために皆でどつか飯食いにいかな？」

「お、いいね！ もちろん肉ー!!」

「ぶぶ、千枝、それ素材……」

帰りにどこかで食事をしようという話になり、彼らは高台を後にし始める。

「あのさ」

と、最後尾にいたマリーが突然呟くように真に呼びかけ、真も「ん？」と呟いて振り返り、どうしたとマリーに尋ねる。

「思い出してみようかな、記憶……そ、その内だけど」

マリーは真の方を向いて、笑みを見せた。

「あの人達、楽しそうだったから……あんな風になりたい」

「協力するよ」

「うん、そうして。どうすればいいか分かんないもん」

マリーの言葉に真は「了解」と返す。

「別に今すぐってわけじゃないけど、その時は、頼りにしてるね？」

頼りにしている、というマリーの言葉に真はこくり、と頷いた。その時陽介が二人を呼び、二人も隣に並び合うと歩き出した。

第四十話 新学期

9月1日。今日から新学期が始まり、真は学校に向かっていた。

「あ、おっはよー」

「おはよう」

「里中、天城。おはよう」

声をかけてきた千枝と雪子に真も返し、千枝は残念そうに「夏休み終わっちゃうたねー」と言う。

「うーす。来るとき、道間違えたー」

千枝達と話していると、遅れて登校してきた陽介がそう真達に声を掛け、陽介の言葉に雪子が「休み、長かったからね」と言うと、千枝が「だからってどうなのそれ」と二人に突っ込む。そのまま校門前で駄弁っていて新学期早々遅刻するわけにもいかないので真達は校門を潜り、玄関に向けて歩いていく。

「おはようございます」

と、玄関の前で青い帽子を被った少年が声をかけてくる。

「おつまえ、えと、＼チビッコ探偵＼!!」

その相手に、陽介はすぐさま名前が出てこなかったので見た目のイメージに探偵とつけて呼ぶ。それに少年——白鐘直斗は思い付きで変な名前を付けないでくださいと怒りながら名前を名乗り直す。

「あの……高校だよ、こっこ」

中学生なのかと勘違いしているのかそういう雪子に直斗は呆れた様子を見せつつ、真達を見る。

「警察への協力は終えましたが、事件にはまだ色々と納得できない点があります」

真剣な目でそう言い、家の方の事情もあるのでしばらくこちらに留まる事にした。と直斗は説明する。今日からこの学校の一年生になったらしい。それに真達がびっくりした様子を見せると直斗は踵を返して歩き出し、数歩足を進めた後、再び振り返る。

「一応、皆さんに挨拶しておこうと思って。よろしくお願いします。先輩がた」

一言挨拶を終え、直斗は玄関に入ってしまった。

「先輩がた？……あの探偵クンが、後輩？」

千枝はぼかーんとした様子でそう呟いていた。

それから時間が過ぎて二学期初日の放課後。久方の授業に陽介がカッターと呟く。事件が解決したため向こう側の世界へと行き来する事もなくなり、時間を持て余しているようだ。日常が急にスラスカになったと不満そうに述べる陽介に、千枝が事件が解決したのは良い事じゃないかと反論。

「や、悪いとは言っていないけどさ」

その指摘に陽介がバツの悪そうな表情で口ごもる。自身も先ほどの発言が不謹慎だったと自覚があるのか、どことなく申し訳なさそうな様子を見せている。

「ねえ、今日もジュネス寄って帰るんでしょ？　なら、直斗君も誘ってみない？」

雪子の提案に、陽介と千枝が驚いた表情を向けると、雪子はちよつと気になっただけなんだけど話す。

「ああ、あいつ確かこの事件の協力の為だけにこっち来たんだっけ？」

雪子の言葉を受けた陽介は、直斗が稲羽に来た理由を思い出し、事件が終わればただの後輩に当たる直斗に、陽介が自分達と同じ転校生なんだなと呟く。

「うっし、誘おうぜ」

「こんちわ、先輩。誰を誘うの？」

直斗もジュネスに誘おうと決めたところにりせが声をかけてくる。

「あ、芸能人つてのもすごいけど、『探偵』つてのもたいがいレアだね」

りせを見た千枝が思い出したように言い、家どんな風なのかとかちよつと興味ある。と言う。雪子はなによりもあの歳でっていうのが不思議だねと疑問点を出した。

「あ、白鐘君を誘うの？　でも彼だったら、さつき廊下で女生徒に声を掛けられてたよ？」

りせの言葉に真達が一組教室前を見てみると、確かに二人の女生徒

に話し掛けられている直斗の姿が見えた。どうやら直斗に、この辺りを案内してあげると遊びに誘っているようだ。しかし、女生徒達とは対照的に直斗はあまり乗り気では無いように見え、事実「必要ないから」と拒否している。

「興味ないんです。遊び場にも、君達にも」

一刀両断、というにも少しばかり失礼な言い方に女生徒二人は「何言ってるの!?!」「親切にしてやってんじゃん! 何よその態度!」と若干イラついた様子を見せて直斗に迫る。

「あーあーつたく……折角モテてんのに、あいつ……」

陽介は呆れたようにそう呟いた後、「ようう白鐘君、元気かね?」と直斗に声をかけていった。いきなりの陽介の乱入に女生徒は「えつと」と口ごもる。

「うーッス。何してんスか?」

さらに完二まで合流。陽介と完二の二人がつるんでいるという事を知っているのだろうか、女生徒は「私らこれで」と言って足早に去っていった。

「……また会いましたね。僕に用でも?」

直斗は先ほどの事は気にも留めてない様子で陽介に話しかける。それに千枝が「帰りヒマなら、あたし達と一緒にどっか寄ってかない?」と遊びに誘った。

「僕と……一緒に?」

その言葉に直斗はそう呟き、少し考えた後に「今度にします」と答える。色々考え事があるようだ。

「考え事?」

「それに、今日は早く帰らないと。おじいちゃんに、そう言ったので」
りせが呟くと、直斗はそう次なる理由を続ける。

「そうか。それなら仕方ないな。じゃあ、また今度」

「ええ」

真は保護者にそう約束しているのなら仕方がないと納得、直斗も頷くとすたすたとその場を歩き去った。

それから真達は改めていつもの場所であるフードコートに集合。

いつもの席に座る。

「つたく、直斗のあの態度……明らかにデビューしくじってるだろ」

陽介は人に与える第一印象として大切なデビューを直斗が完全にしくじっている事を呆れ、学校生活は大丈夫なのかと心配する様子を見せる。

「確かに変わった子だけど、不思議な魅力みたいなのがあるよね」

「うっそ、天城ってああいう年下がタイプ？」

雪子の言葉に陽介が驚いたように言うと、雪子はそういう意味じゃなくてと困った様子を見せた。

「直斗君、考え事あるって言ってたけど、事件の事だよな？」

「名探偵的にはスツキリしてないんだろ……もう解決したってのにさ」

千枝の言葉に続いて陽介がそう言う。と千枝がフードコートを見渡して「ここももう『特捜本部』じゃないワケか」と、名残惜しそうに呟いた。今まで自分達が集まっていた場所が変わってしまう事に他のメンバーもしんみりした様子を見せる。

「あ、そ、そーいや、じき修学旅行じゃね？」

空気を明るくしようと、陽介は学校における最大イベント——修学旅行を話題に出した。

「あ、そうだったね。行き先どこだったっけ？」

「辰巳ポートアイランド」

千枝が行き先はどこだったかと考え始めると、雪子が答える。海に面している人工島で、かなりの大都会らしいと補足説明を入れた。

「……」

なお、雪子から行き先の名称が出た途端、真は固まってしまったが。

「ポートアイランド？ 修学旅行の行き先あそこなの？」

「うおおっ!!」

と、その背後から声がし、陽介は驚いたように振り向く。

「み、命さん!? 毎回毎回人の背後に気配なく立つの止めてくださいよ心臓に悪い!!」

「あはは、ごめんごめん。でも周囲の気配に気を配らないのはまだまだだよ?」

ジュネスエプロンを身に着けてバイト中の命は陽介に謝りながら、しかしそう言う。

「ポートアイランドかあ……私よく、ロケで行ったよ? ムーンライトブリッジの先んところでしょ? あの辺なら、結構遊べるところ多いはず」

「ん〜。まあ、ゲーセンとかカラオケとか遊ぶところは多いね、確かに……ね?」

りせの説明を受け、命はそれを肯定しつつ悪戯っぽい笑みを真に投げかける。それに真はがくりつとうなだれたままだった。

「いや、それがさあ、聞いとくれよ……」

が、千枝が気落ちした様子で話しを聞いてくれと言う。

「今回の旅行……遊んでる余裕、ないかも」

「は?」

千枝の言葉に陽介が返すと、千枝は語る。曰く、今年から観光中心の修学旅行は見直し、地方と都会のなんとかの触れ合いがとかで、向こう、つまりポートアイランドの私立の高校と交流会するらしい。ということだ。

「大分勉強メインで、マジメらしいよ?」

「うは……空気読まないにも程がある、ソレ」

げんなりとした表情で語る千枝に、同じくげんなりとした表情でりせが続く。

「私立の……高校?」

「……あー」

真は呆然とした声を盛らし、持ち前の直感で察した命がうんうんと頷く。

「私立の学校ってどんなトコよ?」

「なんか、すごい立派な高校らしいよ? 校舎もキレイで。あたしら行く日、向こうは休校日なのに、返上で頑張ってくれちゃうみたい」
気づいていない陽介と千枝はそう話し合う。

「あ、ああああああああ……」

その言葉を聞いた瞬間、真はそんな変な声を出しながら両手で頭を押さえ、テーブルに突っ伏した。

「せ、先輩!?! どうしたの!?!」

りせが慌てて声をかける。

「……真君、時には辛い現実とも戦わなくちゃならない。それがペルソナ使いの覚悟というものだよ」

と、命も苦渋の様子で未だ奇声を漏らしている真に呼びかけた後、「里中さん」と真剣そのままの声で千枝に声をかけ、千枝が「はいっ!?!」と返すと、彼はすう、と息を吸い、一拍置いて確信を得ているかの様子で切り出した。

「その私立の学校はもしかして……月光館学園っていう名前じゃないかな?」

その言葉を聞いた真がびたり、と止まる。パンドラの箱、この世の災厄全てが収まっていたとされる箱、その箱が開いたことで世界中に災厄が飛び散った。だが、その箱の中にはたった一つの希望が残されている。あたかも、その希望にすぎないように彼は頭を上げ、目をパチクリさせている千枝を見る。

「え? 命さん、なんで知ってるんですか?」

直後、真はずがんとテーブルに顔を叩きつけた。

「ん? ちょっと待てよ? げっこーかんがくえん?……どっかで聞いたことあるような?……」

陽介が腕組みをし、首を捻る。

「聞いた事あるっていうか、見た事あるはずだよ? 僕がジュネスでバイトする時、面接に提出する履歴書、花村君にチェックしてもらったでしょ?」

「あ、そうだ! 命さんの卒業してた高校の名前だ!!……って、ちよつと待てよ……」

陽介は合点がいったというように柏手を一つ打って頷く。が、その直後彼もはっとした様子を見せる。命と真の関係、それは命が高校時代の先輩後輩というもの。それはすなわち。

「……月光館学園は僕の母校で……真君がここに転校してくる前に通ってた高校だよ」

その言葉に全員が沈黙してしまう。つまり、真にとってはせつかくの修学旅行はほんの半年ほど前まで通っていた高校への里帰り。という事になってしまったわけである。

「え、えーと……ああ、そうだ!」

重くなってしまった空気を払拭しようと、千枝は続ける。

「でね、二日目の自由行動では、工場とか見学するんだって。で、三日目には帰る」

「ほぼ社会科見学じゃねーかッ!」

が、それは逆効果。陽介が悲鳴を上げる結果に終わってしまった。

「うへ……聞かなきゃよかった……」

「ま、まあまあ……ほら、今年から修学旅行、林間学校と同じで1、2年合同になったし。皆が一緒なら、そんなに退屈しないんじゃない?」

真と同じく机に突っ伏した陽介に雪子がフォローを入れ、完二も「ダレたら適当にどっか抜け出すってことだ」とフォローなのかよく分からない事を言い、りせは「お仕事抜きでポートアイランドとかどんくらいぶりだろ」と楽しそうに笑う。

「こ、この案、不評も出たらしいんだけど企画立案、バーイ、モロキン“なんだってさ。アイツらしいというか……”」

「うおお……モロキン……死してなお俺らを縛るのか……」

今は亡き諸岡教諭への追悼として彼の案を採用したということなのだろうか。しかし生徒としてはたまったものではなく、机に突っ伏した陽介は頭を抱えていた。

「なんか、教員としても別の学校の教員と交流する中で成長をしてくとか言ってたらしいって……」

千枝がそんな事を言っていたが、誰も聞いていなかった。

「……まあ、あっちのダチと久しぶりに会うチャンスとでも思えばいいか」

自分の中で折り合いをつけたらしい真は気を取り直してそう呟く。

「ねえねえ、今の旅行の話、もつとクマに教えるがいいと思うな」と、クマがぴよぴよこと足音を鳴らしてやってきた。

「いいから働けよ、お前は」

ポートアイランドとはどこか、何があるのかと興味津々に聞いてくるクマに陽介はそう返す。

「けど修学旅行、じきって言っても、まだそんなすぐじゃないよね。それまで何しよ……」

「まー、ヒマは今に始まった事じゃないツスけどね」

千枝の呟きに完二もそう言い、所詮人なんて一生ヒマの潰し方を考えるだけの生き物なんスよ。と続ける。

「……いい事言っみたいいな空気出してるけどさ。意味全く分かんないから」

完二の言葉に対し、千枝はそうツツコミを入れるのであった。

それからその翌日。真は放課後にジュネスにやってきていた。

「ん？ よお、真」

「陽介……仕事か？」

声をかけてきた陽介に真も返し、ジュネスにいるなら仕事かと思ねる。が、陽介は違う違うと言って笑った。

「俺だってたまにやプライベートでジュネスにいるっての。特別捜査隊の時もそうだろ？」

「……まあ、それもそうか」

「で、真は何やってんだ？」

「修学旅行にあたって、何か買っておこうかと思つてな」

真と陽介は喋り合い、陽介は「なら後で一緒に買い物しようや」と言うのと彼をフードコートに誘い、適当な席につく。

「たまにや、お前と二人でここってのもいいよな。金なくても、ここならちよつとサービスしてくれるし」

陽介は冗談っぽくそう言いつつ、その分面倒な事も多いんだけど。とぼやく。

「あ、いたいた、花村！」

と、そんな声が聞こえてくる。陽介は「こんな風にな」とぼやいて立ち上がり、声の方を向く。二人の女性がやってきた。

「お疲れ様です。今日はどうしたんですか、先輩」

「あのバカチーフに何とか言っちゃよ！ 土日出れないって言ってるのに、出ないとクビとか言うんだけど！」

派手な女子生徒が陽介に文句を言い、隣に立つもう一人の女子生徒が高圧的に「そういうのって、ナントカ法違反とかじゃないの!？」と続ける。

「や、でも先輩ら、面接ん時は土日も出れるって言ったんすよね？」

それに対して陽介が焦りながら言うが、派手な女子生徒は「じゃなきゃ採用されないじゃん！」と、要するに採用されるための建前だというような事を言う。

「あれ、花村君。今日はシフトじゃないでしょ？」

と、そんな声が聞こえてくる。

「命先輩」

「あ、命さん♪」

フードコートで仕事をしていたのだろうか、歩き寄ってきたのは命。それに真が気づくと、女子生徒二人もさっきまでの大声や高圧的な声はどこへやら、猫なで声で命に話しかける。

「ああ、えーっと……こんにちは。二人とも、今日はシフトじゃなかったよね？」

命は誤魔化すような笑顔で二人に言い、二人も「はい」と調子よく頷く。

「あのですねえ。私達も土日は用事があるっていうのにく無理矢理チーフから出る、そうじゃなきゃクビだって脅されてる」

「これってナントカ法違反ですよね？ だからちよつと花村君から注意してもらえないかなって」

女子生徒二人は猫なで声で命に話す。と、陽介がはあ、とため息をついた。

「分かった、分かりました。俺、ちよつとシフトについて話してみます

……」

「ああ、なるほど」

陽介の言葉を聞いた命は何があつたのかを察する。

「うん、用事があるっていうなら分かりますけど。お二人もクビになつたら困りますよね？　土日出られると言つておいて出ないというのは無責任ですし、特定の日に休みたいのならそれ以外の日に真面目に出ておいた方が、交渉もしやすいと思いますよ？」

「そ、そうですね……はい、分かりました」

「えーつと花村君、よろしくね？」

命の手前だと高圧的に出られないらしい二人はそう言つて歩いていく。

「……はあく命さん、助かりましたよ」

「うん。じゃあ僕はこれで」

陽介は上手い具合に助け舟を出してくれた命に感謝し、命はそう言つて歩いていく。

「先輩、やっぱ人気だな」

「まあな。バイトに入ってる女学生は大抵命さんがシフト入ってる時に潜り込もうと必死だよ。チーフもシフト調整に苦労してるぜ……そこにこれだからな、正直気が重い……」

陽介はやれやれとため息をつき、「命さんは、なんなら僕をこき使つてくれてもいいよって言ってるけど、そうもいかねえしな」と苦笑する。

「悪いな。こつちも流石にこれ以上日中にバイトを増やすのはきつい……」

「あ、いや別にいいって。またやばい時にヘルプ頼むかもしんねえけど」

「その時は出来る限り協力する」

真の申し訳なきような言葉に陽介は苦笑で返し、真もその時は協力すると約束する。

「あら、陽介君。ちようどよかつたわ」

そこにまた別の声が聞こえてきた。

「あー……ども」

「ちよつと聞いてちようだいよ！ この間のクレームの件なんだけど
精肉部長に……」

「あ、はいはいはい。この話なら、向こうで聞くんで」

大きな声で話し始める女性に陽介はそう返し、真に「ちよつと待つ
ててくれ」と伝えてから、従業員の話を聞きに行く。

「うあー、疲れた……俺は苦情係かつつの……」

「だが、真面目にやっている辺り偉いよな」

「はあ？ 面倒なだけだって」

真は嫌がりつつも律儀にしつかりやっている事を偉いと言い、しか
し陽介は照れたように笑いながらそう答える。

「つたくさ……みんな俺をジュネスの息子って利用してんじやん」

陽介はぼやく。それに、ヒマならまだしもテレビのことを知っている
以上、事件の事も考えなければならぬ。事件は解決しているが、
その犯人である久保美津雄は警察に手に負えるのか。そして法律は
テレビを使った殺人、というものをちゃんと裁くことが出来るのか。
それを考えていたら他の事に構う余裕はない、やれることがあるな
ら、やらなきゃならない。と陽介は話す。

「よく言った」

「ちよ、茶化すなって！ クサイこと言ったみたいで恥ずかしいだろ
！」

真の言葉に陽介は照れながら怒ってみせた。

「……こんなマジ系の話、するなんて思わなかったな。」

陽介はははつと笑う。

「前いたとこだと、くだらねー笑える話しかしなかったし……それで
いいと思ってた。こんなマジな話なんて、ホントお前らただだよ……
特にお前にはさ、初っ端から一番みつともねーとこ見られてるし」

陽介はそう言い、けどさと言う。

「なんかまあ……今考えると、お前でよかったな……とかさ」

今更だけど、あの時一緒に来てくれてありがとう。と、陽介は恥ずかしそうに笑いながら改めて真にお礼を言った。

「あーなんか色々あつて腹減ったな。うっし、レジの人のサービス期待して、ウルトラヤングセットに挑戦してみつかー!」

陽介は立ち上がると注文をしに行く。そしてウルトラヤングセットをそれぞれ平らげた後、真は修学旅行で使うものや、旅行の間の堂島家の食事の材料を買い出しして帰っていった。

それから時間が過ぎて9月7日の夜。翌日が修学旅行となり、真は旅行で家にいない間日持ちする料理としてカレーを作り置きしてから、学校配布の修学旅行のしおりを確認する。旅行は明日から二泊三日、一日目は交流先の私立月光館学園での交流会。二日目からは、千枝からは工場見学と聞いていたが実際は一日目の夜までに担当の教員に自分が行きたい場所を書いたプリントを提出し、認められればそこへ行つての自由行動が可能、認められなかった、または行く場所の希望がない場合は教員引率による学校推薦の工場見学となるらしい。「……まあ、あっちに行つてから考えるか。幸い行き先には不自由するまい」

元通つていた学校であり、リセと比べても土地勘はあるだろう場所。真の頭の中にいくつかの候補が思い浮かび、明日の夜にでも皆に相談しようと考えつつ真は荷物の最終確認。足りないものがないかを確認し、問題なしと判断すると今日は早めに床についた。

「ほーら、もう明日でしょー。今日入つて明日会いに行く! もう出発だよー」

「ま、待ってよー」

一方、昼過ぎ頃まで時間を戻して八十稲羽から遠く離れた地。茶髪の女性が呼ぶと、家の奥から赤髪の女性が髪をポニーテール風に結い、髪留めで髪を留めながらばたばたと出てくる。

「もー。忘れ物ないね？」

「バ、バツチリ！ だよー！」

茶髪の女性の言葉に赤髪の女性はぐっとサムズアップを見せながら返し、玄関に置いていた旅行用のスーツケースをがしつと掴む。

「楽しみ楽しみー♪ 元気かなー千尋ちゃん♪」

赤髪の少女は鼻歌を歌いながら元気にそう言い、茶髪の少女はやれやれとため息を漏らす。

「さて、行きますか。ポートアイランド！」

そして元気よく声を響かせた。

第四十一話 修学旅行（前編）

9月8日。今日から真達の通う八十神高校は二泊三日の修学旅行で辰巳ポートアイランドへとやってきていた。

「うはー、なんだこれ……広過ぎじゃね、この学校？」

「まあ、そうだな。俺の知る限り一番だと思っぞ？」

陽介はそう言うと、啞然とした表情で月光館学園の校舎を見回し、「広さで負けてたらウチ勝つとこなくない？」とぼやく。月光館学園は高等科、初等科と中等科が同じ敷地内にあり、玄関一つとってもその広大さは八十神高校とは比べ物にならない。都会っ子である陽介はもちろんの事八十神高校の生徒は驚きを隠しきれず、元生徒の真をして改めて月光館学園の広大さを身に沁みさせていた。

「えー、あー、次に、この学園都市とこの学園の設立意義について説明しまあす……」

驚く陽介の眼前では、月光館学園の校長の長い話が続いている。話の内容に一貫性が無く、設立意義から諺へと次々に話題が変わっていく。あまりの長話に欠伸を漏らし文句を呟く千枝を雪子が宥めると、校長に紹介された月光館学園の生徒会長が挨拶を行う。

「ようこそ、私立月光館学園へ。初めまして。生徒会長を務めます、三年D組、伏見千尋です」

校長に紹介されて、八十神高校の生徒達の前に出てきた女生徒——眼鏡を掛けた理知的な雰囲気を持った綺麗な子だ——が挨拶をし、利発的な声で「よろしくお願いします」と挨拶。

「うお……あの子、レベル高え！」

「た……確かに、カワイッスね……」

生徒会長——千尋の挨拶を聞いた陽介と完二が、千尋の容姿に顔を赤らめて見惚れている。陽介は「俺史上空前のメガネ美人だ」とまで言っており、千枝が「反応し過ぎだから」と小声で怒鳴る。

「他校を招いての本格的な学校交流は、我が学園にとっても初めての試みです。他者を知る事は己を知る事であり、己を磨く第一歩である……と、私は考えます。この機会が、参加者一人一人の糧となるよう、

私達も精一杯、務めさせていたただきたいと思えます。よろしく願います！」

落ち着いた様子で、高校生とは思えない内容のスピーチを終えた千尋に、八十神高校の生徒達から賞賛の拍手が送られる。

「やっばい、全てが負けてる……」

千枝がうつむいて敗北感に押し潰されていた。そして柏木教諭がクラス別に分かれるように指示を出し始め、ぞろぞろと列が崩れていく中、真は千尋の方に歩いていく。

「お久しぶりです、伏見先輩」

「え？……あ、椎宮君！」

真に声をかけられた千尋は驚いたように声を出し、「そっか。転校先が」と察したように頷く。

「つておいおいおい！ 真、お前このメガネ美人さんとお知り合いなの!?!」

「あ、ああ。まあ……」

その後ろから陽介が真に向けて叫び、彼が苦笑を漏らしつつ肯定すると、陽介はごほんと思をついてジュネスでのバイトで磨き上げた笑顔で千尋に向けた。

「えー、は、初めまして！ 俺、椎宮真君の『大親友』の、花村陽介つて言います！」

「あ、先ほど名乗りましたが、この学校の生徒会長を務めます、伏見千尋です」

陽介からの自己紹介を受けた千尋は再び名乗り、その笑顔に陽介はまたも見惚れる。

「なーなーおい真！ お前この人とどうい関係なんだよ教えろよー」

「ど、どういう関係つて……命先輩繋りの友達だよ」

「あ、命さんの？」

「えっ!?! み、命先輩……あなた達、命先輩を知ってるの!?!」

陽介の言葉に真が返し、陽介がなんか納得したように返すと、千尋が驚いたように陽介達に向け言う。

「ま、そりゃあねっ?」

「ひゃわっ!」

と、いきなり何者かが千尋に背後から抱きつくようにのしかかった。

「久しぶり、千尋ちゃん♪」

「み、こ……」

そして何者か——命は千尋の耳元に囁くように挨拶し、千尋はその相手が何者かを知った直後、どんどん顔を赤くしていく。

「ひゃわあああああああつ!!!」

直後、千尋の悲鳴が響き渡った。

「な、み、みことしえんぱひ!? ど、どうひてしえんぱひがほほひ!」

さつきまでの利発さはどこへやら真っ赤な顔に回ってない呂律で必死に言葉を発しながら命を見る千尋。それに対して命は悪戯っぽくくすくすと笑っていた。

「み、命さん!? どうしてここに!」

「ポートアイランドって聞いて里帰りしたくなっちゃってね。電車とタクシー駆使してこっそりついて来たんだよ」

千枝が驚いたように尋ねると命はしれっとそう言う。全く誰も気がついていなかった。

「あ、紹介するね? 彼女は僕の後輩の伏見千尋ちゃん。僕と千尋ちゃんは生徒会仲間だったんだ」

「生徒会仲間?……」

「うん。僕はここに転校してきた二年の時に当時の生徒会長だった先輩にスカウトされて庶務として生徒会に入ったんだ。その時に千尋ちゃんは経理をしてたんだよ」

「経理……ってあれッスか、金の計算をする? 頭いいんスねえ」

「うんうん。やつぱさつきのスピーチからもこう、気品っていうか教養っていうか、そういうのが滲み出たもんなあ……」

命から千尋の紹介を受けた完二と陽介は感心したように頷く。と、千尋はぶんぶんと首を横に振った。

「そ、そそそそんなことありません! わ、私、一年の時は流されて生

徒会に入っちゃったみたいなので、経理の仕事もミスしてばかりで、命先輩にはいつも助けてもらってましたし……」

わたわたと言葉を紡ぐ千尋。元々自分はあがり症で、命と一緒に過ごしていく中で治ったけど男性恐怖症っぽいところもあった。それにさっきのスピーチも本当は、その命の言う生徒会長と一年前の生徒会長と一緒に考えてもらった——つまりいわば彼女の一年の時から三代生徒会長の合作——ものだ。と彼女は語る。

「ふふ、道理で。桐条先輩に似てると思ったよ……ふむ、僕みたいな万年庶務如きが頭が高かったかな？ これからは伏見生徒会長と呼ばせていただきますね？」

「か、からかわないでください!!」

悪戯っぽく笑いながらからかう命と顔を真っ赤にしながら文句を返す千尋。さつきまでの落ち着いた様子や理知的な雰囲気はない。しかしその分親しみやすさを陽介達は感じ始めた。

「つて、そういえば伏見先輩……その妙に分厚いプリントの束は一体？」

「え？……ああっ!？」

千尋は真の指摘を受け、自分が持っているプリントの束を見て叫ぶ。

「あ、こ、これ今日の皆さんの予定表……渡しそびれちゃった……でもこれから打ち合わせが……」

「それは大変だね。真君、花村君、皆。手分けして配ってあげるんだ」慌てている千尋を見た命がすぐさま指示、真達も「はい!」と返す。

「ご、ごめんなさい、段取り悪くって……」

「いえ、充分立派です。これくらいのお手伝いさせてください」

ぺこりと頭を下げて謝る千尋に対し真はそう言っただけでプリントの束を受け取る。

「あの、じゃあお言葉に甘えて。私、そちらの生徒会の方々と打ち合わせがあるので……椎宮君達の班はこれから特別授業のはずですから頑張ってください。教室は二階にありますから。では失礼します」

「あ、千尋ちゃん。せっかく来たんだし鳥海先生達にも挨拶したいん

「だけど……」

「あ、では一緒に。鳥海先生は確か……」

千尋と命は喋り合いながら校内に入っていく。

「……今ナニゲに『特別授業』つわれた？　ここまで来て『授業』!？」

悲鳴を上げる陽介に、雪子は自分が配る分のプリントを見る。

「私達のクラスはえつと……『江戸川先生』って人ね。内容は、カバラと……」

「カバ？」

「知らねんスカ？　カジノツスよ、カジノ」

雪子の言葉に千枝がちんぷんかんぷんの様子で呟くと完二が得意気にそう言う。

「カバラというのはユダヤ教の伝統に基づいた神秘主義思想の事だ。しかし江戸川先生か……また濃い先生が割り当てられたな」

「うえ、そうなの？」

真のカバラについての説明及び呟きに陽介が言うと、真は「まあ、この学校の教員は大体どれも劣らぬ濃さを持つけどな」と続ける。

「ってそうだ、今日はいつから自由行動だ？」

陽介はそう言って自分に割り当てられたプリントを見る。

「えーつとね……無い」

が、彼が調べるよりも早く千枝が切り捨て、陽介と完二はプリントに目を落とし、確認。今日は一日授業で、今日明日はホテル泊、明日と明後日の昼までは辛うじて自由行動。というスケジュールになっている。

「マジかよ……」

「今日は頑張って『修学』しよ？」

雪子のフォロワーになつてない言葉に陽介は肩を落とす。それから元生徒の真の案内で彼らは教室に向かう。

「のわっ!？」　げ、玄関に店があるツスよ!？」

「売店だ。文房具から昼食までなんでもござれ。昼時は腹を空かせた生徒達の戦場だ」

玄関ホールにある売店に完二が驚き、真の説明に千枝と雪子がへーと言う。

「はい、どうもはじめまして。会うは別れの始め、アルファなり、オメガなり……この時間、みなさんのお相手をいたします、江戸川です、ヒビ」

メガネにぼさつたい黒髪、白衣といううさんくさい風貌の教師——江戸川はやはりうさんくさい笑みを浮かべながら挨拶をし、八十神高校という名前が気になったのか、気が変わったと言ってカバラ哲学の話を止めて「お別れの話」という話をしようかと言う。

「いやいや、これは『日本で一番古い呪いの話』と言ってもいいのかもしれないねえ」

江戸川はそう訂正をして話し始める。この国を作った神様、国生みの二神、男神イザナギと女神イザナミ。この二人は大変に仲が良かったが、ある日イザナミが火の神カグツチをお産した時に死んでしまう。それをたいそう悲しんだイザナギは死者の国までイザナミを連れ戻しにかかった。

「暗い暗い黄泉の国……そこで、黄泉の住人となったイザナミ神に、一緒に戻ろうと男神が話します」

イザナギの説得に対し、イザナミは黄泉の国の神の神に掛け合うから待っていてくれと返事。しかし様子が気になったイザナギは禁を破り、クシに火を灯して辺りを見てしまう。

「そこで見たのは……全身にウジ虫がビツシリのイザナミ神！」

江戸川の話聞き、想像したのか、千枝など女性陣が「うげっ」と悲鳴を上げる。その変わり果てた姿のイザナミを見たイザナギは逃げ出すが、怒り狂ったイザナミもそれを追いかける。だが様々な追手をかわしたイザナギは黄泉の入り口——ヨモツヒラサカに辿り着くとこの世とあの世を繋ぐ道を多いわで塞いで事なきを得たのだと。

「そして、岩までやってきた恐ろしい女神に、別れを言い渡します。これが『コトド』と言われる呪言です」

話は続き、イザナギから別れと言う名の呪いを受けたイザナミはイザナギにこう言い返したという。 “こんな仕打ちをするのなら、私はあなたの国の人間を日に1000人殺す”と。しかしイザナギはそれを咎めることなくこう言い返した。 “ならば私は日に1500の産屋を立てよう”と。

「千が死にゆき、万が生まれくる。それが、この国にかけられた呪いなわけです」

有名なこのお話、知ってる人も多かったですかね。と江戸川は言う。

「さて、イザナギ神とイザナミ神。言葉の語源は “誘う” から来てるんですね。今日のお話が、みなさんの知的好奇心への “誘い” になったとしたら幸いですね」

そう話を締めつけた時、授業の終了を示すチャイムが鳴った。

「あー、もう時間ですか。ちよっと、喋り過ぎましたかね……ヒヒヒ」特別授業が終了し、江戸川は教室を出て行く。

「……なんつうか、思っていたのとは違って、結構楽しめた授業だったな」

陽介は感想を言った後、ふと真を見る。

「そういや、真が最初に使ったペルソナの名前って確かイザナギだったよな？」

「そうだな。面白い偶然だ」

「ん〜……って事はどっかにイザナミってペルソナを使える奴もいるのかもな」

「そうだな。先輩もそうだけど、俺達以外のペルソナ能力者もいるらしいし、意外にどこかにいるのかもな」

陽介と真は喋り合う。そして一日の長い特別授業を終え、真達は再び月光館学園の入り口に集合。

「じゃあ、これから晩御飯だけとお。せっかくだからこの食堂とかあ、近場での自由行動っていうことにしちゃいます。ご飯が終わったらここに集合ねえ？」

柏木はそう言うと、「シヤガールのフェロモンコーヒーで、フェロモ

ンムンムンになっちゃいましたよ」とか言いながら歩いていく。

「なんつうか、飯の引率放棄されただけのようが気がするんだけどさ……」

「ま、いいじゃねえスカ。先輩、この辺の飯場知りませんか？」

陽介の言葉に完二は自由に行動できるならいいと返し、真に近くにいい場所ないかと尋ねる。

「そうだな……」

「あ、私があぐれ行きたいな！」

完二に尋ねられた真がいくつか脳内でピックアップを始めるとりせが手を挙げながらリクエストを出し、真もじゃあそこに行くかと決めて陽介達を案内する。

「……あーごめんねー。今満員で、ちよつと待ってくれるかな？」

が、そのはがくれは現在満員。りせが「えー」と口を尖らせるが、真はしようがないなと頭をかく。

「あ、皆！こつちなら空いてるよ！」

「先輩！よかつた、行こう！」

と、やって来ていた命が定食屋「わかつ」の前に立って手を振り呼ぶ。真もそれを聞くと他の八十神高校生徒が来て混み合う前にとわかつに走っていき、全員が店に入っていく。

「……………」

それと入れ違いに、二人の女性が商店街に入ってくる。

「きつき、八十神高校っていう学校の生徒が学園から出て行ってた。オーケー？」

「うん」

「そしてターゲットはその高校の人と仲が良かったらしい」

「うん」

「つまり、夕食時。きつとターゲットはその高校の人と一緒に食事を取っているはず」

「うん」

二人の女性は喋り合い——主に茶髪の女性が喋り、赤髪の女性が無言で頷いている形。なお双方ゴゴゴというオーラを背負い、目が凄まじく据わっている——商店街を睨む。

「徹底的に探すわよ！」

「イエス、ママ！」

どん、と強く地面を踏みしめて、二人の女性が巖戸台商店街に踏み込んだ。

「ふーん。DHA盛りだくさん定食だつて。完二これにすれば？ DHA摂取したら頭よくなるよ？」

「うっせえ！ なんもん迷信に決まってるんだろぅが!!」

「いや、そうとも限らなかつたりするかもしれないよ？」

りせが完二をからかい、完二が怒ると命が返す。

「ん〜。私やつぱり肉多いのがいいなあ」

「私はどれにしよう……」

千枝と雪子も注文に迷う。

「すいません。俺、いつものお願いします」

「おお！ なんか常連客っぽい!!」

真のドヤ顔での注文に陽介も騒ぐ。が、いつもので分からなかったのでちゃんと料理名を注文し直すというオチがきつつつ、全員が注文。やってきた食事を食べ始める。

「おお、うっめー！」

「学生時代、放課後は食事しながらコミュニティを深めるのが日課だったからね」

陽介が料理に歓声をあげ、その向かいに座る命は満足そうに頷きながらDHA盛りだくさん定食を食べていく。

「うんうん、そうだねえ。私も学生時代、放課後はいつもここやほかぐれに来てたっけなあ」

命の言葉に返す女性の声、その柔らかく魅力的な声に命はぴたつとその動きを完全停止。向かいに座っている陽介は首を傾げて彼の背

後を見上げる。

そこには二人の女性が立っていた。一人——ついさつき命の言葉に返した方だ——は赤い髪をポニーテール風にし赤い瞳が特徴的で、どこことなく命に似た雰囲気をした笑顔が魅力的な女性、もう一人は栗色の髪を肩くらいまで伸ばした、吊り目——と言っても今回は怒って目を吊り上げているようにも陽介の目には映る——のこちらもまた魅力的なスレンダールの女性。

「やつと捕まえたわよ。まさかポートアイランドに丁度良く来てたなんてね……こつちから出向く手間が省けたものね」

「ゆかりっち。まずは挨拶しなきゃいけないんじゃないかなあ？」

「それもそうね……さてと、じゃあ改めて」

栗色の髪の女性は怒り心頭の様子でそう言っており、赤髪ポニーテールの女性はにこにここと微笑み、しかし全く笑っていない目で命を見ている。それにゆかりっちと呼ばれた栗色の髪の女性も頷くと二人は息を合わせて同時に口を開き同時に言葉を紡ぐ。

「久しぶり、命君」

「久しぶり、お兄ちゃん」

その言葉を背中越しに聞いている命は顔が真っ青になって汗をたらだらと流しており、それを見た真は苦笑いを零しながら顔を上げると代わりにというように二人の顔を見て挨拶した。

「お、お久しぶりです。岳羽先輩、結生先輩」

「うん、久しぶりだね。真君」

「ところで真君、命君借りていい？ ちょっと三人でお話したいことがあるの」

真の言葉に赤髪ポニーテールの女性——結生がにこつと微笑みながら挨拶を返し、次に栗色の髪の女性——岳羽ゆかりが問う。その言葉に対し命は助けてといわんばかりの目を真に向け、真はほんの一瞬考えた後頷いた。

「どうぞ」

「真くん!!!」

「ありがと、真君」

「さあ、お兄ちゃん。ちよつとこつちに来て……オハナシしようね？」
真の命を売るも同然の言葉に命がお店に迷惑がかかりそうな叫び声を上げ、それにゆかりがお礼を言うと言つと結生はがっしと命の肩を掴んで店の外にずりずりと引きずっていく。

「いやー!!! 真君花村君巽君天城さん里中さん久慈川さん誰かヘルプミープリーズ!!!」

命は悲鳴を上げて仲間達に救援を求め、が二人のただならぬオーラを見て巻き込まれたくないのか全員例外なく目を逸らしており、ついに命が店から引きずり出されると店内に静寂が戻る。それから真は目を閉じて祈りを捧げるように手を組み口を開いた。

「……許してください、先輩。俺も、命は惜しいんです……」

「……な、なあ、真……あの二人つて一体誰なんだ？」

真の言葉に陽介が問いかける、と真はああと頷いた。

「一人は利武結生先輩、命先輩の双子の妹さん。んでもう一人は岳羽ゆかり先輩、命先輩の恋人だ」

「み、命さんつて妹と恋人いたの!？」

「ああ。あの命先輩最大の弱点ツートップだよ」

「うん、確かに。普段飄々としてる命さんがあんな焦ってるの、初めて見た……」

真の言葉に千枝が驚いたように声をあげ、真がそう続けると雪子も納得したように頷いた。

巖戸台商店街の路地裏。命はゆかりと結生にここに連れ込まれていた。

「え、えーと、その……お久しぶり、デス」

全力で笑顔を作る命だが、目が据わっている二人には通じそうにない。

「……その……なんで分かったの？」

「私、先代生徒会長。千尋ちゃん、オーケー？」

「……しまった。口止めしておくんだ……」

千尋はあのスピーチ原稿は先々代の生徒会長および先代生徒会長と合作で作り上げたと言っていた。先々代の生徒会長というのは桐条美鶴。先代の生徒会長というのは目の前にいる利武結生。恐らく彼女らはスピーチ原稿を作った後、上手に出来ているのか気になったか何かで様子を見に来たのだろう。命は千尋から結生達に話が飛ぶ可能性を考慮しておらず、口止めをしなかった自分を呪う。

「え、えっと、その……」
「ん」

言い訳を続けようとする命にゆかりがそう言っただけで無造作に携帯電話を差し出す。ピンク色のそれはプルルルルと音を立てており、何かに発信しているようだ。

「もしもし、ゆかりか？」

「き、桐条先輩!」

まさかの電話相手に命が叫ぶ。

「命!?……そうか。もう捕まってしまったのか」
「捕まった？」

美鶴はゆかりの携帯電話から命の声が聞こえてきた事に驚いた後、察したように呟く。その言葉に命が聞き返した。

「桐条先輩、どういうことですか？」

「いや、実はな。二人とも数か月ほど前から私のところに乗り込んできていたんだ」

美鶴は話す。ゆかりと結生は四月から命がいなくなった事について独力で調べ上げ、その結果桐条グループになんらかの関係があるという事を掴むと、「命がどこに行っているのか教えろ」と美鶴の元に乗り込んだらしい。無論命との約束もあって美鶴は最初こそ知らぬ存ぜぬで押し通していたのだが、少し前に薙刀と弓矢を持ってきて「これ以上誤魔化すなら社内で暴れまわってやる」と脅されたらしい。

「しかもアイギスも二人側に回ったんだ。流石に社内で暴れまわられるわけにもいかんし可愛い後輩兼親友、そして秘書を前科者にするわけにもいくまい……」

美鶴はそう疲れた様子で話す。

「だから、全て説明した。君が八十稲羽で発生した連続殺人事件の捜査を秘密裏に行っていること、それにはシャドウも関わっていることもな」

命の怒りを押し殺ししかし怒りを殺しきれていない声に美鶴はそう言い、その言葉に命の目が研ぎ澄まされた。

「桐条先輩！ 言ったはずだ！ 皆に言ったら、俺は一生あんたを――」

「軽蔑するなら好きにしろ！ だが、お前が失踪して数ヶ月ずっと心配していた彼女達の気持ちも汲んでやれ!!」

「――っ！」

激昂した命の叫び声に対し美鶴が一喝、それを聞いた命が声を失うと美鶴はふうと息を吐いた。

「まあ、その失踪の原因を作ったのは私だ。強く言える立場ではないがな……」

「……いえ。申し訳ありません……分かりました。後は全て僕から説明します」

美鶴の言葉を受けた命がそう言い、美鶴は「ああ」とだけ言うと言話を切る。ゆかりの携帯からツー、ツーという電子音が静かに響いた。

「……それで、どういうことなのよ？ なんて命君が連続殺人事件の捜査なんて危険な事やってるの!? なんてそれにシャドウが関係してるの!? なんて……」

ゆかりは泣きそうな声を上げながら命に掴みかかる。

「なんで……私達に何も教えてくれなかったの?……」

泣きそうな声、いや、ゆかりは泣きながら命にすがりついていた。

「……ごめん、ゆかり……」

ゆかりが泣いていることに気づいた命は、彼女に謝罪しながら彼女を抱きしめる。

「お兄ちゃん……今、私はブチキレてる。親友であるゆかりつちを泣かせた相手をぶん殴りたい気持ちで一杯だよ」

ゆかりの後ろに立ち、命と相對している結生もうつむきながら呟

く。その握りしめられている拳はぶるぶると震えていた。
「でも……」

顔を上げる結生。彼女の目にも涙が溜まっていた。

「無事でよかったよお……お兄ちゃん……」

「……ごめん、結生……たった一人の家族を残して……僕は……」

へたり込み泣き始める結生の姿を見た命は、己のふがいなさを恥じていた。そして彼は「ゆかり、結生」と呼ぶ。

「……マヨナカテレビって知ってるかい？」

この話を続けると間違いなく彼女らを巻き込んでしまう。しかし、命の目には覚悟が秘められていた。

「テレビの中の世界？」

「普通の人間が放り込まれるとシャドウに殺されて逆さ吊りにされる？」

「……信じてもらえませんかね？」

ゆかりと結生は「はあ？」とでも言いたげな表情で命の説明に返し、それに命は引きつった笑みで聞き返す。

「バカじゃないの？ ってか、バカじゃないの？」

ジト目で言うゆかり。が、続けて彼女は笑った。

「信じないなんて言っていないでしょ？」

「影時間を体験しておいて、あり得ない現象を話だけ聞いて否定する真似が許されると思う？」

ゆかりと結生は命のこの突拍子のない話を信じており、命は「ありがとう」と頷く。

「じゃあ、早速だけど来てほしい」

「え？」

命は二人に向け、言う。

「さっき僕と一緒にいた真君を含めた子達……彼らが、テレビの中の世界を知り、僕と共に調査をしてきたペルソナ使いなんだ」

「命先輩！ 無事でしたか!？」

「ああ、なんとか無傷で済んだよ」

戻ってきた命に真が声をかけると命もこくと頷いて返す。

「初めまして、命の妹の利武結生です。結生でいいよ」

結生はにこつと無邪気な笑顔を浮かべて自己紹介をする。

「か、可憐だ……お、俺花村陽介です！ 初めまして!」

その笑顔での挨拶を見た陽介が見惚れ、いち早く自己紹介を行う。

「うん、よろしくね。花村君」

「絶世の美女だ……」

結生が笑顔で挨拶を続けると陽介は見惚れたままそう呟いて返した。

「それで、私は岳羽ゆかり。その……命君の恋人」

ゆかりは照れたように頬をかきながら自己紹介。

「たけば、ゆかり?……それにとしたけゆいってどこかで聞いたことがあるような……」

と、リセがその名前を聞いてむむむと考え始める。

「あー!!!」

そして思い出したように叫んだ。

「思い出した! 大学生モデルの岳羽ゆかりと利武結生だ!! 私休業する直前だったからぼんやりとしか覚えてないけど……」

「大学生モデル?……」

リセの言葉を聞いた真と命がぼかんとした様子で呟き、二人を見る。

「あーうん……その、スカウトが来てね……その、お小遣い稼ぎにいいかな〜って……」

そしたらなんか有名になっちゃって。と笑う結生。今度は雑誌の表紙も飾るみたいな事言われたなくとか言っている。

「ゆかりがいて……」

命は月光館学園時代、こういう事にノリノリになってしまう結生の防波堤であったゆかりがいてなおこんな事になっている事に頭を抱

えるが、ゆかりもぷいっと顔を逸らしていた。

「だ、だって……有名になつたら命君から連絡取ってくれるんじゃないかなって……思つたんだもん……」

頬を赤らめながらぼそぼそと弁解するゆかりに、命は彼女を抱きしめた。

「ごめんね……」

「ううん、私も……ごめん」

命とゆかりは抱き合いながら互いに謝り合う。

「……すんませーん。ここってコーヒーねえっすか？　もしくはにっがいお茶でもいいんですけどー」

甘い桃色オーラに包まれている命とゆかりを見た陽介が右手を上げてとにかく甘さを中和するような飲み物を注文する。完二も顔を手で覆い、千枝と雪子、りせは「おお……」と声を漏らし、真は苦笑を漏らしていた。

「お、お兄ちゃんとゆかりっちがごめんね？　もう付き合い始めてからいつもこうで……」

結生が謝り陽介が慌てたように「いえいえ」という。その口元はにやけており、千枝が「全く男子は」とぼやいた。

「ところで、陽介君ってお兄ちゃんと仲がよかつたりするのかな？」

「え？　そ、そりやもつちろん！　命さんにはいつもお世話になってますよ」

「そっかー」

陽介の言葉を聞いた結生はふんふんと頷き、目を細める。

「……な、なんだ？」

陽介は結生の放つオーラが変わつたような気がすることに気づく。「ねえ陽介君。お願いがあるんだけどね……お兄ちゃんがあつちでどういう事してたのか、出来れば教えて欲しいな〜って」

結生はにこにこ笑顔を見せている。が、その笑顔を見た陽介の感情に出てくるのはさつきまでの嬉しいとかそういうものではなく、むしろ恐怖であった。

（な、なんだ？　なんか目が、まるで獲物を見つけた蛇みてえだ……）

陽介は己のペルソナ——ジライヤが怯えているような錯覚を感じる。このまま彼女の要求を呑まなければ自分はをじわじわと締め殺され、最後に丸呑みにされそうな雰囲気を感じていた。

「わ、分かりました……俺の知ってる限りでよければ……」

「うん、お願いね?」

陽介の引きつった笑顔での言葉に結生は満足そうに笑う。

「ちよつと花村ったら美人に弱いんだから〜」

千枝が呆れたように言うが、陽介は苦笑でしか返せなかった。

(まあ、ここは色香に負けたことにしておくよ……殺されると思ったなんて言ったら笑われる)

その心の中で、彼はそう思っていた。

「……」

「天城先輩、さつきからどうしたんスか? 結生大先輩をじつと見て?」

そんな中、雪子は何かを考えるように結生を見ており、それに気づいた完二が尋ねる。何気にさらつと結生の事を命と同じく大先輩のポジションに置いていた。

「……あつ」

と、雪子はそんな声を漏らす。

「あの、もしかして二年前に八十稲羽に来たテニス部の方では……」

かたんと音を立てて腰を上げ、前に乗り出して結生に尋ねる雪子。それに結生は「ん?」と言って雪子を見る。

「あ! 天城屋の子!」

「やつぱり!」

結生は雪子を見るとそう言い、雪子も嬉しそうに笑う。

「え? 雪子、知り合い?」

「うん。二年前に八十神高校が交流戦? とかでうちの旅館に泊まった事があるの。あ、もしかしたらその繋がりで今回も月光館学園とこういう交流会とかになったのかも」

千枝が驚いたように尋ねると雪子はそう言って、結生に「お久しぶりです」と挨拶する。

「うわー久しぶりー♪ えーっと、ユキちゃんだっけ！」

快活な笑顔を浮かべながら雪子の手を取ってぶんぶんと上下するように振る結生。雪子も「はい」と微笑んでいた。

「……じゃあ、マヨナカテレビについての話に入ろうか」

顔合わせが終わった辺りで（二人の世界から）戻ってきた命が真剣な表情で話し始める。

「けど命さん。事件はもう解決したんだし、後は俺達に任せて命さんは大学に戻った方がいいんじゃない？」

結生とゆかりは心配のあまり、今回は偶然ここで出会ったが恐らく八十稲羽に乗り込むつもりだったのだろう。ならばその心配の種を取り除くためにも命はここで手を引くべきなのではないかと命を説得する。

「……いや、僕はまだ帰るわけにはいかないよ……理屈とかじゃない。まだ、ここで帰ったらダメだって言ってるんだ」

命は己の心臓をドンと叩きながらそう言う。己の心が、直感が、まだ事件は解決していないと言っている。少なくともここで帰るわけにはいかないと訴えかけているのだと彼は言う。

「でも、大雑把な話はお兄ちゃんから聞いたけど。実際気になるよね」と、結生が口を挟んだ。

「まずその事件の話だけ。何故諸岡氏だけがテレビに入れられずに殺されたのか」

「ああ、その件なら真先輩が、俺達が助けてるから確実に殺してえ程恨みを持ってたモロキンだけあしくじらねえようについていう事じゃねえかって推理してましたけど」

結生の言葉に完二が説明。結生は「確かにそうなら説明はつかない事もないけど」と呟き、口元に手をやって黙り込む。

「そもそも久保氏がどうしてテレビに入れる能力を持ったのか……真君は月光館学園にいた頃はまず間違いないそんなビツクリ人間能力は持ってなかったのに」

「俺だって最初は驚きましたって」

結生の思考に真がツツコミを入れる。

「そういや俺らの中で最初にテレビに入れるようになったのって真だったよな。で、俺達も続いて」

「……………」

陽介の言葉に結生は一瞬違和感を考える。と、その時彼女のお腹がぐうぐうと鳴った。

「…………お腹減った」

「そういうえば私達昼食まだだっけ」

空腹で思考を遮られ、ゆかりも苦笑する。

「あ、やべ。おい、そろそろ行かねえと集合に遅れちまうぞ」

陽介が携帯で時間を確認し、立ち上がる。

「先輩、俺達先に行きます。一応、俺達が泊まる予定のホテル、後でメールしときますんで」

「ああ、うん」

真がそう言つて、高校生メンバーは大急ぎで部屋を出て行った。

「はい、ここでえす。シーサイド・シティホテル。はまぐり」。今日はここにお泊りよお」

柏木の引率によって連れてこられたのはあからさまに怪しげな外観のホテル。それに生徒達に動揺が広がり、一人は「これ普通のホテル？」と呟いた。柏木が見つけたホテルらしく、最近オープンしたばかりで都会っぽく値段もお手頃なのが決め手で、なかなかのチョイスだと思っている。と柏木は自賛した。

「ここに泊まんのか？」

生徒の一人が疑いの目で呟き、別の生徒は看板を確認して「確かにシティホテルって書いてるけど」と言い、呆れた様子の男子生徒が「どう見ても潰れたラブ——」という辺りで、修学旅行でそんな疑いのかかる場所に泊まるなんて口に出したくないのか言い留まる。そんな呆れ返る生徒達に柏木は、早く中へと入るように急かし、生徒達は重い足取りでホテルに入っていく。

「…………怪しくないか？」

困惑する陽介の言葉に千枝は地元でこういった建物がないので分からないと返す。

「ここはね、〃白河通り〃って言って、その——」

「久慈川!! それ以上言うな!!!」

顔を赤らめて説明しようとするりせを真が顔を真っ青にして遮る。

「ノッフッフッフッフ……思ったより早い到着ですね……それに、なかなかのホテルです……ボクと会ったら、例えばヨースケとかはどんな顔をするでしょうね?」

「ツ!?……殺気!!」

突然聞こえてきた謎の声、それに陽介が身構えた。

「上かつ!」

そして殺気の出所を感知、全員が上を向く。

「あれって……まさか!」

「とうっ!!」

雪子が驚きに声を上げた直後、何者かが飛び降りる。そして近くのゴミ捨て場に着地。ガシャーンという音が響く。

「ふんふん……しゅびどうび」

謎の存在——クマが彼らの前に姿を現した。

「クマ!? テメ、なんでここに!」

「クマの中の寂しんボーイが暴れたのさ!」

完二の言葉にクマはそう言い放つ。

「一体、どうやって来たの!? なんか〃能力〃ってこと!」

「いえ、普通に電車です」

千枝がわくわくした様子で尋ねるが、クマはそう言う。ジュネスのアルバイト代を〃ホームランバー〃を我慢して貯金したらしく、行き先も陽介の旅のしおりに書いてあったのをチェックしていたらしい。

「んで、センパイが連れてきてくれたの。電車とかタクシーの乗り方教えてもらったクマ」

「先輩……」

クマの言葉に真が頭を抱える。りせが「じゃあなんで命さんと一緒にいなかったの?」と尋ねるとクマは「皆をびつくりさせるために旅

のしおりに書いてあったホテル名を探して、待ち伏せしてたの」と答えた。

「で、明日から自由行動っしょ？ ん？ 知ってるぞ？」

「まあ、そうだな」

真はクマの言葉に苦笑する。と、その時彼の携帯が鳴り始めた。

「ん？ 先輩……もしもし？」

「あ、真君？ 悪いけど明日の自由行動。良ければ僕達に付き合ってもらえないかな？ せっかくだし、僕の仲間に合わせておきたいんだ」

「仲間って……ペルソナ使いの？」

命のお願いを聞いた真が驚いたように言うと、真の言葉を聞いた後ろの陽介達も驚きのリアクションを取る。

「そう。かつて影時間を戦ったS・E・E・Sの仲間。まだ何人

かはこのポートアイランドにいるから、せめてその人達だけでもさ……まあもちろん、君達をペルソナ使いとは明かさないけどね。事件に巻き込みたくない」

あくまでも修学旅行にやってきていた知り合いを紹介する。という体で動くらしい命に真は了解、と返す。

「うん。じゃあまた明日。僕は結生とゆかりが取ってたホテルに泊まるから心配しないで。明日、月光館学園の校門前で待ってるよ」
「はい、分かりました」

命との電話を終え、真は携帯電話をしまうと、仲間達に説明を行う。

「……命さんの仲間で、俺達以外のペルソナ使いと会う!？」

「大先輩の仲間ツスか……」

陽介と完二がまたも驚くと、千枝も「ふおおー」と興奮する。

「勝手に話を決めてしまったが、いいか？」

「うん、構わないよ」

「命さんの仲間かあ……どんな人達なんだろ、楽しみ♪」

全員からの賛成を受け、明日は命のかつての仲間に会いに行く事に決定する。

「さてと……楽しみなのはいいとして……」

それから陽介がクマを見て「問題はコイツだな」と言う。部外者と着ぐるみのコンボだ。明らかに不審者である。

「お前、その辺で夜明かせんじやねえか？ それ着てりや冷えねえだろ」

「しどい！ どんだけ頑張ったと思ってるクマ!?!」

完二の言葉にクマがショックを受けたように叫ぶ。どうやら命も宿泊までは付き合ってくれなかったようだ。

「ちよつとお、あなた達？ 部屋割りでモメてるのお？」

と、真達が入ってこないのを咎めに柏木がホテルから出てきて、クマを見ると「なあにその大きなクマちゃん」と尋ねる。

「きよ、今日の授業で作りましたー」

口から出まかせで誤魔化す真に柏木は「まあ、器用な指なこと」と怪しく笑い、早く持つて入りなさい。と言う。

「そうそう、お部屋すごいわよお。全室ウォーターベッド。でも枕元の電気点ける時、間違えないでね？ 回るから」

そう言つて柏木はホテルに入つていき、陽介達も「明日楽しみだね」「もう色々と疲れたけどな」と言いながらホテルに入つていく。最後に真と呼び戻された完二が、微動だにせずぬいぐるみを決めこんだクマを二人がかりで抱えてホテルに入つていった。

その翌日、修学旅行二日目。真達は教師から自由行動の許可を取り、月光館学園の正門前にやつて来ていた。

「遅かったね、真君。皆」

既に命、結生、ゆかりは待つており、真達がやってくると命は彼らの前に立ち、彼らを見据えて口を開いた。

「さあ、行こうか……かつて、存在しなかった時間の中で、共に死の運命に抗った仲間達の元へ」

第四十二話 修学旅行（後編）

八十神高校修学旅行二日目。真達は命の案内でかつて彼が共に戦った仲間達の元へと案内されていた。

「……で、さ」

陽介がぼやく。

「きゃー！ ねえねえこれ！ とつても綺麗！」

「うわーほんとだ！ それにこっちの腕輪かっこいいー！」

「わー、お守りもすごいたくさん……」

りせ、千枝、雪子のはしゃいでいるここはアクセサリーショップの

Be blue Vだ。

「いやー。今から会いに行く子は普通に学生やってるからね。放課後まで待たなきゃ」

陽介の呆れた様子に命はあははと笑っていた。

「……ま、ならしようがないっすよね」

その言葉を聞いて納得したのか陽介は店内を見回す。アクセサリーショップで思い出の品を買おうという学生は多いらしく、店員達も見慣れぬ学生に対してすらすと説明、接客をしている。中には陳列している商品を見ているだけの客も多いが、それらが何か興味を持った様子を見せるとすぐさま接客に入っていた。

「へー……なるほど。この接客術は見習いてえな……商品の陳列も、なるほどな……」

ジュネスでバイトしている癖でそういう目で見てしまう陽介は思わずそう呟いてしまった後「なんで修学旅行でまで仕事の事考えてんだ俺」と自らの職業病に頭を抱えていた。

それから古美術眞宵堂等他の施設も回りつつショッピングを進めていき、時間は普通の学校ならば放課後という時間帯になる。命も時間を確認して「そろそろいいかな」と呟くと彼らの方を振り向く。

「さて、じゃあ改めて。行こうか」

そうやって命が彼らを先導してやってくるのは、月光館学園の中等部だ。結生が中等部の受付に行って見学の許可を取り——受付の人

と顔見知りなのか談笑しながらあっさり取っていた——グラウンドにやってくる。

「パスパス！」

「回り込め——！」

「足を止めるな——！」

わーわーと騒がしく声が飛び交い、グラウンドの外からキャーキャーと黄色い声が飛び交っている。白と黒のボールを腕を使わずに相手のゴールに叩き込むスポーツ。サッカーだ。

「ふうっ!!」

先頭を走る、茶色い髪の少年のヘディングシュートが決まり、それと共に声援が一段と大きくなる。そしてキャプテンだろうか、一際体格の大きい男子が時計を確認した後「よし、キリがいいし一旦休憩——」と叫ぶと部員達はぞろぞろと散らばっていく。汗を拭きにタオルを取りに行ったり、土汚れを落としに水道に行ったり、スポーツドリンクで水分補給を行ったりと様々だ。

「おーい！ 乾くーん!!」

「わっ!？」

結生の呼びかけに驚いたように叫ぶのはさっきヘディングシュートを決めた少年。彼はきよきよと辺りを見回した後、手をぶんぶん振っている結生に気づくと彼女に駆け寄った。

「結生さん、どうしてここに!? って命さん! あなた行方不明になったって結生さんが——」

「あ、うん分かってる。昨日大分泣かれたからもう勘弁して……」

少年は驚いた様子で結生に問いかけた後、その隣に立つ命に気づいて事情を知っているのか怒った様子を見せる。が、命が苦笑交じりに返し、少年はため息をついて「分かりました」と言った後、彼らの後ろにいる真達に気づく。

「えっと、それでこちらの方々は？」

「彼らは修学旅行でここに来た八十神高校っていう学校の生徒。この椎宮真君は月光館学園から転校してって、皆はその友達だから僕達が案内してるんだ」

「皆、この子は天田乾君。まあ私にとつては弟分つてどこかな」

少年——天田乾の質問に命が答え、結生が天田を紹介する。

「椎宮……あ、あなたが」

「ああ、あなたが天田」

と、天田と真が互いに何かを感じ取り、右手を差し出す。

「初めまして、先輩から話は常々」

そして握手をしながら初対面の挨拶を行なった。

「あ、あの、命さん……この子が、その……ペルソナ使い？」

「うん。強いよ」

千枝が命の近くによつてこそそと耳打ちし、この子がペルソナ使いなのかと問う。それを命は不敵に笑つて肯定した。

「えーつとごめんね……君、いくつなの？」

「え？ 僕ですか？ 今年この月光館学園中等部に入学しました」

「つてこたあ、オメエ一年ボウズかよ!？」

雪子の質問に天田は素直に答え、それを聞いた完二が驚愕の声を上げる。命達の影時間での戦いは二年前、つまりその頃の天田はまだ小学五年生で、そんな幼い時にシャドウとの戦いをしていたという事になる。が、そういう背景を彼らが知っていると知らない天田は完二のリアクションに首を傾げていた。

「そ、それより天田君、サッカー上手になつたね!」

「あ、はい。頑張れば今度の試合、控えに入れるかもしれないって監督やキャプテンにも褒められています!」

誤魔化すゆかりに天田も嬉しそうに笑っていた。

「それで、これから今度の試合のレギュラーを決める参考にするつていう紅白戦をするんですけど……」

次に天田は照れた様子で結生の方を見る。

「あの、それに僕達のチームが勝つたら、その……」

天田は頬を赤く染めながらもじもじとした様子を結生に見せる。

「ぼ、僕と付き合ってください!!」

そしてキラキラとしたオーラを背負つて勢いよく結生に告白。後ろの女性陣から「キヤー!」という黄色い声が響く。が、その中で唯

一ゆかりだけは気のせいかな笑みを引きつかせていた。

「うん、いいよ」

結生もそれを微笑み承諾、女性陣がまた「キヤー！」と叫ぶ。

「つていうか、買い物くらいなら言われなくてたつて付き合うよ。あ、なんなら皆で一緒に食事もどう？ レギュラー入り出来そうならちよつと早目のお祝い、無理そうだったら残念会って」

が、結生は純粹な笑顔を浮かべながらそう続けた。その言葉を受けた天田の表情が引きつり、やがて「あはははは」と笑い始める。

「そ、そうですね……えーつとその……まあ、ゆつくり見て行ってください……」

天田はそう言ってグラウンドに戻っていく。気のせいかな背負うオーラがどんよりしていた。

「ふう、乾君もまだまだ子供だね。まあ、買い物に付き合っただけのもお姉ちゃんの務めだね」

得意気にそういう結生の後ろで千枝はゆかりをつんつんとつついた。

「あのー……もしかして……」

「皆まで言わなくていいわ……私知ってるだけでもこの子、告白を同じような感じで全部振ってるからさ……多分、本人告白とも受け取ってないわ」

千枝の言葉を受けたゆかりがこめかみに指を当てて頭痛を堪える様子でぼやく。

「……雪子がもう一人いる……」

その言葉を受けた千枝が呆れた様子でそう呟いた。

それから時間が過ぎ、紅白戦が終了した後、天田は「ミーティングとかあるし、この約束はなかったことにしてください」とやはりどんなよりした様子で結生に言い聞かせ、命達は月光館学園中等部を後にする。

「次はどこに行くんすか？」

「そうだね……まあ、ついて来てよ」

陽介の問いかけに命はそう返すだけ。それから彼らがやってきたのは大きな清潔感のある建物だ。

「……病院？」

雪子が呟く。

「そう。僕が知る、確実にポートアイランドに残っている人がいる場所だよ」

命はそう言つて病院に入り、受付に行く。

「すみません、荒垣真次郎さんのお見舞いに来たんですが？」

「ああ、お久しぶりです。荒垣さんならさつきりハビリが終了したはずなので、多分病室ですよ」

「ありがとうございます」

命と受付の女性はそう話していた。

「りハビリ？……」

千枝が受付の女性が言っていた言葉を繰り返す。が、命が「行くよ」と言つて歩き出すと慌てて真達もその後を追った。そして命、結生、ゆかりが慣れた足取りで入院患者のいる棟に行つている途中だった。

「あつ、命君に結生ちゃん、ゆかりちゃん！」

「あ、風花！ 風花も来てたんだ！」

そんな女の人の声が聞こえてくる。その声の相手にゆかりも笑つて返す。

「よお」

そしてその少女が押している車椅子には一人の青年が入院服を着て座っていた。

「うお、こえっ」

入院患者らしいのだがその鋭い目つきや威圧感に思わず陽介が声を漏らす。完二も過去の経験か「こいつ、ただもんじゃねえ」と呟いていた。

「ん？ テメエは椎宮……確か転校したつて聞いたはずなんだが？」

「お久しぶりです、荒垣先輩。偶然にも転校先の学校の修学旅行先がここだったんですよ」

「そりゃ運がねえな」

荒垣と呼ばれた青年と真は話し合う。

「つて事は、後ろの連中はその学校の友達つてどこか？」

「ええ」

「そうなんだ！ 私、山岸風花。よろしくね？」

荒垣の質問を真が肯定、風花と呼ばれた女性がほんわかと微笑みながら自己紹介をした。

「……荒垣真次郎だ。まあ、命達とはちつとした付き合いでな……今は二年前に事故つたのが原因で入院してる」

続けて荒垣も自己紹介をした。

「二年前……」

陽介が何かを察したような声を漏らす。が、荒垣が「あん？」と呟くと「なんでもないっす」と誤魔化した。

「身体の調子はどうですか？」

「リハビリの経過はまあ順調だ……退院はまだ難しいが、もうしばらくすりや自力で歩ける程度には回復するだろうって医者にも言われている……普通なら間違いなく死んでたって考えりや儲けもんにも程があるな」

命の質問に荒垣はクククと笑いながら返す。

「し、死んでたって……」

「……ああ、悪い。ものの例えだ、あまり気にすんな」

死、という単語に雪子が怯えたように口走ると荒垣は口に手をやって一言謝った後、ものの例えだと言っておく。

「でもよかったです、荒垣先輩がちゃんと動けるようになって！」

と、結生がにぱつと輝くような笑顔を見せる。

「だって、荒垣先輩が退院したらまた美味しい料理が食べれるし！」

そしてぺろつと舌なめずりしながらそう続け、それを聞いた風花が苦笑。荒垣も頭を抱えて呆れたようにため息をつく。

「この珍獣に餌付けしちまったのは失敗だったか……」

「あ、あはは……結生ちゃん、よかったら今度私をご馳走するから……これでも荒垣先輩に教わって、結構上手になったんだよ！」

荒垣の言葉に風花が苦笑交じりに、しかし後半自信満々に言う。そ

れに結生が「ほんと!?!」と目を輝かせた。

「やめんかー!」

が、ゆかりがぼかつと結生に拳骨を入れた。

「とうか、荒垣先輩に今料理教わってるの?」

「あ、うん。と言つても、荒垣先輩にレシピを教わつて、それを元に私が料理を作つて持つてきて荒垣先輩に食べてもらつて、評価を貰つたりどこを直せばいいのか教わつたりしてゐるって感じかな?」

結生を叱つた後にゆかりはそういえばと風花に尋ね、風花はてへへと照れ笑いをしながらそう説明。「最近看護師さんや他のお見舞い客にも有名になつちやつて」と続け、さらに「そういえば荒垣先輩、さつきりハビリ中にも看護師さんとお話してましたけど」とジト目で言うと荒垣は風花から目を背けつつ、「おかげでゆつくりできやしねえ」と誤魔化すようにぼやく。

「へえ……もう花嫁修行はばっちりですね、荒垣先輩」

「!!?!」

そこに命が悪戯っぽい微笑みで爆弾投下。その言葉を聞いた荒垣と風花が顔を真っ赤に染め上げる。

「な、何馬鹿な事言つてんだ teme 工!」

「あ、荒垣先輩無茶はダメです! み、命君もからかわないで!」

思わず立ち上がるうとする荒垣を慌てて風花が止め、真っ赤な顔で命を叱る。それに対する命はまだ悪戯っぽく笑っていた。それから風花が車椅子を押して荒垣を病室に連れて行き、命達もその後をついて行く。

「……はあ。まだダメか……荒垣先輩もつまない意地張つてないで素直に受け止めればいいのに」

前の二人に聞こえないようにぼそつと呟く命。それに千枝達が「えっ」と声を漏らす。

「……あまり言えないんだけどね。荒垣先輩、知り合いにちよつとした負い目があるの……それこそ、あの子に殺される事を覚悟していたくらいに。この入院の原因も、その子を命懸けで守つたためだし」

ゆかりがぼそぼそと説明、命もやれやれと肩をすくめた。

「その子とももうとつくに和解してるくせにさ、意地を張り過ぎなんだよ」

「しかもさ、ここ退院したら即シャドウワーカーに入隊するとか言ってるんだよ。美鶴先輩に無理言つてさ、美鶴先輩はこれも元はといえど自分達の責任だからとかでこの入院費も自分でもつてるんだけど、それを働いて返すとか息巻いちやってさー」

「……荒垣先輩、不器用にも程があんだろ」

「それで、その贖罪に風花を巻き込むわけにはいかないっていう感じかな？ お互い両思いなのは間違いないのに……」

「うんうん。それで文句言うような奴がいるなら全員私がぶん殴つてやるよ」

命、結生、ゆかりが前を行く二人に聞こえないようぼそぼそと話し合う。命はさらに「こうなりや風花だけを焚き付けた方が早いか」と呟いていた。

それから病室に戻り、荒垣がベッドに戻ってから命達三人は「お見舞いの品買ってきまーす」とか言いながら風花を連れて病室を出て行く。真達自称特別捜査隊メンバーが残された。

「……つたく、あいつら今度は何企んでやがる」

荒垣が頬杖をつきながらぼそりと呟いた。が、一拍置いて「まあいい」とも呟いた。

「な、なんかすみません、荒垣先輩……」

「別にいい……あいつらが妙なのは今に始まった事じゃねえ」

真が苦笑交じりに謝罪すると荒垣は頬杖をついたままそう返す。心なしか頬の端が緩んでいた。

「ところでだ」

と、荒垣は突如真達を見据え、言葉を紡ぐ。

「お前ら、今とんでもねえ修羅場をくぐってるだろ？」

『!?!』

単刀直入な発言に千枝達が驚いた反応を見せ、どうにか無表情を努めていた真を見て荒垣は続ける。

「お前らの目を見れば分かる……昔のアキや、あいつらにそっくりだ

からな。いや、命のやつも、あの頃と同じ目をしていたからな」

そこまで言つて荒垣はふうと短く息をつく。

「とりあえず、一つだけ言つておく」

その瞬間、荒垣の目が鋭く研ぎ澄まされた。

「命から絶対に目を離すな。あのバカは誰かを守る、なんていう大義名分のために自分が死にかけるといふようなバカを平然をやらかすバカだからな」

「……ええ。先輩は俺達に無茶させないくせに自分はいとも簡単に無茶をしますから」

荒垣の言葉に対し、既にそういう前例を見ている真は首肯で返した。

それから少し時間が経つてから命達はお見舞いの品を買つて戻つてきた後、結生とゆかりが久しぶりに会つた風花ともう少し話したいと言ひ出し、命もそれに同席するということでその場で一時解散。真達は夕食をどうしようかと話し合いながら病院を後にした。その後は真の案内でポートアイランド内を見て回つた後、日が暮れ始めると案内役をりせが引継ぎ、彼らがある場所へと連れてきていた。

「おーすげえ、これがクラブか……」

りせに連れてこられた建物に入った完二が驚いたように呟く。派手な内装にキラキラと輝くライト、ノリの良い曲に乗つて歌う人や踊る人、所謂クラブだ。千枝が「テンションあがってきたー！」と両腕を掲げ、雪子も「こういうところ、地元が無いもんね」と興味を見せている。

「いいんですか？ 高校生がこんな所に来て」

『！』

そこに突然かけられる声、それに真達が反応して声の方を向き、完二だけは慌てた様子で顔を逸らす。そこに立っていたのは件の探偵——白鐘直斗だ。

「いいんですかって、お前のが先にいただろー！」

「問題が起きないか、確認に來ただけです」

陽介の指摘に直斗はさらりとそう言い、「見たところ客層は良さそ

うだし、問題は起きなそうですけどね」と続けると出入り口の方へ歩いていく。

「え、帰っちゃうの?」

「どう? 一緒に」

千枝が驚いたように言い、雪子が一緒にどうかなと尋ねる。

「一緒について……僕とですか?」

雪子からの誘いに直斗が驚いたように聞き返すと、雪子も「この間はゆっくり話せなかったでしょ?」と微笑んで問いかけ、それに対して直斗は頬を赤らめながら「この間は用事があっただけです」と返す。「なら、今は流石に暇だろ?」

「私、話したいと思ってたんだ。同じ歳で『探偵』なんて、興味あるもん」

それに対し真が言うと、りせも笑いながらそう続ける。そこまで誘われると断る口実もないためか、直斗は「構わないですけど」と参加を了承した。

「なんだー? 微妙に顔赤くないか?」

「あ、赤くないです!」

顔を赤らめている直斗を陽介がからかい、直斗が言い返しているとりせが「ちよつと待ってて」と皆に声をかける。

「上、貸し切るから」

「おう」

りせのあまりにも自然な流れでの言葉に陽介も頷く。

「……貸し切る!」

その直後りせの言葉の意味を理解し、素っ頓狂な声を出した。

「うん。大丈夫、多分顔利くから」

しれつとそう言い残してりせは従業員のいる方に歩いていく。それから従業員を伴って戻ってきたりせは従業員の案内を受け皆を連れて二階に行き、従業員の運んできたドリンクで乾杯をする。

「けど、大丈夫なの? こんなとこ高いんじや……」

千枝が心配そうな表情で尋ねるが、対するりせは平気そうな顔で「平気平気」と言っていた。曰く、一昨年このクラブでシークレットラ

イブをしていた時、途中で電源が落ちて中止になってしまったらしい。その時の借りを返したい、ということでもむしろ今日はタダでもいいという事だ。

「そういう事なら、もっと頼んじやおつとー！」

「よおおし、クマキユンもエンリョしにやいー！」

お金の心配がなくなった千枝は喜んでドリンクの追加注文を決め、クマが妙な言葉遣いで言うのと完二がそれにツツコミを入れる。

「ちゆめたいなーん、カンジは……」

クマは妙な言葉遣いのままでそう言った後、「カンジ、カンジ……イイカンジ！ なんつって！」とか言いながらブフーツと吹き出す。

「なんで一人でそんなフルスロットルなんだよ……」

陽介も呆れ気味にツツコミを入れていた。

「……」

と、雪子の様子も妙に変になっていた。

「いいカンジ……ぶつ、ぶふーっ！」

そしていきなり吹き出して爆笑し始め、完二が「この人もいつも以上にユルくなってるぞ……」と声を漏らす。

「……まさか、ここのドリンク」

真がドリンクにアルコールでも入っているのではないかと疑い、ドリンクを持って鼻を近づけアルコールの匂いがしないかと匂いを嗅ぐ。

「わ、私、ソフトドリンクって言ったよ!? ちゃんとノンアルコールだって……言ったもん。ちゃんと言ったもーん!!」

と、ドリンクを注文したりせがちゃんとノンアルコールのソフトドリンクを注文したと訴え、癩癩を起こす。さらには「信じてくれるよねーせんぱーい！」とか言いながら真に抱き付き、真もドリンクを零さないよう慌ててテーブルの上に戻っていた。

「……これ、まさか本当に酒なんスか？ けどそれにしちやあ匂いが……」

完二も酒の疑いがあるソフトドリンクの匂いを嗅ぐがアルコールの匂いはしないのか首を捻るのみ。と、りせが突然真から離れ、立ち

上がった。

「王様ゲーム！」

そしていきなり宣言した。

「オトナは、こういう場合、王様ゲームするの。法律で決まってるの……ヒック」

赤い顔にヒックなどという酔っ払いみたいな台詞を言いながらりせはそう言い出す。しかもテレビの関係者は自分達で私に「りせちー」なんてロリっぽいキャラ付けしたくせに子供、子供、と言っている。さらには打ち入りも打ち上げも私が帰ってからの方が盛り上がっているのは知っていると、色々とまずいカミングアウトを酔っ払いがくだをまくような勢いでし始めていた。

「カーンジ！ ワリバシ、用意！」

「うえ!? んで俺が……」

「王様の言う事は絶対よ！ 駆け足！」

「は、始まってんの!？」

酔っ払いりせの命令により、なし崩し的に王様ゲームが開始される事となった。

「あ、あのお……王様ゲームって……どんなんだっけ？」

「えつとく、当たりを引いたら王様でく、他のクジには番号があつてく……王様はく、何番と何番は何しろくつて命令できちゃうの。でも誰が何番かはく、命令決まるまでヒミツ！」

千枝のルール確認に対しこっちも呂律が怪しくなり、妙に身体が左右にゆらゆら揺れている雪子が間延びした口調で説明、りせも「さつすが先輩、話はやーい」と合いの手を入れる。

「な、なんで知ってんだ?……」

「家が旅館だからじゃね?」

千枝の驚きの言葉に対して陽介がぼやいた。そしてりせが「ほら引いた引いた!」と言ってクジである割り箸を入れたコップを突き出し、順番にクジを引いていく。

(……6番か)

真は自分のクジに書かれている番号を確認、心中で呟く。王様では

ないらしい。

「はい、じゃあ、王様だ〜れだ?」

「クマの赤! 赤! クマ、王様!」

りせの合図にクマが赤い割り箸を見せながらはしやぐ。陽介が「出からやっべー」と汗を流した。

「王の名において命ずる!! すみやかに、王様にチツス!!」

初っ端からセクハラまがいの命令に千枝が「チツス!」と叫ぶ。

「おう、神よ……女子をお願いします3番!!」

「ウギヤ〜!!」

クマの言葉に悲鳴を上げたのは完二。それを受けたクマが慌てて「やっぱ2番」と言い直すと陽介が自分の割り箸をちらりと見た後、顔色を変えて「変えんな王様!」とツツコミを入れる。

「チツスチツス〜!!」

雪子まで囃し立て始めた。

「カ、カンジ……やっぱりクマの身体目当てだったのね!」

クマは恥ずかしそうにそう言い、チラツチラツと上目遣いで完二を見る。

「おっけ、クマの純情あげちゃう!!」

そう言つてクマは突然完二を押し倒す勢いで飛びかかった。

「うわ、イテツ、やめろ! テンメ、シメツぞコラ!!」

完二は声を荒げた後、真達に助けを求め。しかし真達は何も出来ず、目を逸らしたのであった。

「さあ……一回戦で早くも脱落者二人よ」

「え、そういうゲーム?」

りせの言葉に千枝がツツコミを入れるが、りせは構わず「続けて第二回せーん!」と宣言。真達は再び割り箸クジを引いていく。

「王様だ〜れだ?」

りせの合図で真は割り箸を見る。と、それには赤い印がついており、真はその赤い印を見せながら手を挙げる。

「よかった……まともな命令で済みそう……」

常識人である真が王様と知った千枝はほっと安堵の息をつき、陽介

も「助かったぜ、相棒」とサムズアップを見せる。

「ダメよく！ チツスの次はチツスよりキワドくないと〜」

が、雪子が爆弾を投下した。「く〜きよめよく」とか言いながらきはははははと高笑いしている。

「じゃ、膝枕」

続けてりせが爆弾投下。しかも雪子も一緒に二人で「膝に座る」だの「いつそ抱きつく」だの「時代は肩車」だの言い始めた。

「ほら王様！」

「あ、えーつと……」

「誰？ 何!?!」

雪子とりせが二人がかりで真っ赤な顔で迫り、真は汗をだらだらと流しながら考える。

「い、一番が膝枕！」

そして咄嗟に思い浮かんだ一番と、最初に出た膝枕という命令が口に出てしまう。

「ハイ、一番！ 一番！」

と、りせが一番と書かれた割り箸を握った右手を掲げてうっしやーとガッツポーズを取り、ふらふらとした千鳥足で真の横に移動すると何故か彼の膝に頭を乗せる。

「え、王様の膝につて事?!」

一般的にこの場合は真がりせの膝に膝枕をしてもらうはずだがあべこべな結果に陽介が思わずツツコミを入れるのであった。

「えっへへー。先輩のヒザ、あつたかくて気持ちいい〜」

りせは安心しきった様子で横になっていた。

「……ど、どうすればいい?」

思わず彼女の頭をよしよしと撫でながら、真は心底困った様子で陽介に問いかける。

「……放つとけ」

その言葉に陽介はふるふると首を横に振ってそう返した。

「あはははは、次は私、王様〜！ 女王様〜！」

と、雪子が突然言い出し、陽介が「いやクジ引けよ！」とツツコミ

を入れる。

「よし、でわあ、とても口では言えないハズカシイ〜エピソード、語ってもらおう!」

しかし雪子は聞く耳持たず命令を進め、さらにはその命令の対象を「直斗君!」と名前でご指名する。

「何でもアリだな……無視していいぞ、直斗」

呆れきった陽介も直斗に無視していいぞと言っておく。

「……いえ、いいですよ」

が、直斗は意外にも彼女の命令を承諾した。が、続けて「その代わり」と言って自称特別捜査隊メンバーを見回す。

「僕が話したら、皆さんにも『あること』を話してもらいます」

「い〜わよ〜」

直斗の言葉を雪子も承諾してしまった。

「恥ずかしい過去なんて、思い当たりませんが……とりあえず、生まれの話でいいですか?」

直斗はそう一拍置いて話し始める。こんな機会でもないと話す事もないでしょうし、とクールに言う直斗に陽介が「なんとという急速冷凍」と一気に空気が冷めていく感覚を感じる。

「白鐘の家は、代々ずっと探偵の家系で、時の警察組織に力を貸してきました……」

それから直斗は話し始める。その入りに千枝が「なんか金田一ナントカみたい」と呟く。科学捜査のなかった昔は、専門知識に基づいて助言できる人材は今よりも貴重であり、それゆえに祖父は警察に太いパイプを持っていて若い自分の面倒を色々と見てくれている。しかし最近の捜査は医学・科学に通じてないと話にならないため、自分ももっと勉強しなければならない。と直斗は話す。

「そりやまた、大変だな」

陽介はふんふんと頷くが、そこで直斗が口を閉ざすと「終わり?」

オチは?」と慌てたように問い返す。しかし直斗はやや首を傾げながら「そういうのを期待されても」と淡々と返した。

「恥つずかし〜。ナオト君、恥つずかし〜」

しかし雪子は何が面白いのか笑って手を叩いており、あまりの温度差に陽介も「帰りてえ」とぼやいた。

「はふう……眠い……」

しかも未だ真の膝枕を受けているりせはそのまま眠りかけていた。話が話し終えた直斗は気にせず「次は皆さんの番ですよ」と話を振る。

「答えて貰いましょう。皆さんが本当は、事件とどう関わっているのか」

「お前な……空気読めな過ぎて逆にオモシロイよ……事件つつてもなあ、もう解決して——」

射抜くような視線で質問してくる直斗に、陽介が呆れた様子でツツコミを入れ、話を逸らそうとする。

「えつとく、誘拐された人をく、テレビに入って助けに行きま〜す！」

しかし雪子はその陽介の努力を打ち砕き、「うようよしてるシャドウたちをく、ペルソナで『ペルソナァ〜』って……」と話し始め、陽介が「ばかおまつ！」と大慌てで彼女を止めようとする。

「……ハア。僕をからかってます？」

が、まあ当然だが直斗は信じておらず、呆れた視線を向けるのみ。

「ホントらもんっ！」

「へぐっ!？」

と、ペルソナを信じてない口調に反応したのかりせは起き上がり、その時の流れで振り上げた拳が真の顎にヒットする。

「ペルソナーっ!!」

そして腕を振り上げてそう叫んだ後、今度はそのまま座り込んですうすうと寝息を立て船をこぎ始める。

「あーもー! この酔っ払いコンビは!!」

千枝が怒鳴り、直斗は呆れた様子で「話す気がないのは分かりました」と返した後、ドリンクを見る。

「大体、何にそんなに酔っ払ってるんですか？ コレ、お酒じゃないですよっ!」

「まあったまた〜」

直斗の指摘を雪子が笑うが、直斗は冷静に「飲酒運転への抗議があり、ここは去年からアルコールを扱っていません」とこの店に来た時に従業員から確認した事を彼らに説明する。

「え……みんなして、『場酔い』?」

「いいじやらいろ、どつちれも……うふー、なんか気持ちよくらつてきた……おやすみらさくい」

汗を一筋流して呟く千枝に雪子は笑ってそう返し、彼女も眠りについてしまう。

「ちよつ、先輩?! おいおい二人も潰れてどやって帰んだよ?!」

「ハア……なんか俺、色々頭痛してきた……こりや二日酔いだな……」
潰れてしまった雪子に完二が叫び、陽介はこの状況の頭痛を酔っ払いという意味合いで上手く表現、場酔いしているクマの呂律の回つてない「朝まで飲む」発言にりせも「のぞむところら〜」と寝言で返す。「だから……お酒じゃないって言ってるんでしようが! バカ軍団ですか!?!」

直斗の呆れ気味のツツコミがクラブ二階に響き渡った。

そんな感じで二人も場酔いで潰れてしまったためお開きになり、眠ってしまった雪子とりせ、場酔い中のクマはそれぞれ雪子は陽介と千枝が肩を貸し、りせは真がおぶり、クマは完二が手を引いてホテルまで戻る。幸いにも教師に見つからずに部屋に戻る事が出来、熟睡しているりせは幸い同室が真の部活仲間である綾音だったため「はしやぎ過ぎて疲れたみたいだ」と適当に理由をでっち上げてベッドに寝かせていた。

そんなこんなが起きた翌日。真達は八十稲羽に帰る集合時間前に、りせの強い希望によって巖戸台駅前商店街にあるラーメン屋「はがくれ」へとやって来た。もちろん命と結生、ゆかりも一緒である。

「んーっ! やばい、うまいよコレ!」

「このラーメン、この辺で一番おいしいんだから」

千枝の言葉にりせも自慢げにそう答える。ドラマの撮影などでここに来た時は口ケ弁をパスしてここに食べにきていた程らしい。

「そーそー。相変わらず美味しいよねー! すみませーん、替え玉お

願いしまーす!! あ、それとチャーハン大盛りで!」

ずぞぞつと一気に麺をすすする音が後ろの席から聞こえた後、元気な女性の声が響く。

「……ってか、結生大先輩……どんだけ入るんすか」

完二が振り向いてツツコミを入れる。結生の食べているラーメンはこれで五杯や六杯で済むものではなく、しかもラーメンだけではなくチャーハンや餃子などのサイドメニューも同時に平らげて皿は隣の席にがしやがしやと積み上げられている。

「……………」

結生の正面に座る命はテーブルに肘をつけて両手を組み、その手で顔を隠すようにしているがその顔色は真っ青だ。まあ、現在彼女の食べているラーメンだけで既に真達自称特別捜査隊メンバーが食べている量に匹敵している。

「まあ、これは罰だと思って、しっかりと奢るように」

「……はい」

ゆかりもラーメンをすすりながら命に言い、彼も力なく頷いて返した。

「うっへー……結生さん、見た目痩せてるっぽいのになんであんなに食えるんだ?」

「だが、命先輩も痩せているが結構大食いだぞ?」

「つと、そうだっけ。フードコートの人達驚いてたな……けど、結生さんののはそれを超えてるぞ……」

陽介と真も隣同士の席で顔を合わせながらぼそぼそと話し合っていた。

「……ねえ、昨日って、夜どうしたっけ?……私、ほとんど記憶なくて……」

「ああ、私と先輩、すぐ寝ちゃったらしくて。なんか盛り上がったらしいけど」

「そうなんだ……覚えてない……」

雪子もりせに昨夜の事を質問、しかしりせも記憶は曖昧であり雪子は頭を悩ませていた。

「ラーメン替え玉とチャーハン、おまちー。それと食器おさげしまーす」

そこに結生のラーメンの替え玉とチャーハンを運んできた女性店員の声が聞こえてくる。その独特のイントネーションに思わず命と自称特別捜査隊メンバーが振り返る。

「あいかちゃん!」

雪子が叫ぶ。はがくれの女性店員の正体は真達のクラスメイト、中村あいか。この店の制服姿のあいかに千枝も「なんでここで働いてるの!？」と驚きを露わにしていた。

「ここ、知り合いのみせー。しゅぎようちゅー」

やはり独特のイントネーションでそう言いながら結生の食べた後の食器を黙々と運ぶあいか。陽介も「すげーなあ旅行中まで」と驚き半ばに感心していた。そしてぱくぱくとラーメンとチャーハンを平らげながら、結生は眉間に皺を寄せる。

「ん〜。もうそろそろ締めにしよっかな。すいません、はがくれ井で」「えっ?」

結生がこともなげに注文したメニューを聞いたりせが驚いたように店に展示されているメニューを見ていく。

「はがくれ井、通常メニューになってたんだ……あー、失敗した」

りせは注文を失敗したと悔しがるが、その直後ラーメンも美味しいからいつか。とあっさり続ける。

「そう言や、大丈夫なのか? 顔、モロ出しで来てるけどさ」

心配する陽介に、りせは気にした風もなく平気平気と答え、壁を指さす。

「ほら、そこに私のサイン飾ってるけど、誰も気づいてないでしょ? こっちじゃそんなもんだって。しかも、ほとんどノーメイクだし」

りせはそう言い、雪子も「サインあるね」と感心するがその隣で千枝が「バレないのはコイツの方が全然目え引くからでしょ」とツッコミを入れながら、着ぐるみ姿でラーメンをすすっているクマを指した。しかし着てきた以上は着て帰らすしか無いかと諦めた口調で締めくくる。

「……あれっ!? 私のどんぶりは何？」

りせのサインに注目していた雪子は顔を下ろした後、自分が食べていたどんぶりが無い事に気づいて両隣の席を見、そこでクマの席に先ほどまでなかったはずの空のどんぶりを発見する。

「もしかして……食べちゃった？」

「の、残してたから……えへ」

雪子の咎めるような言葉にクマはそう返すが雪子は「残してない！」と訴える。

「てかお前、さつきもお代わりしてなかったか？ 何杯目だよ」

陽介が呆れた様子でクマに問いかけるが彼は「クマ、数、分からない」と誤魔化そうとし、それを聞いた陽介は怒鳴ってクマから伝票を奪い取る。

「1, 2……10杯!」

悲鳴を上げる陽介に対しクマは「ユキちゃんの残りで11です」と修正する。

「そろそろ、集合の時間ですね」

「あー、もうそんなかあ……」

何気と一緒に来ていた直斗が時間を確認し、そう言うのと千枝も残念そうに「旅行メンドくさーって思ってたけど、終わってみれば割と楽しかったかも」と感想を残す。それから駅でお土産買っていこうよと提案、陽介も「よし」と頷いた。

「じゃ、行くか。おいクマ、行くぞ」

陽介がクマを呼ぶがクマは微動だにせず、陽介は不思議そうに彼を叩きながら「おいクマきち」と呼ぶ。しかしやはり反応せず、完二が「毛え逆撫でんぞこのやろう」とよく意味の分からない台詞で凄みながら歩いていく。

「……お、おい……クマが……う、動いてねえ!」

が、クマが一切の反応を見せないのに気づくと慌てた様子で声を漏らす。

「ちよつと……ま、まさか……外に長く居過ぎて……とか、そういうんじゃないでしょーね!」

「そうなの!? クマ!!」

千枝の焦った様子での声にりせもクマに呼びかける。

「うえぶ。おなか、おもたい」

その時クマから聞こえたのはそんな気持ち悪そうな声だった。要するに食べ過ぎで動けなくなったただけらしい。

「このコ、置き去ろう」

雪子の冷たい台詞に全員が戦慄、クマが「動けんクマ、運んでくれー」と懇願し始める。

「集合に遅れそうなので、僕はこれで」

直斗は一足先に勘定を置いて店を出ていき、雪子もその後が続く。

「あ、雪子。待ってよお」

千枝も慌ててお金を置いて後を追ひ、クマは慌てた様子で「帰りの切符代もないの!」と訴える。

「……さらば、クマ」

陽介が一番に両手を合わせる。

「青春の思い出と共に、ここに置いていこう……」

そう言っつて残る真、完二、りせも共にクマに向けて合掌する。

が、流石に置いていくのは冗談としてクマは命達三人に任せ、真達は駅前のお土産コーナーで菜々子他各々の家族へのお土産を買った後、集合。一同帰路についたのであった。

「おかえり!」

八十稲羽の堂島家。玄関を開けて入ってきた真を出迎えたのは輝くばかりの笑顔を浮かべた菜々子だ。

「面白かった?」

「ああ。とてもな」

「たつみポートアイランドでしょ? 菜々子、テレビで見たことあるよ! ビルが高くて、人がいっぱいいて、うみがあって、おみせやさんがねー……」

菜々子は辰巳ポートアイランドについて自分が行ったかのように

興奮しながら話していた。

「そういえば、菜々子にお土産があるんだ」

そう言つて真が菜々子にお土産を入れていた紙袋を手渡し、菜々子は嬉しそうに紙袋を持つと「ありがと、お兄ちゃん！」と笑顔でお礼を言うのと紙袋からお土産——巖戸台ちようちん——を取り出す。

「すごい、かっこいい！」

そして提灯を手に大はしゃぎ。するとその時遼太郎が帰ってきた。

「おー、帰ってたか。ご苦労さん。タツチの差だったな」

「はい。無事に戻りました」

遼太郎の挨拶に真も無事に戻つたと報告。と、菜々子が提灯を見せながら「お兄ちゃんにお土産貰つた」と言う。

「よかつたな、菜々子。お礼言つたか？」

「言つたよ！」

菜々子はそう言つて嬉しそうに部屋に戻っていく。

「すまん、小遣いから買つてくれたんだろ？」

「はい。ああ、叔父さんにもお土産に饅頭買ってきましたので、後で食べましょう」

「ああ、ありがとな。にしても、確か辰巳ポートアイランドだったか。確かお前がここに来る前に通つていた場所だったな。友達に会えたか？」

「ええ、まあ」

遼太郎の言葉に真は苦笑気味に返し、遼太郎が椅子に座ると真も巖戸台まんじゅうをテーブルに置く。

「そーいやあれか、一年も合同つて事は、白鐘も一緒か。お前、あいつとは結構話すのか？」

「そうですね。この修学旅行では結構話しました」

真から聞き、遼太郎は「あいつ、妙に大人びてるが、ほんとはお前の一個下なんだよな……」と何か思う様子で呟く。

「仲良くしてやってくれないか。生意気なガキだが……根は真っ直ぐな奴だ」

真剣な表情で真に頼む遼太郎。今の直斗は正論を言い張つて上の

連中に煙たがられているらしく、大人は勝手だな。と彼は自嘲した。「っと、すまん。疲れてるよな。風呂入ったらどうだ？ ああ、荷物は片しとけよ」

遼太郎はそう言う言葉と菜々子に風呂を入れてくれと頼み始め、真も風呂が沸くまでの間を使って荷物を片づけるため、部屋に戻っていた。

「……」

時間を少し戻して辰巳ポートアイランド。真達が集合場所に集まり始めた頃、命は一人である路地裏に来ていた。なお食べ過ぎで動けなくなっているクマは結生とゆかりに任せてベンチで休ませており、人数分のジュースを買ってくるよと言って一人別行動を取っている形だ。

「……何も見えない」

そしてぼそりと呟く。ポロニアンモールのとある路地裏、ここには二年前の戦いにおいて放課後など影時間以外の時間帯にペルソナの合体等を行っていたベルベットルームへの扉があった。しかし、今の命の目には何も見えない。それを確認した命は路地裏を出て行く。だが彼の姿が消えた後、裏路地の奥地に淡い青色の光がぽうつと走ったが、それに気づいたものはいなかった。

第四十三話 意地と決意

9月11日。修学旅行の翌日、ジュネスのフードコートに真達は集合。命はやや青い顔色で座り、真は苦笑しながら、この場の新顔に顔を向ける。

「えーっと、その……八十稲羽にようこそ。岳羽先輩、結生先輩」

「うん、ありがとう。真君」

真の歓迎の言葉に対し、自らが座る椅子の横に旅行用のバッグを置いた女性——岳羽ゆかりがお礼を言い、その隣に座る女性——利武結生が命を見る。

「それで、お兄ちゃんはこの八十稲羽で……ユキちゃんのところに泊まってるんだね」

「そ、そうだけど？」

結生のにこにこ笑顔での言葉に命もびくつと肩を跳ね上げてから引きつった笑みを見せながら返し、結生は素早く雪子の方を見る。その余りの速さに雪子も驚いた様子を見せる。

「ユキちゃん！ この天然タラシに何かされてない!？」

「てっ!? そ、そんな、別に何も……」

びしつと命を指差しながらの失礼な表現に雪子は驚いた後彼の無実を証言する。

「ほ、ほんと? もしかして部屋に呼ばれて押し倒されたりとか……」

「こら結生、僕を何だと思ってるの!？」

結生の心配そうな声に対し、流星に命が彼女を叱る。

「お、おし、たお……」

しかし彼女の言葉を聞いた雪子がぼんつと顔を赤くした。

「……お兄ちゃん?」

「命君?」

「濡れ衣だー!!??」

オーバーヒートしたかのように顔を赤くした雪子を見た結生とゆかりがジト目で命を見、命も悲鳴を上げる。

それから激昂状態になったゆかりと結生を見た千枝が真っ青な顔

で雪子をガクガク揺さぶって彼女の意識を現実に戻させ、我に戻った雪子も大慌てで謝りながら命の無実を証言。その証言を聞き終えた結生は怒りのオーラを消して命を見る。

「うん……ユキちゃんがそう言うなら。お兄ちゃんを信じる」

「私も……命君がそんな不貞をしないって信じてるし」

怒りのオーラを消した結生とゆかりはそう言い、しかしゆかりは「しないよね？」と命を睨み、命も必死で首を縦に振る。

「……こりゃー。確かに浮気出来ねえわな」

「結生先輩とゆかり先輩を本気で怒らせたなら、先輩の命はないかもしれないからな……まあ、元々先輩はそういうところすっごく真面目なんだけど」

陽介と真もぼそぼそと話し合っていた。

「でもまあ、お兄ちゃんが泊まってる場所がユキちゃんところなら話が早いや。ユキちゃん、今日から私とゆかりっちも同じ部屋に泊まるからよろしくね♪」

「……えっ?」

結生の言葉に命と雪子の声が重なる。と、ゆかりが呆けた表情をした。

「え?……美鶴先輩から連絡来てないの?」

「……」

ゆかりの指摘を聞き、命は携帯電話を取り出すとメールを見る。

「……あ、来てた」

「そういえば、お母さんから宿泊客の予約の話聞いたような……」

つまりはメールを確認していなかった命のミスであり、雪子も唇に人差し指を当てて虚空を見上げるようなポーズをしながら記憶を思い返していた。

「と、いうわけで」

結生とゆかりが声を合わせてにつこりと微笑む。

「もう逃がさないからね? お兄ちゃん」

「もう逃がさないからね? 命君」

「イエスマム……」

最愛の女性二人の言葉に命は苦笑交じりにそう言い、立ち上がった。

「じゃ、二人を天城屋まで案内するから僕達はこれで」

「あ、私も一緒にいきます」

雪子も一緒に行くと言い、それに合わせて結生とゆかりも立って荷物を持つ。

「……そういえば二人ってどうやって来たの？」

「美鶴先輩の名前でバイク二台レンタルさせてもらったよ」

「買ってやろうかって言われちゃったけど、流石に遠慮したわ」

命と結生、ゆかりはそう言い、笑い合いながら雪子と一緒にフードコートを後にした。

「……おつかねえ妹さんと彼女さんだなあ……」

「二人とも命先輩の事が心配なだけだ」

陽介が頬を引きつかせ、しかし真は二人の本心を見抜いて皆に話す。

「しっかし、大先輩方……事件はもう解決したつてのに何を調べる気なんスかね？」

「うーん……命さんは何か気になる事がある。みたいな事言つてたよね……でもそんな事あったかなあ？」

完二と千枝が腕組みをして首を捻りながら、この三人が八十稲羽に滞在する理由である事件について考える。

「ん……ま、命さん的には納得してないんじゃないかね？ あの人、確か調査頼まれて来てるんだしそこそこはつきりさせときたいんだろ」

結局陽介がそう結論を出して立ち上がり、「俺そろそろシフトの間だから行くわ」と言う。真達も今回の集まりは突然やってきた結生とゆかりへの挨拶というところが多かったためこれで解散となった。

「……」

夜中、稲羽警察署の資料室。白鐘直斗は修学旅行から戻ってきた翌日、つまり今日の早朝から今回の事件の資料をかき集めてその全てを

洗い直していた。

「……失踪した人間は全てその前にテレビ報道されている。しかし、諸岡金四郎氏だけはテレビ報道もされておらず、失踪もしていない……」

直斗は自分の考えを口に出しつつ次の資料をめくる。

「天城雪子、巽完二、久慈川りせ……失踪した後、全く足取りの追えないまま突然発見……その後は何故か椎宮さん達と行動を共にしている」

そこまで眩き、直斗は考える。自分も雪子と完二からは警察経由で、りせからは直接接触して証言を聞いたがその全てが「失踪前後の記憶が曖昧で、何があったのか覚えていない」という結果。

「……もしや、椎宮さん達が犯人のグループで、天城雪子達を懐柔し自分達に不利益な証言を出さないように監視している？」

直斗がそこまでぼそりと眩いた時だった。

「ん？ おい、まだ誰かいるのか？」

「!？」

突然聞こえてきた男性の声。それに直斗は驚いたように顔を上げると、資料室の入り口に立っていた男性が驚いたような目を見せた。

「お前、まだ残ってたのか？ 外はとつくに暗くなってるぞ……」

「あ、は、はい。すみません……堂島さん」

驚いた後呆れた様子で注意する男性——堂島遼太郎に直斗は慌てて謝罪をし、遼太郎は呆れた様子のまま資料室に入ると直斗が広げている資料を見る。

「……例の事件を調べてたのか」

「はい……どうにも違和感が拭えなくて」

「まあ、気持ちちは分からんでもないが。時間が時間だ。今日はもう帰れ……まだ納得出来てないってんなら、また明日お前がここを使えるように俺から言つといてやる。もちろん、学校が終わってからだがな？」

「……はい」

遼太郎の言葉に直斗は渋々ながら頷く。それから遼太郎が資料の

片づけを手伝い、そのまま直斗を家まで送ると申し出て二人は車に乗り、遼太郎の運転で車が走り出した。

「……堂島さん。一つ、お聞きしてよろしいでしょうか？」
「なんだ？」

直斗は運転中の遼太郎に話しかけ、遼太郎も前方を確認しつつ直斗の方を顔を動かさずに目だけでちらりと見、何か話したいことがあるなら言え、と促す。

「……あなたの甥である、椎宮真さんの事ですが……彼が今回の事件に関わっている。という可能性はないでしょうか？」

「……」

直斗の言葉に対し遼太郎は動揺など微塵も見せないまま、前方の信号が赤色のランプを点灯させたため停止線で車を停止させる。

「天城雪子、巽完二、久慈川りせ」

直斗は三人の名前を出す。警察では今そこまで注目していないが、彼らも謎の失踪をしており、発見された後は真と行動を共にしている事を口にする。

「つまり、なんだ？ 真が今回の事件に関わっていて、その秘密を握っているかもしれないだろう三人を監視している。とでも言いてえのか？」

「証拠がない推論ですが……この三人も被害者である山野真由美、小西早紀と共通点があるんです」

そう直斗が言ったところで信号が青になり、遼太郎はアクセルを踏んで車を発進させる。

「まあ、俺も最初は事件にやけに首を突っ込んでるようなあいつを疑った事はある……俺達の仕事はまず、偶然って線を消す事から始まるからな」

遼太郎はそう話すが、続けて「ありえねえな」と直斗の言葉を否定した。

「……理由をお聞きしても？」

「俺も証拠がある。ってわけじゃないが……あいつはそんな事する奴じゃねえ」

遼太郎はそう言い切った。

「親戚の欲目だとか言われてもおかしくはねえがな……あいつは昔の姉さんにそっくりだ。不愛想に見えながらも、心には熱い正義感と優しさを持っている。そんな奴が誘拐だの殺人だのに手を貸すはずがないからな」

そう言う彼は優しい微笑みを見せており、直斗も目を閉じる。

「……そうかも、しれませんね」

そしてそう呟き、目を開けて外を見ると「止めてください」と言う。

「ここまでで結構です」

「家まで送ってもいいんだが？」

「いえ、もう充分近いので。ありがとうございました」

家の前までちゃんと車で送るぞと言う遼太郎に対し、直斗は充分近いから構わないと返して下車。遼太郎から「どうにか落ち着いてきてるが、気をつけろよ」という注意を受けてから帰路へとついた。

（……流石に犯人もしくはそのグループに属している。という事は無いにしても、椎宮さん達が事件に関係している事は間違いないはず。それにこの事件にはまだ違和感が……）

すたすたと帰り道を歩きながら直斗はまだ思考を続ける。と、その時彼の携帯が突然震え出し、直斗は「お爺ちゃんかな？」と呟いて液晶に表示された電話番号を見る。

「……もしもし？……いえ、その件は前に……」

直斗は電話相手に対しそう話すが、その言葉は途中で途切れてしまう。

（待てよ、失踪した人達の共通点は……）

直斗は何かを思いつき、僅かに考えた後に改めて電話相手に話しかける。

「そのお話、お受けさせてもらってもよろしいでしょうか？……はい。では……はい……では、よろしく願います。失礼します」

会話を終了して電話を切り、直斗は再び歩き出す。これで事態が何か動くはずだ、という確信に近い考えを持ちながら。

翌日9月12日の昼休み。真は食事後の腹ごなしの散歩で校内を

歩いており、なんとなく一年生の教室に来た時だった。

(……)

一年の教室前を歩いている時に変な違和感を感じる。

「あ……権宮先輩」

「小西」

その時出会ったのはこの事件の被害者小西早紀の弟であり真の友達の小西尚紀。

「ちよんどよかった……白鐘、見てないか？」

すぐさま切りだす真。変な違和感、教室に直斗を——今までふと見ていたりせ達から話を聞くところによると周りの喧騒を全く気にせず机で本を読んでばかりいるらしい——見かけない事。が、尚紀は困ったように頭をかく。

「えっと、そう言われても……俺も別のクラスだし……でもそういうば、朝から見かけないような……」

転校生とか目立つし、いなかった気がします。と尚紀は証言。真はそうか、と呟く。

「白鐘が学校をさぼると思えないしな……心配だ」

「……えっと、もういいっすか？」

「ああ、すまん」

急いでいる様子の尚紀に真は一言謝って彼を解放し、尚紀はすたすたと歩みを進めると手近なトイレに入っていった。真もそれを見送った後時間を確認、そろそろ予鈴が鳴る時間のため教室に戻っていった。

それからまた時間が過ぎて夜。真は家で菜々子と共にテレビを見ていた。

「はい。『報道アイ』の時間です」

番組の内容がニュースに代わり、アナウンサーが番組名とその内容、この稲羽市の連続殺人事件、世間的な名称は『逆さ磔・連続殺人事件』を述べる。

「解決の陰に、なんと現役高校生の、文字通り少年探偵の活躍があった事、御存じでしょうか。今日は、甘いマスクでも話題をさらいそう

な『探偵王子』、白鐘直斗君の特集です」

「!?」

アナウンサーの言葉と共にテレビに映し出されたのは直斗の姿。それに真は驚いたように目を見開いた。菜々子はそれを不思議そうに見た後、制服が真のものと同じだと指摘する。

「まずは、先日の犯人検挙、お疲れ様でした。この事件はかねてから謎が多いとされてきましたが、お手柄でしたね」

「手柄と呼べるほどのものじゃありません」

アナウンサーの賞賛に対し直斗は静かに返答。先日の諸岡さんの事件については犯人の仕業に間違いはないが、事件の全体像を見渡した時に、自分には幾つかの違和感が残る。と話す。

「事は三人もの犠牲が出た殺人事件です。小さな違和感でも追求すべきだと僕は思います」

「は、はあ……警察会見の内容と、若干異なるようですが……」

警察からの公式的な会見とやや異なる直斗の主張にアナウンサーは怪訝な様子を見せながら、次は探偵王子の素顔、と題して直斗君自身の事を聞いていきたいと思えます。と話を変える。

「おにいちゃんの学校、たんていさんいるんだー」

「……」

無邪気に喜んでいる菜々子を横にしながら真は考え始める。

（白鐘はこういう事をすすんでするタイプには見えなかったが……ん？ いや、待てよ……これは……）

真は現在テレビに映り、自分のプライベートに関する質問に微妙に話を逸らして深くまで至らない程度に答えている直斗を見る。現在、直斗はテレビに映っている。そして、今まで失踪してきた人の共通点は失踪前、テレビで報道されている。という事だ。

（まさか………囿になるつもりか?）

己の中で一つの結論へと辿り着く。

「おにいちゃん、おにいちゃんの学校ってすごいんだね！ 菜々子も、しょうらいはおにいちゃんの学校行くー」

が、そこで菜々子が楽しそうに呼びかけていることに気づき、真も

深く考えるのは後にしよう。この思考を頭の片隅に持っていくと、菜々子との団欒を始めるのであった。

そしてその翌日9月13日。学校に登校していた真に陽介達が合流する。

「ね、昨日のテレビ見た!? 直斗君出てたやつ!」

開口一番千枝が言い、陽介は「実際に犯人捕まえたの俺らだけ」と得意気な様子を見せる。雪子は「でも容疑者を見つけたのは警察だし、それに協力してたんだからお手柄は確かだと思うよ」と言う。

「けど、意外なんだよねー。彼……テレビとかに出たがるようなタイプじゃないって思ってたんだけど」

「ああ、その事だが……」

千枝の意外そうな言葉に真が昨日考えていたことを話そうとする。

「おはようございます」

それを遮る声が聞こえてきた。

「白鐘……」

「実は、事件の事でお話があつて、皆さんを待っていました」

直斗の登場に驚く陽介達を気にする風でなく、直斗は「現時点での僕の考えを聞いてもらえますか?」と真達に問いかける。それを真が首肯すると直斗は「最初に」と切り出した。

「被害者の共通点ですが、まず殺害の前に必ず誘拐されるという事。狙われるのは、メディアにある程度ハッキリ取り上げられ、急に知名度を得た地元民……その辺りが確率的に高いでしょう」

直斗が話すのは今回の事件における被害者の共通点。少なくとも被害者の「人物像」はあまり重要視されていないだろうと話す。

「この点……皆さんも同じ見解を得てるんじゃないでしょうか」

「……白鐘、もう少し単刀直入に頼めるか?……お前の言う条件にあてはまる者が、ここに何人か揃っている」と

直斗の言葉に対し真も単刀直入に切り返す。

「……ええ、言いたいことはその通りです」

真の返しに対し直斗もこくり、と頷いた。今回の事件、二人目の被害者である小西早紀の殺害と三人目の被害者である諸岡金四郎の殺

害の間に長いブランクがあった。しかしさっきの条件を踏まえて調べるとそれらしい「失踪」は続いていた。天城雪子、巽完二、久慈川りせ、この三人もテレビで報じられた後に失踪している。

「何かの訳で死を免れたのか、自分から目を逸らすため、自身を被害者の一人に見せかけたか……殺された被害者とも何人かは接点もありますし、皆さんの誰かが犯人かと疑った事もあります」

「あ、あたしらの誰かが犯人って、そんなワケないでしょ!？」

直斗の言葉に千枝が反論。が、直斗は「そういう事もあった」と、過去形であることを強調する。

「現時点でまとめ直すなら……今の僕の考えは、それとはまったく逆です」

「逆?」

直斗の新たな推理に真が興味を持つ。

「犯人なんじゃない……恐らく皆さんは、犯人を追いつめる『手段』を持った人達」

懐柔ではなく、助けたから仲間が増えていると考えれば全ての辻褄が合う。直斗はそう、真達の秘密の一端に辿り着いた台詞をその口から紡ぎ出す。が、あくまで想像です。と言葉を締めた。

「ただそう考えると、やはり三件目……諸岡さん殺しはおかしいんですよ」

直斗は右手の指を三本立て、メディアにも出ず、失踪した形跡もない、何より遺体の状況がおかしい。と三つの違和感について話した。特に遺体の状況、二件目までの遺体は今も詳しい死因が不明にも関わらず三件目だけは鈍器による後頭部強打が直接の死因だと分かっている。これは明らかな違和感だ、と。

「警察はこの違いに納得のいく答えも持ってないにも関わらず、事件を収束するのに必死です。この上は、何か確証を掴める行動が必要でしょう」

「確証を、掴める行動?」

直斗の言葉に千枝が不思議そうな顔を見せる。

「……だから敢えてテレビに出て、お前自身が定義した条件を満たそ

う。と考えてるのか？」

「つて、それってつまり囿って事じゃねえか!？」

真の言葉を聞いた完二が叫ぶ。と、直斗は一つ微笑を浮かべた。

「まあ、結果がどうあれ……これで何かが掴めるはずです。それに皆さん、以前僕に興味深い事を言いましたよね」

直斗はそう言つて、真達の進行方向とは逆方向に歩き出す。

「おい、どこ行くんだ？」

「僕は……遊びのつもり、ないですから」

「直斗君?……」

学校とは逆方向に向かう直斗に陽介が呼びかけるが、直斗はそうとだけ呟く。それに雪子が心配そうな声を出す。直斗は気にせず歩き去つていった。真達も直斗の事は気になるがこのままでは遅刻してしまうため、学校へと向かつていった。

その放課後、真達は屋上に集まって朝、直斗が言い残していた事を考えていた。

「直斗の奴……とんでもねえ事しやがったな。まさか囿になる、だなんて……」

「で、でも、もう犯人捕まつてるでしょ?」

陽介が腕組みをしながら呟き、千枝はどこか困惑しながらも既に犯人である久保は捕まつてるんだから心配はいらないはずだ、と反論。完二も「そつスよ」と千枝に同意した。

「先輩らがビビりすぎなんスよ。直斗の奴が言い残した事もワケ分かんねえし、振り回されたつてしやあねえツスよ」

強気にそう言っている完二だが、それはどこか自分に言い聞かせているようにも聞こえる。

「……とりあえず、今は何も起きない事を祈るしかない……里中の言う通り、犯人は捕まつてる……はずなんだから……」

「そう、だね……」

真の言葉を雪子が不安気に同意した。

「……あの、さ。事件とは関係ないんだけど」

その後、雪子がそう話題を変える。

「なんだか最近、ヘンじゃない？ 町の雰囲気……みんな、妙に浮かれてるっていうか……他人の話ばかりして」

「そう？ 今の始まった事じゃないっしょ。ヤバい事件が解決したんで、不安がなくなった反動じゃん？」

雪子の不安な言葉に千枝が首を傾げながらなんでもなさそうに返し、りせも「たまたま『旬』が来てるんでしょ」とあつさり言う。即熱して即冷める。全部お祭りで、流行り廃りにワケなんてない、この事だ。

「でも……いくらなんでも、ちよつと変つていうか……なんだか、怖がつてるみたい」

雪子の言葉に全員が不思議そうな顔を見せ、それに気づいた雪子は「そんな気がしただけ」と慌てて付け加えて謝る。話はこれで終わり、真達は解散して各々帰路について行つた。

そしてそのまた翌日9月14日の夜、天城屋旅館。命、結生、ゆかりの三人はマヨナカテレビを確認していた。人影が映っているのは確かなのだが画像が荒く、誰なのかは確認できない。

「……これがマヨナカテレビ」

ゆかりがぼそりと呟く。

「これに映った人が失踪する……誘拐されるってお兄ちゃんたちは推理してるんだよね？」

「ああ。だけど諸岡教諭の時はそうならなかった……僕はそこが気になつてるんだよ」

結生と命もそう話し合い、結生は「なるほどねー」と言いながらごろんと寝つ転がる。そしてごろごろと転がっていると、彼女は部屋に備え付けられている小さなテーブルの上に立てて並べられている、いくつかの本の中のファイルを見つける。

「お兄ちゃん、あれって？」

「ああ。僕がテレビの中で見たシャドウに関する資料だよ。桐条先輩に送ったやつ控えみたいなものかな」

結生の質問に命はそう言い、結生が「見てもいい？」と尋ねると「どうぞ」と返し、結生はファイルを見ていく。

「……陽介、シャドウ？」

「花村君達のシャドウだよ。僕達と違って皆はテレビの中で自らの負の側面がシャドウとして現出。それを受け入れる事でペルソナに変じたんだ」

その資料にはそれぞれのシャドウがどうして暴走をしたのか、どういう特性を示しているのかを僕なりに分析してまとめたんだよ、と命は説明、結生は「へー……」と言いながら資料を読み進めていく。

「……美津雄シャドウ。これが犯人のシャドウ……」

結生はそう呟き、少し考えたと「ん？」と声を漏らす。

「お兄ちゃん。そういえば皆ってどうしてテレビの中に入れるの？」

「え？ いや、僕は知らないけど……なんかいつの間にか」

ぼんやりとした把握内容に結生は「真君に聞いた方が早いや」と呟いて真に電話をかける。

「え？ 俺達がテレビに入れる理由？……そういえばなんでだろ？」

……あ、でもそういえば陽介が、ペルソナに覚醒した後試してみたらテレビに手を突っ込めたって言ってました」

「ペルソナに？……!?」

真からの証言を聞いた結生はふむふむと頷いた後、自分の中で線が繋がっていく感覚を覚える。

「お兄ちゃん！ 確認したいんだけど!! こっちではその人のシャドウが変質したのがペルソナなんだよね!」

「何言ってるの？ ペルソナもシャドウも元は同一、己の意思で制御できるかどうかの違いでしょ？」

「そういう問題じゃないの!!」

結生は命目掛けて怒鳴り、真に向けて「明日、放課後でいいから急いで皆を集めて!!」と怒鳴るように言うのと電話を切る。

「ど、どうしたの、結生ちゃん？」

「……」

結生の焦った様子にゆかりがぼかんとする。それに対し結生は睨むような目つきで命とゆかりを見た。

「久保美津雄が犯人じゃない証拠を見つけた！」

「結生大先輩、どういう事ツスか!？」

4月15日放課後、自称特別捜査隊全員がフードコートに集合した後、完二が一番初めに叫ぶ。それに対し結生は例のファイルをばんつとテーブルに叩きつけた。

「うえっ!? これ俺らのシャドウの絵!？」

「わー! ちよ、ちよつと見ないでー!!」

陽介や千枝達は慌て始めるが、結生はそれらを気にせず美津雄のシャドウのページを開いた。

「皆に確認取るんだけど……皆は最初はテレビに手を突っ込めなかつたんだよね?」

「え? そ、そりやーもちろん」

結生の言葉に千枝がこくこくと頷く。次に「で、ペルソナに目覚めた後、突っ込めるようになった」という確認にも彼らは首肯。

「つまり、ペルソナに目覚めた事で、テレビに入れる能力を得たとしたら……これはおかしいのよ」

「え、と?」

結生の言葉にりせが不思議そうな顔を向ける。

「……そうか!」

一番に真が気づいた。

「思い出せ、皆! 俺と命さん達先輩を除いて、皆はシャドウを受け入れたことでペルソナを手に入れたんだ!」

「お、おう……って、そういうことか!」

「あっ!」

真の言葉を聞いて陽介と雪子が気づいた。

「え、ど、どういうことツスか?」

「私達はシャドウを受け入れ、シャドウがペルソナになったからテレビに入れるようになった……だけど——」

「——久保はテレビの中でシャドウの自分を出していた……つまり逆に言えば、あいつはペルソナを持ってねえんだ!!」

雪子と陽介の説明を受けた千枝が「ちよつ」と声を出す。

「そ、それっておかしいじゃん!? じゃあなんで久保はテレビに人を放り込めたの!?!」

千枝の言葉に真は拳を握りしめる。

「……久保はテレビに人を放り込んで殺していた犯人じゃない。諸岡教諭を襲い、テレビの中で殺されたように装った模倣犯だつてことだ」

「……つてこたあ……つまり……」

真の静かな言葉を聞いた完二が顔を青くし、陽介も唇を震わせながら声を出す。

「……真犯人は……テレビに人を放り込んでいた奴は、捕まってねえ!」

陽介が叫ぶのと完二が座っていた椅子をガタンという音を立て蹴り飛ばす勢いで立ち上がったのは同時だった。

「完二君!?!」

「ど、どうしたの!?!」

「決まってるんだろ! このままじゃ直斗の奴が危ねえ!!」

雪子と千枝が叫び、完二は怒鳴る勢いでそう言い残すとフードコートを飛び出した。

「ちよ、ちよつと完二! あんた直斗君の家の住所とか知ってるの!?!」

「ちよつと落ち着きなさいって!」

「誰か、白鐘の家の住所知ってる奴はいるか!?!」

りせが大慌てで後を追い、真が陽介達に確認を取るが、そもそも直斗とそこまで深い付き合いをしていたわけでもないため全員首を横に振る。

「つ、こっとなつたら人海戦術だ!」

真も止むを得ないと、全員バラバラに町を探し回って直斗の無事を確認するしかないと決めて指示。全員領いてフードコートを飛び出した。

それから町中を走り回るが直斗の姿は確認できず、直斗の家がどこにあるのかも分からないまま夕暮れになってしまい、一行は一度ジユ

ネス前に集合していた。

「はあ、はあ……ちくしょう！」

一番必死に探し回ったのだろう。体力自慢の完二が息を切らしており、悔しそうに声を荒げる。命が顔を上げ、暮れ始めている日を見る。

「もう暗くなる……今日は解散しよう」

「っ、大先輩！ このままじゃ直斗が!!」

命の言葉に完二が必死の表情で叫び、彼に掴みかかろうとする。

「わわ、落ちて着いてよえーと、完二君！」

その前に結生が立ちほだかり、完二を落ち着かそうと試みる。

「結生大先輩！ けど、このままじゃ直斗が“あっち”に放り込まれて……」

「でも、今直斗君がどこいるのかも分かんないんだから……」

「けどじつとしてるわけにや……」

完全に平常心を失っている完二を結生は落ち着かせようとするが彼は聞く耳持たず。結生は呆れた様子のため息をついた。

「ごめんね」

「へ？ ぐ……」

いきなり出てきた謝罪の言葉に完二が呆けた声を出した直後、打撃音が聞こえたと思うと彼は苦しい声を出して倒れ込む。その腹には結生の右拳が突き刺さっていた。

「真君、悪いけど完二君を送っててくれない？ 結構本気で殴ったからしばらく目を覚まさないと思う」

「は、はい……」

結生の言葉に真は頬を引きつかせながら頷き、気絶している完二を結生から受け取る。

「う、嘘だろ？ 完二が一撃でのびてやがる……」

「結生先輩、腕っぷしは命先輩と同等だからな」

「いやいや、流石にお兄ちゃんには勝てないって」

陽介は疲れていたとはいえ完二を腹パン一発で気絶させた結生に戦慄、真がそう言うのと結生はけらけらと笑いながらそう返してみせ

た。

「……直斗が心配だが、今日はこれで解散。マヨナカテレビを確認しよう……話はそれからだ」

真がこれからの行動方針を決め、通達。気絶している完二以外の全員が了承してから解散となった。

そして時間が過ぎて夜。真は外で雨が降っているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始めた。

「鮮明な映像、やっぱりか……」

犯人は捕まった、事件は解決した。と油断していたため今回もまた被害を未然に防ぐことが出来なかった。その事に真は悔しそうな表情を見せる。

「皆さん今晩は、探偵王子”こと、白鐘直斗です”

自身の身体より大きな白衣に身を包んだ直斗の姿がマヨナカテレビに登場する。

「『世紀の大実験・ゲノムプロジェクト』へようこそ」

直斗が挨拶をしたところでカメラが直斗を右側から移すアングルに変わる。が、直斗はくるりと身体を回転させ、カメラの方を向いた。

「僕がこれから受けるのは、人体改造手術……禁じられた、素晴らしい秘宝！」

興奮したかのように直斗は続ける。今から自分が受ける人体改造手術、それによって自分が全く別の人生を歩み始める。新たな旅立ち、新たな誕生の瞬間。そんな記念日を皆と体験したい。と直斗は語った。

「どうぞ、お楽しみにッ!!」

そう締めたところでマヨナカテレビは消えてしまった。そしてその直後携帯電話の着信音が聞こえ出し、真は携帯電話の液晶画面に表示される相手の名前を確認する。

「完二」

どうやらマヨナカテレビが始まる前に目を覚まし、マヨナカテレビを確認したらしい。

「あ、もしもし先輩スか!? いま、な、直斗の野郎がつ!! あいつ、やっぱり……クソツッ! 俺が、犯人を捕まえたなんていい気になつてなけりゃっ!!」

「落ち着け」

完二は動揺と同時に直斗を守れなかった自分の不甲斐なさを恥じており、真が彼を落ち着けと諭す。

「あ、す、すんません……」

「明日皆で話そう」

「そ、そっスね……くそ、でも、囨になつといてテメエが拉致られてりや世話ねえだろが……クソツッ! イライラすんな、あいつ!」

完二は動揺しつつも何故自分がここまで動揺しているのか分かっていない様子で言葉を吐いている。

「とにかく、明日すぐメンツ揃えましょう!」

その言葉を最後に完二は電話を切り、真も電話を切ると明日に備えて眠りについたのであった。

第四十四話 意地、そして基地へ

「昨日の……直斗君だったよね？」

9月16日、学校が終わった後真達はマヨナカテレビについて話をするためジュネスのフードコートへと集まっていた。もちろん、命と結生、ゆかりも一緒である。

「クマくん、どう？ やっぱり……いる？」

「におい、するクマ」

雪子の浮かない顔での呟きにつき、千枝がクマに確認を取ると彼も肯定。

「これじゃ……おんなじだ……今までと、なんも変わってねえ……」

陽介が悔やみ、りせは直斗が「遊びじゃない」と言っていた事を思いだし、以前自分達が直斗に自分達のやっていることを、シヤドウとの戦いを知らないとはいえ遊びと言われたことに対し遊びはそっちだと言い返したことを悔やむ。と、完二がばんっとテーブルを叩いて立ち上がった。

「悔やむのは後だ！ それより今はとっととテレビに入って、あいつを探さねえと！ あのバカが『向こう』でくたばっちまう！」

「そうだね。急ごう！」

完二の言葉に命も同意、真達もこくりと頷いてフードコートを後にし、家電売り場まで移動するとテレビに入ってしまった。

「ここがテレビの世界……」

「うわー、なんかふっしぎー」

テレビの世界初体験のゆかりと結生——双方クマからメガネを受け取っており、二人とも同じ形のナイロールタイプで、違いはそれぞれフレームがゆかりはピンク、結生がオレンジ色というくらいだ——が不思議そうに辺りを見回している近くでりせがペルソナ——ヒミコを召喚。辺りの探知を行っていた。

「確かに、誰か入ってる。それに、この世界、また少し広くなってる

……」

「さすがやね、リセチャン。クマの鼻、そこまではもう全然ムリ」

リセの報告にクマが彼女を賞賛、「肩モミモミしましょか」と言う。陽介が「邪魔すんな」と彼を叱る。するとりせが困ったように表情を歪ませた。

「前と同じ……居るのは分かるけど、場所が見えない……何か、あの子の事もっと分かるもの……手がかりが欲しい。今のままじゃ、どっちに進んでいいか分かんない……」

「クツソ、あいつの事分かんねえ事だらけじゃねえか……」

リセの言葉を聞いた完二が悔しそうに唸る。と、千枝が「いつもの事でしょ！」と元気よく言った。

「焦らず、天気を気にして、いつも通りやろ。必ずうまくやれるって！」

「ああ、そうだな。とりあえず、あいつの居場所掴めそうなものを探そうぜ」

千枝のポジティブな言葉に陽介も同意、まずは直斗の居場所が掴めそうなものを探そうと言う。

「……そつスね。こつちに入ってることあ分かってんだ……なら、こつちから出してやるだけツスよね！」

自分の無力さにイラついていた完二もようやく落ち着きを取り戻す。と、ヒミコの召喚を解除したりせが申し訳なさそうに「すぐ見つからなくてごめんね」と彼らに謝る。が、続いて力強い表情を見せた。「けど、あのコを感じられるような、何かヒントがあれば、絶対見つけてみせるから！」

力強く、決意を込めた瞳でのりせの言葉に真達はこくりと頷き、一度テレビを出ると手分けして直斗の情報を集めに走り出した。

それから真がやってきたのは学校。最近直斗は登校していなかったとはいえこの学校の生徒、何か知っている人がいるかもしれないと彼は判断していた。

「誰かいないか？……」

しかし既に放課後になってから時間が過ぎており、部活をしている

生徒を除いてほとんどの生徒は下校している。

「あ、先輩」

「松永」

だがまだ学校に残っていたらしい彼の後輩というか部活仲間の松永綾音、彼女を見つけた真は「ちよつと聞きたいことがあるんだが」と彼女に声をかけ、綾音も「なんですか？」と聞き返す。

「白鐘についてなんだが……なにか知ってる事はないだろうか？」

「白鐘、君……ですか？……いえ、クラスが違うし、お友達が少し白鐘君について話してるくらいで……」

「ああ、そうだよな……すまない。気にしないでくれ」

真の質問に綾音は困ったように首を傾げて申し訳なさそうに答え、真もすまないと一言謝ると頭をかきながらその場を去ろうとする。

「あつー！」

が、その時綾音が何か思い出したような声を出した。

「そういえばいっだったかは忘れちゃいましたけど、前にお母さんに頼まれておつかいに商店街に行った時、白鐘君が警官の人ともめてるのを見たことがあります」

綾音はそう証言。なんでも、学校では物静かな雰囲気だったのにその面影を見せない程に怒っていたのが印象に残っているらしい。だがちらりと見ただけだし、その後すぐにおつかいに戻ってしまったため何故もめていたのかまでは分からないそうだ。

「えっと、ごめんなさい。こんな事で……」

「いや、充分だ。ありがとう」

中途半端な情報に謝る綾音だが真は彼女の頭にぽんと頭を置いてお礼を言う和学校から去る。その道中で携帯を開き、さつき綾音から聞いた情報をメールで特別捜査隊メンバーに送るのも忘れない。

「とりあえず、白鐘ともめていたという警官から話を聞いてみるか……だが、いれればいいんだが……」

次に話を聞くべき相手の見当をつけつつも、警官という大雑把な情報だけでその相手を見つけられるだろうか。そんな不安な思いを一瞬頭によぎらせながら、真は商店街までやってくる。

「だからよお！　白鐘直斗について聞いてきてえんだつつうの!!」
「!?」

いきなり聞こえてきた聞き覚えのある大声。真は驚きに硬直した直後、声の方に走り出した。

「お、おい完二、落ち着けて……」

「だけども花村先輩！　あいつがサツと何かもめてたって話でしょ!?!
だったらサツをしらみつぶしにあたりや早いじゃねえツスカ!!」

商店街の北側、小西酒店の前で騒ぎを起こしているのはやはり完二。彼は警官に対し質問をしているようなのだが明らかに威圧的であり、警官の方もイライラした様子で「職務中なんだ。学校が終わったのなら早く帰れ」と言っており、陽介が慌てた様子で完二を落ち着かせようとしているものの一触即発の雰囲気を漂わせていた。

「あ、あの、すみません」

「ん？　なんだい？」

慌てて駆け寄り、警官に話しかける真。警官も完二と言い合いをしていたのを差し引いてもイライラを隠していない様子で真を見る。

「失礼しました。俺達、白鐘直斗の友達で……最近学校に来てないから心配しているんです」

「あの子の知り合いか？　確かに最近署でも見ないな。ちよつと前までは、よく夜遅くまで資料を調べてたけどねえ……納得いかないからって、あの執着具合は異常だよ」

そこまで言うと言官は「もう行きなさい。無駄話をしてるほど暇じゃないんだ」と真達を追い払う。

「事件に執着……だからってアイツ、なんでいつも一人で突っ走るんだ……」

「うくん、納得いかないからって、普通一人で続けるか？　まったく」

完二が頭をかきながら、陽介が腕を組みながら呆れた様子で言う。

「警官はまだいるはずだ。聞いてみようぜ」

「そうツスね。手分けして捜しましょう!」

陽介と完二がそう言い、彼らは解散して聞き込みを再開した。

「あ」

商店街を走って警官を探していた真の目に映るのは、報告、連絡をしているらしい二人の警官。

「叔父さん」

「ん？ ああ、真か」

その内の一人は彼の叔父——堂島遼太郎。

「あの、すいません。白鐘の事なんですけど……あいつ、最近学校にも来てないそうなんです。叔父さん達は何か知りませんか？」

「なに!? あいつ、まさか学校にも行かねえで事件について調べてるのか!？」

真の言葉を聞いた遼太郎は驚いたように叫んだ後、「あいつが資料室を使えるようには言つといたが、学校が終わってからにしろつて言っただろうが」と呆れたようにぼやく。と、彼と話していた警官が呆れたようにため息を漏らした。

「っていうか、署内は解決ムードなんだから、納得してないからって一人で頑張られてもな……署内では事件は終わった事として扱われているんだから……」

「おい」

警官の面倒そうな言葉を遼太郎が注意するが、警官は肩をすくめる。

「だって実際もう犯人も捕まっていますし、蒸し返されても困るじゃないですか。『そういうところが子供』なんですよ、あの子」

「ああ、まあ無理して肩肘張ってるところはあつたがな……」

警官の言葉に遼太郎は腕を組んでそう呟く。

「分かった。あいつを見かけたら俺からも注意しておく。お前はもう気にするな」

(つまり……)

遼太郎は一つ頷くと直斗を見かけたら注意しておくからお前は気にするな、と真に言う。それを聞きながら真は今まで集めた情報を頭の中でまとめる。

(白鐘は事件に対する異常な執着心を持っていた……だがそれに対し、署内では子供扱いされていたらしい)

「おい真？ 聞いてんのか？」

「あ、はい。分かりました。じゃ、俺は陽介達と約束があるので、これで」

「おう。あんま遅くなるなよ？」

遼太郎の言葉を受け流しつつ真はその場を後にする。そして携帯を取り出すと「白鐘についての情報ゲット、ジュネス屋上に集合」という文面をメールで送信。自分もジュネスに急いだ。

「先輩！ 手がかり掴めたんだね!？」

ずっとテレビの中でヒント無しでも直斗を見つけれないかと試していたりせはテレビの中に真達が入ってくると嬉しそうに言い、「早く教えて！ 居場所捜すから!」と急かす。それに対し真も直斗が「子供扱い」されていた事と捜査に対する異常なまでの執着心があった事をりせに伝えた。

「なるほどね……意地だね、完全に」

りせはそれを意地と評する。直斗くんにしては珍しく感情的って事なのかも、とも彼女は言う。

「うん、だいたい感じ分かった。多分行けると思う。すぐペルソナで見つけるから、そしたらついて来て!」

そう言っつてりせはヒミコを召喚。直斗の居場所を探り始めた。

「……なんスかね。こゝ?」

りせが直斗の居場所を見つけ、彼女に連れられてやってきた場所を見た完二が呆けた声を出す。

やってきた場所には地下シェルターの入り口のようなものがあり、その上部には巨大なパラボラアンテナが建てられている。さらに建造物の側面には金の羽根を広げた不死鳥のマークが描かれていた。

「SFチック……ていうか、あー分かった、特撮の秘密基地っぽくないか?」

「ああ、なるほど。子供の頃に憧れたな」

陽介の言葉に真がうんうんと頷く。

「あれ、シンドイらしいよー、現場。滝とか火の中とか余裕で本人飛び込むらしいし」

「うわー。嫌な事聞いちゃった気がする……」

りせの言葉に何故かゆかりがげんなりとした表情を見せた。

「ま、男のロマンの基礎だな」

「そうね。気持ちは分かるかなー。カンフーと一緒にアクションだしね」

陽介の言葉に千枝が同意、秘密基地って響きもトキメクよねと騒ぐ。子供の頃に天城屋旅館の裏山辺りに作った事があるらしい。しかし仙人に必殺拳を伝授されると言っており、陽介から「それ基地じゃねーだろ」とツッコまれていた。

「でも、考えてみるとこの特撮の秘密基地みたいところが直斗君の心が出元って事だよな?」

「だとすると、結構カワイイとこあんのかもな」

命の言葉に陽介もクスツと微笑してそう言う。

「グダグダ話してる場合じゃねッスよ! とつとと行きましよう!」

と、完二が気合十分に右の拳を左の手の平にばしつと打ちつけ、それを聞いた命もああと頷いた。

「よし、行こう!」

そう言っただけで夏用の上着を脱ぎ捨てて、その下に着こんでいたS・E・E・S・時代の制服姿になる命。ゆかりと結生もそれに倣ってさつきまで着ていた上着を脱ぎ捨てる。ゆかりが着ているのは命と同じくS・E・E・S・時代に着用していたピンク色のカーデイガン、そして――

『ぶっ!!』

自称特別捜査隊メンバーが例外なく結生の格好を見て吹き出し、完二に至っては鼻血まで噴き出している。命とゆかりも口をあんどりと開けていた。

「ん? どつたの?」

だがその視線が集中している結生は全く気にも止めずに持つてきていた鞆から銀色金属製のカチューシャのような形の頭防具と首周りを防御するのだろうと同じく銀色金属製の首輪のようなものを着用する。その身体には金属による覆いは必要最小限もない、むしろ両腕を覆う純白の長手袋と両足を覆う純白のロングブーツのそれぞれ肩側と太もも側、そして胸部部分以外こそ金属でガードされているがそこ以外は純白のへそだし水着とでも言えればいいだろうか。かなり露出の多い格好になっている。しかも結生の服の上からでは分からなかった豊満な胸がかなり露わになっており、真と陽介は目のやり場に困っている。なお完二は鼻血を吹いてそっぽを向き、クマはりせに目を塞がれていた。

「ちよ、ちよつと結生さん!? な、なんなんですかその格好!」

「ん? ハイレグアーマーっていう防具だよ? 私の愛用品!」

千枝がツツコミを入れ、結生がドヤ顔で自慢するように胸を張る。

「こんのバカッ!」

「ふぎやつ!」

と、その脳天にゆかりの拳骨が突き刺さった。

「ちや、ん、と! 美鶴先輩から服届いたはずでしょ!? なんでそつちじゃないの!?!」

「うう……だ、だつてハイレグアーマーの方が動きやすいし……」

「はっ、そつか。機動力つて大事だよね……」

「雪子!」

ゆかりからのお叱りを受けた結生が頭を押さえながら涙目で訴えると雪子がはつとした表情を見せ、千枝が戦慄する。

「別にいいじゃん! 知らない人見ないし!」

「ダ、メー! ほら見なさい真君達こつち見れないでしょ! 早く着替えなさい!!」

唇を尖らせてぶーぶー文句を言う結生にゆかりが説教。探索に支障が出ると言つて彼女を制服に着替えさせることに成功させる。

「さてと……じゃあ改めて。皆、行くぞ!」

仕切り直しといわんばかりに真が呼びかけ、それに陽介達が「おう

！と返すと彼らは一気にシエルタワーらしき入口へと飛び込んでいった。

第四十五話 テレビの世界、秘密結社改造ラボ

「施設内ニ正体不明ノ侵入者ヲ確認……警戒レベル、イエロー。施設内ノ警戒ヲ強化」

「ひゃっほー！ 久しぶりに暴れるぜー！ 止めてみればー!!」

「よし、行くよー!」

「ちよつところ二人とも待ちなさい!!」

真達が施設に入った途端、どこからともなく機械音染みた音声が流れる。が、驚いたように足を止めた真達を追い抜き、結生が自分の背丈以上もある薙刀を手に突っ込んでいく。それに並走するように命も突っ込み、ゆかりは弓に矢を番えながら慌てて後を追う。

「警告！ 警告！ 侵入者ニ告グ！ 直チニ施設カラ退去セヨ！

繰り返す。直チニ施設カラ退去セヨ!」

「ふははははー！ そんな事言われて素直に出て行くわけないじゃーん!!」

「同感だね!」

機械音声での警告が鳴り響くが、結生は一切気にせず球体状の身体に大きな口と長い舌を伸ばしたシャドウ——甘言のアブルリーを薙刀で斬り裂き、命は金属製のナックルガードを着けた拳で巨大な岩型のシャドウ——不遜のバザルトを打ち砕く。と、思いつきり暴れている二人を取り囲むように次々とシャドウが現れる。その数十体というところだろうか。

「ウォーミングアップにはちよーどいいね」

「オツケー、やっちゃいますか!」

薙刀を片手でひゅんひゅんと回してから構えを取り直す結生と背中合わせになるように命も陣取り、腰に差していた片手剣を抜く。

「ちよ、ちよおっ!?! あの大群をたった二人で!?!」

「いくら大先輩でもやべえツスよ! 俺達もカチコミましょうや!」

陽介が驚愕し、完二が心配したように叫ぶ。それに真も「ああ」と言って一斉に武器を構えた時、

「皆……巻き込まれなくなかったら私より前に出ない方がいいわ」

ゆかりが彼らを押しとどめた。

「え？」

「えーつとりあえず、りせちゃん？ あなたがここのアナライズ役よね？ 万一のために準備だけはしておいて」

「あ、はい」

千枝と雪子が呆けた声を出す。ゆかりは手慣れた様子でりせにアナライズの指示。りせも頷いてヒミコを召喚し、アナライズを開始。それを合図にしたかのようにシャドウの群れが一斉に命と結生に襲い掛かる。

「せんぱーい!!!」

真が叫ぶ。が、その時彼らは見た。二人が全く同時に、己のペルソナを召喚する装置である銃を己のこめかみへと突きつけるのを。

「来い、オルフェウス!!」

「出番だよ、エウリュディケ!!」

ガシヤアンとガラスの割れるような音が響き、二人の頭上にペルソナが顕現する。命の上に顕現するのは彼と同じ右目を隠すように白髪を伸ばし、首から下は人形のような作りもの身体。そして巨大な豎琴を背負う幽玄の奏者オルフェウス。結生の上に顕現するのはこちらも結生と似たようなポニーテール風に橙色の髪を結っている綺麗な女性、だがその足には蛇が巻き付いているのが妙に気になった。

「オルフェウス、アギ！」

「エウリュディケ、セクシーダンス！」

主二人が命じ、オルフェウスが豎琴をかき鳴らして炎をまき散らし、まるでその曲に合わせるようにエウリュディケが見る人を魅了するかのような踊りを踊り始める。と、数体のシャドウがエウリュディケにひれ伏し、彼女に攻撃を仕掛けようとしたシャドウ達向けて攻撃を仕掛け始めた。

「な、なんだありや!? シャドウが同士討ちを始めやがったぞ!!」

「あれは、混乱の症状にそっくり……」

陽介が驚き、雪子がぽかんとしながら分析する。

「続けていくよー、デビルスマイル！」

脳天目掛けて急降下突進を仕掛けてきた源泉のバザルトをかわし、逆に蹴りを入れてまるでサッカーのシュートの如くシャドウを巻き込ませながら吹き飛ばしつつ指示。するとエウリユディケから何か恐ろしいオーラが放たれ始め、そのオーラに呑まれたシャドウ達が怯み、怯えだす。

「チイツ、あの感覚……恐怖か!」

「うう、変な事思い出しちゃった……」

以前美津雄のシャドウとの戦いでその攻撃を受けてしまった完二と千枝がそれを思いだして完二は表情を歪め、千枝はやや顔を赤くしてうつむく。

「さらにさらに、ポイズンミスト!」

結生が四方八方から迫りくるシャドウをくるくる回転しながら斬り倒しつつまたも指示を出し、エウリユディケが両腕を広げると緑色の霧が辺りに充満。シャドウ達を蝕む。

「ド、ドクドクマー!」

「間髪入れずバステ三発って……」

三連発の状態異常攻撃にクマとりせが驚く。

「隙あり!」

同士討ちと恐怖、さらに毒でシャドウの戦線はガタガタ。間髪入れずに命と結生が一齐に斬りかかり、オルフェウスも豎琴を構えてシャドウ軍勢に突進した。

「あれがエウリユディケの基本戦闘パターンね。バステで相手を攪乱し、相手を状態異常に落としたところで一気に仕留める」

ゆかりもエウリユディケの戦闘パターンをそう評した。

「よ、よし! 俺達も行くぞ!」

「だーかーらー。巻き込まれるからやめなさいって」

真が刀を構えて突撃準備をするが、ゆかりは何度も言わせないと言いたげな表情で言う。と、完二が「はあ?」と声を上げる。

「何言ってるんスカ岳羽大先輩? もうそれは終わったんじゃない?」

「むしろここからが本番よ、あの台風兄妹は……」

完二の疑問の声に対し、ゆかりはこめかみに指を当てながら頭痛を

堪えるような表情でそう呟いた。

「オラオラオラオラアツ!!!」

老木がちゃんちゃんこを着たような格好のシャドウ——招きの女御が薙刀に一刀両断され、その背後から結生を狙っていた不遜のバザルトが命に蹴飛ばされ、地面に叩きつけられると同時に自爆。周りのシャドウを巻き込んで消滅する。

「お兄ちゃん!」

「オツケー!」

結生が薙刀を刃を横にして地面に置くような格好にして命を呼び、命も頷くと剣を鞘に収めてその薙刀の上に乗る。

「どっ!いしよー!」

ふうんつと薙刀を振り上げて命を空中に飛ばす結生。命も空中でダーツを両手一杯に構えると一斉投擲。雨のように降り注ぐダーツはシャドウの急所に次々と命中していった。

「せいっ!!」

さらに命は落下の勢いを利用して飛び蹴りに繋げ、石像型のシャドウ——維持の彫像を蹴り飛ばす。

「エウリユデイケ、五月雨斬り!」

一方結生はエウリユデイケに指示を出し、エウリユデイケが両手を前に突き出すと不可視の斬撃がシャドウを斬り刻む。

「せいっはっとうっ!!」

続けて結生が薙刀で斬り込み、さらに相手の懐に入ると膝蹴りを叩き込み、最後にエルボウクラッシュで突き飛ばす。

「うわ、すごっ!」

思わず千枝が叫ぶ。が、その次に雪子が「あぁっ!」と叫んだ。辛うじて生き残ったシャドウ達が一斉に結生目掛けて四方八方から襲い掛かってきたのだ。

「ふふん」

が、結生は余裕を見せながらくるつと周りを見てタイミングを計る。

「せいっ!!」

そしてタイミング通りに薙刀の柄を地面に立てるとまるで棒高跳びのようにダイナミックなジャンプで四方八方から襲い掛かるシャドウを回避。逆にシャドウ達はそれぞれの攻撃がそれぞれに当たる結果になってしまう。

「ギガンフィスト！」

一塊になっっているシャドウを見ながら結生は指示。それと共にエウリュディケが拳を振り上げ、振り下ろすと共に不可視の衝撃がシャドウをいつぺんに押し潰した。そして結生は着地をするとドヤ顔を見せつつ真達に向けてサムズアップをする。千枝達も「おおー」と小さな歓声を上げながらパチパチパチと拍手を返した。

「っ！ 先輩！ 危ないっ!!」

「ほえ？」

が、その時真が血相を変えて叫び、結生も呆けた声を出す。直後、自分が倒しきれていなかった、二人一組のダンサーを思わせる胴体の一つの大きなハート型の頭部が浮かぶシャドウ——ロイヤルダンサーが緑色に輝く剣を突き出して迫っている光景があった。

「あわわわわわ!!」

慌てて薙刀を構えようとするがもう遅く、一番近くにいる命も間に合わない。が、ロイヤルダンサーの剣が結生に届こうとしたその時、シユパアンという風切音が聞こえたと思うと、ロイヤルダンサーが消滅した。

「え？……」

「な、何が……」

「た、岳羽先輩？……」

千枝と雪子が呆然とし、真がゆかりの名を呼ぶと全員がゆっくりとゆかりを見る。彼女は弓道で矢を放った後に取り残身の姿勢を取っている。

「まさか、あの一瞬で？……」

それ以外考えられない。ゆかりはロイヤルダンサーが結生を狙っているのに気づいた瞬間、目にも止まらぬ早撃ちでロイヤルダンサーを正確に貫いたのだ。しかも一撃、つまり急所を的確に射抜いてい

た。

「ゆかりっちー助かったよー!」

結生がとててと小走りゆかりに駆け寄り、両腕を広げて彼女に抱き付こうとする。

「この馬鹿っ!」

「ふぎやっ!」

が、両腕を広げていたため無防備になっていた結生の頭にゆかりの拳骨が突き刺さった。ゆかりの額には怒りマークがくっついていてる。

「油断しちゃダメだつて言ったでしょ!　ただでさえあたし達は大分ブランクあるんだから!」

「だ、だからとつとと勘を取り戻そうと思つて戦つたんじゃん……」

「横着しすぎ!　皆と一緒に戦つてゆっくり勘を取り戻さなきゃ危ないでしょうが!!」

ゆかりは結生に説教を始め、さらには「命君も命君よ!」と説教が命にまで飛び火、「よくそんなので今まで真君達を率いていられたわね!」、「ここではアドバイザーとか言つてたけど、元リーダーとしてちゃんといざとなつたら自分が真君達を引っ張つていくんだつて自覚持ちなさい!」と気がついたら利武兄妹を正座させて溜々と説教していた。

「……み、命さんがここまで押し負ける姿、初めて見るよな……」

「た、岳羽大先輩、すげえッス……」

「あたし今、影のリーダーつて言葉を思い出したわ」

「私はその、尻に敷かれるつていう言葉を思い出した」

陽介、完二、千枝、雪子もぼそぼそと喋り合つてた。

「警告!　警告!　侵入者二告グ!　直チニ施設カラ退去セヨ!」
繰り返す。直チニ施設カラ退去セヨ!」

ゆかりの説教がなかなか終わりそうになかったため、真が適当なところで「白鐘を助けに行かなきゃ」と助け舟を出して終わらせ、先に進んでいく。そして先へと続く階段を降りた時、再びそんな警告音が

聞こえてきた。

「これって……直斗君が助けを拒んでるってこと？」

「あるいはシャドウがそう思わせようとしてるのかもしれないな……」

「真偽は分からないけど。白鐘君を助けないわけにはいかないからね。先に進もう」

直斗が助けを拒んでいるのかと困惑するりせに、真は直斗のシャドウがそう思わせようとしている可能性を指摘。だがどちらにしても直斗を助けられないという選択肢はない、と命は言う。

「そうだね！ 絶対に直斗君、助けないと！」

命の言葉にりせも同意。

「ねえ、先輩……」

が、彼女はそう気合を入れ直すように言った後、何かを思い出したように突然、どこか不安な言葉を真達に投げかける。

「覚えてる？ 直斗君、マヨナカテレビに映った時、人体改造手術を受ける”って言った……」

「そ、それって、もしかして直斗君、ここで改造されちゃうってこと!?!」
りせの言葉を横取りするように千枝が慌てた言葉を出し、一行が一瞬言葉に詰まる。

「ヤバッ！ 急がないと!?!」

そしてりせが慌てた声を出す。なおその横では結生が「バツタをモチーフにした改造人間に改造!?! なにそれ胸熱!?!」とかキラキラした目で言ってるゆかりにしばかれていた。

「正体不明ノ侵入者ハ現在、地下4階ニ到達……警戒レベル、オレンジ。施設内ノ重要区画ヲ閉鎖。侵入者ヲ排除セヨ！」
「ついに警告がなくなったか」

地下四階へと辿り着いた時、機械音声から警告の言葉が消え、侵入者、つまり真達の排除を命じる音声流れる。その音声を聞いた真が眩き、ゆかりもうんと頷いた。

「ここからは本腰入れてかかってきてもおかしくないわね……二人とも、暴走は慎むように」

「はい……」

「も、もちろんです。ママ……」

ゆかりはギロリと命と結生に睨みを利かせ、二人もやや青白い顔でこくこくと頷いて返す。

「おっと、岳羽さん。言ってる間に敵の登場ですよ!」

陽介がゆかりに呼びかけながら己の武器である短剣を抜き、ゆかりもこくと頷くと弓に矢を番える。真も背負っていた刀を抜きつつ左手にペルソナカードを具現する。

「来い、ニーズホッグ!!」

カードを握りしめた手で碎き、己の心の海に眠る存在を解放。現れるのは世界樹ユグドラシルの三つめの根を齧っているとされる大蛇——ニーズホッグ。

「おお、これが真君達の召喚方法かあ……」

「へえ、召喚器を使わないんだ……」

なんだかんだで今までペルソナ召喚せずに突き進んでいたため、自称特別捜査隊メンバーの召喚方法を初めて見た結生とゆかりもそう眩く。

「マハムドオン!」

真が指示をするとともにニーズホッグが吼え、辺りに呪殺の魔法陣が敷かれていく。が、無数の正方形が組み合わさって立方体を形成したような格好の物体の中に入り、宙を浮かぶ人形のシャドウ——赤のシジルの身体が光ったと思うと真にその呪殺の力が反射された。

「相棒!」

「心配いらない! ニーズホッグに闇の力は通じない!」

陽介が叫ぶが、真はニーズホッグの力で呪殺の力を弾く。

「だったらこいつでどうよ! ブフ!」

別のシャドウがあらかた呪殺で消滅し、残る赤のシジル目掛けて千枝がトモエを召喚、氷の弾丸を放って攻撃する。が、死角から狙っていた氷の弾丸を赤のシジルはまるで見ているかのように見切って回

避。千枝が「なっ!?!」と驚愕の声を上げ、驚愕によって彼女は動きを止めてしまう。

——アギラオ——

「きやああっ!!」

そこに赤のシジルが炎をまき散らし、弱点である炎の攻撃を受けた千枝が吹っ飛ばされダウンしてしまう。

「千枝！ く、コノハナサクヤ、アギダイン!!」

雪子が千枝のフォローをしようと、赤のシジル目掛けてアギラオ以上の力を持つアギダインを叩き込まんとする。が、赤のシジルはその炎を吸収し、無効化した。

「き、効かない!?!」

自分の攻撃が無力化されてしまった事に驚く雪子だが、赤のシジルが千枝目掛けて再びアギラオで攻撃を仕掛けようとしているのに気づくと、炎に耐性を持つ自分が千枝を守ろうとばかりに咄嗟に彼女の前に立ちはだかる。

「ゆ、雪子!?! ダメ!!」

千枝が叫ぶが、彼女もさっきのダメージで動けない。

「ユキちゃんに手は出させないよー!」

が、そのさらに前に結生が立ち、彼女は召喚器である銃をこめかみに突きつける。

「エウリユディケー!」

引き金を引くと同時に己のペルソナの名を呼ぶ。と、エウリユディケが両手を広げると共に彼女の前にそれぞれ赤、青、緑、黄、白、黒、そして橙の色をした七つの玉が出現する。

「いっくよー、パラダイムシフト! フレイム!」

結生が叫ぶと七つの玉がルーレットのように回転。やがて赤色の玉を一番上にして止まるとエウリユディケの髪の色が赤色へと変色。その直後、赤のシジルがアギラオを結生目掛けて放った。

「へっへーん! 効かないよ!!」

しかし結生は得意気に笑っており、確かに多少のダメージは受けているものの、ダメージはかなり軽減されていた。

「ゆかりっちー！　いくよ！　マハタルカジャ!!」

結生がゆかりに合図を送りながらエウリュディケに指示。エウリュディケも仲間を支援する光を輝かせ、ゆかりはその赤い光を浴びながら召喚器を両手で握り、額に押し当てる。

「イシス！」

彼女の心の海より呼び出されたペルソナ——イシス。その力を感じながらゆかりは弓に矢を番え、引き絞る。と、その矢尻に旋風がまとわれた。

「くらいなさい……必殺、ガルダインアロー!!」

掛け声と共に放たれた矢は竜巻を帯びて螺旋状に回転。凄まじい破壊力をもって赤のシジルを貫き、敵の急所を狙う正確無比な一撃が赤のシジルを一発で消滅させた。

「な……さつきから見てるけど、結生さんも岳羽さんもとんでもねえな……」

「流石、命先輩と肩を並べるお人ツス！」

ペルソナの援護があつたとはいえ突入早々命と背中を任せあつてシャドウの群れとその身と薙刀そして体術で渡り合った結生と、シャドウを一撃で消滅させる正確無比なスナイパーのゆかりを見ながら陽介が引きつった声を漏らすと完二が感動したように声を上げつつ生き残りのシャドウを殴り飛ばす。

最初のニーズホッグのマハムドオンによって大部分のシャドウが壊滅し、残るシャドウも危なげなく全滅させてから彼らは探索を再開。とりあえず目についた扉に触れ、次々と開けて中の様子を確認しながら進んでいく。

「ココカラ先ハ研究区画デス」

「うおっ!?!」

扉に触れた時そんな機械音声が流れ、扉に触れた本人である陽介はびくつと身体を震わせて扉の前から飛び退く。

「一般ノ戦闘員ノ立ち入チヲ禁止シマス。身分証ヲ提示シテクダサイ」

「身分証って……バ、バイクの免許とか？」

「いや、違うでしょ」

機械音声に対し天然ボケをかます雪子とツツコミを入れる千枝。だが確かにこの扉には他のものと違ってすぐ横に読み取り機なのだろうかカードリーダーのような装置がついており、恐らく身分証なるものをこの装置に通さなければ研究区画へは進めないのだろう。

「……この前のくらのやみのたまのように、どこかで身分証を手に入れられるかもしれない」

「んじゃ、そいつを手に入れる事が当面の目的だな」

「チツ。シャドウぶっ倒して手に入れられりや一番早えんすけどね」

真は以前のボイドクエストでの冒険を思いだし、陽介も当面の目的をはつきりさせる。早く直斗を助け出したい完二はそこらにいるシャドウを倒して手に入れられないかと悪態をつくが、さつきシャドウの大群を倒した時に一体たりともそんなものを出さなかったため、その線はないだろうと彼も気づいていた。

「正体不明ノ侵入者ハ現在、地下6階ニ到達……侵入者ヲ排除セヨ！」

地下六階に到達した時、侵入者の排除を命じる機械音声は鳴り響き、その命令に従うように次々とシャドウが襲い掛かる。

「くそ、なんだよこの数……多すぎんだろ！」

十体、いや二十体を遥かに超える数に陽介が悲鳴を上げる。

「流石にこの数を一気にってのは辛いね……全員、一塊になって突っ切るよ！」

「ああ。適当に相手を撒きながら各個撃破でいくぞ！」

命と真が指示を飛ばし、一行は一塊になってシャドウ連中を横切り、追いかけてくるシャドウ達を振り切りながら基地内を走り回る。

「しめた、扉だ！ 下の階に行けばあいつらは追ってこれねえ！」

陽介が前方の扉を見て歓声を上げ、ペースを上げると扉を開けるために扉にタッチする。

「ココカラ先ハ機密区画デス。一般ノ戦闘員、及び研究員ノ立ち入

りを禁止シマス。身分証ヲ提示シテクダサイ」

「なあー!?!」

が、扉は開かず聞こえてきたのはそんな機械音声。確かによく見ると、四階にあったものと同じカードリーダーがついている。

「だーもう花村! こんな時に何してんのさー!」

「うっせー! 俺だつてまさかまたこんなもんがあるなんて思わなかったんだよ!!」

「で、でもどうしよう!? これじゃあここ、行き止まりつてことにな……」

叫ぶ千枝に陽介も怒鳴り返し、雪子が慌て出す。と、完二が足を止めて振り返った。

「どうするもこうするも、こうなりや腹くくるしかねえつしよ!!」

ばしつと右の拳で左の手の平を叩き、戦闘体勢に入る完二。その声を聞き、陽介達もはっとした表情を見せて構えを取る。

「……仕方がない。ここで消耗したくはなかったんだけど……」

が、その前に命が立ち、召喚器を構える。

「来い、タケミカズチ! トール!」

ガアンツという銃声と共にパリンとガラスの割れるような音が響き、命の頭が吹っ飛んだように大きく揺れる。

顕現するのは日本に伝わる雷と剣の神——タケミカズチと北歐神話に伝わる最強の戦神にして雷神——トール。

「ミックスレイド、雷神演舞!!」

東洋と西洋の雷神のコラボレーション。その雨のように降り注ぐ雷がシャドウ達を捉え、薙ぎ払う。たまに反射されたのだろう雷が命を襲うが、雷神の加護が彼を雷撃から守る。

「いくよ、ゆかりっち!」

「オツケー!」

続いて結生とゆかりも召喚器を構える。

「エウリユディケ! パラダイムシフト、ウィンド!!」

「イシス!」

二人も己のペルソナを召喚。エウリユディケの作り出した緑色の

玉が光を放ち、その髪色も緑色に染まる。

「神空破!!」

二人が声を合わせ、放たれるのは巨大な竜巻。巻き込まれたものを無残に引き裂き、跡形もなく砕く暴風の鉄槌。

「な、嘘だろ!? お、俺の攻撃なんて足元にも及ばねえ……」

同じ風使いである陽介はその攻撃のレベルに驚愕。この基地に潜入してから新たに覚えたスキル——ガルダインを遥かに超える威力と規模の技に呆然としか出来なかった。そして竜巻が消え、雷の雨と暴風の鉄槌でほとんどのシャドウが死滅。しかし幸運にもその二つの属性に耐性を持っていたシャドウもいたのだろう。それらはまだその場に存在していた。

「くそ……真君、後お願い……」

「ひ、久しぶりにでかいのやったから……疲れた……」

「ほ、ほんとにブランクってきついわね……」

だがS・E・E・S。トリオは疲労感で動けなくなっており、真はクマと陽介に三人の護衛を任せると残る敵を倒すために千枝、雪子、完二を引き連れてシャドウの前に立つ。

「イザナギ!」

「トモエ!」

「コノハナサクヤ!」

「タケミカズチ!」

カードを砕き、ペルソナを呼び出す。

「イザナギ、スラツシュ!!」

「タケミカズチ、デッドエンド!」

イザナギとタケミカズチの光纏う斬撃が円盤に逆さ吊りにされたようなシャドウ——憤怒のキュプロクスを斬り、

「トモエ、ブフ!」

トモエの薙刀から放たれた氷の刃が魚のようなシャドウ——心理のペーシエを凍らせ、

「コノハナサクヤ、マハラギオン!」

コノハナサクヤの放つ無数の炎弾が蛇のようなシャドウ——愛欲

の蛇の群れを焼き尽くす。元々ただの生き残り、倒すことにそれほど
の人間はかからず、一気にシャドウを殲滅したおかげか増援の気配も
ない。

「……先輩達は休んでいてください。しばらくシャドウも出てこない
だろうし、俺達がこの探索を試みます……大丈夫だよな、久慈川
？」

「う、うん……大丈夫。敵シャドウの反応なし、しばらくは大丈夫そ
うだよ」

「分かった。陽介、クマ。先輩達の護衛を頼む」

「ああ、任せとけ！」

「任せとけクマ！」

真は任せに敵シャドウがいないか確認を取り、陽介とクマに命達の
護衛を任せると千枝、雪子、完二を連れて辺りの探索に乗り出した。

「……にしても、分かりづらいツスね。薄暗いし、どこもかしこも似た
ような風景で迷いそうツス」

「ま、どこもかしこも似たような風景っていうのは今に始まった事
じゃないけどね」

「でも、今までは明るいところが多かったし、確かに薄暗くて周りが見
え辛いついていうのはなんだか不安だね……」

完二が辺りをきよろきよろしながら今更言うと、この中では真と同
じくダンジョン経験の長い千枝が今までも似たようなものだったと
感想を述べ、しかし雪子は今までは中も明るかった。けどここは薄暗
くて辺りが見え辛いのが不安になる。と呟いた。

「ん？」

と、真がかたかたと震えている宝箱を見つけ、それに手を触れる。
と宝箱はぴよこんつと跳ねて星のような光をばらまきながら何か
カードを真の手に向けて飛ばした。

「……研究員用、認証キー？」

「あ、認証キー！」

「って事は、これであの扉を開けられるってわけツスね！」

「早く戻ろう！」

真が手に入れたカードを見た千枝達が歓声を上げ、真も頷くとりせにカードキーを入手した旨を通信で伝え、命達の待つ閉ざされた扉の前に戻る。帰ってきた真達を見つけた陽介とクマが嬉しそうに飛び跳ねて手を振り、りせもそれを真似る。命と結生は互いに寄り添い合って仮眠を取っており、ゆかりも命にもたれかかって目を閉じている。シャドウは殲滅した事に加えて護衛がいるとはいえいつ襲われてもおかしくない場所で平然と眠っている胆力に真は驚くと同時に苦笑を漏らした。

「お、待ってたぜ！ 真！」

「センセイ！ 早く先に進もうクマ！」

「ああ」

陽介とクマからも歓声が飛び、真は頷くと扉の横にあるカードリーダーにさつき手に入れた認証キーカードを差し込み、スライドさせる。

「ココカラ先ハ機密区画デス。一般ノ戦闘員、及び研究員ノ立ち入りを禁止シマス。身分証ヲ提示シテクダサイ」

『あれー!?!』

が、聞こえてきたのはさつきと同じ機械音声。自称特別捜査隊の声が重なった。

「当然でしょ」

するとそこに呆れた様子のゆかりの声が聞こえてくる。彼女だけは眠っておらず、ただ身体を休めるために目を閉じていただけのようだ。

「真君、その認証キー。もしかして一般戦闘員用、とか研究員用、とか書かれてない？」

「え？ は、はい。これは研究員用認証キーって……あ」

ゆかりの指摘を受けた真がカードキーを読み直すと、そこで彼も過ちに気づく。ゆかりも「そう」と頷いた。

「この扉は一般戦闘員及び研究員の立ち入りを禁止してる。つまり研究員用認証キーじゃ入れない場所なのよ」

「はあ!? なんスかそりゃあ!? じゃあつまりこのカードキーはただ

の役立たずつつうわけなんスか岳羽大先輩!？」

「そうは言っていないわよ」

ゆかりの指摘に完二が吼えると彼女は首を横に振る。と、陽介が何かを閃いたような、思い出したような表情を見せる。

「そ、そうか! 四階の封鎖されてた扉は確か、研究区画がどうのこうのって言ってたはずだ!」

「つまりこのカードキーは四階のあの封鎖された扉を開けるためのもの、っていうわけなんですわね!」

陽介に続いて雪子もそう言い、ゆかりは「多分ね」と返す。

「とりあえず一度四階まで戻ってみましょう。ほら二人とも起きなさい」

ゆかりは真達に提案しつつ命と結生を揺り起こす。そして片手で寝ぼけ眼を擦りながらももう片方の手はそれぞれ剣と薙刀から離していない二人を連れ、一行は一度四階まで戻っていく。

「研究員用認証キー、認証」

四階の閉ざされた扉のカードリーダーに先ほど手に入れた認証キーをスライドさせ読み込むと、ピーという電子音の後そんな機械音声が流れ、扉が重い音を立てて開く。真達は互いに顔を見合わせると頷き合い、研究区画に足を踏み入れた。

「気をつけて! 向こう側に強い気配がするよ!」

シャドウを倒しながらややや進んでいった先にある扉の前に立った時、りせから警告が飛ぶ。真達はそれを聞いて気を引き締め直し、扉を開ける。

「研究区画二不審者ノ進入ヲ確認。コレヨリ排除スル!」

その扉の先にいたのは赤色の装甲をした、肩に正義の文字が刻まれている巨大なロボット。それがそんな音声を再生すると同時にアラームが鳴り響き、彼らの入ってきたドアも重い音を立てて閉じていった。

「な、しまった！」

「なあーに！ こいつをぶっ壊せばまた開くでしょー！」

「そツスね！ スクラップにしてやらあ!!」

陽介が逃げ場がなくなったことに声を上げると千枝と完二が拳をぽきぽきと鳴らす。が、こちらが身構えるよりも先に、巨大ロボットの――圧倒の巨兵は手にした巨大な剣を掲げ力を溜めた。

「エウリユディケ！ パラダイムシフト、サンダー！ マハラクンダ!!」

「キントキドウジ、マハタルカジヤクマ！」

黄色の髪に変化したエウリユディケが圧倒の巨兵の防御力を下げ、キントキドウジが仲間を鼓舞する。

「トール！ ギガンファイスト!!」

「トモエ、黒点撃！」

「タケミカズチ、ミリオンシュート！」

そこに間髪入れず、命が西洋の雷神を召喚。その手に持つ槌――ミヨルニルの鉄槌が巨大ロボットの直撃する。さらにトモエの蹴りとタケミカズチの放った闘気の矢が突き刺さり、続けてゆかりと陽介がガルダイン、雪子がアギダイン、クマがブフダインで攻撃を仕掛ける。

だが圧倒の巨兵はその猛攻に怯むことなく、掲げていた剣を勢いよく地面へと振り下ろす。地面へと叩き付けられた剣が周囲に衝撃波を発し、その余りの威力に真達は吹き飛ばされてしまう。

「み、みんな……コノハナサクヤ、メデイラマ！」

「メデイラマクマー！」

雪子とクマが回復の魔法を唱えて真達を回復させる。が、その隙に再び圧倒の巨兵は再び剣を掲げて力を込める。

「またか……全員防御！」

真が指示を飛ばし、全員が防御の姿勢を取ると圧倒の巨兵は再び剣を勢いよく地面に振り下ろし、辺りに衝撃波を飛ばす。が、その後もまたも剣を掲げ、力を込めた。

「どうやら動き自体は単純なようだね。チャージで力を込めて、衝撃

波を放って吹き飛ばす」

「なるほど……それが分かれば話は早い」

命が分析。真はにやりと笑うと右手にペルソナカードを具現した。
「デカラビア、テトラカーン！」

呼び出したのは一つ目ヒトデ。それが特殊な障壁を張ると同時に三度圧倒の巨兵が剣を振り下ろし、衝撃波を放つ。だがデカラビアの張った障壁はその衝撃波を跳ね返し、圧倒の巨兵は自らの攻撃で傷つく結果に終わる。さらに巨大ロボットは命の予想した通りのプログラムに従って動いているらしく力を溜めている間は無防備、その隙について攻撃を仕掛け、少しずつ、だが着実に圧倒の巨兵から体力を奪っていく。と、その時突然圧倒の巨兵がまるでフリーズしたかのように動きを止める。

「な、なんだ？」

「へへ、どっかぶっ壊れたか?! 先輩、一気に畳みかけようぜ!!」

真は相手が動かなくなったことに困惑するが、完二がチャンスだから畳みかけようと提案。真は相手の動きを不審に思うがどちらにしろ攻撃しなければ道は開けないため、その提案に乗って攻撃を指示。己もペルソナを召喚する。

「デカラビア、アギダイーン！」

巨大な炎の爆発を合図に完二達も一斉攻撃を仕掛ける。が、その時りせが「ひっ！」と悲鳴を上げた。

「み、皆ー！ そのロボットの内部から高エネルギー反応！ この反応はダイスシャドウと同じ……そいつ、自爆するつもりよ!!」

「何!?!」

「急いで防御して!! エネルギー膨張、危険域！ もう時間が無い!!」

りせが悲鳴に近い声を上げて防御を指示、真達も防御の構えを取ろうとするがそれよりも一瞬早く圧倒の巨兵の内部エネルギーが真達が視認できるほどに膨張、その巨体が大爆発を起こし、爆風が真達を襲う。

「う……みんな、大丈夫!? 返事して!!」

部屋の隅にいたため辛うじて爆発の影響が低かったりせは爆風によって発生した煙に覆われた部屋の中で必死で呼びかける。部屋の中はポロポロで、特に自分達が入ってきた扉は圧倒の巨兵の自爆の威力に耐えきれず壊れて大きな穴が開いていた。

「く……」

「あつてて……」

「先輩！ 命さん！」

煙の中間こえてきた真と命の声にりせが安堵の声を出す。が、二人とも息絶え絶えでどうにか力尽きていない程度、命は額から血を流しながら、召喚器をこめかみに当てる。

「ソロネ……リカームドラ」

「ラケシス、リカーム……」

命が座天使を、真が運命の三女神の次女を呼び出して戦いが出来なくなるほどに傷つき消耗した仲間を回復する。

「つ……なかなか辛いわね」

「ゆかり。きついとこ申し訳ないけど……」

「分かってる」

ゆかりはゆつくりと座り直し、しかし立ち上がる気力はないのか座った状態で召喚器を肩間に押し当てる。

「イシス！ メディアラハン!!」

イシスが光を放ち、仲間達を癒す。そして煙も消えた時、全員疲労で座り込んでいるものの傷一つなくなっているメンバーの姿が登場した。

「……これは？」

と、煙で足元も見えていなかった真は煙が消えた今足元にカードが落ちていることに気づく。

「幹部用、認証キー……これがあれば六階の扉を開くことが出来るんじゃないか!？」

「マ、マジツスか先輩!!」

真がカードキーを持つて全員に声をかけ、それを聞いた完二が立ち上がるが直後疲労からか立ちくらみを起こしたように膝を折って倒れ込んでしまう。

「だが、今日はもう皆ボロボロのようだ……今日は一度、ここで帰還しよう」

「……クソがつ、情けねえ……」

真はこれ以上の探索続行は不可能だと冷静に判断し、帰還を選択。完二も身体が動かない自分を呪うように呟いていた。

「完二君、落ち着いて」

「そうだよ。今日はゆっくり休んで、また明日バッチリ体調整えてチャレンジしよう！」

そんな完二を雪子と千枝がフオロー。完二も僅かに沈黙した後「あざっす、先輩」とお礼の言葉を返した。

「じゃ、帰るよ」

命がそう言つてカエレールを取り出し、頭上に掲げる。

「転移！ 出入り口！！」

そして行きたい場所を宣言するとカエレールが光を放ち、彼らの姿はその場から消え去った。

それから秘密基地の出入り口に光の粒子が結集、一際強い輝きを放ったかと思うと真達がその光の中から姿を現し、彼らは一度入り口広場まで戻るとテレビの世界を後にし、ジュネスから出ると解散。それぞれ帰路についたのであった。

第四十六話 少年探偵の真実

「正体不明ノ侵入者、機密区画ニ進入……警戒レベル、レッド。施設内ノ警戒ヲ更ニ強化。侵入者ヲ排除セヨ！」

探索二日目。幹部用認証キーを使つて更に先の階層に進んだ時、そんな機械音声が鳴り響くアラームと共に聞こえてくる。さらにその命令に従うように新たにシャドウが姿を現してきた。人間から見れば両手用の剣であろう大剣を片手で振るう怪力とそれに見合う巨体を持つ均衡の巨人、黒い戦車そのまま姿の邪悪の砲座、そして近未来的な秘密基地には似合わない中世の騎士のようなシャドウ——地獄の騎士だ。

「君達……邪魔だよ！」

結生が声を張り上げ、召喚器をこめかみに押し当てる。

「ハイヤーッ!!」

だがそれよりも早く地獄の騎士が槍を振るい、その槍の軌跡が毒々しい緑色の衝撃波を放つて結生達を襲う。

「ぐっ!!」

咄嗟に全員身をひるがえして衝撃波を避けるが、その時真と命は地獄の騎士に守られている均衡の巨人と邪悪の砲座が何か力を溜めている様子に気づく。

「っ！ 後ろの二体から高エネルギー反応!!」

「チャージとコンセントレイトか!？」

「全員防御しろ!!」

直後リセが二人の予感が的中していることを分析し、命は二体のシャドウが使っているであろうスキルを経験から分析、真も即座に指示を飛ばす。が、その指示を飛ばすのとほぼ同時に均衡の巨人が剣を振り下ろして無数の不可視の斬撃を、邪悪の砲座がその砲身から無数の竜巻を放つ。

「デカラビア、テトラカーン！」

「リリース、マカラカーン！」

防御が間に合わないかと判断した二人は咄嗟にペルソナを召喚。二

体のペルソナが作り出した壁がその不可視の斬撃と無数の竜巻を跳ね返す。

「今よー！」

「お、おうー！ タケミカズチ！ マハジオンガ!!」

「ジライヤ、パワースラッシュ!!」

ゆかりが叫び、一番に反応した完二と陽介がタケミカズチとジライヤを召喚。斬撃と竜巻が飛び交う障壁の後ろから落雷を落とし、光を宿した手裏剣を邪悪の騎士目掛けて投げつける。と、電撃属性が弱点だったのか均衡の巨人と邪悪の砲座がダウン、手裏剣がクリティカルヒットしたのか地獄の騎士も崩れ落ちる。

「今ならボコれる！ やつとくよー！」

敵全員がダウンし、結生が薙刀をひゅんと回転させて持ち替えながら声を張り上げ、千枝と雪子も「おー！」と右手を挙げてノリノリの様子を見せる。

「薙刀の錆にしてやる！」

「観念しろー！」

「消えてしまいなさい！」

「お、俺達も行くぞー！」

そして女性三人が我先にと突っ込み、陽介達もやや遅れて後に続く。そして総攻撃が止むと三体のシャドウは全て無に還る。

「く、大分手強くなってきたな……」

「そうだね。一体が前衛で防御し、その隙に後衛が力を溜めて大きな攻撃。連携が取れていた……僕達が反射系スキルを持つてなかったらもつと苦戦してたかも」

テトラカーン、マカラカーンという相手の一部攻撃を反射するスキルを使った真と命はやや疲労めいたため息を漏らす。ただでさえ消耗の激しいスキルを無理矢理範囲を広げて使用、その負担は通常の数倍は軽くあるはずだ。

「長期戦になったら不利だ。急ぐぞー！」

真はここで手間取ると消耗が激しくなると判断して急いで進む事を提案。他のメンバーもその案を否定する理由はなく、一行は一気に

その階層を駆け抜けていった。

「侵入者ヲ阻止セヨ！ 侵入者ヲ阻止セヨ！」

「言葉が変わった？」

先に進む階段を下りた時、また機械音声が流れてくるがその内容が排除せよから阻止せよに変わっており、その違和感に真が気づく。

「直斗君の気配、近い！」

続けてりせの歓声にも近い声が聞こえてきた。

「もうちよつとだね。気合入れるよ！」

「ウツス！」

命の言葉に完二が大きく頷いて返し、彼らはシャドウを完全に消滅させるまでとはいかずとも弱点を的確に狙ってダウンさせ、その隙を突いて逃げるという手段でなるべく消耗を少なくしながら基地内を駆け回る。

「あつた！ 階段だ！」

陽介が指差す先にあるのは確かに階段。もうすぐ直斗のいる場所に着けるはず、と彼らは頷きあつた。

「侵入者発見」

「侵入者発見」

「侵入者発見」

「……え？」

が、その時そんな機械音声が聞こえてきたと思うと階段の前に突然赤色の装甲をした、肩に正義の文字が刻まれている巨大なロボットが三体现れる。

「あいつは、あの時に戦ったロボット!？」

「あれに比べれば小さいけど……量産型ってところかな？」

真が驚きの声をあげ、命は冷静に分析する。

「クソがつ！ あいつがやべえかもしれないねえって時に！ どきやがれ!!」

完二が怒号を上げ、武器である盾を構えると真達も次々と武器を構

える。

「……真君、皆……ここは僕達に任せて先に行くんだ」

が、彼らより数歩前に命、結生、ゆかりのS・E・E・S・メンバーが立つ。

「先輩!？」

「異君の言う通り、ここで時間を割いていたら白鐘君が危険かもしれない。ここは僕達が引き受けるから皆は白鐘君の救出に急ぐんだ」

「で、でもいくら大先輩でもこいつら相手じゃ……」

「そうですよ！ 前は一体相手に全員がかりでも苦戦してたのに……」

真の言葉に対し命がそう言い、しかし完二と雪子が反論する。

「別に倒すつてわけでもないんだし。たかが量産型でしょ？ あれよリスペックは落ちてるだろうし、隙突いて階段飛びこみやへーきへーき」

「そうそう。心配してる暇があるんならその心配を白鐘君に向けてあげなさいよ」

だが結生とゆかりも譲らず、真は少し黙る。

「分かりました」

「相棒!？」

真は命達の提案を了承。それに陽介が声を上げるが、真は首を横に振る。

「こう言った後の先輩達は頑固だからな。押し問答をしても言い負かされるのがオチだ……なら、押し問答する時間を使って俺達は先を急ぐ。でも先輩……無茶はしないでくださいね？」

「分かってるよ。ゆかりもいるんだしね」

真の念押しに対して命は苦笑。それから真達自称特別捜査隊メンバーが階段向けて走り出し、だがロボット——圧倒の巨兵もそれを阻止しようとする。

「そうはいくかー！」

「エウリュディケ、パラダイムシフト！ ウィンド！ マハスクカジャ!!」

「イシス！ マハガルダイソ！！」

だが命が自称特別捜査隊メンバーに向けて剣を振り上げていた圧倒の巨兵目掛けて飛び蹴りをくらわせ、結生がエウリュディケを召喚、全員の機動力をアップ。さらにゆかりが無数の巨大な竜巻を起こして巨兵達の動きを封じ、真達が階段を降りていくのを援護する。

シャドウ達は階層が変わると追う事が出来ず、しかし残った三人だけは通さないというのか階段の前に立ちはだかった。

「蹴った手ごたえからして、耐久力はこの前の奴と比べたらあまり高くないみたいだね」

「でもまあまあ動きは早かったし……耐久力を犠牲にスピードを上げたタイプかな？」

命と結生は冷静に圧倒の巨兵を分析。しかしそうする暇を与えないというように圧倒の巨兵の一体が近づいて剣を振り下ろし、二人は俊敏にそれをかわすものの、その剣は床を打ち砕いた。

「力もあるね……まともにくらったらやばそう」

「こりゃ、隙を突いて逃げるって線は無理そうだ……そんな考えで戦ってたら押し切られる」

結生は苦虫を噛み潰したような表情で呟き、命も作戦の変更を考えながら召喚器を抜き、くるくると手で弄びながら精神を集中する。

「作戦変更！ こいつらぶっ潰す気でいくよ！！」

「了解！！」

命の指示に二人も頷き、三人は召喚器を構える。

「二ペルソナ！！！！」

そして同時に引き金が引かれて彼らの心の海からペルソナが呼び出され、戦いの火ぶたが切って落とされた。

「この先！ 直斗君がいるよ！」

一方階段を下りた真達はりせからの言葉を聞き、目の前の巨大な扉を見る。

「うおおおおお！！ 開きやがれええええええつ！！」

完二が先頭を走つてもはやぶん殴る勢いで扉に触れ、扉がガコンツと音を立てて開いていくと一行は一気に飛び込んでいった。

「直斗ッ!!」

完二が血相を変えて飛び込み、救助対象者の名を呼ぶ。

「待ちくたびれましたよ」

が、それに返すのはパニックや動揺などない。むしろ冷静沈着な声だった。

「……この子の相手をするのに、ほとほと参っていたところですよ」

そしてまるで我儘を言う子供のお守りをしていたかのようにそう続け、真達の方に歩こうとする。

「やだあー！ やだ、やだ、行かないで!!」

するとそんな癩癩を起こした子供のような泣き声が聞こえてくる。その声の主はもう一人の直斗。目から涙を流しており、ぶかぶかの白衣を着ているがそれがさらに大人に見せようとしているかのような子供っぽさを強調している。

「君と話しても無意味だ……僕はもう帰らないと……」

「なあんで？ なんで僕だけ置いてくの!? どおしていつも僕だけひとりぼっちなのっ!?!」

寂しい、寂しいと泣き喚く直斗のシャドウ。それが直斗の一面であると知っている雪子が「直斗君……」と声を漏らした。

「僕と同じ顔……まるで僕だとも言いたげだね」

直斗はふう、と気だるげな息を吐いてシャドウの核心を突く。

「でも君と僕とじゃ——」

「何を誤魔化してんだい？ 僕は、お前だよ」

冷静な直斗の言葉を遮り、直斗のシャドウが言う。それは先ほどまでの癩癩を起こしている我儘な子供のような声ではなく、相手を容赦なく抉る鋭い声になっていた。

「子供の仕草は『ふり』じゃない……お前の真実だ。だってみんな、お前に言うだろう？……『子供のくせに、子供のくせに』ってさ」

直斗のシャドウは話す。いくら事件を解決しても、必死に考えても、子供というだけで誰も本心では認めない。周りが認めているのは

直斗の「頭」だけである。と。

「『名探偵』扱いは、それが欲しい間だけ……用が済んだら『子供は帰れ』だ。世の中の二枚舌に、お前はなす術もない……独りぼっちの、ただの子供だ」

「……」

直斗のシャドウの容赦ない指摘に、反論が出来ないのか直斗はつい黙り込んでしまう。

「僕、大人になりたい……」

と、直斗のシャドウは再び子供のような泣き声をあげながらそう言った。

「今すぐ、大人の男になりたい……僕の事を、ちゃんと認めて欲しい……僕は……居ていい意味が欲しい……」

「やめろ……自分の存在する意味なんて、自分で考えられる……」

「フツ……無理だって言ってるだろう？」

直斗のシャドウの子供のような泣き声に直斗は反論。だがその瞬間直斗のシャドウは再び態度を豹変させた。

「今現に子供である事実をどうする？」

「や、やめろー!」

「本心じゃ憧れてるだろう？ 強くてカッコイイ、小説の探偵みたいな、大人の男にさ。それは裏を返せば、心の底で自分を子供と思ってるって事だ」

直斗のシャドウの指摘を直斗は声を荒げて止めようとするが、直斗のシャドウは怯まずに淡々と決るように指摘をしながら一歩、また一歩と直斗に近づく。

「っ……」

「認めるよ……お前は所詮子供さ……自分じゃどうしようもない」

怯えたように表情を歪める直斗に、直斗のシャドウは直斗に顔を近づけ、どうしようもない現実を指摘する。

「さあ……そろそろ診察は終わりだ……人体改造手術に移ろうか」

直斗のシャドウは顔を歪めて笑い、直斗の手を取ってこの部屋の中央にある巨大な手術台を指し示す。だがそれには両手両足を拘束す

る手枷と足枷、さらには巨大な丸鋸やドリルなど、手術台というよりむしろ拷問台や処刑台と言った方が近い雰囲気を見せている。

「いいだろ……白鐘『直斗』くん?」

「やめろ!!」

不気味な笑顔を見せる直斗のシャドウの手を払いのけ、直斗は叫ぶ。

「白鐘『ナオト』……男らしくてカッコイイ名前だよな? けど、事実は変えられない。性別の壁はなお、越えられない」

直斗のシャドウの言葉に違和感を感じた真が「え?」と声を漏らす。

「そもそもオトコじゃないのに、強い大人の男になって、なれる訳ないだろ?」

「え、ちよ……あいつ今、スゲーこと口走ったぞ!」

「お……男じゃねえだど!」

直斗のシャドウが放った真実に陽介が叫び、完二も絶句する。

「……だ、駄々をこねてるつもりはない……それじゃ、何も解決しない……」

「ふ、ふ……あはは! あっはははは!!」

直斗の言葉を聞いた直斗のシャドウが突如、大爆笑する。

「その言葉はお前が言われたんじゃないか。『駄々をこねていても、何も解決しないよ、ナオトくん』ってさ!」

爆笑で歪んだ笑みをそのままに嫌味たらしく直斗に向けて言う直斗のシャドウ。

「お前泣いてたよな。自分の口から言うなんて、何を守ろうとしてるんだ?」

「なっ……に、を?」

自分を傷つけた言葉を自分の口から言った事を直斗のシャドウは嘲笑する。

「いいんだ。もう無理しなくていい。そのための『人体改造手術』だ。駄々をこねたまま、一步も動けずにいる……僕にはその気持ちが良い分かる……」

直斗のシャドウは憐れむような、それでいて見下すような視線を見

せながら直斗に話す。

「僕は、お前なんだよ……」

「違うっ!!」

直斗のシャドウの言葉を否定する直斗。

「だめっ!!!」

「いや、いいー!」

このままでは危ない、と千枝がそれを遮ろうとする。が、それを完二が阻止した。

「ちゃんと吐きだしやいいんだ」

完二はそう言って直斗のシャドウを睨みつける。

「俺らはアイツを倒して、ケツ持ってやりやいい!……じゃねえとアイツ……直斗のやつ、苦しいまんまだろ」

「フフ……あははははっ!! 言うよね、偉そうに!!」

完二の言葉に直斗のシャドウが笑う。が、次の瞬間その視線に殺意が入り混じった。

「いいよ、来なよ……僕はキミみたいに、粗暴で情に流されるタイプが一番嫌いだ!!」

直斗のシャドウがそう叫んだ瞬間、直斗のシャドウを黒い影が取り囲み始めた。

「よし、とにかく話は後だ!」

「来るよっ!!」

りせが叫ぶと共に、直斗のシャドウを取り囲んだ影は球体状になって空中に浮遊。そしてその影が弾け飛んだ時、そこには身体の左半身が機械で構成された直斗の異形の姿があった。両手には一昔前のSF映画で出てくるような光線銃を持っており、背に飛行機の主翼を生やしている。正に改造人間^{サイボーグ}とでも言うような風貌だ。

「我は影……真なる我……なに? 君らも自分にうんざりしてる人? いいよ……なら、特別手術を始めよっか」

「いいぜ、来やがれ! 俺がガツチリケツ持ちしてやつからよ!!」

直斗のシャドウの言葉に完二も叫び、何がなんだか分からない様子で固まっている直斗を見る。

「直斗！ オメエはどっかに隠れてろ！」
「！」

完二の声を聞いて我に返ったように直斗ははっとなる踵を返す。
「おっと、患者がいなくなったら困っちゃうね」

だが直斗のシャドウがそう言った瞬間、直斗のシャドウ曰く手術台から手枷と足枷が台とワイヤーで繋がった状態で射出。直斗の両手両足を捕らえると彼女を手術台へと固定する。

「う、動けない……」

「テメエ、直斗を離しやがれ!!」

直斗が捕まったのを見た完二が怒号を上げてタケミカズチを召喚。ジオダインで攻撃を仕掛けるが、直斗のシャドウはそれを空を飛んで回避する。

「ジライヤ、パワースラッシュ！」

「ニーズホッグ、ブフダイン！」

続けてジライヤが手裏剣を投げ、ニーズホッグが巨大な氷塊を放つが、直斗のシャドウはそれらも俊敏に動いて回避した。

「だったらクマ君！ 援護して!!」

「了解クマ！ キントキドウジ、マハブフーラクマ!!」

千枝が叫ぶとクマも了解し、キントキドウジが質より量とばかりに放った氷の弾丸で弾幕を張り、直斗のシャドウの動きを止める。

「よっし、いくよトモエ!!」

動きを封じたのを見た千枝がトモエを召喚する。

「遅い!!」

が、その前に直斗のシャドウは右手の光線銃を千枝に向け、緑色のこれまた一昔前のSF漫画で超音波をイメージしたような円状の光線を放つ。

「つつ!!」

それを受けた瞬間、トモエが消え去った。

「千枝先輩！ ペルソナが封じられてるよ！」

りせが千枝の様子を分析し、叫ぶ。

「千枝！ 回復して！ コノハナサクヤ、アギダイン!!」

雪子が千枝に回復を薦め、その間の時間稼ぎにとアギダインを放つ。それは攻撃を放った直後、動けなくなっている直斗のシャドウに直撃するが、直後直斗のシャドウは何事もなかったかのように爆炎の中から姿を現す。

「あいつ、火炎に耐性持つてる!?!」

「そんな!?!」

りせが分析すると雪子が悲鳴を上げる。主な攻撃手段が炎属性の魔法に特化している雪子に取っては相性の悪い相手のようだ。

「さあ、今度はこつちから攻めさせてもらおうよ!」

直斗のシャドウが叫び、左手の銃を完二に向けると赤・緑・青の三色の光が螺旋状になって完二を貫く。

「くっ!?! へ、何だこんなもん! 痛くもかゆくも……!?!」

避けきれず光線を受けてしまった完二だが、ダメージはないのか不敵に笑う。だがその直後、彼の様子が変化した。

「くらえっ!!」

直後直斗のシャドウは完二目掛けて突進。様子がおかしい完二は防御しようとするが、その防御はあっさりと破られ突進攻撃をほとんどもろにくらってしまう。

「お、おいどうしたんだよ完二!?!」

「ち、力が入らねえ……それに、身体がすげえ重いツス……」

陽介がカバーに入りながら完二に異常を問い、それに対し完二はそう呟く。だがそれだけではなく、打たれ強さが売りの完二にしてはダメージが大きかった。

「っ!?! 完二の攻撃力・防御力・機動力全部低下!?! もしかしてさっきの光線のせい!?!」

りせは完二の普段の平均的な戦闘力と現在の戦闘力を数値化し、その差を比較して仰天。さっきの光線が完二の戦闘力を奪ったのかと考える。

「なら相殺するんだ!」

「オツケー任せろ! ジライヤ、マハスクカジャ!!」

「キントキドウジ、マハラクカジャクマ!!」

「うっしや！ タケミカズチ、マハタルカジャ!!」

真からの指示を受け、陽介、クマ、完二がそれぞれ仲間の戦闘力向上、つまりステータスアップスキルを使用。全ての力を下げられていた完二はこれで相殺し、真達は反撃開始と意気込む。

「甘いね」

だが直斗のシャドウはそれを嘲笑、左手の光線銃をぶんつと無造作に払うようにしながら光線を放ち、まるで光のシャワーのような光線を受けた真達から、さつき支援を受けたことで上昇した力が消え去っていく。

「な、なにこれ!？」

「このスキル、もしかしてデカジャか!? ステータス上昇打ち消されちまった!?!」

千枝が声を上げると陽介は自分も使うスキルであるためかスキルの正体を看破。驚きに叫ぶ。

「ペルソナ封じ、相手ステータスダウン、さらにはこっちのステータス上昇打ち消し……何アイツ、今までのシャドウとは全く違う!?!」

こっちを状態異常に陥れてくるシャドウも存在はしていた。だが直斗のシャドウはそれを見事に使いこなしてこっちを封殺。戦いを常に優位に進めている。

「流石は白鐘から生まれたシャドウ、頭脳戦はお手の物という事か……」

真も今までとは一味も二味も違う強敵に歯噛みしていた。

「ほらほらどうしたの?」

直斗のシャドウは嘲笑しているような声色で右手の光線銃から電撃を放つ。その一撃はジオダインと同等の威力、まともにくらつてはまずいと全員回避に専念するのが精一杯、特に電撃が弱点の陽介とクマは必死に回避している。

「先輩方！ 俺の後ろに集まってください！ 俺が身体張って守ります!! 俺の後ろから攻撃を!」

電撃に耐性を持つタケミカズチを有する完二が壁役になると言い、現状それが一番と判断したか全員が完二の後ろに一塊になり、完二は

タケミカズチを壁にして電撃を受け止める。

「フッフ、単細胞相手は楽でいいよ」

が、直斗のシャドウは身体を張って皆を守る完二を嘲笑。機械である左目からピンク色の超音波をイメージしたような円状の光線を放つ。

『うああああああっ!!』

「先輩！ 皆！」

完二を盾にするために一塊になっていた真達はその光線をかかわすことが出来ず浴びてしまう。りせの悲鳴が響いた。

「く……なんだ、身体がいう事を聞かない……」

「な、なにこれ？……肘や膝がなんだか、痛い？……」

「こ、腰が、腰が痛いクマー……」

光線を浴びた真はダメージは全くないのに身体に力が入らず、刀を杖にしてなんとか倒れる事を防ぐ。その後ろで雪子も身体の節々を押さえながら眩き、クマは腰を押さえながらゴロゴロと転がる。

「ふ、ふっふ。もう終わり？」

「よ、よせ……」

「ん？」

全滅近い状態の自称特別捜査隊メンバーを見た直斗のシャドウは彼らを嘲笑。しかしその時、そんな弱々しい声が聞こえてきた。

「これ以上、人を傷つけるな……」

直斗だ。彼女は弱々しい声ながらも己のシャドウに抗議をしながら、彼らを助けられないかと脱出のためながく。が、直斗のシャドウは彼女の横に立つと光線銃を彼女に向ける。

「ほら、ダメだよ。患者はじつとしてなきや。ちゃんと身体に穴空けられないだろ？」

「く……」

光線銃を向けられた直斗は何も言えなくなる。

「や、やべえ……」

「直斗君……」

身体がガクガクと震えながらも、陽介と千枝が立ち上がる。このま

までは直斗が危険だ、助けないと。と二人は思い、ペルソナカードを具現する。

「ジライヤー！」

「トモエー！」

短刀と蹴りがペルソナカードを砕き、ペルソナを具現させる。

「……………」

が、そこで二人の行動が止まった。

「えつと……………何すんだっけ？」

「え、あ、あれ？……………思い出せない……………」

ペルソナを呼び出すまでは覚えていた。だが、自分は何故ペルソナを呼び出したのか。その目的が思い出せず、ペルソナも消え去った。

「ふふ……………さあ、そろそろ始めようか……………お前に新しい人生をプレゼントしてやるよ」

直斗のシャドウがそう言うと同時に、手術台に着けられている丸ノコヤドリルが回転を始める。

「ふざけんじゃねえっ!!」

「っ!?!?」

が、その時そんな怒号が聞こえ、直斗のシャドウは咄嗟にその場を飛び退く。

「タケミカズチ、ミリオンシュート!!」

放たれる闘気の矢、それは直斗のシャドウにこそ当たらなかったが丸ノコとドリルを粉碎、直斗を間一髪助ける。

「なに、馬鹿な!? お前達の内面は老化してるはず……………身体能力の大幅な低下、軽度の記憶障害も誘発しているはずなのに……………」

「へっ、俺はバカだからよお。物覚えなんざ元々良くねえ。だけど、今回一つだけぜってえに忘れねえもんがある」

直斗のシャドウはさっきの陽介や千枝のように記憶障害になつていない完二を見て焦り、それに対し完二はやはり老化による身体能力低下が効いているのか身体を震わせながらも力強く宣言する。

「直斗はぜってえに守る!!」

「ちつ……………だけど、君の弱点も分析済み！ これで終わりだ!!」

完二の言葉に直斗のシャドウは舌打ちを叩いて右手の光線銃を構える。と、その光線銃から竜巻が放たれる。ガルダイン。タケミカズチの弱点である風属性スキルだ。しかし完二は引かない、直斗は必ず守る。己の決めた信念を貫き通すため、敢えて弱点の攻撃だろうとこの身で受け止めると。

「よく言った。巽完二」

が、そんな男女の声が聞こえてきたと思ったその時、直斗の前に立つ完二のさらに前に、二人の男女が立ちはだかった。

「受け止める、アトロポス！」

「エウリュディケ、パラダイムシフト、ウィンド！」

そして二人が叫んだ時、風が二体のペルソナによって防がれた。

「……だ、大先輩！」

「遅くなったね」

「皆も、もう大丈夫だよ！」

完二が叫び、命と結生がそう返すと完二もはつとしたように振り返る。

「イシス、お願い！ アムリタ!!」

ゆかりが己のペルソナ——イシスに願い、イシスも浄化の光を降り注がせる。

「いきりたつうううう!!」

「すばらしいいいいい!!」

身体の調子が戻ったクマと陽介が歓声を上げる。

「みなぎってきたぜ!!」

さらに真も拳をぐつと握り締めて叫んだ。

「チツ、厄介な蠅が増えたね……」

直斗のシャドウはそう呟いて再び右手の光線銃から電撃を発射。

「うひゃあつ!!」

「あばばばばば?!」

「あ、ごめん……弱点だったからつい……」

命と結生は咄嗟に飛び退くがその後ろにいた完二は不意打ちの形で電撃をくらってしまい、兄妹は声を合わせて完二に謝る。

「来い、デカラビアア！ メギドラ!!」

後ろにいた真がデカラビアを呼び出し、万能の力を持つ光線を直斗のシャドウ目掛けて撃ち込む。

「くそー！ くらえ、ランダマイザ!!」

万能の光線をかわしながら直斗のシャドウは左手の光線銃を真に向けた。

「同じ手はくらわねえぜ！ くらえ、ガルダイン!!」

「くうっ!?!」

しかしその銃から光線が放たれる前に陽介が竜巻を起こして直斗のシャドウを煽り、空中で強風をもろにくらった直斗のシャドウは飛行機の翼のフラップを操って姿勢制御を行う。

「お返しよ！ トモエ、黒点撃!!」

「づあっ!?!」

だが若干崩れたバランスを立て直すのに生じた隙を見逃さず懐に入ったトモエが強烈な蹴りを叩き込み、直斗のシャドウを蹴り飛ばす。

「く、この、だったらもう一度……」

直斗のシャドウは生身の右半身の表情を歪ませながら眩き、左半身の機械の目にピンク色の光を溜める。そしてピンク色の円状の光線を再び放った。

「おわ、やべっ!」

「先輩！ あの光を浴びないでください!」

くらったら厄介な攻撃に陽介が悲鳴を上げ、真は攻撃の詳細を知らないだろう命達に呼びかけ、自称特別捜査隊メンバー全員がわあわあ声を上げて回避に走る。

「なるほど……あの目から光線を撃ってるわけね……」

と、ゆかりはそう呟いて背中の中矢筒から矢を一本抜いて弓に番え、矢を引き絞る。

「ふっ!」

狙いを定め、精神を集中して矢を放つ。それはシュンツと風切音を立てて飛び、

「ぐあっ!?!」

吸い込まれるように直斗のシャドウの左目に突き刺さる。と、直斗のシャドウの左目からバチバチと火花が飛び、光線が消えていった。

「く、このっ……よくもやってくれたな!」

直斗のシャドウは右半身の目を怒りに歪ませて右手の光線銃をゆかりに向ける。

「くらえ、ジオダイン!!」

ゆかりの弱点を分析したのか、あるいはただの偶然か。だが彼女を狙うのはイシスの弱点である電撃の攻撃。それを見たゆかりがしまったとばかりに目を見開く。

「岳羽先輩!」

が、その前に真が立ちほだけ、電撃を防ぐ。デカラビアの守りによりその攻撃は完全に防がれる。

「来い、ホルス」

ガシヤアンとガラスの割れるような音が鳴り響き、命はエジプト神話の天空神を呼び出すとその背中に乗り込み、さらに結生も続くとホルスは急上昇。

「おらああああああっ!!!」

主の心に従い、ホルスは直斗のシャドウ目掛けて猛突進。

「誰の女に手エ出しとんじやコラアアアアアアアッ!!!」

「ふぐわっ?!?!」

そして突進に合わせて命の拳と結生の薙刀が直斗のシャドウの顔面に突き刺さった。

「見た?」

「うん」

「そ、空飛んでる大型シャドウを自分からぶん殴りに行ったぞ……」

千枝、雪子、陽介がひくひくと頬を引きつかせる。

「皆! 先輩を援護だ!!」

しかしこの兄妹の奇行に慣れているのか真とゆかりは呆然とする事なく真は援護を指示、ゆかりは既に弓を構えてホルスを駆る命と空中戦を繰り広げている直斗のシャドウを睨んでいた。それを見て陽

介達も頷いてペルソナを召喚、

「ジライヤ、マハスクカジャ！」

「トモエ、ブフ！」

「コノハナサクヤ、アギダイーン！」

「キントキドウジ、マハタルカジャクマ！」

「イシス、ガルダイーン！」

ジライヤが機動力アップの支援を行い、トモエは薙刀を振るって氷の衝撃波を飛ばし、コノハナサクヤが炎の弾丸を放ち、イシスが猛竜巻を起す。さらにクマが攻撃力のアップによる支援も忘れない。

「ホルス！ 急上昇!!」

「く、ぐああああああつ!!」

陽介達の攻撃に気づいた命はホルスに上昇を命じ、同時に結生も薙刀を振るって直斗のシャドウを牽制、ホルスの移動を助ける。そしてホルスという壁が消えた次の瞬間陽介達の放った攻撃が直斗のシャドウに直撃した。

「今だ！ ホルス、ブフダイーン！」

圧倒的な隙を見逃さずに命が指示、ホルスが冷気を放つと直斗のシャドウの背にある主翼の片方が突如氷に包まれる。氷の重量の他、フラップが動かなくなったことによりバランスが崩れる。

「エウリユディケ、ギガンフィスト!!」

「ぐああああああつ!!!」

続けて結生がエウリユディケを召喚して指示、エウリユディケが腕を振り下ろすと不可視の衝撃が上から下へと振り下ろされ、バランスを崩した直斗のシャドウを地面へと叩き落とす。

「いくぞ、完二ー！」

「ウッスー！」

真が合図を出し、完二もぼしつと右の拳で左の手の平を叩いて気合を入れ直す。真は懐から六本の赤い剣が描かれているカードを取り出すとそれを上空に掲げる。

「スキルカード、発動!!!」

叫び、イザナギが光に包まれる。

「ジオダイン!!!」

イザナギが右手を掲げ、巨大な雷が上空に作られ、落雷が起きる。だがその落雷が狙うのは直斗のシャドウではない。

「タケミカズチ、剣を掲げろ!!」

完二の言葉に従い、タケミカズチは雷の形をした剣を掲げる。その剣にジオダインの落雷が直撃、剣が帯電する。タケミカズチはその剣を両手で握り締め、くるくると錐揉みしながら落下する直斗のシャドウを見る。

「いけ、タケミカズチ!!」

帯電する剣を握りしめ、タケミカズチは直斗のシャドウ目掛けて突進。その剣が雷とは別に光を帯びる。

「マッドアサルト!!!」

「ぐ、あ……」

雷と光を帯びた剣の一撃がトドメとなったか、直斗のシャドウは小さな苦しげな声を漏らすとげその全身がまるで焦げていくかのよう
に黒く染まりあがる。そう思うと影が霧散し、消滅していった。

「……全部、知られてしまいましたね」

「直斗君、女の子だったんだね……」

直斗のシャドウが倒れると同時に直斗を拘束していた枷も解かれ、直斗はふうとため息をついてそう呟く。それに千枝も意外そうに呟いた。それから直斗は自身のシャドウを見ると、その前に立つ。

「幼い頃に両親を事故で亡くしたぼくは、祖父に引き取られました」
直斗は祖父に引き取られた後、友達を作るのが下手で祖父の書齋で推理小説ばかり読んで過ごしていたと語る。

「将来の夢は、カッコイイ……ハードボイルドな、大人の探偵……」
直斗のシャドウもまるで子供が夢を語るような無邪気な声質でそう語る。

その言葉に直斗も頷き、自身の仕事に誇りを持つ両親や祖父を見て、自身も将来はその仕事を継ぐのだと疑っていなかった。それを普

通は窮屈と思うかもしれないが、自分に拒む気持ちはなく、むしろ憧れていたと語る。

「その辺も受け継いだものかもしれませんが」

直斗はそう言い、微笑を浮かべる。

「祖父はきつと……いつも独りでいる僕の夢を、叶えてくれようとしたんだと思います」

その微笑を消して直斗は続ける。祖父に持ち込まれた相談事を内緒で手伝う内に、気付いた頃には少年探偵という肩書きが付いていた事。初めは嬉しかった。でも上手く行く事ばかりではなかった、と直斗はやや暗い表情で呟く。

「子供のくせに」って……言ってたね」

「事件解決に協力しても、喜ばれるばかりじゃありませんでした……僕が “子供” だって事自体が気に障っていた人も少なくなかったし……」

千枝の言葉に直斗は首肯し、返答。自身が子供である事は時間が解決するかも知れない。しかし “女” である事実は変えようがない。

「女でいるの……嫌い？」

雪子が尋ねる、女でいるのが嫌だから男の子の格好をしているのかと。それを直斗は首肯し、自嘲気味な表情を見せる。

「僕の望む、 “カッコイイ探偵” というのと、合わないんですよ……」

自嘲気味の表情で直斗は語る。警察は男社会であり、軽視される理由が増えると誰にも必要とされなくなると、直斗は自重と共に不安気な言葉を吐露した。

「んなのは思い込みだ」

が、完二がそれを思い込みだと否定する。

「ね……ほんととは、分かっているんだよね？」

「本当に求めていること、それは “大人になる事” でも、 “男になる事” でもない」

ゆかりと結生が尋ねる。

「ええ……」

それに直斗は頷いた後、再び己のシャドウに向き直る。

「ごめん……僕は知らないフリをして、君というコドモを閉じ込めてきた。君はいつだって、僕の中にいた」

シャドウ、己の中の子供の部分に謝罪した後、その存在を認める。

「僕は君で……君は僕だ」

直斗の言葉を聞いたもう一人の直斗は子供らしい、無邪気な笑顔で直斗に向ける。その笑みに直斗も微笑みを返した。

「僕が望むべきは……いや、望んでいるのは、大人の男になる事じゃない。ありのままの君を、受け入れる事だ……」

優しく笑いながらそう宣言する直斗。その言葉を受けたもう一人の直斗が頷くとその姿が光に包まれる。直後、直斗の目の前にシャドウとは少し違う異形——ペルソナが姿を現した。とても小さい身体、その右手には長いビームサーベルを握る昆虫のような顔をした人間。それを直斗は黙って見上げていた。

「……スクナヒコナ」

彼女がそう呼ぶと同時、スクナヒコナはタロットカードとなって直斗の前にゆつくりと降下。そのカードにはローマ数字の「X」、運命を意味する数字が書かれていた。そのカードは直斗の目の前まで落ちると光の粒子となって彼女を包み込んだ。

「それにしても、ズルいですよ……こんな事、ずっと隠していたなんて……」

直斗は隠されていた秘密を暴いた探偵のような笑顔を真達に向ける。

「これじゃ、警察の手に負えないわけだ……」

「直斗！」

しかしそこまで言うのが限界のように彼女は崩れ落ち、完二が声を上げて駆け寄ると彼女を抱き上げる。

「でも……これで、分かりました……事件はまだ……終わってない……」

「ああ。お前がそれを証明したんだ」

「とにかく、詳しい話は後だ。早く外に出よう」

直斗は疲労困憊ながらも事件は終わってない事を確信し、真が直斗

のおかげだと賞賛。しかし直斗への負担を考えた陽介が詳しい話はテレビから出てからにしようと言い、直斗は完二が背負って一行はその場を後にした。

「おい……おい！」

テレビを出てから完二が呼びかける。その直斗は肩で息をしており、かなり辛そうな様子だ。

「まったく……身体張っちゃって……」

「でも、直斗君が証明してくれた……犯人はまだ捕まってないって」

「うん。結生の推理もあくまでペルソナ使いでないとテレビに入れない。そう仮定しての状況証拠だけだ」

「でも、これは完璧です……」
「テレビに人を放り込んでいる犯人は捕まっていない」。久保美津雄は模倣犯だった」

千枝と雪子が話すのに続けて命が言い、真がこれで分かった二つの真実を話すと陽介達もこくりと頷く。

「まったく……キバリすぎなんだよ、テメエは」

「信じてました。来てくれるんじゃないかって……」

完二の呆れた言葉に対し、直斗はそう告白。でもまさかこんな大事とは思ってなかった。と続けた。

「まったく、テメエはバカだ。どこも天才じゃねえ」

直斗の言葉に驚いた完二はふんつと顔を背けて悪態をつく。

「……世話……かけさせやがって」

が、そんな事をぼそりと呟き、それを聞きつけたりせがニヤニヤと笑った。

「なーんだ、完二。やっぱり心配しまくりじゃない」

「うるせえ、チャカすな」

りせのニヤニヤ笑いでの言葉に完二が苦虫を噛み潰したような表情で返す。

「私、送ってく。一人じゃ帰れそうにないし」

「ん、なら異君も一緒にお願いできるかな？ 女の子二人、しかも一人はかなり消耗してるのは危ないし」

「ん、あ、はい。分かりました」

雪子が送っていくと申し出ると命は完二にも同行を指示、完二もやはり心配なのか二つ返事で引き受けた。

「へいき……です、ひとりで……」

しかし直斗はそれを断りながら立ち上がろうとする。が、足元がふらついており、立ち上がる事すら出来ずにまた膝をついた。

「明らかに無理でしょ!? オトナはなんでも一人で出来るって思わないのー!」

「おう。おら、掴まれ」

空元気にもなつてない直斗の様子にりせが呆れたように注意、完二が直斗に手を差し伸べ、直斗も渋々その手を取ると完二は直斗を立たせようとぐいっと引っ張る。

「う、わっ!?!」

「うおっと!?!」

が、その力は直斗からしたら予想以上に強かったのか、直斗は悲鳴を上げるとそのままの勢いで完二の胸板に顔面ダイブする。

「うわ、ちよつと完二! 加減しなさい!」

「う、うっせーな! 悪かったよ! おい直斗、大丈夫か?」

「あ、は、はい……」

りせが疲れている直斗に負担かけてどうするんだと完二を非難、完二も直斗に大丈夫かと声をかけ、直斗もこくりと頷いて顔を上げる。

「あの、ごめんなさい……!?!」

本人は無自覚だろうが、疲労から絶え絶えになっている息にやや上がった頬、そして潤んだ瞳。それに完二はびっくりしたようにのけ反った。

「異君?」

「う、うるせー! なんでもねえよ!」

「わっ!?!」

小首を傾げる直斗に完二はそう叫んで返すとなんと直斗を肩に担ぎ上げる。

「お、下ろして! 下ろしてください!」

「るせつ！ ろくに歩けねえんだから大人しくしやがれ!!」

ばたばたと暴れる直斗と平然と担ぎながら怒鳴って歩いていく完二。

「わ、完二君待って!」

雪子が大慌てでその後を追い、真達も後は雪子と完二に任せて解散した。

「あ、おかえり〜! おつじやましてま〜す!」

夜、家に帰ってきた真を出迎えたのはそんな抜けた声だった。

「足立さん。いらっしやい」

「悪いな、今日は早上がりで……」

「ほらほらあ、座んなよ〜」

抜けた声の主——足立に真はいらっしやいと声をかけ、遼太郎が連絡もなしに足立を連れてきた事を詫びていると足立は座るよう促す。顔が真っ赤で不自然にゆらゆら揺れており、テーブルには缶ビールが散乱していることから恐らく酔ってるのだろう事が予想できる。

「白鐘君、見つかったんだよね〜。って、知ってるっけ。白鐘君」

足立は笑いながらそう話す。曰く、自分達に黙って居なくなっていたがさつき見つかつたという報告を受けた。という事だ。

「どうやら、お前がこの前話してた時には行方不明になっていたそうだ……心配かけたな」

「おっさわがせだよ、まったくさ〜」

「安心しました」

遼太郎と足立が話し、真は適当に話を合わせる。

「でも白鐘君、なんで居なくなつたんですかね〜?」

足立は酔っ払いのテンションで話題を続け、ちよつと気難しそうだし捜査から外れたから拗ねて家出でもしたのかなと話す。だが居なくなつたと聞いた時はびっくりしたが無事に見つかつてよかった。もし第四の誘拐殺人なんて事になつたら色々破算になるところだった。

「足立」

「でも犯人の少年、諸岡さん殺し以外には証拠出ないっすね。これ、立件までいけんのかなあ？」

足立はそう話すと遼太郎の「カン」の通り、真犯人が別に居るかも知れないと呟く。

「何遍言わせんだ！ペラペラ喋んな！」

流石に喋り過ぎと判断した遼太郎が足立を一喝。遼太郎の言葉に足立は硬直すると「すみません」と素直に謝った。

「とにかく！」

遼太郎は話の流れを変えるように大声を出すと真を見る。

「お前は事件なんて気にせず、学生らしく勉強でもしてろ。でないと……」

遼太郎はそこまで言うのと、菜々子をちらりと見て彼女を気にする風を見せる。

「……ハア……俺あもう寝る」

そしてそう言い残すと寝室に去っていった。

「ごめくん、空気悪くしちゃったね！」

足立は酔っ払ったまま謝り、しかし遼太郎の心配も分かるなど続ける。

「事件のことは、僕ら警察に任せて欲しいな。何かあった時、マズイの分かるでしょ？」

君達が巻き込まれでもしたら、こっちはとても心配する事になってしまう。と足立は話す。

「こわいこと、まだおきる？」

と、菜々子が心配そうな顔で足立に問いかけ、足立は慌てた様子で「大丈夫だから！」と返した。

「安心しろ。何か起きてても、叔父さん達がすぐになんとかしてくれるさ」

「そ、そうそう！犯人は捕まったんだし、もう怖い事起きないよ。ね、大丈夫だよ？」

真が菜々子を安心させるように言うのと足立もおどけたように菜々

子を安心させる。

「と、とにかく、お父さん、心配性っていうかさ。おにーさんに、任せ
てよ！ こうみえても、署内イチの頭脳派なんだから！ って、難し
い言葉使っちゃったな……わかったかな？」

足立は調子に乗ったような、おどけたようにそう言った後、立ち上
がる。

「さ、さて、堂島さん引けちゃったし……僕もおイトマかな……じゃあ
ね！」

「おやすみなさい、足立さん」

足立はそう言って帰っていき、真も彼に挨拶を返すと立ち上がる。

「ずのうは、ってなに？」

「頭がいいって事だ」

「ふうん……じゃあ、大丈夫だよね？」

と、菜々子がさっきの足立の言葉で分からない事があったのか真に
尋ね、真が菜々子の質問に答えると、菜々子はそう言ったきり黙って
しまう。やや晴れない空気のまま、事件の夜は過ぎていった。

第四十七話 深まる絆。永劫と魔術師

9月18日、日曜日。真は商店街を訪れていた。

「あ、来た。遅いよ。ね、どっか行こ。記憶、一緒に探してくるんでしょ？」

彼が訪ねようとしていた相手——マリイが言う。以前マリイとした約束、彼女の記憶を取り戻す手伝い。真は今日それをしに来ただ。

「そうだな。行くか」

「うん、行こ！ 早く思い出したいよ」

マリイは待ちきれない様子を見せており、真はひとまず落ち着ける場所でマリイの話を聞くことにした。

それからやってくるのは鮫川の河原。

「でき、記憶の事だけど、どうすればいいの？」

「そうだな……手がかりは何かないのか？」

「ううん、ないよ」

マリイの問いかけに対し真は何か手がかりがないかと尋ねる。それにマリイはないよ、と答えた後「前も言ったけど」と言って唯一の手がかりだという古い竹櫛を取り出す。

「これだけは最初から持ってたの……何かの役に立つかな？」

「……どこかで売っていけば、何か分かるかもしれないな」

真は竹櫛を見ながらそう言うが、マリイは以前調べたのか「ジュネスで見たのと違う、こんなのなかった」と答える。

「何かもつと古い感じ……そういうのあるお店、知ってる？」

「……古い竹櫛……服飾雑貨」

マリイの問いかけに真は目を閉じ、考え始める。

「異屋」

「たつみや？」

「完二の家だ。古い染物屋をしているから、もしかしたら何か分かるかもしれない」

「オッサンち？ ふーん……ちよつと意外。とりあえず行こ。商店街

の方……だっけ？」

真から説明を受け、マリーは竹櫛をバッグにしまうと歩き出した。

「こんにちは」

異屋に辿り着き、真が挨拶をしながら店に入る。

「うーす、らっしやい……って、先輩じゃねえスカ」

「きゃー先輩、偶然！ あ、マリーちゃんも一緒なんだ」

店番らしい完二と、何か駄弁っていたりせが挨拶を返す。

「え……てか何、まさか二人してデートとか……」

「いや、ちよつと用事があるんだ」

男女二人きりという光景から気づいたりせが慌てたように言うが真はそれを否定、マリーもうんと頷いて返すとりせは安心したように「ビックリしちゃった」と返した後、完二を小突く。

「ほら完二、先輩が用事だつて！」

「用事……って、俺にツスカ？」

「ああ、マリー」

完二は首を傾げながら真に問いかけ、真もマリーに促すとマリーはバッグから竹櫛を取り出した。

「これ……何か分かる？ なんでもいいの、知ってる事教えて」

マリーの言葉に完二は「いきなりなんだよ」とぼやきながらどれどれと呟いて竹櫛を見る。

「なんだこりや……えてえ古いな。櫛だつてー事は分かるけどよ……」

完二が櫛だというのに対しりせは「これ櫛なの？」と驚いた声を出す。使いづらそうな形、と評価した。

「で、どうすんスカ？ コレの出所が分かりやいーんスカね？」

「ああ。分かるか？」

「や、オレにや全然分かんねーっすけど……」

完二が確認を取り、真が出来るかと尋ねるが完二は首を横に振って全く分からんと返した後、店の奥の方を向いて「お袋！ ちつと来て

くれよー」と母親に呼びかける。

「あ、そっか。完二のお母さんなら何か分かるかも……」

「はいはい、聞こえてますよ。そんなに大声で呼ばなくても……」

完二の母親はのんびりとした口調で出てくると真を見て「お久しぶりね」と挨拶。マリーを見て「その子も完二のお友達？」と挨拶した。「この櫛の事。なんか分かるかつつてよ。お袋、何か分かんねーか？」

完二の促しに彼の母親はどれどれとマリーの竹櫛を観察する。

「これは……相当古い物ねえ」

完二の母親は一見してそう言い、こういうのはちよつと置いてないわねと言う。

「何か分かる？　なんでもいいの」

マリーはどこか必死さを見せながら尋ね、完二の母親は「こんな形は初めて見たから、日用品ではなさそうだ」と鑑定。お店ではなく美術館や博物館で訊いた方がいいかもしれない。と話す。それにマリーだけでなく真、完二やりせも頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

「博物館？……えっと、それって珍しいって事？」

りせが尋ねると、完二の母親は珍しいかどうかは分からないけど、その辺で売っているようなものではないと言う。それを聞いた完二が「売ってねえならどこにあんだよ。ババア、ちったあ他にも分かんねえのかよ」と言うが、それを聞いた彼の母が「ババアはやめなさいって言ってるでしょー！」と一喝すると彼は焦ったように沈黙。

「ごめんなさいね、お役に立てなくて。でも、本当に見たことがないのよ」

「……私、なんでそんなの持つてるんだらう……こういうの、誰かに貰ったりする？」

完二の母親の申し訳なさそうな謝罪を受け、マリーは何故自分がそんなものを持っているのか不思議に思った後、もう一度彼女に問う。それに完二の母親はどうかしら、と呟いた。

「櫛ってね、贈り物には向いてないのよ」

「……どういう意味ですか？」

その言葉を受けた真が尋ね、完二の母親は「櫛という文字には『苦』や『死』が入っており縁起が悪く、別れを招く力がある、なんて言われている」と説明。しかし同時に「私みたいな古い人の慣習だから、若い人は気にしないかもしれないけど」と朗らかに笑った。りせもそうなんだ、と呟いていると客が完二の母親を呼び、完二の母親も「ちよつとお待ちくださいな」と返した後完二に真達を頼み、真達にもちよつとお話をしてくるけどゆっくりしていてねと言いついて歩いていった。

「『苦』や『死』……か。んなモン、人に送ったりしねーよな」

「『別れを招く』って言うってたよ？ 櫛って、結構縁起が悪いのね……」

完二とりせの言葉を聞き、マリーはうつむく。

「別れ？……」

そしてぽつりとつぶやき、んぐ、と声を漏らす。しかし眉をしかめているその様子は具合が悪そうに見え、りせと完二が心配そうに「具合でも悪い？」「なんなら座って休め」とマリーに促した。

「何か思い出したか？」

「わかんない、でも……何か……気になったの」

真が尋ねるが、マリーはそう呟くのみ。そしてやがて首を横に振ると「消えちゃった。思い出せない」と呟き、頭をかく。

「何か……フワツて。もう少しで分かりそうだったのに……」

マリーは悔しそうに呟く。

「……思い出せねーって、お前。その櫛の事、覚えてねえのかよ？」

「え？ どういう事？ それ、マリーちゃんの櫛なんじゃ……」

完二がマリーの言葉の違和感に気づき、りせも問いかけるが、マリーは気にしないでと答える。それに二人が不思議そうに首を傾げるが、マリーは構うことなく竹櫛をもう一度見る。

「これ、普通の櫛じゃないんだ。はくぶつかん？ びじゅつかん？

また調べたら、何か思い出すかも。キミも協力してね」

「もちろんだ」

マリーは真から協力を取り付けると、疲れたから今日は帰る。また

今度続きをしようと言って店を出て行く。

「……何スか、アイツ」

「マリーちゃんって、ちよつと不思議だよね……」

「すまない。これはマリーの問題なんだ……俺から口外するわけには
いかない」

完二とりせが不思議そうに呟き、真が申し訳なさそうに言う。

「いいツスよ。気にしないでください」

「うん。ほら先輩、マリーちゃん行っちゃうよ！」

「ああ、すまない」

りせが促し、真はもう一度二人にそう言ってから店を出て行く。そしてマリーをベルベットルームに送ってから、彼も家に帰っていった。

その翌日、6月19日の月曜日。休日である今日、真はジュネスのフードコートへとやってきていた。彼は昨日と同じくマリーの記憶を取り戻す手伝いをしようとしたのだがマリーは何か考えているような様子を見せながら「気が乗らないからパス」と却下。

肝心のマリーがそう言っているのに無理に連れ出すわけにもいかないため、真はベルベットルームを抜け出してそこらを散歩していた時に偶然出会った陽介にここに誘われたのだ。

「さーて、今日は何食う？」

陽介は元気に笑いながら言い、「またウルトラヤングセットに挑戦すっか？」と冗談交じりに続ける。

「ちよつと花村!!」

と、そんな聞き覚えのある高圧的な声が聞こえ、陽介は真に向けて「悪い」と呟いて頭を下げると席を立ち、声の方を向く。

「今日は何すか？」

「なんでカズミが休めてウチらはダメなわけ？」

「……は？」

派手な女子生徒の言葉に陽介は呆けた声を出した。

「前にアンタに言ったじゃん！ ウチら、土日はバイト入れないって
！」

「だから断ったら、やっぱクビとか言われて！ 超意味分かんないんだけど！」

派手な女子生徒と高圧的な女子生徒は以前陽介に「土日はバイトに入れないからどうにかしろ」と迫っていた二人で、どうやらそれを通してとしたらクビになりそうになり、再び陽介に文句を言いに来たらしい。

「や、俺は一応、チーフに伝えましたけど……それよか先輩ら……最近、無断欠勤とかしてないすか？」

その二人の訴えに対し陽介は一応チーフに伝えた。と返した後、二人が最近無断欠勤している事を指摘する。

「あ、あれはたまたま忘れてて……てゆーか、それ今、関係ないでしょ！ どうしてくんよ、デートあんだけど！」

「カズミだけ休めるとかさあ、ヒイキすぎだっつもの！」

派手な女子生徒は陽介の無断欠勤の指摘に一瞬詰まった後、開き直ったように高圧的な女子生徒と共に陽介を責める。

「つーかアンタさあ、早紀のこともヒイキしてたよね？」

「……え？」

「ゴマかしてもムダだからね！ みんな知ってたんだから！ アンタが早紀のこと好きで特別扱いしてたことくらい！」

「……」

派手な女子生徒の言葉に陽介は一瞬黙る。

「小西先輩のことは、関係ないんじゃないですか？」

「あるに決まってるじゃない!!」

陽介の言葉に派手な女子生徒は喚き、「どうせ他の従業員にもヒイキさせるよう言っていたんだ」「店長の息子だからって何やってもいいのよ」と、高圧的な女子生徒はさらに「早紀が死んだら今度はカズミ。言っておくがあの子は彼氏がいるぞ」と勝手な勘違いで陽介を責める。「早紀だってイヤがっていた、そういうのが分からないなんてマジウザすぎ」と言った後、さらには早紀のことまで悪く言い始めた。

「……二人とも、一度落ち着いてください。小西先輩が可哀想です」

「真……」

流石に見かねた真が二人を落ち着かせようとする。

「な、何よ！ アンタ別に早紀のこと知らないでしょ？ すつこんでてよー！」

「そつちがすつこんでろ!!」

高圧的な女子生徒の言葉に対し鋭く怒号が響く。その主は陽介だった。

「アンタらに小西先輩の何が分かんたよ!! あの人はな、アンタらみたい中途半端な気持ちで仕事してなかったよ！ 適当に見えても、真面目だったよ！ 口は悪いけど優しくかったよ!! 俺のこと嫌い？ 知ってんだよそんなの！ もういねーよ！ 置いてかれたんだよ！……放つとけよ」

「陽介……」

陽介はどこか泣きそうな様子で怒鳴る。その様子に、ある意味早紀の本音にも近い言葉を共に聞いていた真も声を漏らす。

「騒がしいけど、どうかした？」

「先輩！」

そこにやってくるのは命。今回は非番なのかジュネスエプロンは身に着けておらず、その後ろにはゆかりと結生も連れられていた。二人とも状況が分かってないのか不思議そうな表情を見せているが、命は陽介が怒鳴ってる相手を見て察した顔を見せる。

「あ、命さあん」

と、女子生徒二人はこの前のように猫なで声で命に話しかける。

「あのですねえ、私達土日は大事な用事があるからどうしても入れないって言ったのに、クビだとか言われるんですよお」

「しかもカズミだけ休めるとかあ、これってヒイキですよねえ？ 花

村君、店長の息子だからってヒイキはよくないですよねえ？」

「……は？」

二人の言葉に命がぴくり、と目じりを動かした。

「当たり前じゃん。君達最近無断欠勤多いし、仕事もテキトーだしさ。いい加減こつちや先輩もフォローしきれなくなってきたよ。つっつか、僕の方がバイト歴では後輩だけど正直、君達二人よりは仕事が出

来るって思ってるよ？」

「……え？」

命の言葉に二人の目が点になる。

「その点だけで言えばカズミさんはね。仕事のペースは遅いけど、やる事はちゃんと終わらせてるし、遅刻はあっても連絡はちゃんとしてるみたいだし無断欠勤なんて当然ないし。毎日ちゃんとやってくれれば評価はつくし、それなら上の方も多少シフトを融通しようって気にもなるよ」

「なっ……」

「それを、どのツラ下げて花村君がヒイキだって？ 冗談もほどほどにしてほしいな」

命は二人を睨みつけながらそう言っており、真はあっちゃーと声を漏らす。

「話がよく分かんないけどさ。つまり仕事ちゃんとやってない癖に休みだけは取ろうとして、しかもそれが通らなかつたから花村君に八つ当たりしてるってこと？ で、あわよくば休みを取ろうって？」

「うわ、サイツター」

結生とゆかりもそう言ってジト目を向ける。

「なっ、んですって!？」

「大体あんたら何よ!？ 命さんにそんなくつついて、何様よ!？」

「……お兄ちゃん、またやった?」

「記憶がありません」

女子生徒二人の言葉に結生は呆れたようにまた女の子を引っかけたのかと尋ねる。が、命は肩をすくめながらそう返しており、結生も分かっていたのか「だよね」と返すのみ。

「とにかく。無断欠勤だのサボりだのやつといて休みだけしっかり取ろうだなんて甘いのよ！ バイトとはいえ自分の仕事には責任持ちなさい!!」

そしてゆかりが腰に手を当てて一喝。なお結生と命は横で拍手して「いよっ、よく言った！ 流石ゆかりっち！」なんて囃し立てている。

「な、んですってえっ!!」

と、逆上したのか高圧的な女子生徒がゆかり目掛けて手を振り上げ、彼女をはたこうとする。

「おっと」

が、その腕を命が取る。

「言つとくけどや」

そして彼の左目、そして髪で隠れている右目からも鋭い視線が飛ぶ。力を込めて腕を握りしめているのか、高圧的な女子生徒は「いだだだだ!」と悲鳴を上げていた。

「俺の最愛の彼女に手え出したら……潰すぞ?」

「か、の、じよ?……」

その言葉を聞いた女子生徒二人が固まる。それぞれ「ウソでしょ、そんな」でも、だって」とか何かブツブツと呟いている。

「そ、そういうば、命さんは喧嘩別れでここに来たって噂が——」

「は? 何よそれ? あたしと命君が喧嘩?」

「まあ、そんなのしよつちゆうつていうか、ぶつちやけお兄ちゃんが悪いのをゆかりつちが毎度説教してるだけだし。そんな事でいちいち家出なんてしてらんないよね?」

「結生が言うな。ゆかりに迷惑かけてるのはお前だろ」

女子生徒の言葉にゆかりが呆けた声を出すと結生が言い、命が結生に注意するとゆかりは「どっちもよ!」とツツコミを入れる。

「話が逸れたけど。二人とも、結局どうするの?」

「……フンツ」

「いっ」

命の言葉に女子生徒二人は命を睨みつけ、歩き去っていく。

「……ごめんね、花村君。勝手に話に割り込んで、なんか余計に話がややこしくなっちゃって」

「あ、俺もすまない。元はと言えば俺が話をこじらせたようなもんだし……」

命が陽介に謝ると我に返った真も謝罪。しかし陽介は「いいつすよ」と哀しげに笑いながら返した。

「それより真、ありがとな。さつきあの人に言ってくれたの、嬉しかったよ」

陽介はそう言い、しかしやはり早紀という痛いところを突かれたのは悲しかったのかずずつと鼻を鳴らす。

「ああ……イヤだけど、イヤだけど親父んとこ行ってくる……あの二人、このまま辞めちゃうだろうし……報告して、謝んねーとな……」
陽介はそう呟いて大きいため息をつく。

「あー、えつと。その事で花村君を探してただけだよ……ジュネスってまだバイト募集してたよね？」

「え？ あ、はい……え？ まさか……」

命の質問に陽介はまだバイト募集は閉め切っていないかっただと記憶を辿り、肯定。その後気づいたようにゆかりと結生を見ると、二人は微笑しながら記入済みの履歴書を封筒から取り出した。

「この二人を、ジュネスのバイトに紹介してほしいんだけど。仕事ぶりには、まだ半年程度の新米が言っても説得力はないだろうけど。僕が保証するよ」

「……はい！ アポなしはやばいかもですけど、すぐ親父に相談してきますー！」

陽介は信頼できる相手が保証するという新たな戦力に一瞬顔をほころばせ、しかしやはり一緒にバイトしてきた仲間が自分のせいで辞めてしまうという事もあって複雑な表情を見せながらその場を去っていった。

第四十八話 深まる絆。戦車と女教皇

9月20日。学校が終わったの放課後、ここは鮫島の土手だ。
「たあっ！」

茶髪の少女——千枝はトントンツとステップを踏みつつ回転、勢いを込めた左足での蹴りを目の前にいた相手に放つ。

「つとー！」

が、その相手——真は手に持っている丈夫な木の枝——そこら辺で拾った木刀代わりだ——で右へと受け流す。

「甘いな」

「わっ!?!」

さらに真は右腕と右脇で挟み込むように千枝の足を取り、彼女の動きを封じると左手一本で木の枝を振り上げ、動けなくなった千枝目掛けて振り下ろそうとする。

「甘いのはっ——」

が、千枝はもう片方の足で地面を蹴ると、なんと真に押しえられている足を支えにして宙に浮かぶ。

「——そっちっ!!」

「ぐふっ!?!」

予想だにしない反撃に面食らってしまった真は胸に千枝の蹴りをくらってしまい、膝をつくと苦しそうに咳き込む。その頭のすぐ横にビシユツと風を切るような音が聞こえた。

「あたしの勝ち！ だよな？」

千枝は真の頭のすぐ横に回し蹴りを寸止めしつつ、にかつと笑いながら真に尋ねる。

「……ああ。参った」

その言葉に対し、真は木の枝を投げ捨てて敗北を認めるのであった。真は放課後、千枝の特訓に付き合う中で組手を行っていたわけだ。と言っても真は木の枝とはいえ刀を使う事を想定しての実戦形式であったのだが。

「んじゃ約束通り。特訓の後のご飯は椎宮君の奢りってことで！ よ

ろしく！」

「ああ、約束は守る」

千枝はにかつという笑顔のままそう言い、真もこくりと頷いて返した。その後特訓というか組手を終えた二人は稲羽商店街の中華料理屋である愛家にやってきていた。しかし千枝はその店頭には貼られているメニューの書かれたポスターを見ながら「うーん」と唸っている。「肉丼か定食……まさか究極の選択……」

そう呟く千枝。流石に真の奢りとはいえ二品も頼むのは自重しているようだ。

「や、やめろよお！……」

そんな時、突然そんな声が聞こえてくる。

「デカイ声出すんじゃないよ」

「そうそう。出すならさあ、他のもん出して欲しいんだよね。何？」

「こっただけ？　ちよつと飛んでみ？」

さらにドスの効いた声など、明らかに穏やかではない声が聞こえてくる。

「こ、これって、まさか……」

千枝の声に焦りが混じる。以前千枝と共に今回のように特訓の帰りに食事をしようとしていた時、不意に通りがかりの警察から聞かされた——というよりは高校生に対して注意を呼び掛けていた方が近いが——最近多発している恐喝の現場かもしれない。

「椎宮君、行ってみよー！」

「ああ」

千枝の言葉に真も頷き、二人は声の聞こえてきた路地裏へと走り込んだ。

「た、剛史!?!……」

その先にいたのはやはりというか三人の男子に取り囲まれている一人の男子。彼は以前、やはり千枝と特訓をしていた時に偶然出会った、彼女の中学時代のクラスメイトこと河野剛史だ。千枝は絡まれているのが自分の知り合いだという事に驚いている。

「あーあー、人来ちった」

「いーじゃん、あいつらからも小遣いもらえばさー」

「こいつ、千円しか持ってねーしなー」

恐喝をしていた男子の一人がつまんなそうに呟くと、リーダー格らしい少年が真達からも金を奪えばいいと笑い、それにもう一人の少年が千円札をヒラヒラさせながら剛史を馬鹿にする。

「ち、千枝ー!」

と、その隙をついた剛史は悲鳴のような泣き声のような声を上げて千枝の背後に回り込んだ。

「あ、コラー!」

「なあに逃げてんだよ」

「しかも、女のケツに隠れちゃってさあ」

男子三人が剛史を威圧するが、千枝は構えたまま剛史にちらりと目をやる。

「どっかケガは?」

「へ、へーき……」

千枝の確認に剛史は平気だと返した後、「有り金を全部取られた、千枝はこういうの得意だよな。こういうの許せないよな」と場を千枝に任せようとする。

「まー、ムカつくけどね!! ねえ、アンタらさ、ヒキヨーなんだよ! 寄ってたかって……恥を知らないさい!!」

千枝はびしっと指差しながら男子三人を一喝。

「じゃ、じゃあ任せたからー!」

その隙に剛史はその場を逃げ出した。

「え、ちよ、早ッ!……つたくー!」

千枝は逃げ足早い剛史に呆れた後、トントントとステップを踏み始める。

「ほら、どしたの? やんなら、かかってくるよー!」

「ハア?なんだ……この女」

「女がチョーシ乗りやがってよ……」

「女でも、ヤってやんぞ、アアン!」

千枝の挑発に男子が怒りだす。どうにもよくない状況だ。

「……」

と、真が千枝の前に腕を差し出して彼女を静止させる。

「やるなら……俺が相手だ」

「えっ……椎宮君が？」

真の言葉に千枝は不満そうな顔を見せる。

「面倒くせー……」

「おい、さっきのヤツ、サツとか連れてきそうじゃね？」

「あーあ、つまんね。行こうぜ」

男子三人はそう言つて去っていく。

「あ、ちよ、ちよつと！ 待てコラ!!……何よ……椎宮君が出てきたとたん、逃げてさ」

千枝は自分ではなく真を見て相手が逃げ出したのを見て複雑な様子を見せた後、真を睨む。

「さっき……何で余計なことしたの？ あたし、そんなに頼りない!？」

一人で平気だったよ！ あたしさっき、椎宮君に勝ったじゃん!」

自分がそんなに頼りないのか、と怒る千枝。しかし叫んだ後クールダウンしたのか彼女はしゅんとなる。

「……ごめん。何か、一人で突っ走って……椎宮君にも、メーワクかけて……」

「迷惑じゃない」

「ん……ありがとう」

千枝の言葉に対し迷惑じゃないと返す真。その言葉を受けた千枝はお礼を返しつともどこか申し訳なさそうな様子を見せていた。

「そうだよね、あたし、一人じゃないのに……いつも、そう」

千枝は一人眩き、苦笑する「真や陽介、雪子。仲間がいて皆で頑張っているのに、それでも自分がやらなきゃいけない。自分がもつと頑張らないといけないと焦ってしまう」と彼女は語る。

「それでいつか、今日みたいにメーワクかけちゃったりするのかな……はは……バカすぎる」

千枝はそう眩き、自嘲。ふう、と小さく、しかし長くため息をつくとパンツと自分の頬を両手で叩いた。

「椎宮君……ありがと……その」

千枝は自分の至らぬところを反省した後、真にお礼を言い、次にやや気恥ずかしげな様子を見せる。が、少しするにぱつといつもの元気な微笑みを見せた。

「なんでもない！　ね、もう帰ろ」

「食事はいいのか？　奢る約束だが」

「いーのいーの！　なんでもっと頑張んなきゃって焦るのか、家に帰ってよく考えてみるよ……あんま頭良くないから、不安だけどね！」

千枝はそう言い、おどけたように笑う。

「……分かった。奢りはまた今度に」

「うん。楽しみにしてる」

二人はそう話してその場を切り上げ、真は千枝を家まで送ってから帰路につく。だが特訓やら恐喝現場での騒ぎやらで時間を取ったのか、既に日は暮れ始めていた。

「……あれ？」

と、商店街を歩いていた真の耳にそんな聞き覚えのある声が聞こえ、真は声の方を見ると「あつ」と声を出す。

「足立さん」

「奇遇だねえ、君かあ。こんな時間にどしたの？　最近は物騒だから早く帰りなよ」

声の相手——足立はそう言い、「まあ事件は解決したんだけど」とへらへら笑う。

「足立さんも、仕事帰りですか？」

「あー、まあね。早く上がれたからさ、たまには何か作ろうと思ったんだけど、メンドくさくなっちゃって。惣菜でも買って帰ろっかなってと……」

真の質問に足立は答え、真も暇だからと彼の目的地である惣菜大学までついていく。が、店は既にシャッターを閉めており、閉店の様子を見せていた。

「あー……やっぱりね。田舎の店って閉まるの早過ぎ」

若干予想はついていたのだろうか、足立は諦観気味の言葉を紡ぎ出した後、困ったように頭をかく。

「参ったなあ、家に煮物だけはあるんだけどねー。それも大量に……」
「あら、透ちゃん！ お仕事どう？ 頑張ってる？」

足立の言葉を遮る勢いで聞こえてきた女性の声、足立の口から「げっ」と嫌そうな声が漏れ出し、しかし無視するわけにもいかないという様子で彼は声の方を向き、真も同じ方を見る。そこに立つのは一人のお婆さん。以前足立と話していた時に会った、足立と同じ名前の息子がいるため足立にかまっっているお婆さんだ。

「あ……どうも。さつき上がったところで……」

「夕飯は済んだ？ 若いんだからしつかり食べなきゃ。そうだ、良かったらウチに来ない？ 大好きな煮物、いっぱいあるわよ」

お婆さんの言葉に足立が困ったように苦笑を漏らしながら返すとお婆さんは返答を待たない勢いでまくしたて、足立は「あー、いや、今日はちよつと……」と何か言いあぐねつつ、ふと真の方を見る。

「そうだそうだ。夕飯は彼と食べる約束してて。上司のトコの子だから断れなくて。はは……また今度お願いします」

「そう……残念ね。それじゃ今度、絶対ね。おやすみなさい」

足立は真の肩を抱きながらそう言い、お婆さんはそう言っただけを去っていく。

「ふい〜」

お婆さんが見えなくなってから、足立は安堵が含んだようなため息をつく。

「参るよなあ。人んちでサシで夕飯とか、気まずいでしょー。だいたいの煮物、レンコン硬くて苦手なんだよね」

そう言いながら足立は真から離れ、気づいたように真に向けて申し訳なさそうな笑みを見せる。

「あー、悪いね。ダシに使っちゃって。おかげで助かったよ」

「煮物だけに？」

「はっ」

足立の詫びの言葉に真が悪戯っぽく笑いながら返すと、足立は呆け

た声を出す。が、すぐに「ああ」と合点がいったように頷く。

「ダシって事？ くつだらな。君、良くダシなんてすぐ出るよね……って、そういや結構料理得意なんだっけ？ はは、本当にご馳走になるのかな。この前の料理も美味かったし」

そう足立は軽口を叩くが、続けて何かに気づいたように首を傾げる。

「でも、堂島さんまだ仕事だよな？ って事は僕らだけ？……何か変じゃない？」

「菜々子も喜びます」

「君の『お兄ちゃん』ぶりも板についてきたね。菜々子ちゃん、君が来てからちよつと明るくなった気がするし」

真の言葉に足立は再び苦笑する。が、菜々子を気にかけていた事がその返答から読み取れた。

「しっかし、ホント君ってすごいね。僕が高校の頃なんて、料理の『り』の字も知らなかったからさ」

「何してたんですか？ 部活とか？」

足立の言葉に真が首を傾げると、足立はひょいっと肩をすくめて皮肉な笑みを見せる。

「勉強ばっかしてたよ。それなりに進学校でさ、成績が全て」

そう自らの高校時代を振り返る足立。振り返った結果として「やれば返ってくる場所は分かりやすかったし、親も成績さえ良ければ何も言っでこなかったため別に嫌ではなかった」と続け、だがそこまで言っただけ、彼は疲れた息を吐く。

「……でもさ、そんなんで上手くいくのは、やっぱり学校の中だけなんだよね」

「やっぱり、社会は大変なんですか？」

「そりゃあね。仲間内で足引つ張り合ったり、責任押し付けあったり……大人は大変だよ」

皮肉な笑みと疲れたため息をそのままに彼はそう言う。

「じゃあ、今日ぐらいはゆっくりしてください。食事、ご馳走しますから」

「……結局そうなんのね。ま、いいや。じゃあ、ご馳走になろうかな。君、料理上手だし」

最終的に堂島家での食事に誘われる事になる結果に足立は苦笑し、断るのも面倒になったか誘いを受ける。

そして真は足立を家まで連れてくると料理の仕込みを行ない「お手伝いするー」と言う菜々子にジャガイモが柔らかくなるのを見ていてほしいという任務をお願いした後、足立と雑談をし始める。

「お兄ちゃん。じゃがいも、柔らかくなってきたよ」

「ああ、ありがと」

菜々子の報告に真はお礼を言いながら立ち上がって彼女の頭を軽く撫で、菜々子は「えへへ」と嬉しそうに笑った後足立を見る。

「今日はね、シチューなんだよ!」

「シチュー? ああ、シチュー?」

「そう、しつ……しちゅー!」

「あ、言えた」

シチューとちゃんと発音出来てなかった菜々子に足立が首を傾げた後正しく言い直すと菜々子は言い直し、ちゃんと言えたと足立は笑う。

「あだちさん、しちゅー好き?」

「シチューかあ。まあ、割とね」

「わりと?」

「あー……いや、好きって事。久々だしね、実際」

足立は菜々子にそう話した後、シチューを作っている真に目を向ける。

「ってゆーかさ、この前堂島さんに誘われた時から気になってたんだけど、普段からこうやって料理してんの? 堂島さん、君が来て助かってるだろーねー。言われてない?」

「ああ、たまに言われます」

「あ、ホントに? あの人、そういうの素直に言いそうにないのにね」

足立の質問に真はたまにお礼を言われる事を思い出し、その返答に足立は意外そうに笑う。それから真がシチュー作りを続け、後はシ

チューを煮るだけになり、タイマーをセットして戻ってきたのを見て足立はふふつと笑う。

「そう言えば君、春に帰るんだっけ？ 堂島さん、泣いちゃったりしてー」

「……」

足立の言葉を聞いた菜々子が悲しそうにうつむき、足立は「げっ」と自分の失言に気づく。

「あ、ごめんごめん。帰るって言っても、まだ先の話だから」

「うん……」

足立の言葉に菜々子は頷くが、やはりまだ悲しそうな表情は消えず、足立は「えーつと」と考え始める。

「そうだ、菜々子ちゃん。こんなの知ってる？」

そう言って足立は手を広げ、手の平の上に500円玉を乗せる。

「よく見ててねー」

足立は500円玉を握りしめ、手を持ち上げ、もう一度下げる。

「ほら」

そう言って開いた手の平からは500円玉はこっせんと消えていた。

「なんで!? なんでー!? もっかい! もっかいやつて!!」

「じゃあ今度は、もっとすごいやつねー」

菜々子が驚いたように声を上げ、足立は得意気に笑ってまた500円玉を手の平の上に乗せ、握り締める。

「お兄ちゃんのポケット」

「?……!」

足立の言葉を受け、ポケットを探る真。するとポケットから500円玉が出てきた。自分も手品は趣味としてやっているが、それを超える腕前の足立に真は驚きを隠せずにぽかんとしてしまう。

「すごい! あだちさん、すごい!!」

「ビックリした……」

「手先は器用な方でさ。出来ちゃうんだよね、これくらいは」

足立はケラケラと笑いながら500円玉を回収。菜々子も元気に

なっているのを確認してこつそりホツとしている様子を見せる。

「僕、マジシャンになればよかつたかなー。そしたらさ、こんな……」
そこまで言った辺りで足立は口を滑らせたともいうように口をつぐんだ後、「あー」と呟き、小さく首を横に振る。

「まあ、公務員に勝る職業はないか。ちよつと器用なくらいじゃ、何にもならないし」

足立はそう言つて肩をすくめた後、鼻をヒクヒクと動かす。

「いい匂いしてきた。そろそろなんじゃない、シツー」

「し・ちゆ・うー！」

足立のわざとらしい言い間違いに菜々子が叫ぶ。

「シツー？」

「し・つ・うー！」

「ブツブー」

「言えたもん！」

「言えてませーん」

からかう足立とむきになる菜々子、それを見て苦笑する真。三人で賑やかな時間が過ぎていった。

その翌日。真は神社でキツネに依頼されていた「口下手を直したい」というお願いを解決——同じ学校の生徒で、少し話し方の指南をした——した事を報告しに来た後、少しキツネと一緒に過ごしていた。

「あれっ、椎宮君」

「天城」

神社にやってきたらしい雪子が驚いたように真を呼び、真も雪子を呼ぶ。「偶然だね」と雪子は笑った。なお雪子が来ると共にキツネは警戒したのか去っていった。

「天城も何か用事か？」

「うん、ちよつとお参りに」

真の質問に対し、雪子はまあ神社への用事としては当然な返答を見せる。

「時々、時間見つけて来てるの。静かで気持ちいいから」

微笑んでそう話す雪子。大切なお客さんが来る時に仲居さんとお参りをする事もあったし、毎年の初詣や受験のお守りもここだった、と彼女は回想していたが、やがて寂しそうな目を見せる。

「この町を出たら……ここにももう、来られなくなるね……」

「帰ってこないのか？」

「だって……親にも顔向けできないし」

雪子の呟きに真が聞き返すと、雪子はそう寂しそうな声を出す。

「あれ、雪ちゃん！」

と、そんな声が聞こえ、雪子が驚いたように声の方を向くと真もそっちを見る。神社の鳥居の下に立っているのは和服の女性だ。

「葛西さん……どうしてここに？」

「酒屋さんへ注文ついでに、ちよつと休憩……あーあ、雪ちゃんにバレちゃったあ」

「や、やだ、別に言いつけたりなんか……」

葛西という女性は雪子に向けて悪戯っぽく笑いながら言い、雪子が慌てて言いつけたりなんかしないと云おうとすると葛西は悪戯っぽい笑顔のままあははと笑って「冗談よお」と返す。と、そこで葛西は雪子の横にいる真に気づいたように「あつ」と声を出す。

「そちら、もしかして、ウワサの彼氏？ あらあく料理の勉強の甲斐あつて、遂に射止めちゃったわけねえ？」

「彼氏？」

「ち、違うつたら!!」

葛西の言葉に真が首を傾げると雪子は顔を真っ赤にして否定。しかし葛西は楽しそうな微笑みを浮かべた。

「あらあ、雪ちゃん真っ赤よ？ じゃ、邪魔者は消えるわねえ」

「だ、だから、違うつたらー」

楽しそうな悪戯っぽい笑顔での言葉に雪子はさらに慌てるが葛西は聞く耳持たず神社を後にする。雪子は「もう」と呟くが、直後気づいたように慌てて真の方を見る。

「ご、ごめんね。あ、さ、さっきの人は、うちの仲居さんなの。仲居さんたち、何か勘違いしてて……ほんと……ごめんね……」

雪子は先日から料理の特訓として、真に作った料理を食べてもらってはアドバイスを貰っていた——曰く修学旅行の時に風花と荒垣を見て実際に人から評価とアドバイスを受けた方がいいと気づいたらしい——のだが、それがいつの間にか好きな人のために料理を作っているなんて事になってしまったらしい。

「別にいい」

「う、うん……よかった」

特に気にしていない様子の真に対し、雪子はやや汗ばんだ様子でそう返す。

「さっきの葛西さんとかね、仲居さんたちや板前さんたちが、料理教えてくれてるの」

雪子は話し始める。最初は一人でやると言い張っていたのだが、失敗続きでヤケドまでしたのを見た板前からついには「教えさせてくれ」と言われてしまい、休憩時間を潰してまで優しく教えてくれたこと。一度、割と成功した時なんて、みんな集まって味見して、褒めてくれた。それがなんていうか、嬉しかったのだと。

「それに私には、学校の仲間もいる……結構、私、幸せ者だよね……」

「ああ」

雪子の言葉に真は頷き、雪子もうんと頷き返す。

「私ね……みんなのためにも、頑張ろうって思う……」

「ああ」

その笑顔からは静かなやる気と決意を感じ、真はその決意に応えるようにこくりと頷く。が、その時雪子の笑みに影が出来た。

「でも私、あんな優しい人たちを裏切って出て行こうとしてる……でも……仕方ないよね……」

雪子はそう、ぼそりと呟く。それに対し真は何も言う事が出来なかった。

時間が過ぎて夜、天城屋の駐車場。ここにバイクで戻ってきた命、結生、ゆかりは長期間宿泊&雪子の友達というよしみで使わせてもらっている従業員専用駐車場にバイクを止め、玄関へと歩いていく。「ふあ、ジュネスのバイトって大変だねえ。シャガールの方が楽

だわ〜」

「覚える事がたくさんあつて大変だわ……それに、変な奴もいたし」

伸びをしながら呟く結生にゆかりもうんうんと頷いた後、疲れたため息を漏らす。二人も人手不足ということでジュネスのバイトへの採用はもらったのだが結生はともかくゆかりは命の恋人であることが主なバイト層である学生バイトの中でも女性陣にやつかまれている。

「まあ大丈夫でしょ？ ゆかりに理不尽なイジメしたら許さないって言つといたし」

もつとも、命がシャドウ相手に放つ本気の殺気を一般学生相手に放ちながら注意を喚起していたため逆に怯えられてしまい、彼女らの教育係を陽介が一人でする羽目に陥ってしまったのだが。

「あくあ。オイシイ話だつてのに、乗らないのは田舎の特徴なんですかねえ？」

「!？」

と、いきなりそんな話し声が聞こえ、いきなりでよく分からないが不穏な雰囲気を感じ、先頭に立っていた命が咄嗟に二人を止めるように腕をかざす。二人も無言で頷くと三人とも壁に張りつくようにして気配を隠しつつそつと壁から顔を出して声の主を確認する。そこにいるのはスーツの男を始めとした若い男達だ。

「事件で客が減って大変だろうから、客が増えるようにイイ企画考えてやっつたつてのに」

「そうつすよねえ。あの騒動の老舗旅館、哀れ廃業か!？」つて危機感を煽るいいコピーなのに」

「お前本気かよー」

そう言い、「あはは」と笑う男達三人。

「……なんかむかつくわね」

ゆかりが額に怒りマークをくつつけながら呟く。

「……ん？」

と、結生が男の一人——スタッフらしく背中に局のロゴだろうかプリントされた上着を羽織っている。を見て首を傾げた。

「どうしたの？」

「いや、あの局のロゴ、どっかで見たような……」

「テレビ局のロゴぐらいどこでも見るでしょ？」

「ん、いやテレビとかじゃなくって、どっか別の……ん？」

ゆかりが尋ね、結生が首を傾げながら言う。ゆかりは「テレビ局のロゴなんてどこで見たっておかしくはない」と返す。だが結生は納得しないように首を傾げていた。

「なんにしても、穏やかじゃないね」

「ん、そだね。ユキちゃんを困らせるんならぶっ飛ばしてやる」

「二人とも穏便にね？ ああいうの敵に回したらめんどくさいんだから……まあ、やるってんなら協力するけど」

命の言葉に結生がやる気満々の様子を見せるとゆかりは二人をたしなめつつ、叩き潰すなら協力すると返す。そう話し合いながら彼らは天城屋旅館へと入っていった。

第四十九話 深まる絆、皇帝と恋愛

9月24日。稲羽町の高台で真は丈夫な木の棒を手に素振りをしていた。

「ん？ 椎宮先輩？」

「？」

突然聞こえてきた呼び声に、真は素振りの手を止めてそつちを見る。そこには完二が立っていた。

「完二、偶然だな」

「奇遇ツスね。何してんスカ？」

「素振りだ。恥ずかしながら、この前里中に負けてしまつてな」

「マジツスカ」

真は棒を地面に立て、まるで杖のように棒に体重を預けながら完二に素振りをしている事、その理由である以前千枝との組手で負けてしまった事を暴露。完二は真が負けたという事に驚きの様子を見せる。

「完二はどうしたんだ？」

「ああ？ いや、散歩つつか、なんとなく来ただけツス」

真の言葉に完二はそう返し、高台から覗く町を見下ろす。

「ここ、昔から好きなんスよ。家も学校も全部見下ろせて……小つせーなーって、思えてさ」

完二はそこまで言うのと黙り込み、僅かな間を置いた後にどこか居心地の悪そうな表情を真に向ける。

「あの……この前、病院でお袋と会ったとき、俺のこと……何か聞いたツスカ？」

完二の問い。それは以前完二に誘われて彼の家に遊びに行こうとした時、彼の母親が病院に運ばれたと近所の人に聞かされた完二が血相を変えて病院に飛び込んでいった時の事だ。もつともそれは勘違いで、自転車にぶつけられた男の子を病院に連れて行っていただけだったのだが。

「……ああ」

「ババア……やっぱりか……ま、先輩にやサラケたし、今さら怖いもん

なんざねツスけど」

そう言いながら完二は照れくさそうに笑い、真から目を逸らすように高台から見える土手へと視線を移す。と、彼は「あん？」と間の抜けた声を漏らした。

「どうした？」

「いや……あいつ……お袋と病院にいたガキか？……」

完二の呟きを聞きつけた真も土手、完二の視線の先へと目を向ける。そこにいるのは確かに以前完二の母親が病院に運ばれた事件の時に完二の母親が病院に連れて行った男の子だ。どうしたのか分からないがうつむいている。その様子はどこか泣きそうなものにも見え、真と完二は顔を見合わせると彼の方に歩いて行った。

「んだ坊主、一人で何やってんだ？」

「えっ……えっと……何も、してない……」

突然完二に話しかけられた男の子はどこか怯えた様子でそう返し、それを見た真は学童保育での経験か彼に視線を合わせるようにしやがみこんだ。

「どうして泣きそうなんだ？」

「……人形、なくした」

真の優しい声色での問いかけに、男の子はそう告白する。彼の話を纏めると、サナちゃんという女の子の友達に借りたウサギのあみぐるみをタカくんという男の子の友達に「女みてー」と取って投げて踏んで、泥だらけになった挙句に「男なら捨てる」と言われ、男の子はそれを川へと投げたらしい。

「ウサギ、流され、て……う、うわあああん!!」

そこまで言うと言の子は我慢できなくなったように大声で泣き始める。

「う、うつく、どうしよう、どうしよう！ サナちゃんに、返さないと……サナちゃん、あのウサギ、すきだって……ぼく、ぼく……」

「……で、何でここ居んだよお前。逃げてきたのか？」

悲しみと後悔でパニックになっているらしい男の子に完二は静かに問いかける。

「……う、ひつく」

「つたく、このバカ！」

「う、うわあああん!!」

何も言わず泣いているのを肯定と見たか怒鳴る完二と怒鳴られて余計に泣き出す男の子。

「つたく。オラ、行くぞ！　ぐずぐずすんな!!　先輩、俺ちよつと行つてきます！」

がつしと男の子の腕を掴んで言う完二は、真剣な目を見せて真に言う。その目を見た真はゆつくりと立ち上がった。

「暴力はよくない」

「……ちげーよ！　シメつぞ!!」

「冗談だ。俺も一緒に行こう。一人より二人、二人より三人で探した方が早い」

「え、まじスか!？」

真の冗談に本気で怒る完二だが、続けての言葉には驚いたように目を見開く。

それから三人は男の子がウサギのあみぐるみを投げ捨てたという場所へとやってくる。完二が川の中の搜索を開始する。

「ぼ、ぼくも……」

「るせつつーんだよ、テメー足手まといだから来んな！　先輩、そいつ入ってこないよう見といてくださいね！」

「ああ」

自分も川の中を探そうとする男の子だが完二が一喝して阻止し、真に入ってこないよう見といてくれと続ける。真も領いて男の子の肩に手を乗せつつ、辺りを見回してウサギのぬいぐるみが河原へ打ち上げられていないだろうかと探し始めた。

しかし完二の必死の搜索にも関わらずウサギのあみぐるみは見つからず、いよいよ暗くなり始めてこれ以上の搜索は危険だと言えるような状況になってようやく完二は河原へと上がる。

「ご、ごめんなさい。ぼく、サナちゃんに謝る。サナちゃんが怒つても、ごめんって言う……」

「それは当然だ。あみぐるみが見つかったからと言って謝らなくてもいいという事にはならない」

頭を深く下げて謝る男の子に真は厳しく意見を述べる。

「あー、待て」

と、完二が声を出した。

「それ、どんなウサギだ？ 詳しく教えろ」

完二の言葉に男の子は首を傾げるが、「いいから教えろってー」と続ける男の子は慌てたようにどもりながらもウサギのあみぐるみの特徴を教えていく。

「……うし、分かった。お前、〃サナちゃん〃にはちゃんと謝れよ。お前が〃捨てた〃んだからな。そのウサギの代わりにやなんねーかもだけど、俺が新しいヤツ、お前にやるからよ……それで許してもらえ」
「お、おじちゃん……」

「だ、誰がおジちゃんだゴラァア!!」

完二の言葉に男の子が声を漏らすと、自分を指す呼び方に引っかかったのか完二の怒号が響き渡る。そして男の子が帰っていった後、完二はふんつと鼻を鳴らした。

「ったく……こちとら花も恥じらう高校一年だっつんだよ」

不機嫌そうに唇を尖らせる完二だが、続けて何か悩むような表情を作る。

「……そんなに俺、老けてツスカね？ やっぱこのマユゲが……って、んな事より、すんませんでした。面倒につき合わせて……」

オジちゃんと言われたことが気になっているのか、その原因だと自分で考えるマユゲをいじる完二。だが直後それより優先すべきだと気づいたように真に頭を下げる。

「構わない……だが、見つからなくて残念だ」

「やっぱもう、流されてたみてえツスね……」

真の残念そうな言葉に完二は悔しそうな表情を見せるが、真は続けてどこか悪戯っぽい笑みを見せる。

「ところで、新しいヤツをあげるって？」

「聞いてたか、やっぱ」

その言葉に完二もやけに恥ずかしそうに頬をかく。

「何か俺、アイツの気持ち、分かる気がしたんスよね……認められてえ、ハブられたくねえって、やっちゃいけねえ事に手え出して……んで、一番泣かしちゃいけねえ人を泣かしちまってよ……だから……まあ、助けてやれねーかなと思っただんスよ」

完二はそこまで言うのと照れたように笑う。

「甘やかしすぎッスかね?」

「いや、良い事だと思う」

照れたように笑う完二に対し、真は良い事だと伝える。それに完二も「あざっす」と頷いた後、ふえつくと声を出す。

「へつく……う、うう? あー、くしやみ出そうで出ねー。気分悪イわ……風邪引きそうなんで、帰るっスかね……」

「身体に気をつけるよ」

「分かってるッス」

そう言い、真と完二は別れて帰路についたのであった。

翌日9月25日。真はりせのお願いで沖奈駅前に一緒に出掛けており、その帰り、りせを家まで送ってきていた。

「えへへ。いっぱい、お取り寄せ頼んじやった。取りに行く時、また一緒に行ってね、先輩」

「ああ」

りせは楽しそうな笑顔で話しており、「声をかけてくる人がいなかったし、もしかしたらもう忘れられてたりして」と冗談っぽい笑顔で口にしていた。

「そうだ、お豆腐持って帰る? 今日のは私が仕込み手伝ったんだから。待ってて」

そう言っさりせは家の方に走っていく。

「あの……真さん、ですよね?」

と、その背後から声をかけられ、真は驚いたように振り向く。

「……確か、りせの元マネージャーの……」

「はい。井上実です。えーと……先日は、どうも……」

声をかけてきたのはりせの元マネージャーである井上実。彼はペ

こりと頭を下げた後、真に一通の手紙を差し出してきた。

「突然で申し訳ないとは思うのですが、これを……彼女に渡してもらえないでしょうか？」

「これは？」

「ファンレターが、その、まだ来てまして……」

「……どうしてわざわざ？」

とりあえずファンレターは受け取りつつ、何故わざわざりせに個人的なファンレターを持ってきて、しかし直接渡そうとはしないのかと尋ねる。

「僕からでは、受け取ってもらえないと思うので……それに彼女、その子からのファンレターは、いつも楽しみにしていたから……」

実はファンレターを持ってきた理由とそれを真に託した理由をそう説明し、話し始める。今の時代、タレント業は売れたら売れたで辛い仕事であること。パズルのように分刻みで予定がハマっていき、毎日、気の毒なほど限界まで搾り取られること。

「でも僕は、それでも彼女に戻って来て欲しいんです……彼女の輝きは本物だ……それに、辛さをバネにできる強さも持ってる」

実はどこか確信めいた目を見せながら話し、真を見る。

「見たところ……彼女は、あなたに頼っているようだ。ですから、あなたの方から——」

「先輩、ごめん。今日のはもう……って」

実の言葉を遮るようになりせがたたと駆け寄りながら真に声をかけ、真が実と話をしているのに気づくと驚いたような表情を見せた後、実を睨む。

「井上さん!! しつこいよ……てゆうか、先輩に何言つたの!!」

「ご、ごめん、もう帰るから……それじゃ……」

睨むりせに対し実は一度頭を下げてその場を去る。が、りせはまだ不機嫌そうな様子を見せていた。

「辞めた後まで付きまとうなんて、ストーカーじゃん! 信頼してたのに……裏切られた!!」

「久慈川、そういう言い方はよくない」

りせの言葉を咎める真。するとりせは驚いたように真を見た。

「なっ……なんで先輩、あの人の肩持つの!? せ、先輩は、りせの味方じゃないの?……」

「俺はお前の味方だ……だが、味方だからと言って全てを肯定するわけじゃない」

「……」

シヨックを受けた様子のりせに対し真は静かにりせを諭し、それに對しりせはしゅんとした様子を見せる。

「それで、あの人……何しに来たの?」

「お前の芸能界への復帰を俺の方からも話してみてくれと頼まれたが……一番の用事はこれのようだ」

そう言い、真は実から託されたファンレターをりせへと渡し、りせはファンレターの差出人を見ると驚いたように目を見開いた。

「これ……この子、まだ手紙くれてたんだ……そっか……でも、わざわざ、これをも?……」

「そうらしい……ところで、そのファンレターは何か特別なものなのか? いつも楽しみにしていたそうだと聞かされたんだが……」

「……この子ね、中学生の女の子なんだけどいっつも手紙、くれるの」
真の質問にりせはそう答え、話し始める。きっかけは仕事でイジメ

撲滅のキャンペーンに出たこと。それを見てすごく勇気が出て、イジメに負けず友達が出来るように頑張るとファンレターをくれたらしい。それ以来、
「今日はこんな事が出来た」、
「こんな風に話せた」という手紙くれること、
「りせちーが頑張ってるから、励まされる」、
「まだ頑張れるって思える」とファンレターには書かれていること。

「……はは、なんか単純だなんて思うでしょ? でもね、この子からの手紙を読む度に、
「りせちー」にも、意味があるって思えた……だから、辛いときはいつも読み返してたな……」

ファンレターに目を落としながらそう呟くりせ。だが少しの間をおいて彼女は真を見るように顔を上げた。

「先輩……まだ時間、いいかな?……」

その言葉に真は無言で頷き、二人は近くで人気のない辰姫神社へと

やってくる。その石段に座り、りせはファンレターを読むと考え込む様子を見せる。

「……やっぱ、心配してくれてるみたい。表向きは、体調不良で休養って事になってるから……」

まず、ファンレターの相手は体調不良による休養という事から自分を心配してくれている事を真に伝える。次に休業の直前に映画出演の話があり、それをすごく楽しみにしてくれていたこと、元氣になって、早く戻ってきてね”と書かれていたこと。

「先輩に付き合ってもらってよかった。一人で読むの、なんだか怖かったから……」

そう言い、りせは「自分は“りせち”は捨てた、この子の期待には応えられない」と自嘲する。

「……後悔してるか？」

「後悔はしてない……と思う。だって私、休業して、ホツとしてるもん。本当の私に戻れて良かったって……はは……」

そう言いつつもりせは寂しげに笑っていた。

「とにかく、もう“りせち”は居ない。たぶん、この子だけじゃない、もっと大勢の人をガツカリさせて……社長からも、そう何度も言われたから、とつくに分かってたけど……私の選んだ道はそういうことだって、分かってたけどね……」

りせは言い終えてから無言になるが、やがて顔を上げると「あー」と声を出す。

「私、このままお豆腐屋さん継ごうかな！……今でも看板娘だし、けっこう繁盛しちゃうと思うよ！」

言いながらりせは首を傾けて真を見上げるようにしながら、どこか妖艶な目つきと笑みを見せる。

「……ねえ、先輩。この前の話……ホントに……しちやおつか？ 高校出たら結婚して……私と一緒にこの町でお豆腐屋さん、やるの……なんか、楽しそうでしょ？ ど、どうかな？ なんて……」

「りせが本気なら」

りせの言葉に真がさらっと返すと、りせはジト目になって頬を膨ら

ませる。

「本気ならって……けっこう本気なんだけどな……なんか冷静なんだから、先輩」

しかしそこまで呟いた後彼女は笑った。

「けど、そういうところ……ちよつと好き」

「そりやどうも」

りせの恥ずかしそうに笑いながらの言葉に真も冗談っぽく笑いながら返し、その様子を見たりせは再びジト目になる。と、彼女は立ち上がって数歩歩き彼に背中を見せる。

「……ありがと、先輩。今日はずつと一緒にいてくれて……ちよつとだけ、元気出てきた……うん、大丈夫。私には、やれることがあるし……私にしかできないことが、まだまだ、ありそうだから……」

りせが静かにやる気を燃やす様子を真は感じ、立ち上がる。それと同時にりせもくるつと振り返った。その顔には無邪気な笑顔が浮かんでいる。

「いっぱい付き合わせちゃって、ごめんね。そろそろ、解放してあげる」

その言葉を受けた真はゆっくりと石段から立ち上がるとりせの方に歩き、その頭にぽんと手を置く。

「送るよ」

「……うん」

真とりせは一緒に辰姫神社を後にし、真はりせを家まで送ってから帰路についた。

それからまた少し時間が過ぎて9月28日の放課後、真は商店街にやってきていた。少し早い夕食に愛家で食事でも取ろうかと考えながら彼は歩みを進める。

「あ、来たー！」

と、そんな声が聞こえる。そう思うといきなりがしつと腕を掴まれた。

「……どうした、マリー？」

「ね、どっか行こ。記憶、協力してくれるんでしょ？」

「いや、俺今日はちよつと……」

強引に言ってくるマリリーにやや引きつつ断ろうとする真。

「ぶー、ばかきらいさいてーきらい」

だがそう言うのと頬を膨らませながら悪態をつく。しかも腕を離す様子も見せない。

「……分かったよ」

結局真も根負け、マリリーに付き合う事を決めたのだった。

「うん、行こー！」

「お、おいマリリー。まずは落ち着け……」

それを聞いたマリリーは嬉しそうに微笑んでぐいぐいと真を引つ張り、真はマリリーに呼びかけつつ、とりあえず落ち着ける場所で話を聞こうと考えるのであった。

それから真は落ち着ける場所として鮫川の河原を思いつき、やや落ち着くと共にしきりに考え込み始めたマリリーを連れてここへとやってきた。

「この事……全然分かんない。どうすればいいの？」

そう言っただけでマリリーが見せてくるのは彼女の記憶の唯一の手掛かりである櫛。異屋の女主人である完二の母親からは特別な品だと判断されたものだ。

「たしか、かなり古いと言っていたな？」

「うん、言っただけ。それに初めて見る形だって……なんだっけ？ はくぶつかんと、びじゅつかん？ そこにある櫛？……意味わかんない。何に使うの、それ？」

「芸術品だ」

「げーじゅち……」

真の確認にマリリーは肯定を返した後、以前完二の母親に聞かされたことを反芻、意味が分かんないと返すと真は説明。説明を受けたマリリーが復唱しようとするが、舌を噛む。

「……噛んだ。それ、絵とか石のヤツ？」

マリリーは芸術品を絵とか石と大雑把にぶった切り、しかし「意味な

「いトコとか、似てるし」と変なところに共通点を見出して一人感心する。

「そういうの分かる人いる?」

「芸術品か、ちよつと待て……………完二の母親、は分からないと言っていたし、陽介、天城、里中……………どこも芸術品とはあまり関係がない……………芸術品……………アート?」

真は心当たりを考えつつ、一つ思い当たる。

「 дайだら。」

「なにそれ?」

「ああ、いや。知り合いで……………アーティスト、つまり芸術家を自称しているんだ。もしかしたら何か分かるかもしれない」

「いるんだ。ふーん、変な人ばかり。とりあえず行こ。何か分かるかもしれない」

真に心当たりがあると聞いたマリーはマイペースにそこに行こうと決めて歩き出し、真も慌ててその後を追った。

そして商店街の дайだら。店内に入った二人だが、マリーは刀や斧や鎧などを見てやや引いた様子を見せる。

「これ売るの? 普通、買う?」

「テレビの中の護身用にな」

マリーのある種当然の言葉に真は苦笑しつつ答える。

「ユキチャン、ちつと待つクマ。荷物が重くて、ク、クマは……………へぶし!」

と、店の外からそんな聞き覚えのある声が聞こえてきた。そう思うと дайだら。に新たな客が来店する。

「あ、やっぱり。こんにちは、椎宮くん、マリーちゃん」

「天城、偶然だな」

「あれえく!? センセイにマリチャン! クマ、これは思わぬ所で、大スクープに遭遇しちゃったヨカン……………」

「どんなスクープか知らないが、勘違いだぞ」

来客——雪子に挨拶した直後、人間状態のクマが笑いながら真を見る。それに真も呆れ気味にツツコミを返し、クマもによほほと笑う。

「んもー、センセイだったら、分かってるクマよ……クマは知ってる、センセイはぬけがけする様な、ふしだらな漢じゃないって」

「何がどう抜け駆けなのか教えてもらおうか？」

クマの言葉に真はやや目を据わらせながら尋ね返し、クマは「目が本気よ……何だか雲行きが怪しいクマ？」と引いた様子を見せる。

「まあ、それは置いておこう。二人はどうしたんだ？」

「私は旅館の買い出しの帰りなの。丁度そこでクマさんに会ったから、荷物、全部持って貰っちゃって」

「お店の外に荷物いっぱいクマよ。クマはもう、運べましえん……」

さらっと人使いの荒い雪子とげんがりしているクマに真は苦笑を見せる。

「椎宮さんとマリーちゃんは何してるの？ あ……お買い物とか？」

「ちよつと調べ物を」

「そうなんだ……えつと……ここで？」

次に尋ねてきた雪子の質問に真が答えると、雪子は最初こそ納得の様子を見せるが普通の人は全く用事がないだろうこの店で調べものをしている事に目を丸くする。と、マリーは鞆から例の櫛を差し出した。

「ね、これ……分かる？」

「ほほー、これは」

「珍しい櫛だね……これがどうかしたの？」

マリーが見せてきた櫛を興味深く覗き込むクマと雪子、その後雪子は不思議そうに真とマリーに尋ねる。

「これについて詳しく知りたいんだ……何か分かる事はないか？」

「え、そうなんだ。私は……ごめんなさい、何も分からないな」

「クマもさっぱりです。見た事もないクマねー……でも、凄くキレイクマよ？ ツヤツヤしてるクマー！」

真の言葉に雪子は申し訳なきように、クマも分からないと言いつつ、キレイでツヤツヤしていると櫛を評する。と、雪子がそこで合点がいったように頷いた。

「あ、それでこのお店？ 確かに骨董品とか、詳しそうだよね」

「やっぱりそうなんだ……訊いてみたら、何か分かる？」
「どうかな……とりあえず、おじさんに訊いてみようよ」

マリーの言葉に雪子が首を傾げると、クマはいよおくしと気合を入れ、「いざ突撃クマ。クマも懸命に聞き込むクマよー」と言っただいだら、のオヤジの方に歩いていく。

「へい、スミマセ〜ン？ 訊きたい事があるクマよー！」

「あ？ 訊きたい事だあ？……アートの話以外はお断りだぜ」

どこかエセ外国人口調で気合満々に尋ねるクマだが、圧倒的な威圧感を誇るだいだら、のオヤジの返答を受けるとすぐさま怯えたようにマリーの後ろに隠れ、マリーが櫛をだいだら、のオヤジに見せる。

「あの……これ、わかる？」

「櫛だあ？ ウチは櫛なんざ……」

マリーの見せてきた櫛にだいだら、のオヤジは最初こそ興味なさげに答えるが、何かに気づくと興味を持ったように「ムツ!？」と唸り声を出す。

「こいつあすげえな、いい仕事してやがる。おまけに年季も半端じゃねえが……そのくせ傷みが少ねえ……少なすぎる」

アーティストを自称しているのは伊達ではないのか、専門外らしい櫛に関しても正確な目利きを見せる。

「二体、コイツを何処で見つけた？」

「え、えと……」

「あの……何か分かりませんか？ どんな事でもいいんです」

失ってしまった記憶の手がかりをどこで見つけたと聞かれ、どもつてしまうマリーに助け舟を出すように雪子が尋ねる。と、だいだらのオヤジは再び櫛に目を落として「ふむ」と唸る。

「……分らん。形は櫛だが……装飾品か、はたまた祭に使うモンか。いつ頃のモンだかすら、見当も付かねえ」
「……そう」

だいだら、のオヤジの言葉にマリーは残念そうに呟いて櫛を鞆に戻そうとする。が、そこでだいだら、のオヤジは「まあ待て」と止めた。

「だが素材の事くらいは分かるぜ」

そう言い、もう一度マリーの櫛をじっくりと観察する。

「こりゃ……そうだな、普通の竹じゃねえ……中国地方に生えてるって言う、珍種の竹に似てる気はするが……」

「違うの？」

「違うな、とにかく普通じゃねえ。この世の物とは思えん美しさだけ……」

「この世の物じゃないクマ？ だったらどこの世の物ね」

「いだら、のオヤジの鑑定にクマがまぜつかえすような——と言っても本人は真面目なのだろうが——言葉を発する。」

「何それ、意味わかんない……ッ！」

「マリー！」

「いだら、のオヤジの鑑定とクマの発言を聞いたマリーが苛立ったように声を発しようとした時、突然彼女は頭を押さえる。」

「大丈夫か？」

「……だいいじよばない。頭、痛いよ……」

彼女を支えるようにしながら大丈夫かと尋ねる真にマリーは頭痛を訴え、その様子を見たいだら、のオヤジが「どっかに薬箱があったよな」と言いながら店の奥に駆け込み、雪子も「ご近所に薬を貰う方が早いかもしれない」と言っつて店を飛び出し、クマもその後を追う。

「う……何これ……何なの……」

頭痛を堪えつつ、マリーは「意味わかんない。イライラする」と苛立った表情で声を漏らす。

「何か浮かぶくせに……すぐ消えちゃう！ あとちよつとなのに！……」

「落ち着け」

「分かってるっ！ 分かってるけど……悔しい……こんなの。また何も思い出せない！……」

マリーは必死に記憶を取り戻そうとしており、真にその切実な気持ち伝わってくる。

「おい嬢ちゃん、大丈夫か!? 薬持って来たぞ!」

「マリーちゃん、大丈夫? お薬、りせちゃんとお婆ちゃんから分けてもらってきた!」

「マリーちゃん大丈夫クマー!?!」

「マ、マリーちゃん! 突然頭痛を起こしたって、どうしたの!?!」

直後、ほとんど同時にいだら。のオヤジ、雪子、クマ、さらには雪子が薬を貰ってきた時に話を聞いたのかりせが薬を手に戻ってくる。が、マリーはそれを無視するように店の入り口に向けて歩き出した。

「……帰る。まだちょっと頭痛いから」

マリーはそうとだけ言う。「頭痛いなら休んでいけ」といういだら。のオヤジの言葉や「無理しないで」という雪子達の心配の声に耳も貸さずに店を出て行く。

「……」心配をおかけしました。俺がついて行きますので」

真はいだら。のオヤジや雪子達に謝罪とお礼を言った後マリーを追って店を出て行き、彼女をベルベットルームまで送っていくのであった。

それからまた時間が過ぎて十月五日の夜。ここ数日雨が続いており家で見た天気予報では今夜は霧が出るという予報を聞く。そして夜中、真は外で霧が出ているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビが映り始めた。マヨナカテレビだ。しかしそれは砂嵐を映すのみで他には何も映らなかった。

(……よかった)

真は安堵の息を吐いてマヨナカテレビが消えていくまで何も映らないことを確認し、それから安堵と同時に疲れが出てきたのかふわあ欠伸をすると寝巻きに着替えて布団に入り眠りについた。

翌日、十月六日。真は登校途中に出会った陽介、千枝と共に校門にやってきていた。するとそこに直斗が立っているのを見つける。

「白鐘、体はもういいのか?」

「はい、おかげさまで」

真の問いかけに直斗は相変わらずクールながらどこか柔らかい声で返し、「改めて、この間はありがとうございました」と頭を下げお礼を言う。

「いいって。つかお前、その制服……」

「え……ああ」

陽介はお礼に対し深く考えるなど返した後、相変わらず女子なのに男子制服を使っている事をツツコミ、直斗はやや照れた様子で「少し迷いましたが、今まで通りにしました」と返す。

「皆さんも別に……」

「あ、『探偵王子』だ」

皆さんも別に気にせず今まで通りに接してください。とでも言うとうとしたのだろうか、しかしそれを遮る噂好きな男子生徒の声が聞こえる。

「王子じゃねーよ、アイツ、女なんだってよ!」

「え、う、ウソお!? あいつが女だったら、え、や、やべえって!」

噂好きな男子生徒と一緒に登校していた情報通の男子生徒が直斗は女性であると暴露、それを聞いた噂好きな男子生徒は何故か焦り出し、そこに遅れてやってきたショートカットの女子生徒が真相を知って「ガツカリなような、でもグツとくるような」という感想を漏らすと、茶髪の女子生徒が「そういう目で見ると、逆にイケてない?」と騒ぎながら歩いていく。

「やれやれ……噂は早いですね」

「安心しろ、俺達がついている」

「……あ、ありがとうございます」

噂話の広がり早さに直斗が辟易した様子を見せると、心配していると受け取ったのか真が言い、直斗は顔を赤らめながらお礼を言った後、「別に辛いという訳ではないのでそんなに気にしないでください」と答える。

「今まで通りでいいですよ」

そしてさつき言いそびれたことをもう一度言い直した後、彼女は冷静な探偵の目を見せる。

「それより、一度皆さんと集まって事件の事をお話しないと」

直斗は今回の事件をこの町に潜む「誰か」によって行われている「誘拐殺人事件」と判断、「まだ、終わっていない」と真剣な目で断言する。

「同意見だ」

「詳しい話は、放課後にしましょう」

直斗の意見に真も同意、直斗もそれを聞いて放課後に詳しい話をしようとする。真はもちろん陽介と千枝もこくりと頷いた。

第五十話 新たな真実。探偵少女の仲間入り

「初めに、チャイムが鳴ったんです」

10月6日の放課後。いつものジュネスのフードコートに集まった自称特別捜査隊は今回の被害者である直斗から話を聞いていた。

「ところが、玄関に出ても誰も居なくて……不審に思っていたら、急に後ろから腕が回って、何かで口を塞がれたんです。それからすぐに、袋のようなものを被せられて、恐らく担いで運ばれました」

「よくそんな覚えてるね」

直斗の詳細な説明にりせが驚いたように返す。同じく実際に誘拐された身だが自分は手掛かりに繋がる事は何も覚えていなかった、それは完二も雪子も同じであり、言葉には出してないものの二人も直斗の正確な証言に目を丸くしている。

「意識を奪うために薬物を使ったようですが、完全には意識を失わずに済んだので」

りせの言葉に対し直斗はそう説明。「想像していた手口と近かったし、心の準備が出来ていた」と付け加えた。

「それに、少しでも情報を得ておきたくて必死でしたから」

「さっすが、メイタンテーね」

直斗の覚悟をクマが賞賛するが完二は「冷静すぎんだろ」と、自らを囿にしている事は褒められたことじゃない。というような様子でツッコんだ。

「ちなみに白鐘さん、犯人の顔を見たりはしなかった？」

「……いえ。すみません」

命の問いかけに直斗は申し訳なさそうに首を横に振る。

「ですが、手際や体格から言って、犯人は男だと思えます」

しかし続けて冷静に推理を行い、「会話や合図らしい声は一切なかったため単独犯だと思われる」と付け加えた。

「ただ、ここから先がどうもよく分からない……」

だがそこで直斗の言葉が濁る。

「一度身体に衝撃があつて、恐らく僕はその時に、テレビの中へ落とさ

れたんだと思いますが……」

袋を被せられて担がれて、テレビの中へ落とされた。この一連の流れがものの数分だったような感じがする。と直斗は話す。

「捕まった直後にテレビにつて事？ あ、道端にテレビがあつたとか!?!」

「流石にねえだろ」

直斗の証言を聞いた千枝のどこかずれた言葉に陽介がツツコミを入れる。

「そこ辺りからの記憶は、流石にあやふやなんですが……」

「そうか……ありがとう」

直斗の証言が終わり、真は証言をしてくれたことにお礼を言う。

「それにしても大胆な犯人だねー。真正面からチャイムをピンポーンだなんて」

「うん。大胆っていうか、無謀っていうか……」

結生が驚いたような困惑したような様子で呟き、ゆかりも腕組みをしながらか考える。

「でも、確か完二君の時もそうだったんだよね？ 私はよく覚えてないんだけど……」

「あー……言われてみりや俺の時も誰か来たような気がすんな」

雪子の確認に完二が頷き、陽介も「どういう神経してんだよ……」と犯人の豪胆な犯行に対してぼやく。

「よく覚えてない」という、皆さんの証言の理由が、ようやく分かりました」

そんな中で直斗は冷静に、合点がいったように頷く。「常識を超えた異常な体験にテレビの中での心身の消耗、混乱をきたして当然だ」と彼女は言う。

「ただ、状況を見ると、僕と皆さんの失踪体験は、真似る必要のない所までよく似ている……恐らく、犯人は同一人物と見て間違いないでしょう」

「つて事は、結生さんが前に言つてたように、モロキンを殺した久保つて子は模倣犯だったつて事？」

直斗の推理と判断を聞いた千枝が確認を取るように聞くと、直斗は「自分はその推理を聞いていませんし、本筋が証明できない内は厳密には確定しません」と前置きをして話す。

「久保はやはり、諸岡さんを殺したに過ぎません。真犯人の手口を真似ただけの『模倣犯』です」

「道理で、モロキンの時だけ例外だらけだと思っただぜ」

直斗の言葉に陽介がぼやく。

「しかし、そうなるの一つ謎が残るんです……久保は何故、『あの世界』を知っているのか」

「つて、言われてみりやそうだよな。そもそもあいつテレビに入れねえのに、どうしてテレビの世界に?……」

続けての直斗の言葉に再び陽介が首を捻る。

「……スケープゴート」

それに答えるよう、だが今にも消え入るような声で呟くように言葉を発したのはゆかりだった。

「真犯人からすればさ、自分から罪を被ってくれるなんて願ったりじゃない?」

「でもゆかりっち、それならなんで久保氏がテレビに放り込まれて殺されかけるの?」

「……口封じとか? 真犯人からすれば久保が犯人だつて事になれば、その後どうなるのが構わないんじゃない? 罪を償う為の自殺、とか思わせる。とかさ」

ゆかりの言葉に結生が反論、ゆかりは僅かに詰まった後にそう返す。しかしその眉間にはやけに皺が寄っていた。

「ゆかり、無理はしなくていいから」

「……うん」

命が何か助け船のように言い、ゆかりはこくりと頷くと黙り込む。「世間で騒がれている異常な遺体状況も『向こう側ゆえ』なんでしよう」

ゆかりが黙った後、入れ替わるように再び直斗が話し始める。「テレビの中でシャドウに殺された遺体を、そのシャドウに襲われるとい

うリスクを冒して運び出し、現実世界で誰かに目撃されるといふさらなるリスクを冒してまで霧の日にぶら下げるなんてするよりも、あの遺体状況は向こう側で起きる異常現象の一つと考えるべき。その方が自然だ」と彼女は推理した。

「全ては本人から直に聴取できれば早いんですが……」

直斗はそう呟くが、続けて「生憎僕は、捜査からは外された身です」と悔しそうに語る。その上で「警察がこんな話にまともに取り合うとも思えない」と、テレビに放り込まれる前、修学旅行時に酔っ払っていた雪子が話していた真実を戯言と受け取っていた事を思い出しながら続ける。

「ていうか、犯人が別に居るって自体、認めないんだろうな……」

それに同意するようになりせが呟いた。彼女曰く「記者会見をやった事をひっくり返すのは重たいこと」らしく、その言葉を受けた直斗も頷いた。

「僕が捜査から外された最大の理由も、その可能性を訴えたからだと思えます」

警察としても逮捕してしまった容疑者を易々とは覆す事は無いだろう。ましてや逮捕した相手は少年。その上、今回の逮捕で事件を終わりにしたいと警察内部は考えている。と直斗は語った。

「犯人は他にいるかもって可能性、消えてないのに!?!」

「クソが……んなこったろうと思っただぜ。ま、ハナから信用しちやいねえがな」

直斗の証言に千枝が驚きの声を上げ、同時に完二が悪態をつく。

「けどさ、直斗お前……現場でそんだけガツツリ冷静だったなら、もうちよつと、こうさ……取り押さえろとまでは言わないけど……外出たら後ろからって、名探偵的に、どうよ……」

「い、いや……」

陽介も苦笑いしながら直斗にそう言い、その指摘に直斗は言いよどむと頬を赤く染めながらうつむく。

「正直言っと、その……結構、怖くて……」

そう言い、ごめんなさいと直斗は謝る。

「仕方ないよ。私達だって抵抗できなかったのに、下級生の、それも女の子だよ?。」

「ああ。話を聞いているとつい忘れてしまいそうになる」

それを雪子と真がフォローした。

「それにしても」

と、命がくすつと笑って直斗を見る。

「な、なんですか?。」

「いや、冷静沈着に見えて結構可愛いところあるよね。飛んでる。お嬢様?。」

命の評価に直斗は顔を真っ赤にし、「とにかく!。」と誤魔化すように声を張り上げる。

「真犯人はこれからも犯行を続けると見て間違いないでしょう……次の動きがあるまで、今は様子を見るしかありませんが……」

今はこちらから手出しする方法がない事を直斗は浮かない表情で呟いた後、決意を込めた目で真達を見る。

「もう、仕事でも他人事でもありません。僕は、僕らが狙われた事の実を知りたい」

そう言って、彼女は一度真達をゆっくりと見る。

「僕にも、協力させてください」

「もちろんだ」

直斗の協力の申し出を真は即答で受け入れ、直斗は「ありがとうございます」とお礼を言う。

「改めて、宜しく願います。リーダー」

「リーダーはやめてくれ」

だが続けての彼女の言葉に真は苦笑を返した。

「では、早速で恐縮なのですが……これからテレビの世界に行く。という事は可能でしょうか?。」

そして直斗はすぐさまそう切り出す。改めてテレビの中の世界やペルソナという能力について確認したらしく、探偵という、自分達よりも観察眼が鍛えられている彼女が見ればまた何かが分かるかもしれないと考えた真達もそれを了承する。

「ふっふっふ。空気の読めるボク、この展開読んできたのよね」

と、クマがそう言つて直斗にメガネを渡し、説明もそこそこ真達はテレビの世界へと向かった。

「……ここがテレビの世界。話には聞きましたが、霧が酷いですね……」

直斗はまず裸眼でテレビの世界を見回し、視界を覆う霧に顔をしかめた後メガネをかけ、その前後の違いにほうと感嘆の声を出し、スタジオの柱やら何やらを注意深く確認する。

「ふむ……普通の柱と比べて変わったところはない……これは、何も知らなければ現実世界だと思つても不思議ではないですね。この世界は一体……」

直斗は呟き、またふむと声を漏らす。

「……とりあえず、他にも確認してみたいですね」

「よし。適当な場所に行つてみよう……この前行つた直斗の秘密基地でいいか？」

直斗の要望に真が頷き、この前の秘密基地でいいかと確認を取ると直斗はびくうつと身体を震わせる。

「い、いや、その……」

「あそこの敵は厄介だし、テレビの世界を調査するなら別の場所の方が手ごろなんじゃない？ 白鐘さんはまだ戦い慣れてないんだし」

かーつと顔を赤くしながら声を漏らす直斗。どうやら流石に恥ずかしいらしく、それを察したのか命が助け舟を出す。

「そうか。なら天城の……」

「いつ、いや、そのつ、も、もうあそこ調べる事なんてないんじゃないかなあーあはは……」

天然なのか真は雪子姫の城に行こうとするが、雪子がそれを拒否。

「……ゲームダンジョンでいいんじゃない？ 久保の」

なんか話が進みそうにないというかあと二回ほど同じ話題でループしそうな気がしたのか、陽介がこの場にはいない久保美津雄の生み出したゲームダンジョンを候補に挙げたのであった。

「先輩、久保が居た場所に強力なシャドウ反応があるよ！」
直斗を伴ってゲームダンジョンに入った時、己のペルソナであるヒミコでダンジョン内部を調べていたりせからそう報告が入る。

「事件とは関係なさそうだけど……」

「まあ、せつかくだし。白鐘さんの様子を見ながらあわよくば倒しとこうか」

「そうですね」

りせの報告を聞いた命と真が方針を決め、直斗は「よろしくお願いします」と言って武器として渡された銃を握りしめる。

「ま、そう緊張しないで。私達がついてるから心配ないって」

「は、はい……」

やや緊張した様子を感じ取ったのか、結生が薙刀をくるくる弄びながら直斗に声をかけ、直斗はこくこくと頷いて返す。

「ん、こんな緊張してるって感じの女の子……可愛いなあ」
「へ？」

その時、突然結生の雰囲気が変わり、直斗は妖艶な笑みを浮かべぺろりと口元で舌なめずりしている結生を見て呆けた声を出す。

「そいつー！」

「はぐつ……」

だがゆかりが結生の背後から首筋に手刀を入れ、がくりつと倒れ込みそうになった彼女の首根っこを掴む。

「ごめん直斗君、気にしないで」

「は、はあ……」

ぺこりと頭を下げて謝るゆかりに直斗は呆けた声でそう漏らすしかなかったのであった。

「敵三体発見！ その先の角から来るよ!!」

瞬間りせからの通信が聞こえ、その時すぐに真達の雰囲気が変わる。そしてりせの言っていた通りダンジョンの曲がり角から、何も知らなければ不意打ちをくらうタイミングで三体のシャドウ——依存のバザルト、狂気のキュプロクス、正義の剣が姿を現す。

「よっしゃ、いくぜー！」

一番に完二が武器である盾を手に突進、正義の剣が振り下ろす剣を盾で受け止め、そのまま押し返すと盾を鈍器のように振り回し、正義の剣を吹き飛ばす。

「どーんっ！」

次に千枝が自慢の蹴りで、押し潰そうと向かってくる依存のバザルトを蹴り飛ばす。

「お願い、コノハナサクヤー！」

さらに雪子がカードを扇子で砕いてペルソナを召喚。炎をまき散らして狂気のキュプロクスをダウンさせる。

「今だよ、直斗君！」

「は、はい！」

りせが合図を送り、直斗は集中。それと共に彼女の目の前にカードが現れ、直斗はカードに銃口を向ける。

「来い、スクナヒコナ！」

引き金を引き、放たれた銃弾がカードを破壊。それと共に小柄な体躯に似合わぬ長大な刃の剣を握った虫顔の人間——彼女の心ペルソナの鎧であるスクナヒコナが召喚される。

「メギドラー！」

直斗が命じると共にスクナヒコナが剣を振るい、上空に光が集中。その光から突然光線が地面に落とされ、その衝撃波が三体のシャドウを薙ぎ払い消滅させる。

「すっごっ!?!」

「マジか、一瞬じゃねえか……」

千枝が声を上げ、陽介もぼかんとする。

それからダンジョンを進みつつ直斗のペルソナの能力を確認していき、スクナヒコナが得意とするのは万能属性と闇、光属性のスキル。さらに炎と風のスキルもやや使える他、物理系のスキルまで揃えている。という何事もそつなくこなせる直斗らしいペルソナと言える。

「でも万能属性、闇属性、光属性のスキルは強力な分精神的な消耗も激しいから。そこはうまく使い分けていかないかね……」

「き、気をつけます」

命は剛毅蟲を殴り飛ばしながら直斗に注意を行ない、直斗も先達の言葉だからか素直に注意を受け入れる。

そのまま彼らは以前久保を捕まえにやってきたダンジョンの最奥地へと到着。硬く閉じられている巨大な扉の前に立った。

「……準備はいいな？」

先頭に立つ真が確認を取り、残る全員がこくりと頷くと真もこくと頷いて返し、扉に手を当てる。以前やってきた時は封印されていた扉、しかし今回は少し押すだけで簡単に開いていき、真達はその中に足を進めていった。

「フアイトだよ、先輩！」

りせの応援が最上階のコロッセオに響く。その中央に立つのは中世どころか近代をも超えた近未来的な存在である人型ロボット。巨大な体躯に見合う巨大な剣を持つ姿は圧巻と言えるだろう。そのロボットはコロッセオに入ってきた真達に気づくと頭部を一網打尽にされないよう散開し一人になつていた真の方に向ける。

「くっ!？」

その口から放たれる淀んだ吐息に真が怯んだ隙にロボットは剣を握らぬ左手を真に向ける。と、その左手から闇の力が放たれ、真の目の前に呪殺の陣が敷かれる。

「イザナギッ！」

咄嗟に闇属性に耐性を持つイザナギを呼び出して呪殺攻撃を無効化する。だがいきなり呪殺を狙ってくる相手に真は冷や汗をかいた。

「キントキドウジ、マハタルカジャクマ！」

「ジライヤ、パワースラッシュ！」

「トモエ、黒点撃！」

クマがペルソナの力を増強させるスキルを使うと共に左右から陽介と千枝がペルソナを召喚、ジライヤが光を纏う手裏剣を投げつけ、トモエが光を纏った足で一点に力を集中した蹴りを入れる。だがロボットはそれに堪える様子を見せず、剣を振るって二体のペルソナを追い払った。

「そいつ、物理に耐性あるみたいだよ！」

「だったらこいつでどうだ！ タケミカズチ、ジオダイーン!!」

「ゴノハナサクヤ、アギダイーン!!」

りせがすぐさま分析、完二と雪子がペルソナに魔法攻撃の指示を出し、巨大な落雷と爆発がロボットを撃つ。だがロボットは負けじと剣を掲げた。

「エウリユデイケ、パラダイムシフト！ フレイム！ マハタルンダ!!」

「パールヴァティ、マハラクカジャ!!」

剣を振り下ろすと共に無数に広がる不可視の斬撃。だが結生がその斬撃の威力を鈍らせ、さらに命が展開を命じた青い障壁が仲間を守る。だが単純な物理攻撃は通じないと判断したのかロボットから淀んだ空気が発生、辺りを包み込む。

「何か来る！ 全員警戒しろ！」

真は先ほど受けた呪殺攻撃のような何かを警戒、全員に呼びかける。その時ロボットが剣を振り下ろすと青い衝撃波が無数に発生、真達を斬り刻んでいく。

「……………」

だが思ったよりもダメージはなく、真は怪訝な目を見せた。しかし彼は身体を斬られると共に何か別の何かを斬られたような錯覚を同時に感じる。

「アアアアアアッ!!!」

「!?!」

突如聞こえてきた絶叫と殺気、真は咄嗟にそっちに剣を構え、同時に構えた剣に二本の短剣が当たる。

「陽介!? どうしたんだ!?!」

襲ってきたのは陽介。真が必死に呼びかけるが陽介は力の限り短剣を押し、真を斬ろうとしている。よく見るとその目は正気を失っているように光がない。

「雪子、どうしたの!? 目を覚まして!?!」

「お、おいクマ!?! テメエ何金ばらまいてんだ!?!」

しかも他にも正気を失っているメンバーがいるのか雪子はドス黒い笑みを浮かべて説得を試みている千枝に攻撃を仕掛け、クマはあやしい踊りをしながら金をばら撒き完二がクマに呼びかけながらばら撒かれるお金を拾い集めていた。

「み、皆混乱してるよ!?!」

「くそ！ 先輩、まずは状態異常の回復を！」

りせが全員の状態を分析、陽介、雪子、クマが混乱していることを見抜き、真が命に呼びかける。

「命くん、命くうん……」

「お兄ちゃあん……」

「ゆ、ゆかり！ 結生！ 正気に戻るんだ!?!」

「……そつとしておこう」

だがゆかりと結生も混乱して何故か命に甘えており、だがやばい色香に命が悲鳴を上げる。それを見た真は何も見なかったことにした。だが三人も混乱状態で戦線はガタガタの上にロボットはまた剣を構え、追撃の様子を見せていた。

「先輩！ 僕が時間を稼ぎます！」

「白鐘!?! くそ、完二！ この際お金は後回しだ！ 白鐘を援護しろ!!」

「つ……ウツス！」

と、直斗がロボットに向けて銃を撃ちながら突進、真はそれを見てすぐにクマがばら撒いた金を拾い集めている完二に直斗の援護を支持し、完二は金を捨てるという行為に躊躇しつつも直斗に何かあってからでは遅いと男らしく金を投げ捨ててロボットの方に走る。

「アアアアアアツ!!」

「ちっ！」

混乱している陽介は一旦バックステップで距離を取った後、絶叫しながら再び突進。その勢いを込めて左手の短剣を突き出すが真はそれをサイドステップを踏んでかわし、しかし陽介は右手に持つ逆手に握りを変えた短剣で回避した真を狙い、だが真はそれを刀で防ぐ。そこから真と陽介の痛烈な剣劇が開始された。

「アアアアアアッ!!」

「正気につ——」

互いに数メートル程度の距離から陽介が短剣を振り上げて突進、真も中段の構えから突進する。

「——戻れっ!!!」

そして陽介の振り下ろした短剣と真が横に薙ぐ刀が交差、二人は突進の勢いのまま距離を取る。

「ぐはっ……」

その後、僅かなタイミングを置いて倒れたのは陽介。真はそれをちらりと確認した後、峰を向けていた刀を背中の鞘に収めて右手に精神を集中。ペルソナカードを具現する。

「ラファエル、アムリター!」

カードを握る要領で砕き、召喚するのは大天使ラファエル。彼が剣を掲げて気合を入れた声を発すると共に癒しの光が降り注ぎ、混乱していたメンバーを正気に戻していく。

「タケミカズチ、ミリオンシユート!!」

一方完二はタケミカズチを召喚、闘気の矢を放ってロボットに連続攻撃を仕掛ける。さらにロボットの頭上に光が集中。

「メギドラ!!」

直斗の声と共に光線がロボットの頭上から地上を貫き、そこにスクナヒコナが剣を手に突進する。

「五月雨斬り!!」

小柄な体軀を生かしたスピーディな剣技、それを受けたロボットは闘気の矢による援護も手伝い、バランスを崩してダウンする。

「敵は総崩れです! 仕掛けましょう!!」

「皆、行くぞ!!」

直斗が合図をかけ、真の号令で千枝や雪子達も一斉にロボットに総攻撃を仕掛ける。

「これで……終わりですっ!!」

総攻撃の締めには直斗が銃を構えて引き金を引き、銃弾を放つ。その銃弾がロボットの頭部を貫き、ついに限界になったのかロボットは

真つ黒な影となつて消滅していった。

「これが、シャドウとの戦い……なるほど、これは……なかなか興味深いですね」

直斗は今まで体験した事のない戦いにやや高揚気味の笑みを見せつつ、安全装置を確認してから銃をホルダーにしまう。

「それにしても厄介な敵だったねー。ロボットなのにこつちを状態異常にしてくるなんてさ、もっとこう真正面からかかってこいつての！」

「ご、ごめんね、迷惑かけて……」

「ごめんなさいクマ……」

千枝は剣を持ち明らかな肉弾戦型ロボットのくせして状態異常に陥れるという戦法の敵に慚然とした様子を見せ、混乱してまともに戦えていなかった雪子とクマがそれを謝罪する。

「あ、あああああう、あ、あたし命君にあんなこと……」

「よ、よしよし……」

同じく混乱していたゆかりは顔を湯気が出そうなほど真つ赤にして、やや脱げている制服を着直す余裕もないほどにオーバーヒートし、結生がそれを苦笑気味になだめる。だが彼女も彼女で恥ずかしい記憶は残っているのか顔が真つ赤だった。なお命はその横で真つ青な顔をしつつ「危なかった、なんとか理性を保てた……」と呟いている。

「ふう……」

真は息を吐きつつ、ふとコロッセオを見回す。と、奥の方に何か置かれていることに気づき、奥へと足を進める。

「……骸骨か」

何かと思つたがドット絵で表現されている骸骨。だがその骸骨に一本の剣が突き刺さっており、真はなんとなくその剣の柄を握りしめると力を入れて引つ張る。と、あまり抵抗もなくその剣は引き抜かれた。

「……強そうだな」

青銅色と言えいいだろう色をした柄の両刃の剣。その形はどこ

かのRPGの勇者の剣にも思え、真は気に入ったのか剣をそのまま持って仲間達の元に戻る。そしてクマがばら撒いたお金を全て回収し終えてから、真達はテレビの世界を後にした。

「失礼します」

翌日10月7日の昼休み。教室で駄弁っている真達四人の耳に入る礼儀正しい挨拶の声、その聞き覚えのある声に四人が出入り口の方を見るとそこには直斗が立っており、彼女はそのまますたと迷いのない足取りで真達の元に歩み寄る。

「今日の放課後、時間ありますか？」

「何か、事件？」

いきなりそう問うてくる直斗に千枝が不思議そうに聞き返す。が、直斗は「いえ」と首を軽く横に振って返す。

「実は、クマくんを医者に診せてみたいんです」

直斗の言葉に雪子が「獣医さん？」と真顔で聞き返し、直斗は困った様子を見せながら「一応、人間用です」と返す。

「空いているなら、今日の放課後、精密検査を受けられるように手配しましたから」

直斗曰く、クマが何者なのかまずは普通に医者に診てもらおうのもいいかもしれない。それにテレビの世界を覆う霧やペルソナという人知を超えた現象や力が身体に何か影響を蓄積をしていないか。それを診てもらった方がいいかもしれない。という事だ。

「えー、影響？ こ、怖い事サラツというなよ……」

「だが、その発想はなかったな……」

陽介が嫌そうな声を出し、しかし真は直斗の提案に感心したように頷く。

「異くんや久慈川さん。それと命さん達の方も頼んであります。当日に事後承諾になってしまい申し訳ありませんが、空けておくようお願いします」

「ああ、分かった。先輩達には俺から伝えておくよ」

「よろしくお願ひします。では、失礼します」

直斗の提案を了解した真に対し直斗は一礼、教室の出入り口で「失礼しました」と一言挨拶を述べて教室を出て行く。最後まで礼儀正しい振る舞いを見せていた。

「なんていうか……ホントに高校生？　なんかすごい手際いいんだけど……」

それを見送った後、千枝がぼかんとした様子で呟いた。

それから時間が過ぎて放課後。真達は直斗に紹介された病院で精密検査を受けた。

「フツの健康診断だったな……」

検査を終えた後、陽介がそう感想を述べる。精密検査と言われているもののやった事は通常の健康診断に少々する事が増えただけ、完二は「すっげー機械に乗って回されたりすんの、ちつと期待したんスけどね」とやや残念がつており、りせも「受けた意味あったのかな？」と検査担当の医者が不思議そうな顔をしていたのを思い出す。

「あ、戻ってきた」

雪子の言葉と共に、検査が長引いていたらしいクマと付き添いの直斗が戻ってきて「お待たせしました」と挨拶する。

「クマのこと、何か分かったか？」

「分かりましたよ……」

陽介の言葉に直斗が頷く、しかしその顔はやや困惑気味のものだった。

「分からないって事が」

そして彼女はそう続けた。

「どういう事かな？」

「レントゲンを撮ってもらったんですが、映りませんでした」

命の問いかけに直斗はそう答える。何度撮っても結果は同じで、見た目の様子や触診では異常はないらしく、最終的には機械がおかしいかもしれないのでまだ心配なら別の病院に行く事を勧められたらしい。

「逆に迷惑をかけたかもしれませんね……」

「やっぱり、普通と違うんだね……」

直斗の眩きの横で雪子は改めてクマが普通の生物とは違う事を認識。しかしそのクマは頬に手を当てて「クマ、奥の奥まで見られちゃった」と照れたように顔を横に振り、千枝が「だから見えてねーっつ」の「とツツコミを入れる。」

「まー、異常はねえって事なんスよね」

しかしクマの正体を探るという当初の目的こそ達成できなかったものの、霧やペルソナが身体に影響を及ぼしている可能性は今のところない。という結果に完二はうんうんと頷き、しかしその次に腕を組む。

「けど、こいつもそうスけど、実際なんなんスカね。ペルソナとか、シャドウとか……」

「そういや、前に図書館やらネットで調べてみたぜ？ ペルソナってのは、なんつーか別の人格……みたいな意味だろ？ 関連ワードで、シャドウってのもあった気がするけど……」

「シャドウは、シャドウ……人間から出るもの、だと思う……」

完二の疑問の声に陽介がそう言うのと、クマがやや曖昧そうな口調で続ける。

「……お兄ちゃん、もしかして話してないの？」

「……そういえばちらつとは話したけど、ちゃんとした説明まではしてなかったっけ」

「あんだねえ……」

と、結生が訝しげな様子で命に尋ね、命がぽんと手を打つとゆかりが呆れた様子で眩く。

「……あくまであたし達の知ってる知識になるから、真君達やマヨナカテレビに適應できるかまでは分からないんだけど……そもそもとしてペルソナとシャドウっていうのは根本的には同一の存在なの。自らの心の中に抑圧された感情、それがシャドウであり、そのシャドウを制御する事でペルソナになる」

「ペルソナになる……そっか、倒したシャドウがペルソナになったもんね」

ゆかりの言葉を受けた千枝が自分達の経験を思い出して納得したように頷く。

「まあ、自分の心から生まれる存在。その意味で言えばペルソナもシャドウも同じなんだ。そしてペルソナとは人が外側の物事と向き合った時、表に出てくる“人格”。簡単に説明しちゃうと人と接する時とかに無意識に出てくる表層人格、それが固有のペルソナとなるんだ……だから僕や真君みたいな存在は色々例外なんだけど」

ゆかりに続いて命が話す。と、完二はその説明で頭がこんがらがったのか「むむむ」と唸り声を上げた後、頭をがしがしとかく。

「まあ、細けえ事あい……何モンだろうと、邪魔すんならぶっ潰すだけだぜ」

「でも、相変わらず不思議だよ。影時間も消えたのになんでシャドウがいるのかとか、そのシャドウが跋扈してるマヨナカテレビってなんなんだろ?」

「そこは僕も不思議に思ってるよ……こっちが必死こいて封印したつてのに」

「……必死こいた結果、死にかけてちや世話ないわよ……バカ」

完二の言葉の後に結生が呟き、命がため息をつくゆかりが頬を膨らませる。

「ごめんね、ゆかり。もう君を悲しませるような事はしないから……」
「信じらんない」

謝る命と頬を膨らませたままぶいつと顔を背けるゆかり。なんかイチャイチャ空間を展開し始めた。

「なーんか、自分自身の事なのに、分かんない事ばかりね」

イチャイチャ空間に目を細めつつ、りせは話を元に戻そうとそう呟く。

「分かる事もあるクマよー」

それにクマが明るく返し、もっとイカしたデータを色々持ってんの。と続けるとどこからともなく何枚かの資料を取り出した。

「今のご時世、情報開示って大事ですよ。という事で、みんなの検査結果、ドッキドキ大発表クマーッ!」

「なっ!?」じよ、冗談じゃないっての! 返してよ!!」

どうやらクマが取り出した資料は検査結果らしく、それを知った千枝が血相を変えてクマから資料を奪い取ろうとするが、クマはそれをひらりひらりとかわしながら検査結果を確認。ほほーつと感心したような声を出す。

「よし……どーせ発表するならな……スリーサイズ行け!」

「はあ!? バツツツカじゃないの!?!」

その様子を見ていた陽介がクマをけしかけ、その提案に千枝が怒号を上げ、雪子が目付きを鋭くして陽介を睨み付ける。

「私は別にいいけど? とつくにプロフ出てるし」

ただりせは既に正式なプロフィールが事務所から出ているためか涼しい顔をしており、本当にスリーサイズが公表されそうな空気になった雪子が慌て出すとりせはにまにま笑いながら「男の子にはウケると思うけどなー」と返す。

「それに、胸はこのくらい控えめの方が、和服は着やすいと思うし」
「な、なっ……」

りせの言葉に雪子は顔を真っ赤に染め上げる。

「つと、そっか、直斗君もか」

そこでりせは直斗に気づいたのか直斗の検査結果をクマに見せてもらう。

「……こ、これ……ホント? え、計り間違えてない?」

「そこまでだ」

絶句した様子のりせがそう言ったところで真がクマとりせの手から検査結果を回収。中身が見ないよう注意しながら直斗に手渡した。

「白鐘、処分してきてくれ」

「は、はい!」

真からの指示を受けた直斗は足早にその場を去っていき、真は陽介を睨む。

「えーつと……まあ、みんな健康で何よりだな!」

陽介は汗をだらだらと流しながら誤魔化すように言葉を紡ぐ。

「はあ……次はないぞ? つつか、万一岳羽先輩と結生先輩のそーい

うのばらしてみろ、俺達命はないぞ?」

真がそう言つてちらりと見るのは未だにイチャイチャ空間に入っている命とゆかり。命は幸い気づいていないようだが陽介もそこでもようやく彼の怒りを買う可能性があつた事を把握、「すんませんでしたー!」と絶叫して頭を下げる。

「……センセイ。結局、映んなかつたクマね……クマの正体……なんなのかな……」

陽介達が先に移動した後で、クマが真に向けてポツリと呟く。さつきは明るく振る舞っていたが、レントゲンに映らなかつた事をクマなりに気にしていたようだ。

「一緒に探そう」

「うん……ありがとう、センセイ……」

落ち込んだ様子のクマに真がそう返すと、クマは嬉しそうに頷いて感謝の眼差しで真を見つめる。

「おーい、置いてくぞー」

その時陽介の声が聞こえ、真とクマは共に仲間の元に歩いて行ったのであつた。

第五十一話 ジュネス・フェスティバル

「頼むっ！ 皆力を貸してくれっ！ このままじゃ俺、転校させられちまうっ!!」

10月8日、ジュネスのいつものフードコート。陽介からの緊急集合を受けた真達はここに集合し、そう思うと陽介が手を合わせてお願いいしてきていた。

「…………いきなりどうしたんだ、陽介?」

真が目を点にして問いかける。その横ではジュネスに行く途中拾った(というかジュネスに行く)と聞いて「行きたい」とねだり、押し負けた) マリーもいてジュネスを飲んでいる。

「それが、今週末どうしても人を集めなくちゃいけなくって…………」

「今週末…………もしかして、中止になった稲羽署のイベント絡みですか?」

「何、それ?」

「今度の日曜日、アイドルの『真下かなみ』が一日署長をする予定だったんです」

陽介の言葉を聞いた直斗が流石探偵というべき洞察力で推理し、雪子が話についていけずに首を傾げると続けて説明。クマが「花丸急上昇中の『かなみん』がこのようなド田舎に!」と驚きの声を上げ、千枝が「ド田舎で悪かったな」と彼を睨む。

「…………誰?」

「現在人気急上昇中のアイドルでね、たしか世間ではポスト『久慈川りせ』の最注目株だって」

だがマリーは首を傾げており、結生が説明する。

「かなみ、もうそんな仕事取るようになったんだ…………」

「確かに最近テレビでよく見るかも。りせちゃんと同じ事務所なんだ」

りせの眩きに続いて雪子がそう言うのと、りせは複雑そうな顔を見せて「いま稲羽市に来るって、地味に私の騒ぎ追い風にしようって事じゃん」と事務所の目論見を予想する。

「そのかなみんの一日署長イベントが急遽中止になっちゃってさあ」
「僕の失踪騒ぎで、警察署の受け入れ準備が出来なかつたらしいです。
申し訳ない事をしました……」

「白鐘のせいじゃない」

陽介のため息交じりの言葉に、直斗が責任の一端は自分にあるとい
うような申し訳なさそうな口調で言うと言が彼女を気遣う。

「で、それがポシヤンのと花村先輩がヤバいのと、どう関係してんスカ
？」

そして完二が本題に切り込む。確かに今までの話では真下かなみ
の一日署長イベントと陽介には一切の繋がりが無いように思える。

「便乗してセールをしようとしたら、裏目に出ちやっただクマねー」

「かなみん効果で人集まる事前前提のセールだったからさあ。親父マジ
困っちゃって……」

「店長、頑張って準備してたよね」

クマの笑いながらの言葉に陽介が頭を抱えながら言うと言バイトで
ある命が残念そうに呟き、結生とゆかりも頷く。

「それで、結局俺達を呼んだ理由はなんなんだ？」

真が尋ね、千枝も「そこまでの話だと正直あたしには……」と口
ごもる。

「皆には、色々準備とか手伝ってほしいんだ」

そう言った後、陽介はやや引きつった笑みを浮かべてりせを見る。

「そ、それで、久慈川さんにはその、なんだ……ジュネスで、イベント
など……」

「私にかなみの代わりをやってこと？」

「……やっぱ、ダメ？」

陽介の言葉にりせが不服そうに聞き返すと、陽介は浮かぬ顔で呟
く。

「……もしかして、マジで結構ヤバイの？」

「分かんねー。俺、息子たつてバイトだし……」

陽介の様子を見たりせが尋ね返すと陽介は流石にバイトではそこ
の事情までは分からないのか首を横に振り、しかしバイトではなく息

子として、父親が妙に優しい事から何かヤバいんじゃないかと思ってる事を告白する。

「店長がクビとか、あんのかな?……」

「そうなったら店長も花村君もこの町にはいられない……」

「だから転校か……」

陽介の浮かない顔での言葉に命が冷静に眩くと、真もようやく冒頭の言葉の意味を理解。りせに向けて頭を下げた。

「久慈川、気が進まないだろうが俺からも頼む……力を貸してやってくれないか?」

「え、ちよ、先輩?!? そんな……」

「俺に出来る事ならなんでもする。だから、頼む」

真剣な顔で頭を下げてくる真にりせは慌て出し、彼女は「う」と唸った後どこか睨むように陽介を見る。

「う、歌と握手だけ」

「マジ、いいの!?!」

「ただし、サインとか高校生って肩書きで出来ない事は全部NG。逆に大事になっちゃうから」

りせからの出演了承に陽介が歓声を上げ、りせは冷静にサインなどは逆に大事になるからNGと付け加える。

「それと、もう一つ条件」

そしてりせはにこつと微笑む。

「先輩達も一緒に出る事」

『……………は?』

その言葉に自称特別捜査隊メンバーの呆けた声が重なった。

「せくんばい、自分出来る事ならなんでもするんですよね?」

「……………分かった。俺はやる」

りせの愛くるしい微笑みでの言葉に対し、りせに出てもらう条件として自分で言った事を撤回するわけにはいかないのか真は二つ返事で引き受ける。

「ごめん、僕達は無理」

「その日、丁度シフト……」

「流石に今から代わってもらうのも難しいし……」

「うん、命さん達は仕方ないよ」

命達三人はシフトが入っているらしく、りせもあくまでジュネスの手伝いなのにそのジュネスのバイトが入っている三人をこつちに引き抜くのは本末転倒と考えているのか了承する。

「で、花村先輩は？ シフト入ってる？」

「あ、いや。最近親父がシフト融通してくれてて、入ってない……」

「じゃ、決まりね♪」

「……分かったよ」

最近父親が妙に優しい活動の一環なのかシフトが入ってない陽介も参加決定。

「い、一緒に出るって……ア、アイドルとか、そういうの困る」

「スカウトとか来たら困る」

「ジュネスと専属契約してるから困る」

「や、困り方おかしいだろ」

千枝、雪子、クマはずれた困り方をしており、完二がそれにツツコミを入れる。

「つか、俺らに何させようってんだよ？」

「踊るの？」

「そういうのは後で嫌って程やると思うよ。まあ、この話ではしないだろうけど」

「何言ってるの？」

完二の言葉に結生が続くと命がしれつと言い、ゆかりがツツコミを入れる。と、りせはふふつと微笑んだ。

「バックバンドに決まってるでしょ？」

「いつ、いやいやいやっ！ バンドとか無理ゲーすぎだろ!？」

りせの言葉に陽介が慌て始める。だが既に参加すると言った手前引つ込むわけにもいかず、陽介はまだ参加を表明せず、バンドに興味なさそうな直斗の方を見た。

「鍵盤なら少し弾けなくもないです。祖父の薦めでピアノを習ってましたから。持って来れますよ、キーボード」

「乗り気!？」

だがその直斗はあっさりと参加を表明し、千枝が意外そうに直斗を見る。

「今回の件は僕のせいでもありませんから。やれることは、やりますよ」「直斗……しゃあねえ、腹くくるか!」

イベント中止の原因は署の受け入れ準備が出来なかったから、受け入れ準備が出来なかった原因は直斗の失踪（実際には誘拐）のため。その償いとして真剣に参加する様子の直斗を見た陽介はついに腹をくくり、そこで思い出したように笑った。

「そういうえば、俺もギターはあるぜ! 弾いた事はあんまねーけど。ってか、うっかり買ったベースも物置にあった気すんぞ!」

「うっかり買うか! どうせ間違っただんでしょ!」

陽介はギターをやる事に決め、ベースをうっかり買ったという言葉に千枝がツツコミを入れる。

「そういう事なら、ウチにも宴会用の何かある」

「何か……ツスカ」

「じゃあ決まりっ!」

トントントン拍子で全員の参加が決定し、りせが楽譜を探してくる間に真達は楽器と練習場所の確保に走り出した。

「すみません。助かりました、部長」

「いやいや、気にしなくていいよ。今日は部活も休みだし、掃除とか片づけとかちやんとしてくれるんなら」

八十神高校の吹奏楽部の練習場所である音楽室。真はちよつと用事があったて学校にいたらしい顧問と部長に掛け合っここを開けてもらっていた。

「それにしても、一体何を始めるんだ?」

「ちよつと、バンドの練習なんかを……」

「はあ……まあいいや。じゃあ頑張ってね。練習が終わったら掃除と片付けして、鍵を先生に返しといて」

部長は一応何をするのかを聞きつつも深くまでは聞かず、最後にもう一度練習後の掃除と片付け、鍵の返却について注意すると去っていった。

「いやー流石は吹奏楽部。助かったぜ」

にししと笑いながらそう言う陽介に真も「ああ」と返す。

「で、どうすんのこれ。吹奏楽部で余ってんのか、適当にかき集めてきたけど」

千枝がテーブルの上に乗せたたくさんのお菓子をしながら言うと、完二はテーブルとは別の方を見ながら目を細める。

「……アレなんスか？」

「ドラだけど？」

「や、知らないの？」 みたいに言われましても……」

完二が見ているのはドラ。それに対し、持って来た本人らしい雪子がお不思議そうに返す。そのあっさりとしすぎた返答に陽介は言葉に詰まった。

「千枝がね、鳴らしたいかと思つて。ほら、中華っぽいし」

「や、中華かどうかは、この際どうでもいいけど……」

雪子の言葉に千枝がツツコミを返した。

「ヨースケ、これちよつと持ってみるクマ」

「なんだよ？」

と、クマが陽介に何か差し出し、陽介もそれを受け取ると両手に一本ずつ持つ。マラカスだ。

「なるほど、これは……」

「あー、あんた武器そなんだよね。ちよつとそれでペルソナ出してみ？」

「おっし——」

何か感心している直斗と、普段から似たような形の武器を使っていることから千枝がそう言う。それに陽介もこくりと頷き、いつもテレビの中でやっているように構える。

「——ペルソナー……って出せるかーっ！」

ポーズを決める陽介だが当然出せる訳もなく、直後ツツコミが響い

たのであった。

「なら私、これにする」

そう言つて雪子が持つのはタンバリン。しかし彼女は直後何がツボに入ったのか笑いながら「これ、扇の代わりになるんじゃない」と言つており、千枝に「頭が宴会属性になつてんな」とぼやかれていた。「つてか、シヤカシヤカ振るよりまずギターとかだろ！　なあ真、俺ギターやるからベースやらね？　少しなら教えられるし」

「……」

陽介の言葉に真はちらりと、ベースの弦をはじいて遊んでいる様子のマリーを見る。

「マリー、ベースをやってみるか？」

「えっ!？」

真の言葉にマリーが驚いたように彼の方を見る。

「別にギターはバンド一つに一人というわけでもない。俺と陽介でギターをやろうと思う」

「うん！　ビジュアル的にもそつちが良さそう！」

真の言葉にリセがハートマークを乱舞させながら賛成する。

「も、もしかして真、お前ギター経験者!？」

「いや、トランペットと音楽の授業でピアノとリコーダー以外楽器はした事がない」

「経験者じゃねーのかよ!？」

やけに自信満々な真に陽介が驚くが、きつぱりと真が宣言するとツツコミを入れる。

「ま、まあ、音楽関係の経験者である事は間違いないんだよな？　頼りにしてるぜ、相棒」

「じゃあ先輩達とマリーちゃん、直斗君は確定として——」

続けて苦笑しながらそう言う陽介の横でリセは冷静に楽器の担当を決め、完二を見る。

「——完二はドラムね」

「勝手に決めんなコラ！」

「あんたが前出たらメタルバンドみたいになるでしょ?！」

勝手に楽器を決められた完二が不服そうに叫ぶがりせは聞き入れず、陽介がくくつと笑う。

「ドラムいけんじゃね？ お前、叩いたり踏んだりは得意だろ？」

「屁理屈だろそれェ！」

陽介の言葉に完二がツツコミを返し、その近くでクマが「ソウルのままに熱いビートを打ち鳴らすぜい！」と気合を入れる。が、全員呆れた様子で一瞥するだけに止める。

「あのさ……もしかしてあたしと雪子、余ってない？」

「先輩達はええと……バックコーラスとか？ パートあるよ？」

千枝の指摘にりせがあっさりバックコーラスの担当を出す。

「う、歌!？」

「無理無理無理！ なんか持つ！ えーと……簡単そうなのは……」

千枝と雪子は大慌てで楽器を探し始めた。

そして全員の担当が決まったところで練習開始、楽器を並べて一度立ってみる。

「おお！ なんかソレっぽくね？」

「うん、見た感じ悪くないかも」

陽介の歓声にりせも頷き、千枝と雪子がそれぞれトランペットとサクスを口に当てる。しかしスースーという空気が吹き抜ける音が出るだけで、それぞれの音色は一切出ていなかった。

「……音でない」

「これ、壊れてんじやん？ なんかスースー言うよ？」

「貸してみてください」

雪子と千枝が首を傾げ、すると真が千枝からトランペットを借りて口に当てる。そして息を吹き込むとあっさり軽快な音色がトランペットから奏でられた。

『……』

千枝やりせ、他のメンバーも啞然となる。

「初めはそういうものだ。コツを掴めばすぐに慣れるさ」

「あ、うん……」

きちんとハンカチで吹いていた場所を拭きつつ千枝にトランペッ

トを返しながらアドバイスを送る真。千枝もぽかんとしながら頷き、真は元の位置に戻るとギターを構え直した。

「と、とにかく時間ないし、練習始めましょー！」

「どころで一ついいクマ？」

我に返ったりせが練習開始を宣言。しかしその腰を折るようにクマが手を上げる。その手には楽譜が握られていた。

「この紙に書いてあるオタマジャクシは何者クマ？」

「……そういやあたし、楽譜とか読めないわ……あははは」

「私も……」

クマに続いて千枝と雪子も楽譜が読めない事を思い出す。

「やっぱ転校するのか、俺……」

陽介も諦めムードに入っていた。

「諦めるのは早いですよ」

だが直斗がそう言い、彼女は楽譜を分析する。

「この曲ですが、実は繰り返しのパターンがとても多いんです。Aメロ、Bメロ、サビ、どれも同じパターンを二度繰り返ししています」

「おお、言われてみれば……」

直斗は流石は名探偵と言える分析力をもって皆に安心を与えていく。

「一安心出来たところで、練習を始めよう」

「おっしやー！」

真が改めて練習開始を宣言、陽介も気合充分に頷いた。

それから練習開始。基礎がある程度出来ている陽介と直斗は曲を練習し、千枝と雪子はまず音を出すことからスタート、完二やクマも楽譜の読み方から学び、マリーは真から教えてもらいながらマンツーマンレッスン、りせも発声練習として今回歌う歌をそらで歌い始める。

その日は基本的な個人レッスンのみで終了し、真が翌日も音楽室の使用許可を取ったところでメンバーは帰宅。

また翌日の10月9日、自称特別捜査隊メンバー&マリーは音楽室に集まっていた。

「もっかい頭から！ ワン、ツー、スリー、フォー！」

歌手兼コーチとなったりせが強い口調で合図を出し、それに従って真達が演奏を開始する。朝からバンド全体で合わせての練習になっているのだが、やはり初心者が多いどころかほとんどのせいかな演奏のテンポがややずれていた。すると、突然カーツ、という何か固いものをぶつけたようなそれでいて震える音が響き、思わず全員が演奏を止めてしまう。

「あたしじゃない！……多分！」

「私でもないよ？ だってこれ、音出ないし」

千枝が言い、続けて雪子が言う。

「ナウでヤングなオーディエンスたちは、音楽にも『意外性』を求めているクマ！ 突然響く異音……それは、予想をこえるTUMIな裏切り！ 分つかるかなあ〜？」

そう言いながらクマは再びカーツ、というさつきと同じ音を鳴らす。その手にはヴィブラスラップが握られていた。それを聞いた完二はうんうんと頷ぐが、その目は閉じられており、額には青筋が立っていた。

「……よおく分かったぜ。『犯人はクマです』って意味であってつか？」

「あれ……クマの予想を超えるリアクション」

目を開き、ギンとクマを睨みつける完二の威圧感溢れる低い声にクマが怯え、陽介や千枝からもクマ目掛けてブーイングが飛ぶ。演奏の緊張感が抜けてしまったのか直斗が「休憩にしましょう」と提案。朝から練習続きで疲れていたため休憩へと移る。

「俺とマリーでジュースでも買ってこよう。少し外を歩きたい」

「ん、分かった」

「おお、頼むわ」

真がジュースを買ってくるると申し出、マリーもこくと頷く。二人は楽器を下ろして音楽室を出て行き、手近な自販機へと歩いていく。

「マリー、演奏は楽しいか？」

「まあまあ」

真の問いかけにマリーはぶつきらぼうに返すが、その口元には僅かな緩みが見えており、彼女が今回の事を楽しんでいる事を示している。

「あれ、椎宮じゃねえか」

「偶然だな」

「一条、長瀬」

と、彼の友達である一条と長瀬が声をかけてきた。マリーは知らない相手に目を細め、ささっと真の後ろに身を隠す。一条もそんな彼女に目をパチクリとさせた。

「んつと……誰？」

「ちよつとした知り合いだ」

一条の問いかけに真は適当に言葉を濁し、別にそこまで興味があつたわけではないのか二人とも「そうか」で話を終わらせる。

「ところで、何をしているんだ？」

「ジュネスのイベントで久慈川がライブをする事になってな。俺達はバックバンドをする事になったんだ」

「へく。そりや面白そうだな、俺達も見に行こうかな」

長瀬の質問に真はそう答え、それを聞いた一条が興味ありそうに咳く。

「まあいいや。何か困った事があつたら力貸すからさ、遠慮なく声かけてくれ」

「じゃあな。頑張れよ」

そう言つて二人はその場を去っていき、真とマリーも自販機の方に歩いて行つた。

「りせちーがライブ？　って、マジ!？」

「アイドル復帰ってこと!?!　大ニュースじゃん!」

その会話を偶然聞いていた男子生徒が騒ぎ、携帯電話を取り出す。それに真達は気づいていなかった。

それから場所は音楽室に戻り、真とマリーが買ってきたジュースで喉を潤してから練習再開。今度はりせも歌を合わせる事になり、陽介が「本物のりせちーと合わせるとか、心の準備が……」とうろたえる

一幕があつたが演奏が開始。りせも演奏に合わせて歌い出し、一曲歌い終えて演奏が止まる。

「今の……結構よかつたんじゃね?」

陽介の言葉に千枝が「なんかそれっぽかつた!」と歓声を上げて隣の雪子に抱き付き、他のメンバーも歓喜の声を上げる。

「みんな厳しいレッスンに耐えてよくここまで勝ち抜いたクマ!……あとは自分のカラを脱ぎ捨てるだけ。そうすれば、お茶の間デビューが待ってるクマ!」

「しねえっつーの」

どこで覚えたのかそんな事をいうクマに陽介がツツコミを入れる。

「テレビ、もう出たけどね……私達……マヨナカのやつ」

「カラ脱げるっていうか、服脱げただけ……」

「俺のカラは脱げるどころか、木っ端ミジンコだぜ……」

と、雪子、りせ、完二が暗い声色でそう漏らした。どよんという重い雰囲気相場を支配する。

「……」

「わ、マリーちゃん。いや別になんでもないし! み、みんな、ほら!

元気出そ! ね?」

ぽけーつとその様子を見るマリーに、千枝が事情を知らない相手がいいたことを思い出して誤魔化し始める。

「もう一回頭からいってみよう。一度の成功で浮かれる訳にはいかな
い」

「う、うん、分かつた! さっきの調子でいってみよ!」

真の言葉にりせも頷き、落ち込んでいた雪子と完二も気を取り直して練習再開。本番に向けて練習を重ねていく。そして時間的にラストの演奏が終了。りせもオツケーだと太鼓判を押す結果に全員が歓声を上げる。

「明日か……」

「やっべ、意識したら急に緊張してきた……」

「今更何ビビッてんスか? 男ならビシツと決めようぜ!」

「そうクマ! ビシツと決めるクマ!」

真は楽しみそうに眩き、陽介が緊張してきたのか笑みを引きつかせる。それを聞いた完二が激を入れ、クマもそれに乗る。

「うん。きつとうまくいく……でしょ?」

「『きつと』、じゃない。絶対だよ」

マリーの言葉にりせはそう言い直し、真達の方を向いて「皆」と呼びかけると右手を差し出す。

「緊張したつていいんだよ。だってライブには、それさえも楽しめちゃうパワーがあるんだから! 完璧につて思いすぎないで。お客さんは楽しくなりたいんだもん。まずは私達が楽しまなきゃ!」

その言葉を聞いた真達の顔に笑みが走り、彼らはりせの手の上に次々と右手を置いていく。

「じゃあ、いくよ。ファンと、仲間と、自分に感謝! 完全燃焼、一本勝負! セーの——」

『——オーツ!』

りせの合図で全員同時に右手を振り上げ、明日のライブの成功を祈り声を上げた。

そしてまた翌日の十月十日。ジュネスは休業中であるアイドルりせちーのライブであるためか賑わっており、まだ準備中のステージ近くでは入場待ちのお客さんが今か今かと待っている状況だ。陽介が「客、予想以上に集まっている」と慌てていた。なお今回はりせが高校生という立場で出るためか真達も全員八十神高校の制服スタイルになっている。なおマリーは普段の服装である。

「りせちゃん……遅いね」

だが肝心の主役りせがまだやって来ておらず、雪子が心配そうに眩くと完二が「偉そうに言つてたくせになにしてやがんだ!」と悪態をつく。と、その時真の携帯が鳴り始め、真は携帯を取り出して液晶を確認。

「久慈川、どうしたんだ?」

「先輩助けて!」

電話の相手はりせらしく、しかし彼女は慌てて助けを求めており、それを聞いた真の表情が変わり、彼はすぐに設定をスピーカーホ

ンに変えて陽介達にもりせの声が聞こえるようにする。

「このままじゃ私、ライブに行けない！」

「何があつたんだ!？」

慌てるりせに真が尋ねると、りせは説明を始める。どうやらネット上でりせちー復帰ライブ&握手会、というデマが流れたらしく、しかもその中で自宅の場所の情報まで流れてしまったらしく、それが原因で現在家の前に人がいっぱいいて身動きが取れないようだ。

「りせちゃんのライブが見たい人達なんだよね？　じゃあここに呼んであげるとかは？」

「ダメです！　ライブの整理券は今朝までに全て配り終えています。今から来てもライブが見られないと知ったら……」

「暴れ出すかもしれないねえな。それなら整理どころじゃねえツスよ」

千枝の提案に直斗が反論、彼女が言いよどむと完二はその先の展開が予想できたのかそう口にする。陽介も「それマジ勘弁！」と悲鳴を上げた。

「どうしよう……」

マリーも不安気に声を漏らす。

「……俺に考えがある。久慈川、一度電話を切る。里中の携帯にかけ直してくれ」

と、真はそう言つて電話を一度切る。

「クマ、先輩達を呼んできてくれ」

「わ、分かったクマー！」

真がすぐにクマに指示を出し、クマも大慌てで控室のテントを出て行く。それを見送りながら真はすぐに携帯電話を操作、一つのアドレスに連絡を取る。

「……もしもし、俺だ。すまない、一つ力を貸してほしい事があるんだ。今ジュネスに……いるか。陽介を向かわせるから、今いる場所を教えてください……ああ、すまん」

「真、なんだよ?」

「説明は後だ。今ジュネスのスポーツショップに一条と長瀬がいる、すぐに連れて来てくれ」

「お、おうー！」

状況が飲み込めないものの陽介は真の指示ならばこの状況を打開してくれるはずだと信じて控室のテントを出て行く。

「あとは……間に合うかだけか……」

真はそう呟き、やや焦れた様子でテントのテーブルに備え付けられた時計を確認する。既に開演までの時間は残り僅かだ。

「いつまで待たせんだよー！ 早くしてよりせちー！」

「握手会まだかよー！」

「りせちー！ いるんでしょー!?!」

りせの実家である丸久豆腐店の前でりせに呼びかけるファン。

「あー！ あんなどこにりせちーがー！」

と、明らかに不自然な声が聞こえ、りせちーという単語に反応してファンが声の方を向く。そこには赤色の髪をポニーテール風に結った少女が立っており、彼女の指差す先には確かにりせが背を向けて走っていた。

「うおおおおお！」

「りせちーだー！」

「待ってくれー！」

ファン達はその姿を見ると追いかけ始める。

「……後は頼んだよ、ゆかりっち」

「任せといて。結生も気をつけてね」

赤髪の少女——結生はゆかりにそう呼びかけ、ゆかりはバイクに腰かけヘルメットを膝の上に乗せるスタイルでサムズアップ。結生もこくと頷いた。

「まだ始まんねえのかよー！」

「いつまで待たせんだよー！」

一方ジュネス。既にイベント開始時間は過ぎており、入場した客か

らブーイングが飛び始める。

「どうすんすか？ もう待たせるのも限界ツスよ！」

「しかし、久慈川さん無しでは……」

完二の声に直斗もどうしたものかと声を漏らす。

「すまん、俺の作戦ミスだ……」

「いや、真は悪くねえよ！ 元はと言えば俺が無理矢理……」

真が頭を下げ、それに陽介が慌て出す。

「……」

と、マリーは何か決意した様子でベースを手を取った。

「マリー？」

「絶対に来る……だから」

真の言葉に対し、マリーはそう答える。それを聞いた真はこくりと頷いてギターを取った。

「……そうだな。信じよう」

真の言葉を皮切りに、他のメンバーもそれぞれ担当とする楽器を取っていく。

「皆……いこう！」

『おうー！』

真の言葉に全員頷き、彼らは控室を出て手拍子の待つステージへと上がっていった。

「……み、皆さま、大変お待たせいたしました！ これより開演です！」

待たされていた客のクレームを一心に受けていた様子のスタッフが、真達が出てきた事に気づいて慌てて言い、すぐにステージを降りる。肝心のりせがない事に気づかない程テンパっていたらしいがそこを気にすることなく真達はステージに上がり、真がトントんと爪先で床をタップしタイミングを取る。

最初にスタートするのはマリーのベース。そこから完二の力強いドラムが走り、続けて千枝のトランペットと雪子のサククス、そして真と陽介のツインギター、直斗のキーボードがミックスを奏でる。

「胸騒ぎ、無視しても、心がFeel Blue」

そして歌うのはマリィ。だが本来りせのライブなのにりせがおらず、別の人が歌うというアクシデントに観客は困惑の様子を見せていた。

一方稲羽市商店街。どういうカラクリを使ったのかファンに気づかれずに家を抜け出し、しかし見つかってしまい逃走劇を開始したりせは袋小路へと追い詰められていた。

「や、やっと追いついたよ、りせちー」

「逃げるなんて酷いじゃないか」

「僕達握手会を楽しみにしてたんだから」

町中を追い掛け回していたためか息絶え絶えになっているファン達。

「ふっ、ふふふ……」

が、ファン達に背を向けているりせからはおかしそうな笑い声が漏れていた。

「ぎーんねん、でっした!」

そして振り返り様そう言い、頭に手を置くと髪の毛、いや、カツラをばつと取ってその下の青みがかった短髪を晒す。一条だ。

『な、ええっ!?!』

「そらよっ!」

さらに長瀬がその場に乱入し、消火器を噴射。煙が舞ってファン達の目くらましになる。

「よっし一条君長瀬君! その場を離れてー」

「うっす!」

そしてその隙に一条と長瀬は袋小路から抜け出し、それから煙が晴れる。

「ヤーとと」

袋小路の入り口に立つ二人の人影。一人は青色の髪を右目を隠すように伸ばした長身の美青年、もう一人は赤髪をポニーテール風に結った美少女。

「君達、人に迷惑かけまくった挙句、危うく僕のバイト先の命運かかったライブポシヤらせようとした罪は重いよ?」

「そうそう。しっかりお説教の時間だよ。てめーら、そこに正座」

青髪的美青年——命の言葉に赤髪的美少女——結生もこくこくと頷いた後、左手でサムズダウンして正座と命じる。なお命は素手に腕組みだが結生は右手に薙刀（無論スポーツに使うようなもの）を握って肩に担いでおり、その二人の威圧感にファン達は即座に正座体勢へと入っていた。

「Dream Bells、2人の鐘の音が。明日のドア、開いてく True Story」

ジュネスのライブ会場。一条の身体を張った囿によりやつてくることに成功したりせはマリーとデュエットで歌っていた。最初は困惑していた観客もマリーの心からの歌声にノリノリになっており、演奏終了と共に大きな拍手が巻き起こる。

『アンコール! アンコール! アンコール! アンコール!』

「あ、アンコール……つってんぞ?」

「そつか……考えてなかった……」

困惑する完二にりせも想定外なのかそう言葉を漏らす。

「これ一曲しかないのに、どうしよ!……」

「どうするも何も、無視して下がるか、同じ曲をやるしか、選択肢が

……」

「り、りせがMCで正直に事情話せば、リピートでもギリ許されんじやね!」

「今回は久慈川は途中からだから……今度は最初からとすれば……」

千枝が慌て、直斗が選択肢を提示、陽介がそう言うのと真も今回ばかりは手段がないのかそう答える。

「むおおおお! ノツてきたあ!」

と、いきなりクマがステージの端へと駆け始める。

「ちよつと、クマさん!？」

「といやっ!」

雪子が慌てて声をかけるが、クマは気にすることなくステージから飛び降りる。と、クマは観客の上をごろごろと転がる。

「オウイエ……これぞライブのDA☆I☆GO☆MI! 予習しておいた甲斐があつたクマーッ!」

「バカグマ……もう演奏ムリじゃん……」

「こ、こうなりや勢いで、みんなでダイブとかは? お茶濁して帰る的な……」

いきなりダイブしたクマにりせが呆れ、陽介が慌ててそう言う。

「ダイブ……」

「そこ! ワクつとした声出さない!」

「ていうか、七人飛ぶとか普通に迷惑だから……」

雪子が目を輝かせて声を弾ませると千枝がツツコミを入れ、さらにりせも迷惑だと指摘する。

「じゃあどうすんだ!?! 他に方法あんのかよ!?!」

「そ、そんな飛びたきや男子だけ行けばいいっしょ!?!」

「おうよ! 男見してやんぜ!」

「行くか」

陽介の叫びに千枝がツツコミを入れると完二が立ち上がり、真も頷く。

「ちよつと、バカ!?!」

煽った手前本気にされると思わなかったのか千枝が呼びかけるが、既に真、陽介、完二の三人は助走をつけてステージから観客達に向けて飛び降りていた。

「つと」

「げふっ!?!」

しかし観客は見事なコンビネーションで三人をかわしており、真はバランスを崩さず着地するが陽介と完二は着地失敗、陽介は完全に腹を打っており、完二に至っては顔面からダイブしていた。

「避けんの……上手すぎだろ……」

「男は……顔で立ってんスね……知らなかったぜ……」
「……大丈夫か？」

陽介と完二がぼやき、真は苦笑しながら大丈夫かと彼らに声をかけた。

『かんぱーい！』

時間が過ぎて夕方。ライブの後片付けも終了した後、真達はジュネスのフードコートで打ち上げを行っていた。

「みんなありがとう！ 助かった！ おかげでセールも大成功だったよ」

まず挨拶をするのは結果的に今回のライブの発起人である陽介。

「納得いかない！」

そこに不満の声を上げるのは一条だ。

「どうして俺が女装しなけりゃいけなかったんだよ！」

「力になりたいって言ってたじゃないか」

一条の言葉に長瀬がそう答えるが、一条は「こんな形でじゃねえよ！」とツツコミを入れる。

「すまん。咄嗟の事で他に選択肢がなかったんだ……」

「だーくそっ！ 貸しだからな！」

一条にりせの格好をさせて囮をさせ、最終的に命と結生でファンの足止め。その隙にゆかりがバイクでりせをジュネスまで連れてこよう作戦を提案した真が頭を下げ、一条は頭をかきむしりながら貸しだからなど言い捨てる。

「ありがとね、一条君！」

と、一条が想いを寄せている少女——千枝が一条に声をかける。

「え、あ、いや、それほどでも……」

それに対し一条は照れたように頬をかき、千枝はにぱつと笑った。

「女装、本物みたいだったよ！」

その口から放たれた言葉に一条は硬直。

「うわああああああああ!!」

そのまま泣きながらその場を脱兎のごとく逃げ出したのであった。

「どうしたんだ、あいつ?」

「走りたくなつたのかな? 運動部だし」

陽介と雪子が首を傾げてそう呟く。

「そつとしておこう」

事情を知っている真は苦笑を交えながらそう呟き、その場を離れる。

「マリー」

そして一人ジュースを飲んでいたマリーへと声をかける。

「色々とアクシデントも起きたが、楽しかったか?」

「……夢中になつてた。楽しいかとか、そういうの考えるの忘れてた」

「そういうものさ」

マリーの言葉に真はそう言い、「しかし驚いた」と続ける。

「お前、今回の歌詞をちゃんと覚えてたんだな。しかも上手かったぞ」

「あつ……いい、いや、その、べ、別に教えてもらつてたとか、ベルベツトルームで口ずさんでたとか、そういうんじゃないから! ハ、ハ、ハ、ローグツバイとか、セイしないから!」

真の言葉を聞いたマリーが顔を赤くしてまくしたて、席を立つ。

「あ、汗かいた! 涼んでくる!!」

そしてそう言い残すと逃げるようにその場を去つていった。

「ふつ……ん?」

真はくすつと笑みを漏らす。が、次に何かの視線を感じてそつちに顔を向ける。と、ジュネスエプロンを着て仕事をしている店員や私服で遊びにきていた若者や仕事途中の小休憩中なのか緑色の作業服のような服を着た人等がその場を後にしている。

「どうしたんだ、真?」

「ん? ああ、今誰かがこつちを見ていたような……」

真の様子に気づいた陽介が声をかけ、真がそう言うのと陽介も真の向いている方へと視線を向ける。

「別に視線なんか感じないけどなあ?」

「気のせいかな?」

「ま、俺達さつきライブしてたし、あれじゃね。伝説になっちゃったんじゃない？」

陽介が首を傾げながら答えると真も気のせいかと考え、陽介がにしと笑いながらそう言うと言も「そうかもな」と結論を出してその事について考えるのをやめる。そして彼は陽介に連れられて打ち上げに盛り上がる仲間達の輪へと入っていった。

第五十二話 深まる謎と運命との絆

10月11日の朝、天城屋旅館のとある個室。命は目を覚ますと共に異常に気付く。というのも自分が寝ていた布団で自分が隅に追いやられている上に、その掛け布団が不自然に盛り上がり上がっているのだ。そしてその隣の布団は掛け布団が蹴っ飛ばされたように部屋の隅に飛んでいる上にその布団には誰も居ない。

「結生、人の布団に潜り込むなって何度も言ってるだろ？」

そう言い、自分とは反対側の布団の端を掴み、ばさりとめくり上げる。

「……おい」

思わず冷めた目でツツコミを入れてしまう。何故か、いや、朝目が覚めたら妹が半裸で布団に潜り込んでいたらツツコむのも仕方がないだろう。まあ、半裸というか寝巻に使っていた浴衣の帯が緩んで上半身部分だけがはだけてしまっている。という方が正しいだろう。なお辛うじて下半身は無事というかお気に入りらしい純白のパンツが見えているという場合によってはギリギリアウトな光景に加え、なんとブラジャーをつけずに寝ているため豊満な胸がさらけ出されている。そんな状態で男性の布団に入り込むなど、もはや襲ってくださいと言っているようなものだ。

「はあ………」

そう考え、思わず呆れ切ったため息を漏らしてしまう。

「ふにふ、えへへへ………」

しかし結生はそんな兄の呆れを露知らず、幸せそうな寝顔を見せていた。口元からよだれが垂れており少々だらしない格好は御愛嬌だ。そんな寝顔はとても愛らしく、豊満なバストとは対照的にきゅっとしたウエストに、いつの間にかさらにはだけていた浴衣からちらりと除くヒップは芸術的な曲線を描いている。道理をへし曲げて無理を押し通しているようなスタイルは親友のゆかりをして「恨めしい」と呟くほど。その魅力は月光館学園時代に校内のアイドルを飛び越えて可憐な天使の称号を得るほどである。

「ほんと、可愛いなあ」

命はくすぐすと笑い、頭をこそこそと撫でる。と、結生はくすぐつたそうに身じろぎ、豊満な胸がプリンのようにふるふると柔らかく揺れる。そこらの男性ならそれだけで理性が切れて襲い掛かるだろうが、あいにく命はそこらの男性ではなく彼の実兄だ。そんな愚は侵さない。

(流石に、もう僕達も大人だしね。あんな過ちはもう出来ないよ)

中学時代、ちよつと荒んで二人きりの世界に閉じこもっていた時の事を思い出し、兄妹揃ってゆかりにはとても言えない黒歴史を考えながら命はそう呟く。

「結生、起きろ。そろそろ寒くなってきたのにそんな格好だと風邪引くぞ」

命は自分からは背後にあたる方向で寝てるゆかりを起こさないよう気遣いながら結生を起こそうと彼女の頭をかくんかくんと揺らす。しかし結生は目を覚ます様子も見せずにくうぐう寝息を立て、逆に寒いので暖を取ろうとしているのか命にすり寄る。それに命は呆れたようにまたもため息を吐いた。

「おはようございませす。命さ——」
「!?」

その時部屋の出入り口のふすまをからからと開けながら雪子が挨拶をする。が、彼女の言葉は途中で止まり、命もぎよつとした顔を見せる。雪子の目線から言えば、現在命と結生は同じ布団で眠っている、そして命は布団で隠れて見えないものの、結生の方はすっかりほぼ全裸の状態である。

「え、あの、その……」

「ストップ天城さん、まずは落ち着こう。これは結生がだね——」

「あ、いや、えつと、あの、お邪魔しましたというか、その、な、仲のいいご兄妹だとは思ってたんですが」

「——へいストップ天城さん！ 君は絶対何か勘違いをしていらっしやる！ そういうのは中学時代に卒業してるから！」

硬直の後、言葉を絞り出そうとしている雪子に命は落ち着こうと説

得、だが雪子は顔を真っ赤にしながら何かもごもごと呟いており、それを聞いた命が必死に彼女を押しとどめる。なおパニックになっているのかなんかやばそうな事柄を口に出していた。

「にへへへへ、お兄ちゃんだいすき〜」

「結生もこんな時にややこしくなる寝言を言わないで!？」

すると結生は寝ぼけているのか命に抱き付き、甘えるように頬ずりをする。その時彼女の豊満な胸がむにゅんむにゅんと命の身体に当たり、押し潰される。ぶっちゃけエロい雰囲気を見せていた。恐らく完二辺りならその光景を見ただけで鼻血を吹いて気絶していただろう。

「えーっと、その……お、お邪魔しました〜」

「ゆかりヘルプミー! 君の恋人と親友がなんかえらい勘違いに巻き込まれてるから起きてプリーズ!! 結生もいい加減起きろ元はといえはお前のせいなんだー!!」

そつとふすまを閉じ部屋を去ろうとする雪子を見た命はこのまま雪子を帰したら大変な勘違いでえらいことになるかと直感、大声を張り上げてゆかりと結生を起こそうと試みる。

それからその大声で目を覚ましたゆかりは目の前で命がほぼ全裸の結生に抱き付かれている光景にパニックを起こして彼をぶん殴るというアクシデントが起きた後、二人が起きてからゆかりと結生が雪子を説得。なんとか事なきを得る結果になった。

「おつはよー椎宮君!」

「ああ、里中。おはよう」

さて時間は過ぎて登校の時間帯。真が校門をくぐったところで千枝が後ろから彼に挨拶し、相手が足を止めたためそのまま追いつく。「やー、昨日はお疲れでした! あんな風にステージ上がったの初めてだよ」

からからと笑いながら千枝はそう話し、続けて苦笑しながら「りせちゃんとか、仕事ん時、いつもあんな感じだったわけだよな? あた

しには無理だわー」と呟いた後、さらにげんなりした表情を見せる。
「……そして今週から、そんな余韻をぶち壊す中間テストだね……
はあ」

「今度は解答欄を書き間違えるなよ？」

「分かってますってば……あ、そだ。ねえねえ、今日の放課後、みんな
で勉強会しようよ！」

げんなりした表情の千枝をからかうように言う真に、千枝はこの前
の期末テストを思い出しながら頬を膨らませ、続けて名案を思い付い
たようにそう言う。「困った時はお互いさまって言うじゃん？ やっ
ぱホラ、助け合いの心が大事だって！」ということだ。

「ああ、うん、助け合い？」

「うんうん、助け合い」

真の言葉に千枝はこくこくと頷き、二人の間に静寂が走る。その後
千枝がぺこりと頭を下げた。

「ハイ。あたしが一方的に助けてもらおう側です」

「正直でよろしい」

「お願い！ 人助けと思ってさ！ みんなには、あたしから声かけと
くからー！」

潔く自分の不利を認める千枝に真は返し、千枝が必死に両手を合わ
せながらお願いすると真はふふつと笑った。

「もちろん構わない。先輩達には俺から声かけとくよ。結生先輩も岳
羽先輩も、成績優秀だったんだ」

「マジで！ 頼りになるわー！」

命に続く頼りになる先輩である結生とゆかりに千枝はひやつほい
と飛び跳ね、二人は雑談しながら教室に歩みを進めていった。

それから時間が過ぎて放課後。真達はフードコートへとやってく
る。と、雨が降っている時に使っている屋根付きの席には既に先客が
おり、しかし知り合いのため千枝が手を振る。

「菜々子ちゃん、クマくん」

「やあ、ごきげんようクマ」

千枝の呼びかけにクマが気取ったように返し、菜々子が「ごきげん

ようクマ」と続く。

「楽しそうだね」

にここにこ笑顔の菜々子とクマを見て雪子がそう言った。

「ちーす」

「あ、勢揃い」

と、完一とりせと直斗の一年生トリオも合流。

「やつほー皆、遅くなってごめんね」

そこに命達もやってきた。

「あれ、この子は誰？」

と、ゆかりが初対面の菜々子を見て首を傾げ、真が「ああ」と言つて菜々子を指した。

「俺の従兄妹の菜々子です。菜々子、こっちは俺の先輩の命さんとゆかりさんと結生さん」

「堂島菜々子です。はじめまして！」

真が紹介し、菜々子が席を立ててぺこつと頭を下げながら元気に挨拶する。

「……真君、なんだいこの可愛い子。うちにちようだい」

「ダメです」

それを見た結生が真顔でそんな事を言い、真が彼女を睨みながら答える。そんな戦いに気づいていない菜々子は「すごいっばい！」とたくさんの人に嬉しそうにはしゃいでいた。

「みんな、ゾロゾロと何しに来たクマ？」

「試験勉強ー」

教科書ノート参考書などを机に並べる真達を見たクマが不思議そうに首を傾げると陽介がそう叫び、「こういう時ばかりはクマがうらやましいぜ」と机に突っ伏して頭を押さえる。なお結生はすっかり菜々子にメロメロになってフードコートのアイスを買って与えていたりしていた。

「昨日、ここでライブやったとかウソみたいだもんなー……」

「楽しかったよね。お客さん、あんなに盛り上がってくれるなんて思わなかったし。ね、嘆いてないで、まずは加法定理の所から始めよう。」

「うおう……さっそく数学かい……」

陽介の言葉に雪子は同意した後、そう続け、千枝が唸る。

「私達は三角比の所だよね。面積を求めなさいってやつ」

「ああ？ サンカクの面積は……アレだよ。あー、テーヘン×高さ×2だろ？」

りせの言葉に完二が答えるが、話題にするべき部分が間違っている上に計算式まで間違っていた。

「……よかったら、教えましょうか？」

無言になっていた直斗が申し出、それに完二がやや慌てた様子を見せる。

「お!? お前やっぱりデキる子か？ なら、俺にもひとつ……」

「あ、いえ……二年の教科は流石に分かりませんよ」

陽介の言葉に直斗が首を横に振ると、陽介が「んだよー、意外と役立たずだなく」と悪戯っぽい笑顔で答える。

「や、役立たずっていうなっ!!」

「へへ、分かってきた。ナオトくんのイジリ方、だんだん分かってきた」

その言葉に直斗が反応すると、陽介は悪戯っぽい笑顔で笑いながらそう呟き、「怒るとカワイイじゃん」と評する。

「な、何言ってるんですかっ!!」

それを聞いた直斗が顔を赤くしてぷいっとそっぽを向く。

「俺もやーめた、ガラじゃねえや……勉強するより、おとととだぜ」

「あ、私も食べるー。潜水艦探しするー」

「潜水艦は俺のだったのー!」

完二もおととととを取り出しながらそう呟き、それにりせが賛同するとふたりに潜水艦の取り合いに発展する。

「ハア……も、ダメだな今日は……」

それを見た陽介が呟いたその時、スパーンというキレのいい音と「いでっ!?」「たっ!?」という完二とりせの悲鳴が響いた。

「真面目にしなさいっ!!」

そして続く一喝の主はゆかり。彼女はどこから持ってきたのかハリセンを握っており、それで二人の頭をはたいたのは容易に予想できた。

「みんなー。ゆかりをマジギレさせたら怖いよー」

「あたしや順平、もう結構な回数しばかれてるしー」

命と結生が経験者なのか顔を青くしながら警告を発する。経験者なのか真もうんうんと同意していた。

「さ、さー！ 試験勉強始めようぜー！」

身の危険を感じた陽介がいち早くそう言っつてペンを手に取り、全員が変な緊張感の中ペンを握った。

それから命が二年生組の、ゆかりが一年生組の勉強を見ながら試験勉強は進んでいく。なお結生は勉強の邪魔にならないようクマと菜々子と一緒に雑談をしていた。

「クマさん、自分がだれか分からないだって。へんなの」

そんな中、菜々子の口から出たその話題に全員の手が止まった。

「……こっちの生活は、本当に楽しいクマ。だけど、そう感じるほど、自分が何なのか気になっちゃって……」

インターネットで調べたり、マンガやテレビを見たり、この前は図書館にも言ったがなかなかクマの事は分からない。とクマは語る。

「ま、そりゃそうだ」

そもそもテレビの中という不可思議な世界からやってきた存在だ。インターネットやテレビ、図書館という常識的な情報源からクマの正体を探ろうというのは土台無理な話である。

「けどクマ、イメージはある」

「いめーじっ？」

だがそう続けるクマに、雪子が呆けた声を出した。千枝も「おっと初めて聞くかも、アンタの推測」と続けた。

「クマが住んだのはあっちの世界。あっちの世界がクマの現実だった……でも、あそこは多分、こっちの人達の頭の中から生まれた世界かもって思う……クマは、シャドウがいっぱいのあそこで、何かきつと特別な存在だったんだと思う……」

「特別な存在？」

「けど、その頃の事、たぶん忘れたかなんかしたクマね……キオクソーシツってやつ。こないだ本で読んだもん」

クマはそう自らの推測を述べる。が、大事なところは分からないのか記憶喪失と締めた。

「確かに……向こうの世界の成り立ちには、人間の思考が関係している節がありますね」

「そうだね。入った人達の深層心理によって世界が広がっている。そんなイメージがある」

直斗の言葉に命が賛同、雪子や完二をはじめ誘拐されテレビに放り込まれた人の心の中で思っていることが反映され、シャドウが跋扈するダンジョンが出来上がっている。そんなイメージだ。と賛同の理由を語る。

「はい。もつとも、あんな世界に対して推理も何もありませんが……そんな世界に元から居たという時点で、クマくんの特特殊性に関しても領けます」

直斗はそこまで考え、何か納得したように頷くとクマの方を向く。

「君があの世界で特別な存在であることは、状況的には間違いないと思う。それを何も知らないというなら、確かに記憶がどこかで途切れているのかも……今ある一番古い記憶は、いつのものですか？」

直斗の質問にクマは「んー」と考える様子を少し見せた。

「けっこー前ね。気づいたらあそこに住んでて……騒がしくなってきたから、たまたま出会ったセンチ達に、ヨーソローって頼んで……」
「そうか……ずっと向こうじゃ日時感覚がハッキリしないのか……」

「あー。俺達も最初の時はよく分かんなかったもんな」

「結構時間が経ってて驚いたよね」

しかしクマの証言はぼんやりとしており、直斗がその想定をしていなかったのか困ったように呟くと陽介と千枝もそれに賛同した。

「……」

「わ、そうだよ。この話題、菜々子ちゃん置き去りじゃん！」

「ごめん菜々子ちゃん、ポカンとさせちゃったね……」

話についていけない菜々子がぽかんとしているのに気づいた千枝が驚いたように叫び、雪子が謝る。

「……ねー。クマさん、きつと王様だよ」

と、菜々子は無邪気な笑みを浮かべてそう言った。

「王様はね、わるい人のノロイで、森の中にひとりだったって、本でよんだ。クマさんも、そーだったんでしょ？」

「王様……そう言われると、そんな気も……」

「クマさんが、王様……うぷぷつ、似合うかも。マントとか……」

菜々子の無邪気な言葉にクマが領き、それを聞いた雪子がツボに入って笑い始める。

「雪子さ……最近もう誰の前でも爆笑スイッチ入るよね……」

「クマの王様話は……やめようぜ……」

千枝が呆れたように呟くと、その横で完二が顔を青くし陽介がそれを不思議に思う。だがクマは続けて「本当に王様だった、他にも王様がいて、皆で〜」という辺りで千枝が「それクラブの話!？」と悲鳴のような声を上げる。

「や、やめなさい菜々子ちゃんの前でっ!!」

千枝が必死にクマを止め、それから皆は菜々子と一緒に飲み物を買いに席を立つ。その間に席を取られないようにと真とクマが番に残った。

「クマ、ほんとに王様なのかな？」

「そうかもな」

「むっふふ! 王様だったら毎日チツスクマ〜!」

クマの言葉に真が穏やかに笑いながら言うと、クマは変にニヤつく。

「センセイと一緒になら、見つかる気がほんのりしてるクマよ」

表情を改めたクマの言葉に、真はクマからの厚い信頼を感じ取る。

「お兄ちゃん、クマさーん。メロンソーダでいいー?」

「ああ、それで構わない」

「構わないクマ〜!」

菜々子の呼びかけに二人で答え、戻って来てからも試験勉強や雑談で時間が過ぎていく。

「ジユネス、楽しかったね」

そして帰り道、菜々子は楽しそうな笑顔でそう言ったのであった。その翌日、10月12日。真は試験勉強の息抜きに商店街を散歩していた。最近では原付で一気に走り抜けているが、たまには自らの足で辺りの景色を眺めながらの散歩もオツというものだ。というか下校途中のため原付なんて乗れるはずがない。

「ん？」

すると、真は何か視線を感じる。その視線の先にいるのは黒服の男性、サングラスをかけており人相はうかがい知れないが、値踏みするような視線は確かに彼から向けられていた。

「失礼ながら、何かご用でしょうか？」

「あ、ああ。失礼……」

黒服の男性に声をかけると、相手は一言「失礼」と返す。だが何か少し考える様子を見せた。

「ルミノール反応についてはご存知ですか？」

「は？ いきなりなんですか？……ルミノール反応って刑事ドラマとかでよく見る、血痕がここにあるから殺されたのはここだとか、血のついた形跡のある凶器を持っているそれが君が犯人である証拠だ。っていうあれの事でしょうか？」

「ええ。ルミノール反応の詳細について、御存じでしょうか？」

「……ルミノール反応はルミノールが過酸化水素によって酸化される際に、青色の発光を生じる反応のことで、その反応の触媒として血液、正確には血液中のヘモグロビンに含まれるヘムという鉄原子をもつ物質が使われて反応が起きる。この原理を利用して血痕の捜査に利用されている。以上でよろしいでしょうか？」

唐突に繰り出された質問に真はよどみなく答える。

「DNA鑑定に使用する体の部位は？」

「身体的特徴や遺伝病などの遺伝情報を持たない部分、DNAの塩基配列そのものではなく、4塩基を1単位とする繰り返し数をもつ部

位。と記憶しています」

「メールアドレスを確実に入手する方法は？ 足跡から推察できる1
0の項目とは？」

「いや、なんなんですか一体……」

突然質問責めにされるが、真はそれらにすらすらと答えていく。

「なるほど、なるほど……君は実に面白い人のようだ」

一通り質問が終わって満足したのか、男はフッフと笑みを漏らす。

「君、直斗様……あ、いや……し、白鐘直斗という探偵のことを知っ
ますね？」

「ああ。俺の仲間だ」

「ええ、君が知っているということを私は知っていますよ」

最後の質問にも真は正直に答え、しかし男性は裏を取っているか
のように答えを返し、懐から一枚のカードを取り出した。

「これを渡してください。渡せば分かるはずですよ」

表も裏も白紙らしく、真は不思議そうな顔を見せる。その隙に男は
「頼みましたよ」という一言だけ残して足早に去っていった。

「……」

怪しい相手だが、相手は直斗を指名している。ならば何を置いても
まず直斗に報告しておくべきだろう。真はそう考えて携帯を取り出
すと先日聞き出しておいた直斗の携帯のアドレスへとかける。

「はい、もしもし？ 先輩ですか？」

発信し、プルルルルという電子音が僅かに続いた後、直斗の潜めた
声が聞こえてくる。

「すみません。今図書室なので、急ぎでなければ後でかけ直させて
もらっても……」

どうやら図書室で試験勉強の真っ最中だったらしい。

「いや、もしかしたら急ぎになるかもしれない……すまないが、なるべ
く人のいない静かなところに来てもらえないか？」

「……分かりました。では鮫川の土手で落ち合いますよ」

真の真剣な声に、直斗は何かを感じ取ったのかこちらも冷静な声に
なり、二人は会話を終えると電話を切る。

それから場所は鮫川の土手へと移り、真は先ほど渡された真っ白なカードを直斗に渡す。

「渡せば分かる、って……一体、何のことだ？……すみません、このカードを渡された時について、状況をお聞きしたいのですが」

直斗は真が受けた伝言である「渡せば分かる」の意味を考え、それから真に質問をしたいと尋ねる。

「あなたにこれを渡したのは、どんな人でしたか？」

「黒服にサングラスをかけていた、言ってはなんだが怪しい男だ。俺と白鐘に接点がある事を知っているらしい」

「サングラス……こんな町でそんなものをしていたら目立つでしょうに……」

真から証言を得た直斗はわざわざ目立つ格好をしていた事を不審に思う。

「そうまでしても顔を見られなくなかった……ということか？」

「同感です」

真の推理に直斗も同意を見せ、さらに彼女は「その人はきつと、あなたのことをよく知っている」と続ける。このカードが何なのかは分からないが、素性も知れない相手に託すはずがないから。ということだ。

「でも、こんな小さな町です。僕の住所なんてすぐに調べられるはず……何故、わざわざあなたに託したのか……そこが、気になります」
そう呟いて直斗は推理を開始する。しかし今の事件の関係者なのか、あるいは他の事件の関係者なのかさえ分からず、さらに狙いが直斗個人であるならば可能性はいくらでもある。情報が少ない今では推理のつかかりさえ見つけられなかった。

「あ、カードは僕が預かります。恐らくその男は、まだこの町にいます。これ以上、あなたを巻き込むわけにはいかない」

「そういうわけにはいかない」

「え？……いえ、その、心配……してくれるのはありがたい、ですけど……」

直斗は真っ白なカードを手元に手繰り寄せながら、これ以上真を巻

き込むわけにはいかないと言う。だが真はその言葉を聞き入れず、それに直斗は慌てたように眩いた後、うつむく。

「すみません、僕、人の気持ちに疎いみたいで……前、花村さんにも言われました」

直斗はそう言うってから顔を上げる。

「このカードの件は、調べてあなたに報告します。だから……心配、しないでください。その……あなたはリーダーとして色々抱えているから」

どうやら直斗なりに気を遣っているらしく、真は彼女との間にほのかな絆の芽生えを感じた。

我は汝……、汝は我……

汝、新たなる絆を見出したり……

絆は即ち、まことを知る一歩なり

汝、“運命”のペルソナを生み出せし時

我ら、更なる力の祝福を与えん……

頭の中に響いてくる声。それに真はまた僅かに笑みを浮かべた。

「せっかく来たので、もう少し話をしてもいいでしょうか？ 少し聞きたかったことがあるんですが……」

直斗は二人きりの機会を逃すことなく会話のチャンスを作り、二人は今までの事件について話し合いをした後、家に帰っていくのであった。

第五十三話 正義との真実の絆、新たな決意

10月13日の放課後。真は教室に残っている雪子と千枝——二人とも机を向き合わせて試験勉強の真つ最中——に「また明日」と挨拶し、自分も家に帰って勉強しようと考えながら教室を出ていく。

「あ、先輩！」

「先輩、お疲れ様です」

「ああ、久慈川、白鐘。どうしたんだ？」

と、階段のところで丁度上がってきたりせと直斗が挨拶し、真もどうしたんだと返す。

「今から直斗と図書室で勉強するの！先輩も一緒にどう？」

「悪いけど俺は帰るよ」

「そっか、残念」

「では先輩。明日からの中間テスト、お互い頑張りましょう」

りせが勉強会に誘ってくるが真は丁重に断り、りせも残念そうだが無理にも言えないため素直に引き下がり、直斗もそう明日からのテストを健闘しようと思いをかけ、りせと直斗は図書室へと足を向け、真は階段を降りていった。

それから彼は帰り道である鮫川の土手を歩いている時、高台にいる二人に気づく。その一人は彼の仲間である巽完二、もう一人は以前完二といた時に会った、サナちゃんなる女の子のウサギのあみぐるみを失くしてしまったという大人しそうな少年だ。

「これな、約束の……も、文句言うなよ？」

完二がそう言って少年に差し出したのはウサギのあみぐるみ。服とリボンと帽子と傘がついた、遠くから素人目に見てもものすごく凝っているのが分かる一品だ。

「すっごーい!!」

それに大人しそうな少年が歓声を上げる。そのまま完二をキラキラとした目で見て「おじちゃ……お兄ちゃん、これ、すごいね！どこで買ったの!？」と聞き始めた。

「あ……べ、別にいいだろ！」

「だって、ぼくも欲しい!」

「……お前にもある」

あみぐるみの出所に心当たりのある真は高台の休憩場所の影に隠れながらくつくつと笑いを噛み殺し、完二は少年の質問を別にいいだと誤魔化すが、少年は諦めずに自分も欲しいからどこで買ったのか教えてと食い下がる。

すると完二はそう言ってもう一つウサギのあみぐるみを少年に手渡した。服と靴とキャップとサッカーボールがついている。こつちも先ほどのウサギのあみぐるみに負けず劣らず凝った一品だ。

「これ、ぼくの!? ありがとう!! ねえ、どこで買ったの!」

だが少年が余計に完二に食い下がる結果になった。

「完二、観念しろ」

「ぬあ、先輩?! い、いつからいたんスカ!」

「ついさつき。なんなら俺から言おうか?」

「っ、分かったツスよ!」

既に真相を見抜いている真は二人の前に姿を現して完二に観念して正直に話せと促し、完二はそれに怯むが真の追撃に唸り声を上げるところくと頷き、ごほんごほんとおぼろしく咳払いをして、しかしやはり照れくさいのかぷいっとそっぽを向く。

「お、お兄ちゃんが、作りました……よう?」

「これ……作ったの?」

その告白に少年がぼかんとした顔になる。

「わ、悪イかよ……き、気色悪イってんなら、返し——」

「すっげー! かつこいいねー!!」

気色悪いと思うなら返せ、と言おうとする完二だが、少年はむしろ尊敬の目を完二に向けていた。

「ねえ、また、違うの作ってくれる!? ぼくのお母さんね、こういうの大好きなんだよ!」

「え、お、おう……」

「約束だよ!」

いきなり尊敬の目を向けられた完二は予想だにしない反応に怯み、

そのままとんとん拍子に新たな作品を作る事を約束させられてしま
う。

「じゃあぼく、これ、サナちゃんにあげてくる！　ありがとう、おじ
ちゃん!!」

「だ、だからオジちゃんじゃねえつつうの!!」

そして失くしてしまったウサギのぬいぐるみの持ち主だったサナ
ちゃんなる少女にガールズエディションのウサギのあみぐるみをあ
げてくると言って走り去り、その中の完二を指す呼称に完二は怒鳴り
声でツツコミを入れるが、少年は既に見えなくなっていた。

「……はは。かっこいいだよ」

「確かにすごい技術だ」

「んなの、ムダなスキルツスよ……」

完二はまさかの感想に信じられなさそうに返し、だが真も褒めると
満更でもないのか照れた様子を見せる。

「けど、まあ……悪くねツスね。　ありがとう」か……こんな、くだら
ねー事なのによ」

照れたように笑う完二はどこか大人びて見える。真は心の中でそ
う感想を漏らした。

「ところで、完二」

「なんスか?」

だが真は大事なことを思い出し、完二に問いかける。

「あんな凝ったあみぐるみを二つも作ってて、お前中間テストは大丈
夫なのか?」

その言葉に完二はさつと顔を逸らす。見て分かる程に目が泳いで
いた。その意味するところを理解し、真は携帯を取り出すとあるア
ドレスにかける。

「もっしもし先輩?　あなたのりせだよ、なんちゃって♪　今図
書室だから静かにお願いします、何か用?」

「ああ。完二がテスト前日にも関わらず遊びほうけていてな。今用事
が終わったところらしいから、今から連れて図書室に行くと白鐘に伝
えてくれ」

「うん、オッケー♪」

「え、ちよ、先輩!？」

りせは真からの電話のためかややテンション高くしかし図書室内だからちゃんと声を潜めて話しており、真は完二を図書室に連れていくという旨を伝えて完二をとっ捕まえる。

「ま、ちよ、待って下さいよ先輩！　べ、別に直斗に教わんなくたって……」

「行くぞ」

「ま、待っててくれってー!!!」

顔を赤くして慌てる完二を真はスルー。身長の高い完二をしつかり学校まで引きずると図書室で待ち構えていたりせ&直斗に引き渡すのであった。

それから時間は過ぎ、10月19日。期末試験最終日、最後の試験が終了した。

「ふああ。やあつと終わったああ……」

「ね、問8だけど……」

「ああ、そこは……」

欠伸をしながらテストの終了を喜ぶ陽介、その視線の先で雪子と千枝は答え合わせに余念がなかった。

「昨日徹夜したからぶっ倒れそうなんだよね……俺、先帰るわ」

「お疲れ」

「おう。んじやーなー」

陽介は欠伸交じりにそう言っ先に戻っていき、真も荷物を纏めると千枝と雪子に「また明日」と挨拶をして教室を出ていく。

「よ、椎宮」

「よお、一条。今回はちゃんとテストに名前は書いたか？」

「うげ、知ってんのかよ。ちゃんと書いたっつ。何度も確認したわ」
声をかけてきた一条に真が悪戯っぽく笑いながら返すと一条は悔しそうな顔をしながら答える。

「一条、テストが終わったし、少し走らないか？」

「へいへい分かったよ」

「頑張れよ。じゃあな」

「おう、お疲れー」

わくわくとしている長瀬に一条は慣れたように頷き、真は巻き込まれない内に帰宅を選択。一条もひらひらと手を振ってさよならと示した。そのまま彼はなんとなく商店街の方へ足を運ぶ。と、そこに一人たたずむ美少女の姿を見かけた。

「マリー、久しぶりだな。この前のライブ以来か」

「……」

真は美少女——マリーに声をかける。しかしマリーから反応はなく、彼女はうつむいたまま静かに立っていた。

「マリー？」

「っ……あ、いたの？ 合体？ 召喚？ スキルカード？」

「落ちて着けマリー、ここベルベットルームじゃないぞ」

「あ……そうだった……」

なんだかマリーの様子がおかしい。完全に心ここにあらず、という状態だ。

「どうかしたのか、マリー……今日、暇だし。付き合うぞ」

「ん……じゃあ……行く」

真の方からマリーに付き合う、と言うがマリーはどこか暗い表情で頷くのみ。

それから場面は鮫川の河原へと移る。真は元気がなく無言のままのマリーを連れ、ひとまず静かなここにやってきていた。

「……ねえ、イルカ見たい」

「はっ」

マリーが唐突にそんな事を言う。

「イルカ出して。3つ数えるから、その間にイルカ。ね、分かった？」

「おいマリー……」

いつもの我儘。だが声が刺々しく、特に機嫌が悪そうだった。

「イルカ、まだ？……つまんない」

「ランプの魔人じゃあるまいし……」

マリーは不機嫌そうに眉間にしわを寄せ、真も苦笑で返す。と、マ

リーは「はあ」とため息をついた。

「また頭痛か？」

「違う。そういうんじゃない。考えなければ、頭痛くならないから」
真の問いかけにぶっきらぼうに答える。それはどこか投げやりだった。

「もういいよ。思い出すのやめた」

マリーは真から顔を逸らしてそう言う。

「諦めるのか？」

「しようがないじゃんっ!!!」

真の言葉にマリーが吼える。「調べたって意味ないし、結局何も分からなかった。何も思い出せず、考えると頭が痛くなるし、何か出てきてもすぐに消えてしまう」とマリーは怒鳴るように続けた。

「ッ!?!」

と、マリーはまた頭を押さえた。いつもの頭痛のようだ。

「マリー!?!」

「放つといてよ!」

思わず駆け寄り手を伸ばす真をマリーが払いのけ、睨みつける。

「もうヤダ……頭痛い……私はただ……思い出したいだけなのに!」

ギリギリと歯をきませ、痛みを堪えるマリー。それからやや時間を置いて痛みが消えたのか、マリーは頭から手を離し、むすつとした表情になる。

「もういい……記憶いらない。忘れたままでいいよ……」

うつむき、ため息交じりに答える。完全に投げやりになっており、真はつい無言になってしまう。そのまま静かに歩き去っていくマリーに真は何も言えず、無言のまま河原へ立ち尽くしていた。

その翌日、10月20日。学校が終わった後真は特にやる事もなく、たまには静かに読書でもしようかと思つて真つ直ぐ家に帰つてきていた。

「ただいまー」

帰宅し、挨拶の言葉を口にする。しかしそれに返す言葉はない。どうやら遼太郎はもちろん菜々子もないようだ。

「ただいまー」

と、思うと菜々子が帰ってきた。

「おかえり」

「あ、おかえりー。ねえ、ポストに手紙来てたよ。お兄ちゃんに」

そう言つて菜々子が封筒を手渡してくる。確かにその宛名は「椎宮真サマ」となっており、真は差出人を確認しようと封筒を裏返す。だが差出人の名前や住所はなく、しかも表面をもう一度確認するが消印がなく、さらには切手すら貼られていない。明らかにおかしな封筒に真は不思議そうな顔をしながら封筒を開け、中身を確認した。

「!?」

中身の紙にはたった一文だけが印刷されていた。

コレイジヨウ タスケルナ

(これは、いったい……)

パソコンで打ったのだろう文字のため筆跡での判別は出来ない。しかも中身の意味すら分からない。そんな内容に真は硬直する。

「おともだち?」

と、菜々子が首を傾げながら問うてきた。

「あ、ああ。前の学校の友達が、な?」

「ふくん……あ、見たいテレビ始まつちやう!」

なんとか誤魔化し、菜々子は今に向かうとテレビに夢中になり始める。それを確認してから真は再度手紙に目を落とした。

コレイジヨウ タスケルナ

(コレイジヨウタスケルナ……これ以上、助けるな。これはまさか犯人からの警告か? それともただのイタズラ……)

真は考え込むが、一人で考えてもどうしようもなく、明日皆に見せて相談しようと思つて手紙を隠すように封筒に入れ、部屋に戻つていった。

そして翌日10月21日、昼休み。真は自称特別捜査隊のメンバーを屋上に集めると、昨日届いた手紙を皆に見せる。なおここにはない命達には携帯で連絡を取ろうかとしたのだが陽介によると今日は三人とも朝からシフトが入っている、ということの後で雪子の方から結

論を伝えておく。という形に落ち着いた。

「『コレイジヨウ タスケルナ』……警告、ですかね」

手紙の内容を見て一番に口を開くのはやはり探偵の直斗だ。千枝が「カタカナでカタコトってベタすぎない?」とツツコむ。

「イタズラじゃねんスカ? マンガじゃあるめえし」

対して完二はイタズラだと切つて捨てる。リセも心配そうながら「最近私達事件の事考えてるし、なんでもかんでも結びつけちゃうかも」と、イタズラを深く考えすぎる線もあるという点で完二に同意した。

「叔父さんには見せたのか?」

「いや、どうするべきか迷っている。場合によっては見せるべきかもしれない」

「いえ、堂島さんは信頼できる方ですが……見せるのは、控えた方がいいでしょう」

陽介の質問に真が返すと、直斗が遼太郎に手紙を見せる事に反対する。まずこんな脅迫状染みた手紙が来る経緯の説明が出来ない。その上心配されて見張りをつけられたら身動きが取れなくなる恐れがある。というのが彼女の意見だ。

「もしこの手紙が本当なら、一番重要なのは内容ではありません」

さらに直斗は、心配そうな表情で続ける。

「『宛名入りで、堂島家に届いた』という点です」

それはつまり、犯人は犯行の邪魔をしているのはどの誰なのか詳しく知っている。とアピールしていることに他ならないという意味だ。しかも真の身元が分かっているのならばさらに昔から住んでいる陽介や雪子達の身元を調べる事なんて造作もないはず。そんな中わざわざ家主が刑事の堂島家を選んで脅迫状を送り付けている。これはこの手紙から捕まる事なんてないという犯人の自信の表れを伺わせていた。

「この手紙……可能なら鑑識にかけたい所ですが、恐らく何も出ないでしょう。警告と同時に、特定されない自信があるという犯人の意思表示のように思えます」

直斗もそれを理解しているのかそう呟いた。

「警察に言っても仕方なし、つてか言う余計にヤバイ……」

「ほんと、イタズラであってくれ、マジで……」

「でも、内容考えると、ただのイタズラにしては出来過ぎかも……」

千枝は八方ふさがりというように呟き、陽介は天を仰ぎながら悪戯であつてくれと祈り、雪子はイタズラにしては出来過ぎだと呟く。

「もし犯人なら……なんで私達の事そんなに知ってるのかな……どこかで見てるとか？」

「……あつち〴〵に居る時、見られてる気配あるつてのは、大分前からクマが言ってるな……」

「まさか、マヨナカテレビに〴〵もう一人〴〵、シャドウが映っている時に、助けに行っている俺達の姿が見られていた？」

雪子の呟きに陽介がはつとしたように漏らすと、真が気づいたように続く。

「で、でも、あたしたちのしてる事、誰も知ってる感じしなくない？」
だがそれに反論するのは千枝だ。確かに学校で噂を聞くことはないし、テレビを見たらしい子からも自分達の話題が出たというのを聞いたことはない。噂でもちきりになるのは失踪した人だけという印象だ。

「そういや、そもそもマヨナカテレビ自体、どういうモンなのかは謎のままなんだよな……」

陽介の呟きで、場が沈黙に包まれる。

「あの世界の正体を探る話は一旦置きましよう。不明な点が多すぎます」

「ああ。とにかく今は〴〵犯人はこちらを知っている〴〵ことを知り、心構えを持つ」

「ええ。それだけ共有できれば充分です」

直斗がマヨナカテレビの正体という未だ不明な点が多すぎる事は一旦置こうと言い、真が脅迫状から最低限分かる事を纏める。

「憶測で勝手に不安を掻き立てて動けなくなる、それが一番相手の思うツボだ」

「ああ、真の言う通りだ」

「おう！ ビビって動けなくなるなんざ情けねえぜ！」

男性陣も頷いて返した。

「あー、じゃあバツサリ話題変えちゃってもいい？」

と、千枝が挙手しながらそう新たな話題を出した。

「もうすぐ文化祭りじゃん？ うちのクラスって何すんだっけ？」

「そーいや、決まってるじゃないじゃなかったか？」

「今度、投票で決めるって聞いたけど……確かまだ案を募集集中じゃなかったかな？」

千枝の質問に陽介が言うのと雪子が補足する。

「へえ？」

と、陽介が何か笑みを浮かべ、千枝が「うわ、何か閃いてるよ……」と嫌な予感がすると言いたげな顔を見せる。「絶対アレな事だ。賭けてもいいわ」とまで言っていた。

「先輩、一緒に回る人、もう決めた？ 私空けてあるからね。この幸せ者！」

「ははは……」

「うう、今の今までだんまりだったのに、この子は……」

明るく言うりせに真は苦笑。千枝も呆れた様子を見せる。そんなこんな談笑で時間が過ぎていく。

（脅迫状の件、本当にイタズラなんだろうか……俺には今、何も出来ないのだろうか……）

その談笑の中、真は僅かな不安点を考え続けていた。

放課後、真はこの脅迫状についてももう少し考えたいと言い残し、「何かあったら相談してくれ」という陽介達にお礼を返して一人帰路に就いていた。

「おにいちゃん！」

「菜々子」

と、小学校の通学路と交差する地点で偶然菜々子と合流。菜々子は

やけに機嫌が良さそうに笑顔で真に駆け寄った。

「嬉しそうだね。学校でいい事でもあったか？」

「うん！ あのね、きょう学校で、『家族は助け合うんだ』って先生、いつてた」

菜々子は笑顔でそう語る。

「お母さん死んじゃって、菜々子もお父さんも、さびしいけど……でも、菜々子にはお父さんがいるから！ だから、お父さんがさびしくないように、菜々子が頑張らないとね！」

純粋な笑顔の中に強い心を覗かせ、真は静かに笑みを見せる。ちよつと前、授業参観のアンケートの件で家出する程険悪な状態になったのが嘘のようで、真も思わず笑みを零した。

「お兄ちゃんも、かぞくだから……いっしょにがんばろーね！」

「ああ、頑張ろう」

菜々子の輝かんばかりの笑顔での言葉に真は首肯、その言葉を聞いた菜々子も嬉しそうに笑う。

「えへへ……お兄ちゃん、だいすき！」

菜々子からの熱い親愛を真は感じる。

我は汝……、汝は我……

汝、ついに真実を絆を得たり……

真実の絆、それは即ち、まことの目なり

今こそ、汝には見ゆるべし。

『正義』の究極の力、『スラオシャ』の

汝の内に目覚めん事を……

そんな時、真にそんな声が聞こえ、それと共に自らの中に何か強大な力が生まれるのを感じる。

「ねえ、おにいちゃん。今からお買い物、行こう！ お父さんにたくあん買って帰ってあげよう、それとね、おやさいもたくさん食べないよ。」

ばらんすのいい、食せいかつがだいじなんだよ！」

それも学校で先生からの受け売りなのだろうか、えっへんと得意気な顔をして菜々子はそう言う。

「ああ、行くか」

それに真も頷き、二人は一緒にジュネスへと向かうのであった。

それから時間が過ぎて夜。菜々子と一緒に夕食を作り、菜々子と遼太郎との家族団欒を過ごした後、真は一人ベッドに寝転んでいた。

（あの脅迫状……それが本当なのにしろ、イタズラなのにしろ……俺には今、何も出来ないのだろうか……）

考え、目を閉じる。浮かんできたのは今日の帰りに見た菜々子の笑顔。それを思い浮かべ、また何かを考える。それから真はゆっくりと目を開け、枕元に置いていた携帯電話に手を伸ばす。それを操作し、あるアドレスへとかけた。

「もしもし、真君？……話は天城さんから聞いたよ」

「先輩……」

電話の相手は命、既に脅迫状の件は聞いているらしく、真はすうはあと深呼吸する。

「ご相談があるんですが」

そして信頼できる相手である先輩に、真は真剣な目をして静かに切り出した。

第五十四話 法王との真実の絆、家族の絆

10月22日。真は一人八十神高校への道を歩いていた。しかし彼の周辺の空気は重く、何かピリピリとしている。そのため通学中の生徒もやや真から距離を取っていた。

「お、おはようございます。先輩」

「あ、白鐘か……おはよう」

「何やらピリピリしていますが、昨日の事が原因ですか?……あまり気にしすぎるのもいけないと思います。そうやって気を張り詰めさせ、疲労させるのが狙いかもありません」

「ああ、分かっている……白鐘、今日の放課後に屋上に集まるよう、完二と久慈川に言っておいてくれないか?」

「……分かりました」

声をかけてきた直斗に真は挨拶を返した後、放課後の集合を一年生組に伝えるようお願い。直斗もそれを了承すると二人は歩みを進めていった。

それから午後へと時間が過ぎ、ホームルームの時間となる。

「えー、知っての通り来週末の土日は文化祭です。そして知っての通り、ウチのクラスの出し物が決まっています。もー、みんなやる気ないでしょー?」

「今出てる案から決めちゃうから、各自一票を投票してください」

クラス委員男子が呆れたように言うと、女子クラス委員がそう言い、「読み上げます」と言って現在クラスから出ている案を読みあげていく。だが休憩所、ビデオ上映室、自習室と、要するに準備もやる事もほとんどない案だ。男子生徒の一人が「要はどれも〴〵なんもしない〴〵って事じゃん」と呆れた様子で呟く。だがまた別の男子生徒が「ま、楽なのがいんじゃない?」とも言っていた。

「最後、えっと……ご、〴〵合コン喫茶〴〵!」

『はあ!?!』

クラス委員女子は最後の案を見て驚いた声を上げ、その内容に教室内からも驚きの声上がる。

「おいおい、誰だ提案したの？ 里中あたり？」

「違うっての!! 何を根拠に言ってるのよ!!」

しかしただ一人笑っている陽介は軽口を叩いており、千枝がツツコミを返す。だがこつちも特に驚いていなかった雪子は「合コン喫茶って……何？」とそもそも内容がピンときていない様子を見せていた。

「知らんけど……まあ誰も投票しないでしょ」

「そうそう、あくまでネタネタ。一個キワモノ混ぜとくのってお約束じゃん？」

「アンタかよ!？」

「陽介……」

千枝の言葉に陽介も同意、だがそれは彼がこの企画を提案したという自白に他ならず千枝は怒鳴り声でツツコミを入れ、真が呆れた顔を見せる。それからクラス委員二人が投票用紙を回していく。投票用紙と言うものの全くの白紙で、先ほど出された四つの案のどれか一つを記入して提出する形らしく全員が投票用紙に記入をして提出する。

「それじゃ、開票しまーす」

クラス委員女子が開票を宣言し、クラス委員男子が記入済の投票用紙を読み上げる。

「一票目、合コン喫茶。二票目、合コン……喫茶……あ、あれ？ まじで？」

なんだか嫌な予感がする。とこの瞬間教室内の意見が一致した。

「三票目、ビデオ上映室。四票目……合コン喫茶」

合コン喫茶、合コン喫茶、自習室、合コン喫茶。と開票が進んでいく。そして全ての開票が終了した結果第一位は合コン喫茶。それも残る三つの案の票を足してもギリギリ競り勝つ完全勝利だ。

「ちよ、一位って……どうすんだよー」

「オマエのせいだろっ!!」

慌てた陽介に千枝が怒鳴る。だが彼女は「入れた連中もどこまで本気なんだか。自分らでやるって分かってんのかな」とぼやいていた。すると雪子が振り返る。

「私、合コンって行った事ないから、ちよっとだけ、興味あったってい

うか……」

投票者の一人がここにいた。だが「誰も投票しなかったら可哀想でしょ」という労いも見せており、そんな雪子に千枝は「犯人は花村だけどね」と呆れている。

「は、犯人とか言うな！ 一位つて事は、世論だろ、一応！」

陽介の言葉の次にクラス委員男子が「民主主義らしく、多数決で合コン喫茶に決まりました！」とどこかやけになった様子で言う。だが彼も「これってフイーリングカップルみたいな感じなのか？」と呟いており、内容を掴み切れていないようだった。

「ていうか、ほんとに大丈夫か？ みんな、ちゃんと手伝えよー？」

クラス委員男子の言葉に、女子生徒の一人が「ていうか、先生達OKすんの？」と呟き、「柏木なら意外とすんじゃないやね？」と男子生徒の一人が答える。

「柏木先生は、例の二大コンテストの準備で忙しいってさ。だからクラスの出し物は生徒に一任だつて」

その言葉に「うっわ、メンドくてブン投げただけじゃん！」と女子生徒が言い、「ご、合コン喫茶つてこれ……客、来るのか？」と男子生徒の一人が心配そうに呟く。さらには「てか、合コン喫茶つてぶつちやけ何なの？ 入れたけど」と他人事な声まで聞こえてきた。

「どうなつちやうの……」

不安しかない教室内に千枝がそんな声を漏らす。

「陽介」

「お、おう、なんだよ？」

「言い出しっぺの法則。というものを知っているか？」

「……なにそれ？」

真は陽介を睨み、重い口調で言う。

「要するにだ……言った本人が責任を持ってやれ」

そう言つて真は席を立ち、前に行く。そして突然真が前に出てきた事に驚いているクラス委員二人を放つといてチョークを持つと黒板にでかかかと「2—2 文化祭出し物合コン喫茶 責任者 花村陽介」という文字を書く。

「ちよ、あ、相棒!？」

「これはフオローしきれない。企画者のお前が責任を持って陣頭指揮を取れ」

悲鳴を上げる陽介を真は睨んで黙殺。バン、と黒板を叩く。「異論は認めん」という威圧が読み取れ、陽介は滅多に怒らない真が本気に近いレベルで怒っている事を察するとこくこくと静かに頷く。

「せめてもの情けだ。お前がきちんと指揮を執るのなら、その手助けには全力を尽くそう」

「お、おう……」

真は席に戻る時わざわざ陽介とすれ違うコースで動き、彼とすれ違いきざまにぽんと肩に手を置いて言葉を残して席につく。陽介もその言葉にこくんと一つ頷くと崩れ落ちるように席についたのであった。

それから時間は放課後に移り、真は朝直斗に指示を出した通り自称特別捜査隊八十神高校メンバー全員を屋上に集めていた。そして真は彼らに今日の朝、いや、昨日の夜から考えていた事を告白。

『……』

それを聞いた全員が呆けた顔を見せた。

「ま、待って待って! いや、えつと……ごめん、話についていけない!？」

一番に口を開いたのは千枝だが、彼の告白についていけない。

「ま、待てよ相棒! お前、本気なのか!?!……堂島さんにテレビの中の世界を教えるなんて!？」

この中では一番付き合いの長い陽介さえも真の提案、堂島遼太郎に自分達が調べているテレビの中の世界を教える。という事に驚きを隠せていなかった。

「本気だ」

「いや、でも先輩! 警察じゃ犯人をとつ捕まえらんねえから俺達でやってきたんじゃねえスカ!? そりや堂島さんは信頼できつかもしんねえけど……」

陽介の焦った声での言葉を真は静かに首肯。しかし完二が反論する。下手な事を言い出してしまえば逆に監視をつけられ、身動きが取

れなくなる可能性がある。昨日直斗が話した懸念、直斗もそれを忘れていないのか無言で彼を見つめていた。

「それについては、昨日真君から相談を受けたよ」

すると真の携帯電話からそんな声がする。スピーカーホンで皆に聞こえるようにしている、命の声だ。

「正直言つて、僕は反対だったよ。堂島氏は実直な警察官だ。間違いない信頼に値する……だけどそれとこれとは話が別だ。信頼できるからと言つて安易にあの世界の存在を明かすわけにはいかない」

「ほら！ 命さんだつてこう言ってるじゃん！ 考え直してよ！」

「里中さん……僕は、反対だったって言つたんだよ？」

「……え？」

命の言葉を使い、千枝が真の説得を開始。しかしそれを遮るように命はそう続け、千枝の説得の言葉が止まる。

「私達も一緒に聞いてたんだけどね……うん、これは勝てないわ」

「そーそー。これは無理無理、理論理屈じゃ絶対に論破できないよ」
そこにゆかりと結生の声が聞こえてきた。

「……昨日、皆と相談した後を考えていたんだ。本当に、俺に出来ないことはないか……」

そして真は静かに語り出す。

「そう考えていた中で菜々子を見て、思つたんだ……これがイタズラではなく犯人からの警告だとしたら、犯人は少なくとも俺の家を知っている。今は脅迫状で終わっているが、これから先菜々子に……家族に被害が出ないとも限らない」

真はそこまで言うと言を下げた。

「すまん。俺の自分勝手だとは分かっている……だが、もし菜々子に危険が迫るかもと考えたら……」

「……そうか、そうだよな……」

真の言葉を聞き、一番に陽介が頷いた。

「そうだね。警告が続いていけば、今度は家族がどうこうっていう可能性もあるんだ……」

「そうだったら、うちのババアや先輩らの両親はともかく一番危険な

のは確かに菜々子ちゃんか」

「うん。まだ子供だもんね……抵抗しようにも大人の男性相手じゃきついかも……」

「確かに。そうなると警戒の意味合いを兼ねて堂島さんに話をしておくのも一つの手法」

「っていうか……菜々子ちゃんを引き合いに出されたらあたしらじゃ敵わないよ」

続けて雪子、完二、りせ、直斗、千枝も次々に納得の姿勢を見せた。

「……ありがとう」

「いいって事よ！ だけど実際問題、堂島さんにはどうやって説明する気なんだ？ 流石に言葉だけで信じてもらえそうな次元じゃねえぞ？ それこそ嘘っぱち並べ立てられて誤魔化されているって考えちゃうのは直斗が証明してるぜ？」

真のお礼に陽介がにと笑いながら返した後、遼太郎にテレビの中の世界を教える。という方向で話を進める。雪子が酔った（場酔い）勢いとはいえ修学旅行中に直斗に真実を明かした時、そう思うのも無理はないが直斗はむしろからかっていると思ひ込んでしまった前例を持ち出すと真はこくり、と頷いた。

「百聞は一見に如かず、だ」

「……それってつまり、堂島さんを実際にテレビの中に連れていく、ってこと？」

「ああ」

真の言葉に千枝が確認するように質問をすると真はこくり、と頷く。

「待って！ そんな事をしたら堂島さんのシャドウが出てきちゃうかも……」

「んなの、俺らがついて行って今まで通りボコつちまえば済む事ツスよー」

そこに雪子が警告を発し、だが完二が拳を握りしめながら続ける。

「ちよつと待ちなさいよ完二！ それはダメ!!」

しかしそれをりせが押しとどめた。

「なんだよテメエ、じゃあ堂島さんが危なくなってもいいってのか!?」
「そんな事言つてない! だけど……私達がついていったら、堂島さん、私達に聞かれたくない事全部聞かれちゃうかもしれないのよ!」
「僕も久慈川さんに賛成です。今までは救出のための不可抗力と考えるても……本来ならばあまり不特定多数の人間に聞かれたくない事でしょう」

なんだかんだ言つて遼太郎を心配している様子の完二に対し、りせは遼太郎の身体ではなく精神的な面で彼を心配する様子を見せる。自分達はまだ子供、世間の綺麗な部分だけを見て充分生きていける世界の住人。しかし遼太郎は大人でありしかも警官、世間の汚い部分を否応なく見せられ、その中で生きていかなければいけない世界の住人だ。一回り以上真達の年上である事もあり、今まで心の中で抑えこんでいた負の側面、シャドウとして具現するかもしれないものは彼らの比ではないだろう。アイドルとして大人の世界を少しでも知るりせがそう反論、探偵として警察社会の一端に身を置く直斗もそれに賛成した。

「そこは俺に任せてくれ。あらかじめそうなる可能性が高い事を教えておくし、俺が一人で叔父さんの護衛につく。万一シャドウが暴走しても皆が来るまでは持ちこたえられるはずだ……久慈川」

「オツケー。話が聞こえず、かつ危なくなつたらすぐ援護に行けるよ。うなとこで待機して、でかいシャドウ反応を察知したらすぐ向かうようにすればいいんだね!」

「つて事は、余計なシャドウがいなくて……先輩の生み出した商店街が一番いいと思うぜ?」

真の指示を受け、りせが皆まで言うなというように指示の内容を予測し口になると、陽介が余計な戦闘にならないよう小西早紀の心の闇が生み出した異様な商店街を使えばいいと続ける。

「つと。んじゃあクマに堂島さん用のメガネ作ってもらわなきゃな、俺から伝えとくよ」

「では、準備が出来たら僕に連絡をください。事件について重要な情報を見つけた、という体で堂島さんに相談を持ち掛けてみます」

「二人とも、頼む。白鐘、なるべく堂島さん以外に話が広がらないように気をつけてくれ」

「了解しました。細心の注意を払います」

陽介は気を利かせてクマに遼太郎用のメガネを作ってもらおうと言
い、真は直斗に追加の指示を出しておく。遼太郎に教える事は決定し
たもののむやみやたらに広めるわけにもいかない、それは直斗も重々
承知しているのか彼女も真剣な表情で頷いていた。そしてその場が
解散、陽介は千枝達に「先に戻っててくれ」と伝えるとクマに連絡を
取ろうと携帯を取り出す。

「陽介」

「お、なんだよ真?」

すると真がどこかすまなそうな表情をしながら陽介に声をかけ、陽
介も首を傾げて返す。

「すまん」

「……は? え、なに? 俺なんかお前に謝られるような事あったっ
け?」

唐突に謝られてきた事に陽介は慌て出し、携帯を取り落としそうに
なつて余計に慌てる。

「いや……お前に合コン喫茶の責任者を押し付けたことだ……この相
談が無茶だという事が分かって、だがどうにかして説得しなければ、
ば、と思っていたらピリピリしてしまって、つい……すまなかつた」
「あー……いや、まあ。しゃあねえよ。俺も言い出しっぺだしさ、なん
とかやってみる」

真は頭をかきながら申し訳なきように謝罪を繰り返し、陽介も自分
の蒔いた種だと苦笑する。

「その代わり、しっかり手伝ってもらおうからな?」
「ああ」

そして陽介はにっこ笑いながら手伝いを頼み、真も穏やかな笑みを
浮かべて了承する。それから陽介はクマに連絡を取るために電話を
かけ、真は陽介に任せて屋上を出ていった。

それから少し時間が過ぎて10月24日。真は登校途中で会った

直斗と原付免許の話（直斗も偶然、真達と同じ夏ごろに免許を取ったらしい）をしていた。

「お、真に直斗！ うーっす！」

「ああ、陽介」

「花村先輩、おはようございます」

そこに陽介が追いつき、真と直斗が挨拶を返す。

「よう、事件の話か？」

「いや、雑談だ。白鐘も原付の免許を持っているらしい」

「探偵として足が必要だったので。久慈川さんに聞いたところ、花村先輩と椎宮先輩も夏頃に取ったそうですね。同じ頃に僕も取ったんですよ」

「へー、そいつあ偶然だな……ああ、じゃあ冬にスキーとか行かないかって話になってんだよ。直斗も行こうぜ」

「はい」

陽介も加わって雑談に花が咲く。

「つと、それどころじゃなかった」

だがその次の瞬間、陽介の目が真剣なものへと変わる。

「堂島さん用のメガネが完成した。もちろん、ちゃんと見せてもらったぜ。鼻メガネじゃねえことは確認済みだ」

流星に遼太郎に鼻メガネなんて渡したら話をする前に怒られる事は想像に難くない。そこはしっかりと確認を取っていた。だがそこをよく知らない直斗は「鼻メガネ？」と不思議そうな表情を見せる。

「まあ、いいから。とりあえず直斗、頼むぞ」

「分かりました。今日の放課後、堂島さんにジュネスまで来てもらうようにします」

「先輩達にも声をかけておこう」

真、陽介、直斗の三人で話を進めつつ、彼らは学校に向かっていった。

「……………」

それから昼頃。遼太郎は食後の一服を喫煙室で取りながら、ふと考える。つい先ほど直斗から連絡があり、捜査から外された後も独力で事件のおかしい点の調査を行っていた。と語る彼女はこう述べたのだ。

(事件について重要な情報を発見した、か)

署内では解決したものとして扱われている八十稲羽逆さ吊り連続殺人事件。その事件をひっくり返す情報。電話では言えない事なのか、夕方ジュネスまで来てくださいと遼太郎は頼まれていた。何も人通りの多いジュネスでなくとも署で話を聞こうとしたものの、どうしてもジュネスでないと駄目。と食い下がられてしまい、もしやジュネスで何か物証を発見したのかもしれない。と遼太郎は考えるとそれを了解したのだ。

(しかし……解せん)

だが彼は刑事としての推理力でおかしい点を考える。ジュネスに来てくれ。というのはジュネスでそう簡単に動かす事の出来ない物証があった。という言い訳にしては大分苦しいが考えられない事もない。

(俺一人で、それも誰にも内緒で来てくれ。か……)

捜査上では相棒である足立にさえ秘密にして来てくれ。と直斗は言っていた。そこがどうしても解せない。捜査である以上、相棒である足立を連れていくのは当然の話。しかし直斗は「堂島さん一人でないといけない」と繰り返し強くお願いしていた。それに根負けし、今日の夕方七時にジュネスの家電売り場で待ち合わせ、という事になったのだ。

(……まあいい、行けば分かる事だ。あいつの事だ、イタズラという事もないだろう)

遼太郎は直斗を探偵として信頼している様子を見せながら煙草を喫煙室の灰皿に押し付けて火を消し、喫煙室を出ていった。

それから時間が過ぎて午後七時。遼太郎は早目に仕事を切り上げると言われた通り一人でジュネスへとやってきていた。もつとも、直斗が、彼女のいう事が正しければ犯人と思しきグループに拘束されて

いる可能性がある。そのため予防線は張っていた。

(真に「今日の十二時までには俺から連絡がなければ明日、警察に連絡しろ」という電話は留守電に다가しておいた……警察に内緒にしろ。と言われたが、家族に内緒にしろ。とは言われていないからな)

直斗の願いを逆手に取り、悪知恵を働かせている。遼太郎は真が来てからこういう融通が利くようになったものだ。と自ら苦笑し、ジュネスの家電売り場へとやってくる。

「堂島刑事、お待ちしておりました」

そこには直斗が静かに立っていた。いや、その横に青い髪の長身男性も立っている。

「君は、利武君？」

「こんにちは」

予想だにしないその相手に遼太郎はぎよつとなる、が直後すぐに頭を働かせた。

「直斗、もしかしてお前のいう証拠、というのは彼が証人である。ということなのか？ だったら都合のいい時に彼を連れて署まで——」

「いえ、違います……証人、というのはある意味当たらずとも遠からずですが」

「——？」

どうにも直斗の言葉の意味が分からない。と遼太郎は首を傾げる。

「お兄ちゃん、人払い完了したよ」

「!？」

すると背後から突然そんな声が聞こえ、遼太郎は驚いたように振り返る。

「あ、こんにちはは初めまして。堂島さん。真君からお話は伺ってます」

そこには赤色の髪をポニーテール風にしどことなく命に似た顔立ちをした、ジュネスの制服を着た女性が立っていた。

「というか、家電売り場ほとんど人いなかったから人払いも何もありませんけどね……」

その横では同じくジュネスの制服を着た、茶髪をショートにした気の強そうな女性のため息をついている。

「き、君達は？」

「僕の妹と彼女です。まあ紹介は後に……丁度、今日のメインも到着したようですし」

「メイン？」

遼太郎がぼかんとした様子で問うと命が説明、その最後の言葉に遼太郎はまた不思議そうに尋ねる。

「叔父さん、お待たせしました」

「真!？」

そこに姿を現したのは遼太郎の甥にして家族——椎宮真だった。その姿に遼太郎はぎよつとした顔を見せた後、表情を険しくさせる。「なんのつもりだ？ 事件の重要な情報を見つけた、と連絡を受けたからここまで来たんだ。イタズラだったらただじゃすまさんぞ？」

「そんなつもりはありません。俺は……俺達は事件の重要な情報を、この事件の真実へと至る鍵をこの手に持っています」

「俺、達？」

遼太郎の重い声にも動じずに真は静かに、だが力強くそう言いきり家電売り場の一番巨大なテレビへとゆっくり歩み寄る。そして右手を静かにそのテレビへと近づけた。

「なっ!？」

もう何度目の驚きになったか分からない。しかし遼太郎は驚きを隠せていなかった。硬い何の変哲もないテレビの画面、それに真が触れた瞬間まるで水面のように波紋が走ったのだ。それだけではない。まるで水の中に手を入れていつているかのように真の手が、腕がテレビへと吸い込まれていく。

「こ、これは……一体、なんのトリックだ？」

「堂島さん、手を」

驚愕に固まっている遼太郎に直斗が手を差し出すよう促し、遼太郎は呆けたままその声に反応して直斗の手を取る。

「さあ、真実に向かって出発」

「うお!？」

そしてその背中を命が押し、そこで遼太郎は我に返る。

「じゃ、私達は持ち場に戻るね」

「後はよろしく」

「い、いや、待て！ これは一体どういう事なんだ!？」

結生とゆかりがばいばいと手を振り、遼太郎が慌てたように声を上げる。だが直斗が手を引き命が背を押し、遼太郎は先に入っていく真の後を追うように、驚愕が続いているため無理もないが自分の身体がテレビへと入っていくことに疑問を持つ余裕すらなく、テレビの中に吸い込まれていった。

「(…)…(…)は、どこなんだ!？」

テレビの中に入った遼太郎が開口一番声を上げる。霧に包まれた不可思議な場所、明らかにジュネスではない。かと言って地元八十稲羽でもない。そんな場所に突然やってきては狼狽するのも無理はない。

「待ってましたよ、堂島さん」

まるで当然のように彼を待っていた陽介達に疑問を持つ余裕すらなく、陽介は遼太郎の前に歩き寄ると手に持っていた物を遼太郎へと差し出した。

「堂島さん、これをかけてください」

「っ、これは…メガネか？」

陽介に渡されたメガネ——ほとんど真のものと同じでフレームが濃い茶色になっている程度しか違いはない——を遼太郎は訝し気な顔を見せながらかける。だがその時また「なあっ!？」と声を上げた。

「深い霧が、まるでないようだ…っつて、お前達、なんでこんな所にいるんだ!？」

霧がなくなつて辺りを見通せるようになってやっと、遼太郎は自称特別捜査隊メンバーがいる事に気づく。

「このメガネは理屈こそ不明なんです、このテレビの中を覆う霧を見えなくさせる効果があるんです。そして、この世界を俺達はマヨナカテレビ、と呼んでいます」

「マヨナカ…テレビ…」

真の説明、この世界の名前を遼太郎は反芻。それから真は語り始め

た。四月、自分がこの町に来た時から起きている殺人事件、それはこの世界で起きているものなのだ。このマヨナカテレビの中に潜む存在——シャドウ、それを打倒できる唯一の力——ペルソナについて。陽介達がペルソナの説明に入ったところでそれぞれのペルソナを召喚するなど説明のフオローも行う。

「……テレビの中に広がる世界、マヨナカテレビ、抑圧された自我が表に出た存在シャドウにそれを制御する事で生まれるペルソナ。テレビに放り込まれた人間は俺達の世界で霧が濃くなる日、つまりこつちの世界で霧が晴れたらシャドウに殺される……山野真由美アナと小西早紀は間に合わず殺されてしまったが天城雪子、巽完二、久慈川りせ、白鐘直斗は誘拐されてテレビに落とされたのを真達が助けてきた……」

遼太郎は一気に提示された情報を噛み砕くように繰り返し、頭を押さえる。

「ダメだ、頭が痛くなってきた……」

「だ、大丈夫ですか、叔父さん？」

「無茶を言うな。お前達みたいな柔軟な子供と違ってこつちは偏屈な大人なんだ。こんな訳の分からん事をいきなりまくしたてられて理解しきれないだろう……」

頭を押さえる遼太郎を真は心配するが、遼太郎は呆れたようにため息をついてそう答える。

「まあ、こんな物証を目の前に持ち出されたら信じる以外はねえがな」
そして遼太郎はこの不可思議な世界を見回す、再びため息をつく。

「んで、なんだっけか……お前達はそのペルソナ？ とかいう奴を使つてシャドウ？ とかいうもんと戦つてる。つて認識でいいのか？」

「はい。俺や先輩はちよつと経緯が違いますが、陽介達は抑圧された自我であるシャドウを受け入れる事でペルソナを得ているんです」

「僕に関しては真君達とはまた別の観点によるペルソナ入手になるんですが……そこまで説明してたら余計混乱しちゃうんで、今は置いてください」

遼太郎はとりあえず必要最低限の情報確認を行う事に決め、真と命が補足を行う。

「えくと、そんなもって……マヨナカテレビに放り込まれた人間の心によつて、この世界は広がっている?」

「あ、そこに関しては実際に見てもらった方が早いと思うつす。商店街に移動しようぜ」

「商店街? 店もあるのか?」

情報確認を続ける遼太郎だが、そこは見てもらった方が早いと言う陽介に従つて移動開始、しかし商店街という言葉から遼太郎はそんな誤解をしていた。

「……おい、本当に商店街じゃねえか……」

そして彼は頬を引きつかせる。自分がずっと見てきていた商店街、正にそのものの風景が広がっているのだ。しかし赤と黒が混ざり合ったような配色が不気味さを掻き立てている。

「そして、この世界に住むシャドウという化け物とお前達は戦っている」

「はい……叔父さん、この世界を知らせてから事後承諾っていうのもおかしいんですが……俺達と一緒に戦ってください!」

「……事後承諾も何も、こんな世界を知られてないと何を馬鹿な事を言つてるんだ。と一蹴していたよ」

真の真剣な言葉に遼太郎は苦笑する。

「この世界が現在犯人に繋がる唯一の道なんだろう? なら望むところだ!」

そして彼はこくりと頷いて返した。

「ありがとう、叔父さん」

「じゃあ、相棒。俺達はここで待つてるから」

「危なくなつたらすぐ探知するから、任せといて!」

真がお礼を言った辺りで神社前に到着。この辺で待つという事をあらかじめ決めていたため真と遼太郎を除いて足を止め、二人だけで先に進んでいく。目的地は陽介のシャドウが出現した場所——小西酒店だ。

「叔父さん、さつき説明しましたけど……シャドウというのはその人間が抑圧している感情が自我を持ち現れた姿……つまり、その本人が心のどこかで思っていることの表れなんです。いや、その隠したい負の側面が性質悪く暴走してしまっている。と言った方が正しい」

「ふむ……」

「そしてシャドウは宿主に否定される事で暴走する」

真はこの先起きるだろう事を遼太郎に説明する。

「だから叔父さん。何があろうとも、絶対に、シャドウを……もう一人の自分を否定しないでください。どれだけ認めたくない事であろうとも、それは必ず叔父さんが心のどこかで思ってしまったている事。それが膨らんでしまったものなんですから」

「……分かった」

真の言葉に遼太郎は静かに頷く。しかしその表情はこわばっており、流石の彼も未体験かつ常識離れたことに緊張を隠せていなかった。そして二人は小西酒店へと足を踏み入れる。陽介のシャドウとの戦いから全く足を踏み入れていないここは陽介のシャドウが巻き起こした暴風や真と命の奮闘によって内装がボロボロになり、割れた酒瓶などが辺りに散乱していたままの状態だった。

「……本当に、小西さんこの店と同じなんだな……」

遼太郎はどこか驚いた様子で店内を眺めまわす。真は小西酒店の内装を現実世界で見たことはないがどうやら内装もそっくりのようだ。

「叔父さん、シャドウがどこから来るか分かりません。気をつけてください」

「お、おう」

真の言葉に遼太郎はこくりと頷き、真剣な表情になって辺りを警戒し始める。

「ぶ、くくくくく」

するとそこに遼太郎の笑い声が聞こえてくる。

「なっ!?……お、俺……だっ……」

遼太郎も絶句する。店の真ん中、いつの間にかそこに立っていたの

は金色の瞳を輝かせる遼太郎——彼のシャドウだった。遼太郎のシャドウは相手を嘲笑するような笑みを浮かべ、遼太郎に敵意の視線を向けていた。

「犯人に繋がる道なら協力する？ よく言ったものだ……そこまでして、お前は菜々子から逃げたいんだな」

「な!？」

遼太郎のシャドウの言葉に、遼太郎は愕然とする。菜々子、我が子から逃げたい。遼太郎の心から生み出された、と先ほど教えられた存在はそう言っているのだ。

「そうだろうか？ ひき逃げにあった千里の無念を晴らす、そう言つて菜々子から遠ざかり、無駄な捜査を繰り返している」

「な、何を馬鹿な！ 俺は——」

「——ああ、ひき逃げと言えば……菜々子を迎えに行っていた千里はその時どう思っていたんだろうなあ。ひき逃げにあい、たった一人で倒れて、痛かっただろうなあ」

遼太郎の反論を遮り、遼太郎のシャドウは嘲笑しながらそう続ける。

「目撃者もなく、発見は遅れに遅れ、見つかった時はもう手遅れ。一人寂しく命が消えて行き、身体が冷たくなっていく。その時千里は何を思っていたんだろうなあ……自分がどうして死んでしまうのかという嘆きか、愛する家族を遺して逝ってしまう事への謝罪の気持ちか、それとも——」

遼太郎はそこまで言うと、ニタアと笑みを歪ませて遼太郎を真つ直ぐに見つめる。

「——菜々子を迎えに行くことがなければ、私は死ななかつたのに。という怒りか」

「っ!?!？」

その言葉に遼太郎は言葉を失う。

「ば、馬鹿を言うな！ 千里がそんな事を思うはずがない!!」

「ああ、そうだな。あの優しい千里がそんな事を考えるはずがないな。すまない」

遼太郎の反論を、遼太郎のシャドウはやけに素直に聞き入れ、謝罪するとペこりと頭を下げる。

「だが、お前はどうかだろうな？」

しかし頭を上げた時、遼太郎のシャドウは再び相手を嘲笑する笑みを浮かべていた。

「思っているんだろう？ 菜々子を見るたびに、菜々子から千里の面影を見つけるごとに、犯人を捕まえられないっていうやりきれなさを、自分の無力感を……現実を突きつけられている事を」

「や、やめろ！」

「いや、違う。菜々子さえいなければ千里は死ななかつた。そうだ、菜々子さえいなければ、千里は今も俺の隣で笑っていてくれた」

「ち、違う！」

遼太郎のシャドウの叫びを、遼太郎は怯えた表情で否定する。

「違わないさ。お前は菜々子を疎ましく思っている、だから真に菜々子を押し付けて菜々子から離れる。もうこれ以上追いやいな事件を追い続けて、菜々子を置いてけぼりにしている。今度はこの事件を利用して菜々子から離れようって寸法かな？」

「で、でたらめを言うな!!」

「でたらめじゃないさ。だって俺は、お前なんだからな！」

「違う!!」

遼太郎のシャドウの言葉を、遼太郎は強く否定する。

「お前なんか——」

そしてその口から禁句の否定が飛び出ようとした。

「叔父さん!!!」

「——っ!？」

直前、真が声を張り上げてそれを封じる。

「落ち着いてください、叔父さん……どんなことがあるとも、俺は絶対に叔父さんを否定しない。いや、菜々子も、きっと叔父さんを……お父さんを否定したりしません」

真はいつの間にか取り出した一枚の写真を見せる。それは菜々子から渡された一枚の写真、堂島家三人の笑顔の瞬間を切り取った色あ

せない思い出の証。真と菜々子の真の絆の証だ。

「……ああ、そうだな」

その写真を見て遼太郎も落ち着いたのか、ふうと息を吐く。そして今度は彼がゆつくりと、しかししっかりと己のシャドウの目を真つ直ぐに見た。

「確かにそうだ」

「―」

こくり、と大きく頷き、遼太郎は己のシャドウの言葉を肯定する。「確かに、菜々子がいなければ千里が死なずにすんだかもしれない。今も俺の隣で笑っていたかもしれない。そう思わなかったと言える嘘になる……」

今まで己が抑えこんでいた思いを吐き出す。それは今まで見てこなかった自分への懺悔の言葉。

「だが、今なら断言できる。菜々子がいなければ、少なくとも今の俺は笑顔になれていない。菜々子から千里の面影を見つける度に辛くなったこともある。それでも、あの子がいてくれただけで、どれほど救われて来たか分からない。いくら千里が隣で笑いかけてくれていても、菜々子がいなければ、俺は笑顔になれない自信がある」

遼太郎はそこまで言うと言に笑みを向ける。

「ありがとうよ、真。お前に菜々子を押し付けていた。俺なんかより、お前の方がずっと菜々子の『家族』だ。そう思い込んでしまっていた。だが、もう逃げない」

遼太郎はそう言い、再び己のシャドウと真つ直ぐ相對する。

「俺はお前だ。お前は、菜々子と向き合って、また大切な存在を失う事を恐れ……千里を、仇討ちを言い訳に事件へと逃げ続けていた。臆病な俺自身だ」

その言葉に遼太郎のシャドウの口元から嘲笑の笑みが消え、代わりに穏やかな笑みが浮かぶ。

「俺はもう逃げない。刑事として、父親として……家族として。俺は菜々子と向き合う」

その言葉を聞いた遼太郎のシャドウは満足げに頷くと目を閉じ、同

時にその姿が光に包まれる。直後、遼太郎の目の前に一体の存在が姿を現す。それは遼太郎の心の海より現れた存在、もう一人の自分であるシャドウを受け入れる事で生まれ変わった事を証明する存在——ペルソナ。茶色の髪を伸ばして目を隠し、しかし辛うじて見える口元には慈愛の笑みが浮かんでいる。純白の衣服に身を包んだ姿はまるで天女のような。その姿を遼太郎は静かに見上げていた。

「……カミムスビ」

遼太郎が静かに呟く。するとカミムスビは静かに頷いてタロットカードとなり、遼太郎の前にゆつくりと降下。そのカードにはローマ数字の「V」、法王を意味する数字が書かれていた。そのカードは遼太郎の目の前まで落ちると光の粒子となって彼を包み込んだ。

「叔父さん」

「真……これが……」

「はい。これがペルソナです」

真の言葉に遼太郎は静かに「そうか」と呟く。

「真……ありがとうな」

遼太郎は唐突に真にお礼を言う。

「逃げるのも、悔やむのも、ここでもう全部、仕舞いだ。俺はもう二度と、大切なものを失くさない。絶対に……絶対にだ」

その表情からは強い決意が感じ取れる。

「これは……お前が教えてくれた強さだな……ありがとうな」

二人はしばらく無言の時間を過ごししてから、小西酒店を後にしていった。

「真！ 堂島さん！」

神社前で待つていた陽介が一番に二人が戻ってきた事に気づき、大きく手を振る。すると今まで探知に気を張っていたらしいりせがはっとしたようにヒミコの召喚を解除する。

「大きなシャドウの反応がなかった……っていう事はもしかして……」

「ああ。叔父さんはシャドウを否定する事なく受け入れる事が出来たんだ」

「す、すごっ!」

「やつぱり、大人ですね」

りせがもしかしてと言うと真は彼女の言葉を皆まで聞かずにそう答え、それを聞いた千枝と雪子が遼太郎を尊敬の目で見る。

「いや、真に止めてもらわなきゃ危なかった……」

しかし遼太郎はふっと笑ってそう答える。

「しかし……この世界が殺人事件が起きていたとはな……って事は久保の奴は……」

「はい。恐らく彼は模倣犯、というのが僕達の間推理です。彼はそもそもこの世界を知っていたのかすら怪しい。それに久保の逮捕後、僕が誘拐された事がその証拠になります」

遼太郎の言葉に直斗がそう答え、遼太郎は渋い顔をしながら「なんてこった」と声を漏らす。

「捜査は初めからやり直して事か……」

頭をかきながら遼太郎はそう呟き、ふうと息を吐くと真達を見る。

「とにかく、捜査の洗い直しは俺の方でやっておく。お前達はマヨナカテレビの方を確認して、何かあれば俺にも報告するんだ」

「や、やめさせないんすか!?!」

遼太郎の言葉に陽介は、彼が自分達がこんな危険な事に首を突っ込んでいることを黙認する、と言っているにも等しい事を驚く。と、遼太郎はふっと笑った。

「本音を言うならやめさせたいさ。だがどうしても人手が足りん。足立や署の連中をこんな訳の分からん事に巻き込むわけにもいかないからな。それに、万が一次の被害者がテレビに放り込まれたりしたら、お前達じゃないと助けられない。そうだろ?」

「はい」

遼太郎は最初に本音を言いつつ、マヨナカテレビの世界に精通している真達の手助けが必要だと語る。

「だが、決して無理だけはするな。被害者の命も大事だが、お前達の命も同じくらいに大事なんだからな」

『はいー』

遼太郎の締め、真達は大きく頷いて返し、それから彼らはマヨナカテレビの世界から出ていく。

「……こんな大人数が出入りしてるのに、誰も気づかないものなんだな」

テレビから出終えた後、遼太郎がため息交じりに呟くと真達も何とも言えない表情になる。しかし彼は「まあ騒ぎになるよりはマシか」と無理矢理自分を納得させていた。

「じゃあ、とりあえず今は次のマヨナカテレビまで待とう」

「分かった。そっちは任せただぞ」

真が今後の方針を決めると遼太郎も了解する。真達は今まで通りマヨナカテレビの確認と調査、遼太郎は警察という立場を利用しての捜査。と互いの方針を決定した。そして今回は解散、真も遼太郎が仕事を終えているなら一緒に帰ろうかと声をかけようとする。

「真、先に帰っててくれ」

「え？」

「少し、野暮用を思い出してな」

「はい、分かりました？」

遼太郎は真に先に帰るよう促し、真は首を傾げながらも終わらせなければならぬ仕事でも思い出したのか程度に考えて彼の言う通りひと足先に帰路へとついたのであった。

それから夜。遼太郎は帰って来て早々何故か真と菜々子を真の部屋に追いやり、菜々子は「どうしたんだろうね？」と首を傾げ、真も「さあ？」と首を傾げていた。

「おい、二人とも。ちよつと降りてきなさい！」

と、階下から遼太郎の声が聞こえてきた。

「むこう行つてろつて言ったのに？」

「とりあえず降りてみよう」

菜々子がまたも首を傾げ、真も一緒に階段を下りて居間に向かう。

「ケーキ!? 丸いのだ!!」

居間を見て一番に菜々子が驚いたように声を上げる。テーブルの上にはホールケーキが用意されており、菜々子は遼太郎に「きょう、な

んのおいわい!？」と尋ねる。

「あー、えつとだな……今日は『家族』の大事な日なんだ」
「だいじな日?」

遼太郎の妙に歯切れの悪い言葉に菜々子は首を傾げる。それに遼太郎は「そうだ」と頷いて菜々子と真を交互に見る。

「お前と、コイツと、俺が、『家族』になる記念日だ」
「……いままでは?」

遼太郎の言葉に菜々子が単刀直入に純粋な言葉で聞き返すと遼太郎は口ごもる。

「と、とにかくな、ちゃんと、『家族』になる記念日なんだ」

誤魔化すようにそう言い、菜々子は「ふうん」とよく分かってないような様子を見せつつも嬉しそうに笑い、「よくわかんないけど、でも、なんかうれしいね!」と表現する。

「よし、じゃあ食おうか」
「うん!」

遼太郎がそう言うのと菜々子は我慢できないようにたたつと走って座り、三人でケーキを囲んで楽しい時間を過ごす。そしてケーキを食べ終えた頃、遼太郎はフォークを置いてまた何かを切り出す。

「それとな、外の様子見てきたんだが。後で少し、散歩に出よう……三人で、行つときたい場所があるんだ」

「ほんと! おさんぽ!」

「ああ。さ、準備してきなさい」

「はい!」

遼太郎の言葉に菜々子は目を輝かせ、嬉しそうに散歩の準備へと行く。

「あー、その……なんだ。妙な事に付き合わせて、その……悪かったな」

「いえ、楽しかったです」

「そうか……優しいな、お前は」

遼太郎の申し訳なきような言葉に対し真が楽しかったと伝えると、遼太郎も嬉しそうな様子を見せる。

「どうも、こんなことでもしないとケジメがつけられないと思ってな……それに、菜々子にもちゃんと知っておいて欲しかった。俺が、ちゃんと家族として、あの子を大切に想ってるって事を」

遼太郎は己の中で一つのケジメをつけるために今回のイベントを企画したらしい。真はその心意を理解すると共に家族という絆が深まった事を嬉しく思う。するとそこで遼太郎は「それとな」と一拍置いて真にマグカップを差し出した。

「これは？」

「俺と菜々子が使ってるのと同じヤツさ。これはお前専用。後で名前書いといてやるからな」

「いや、名前はちよつと……」

遼太郎の言葉に真はこの年になって名前はちよつとと恥ずかしそうに漏らす。遼太郎は笑いながら「書いとかないと間違うだろ」と返し、「菜々子のも俺のも、底にちゃんと書いてあるぞ？」と答える。その笑顔は心の底から楽しそうなものだ。

「俺達は、家族だ」

遼太郎は真剣な表情で切り出す。

「だから、お前のカップも、菜々子のカップも、いつでも俺が満タンにしてやる……忘れるんじゃないぞ」

「……はい」

その言葉に真も微笑を浮かべて首肯。

「お父さん、じゅんびできたー？」

「ああ、そろそろ出ようか」

「行く、お兄ちゃん！」

準備が終わってやってきた菜々子も一緒に、三人で散歩に出かけた。

やってきたのは鮫川の河川敷。菜々子は「よるだところいけど、お父さんとお兄ちゃんといっしょで、たのしーね！」とはしゃいでいた。「はしゃいで落ちるなよ」

遼太郎も笑いながら菜々子に釘を刺す。と、菜々子は首を傾げながら「どうしてここに来たの？」と遼太郎に聞いた。

「お前、ずっと来た行って行ってたろ？」

それに対し遼太郎はそう答え、「そのうち三人で、天気の良い日に弁当でも持ってこような」と続けると菜々子は「やったー！」と万歳する。それから菜々子はもつと川の近くに行ってみたいと笑顔で言い、遼太郎が足元に気をつけるよ、と注意しながらもいいぞと言うと嬉しそうに川の方に走っていく。

「あの子のあんな顔……久しぶりに見た気がするな」

微笑んでそう呟いた次に、遼太郎は真剣な表情で真の方を向く。

「俺は……これからも千里を轢いた犯人を追う」

決意を込めた表情でそう言う遼太郎は、それは自分がまた菜々子から逃げるための免罪符にするためではない。と言う。

「俺が……刑事だからだ」

悪を許さない国の正義、警察。その誇りであり職務、そんな簡単で当たり前前の事すら自分はいつの間にか忘れてしまっていた。と彼は真に語る。

「大切な事は皆、お前が思い出させてくれた。本当に、感謝してる」「はい」

遼太郎の決意と感謝を聞いた真は嬉しそうに頷く。

「この町はなあ、俺の町だ。菜々子やお前のいる、俺の居場所だ。だから俺はこれからもここを守って生きていく。デカとして……父親として、な」

清々しく笑いながら、遼太郎はそう言った。

我は汝……汝は我……

汝、ついに真実を絆を得たり……

真実の絆、それは即ち、まことの目なり

今こそ、汝には見ゆるべし。

“法王”の究極の力、“コウリユウ”の

汝の内に目覚めん事を……

そんな時、真にそんな声が聞こえ、それと共に自らの中に何か強大な力が生まれるのを感じる。

「待てコラー!!」

と、土手からそんな叫び声と「しつけーんだよ!!」という声が聞こえてきた。

「なんだあ?」

遼太郎はいきなりの声にそう漏らした後、土手に見える相手が顔見知りなのか「どうした!」と呼びかける。と、土手から警官が降りてきた。

「堂島刑事……す、すいません、お休み中……」

「んなこたあ、気にすんな。それよりあいつら、なんだ?」

「あ、あの、カツアゲグループです。最近、ウワサになって……」

警官からの話を聞いた遼太郎は呆れた様子で「しよっぱい真似しやがって」とぼやく。

「お父さん、行くの?」

「……おう」

遼太郎の言葉を聞いて戻ってきたらしい菜々子が尋ねると、遼太郎は一つ頷いた後、娘を安心させる父親の笑顔を菜々子に見せる。

「悪いヤツらを捕まえるのが、俺の……いや、お父さんの、仕事だからな」

そう言い、遼太郎は真に向けて「菜々子を頼む」と言う。

「任せて下さい」

「そこなくちゃな」

真の言葉に遼太郎は満面の笑みで頷いた。

「お父さん、きをつけてね?」

「ふ、俺を誰だと思ってる。泣く子も黙る、稲羽署の堂島だぞ? だから、お前達は安心して先帰って寝てろ」

菜々子が心配そうに声をかけると、遼太郎は菜々子の頭の上に手を置いて安心させるようにそう言う。そして彼は警官と共に階段を駆

け上がり、

「おるあああ！ 待てこのクソガキ共ー!!」

カツアゲグループ目掛けて怒号を上げ、追跡を始めた。

「お父さん、がんばれー!!」

菜々子は父に声援を送り、次に「かっこいい」と父親を評する。

「さき、おうちかえろ？ かえって、オフロわかして……あと、いっしよにやしよく作ろ！」

「ああ、そうだな」

二人は遼太郎の夜食メニューを考えながら、一緒に家に帰っていくのであった。

第五十五話 文化祭準備

10月25日。今日は朝から雨の予報で実際に登校途中に雨が降り始め、真は差した傘を片手に通学路を歩いていた。

「おはようございませう、椎宮さん」

「ああ、白鐘。おはよう」

その途中で直斗に出会い、互いに挨拶を交わして共に通学路を歩く。と、直斗がアンニュイな様子で息を吐いた。

「雨……嫌ですね」

言葉少なく直斗は呟く。「今は誰も失踪していないが、それでも何か落ち着かない」ということだ。

「わ、悪い、入れてくれっ!!」

すると慌てた様子の陽介が駆け寄り、強引に真の傘に入る。

「お、俺も頼みます!」

「ごっちはもう満員だよ! お前、直斗に入れてもらえ!」

続けて完二が駆け寄るが真の傘は満員、陽介が苦言を漏らす。

「どうぞ、異君。そのままでは風邪を引きますよ」

「なっ!……俺とコイツが一緒の傘だあ? じよ、冗談じゃねえ!」

そんな事したら、その、つまり……あ、あ、*「相合傘」* じゃねえか!」

完二を迎え入れようと傘を高くする直斗。しかしそれに対し完二は照れ、その理由を聞いた陽介が呆れた視線を完二に向ける。

「相合傘って、お前……ガキじゃあるまいし……」

「うっせ! つーか花村先輩がどいてくださいよ!」

「……ムチャクチャ言ってるな、コイツ」

完二は自分が真の傘に入るから陽介はどけと言いはじめ、陽介は呆れつつも「ま、別にいいけどさ」と続けて直斗の傘に入ろうと彼女に声をかける。しかしそこで完二が「ふざけた事言ってるじゃねえぞ!」と声を荒げ、それを聞いた陽介が「お前どうしたいんだよ!」とツツコミを入れた。

「あの、僕は別にどちらでも……」

「……しょうがない。陽介、傘持ってくれ」

「へ？ お、おう」

困った様子の子の直斗に真は呆れたようにため息をつく。陽介に傘を押し付ける。それに陽介が困惑した様子で受け取ると真が直斗の傘に入った。

「え!?!」

「このままアホな言い合いしてたら遅刻する。陽介と完二と一緒に傘なら文句はあるまい」

「なるほど、第三の選択ですね……予想外でしたが、僕は構いませんよ」

男性二人の呆けた声に真はそう返し、直斗は感心した様子でうんうんと頷く。

「……くそ、しゃーねえな。花村先輩、一緒に入ってってやるよ」

「偉そうに言うなよ!」

陽介と完二はまだコントを続けつつ、四人二組で雨の中歩き始める。

「そういうえば、先輩。前のカードの件ですが……」

すると直斗が陽介と完二に聞こえないように真に声をかける。実際に雨音でかき消されているのか二人には聞こえていない様子だ。

「やはり、何も書いていない。ただの真っ白なカードです」

直斗はそう結論から告げる。ただ、紙の厚さの割りに手触りが少し硬いというかゴワゴワしている。と補足を入れた。

「文面がない以上、心当たりといっても浮かびませんね。恐らく、イタズラでしょう。お手を煩わせてすみませんでした」

「つまらない話だったな」

「あははっ。確かに、この先を期待しそうですが」

直斗の出した結論に真が苦笑すると直斗も子供っぽく笑う。

「ですが、この前の脅迫状の件もあります。下手に抱え込むべき事情が増えなかったのはむしろありがたいでしょう」

だが次に直斗は真剣な目つきで続け、その言葉には真も同意する。

「え、と……その、報告は以上です」

どこか歯切れの悪い様子で直斗は口をつぐむ。

「……何かあったのか？ 雨の日だからとか関係なさそうな気がするんだが」

そんな彼女の様子に真は何か勘付いたのか静かに直斗に問いかける。と、直斗は苦笑を漏らした。

「隠し事は得意なつもりだったんですが、まだまだでしょうかね……昨日の事なんですが……」

真の心配そうな言葉に対し直斗はそう話し始める。昨日、少し用事があつて遅くなつていた時に薬師寺という、彼女の祖父の秘書をしている人から電話があつたのだが、その内容は白鐘の本家に何者かが侵入したらしく、自分の部屋が荒らされていたようだが何か盗られたものに心当たりはないか。というもの。さらに祖父の持ち物からも直斗に関するものがいくつか消えたそうだ。

「そちらの方は何とも言えませんが、僕は無くして困るものはないので……」

「イタズラと断じていたカードと同時期にお前を狙つたらしい泥棒……偶然と思えないのは最近が最近だからか？」

「ええ、そこなんですよね……」

直斗の説明を受け、真がそう呟くと直斗も同意するように頷くと、彼女は少し置いて慌てたような声を出した。

「と、ともかく。僕の事はあまり気にしないでください。僕もあなたも、今は他にやることがあるはず……あなたに心配されると、その……どうしていいのか……」

そう言う直斗は珍しく落ち着かない様子を見せていた。

それから時間が過ぎて夜中。陽介は自宅の自室で合コン喫茶の責任者として必要なものを考えていた。内装に関しては安っぽい折り紙で作った小さな輪を繋ぎ合わせるといふありがちな飾りやジュネスの100均で売っているようなテーブルクロスなどの用品で間に合わせられる。というか予算を考えると安く済ませられるところは安く済ませないと確実に予算オーバーしてしまう。あと考えなければならぬのは一応喫茶という体裁のためのメニューというところだろう。

(ま、そこもジュースやクッキーでも買ってくれば形にはなるか……) 流石に全部買って済ませるわけにもいかないから、明日辺りにでもお菓子作りが出来たりちよつとつまめる軽食を作れる奴はいないか聞くとしよう。と陽介は考えるとそれらを書いていたノートを閉じ、鞆の中に放り込む。

「ヨースケーヨースケー」

「ん？ なんだよクマ」

すると現在花村家に居候をしているクマが彼の部屋に入ってくる。

「ここに書かれている文化祭って何クマか？」

そう尋ねてくるクマの手に持たれているプリント用紙に陽介は視線を向ける。それには「八十神高校文化祭」と大きく書かれており、どうやら学校で配られ親に渡しておいた文化祭のチラシをクマが見つけたらしい。と納得した陽介は文化祭について簡単に説明。それを興味深く聞いたクマは、プリントに書かれてある項目を指差して「これは何クマか？」と、さらに質問を重ねる。クマが指差しているのは「ミス八高・コンテスト!!」という項目だ。

「ああミスコンな。ま、一言で言っちゃえば、うちの学校で一番可愛い子は誰かってのを決めるんだよ」

「なんと！ そのミスコンにユキチャン達は出るクマか!？」

「いや、出ねえだろ」

可愛い子を決めるという説明にふんふんと頷きやや興奮気味のクマが続けて尋ねるが、どこか冷めた様子の子の陽介が答えると、クマはガーンという擬音がつきそうなほどに残念そうな顔をし、がくりと膝をついた。

「そ、そんなあ!……そんなのもつたないクマー! ユキチャンは美麗だしチエチャンは華麗だし、これがミスコンに出なくて何がミスコンクマかー!」

「もつたないっつってもよお……」

芝居がかった大袈裟な動作で膝をついた後、今度は背中を床につけて手足をじたばたという分かりやすいというより古臭い子供の駄々をこねる行動をするクマに陽介は呆れ顔を見せる。それからクマは

疲れたのか手足を止め、もう一度チラシを見直す。すると彼はピーン、と天啓を感じたように目を見開くとがばっと起き上がった。

「ヨースケ！ ココ！ ココに他薦でも参加を受け付けるって書いてあるクマ!!」

「ん、どれどれ……へー。他薦も受け付けるのか……」

目をキラキラさせてそう言うクマに陽介はチラシを確認。確かにそんな文言が書かれており、しかも『学校外からの参加も受け付けます』という文言が書かれていることを見つける。

「いや、もうこれミス八高じゃねえだろ……」

学外から参加してミス八高つてのもおかしいだろとツツコミを入れる陽介。

「ヨースケ！ つまりヨースケが言えばユキチャン達がミスコンに出場してくれるんだよね?!」

「ま、そういう事になるけどよ……」

クマはキラキラとした目で陽介に迫り、陽介も困った顔を見せるがやがて根負けしたように頷いた。

「へいへい分かった分かった。推薦するって」

どうせ嫌なら勝手に辞退すんだろ。と、鬱陶しいクマをどかしながら陽介はミスコン他薦用紙——チラシの裏に印刷されていた——を書き始める。推薦するのは里中千枝に天城雪子をはじめとした自称特別捜査隊のメンバー。最後に推薦主である自分の名前を書いて用紙は準備完了だ。

「じゃ、これを明日提出すつからな」

「ありがとーヨースケー！ これでユキチャン達の水着審査が見られるクマー！」

わーいわーいと万歳をするクマに対し、陽介はミスコン自体を知らなかつたくせに一体どこでそんな知識をつけてくるんだよ。とクマの台詞に頭を抱える。が、そこで彼は何か気づいたようにチラシを裏返し、もう一度ミスコンの項目を確認した。

「……クマ、ミスコンに水着審査はねえぞ？」

「なんですとおく!?!」

その言葉にクマが驚いた様子でチラシを奪い取り確認する。ミスコンは所謂ステージ上に上がってのアピールのみ。水着審査の文字はない。その事実には愕然としたクマは、ガツクリと項垂れるが、そこである一文に目が留まった。それは「ミス八高・女装大会!! 優勝賞品『ミス八高・コンテスト!! 審査員権』」。

「ヨースケ! これ! これにクマは出れるクマか!」

「は、はあ!」

その一文に気付いたクマが、凄い勢いで陽介に迫り、あまりの剣幕に圧倒された陽介はクマが指している項目を確認。『ミス八高・女装大会!!』という一文を確認、さらに悲鳴を上げた。

「はああつ!? お前、女装大会に出る気かよ!?……こ、これも学校外からの参加は受け付けてるみたいだけど……」

「クマなら優勝間違いなしクマ!」

驚く陽介に、クマは自信たっぷりな優勝間違いなしと言い切る。

「ま、確かにお前、見た目は良いからな……それ以前に参加者が居ないと思うけどな」

クマ一人しか参加者がいなければクマの優勝は決まりだろう。どうせ自分は関係ないしクマが出たいというならわざわざ止めもするまいと、若干面倒くさく感じながら、同じように女装大会へのクマの推薦を書く。そして「明日提出するけど、絶対に後悔すんなよ」と何度も念押し。クマが「分かってるクマ!」と答えて上機嫌で部屋を出ていくのを確認して、陽介は鞆の中に件のチラシを放り込むとさつさと床についたのであった。

騒動が起きるのは、それから二日後だった。

10月27日。昼休み。真と完二は陽介に呼ばれて——というか本人も千枝に頼まれたらしい——屋上へとやってきていた。

「どーいうことか、説明してほしいんだけどっ!」

「な、何がだよ!」

「ミスコン! 勝手にあたしらの名前書いたでしょ!」

千枝の怒号に陽介が怯むと千枝は畳みかけるようにミスコンに勝手に参加させた事を問い詰める。朝、掲示板の前に人だかりが出来て

いるのを真も見たのだが、どうやら内容は八高のミスコンに千枝、雪子、りせ、直斗が参加している。という事らしい。なお教諭の柏木典子とクラスメイトの大谷花子も参加のようだ。

「な、なんで疑いが俺一択なんだよ!」

「ねえ、椎宮君、完二君……心当たりはある?」

たった一人責められている陽介が反撃し、それに対して雪子が他に疑わしいと言える真と完二に問う。二人は無言で首を横に振った。

「ほら、二人は知らないって」

「いやいやいやおかしいだろ!」

雪子はその反応だけであっさり二人を容疑者から外す。それに陽介は悲鳴を上げた。

「里中先輩、天城先輩。遅くなりました」

すると屋上に直斗が入ってきた。気のせいか普段から冷静な声がさらに重く、冷たい雰囲気を見せている。

「どうだった?」

「柏木先生からコピーを貰ってきました」

雪子の問いかけに直斗はそう返し、陽介の元まで歩き寄ると彼に一枚の紙を突きつける。

「この、ミス八高・コンテスト!!」参加者推薦用紙ですが。僕達四人の名前と共に、推薦者の欄に花村陽介、と先輩の名前が書かれています」

「あ、いや……いい、嫌なら辞退すればいいだろ? ネタで済むわけだし」

「それが出来ないから怒ってんだっつもの!」

物的証拠を突きつけられた陽介は顔を青くしながら、推薦した時に思っていた「嫌なら辞退すればいい」と提案するが千枝はさらに怒号を上げる。

「今年は主催の柏木の仕切りで、申請されたら他薦でも強制なのよ!」
「マジ? そっか……そういう細かいレギュレーションは見落としたかも……」

千枝の怒声に陽介は思わず口を滑らせ、屋上が沈黙に包まれる。

「やっぱオマエじゃんか!!」

「やつべ……」

「花村先輩……もしかしたら花村先輩の名を騙った何者かの犯行かもしれないと信じたかったんですが……」

千枝の怒号に陽介は口を押さえ、直斗は冷たい目で陽介を見る。同時に雪子と千枝は陽介に文句をマシンガンの如く連射し始めた。

「ねえ、先輩達はさ、私達に出て欲しい?」

「そ、そりゃーまーな」

りせの問いかけに陽介が素直に答える。

「だって天城とか、地味に学校中で人気じゃん? その上、アイドル“に『探偵王子』だぜ? こんな注目ヒロインが全員不参加じゃ、ミスコンあり得ないって!」

「あたしは関係ないじゃん!」

陽介の言葉に千枝が頭から湯気が出てそうなほどに顔を真っ赤にして巻き込まれたことを怒る。

「……悪かったあね、関係なくて!!」

「ぐふあっ!」

直後、自分一人だけ特に人気がないと暗に言われている事に逆ギレし、陽介を八つ当たり気味に蹴り飛ばすのであった。

「いや、朝に少し聞いたが。里中は意外と隠れファンが多いらしいぞ。

一条も——」

真はうつかり口を滑らせそうになり、その様子に千枝が首を傾げる。

「ふえ? 一条君がどうかしたの?」

「——いや、なんでもない。とにかく、里中も人気がある。それだけは確かだ」

不思議そうな表情をする千枝に対し真はそう断言。いざ人気があるとと言われると恥ずかしいのか、千枝は頭をかきながら「そ、そんな照れるなく」とにへへ、と笑いながら呟いていた。

「な、完二も出て欲しいよな?」

「あ?……んなん、興味ねえスよ、俺……」

陽介の言葉に、話を振られた完二は興味なさそうに呟くが、その時ちらりと直斗に視線を向けてしまい、直斗が不思議そうに首を傾げると慌てて顔を逆方向に逸らす。

「……タツミくんは、ぜひナオトくんに出て欲しいってさ」

「なっ……いい、言つてねえよ!」

その様子に陽介はにやつきながら返し、完二が怒号で返すが、彼は構うことなく真の方を見た。

「で、真はどうなんだ? つか、出て欲しいよな?」

「あまり無理に、とは言えないが……個人的には出て欲しいかな」

陽介の言葉に真は照れたように笑いながら答える。まさか真が敵に回るとは、と千枝と雪子が固まった。

「あ、いや……謎が深まった事件しかり脅迫状しかり、最近色々暗い事が多いからな。祭りで思いつき騒いで空気を変えたいってだけで。里中や天城は華があるからな。もちろん久慈川と白鐘もだが」

下心なくそう答える真に、千枝と雪子が照れたようにうつむく。

「期待してくれてる人がいるなら、久々に頑張っちゃおうかな。事務所とかは、この際ムシで」

するとりせがミスコン参加に前向きな発言をする。それを聞いた陽介が話に乗って「クマも楽しみにしてるぜ。つか、俺に全員の推薦プッシュしたのあいっだし」と話した。

「クマ公もグルか……」

「あのクマ、燃やしちやおうか……」

それを聞いた千枝と雪子が不穏な言葉を口にする。

「困ったことになりましたね……断れないのが確定なら、もう議論に意味はないですが……」

そこで直斗が困った様子で呟いた。男装をしている直斗からすれば自分がミスコンのステージに上がるだけでも場違いな気がしているようだ。

「なんとか学校側と……」

「も……問題、ねえんじゃ……ねえか?」

どうにか交渉をしようかと考える直斗にそう完二が声をかけた。

「て、てか出る！ いいから！」

だがその完二はどこかテンパっており、陽介が「いつにも増してオーバーヒート気味」とその様子を称した。

「なによ完二、回りくどい事言ってるんで、気になるなら言えばいいのに。じゃあ、ミスコンは私達四人とも参加でOK?」

「な、何を言ってるんですか!?!」

りせはあっさり四人ともミスコン参加決定とまとめ、その言葉に直斗が慌て出す。

「その……頼む、出てくれ」

だが直斗に向けて完二が深く頭を下げた。

「その時に、だな。俺の、疑惑が、完全に晴れるってえか……頼む!!」

俺を男にしてくれ!!」

「疑惑?……何の話?」

完二の言葉に直斗は困惑気な表情をするが、完二が「いいから出る! テメエ名探偵だろうが!」と叫び、直斗は「探偵関係あるの!?!」とむしろ困惑を深めていた。

「……分かったわよ」

千枝がため息交じりに渋々参加を受け入れる。

「その代わり、対価はきっちり払ってもらうからね!」

「お、おう……ジュネスのビフテキセットくらいなら奢るけど……」

「あ、そういうの今回はいいわ」

「え!?! お、お前が肉につられないなんて……」

「肉よりいい事を思いついたからね」

千枝の言葉に陽介はいつものように肉で手を打とうとするが、千枝がそれをそっけなく断ると陽介は驚いた表情を見せる。それに対し千枝はきしし、と悪戯っぽい笑みを陽介のみならず真や完二にも向けていた。

それから翌日10月28日、朝。真と陽介は最終段階として合コン喫茶のメニューについて話し合いながら登校していた。

「んじゃあ、軽食については取り分けが出来るサラダとかで……」

「ああ。あらかじめ盛り付けてラップをかけて、クーラーボックスか

何かに保存しておけば事足りるだろう。一応切らした時のためにレシピなどのメモも用意しておく」

「結局真に頼りつきりだな、悪い」

結局軽食に関しては調理経験があると共に比較的知識が豊富な真が全権を任されてしまい、真は材料を簡単に盛り付けるレベルのサラダを提案。保存方法も考えていた。そして彼らが校門をくぐったその時だった。

「な、なんじやこりやあああああああつ!!?」

校内から突然聞こえてきたのは完二の悲鳴。真と陽介は顔を見合わせると走り出した。

「完二ー！ どうした!?!」

「な、何かあつたのか!?!」

「つつ、椎宮先輩！ 花村先輩！ これを見てください!」

真と陽介の呼び声に完二は掲示板を指差す。そこに目立つよう書かれているのは「ミス八高・女装大会!!」という文字だ。

「ああ、女装大会にクマの名前が書かれてるって事か？ あいつがどうしても出たいつつうからよ。どうせあいつしかいねえんだし、消化試合消化試合」

「そ、それだけじゃねえんすよ!」

クマを推薦した陽介は完二の驚愕の理由を察したようにそう話すが完二は首を横に振って返す。

「なんだよ、他に参加者いるの？ ハハ、誰だよ、んな物好きは」

まさかどつかずれているクマ以外に女装大会なんて恥さらしの場に出る人間がいるとは思っていない陽介は笑いながら掲示板を確認する。

「えー、なになに…… 『花村陽介』……俺だーツ!?!」

「それだけじゃねえんすよ！ ほら、下!」

「なっ!?! 『異完二』!?! しかも 『椎宮真』!?!」

「はあっ!?!」

陽介の言葉に真も驚いて掲示板に駆け寄る。そこには確かに自分の名前が書かれていた。そしていつの間にか集まっていた登校途中

の生徒が掲示板を確認するなり「花村、期待してるぜ」と呼びかけた
り、女子生徒が「結構多いねー。去年二人とかじゃなかった?」「他薦
でも強制らしーじゃん? 誰かが推薦しちゃったんじゃない?」と話す
がその中で「意外と自薦だったりして」という言葉が出たり「それ割
と真顔でキモイ」と話していたりしている。

「誰かが、推薦?……」

陽介がその中の一言に反応し、眉間にしわを寄せてそこに手を当て
る。

「あいつらだ……やりやがったな……」

そう呟き、陽介は「行くぞ!」と号令をかけると三人は二年二組へ
と走り、教室のドアを開ける。そこでは千枝と雪子がクラスメイトの
女子と談笑している姿があった。

「おいつ、里中!」

「ん? あ、おはよー。早いね」

「早いね。じゃ、ねーよ! どーいう事が説明してもらおうか!」

「何が?」

陽介が血相を変えて千枝に詰問するが、千枝はきよとんとした顔を
見せる。なお談笑していたクラスメイトの女子は血相を変えた陽介
にびつくりした後、話の腰を折られたせいかその場を離れていた。

「何が? じゃねーよ!! 女装大会! 俺らの名前、書いただろ!」

「あー、アレか。人数が増えて、柏木先生も喜んでるそうだよ」

その怒号にも近い言葉に千枝が暢気に答える。

「おつまえ、女装だぞ?! 女装!!」

「先にやったのはアンタだろ!!」

陽介の言葉に対し、千枝は「先に許可も取らず出たくもないミスコ
ンに参加させられたのはこっちだ。これでおあいこだ」と主張する。
それ自体は正論のため陽介も言い返せず、弱々しい声で「それとこれ
とは、違うだろうよお」と漏らすのが精一杯だった。

「大丈夫」

すると、雪子が自信満々に頷いた。

「すっごく綺麗にしてあげる。ね?」

「そういうこと言ってるんじゃないの！」

しかしその返答は女装大会への参加が前提となっており、陽介が悲鳴を上げると完二も「男にはプライドってもんがあるんすよ！」と続く。

「頑張らせてもらおう」

「うっお!? マジかよお前!」

だが続く真は参加に前向きな姿勢を見せ、陽介と完二がびっくりして彼の方を見る。すると真は肩をすくめた。

「元はと言えば当事者に許可を取らずミスコンに出したのは確かだからな。こっちも同じことされても文句は言えない」

「いや、俺と先輩は完全にとぼっちりじゃねえスか?」

「参加を促した。という意味で言うなら同罪だ」

真の言葉に完二がツツコむと、止めるのではなく参加を促した時点で同罪と真は答え、次に顔に手を当てる。

「……というか、そうとでも思っていないと流石にやってられない」

「二な、なんかごめん……」

結局開き直っているだけの様子の真に陽介と千枝が思わず謝罪の言葉を口に出した。

「はあ……まあ、とりあえず。名前が推薦されたら強制参加だ。たかが祭りの一イベント、こうなったら下手にあがかないで開き直った方がマシだ」

「そうそう。文句があるなら柏木センセに言いに行つて」

「か、柏木が聞き入れるわけねえじゃんか……」

真は諦観の念を持って、祭りなんだからと開き直る事に決め、千枝が文句があるなら柏木先生に直談判してねと続く。それに陽介も強敵に対し頭を抱えて無言になった。

「あ、諦めるなんて先輩らしくねえつすよ! 俺、ほんつと嫌つすからね!」

「完二君、出席日数とか大丈夫?」

諦めずに抵抗しようとする完二だが、雪子の何気ない一言に硬直する。

「あまり、先生をがっかりさせない方が、いいと思う」

「先輩……さらつと怖いスね……」

真顔でサラリと脅迫めいた事を言ってくる雪子に対して、完二がうつむいてそう呟いた。雪子も千枝程表に出していないだけで、それほどまでに今回の事を怒っている様子である。

「プロデュースはあたし達に任せてもらっていいしね。リせちゃんもいんだからさ。キレイになんないワケないし」

「……絶対、キレイになるんだろうな……」

「保証する」

千枝の言葉に、何か気になったのか完二が問うと雪子が真剣な顔で頷く。

「……ちよつ、お前何出る気になってんだよ!？」

「出るからには、咲くしかないっしょ!」

陽介の言葉に対し、完二は男らしくガッツポーズを取って宣言する。

「そーいう男らしさ、やめてくれよ! 俺は絶対——」

「サボったら柏木、怒るだろうな……来年は完二君と授業受けてたりして」

今度は陽介が抵抗しようとするが、今度は千枝がサラリと脅迫。完二はまだしも自分のクラス担任であり、陽介は硬直した。

「陽介」

すると真が陽介の肩にポンと手を置く。

「いいから出ろ」

一トーン落とした脅しの言葉。それは「自分達が出るのに元凶であるお前だけ逃げるのは許さん」と語っており、陽介はがくりと肩を落とす。

「ど……どうしてこんな事になったんだ……」

陽介の口から漏れ出る言葉。その小さな声は誰にも届かずに霧散するのであった。

第五十六話 文化祭一日目

10月29日。今日は八十神高校の文化祭、今日明日と晴れの文化祭日和である。

二年二組の出し物、合コン喫茶。机を三つずつ二組で向かい合わせにし、その上に赤色の布をテーブルクロスのようにかけて花瓶と花などの飾りでそれなりに形になるように飾られている。しかし、客は誰一人来ていない。

「ご、合コンやってまーす……」

雪子が恥ずかしそうに客引きをするが、彼女自身「恥ずかしいな、これ」と呟いており、どこか哀愁を誘う。というかそもそも人通りがない。

「見てってもらうには、サクラが必要な」

「サクラ？」

クラス委員の男子がそう呟き、陽介が聞き返すとクラス委員の男子は「俺らでサクラをやる」と説明。陽介が「寒くね？」とツツコミを入れるが、クラス委員の男子は「客が来ないと始まらないし」と若干やけになっていた。

「けど、ここにいるの五人で奇数だし……」

「やつほー、皆。様子を見に来たよ」

人数が合わないと言おうとする陽介だが、そこに命が顔を出した。

「すげータイミング……ってあれ？ ゆかりさんと結生さんは？」

「二人は別行動。結生が出店でご飯食べてるからゆかりはそれについてる」

狙ったようなタイミングでやってきた命に千枝は驚いた後、彼の恋人と妹がいない事を不思議に思うと命はそう説明をした。とりあえずこれで偶数にはなったものの、陽介は困ったように腕を組む。

「でも、男4の女2だろ？」

「お前ら、どーせ明日、女装すんだろ？ どっちか女の席に座れ」

「女装？」

「あ、あーいや、なんでもないっすよ、あはは……」

陽介の言葉にクラス委員の男子がそう言うと言が首を傾げ、陽介が慌てて誤魔化しに入る。

「……」

その隙に真がさつきと男子の席へと座り、命も訳が分からない様子ながら真の隣の席に座る。

「じゃ、花村。お前女役な」

「ま、マジかよ……」

クラス委員の男子がそう命じ、陽介は肩を落としながらも反論することなく女子の席に座る。

「じゃ、始め」

そしてクラス委員の男子がそう宣言。しかし場は沈黙に包まれていた。

「えーっと……はじめて、いいよ?」

そう言い直すが、やはり沈黙に包まれる場。その重い沈黙に包まれながら、クラス委員の男子は「開始、シテクレ」と言うがやっぱり誰も喋らない。

「……というより、これ何?」

やっと喋ったのは命だが部外者のためそもそも状況を理解していなかった。

「ご、合コンの真似っす……」

陽介が頭を抱えながら答えるが、女性役のため「合コンですわよ、おほほほー」と言い直した。

「いやいーよ言葉遣いは……あ、命さん。合コンの経験とかないんですか?」

「ないよ、そんなの。多分結生とゆかりも」

千枝が本物の合コンについて教えてもらえれば少しは感覚掴めるんじゃないかと、経験ありそうな命に尋ねるが命は即座に経験がないと否定する。さらに結生とゆかりもないと逃げ道を塞ぐ。なお結生に関しては人生共に歩んできた双子だからそういう事があれば分かる、ゆかりに関しては自分と付き合うまでむしろ男子に対して壁を作っていたことによる推測である。

「えーつと、ご趣味は？　とか？」

「先輩、それ多分お見合いとかそういうのです」

ボケる命に真がツツコミを入れた。

「しゅ、趣味はえつと、格闘全般でつす。見る方メインね……あはは……」

とりあえず命の質問に答える千枝だが、「うわ、すげー恥ずかしい」と呟く。

「わ、私は、ええと……シヤ、シヤドウ倒したり？」

「それ趣味じゃねーだろ！」

雪子が変な墓穴を掘り、クラス委員の男子がきよとした表情を見せると陽介がツツコミを入れる。

「えーとじゃあ、こつちから質問するね！」

次に千枝が女性陣から質問をしようとするが、改めて考えて沈黙すると「無いな」と結論を出した。

「す、好きな女の子のタイプは？」

「おお、直球……」

咄嗟に雪子が質問を出し、陽介も直球の質問に驚く。

「えーと……か、かわいい子？」

雪子に質問されて舞い上がったのか、クラス委員の男子が声を裏返しながら答えるが「うわ、何か寒いな」と自分で呟き、照れるクラス委員の男子に陽介は「今更……」とツツコミを入れながら呆れる。

「ゆかりと結生」

「ピンポイントですなあんたは?!」

続けて恋人馬鹿&シスコンの命の返答に全力でツツコミを入れた。

「可愛い子なら誰でも好きだよ、オレは。とか言った方がいい？」

「やめてください、いやマジで。なんか色んな意味で洒落にならない気が……」

さらに続けてボケる命に陽介は頭を抱えながら答えた後、真を見る。

「んで、真。後はお前だけだぞ」

「そうだな……特に考えたことはないけど……優しい子とかか？」

無難な受け答え。だが陽介は「俺も俺も！ 守ってあげたくなくなるっつーか」と女性役である事を忘れて同意する。

「じゃあ、陽介がこの中で気になる異性は？」

「えー、みんなカッコいいけどー、やっぱり、頼りになるのは椎宮――」

お返しに真が陽介に質問。それに陽介は裏声を使ったどこかギャルっぽい声色で返答。

「――つてアホかつ!! 素人にノリつつこみさすなっ!!」

だが最後まで貫くのは無理だったか素に戻ってツツコミを入れる。

「はあ……」

千枝がため息をつくとき、命も苦笑。残るメンバーはがくりとうなだれた。

「お兄ちゃん。真君とここにいるみたいだけど……」

「喫茶店、みたいだね？ 盛り上がり――」

そこに結生とゆかりが登場。様子を見に来たらしい二人は人気のない重い沈黙に包まれている教室内を眺めまわして黙り込む。

「――ないね」

「……じゃ、じゃあ、また!」

沈黙に耐えきれなかったか、二人は静かに後ずさると足早にその場を立ち去っていった。

「合コン喫茶、失敗だな……」

「シミュレーションをしておくべきだったな」

陽介と真が大きいため息をつき、そう結論を呟くのであった。

合コン喫茶の爆死確定後、真は陽介に合コン喫茶を任せると一年の教室へと遊びにやってきていた。

「……なんだこれ？」

だがそこで真がぼやく。出し物なのは間違いない、だが二組のはずの松永が三組に出入りしてその生徒と打ち合わせをしていたり一組のはずの直斗が二組で出し物の案内をしている。

「あ、先輩!」

「あ、久慈川……なあ、これどういう事なんだ？」

すると背後から何者かが真に声をかけ、真は振り返るとその相手――久慈川りせに声をかける。彼女は肩に看板らしきものを担いでおり、どうやら客引きから帰ってきたようだ。そう考えつつ真は一年のカオス状態を質問する。

「え？……ああ、これこれ」

りせは一瞬首を傾げつつもすぐに納得いったように頷くと看板を見せる。

「……一年生合同？ 駄菓子ゲーセン雑貨なんでもござれ？」

「二年生の中で出し物の意見が分かれすぎちゃってね。じゃあいつそ三つのクラスで共通して意見の多かった三つに絞ってそれぞれやりたいところでやっちゃえばいいんじゃない？ って結論になったの」

随分とフリーダムな結論だった。

「それで、一組が駄菓子屋で二組がゲーセン、三組が雑貨屋やってるの。先輩も見て行ってね。じゃ、私これから接客のシフトだから。またね」

「あ、ああ……」

りせはそう言うと、彼女のメインの持ち場は駄菓子屋なのか一組に入って「たっだいまー。客引きこうたくいつ、接客入りまーっす」と明るい声で呼びかける。その時男性の声で「うおおおおっ！」と盛り上がった声が聞こえてくる。

「……そっとしておこう」

今すぐ入ったらりせ目当ての客に巻き込まれそうだと真は判断。

二組のゲームセンターに後ろのドアから入る。

「いらっしやいませ……あ、先輩。こんにちは」

「ゲームセンターか。白鐘のイメージとは合わないけど、意外だな？」

「ああ、聞いたんですか？ 駄菓子屋や雑貨屋はどうもイメージが湧かなくって……それに僕は頭脳系ゲーム部門という事になってますから」

後ろのドアからすぐの所にいた直斗に挨拶。真が直斗とゲーセンに繋がらない事からここを選んだのを意外だと言うが、直斗は照れくさそうに頬をかきながら説明する。確かにゲーセンそのものと直

斗のイメージはあまり結びつかないがなるほど、頭を使う系のゲームという意味なら直斗はぴったりだ。

「なるほど。じゃあ少し遊んでいくか」

「あ、言い忘れてました。先輩、どうせならポイント稼ぎでもしてみませんか？」

「ポイント稼ぎ？」

真が納得したように頷き、遊んでいこうかと呟くと直斗はそう補足説明を入れる。曰く「このゲームセンターでは専用のポイントを賭けて勝負する事が出来、賭けたポイントと、スコア系のゲームならスコアに、タイムアタック系のゲームならタイムに、対戦系のゲームなら勝率に応じてポイントを得る事が出来、そのポイントを使用して一組の駄菓子屋や三組の雑貨屋で買い物もできる」ということらしい。ここでも一年生合同というのを生かしていた。

「もちろん強制ではありません。無料でゲームをする事も可能ですが、その場合特典などは一切つきません。また集めたポイントを現金に換金する事もできませんのでそこはご注意ください。まあ、詳しい事はそちらにポイント交換所があるのでそこでご質問をお願いします」

そう言つて直斗は教室の前入り口を指差す。

「……ども」

そこには尚紀が「ポイント交換所」という看板がでかか飾られている席で座っていた。どうやら彼がその係らしく、真は直斗に「サンキュ」と返してから尚紀の方に歩いていく。と尚紀はぺこりと頭を下げた。

「こんにちは」

「ああ。とりあえず白鐘の方からざっくりと説明は聞いたよ」

「はい。ポイントは基本十円十ポイント単位です。十ポイントチケットが十枚溜まったとか百ポイントチケットが十枚溜まったとかでかさばって邪魔になったら持ってきてください。両替しますんで。逆に百ポイントチケットを十ポイントチケット十枚へくみたいな両替も可能っす……まあ、万単位になったらチケットは用意できてないで

すけど……あ、それとチケットをお金に換金って事も出来ないんで気をつけてください。何回かそういうトラブルあったんで。あと、ポイントが使えるのは学園祭の間だけですから……えーと、そんなくらいかな？ 何か質問は？ まあこの教室中に説明と注意用の張り紙貼ってるんで、最悪それ見てもらえば大体分かりますけど」

尚紀はボソボソとした声ながら淀みなく説明。教室の入り口やそこら中に貼っている張り紙を指しながら質問はないかと尋ねるが、真は「大丈夫だ」と頷く。

「大丈夫だ、ありがとう。とりあえず百ポイント頼む」

「はい。んじゃ百円になります。十ポイントチケット十枚でいいですか？」

「サンキュ」

真は百円支払って百ポイントチケット——折り紙を半分に分けてマジックで「10P」と書いている簡単なものだ——を十枚手に入れ、踵を返すと直斗のいる席へと戻りながらチケットを確認する。

「なんというか、簡単なもんだな。すぐ偽造できそうだぞ」

「わざわざそんな事する人もいないでしょう？ それに、対策はしています」

真の言葉に直斗はチケット偽造の手間とここの商品の入手可能になるといのが釣り合っていないと答え、しかしきつちり対策はしていると続けた。

「裏返してみてください」

「裏？ ってなんだこれ、ハンコが押されているな？」

直斗の指示通り裏返したチケットには大きく、しかし中身は繊細な模様が描かれたハンコが押されていた。

「偽造対策のために僕が考案し、巽君に作ってもらいました。もちろん解析方法は全クラスに周知させています。と言っても透明な紙に同じハンコを押していて、重ねて透かさせるだけですけど」

「お前ら本気出しすぎだろ……」

不正は許さない探偵魂が垣間見え、真は苦笑をするが同時に偽札ならぬ偽チケットの偽造の心配もないと一安心する。

「じゃ、やるか」

「はい。じゃあ何で勝負しますか？ 簡単なものでよろしければあつちむいてホイからありますけど？」

「もうちよつと知的に勝負しようか？」

「そうですね。あ、これ対戦内容のメニューと簡単なレートになります」

直斗は学園祭の空気のせいかな冗談を言う余裕を見せており、真も苦笑を返すと直斗はふふつと笑った後に対戦メニューを提示する。

「トランプゲームか……んじや手始めにポーカーでもやるか」

「了解しました。ああ、今回は簡易的なルールで行います。ルールは所謂クローズド・ポーカーで行いますが、勝敗は手役の強弱のみで判定、引き分けについてはノーペア同士の場合はディーラーつまり僕の勝利としますが、それ以外の手役で引き分けの場合は全てプレイヤー、先輩の勝利となり、勝利した場合はプレイヤーの手役に応じたポイントをゲットできます。もちろんプレイヤーが敗北した場合は賭けたポイントは没収となります」

「要するに例えばワンペア同士でも数字の大小による勝敗判定は行わないって事か」

「はい。その場合は先輩の勝利、ノーペアの場合を除き引き分けは全て先輩の勝利として扱われますから、積極的な行動をお勧めしますよ？」

今までの時間の間に何度かトランプゲームをしていたのだろう。シャツフルをする直斗はやけに手慣れており、その顔も普段の探偵らしい冷静さの中に狡猾さを秘めているように見える。

「ああ、ポーカーの手役と強弱を覚えてないのなら、こちらに一覧を用意していますからどうぞご覧ください」

「ゲーム中に視線で相手の手役を推測しようとも思ってるのか？」

そんな手に引つかかるか。手役くらいは覚えてる、しまっつていいぞ」
「流石先輩」

早速場外攻撃を仕掛けてきた直斗だが真は引つかからずに片づけるように言い、直斗はくすくすと笑う。やはり強かさが普段の直斗より

も増していた。

「では、さっそく」

「ああ。10ポイントで頼む」

真が10ポイントのチケットを一枚テーブルに置き、直斗も承諾すると流れるようにトランプを互いに五枚ずつ配り、残った山札を二人の間にとんと置く。それを合図に真は自分の手札を確認した。

(ハートの2、ダイヤの8、クラブの5、クラブの2、ハートの4か) とりあえずハートとクラブの2同士でワンペアは達成している。真は何か揃えば御の字、程度に考えてハートの4とクラブの5を捨てた。

「二枚捨てて二枚引く」

「では僕も」

互いに二枚ずつ捨てて二枚カードを引き、真は手札を確認。代わりに来たのはスペードの7とダイヤの3、結果はハートとクラブの2のワンペアのままだ。

「さて、勝負しますか？ 下りますか？」

「最初なのに下りるといいうのも味気ないだろ？ 俺はワンペアだ。そっちは？」

直斗の確認に対し真は勝負を宣言。自分の手札を見せると、直斗はふふつと笑った。

「残念。僕はノーカードでした。先輩の勝ちですね、ワンペアでの勝利だから……10ポイント差し上げますね」

直斗の手札はスペードの5、クラブの4、ダイヤの10、ハートの1、ダイヤの8。確かに一つも役が揃っていなかった。

「さて、続けますか？」

「ああ。この二十ポイントを賭ける」

「了解しました」

真は机に乗せたままの合計20ポイントチケットを賭けると示し、直斗も頷くとカードを回収。再びよくシャッフルする。そして配られたカードを真は確認、再び真と直斗のポーカー勝負が幕を開けた。

「……ふう。この辺にしておくか」

「ええ。楽しいゲームでした」

数回のゲームの後、真が席を立つと直斗も息をつく。いつの間にか観客も集まっており、特にゲームセンター担当の生徒は「白鐘と渡り合った、だと……」と絶句していた。

「では、合計五十ポイントのチケットを差し上げますね」

「サンキュ。じゃあな」

「はい」

勝利し敗北しを繰り返し、最終的には真が五十ポイント分勝利に終わる。真は五十ポイントチケットを受け取ると挨拶をして二組を出ていった。そのまま隣の三組へと足を運ぶ。

「お、先輩。らっしやいッス」

「完二、お前は雑貨屋か」

「ええまあ。俺元々三組だし、ならここでいいかなってよ」

店番をしているらしい完二は笑いながらそう答える。雑貨屋らしくラインナップは色々揃っているが、行っているのは女子がメインなのだろうか。ぬいぐるみやアクセサリーのような女物が多い様に見える、一応男向けのキーホルダーなどの小物も置かれてはいるが女物がメインになっているように見える。

「あ、先輩。いらっしやいませー！」

「よ、松永」

と、真の文化部の後輩である松永綾音が挨拶をしてきた。真も軽く右手を上げて挨拶を返す。

「あの、先輩。あの編みぐるみですけど凄いですよ！　なんと異君が作ったんですー！」

「でっ!?　おい松永声がでけえ！　それは秘密だっつただらうが!?!」

「あっ!?　ご、ごめんなさい!!」

「あーいや、まあ先輩ならいいんだけどよ……」

松永は完二の前に並ぶ凝ったあみぐるみを指しながら興奮したように言うが、それを聞いた完二が慌てたように叫ぶと松永は慌てて頭

を下げ、完二も真なら知っていることだからと松永を許す。それから完二は注意深く周りを見回すが、他のクラスメイトもお客さんも接客や商品に夢中でどうやら松永の声は聞こえてないらしく、彼はほつと安堵の息をついた。

「完二、お前……」

「ええ、まあ。この前あのガキにかっこいいって言われてから……まだ吹っ切れたとか、そういうんじゃないんすけど、こういうのも悪くねえっつうか……松永は雑貨屋の希望だったし、先輩の後輩みたいだったんで、相談したんすよ。編みぐるみを置けねえかって……」

「それで、委員長に相談をして、クラスの皆には私の知り合いが作ってくれた、ということにして置く事にしましたんす」

「や、やっぱまだその、知ってる奴には恥ずかしいっつうかよ……」

松永は委員長に事情を話した上でメイドイン完二なのは内緒にして彼の作った編みぐるみを商品に追加したらしく、完二は照れくさそうに笑いながらそう言う。しかし自分が作ったという事は内緒ではあるが自分の作品をこうやって出している事が進歩だな、と真は考えた。

「っつーか、あのガキにまた纏わりつかれてよ、今度は母親に頼まれたとかでネコだの犬だのピンク色のワニだのを作ってくれとかお願いされたんすよ。お金払うからとかよ……なんか変な事になっちゃまったぜ」

完二は苦笑交じりながらも嬉しそうに笑いながらそう言っていた。

「異くん。こっちの段ボール箱運んでくれなーい？」

「おう！ んじゃ先輩、また後で。松永、ちつとでいいからここ頼んだぞ」

「ああ」

「はいー！」

すると入り口近くで段ボールを引きずっていた女子が完二を呼び、完二も快い返事をする。と真に「また後で」と挨拶。松永に僅かな時間ながら店番を頼むと女子の方に走っていき重そうな段ボールを軽々と持ち上げ運び始めた。

「完二も大分馴染んでるんだな」

「はい。まだ他のクラスとはそこまでっていわけでもないんですが、三組の中では力仕事とかで頼りにされてるそうですよ」

真が思わずそう呟くと松永がこくりと頷き、笑顔でそう返したのであった。

すると教室の外、一組の方から何かざわざわという物音が聞こえ始める。

「どうしたんでしよう?」

「俺が見てこよう」

「あ、はい」

首を傾げる松永に真はそう言い残し、教室を出ると一組の方へと歩いていく。

「なあなあいいでしょ、りせちー。ちよつと文化祭を案内してくれてもさー」

「一緒に遊ぼうぜ、りせちー」

「仕事中ですから」

一組を覗き込んだ真に目に映るのはどうにも柄の悪い様子の他校生がりせを誘い、りせがそれをあしらっている光景。実家である豆腐屋の手伝いをしている時にもそういう事はあるのかやけに手慣れていた。しかし相手の方もしつこく誘い、だがりせも淡々とあしらうのみ。それが繰り返され、ついに他校生は我慢の限界になったのかりせの腕を掴んだ。

「いいから来いって言ってるんだよ!」

「きやつ!」

怒号を上げる他校生の男子にりせが悲鳴を上げる。

「そこまでだ」

それを見た瞬間、真は二人の間に割り込むと他校生の腕を掴む。

「な、なんだよテメエ!」

「くじ……りせは俺の仲間だ。乱暴は許さん」

「先輩……」

普段名字呼びだがここは名前呼びにした方がなんかそれっぽい、という感じのノリでりせを守るため他校生の不良を睨みつける真。それれりせが感激したように声を漏らした。

「うっせえんだよ！ テメエふざけてんなら——」

「先輩！ 何があつたんスか!?!」

怒号を上げる他校生の不良だが、それは乱入してくる完二の声によつてかき消される。

「た、巽完二……」

「先輩。一応近藤先生を呼んでくるように言っておきました」

「ああ、ありがとう。白鐘」

完二の登場に怯む他校生。さらに後ろから直斗が呼びかけると

「ぐう！」と唸った。

「くそ、行くぞ！」

「お、覚えてろ！」

完二がいる上に教師に捕まったら面倒と思ったか、すぐに教室を出て行き逃げ出す他校生の不良。それから少し遅れてやってきた近藤先生に一組のメンバーが事情を説明し始める。

「助けてくれて、ありがとうね。先輩」

「ああ」

にこつと微笑んでりせはお礼を言い、それに真はそう返す。

「お礼に、ここの駄菓子半額にしたげる！ どんどん買ってって！」

「はは……」

10円、20円のを半額にしたところであまり痛手はないんじゃないか、と素人ながらに考えて真はりせの提案に苦笑。それから直斗のところで稼いだ70ポイント分のチケットを差し出した。

「じゃあ、これで適当に見繕ってくれ」

「了解しました！」

真からの注文にりせは満面の笑顔で頷いてぴしとおふぎけの敬礼を取ると駄菓子を適当に選別していく。

「せんぱーい。特別サービスに一つだけすっぱい三つのぶどう入れてあげようかー？」

「ああ、頼む」

そんな流れがありつつ、りせは70ポイント分の半額の駄菓子＋αを真に渡す。

「ありがとうございます！ありがとうございましたっ！」

「ああ、サンキュ」

ビニール袋を手に笑顔を添えて真に渡し、真もビニール袋を受け取ると一礼して教室を出る。

「じゃあ、頑張れよ」

「うん！」

「僕達のところにもまた来てください」

「んじゃ、また後で！」

一年生にそう別れの挨拶をし、彼は教室を出ていくと、せめて駄菓子でも差し入れてやろうと思いつきながら自分達のクラス、合コン喫茶へと戻っていった。

第五十七話 文化祭二日目

文化祭の二日目。真達はコンテスト開催前に自分達の教室へとやってきていた。

「なに今さら怖じ気づいてんの。こっち来て、座って」

「ほらほら、完二くん。こっち!」

それを嬉々として待ち構えていた千枝が手招きし、りせがわざとらしい君付けで完二を呼ぶ。三人も観念した様子で教室へと入っていった。

「大丈夫、痛くしないよ」

雪子が真顔でそう言うが、どこか声質が重く不穏な響きを含んでいる。

「野望のために優勝もらうクマ!」

だがクマだけはやる気満々。そのまま雪子が真の、千枝が陽介の、りせが完二の、そして直斗がクマを担当してメイクアップをしていく。

「えっと……りせちゃん。ここからどうするんだっけ?」

メイクに不慣れなのか雪子がたびたび手を止めてはりせにメイクの仕方を尋ね、

「ねー。つけまつ毛は必須だよね?」

「お、おー! どんどん持って来い!」

千枝の言葉に陽介がやけになつて声を上げ、

「うわ、完二、肌ボロボロ……ちゃんとケアしてんの?」

「あん? なんだそりや?」

「ああ、完二に聞いた私がバカだった」

りせが肌がボロボロな完二に苦言を出したりする。そんな感じでメイクが進んでいき、そのまま時間が近いたためろくな確認もせずに体育館裏へと連行される。

「レディース、エーン、ジェントルメン!」

ピンク色のアフロヘアーのカツラを被った司会者が文化祭二日目

の目玉イベントこと「ミス？八高コンテスト」の開催を宣言する。その舞台袖では企画者である柏木が「はじまったわね……」と怪しい笑みを浮かべていた。

「さっそく一人目からご紹介しましょう！ 稲羽の美しい自然が生み出した暴走特急、破壊力は無限大！ 一年三組、巽完二ちゃんの登場だ!!」

「うっすー」

その紹介の言葉を合図に完二が舞台へと上がる。金色の髪に白いワンピース、某大女優をイメージしているのだろうが明らかに合っておらず、観客からは笑い声や悲鳴、「キツモー」という声や「これはひどい、ひどすぎるー」という声も上がっていた。

「さー、僕も近付くのが恐ろしいのですが……チャームポイントはどこですか?」

恐る恐る訊ねてくる司会者の質問に、完二は若干戸惑った様子で「……目?」と、意外にスタンダードな答えを返す。

「二番手がコレでは、もう霞んでしまうんじゃないでしょうか。がけっぶちの二番手をご紹介! ジュネスの御曹司にして爽やかイケメン、口を開けばガツカリ王子! 二年二組、花村陽介ちゃんの登場だ!!」

「ど、どもー」

その言葉を受け、引きつった笑みの陽介が恥じらった様子で登場。完二はメイクしたのがメイクに慣れたりせのためかメイク自体は形になっていくものこちらは化粧が過多気味、という印象。化粧慣れしていない千枝の経験値のなさが露呈していた。観客からは「花村先輩、いい線行くと思ったのにー!」という残念そうな声や「や、これいそうで怖い!」という化粧に不慣れな子がいきなり無理に化粧すれば、という意味合いで現実においてさうだという声を出す。

「さあ、気合いが入った服装ですが……普段からこんな感じですか?」

司会者から質問に、陽介は「んなワケねーだろ!」と、間髪入れずにツツコミを入れるが、慌てて「ねー……ですわよ?」と、言い直す。「なんすかこれ、ただの見世物じゃねえすか!」

「それ以外の何だと思つてたんだよ……」

完二の小声での抗議に陽介が呆れた様子で答える。

「僕ももう、おなかいっぱいになってきました！　続いて三番手、この人の登場です！　都会の香り漂うビターマイルド、泣かした女は星の数!?!　二年二組に舞い降りた転校生、椎宮真ちゃん！」

紹介を受け、真は堂々とした足取りで登場する。八十神高校の女子制服、丈の長いスカート、肩に担ぐ形に竹刀とその格好はスケバンそのものである。なお髪はウィッグを使って三つ編みおさげになっている。観客からは「やめてー!」、「なんで先輩、こんなの出ちゃうのー!?!」、「先輩つてクールだと思つてたのに……」と先ほどの完二や陽介とは違う意味の悲鳴が上がっている。

「さー、物議をかもし出場ですが……自分で立候補を?」
「当然です」

実際は押し付けられたものだがそれを言っても味気なく、立候補したと答える真。あまりの堂々とした返答に逆に司会者も答えに詰まった。なおその横では陽介が「純粹な青少年をキズモノにしやがって!　ぜつてートラウマになったぞコンチクショー!」と企画者の柏木への呪詛をはいていた。

「さうして最後は学校外からの参加、出場者たちのお仲間が登場です!

自称 “王様 from テレビの国”、キュートでセクシーな小悪魔ベイビー!　その名も熊田ちゃんだあ!!」

司会者からの紹介を受け、クマがスキップしながら登場する。金色のロングヘアのウィッグに青色のワンピース。不思議の国のアリスといった面持ちのクマはステージの端から端までスキップで移動し、キラキラとした愛嬌を振りまきながらアピール。最後に壇上中央でクルリと一回転して銃を構えて撃つ仕草を取る。

「ハートを、ぶち抜くゾ?」

その言葉に、体育館内から歓声が上がった。観客からは「あれ男の子!?!」という驚きや、「すっごい可愛い」という声、さらには野太い声で「オレ、あれならイケる……」という不穏な発言が交じっていた。

「それでは皆さん、投票を……え?」

出場者が全員出そろったところで投票へと移ろうとする司会者。しかし舞台袖から司会者を呼ぶ声が聞こえてきた。

「え、なに？ 一人時間ギリギリで飛び入り参加？ え、俺そんなの聞いてないよ？ 紹介文もないし……」

「はいはい、私にお任せくださいな！」

「え、誰?！」

困惑する司会者から何者か——マイクから伝わる声からして女性——がマイクを奪い取る。

「さーて皆様お立会い！ 最後の最後に真打登場！ 主人に誘われ、この一時、あなたの心に仕えましょう。その名も利武命ちゃんだあ!!」

「「なにいつ?!!」」

女性——利武結生の口から飛び出た紹介に真、陽介、完二が悲鳴にも近い声を上げる。すると黒い服に身を包んだ女性——岳羽ゆかりに手を引かれ、黒いシックなメイド服に身を包んだ命が静かな足取りでステージへと登場した。その様子は男性の主人に誘われるメイドという、なんか普通のイメージとは逆の状態だ。観客からは「ちよ、あれってジュネスのー!」、「命様よー!」、「え、隣の人ってジュネスの新人さんだよね!」、「あれ、命さんの彼女らしいよ!」という声が飛び交う。

「せ、先輩、どうして?！」

「あー、なんかノリで。結生が面白そうだから出場しろってさ」

「私は交換条件……」

ひそひそと小声で真と命とゆかりが話し合う。勝手に出場を決められたようだが全く動じずに女装を決める辺り命も肝が据わっていた。

「えーと、私飛び入りというか学校外からの参加は熊田ちゃん一人だと伺っていたので正直驚いているんですけども……何故メイドさん?！」

結生からマイクを返してもらった司会者が困惑しながら質問。それに命は満面の笑顔を浮かべた。

「ゆかりの愛用品をお借りしました」
彼氏

「ちよ、それ元はといえば命くもがもが」

なんか色々誤解を招きそうな返答にゆかりが抗議しようとするが、すぐさまその口を手で塞ぎ、さらにステージに上がった結生に任せて見事なコンビネーションでゆかりを舞台袖へと連れ去る。

「つか、大先輩と岳羽大先輩って大分ガタイ違うツスよね？　なんで入ってたんだ？」

「フリーサイズなんだから。そこあんま深く考えんな」

完二が純粹な疑問の声を出すと陽介が首を横に振りながらそう告げる。

「えーそれでは改めて、これより投票に移りたいと思います！」

改めて出場者が全員揃ったところで司会者が投票の開始を宣言する。

「今年の『ミス？　八高コンテスト』、優勝は……」

そして投票が完了し、ドラムの音を背に司会者が言葉を溜める。

「校外参加の熊田さん!!」

その言葉と共にクマが上からライトアップされ、クマが真達より一歩前が出る。ちなみに司会者の解説によると実質クマと命の一騎打ち。男子のツボを押さえたクマの方がギリギリで競り勝ったようである。

「優勝した熊田さんには、素晴らしい商品が!!　本日午後の部に行われる、真正正銘の女性たちによる、『ミス八高コンテスト』、その栄えある審査員の座をプレゼントします!!」

「うっひょーいー!」

司会者からの言葉を受け、クマは全身で喜びを表現するようにガッツポーズを取ったり飛び跳ねたりする。なお後ろでは陽介が「審査員の座かよ。セコイよな、前座の商品は……」とぼやいていた。

「審査員であんなに喜ぶなんて、なかなか出来ないよね」

「あんなに喜ばれると、なんだかこっちまで嬉しくなるね」

「無駄にピュアよね、クマのやつ」

そんなクマの様子を見た千枝が眩き、雪子も千枝に同意するとりせもそう話す。三人とも母か姉のような微笑ましい気持ちでクマを眺めていた。

「それでは熊田さん。優勝のお気持ちと、ミスコンの審査員になった感想は？」

「……ふっふっふっ。待ちに待った日が来たですね〜」

しかし、そんな微笑ましい気持ちは次の一言で崩れ去る事になる。

「午後の審査は……じゃじゃーん！ 水着審査をするべがなー!!」

その一言を聞き、男子生徒達の大歓声が体育館に響き渡った。

「なな、何言いだしてんのあいつ……そんなのあるわけ無いじゃん!!」

クマの爆弾発言に、千枝が真っ先に大慌てで反応する。

「えー、水着なんて持ってないよ!」

りせも水着を用意していない——正確に言えば家に帰れば夏物の水着はあるだろうが——と驚く。

「あのクマ、始末した方が……」

雪子が低く、殺意の籠もった小さな声で眩く。その目は鋭く研ぎ澄まされ、視線だけでクマを呪殺せんばかりに睨んでいる。

「いや、勝手に言ってるだけですから……」

直斗はクマが勝手に言っているだけだ。と呆れている。

「うふふ……いいい！ いいわあ、この流れ!」

クマの発言に柏木だけが何かを企んでいるのか邪悪な笑みを浮かべている。そんな体育館内が騒然とした中、〃ミス？ 八高コンテスト〃は幕を閉じた。

それから時間が過ぎて午後になり、女性陣はミス八高コンテストの準備のため、控え室である空き教室に集合していた。控え室には柏木と大谷が既に到着しており、余裕の表情を見せている。

「せいぜい着飾んなさいな、ガキンコちゃん達」

雪子達の到着に気付いた柏木は悠々と近付いてくると、見下すようにそう言う。その台詞を聞いた千枝は「漫画のキャラかよ」と眩いた後、柏木が本気でミスコンでの優勝を狙っている事に気付き呆れた様

子を見せる。すると控え室の扉がノックされ、紙袋を提げた女生徒が入ってきた。

「さつき優勝した熊田さんから、差し入れです」

クマからの差し入れと聞き、雪子達が首を傾げていると女生徒は気まずそうな表情で「水着だそうです」と、中身を伝える。

「ちよっ、いらないうって!」

千枝があまりの手際の良さに引きつついらないと答える。

「うふふ……ふふふあははおーっほっほっほ!!」

すると柏木が高笑いを始め、嬉しそうに「大人の魅力をさらけ出すわよ」と宣言する。

「ま、私は自前の水着だけとお」

「私も自前ですけどお」

柏木と大谷は水着は自前だと宣言、千枝が「なんなのこの人達……」と呆れ顔を見せた。

「ねえ、やっぱり辞退しない?……」

雪子は水着を着るのが嫌なのか辞退を考えていた。

「あ、柏木先生。ミス? コンに出ていた利武さんのお知り合いがミスコンへの飛び入り参加をしたいそうなんです?」

「ああ、いいわよお。何人でもいらっしやいなあ」

すると女生徒が柏木にそう確認を取り、柏木は自信満々に飛び入り参加を認める。

「命さんの知り合い……って、まさか……」

「やつほー。飛び入り参加を認めていただき、ありがとうございます!」

千枝が慌てたように声を震わせるのと、控え室に結生が飛び込んでくるのはほとんど同時だった。

「ゆ、結生さん!? どうして!?!」

「や、面白そうだし。一応水着……っぼいのは持ってきたよ」

「ノリノリですね……」

千枝が驚いた声を出すと結生は楽しそうに笑い、その様子に直斗が呆れ顔を見せる。

「ああら、あなた達の知り合いなの？ まあ、参加は認めてあげられるけどお、負ける戦はしない方が賢明よお？ さつき辞退の相談が聞こえたし、なんなら特例で辞退を認めてあげてもいいわよお？」

柏木は余裕の笑みを浮かべながら、雪子達を挑発する。

「アイドルなんて言っても、やっぱりガキンコよねえ、心も度胸も……体も」

その台詞はあからさまにりせへと向けた挑発で、しかも見下した視線をりせへと向けている。

「……はあ!？」

その挑発が勘に障ったりせが険しい視線を柏木へと向ける。

「どうせミス八高に選ばれようもない人達だし、辞退でいいんじゃないですかあ？」

と、大谷がりせを更に煽るようにそう話す。その言葉を聞いた千枝の額に怒りマークが浮かんだ。

「あ、アンタは選ばれるってわけ!? こっの……イビキ魔神!」

「なに、イビキって意味わかんない。見た目も頭も、言葉遣いも悪いのね」

「こっちはアンタのせいでどんな目にあっただと思ってるの……カ、カチンってきた」

売り言葉に買い言葉と言おうか。大谷の言葉に千枝が噛みつく。

「あら？ 私と勝負しようっていうの？ 無駄だから、やめときなさいって」

すると大谷は得意気な表情でさらに千枝を煽り、次に千枝の隣に立つ雪子を見る。

「あなたの友達にも、忠告しとくわ。どうせ、負けるんだから、今の内に逃げた方がいいわよ？」

「に、逃げるですつてえ……」

その言葉に千枝の堪忍袋の緒が切れた。

「なんで、あんたから逃げなきゃなんないのよー!」

そう言い、千枝は他のメンバーに「ここまで言われて逃げらんないでしょ!？」と同意を求め、雪子もりせも頷いた後、無言のままの直斗

を見る。

「え……僕もですか!? そ、そんな簡単に挑発に乗って、どうするんですか!？」

直斗は自分も巻き込まれそうになっている事に気づいて焦った顔になると首を横にぶんぶん振って「水着なんて絶対無理です!」と断固拒否しようとする。

「逃ーがーさーなーい」

しかし目が据わっている千枝は、逃がさんとばかりに直斗の肩をがしりと掴む。

「あ、あうう……」

直斗は涙目になって唸った後、諦めたようにうつむいた。

「文化祭二日目のメインイベント! 正真正銘、ミス八高コンテスト!! 審査が続いています! 聞こえますか! この歓声が!」

体育館で行われるミス八高コンテスト。司会者はテンション高く声を上げる。既に審査というか第一アピールポイントである壇上での自己PRは柏木と大谷が終わっている。

「では次の方! 二年二組、里中千枝さん! どうぞ!!」

司会者からの紹介を受け、千枝が壇上へと上がる。その時千枝のファンから歓声が響いた。

「さ、里中千枝です」

「では自己PRをお願いします!」

「え、えつと、性格はおとなしくって……好きな食べ物は、プディングです」

引きつった笑みを浮かべつつ、千枝がそう話す。

「うそつけ、肉だろー!」

陽介がヤジを飛ばすと、千枝はついギロツと陽介を睨みつけた。

「ありがとうございますー!」

司会者からの声を合図に千枝がステージの後ろに下がる。

「続きましては同じく、二年二組、天城雪子さんです!」

その紹介を合図に雪子が壇上に上がる。彼女への告白の成功を天城越えと称される程に人気があるだけはあり、歓声が大きくなっていた。

「こ、こんにちは。天城雪子です。えっと、家は旅館を経営しています。天城屋旅館です」

雪子のPRは咄嗟ではそれ以外思いつかなかったのか実家である天城屋旅館のPR。「日帰り入浴もできますので、どうぞごひいきに」と言つて綺麗に一礼をするのを最後に彼女はステージの後ろへと下がった。

「はい、ありがとうございますー！ 続きましてはなんとこの人、一年二組。久慈川りせさんです！」

紹介を受けて壇上へと立つりせは流石アイドルか場慣れしており、手を可愛らしく振りながらアピールすると男子勢から大きな歓声が上がった。

「こんにちはっ、久慈川でつす！ この町に来て日は浅いけど、とってもいいところで、りせちゃん幸せだよっ！」

自己PRも元気よく、男子勢の歓声をBGMにしてもなお呑まれなもの。りせは最後まで笑顔のままでりせちゃんとしてのポーズを取り、ステージの後ろに下がる。

「いっやー、生りせちゃんですよ！ ありがとうございますー！」

司会者も嬉しそうに声を弾ませていた。

「続きましては噂の転校生！ 一年一組、白鐘直斗さん！」

「おい完二、次だぞ……あいつ……」

「ちよ、しー！ 静かに！」

司会者の紹介を聞いた陽介が完二を肘でつつきながら言うように完二は陽介に黙るよう促す。そして直斗がどこかおどおどとした様子で壇上に上がった。

「……し、白鐘直斗、です」

直斗は最初に名前を名乗る。しかし動揺しているのか、その声は今まで体育館全域に出場者の声を届けていたマイクを使ってなお今にも消え入りそうな小さな声になっている。

「こんなコンテストで壇上にかかる事になるなんて……夢にも思った事がなくて……その……何を言っているのか……こ、困ったな」

直斗は困ったような照れたような表情で頭をかき、冷静沈着な直斗の意外な一面がツボに入ったのか女性陣や一部男性陣からざわめきが走り出す。直斗はペこりと頭を下げてステージの後ろに下がった。

「さて最後を飾るのは学校外からの参加者！ 午前の部、ミス？ 八高コンテスト”の準優勝者。利武命さんの妹、利武結生さんです！」

司会者からの紹介を受け、結生は威風堂々の様子で壇上へと上がる。読者モデルをやっていた経験からか、リセほどではないが立ち姿が様になっていた。

「どうも、利武結生です。今はジュネスでアルバイトをしています。皆明るくて楽しい職場です！ エヴリデイ・ヤングライフ！ ジュ・ネ・ス！」

笑顔でさらっとジュネスのPR。テーマソングで締め、結生はペこりと一礼するとステージの後ろに下がった。

「以上の個性豊かな七名で競っていただきます！」

そして出場者が全員揃った事により司会者が話を進める。

「それでは、特別審査員の熊田さんから出場者に質問をしてもらいましょう！」

司会者の言葉と共にクマが壇上に立ち、同時に男性陣からピューピューという指笛やパチパチパチという拍手、わーわーという歓声が飛び交う。

「えー、ゴホンゴホン。特別審査員の熊田です。えー、ワタシを怒らせると不利になりますのでヨロシク……」

さらりと脅迫してくるクマに、別に不利になっても怖くはない千枝以下四人が呆れ顔になり、結生も苦笑を見せる。

「えー、結生さん。彼氏はいますか？」

「彼氏はいません。けど、お兄ちゃんとはゆかりっちは私の家族ですー」

そこにいきなり投げ込まれる爆弾に結生がサムズアップをしながら堂々と答える。

「……命さん、あんなんでいいんですか？」

「ああ、結生にも困ったもんだよ。そろそろ僕にべつたりばかりしないで独り立ちしてもらいたいんだけど……まあ、結生を娶りたいっていうなら簡単だよ」

客席で見物している陽介が苦笑気味の顔で命に聞くと、命もブラコンな妹に苦笑する。だが、その次の瞬間彼の気配が変わった。例えるならいきなりライオンにでも囲まれたかのような重いプレッシャーに周囲が包まれている。

「僕を倒せばいい。ね？ 簡単でしょ？」

「うん、そうね……せめて命君レベルはないと。最大限譲歩してもお付き合いは私と命君が認めてからね。ま、それでフリーの相手は今のところ天田君しかいないけど」

結生のブラコンに負けず劣らずシスコンの命の言葉にゆかりも同意する。

「……先輩達は、結生先輩の彼氏を作りたいのか作りたくないのか分からん……」

付き合いの長い真がそんな二人の、本人は心から真面目なボケにツツコミを放棄して頭を抱えるのであった。

それからクマが出す質問はキスの経験や身体のくすぐったい部分とセクハラばかり。なお最後の一個はりせに対して「家に遊びに行つていい？」というもので、りせには「質問じゃないじゃん」と呆れられていた。

「さ、さーて、ここで皆さんに驚きのお知らせです！ なんと！ 今年度から！ 本コンテストに水着審査が加わりました！」

司会者が熱く語り、「それもこれも、この熊田さんのおかげですー」とクマに振る。振り返り、腕を振るクマに男性陣から大きな歓声が響いた。なおそんな男性陣に女性陣からは冷たい視線が飛んでいるが誰も気づいていない。

「では、参加者の方々には水着に着替えて、また登場してもらいましょー！」

その言葉を合図に柏木と大谷は意気揚々と、結生はお祭り騒ぎを楽

しむ様子で、千枝達四人はどこか暗い顔でステージ脇に下がるのであった。

それからまた先ほどの順番で壇上上がるらしく、自前の水着を着用している柏木と大谷に続いて出てきたのは千枝だ。

「あ、あはは……ど、ども……」

緑をベースに白とオレンジのラインが入ったビキニを着用した千枝は恥ずかしそうに顔を赤くしながら引きつった笑みを浮かべ、自己流のカンフーで鍛えているスポーティでスレンダーな身体に男性陣から歓声が飛ぶ。

「ほっほー」

「おっさんかお前は」

「けど、千枝先輩、かわいいッス……」

陽介の眩きに真がツツコミを入れると完二がそう眩いた。その次に雪子がステージに上がる。着用しているのは淡いピンクに白のラインの入った水着だ。

「す、すみません……」

顔を赤く染め上げ、うつむいてどうにか声を絞り出す雪子。しかしそのプロポーションはかなりのもので男性陣からの歓声も力強い。

「いやー、むしろありがたいよな」

「おお、天城先輩……俺の思った通りの人ッスよ……」

陽介はむしろ拝み、完二もうんうんと頷いて同意を示す。雪子の次に出てきたりせはオレンジ色を基調に花柄があしらわれたビキニ。前二人が恥ずかしさに縮こまっていたのに対し、りせは変わりない笑顔を浮かべて手を振って「やっほー、りせちーだよー」と挨拶をし、休業中とはいえほんの少し前まで現役で活動していた人気アイドルの登場に体育館内が湧きたつ。

「お、来た来た！」

「何がッスか？」

テンションの上がる陽介に完二が呆けた声を出す。

「流石久慈川はアイドルだな。一気に空気を掴んだのが俺でも分かる」

「だろだろ？ やっぱアイドルは違うよなー！」

「そスか？」

真が感心したように呟くと陽介も力強く同意。しかし完二は興味がなさそうなそっけない様子を見せていた。

「はは。巽君は次に出てくる白鐘さんの方が大事かな？」

「んなっ!? 大先輩、からかわないでくださいよっ！」

からかう命に完二も顔を真っ赤にして命に言い返す。

「白鐘さーん」

「は、はい……」

と、何かアクシデントでもあったのだろうか。司会者が間延びした、どこか様子をうかがうような口調で直斗を呼ぶと、クマの趣味なのかスクール水着を着用した直斗は顔を真っ赤にしながらよたよたとおぼつかない足取りでステージへと上がる。その身体は震えているのが観客席からも分かり、男性陣は無言でステージを見上げているが、女性陣からはざわざわとしたざわめきとどこか不安そうな声が聞こえる。

「あ、あの……う……」

どうにか声を絞り出す直斗。しかしその次の瞬間、直斗の膝がぐんと折れ、彼女はその場にへたり込んでしまう。

「「直斗君?!」」

「直斗!!!」

崩れ落ちた直斗に観客の女性陣が「きゃー！」と悲鳴を上げ、千枝、雪子、りせの三人が直斗に駆け寄る。それと同時に完二が声を上げ、他の観客を押しつけてステージに駆け寄ると両端の階段に回る時間も惜しいか壇上に手をかけ、己の腕力だけで一気にステージへと上がった。

「巽君！ すぐに白鐘さんを保健室に!!」

「了解ッス!!」

人ごみに紛れながら命が声を張り上げて指示すると完二は頷き、すぐに直斗を抱き上げるとステージを降りる。女性陣は心配そうな視線を直斗に向け、野次馬の様相を見せる男性陣は完二から「どきやが

れ!!」と声を荒げて睨まれるとすぐにその場をどいた。

「お、おい待てよ巽完二！ お前この隙に直斗ちゃんをどこかに連れ込もうとか思ってたんじゃないだろうな!？」

「っ！ テメエ、今はンなこと言ってる場合じゃねえだろうが!!」

だがそんな男子の声が響き、完二の額に青筋が立ち怒鳴り声を上げる。

「うるさい外野は黙っててよ」

そこにそんな涼やかな、しかし怒りに燃えた声が響く。

「完二君。うるさい外野は私が黙らせる、早く直斗ちゃんを保健室に」

結生だ。彼女はヘソ出しの純白水着とでもいう薄手の衣装を基調に金属のアーマーのような飾りを着けた姿で木製の薙刀を先ほど空気を読まず声を上げた男子に突きつけている。ビキニアーマー&薙刀という正に女戦士とでもいうべき姿での威圧に男性陣は怯えたように声を失った。

「結生大先輩！ あざっす!!」

完二も一礼をするとすぐに体育館を出ていくのであった。

「う……………、ここは?……………」

時間が過ぎ、保健室に運ばれ保険医の指示の元ベッドに寝かされていた直斗が目を覚ましたのは一時間ほど後だった。

「目が覚めたか!？」

「巽君……………えっと、僕は……………」

椅子に座って焦れていた様子の完二は直斗が目を覚まし起き上がったのに気づいて立ち上がり、直斗はぼやっとした頭で現状を把握しようとする。

「そうか、僕は確かミスコンで倒れて……………」

「お、おう。保健の先生が言うにはひでえ緊張が原因だったんだらうってよ……………」

「そうですか……………すみません。巽君にご迷惑を……………」

「いや、ンなことねえよ。気にすんな」

自分が倒れた理由を思い出した直斗は申し訳なきように完二に謝罪。しかし完二は気にも留めてないようににと笑ってそう返した。「男性からのああいっす視線には慣れないですね。女だからってという視線には慣れていたつもりだったんですが……」

警察では女だからという理由で気にくわないと思っていた人もいた。と語っていた直斗。その視線には慣れていたつもりだったが、今回のような好奇の視線には耐性がなかったようだ。

「まあ、しゃあねえだろ。一次審査に出ただけでもお前、頑張ったよ」「ありがとうございます……そういえば、ミスコンの方はどうなったんでしょう?」

「さあ? 俺もお前を運んでから目が覚めるまでここで待ってたからよ……」

完二の一次審査という台詞でミスコンの結果はどうなったんだろうと思いつつ質問する直斗に、完二もずっと保健室で待っていて事の経過を知らないため首を傾げる。と、その時コンコンというノックが聞こえ、その後保健室のドアが開いた。

「完二、白鐘の様子はどうか?」

「あ、目が覚めたみたいだね。よかった」

真と命が入室しながら問いかけ、目が覚めているのを見てほっと安堵の息を吐く。

「ほら、あんたらも入る!」

「きりきり歩いて」

「いででで!! み、耳が千切れる!!」

「い、痛い! ユキちゃん痛いクマ!!」

次に入ってくるのは千枝と雪子、そして二人に耳を引っ張られている陽介とクマだ。なお女子はちゃんと制服に着替えている。

「ほら二人とも、直斗に言う事あるでしょ?」

その次に続いて入ってきたりせが二人に促し、千枝と雪子から解放された二人は耳をさすりながら直斗の前に立つと大きく頭を下げた。「ナオちゃん、本当にごめんなさいクマ。水着審査が倒れちゃうほどに嫌だったなんてクマ、全然思わなかったクマ……」

「推薦しちまった俺も同罪だ。あの時クマをしつかり叱つとけばこんな事には……」

「直斗君、私もごめんね？ 私が柏木達の挑発に乗っちゃって、直斗君は嫌がってたのに無理矢理……」

噛みしめるような声で本気の反省を示す陽介とクマ、その後ろで千枝も簡単に挑発に乗った挙句に直斗を巻き込んでしまった事を反省して頭を下げる。その様子を見て直斗は柔らかく微笑んだ。

「いえ。最終的に参加を決めたのは僕ですし、気にしないでください」

その言葉を受けた三人がほっと息を吐く。

「あ、そうそう。直斗、ミスコン優勝おめでとね!!」

と、そこにりせが脈絡なくそんな言葉をぶっこむ。

「……は？」

その言葉を受け、直斗が呆けた声を出すのもしよがないと言えるだろう。

「ああ、ミスコンだが。柏木教諭がどうにか場を収めて続行したんだ」「おう、ありやむしろ清々しいわ」

真の説明に陽介がどんな手段を用いたのかまでは説明しないもののいつそ清々しいと評する。

「で、男子票は分かれたみたいだけど。女子からの圧倒的な投票で直斗ちゃんが優勝したってわけ」

そして結生が直斗優勝に至る経緯を説明した。

「出ないのに優勝って、なんかもう笑えちゃうよね」

「うん。でも女子の票が必要っていうならしょうがないよね。それにまあ、柏木達には私達が勝ったって事でよしときましょ!」

まさか水着審査で棄権扱いのはずなのに優勝をもぎ取る直斗の女性陣からの人気に苦笑する千枝に、りせは得意気な笑みを浮かべてそう答えた。ちなみに苦笑しながら話す雪子によると途中棄権扱いだった直斗に敗北したのが悔しかったのか柏木と大谷は号泣していたらしい。

「さ、皆。そろそろ移動しましょ。大勢でぞろぞろいたら迷惑だし」

「そツスね。直斗、おめえはもう大丈夫か？」

「あ、はい」

ゆかりが保健室から出ようと言うと完二も頷き、直斗に大丈夫かと確認。直斗もこくりと頷くと立ち上がる。

「あー……ごめん。その前に着替えよう」

「あ……は、はい……」

しかしゆかりは困ったようにそう返す。水着審査で倒れてそのまま完二に保健室で運ばれたので当然だが、直斗はスクール水着のまま。直斗が顔を赤くして頷くと千枝が「はいはい男子は出ていく」と男子勢の背中を押して保健室から追い出し、結生と雪子が体育館に戻って直斗の着替えを持ってくる。そして直斗の着替えが終わってから全員で保健室を後にした。

「んで、どうするよ?」

「相談ついでに休憩がてら教室に戻ろう。どうせ空いてるだろ?」

「よ、容赦ねえなお前……」

陽介がどうするかと尋ね、真がさらりとどうせ空いているだろう自分達の教室で休憩しようとする。自分達の出し物が大失敗しているとおつきり言つてのける真に陽介の頬が引きつった。

「あ、お兄ちゃん!」

すると突然そんな声が聞こえ、真が足を止めて振り返る。

「おう、見つかつてよかった」

真が振り返ると共に菜々子が嬉しそうな表情で駆け寄り、その後には遼太郎も歩き寄る。

「叔父さん、どうかしたんですか?」

「県庁の出張があつてな、帰りが明日になりそうなんだ」

真の質問に遼太郎が顔を曇らせてそう答える。

「せっかくの、お前の学校の文化祭だ。俺も菜々子と楽しみにしてたんだが……すまんが、菜々子だけでも連れてやってくれないか」

「ああ、分かりました」

遼太郎の言葉に真はこくりと頷いて返し、雪子が菜々子に「じゃあ私達と一緒に回ろうか」と提案する。

「じゃあ、すまんが宜しくな」

一度頭を下げてよろしくなと頼み、これからすぐに出ないといけな
いのか遼太郎は踵を返す。

「行つてらっしゃい」

「おう。菜々子、楽しめよ」

真と菜々子が遼太郎を見送り、遼太郎も柔らかく微笑むとそう返し
て歩き去った。

「で、どうする？ 一度俺達のところに――」

「よし菜々子。学園祭ついでに校内を案内してやろう」

合コン喫茶に菜々子を連れていきたくないのか、陽介の言葉を食べ
気味に却下して菜々子を連れていく真。

「真君もお兄ちゃんになったね……」

その姿に結生が苦笑。他のメンバーも苦笑しながら真の後を追っ
ていった。

学校中に並ぶ出店で団子やら焼きそばやらジュースやらを買い食
いしながら彼らは校内を歩いていく。

「わり、俺ちよつとトイレ」

「あ、なら俺も行くつす」

「うん。花村君、ペットボトル貸して、持っててあげる」

「ほら、完二も貸しなさい」

「わりいな、天城。すぐ戻つから」

「おう、頼むぜ」

ジュースをがぶ飲みしてトイレに行きたくなつたかそう言う陽介
に、ならついでに済ましとこうと完二も続く。雪子とりせは荷物を
持っていたら用が足しにくいだろうと気遣つたのか陽介と完二が
持っているペットボトルを受け取り、二人はトイレへと向かう。

「ねー、お兄ちゃん。お兄ちゃんってラッパとかも吹くんだよね？」

「ラッパ……ああ、トランペットか。部活でやってるよ」

「ぶかつ……どこでやってるの？」

「実習棟だけ……」

菜々子がふと思ひ出したように真がトランペットを吹いてる事を
質問すると真はそう返答。それを聞いた菜々子が興味を持ったよう

に続けてそう質問した。

「あれ、実習棟って立ち入り禁止じゃなかったっけ？」

「そうだったかな？ 出し物は何もやってないけど……」

「ま、ちよつと入るくらいなら分かんないんじゃない？」

りせが実習棟は文化祭中立ち入り禁止じゃなかったかと言うと雪子が首を傾げ、すると千枝は少し入るくらいなら大丈夫でしょ。とからから笑いながら答える。

「体育館で演奏をする吹奏楽部が本番前の練習をしている以外は、特に出し物をしているわけではないみたいですが……立ち入り禁止と明記はされてないようです。まあ、少し案内するくらいならいいんじゃないですか？ 先輩、僕達が異君達を待ってますから、先輩はちよつと菜々子ちゃんを案内してきたらどうでしょう？」

「分かった。じゃあ頼むよ」

「あ、んじゃあたしも一緒に行く。どうせ待っても暇だしさ」

文化祭のパンフレットを確認した直斗は少し融通をきかせたのかそう言い、それを聞いた真はお礼を言つて菜々子の手を取り、そこに千枝もじつと待つても暇だからと同行を希望する。

それからその場を雪子達に任せ、真、菜々子、千枝の三人は実習棟へと潜り込む。既に吹奏楽部の演奏は始まっているため練習している子はおらず、実習棟は静かな雰囲気にも包まれていた。

「……流石に鍵は閉まっているか」

音楽室の鍵を確認した真は残念そうにそう呟く。菜々子に音楽室を案内する事は出来ない様子だ。

「しようがない。実習棟を一回り案内をしてから戻ろうか」

「うんー」

真の言葉に菜々子は楽しそうに頷いた。

「そ、そんな……持ってますん……」

「ー」

すると二階の方から突然そんな声が聞こえ、真と千枝は前に起きたことを思い出して顔を見合わせる。

「椎宮君、まさかー」

「ああ……菜々子。すまないが急用が出来たんだ。先に天城達のところに戻っててくれ」

「え、う、うん……」

千枝の言葉に真も頷いて返すと、菜々子に先に戻っているように促し、菜々子が実習棟から出ていったのを確認してから二人は二階への階段を駆け上がった。

「ちよつとあんたら、何やってんの！」

「あ……んだ、またあいつかよ」

階段を駆け上がった二人が見たのは前に千枝の友達である剛史にカツアゲをしていた三人の不良達。不良の一人が千枝を見てめんどくさそうな顔を見せた。

「フフン。俺いいコト思いついちった♪」

「ギャハハ！ お前、すげー悪そうな顔してつぞく！」

リーダー格の少年がニヤニヤとした顔で言うともう一人の少年が笑いながらそう答える。

「秀ー」

「せ、先生、助けて……」

と、そこで真がカツアゲされている相手に気づく。その相手は真の家庭教師先の生徒——中島秀。

「あんたら、性懲りもなく！ 秀君を離しなさい!!」

知り合い、それも今度は年下の相手が巻き込まれたことに憤り、千枝は声を荒げる。

「へへ、別にいいよ。『ちえちゃん』」

するとその時リーダー格の少年が千枝の名前を呼び、千枝は驚いたような警戒を強めたような様子で「なんであたしの名前」と聞き返す。

「こないだアンタが助けたヤツ、グーゼン会ったから事情聴取してさ。色々聞いたぜえ。アンタン家とか、カワイイ『天城さん』とか」

「……どういふつもりだ？」

遠回しに脅迫をしてくるリーダー格の少年に今度は真が聞き返す。

「俺ら今からこいつと大事な相談すつけどさあ。その間、そこ動くなよ？ ジヤマしたらどうなるか分かんないぜ。『天城さん』とかが

「や」

「ギャハハ！ お前、超わりー！」

「ぎっ、けんな!!」

リーダー格の少年の言葉にもう一人の少年が笑うと千枝も激昂を隠さず声を上げた。

「……我慢ならないな」

と、真が一步前に出て拳を握りしめる。

「うん……こいつら、絶対許さない!!」

同時に千枝もひどく怒った様子で前に出た。

「そーゆーこと言ってるいいわけ？ 大事な人、どーなってもしらないよ?」

「……分かった、じゃああたしを殴んなさいよ！」

「里中!？」

リーダー格の少年の脅しに千枝はそう言い放ち、真もまさかの言葉に驚いた声を上げる。

「あたしにムカついてるってことでしょ？ だったら、あたしを殴ればいいじゃん。抵抗しないからさ、存分にどーぞ。顔でもおなかでも、どこでも何発でもいいよー！」

そう言い、千枝は不良達の方に踏み込む。

「ほら、早く!!」

「……キモ」

「なんだ、この女……まじ?……しらけちった……行こーぜ」

鬼気迫る千枝に押されたのか、不良達はそう言ってその場を去っていった。

「せ、先生、それにえつと、里中、さん? ありがとうございます……」

「俺は何もしてない」

「……えっ? あ、ああ、いいのいいの!」

秀のお札に対し、真は何もしていないと返し、千枝も慌てたようにそう答える。

「秀は一人で何してたんだ?」

「あ、はい。八十神高校は進学希望先の一つなので、ちよつと下見に……」

「そうか。だが、気をつけろよ」

「はい。じゃ、また今度」

真の注意に対し、秀は申し訳なさそうにそう言い、歩き去っていく。

「ハア……何か、まだドキドキしてる……あたし……バカだった？」

「いや、秀をちゃんと守れたよ」

「……ありがとう」

千枝の問いかけに対し、真がそう返すと千枝は照れた様子で頷く。

「バカだったかもしれないけど、助けたかったんだ。秀君も、雪子も

……この気持ちだけは、ウソじゃない。どうしても『守りたい』って

思っただよ……」

そう言い、千枝は優しげに微笑む。

「ああ、心強い。これからもよろしく」

「……うん、よろしく。頼りにしていいからね！」

成長した千枝を見て真は笑みを浮かべ、その言葉に千枝もむんと

ガッツポーズを取って気合を入れる。

「……じゃ、戻ろっか！」

「ああ」

千枝の言葉に真も頷き、二人は実習棟を出て仲間の元に戻っていた。

「チツ。まったく白けちゃったぜ」

「ま、いいだろ。また適当なガキを見つけて……」

「もしくは本当に『天城さん』狙っちゃまう？」

「へへ、マジでやる？ ワルだねー」

実習棟から出た不良三人組はニヤニヤしながらそう話し合う。

「「ぐえっ!?!」」

人気のないところに差し掛かった瞬間、突如三人は何者かに首根っこを掴まれて校舎裏へと引きずり込まれ、壁にだんつと押し付けられる。

「な、なんだ!？」

「やつほー」

リーダー格の少年が声を上げ、その声に応えるのは二人だった。

「話は聞かせてもらったよ。カツアゲをしたみたいだね」

「あと、ユキちゃんを狙おうとしたんだって？」

応えた二人——命と結生の目は据わっており、その威圧感に三人組が怯む。

「だ、だったらなんだってんだ——」

ドゴン、という音が二重に響き、リーダー格の少年の言葉が止まる。彼とその隣の少年の顔の真横にそれぞれ命と結生の拳が突き刺さったのだ。しかもその拳は素手にも関わらずコンクリート製の壁にヒビを入れている。

「警告する。里中さんや天城さんに二度と近づくな……それを破れば君達の身の安全は保証しない」

「……………」

命の威圧感たつぷりの言葉に三人は腰が抜けたのかへたり込み、心なしか股間に何かで濡れたような跡が広がる。

「……………クス」

結生はその光景を見ておかしくなつたか、口元に手を当てて、しかし目元に影を作った見下すような視線で不良三人組を見る。まるで女小悪魔か女王のような笑みを浮かべた彼女を怯えが走った表情で不良三人組は見上げ、命と結生はすたすたとその場を後にしていた。

「先輩！ どこに行ってたんですか？」

「うん、ちよつと野暮用」

先に皆のところに戻っていた真が声をかけると、命は当たり前障りのない笑みを浮かべた顔でそう答える。

「命さん。今晚、うちで打ち上げをしようかと思うんですが」

「ああ、いいね」

命がいない間にそんな話が進んでいたのか、雪子は自分の実家であ

る天城屋旅館に泊まっている命にそう説明する。旅館に泊まるという滅多にないチャンスに陽介達は大喜びしており、直斗は祖父に連絡を入れなければと携帯電話を取り出している。

「……けど、良いの？ 迷惑にならない？ まだ、シーズンでしょ？」
一人、千枝が心配そうに雪子に訊ねると、雪子は苦笑しながら「今年はお客さんが減った」と告げる。表向きは犯人が捕まったと報道されているものの、マヨナカテレビの事件の影響が今も続いているようだ。

「……それに、空いてる部屋もあるから」

「……そっか。ならいいんだ。なんか、雪子のとこ泊まるの、久しぶり!!」

少し言葉を濁してそう語る雪子だが、その説明に千枝は納得すると、雪子の家に泊まるのも久しぶりだと嬉しそうに話す。

しかし流石に学校帰りに直行というわけにもいかず、文化祭終了後一度解散、各々家に帰って泊まりの準備をしてから天城屋旅館前に集合という形になるのであった。

第五十八話 文化祭終了、天城屋旅館にて

10月30日、夜。天城屋旅館に泊まる事になった真達はその一室へと案内されていた。服装は私服から旅館に用意された浴衣に着替えている。

「みんな一緒の部屋じゃないクマね〜……」

「そりやそうだろ」

なお流石に男女別室で、クマの残念そうな言葉に陽介がツツコミを入れると、クマは「隣ならまだ許すけど、遠くへ行ってしまったクマ」とよよよと泣き出す。

「空いている部屋があまり無いらしくて、皆は別の階になったそうだ。菜々子を連れて温泉に行ったらしい」

「(´▽`)混合浴?」

真がそう説明するとクマが興奮したように声を上げ、その様子に残り三人が呆れ顔を見せる。

「何ベンも入るシユミネーし、寝る前一回行きやいいっすよね」
「だなー」

完二の言葉に陽介も同意。それから完二はふと辺りを見回した。

「ところで、この部屋……どういう事なんスカね。けっこう上部屋みたいなのに……」

「やっぱ、オマエも気になった? 普通、シーズン中に空かねえよな、こんな都合よく……」

内装からそう考えたのだろう完二の言葉に陽介もそう答える「あえてスルーしようとしてただけど……まさかここで、何かあったとかか?」と呟く。

「旅館……か……まあ、病院ほどそういう話はないだろう」

「悪い真! 頼むから今そういう話をしないで!!」

真が妙な気配や変な視線を感じる病院バイトの事を思い出しながらそう呟くと、陽介が必死にそれを抑える。と、いきなりジリリリりと黒電話の音が鳴り響き、全員がびくりと反応した。

「い、いきなり鳴るねしかし! か、完二、出てみ!」

「な、なにビビってんスカ……」

陽介が完二に電話に出るよう振り、完二がそう呟いて黒電話の方に行くが、電話を取ろうとしている完二の手も震えていた。

「……はい」

恐る恐るという様子で、ややぶつきらぼうな声で完二は電話に出、やや無言になる。なんかやけに不安がかきたてられた。

「あ、そうすか！　どもー！」

と、明るい声でお礼を言い、電話を切って振り返った。

「旅館の人からでした」

あつきりそう言う完二に陽介がホッと息を吐く。

「露天風呂、今ならケッコー空いてるらしいッス」

「素晴らしいサービスだな、天城屋旅館……やな汗かいた……」

わざわざ露天風呂が空いているタイミングを教えてくれる親切なサービスに、しかしさっきまで変な雰囲気だったため陽介はやや苦々し気な顔になる。

「せっかく教えてもらったんだ。行くか」

「おう、そだな」

「んじゃ、流しに行きますか」

真が言うのと陽介と完二も頷き、立ち上がって部屋を出ていく。

「クマ、みんなでおフロ、楽しみだなー。みんなで同じ方向いて背中流しっことか、富士山見ながら歌ったりするんでしょ？」

「それは銭湯だと思う」

「いやー、それにしても。こっちは楽しいことばかりクマよ。これも、センセイがクマのところには皆を連れてきてくれたおかげだね。ありがとう、センセイ……」

そう言っただけでクマは感謝の眼差しで真を見つめ、真はクマからの感謝の気持ちを感じ取る。

「おーい、エレベーター来てっぞー！」

「行くか」

「クマ！」

先に行った陽介から呼ばれ、真とクマはそう言っただけで部屋を出ていっ

た。

「あれ、真君達。今からお風呂?」

「あ、先輩。先輩もですか?」

「うん。ゆかりと結生は大学の課題で頭悩ませてるし、僕はちよつと息抜きにね」

途中で命も合流。それから彼らは脱衣所まで行き、全員着ていた浴衣を脱ぐと用意された籠に入れて棚に入れておく。

「あ、誰か来てるみてえだな」

「んじや、静かにした方がいいっスね」

自分達が使っている棚とはまた別の棚に、既に誰かが脱いで籠に丁寧に入れている浴衣をちらりと見た陽介がそう呟くと、完二がマナーとしてそう返す。

「むっほ、広々クマ! クマかき披露してやるクマ!」

「っておい!」

すると広い露天風呂に興奮したのか、クマが浴室に飛び込むとそのまま温泉へと飛び込んだ。

「あいたっ!」

「だーおい! まずは身体洗えっての! つ、連れがすんませーん!」

陽介がクマに注意を叫び、悲鳴が聞こえてきた事から露天風呂に入っていた他の客に飛び込んだ勢いで散ったお湯でもかかったんじゃないかと慌てて謝罪の言葉を口にする。

「え、えええ!」

「あああアンタらっ!」

「なななな、なんでオメーらが!」

「こ、こっちのセリフっ!」

が、そこにいたのは雪子に千枝。その姿に陽介が狼狽したように声を上げると千枝が怒号で返す。

「どうしたんスか?先輩?」

「何かあったのか?」

「ん……なんか嫌な予感……」

「げっ!?! やべえ完二! 真! 命さん! 来んな!!」

そこに完二と真と命が浴室に入り、陽介が声を上げるが一步遅く、三人も露天風呂に入っている女性陣を見てぎよつとした顔になる。さらに命は何かトラウマでも刺激されたように顔を真つ青に染め上げていた。

「ちよ、花村とクマ公だけならまだしも椎宮君まで!？」

「みつ、みみ命さん!？」

千枝と雪子がまさか真や命まで来るとは思つてなかったのか顔を真つ赤にして身体を湯船に隠し、湯船の奥まで逃げると、先に逃げていたりせと直斗と一緒に湯船の横にあつたたらいを手当たり次第に投げつけまくる。

「ま、待て! ちよつと待ってくれ!!」

「チカーン! せめて二人つきりならともかくー!」

真がその場に留まつて弁明しようとするが、りせが真つ赤な顔でたらいを投げつけまくりながら悲鳴を上げており、どうにも話を聞いてもらえる雰囲気ではない。

「誤解だつてー!」

「すぐ出ていってください!」

完二も弁明を始めるが、直斗も聞く耳持たずに赤い顔をしながらたらいを投げつける。

「た、退散クマー!」

「覚えてろよ!!」

クマが湯船から出て我先にと逃げ出し、陽介が声を上げると全員一斉にその場を逃げ出した。

「後で制裁が必要ね……」

「すごーい、いっぱい当たつてた!」

「おねーちゃん、上手いでしょ?」

「……見られたかな」

怒り心頭の様子千枝の横で菜々子が無邪気に笑うと、りせが得意気な顔になり、直斗が不安気な顔になる。

「あ」

すると雪子が声を漏らす。

「この時間、ここ男湯だった」

その言葉に千枝達女子高生組三人がぎよつとした顔になる。

「時間、間違えちゃった。あはははは！」

「あはは……つて、まじかよ……」

「せ、先輩達に悪い事しちゃった……」

「後で、謝りましょう……」

あははと笑う雪子に千枝が頬を引きつかせると、りせと直斗がしよぼんとした顔になった。

「ヒデー、ヒデーよあいつら……さつき確かめたけど、あの時間の露天は『男湯』だったぞ……」

浴衣に着替え、部屋に戻った彼らは体育座りになりふてくされたような落ち込んだ様子を見せていた。ちなみに命は「桐条先輩ごめんなさい桐条先輩ごめんなさい」と顔を真っ青にしてうわ言のように謝り続けており、彼の部屋に送り届けて出てきたゆかりに事情を説明すると、彼女はやけに冷たい目をして「ああ、そういうことね。はいはい、ありがとう」と妙に平坦な声でお礼を言い、命を部屋に引きずり込んでいた。

「なんか、クマの頭がデコボコしてるな……」

「それ、たんこぶだな。オマエ、たんこぶ、出来てやんの。あはは……は……はあ……」

寝転がり頭を押さえるクマに対し完二は明るく振る舞おうとするが、やがて暗いため息が口から漏れ出る。

「なあ……お前らさ……」

すると、陽介が顔を上げた。

「……見たか？」

「いや……」

「何も……」

「見えなかった……」

陽介の言葉に完二、クマ、真の順番で返答した。

「ちくしょう……いいことなんか一個もない人生……も、寝よ」

心が折れたらしく、陽介は寝ようとよろよろ布団に足を進める。

「待った、先輩」

すると完二が呼び止める。

「なんか……聞こえねえか？」

そう言われ、彼らは耳を澄ませる。すると、「うっうっ」「うっぐすっ」という、まるで女性のすすり泣くような声が聞こえてきた。

「い、今の……」

「き、聞こえちやった……」

「ま、まさか……“出た”んスカね……」

陽介、クマが怯えた声を出すと、完二も恐る恐るそう発言する。

「出た、天城屋、事件、空いた部屋……もしかして、山野アナ？」

そこで真が真実に気づいてしまう。

「あー！ ゆっちった！ そのこと、うまいこと忘れてたのに、お前ゆっちった！」

陽介が声を上げ、部屋の柱や梁に貼られているお札を見る。

「それで“お札”か……天城のやろ、知っててここに通したな……」

陽介は頭を抱え、「風呂の仕打ちといい、ヤラレっ放しじゃんか、俺ら！」と叫ぶ。と、再び女性のすすり泣きが聞こえてきた。

「おわわわあ……こんなんじや、寝らんねえよ！」

暴走族を潰したという噂を持つ完二も実体のない幽霊相手だと怖いのか怯えた声を上げる。するとクマがすくつと立ち上がった。

「決めた！ ユキチャンとこ行く！」

みんなの寝顔を見ながらじゃないと、安心して寝られないと建前を言うが本音は分かり切っており、真が呆れ顔になる。

「ちよっ……寝顔って、寝室入り込む気か!? んなの……」

陽介も流石にまずいと思うのか説得を始めようとする。だが、その時また女性のすすり泣きが聞こえてしまい彼は沈黙。真の方を向いた。

「おい、どうするっ……」

「やめた方がいいだろ……」

「じゃ、ここで夜明かしっスね」

「……ム、ムリだつて！」

陽介の言葉にやめておけと警告する真だが、完二の言葉を聞くと陽介が怯え声を出す。

「おっけー！ 寝起きドツキリ、ヨーソロー！」

そしてクマがそう言つて部屋を出ていくと陽介と完二も後に続き、万一のためのストップパーとして真もついて行く事になった。

「みなさん。おーはーよーうーごーぎーいーくーまー」

どこで覚えたのか寝起きドツキリのノリで話すクマ（着ぐるみ着用）は「寝起きドツキリもとい寝込みドツキリ、リポーターのクマ」と名乗る。着ぐるみを着用している姿に陽介が「いつ着たんだよ」とツツコミを入れた。なおクマによると「なんとなく不安なので持ってきている」ということだ。

「お、クシです！ 長い髪の毛がついています」

声を潜めながらも完二がややノリノリでそう話す。

「意外にやる気だな……」

その様子に真がツツコミを入れた。

「林間学校のリベンジっスよ」

「おお、いいこと言うじゃん！ よしっ、俺もガッツリリベンジ！……」

完二と陽介がそう言い、気合を入れる。真はその後ろでため息をついた。とりあえず法に引つかかる事をしそうになつたら殴つてでも止めて部屋から引きずり出そうと心に決める。

「こっ、これは、歯ブラシです!!」

クマの発言に陽介が「なんかドキドキしてきた」と呟く。

「あ、けど、菜々子ちゃん……」

「大丈夫、菜々子ちゃんは寛大な子！」

「ま、まあ、そうだな……」

陽介が菜々子の事を思い出し慌てたように口にするが、クマが菜々子は寛大な子だと答え、陽介もそれに同意する。

「何かあったら流石に許さんぞ」

「お、おう……リベンジに巻き込まないように、起こさないようにすつからさ」

睨みを利かせる真に陽介は苦笑いしつつ、起こさないように配慮すると答える。

「お……いよいよ、お布団に到着！ よく寝てます！」

と、その間にクマが布団へと辿り着いた。

「失礼しま〜す……ユキちゃん、おばけ、こわいよー」

そう言い、クマは一枚の布団に寝転がる。

「よ、よし……俺だつてなあ……お、漢見せるぜ！ さ、里中先輩、優しくしてください！」

続けてそう言いながら完二がもう一枚の布団に寝転がる。

「あ、あれ？……布団、足りなくね？」

だが、そこで陽介は違和感に気づく。女子は千枝、雪子、りせ、直斗、そして菜々子の五人。つまり布団は五枚あるはず、仮に菜々子が別の誰かと一緒に寝ているのだとしても最低四枚はあるはずだ。しかしこの部屋に敷かれている布団は二枚だけだった。

「ちよつとお、なあに？」

するとその時、リモコン式の点灯システムを採用しているのかひとりでに蛍光灯に明かりが付き、完二の布団から柏木が起き上がった。

「んもー……」

続けてクマの寝ている布団から大谷が起き上がる。

「!?!」

それに気づいたクマと完二が起き上がり、陽介がぎよつとのけぞる。

「あらやだ！ キミたち、そういう事だったわけ？ んもー！ 言ってくれればいいのにい！」

「いけない子達ねえ……フフ」

困ったような台詞ながら口調は明らかに弾んでおり嬉しそう。そんな様子にクマが「出たああああー！」とお化けでも見たような悲鳴を上げた。

「あ、や、や、ささ触んたって!!」

完二もはだけた浴衣の間から露出した肌を触ってくる柏木の手を払いのけながら慌てて声を上げる。

「さっきまで、二人で泣いてたのよ? 魅力の分かるオトコがいなくて。いいわ……いらつしやい。そのかわり、誰にも言っちゃ駄目だぞ!」

「カマーン!」

そう言い、柏木と大谷はまるで生者を求める亡者のように陽介達ににじり寄る。

「や、やべえ! 逃げるぞ、まこ——っていねえし!?!?」

陽介が慌てて逃げ出そうと真に言うが、君子危うきに近寄らずというのか、真はいつの間にかその場から姿を消していた。

「二……うぎやああああああ!!」

そして三人の悲鳴が響き渡った。

「……すまん。陽介、完二、クマ……俺一人で逃げるのが精一杯だった……」

一人でしれっと逃げた真は廊下で親友友人仲間に両手を合わせ、黙祷を捧げる。

「おにいちゃん?……」

すると、突然そんな声が聞こえ、振り向く。そこにはピンク色のパジャマを着た菜々子が眠たげに閉じかけている目をこすりながら立っていた。

「どうした、菜々子?」

「おといれ……」

「そうか。連れていくよ」

どうやらトイレに起きたらしく、真は菜々子連れてトイレへと向かう。そしてそのままのノリで菜々子が泊まっていた女子部屋へと菜々子連れて移動。菜々子を寝かしつける。

「あー、さっぱりしたー! やっぱ24時間お風呂入れるって最高——うわあっ!?! 椎宮君、どうしたの!?!」

すると浴衣を着た千枝達四人——お風呂上りなのか肌がほてっている——が部屋に入り、真を見て千枝が悲鳴を上げる。

「あ、ああ。眠れなくて散歩をしていたら菜々子と偶然会って。トイレに連れて行ってそのまま流れで……」

「そっか。ありがとね」

彼女らに寝込みドッキリを仕掛けようとしていたことは省いて説明し、彼の言葉に雪子がお礼を言う。

「そ、そういえば先輩。さつきはお風呂の時にごめんなさい……」

「ぼ、僕達がお風呂の時間を間違えていて……申し訳ありません。明日、改めて異君達にも謝罪します」

「ああ、気にしなくて構わない」

と、りせと直斗がさつきのお風呂の時に無実の真達に手ひどい事をしてしまった事を謝罪。しかし真は平然とそれを許した。

「あはは、ほんとごめんね。お詫びと言っちゃなんだけどゆっくりしてってよ。あ、そういえば、となりの部屋に柏木先生と大谷さん、泊まってたよ」

「そ、そうか。それは偶然だな……」

千枝も苦笑しながら謝罪、お詫びにゆっくりしてってと答える。それから千枝は隣の部屋には柏木と大谷が泊まっていたと話題に出し、ついさつきまでその部屋にいた真は頬を引きつかせながら偶然だなどと答える。一応隣の部屋から物音はしないから陽介達は上手く逃げお世話らしい。そう信じよう、と真は心中考えた。

「うん。ビックリしちゃった。仲良いんだねー」

「時々、泊まりに来てくれるんだ。辛い事があると、泣きにくるみたいで……」

千枝の言葉に雪子がそう説明する。

「へー、やっぱり、直斗君にコンテストで負けたのが悔しかったのかな？」

「そ、その話はしないでくださいよ……」

千枝が直斗に話を振ると、直斗は照れたようにうつむきながらそう返す。

「ま、あの二人、いいコンビだよな」

と、りせがからからと笑いながらそう話した。

「そういえば先輩。先ほど菜々子ちゃんとお話していたんですが。偉いですね。一人の時は知らない人が来ても玄関を開けない、というように防犯意識がしっかりしていました」

「ああ。まあ、叔父さんのおかげだろうけどさ」

直斗が菜々子を褒め、真もそう答える。そのまま話の花が咲いて夜が更けていく。そして誰かが「ふわ」と欠伸をすると真が立ち上がる。と膝を立てた。

「じゃあ俺はそろそろ戻る——」

が、そこで真の動きが止まる。彼の浴衣の袖を菜々子が掴んだまま眠ってしまったっており、しかも結構しっかり掴まれているためちよつとやそつとでは外れそうにもない。浴衣を脱いだら上半身裸になってしまうし、かと言って無理矢理に離そうとしたら菜々子を起こしてしまうかも、と葛藤してフリーズする真を見た雪子がくすくすと笑った。

「椎宮君、なんなら泊まっていつて。菜々子ちゃんの寝てるお布団のサイズなら椎宮君も一緒に寝る余裕はあるはずだし」

「あはは、そだね。泊まっていきなよ」

雪子の言葉に千枝が笑いながら賛同する。

「え……いや、だけど……」

「あ、先輩ったら意識してる〜」

「遠慮しないでください」

雪子の提案に慌てる真をりせがからかうように笑い、直斗もそう答える。

「……じゃあ、そうさせてもらおうよ」

諦めた真も苦笑しながらそう答え、そのまま真は菜々子を起こさないように注意しながら彼女の布団に入り、残る女子メンバーもそれぞれの布団に入り、雪子が蛍光灯を消灯して眠りにつくのであった。

翌朝。真は浴衣はそのまま、後で自分の部屋に戻ってから着替えようと考えながら部屋を出ていき、私服に着替え終えた菜々子達を待つ

て彼女らと一緒に、朝食を食べるために大広間へと向かう。

「……おはよーさん」

大広間に到着すると、妙に疲れ切った表情をした陽介が出迎える。しかもよく見れば陽介だけでなくクマと完二も疲れ切った表情をしており、さらにクマにいたっては心なしか顔が青ざめている。

「……どうしたの？」

「あーいや……昨日、悪夢を……そう、悪夢を見ちまってな……」

千枝が呆けた顔で尋ねると、陽介が静かに呟く。その言葉に完二とクマもずーんと落ち込んだ様子を見せた。

「やっぱり、あの部屋駄目だったか……」

さらりと、そしてぼそりと雪子が呟いた。

「……陽介、まさか……」

「て、貞操は守り切った！　なんとか逃げ切った！　っていうかお前、一人で逃げんなよ!!」

「すまん、命の危機を感じて……」

声を潜めて問いかける真に陽介は声を潜めつつも焦ったようなそれだけで真剣な声で真に訴え、仲間を見捨てたことには変わりないためか真は申し訳なさそうに謝った。

「っーか先輩、俺ら柏木達を撒いてから部屋に戻ったんすけど、結局先輩、俺らが寝るまで戻ってきてなかったツスよね。つてか朝もいなかったし……どこ行ってたんすか？」

「ああ。あの後菜々子に会って、トイレに連れて行った後に部屋まで送っていったら天城達と合流して。そのままの流れで天城達の部屋に泊めてもらったんだ」

「なんですとー!？」

完二の質問に真が正直に答えるとクマが発狂せんばかりに声を上げる。

「お前、何気に一人でチャレンジ成功しちゃってるわけね……」

「うあ、流石先輩だぜ……」

「センセイ、羨ましいクマ……」

女子への寝室侵入チャレンジを唯一成功させた形になる真に、陽介

と完二が頭を抱えてうなだれ、クマはぼたんとテーブルに突っ伏す。

「あ、あの、花村先輩、クマ……」

「巽君……」

するとりせと直斗が突っ伏した男性陣に声をかけた。

「あ、あの、昨日はごめんなさい。私達が時間間違えたせいで……」

「ほ、本当にすみませんでした。天城先輩と里中先輩からも、謝っておいて、と」

りせと直斗が男性陣に向けて頭を下げる。なお雪子と千枝は旅館の手伝いか厨房で準備された朝食を運んでおり、こつちの方には来られそうにない。

「あ、ああいや……まあいいよ」

「おう。風呂一回くらいよ」

陽介と完二も一日置いてしまうと怒りもどっかいつてしまっており、あっさりとして女性陣を許す。それから彼らは運ばれてきた朝食を取って早々に天城屋旅館を後にするのであった。

第五十九話 ハロウィン in ジュネス

10月31日。今日は学園祭の休校日で、朝天城屋旅館から帰ってきた真は荷物を置き、部屋で一休みをしていた。すると突然真の携帯が鳴り始め、彼は電話の相手を確認すると電話に出た。

「もしもし。陽介、どうしたんだ？」

「助かった……出てくれると思ったぜ！ お前、今日ヒマだろ!？」

頼む、ちよつと付き合ってくんねーか!？」

「どうかしたのか？」

焦っている様子の陽介に対し、真がどうしたんだと尋ねる。

「今日ジュネスでハロウィンフェアなんだけど。準備、全然出来てなくてさ！ 飾りはあるけど、チーフいなくて誰に頼んでいいかわかんねーんだよ。お前ら以外、頼めるヤツいないんだ！ ホントお願いしまっす！」

「分かった」

「おっしや！ 恩に着るぜ、相棒！ んじやフードコートでな！」

他の皆には俺から連絡すつからー！」

そう言つて陽介は電話を切り、真は外出の準備をするとジュネスへと向かう。

それから呼ばれてやってきたらしいいつものメンバーと共にハロウィンの飾りつけを開始。力がある真と完二が重いものを運び、手先が器用なりせと直斗がハロウィン風の看板に茶色とオレンジの風船をアーチ状に並べて飾り、雪子と千枝はテーブルにハロウィン風のクロスを敷き、クマはその他軽い代わりに数が多くかさばる荷物運びなど雑用全般。陽介が全体の指揮を執る。

「うゝ、腰いったー……」

「ようやく終わったね」

「おっ、タイミングばっちり！」

「こっちも終わりました」

身体を反らすように伸びをして呟く千枝に雪子が全てのテーブルにクロスを敷いたのを確認、すると同時に終わったらしい二人

の方を向いてウインクし、直斗が終了を報告する。

「みんなー、お疲れクマー」

すると荷物運びが終わった後、どこかに消えていたクマが声をかけてくる。

「ク、クマきち……何、そのかつこ？」

その姿に千枝がツツコミを入れた。クマはいつもの姿ではなく頭部分がハロウインのカボチャ風になっていた。なお下腹部もハロウイン風の飾りがついている。

「ハロウインの仮装クマー！ ハロウインフェアで仮装してる人はフードコートでサービスが受けられるから。せつかくだし、チエチャン達もどうぞってヨースケが」

そう言つてクマが差し出すのはそれぞれの名前が書いてある四つの紙袋。恐らくハロウインの仮装が入っているのだろう。ちなみに真達男性陣は既に着替えに行つてゐるらしい。

「へーなるほど。花村にしちや気が利いてるじゃん」

「ふふ、せつかくだし着てみよつか」

「さんせー！」

「ええ」

千枝、雪子、りせ、直斗の順番でそう言い、着替えを受け取るこの前夏休みにバイトしていた時に千枝が教えられていたロッカールームへと移動。それぞれ着替え始める。

それから着替えを終えてフードコートに戻ってきた時、既に真達はそこにスタンバっていた。

「にしても……似合ってたな、お前」

フードコートで待っていた陽介が真の服装を見てそう呟く。シルクハットに白服に黒マント、ヴァンパイア吸血鬼を模した仮装だ。

「板についてるつつーか、もはやそつちが普段着つてレベルの着こなシッスよ……」

「任せておけ」

「ハハ、どういう自慢だよそれ」

完二の言葉に真がサムズアップして答えると、陽介はその返答に笑

いながら返す。

「やつほ、花村。この衣装サンキュね」

「よう、来たか」

千枝が声をかけ、陽介も軽く右手を挙げて返す。彼は犬耳カチューシャを頭につけ首回りから胸を逆三角形に覆うようにモフモフとした毛の生えた狼男を模した仮装をし、隣に立つ完二は長身とガタイの良さを生かしたフランケンシユタインを思わせる仮装をしていた。

ちなみに千枝は小さい魔女帽子を頭に乘せ、カボチャをイメージしたスカートという全体的にポップで可愛いデザインの魔女衣装。雪子の衣装は上が黒で袖なしの少々露出の大きい服装に下は赤のスカート、黒い帽子のデザインもあってこちらは正統派の魔女衣装といった風貌だ。

「ま、待つてください久慈川さん、せ、せめて心の準備を……」

「さっきからずーっとそう言ってんじゃん。パールツクだし私一人だと意味ないでしょ？」

するとその後ろからりせと直斗がやってくる。やってくるというよりは気乗りしていないというか怯えた様子の直斗を無理矢理りせが連れてきたような様子。その直斗はおへそというなお腹や背中の下半分程を出した黒色の服に黒い半ズボン、かかとがまだ低い方の黒ハイヒールに黒長手袋をしている。半ズボンの後ろからはぴよこんと尻尾が出ており、また頭の黒いネコミミカチューシャから猫娘というモチーフなのが分かりやすい仮装だ。しかし直斗は両手でお腹を隠しており、恥じ入っている様子だがそれが逆にギャップで可愛らしさを演出している事に本人は気づいていない。

「どう、先輩？ 似合う？」

その横のりせは直斗の色違いで白色の衣装——直斗が黒猫とすればこちらは白猫——に身を包んでいた。こっちは恥じ入る様子もなくノリノリでセクシーポーズを決めていた。

「ああ。皆似合ってる」

「おう。ついでに客引きとかでもしてもらいたいくらいだな」

真が下心なく皆を褒めると、陽介もからからと笑いながら客引きも

してもらおうかと続ける。

「ま、アレがいりやお客は……」

そう言つて陽介が見るのは先ほどの頭部分がハロウィン用のカボチャになつているクマ。彼は風船を手に楽しそうに手を振っている。「た、楽しそうだなアイツ。なんか……ご当地なんとかみたいになつてっけどな……」

「あれ、陽介君」

苦笑する陽介。すると真面目そうな店員が驚いたように駆け寄つてきた。

「ちよつとちよつと、どうなつてんの？」

「あ、チーフ。お疲れ様つす！ ハロウィンフェアの飾りつけなんすけど……」

「え？ あはは、やだなあ陽介君」

真面目そうな店員——チーフの問いかけに陽介がそう説明。するとチーフは冗談でも聞いたように笑つた。

「アレとつくに中止になつたでしょ」

『……は？』

チーフの言葉に陽介を始めとしたその場にいた全員が呆けた声を出す。

「あれ？ 中止決まつた時の朝礼、陽介君も居たと思つたけど。はは、朝だしボンヤリしてたかな？ まあ、片づけよろしくね」

チーフはそう説明した後、ハロウィンの飾りつけを眺めると「すごいねえ、これ。陽介君達が飾り付けたの？」と感心し、「こんなに頑張ってくれるなら、やれば良かったなあ、ハロウィン」と残念そうに呟きながらフードコートを去っていく。

「……陽介」

「花村、あんた……」

「み……見ないでくれ。そんな目で俺を見るな……」

チーフが歩き去つてから陽介除く自称特別捜査隊メンバーが陽介を冷たい目で見て真と千枝が代表するように声をかけると、陽介は力なく首を横に振つてそう返した。

それから片付けも終わり、衣装はお詫び代わりに持って帰ってくれと言われて袋詰めにしてもらい、真はついだからと買い物で済ませるとエレベーターを降りて帰路についていた。既に千枝達は帰っており、彼一人である。

「あれ？」

するとジユネスの入り口ホールに足立が立っているのを彼は見る。

「足立さん、こんにちは。お仕事ですか？」

「ん？ ああ、まあね。にしても君もヒマだねー。しよつちゅう見かける気がするよ。ま、学生はそんなもんか。今の内にたつぷり遊んでおきなよ？」

「これでも忙しいんですが？」

「あ、そうなの？ まあ子供の忙しさなんて知れてるよ。君も社会人になれば分かるって。寂しいお婆さんの相手とか……」

足立の言葉に真が苦笑しながらそう返すが、足立はシニカルな笑みを漏らしながらそう返す。その時ジユネスのドアが開く音が聞こえ、入ってきた人を見た足立が慌てて真の後ろに隠れる。出てきたのは足立と同じ名前の息子がいるから、と足立に構うお婆さんだ。なにやら先日は署にお見合い写真まで持ってこられたらしい。

「あら？ 透ちゃん、どこ行っただの？」

「参ったなあ……まーた煮物とか……」

お婆さんの言葉に足立は困ったように眩き、どうにかこの場を逃げようとする。

「こつちだよ、母さん。買い物はもう済んだ？」

と、お婆さんを追いかけて中年の男性が入り、お婆さんに声をかける。

「済んだわ、帰りましょう。せつかく透ちゃんが帰ってきたんだもの、すぐに……」

お婆さんはそう言ってジユネスから出ようとする。と、その時彼女は中年の男性を見て驚き固まっている足立に目を向けた。

「あらあら、刑事さん」

「刑事さん？」

普段は透ちやん、と呼んでいたはず。と真は訝し気な声を出す。

「透ちやん、こちら刑事の足立さん」

「やあ、どうも。母がお世話になってるようで」

お婆さんの紹介に中年の男性はそう挨拶。足立は「はあ」と曖昧な返答を返した。

「こつちがね、息子の透よ。私の顔を見に帰って来てくれたの」

「ハハハ、仕事の都合で、数日後にはまたとんぼ返りですがね」

続けてお婆さんは中年の男性の事を息子の透だと嬉しそうに紹介、男性は困ったように笑いながらそう言った。

「もう、寂しいわ。でもお仕事頑張ってるんですものね。透ちやんね、商社で働いてるのよ。外国への出張も多くてねえ。この歳で役員なの」

「ハハ、やめてくれよ母さん。さ、彼の仕事の邪魔になる。帰ろう」

そう言い、お婆さんとその息子の透さんはジュネスを出ていく。

「透ちやんの好きな煮物、いっぱい作ってあるからね」

「そいつは嬉しいな。レンコンは硬めで頼むよ」

「ええ、もちろんよ」

その間、そんな会話が聞こえ、自動ドアが閉まると声は聞こえなくなった。

「結局……俺じゃなくてもいいんだよな」

足立はそう呟き、真の方を見て困ったように笑う。

「あれが本物って……ねえ？ どこが僕と似てるんだろ。歳も全然違うしさー。一緒なの、名前だけじゃない？」

皮肉気味に笑う足立はしかし「まあ、でも本物がいるうちは相手しなくていいから助かるよ」と続ける。

「寂しい？」

だがその顔はどこか寂しそうに見え、思わず真はそう尋ねた。

「僕が？ やだなあ、僕が、なんでさ？」

その質問に対し、足立は先ほどの寂しそうに見えた顔が嘘のような驚いた顔を見せる。

「僕はね、一人の方が好きなの。気楽だし、自由に立ち回れるしね」

「でも、孤独です」

「……どつちが楽か、つて話さ」

足立の言葉に対し、一人は孤独だと反論する真。だが足立は笑いながらそう答えた。

「あの息子、硬いレンコンが好きなんだねー。ホント、気が知れないよ」

足立は笑みを浮かべながらそう呟く。「ウチの母親が作る煮物も、レンコン硬くてさ。その頃から嫌いだったんだよね。いっつも残してたけど、結局ずつと何も言われなかったなあ。ずつと硬いままだつたよ」と彼は呟き、頭をかいた。

「……僕が嫌いなもの、知らなかったんだろーねえ」

そう言い、足立はため息をつくとき清々したというようにまた笑みを浮かべる。

「ま、とにかくこれで、しばらくは肩の荷が下りたかな」

そう話す足立は、しかしやはり寂しそうに見えた。

「おい、足立！ こんな所で何やってんだ！」

「わ……ど、堂島さん！」

と、ジュネスの自動ドアが開いたと思うと遼太郎が駆け込んできた。県庁への出張が終わって帰ってきた途中、その道中に足立がジュネスにいるのを見つけた様子だ。

「ん……なんだ、お前か」

「お帰りなさい」

「おう、ただいま。ああ、こいつは土産だ。持って帰つていてくれ」

「あ、はい」

真に気づいた遼太郎は言葉少なく彼と挨拶を交わしてお土産を渡した後、足立を睨んだ。

「つたく、子供相手に油売ってんじやねえ！ サツサと行くぞ！」

「ええっ!?! いや、堂島さんも荷物とか家に置いて来た方が……」

「いらん、荷物なんてロッカーに置いておけるぐらいだ。それより出張の報告書をとつとあげねえといけねえからな」

そのまま警察署に直行しそうな遼太郎に足立が出張の荷物を家に

置いてきたらどうかと説得を始めるが、遼太郎はあっさりと必要ないと返す。それから彼はジュネスを出て行きざまに真の方を見る。

「……悪かったな、コイツが付き合わせて。お前も早く帰れよ」

「ちよ、待っててくださいよ！ 堂島さーん!? ……なーんであの人が謝るんだか」

それを見た足立は頭をかきながらそう呟き、真の方を見てへらつと笑う。

「じゃあね、僕もう行かなきゃ。堂島さん待ってるし」

そう言い、足立は慌てて遼太郎を追いかけジュネスを出ていく。それを見送って真もジュネスを出ていくと家に帰っていった。

そして、時間は夜まで過ぎる。まだ遼太郎は帰ってきておらず、真は菜々子と共に居間で炬燵に入ってテレビのニュースを見ていた。

「今日、さむいね」

「それでは、次のニュースです。『環境を考える会』代表の香西氏が、市内の小学校を訪れ、霧の影響を現地調査しました」

菜々子が少し震えながらそう呟いた時、テレビのニュースでアナウンサーが話し始める。稲羽市ではここ数年頻繁に濃霧が発生しているが、原因が良く分かっていない。市内では霧の原因について憶測が飛び交い、体への影響を不安視する声も上がっている。だが市は、霧が人体に害を与える事は考え難く殺人事件等による住民の不安心理の表れなのではという見方を示してるとのことだ。

「これを受け、香西氏は、事実関係をはっきりさせるため、現地の小学校を訪れました。霧の中でも元気に遊ぶ子供達に、体調や心の不安などについて尋ねたということですよ……」

「あ、この人、がっこうに来たよ」

画面に映った香西氏の写真を見た菜々子がそう呟く。

「調査を終えた香西氏は、コメントを発表しています」

ニュースの中で香西がある生徒と話した事をあげて、風評に惑わされず自分の言葉で話していた。本来は我々大人こそがそうでなければならぬ。とその生徒を賞賛していた。

香西氏のコメントに対して集まった保護者からは拍手が上がったがその一方では選挙に向けた人気取りと言う評もあり、賛否両輪という印象を与える。

「……………つくしゅー！」

と、突然菜々子がくしゃみを出し、真は視線をテレビから菜々子へと移す。見ると菜々子の顔が少し赤くなっており、彼女は頭が痛いと言いに訴える。真は菜々子の額に手を当て熱を測った。

「酷い熱だ……………薬を飲んで休まなきゃ」

そう言つて、真は救急箱から風邪薬を取り出すと菜々子に飲ませて、布団を敷いて菜々子を寝かせた。

「ね、お兄ちゃん……………春になったら、かえっちゃうの?……………」

「!」

そんな菜々子の突然の質問に、真はなにも返せず沈黙してしまう。「もうすぐ、冬になっちゃうね……………ゆきがふったら、お兄ちゃんと、ゆきだるま作る……………」

「そうだな。きつと作ろう」

「うん。いっぱい、あそぶ……………」

「ああ」

「春まで、いっぱいあそぼうね……………」

「もちろん」

そう話し、菜々子は眠りにつく。

(後で、菜々子のベッドに寝かさななきゃな)

真はそんな事を考えつつ、また別の事を思う。

(春になったら、帰る……………か……………)

元々両親の一年間の外国への転勤のため自分は八十稲羽にやってきており、両親が日本に戻ってくれば自分はまた月光館学園の方に転入し直す形になるか、もしくはまた別の学校に転校するか。いずれにせよこの町を離れる事になる。それは分かっている。しかしこの町で築き上げてきた仲間達との絆、町の人達との繋がり。いずれやってくるそれらとの別れにどこかもの寂しさを感じてしまった。

(だが……………俺が帰る前に、犯人だけは捕まえないとな)

しかし同時に彼は決意を新たにす。未だ影すら掴めない、この事件の真犯人。目の前で眠っている愛しい妹の笑顔を守るためにも、自分がこの町を去る前にそいつだけは捕まえなければならぬ。と。

第六十話 永劫との恋情、第二の脅迫状

11月1日、放課後。真は学校の帰り道に商店街を散歩していた。
「あ……」

すると突然そんな消え入りそうな声が聞こえ、真は声の方を向く。

「マリー」

「ん……」

消え入りそうな声を出した相手——マリーに真が声をかける。と、マリーは少し気まずそうに目を逸らした後、ゆつくりと真の方に歩き寄る。

「あのね……この前、ごめん……なさい」

「気にするな」

「……誰もいないトコで話したい」

「分かった」

マリーは以前真に酷い事を言った事を謝り、彼女の希望する静かな場所に移動しようとする真がマリーの手を引いて歩き出す。それから二人は高台まで上がってきた。

「……ホントはね、怖い。何も覚えてないから……私って、全部借りもの……全部……あの部屋から、ただ借りてるだけ」

マリーはそう呟き、落ち込んだようにうつむく。

「借りてる物返したら、私には何も残らない……マリーって名前も、この姿も、この声も……いつか消えてなくなっちゃう……そんな気がするの」

そこまで話し、マリーは真を見る。

「だからさ……せめて記憶、思い出せたらって、思った。でも……何も分かんなくて。そういうの、凄く怖い……」

そう言っただけマリーは真に背中を向け、不安になったのか真はマリーの近くまで歩き寄る。

「私の記憶なんて、ホントは何処にもないのかもね……」

「マリー……顔を上げてみる」

マリーの不安そうな言葉に対して真はそう促し、マリーは顔を上げ

る。

「綺麗……」

そこに広がるのは高台に臨む八十稲羽の景色だ。

「ね……ここってあそこ？ ビーフーターキー？ 串のヤツ。あれ食べから来たトコ」

「ああ」

「やっぱ懐かしい……なんでだろ、私ずっと昔からこの景色、知ってた気がするの」

マリーの質問に真は柔和に微笑みながら頷き、マリーは懐かしそうにそう呟く。

「ね、あの時楽しかった。また連れてってよ……ね？」

「覚えてるじゃないか」

「ばか、きらい、さいあく。当たり前じゃん、そんなの覚えて……」

マリーの言葉に真がイタズラっぽく微笑みながら返すとマリーは頬を膨らませて悪態をつく。だがその言葉は途中で止まり、彼女ははつとした顔になっていた。

「そっか……これ、『記憶』だ。キミと作った、私の記憶……」

「他にもあるだろ？ 皆と行った海水浴、俺との夏祭り、それにジユネスでの演奏」

「うん……覚えてる。はは、バカみたい……何か……凄いね」

真の言葉にマリーは笑い、何かを思い出すように目を伏せる。それからマリーは真に向き直した。

「ね、これからも増やせるかな？ 私の記憶……」

「ああ、協力するよ」

「バカ……当然だよ」

マリーの言葉に対し、真が頷くと彼女は頬を赤く染めながらそう答える。

「キミがいなきや作れないよ……」

消え入りそうな声でぼそりと呟くマリー。それから彼女はうんと頷いた。

「……焦らなくていいよね。記憶がなくなっちゃって、作っちゃえばいい

んだ。はは、ありがと……ごめん、嬉しいや」

笑顔でそう言うマリィは元気を取り戻したらしく、真は彼女との仲が深まった気がする。と考える。

「でもさ、やつぱりキミって変人」

するとマリィが相変わらず失礼な事を真へと言った。

「忙しいくせに、ずっと私の世話、焼いてるよ……なんで、そんな事するの？……なんで？」

マリィはそう、潤んだ目で真へと問いかけ、真も何故自分がマリィの世話を焼いていたのかと考える。最初はマーガレットに押し付けられ、困っている人を見捨てるわけにもいかないから彼女の相談に乗っていた。だが記憶がないという彼女は様々なものに無邪気な反応を見せており、たまに我儘も言うがそれさえも受け入れてしまっていた。それはなんでなのか、と、真は考え、マリィの笑顔を思い出すと結論が出たのか微笑んだ。

「好きだから」

「嘘だよ、そんなの……言葉だけじゃ、信じらんない」

真はマリィにそう気持ちを伝える。だがマリィは顔を真っ赤にしながら、ぷい、とそっぽを向いてそう返す。

「……仕方がないな」

そう呟き、真はマリィに近づくと彼女を優しく抱きしめる。

「……驚かせないでよ、バカ。嫌いだよ、キミのそういうトコ……ホント、嫌い……嫌い……だったのに」

マリィの鼓動が真へと伝わってくる。

「……また増えたね……記憶」

と、マリィは顔を上げ、真に向けて微笑みかける。

「ね、もうちよつとこうしてて。私が……忘れないように。いいでしよっ。」

「ああ」

マリィの言葉に頷き、真はマリィを優しくしかし強く抱きしめる。高台で抱き合うその姿を太陽が照らし出していた。

それから翌日。登校している真に「せくんぱいつ」と声をかけてりせが駆け寄ってくる。

「おはよ、先輩」

「ああ、おはよう」

りせの明るい笑顔での挨拶に真も微笑を浮かべ、返す。するとりせはさらに楽しそうに微笑んだ。

「先週は楽しかったね。文化祭に、みんなでお泊まり！」

彼女は嬉しそうに「私、そういう体験もうないだろうって思ってた」と語る。

「あ、けど予報見た？ 週末からまた天気崩れ出すみたい」

だが切り替えはしつかりしており、天気が崩れ出すからマヨナカテレビは要チエックだと真に言う。

「しばらく晴れ続きだったからな……意外なものが映るかもしれないな」

「うん。世間は解決ムードだけど、真犯人、まだ捕まってないんだもんね」

互いに事件解決への思いを共有し、二人は学校へと歩みを進めていく。

「あ、ところで先輩。今日暇？」

「特に予定はないが……」

「じゃあさ。沖奈市で今見たい映画やってるんだけど、一緒に見に行かない？ ローマの有休って言って、有休中に偶然出会った主人公と王女との騒動を描いたラブストーリーなの！」

「ああ、えっと……」

つい昨日マリーとのラブロマンス的なイベントをこなした次の日にというのはどうかなあと真は己の良心と戦う。

「ね、いいでしょ？ 一人で映画って寂しいし」

「……分かった」

しかし直後、りせから笑顔での誘いを受けるとまあ友達と遊ぶだけだし、いいか。と真は自分を納得させて了承するのであった。

そしてその日の放課後。一旦帰って私服に着替えた後、真とりせは原付で沖奈市までやってくる。と映画館30frameでイチオシ映画、ローマの有休のチケットを二人分買い、映画館に入る。美しいローマの街で繰り広げられる優雅なロマンスはラブストーリー系の映画に特に興味のなかった真でも胸がときめくような出来だった、「うくん、さいこー!」

映画が終わり、りせが満面の笑顔でそう叫ぶ。

「名作のリメイクって原作に及ばない事が多いけど、これはよかったかも!……ローマかあ。ヨーロッパの町って、なんかもうただカメラ回してるだけで絵になるよね……」

「ただ単に俺達が見慣れてないからじゃないのか?」

「……先輩夢がないな」

うつとりとした顔のりせに真がふとそう呟くと、りせは途端にジト目に頬を膨らませながらそう呟く。それに真も苦笑を浮かべた。

「変な事言ったな。悪かった」

「別にいいよ。それより一緒に来てくれてありがと、やっぱりこういうラブストーリーを一人で見ると居心地悪いから」

「そういえば映画を見ていたのはやけに男女の二人組が多かったよ。うな気がする、と真は今更ながら思い返した。

「じゃ、帰ろっか」

「そうだな」

しかしその真意を考える前にりせが帰ろうと言い、真も頷くと二人は原付の駐輪場へと歩いて行った。

それから数日過ぎて11月4日になる。

「つくしゅー!」

教室内で突然真がくしゃみを出し、咄嗟に手で口を押さえる。

「だ、大丈夫? 風邪?」

「いや、ただくしゃみが出ただけだと思うが……」

隣の席の千枝が心配そうに声をかけると、真は偶然じゃないかと答

える。

「そうかもしれないけど、無理すんなよ?」

「うん。椎宮君、色々頑張ってるし。知らない内に疲れが溜まってるのかも」

「ああ、すまない……へ、つくしゅ!」

陽介と雪子が心配そうに声をかけ、真もそれに頷いて返すのであった。

それから時間が過ぎて放課後になり、真は陽介達から無言で「体調悪いかもしれないんだからとつとと帰れ」の視線を受け、下手したらまた事件が起きた時のためのマヨナカテレビ探索用の資材調達さえも肩代わりされそうになったため、今日は部活もないので観念してそのまま家へと直帰する事にした。

「お父さん、おそいな……」

夜中に時間が移り、外が雨の中、テレビを見ていた菜々子がふと呟く。すると突然玄関からびんぽーんとインターホンの音が聞こえてくる。

「お父さん、カギ忘れちゃったのかな?」

防犯のため普段から玄関には鍵をかけるようにしている堂島家。菜々子は玄関に向かうと鍵を開け、応対。するとすぐに戻ってきた。その表情は浮かないものだ。

「ハイタツの人だった。高橋さんちどこですかって……」

残念そうにそう呟いた直後、今度は家の電話が鳴り始める。すぐ近くに立っていた菜々子がすぐに電話を取った。

「もしもし、ドウジマです。あつ、お父さん!」

電話相手は遼太郎らしく、菜々子の顔がぱつと明るくなる。

「うん……分かった。うん、お兄ちゃんがいるし。菜々子は大丈夫だよ。お仕事頑張ってるね、ばいばーい」

菜々子は少し残念そうな顔になりつつも父親に頑張ってるねとエールを送り、電話を切る。

「お父さん、あした帰ってくるって」

「そっか」

菜々子からそう聞き、真もこくりと頷く。

「つくしゅ!!」

直後また真の口からくしゃみが出た。

「お兄ちゃん、寒いのか?」

「ああ、いや……そうかもな」

菜々子が心配そうに声をかけ、真が苦笑しながらそれを肯定する。

「コタツ、出そっか? さむかったら出しなさいって、お父さん言つた。あつたかいよ!」

「分かった」

菜々子は寒いならコタツを出そうと言い、真も頷くと立ち上がり、菜々子に教えられて押し入れからコタツを出すと卓袱台があつたところにコタツを置き直し、コタツに入る。

「スイッチ、入れるよ」

菜々子は嬉しそうに言つてコタツのスイッチを入れる。しかしコタツに何の反応もなく、カチカチと何度かスイッチを入れ直すがあうともすんとも言わなかつた。

「つかない。こわれてるね」

「今度、新しいのを買いに行こうか」

しゅんと、がっかりした様子の菜々子に真がそう尋ねる。すると彼女の顔はすぐにぱつと明るくなった。

「え、買うのか? ジュネス? やったー! こんどのお休みの日、ジュネス行こー!」

「ああ。約束だ」

明るい表情で無邪気に喜ぶ菜々子に真も微笑んで頷いた。

「……」

稲羽市警察署。遼太郎は先ほど家に電話をかけた後、喫煙室で煙草を一服し終えて喫煙室を後にする。

「おう、遼太郎」

「市原さん」

喫煙室前、突然彼を呼び止めた男性——遼太郎よりも一回りは年上だろう、皺が少々目立つが穏やかそうな壮年という印象だ——に遼太郎が言葉を返す。

「丁度よかった。今お前さん呼びに行こうとしたところだったよ」

からからと笑う壮年の男性——市原。相手の緊張をほぐすような笑いだが、これでいてかなりの切れ者である彼を知る遼太郎もはははと笑いを返す。と市原は真剣な表情になり、声を潜めた。

「少し前に頼まれた鑑識の件だが、結果が出たぞ」

「本当ですか!？」

彼の言葉に遼太郎もそう聞き返す。真とマヨナカテレビの件で協力を決めた少し後、彼から実は脅迫状を送られていた事を聞き、市原に個人的に鑑識を依頼していたのだ。表向きの理由としては「消印も何もなしに送られてきた脅迫状で、もしも家に何か危害を加えようとしているとしたら菜々子が心配だ。何か手がかりを見つけられないだろうか」というもの。市原もそれこそ彼女が生まれた頃から知っている菜々子（なおここ数年会っておらず、菜々子からは覚えられているかも怪しい）には少々甘いところがあるため「仕事が空いている時でよければな」と快諾していた。

「結果から伝えるとだな。封筒と手紙から検出された指紋からは、前もってお前さんから提出されたもの以上の指紋は出てこなかったな」
「そうですか……」

市原の言葉に遼太郎も気落ちした様子で呟く。提出された指紋、それは自分以外に真と菜々子、あとは彼が封筒や手紙を見せたという陽介達いつもの学生メンバーのものだ。すると市原は呆れたようにため息をついた。

「というよりもだ。受け取ったつうお前さんの甥っ子は何を考えてるんだ？ 脅迫状を不特定多数に回し読みさせて。まあ、イタズラだと思ふのもしようがねえかもだがな」

「す、すみません……」

市原の注意に遼太郎が頭を下げる。あらかじめ陽介達の指紋が出るだろう事を説明する際に「受け取った甥がイタズラだと思つて笑い

話の種に友達に見せて回ったそう」と言い訳していた。市原はまったく悪態をつけて腕を組み、ふんと鼻を鳴らすと再び真剣な顔を見せる。

「まあ、鑑識の立場から言わせてもらえば。お前さんの甥っ子やその友達によるイタズラって線を除けば……この手紙を送った人間は相応どころじゃなく用心深いって事だ」

パソコンを使っているため筆跡からの特定は不可能。使用しているインクや手紙、封筒の用紙も近所の文具店で売っているような珍しくもない品。出所を探ることも難しい、というのが市原鑑識官の見解だった。その上髪の毛などの物的証拠も一切残していない事も彼がその結論を出す裏付けとなっている。

「とりあえず。俺から言えることあ菜々子ちゃんや甥っ子の周囲に気をつけて安全を第一に考えろ、って事ぐらいだな。無論、お前さん自身もだが」

「ええ。わざわざありがとうございます」

市原の結論に遼太郎もわざわざ鑑識に時間を取ってくれた彼にお礼を述べる。

「なあに、お前さんとはひよつこの頃からの付き合いだからな。これぐらいの我儘は聞いてやるよ……何より、お前さんがあの事件よりも優先してくれって言ったからな」

市原はニヤリ、と笑ってそう告げる。あの事件、それは遼太郎の妻である千里のひき逃げ事件。市原にはこの事件についても協力をお願いしていたが、今回はその鑑識よりも今回の脅迫状の鑑識を優先するよう遼太郎はお願いしていた。

「お前さんがあの事件を血眼になって追いかけてるのを俺あよく知ってる。それを後回しにしても、ってのが嬉しかったわけよ」

「ええ……もちろん、あの事件を追いかける事を諦めたわけではありません。俺は刑事^{デカ}としてあの事件を追う。だけど、それを理由に菜々子から逃げる事はもうやめました。俺は父親として、菜々子と向き合う。そう決めましたから」

「ふっ……いい目をしてんぜ、遼太郎。さ、仕事に戻んな。俺あ一服し

てから戻るからよ」

「はい」

市原はふつと笑うと喫煙室に消え、遼太郎ももう一度市原にぺこりと礼をすると部屋に戻っていった。

視点が変わり、時間が過ぎて真夜中。真は自室で、外で雨が降っているのを確認してからカーテンを締めテレビの前に立つ。そして少し待つと電源の点いていないテレビがぎざぎざ、という雑音と共に映り始める。真はその砂嵐の中に人影を見つけた。

(……いつにも増して不鮮明だ。性別の見分けすらつかない……)

しかし人影はいつにも増して不鮮明。普段なら背格好から性別の見分けくらいはつくのだが今回はそれすら出来なかった。これといった手がかりを入手する事も出来ずにテレビは消えていく。真は無言で立っていた後、携帯電話を取り出すとある番号にかける。

「おい真、お前体調悪いんなら無理すんなって言ったろ？」

「マヨナカテレビを確認するぐらいの余力はある。それより陽介、テレビは見たよな？」

電話の相手——陽介は開口一番呆れたように、しかし真を心配した様子でそう注意し、対する真はマヨナカテレビの確認ぐらいは出来ると言いつ返してから本題に入る。

「ああ、エライボンヤリしてたけど、今確かに人映ったよな？」

陽介は人が映ったと情報を共有。悔しそうに、また事件起きちゃうのかと呟く。

「とにかく、明日集まれるか？ 今日のはいくらなんでもボンヤリ過ぎて推理も何も無い。心当たりとか情報交換しねえと話が進みそうにないぜ？」

「ああ、分かった。また明日な」

明日集まろうという事に決め、真は電話を切ると今日はもう眠りについた。

それから翌日、11月5日の放課後。あいにく今日は終日雨の予報で少なくとも今は雨は土砂降り。屋上で話し合いをするには向かない天気であり、そもそも命達も会議に参加するには屋上は不適當。全員揃ってジュネスのフードコートに集まっていた。だがその中に真の姿はない。

「にしても相棒……余力はあるとか言つといて朝起きたら学校休むほどの高熱はねえだろ……」

「あはは……」

「でも、椎宮君も脅迫状やら何やらで負担はかかってたんだし。仕方ないよ」

「まーな。俺も真を責めるつもりはねえよ……」

陽介は今朝「すまん、風邪引いたみたい」のメールを受けて椎宮真本日欠席の旨を学校に伝えたが、体調悪いなら無理するなど警告したにも関わらず完全に体調を崩した彼に呆れた様子を見せる。千枝もそんな彼に苦笑を見せ、雪子も苦笑しつつ彼を擁護。陽介も真を責める気はないと言つて話を打ち切つた。

「さて、会議を始めようぜ。まず全員、マヨナカテレビは見たよな?」
全ての前提となるテレビを見たか、とまず陽介は確認する。

「マヨナカテレビ……皆さんに言われて、僕も見てみました。探偵業の僕が、まさかこんな『迷信』に目を凝らす日が来るとは……驚きです。人影……確かに映りましたね」

マヨナカテレビ初体験の直斗が、現実主義であるべき探偵の自分が、根拠が解明されていない迷信に目を凝らすとは思わなかったと困惑の様子を見せる。

「あれ、誰だか分かつたって人、居る?」

「流石に無理っしょ、画面あんなザラザラじゃ」

陽介が確認するように誰か分かつた人はいるかと思ねると、完二が不鮮明過ぎて分からないだと返答。

「誰か、最近テレビに出て地元で有名になった人は?」

次に発言するのは雪子。テレビに映つた人が何者か直接分からない

くとも、映るには一定の理由があるのも分かっている。そこから逆算して誰が映ったのかを突き止めるというわけだ。

「すぐには思い当たりませんね……」

それに直斗が口元に手を当てて考え込む様子を見せながらそう前置き。その上で「政治家が一人、霧からくる風説を鎮めるために稲羽市に来た」というニュースがあったことを告げる。

「ですが、可能性は低いでしょう。第一、すぐに中央に帰りましたし」しかし地元の間人ではない上にすぐ中央に帰った事から可能性は低いと結論付ける。

「むむむ……」

「ん？ どうした？」

するとクマが声を漏らし、陽介がどうかしたかと声をかけた。

「そう言やお前、昨日は売り場のベッドで爆眠した罪で、深夜棚卸しの刑だったっけか」

と、陽介は思い出したようにそう呟き、マヨナカテレビを売り場のテレビでちゃんとチェックしたのか尋ねる。そんな陽介の質問にクマは憤慨、ちゃんと確認したと反論する。

「クマが見るに……映った人、体格、細っこくなかった？」

「いやー、あんだだけボンヤリで体格も何も無いっしょ？ 気のせいだって。もしくは寝オチか」

クマの言葉に千枝は呆れた様子でそう返し、それよりもテレビの中に人はいないか確認する。

「それはナシ。まだ誰も来てないよ？」

「もう一晩、様子見るしか無いかも」

千枝の質問にクマが首を横に振り、結生がそう呟く。

「そうね。幸い、この雨は今日も夜まで降り続くみたいだし。今夜も忘れずにチェック、それしかないわ」

結生の言葉にゆかりも賛同。現状ではこれ以上進める事も出来ないためそれを最終結論として今回の話し合いは終了となった。

「さてと、真君にはどうする？」

「あー、寝てたら電話で起こしても悪いし。後で俺が「今夜もマヨナ

カテレビを見る事になったけど、お前は無理せず寝てろ」とでもメールしときます」

「お願いね」

命が真への連絡を考えると陽介が後でメールしときますと返答、命も異存はないのかお願いと返した。

「あ、じゃあ皆で先輩の家にお見舞いに行かない？」

「や、起こしてもしたら悪いっしょ？ あんま気を遣わせるのもどうかと思うしさ」

りせは真を元気づけるためお見舞いを提案、しかし千枝が真を起こしたら悪いしと反論した。

「まあ、今日一日様子を見て、明日も体調が悪そうだったらにしょ」

「はい」

結生が折衷案を考え、りせもそれに同意。そしてこの場は解散となった。

「ふう……」

時間が過ぎて夜。遼太郎は仕事が一段落し、家に帰っていた。

「しかしコタツが壊れてたとはなあ……最近は気候も変だし、真も体調を崩したみたいだから……真が元気になったら皆で買いに行くとするか」

遼太郎は真からメールでコタツが壊れていたこと、菜々子がジュネスに買いに行くのを楽しみにしていること、そして自分が体調を崩して今日は学校を休んでいることを伝えられ、最近の不安定な気候で自分や菜々子まで体調を崩す前に新しいものを買おうと決めながら家の門をくぐる。

「ん？」

と、遼太郎はポストに郵便が来ているのに気づき、ポストから一通の封筒を取り出す。近所の文具店で売っているような変哲もない無地の封筒、宛名は「椎宮真サマ」とパソコンで印字されている。しかし差出人の名前や住所はなく、さらに消印や切手もない不審な封筒

だ。

「こいつあ、まさか……」

ほんの昨日、全く同じ不審な封筒の話になった。そこにこれと遼太郎は表情を変え、家に入っていった。

「お父さん、おかえりなさいーい！」

「ああ、ただいま。菜々子……真はどうしてる？」

「えと、お兄ちゃんはへやでねてるよ。さつきね、菜々子がおみずかえてあげた！」

「そうか。えらいぞ、菜々子。俺はちよつと真と話があるから。あいつが元気になったら、皆でコタツ買いに行こうな」

「うんー！」

遼太郎は菜々子とそう話し、コタツを買いに行くのと直接約束。嬉しそうに笑う菜々子の頭を撫でると二階の真の部屋へと向かった。

「真、起きてるか？」

「ああ、叔父さん。お帰りなさい」

部屋に入り、綺麗に片づけられている部屋の奥のベッドで横になっている真に声をかける。それに真は返答し、右手で今は額に乗っけられている濡れタオルを押さえながら起き上がろうとするが、遼太郎は「そのままでもいい」と制してベッド脇へと足を運び、彼を寝かせる。

「調子の悪いところにすまないが、お前宛の手紙だ。おそらく、前に届いたヤツと同じ物だと思うが……」

予想が的中する可能性は高いとはいえ一応真宛ての手紙であり、遼太郎が勝手に中身を検めるわけにもいかない。真は遼太郎から受け取った封筒を開け、中身を確認した。

「!?」

中身の手紙には以前のものと同じく、パソコンで打った文字でたった一文だけが印刷されている。

コンドコソ ヤメナイト ダイジナヒトガ イレラレテ コロサ
レルヨ

それは遼太郎の予想通り、二通目の脅迫状だった。

「叔父さん、この前と同じ脅迫状です」

「やっぱりか……真、念のため聞くが心当たりはあるか？」

「……いえ。今日は一日中家にいましたが、流石にずっと寝てたら……」

「そう、だな……すまん。この手紙、鑑識に出してもいいか？　あまり期待はできませんが……」

「はい、お願いします」

遼太郎は一応真に心当たりがないかと尋ね、学校を休んで一日家にいたものの寝ていたため分からないと答える真に謝ると、二通目の脅迫状を鑑識に出すことを提案。一通目の脅迫状の鑑識結果からあまり期待はできないものの、やらないよりはマシだという彼に真も同意した。

「じゃあ、行ってくる。お前は休んで万一に備えてくれ……そうさせないよう、努力はするが」

「はい」

遼太郎は立ち上がると部屋を出て行き、真も目を閉じると今自分に出る事である、一刻も早く体調を万全にし、犯人を捕まえられる状態にするため眠りについた。

「菜々子、お父さん忘れ物をしちまった。少し取りに行ってくるから留守番、よろしくな。俺が出たらすぐに家の鍵を全部かけるんだ、いなっ…」

「うんー！」

鑑識に持っていくための方便として遼太郎は忘れ物をしたと理由をつけ、菜々子に戸締りをしっかりするように伝える。と、菜々子は遼太郎が右手に持っている手紙に気づいた。

「あれ、お父さん。それなに？」

「え？　ああ、いや、これはなんでもない。じゃあ菜々子、頼んだぞ」
菜々子の質問を遼太郎は適当にはぐらかし、家を出る。それから菜々子がちゃんと家の鍵をかけた事を確認すると彼は車に乗り込みながら携帯で電話をかけた。

「おう、どうしたよ遼太郎」

「市原さん。まだ署に残ってますか？」

「ああ、どうした？」

「また脅迫状が届きました……期待はできないかもしれませんが……」

「分かった。すぐ持って来い、準備をして待ってる」

「ありがとうございます」

全て言わずとも理解してくれる市原に感謝しつつ、遼太郎は車を出すと稲羽署へと急ぎ車を飛ばしていった。

第六十一話 真犯人発覚。父親の決意

遼太郎が警察署に真宛ての脅迫状を持っていったのとほぼ同時刻、ジュネスの食料品売り場。陽介はクマと一緒に棚卸をしていた。

その際「なんで俺まで棚卸してんだよ」という愚痴にクマが「クマがあんま稼がないからしよーがないでしょ？」とどこで覚えたのか分からない台詞を言い、陽介にツッコまれるというショートコントが行われていたのは余談である。

「あーも、何で俺がお前養ってんだよ……ハア……こんなん買ってやんなきゃよかったぜ……」

陽介はそう言いながら、ズボンのポケットに手を入れると何かを取り出してクマに手渡す。

「ほらこれ、持っとけ。お前用の携帯」

「おお……IT時代！」

「無いとこつちが心配だしな。つつても、子供用の安つちーやつだけど」

陽介はクマにいざという時の連絡手段を持たせるつもりらしく、子供用の安物のようだがクマは感動したように「ありがとヨースケ」と涙ぐんでいた。

「使い方はー、このマークの押して……」

陽介はクマに携帯の使い方を教えようとするが、口で教えるより実演した方が早い事に気づいて自分の携帯を取り出す。そのままいつものように真の携帯にかけようとアドレス帳から検索した。

「つと、でも真は体調崩してるし、起こしたら悪いな。完二辺りにでもかけるか」

しかしかけようとする寸前、真は体調を崩して寝てるはずである事を思い出す。と、クマがお菓子を入れたカゴを持ち上げた。

「ナナチャンとこ、遊びに行く！ 遊ぶ約束、たくさんしたからね！」

「行かねーよ、てかお菓子戻せ」

クマの言葉に陽介は冷静にツツコミを入れ、「もう晩飯時回ってるだろ。今度にしろ」と続ける。

「……あーそっか、でもあいつ体調崩してんだよな。ってことは今日の晩飯って……」

「晩ご飯、差し入れに行ってみるとか！ ねえねえねえねえ！」

「あーも、わーかったよ、しょうがねーな……」

「オツケーキマ!？」

陽介は晩飯時回つてるとまで言うと言と真が体調を崩してるとて事は食事を作る人もいないのではないかと思ひ当たる。真が来るまでは遼太郎が惣菜を買ってきてきてどうにかしていたそうだが、少なくとも今日はジュネスに遼太郎が来ていた様子はない。

彼がそこまで考えるとクマが晩ご飯の差し入れに行くのはどうかと提案し、陽介に押し押しで迫る。陽介もそれがうっとおしくなつたか分かつたよと答え、クマも目を輝かせた。

「イエスツ！ ヨースケ、おつとなー！ クマ、その心遣いにキュンつてした」

「じゃ、ちよつと待つてろ。電話してみるから……携帯にかけるより家電の方がいいよな」

騒ぐクマを横に陽介は真の携帯ではなく彼が居候をしている堂島家へと電話をかけた。

「……もしもし」

「あ、菜々子ちゃん？ お兄ちゃんは？ 寝てる？」

「うん……」

「そっか。晩飯まだなら、俺達差し入れに行こうと思つてんだけど。あ、堂島さん……お父さん帰つてきてる？」

晩飯の差し入れなら菜々子よりもいるなら保護者の遼太郎に了解を取るべきだと判断した陽介は菜々子に遼太郎が帰っているかと尋ねる。

「ううん。さつき帰つてきたんだけどね、わすれものしちやつたつて、またいつちやつた」

「あーそっか」

菜々子はそう正直に陽介に話し、陽介もそっかと頷きながら、忘れ物ならすぐ帰つてくるだろうし差し入れは三人分だなど思考の片隅

で考える。

「そういえばね、お兄ちゃんとおはなしして、へんなてがみをもつてった」

「変な手紙？」

すると菜々子が気になる事を言い残し、陽介が気になったようにその言葉を繰り返す。と、クマが「いいかげん、クマに代わりんしゃい！」と叫んで携帯を奪い取ると「こんばんは、あなたのクマクマー」と菜々子に話しかける。

「また一緒にジュース飲んだり、お菓子食べるクマよ」

「変な手紙……」

クマが菜々子と話している横で陽介は考え始め、はっとした顔になった。

「まさか、あの『脅迫状』!? 二通目が来たって事か!?!」

そう声をあげ、陽介はクマから携帯を奪い取る。

「わ、悪い菜々子ちゃん。用事を思い出したから、切るから。お兄ちゃんによろしくな!」

そしてそう言い、すぐに電話を切って別のアドレスに電話をかける。

「ちよつとヨースケー、楽しく話してたのに何クマか?」

「クマ、今この電話命さんに繋がってる! 脅迫状の二通目が届いた可能性があるって命さんに教えてやってくれ! 俺は俺とお前の早退手続きをチーフに頼んでくる!」

「わ、分かったクマ!」

ぶーぶーと文句を言うクマに陽介は真剣な表情で言い、クマがこくと頷くと携帯をクマに押し付けて事務室に走っていく。クマも相手が電話に出るのを確認すると「センパイクマか!?!」と通話を開始した。

時間が過ぎて深夜。大雨が降り、雷も鳴り響く外。直斗はレインコートを着込み、自分用の原付を駆って走っていた。そのサイドミ

ラー横には自作した携帯電話ホルダーが取り付けられており、そこに置かれている携帯電話は千枝と通話が繋がっている。

「さっきマヨナカテレビに映ってたの、菜々子ちゃんじゃない!? どうして菜々子ちゃんが……テレビに出たりしてないのに!」

「いいえ……出てたんですよ……菜々子ちゃんも。視覚的にじゃなく……」

千枝の慌てたような声に対し、直斗は焦りつつも冷静さを失うまいと頑張っているような声色でそう答える。

「えっ!？」

「政治家が学校訪問に来たこと、何度かニュースで流れましたよね? そこで、彼は自分と話した一人の生徒について、毎度特別にコメントを出して称えたんです。その子は匿名のまま、知名度だけ上がっていった……それが菜々子ちゃんだったんです!」

直斗はそう説明。「興味に反応した新聞が今日の夕刊に写真と実名インタビューを大きく出しています」と補足する。

「それに、狭い田舎町だ……もつと前から風の噂に知っていた人も多いでしょう」

「そんな……」

「メディアにある程度ハッキリ取り上げられ、急に知名度を得た地元民」。それが彼らが予測したテレビの中に入れられる人間の共通点。

匿名とはいえメディアに取り上げられたことに間違いはなく、そして今日の夕刊で匿名だった報道が実名に変わった。これにより菜々子は地元で急激に知名度を上げたことになる。つまり、これでテレビの中に入れられる条件を満たした。

「もつと早く気づけばよかった……」

絵で出ていないものはテレビに出ていないと思いついでいた。探偵にあるまじき先入観にとらわれた未熟な自分に直斗が後悔に満ちた顔を見せる。

「ど、どうしよう……今は椎宮君が家にいるけど……」

「ええ。万全の状態ならまだしも、今彼は体調を崩している。下手を

すれば返り討ちにあう可能性もあります……とにかく、僕が先輩の家に行つて、お二人の無事を確かめます！」

「分かった、あたしもすぐ行く！ 雪子とりせちゃんにも連絡してくから！」

「はい、お願いします！」

直斗と千枝は話を終えると電話を切り、直斗は原付のスピードを法定速度ギリギリまで上げる。雨で何度かスリップしそうになるがなんとか持ちこたえ、直斗は堂島家へと辿り着いた。

玄関のドアは開いている。それをさつと確認した直斗は原付を降りてエンジンを切り携帯電話をホルダーから取り外すがそれ以上の時間は惜しく、原付のスタンドを立てることなく原付を倒してヘルメットをかぶつたまま堂島家に飛び込んだ。

「菜々子ちゃん！ 先輩！ 〆無事ですか!?!」

声を張り上げるが反応はなく、直斗は靴を履いたまま玄関口から上がる。居間の方に人気はなく、直斗は真の自室である二階へと上がった。

「先輩……いない!?!」

しかし部屋に真の姿がない。ベッドは布団が少々荒れているがこれくらいなら起き上がった程度とみなしていい、それ以外は部屋の中に変わった様子は見受けられなかった。

（先輩は部屋を自分で出ていったのか？）

冷静に考えつつ直斗は階段を下り、居間を改めて確認。こちらら荒らされた形跡はなく、次に直斗は玄関を確認した。

（鍵をこじ開けた形跡はない……元々鍵が開いていたのか？ いや、でもたしか……）

今の内に少しでも情報を収集し、推測を始める直斗。すると彼女の携帯電話が鳴り始めた。

「もしもし?」

「もしもし、直斗か!? 里中からお前が真の家に向かったって聞いたんだけど!?!」

「花村先輩、ダメです！ 菜々子ちゃんも、先輩も見当たりません！」

「マジかよ!? でも、菜々子ちゃんはともかくなんで真まで……ど、堂島さん!?!」

電話相手——陽介が突然変な声を上げる。その時電話口から聞こえる声が変わった。

「白鐘!・俺だ!」

「堂島さん!・今、堂島さんの家にいます。扉が開いていて、家の中には誰もいません!」

「くそ、どうして菜々子が……とにかく電話じゃ埒があかない!

お前も署に來い! こつちで詳しい話を聞かせてくれ!」

「はー!」

陽介から代わった電話相手——遼太郎から指示を受け、直斗も頷くと堂島家を飛び出す。

「直斗君!」

「どうだった!?!」

「菜々子ちゃんと先輩は!? 無事!?!」

そこと同じく原付に乗った雪子、千枝、りせが到着した。

「ダメです、家には誰もいません! 警察署に花村先輩が堂島さんと

一緒にいます。僕達も急ぎましょう!」

直斗がそう言うのと雪子達も頷き、直斗が原付を立て直して乗り、エンジンかけると彼女達は直斗を先頭に警察署まで走っていった。

「とにかく今は説明してるヒマはない! 至急国道沿いに検問を張ってくれ!」

「えと、は、はい……一応、関係各所に連絡はしておきますが……」

稲羽市警察署。取り調べなどに使うのだろう一室で陽介と完二、クマ。そしてクマから連絡が来た命とゆかり、結生が揃っている中、遼太郎が交通課に誘拐事件の発生と検問の要請を行っているが、どうして誘拐と判断したのかと尋ねられると答えられなくなってしまい、電話相手の太田なる交通課の職員がそう言うと言電話が切れる。

「さ、殺人との関係って言っても、証明できないし……署内すっかり解

決ムードですから……」

遼太郎の隣に立つ足立が困ったように遼太郎に言う。遼太郎は検問要請の中で「例の殺人事件とも繋がっているかもしれない」と言っ
てしまい、それを聞いた太田からは「事件の犯人、拳がったじゃない
ですか」と訝し気な様子を見せられてしまっていた。

「堂島さん！」

「白鐘！」

するとそこに直斗を始め女性陣が入る。足立が「ちよ、なんでこ
んなに集まってくんのさ!？」と悲鳴を上げた。

「よし。白鐘さん、堂島氏の家の状況から何か分かったことを教えて
！今は当てがない、とにかく少しでも情報が欲しい！」

「うん。一回冷静に状況を整理しよう」

命がすぐさま直斗に発言を頼み、結生も状況を整理しようと提案す
る。

「はい。まず、今回の失踪は、これまでと同じ犯人による誘拐とみて間
違いないでしょう」

直斗はまず最初に今回の失踪、誘拐事件がこれまでと同一犯である
と断言する。

「堂島さんの家は玄関の鍵が開いていました。しかも鍵には、こじ開
けられた痕跡”が無かった……」

「おい、そいつあおかしいぞ。俺は真から脅迫状を預かって市原さん
に鑑識をお願いしに来たんだが、その時家を出る前に菜々子が玄関の
鍵をかけた事を確かに確認している」

直斗の発言に、遼太郎がそう矛盾点をツツコむ。鍵は確かにかかっ
ていた。しかし、こじ開けられた痕跡はなかった。

「菜々子ちゃんが……自分で開けたってこと?」

その矛盾を解決する答えを千枝が呟き、直斗も頷く。

「僕らの時と同じだ。犯人は忍び込んだんじゃない、堂々と玄関から
現れたんです……呼び鈴を押して」

その発言に雪子と完二が反応。雪子が「私達の時と、同じ……」と
呟く。なお足立は「私達の時?」と呆けた顔を見せていた。

「でも、お二人の時とは事情が違う」

だが直斗はそう話を続ける。以前、文化祭の打ち上げで天城屋旅館に泊まった時に直斗は菜々子から話を聞いていた。〃一人の時は知らない人が来ても、玄関は開けない〃と。

当時厳密には家には真がいたが、体調を崩して寝込んでいる彼はいないもの、実質は菜々子一人だったと考えても支障はないだろう。

「ああ。それは俺も昔から言い聞かせていた……だが、つてこたあ犯人は……菜々子の知り合いだったってことか？」

遼太郎も直斗の発言を肯定、彼女の証言をもとに犯人像を絞り込もうとする。

「堂島さん、誰か思い当たりませんか？ 菜々子ちゃんの知り合いでなくとも、例えば堂島さんの知り合いの中で菜々子ちゃんとも顔見知り、とか」

「やー、それはないと思うなあ。堂島さん、署内で割と孤立してるし……あだっー！」

「いらん事を言うな」

直斗の質問に足立が余計な口を挟み、遼太郎から拳骨をくらう羽目になる。が、続けて遼太郎はむうと重く息を吐いた。

「しかしそうだな……市原さんもここ数年菜々子とは会ってないし、顔見知りと言えば組んでるこいつぐらいのもんだろ」

「も、もちろん、僕はずっとここにいたけどね!？」

結局足立の言葉に反論は出来ず、自分と菜々子の共通する知り合いといえは足立ぐらいだと証言。足立が慌てたように署内にいたと自身のアリバイを証言した。

「菜々子ちゃんの知り合いってだけじゃ、絞り込めそうにないわね」

「そうですね……なら、切り口を変えてみましょう」

ゆかりが腕組みをして呟くと、直斗は切り口を変えようと言う。

「確かな事実として、犯人はかなり大型のテレビを使用しているはずですよ」

直斗はそもそもとして犯行に使われているテレビ、それも人が入れるほどに大型なものを使用しているはずだと話す。なお足立は「は

……テレビ？　なんで？」とまとも呆けた声を出している。

「誘拐の現場はバラバラなのに、テレビが使われるのはいずれも誘拐の直後。玄関先でと言ってもいいでしょう」

「つまり、犯人はテレビを携えて、移動している。可能性があるってわけか……って事は、〃車〃が犯行現場ってことか？」

現役刑事ゆえに遼太郎が直斗の言葉を待たずして推理を進める。

「犯行のスムーズさから見て、恐らくセダンではないある程度大きな車でしょう」

直斗はそこまで推理しつつ、しかしおかしい点を述べる。それは「多くは白昼堂々の犯行のはずなのに、不審者の目撃情報が全くないこと。」

「顔見知りで、車で移動……でも、見えない車？」

「偶然、誰も見なかっただけ……は、流石にあり得ないよね。これだけ繰り返してるわけだし……」

「見えない車って……そんなのある？　一体何？」

千枝とりせと雪子が首を捻る。

「顔見知り、車で移動……見えない車、偶然ではない……」

遼太郎も今までの証言で何が引っかけたのか、うつむいて発言の内容を繰り返す。

「待てよ、見えない……違う。見えていても怪しまれない……」

そこまで呟いた時、彼は何か気づいたように顔を上げた。

「そうか、宅配便の車だ！」

遼太郎が声を上げると同時に完二もはっとした顔になる。

「思い出した！　先輩らに誰か来たようだったけど。確かに来たツスよ、宅配！　宅配のトラック！」

「宅配のトラックなら、どこの家の前に止まってたって、不審〃じゃない」

「ああ。見えないんじゃない。怪しまれていなかったから気にもとめられてなかったんだ」

完二が叫び、りせが呟くと陽介も頷く。

「そうか、ローカルな業者なら配達員が毎度同じで、顔見知り……」

しかも菜々子ちゃんが留守番してる時にだけ会ってたから、僕らは知らない。堂島さん、心当たりは——」

「ああ、ちよつと待ってる!!」

直斗が再び心当たりを尋ねようとした瞬間、遼太郎は部屋を飛び出していく。そして数分と経たずして戻ってきた。

「足立、どけ！」

「うわつと!? 堂島さん、それって“一から洗い直す”って集めた、山野アナ殺しの資料!」

「ああ。お前達、これを見ろ」

足立をどかして資料をテーブルの上に置き、全員をテーブル周りに集合させる。

「これは……参考人ですか？」

「ああ。その内の一人が“運送業”となってるんだ」

直斗が資料を確認、遼太郎がそう告げると全員が遼太郎の指す資料に注目。直斗がそれを読みあげた。

「前職解雇の後、家業を継ぎ“運送業”……前職、“議員秘書”！ 生

田目太郎!!」

「演歌歌手の旦那か！」

陽介が声を上げる。第一の被害者山野真由美の不倫相手であり、演歌歌手柊みすずの旦那の生田目太郎。ここで第一の犠牲者の参考人と今回の菜々子の誘拐犯が繋がった。

「今は職業が一致したのですが、行く当てを絞るだけなら充分だ」

「ああ。住所もここからすぐだ。足立、出るぞ！」

「は、はいっ!」

直斗の言葉に遼太郎も頷き、相方である足立に出るぞと告げる。しかし足立は声をひっくり返していた。

「結生、お前も堂島氏と一緒にの車に乗って。いざという時に僕達と連携を取るための連絡係になってくれ」

「了解！」

命の指示に結生が敬礼を取る。

「僕と堂島氏、ゆかりで先行する。皆は後からついて来て、君達の法定

速度に合わせてたら間に合わないかもしれない！」

「分かりました！」

ちやつかり命が指示を出し、遼太郎は足立を引つ張って車に搭乗、結生も後ろの席に座ってシートベルトを締め、バイクツリーング用のインカムを準備して命達と通信を繋げる。

「お兄ちゃん、こっちは準備オツケーだよ」

「うん。行くよー」

「俺が先頭に行く。お前達は後からついて来い！」

「つてか堂島さん、一般人を連れていくつて……」

結生が準備オツケーを伝えると命も了解を示し、遼太郎が先頭を行くと指示すると足立が至極正論を言うが無視される。そしてその言葉通り遼太郎を先頭に命、ゆかりが後を追う形で走り出した。

「俺達も行くぞー！」

その後を追いかけるように陽介達が原付を走らせる。しかしやはりスピードは段違い、あつという間に置いて行かれる結果になった。

「いなば急便……堂島さん、あれ！ 生田目の実家の運送業の屋号じゃ!?!」

「ああ……そのトラック！ 止まれ!!」

生田目の実家に向かう途中。いなば急便と書かれたトラックを発見した足立がそう叫び、堂島も頷くとトラックに向けて止まれと大声で呼びかける。しかしその瞬間、トラックは速度を落とすどころかまるで逃げるかのように速度を上げていった。

「チツ。おい足立、利武さん、しっかり掴まってる！」

「え、堂島さん!?! うおわっ!?!」

「きゃっ!?!」

遼太郎はそういうや否やアクセルを踏み込んでスピードアップ、いきなり揺れた車内に足立と結生は悲鳴を上げた。

後ろを走る命とゆかりも追いかけるが、生田目が乗っているだろう

トラックは速度違反に信号無視と道交法違反で確実に罰則をくらうような行為を繰り返して逃げ続け、遼太郎も流石のドライビングテクニクでそれを追う壮絶なカーチェイスがスタートする。

「ど、堂島さん！ このまま暴走続けてたら危険ですよお!？」

「だがどうしろってんだ!? あいつが菜々子をさらったのは間違いねえんだ!」

足立が悲鳴交じりに遼太郎に呼びかけ、だが遼太郎も熱くなってるのか怒鳴り返すと「待ってる菜々子、今助けてやるからな」とトラックの荷台を見つめながら呼びかけるように呟く。

「……仕方ありません。僕が先回りして挟み撃ちにします。神社の先にT字路があったはずです、そこに上手く追い込んでください!」

と、命がインカムを通じてそう言い、遼太郎から離れて別の道へと向かう。相談している暇はなく、遼太郎もなし崩しにそれを認め、トラックを命の言う通りT字路へと追い込もうと走る。そして稲羽市の商店街を暴走、丸久豆腐店の前を通り過ぎた辺りでインカムに再び通信が入った。

「こちら命です! T字路に到着しました! トラックは自分が止めますから堂島氏は事故に巻き込まれないようスピードを徐々に落としてください!」

「と、止めるって、あの子何するつもりなんですかあ!？」

「分からないが、確かにこのままだと危険だ! 今はあいつを信じるしかねえだろ!」

命の言葉に足立はまたもや悲鳴を上げる。このまま事故を起こせば電柱やポストに当たった物の損事故で終わるなら不幸中の幸い。しかし民家に激突すれば物だけではなく人、それも全く関係ない他人に被害が及びかねない。遼太郎も苦渋の決断でブレーキを踏み、車のスピードを落としていく。

「ひい、ひい……」

一方、いなば急便のトラックに乗っている男性——生田目太郎。彼

は恐怖の声を上げながら猛スピードで神社の前を通り過ぎる。あまりの恐慌状態に既に後ろから追う車がないことにさえ彼は気づいていなかった。

「っ!？」

生田目は気づく。彼が行こうとする先のT字路にはバイクを停車させ、バイクにまたがった青年が立っている。いや、ただ立っているだけではない。彼はトラックに向けて拳銃を構えていた。

「止まれ!・止まらないと撃つぞ!!」

青年の叫び声が響き、同時に生田目はありえないほどの恐怖を感じる。このままでは自分は殺される、死に誘われる、という恐怖。同時にガアンと銃声のような、それでいてガラスが割れるような音が聞こえ、生田目は「ひいいいっ!」と悲鳴を上げるとサイドブレーキを上げ、一気にブレーキを踏み込んでハンドルを右に回す。しかしその瞬間タイヤがスリップし、トラックはぐるんと大きくスピンした。

「くっ!!」

銃を構えていた青年——命も咄嗟にバイクを走らせ、その場を離脱。同時にトラックが先ほどまで命がいた地点の後ろにあつた壁に激突、その勢いで停止した。命のバイクは急発進からの急ブレーキでぎざぎざと滑りながら停止、急ブレーキとはいえ安全第一の停止を行つたためトラックからは大分離れてしまったがすぐUターンをかけてトラックの元へと戻った。

「おい……なんだあれ、煙出てんぞ!？」

自転車で最後尾を走る完二が声をあげ、その大声に気づいた全員が原付を止めて完二が指差す方を見る。そこには確かに明らかに異常な煙がもくもくと出ていた。

「事故!?!……」

「もしかして……嫌な予感がします!・煙の方を調べてみましょう!」

陽介が煙から連想したのか声をあげ、直斗が指示を飛ばす。それを

全員が了解して煙の方、丁度小西酒店の辺りくらいだろう地点に走っていった。

「あ、堂島さん！」

「お前達、速かったな！」

陽介が声をあげ、遼太郎もはっとした顔になって呼びかける。

「うわ、ひどい事故!？」

「皆、生田目氏を探して！ この辺にいるかもしれない！」

千枝が壁に激突しているトラック——煙もそれから出ていた——を見て悲鳴を上げ、そこに命から指示が飛ぶと全員が引き締まった表情になって辺りを見回す。

「白鐘、お前は俺と一緒に現場検証を頼む！ 今は雨が止んでるが、また振りだしたら保存どころじゃない。一刻を争うぞ！ 足立、お前は生田目探しの応援を呼べ！」

「分かりました！」

「りよ、了解つす！」

遼太郎からも指示が飛び、直斗は頷いていつも持ち歩いているのだろう現場検証用らしき手袋を着用しながら遼太郎の元に走り、足立は携帯電話を取り出して応援を要請し始める。陽介や千枝達も辺りを見回しながらトラックへと近づき、トラックの中を見た千枝が「あつ！」と叫んでトラックの荷台を指差す。

「見て、ほんとにテレビあるっ！」

「おう。このくらいのサイズなら俺達も、完二だつて入りそうだな……」

千枝が叫び、陽介もトラックの荷台に不自然に置かれていた巨大な薄型テレビを見てこくりと頷く。

「はい。それと、運転席に日記帳がありました。多分生田目が書いたものでしょう」

するとトラックの運転席から出てきた直斗がそう言い、日記帳を開く。

「僕は、新世界の存在を知った。なら僕は、人を救わなければならぬ」

「救う」だあ？ んだそりゃ？」

直斗が読み上げた一文に完二が呆けた声を出す。直斗も訝し気な表情を見せながらページをめくり、そこではっとした顔になった。

「これは……被害者たちの現住所！」

山野真由美、小西早紀、と被害者を読みあげていく。さらに天城雪子、巽完二、久慈川りせ。未遂で助かって世に出なかつた三件目以降の被害者もちゃんと書かれている事を直斗は確認、そこで彼女は顔を上げる。

「そして、諸岡先生の住所は書いてない」

「すごい……そりゃ決まりだよ！」

直斗の言葉を聞いた足立が声を上げる。直斗はさらにページをめくった。

「最後の日付は今日だ……」こんな小さな子が映ってしまうなんて。

この子だけは、絶対に救ってあげなくては！」

「それ……菜々子ちゃん!？」

直斗が読み上げた内容に千枝が叫ぶ。直斗はさらに一ページめくった。

「〃なんとか入れてあげる事が出来た。最近、警察が騒がしい……この日記も、恐らくこれが最後になるだろう。やれるだけの事はやった……」

「間違いない……今までも全部同じ手口でやったんだ。宅配の振りして、堂々と玄関から来て、すぐ荷台のテレビに放り込んで……犯人は生田目だ！」

さらに直斗が読み上げた内容を聞いた陽介が犯人は生田目だと断じる。

「菜々子ちゃん追っかけないと!! ここにテレビあるんだし……」

「ま、待って待って、変なトコに繋がってたら危険クマよ！」

そう叫び、千枝が荷台のテレビに突っ込むとする。しかしそれをテレビの中の世界に一番詳しいクマが止めた。

「明日は霧じゃないみたいだし、いつものやり方で、明日から行った方がいいクマー！」

「けどよっ!」

「私達が失敗したら、誰が菜々子ちゃんを助けるの!？」

クマの言葉に一刻を争うというように完二が反論しようとするが、それに任せがいち早く反論する。

「菜々子ちゃんの救出は明日以降、最優先で。生田目の行方は警察に任せましょう」

そして直斗がその場の結論を述べる。それから学生の彼らが真夜中うろついているのを応援に来る警察に見られたら厄介な事になるため、残りは遼太郎と足立に任せて彼らは家に帰っていった。

それから翌日の日曜日。ジュネスのフードコートに自称特別捜査隊メンバーは勢揃いをしていた。その全員の表情からいつも以上の気迫を感じる。

「菜々子ちゃん、向こうにいるんだよな?」

陽介の確認に、先ほどテレビの世界に入って中を確認したクマが「間違いないクマ」と頷く。

「生田目は警察が追っているはずですから、僕達は菜々子ちゃん救出だけを考えましょう」

直斗が方針を口にするのと千枝が「あたしらにしか、できないもんね」とやる気満々に言い、りせも「ていうか、私達がやらなきゃ」と続く。「途中で何度も無理かもって思ったけど、とうとう犯人まで辿り着けた。ここまで来て菜々子ちゃんを犠牲になんて、絶対させない!」

「ああ……いよいよシメだ……やってやるーぜ、俺らの力でよッ!」

雪子と完二が声をあげ、それに全員が同じ思いを共有しているように頷く。

「クマ、ナナチャンと約束したクマよ! また遊ぼうって………だいたいよぶだからって……クマ、約束したクマよ!」

クマの言葉に結生がこくり、と小さく頷いた。

「うん。ちゃんと助け出せるよ」

「それに、堂島さんのためにもね」

「ああ。僕達は、とにかく、今やれることをやるだけ」だ。そしてこれは、僕達にしかなない」

結生、ゆかり、命がそう締める。

「大丈夫、こんだけ気合入ってんだから、結果はついてくるって！」

「やり方は今まで通りだ。なんも変わらない」

千枝と陽介もそう言う。やるべきことは次の霧の日までに菜々子ちゃんを見つけて取り戻す。いつも通り、焦らず慎重に行くだけだ。そう言い、互いに顔を見合わせるところくと頷く。そしてテレビの中に行こうと席を立った。

「おう、ここにいたか」

『?!』

そこに突然聞こえてきた声に全員が驚いて声の方を見る。そこには遼太郎が立っていた。

「ど、堂島さん!? なんでここに、生田目を追いかけてるんじゃない……」

「そっちは足立に任せてきた」

陽介が慌てたように尋ねると、遼太郎は静かにそう言う。

「頼む……俺も一緒に連れていってくれ」

そして彼は深く頭を下げ、そう自称特別捜査隊へと願い出ていた。

「菜々子は……俺の、生き甲斐だ……あいつを失くしちゃったら……生きてる意味なんかない……」

遼太郎は噛みしめるように、苦しげに、その声を吐き出す。

「あの子は……今この瞬間も……怖い思いついて……助けを待ってる……もし菜々子に何かあったら……俺あヤツを……生田目を絶対に許さないッ！」

ぎゅうつと握り締めた拳は、菜々子を危険に晒している生田目への怒りと同時に、偉そうに父親面をしていて娘一人守れなかった己の無力を悔いているのだろう。

「だが、お前達には菜々子を救う力がある……それと同じ力を俺も持っている今……黙って待っているなんて出来ない！」

遼太郎は顔を上げる。その目には静かな、それでいて強く熱い思いが宿っている。

「頼む！俺も一緒に連れていってくれ!!」

そして彼は再び頭を下げた。

「……分かりました」

「ちよ、命さん!?!」

それを命が了承。陽介が慌てたように声を出す。

「気持ちには分かるよ。家族が危険に晒されていて、でも自分に何も出来ない無力感はね……」

そう言う命の横で結生も寂しげな目を見せながら小さく頷いた。

「幸い武器なら真君が使ってたものがあるし。堂島氏は刑事だ、剣の心得くらいはあるでしょう?」

「ああ、もちろんだ」

「ペルソナもあるし、護身が出来ればそれで充分です。ただし無茶はしないてくださいね」

「……感謝する」

命が決めてしまえば陽介達も反論は出来ず、遼太郎を仲間に入れて改めて彼らはテレビの中へと入っていった。

第六十二話 テレビの世界、天上楽土

「すごい霧だな……」

陽介が顔をしかめる。テレビの中の霧が濃くなっており、雪子も「最近の霧騒ぎと何か関係あるのかな」とぼやく。

「この中も、何か変クマね。きつと、町で色々騒ぎになってるから、こっちの世界にも影響しちゃってる予感」

「今はとにかく、急ごう」

「うん。久慈川さん、菜々子ちゃんがいる方角、分かる？」

クマの推測を聞きながらも陽介は今優先すべき事を言う。命も領いてりせに菜々子がいる方角の確認をお願い、りせも頷くとヒミコを召喚。アンテナのような頭部が辺りを探るように左右に揺れる。

「これがペルソナってもんなのか……」

「ええ」

最初に説明された時もちらつと陽介達が見せたが本格的に見るのはこれが初めてな遼太郎が呆けた声を漏らす。

「あっちから感じる……すごい……何この優しい感じ……」

りせはヒミコの探知能力で何かを感じたのか、その何かを「優しい感じ」と表現する。

「!？」

すると次の瞬間、りせの目が見開かれた。

「どうした、りせ!？」

「この反応、嘘……」

陽介が慌てて声をかけるとりせが呆然とした様子でヒミコの召喚を解除する。

「先輩もいる！ 菜々子ちゃんの反応、そのすぐ近くに!!」

『な……』

りせが大慌てで叫ぶ報告、それに全員が絶句した。

「そ、そんな……なんで椎宮君まで!？」

「いえ、考えてみれば不思議ではない。先輩が菜々子ちゃんの危機を放っておくはずがない……抵抗し、生田目が一緒にテレビに落とした

と考えるのが自然でしょう」

千枝の悲鳴に直斗が冷静にそう推測する。

「ですが、先輩を含め僕達はシャドウに警戒されている。もしシャドウに見つかりでもしたら体調を崩している先輩は危険です！」

「一日経った今でも反応があるって事は、今は安全な場所にいるって考えてもいいけど……ずっとそうとも限らない。急ごう！」

直斗が最悪のケースを想定し、命が叫ぶと全員が頷く。そしてりせの先導で菜々子と真の反応があった地点へと走っていった。

それから彼らがやってくるのは一面色とりどりの花に囲まれ、綺麗な虹が浮かんでいる幻想的な空間だった。

「ここが、菜々子ちゃんの……」

「きれい……お話に出てくる天国みたい」

雪子が呟くと、りせも天国みたいだと表現。

「天国みたい”、か……」

しかしその言葉を受けた遼太郎が寂しげに呟き、全員がはつとした顔になる。遼太郎は菜々子に母親は天国に行ったと教えている。菜々子が心の隅に浮かべていた、死別した母への寂しい思い。それが具現化したのがこの空間と考えていいだろう。

「やっぱ菜々子ちゃん、心の奥じゃ……」

「仕方ないよ、まだあんなに小さいんだもん」

陽介と雪子も寂しそうにそう呟く。命も浮かない顔をした後、決意したように顔を上げる。

「必ず、助けよう！」

「ああ。皆、頼む。力を貸してくれ！」

命の言葉に続き、遼太郎が力を貸してくれと呼びかける。

「当ったりきクマ！ ナナチャンは、絶対に助け出すクマ！」

「ああ、生田目を見つけてとつちめるのは後だ。まずは、菜々子ちゃんの救出！」

その言葉にクマと陽介がやる気満々に返答、命も不敵な笑みを浮かべる。

「ああ、行こう！ 真君がいない以上、指揮は僕が取る。副リーダーは

結生、お願いね」

「任せといてー!」

命の言葉に全員異論はないように頷き、結生も右手を挙げてやる気満々の様子を見せる。そして彼らは一気に天国の門を潜り抜けていった。

時間を戻そう。11月5日の真夜中、真はピーン、という音を聞いた気がしてふと目を覚ますと起き上がり、携帯を確認する。着信は無し、メールが一通来ているのみだ。そして時間はとっくに12時を過ぎてている。

(マヨナカテレビも見逃したか)

メールは陽介から来ており、「今夜もマヨナカテレビを見る事になったけど、お前は無理せず寝てろ」とあった。確認はするつもりだったが寝過ぎてしまい、真は苦笑。人肌でぬるくなった濡れタオルをベッド脇に置かれていた洗面器に落としてベッドから降りた。

「もう菜々子も寝てるだろうし、タオルくらい自分で変えよう」

起きたついでにタオルを変えて水でも飲もう、と思って彼は洗面器を持つ。少々ふらふらはするが歩けなくはなく、真は自室のドアを開ける。すると階下からガタタツという物音が響いた。

「菜々子? 起きてるのか?」

そう呼びかけ、階段を降りる。

「お、にぃ、ちゃ……」

そんな途切れ途切れの声が聞こえた。

「菜々子!」

その瞬間、真は洗面器を投げ捨てて階段を走り下りる。階段の下の壁にぶつかりつつ腕をクッションにして衝撃をやわらげ、一階に飛び出す。鍵が閉まっているはずのドアが開いていた。真は見る。家の前に止まっている不審な車——いなば急便の宅配トラック。

「……かわいいそうに、すぐ……楽にしてあげる……」

まさかこんな真夜中に配達が来るはずもない、その車の荷台に何か

荷物を押し込もうとしている中年の男性。

「菜々子ー！」

そして荷台に押し込まれようとしているのは菜々子だった。その姿を見た真は走り出し、靴も履かずに家を飛び出す。男は菜々子を荷台に押し込み、自分も荷台に上がった。

「菜々子を、どうする気だっ!?!」

玄関から玄関先のトラックまでほんの数メートルもない。しかしたったそれだけの距離を走っただけで真の息は上がり、彼の意識は朦朧とする。しかしそんな中彼は見る。荷台の中に置かれた不自然なまでに丸出しの、人が一人くらい入れる大きさのテレビを。そして、宅配の制服なのだろう緑色の作業服のような服を着た中年の男性が、菜々子をテレビの中に入れていている光景を。

「!」

真は直感した。この男こそが雪子を、完二を、りせを、直斗を、そして今菜々子をテレビに落とした連続殺人犯であると。

「菜々子を返せえっ!!」

身体の不調も忘れ、真は荷台に乗り込むと男性目掛けて殴りかかる。

「この子は俺が、俺が救うんだああああああっ!!!」

対する男性も絶叫、やみくもに腕を振り回すが狭い荷台の中に体調の悪い相手にはそれだけでも充分。真は振り回された腕をもろに受けて荷台の壁に叩きつけられる。

「まだ、だ……」

しかし真も不屈の闘志で立ち上がろうとする。今まで影が掴めなかった真犯人、それが目の前にいる。そして今菜々子をその凶刃にかけようとしている。今捕まえなければ被害は増える、彼はその意志だけで立ち上がった。

「俺が、俺が救うんだ!! 邪魔するなあああああっ!!!」

奇声を上げ、再び殴りかかる男性。襲い掛かる彼を真は相手の両肩を掴んで引き寄せ、頭突きを入れて怯ませて押し返す。しりもちをついて倒れた相手は一瞬だが動けない、最大の間を真はついて拳を握り

しめた。

「覚悟しろー！」

今度は真が殴りかかろうと踏み込む。しかしその時、急激に頭が揺れる。強烈な不快感に襲われ、真の足元がふらついた。頭突きの反動か、今まで堪えていた熱による不快感がぶり返してきていた。

「う、うああああああつ!!！」

そこに男性の悲鳴が響き、ガズツという音と共に側頭部に衝撃が走る。男に殴られた、それを理解する前に真の体勢が崩れる。ふらついた足元では身体を支える事が出来ず、このまま彼の身体は荷台に横たわる……はずだった。

「っ!？」

変な浮遊感が真の身体を襲う。ここ一年で味わい始めある種慣れた浮遊感、これはテレビの中に入った時のものだ。

「しまっ……」

殴られ、倒れ込んだ先にテレビの画面があつたのか。それを真は理解するがもはやどうにもする事も出来ない。そして体調不良に加えて頭を殴られたダメージによつて彼の意識は遠のいていった。

「……静か」

天国のような場所——天上楽土に入り、周囲をサーチしたりせがあまりの静寂についてそんな言葉を呟く。

「でもなんだろう、この胸騒ぎ……」

「菜々子ちゃんと真君が危険な状態にあるんだ、無理もないよ」

「うん……待ってて、菜々子ちゃん、先輩……ゼツタイ助けてあげるからー!」

りせの胸騒ぎがするという呟きに命がそう返し、りせは改めてマヨナカテレビに囚われた二人を助ける決意を見せる。その決意に思いは同じだというように全員が頷いてから彼らは足を進める。

天上楽土。そこはまるで城か宮殿のような美しい場所で、明るい空が広がり虹もかかっている光景は正に天国というべきだろう。

「シャドウ発見！ 来るよ!!」

しかしそこにもシャドウは存在し、りせの声を聞くや否や全員が戦闘体勢を取る。同時に襲ってくるのは石像のようなシャドウ——育成の彫像と背中に巨大な手を背負った人間のようなシャドウ——インテリマグスに無数の蝶が群がりその一匹が仮面を持っているような姿のシャドウ——目移りのパピヨンだ。それぞれ彫像が二体、パピヨンが群れ二体分、インテリマグスが一体だ。

「ゆかり、白鐘君！ 出来る限りパピヨンを撃ち落とすとして！」

「了解!!」

「天城さん、ああいうのは魔法を使ってくる！ 先手をうって！」

「はいー」

命が指示を出してゆかりが弓に矢をつがえ、直斗が銃を向ける。続けて雪子にインテリマグスへの先制攻撃を指示、雪子が頷くと同時に彼女の前にカードが出現した。

「おいで、コノハナサクヤー！」

呼び出されるのは彼女の心の鎧ベルツナであるコノハナサクヤ。彼女が舞うように回転すると巨大な炎——アギダインがその頭上に具現、インテリマグスへと勢いよく放たれた

「オオオオオ！」

「っ、そいつ火炎に耐性持つてる！」

しかしさほど効いてない様子でインテリマグスは吼え、解析結果を出したりせが驚愕の声を上げる。

「命大先輩！ この石ころは俺と花村先輩で引き受けます！」

「もう一体はあたしと結生さんに任せて！ 下手に魔法使われる前にあいつを倒してください！」

完二と千枝が仲間と一緒に二人一組で育成の彫像を押さえると申し出る。パピヨンはゆかりと直斗が対処し、クマはそれぞれの援護に回っている。なお遼太郎はまだ初戦のためシャドウをきちんと見てどう対処すればいいのかわからない見習い兼りせの護衛に回っている。

命も状況を見て問題ないと判断、普段は真に指示を任せているものの、判断を任せてもある程度はなんとかかなりそうだと彼らの成長、そ

して真の日々の努力の成果を見る。

「了解！ 任せたよ」

頷き、命は後衛にいるインテリマグスへと走り出す。走りながら腰のベルトからダーツを数本引き抜き、投擲。インテリマグスの注意を引きつけ、相手も猛突進してくる命に狙いを定めると魔力を高めた。

「コンセントレイトか」

相手の行動を読み、自らに念じる。自分の中の何かが入れ替わった。

「オオオオオ！」

インテリマグスが吼え、炎が命目掛けて噴射される。しかしそれは命に届かずに吸収され、インテリマグスが驚愕したのか一瞬動きを止めた。その隙に命は腰の後ろに横向きにしまっていた召喚機である銃を引き抜いてこめかみへと当てる。

「ウリエル！ 五月雨斬り!!」

引き金を引くと共に呼び出された大天使が握る剣に光が宿り、一瞬でインテリマグスを斬り刻む。それだけでもインテリマグスは瀕死だが、油断せずトドメを刺さんと命は拳を振りかぶり、放たれた右ストレートがインテリマグスへのトドメとなって霧散させる。

「わあ！ さっすが命さん、すごい！」

「これがペルソナやシャドウ……本当に、この目で見ても訳が分からんな……」

相手の攻撃を予測して無効化、即座に反撃。確実にトドメと冷静沈着な戦いを見せた命にリセが歓声を送り、遼太郎は常人ならば出せないような瞬発力や焼死間違いなしの火炎に無傷、さらに下手なボクサー以上の威力のストレートという総合して人間離れた光景に腕組みしながらため息を漏らす。ちなみに彼の武器は真の剣を借りており、今は真と同じように背負っている。

なお、他のシャドウは陽介が相手をスピードで翻弄している隙に完二が何度も彫像を殴打または結生の薙刀連続突きと千枝が連続蹴りによって粉碎しているのも遼太郎のため息の一因である。

「あ、あはは……まあその内慣れますから……」

「手放しで喜びたかねえな。子供がこんな危険なもんにも首を突っ込んでるってのは」

「あはは……」

りせが苦笑しながら遼太郎に声をかけるが、遼太郎は彼らが一步間違えば命を落としかねない事に首を突っ込んでいると改めて認識して厳しい目を見せ、りせも苦笑を続けた。と、その時ヒミコが何かに反応する。

「え、敵の増援!?……しまった、後ろから!？」

りせが新たな敵の反応をキャッチ、それが後ろから来たと呼ぶと遼太郎と共に振り返る。巨大な砂時計に手足がついたような、その周囲でまるでフラフープのようにIからXIIまでの文字が回転しているシャドウ——逆行の砂時計が襲い掛かってきていた。

「チツ！」

咄嗟に遼太郎がりせを庇うように逆行の砂時計の前へと立ち上がり、相手のタツクルを受け止める。

「む……」

そこで遼太郎は違和感を感じる。相手は自分よりも巨体、砂時計という構造上見た目より軽いかもしれないがそれにしてもダメージが軽すぎる。まるで少々子供にぶつかられたくらいの痛みだ。

「なるほどな」

遼太郎はニヤリと笑い、背負っていた剣を抜くと両手で握る。剣道でいえば全ての基本中の基本、正眼の構えだ。

「はあっ!!」

剣道の面打ちの要領で刀を振るい、続けて籠手——相手に腕に当たる部位がないため回転している文字を打つような形になったが——へと攻撃。さらに胴を薙ぎ払うように隙なく刀を振るいダメージを与えて逆行の砂時計を怯ませる。

「はあー！」

気合を入れ、同時に左手に光が集まると一枚のペルソナカードが出現。遼太郎はそれを握り潰す。

「来い、カミムスビ!!」

遼太郎の叫びと共に現れるのは彼の心の鎧——カミムスビ。茶色い髪を長く伸ばして顔を隠したような格好をしているその女神が腕を振るうと共に金色の拳が具現化し、一撃で逆行の砂時計を粉碎した。

「なるほどな……」

刀を鞘に戻し背負い直しながら、遼太郎は自分に宿った力を飲み込むように呟く。

「堂島さん、大丈夫ですか？」

他のシャドウとの戦いを終えた命が駆け寄り、声をかける。状況が状況であるためか普段の「堂島氏」ではなく真面目なさん付けへと変わった。

「俺なら大丈夫だ。急ぐぞ」

「はい！」

遼太郎は身体に傷が残っていない事を確認し、大丈夫だと判断を下す。彼の言葉を受けた命も頷くと彼らは一斉に走り出した。

「聞こえるー！」

三階ほど階段の役割をしている大きな蔦を登ったところだろう辺りで——なお麓に立てばなんらかの力が働くのか身体が浮き上がったためジャックと豆の木よろしくクライミングをする必要はなかった——りせの声が響いた。

「菜々子ちゃんの声……確かに聞こえるんだけど……ダメ、小さすぎてよく分からない……」

りせは菜々子の声が聞こえるのに、小さすぎてよく分からない事にもどかしい様子を見せ、命達に「声を探して！」と声をかける。

「探すつってもなあ、俺達にや何も聞こえねえぜ？」

りせの指示に完二が困惑の様子を見せ、千枝達も耳を澄ませるが特別聞こえるものはない。

「まあ、この階層隅から隅まで探しちゃえば済む事だよ！」

「ああ、行くぞー！」

しかし結生が気合を入れ直すように言うのと遼太郎も叫び、ここ三階ほどで戦闘に慣れてレギュラー入りを果たした彼は結生と共に我先にと走り出す。

伸びている一本道のそのすぐ先にドアが見つかり、先頭を走る結生がドアを蹴り開けると遼太郎が用心深く開いたドアから見える部屋の中を確認、特に危険がないのを確認すると共に追いついた命達とドアの中へとなだれ込む。

「お母さん……」

「菜々子！」

部屋に入り、数歩歩みを進めた辺りでそんな声が聞こえてくる。声の主は間違いないで菜々子、遼太郎が顔を上げて声を発する。

「菜々子!? どこだ!? 大丈夫か!？」

「お母さん……ど……」

遼太郎が血相を変えて声を上げるが、菜々子に遼太郎の声が聞こえていないのか、彼女は寂しそうな声で母親を呼ぶ。

「なんでいなくなっちゃったの……なんで、菜々子置いてったの……」

「!!」

「やだよ……帰って来て……」

菜々子の寂しそうな、いや、泣きそうな声に遼太郎が衝撃を受けたように沈黙する。

「菜々子ちゃんの……心の声、かな……」

「でも、さびしくないよ……お父さんがいるから……」

千枝がその声の正体に気づいたように眩くと、今度は菜々子のそんな気丈な声が聞こえてくる。

「帰り、いっつもおそいけど……いそがしいから、あそんでくれないけど……ごはんも作れないし、せんたくも下手だけど……やさしくて、ときどきこわいけど……お父さん、すき……」

「菜々子……」

「今はお兄ちゃんもいるから……菜々子、ひとりじゃない……さびしくなんかない……」

その言葉を最後に、菜々子の声は聞こえなくなった。

「あんなちっちゃええのに、寂しくねえって、自分に言い聞かせて、頑張ってるスね……」

「バカ、俺らがしんみりしたら台無しだろ。平気な顔してやろうぜ」
思わず完二が菜々子の心の強さに感嘆したように呟くと陽介がそう返す。気丈な菜々子に、娘の様子に胸を痛めているのは間違いない。遼太郎だ。自分達が立ち入るべきでないという陽介に千枝達もこくりと頷いた。

「!?」

すると突然りせが顔を上げる。

「どうかしましたか、久慈川さん？」

「やっぱり、変……」

直斗が声をかけるとりせがそう呟く。曰く「先ほどから小さな違和感があった」とのこと、しかしここで確信を得たかのように「菜々子ちゃんだけじゃない。誰か別の反応を感じる」とりせは断言した。その彼女にゆかりが顔を向け、小さく首を傾げる。

「真君じゃなくて？」

「ううん、違う。小さすぎて分からなかったけど……やっぱり、菜々子ちゃんと椎宮先輩、その二人以外に誰かが中にいる」

ゆかりが真の気配を間違えているのではないかと尋ねるが、りせはそれはないと断言しつつもこの二人以外の何者かがテレビの中になると答える。それに陽介がはっとした顔になった。

「まさか——生田目か!？」

「かもしれない……菜々子ちゃんの誘拐には特別な意気込みを感じましたから」

「でも、どうして?……」

陽介が消去法でテレビの中にいそうな人間をリストアップ、生田目がテレビの中にいる可能性に気づくと直斗もその推理を支持する。しかし雪子は「真犯人なら中に入る事の危険さを知ってるはず。それなのになぜテレビの中に入ったのか」と疑問を呈した。

「分かりません……」

その疑問に答えるには推理の材料が足りないのか、直斗は小さく首

を横に振って返す。

「でも、仮に生田目がテレビに入ったとすればチャンスは僕や堂島さんが追い詰めたあの時以外にありえない」

そこで命が、生田目がテレビの中に入るチャンスを推理する。その推理に反応したのは遼太郎だ。

「おい待て、菜々子はトラックの中のテレビに入れられたって話したよな!? ってこたあ、生田目も同じテレビに入った可能性が高いって事か!？」

「はい。現実世界のテレビとマヨナカテレビ内における位置の因果関係はまだ証明できてませんが……」

「だけどここのままじゃ菜々子ちゃんが一層危険かも！ 急ごう！」

遼太郎の血相を変えた叫びを直斗が肯定、結生が先を急ごうと呼びかけ、陽介達も頷きあうと既に走り出していた遼太郎の後を追う。

すると彼らが走る先に両腕がランスのようなものに変化し、三本の足がくっついた車輪のような足をしたシャドウ——キラードライブと、性別を示す雄と雌のシンボルを身体につけた蛇——肉欲の蛇が出現、肉欲の蛇が不意打ち気味に遼太郎へと襲い掛かった。

肉欲の蛇はまるでからみつく鎖のようなオーラを放ちながらの突進——攻撃と同時に敵の闘争本能を刺激して攻撃一辺倒へと意識を動かし、逆に防御を考えなくさせる物理攻撃——クレイジーチェーンを遼太郎に見舞う。

「ぐ……じゃまだー！」

その牙を遼太郎はくらってしまいが、直後蛇を払いのけると反撃の刀で一刀両断にする。しかしそこにキラードライブが襲い掛かる。クレイジーチェーンで闘争本能を刺激され、逆に防御を意識の外に置いていると一撃くらうだけで致命傷になりかねない。

「おっとー！」

「!？」

しかし遼太郎はその突撃を刀で防御し衝撃を和らげながら横にかわす。闘争本能に囚われているとは思えない冷静な判断力と回避技術だ。

「雪子先輩！ あいつ炎が弱点です!!」

「分かった！ コノハナサクヤ、アギダイン!!」

遼太郎が戦っている間に弱点を見抜いたりせが雪子に指示、雪子も領いてコノハナサクヤに命じ、放たれた火球がキラードライブを焼き尽くして消滅させた。

「天城さん、ついでに堂島さんの傷を治療してあげて」

「分かりました。堂島さん、傷を見せてください」

「傷？」

命が落ち着いている内にダメージの治癒を提案し、雪子も頷くと遼太郎にさっきの牙で受けただろう傷を見せてくださいと呼びかける。が、遼太郎は不思議そうな表情を見せ、さっき噛まれた右腕を見せた。「もう治ってるぞ」

「……え？」

その言葉通り、袖まくりをされた筋骨隆々な腕には傷一つなくむしろ雪子が困惑の様子を見せる。と、そこで千枝が「そういえば」と言葉を漏らした。

「あたし達ここに来るまで結構シャドウと戦って、特に堂島さんってあたしや完二君と一緒に前線で身体張ってたよね？」

「あれ？ そういや堂島さん、天城先輩やクマ公から回復受けてましたっけ？」

千枝の言葉で思い出した完二が声を漏らす。そこで命達も「そういえば」と呟いた。遼太郎は子供が危ないのに大人が後ろでじっとしてはいられないと、戦いに慣れるとすすんで前線に立って壁役になっており、彼のペルソナは物理攻撃に耐性があると同時に物理スキルに特化していたため命も合理的に判断してあまり無理しない程度にそれを了解していた。

しかし無理はしないように注意していたのだろうとはいえ遼太郎がダメージや物理スキル使用時の肉体的な疲労を理由に雪子やクマに回復をお願いしていた様子は思い当たらない。だがやせ我慢をしている事も現在の遼太郎の様子からはありえないし、そんな事になれば彼らの様子を常にチェックしているりせが気づかないはずがない。

「……もしかして!」

そこで結生が気づいたように声を上げた。

「す、すみません堂島さん! もしかして戦ってる最中たまに疲労が回復したり受けていた傷が癒えたりしてませんか!?」

「……ああ。戦ってる最中というか、戦いが一段落して落ち着いた時にもな……ん? これは普通じゃないのか?」

「お兄ちゃん、これって!」

「生命の泉……いや、治癒促進に勝利の息吹!」

結生の質問に答えた遼太郎の証言から、命はS・E・E・S時代に得た情報から該当するスキルを推理する。

戦っている最中の肉体的疲労や傷の軽度回復は治癒促進・大、同じく戦闘に勝利した時の回復能力は勝利の息吹と名付けられているスキル内容に合致していた。

「す、すごい……今までの戦いぶりからして堂島さんのペルソナに弱点は見当たらない……荒垣先輩を思い出す」

「うん。言うなれば堂島さんのペルソナ、カミムスビは肉弾戦&継続戦特化ペルソナ……」

命はかつて共に戦っていた尊敬する先輩を思い出し、結生もカミムスビの特性をまとめる。

得意とする属性はないが、同時に弱点とする属性はない。物理に対しては耐性を持ち、多少のダメージはすぐに回復して打ち消してしまう。接近戦や物理スキルと共にテレビ内の長い間の探索には心強い継続戦に特化していた。

「あまり無理は出来ないけど、それでも体力回復を自力で精神力の消費なく行えるのは大きなアドバンテージだ。少しでも早く菜々子ちゃんを助けなきゃいけないこの状況ならありがたい」

「なんだかよく分からんが、お前達の力になれるってんならなんでもいい。この世界には不慣れだが、なるべくお前達を消耗させずに生田目のところに届けてやる」

説明を受け、自分の力と役割を直感的に悟ったのだろう。遼太郎は命達が傷を受けて消耗しないよう、万全の状態でこの事件の真犯人――

―生田目太郎の元に送り届ける事が自分の役目であり事件解決への糸口、そして菜々子と真を無事助けるための最良の方法だと受け入れる。

「頼りにしています、堂島さん」

「ああ。期待にや応えてやるよ」

命も遼太郎に頼りにしていると告げ、二人は堅く握手を行う。そして彼らは一気にその場を走り出した。

「ここはいいな……静かで……」

真つ白な霧に覆われた空間。その霧の中、何者か――声質からして中年の男性だろうと予想される――が安堵した様子の声を漏らしていた。たしかに霧に包まれたこの場所は雑音一つない静寂に支配されている。

「ただ静かに暮らしたかった……それだけなんだ……」

中年の男性が、誰かに言い訳をするかのようにそう声を漏らす。しかしそれを聞く者は誰もいないはずだ。

「ええ、分かっているわ」

そう。はずだ。しかしその霧の中、中年の男性の言葉に何者か――こちらは中年の女性のように聞こえる――が肯定の言葉を返していた。

「もう少しすれば、きっと静かに暮らすことが出来るわ……だからその時まで……ねえ?」

女性の声がまるで子供に言い聞かせるような優しい調子での言葉を紡ぐ。

「太郎さん」

その時、深い霧の中から女性のシルエットが僅かに見え、その顔、程度瞳の部分が金色の光を放つのであった。